鳥取県教育文化財団調査報告書　47

一般国道９号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　X

鳥取県米子市

陰田遺跡群

（本文編Ⅰ）

陰田第６遺跡

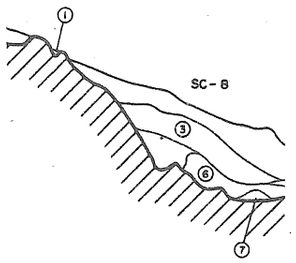
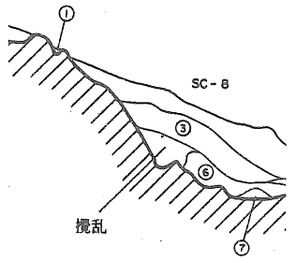
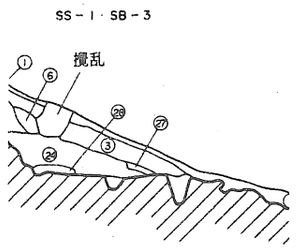
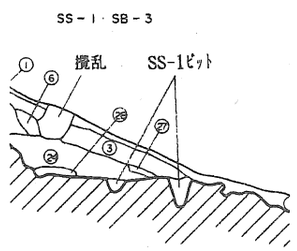
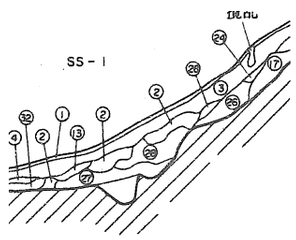
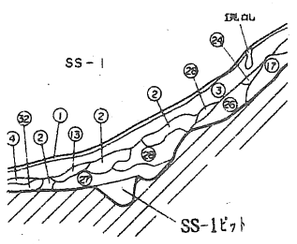
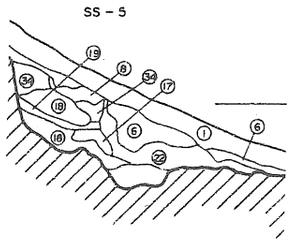
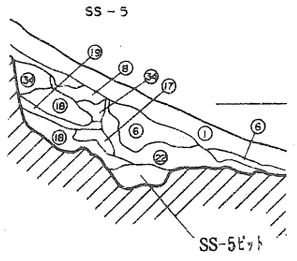
陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区

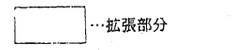
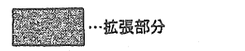
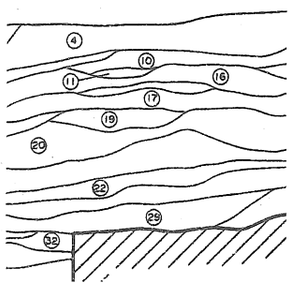
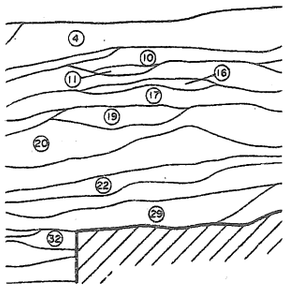
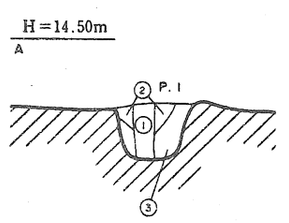
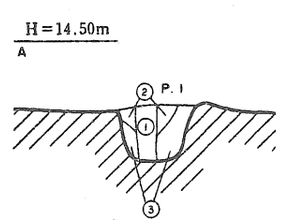
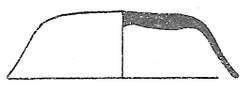
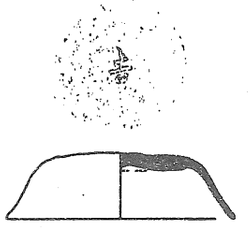
1996

財団法人　鳥取県教育文化財団
建設省　倉吉工事事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書47
一般国道9号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X

『陰田町遺跡群』正誤表

頁	誤	正
本文編Ⅰ・陰田第6遺跡 P188・第170図 C−C' 断面図		
本文編Ⅱ・陰田ヒチリザコ遺跡　P24・第245図 B−B' 断面図		
本文編Ⅱ・陰田ヒチリザコ遺跡　P24・第245図 C−C' 断面図		
本文編Ⅱ・陰田ヒチリザコ遺跡　P24・第245図 H−H' 断面図		

頁	誤	正
本文編Ⅱ・陰田子犬田遺跡 P61・第278図左下隅		
本文編Ⅱ・陰田荒神谷遺跡 P129−130・第333図　A−A' 断面図		
本文編Ⅱ・陰田荒神谷遺跡 P139−140・第339図　A−A' 断面図		
本文編Ⅱ・第9章　考察 P196・11行目	ヒヂリザコ遺跡から・・・	ヒチリザコ遺跡から・・・
本文編Ⅱ・第9章 P223・図1 遺物番号839の土器		

序

米子市は、「山陰の商都」と称される鳥取県西部地域の中核都市であります。北は雄大な日本海、東は秀峰大山に臨んでおり、美しい自然環境にも恵まれ、産業と観光の両面で今後さらなる発展が期待される地域であります。近年、環日本海交流の推進が提唱される中、平成７年には中海臨海地域が輸入促進地域に指定され、米子市の果たす役割も重要視されております。道路等、交通網の整備が急速に進められており、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も近年増加し、この地域の成り立ちを物語る遺跡が数多く発見されております。

当財団では、一般国道９号米子道路工事に伴い、建設省倉吉工事事務所から委託を受けて、鳥取県教育委員会の指導のもと、平成２年度から埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。平成５年度から平成７年度にかけては、米子市陰田町内で陰田遺跡群の発掘調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。調査の結果、弥生時代から江戸時代にかけて断続的に遺跡が形成されていたことが確認され、当該地区の歴史の長さをあらためて認識することとなりました。特に古代においては、山陰地方有数の鉄器生産地帯であったことが解明され、山陰地方の古代史に貴重な資料を提供するものと考えます。本発掘調査の成果が、今後の調査研究の一助となり、多くの方々に活用していただければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大なご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導いただきました方々、そのほか関係各位に対し、心から感謝申しあげます。

平成８年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　田　渕　康　允

序　文

建設省が管理する一般国道９号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までの76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに西伯郡淀江町及び米子市地内において、将来の国土開発幹線道路として、当面活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である米子道路の整備を進めています。

米子道路は米子市及びその周辺部における一般国道９号の交通混雑を緩和するために計画され、昭和47年から事業に着手し、現在までに米子市尾高～陰田町約8.1km（一部ランプ使用）を供用しています。

現在、西伯郡淀江町今津から米子市赤井手及び米子市陰田町から県境までの間を自動車専用道路として施工中です。

このルートには、多数の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い記録保存を行うことになりました。

このうち一昨年・昨年・今年度は、「陰田小犬田遺跡」「陰田古墳群」「陰田第６遺跡」「陰田荒神谷遺跡」「陰田久幸山遺跡」の５箇所について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査を行いました。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを理解いただけることを期待するものであります。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成８年３月

建設省　倉吉工事事務所長

西　田　和　昭

例　言

1．本報告書は、「一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査」に伴い、平成5年度から平成7年度にかけて、鳥取県米子市陰田町地内で実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．本発掘調査は、建設省倉吉工事事務所の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。

3．本発掘調査は、年次ごとに下記の遺跡を対象として実施された。

平成5年度－陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡
（これらは、当初陰田久幸山遺跡と呼称していた遺跡である。）

平成6年度－陰田第6遺跡Ａ区、陰田小犬田遺跡

平成7年度－陰田第6遺跡Ｂ区（これは、当初陰田古墳群と呼称していた遺跡である。）、陰田荒神谷遺跡

なお、遺跡名変更のいきさつについては、本文中に記述した。

4．発掘調査を実施した各遺跡の所在地は、次のとおりである。

陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区－鳥取県米子市陰田町字久幸山および曲リ久コウ
陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区－　〃　字久幸山
陰田ヒチリザコ遺跡　－　〃　字久幸山
陰田第6遺跡Ａ区、Ｂ区　－　〃　字久幸山
陰田小犬田遺跡　－　〃　字小犬田堤ノ下
陰田荒神谷遺跡　－　〃　字荒神谷山および小犬田堤ノ下

5．本調査において、陰田第6遺跡で新たに確認された古墳および横穴の名称については、すでに登録されている陰田古墳群および陰田横穴群の末番の続き番号を採用した。以下が、新たに確認した墳墓である。
陰田66号墳、陰田51号、52号、53号、54号、55号横穴

6．本発掘調査の実施にあたっては、人骨取り上げの現地指導および人骨、動物遺体の鑑定を鳥取大学井上貴央先生、漆の分析を国立歴史民俗博物館永嶋正春先生、土器の胎土分析を奈良教育大学三辻利一先生、木製品の樹種鑑定を鳥取大学古川郁夫先生、石製品の石材鑑定を鳥取大学赤木三郎先生、鉄滓の分析を和鋼博物館佐藤豊先生、鉄生産関連遺物及び遺構の現地調査指導を房総風土記の丘穴澤義功先生にお願いし、御手を煩わせた。また、井上貴央先生、永嶋正春先生、三辻利一先生には本報告書に御寄稿いただいた。明記して、各先生方に深甚の謝意を表します。

7．本発掘調査の実施にあたっては、プラント・オパール分析及び植物珪酸体分析を（株）古環境研究所、鉄滓の分析を日立金属株式会社冶金研究所、（財）和鋼博物館、漆器の保存処理を（株）吉田生物研究所、地下レーダー探査を応用地質株式会社、調査地内の測量および基準杭の設定をシンワ技研コンサルタント株式会社、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を写測エンジニアリング株式会社にそれぞれ委託して実施した。

8．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来的に鳥取県教育委員会に移管する予定である。

9．出土した木製品および鉄製品の保存処理については、鳥取県埋蔵文化財センターにおいて実施した。

10．本報告書の作成は、調査員の協議に基づいて執筆、編集し、執筆担当者は目次に記載した。本報告書に掲載した実測図、写真図版は、西部埋蔵文化財陰田調査事務所で作成した。遺物の実測は、塚田文子、畑さおり、岡田千秋が担当し、遺物の写真撮影は、山川茂樹が担当した。

11．発掘調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して、深謝いたします。（敬称略、順不同）

井上貴央　永嶋正春　三辻利一　古川郁夫　赤木三郎　佐藤　豊　内田貴志　穴澤義功　坂本敬司　村上恭通　梅野将之　松本　哲　矢中仁司　亀田修一　伊野近富　小林雅之　小原貴樹　井上　淳　杉谷愛象　下高瑞哉　西尾克巳　角田徳幸　岡田善治　山口　剛　内田律雄　門脇豊文　灘脇俊彦　高橋浩樹　田中一夫　足立良彦　青田光生　藤原彰子　前住和夫　山内紀嗣　井上武士　平井　勝　米子市教育委員会　米子市教育文化事業団　口陰田自治会　鳥取県立皆生養護学校　広島県埋蔵文化財センター　古代吉備文化財センター

凡　例

1．本報告書における方位はすべて真北を示し、レベルは海抜高である。X＝、Y＝の数値は、国土座標第Ⅴ系の座標値である。

2．本報告書において採用した遺構の略号は、次のとおりである。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＳ：テラス状遺構　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝状遺構

ＳＫ：土坑、土壙墓　ＳＣ：道状遺構　ＳＥ：井戸　Ｐ：柱穴

3．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、瓦質土器は断面網掛け、それ以外のものは断面白抜きで表した。また木製品の断面の年輪は、模式的な表示である。

4．本文中、挿図中および写真図版中の遺物番号は一致する。

5．遺物番号は、本報告書中を通じて通し番号である。

本　文　編　Ⅰ　目　次

第１章　陰田遺跡群発掘調査の経緯 …… 1

第１節　発掘調査に至る経緯（北浦）…… 1

第２節　調査体制（北浦）…… 1

第３節　遺跡の名称について（北浦）…… 2

第４節　発掘調査の経過と方法（北浦）…… 4

第２章　陰田遺跡群の位置と環境 …… 5

第１節　地理的環境（熊谷）…… 5

第２節　歴史的環境（熊谷・山川）…… 7

第３章　陰田第６遺跡の調査 …… 12

第１節　位置と環境（北浦）…… 12

第２節　調査の経過と方法（北浦）…… 12

第３節　遺構と遺物 …… 17

1　概要（北浦）…… 17

2　弥生時代後期の遺構（熊谷）…… 21

3　古墳時代前期の遺構（熊谷）…… 41

4　古墳・横穴（北浦）…… 41

5　古墳時代後期～奈良時代の遺構（熊谷・北浦）…… 59

6　時期不明の遺構（北浦）…… 181

7　中、近世の遺構（北浦）…… 189

8　遺構に伴わない遺物（北浦）…… 204

第４節　ＳＫ２１出土人骨について　鳥取大学　井上貴央 …… 206

第４章　陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区の調査 …… 208

第１節　位置と環境（北浦）…… 208

第２節　調査の経過と方法（北浦）…… 208

第３節　遺構と遺物 …… 208

1　概要　（北浦）……208
2　竪穴住居跡　（山田・北浦）……217
3　テラス状遺構　（山田・北浦）……219
4　土坑　（山田・北浦）……224
5　集石遺構　（山田・北浦）……224
6　溝状遺構　（北浦）……225
7　ピット群　（北浦）……225
8　遺構に伴わない遺物　（北浦）……231

本文編 II 目次

第5章　陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区の調査……1
第1節　位置と環境（北浦）　（北浦）……1
第2節　調査の経過と方法（北浦）　（北浦）……1
第3節　遺構と遺物……1
1　概要（北浦）　（北浦）……1
2　テラス状遺構　（北浦）……2
3　掘立柱建物跡　（北浦）……13
4　溝状遺構　（北浦）……15
5　土坑　（北浦）……15
6　土壙墓　（北浦）……15
7　遺構に伴わない遺物　（北浦）……16
第6章　陰田ヒチリザコ遺跡の調査……20
第1節　位置と環境　（北浦）……20
第2節　調査の経過と方法　（北浦）……20
第3節　遺構と遺物……20
1　概要　（北浦）……20
2　テラス状遺構　（北浦）……23
3　土坑　（北浦）……48
4　遺構に伴わない遺物　（北浦）……50
第7章　陰田小犬田遺跡の調査……59
第1節　位置と環境　（熊谷）……59
第2節　調査の経過と方法……59
1　自然科学的手法による調査　（熊谷）……59
2　陰田小犬田遺跡におけるプラント・オパール分析　（古環境研究所）……59
3　陰田小犬田遺跡における植物珪酸体分析　（古環境研究所）……66
4　調査の経過と方法　（熊谷）……71
第3節　遺構と遺物……73
1　概要　（熊谷）……73
2　土坑　（熊谷）……74
3　河川跡　（熊谷）……75

4　水田跡　（熊谷）……77
5　遺物の出土状況　（熊谷）……84
6　出土遺物　（北浦）……91
第4節　陰田小犬田遺跡の古環境について　（熊谷）……123
第5節　陰田小犬田遺跡出土土器付着漆の分析について　国立歴史民俗博物館　永嶋正春……125
第8章　陰田荒神谷遺跡の調査……127
第1節　位置と環境　（山川）……127
第2節　調査の経過と方法　（山川）……127
第3節　遺構と遺物……137
1　概要　（山川）……137
2　古墳時代後期～奈良時代のテラス状遺構　（山川）……137
3　中世以降のテラス状遺構　（山川）……164
4　土坑　（山川）……164
5　土器溜り　（山川）……169
6　ピット群　（山川）……170
7　井戸　（熊谷）……171
8　遺構に伴わない遺物　（北浦）……172
第9章　考察……191
第1節　陰田遺跡群出土須恵器の蛍光X線分析　奈良教育大学　三辻利一……191
I　陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡、陰田小犬田遺跡、陰田第6遺跡出土須恵器の蛍光X線分析……191
II　陰田荒神谷遺跡出土須恵器の蛍光X線分析……196
第2節　陰田遺跡群における鉄器生産の様相　（山川）……200
第3節　陰田遺跡群出土鉄滓の金属学的研究　和鋼博物館……203
I　陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区及び陰田ヒチリザコ遺跡出土鉄滓の調査……203
II　陰田小犬田遺跡出土鉄滓の調査……206
III　陰田荒神谷遺跡出土鉄滓の調査……210
第4節　陰田遺跡群の性格　（北浦）……220
おわりに……224
抄録……225

第１章　陰田遺跡群発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、建設省倉吉工事事務所により進められている一般国道９号米子道路工事事業を原因とし、米子市陰田町地内において建設予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。同事業における埋蔵文化財の保護と事業計画との調整については、昭和46年以来関係機関間で協議され、以後分布調査、発掘調査が実施されてきた。陰田町地内においては、昭和55年から昭和59年にかけて米子市教育委員会により発掘調査が実施され、50基にのぼる横穴墓群を中心とした一大遺跡群が発見された。今回の発掘調査地は、これらの西側に隣接する地帯で、その西端は島根県との県境である。

発掘調査地については、米子市教育委員会により遺跡の有無、範囲等を確認する事前の試掘調査が行われ、平成４年度には陰田久幸山遺跡（のち陰田マノカンヤマ遺跡、陰田ヒチリザコ遺跡に改称)、平成５年度には陰田久幸山遺跡、陰田小犬田遺跡、陰田荒神谷遺跡、平成６年度には陰田古墳群（のち陰田第６遺跡に変更）の存在が確認された。これを受けて、建設省倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、記録保存のための事前発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。これにより、平成５年度から西部埋蔵文化財調査事務所が調査を担当することとなった。その後調査体制の変更によって、平成６年度は西部埋蔵文化財調査事務所陰田分室が、平成７年度は西部埋蔵文化財陰田調査事務所が調査を担当した。

第２節　調査体制

発掘調査は、下記の体制で行われた。

平成５年度調査体制

調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団　理事長　西尾邑次　副理事長兼常務理事　入江圭司　事務局長　若松良雄
財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター　所長　土井田憲治　次長　山根豊己
調査指導係　係長　田中弘道　文化財主事　久保譲二朗　長岡充展　山枡雅美
庶務係　庶務係長　山根夏男　主任事務職員　木下利雄　事務　嶋村八重子

調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　西部埋蔵文化財調査事務所　所長　松尾忠一
調査員　北浦弘人　原田雅弘　西川徹　山田真一　山川茂樹　仲田信一　中山寧人　志田睦
調査補助員　樋口友枝　山崎裕子　整理員　杉田千津子　測量補助　左藤博
主な整理作業員　二宮さおり　塚田文子　岡田千秋　稲垣美智恵　小川哲　遠藤和子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター

平成６年度調査体制

調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団　理事長　西尾邑次　副理事長兼常務理事　入江圭司　事務局長　若松良雄
財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター　所長　大和谷朝　次長　八木谷昇
調査指導係　係長　田中弘道　文化財主事　久保譲二朗　長岡充展　山枡雅美

庶務係　庶務係長　梅山昭美　主任事務職員　木下利雄　事務　嶋村八重子

調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　西部埋蔵文化財調査事務所　所長　松尾忠一
西部埋蔵文化財調査事務所陰田分室　分室主任　芦達賢二
主任調査員　北浦弘人　調査員　熊谷朗　山川茂樹
整理員　塚田文子　測量補助　左藤博
主な整理作業員　二宮さおり　西山八重子　佐々木美代子　井上紀美子　尾崎美江子　森脇淳子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター

平成７年度調査体制

調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団　理事長　田淵康允　常務理事　上田徹　事務局長　若松良雄
財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター　所長　宮谷正信　次長　八木谷昇
調査指導係　係長　田中弘道　文化財主事　久保譲二朗　長岡充展　山枡雅美
庶務係　庶務係長　梅山昭美　主任事務職員　木下利雄　事務　西尾朋子

調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　西部埋蔵文化財陰田調査事務所　所長　芦達賢二
主任調査員　北浦弘人　調査員　熊谷朗　山川茂樹
整理員　塚田文子　測量補助　左藤博
主な整理作業員　畑さおり　西山八重子　佐々木美代子　小原円　井上紀美子　古谷京子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター

下記の方々が発掘調査作業に従事した。

鷲見勘二　佐野康雄　角田輝彰　吉井秀昭　野口洋一　福富美代子　高田茂　柏尾博臣　松原園子　山中実
米原愛子　村脇義之　足立導昭　山田修子　仲田政子　桜田美智子　吉田繁　西川幸枝　嘉本真弓　井上淳
倉益秀江　吉田一子　中田文子　松本良子　船越典子　河村富士江　野口稔　大本富介　遠藤国男　三好睦
松波綾子　本田美雪　伊澤正治　篠村孝美　下村哲夫　大森佐登子　山崎博　三浦一枝　大塚和子　篠村稔
野坂貞子　船田裕子　亀山梶子　奥田道子　矢信敦子　大草シズエ　勝部恵　山村節子　松原艶子　森安堯
中曽麗子　下村清美　斉木由和　吾郷琴江　福本蓉子　青田さち子　松井操　青田光生　船岡幹子　加川都
石山忠重　高塚克人　高原善夫　安達広典　仲田将吾　鷲見シヅ子　長尾茂

発掘調査参加者

角浩司　河本史幸　米子市立就将小学校６年生（平成６年度）の皆さん

第３節　遺跡の名称について（第１、５図）

発掘調査に着手するにあたり、調査地に遺跡名を付ける必要が生じた。既成の遺跡名を有していたのは、第１図に示した調査区Ａの陰田荒神谷遺跡と調査区Ｂの陰田小犬田遺跡、調査区Ｆ、Ｇの陰田第６遺跡であった。各

調査区の遺跡名命名のいきさつは、次のとおりである。

・調査区Ａ－陰田荒神谷遺跡（いんだかじだんいせき）

陰田荒神谷遺跡として従来設定されていた範囲は、谷の入り口部分およびその付近の段状地形を呈する畑地部分であった。試掘調査の結果、丘陵の斜面部分や谷奥部でも遺物の出土をみたため、遺跡の範囲は拡大されることとなった。当初は遺跡名を「こうじんだに」と読んでいたが、地元では「かじだん」と呼んでおり、これに従うこととした。

・調査区Ｂ－陰田小犬田遺跡（いんだこいんだいせき）

従来は、第図に示した①の地点を指していたが、同じ谷筋の沖積地に形成された遺物散布地ということで、Ｂの範囲も陰田小犬田遺跡と称することにした。旧字名は、①の地点が小犬田堤ノ上、Ｂのあたりが小犬田堤ノ下、Ｂの下側が小犬田鋤先となっている。陰田荒神谷遺跡との境界は、区分をつけ難く、それぞれの調査範囲域の境界を便宜上の境界とした。

・調査区Ｃ－陰田ヒチリザコ遺跡（いんだひちりざこいせき）

調査区Ｃ、Ｄ、Ｅは既成の遺跡名のない地区で、当初は字名をもって便宜上陰田久幸山遺跡（いんだきゅうこうやまいせき）と仮称していた。しかし本来久幸山は第１図の⑤の地点の山であり、③の山は地元でマノカンヤマと呼ばれていることから、遺跡名として適切でないと判断した。調査区Ｃは、②の谷筋の丘陵斜面に連なる谷口部分にあたる。現況で遺構と思われる段状地形が、この谷筋沿いにみられ、調査区Ｃはこの谷に形成された遺跡と一体のものと推測された。②の谷は字名をヒチリザコと称し、もって遺跡名とした。

・調査区Ｄ－陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区（いんだまのかんやまいせきつつみのしもちく）

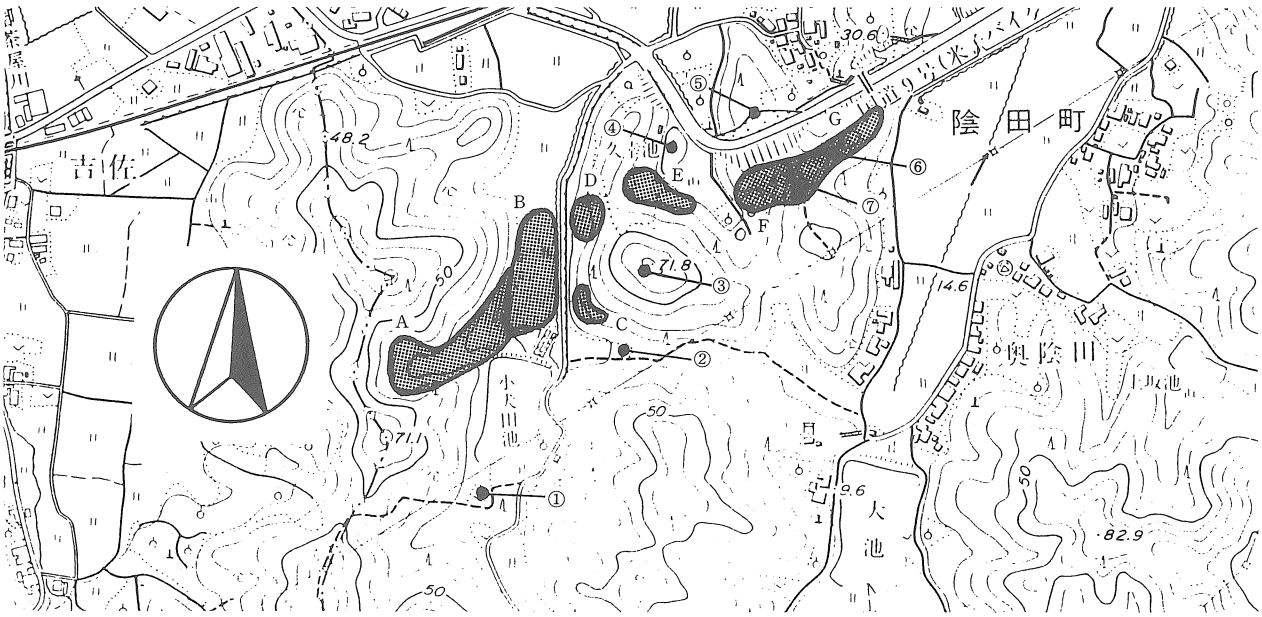
③のマノカンヤマをもって遺跡名とした。Ｅ区との区別のため、調査区が面する調査区Ｂの字名小犬田堤ノ下をもって地区名とした。

・調査区Ｅ－陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区（いんだまのかんやまいせききゅうこういけちく）

③のマノカンヤマをもって遺跡名とした。Ｄ区との区別のため、調査区が面する④の久幸池をもって地区名とした。

・調査区Ｆ、Ｇ－陰田第６遺跡（いんだだいろくいせき）

従来より陰田第６遺跡と呼ばれており、⑥の尾根鞍部を境に、西側を久幸地区、東側を天坂地区と分けられていた。天坂地区は陰田古墳群の範囲に重なっており、うち古墳以外の墳墓、集落跡を指す。今回の調査にあたっ



第１図　調査区の位置（Ｓ＝1：10,000）

ては、当初調査区Ｆを陰田第６遺跡、調査区Ｇを陰田古墳群と称した。両調査区の区分は、調査年度の違いによるもので、⑦の陰田60号墳を境とする。調査の結果、調査区Ｇにおいては古墳が遺跡の主体をなさず、調査区Ｆと一連の遺跡と考えられたので、調査区Ｆ、Ｇともに陰田第６遺跡と総称することとした。⑥による地区の区分については、両地区にまたがる遺構が存在するため、今回の調査においては採用しなかった。本調査において新たに確認された古墳、横穴については、今までのところ陰田古墳群が65号墳まで、陰田横穴群が50号横穴まで登録されていることから、それぞれの末番の続き番号を採用し、陰田66号墳、陰田51号～55号横穴とした。なお、本報告書中においては、便宜上調査区ＦをＡ区、ＧをＢ区と称することとする。

第４節　発掘調査の経過と方法

発掘調査は、平成５年度から平成７年度にかけての３ヶ年度にわたった。

平成５年度は、陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡を調査した。調査時はそれぞれ陰田久幸山遺跡のＡ区、Ｂ区、Ｃ区と称し、遺跡名の略称は、それぞれＩＮＫＡ、ＩＮＫＢ、ＩＮＫＣであった。谷筋が異なるため、発掘調査作業員を二班に分け、陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区と陰田ヒチリザコ遺跡を並行して調査し、陰田ヒチリザコ遺跡での作業が終了後、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区の調査に移行した。４月より着手し、11月に現場作業を終了、平成６年３月まで調査成果の纏めを行った。

平成６年度は、陰田小犬田遺跡と陰田第６遺跡Ａ区を調査した。遺跡名の略称は、それぞれＫＩＮ、ＩＮ６とした。陰田小犬田遺跡においては、排土処理の問題から、調査地を二分し、調査時の排土を片側に置き、その後排土を押し戻してもう片側を調査することとした。このため、陰田小犬田遺跡の調査半ばで陰田第６遺跡に調査を移し、これが終了後再び陰田小犬田遺跡に戻るという行程となった。４月より着手し、12月に現場作業を終了、平成７年３月まで調査成果の纏めを行った。

平成７年度は、陰田荒神谷遺跡と陰田第６遺跡Ｂ区を調査した。遺跡名の略称は、それぞれＫＪＤ、ＩＮ６（95）とした。谷筋が異なるため、発掘調査作業員を二班に分け、両遺跡を並行して調査した。４月より着手し、11月に現場作業を終了、平成８年３月まで調査報告書の作成を行った。

遺跡ごとの詳細については、各章にそれぞれ記述した。

第２章　陰田遺跡群の位置と環境

第１節　地理的環境

鳥取県

鳥取県は本州の西側、中国地方北東部に位置しており、北は日本海に臨み、東は兵庫県、西は島根県、南は岡山・広島の両県と接している。また、中国地方は中国山地を境にして山陰と山陽とに区分されており、鳥取県は島根県とともに山陰地方として位置づけられている。

鳥取県は古代行政区分のもと、東に因幡国、西に伯耆国の２国に分かれていた。（伯耆国は大山を境にして地理的に東伯耆と西伯耆とに区分される。）因幡国は現在の鳥取市、気高郡、八頭郡、岩美郡にあたり、岩美郡国府町に国府が置かれていた。伯耆国は現在の倉吉市、東伯郡、米子市、境港市、西伯郡、日野郡にあたり、東伯耆の倉吉市に国府が置かれていた。現在鳥取県は鳥取市、倉吉市、米子市、境港市をはじめとする４市32町４村から構成されており、鳥取市を中心とした東部、倉吉市を中心とした中部、米子市・境港市を中心とした西部の３地域に区分される。県人口は約62万人であり、そのうち４市の人口は約36万人に達しており、都市人口が県人口に占める割合は約60％弱にのぼる。

鳥取県は、東西に約126km、南北に約62kmの広がりを持っており、総面積は3,506.96㎢、そのうち86.3％を山地が占めている。東部・中部・西部のそれぞれに、千代川、天神川、日野川という代表的な河川が流れており、それぞれの下流に鳥取平野、倉吉・羽合・北条平野、米子平野と呼ばれる平野部が形成されている。また鳥取県は、東に鳥取砂丘、西に大山という観光地を抱えており、毎年多くの観光客が訪れている。平成４年の米子自動車道全線開通に伴い、その数も増加傾向にある。県では現在その豊富な自然環境をもとに、全県公園化構想を推進・着手している。

米子市

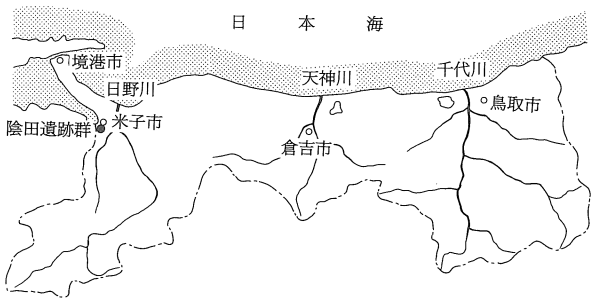
米子市は総面積99.46㎢、人口約13万人を有する鳥取県西部地方の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。古代行政区分においては、西伯耆の会見郡・汗入郡に属する地域である。

市の北部には、日野川からの流出土砂による砂州・弓浜半島が南北にのびており、この半島によって、市の北西には汽水湖・中海が形成されている。山陰地方の人口約140万人（鳥取県の人口約62万人・島根県の人口約78万人）の30％以上がこの中海圏域に集中しており、山陰の中枢地域としての役割をなしている。

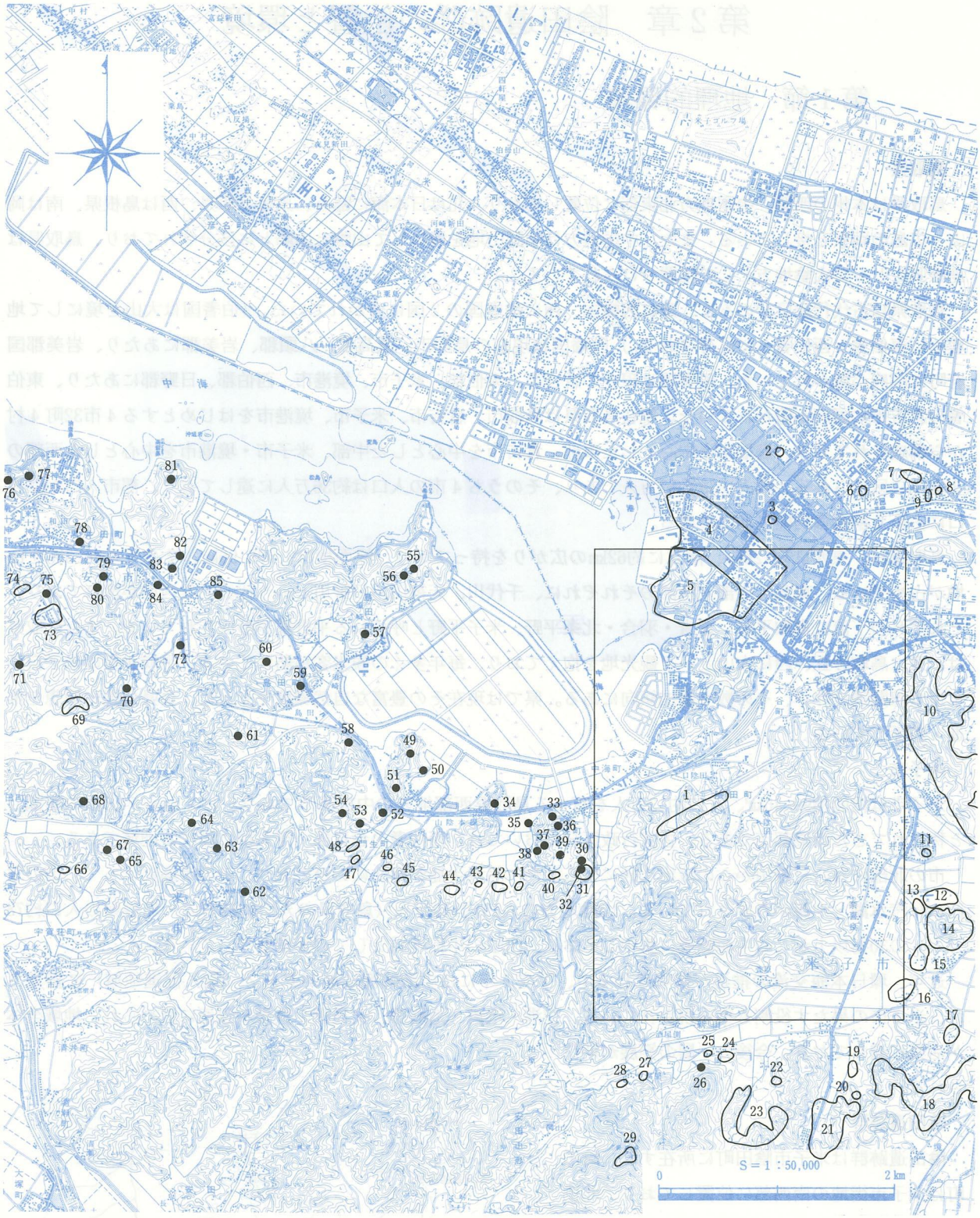
近年、環日本海交流の推進が提唱される中、平成７年には中海臨海地域がＦＡＺ（輸入促進地域）に指定され、米子市の果たす役割も重要視されている。空港・港湾・道路等、交通網の整備が急速に進められ、地域全体が活気に満ちており、今後の一層の発展が期待される。

陰田遺跡群

陰田遺跡群は米子市陰田町に所在する。陰田町は米子市街地の南西部に位置しており、北側は中海と近接し、三方を標高70～160ｍの山稜が取り囲む。農業を生活基盤とする世帯が多く、低地の沖積地を利用して花木栽培が広く行われている。また、丘陵部を利用した果樹栽培も盛んである。



第２図　遺跡群の位置



第３図　遺跡群周辺遺跡分布図

遺跡群の西端は島根県との県境であり、山１つ隔てて島根県安来市と隣接している。現在の県境は、古代の行政区分においてもそのまま旧出雲国と旧伯耆国の国境にあたり、当遺跡群は旧伯耆国会見郡に属する地域である。

陰田町は中海寄りの口陰田地区と谷奥部の奥陰田地区とに区分されており、古くから雲伯往来の要地としての役割を果たしてきた。また、遺跡群の谷奥から南方へ約1.5kmほど進んだ所で旧山陰道に至る。

中世の陰田町は、福田保のうちの「犬田村」と称されている。江戸時代の資料には、正保国絵図に「犬田村」、元禄郷帳に「陰田村」と、時期によって異なる地名の記述が見られ、このことから、17世紀後半には現在の「陰田」の呼称が用いられるようになったと考えられる。

またこの時期、伯耆誌では、会見郡のうち奥陰田、口陰田、西大谷、目角、大谷の5ヶ村を称して「犬田庄」と記している。しかし、元文2年村分帳、因伯郷村帳ではこの5ヶ村は「宗像庄」に属しており、「犬田庄」の庄名は見られず、記述の異なるところである。

第2節　歴史的環境

陰田地区では、近年、交通網の整備等で著しく開発が進んでおり、これに伴う遺跡の発掘調査が盛んに行われてきた。その結果、各時代で種々の性格を持つ遺跡の存在が確認されており、この地区の歴史を解明していく上で、貴重な資料を提示している。

米子市街地の南、陰田町の北東部には縄文時代早期末に始まる目久美遺跡が存在している。目久美遺跡は低湿地の遺跡であり、ここからは縄文時代の貯蔵穴群が確認されている。陰田地区においても、同様に陰田第1遺跡から縄文時代の貯蔵穴が検出されている。陰田地区の最古級の遺跡として、縄文時代前期初頭の遺物散布地である陰田第9遺跡が知られている。これに続く遺跡として縄文時代前期末～中期にかけての遺物が主体となって出土している陰田第7遺跡がある。

目久美遺跡からは弥生時代前期～後期の遺物も多く出土している。また、弥生時代の集落跡とともに水田跡が検出されており、初期農耕文化を今日に伝える貴重な遺跡となっている。遺跡群周辺の陰田第1遺跡・陰田第6遺跡からは、標高30～40mの丘陵尾根部および斜面部に弥生時代後期の住居跡が検出されており、この時期に集落が丘陵上にその生活拠点を移していたことを示している。

当遺跡群西側の丘陵尾根部には島根県安来市の国吉遺跡が隣接しており、そこから尾根を西に下った山麓にはカンボウ遺跡が位置している。このうち国吉遺跡からは遺物の出土はなく、小型の石蓋土壙墓1基が検出されている。カンボウ遺跡からは、谷底を中心に弥生時代後期の土器が出土している。この時期、集落が丘陵部に形成

1　陰田遺跡群　2　錦町第1遺跡　3　四日市町遺跡　4　米子城外郭　5　史跡米子城跡　6　勝田山横穴墓群　7　勝田遺跡　8　人斬り場遺跡　9　勝田土手遺跡　10　宗像古墳群　11　石井要害　12　奈喜良遺跡　13　奈喜良古墳群　14　橋本宝石城　15　橋本遺跡　16　吉谷遺跡　17　榎原第1遺跡　18　境古墳群　19　吉谷トコ遺跡　20　吉谷家ノ上遺跡　21　吉谷古墳群　22　古市横穴墓　23　古市古墳群　24　新山類ノ下遺跡　25　新山岡遺跡　26　新山23号墳　27　新山神遺跡　28　新山大谷原遺跡　29　新山要害　30　平横穴群　31　平ラ遺跡　32　穴神横穴　33　河原崎古墳群　34　八坂古墳　35　茶屋畑廃寺　36　八幡山遺跡　37　嵩横穴　38　屋敷廃寺　39　塚根山横穴群　40　平ラ遺跡　41　山ノ神遺跡　42　徳見津遺跡　43　目廻遺跡　44　五反田遺跡　45　陽徳遺跡　46　陽徳寺遺跡　47　門生黒谷Ⅰ遺跡　48　門生黒谷Ⅱ遺跡　49　和田古墳群　50　下口古墳群　51　山根古墳　52　大歳神社古墳　53　ウガフキ炉跡　54　高畑窯跡　55　岩崎宅横穴　56　赤崎山横穴　57　チョウ塚古墳　58　東谷古墳　59　佐伯互窯跡　60　剣御崎サン古墳　61　イナリ山古墳　62　山ノ神古墳　63　ミセン古墳　64　小田ヶ峰古墳　65　千人塚古墳　66　九重遺跡　67　ウバガ谷遺跡　68　丸山古墳　69　越峠遺跡　70　越峠古墳　71　大神谷古墳群　72　大納言山古墳　73　高広遺跡　74　佐久保遺跡　75　客サン古墳　76　十神山古墳　77　山ノ谷横穴群　78　宮ノ山古墳　79　長曽土壙墓群　80　刎畑遺跡　81　高留古墳　82　米垣山横穴　83　黒島横穴　84　大日サン古墳　85　小浜古墳

第3図　遺跡群周辺遺跡分布図番号対照表

されている割合が高く、カンボウ遺跡においても、果樹園によって削平された尾根部に集落が形成されていた可能性が強いと推測されている。

現在陰田地区では、60基を超える古墳が確認されており、そのうち陰田１号墳では、市内最大級の切石の横穴式石室が確認されている。また、陰田横穴群からは、古墳時代後期～終末にかけての50基にのぼる横穴が発見されており、後背部に墳丘を有する特色を持つ。米子市大垈山横穴群、同尾高１号横穴、西伯町マケン堀横穴群、安来市穴神横穴群においても同様の特色が見られ、この地方が九州地方の影響を受けていたことを窺わせる。（穴神横穴群からは彩色家型石棺内蔵の横穴墓が発見されている。）

奥陰田地区には、弥生時代後期～平安時代前期にかけての遺跡群である奥陰田遺跡群が形成されている。奥陰田遺跡群のうち、陰田隠れが谷遺跡・陰田広畑遺跡・陰田宮ノ谷遺跡等からは、丘陵斜面を加工して竪穴住居や掘立柱建物を構築したと考えられるテラス状の遺構が検出されている。また、陰田広畑遺跡からは、古墳時代後期～平安時代前期にかけての鉄の製錬滓が出土しているとともに、同時期の鍛冶炉が検出されており、製鉄・鍛冶に携わった製鉄関連遺跡であると考えられている。安来市高広遺跡からもテラス状遺構が多数検出されており、その周辺には古墳時代後期～終末の横穴墓も検出されている。また、近年、一般国道９号安来道路の工事に伴う発掘調査により、安来市吉佐町から門生町にかけて、古墳時代の製鉄関連遺跡の調査が行われている。

中世の陰田地区については、天文２年（1533）２月５日の尼子経久寄進状（日御碕神社文書）に「出雲国神門郡日御碕大明神江奉寄附、伯州相見郡福田保犬田村之内、米五十俵地利、十合枡、三斗六升入」と見えるのが初見である。犬田村は、尼子氏に変わって毛利氏・吉川氏が伯耆を制圧した後も、日御碕神社領として安堵され続ける。

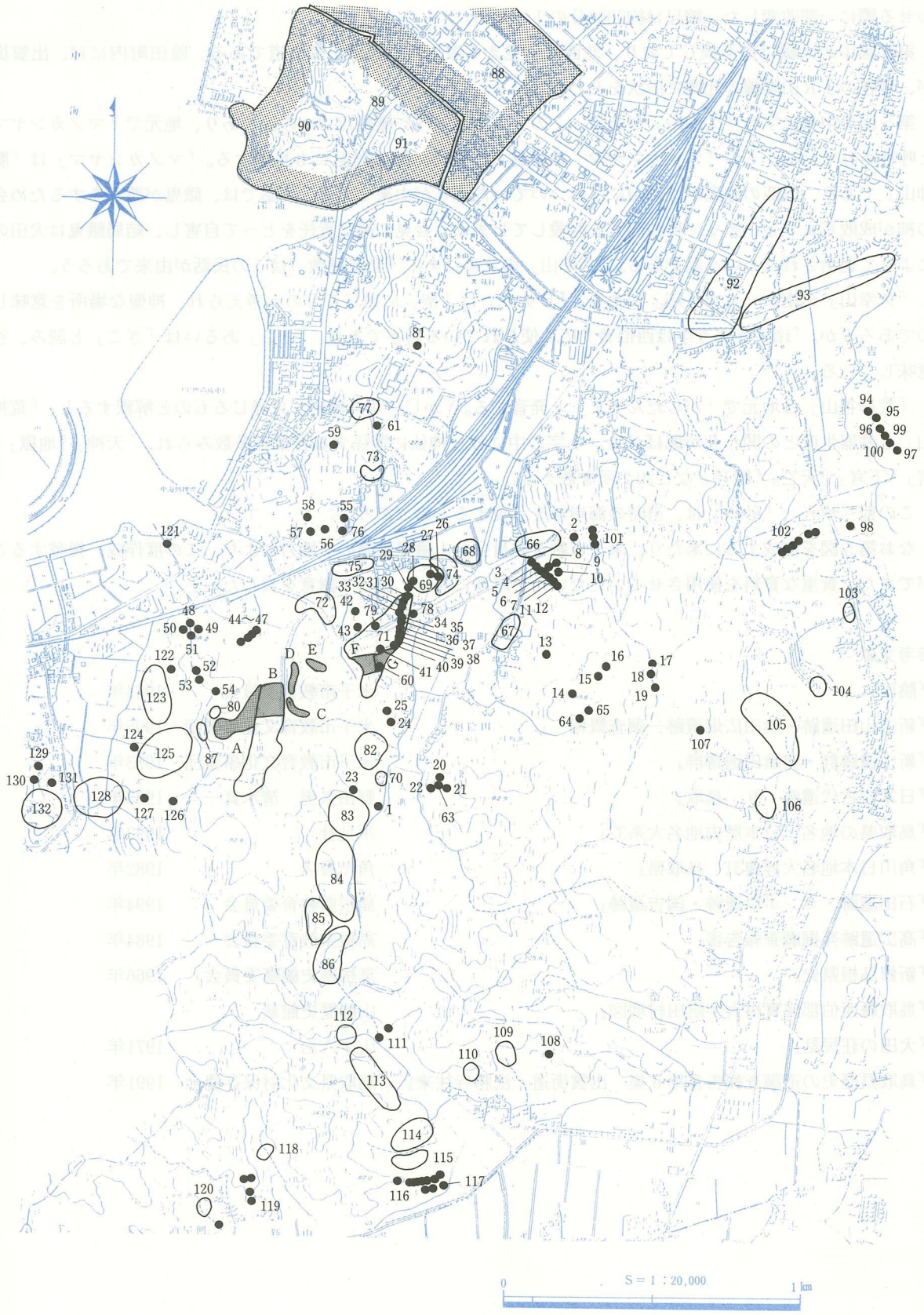
江戸時代初頭の犬田村は、中村忠一（一忠）の伯耆配置に伴い、中村氏の所領となる。中村氏改易後は、加藤貞泰が汗入と会見領有の米子城主となり、やがて、元和３年（1617）池田光政が因伯２国の領主となる。寛永９年（1632）の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると、光仲の主席家老・荒尾成利が米子城を預かることとなる。その後この地は明治に至るまで米子荒尾氏の給所であった。

江戸中期より陰田村と記されるようになった当地は、明治22年より成実村大字陰田となる。その後、大正15年

Ａ　陰田荒神谷遺跡　Ｂ　陰田小犬田遺跡　Ｃ　陰田ヒチリザコ遺跡　Ｄ　陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区　Ｅ　陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区　Ｆ　陰田第６遺跡Ａ区　Ｇ　陰田第６遺跡Ｂ区

１～65　陰田１～65号墳（48～51は別名国吉山古墳群）　66　陰田第１遺跡　67　陰田第２遺跡　68　陰田第３遺跡　69　陰田第４遺跡　70　陰田第５遺跡　71　陰田第６遺跡　72　陰田第７遺跡　73　陰田第８遺跡　74　陰田第９遺跡　75　口陰田遺跡　76　口陰田横穴　77　陰田サキノタニ遺跡　78　陰田横穴群Ａ支群　79　陰田横穴群Ｂ支群　80　陰田荒神谷山遺跡　81　総泉寺山横穴群　82　陰田宮ノ谷遺跡　83　陰田広畑遺跡　84　陰田隠れが谷遺跡　85　陰田ハタケ谷遺跡　86　陰田夜坂谷遺跡　87　国吉遺跡　88　米子城外郭　89　史跡米子城跡　90　米子城跡　91　飯山砦跡　92　目久美遺跡　93　池ノ内遺跡　94　美吉１号墳　95　美吉２号墳　96　宗像40号墳　97　宗像41号墳（別名高山古墳）　98　宗像42号墳（別名中山古墳・中山経塚）　99　宗像43号墳　100　宗像44号墳　101　大谷１～３号墳　102　奥谷１～６号墳　103　奥谷遺跡　104　石井遺跡　105　奥谷前新田遺跡　106　石井中村遺跡　107　石井１号墳　108　新山12号墳　109　新山字萱原所在遺跡　110　萱原遺跡　111　新山10・11号墳　112　下山遺跡　113　研石山遺跡　114　山田遺跡１区　115　山田遺跡２～４区　116　新山２～９・13・14号墳　117　新山１号横穴　118　新山江代谷遺跡　119　新山15～18号墳　120　新山兼廣遺跡　121　八幡山古墳　122　吉佐古墳　123　六ノ坪遺跡　124　神代塚古墳　125　カンボウ遺跡　126　神宝古墳群　127　きさ貝姫塚　128　石田遺跡　129　四方神古墳群　130　平横穴群　131　油田・平古墳群　132　平ラ遺跡

第４図　調査地周辺遺跡分布図番号対照表



第４図　調査地周辺遺跡分布図

より会見郡米子町大字陰田、昭和２年より米子市大字陰田となり、昭和10年より米子市陰田町となった。

第５図は、明治25年８月に作成された陰田町における小字別の地図の一部である。当時の陰田村には98の小字があり、その内、陰田遺跡群を中心とした周辺の39の小字を掲載した。図面は本来、断片の集成であり、繋ぎ合わせる際に一部改変した。縮尺は約3000分の１である。

第５図中の太線は道を表しており、北西隅に見える最も太い線は出雲街道である。陰田町内には、出雲街道が、現在のＪＲ山陰線の北側に旧状をとどめている。

第５図の中央に字名「久幸山」がある。この「久幸山」内に標高72.8mの山があり、地元で「マノカンヤマ」と呼称されている。この「マノカンヤマ」の呼称は、町内に残る民話にも登場する。「マノカンヤマ」は「魔の神山」であり、三匹の餓鬼がこの山に住みついていたことが由来である。民話では、餓鬼が悪さをするため会見の神が成敗しようと、誤って毘沙門天を射殺してしまう。会見の神は責任をとって自害し、結局餓鬼は犬田の神によって退治されたという話である。「久幸山」の北東にある「会見屋敷」はこの民話が由来であろう。

「久幸山」の南に「ヒチリ峪」がある。「ヒチリ」は「聖」に通じるものと考えられ、神聖な場所を意味したのであろうか。「峪」という字は西伯耆で広く使われている俗字であり、「さこ」あるいは「ざこ」と読み、谷を意味している。

「荒神谷山」は地元で「かじだんやま」と発音する。「かじ」が「鍛冶」に通じるものと解釈すると、「荒神谷山」と鉄器生産との関わりが偲ばれる。小字の中には、神仏に関係する言葉が多数みられ、「天神」「地獄」「上宮」「下宮」「天竺」「観音」など20ケ所を数える。

この他「汐入」、「砂口」は、当時の海岸線を示唆するものであろう。

なお第５図を作成するにあたり、米子市教育委員会と山陰歴史館のご協力により、この度作成、掲載することができた。貴重な資料を使用させていただいたご厚意に対し、記して謝意を表したい。

参考文献

『陰田』	米子市教育委員会	1984年
『新山山田遺跡・陰田広畑遺跡―調査概報―』	米子市教育文化事業団	1995年
『新山遺跡群・奥陰田遺跡群』	米子市教育文化事業団	1993年
『日本の古代遺跡　９　鳥取』	野田久男　清水真一	1983年
『鳥取県の地名　日本歴史地名大系32』	平凡社	1992年
『角川日本地名大辞典31　鳥取県』	角川書店	1982年
『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡』	島根県教育委員会	1994年
『高広遺跡発掘調査報告書』	島根県教育委員会	1984年
『新修島根県史』	島根県史編纂委員会	1966年
『鳥取縣西伯郡成實村大字陰田村地図』	山陰歴史館蔵	
『犬田の荘民話』	山中六治	1971年
『鳥取県歴史の道調査報告書第６集　出雲街道・法勝寺往来』	鳥取県文化財保存協会	1991年

第 5 図　調査地周辺の字名（太線は道を示す）

第３章　陰田第６遺跡の調査

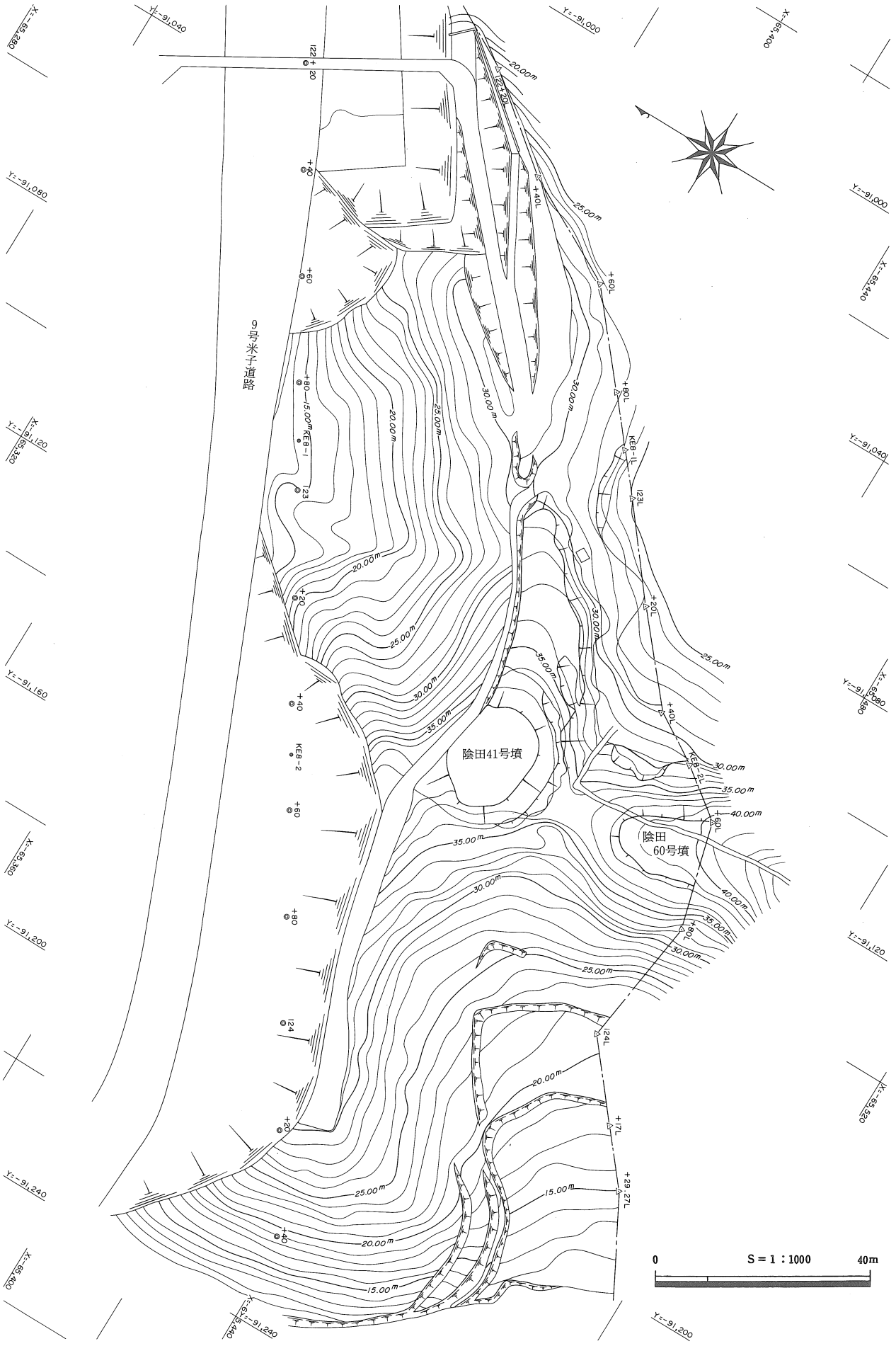
第１節　位置と環境（第４、６～８図）

調査地は、米子市陰田町字久幸山に所在し、久幸山（標高38.6m）と天神山（標高31.2m）が馬蹄形に連なる丘陵の南側斜面部に位置する。中央部に、陰田41号墳、60号墳の所在する尾根があり、これをもって西側をＡ区、60号墳の所在する尾根を含んで東側をＢ区とした。Ａ区は、久幸山の南側に位置し、久幸池のある谷から東方に派生した谷の斜面部にあたる。標高は現況で12～39m、検出面で11.5～38.5mである。現況の地目は果樹園で、段状に造成されている。Ｂ区は、天神山から南西に伸びる丘陵の南側斜面部に位置する。陰田横穴群の存在する斜面の延長部である。標高は、現況で25～38m、検出面で24.5～37.5mである。現況は雑木と針葉樹による山林であるが、以前は果樹園として利用されており、随所で地形の改変がみられた。

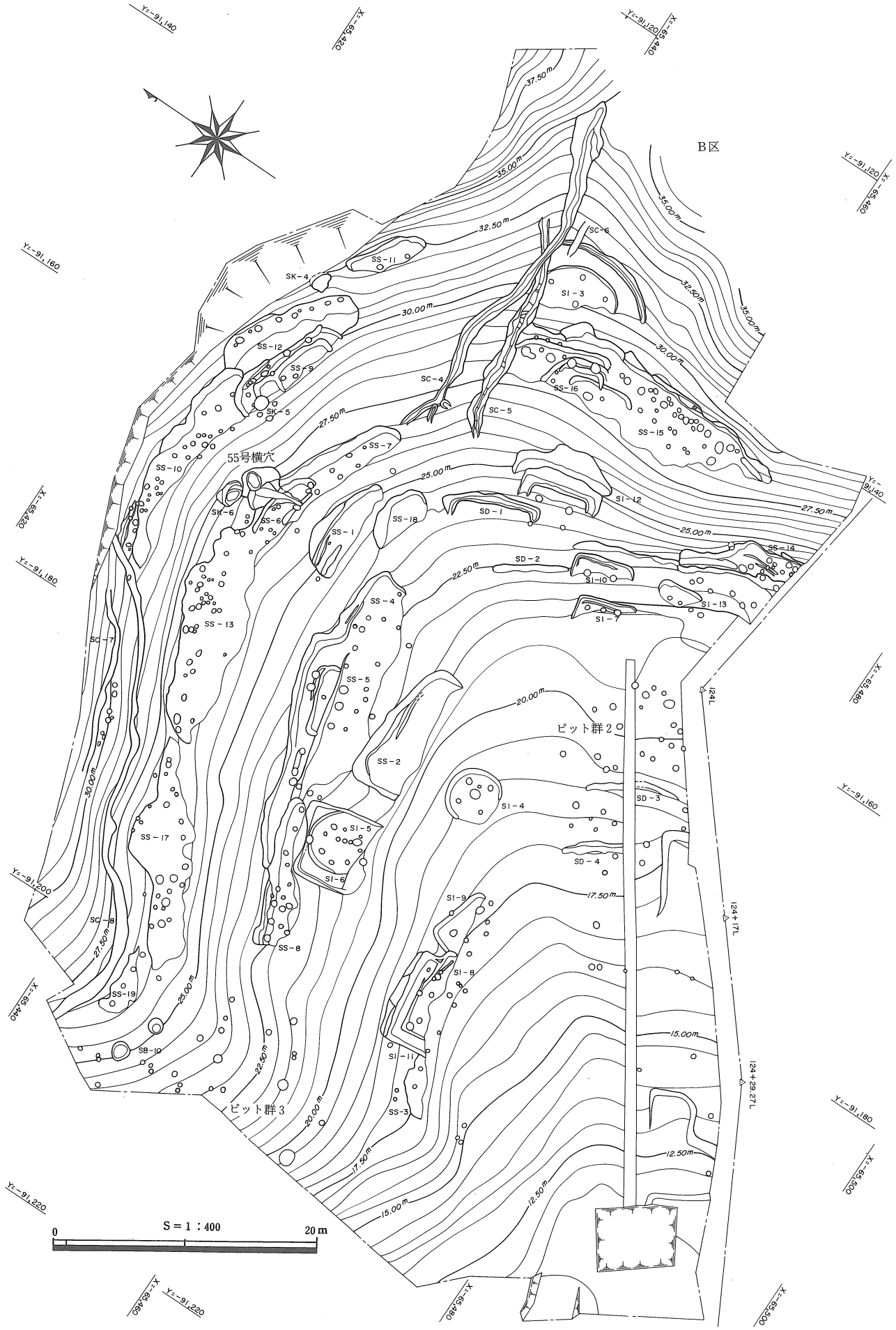
Ａ区北側の丘陵尾根部やＢ区以東に伸びる丘陵においては、米子市教育委員会によって発掘調査が行われており（註１）、弥生時代後期の竪穴住居跡17棟、古墳12基、横穴27基、未完成横穴３基、小横穴20基、古墓63基が検出されている。今回の調査区に隣接する箇所については、Ａ区の北側の斜面上部で、「段状住居跡」４棟が検出されている。調査者は、「斜面を直立気味に掘削して壁面を造り出す段状の遺構」で、「壁に沿って側溝を設け」、「柱痕が見うけられず」、「当初から段状それのみであった可能性も強い」と指摘している（註２）。今回の調査で、テラス状遺構としたものであろう。Ａ区とＢ区の中間の尾根では、陰田41、42号墳が調査されている。41号墳は、径30m、高さ２ｍを測る円墳で、組合わせ式箱形石棺や石槨木棺を中心主体とするものである。古墳時代中期に比定されている。陰田古墳群中最大の古墳である。42号墳は、径12～18mの円墳で、円筒埴輪棺が検出されている。陰田編年（註３）の３式、６世紀中葉に比定されている。なお、42号墳の北側下方には、前方後円墳の43号墳が位置しており、これは未調査の古墳である。Ｂ区の北東側に隣接する丘陵尾根上には、陰田38～40号墳が検出されている。当時は、各古墳北側墳丘の約２分の１の調査であり、38号墳、40号墳では主体部が確認されていない。39号墳では、13基の土壙墓が検出されている。横穴については、今回の調査地に最も近い位置に29号横穴があるが、これは未完成横穴である。Ａ区の西側、久幸池のある谷を挟んだ反対側には、陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区があり、古墳時代後期の竪穴住居跡１棟、奈良時代のテラス状遺構１基が検出されている（本書本文編Ⅰ第４章）。

第２節　調査の経過と方法（第６～８図）

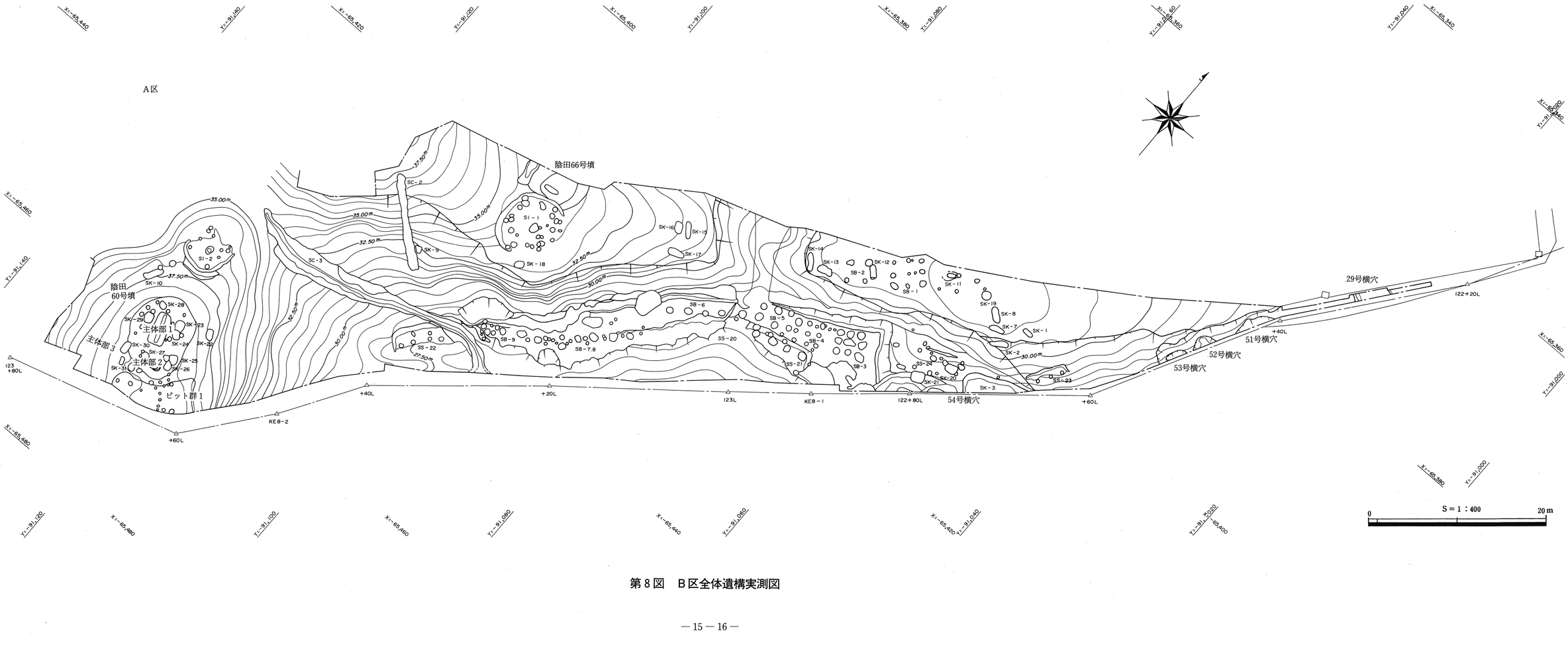
調査は、２ヶ年にわたる。Ａ区は平成６年４月に着手し、12月に現場作業を終了した。過去の調査結果や現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査面積は、4,592㎡であった。果樹園造成に伴い地形が改変されていたが、調査の結果、概ね原地形に沿った改変であったことが判明した。果樹園造成に伴わない段状地形も一部に確認できたが、調査地は概ね傾斜地であった。のちに検出したテラス状遺構の存在については、調査着手時には予測していなかった。存在を予測していたのは、近世墓である。かつて神道墓と思われる石塔がＳＳ－６付近に存在していたが、事前に石塔のみ他所へ改葬された。「文化四年（1807年）丁前修學道中山指間翁神魂卯七月二十二日」の墓碑銘が刻まれた、先端の尖った自然石の竿部で、基台も自然石を粗く加工したものであった（註４）。地下には埋葬施設が遺存するものと考えられ、この付近については重機を使用せず、表土から手掘りした。結果的には、この石塔に伴うべき埋葬施設の確認に至らなかった。基本的には、過去の調査結果から推察して、弥生時代後期の集落遺跡あるいは横穴群の存在を予測していた。遺構の予察のため、サブトレンチを数カ所に設定したところ、段状の落ち込みを確認し、古墳時代後期から奈良時代にかけての土器類が多量に出土したため、斜面部にテラス状遺構の存在を意識しての調査となった。調査前の地形を測量後、現地形を勘案してベ



第6図　調査前地形実測図



第7図　A区全体遺構実測図



第 8 図　B 区全体遺構実測図

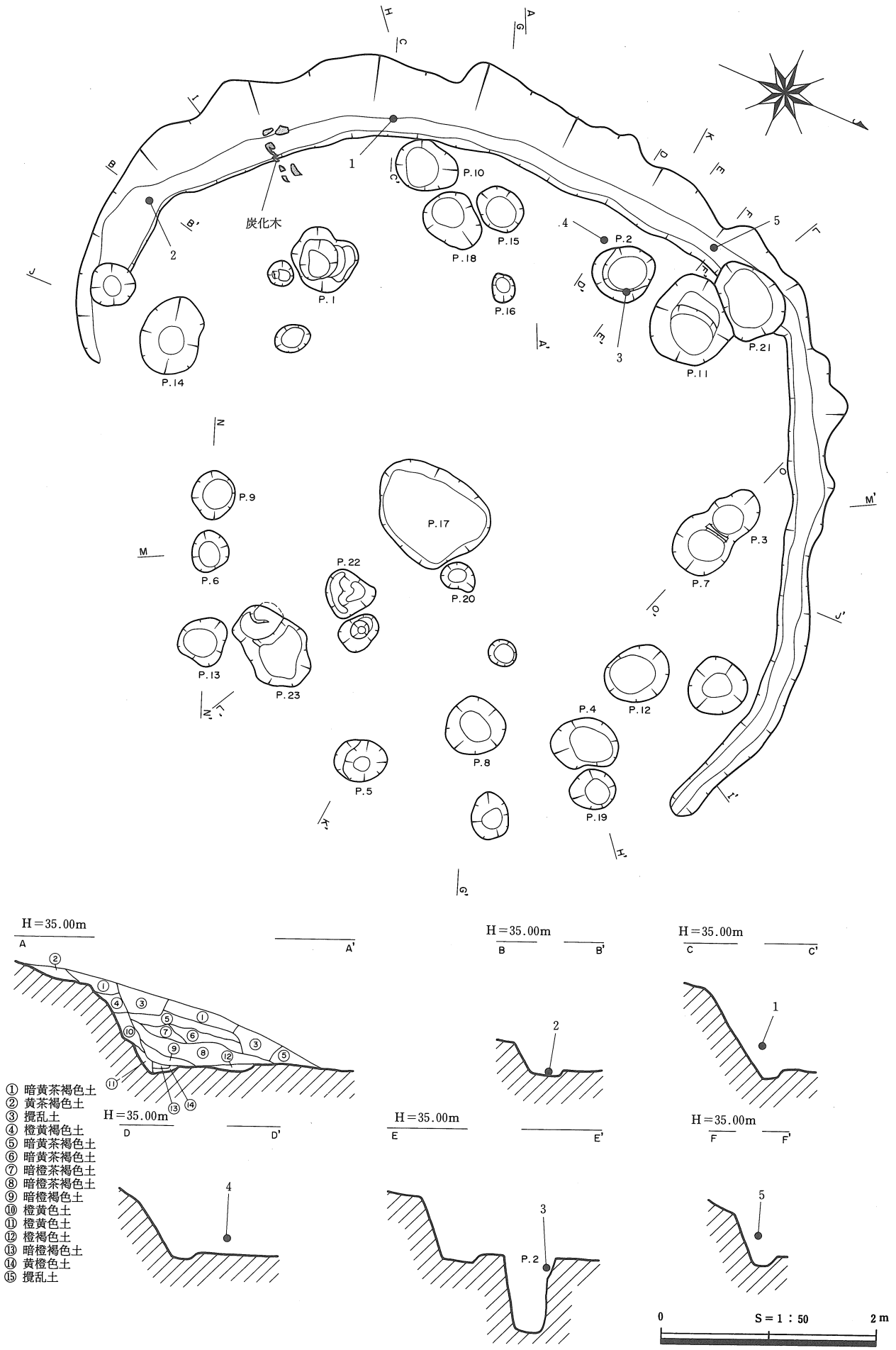
ルトを設定し、土層状況を観察しながら重機により表土を除去した。その結果、岩脈の走り方、風化の度合いが複雑で、箇所によりベースとすべき地盤が異なる状況が現れた。精査を重ねて行うことによって、炭化物を含む灰褐色系の土の半月形状の広がりを遺構の埋土と把握した（図版16）。この検出面を遺構検出面として、調査地全体に拡大して追求していった。遺構は、土層観察用ベルトを設定してサブトレンチを掘り下げ、遺構の床面と壁面を把握したうえで、全体的に掘り下げた。遺物については、必要に応じて出土状況の写真撮影、実測、取り上げを行った。実測は、測量用基準杭を実地に設定せず、トータルシスムを用いた。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査区全体については、調査後の地形を測量し、ラジコン・ヘリコプターによる全体空中写真撮影を行った。平成６年11月に現地説明会を実施し、遺跡と出土遺物を一般に公開し、多数の参加を得た。

Ｂ区は平成７年４月に着手、10月に現場作業を終了した。事前の米子市教育委員会による試掘調査の結果や過去の調査結果を勘案し、現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査面積は、2,500㎡であった。果樹園造成時に地形の改変がなされており、また果樹の施肥用の掘り込みが多数みられ、攪乱された状態が随所で検出された。調査着手の段階で予測されていたのは、丘陵尾根部では、弥生時代後期の集落、前節で触れた陰田38～40号墳の未調査部分と陰田60号墳、南側斜面部では古墳時代後期～奈良時代のテラス状遺構であった。陰田38～40号墳については、相当する箇所の表土直下で岩質の地山が現れ、墳丘を示す盛り土や掘り込みも確認されなかった。結果的には、副次的な主体部と思われる土壙墓を検出したが、中心的な主体部は確認できなかった。これら３基の古墳については、削平され消滅した可能性がある。丘陵尾根部の最東端には、狭長な調査対象域があり、ここに60㎝幅の調査区を設定したところ、中央部付近で段状の落ち込みを確認したため、さらに調査区幅を30㎝拡張して追求した。結果的にこの遺構は、過去に調査されている未完成横穴である陰田29号横穴の未調査部分にあたると判断された（第41図・写真図版11）。このあたりから西側にかけての斜面部には、過去の調査で横穴は検出されておらず、横穴群の終結が予測されていた。しかし、今回の調査で陰田54号横穴（第44図・写真図版12）の後背墳丘が確認されたため、横穴群の新たな支群が調査区南側斜面に展開することが予測された。さらなる精査の結果、調査区東南側、29号横穴と54号横穴の中間地点に、陰田51～53号横穴を確認した（第43図・写真図版11）。ただし、51号横穴は羨門部上方の地山加工部分のみの検出であり、また52、53号横穴は調査区境界線に近接して羨門部が開口し、かつ閉塞石と思われる礫が調査区境界線下の法面に挿し挟まっていた。横穴への入り口部分が境界線上にあたるという状況について、対応を検討した結果、51～53号横穴付近が工事の掘削予定にないことを確認した上で、雨水の流入等横穴内部に影響を与えぬよう急遽埋め戻し、現状保存することとなった。表土除去は、現地形を勘案してベルトを設定し、土層状況を観察しながら重機により行った。全体に岩質が卓越しており、遺構検出に幸いした。遺物については、必要に応じて出土状況の写真撮影、実測、取り上げを行った。実測は、トータルシステムを援用しながら、調査地内に基準ラインを設定し、これをもとに10m画のグリッドをなす基準杭を設定し、使用した。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査区全体については、調査後の地形を測量し、ラジコン・ヘリコプターによる全体空中写真撮影を行った。平成７年９月に、一般に遺跡を公開した。

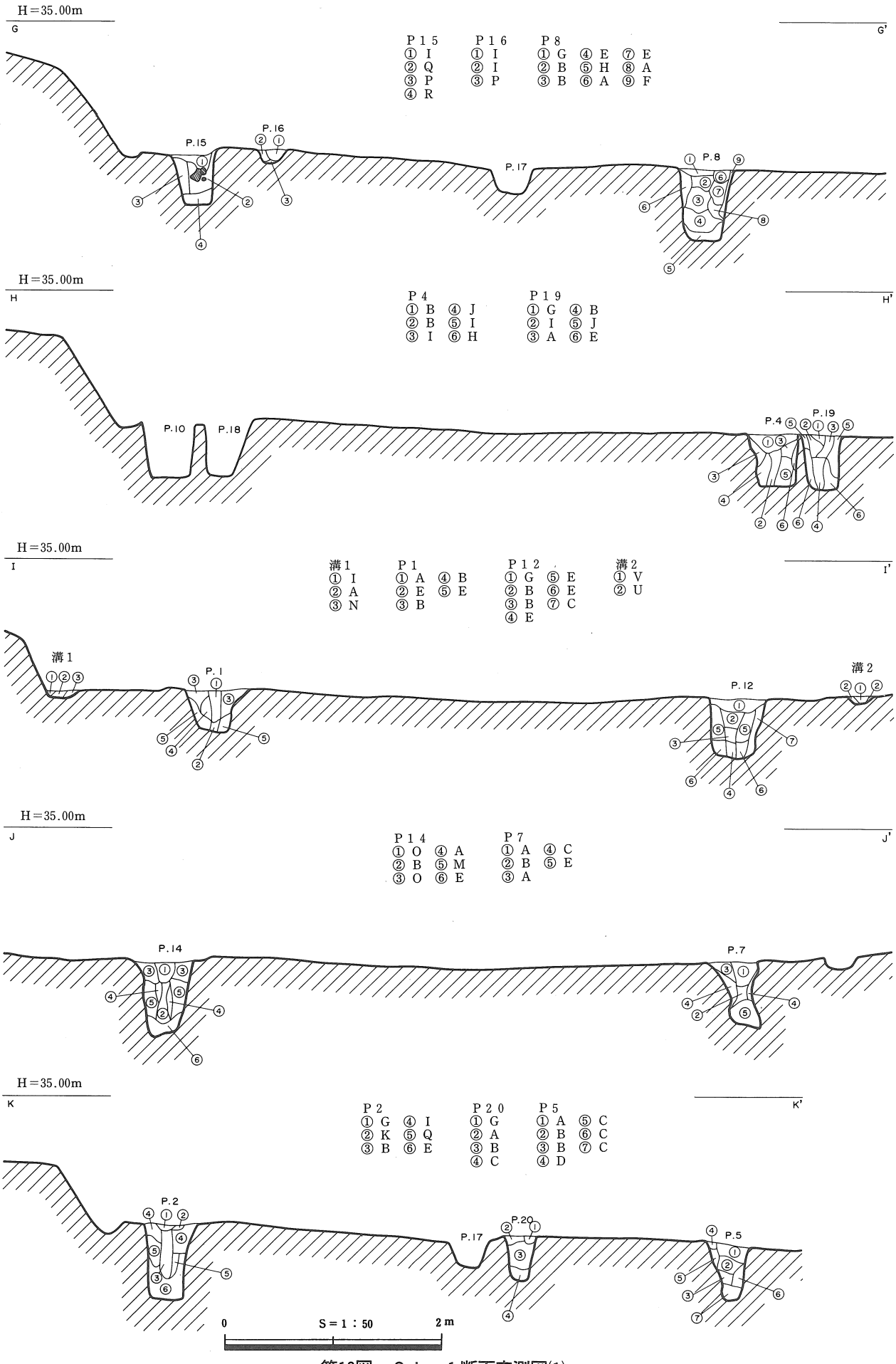
第３節　遺構と遺物

１　概要（第７、８図）

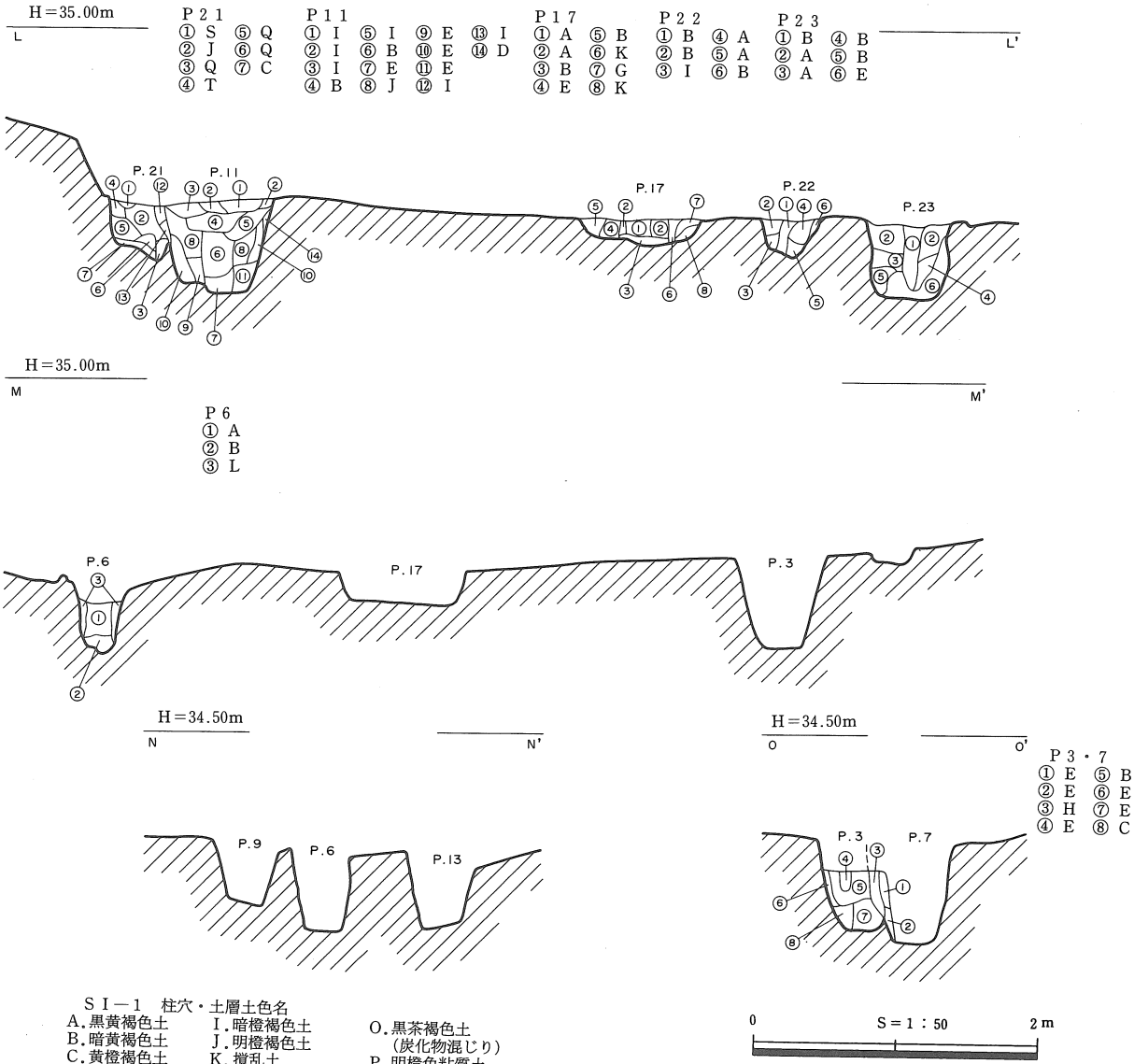
遺構は、竪穴住居跡13棟（ＳＩ－１～13）、テラス状遺構24基（ＳＳ－１～24）、溝状遺構４基（ＳＤ－１～４）、掘立柱建物跡３棟（ＳＢ－１、２、10）、古墳２基（陰田60、66号墳）、横穴６基（陰田29、51～55号横穴）、土坑５基（ＳＫ－１～10、19）、土壙墓20基（ＳＫ－11～18、20～31）、道状遺構８条（ＳＣ－１～８）、ピット群３ヶ所（ピット群１～３）を検出した。遺構の時期は、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期～奈良時代、近世である。遺跡は、弥生時代後期の集落に始まり、古墳時代前期に一部竪穴住居が残り、中期を隔て


炭化木
P.1
P.2
P.3
P.4
P.5
P.6
P.7
P.8
P.9
P.10
P.11
P.12
P.13
P.14
P.15
P.16
P.17
P.18
P.19
P.20
P.21
P.22
P.23
H＝35.00m
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
① 暗黄茶褐色土
② 黄茶褐色土
③ 攪乱土
④ 橙黄褐色土
⑤ 暗黄茶褐色土
⑥ 暗黄茶褐色土
⑦ 暗橙茶褐色土
⑧ 暗橙茶褐色土
⑨ 暗橙褐色土
⑩ 橙黄色土
⑪ 橙黄色土
⑫ 橙褐色土
⑬ 暗橙褐色土
⑭ 黄橙色土
⑮ 攪乱土
0
S＝1：50
2 m

第9図　ＳＩ－1実測図

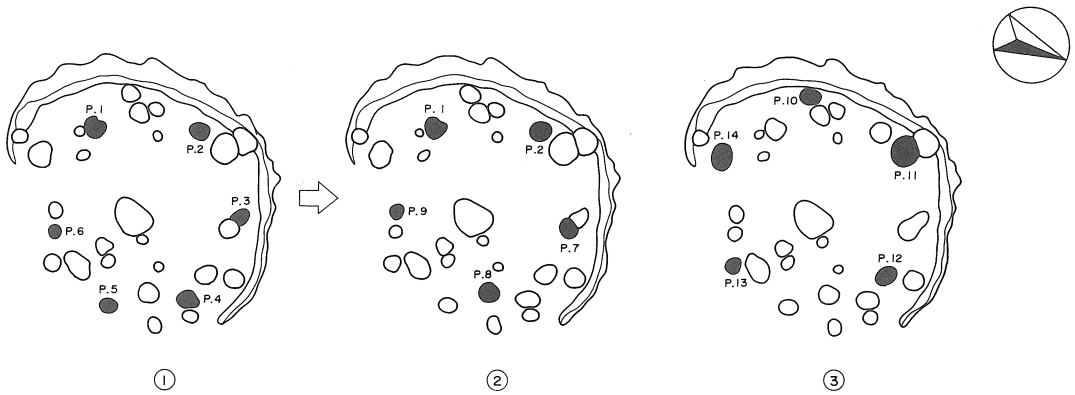


第10図　ＳＩ－１断面実測図(1)

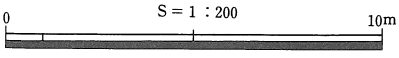


S I－1　柱穴・土層土色名

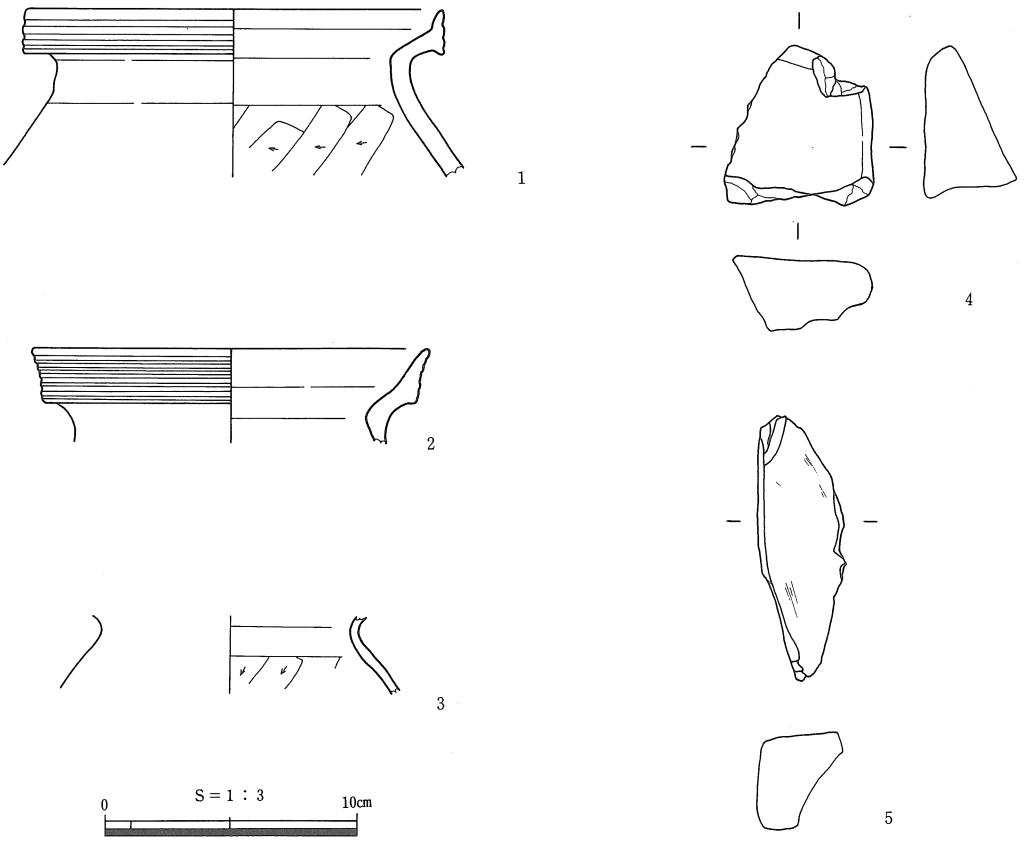
A. 黒黄褐色土
B. 暗黄褐色土
C. 黄橙褐色土
D. 橙色土
（地山土の崩落）
E. 黄褐色土
F. 橙茶褐色土
G. 灰黄褐色土
H. 橙色土
I. 暗橙褐色土
J. 明橙褐色土
K. 撹乱土
L. 黄茶褐色土
（黄白色礫混じり）
M. 暗橙茶褐色土
N. 暗黄茶褐色土
（黄白色礫混じり）
O. 黒茶褐色土
（炭化物混じり）
P. 明橙色粘質土
Q. 橙褐色土
R. 橙黄色土
S. 橙灰色土
T. 赤橙褐色土
U. 濃赤茶褐色土
V. 赤茶褐色土



住居の変遷



第11図　S I－1 断面実測図(2)



第12図　ＳＩ－１出土遺物実測図

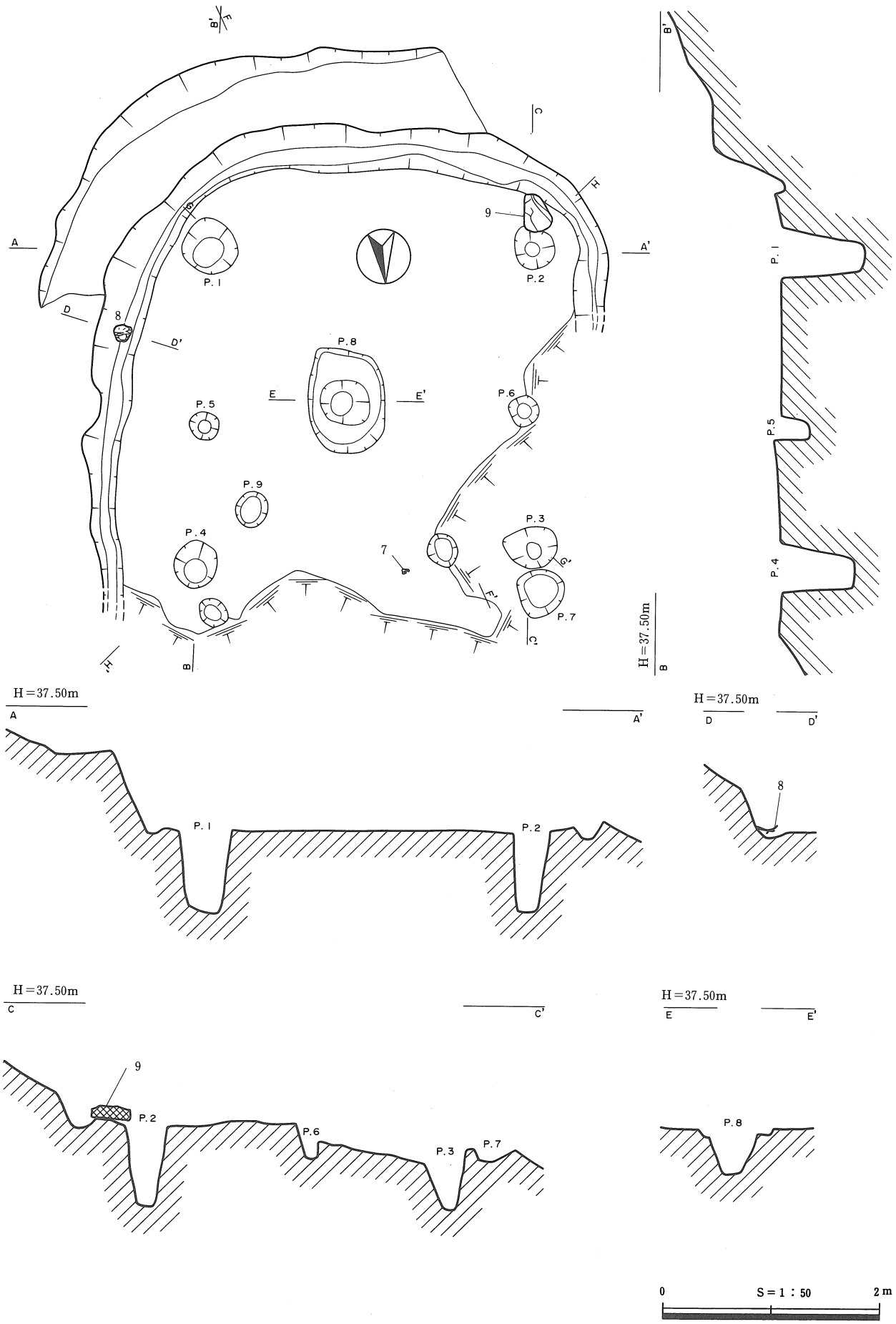
て古墳時代後期に再び集落を形成し、奈良時代まで継続する。古墳時代前期には丘陵頂部に古墳（陰田60号墳）が築かれ、隣接して中期には陰田41号墳が築かれている。後期には横穴が築かれ、同時に土壙墓も形成されている。その後道が残り、往来が現代まで続く。近世においては、古墓群が築かれている。

遺跡において、主要な位置を占める遺構は、古墳時代後期～奈良時代のテラス状遺構である。23基（ＳＳ－２～24）を検出した。斜面を断面Ｌ字状に削平し、平坦面を造成するもので、ピット列を伴う。単独で成立するものは少なく、他のテラス状遺構や竪穴住居と重複するケースが多い。よって遺跡内に、重複する遺構群を１単位となすエリア群が現出する状況となっている。

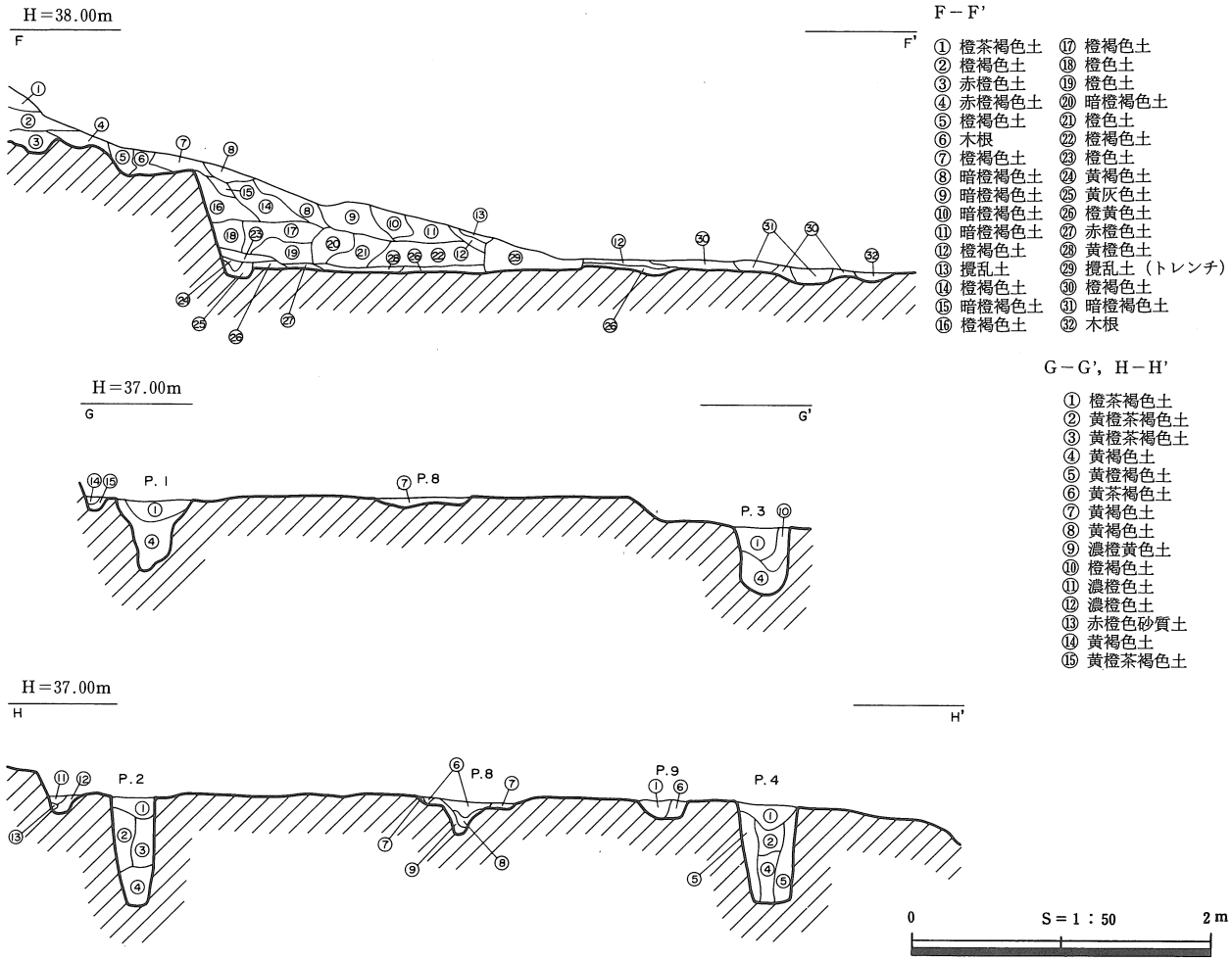
2　弥生時代後期の遺構（ＳＩ－１～５、ＳＳ－１、ＳＤ－１）

本遺跡からは、丘陵尾根部および斜面部に弥生時代後期の竪穴住居跡５棟（ＳＩ－１～５）、テラス状遺構１基（ＳＳ－１）、溝状遺構１条（ＳＤ－１）を検出した。竪穴住居跡は、斜面を直立気味に掘削して、壁面や床面を構築したものである。基本的に壁面裾部に側溝をもつ。円形、隅丸方形の平面プランを呈し、床面の低位側は流失しているものもある。流失部分には本来、斜面を加工した際に生じた廃土を利用して盛土し、床面を造成していたものと推測される。

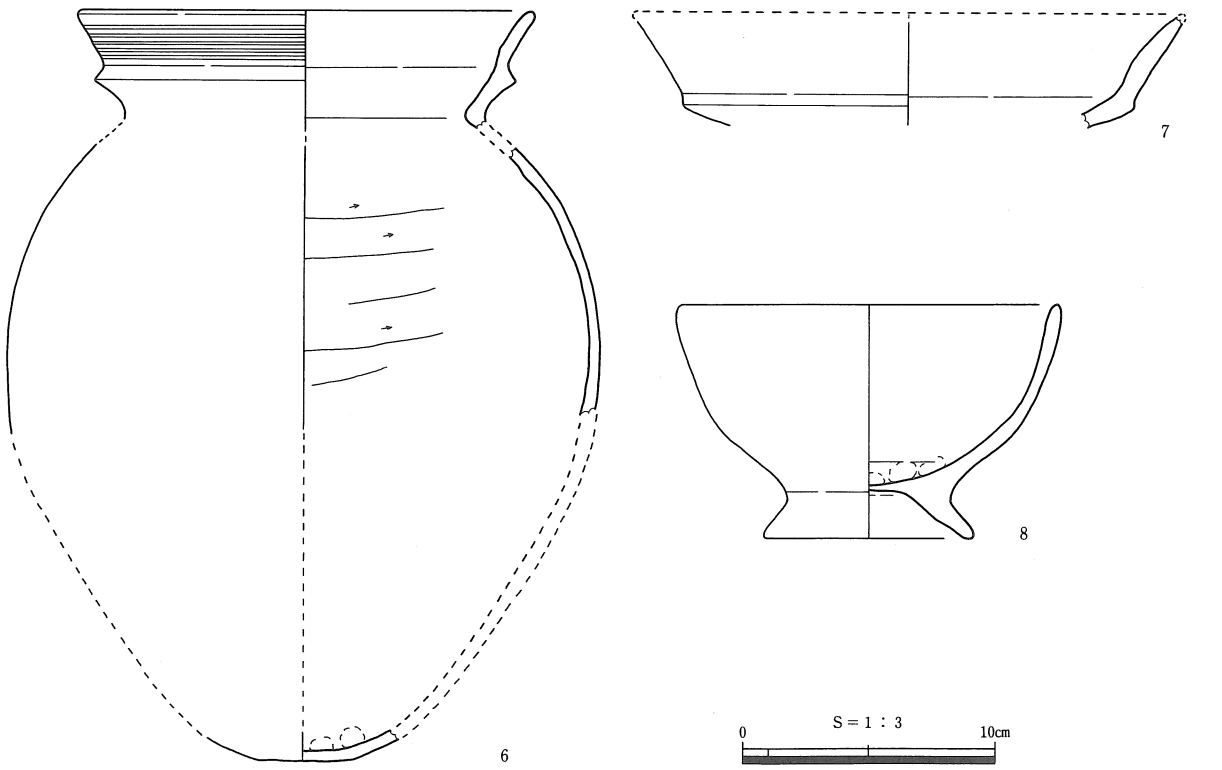
陰田第６遺跡では、昭和55～59年に行われた米子市教育委員会の調査によって、集落跡の存在が確認されている。当時の調査では、Ａ区上方の丘陵頂部周辺（久幸地区）から、円形、隅丸方形、多角形と多様な平面プランを呈する竪穴住居跡９棟を、Ｂ区東側に位置する丘陵尾根頂部周辺（天坂地区）には、円形、隅丸方形の平面プランを呈する竪穴住居跡８棟を検出している。これらの住居跡には、拡張建て替えの痕跡が窺えた。その概要については、Ｐ.27、28の表中に掲載する。今回の調査において検出した５棟の竪穴住居跡はこれらと大きな離隔もなく、時期的にも重なることから、同一集落と考えられる。



第13図　ＳＩ－２実測図

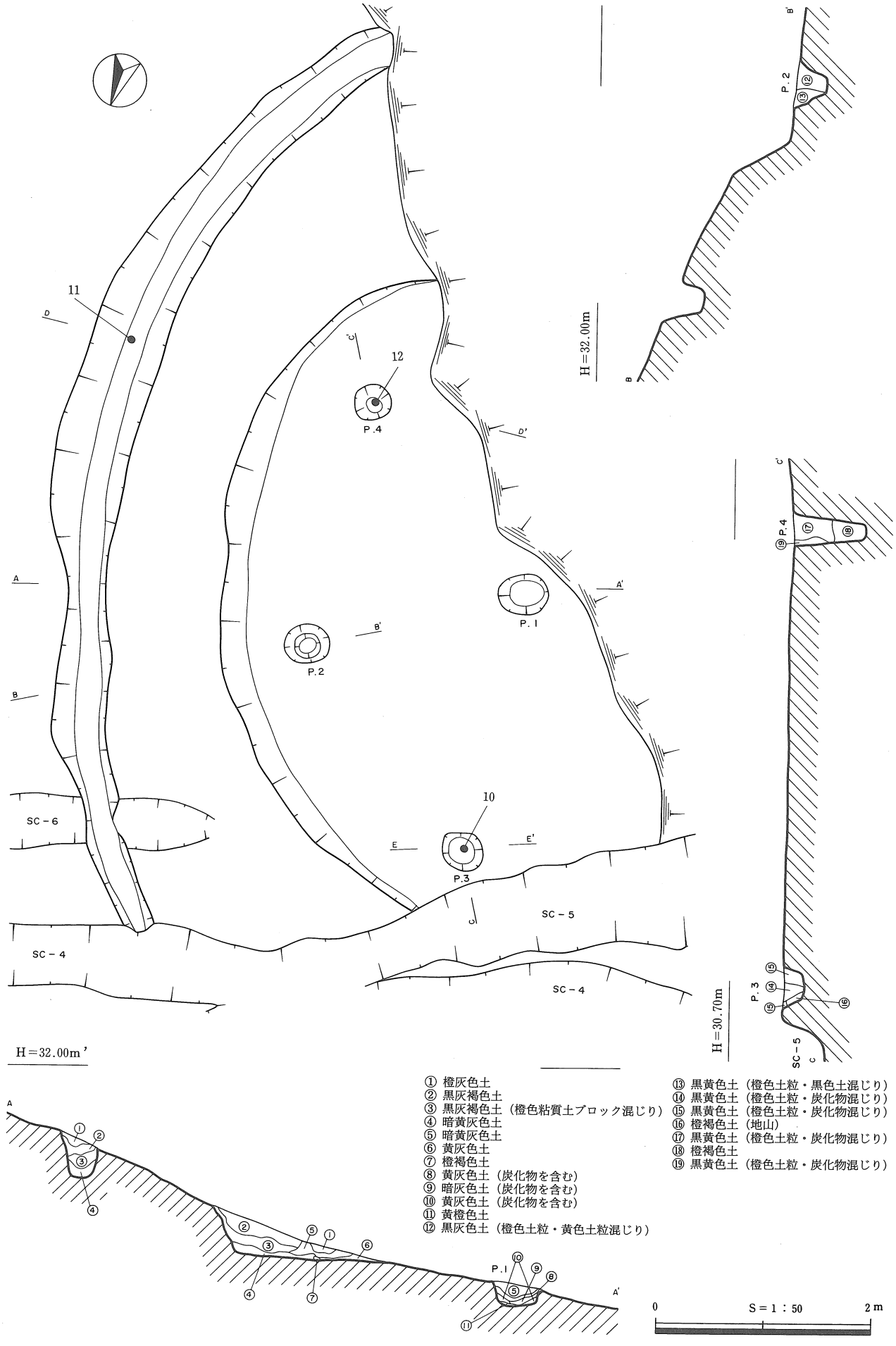


第14図　ＳＩ－２断面実測図



第15図　ＳＩ－２出土遺物実測図(1)

第16図　ＳＩ－２出土遺物実測図(2)


11
12
10
P.1
P.2
P.3
P.4
SC－6
SC－5
SC－4
H＝32.00m
H＝32.00m'
H＝30.70m
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
① 橙灰色土
② 黒灰褐色土
③ 黒灰褐色土（橙色粘質土ブロック混じり）
④ 暗黄灰色土
⑤ 暗黄灰色土
⑥ 黄灰色土
⑦ 橙褐色土
⑧ 黄灰色土（炭化物を含む）
⑨ 暗灰色土（炭化物を含む）
⑩ 黄灰色土（炭化物を含む）
⑪ 黄橙色土
⑫ 黒灰色土（橙色土粒・黄色土粒混じり）
⑬ 黒黄色土（橙色土粒・黒色土混じり）
⑭ 黒黄色土（橙色土粒・炭化物混じり）
⑮ 黒黄色土（橙色土粒・炭化物混じり）
⑯ 橙褐色土（地山）
⑰ 黒黄色土（橙色土粒・炭化物混じり）
⑱ 橙褐色土
⑲ 黒黄色土（橙色土粒・炭化物混じり）
0
S＝1：50
2 m

第17図　ＳＩ－３実測図

陰田第6遺跡の弥生時代後期の竪穴住居跡（『陰田』米子市教育委員会　1984年　による）

天坂地区

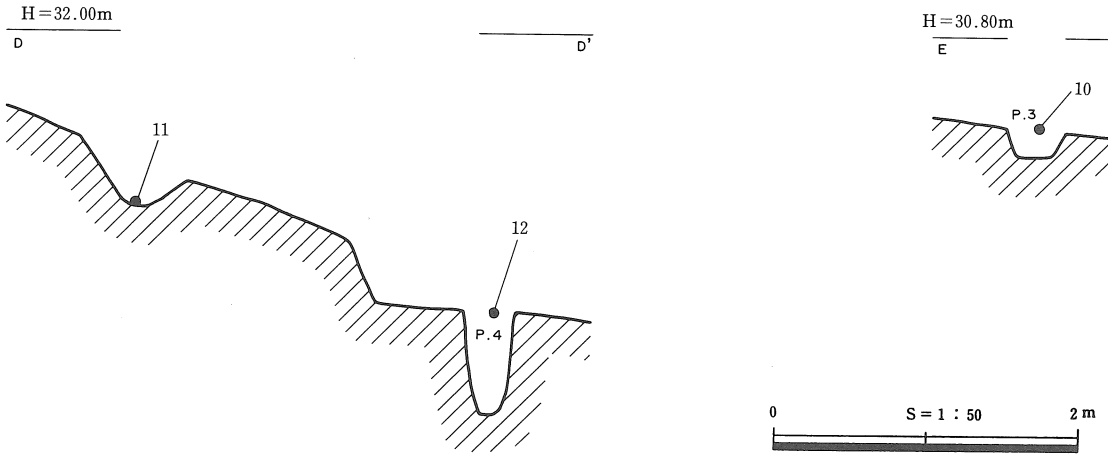
遺構名	規　模	平面プラン	主柱穴	出土遺物	備　考
ＳＩ01ａ	径5.1m	円形	5本	土器	
ＳＩ01ｂ	径6.65m	円形	8本		ＳＩ01ａの建替
ＳＩ02	径4.15m	円形？	4本		
ＳＩ03		隅丸方形？			
ＳＩ04	長軸4.2m 短軸3.45m	隅丸長方形	4本		
ＳＩ05				土器片	
ＳＩ06	1辺約3m	隅丸方形	4本		
ＳＩ07	径約5.2m	円形		土器片	焼失住居
ＳＩ08		隅丸方形？			

久幸地区

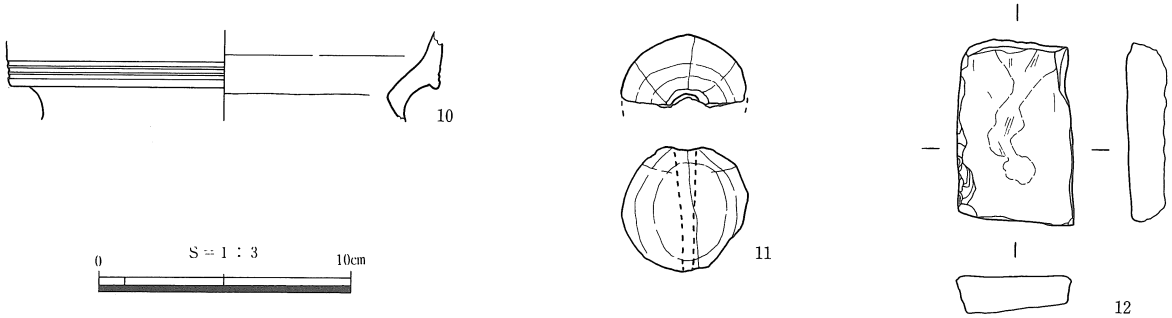
遺構名	規　模	平面プラン	主柱穴	出土遺物	備　考
ＳＩ01ａ	径約3.6m	隅丸六角形	6本		
ＳＩ01ｂ	径約4m	隅丸五角形	5本		ＳＩ01ａの建替
ＳＩ02ａ	最大長6.2m	隅丸方形？	4本		
ＳＩ02ｂ	1辺4.5m	隅丸五角形	5本	土器片・河原石	ＳＩ02ａの建替
ＳＩ03ａ	1辺4.8m	隅丸方形	4本		
ＳＩ03ｂ	1辺5.55m	隅丸方形	4本	土器	ＳＩ03ａの拡張建替
ＳＩ04ａ	径約3.5m	隅丸五角形	5本		

ＳＩ04ｂ	径約6.5m	円形？	5本		ＳＩ04ａの拡張建替
ＳＩ04ｃ	径約6.5m	円形？	6本	河原石、砥石	ＳＩ04ｂの建替
ＳＩ05ａ	径5.4m	円形	4本		
ＳＩ05ｂ	径約6.5m	円形	6本		ＳＩ05ａの拡張建替
ＳＩ05ｃ	径約３m	隅丸八角形	8本		ＳＩ05ｂの建替、焼失住居
ＳＩ06	１辺約5.7m	隅丸方形	4本	炭化材	焼失住居
ＳＩ07	１辺4.7m	隅丸方形	4本	弥生土器片	ＳＩ09の建替
ＳＩ08		隅丸方形？			ＳＩ07の建替
ＳＩ09		隅丸方形？	4本	弥生土器	

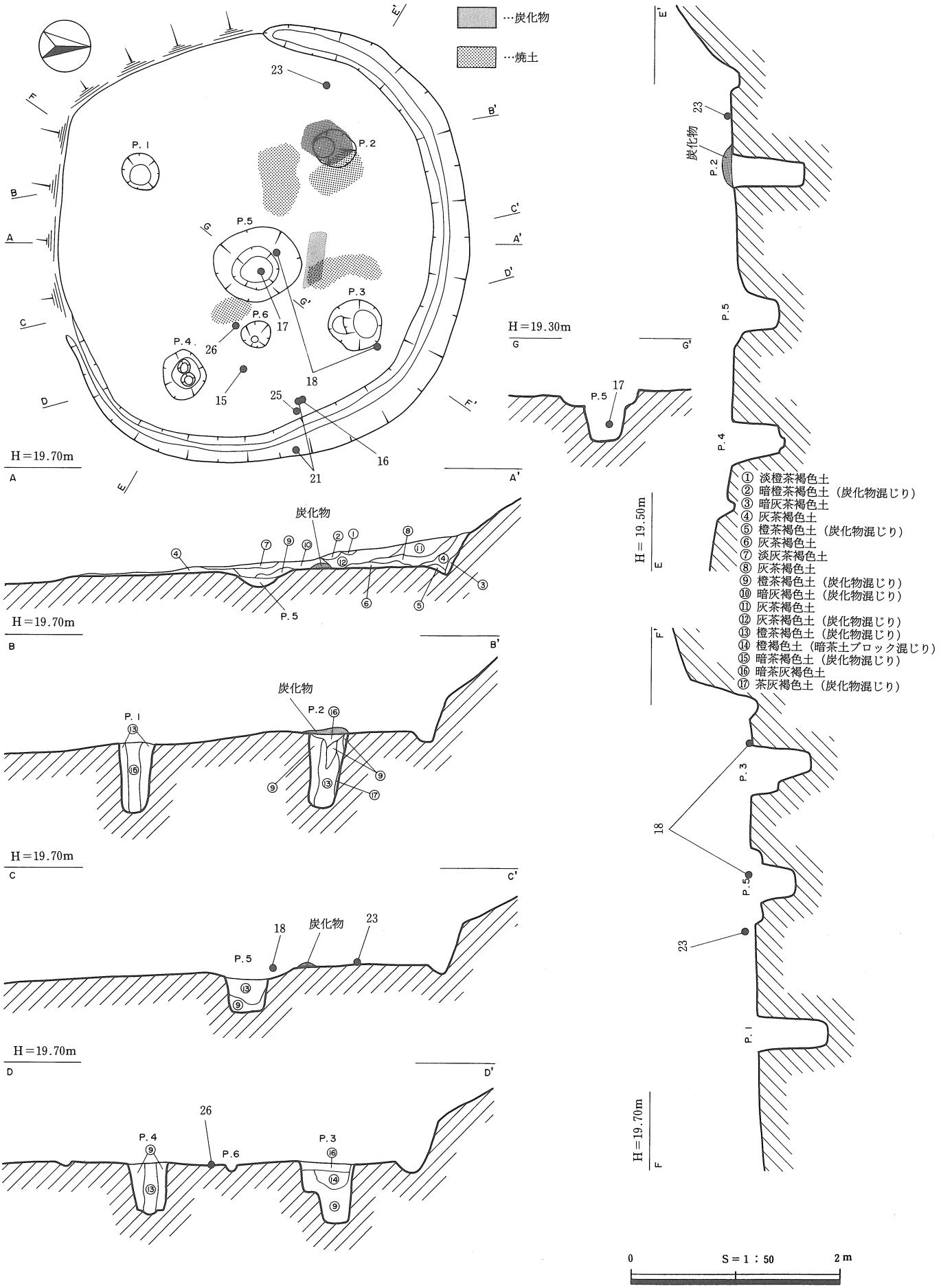
昭和59年に行われた米子市教育委員会による追加調査では、段状住居跡と推定された遺構（仮ＳＩ10～13）を確認しているが、本書ではテラス状遺構と呼称する。



第18図　ＳＩ－３断面実測図



第19図　ＳＩ－３出土遺物実測図


…炭化物
…焼土
P.1
P.2
P.3
P.4
P.5
P.6
23
17
26
18
15
25
16
21
H=19.70m
H=19.30m
H=19.50m
H=19.70m
炭化物
① 淡橙茶褐色土
② 暗橙茶褐色土（炭化物混じり）
③ 暗灰茶褐色土
④ 灰茶褐色土
⑤ 橙茶褐色土（炭化物混じり）
⑥ 灰茶褐色土
⑦ 淡灰茶褐色土
⑧ 灰茶褐色土
⑨ 橙茶褐色土（炭化物混じり）
⑩ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
⑪ 灰茶褐色土
⑫ 灰茶褐色土（炭化物混じり）
⑬ 橙茶褐色土（炭化物混じり）
⑭ 橙褐色土（暗茶土ブロック混じり）
⑮ 暗茶褐色土（炭化物混じり）
⑯ 暗茶灰褐色土
⑰ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
0
S=1：50
2m

第20図　ＳＩ－４実測図

第21図　ＳＩ－４出土遺物実測図

・ＳＩ－１（第９～12図・写真図版４、73）

ＳＩ－１は、標高約34mに位置し、Ｂ区の丘陵尾根部に構築された、直径約８ｍを測る円形の竪穴住居跡である。岩盤を加工して構築した住居のため壁面はいびつに歪んでおり、平面プランも不正な円形を呈している。南東側は、後世の果樹栽培によって削平されている。また北側は、近接して検出した陰田66号墳によって攪乱されている。残存壁高は、西壁で約90cmを測る。壁面沿いには、幅約20cm、深さ約10cmの側溝を検出した。

第22図　ＳＩ－５出土遺物実測図

床面には、合計29基のピットを検出した。土層断面からは住居の構築状況が把握できなかったため、検出したピットの配置状況から住居構造の考察を行い、第11図（住居の変遷）に示す①～③の柱穴の組み合わせを推定した。最低でも２回の建て替えが行われたものと推測される。①は、Ｐ．１～６を柱穴とした６本柱の住居跡であり、ピット間距離は2.5～３ｍを測る。②は、Ｐ．１、２、７、８、９を柱穴とする５本柱の住居跡であり、ピット間距離は2.5～3.3mを測る。③は、Ｐ．10～14を柱穴とする５本柱の住居跡であり、ピット間距離は３～４ｍを測る。それぞれのピットの規模は、Ｐ．１が深さ約40cmでやや浅いが、これを除くと、深さ50～70cmでほぼ同規模の柱穴と考えられる。①と②の構築順序は、Ｐ．３とＰ．７との切り合いの関係から、まず①が構築された後に、②への建て替えが行われたと判断できる。③は、①や②に絡むピットが検出されていないため、構築順序は判明しなかった。①、②、③いずれもＰ．17を中央ピットとして共有したものと推測される。建て替えの度に多少の移動があったと見られ、Ｐ．17はいびつな形を呈している。

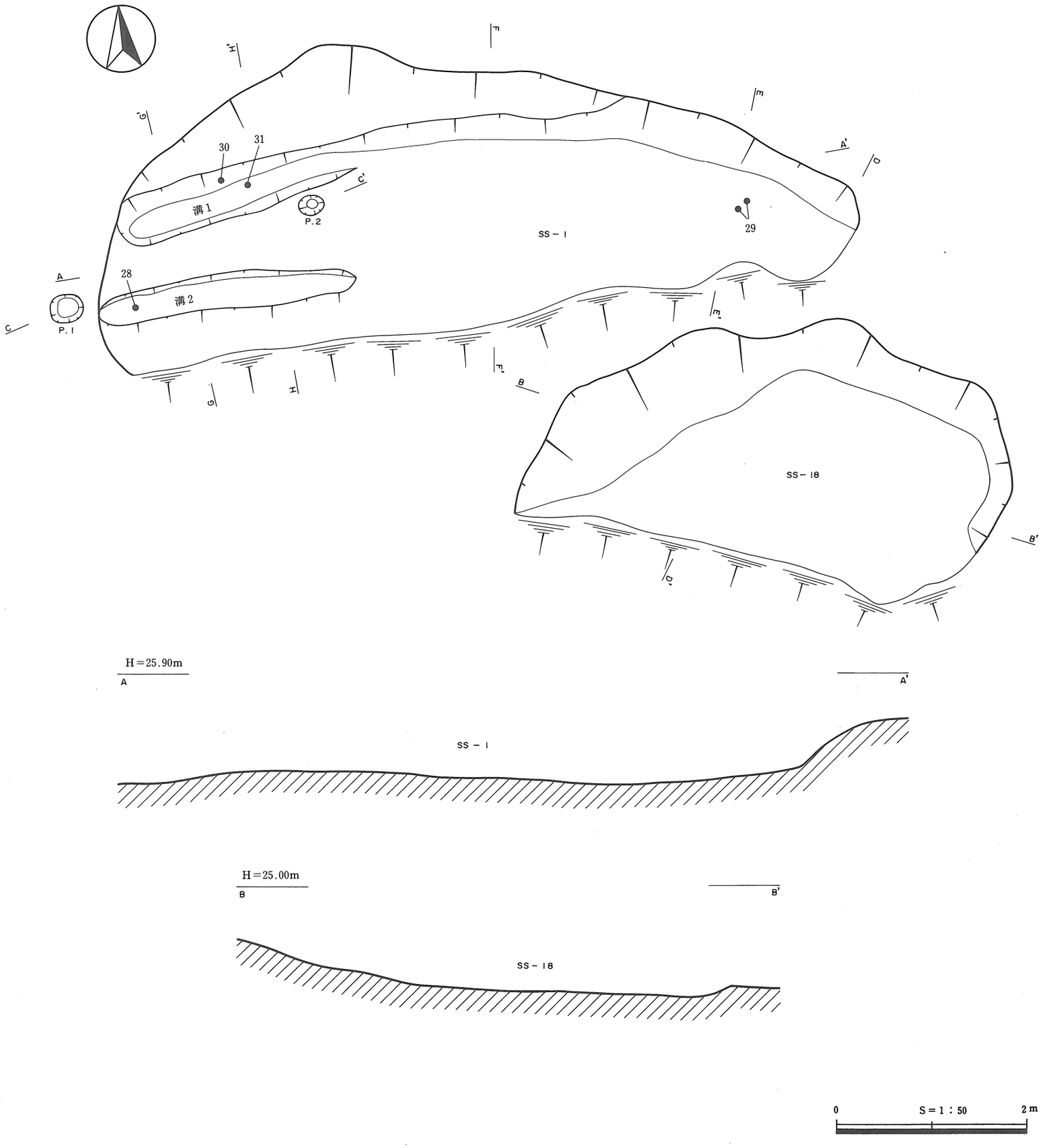
遺物は、弥生土器の壺や甕、砥石が出土した。１は壺の口縁部で、側溝上方に浮いた状態で検出した。直立した口縁部であり、外面には平行沈線を施している。２は甕の口縁部で、側溝直上に出土した。外反した口縁部であり、外面には平行沈線を施している。３は甕の頸部である。Ｐ．２の埋土中上方から出土した。１～３は弥生時代後期後半に比定される。４は砥石であって、Ｐ．２付近に浮いた状態で出土した。石材は細粒花崗岩である。５も砥石であり、Ｐ．21付近の側溝上方に浮いた状態で検出した。石材はアプライト（半花崗岩）である（註５）。そのほかに、Ｐ．17南東の側溝直上で炭化木が出土した。

・ＳＩ－２（第13・14図・写真図版４、５、73）

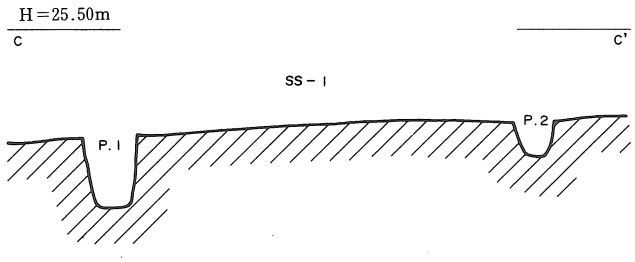
ＳＩ－２は、標高36.5mに位置し、Ａ区とＢ区を分ける丘陵尾根の鞍部に構築された、１辺が約４ｍを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認の契機は、陰田60号墳検出のため設定したトレンチ内から弥生土器の甕（６）が出土したことによる。北側床面の一部が下方に流失している。残存壁高は、南壁で約60cmを測る。壁面沿いには幅約20cm、深さ約10cmの側溝を検出した。側溝の南側上方には、住居跡を囲むように、幅約50cm、残存壁高約30cmの段状の平坦面を検出した。竪穴住居に伴う施設と考える。Ｆ－Ｆ'ラインの土層断面からは、貼り床面が観察される。

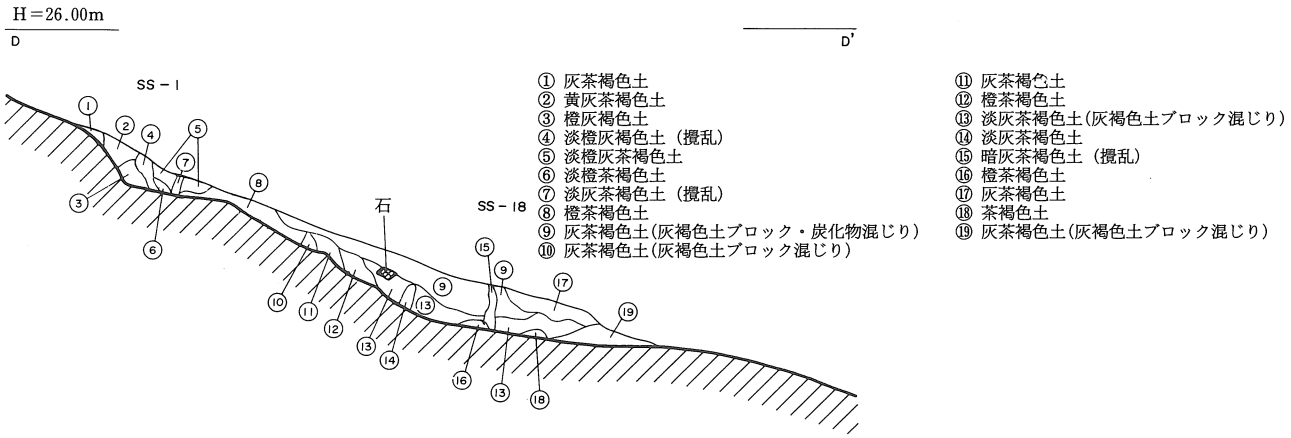
床面には、合計11基のピットを検出した。その配置状況から、ＳＩ－２はＰ．１～Ｐ．４を主柱穴とし、Ｐ．５、６を補助柱穴とする６本柱の住居跡と推測される。Ｐ．８は中央ピットと考えられる。Ｐ．１～４は、直径50～60cm、深さ約70cm、ピット間距離は約３ｍを測る。Ｐ．８は２段掘りとなっており、その上部は直径70cm～１ｍ、深さ約５cmを測り、下部は直径約40cm、深さ約35cmを測る。Ｐ．５、６はそれぞれＰ．１とＰ．４、Ｐ．２とＰ．３の中間点に位置しており、直径約20cm、深さ約30cmを測る。

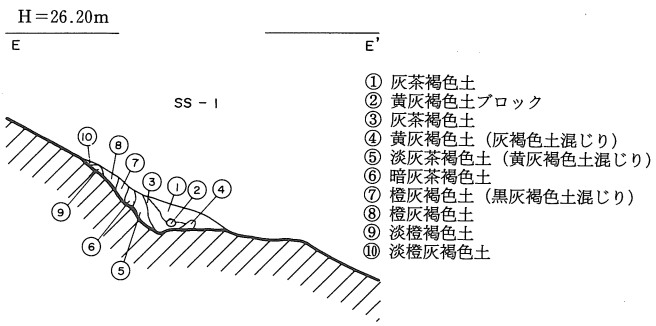
遺物は、弥生土器の甕、台付椀、台石が出土した。６は胴部下半を欠く甕である。口縁部は外反しており、外面には平行沈線を施している。肩部付近に最大径をもち、底部は丸底を指向した平底で、その内面には指押さえが見られる。７は甕の口縁部で、Ｐ．８の北側肩部付近の床面直上に出土した。６と同様に外反した立ち上がりを呈する口縁部である。外面には平行沈線を観察できなかった。８は台付椀であり、Ｐ．８南東の側溝上にやや浮いた状態で出土した。６～８は弥生時代後期後半に比定される。９は台石であり、Ｐ．２の南側肩部付近に床

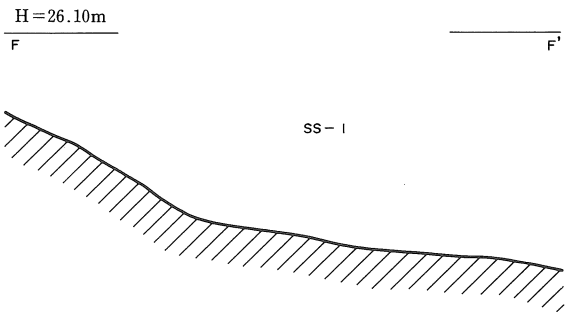


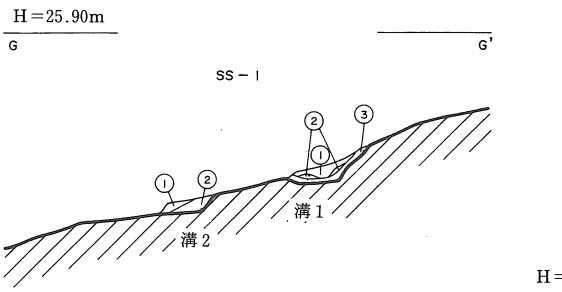
第23図　ＳＳ－１、18実測図

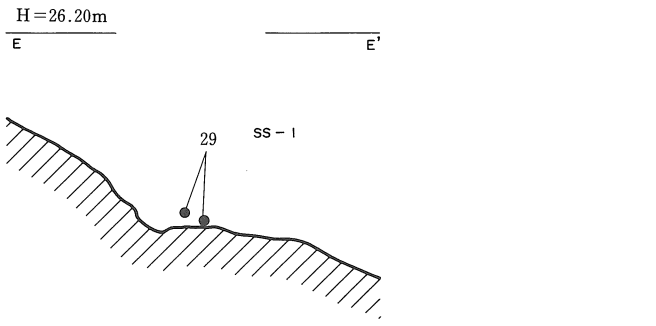


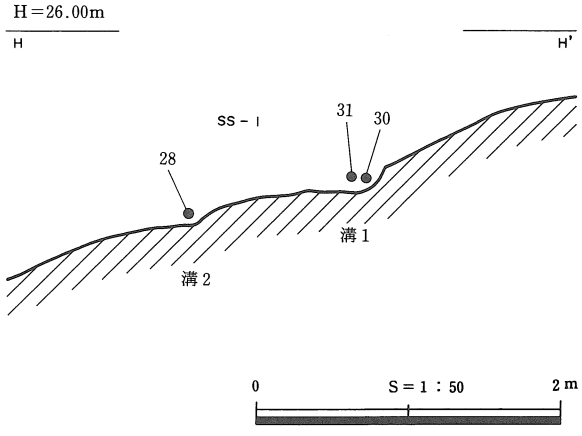




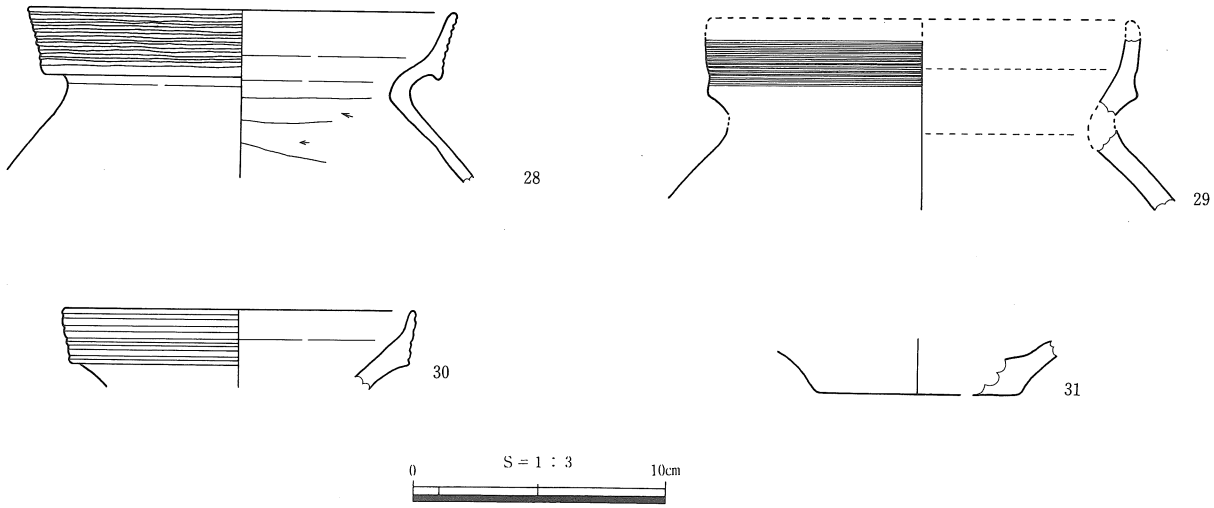




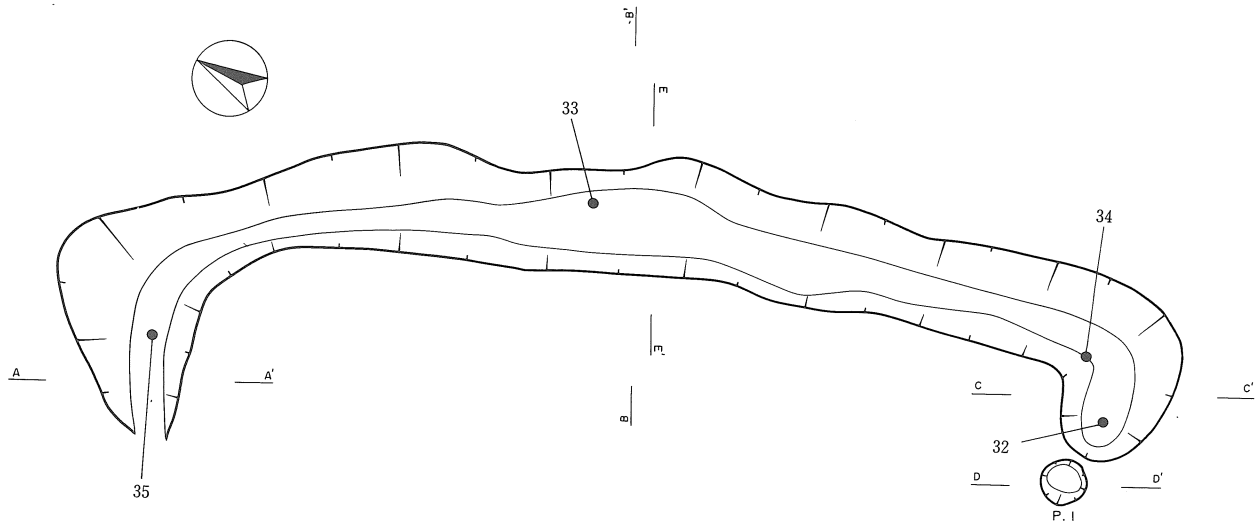


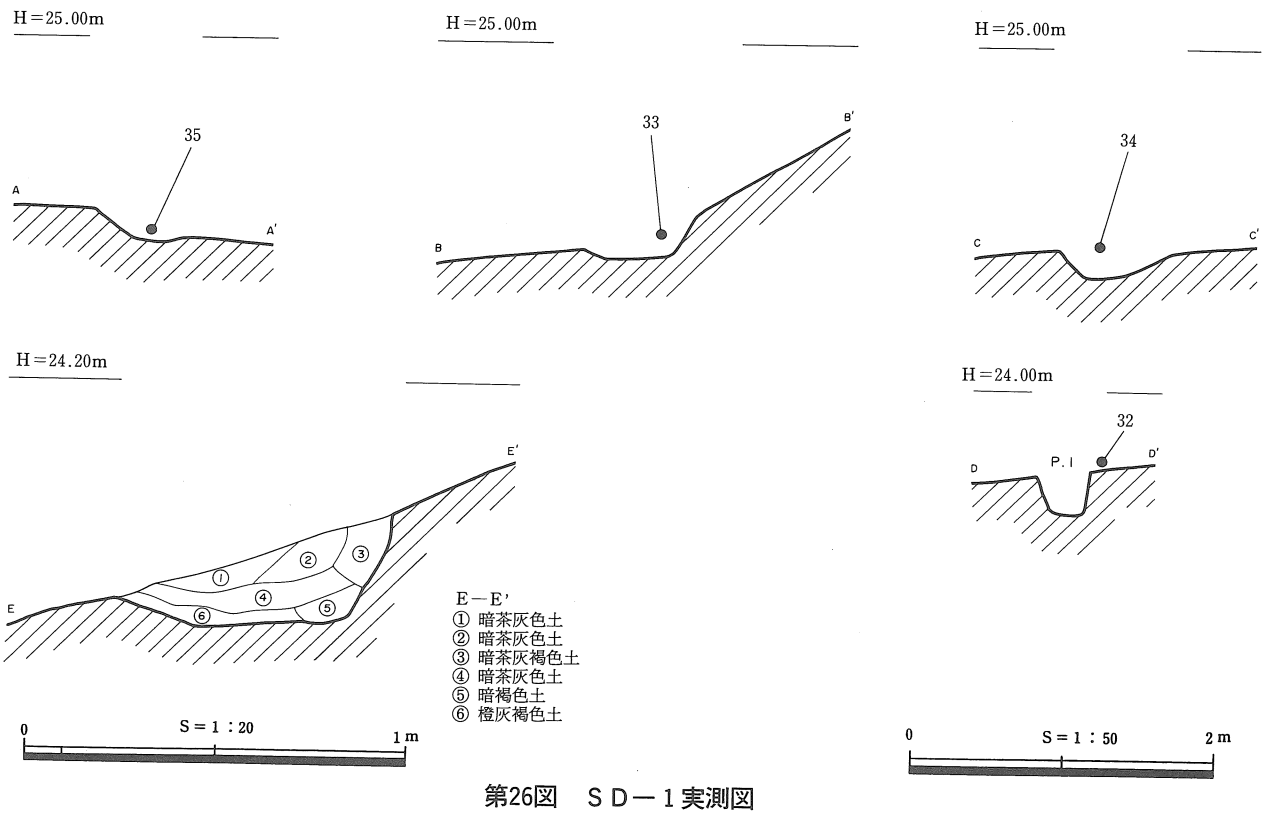


第24図　ＳＳ－１、18断面実測図

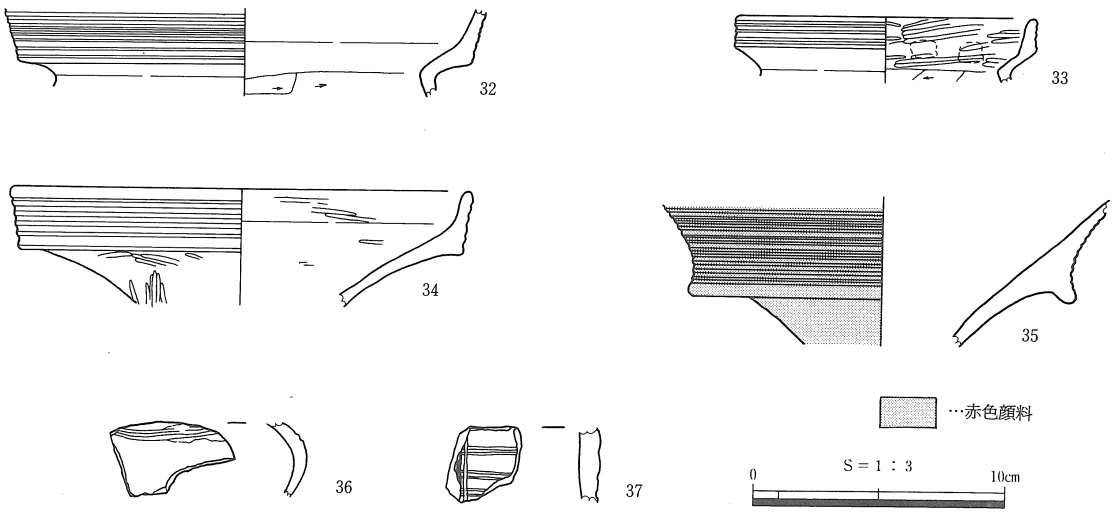


第25図　ＳＳ－１出土遺物実測図





第26図　ＳＤ－１実測図



第27図　ＳＤ－１出土遺物実測図

面直上で出土した。片面には炭化物が円形状に付着している。石材は石英斑岩である。

・ＳＩ－３（第17～19図・写真図版６）

ＳＩ－３は、標高約30mに位置し、急峻な斜面部に構築された円形の竪穴住居跡である。遺構の北側は、３条の道状遺構ＳＣ－４～６によって削平されている。また、盛土・造成したものと考えられる遺構の西側部分は流失しており、原形をとどめていない。ＳＩ－３の推定直径は、約６ｍである。残存壁高は、東壁で約40cmを測る。住居内に側溝をもたず、後背部に幅30～70cm、深さ約40cmの溝を配する住居跡である。溝は、約９ｍにわたって検出した。排水施設と思われる。

床面には、４基のピットを検出した。その配置状況から、ＳＩ－３はＰ．１を中央ピット、Ｐ．２～４を柱穴とする５本ないし６本柱の住居跡と推測される。４基のピットのうちＰ．１～３の３基は、直径約40cm、深さ20～30cmを測り、ほぼ同規模のものと考えられる。Ｐ．４は直径約30cm、深さ約70cmを測る。Ｐ．１～４は、約2.5m間隔で規則的に配列している。

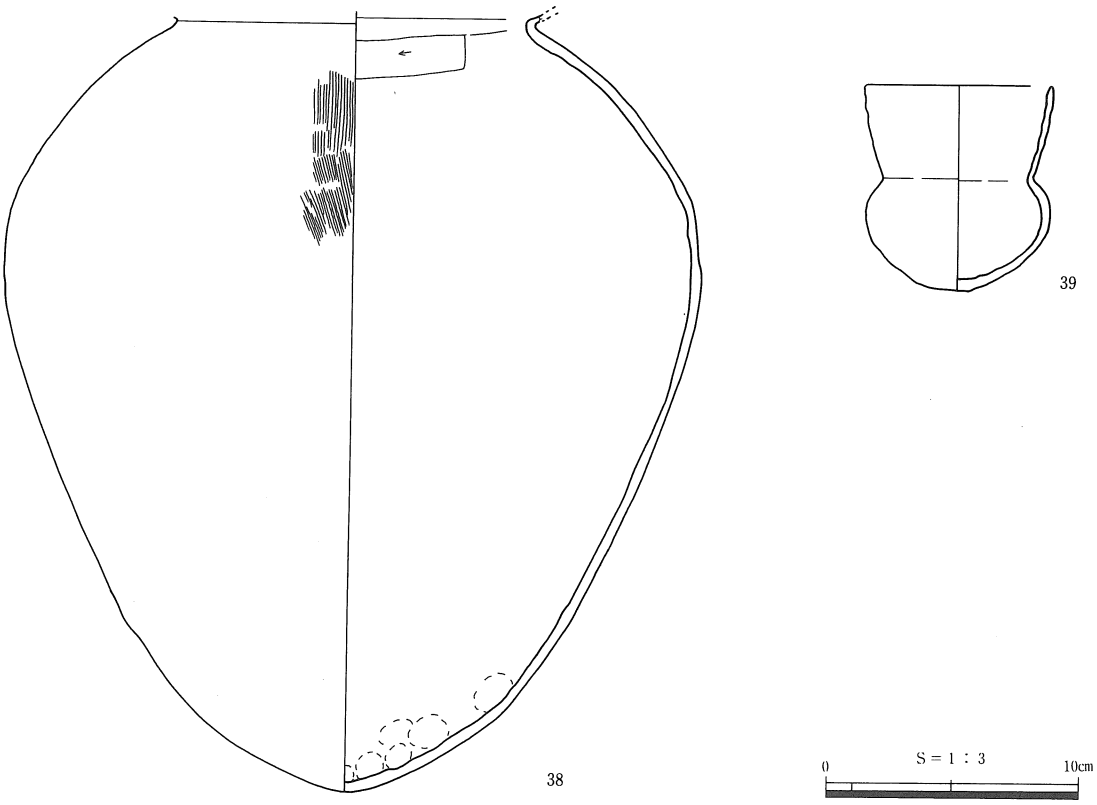
遺物は、弥生土器の甕や土錘、砥石が出土している。10は甕の口縁部であり、Ｐ．３検出面中央付近から出土した。直立する口縁部であり、外面には平行沈線を施している。弥生時代後期後半に相当する。１１は土錘である。溝底面直上で出土した。12は砥石であり、Ｐ．４検出面中央付近から出土した。石材は流紋岩である。

・ＳＩ－４（第20、21図・図版６、73）

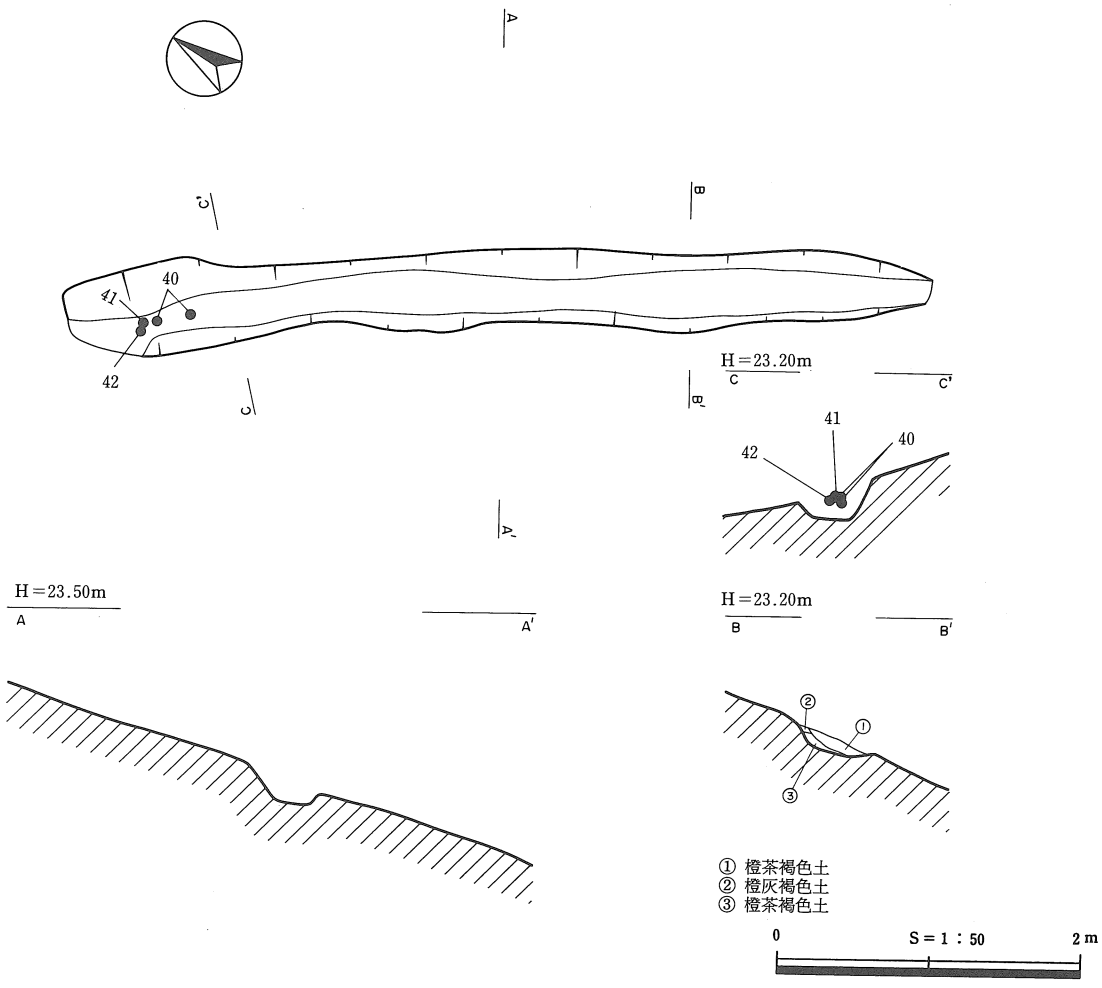
ＳＩ－４は、標高約19mに位置し、Ａ区の丘陵斜面裾部に構築された、直径約4.5mを測る円形の竪穴住居跡である。南西側は僅かに流失しているが、ほぼ原形をとどめている。残存壁高は、北壁で約60cmを測る。壁面沿いには幅約20cm、深さ約10cmの側溝を検出した。

床面には６基のピットを検出した。その配置状態から、ＳＩ－４はＰ．１～４を柱穴とした４本柱の竪穴住居跡と推測される。Ｐ．１～４は、直径30～50cm、深さ約50～70cmを測り、ほぼ同規模のピットである。Ｐ．１～４のピット間距離は約２ｍを測る。中央ピットと考えられるＰ．５は、２段掘りとなっており、ピット上部は直径約90cm、深さ約10cmを測り、下部は直径約40cm、深さ約30cmを測る。床面上には焼土や炭化物の広がりを確認した。焼土は、Ｐ．５やＰ．２の周辺に、炭化物はＰ．２の検出面上に検出した。焼土や炭化物の検出状況から、ＳＩ－４は焼失住居の可能性が高い。

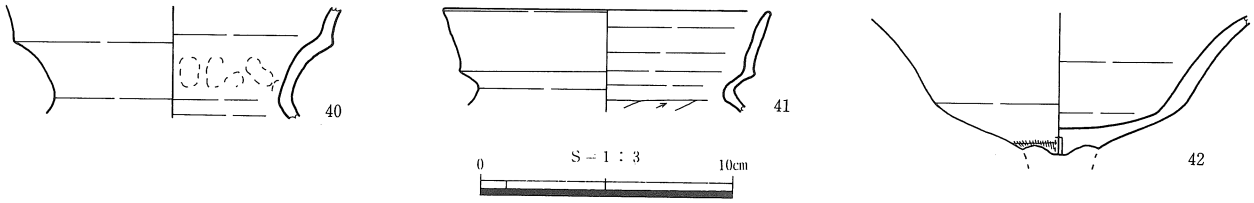
遺物は、弥生土器の甕、器台、敲石、砥石が出土した。13～18は甕の口縁部である。13～16は直立する口縁部であり、17、18は外反する口縁部である。外面にはともに平行沈線を施している。17はＰ．５埋土中に、18はＰ．５の検出面上およびＰ．３肩部直上に出土した。19～23は甕の底部である。ともに平底の底部である。23はＰ．２の西側約40cmの地点に床面直上で出土しており、外面にはハケメによる調整を施している。底部から胴部への立ち上がりから、胴部中央に最大径をもつと推定される。24は器台である。受部外面には平行沈線を施している。



第28図　ＳＩ－６出土遺物実測図



第29図　ＳＤ－２実測図



第30図　ＳＤ－２出土遺物実測図

内面にはミガキが見られる。13～24は、弥生時代後期後半に比定される。25は砥石である。床面東側の側溝沿いに出土した。表面は滑らかに磨耗している。石材は流紋岩質凝灰岩である。26は敲石である。Ｐ．６の南側肩部付近に床面直上で出土した。石材は安山岩である。

・ＳＩ－５（第22、69図・写真図版５）

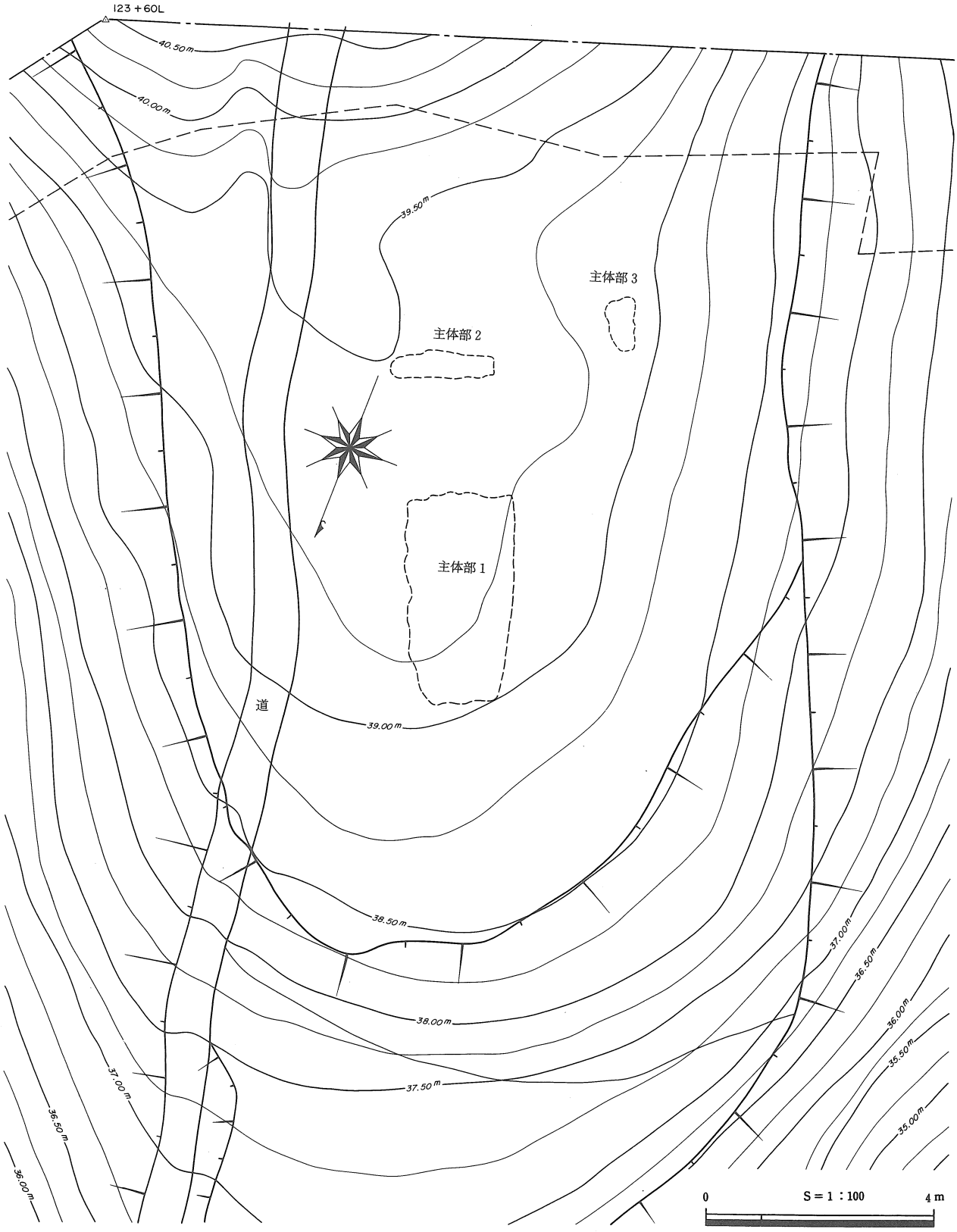
ＳＩ－５は、標高約21ｍに位置し、Ａ区の丘陵中腹に構築された、直径約4.5ｍを測る円形の竪穴住居跡である。ＳＩ－６と重複しており、ＳＩ－５の自然埋没後にＳＩ－６が構築されたものと推測される。南側は流失している。Ｂ－Ｂ'ラインの壁面で、残存壁高は約25cmを測るが、ＳＩ－６検出面からは95cmを測る。床面の西側には、幅約20cm、深さ約10cmの側溝を検出した。

床面からは合計14基のピットを検出した。その配置状態から、Ｐ.11～14を柱穴とした４本柱の住居の存在が推測されるが、ＳＩ－５、６のどちらに関連した柱穴かは判断できない。Ｐ.11～14は、直径40～60cm、深さ30～40cm、ピット間距離は約２ｍを測る。

27は磨石で、Ｐ.14北側ピット内から出土した。石材は頁岩岩片含有細粒砂岩である。時期決定のできる遺物の出土は見られないが、平面プランから弥生時代後期の住居跡と考える。

本調査で検出した弥生時代後期の遺構

遺構名	規模	平面プラン	主柱穴	出土遺物	備考
ＳＩ－１	径約８ｍ	円形	５～６本	土器、砥石	最低２回の建替
ＳＩ－２	１辺約４ｍ	隅丸方形	６本	土器、台石	貼り床
ＳＩ－３	推径約６ｍ	円形	5 or 6本	土器、土錘、砥石	後背に溝
ＳＩ－４	径約4.5m	円形	４本	土器、敲石、砥石	焼失住居
ＳＩ－５	径約4.5m	円形	４本？	磨石	ＳＩ－６と重複
ＳＳ－１	長さ約８ｍ 奥行き約２ｍ			土器	テラス状遺構
ＳＤ－１	幅50～80cm 深さ約20cm			土器	１辺が約6.5ｍを測る竪穴住居跡、あるいはテラス状遺構の一部？



第31図　陰田60号墳調査前実測図

・ＳＳ－１（第23～25図・写真図版５）

ＳＳ－１は、標高約25mに位置するテラス状遺構である。長さ約８m、奥行き約２mを測る。遺構全体がなだらかな断面形態を呈している。Ｄ－Ｄ'ラインの壁面で、残存壁高は約40cmを測る。

床面には、１基のピットと２本の溝を検出した。溝１は壁面裾部に設けられており、幅約50cm、深さ約15cm、長さ約2.5mを測る。溝２は溝１とほぼ平行に検出した。南側肩部を流失しており、幅約40cm、深さ約10cm、長さ約2.5mを測る。

遺物は、弥生土器の甕が出土している。28～30は甕の口縁部である。28、30はそれぞれ溝２、溝１上に浮いた状態で出土しており、29は東側床面のほぼ直上に出土した。28、30は外反気味の立ち上がりを、29は直立する立ち上がりを呈し、外面には平行沈線を施している。31は平底の底部である。溝１上に浮いた状態で出土した。28～31は、弥生時代後期後半に相当する。

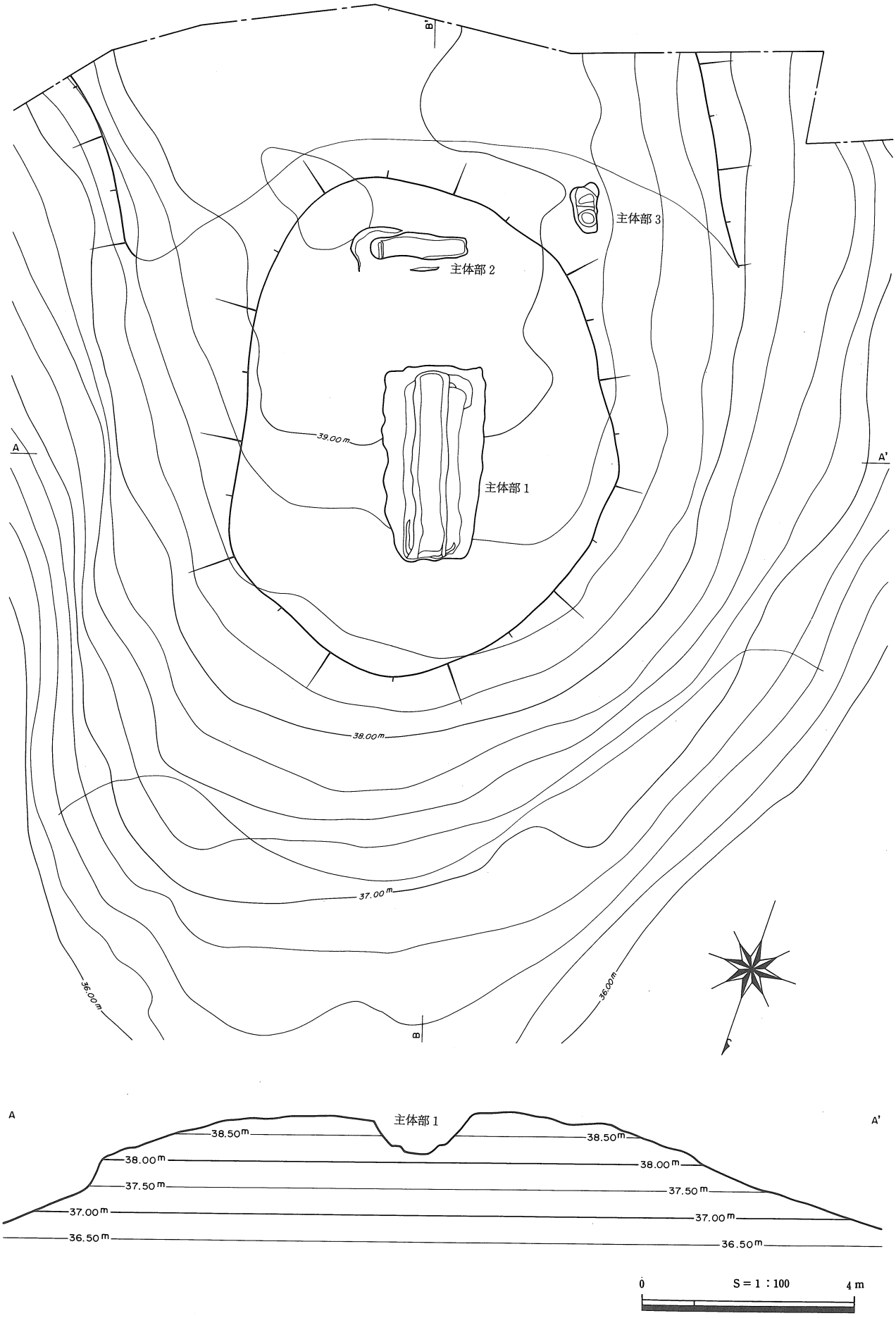
・ＳＤ－１（第26、27図・写真図版73）

ＳＤ－１は、標高約23.5mに位置し、幅50～80cm、深さ約20cm、長さ約6.5mを測る鋭状の溝状遺構である。付随して、ピットを１基検出した。その両端がほぼ直角に屈折しており、床面の殆どを流失した竪穴住居跡かテラス状遺構と推測される。

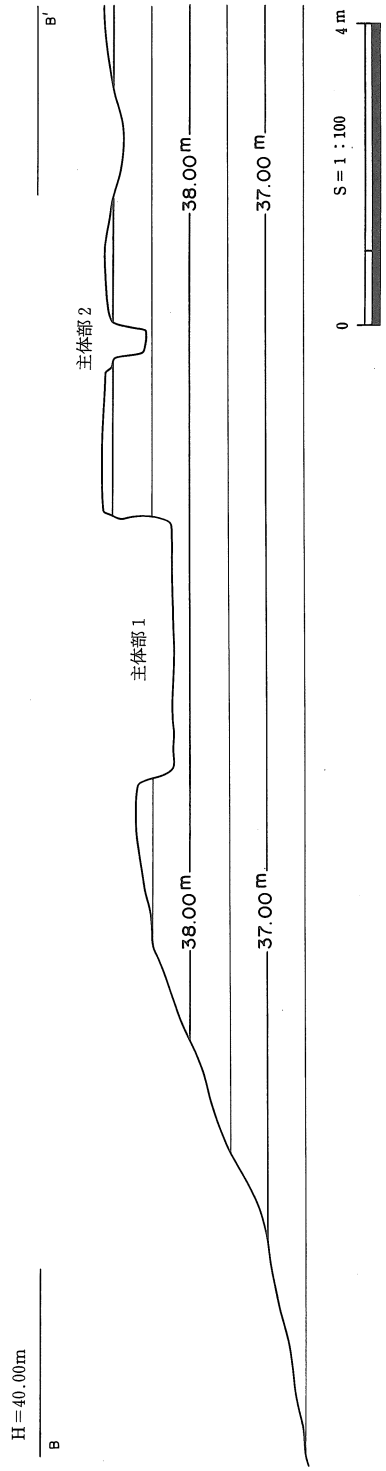
遺物は、弥生土器の甕、器台が出土している。32、33は甕の口縁部である。32は外反する口縁部であり、遺構南東端から出土した。33は直立する口縁部であり、遺構中央部から出土した。内面にはミガキが見られる。ともに外面には平行沈線を施している。34、35は器台である。34の受部はやや外反している。外面には平行沈線を施しており、ミガキも見られる。遺構南端から出土した。35の受部は強く外反した立ち上がりを呈し、外面には平行沈線を施すとともに、赤色顔料を塗布している。遺構北西端から出土した。36、37は器形が不明の土器片である。36の外面には弧文を施している。また、37の外面では、３条の横位の沈線を１条の縦位の沈線が切っている。32～37は、弥生時代後期後半に相当する。

弥生時代後期のテラス状遺構（『陰田第６遺跡（久幸地区）』米子市教育委員会　1984年による）

遺構名	規模	出土遺物	
仮ＳＩ10	長さ約5.5m 奥行き約1.5m	土器・甑・砥石・石鏃・河原石	仮ＳＩ11と同一遺構の可能性大
仮ＳＩ11	長さ約９m 奥行き約２m	土器・甑	仮ＳＩ10と同一遺構の可能性大
仮ＳＩ12	長さ約５m 奥行き約60cm～１m	土器	
仮ＳＩ13	長さ約６m 奥行き約1.5m		



第32図　陰田60号墳実測図



第33図　陰田60号墳断面実測図

3　古墳時代前期の遺構（ＳＩ－6、ＳＤ－2）

古墳時代前期の遺構として、竪穴住居跡１棟（ＳＩ－６）、溝状遺構１条（ＳＤ－２）を検出した。以下に遺構別の詳細を記す。

・ＳＩ－６（第28、69図・写真図版５）

ＳＩ－６は、標高約21ｍに位置し、Ａ区丘陵中腹に構築された、１辺が約５ｍを測る方形の竪穴住居跡である。南側は流失している。前項でも記した通り、ＳＩ－５埋没後に新たに斜面を掘削して、ＳＩ－５の床面から約25cm上方に床面を構築した住居跡である。残存壁高は、北壁で約70cmを測る。壁面沿い西側には、幅約20cm、深さ約10cmの側溝（溝６）を検出した。

床面には14基のピットを検出した。Ｐ.10はＳＩ－６に伴うピットである。長径約70cm、短径約45cmの小判形をしたピットで、深さは約15cmを測る。北側壁面沿い中央部に位置し、溝７を切っている。

38は口縁部を欠く土師器の甕である。西側側溝内からほぼ床面直上で出土した。その底部は自立できない丸底を呈し、内面には指押さえが見られる。39は小型丸底壺である。38とほぼ同地点の床面直上に出土した。古墳時代前期前半に相当する。

・ＳＤ－２（第29、30図）

ＳＤ－２は、標高約20ｍに位置し、幅約40cm、深さ約30cm、長さ約６ｍを測る溝状遺構である。床面の殆どを流失した竪穴住居跡かテラス状遺構の一部と推測できる。

遺物は、土師器の甕、壺、高坏が出土している。40は壺の口縁部である。外反する立ち上がりを呈する。41は甕の口縁部である。外反する立ち上がりを呈する。42は高坏の坏部である。40～42は遺構の北西端に集中して、ともに浮いた状態で出土した。これらは古墳時代前期前半に相当する。

4　古墳・横穴（第31～48図・写真図版３、７～13、18、74）

（陰田60、66号墳、陰田29、51～55号横穴）

古墳２基（陰田60、66号墳）、横穴６基（陰田29、51～55号横穴）を検出した。陰田60号墳は、陰田41号墳の南に隣接し、Ａ区とＢ区を区分する丘陵上に位置する。陰田66号墳は、陰田41号墳の東に隣接し、久幸山から天神山へ連なる丘陵尾根上に位置する。陰田29号横穴は、Ｂ区東端部の狭長な調査区で検出した。陰田51～54号横穴は、Ｂ区の南側斜面の東寄りの地点に位置する。陰田55号横穴は、Ａ区の北側斜面の中腹に位置する。

・陰田古墳群（第４図）

陰田古墳群は、奥陰田地区の谷筋及び陰田小犬田遺跡の所在する谷筋、口陰田地区の北側にあたる天竺山丘陵の尾根筋に分布する。今回の調査によって66号墳まで確認されることとなった。48～54号墳は島根県との県境付近に位置し、うち48～51号墳は島根県側では国吉古墳群と呼称されている。久幸山から天神山にかけて連なる丘陵には、26～43、60、66号墳の20基が所在し、うち31～42号墳の12基が今回までに調査されている。26～36、38～42、60、66号墳は円墳、37、43号墳は前方後円墳である。規模は、円墳は概ね径10～20ｍで、41号墳は径30ｍと傑出している。前方後円墳は、長さ20ｍ台である。中心主体が遺存しないものが多いが、木棺直葬墓または

土壙墓が検出されている。また副次的な主体部として、円筒埴輪棺が検出されている。37号墳では横穴式石室を、41号墳では箱形石棺と石槨木棺を主体部としている点が、例外的である。時期は、31号墳が陰田編年（註6）の1式（6世紀初頭）、33、35、36号墳が2式（6世紀前葉）、32、34、37、42号墳が3～4式（6世紀中葉～後葉）で、38～40号墳は不明である。4式から横穴の築造が始まり、当丘陵においては、5式（6世紀末～7世紀初頭）以降、古墳が築造されなくなるようである。陰田古墳群中、7世紀代に比定される古墳は、奥陰田地区の谷奥部、陰田大池のほとりに所在し、切石造りの横穴式石室を主体部とする陰田1号墳のみである。41号墳は時期を直接示す遺物の出土がなく、石棺の構造から古墳時代中期に比定されている。41号墳は、古墳群中最大規模を示し、展望のよい丘陵支丘上に立地している。同一丘陵上にありながらも、他の古墳とは一線を画す感があり、年代的にも従来古墳群中最古とされてきた。今回の調査で検出した60、66号墳は、41号墳に隣接するもので、これら3基は他の古墳と若干の離隔をもって存在している。（註7）

・**陰田38～40号墳**（第4、8図）

B区北東部、第8図で示すところのSK－1、2、7、8、11～14から51～53号横穴の北側にかけての丘陵尾根上に、本来存在した古墳である。前述したとおり、墳丘、中心主体部の痕跡が確認できず、消失したものと思われる。SK－11～14（第155～158図）は時期を示す遺物の出土がみられなかった土壙墓群であるが、位置的には陰田40号墳に付随する副次的な主体部である可能性も考えられる。SK－1（第140図）で、陰田編年6式相当の蓋坏（第141図）の一括出土がみられたが、当丘陵では古墳がもはや造られない時期であり、古墳との直接的な関連は希薄と考えるが、墓前祭祀に関わる遺構である可能性は捨てきれない。

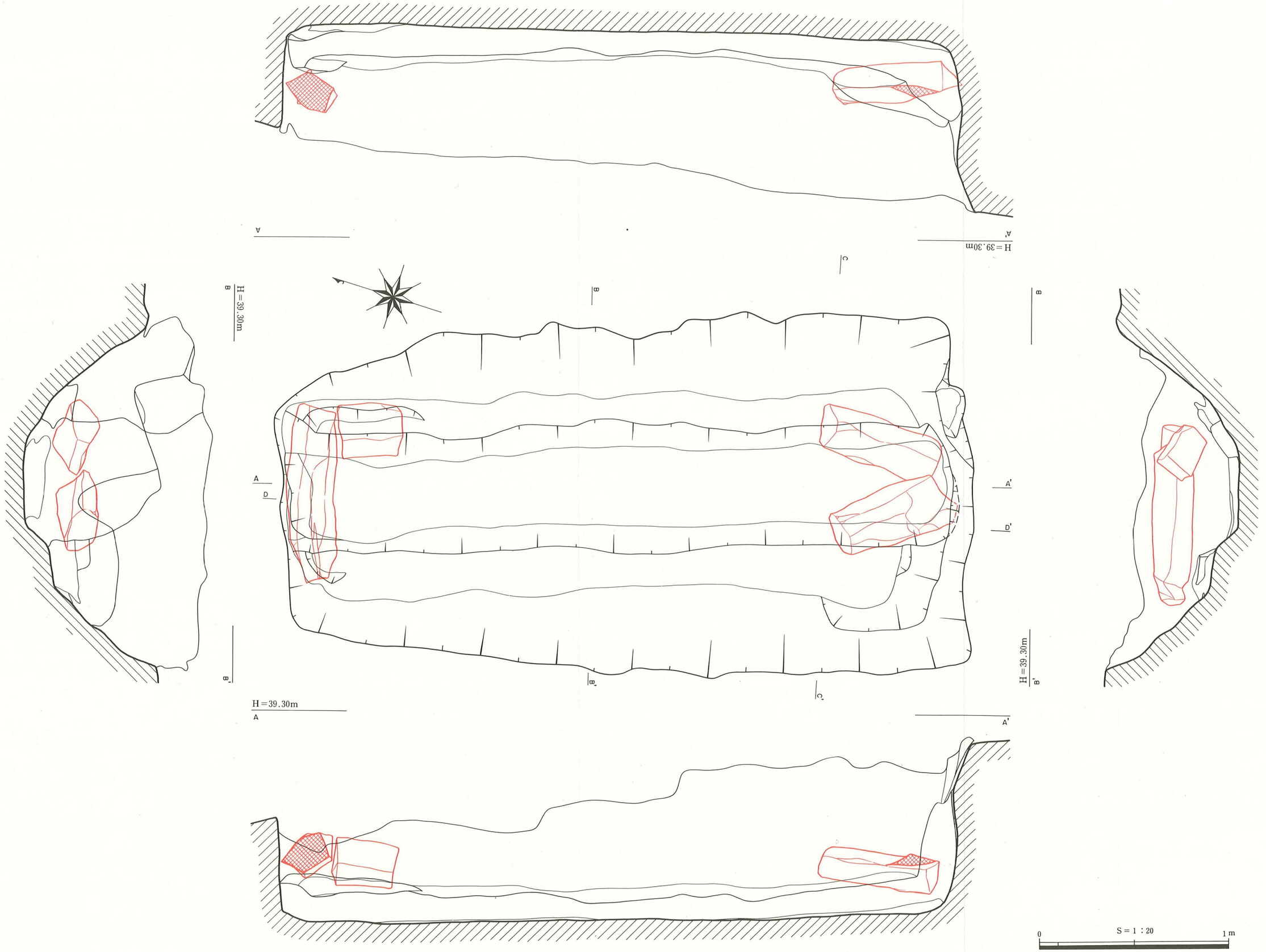
・**陰田60号墳**（第31～38図・写真図版3、7～9、74）

陰田60号墳周辺は、過去に一部が調査されているが（註8）、限られた範囲であったため、古墳としての確証を得るに至らなかった。今回の調査にあたっては、予察によって表土直下が岩質の地山であることを把握、盛土は遺存せず、墳頂部を削平して曲輪状の平坦面を造成しているものと推定した。結果的には、墳頂部に古墓群やピット群が検出され、中、近世期に墳丘が改変されていることが判明した。主体部の遺存深度から、基本的には、地山整形により墳丘を削り出したのち、若干の盛土を施したものと考える。後背の高位側には、堀切状の周溝を設けている。周溝の下端ラインや地山整形ラインから判断して、円墳と考える。墳頂部の標高は、39mである。規模は、墳裾で南北14m、東西12mを測り、東側墳裾部から1.5m、北側墳裾部から2.2mの高さが遺存していた。墳頂の平坦面はいびつな楕円形を呈し、南北9.5m、東西7mを測る範囲である。周溝は、幅2m以上、深さ30cmを測り、約12mの長さにわたって検出した。

主体部は3基確認した。墳頂部ほぼ中央に主体部1、主体部1の南側に2mの離隔を経て、主体部1の長軸と直行する方向に主体部2、主体部2の西側に2mの離隔を経て、主体部1の長軸に平行する方向に主体部3を検出した。主体部1、2は墳頂部平坦面の範囲内に、主体部3は周溝内に位置する。

主体部1（第34、35図・写真図版7、8）は、木棺墓と考える。墓壙は、検出面で南北長3.6m、東西幅は南側で1.8m、北側で1.2m、深さ90cmを測る。北側にややすぼまる長梯形で検出した。検出面の南北の比高差が約40cmあり、本来墓壙の北側肩が南側程度の高さであれば、平面形は長方形状になるものと思われる。主軸方向は、N－19°－Wにとる。2段掘りであり、墓壙中央に長さ3.3m、幅40cmの底面があり、10～15cmの段差をもって両脇に平坦な段を設けている。段は長さ約3m、幅20cm前後で、中央掘り方の両小口にはまわらない。段の北側では5～8cm程度の微細な段差を確認した。断面形は、短軸方向では高台の付く椀形とでも言えようか。長軸方向では概ね長方形状であるが、北側壁はほぼ直立気味の立ち上がりであるのに対し、南側壁はややオーバーハングしている。

墓壙の南北両小口からは、角礫を検出した。石材は、通称陰田石と呼ばれる凝灰岩質流紋岩である（註9）。南側小口では、長さ約60cm、幅20～30cm、厚さ約20cmで同規模の長角礫2個を、逆「V」字状に検出した。中央底面からは10～15cmほど浮いた状態であるが、「V」字状に開く両先端側が左右の段部分の床面にかかった状態であり、南方に閉じる側のレベルがやや下がっている。一方北側小口では、長さ約90cm、幅約20cm、厚さ約15cm



第34図　陰田60号墳主体部１実測図

の長角礫１個を、小口壁に沿った状態で検出し、これと逆「Ｌ」字状をなす配置で長さ約25cm、幅約30cm、厚さ約15cmの角礫を１個検出した。中央底面からは20～25cm浮いた状態であるが、南側小口と同様、左右の段部分にかかった状態であり、微細な段差の部分に合致するような検出位置である。これらの礫は、土層断面の観察からも、また個々の礫の出土レベルがさほどバランスを崩さず水平気味である点からも、埋土への混入や攪乱による投入は考え難く、当主体部に本来的に付随するものと考える。角礫以外に、人骨、遺物の出土はみられなかった。

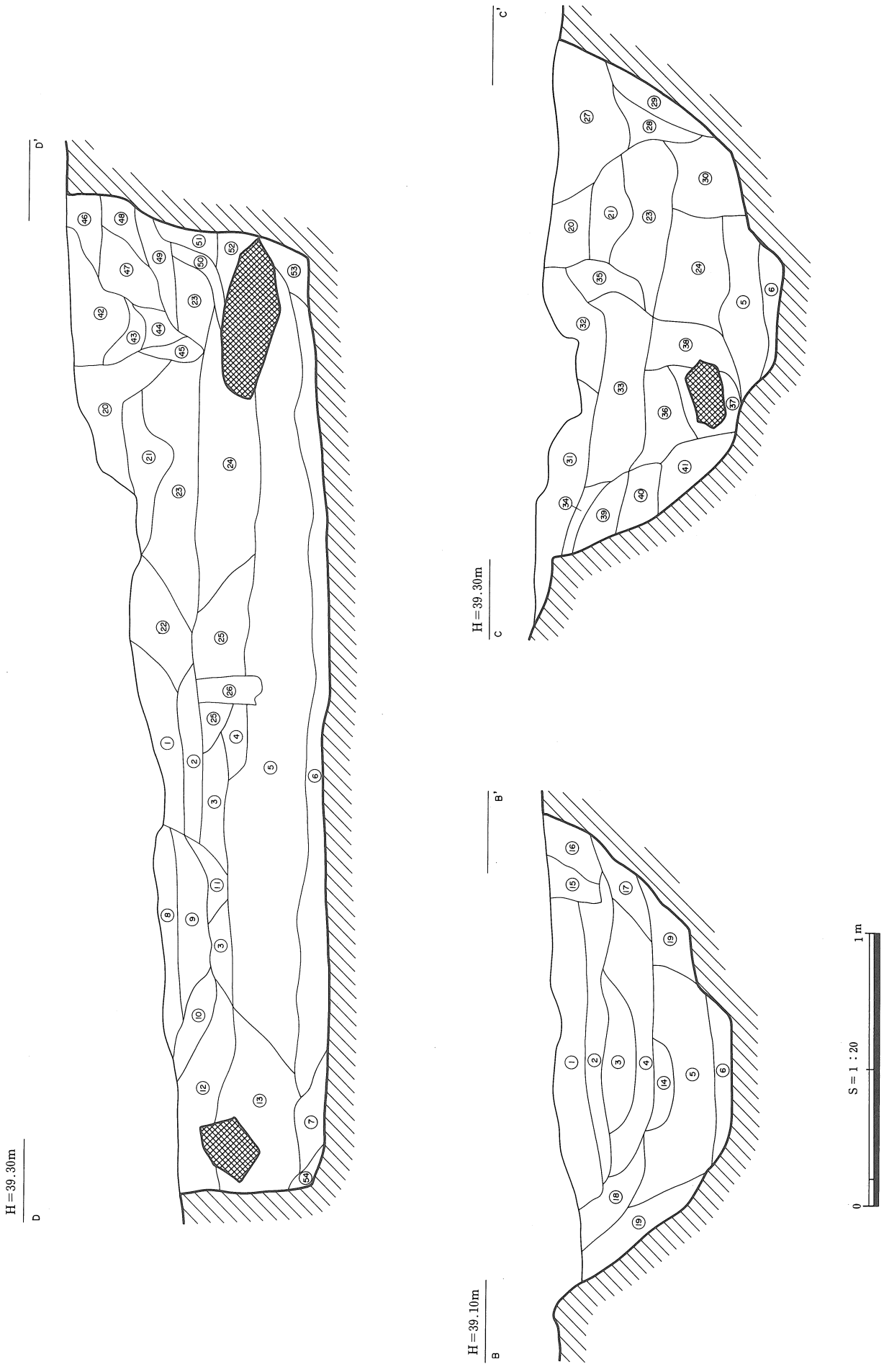
Ｂ－Ｂ'ラインの土層断面では、土質的に４種の系統にまとめられる。１～３層は橙茶褐色土系の層で、墓壙埋土の上部を被覆する層である。４～６、14、17、18層は橙褐色土系の層で、主体部の埋積土および主体部の被覆土である。５層橙褐色土層の左右の立ち上がりラインが外反している。19層は赤橙褐色土層で、裏込め土的である。15、16層の暗橙茶褐色土層は、木根による攪乱土層である。Ｃ－Ｃ'ラインの断面では、土質的に５系統にまとめられる。20、27、28、31～35層は攪乱土層と判断した。５、６、23、24、39、40層は橙褐色土系の層で、主体部の埋積土および主体部の被覆土である。29、30、41層は赤橙褐色土層で、裏込め土的である。21、36～38層は暗橙褐色土層で、21層は墓壙上部の被覆土的であり、36～38層は角礫に関わる層と考える。Ｄ－Ｄ'の長軸ラインでは、４系統の層にまとめられる。８～12、20、26、42～47層が攪乱土層である。１～３層の橙茶褐色土系の層、21、22層の暗橙褐色土系の層は、墓壙上部の被覆土層である。４～６、23～25層は橙褐色土系の層で、主体部の埋積土および主体部の被覆土である。７、51、52層の橙褐色土系の層、13層の暗橙褐色土層、50、53、54層の赤橙褐色土系の層は、小口の裏込め土的である。

墓壙埋土の埋積状況から、主体部は木棺直葬であると考える。ただし、裏込め土的な19、29、30、41層の立ち上がりラインが、２段掘りの左右の立ち上がりラインに続かず、段の肩より外側の地点から始まることから、木棺の側板は２段掘りの外側の段の上に立てられたものと推測する。小口板の状況は、北側では７、13、54層を裏込め土とし、小口板の外側の段の上に角礫を配置したものと思われる。一方南側においては、本来２本の角礫は南壁に接する様に直立していたものが、のちに木棺側に傾いたものと考える。36～38層は、本来的には50～53層と同様に裏込め土であったものが、角礫の傾斜とともに木棺側に流入したものと思われる。木棺の規模は、長さ約2.8m、幅70～80cmが推定される。なお、頭位がいずれかは、判断できなかった。

角礫は、重量や形状からみて、単純に裏込め石として使用されたものとは言い難い。隣接する陰田41号墳の調査では、第１埋葬主体から組合わせ式の箱形石棺が検出されているが（註10）、頭位側の小口板からさらに外側に側板を繋いで延ばし、足位側の小口板外には小円礫を敷き詰めるピットが設けられている。このように、小口板外の空間に対する特別な意識が、伝統的に存在したものと思われる。

主体部２（第36図・写真図版８、９）の墓壙は、検出面で東西長1.8m、南北幅は45cm、深さ50cmを測る。長方形状に検出した。墓壙の北西隅は、古墓ＳＫ－27によって攪乱されている。主軸方向は、Ｎ－70°－Ｅにとる。墓壙の北側上端から15cm外側に約60cmの長さで、墓壙の主軸方向に平行する段差を検出した。また、墓壙の東側上端から約30cm外側に約1.5mの長さで、「し」の字状を呈する段差を検出した。両段差とも、15cm程の高さである。後世の攪乱で原状をとどめていないが、本来は墓壙全体にめぐり、２段掘りであったものと推察される。底面は、東西長1.55m、南北幅はＢ－Ｂ'ラインで30cm、Ｃ－Ｃ'ラインで40cmを測り、東側が幅広である。断面形は、基本的に逆台形状であるが、底面の位置が墓壙検出面より全体的に北側に５cmほどずれており、北側壁面がオーバーハングする恰好になっている。よって、Ｃ－Ｃ'ラインでは断面形が平行四辺形状になっている。底面の東側小口部分に、南北長35cm、東西幅10cm、深さ12cmを測る長方形状の落ち込みを検出した。この落ち込みの西側肩部分に、角礫２個を検出した。墓壙の主軸ラインを挟み、面に傾斜をもたせて両角礫が向かい合うような状態である。枕と思われる。よって、遺体の頭位は東側となる。角礫以外、人骨、遺物の出土はみられなかった。

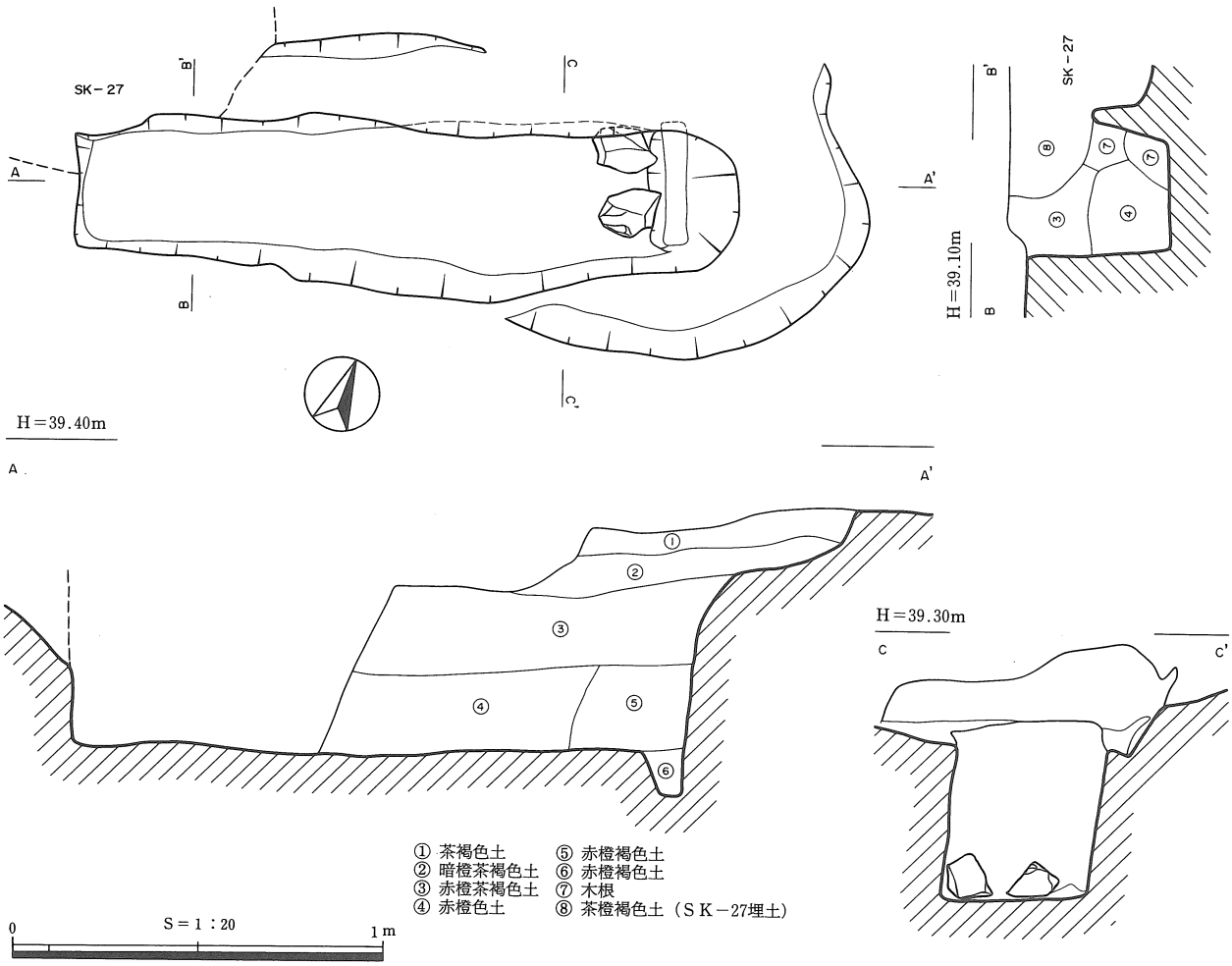
主体部２は、墓壙周辺の段差を利用した木蓋土壙墓であると考える。頭位側の溝状落ち込み部分は、一見木棺の小口板の痕跡のようだが、埋葬の構造上は必要のない施設である。北側の枕石が北側壁面にほぼ接するような位置にあり、このことから側板は置かれなかったとみてよく、土層断面にも観察されなかった。つまり、墓壙内に棺は組まれなかったと考える。むしろ、主体部１と同様な、墓壙の小口部分に対する特別な意識の表れと考え



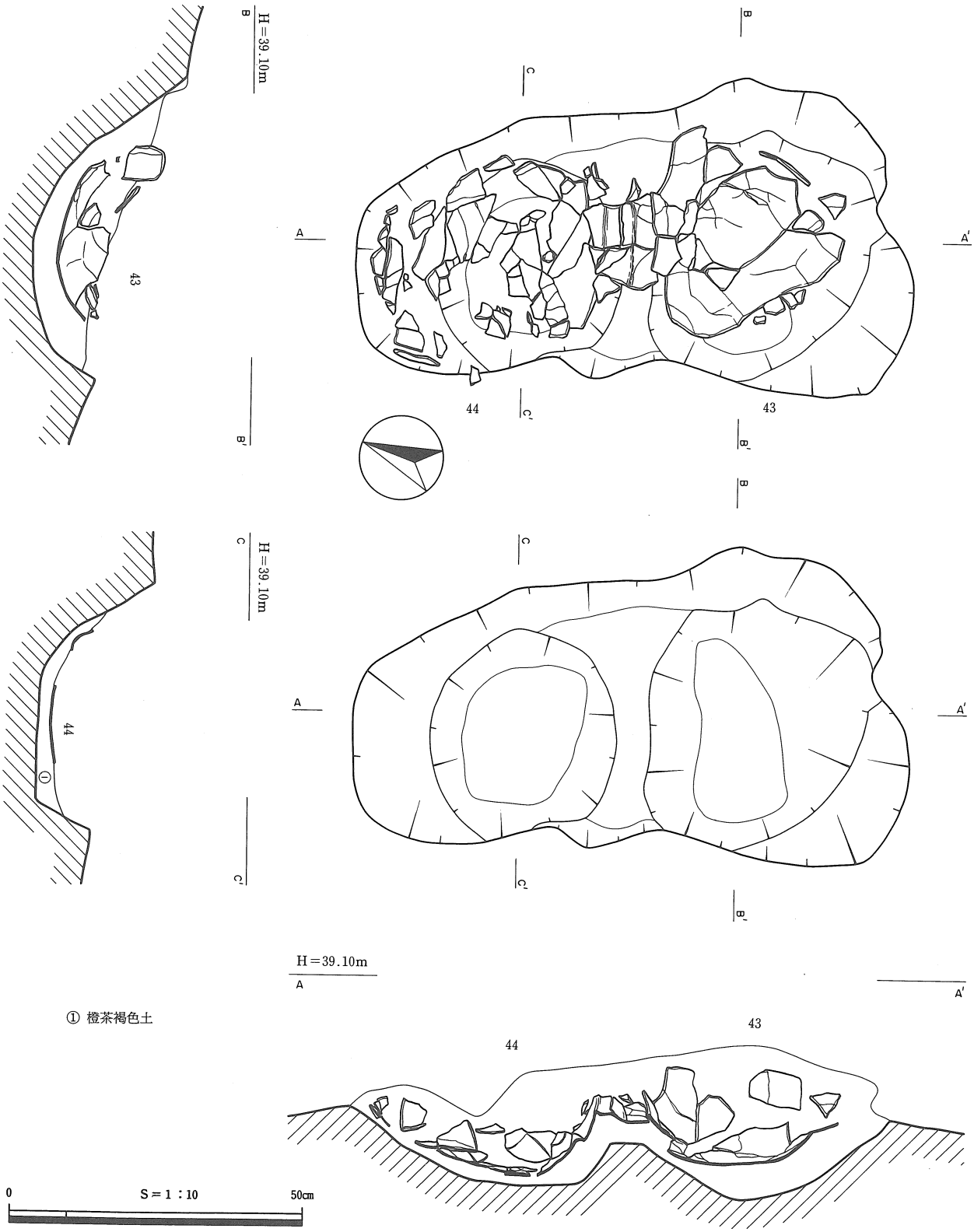
第35図　陰田60号墳主体部１土層断面実測図

1．橙茶褐色土（やや暗い）
2．橙茶褐色土（やや暗い）
3．橙茶褐色土
4．橙褐色土（やや濃い）
5．橙褐色土
6．橙褐色土（やや暗い）
7．橙褐色土（やや淡い）
8．暗橙茶褐色土（やや淡い）
9．暗橙茶褐色土（やや暗い）
10．暗橙茶褐色土（やや暗い）
11．暗橙褐色土
12．暗橙茶褐色土
13．暗橙褐色土
14．橙褐色土（やや暗い）
15．暗橙茶褐色土
16．暗橙茶褐色土
17．橙褐色土
18．橙褐色土
19．赤橙褐色土
20．暗橙茶褐色土
21．暗橙褐色土
22．暗橙褐色土
23．橙褐色土
24．橙褐色土
25．橙褐色土
26．暗橙茶褐色土
27．暗橙茶褐色土
28．暗橙茶褐色土
29．赤橙褐色土
30．赤橙褐色土
31．橙茶褐色土
32．橙茶褐色土
33．橙茶褐色土
34．橙茶褐色土
35．暗橙茶褐色土
36．暗橙褐色土
37．暗橙褐色土
38．暗橙褐色土
39．橙褐色土
40．橙褐色土
41．赤橙褐色土
42．暗橙茶褐色土
43．橙茶褐色土
44．橙茶褐色土
45．橙褐色土
46．暗橙茶褐色土
47．橙茶褐色土
48．橙茶褐色土
49．橙茶褐色土
50．赤橙茶褐色土
51．橙褐色土
52．橙褐色土
53．赤橙褐色土
54．赤橙褐色土

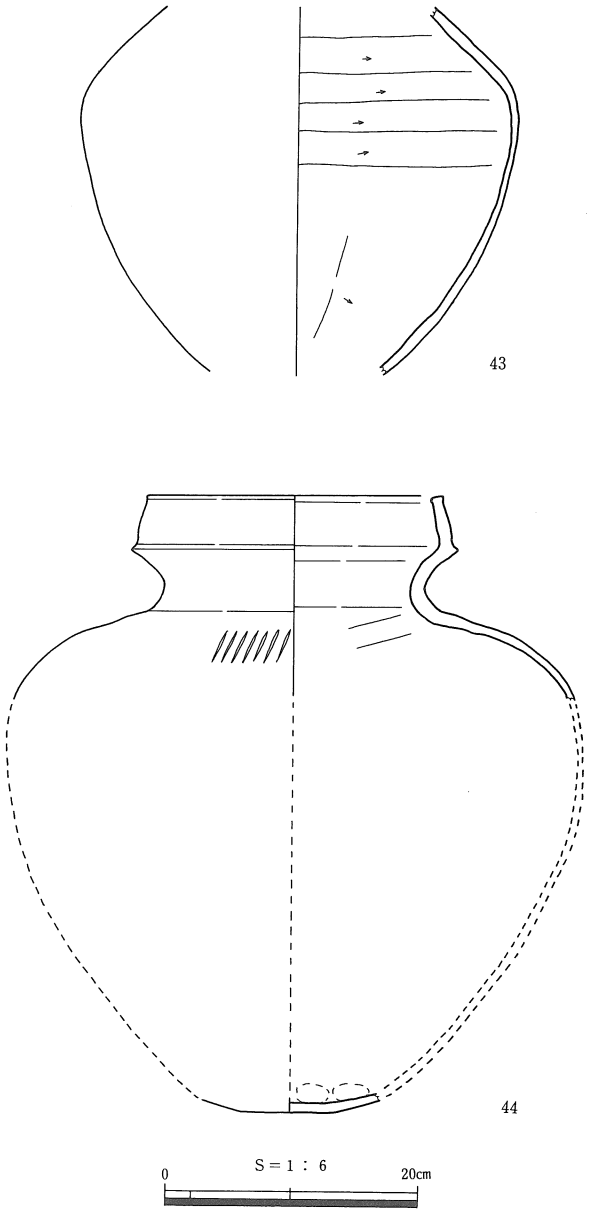
陰田60号墳・主体部１土層断面図土色対照表



第36図　陰田60号墳主体部２実測図



第37図　陰田60号墳主体部３実測図



第38図　陰田60号墳主体部３出土遺物実測図

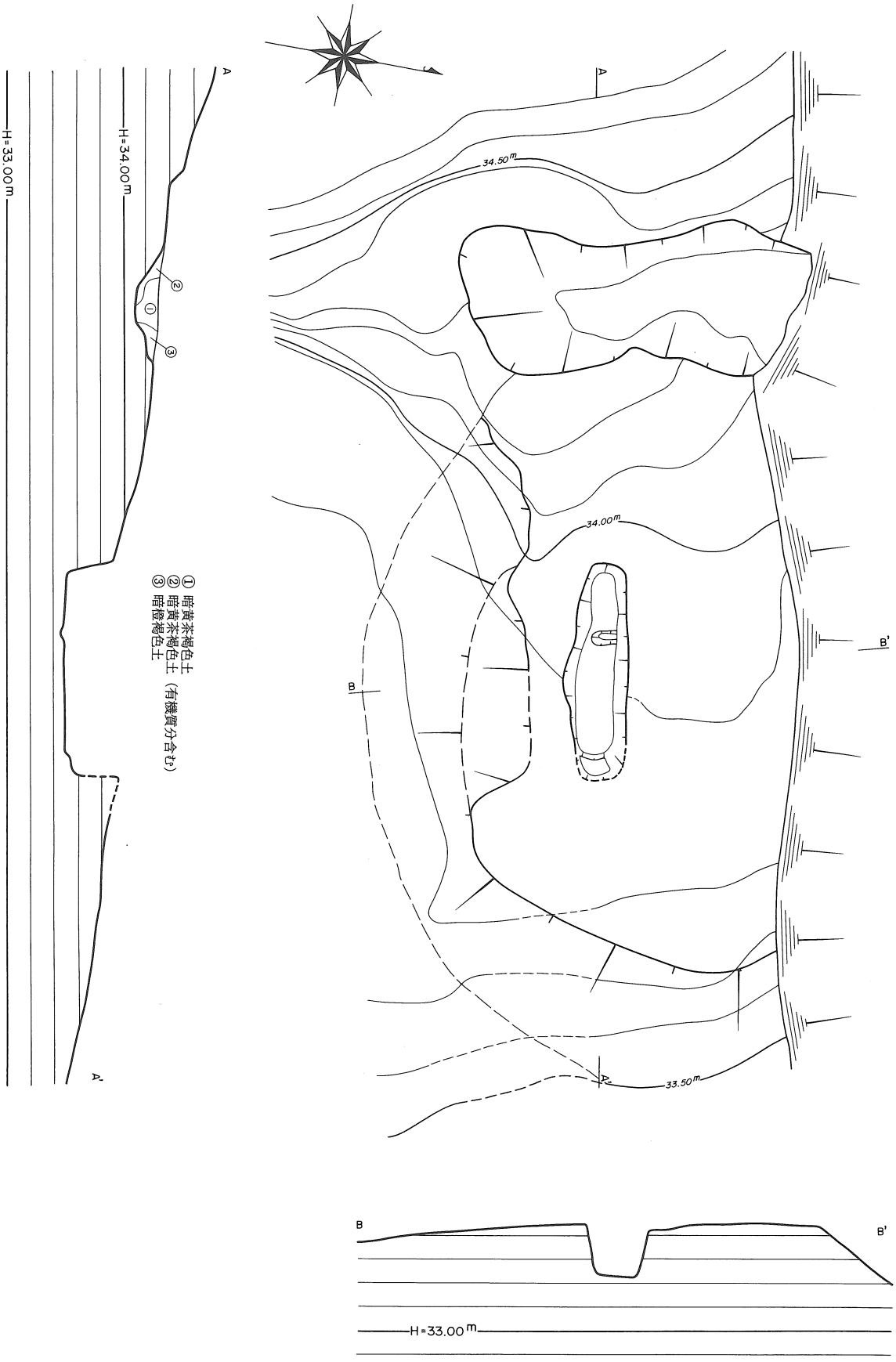
たい。確認には及ばなかったが、食料や有機質用具の副葬空間と推察したい。

主体部３（第37、38図・写真図版９、74）は、土器棺墓である。小児墓と思われる。上部を削平されている。墓壙は、検出面で南北長95cm、東西幅は30～55cm、深さ20～27cmを測る。不整な楕円形状に検出した。主軸方向は、N－26°－Wにとる。断面形は東西が「U」字状、南北が「W」字状である。墓壙の中央には土手状の高まりがあり、これによって２ヶ所のくぼみが仕切られている。それぞれのくぼみに、土器が横位に置かれている。遺物は、土器棺以外出土していない。土器棺は、壺の口縁部（44）と、口縁部を打ち掻いた壺または甕（43）の頸部を合わせたものである。43は、風化のため外面調整は不明だが、内面は肩部から胴部上半にかけてが横方向、胴部下半が斜め方向のケズリ調整である。底部を確認できなかったが、比較的寸の詰まった器形であり、肩部の張りが顕著である。44は、外面肩部に連続刺突文を施し、肩部内面をケズリ調整している。底部内面に指押さえが観察される。口縁部の立ち上がりはやや内傾しており、端部は面をなす。短い頸部から肩部へ移行し、肩の張りは顕著である。底部は丸底気味の平底で、自立が可能と思われる。全体に寸の詰まった器形を推定した。43、44ともに大型品と言っても差し支えなかろう。44の時期は、青木編年（註11）のⅦ期、古墳時代前期前半に位置付けられると考える。

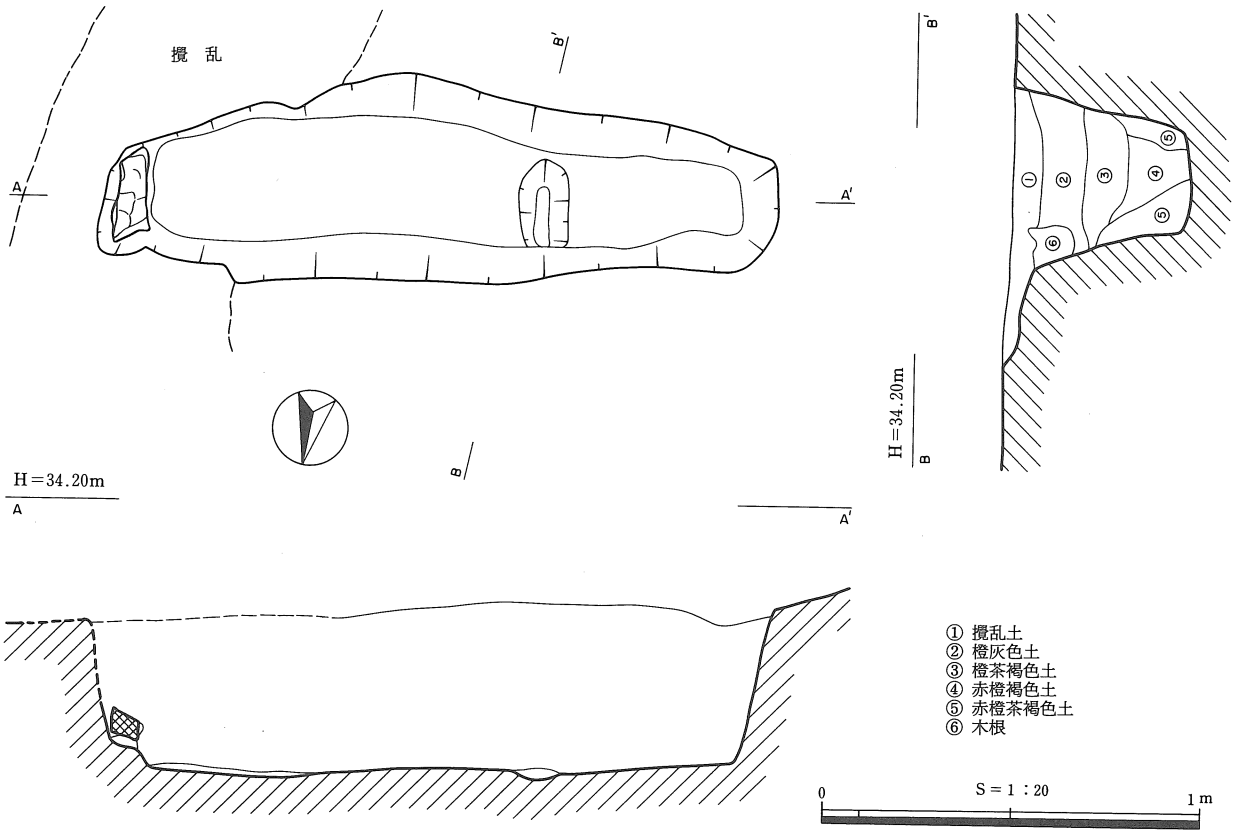
主体部１～３の位置関係から、これらはいずれも陰田60号墳に帰属する埋葬主体と考える。これらの埋葬順序については検証できなかったが、主体部３の土器棺（43、44）の時期が、当古墳の築造時期を概ね示すものと考える。60号墳は、古墳時代中期に比定される41号墳よりも高位に隣接しており、また主体部内の構造についても共通性が認められることから、両古墳は累代の関係にあると思われる。

・陰田66号墳（第39、40図・写真図版10）

陰田66号墳周辺は、果樹により攪乱を受けており、また北側が削平されて地形が大幅に改変されている。基本的には、地山整形により墳丘を削り出したのち、若干の盛土を施したものと考える。後背の高位側には、堀切状の周溝を設けているが、弧状にめぐる形に検出できなかった。本来的な墳丘の高まりがあれば、墳丘を半周する形になるものと思われる。周溝の下端ラインや地山整形ラインから判断して、円墳と考える。墳頂部の標高は、34mである。規模は、墳裾で東西6.5mを測り、南北は2.6m程度遺存していた。東側墳裾部からの遺存高は80cmである。墳頂の平坦面はいびつな形状を呈し、西側周溝寄りでは周溝に向かってレベルが上がっていく。よって墳頂部は完全に削平されているものと推定される。周溝は、幅90cm～1.3m、深さ20cmを測り、2.8mの長さにわたって検出した。



第39図　陰田66号墳実測図



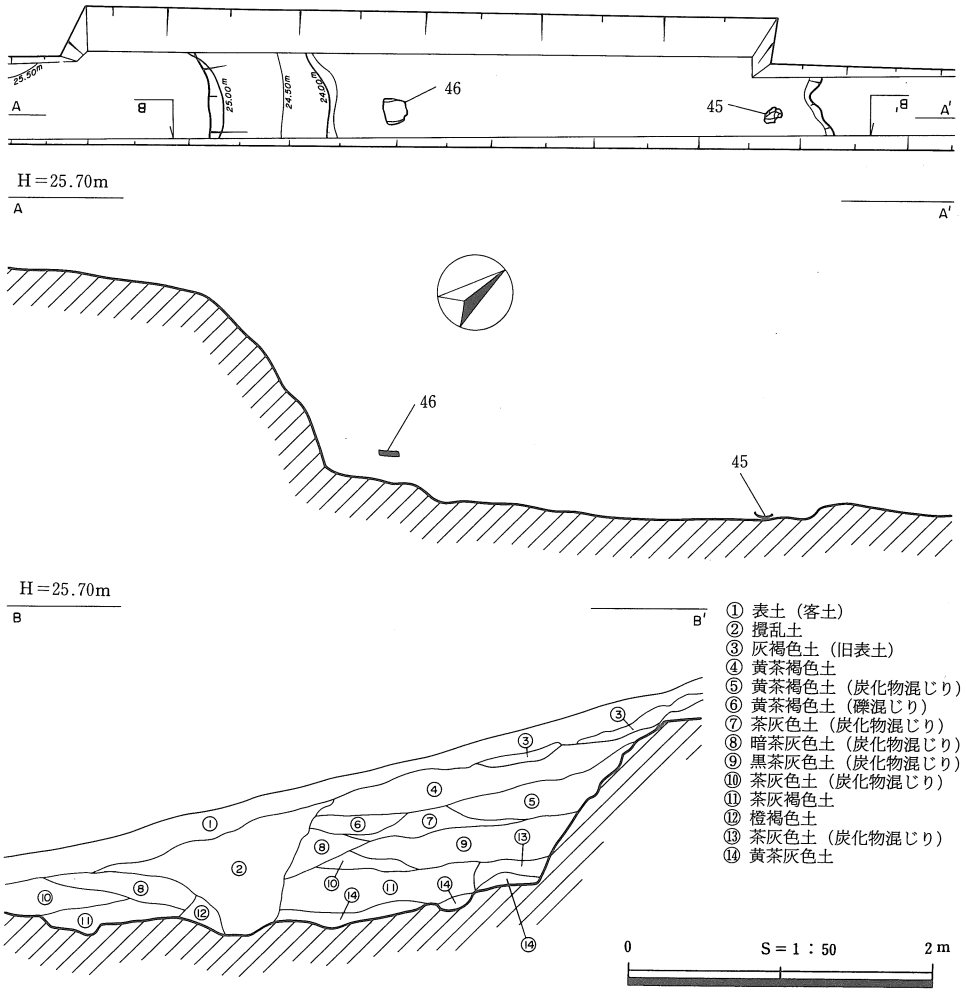
第40図　陰田66号墳主体部実測図

主体部は１基確認した。推定するに、墳頂部からやや南寄りに位置する。墳裾部に副次的な主体部は確認されなかった。墓壙は、検出面で東西長1.8mを測る。墓壙の東側が果樹により攪乱をうけており墓壙の幅を把握し難いが、中央部で55cm、西側で30cmを測り、西側幅がすぼまる。深さは45cmを測る。胴の膨らむ長方形状に検出した。主軸方向は、N－79°－Eにとる。底面は、東西長1.65m、南北幅15～30cmを測り、中央部が幅広である。底面中央やや西寄りの地点に溝状の落ち込みを検出した。幅12cm、深さ３cm程度のもので、棺材を自立させることはできないものと思われる。墓壙の断面形は、逆台形状である。底面の東側小口部分に、南北長20cm、東西幅７cm、高さ５cmを測る段を検出した。この段上に角礫１個を検出した。枕と思われる。よって、遺体の頭位は東側となる。角礫以外、人骨、遺物の出土はみられなかった。

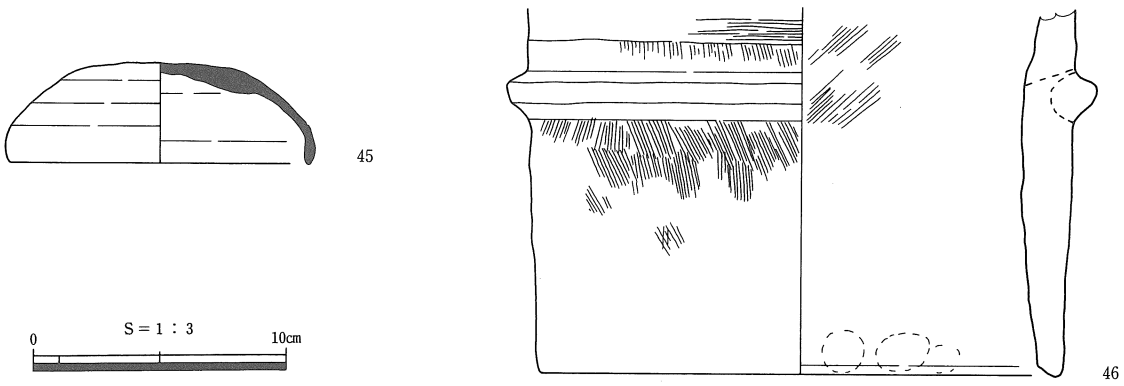
主体部は、木蓋土壙墓であると考える。枕石が東側壁面にほぼ接するような位置にあり、このことから小口板は置かれなかったとみてよく、墓壙内に棺は組まれなかったと考える。時期を示す遺物の出土がみられず、推測の域をでないが、陰田41、60号墳との位置関係や、本主体部が60号墳の主体部２に共通する枕石を伴う木蓋土壙墓である点などから、41、60号墳に近い時期の築造と考える。

・陰田横穴群（第４図）

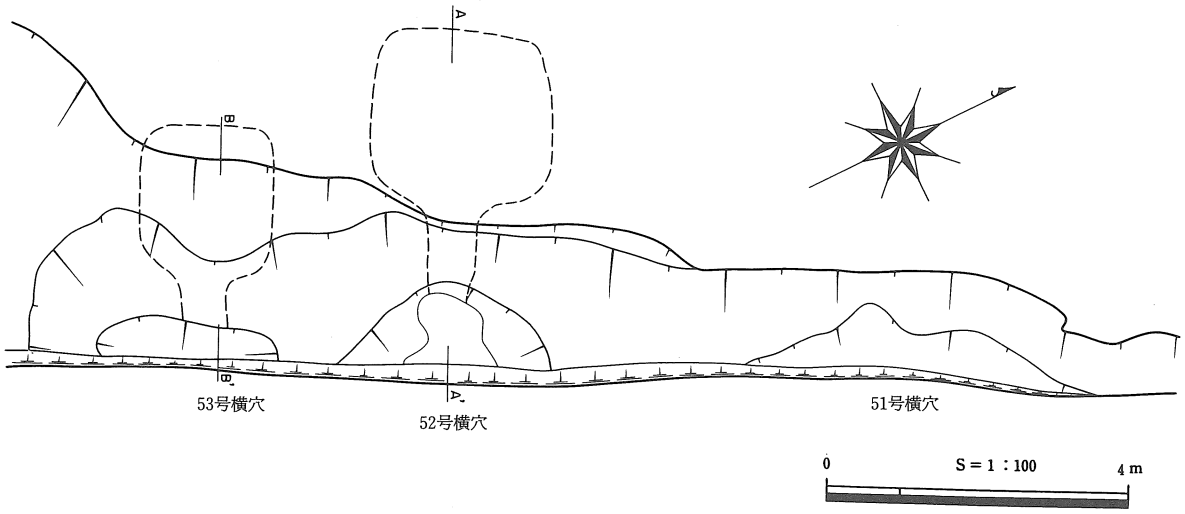
陰田横穴群は、天神山丘陵の東側斜面部及び久幸山丘陵の北側斜面部に形成されたもので、前者をＡ群、後者をＢ群と呼称する。Ａ群では、横穴23基、未完成横穴３基、小横穴15基、Ｂ群では横穴４基、小横穴５基が検出されている。後背に周溝、墳丘を伴う横穴も確認されている。６世紀後葉から築造が開始され、７世紀中葉に築造が終わり、７世紀末～８世紀前葉まで追葬が行われたことが確認されている（註12）。陰田29号横穴は、以前の調査でＡ群に属する未完成横穴であることが確認されており、当時調査区外であった部分を今回調査した。51～54号横穴は、Ａ群の西側延長部に所在する。55号横穴は、Ｂ群の丘陵を挟んだ裏側に所在する。従来横穴が確認されていない地区である。

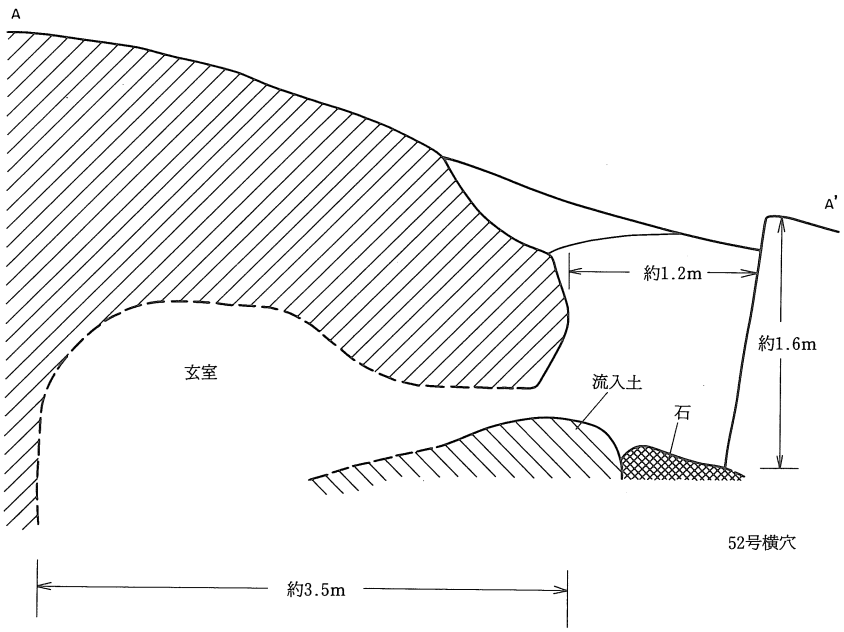


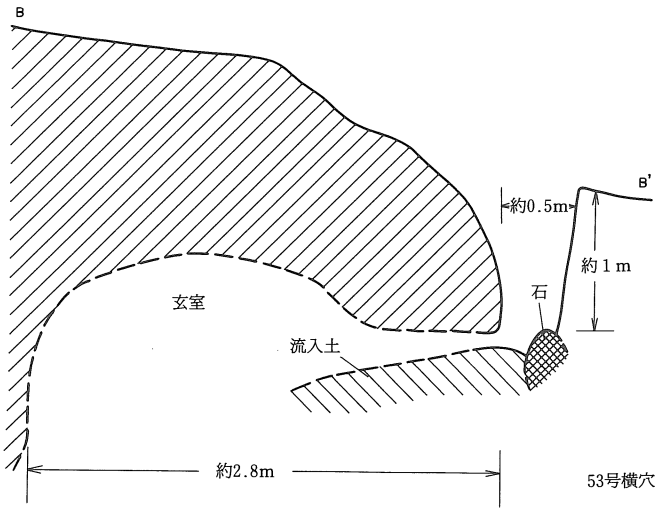
第41図　29号横穴実測図



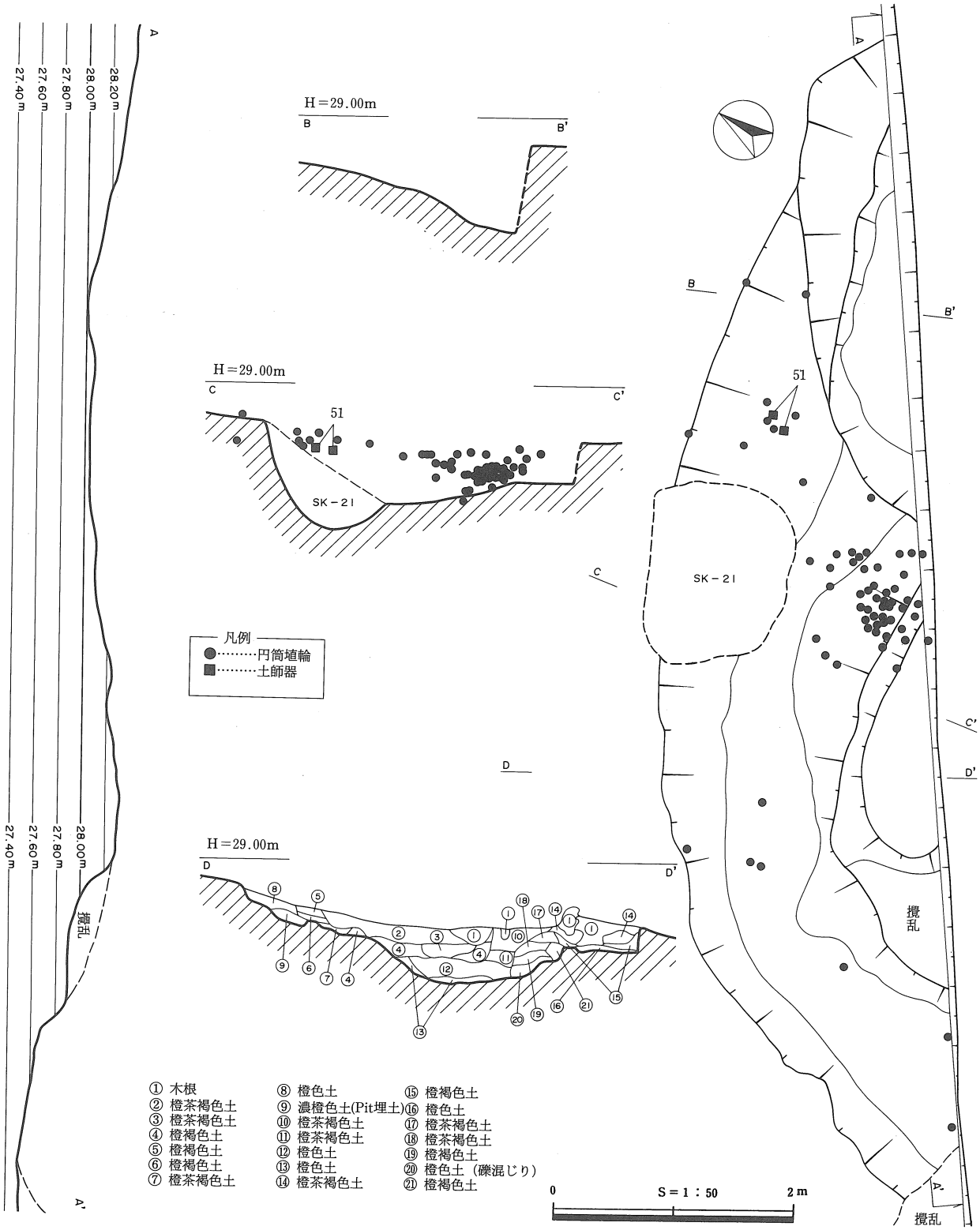
第42図　29号横穴出土遺物実測図



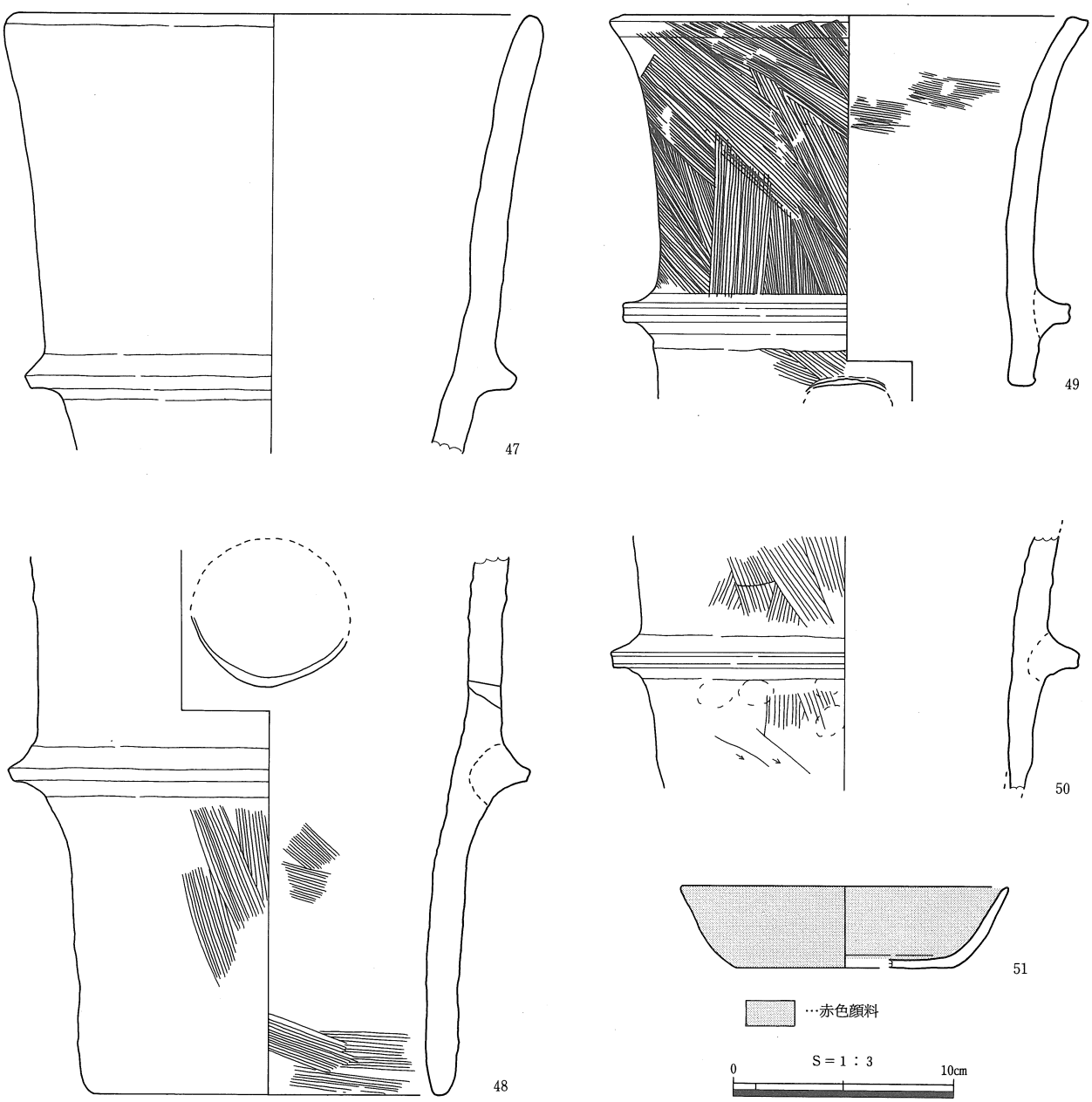




第43図　51号、52号、53号横穴実測図および断面概念図



第44図　54号横穴実測図



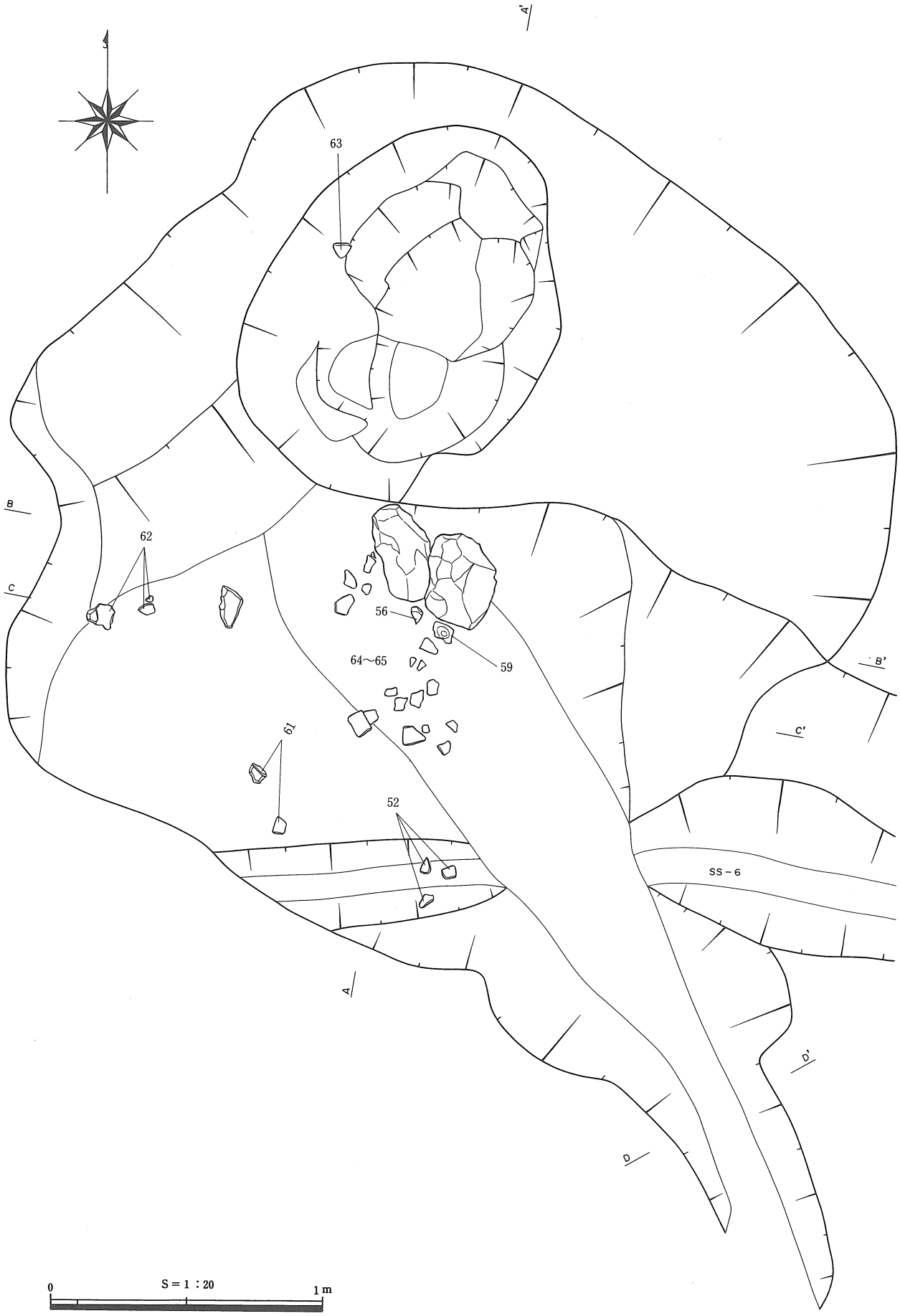
第45図　54号横穴遺物実測図

・**陰田29号横穴**（第41、42図・写真図版11）

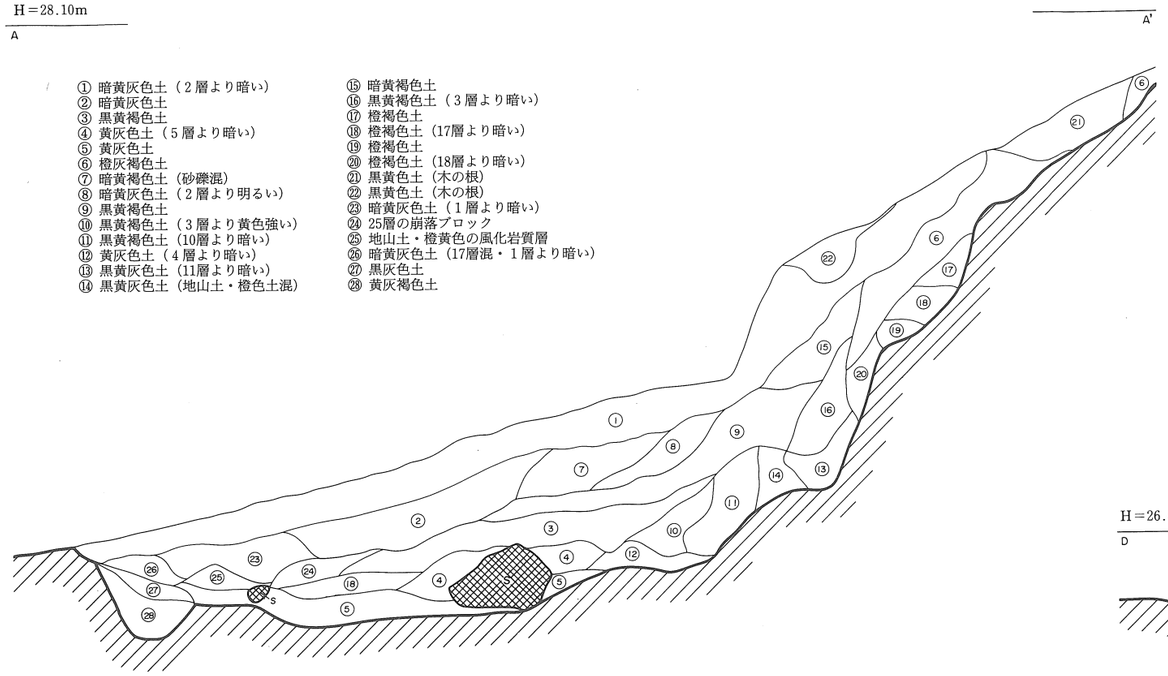
B区の東端の狭長な調査区で検出した。過去の調査で未完成横穴であることが確認されている。岩質の卓越した場所である。高さ約１ｍの段を約50㎝の幅で確認した。横穴の前庭を意図した箇所の壁面と思われる。埋土中から45、46が出土した。45は床面上から出土した。須恵器の坏蓋である。陰田編年の７式（７世紀中葉）相当か。46は混入と思われる。円筒埴輪の基部である。底部再調整の指押さえが観察される。

・**陰田51～53号横穴**（第43図・写真図版11）

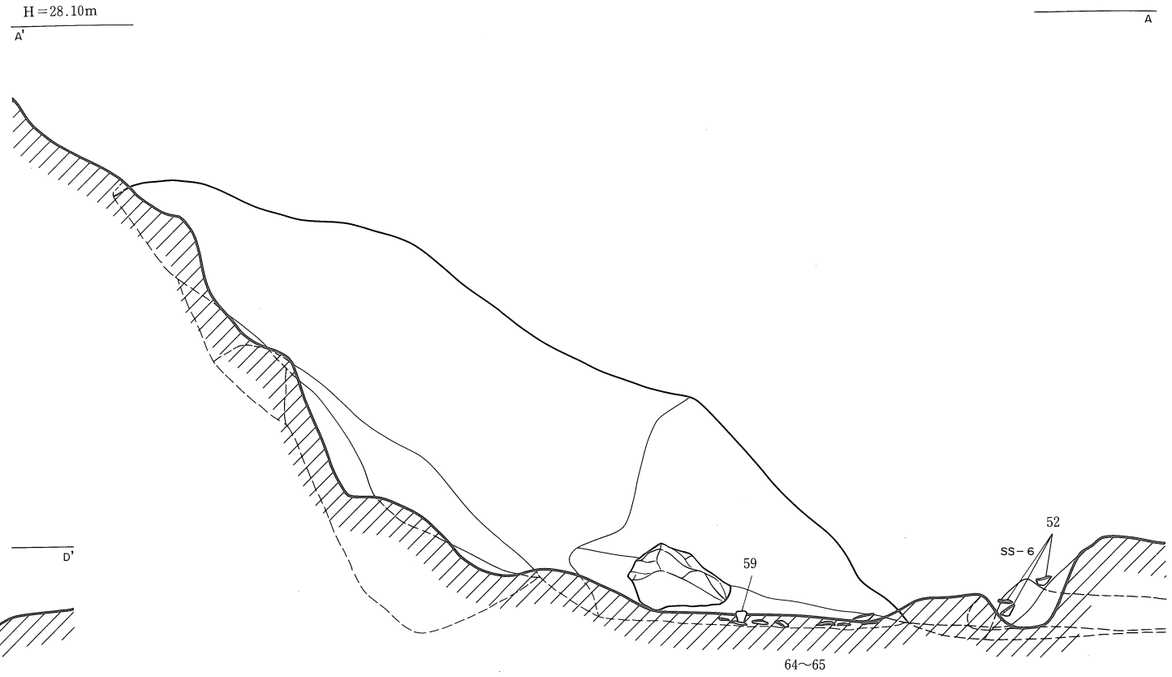
いきさつは第２節に述べたとおりであり、急遽埋め戻したため、詳細なデータを採っていない。平面を平板測量し、断面を略測した結果を示すに留まる。まず丘陵を広く掘削してから、その範囲内に３基を築造している。広い範囲の掘削は、３基が同一支群であることを示唆するものである。51号横穴は、３基中最も北東寄りの位置にあたる。地山加工の痕跡を確認したのみだが、他の２基の状況から推して、羨門部上方部分と判断される。52号横穴は、３基の中央に位置する。調査区界法面から約1.2m、表土上面から約1.6mを測る地点に羨門が開口した。かなりの流入土で羨門部は塞がっていたが、内部には空間が広がっているようである。玄室の奥行きは約3.

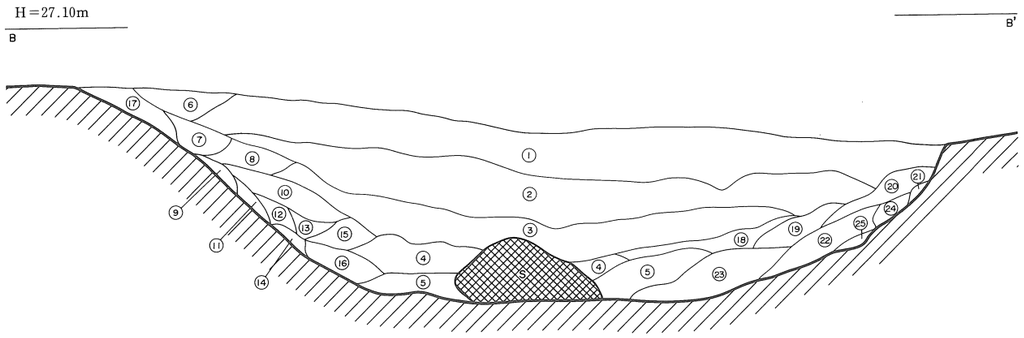


第46図　55号横穴実測図

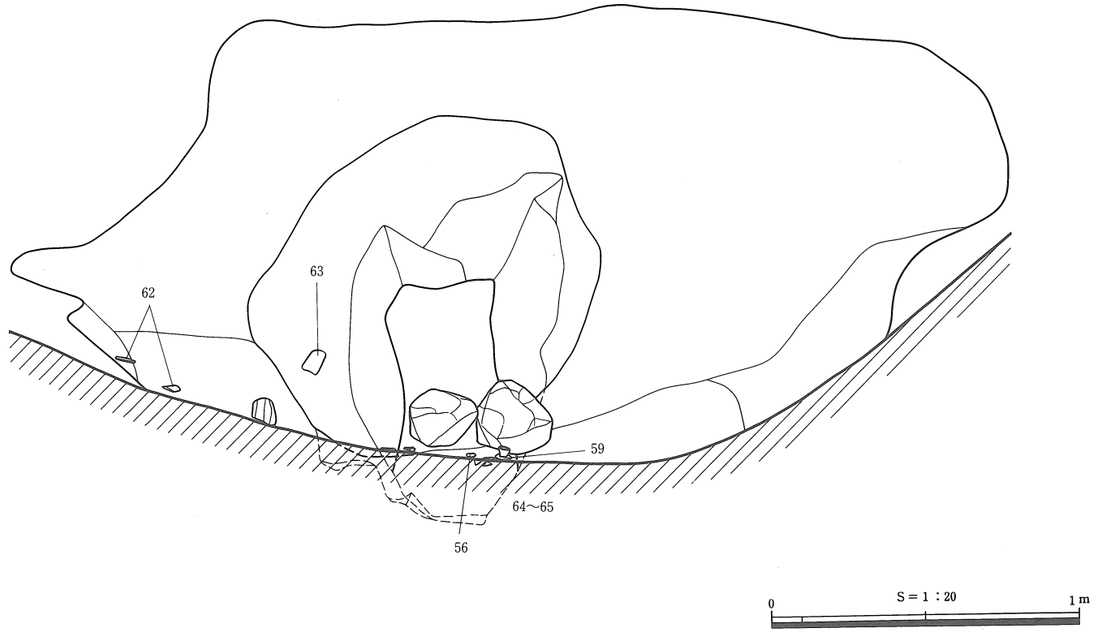


① 暗黄灰色土（２層より暗い）
② 暗黄灰色土
③ 黒黄褐色土
④ 黄灰色土（５層より暗い）
⑤ 黄灰色土
⑥ 橙灰褐色土
⑦ 暗黄褐色土（砂礫混）
⑧ 暗黄灰色土（２層より明るい）
⑨ 黒黄褐色土
⑩ 黒黄褐色土（３層より黄色強い）
⑪ 黒黄褐色土（10層より暗い）
⑫ 黄灰色土（４層より暗い）
⑬ 黒黄灰色土（11層より暗い）
⑭ 黒黄灰色土（地山土・橙色土混）
⑮ 暗黄褐色土
⑯ 黒黄褐色土（３層より暗い）
⑰ 橙褐色土
⑱ 橙褐色土（17層より暗い）
⑲ 橙褐色土
⑳ 橙褐色土（18層より暗い）
㉑ 黒黄色土（木の根）
㉒ 黒黄色土（木の根）
㉓ 暗黄灰色土（１層より暗い）
㉔ 25層の崩落ブロック
㉕ 地山土・橙黄色の風化岩質層
㉖ 暗黄灰色土（17層混・１層より暗い）
㉗ 黒灰色土
㉘ 黄灰褐色土





① 暗黄灰色土（２層より暗い）
② 暗黄灰色土
③ 黒黄灰色土（18層より暗い）
④ 黄灰色土（５層より暗い）
⑤ 黄灰色土
⑥ 暗黄灰色土（17層少量混）
⑦ 暗黄灰色土（17層混）
⑧ 暗黄灰色土（17層多量混）
⑨ 17層の崩落ブロック
⑩ 黒黄褐色土（17層混）
⑪ 暗橙褐色土
⑫ 黒黄褐色土（17層混・10層より暗い）
⑬ 黄灰色土（砂礫混）
⑭ 暗橙褐色土
⑮ 黄灰色土（４層より暗い）
⑯ 黄灰色土（15層より暗い）
⑰ 地山土・赤橙色土
⑱ 黒黄灰色土
⑲ 黄褐色土（23層より暗い）
⑳ 黄茶褐色土
㉑ 橙色土
㉒ 黄褐色土（地山ブロック混・19層よりやや暗い）
㉓ 黄褐色土
㉔ 25層の崩落ブロック
㉕ 地山土・橙黄色の風化岩質層



第47図　55号横穴断面実測図

5m程度と思われる。閉塞石と思われる礫を、調査区界法面に挿し挟まった状態で確認した。53号横穴は、３基中最も南西寄りの位置にあたる。調査区界法面から約0.5m、表土上面から約１ｍを測る地点に羨門が開口した。かなりの流入土で羨門部は塞がっていたが、内部には空間が広がっているようである。玄室の奥行きは約2.8m程度と思われる。閉塞石と思われる礫を、調査区界法面に挿し挟まった状態で確認した。これら３基の横穴の時期を示す遺物の出土はみられず、また後背墳丘等の施設は確認できなかった。

・**陰田54号横穴**（第44、45図・写真図版12、74）

横穴の後背墳丘及び後背周溝を検出した。墳丘はいびつな形状だが、円形を指向するものと思われる。東西4.2m、南北1.2mの半月形の範囲で検出した。墳裾のラインから推定される墳丘の円弧の半径は、2.6mである。Ｄ－Ｄ'ラインの土層断面によれば、14～21層による盛土が観察される。墳裾からの高さは、40cm以上となるであろう。地山整形後盛土による整形が行われたものとみられる。周溝は、東西9.5m、南北2.3mの半月形の範囲を検出した。周溝外側ラインから推定される周溝の円弧の半径は、6.8mである。周溝底までの深さは、約70cmである。周溝の断面形は椀形である。周溝の北東側は他の周溝と重複している可能性もある。遺物は、円筒埴輪片が墳丘の北東側墳裾部に集中して出土した。完形に接合できるものはなかったが、複数個の個体が確認できた（47～50）。埴輪棺を形成するものではなく、また墳裾に樹立されたものでもなかった。墳丘上に据え置かれたものが転落した可能性は残る。５１の丹塗り椀は、周溝内への流れ込み遺物である。

・**陰田55号横穴**（第46～48図・写真図版13）

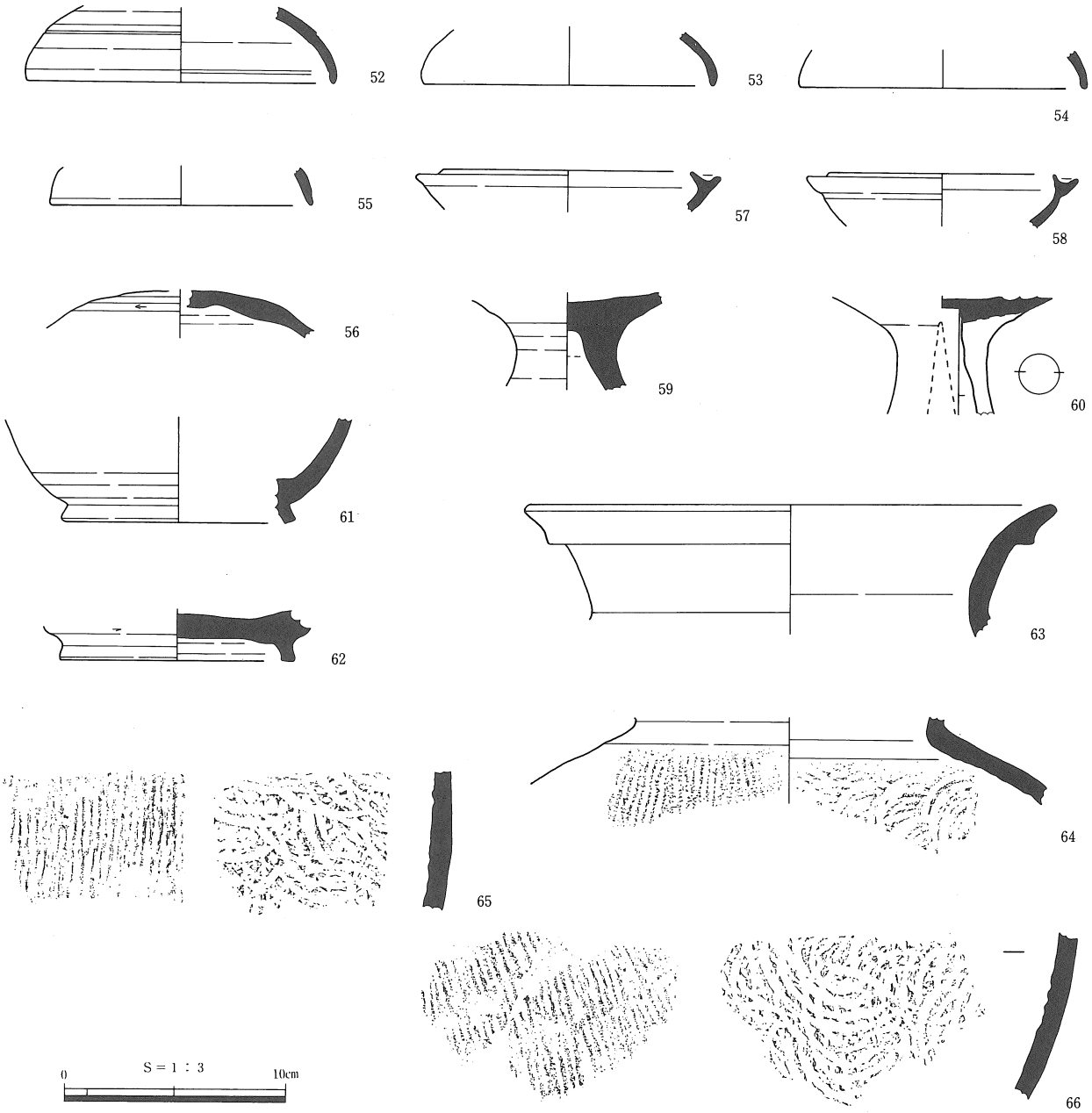
未完成横穴である。テラス状遺構ＳＳ－６の溝を切っている。ＳＳ－６、７で造成されたテラス状地形の後背崖面を利用しようとしたものであるが、横穴を掘り進めていく過程で、岩脈に当たり、構築を断念したものと思われる。墓道から前庭部に至り、羨門を掘りかけたところで中断されている。墓道は、外方に向け先細りで、前庭部に向けて開く溝状を呈する。検出面で幅40cm、底面で幅15cm、深さ10cmを測る。前庭部は、東西３m、南北1.7mの範囲に擂鉢状のくぼみを設けている。墓道から引き続き55cmの底面幅で、羨門方向へ導く。Ｂ－Ｂ'ラインでは、深さ75cmを測る。墓道から前庭部にかけては、羨門に対し正面からではなく、南東方向にあたる斜め方向から入場する形になっており、羨門の正面に対峙した場合の中心軸と墓道－前庭部の中心軸とは、30°のずれを生じる。羨門側崖面の掘削は、東西3.3mの幅に及び、その高さは1.45mを測る。羨門直前の底面は、深さ20cm程度くぼむ。羨門に相当する箇所は、いびつな稜線が走り、掘削をさらに試みた様子が窺える。羨門前の前庭部底面上では、30～40cm大の礫を２個、接するように検出した。また、前庭部底面直上から須恵器片の出土がみられた。完形になるものはなく、いずれも破片であり、横穴構築放棄後の上方からの転落遺物と考える。埋土の堆積状況に、人為的な埋め戻しは窺われなかったことから、構築断念後は、放置されていたものと推察される。

出土遺物はいずれも須恵器で、52～58は蓋坏である。59、60は高坏、61、62は壺の底部、63～66は甕である。52、56はやや古い要素をもつが、53～55、57、58は陰田編年の７式（７世紀中葉）相当と思われる。

当横穴の出土遺物が、横穴構築放棄後の転落遺物であることから、当横穴は７式以降の所作と言える。７式は、Ａ群においては横穴の構築が停滞する段階であり、一方Ｂ群では、32号横穴のみが存在した時期である。８式に至り、Ｂ群に31、33、34号が構築され、これをもって陰田横穴群の構築は終焉する。31、33、34号横穴が、32号横穴と同一支群であることから、32号横穴構築後に構築場所の変更を意図したとは考え難い。よって、８式以降に新たに横穴を構築しようとしたが果たせなかったものと推察される。しかし、造られなかった横穴が、その後どこに築かれたのか、不明である。

５　古墳時代後期～奈良時代の遺構（ＳＩ－７～13、ＳＳ－２～24、ＳＢ－１、２、10、ＳＤ－３、４、ＳＫ－１～６、ＳＣ－１～８）

本遺跡からは、古墳時代後期～奈良時代にかけての遺構として、竪穴住居跡７棟（ＳＩ－７～13）、テラス状遺構23基（ＳＳ－２～24）、掘立柱建物３棟（ＳＢ－１、２、10）、溝状遺構２条（ＳＤ－３、４）、土坑６基（ＳＫ－１～６）を検出した。

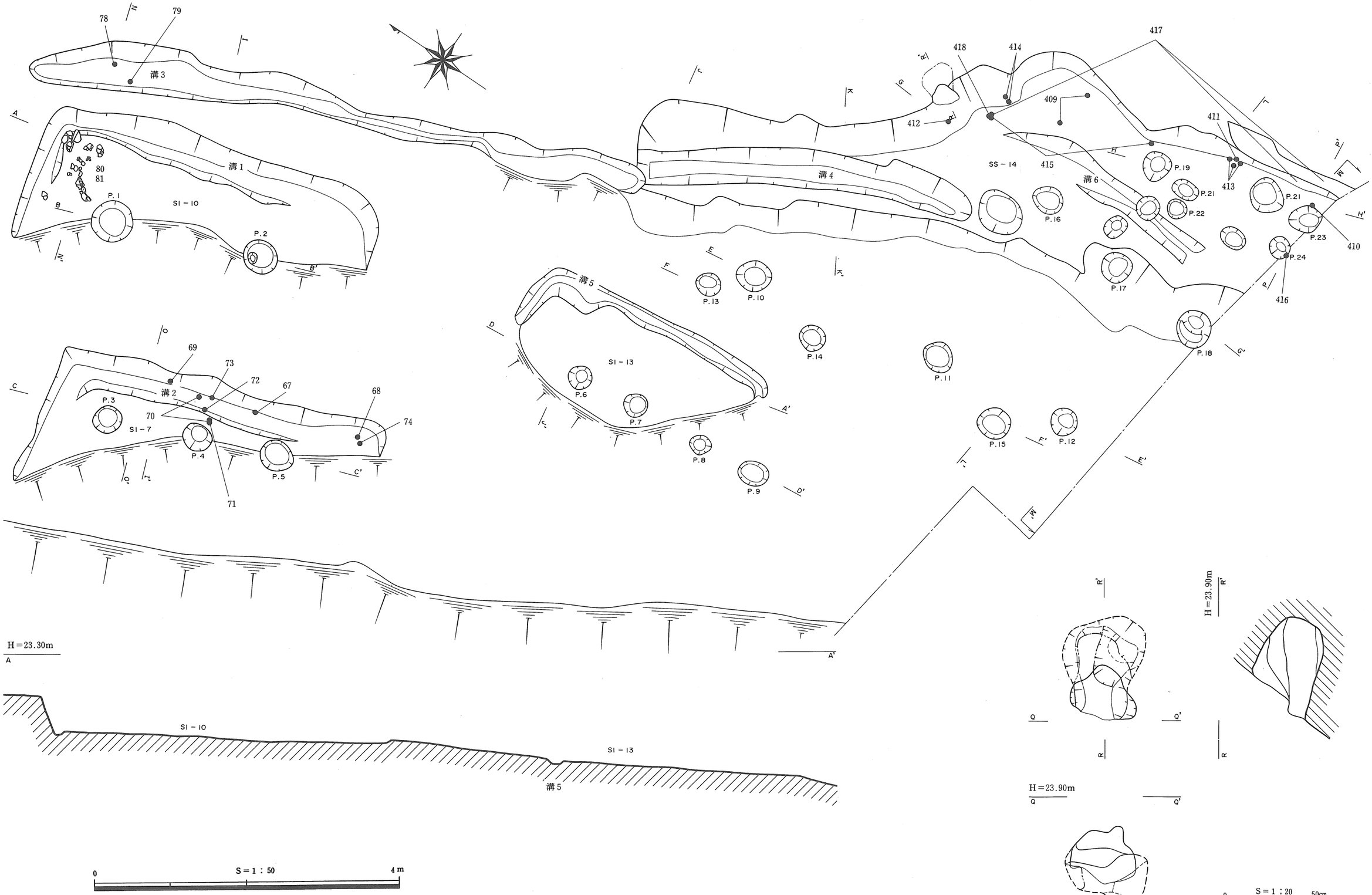


第48図　55号横穴出土遺物実測図

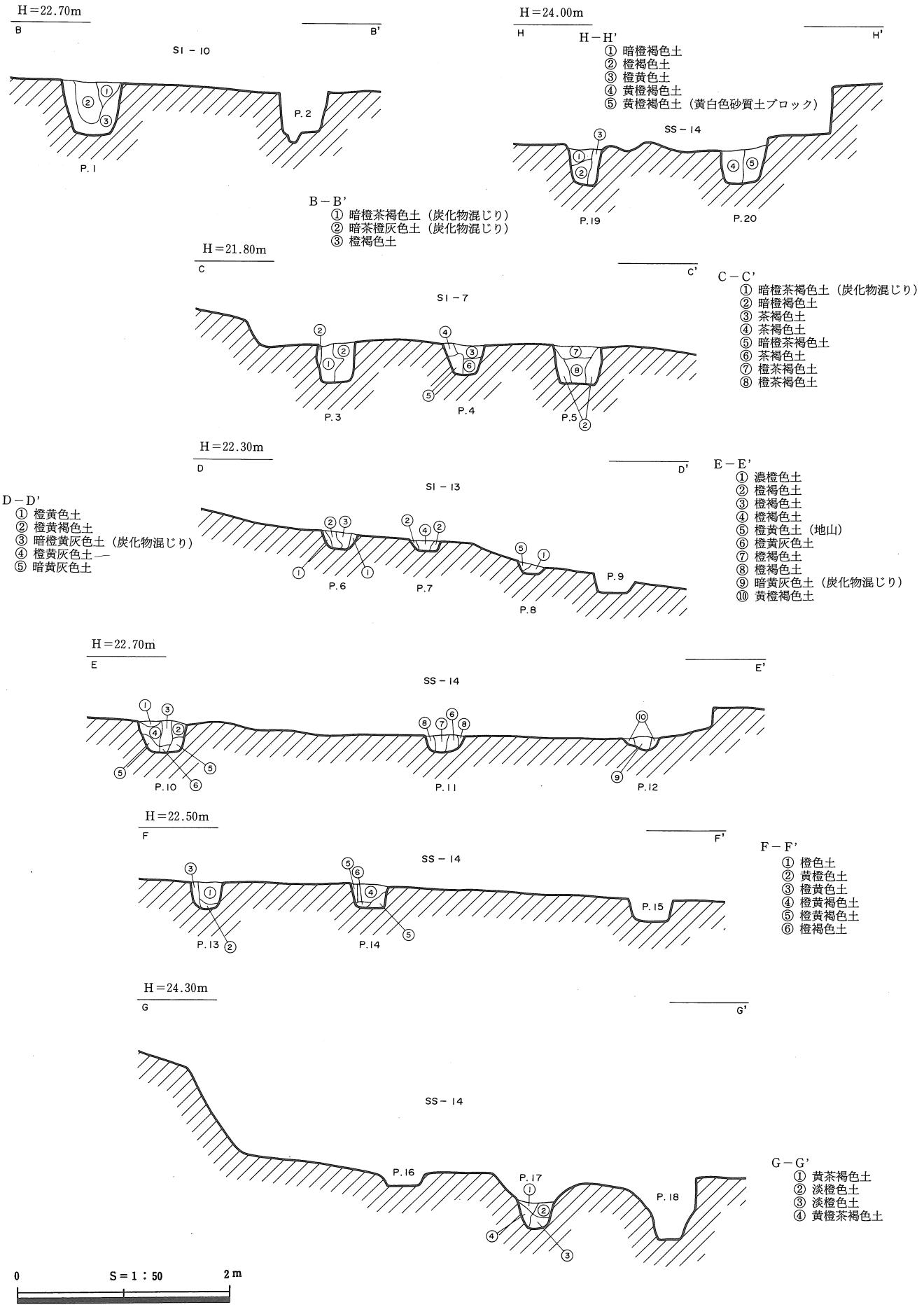
・竪穴住居跡

竪穴住居跡として、ＳＩ－７～13の７棟を検出した。丘陵斜面部を直立気味に掘削し床面を構築した住居跡である。掘削によって生じた廃土を斜面部に盛土し、床面を造成したものと考える。基本的に壁面裾部には側溝を設けている。盛土、造成した床面の低位側はともに流失しており、どの遺構も住居の構造を明確に把握することはできなかった。壁面や側溝の構築状況から、平面プランはともに方形を呈するものと考える。７棟いずれもＡ区の丘陵斜面裾部に構築されており、標高17～18.5mに３棟、標高21～26.5mに４棟を互いに近接して検出した。

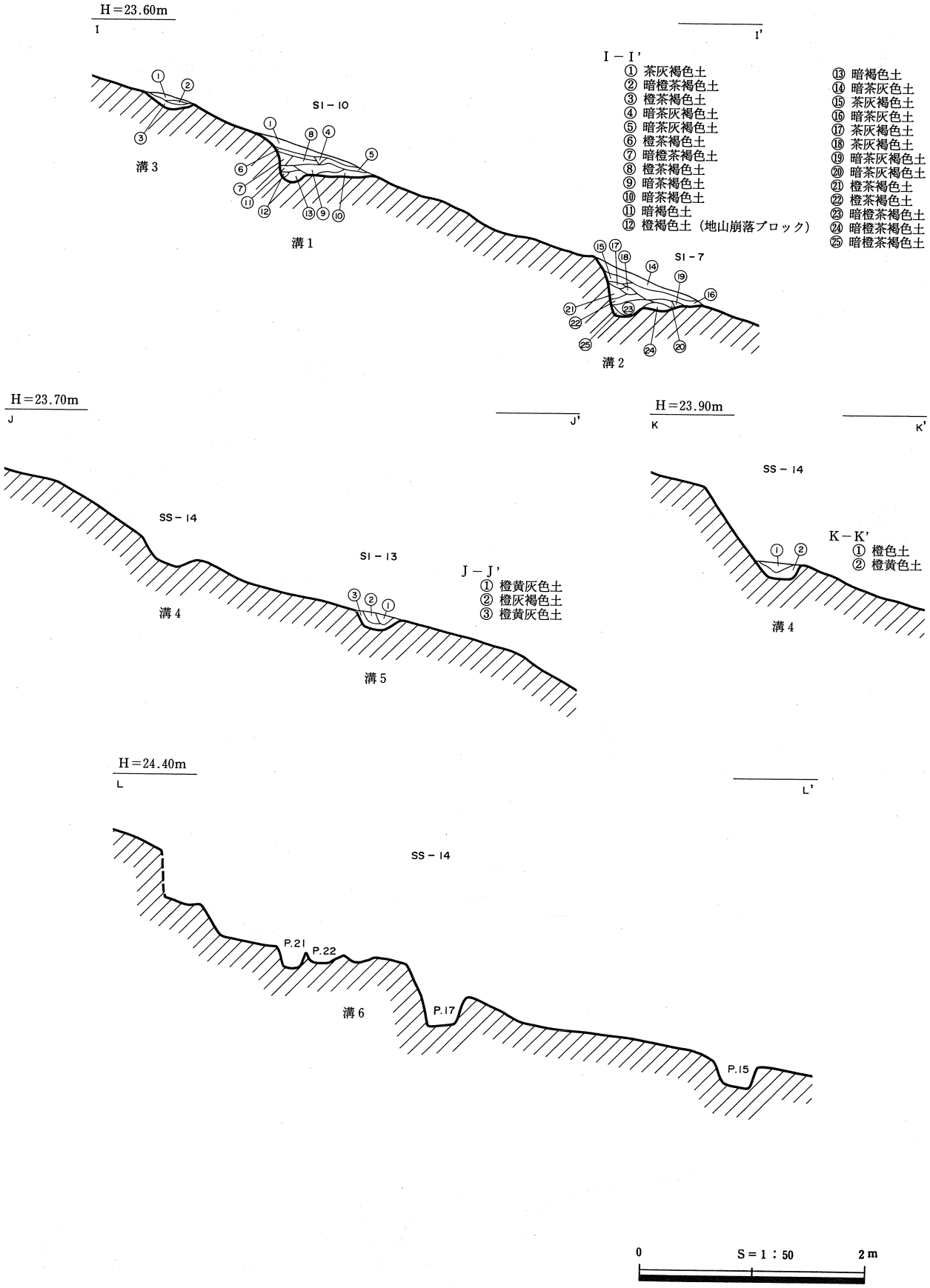
ＳＩ－７（第49～53図・写真図版14）は、標高約21mに位置し、Ａ区東側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺が約４mを測る方形の竪穴住居跡である。西側は流失しており、原形をとどめていない。残存壁高は、東壁で約50cmを測る。壁面裾部には、幅約30cm、深さ約10cmの側溝（溝２）を検出した。斜面の約３m上方にはＳＩ－10が位置する。



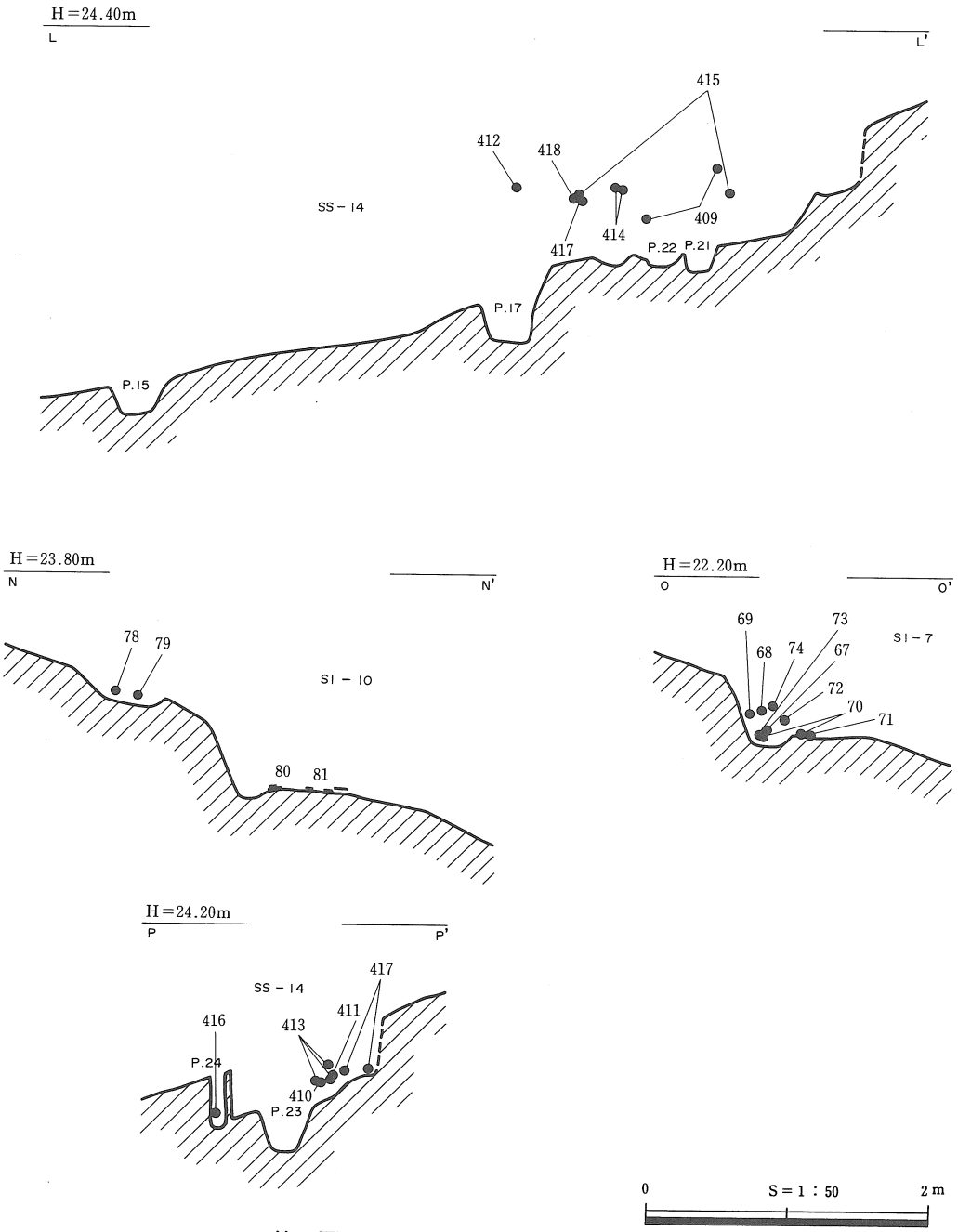
第49図　ＳＩ－７、10、13、ＳＳ－14実測図



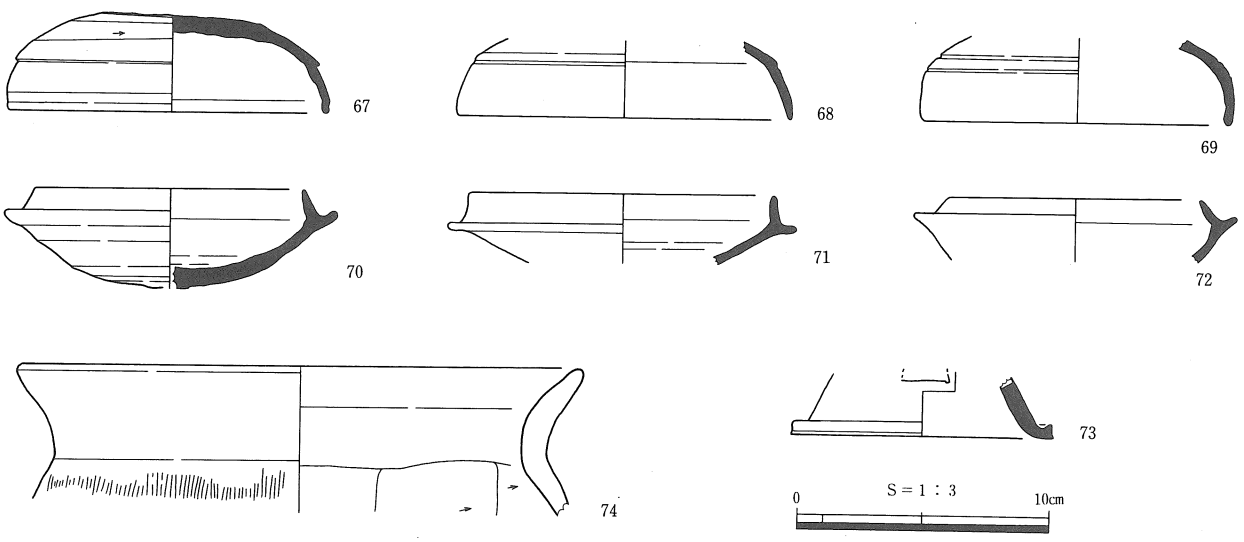
第50図　ＳＩ－７、10、13、ＳＳ－14断面実測図(1)



第51図　ＳＩ－７、10、13、ＳＳ－14断面実測図(2)



第52図　ＳＩ－７、10、ＳＳ－14断面実測図



第53図　ＳＩ－７出土遺物実測図

床面には、３基のピット（Ｐ．３～５）を検出した。Ｐ．３～５は、直径30～40cm、深さ30～40cmを測り、直線上に位置する。ピット間距離は、Ｐ．３、４で約1.2m、Ｐ．４、５で約１ｍを測る。ピットの配置状況から、ＳＩ－７はＰ３、５を主柱穴とする４本柱の住居跡と推測される。Ｐ．４は補助的な柱穴か。

遺物は、須恵器の蓋坏、高坏の脚部、土師器の甕が出土した。67～69は坏蓋である。67は、溝２上の中央やや南側に、浮いた状態で出土した。口縁部と天井部の間に段を設け、稜が突出する。天井部は、ヘラ切り後ナデている。68は床面南端に浮いた状態で出土した。口縁部と天井部の間に段を設け、稜は小さく突出する。69は、溝２上の中央やや北側に、浮いた状態で出土した。口縁部と天井部の間に段を設けているが、稜の突出は鈍い。70～72は坏身である。70は溝２底面上とＰ．４東側肩部付近にほぼ床面直上で出土した。立ち上がりが内傾し、受部はやや上方にのびる。底部は丸みを帯び、ヘラ切り後ナデている。71はＰ．４東側肩部付近にほぼ床面直上で出土した。直立する立ち上がりをもち、受部は水平にのびる。72は溝２上に浮いた状態で出土した。立ち上がりは内傾し、受部はやや上方にのびる。73は高坏の脚部である。透かしを施している。74は甕の口縁部である。床面南端に浮いた状態で出土した。外反する口縁部で、外面にはハケメが見られる。これらの遺物は、陰田編年５式（６世紀末～７世紀初頭）に比定される。

ＳＩ－８（第54～57図・写真図版15）は、標高約17.5mに位置し、Ａ区北側の丘陵斜面裾部に構築された竪穴住居跡である。幅約15cm、深さ約10cmの側溝を検出した。ＳＩ－11と重複しており、第56図Ｉ－Ｉ'ラインにおける溝２、３の切り合い関係から、ＳＩ－11より古い住居跡であることが確認された。ＳＩ－11の構築に伴い、ＳＩ－８の壁面は削平されたため、明確に遺構の範囲を把握するには至らなかった。壁面は東側が僅かに遺存しており、床面南側は流失している。残存壁高は約25cmを測る。遺構東側はＳＩ－９南西端と切り合っている。切り合いの関係は把握できなかった。側溝と東壁の形状から、ＳＩ－８の平面プランは方形を呈すると推測される。

床面には数基のピットと１条の溝（溝５）を検出した。遺構範囲が明確でなく、ＳＩ－11と重複しているため、どのピットがＳＩ－８に伴うものか判断できない。

遺物は、土師器の小壺（75）が出土している。75は溝３上に浮いた状態で出土した。外反する口縁部で、表面には横方向のハケメが見られる。時期は不詳であるが、古墳時代後期以降であろう。

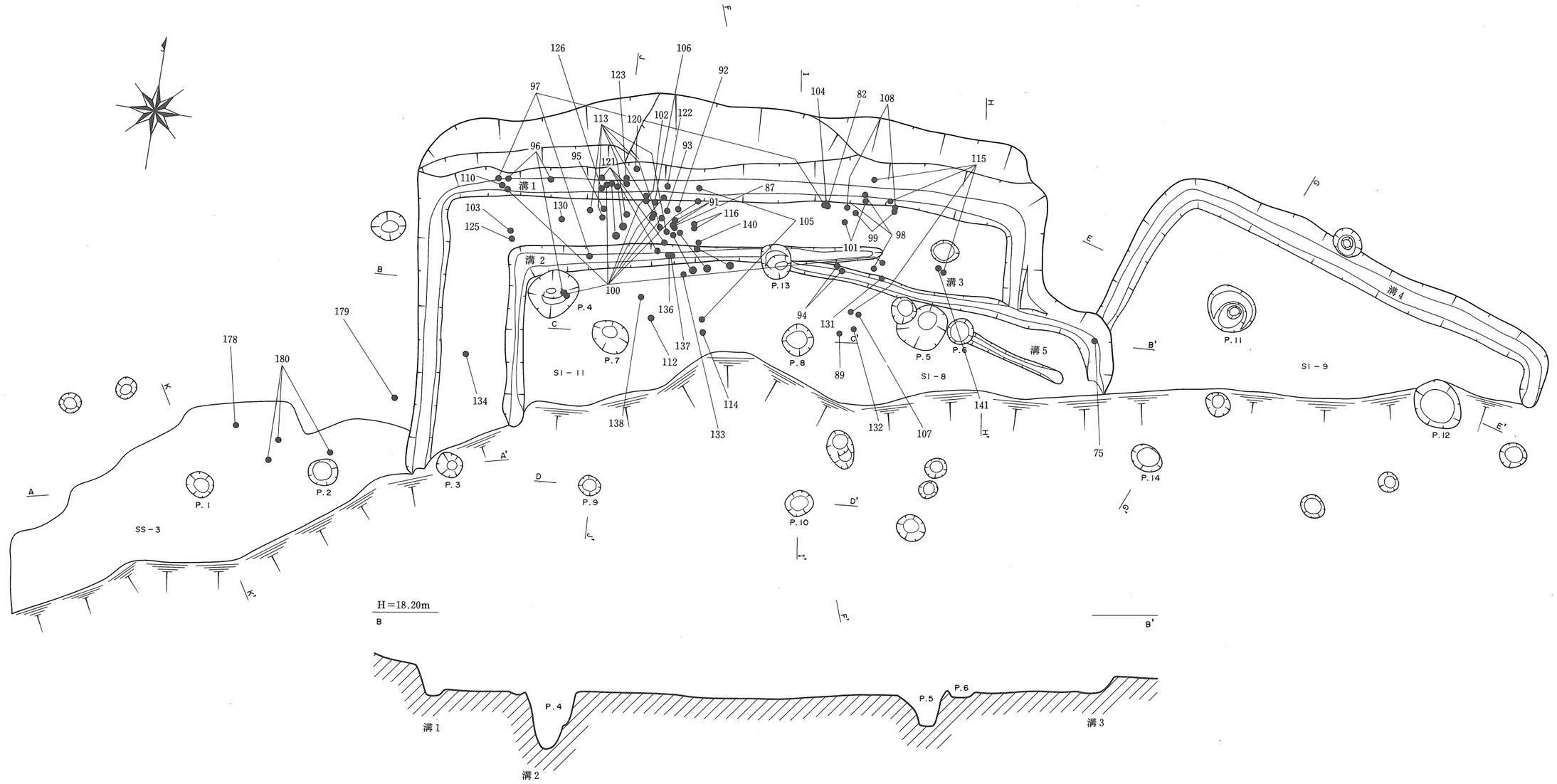
ＳＩ－９（第54、55、58図・写真図版15）は、標高約17.5mに位置し、Ａ区北側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺約4.5mを測る方形の竪穴住居跡である。残存壁高は、北東壁で約40cmを測る。壁面裾部には、幅約25cm、深さ約15cmの側溝（溝４）を検出した。南側は流失している。南西にはＳＩ－８が位置し、切り合っている。切り合いの関係は把握できなかった。

遺構からは８基のピットを検出しており、そのうちの７基は床面に、１基は溝４の北東側肩部に検出した。その配置状況から、ＳＩ－９はＰ11、12、14を主柱穴とする４本柱の住居跡と考える。Ｐ.11は２段掘りになっており、上部は直径約60cm、深さ約５cmを測り、下部は直径約25cm、深さ約50cmを測る。Ｐ.12は直径約60cm、深さ約50cmを測り、Ｐ.11とのピット間距離は約2.5mを測る。Ｐ.14は直径約30cm、深さ約30cmを測るが、上部を流失しており、本来はＰ.11、12と同規模の深さを測るピットであったと推測される。Ｐ.11とのピット間距離は約２mを測る。

遺物は、須恵器の坏蓋（76、77）が出土した。76は口縁部と天井部の間に段を設けているが、稜は突出しない。77はやや外反した口縁部をもつ。これらの遺物は、陰田編年５式（６世紀末～７世紀初頭）に相当する。

ＳＩ－10（第49～52、59図・写真図版14）は、標高約22mに位置し、Ａ区東側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺約4.5mを測る方形の竪穴住居跡である。斜面の約３m下方にはＳＩ－７が位置する。残存壁高は、東壁で約40cmを測る。壁面裾部には、幅約20cm、深さ約10cmの側溝（溝１）を検出した。また後背には、幅約40cm、深さ約20cmを測る溝（溝３）を約８m検出した。ＳＩ－10東壁とほぼ平行に位置しており、ＳＩ－10に伴う遺構と考える。排水施設と推測される。

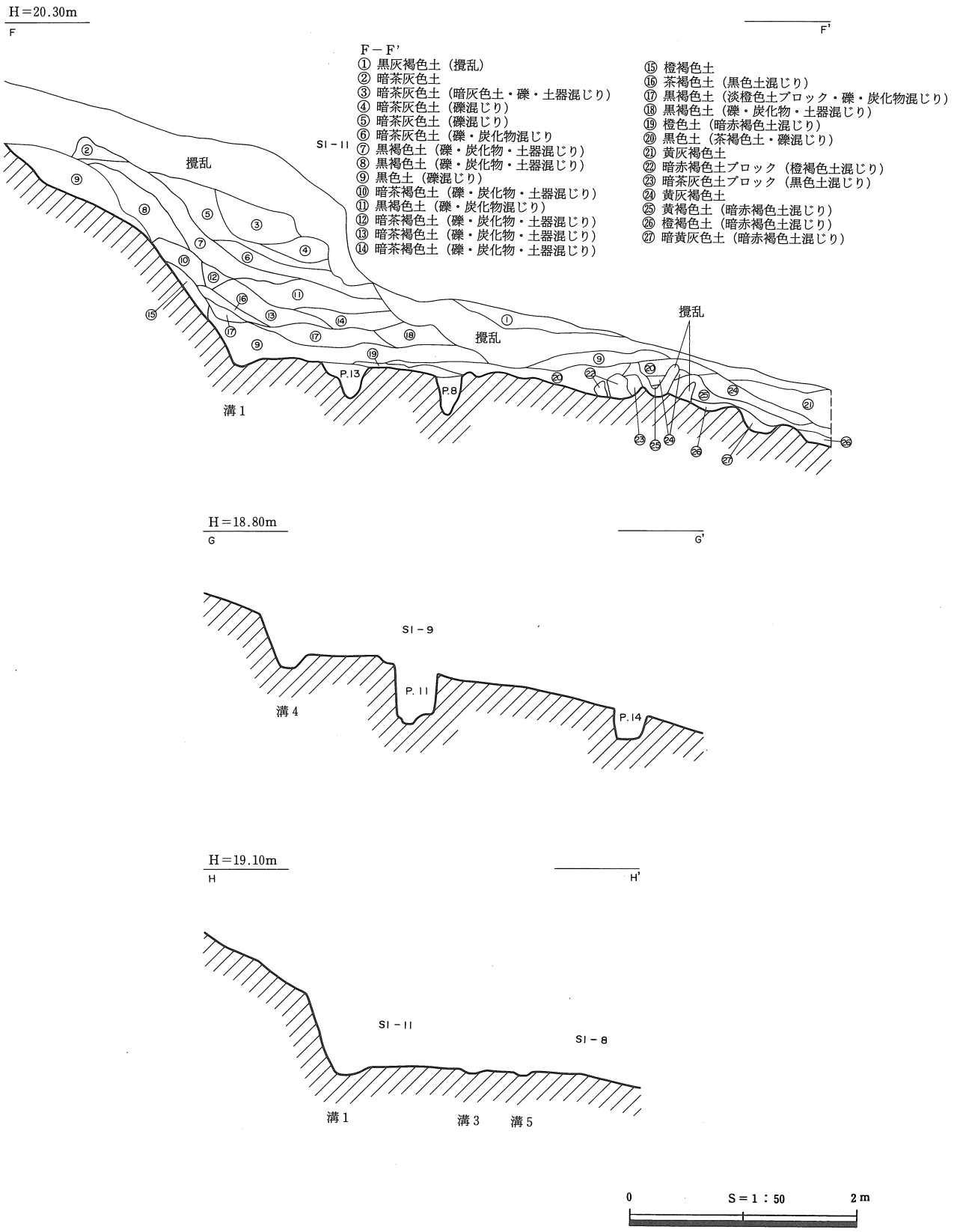
床面には、２基のピット（Ｐ．１、２）を検出した。Ｐ．１、２は直径40～50cm、深さ約50cmを測り、ほぼ同規



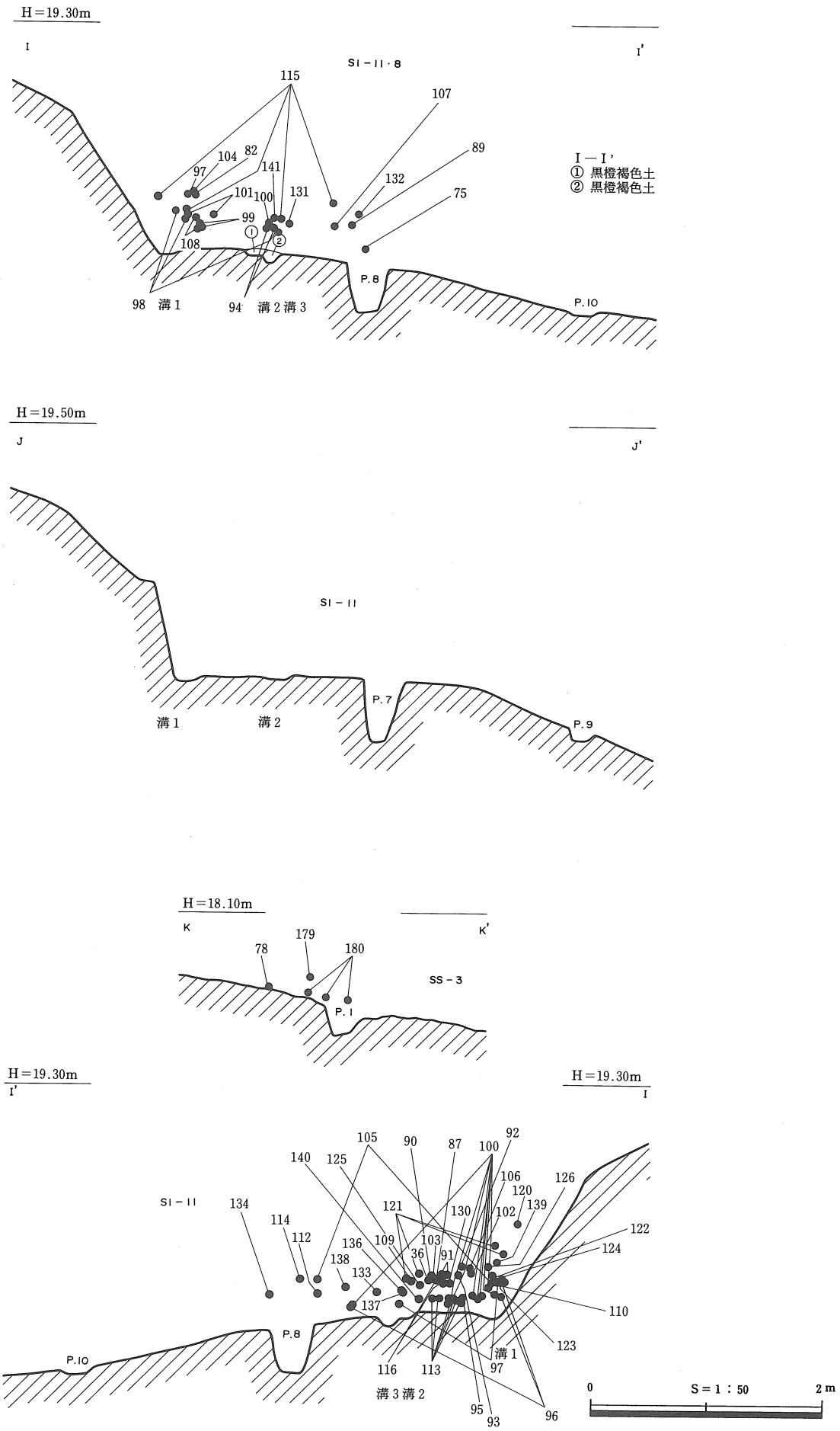
A－A'
① 淡橙灰色土（黄白色土ブロック混じり）
② 淡橙灰色土（黄白色土ブロック混じり）
③ 橙茶灰褐色土
④ 淡橙灰色土
⑤ 橙茶灰色土（炭化物混じり）
⑥ 茶灰褐色土
⑦ 茶灰褐色土
⑧ 橙灰色土（炭化物混じり）

C－C'
① 黒橙褐色土（炭化物混じり）
② 橙茶褐色土

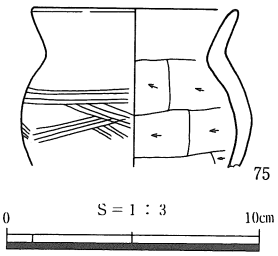
第54図　ＳＩ－8、9、11、ＳＳ－3実測図



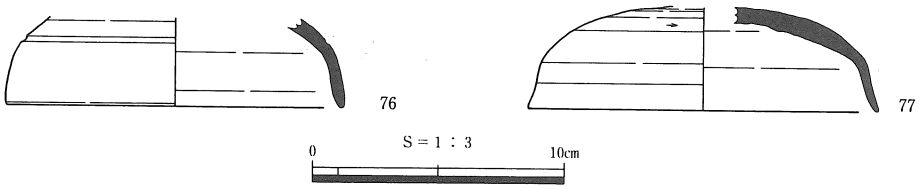
第55図　ＳＩ－８、９、11断面実測図



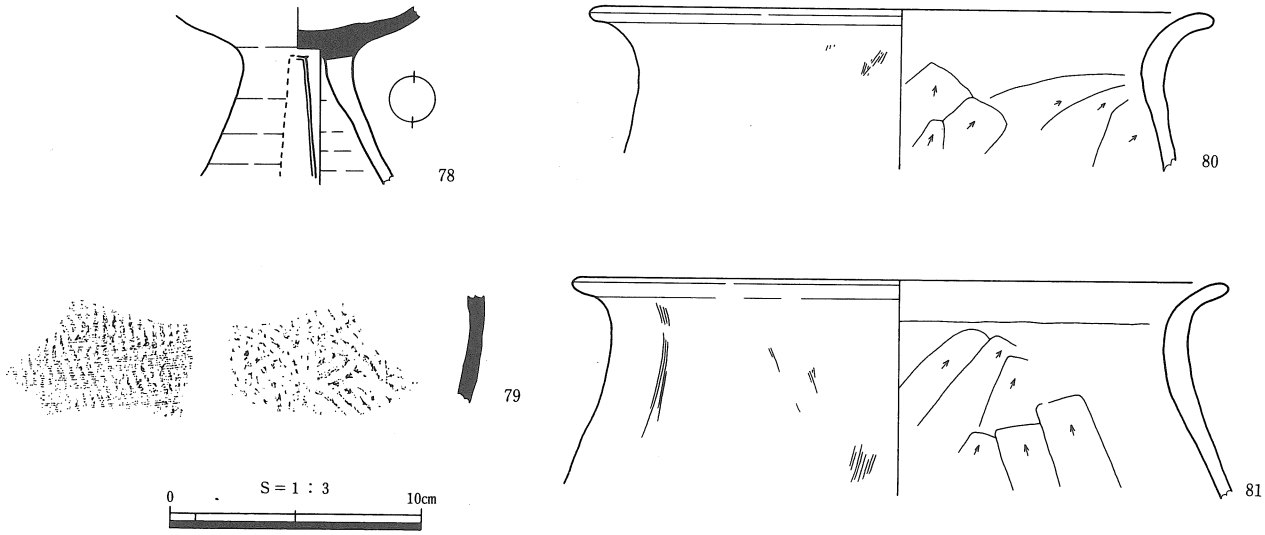
第56図　ＳＩ－８、11、ＳＳ－３断面実測図



第57図　ＳＩ－８出土遺物実測図



第58図　ＳＩ－９出土遺物実測図



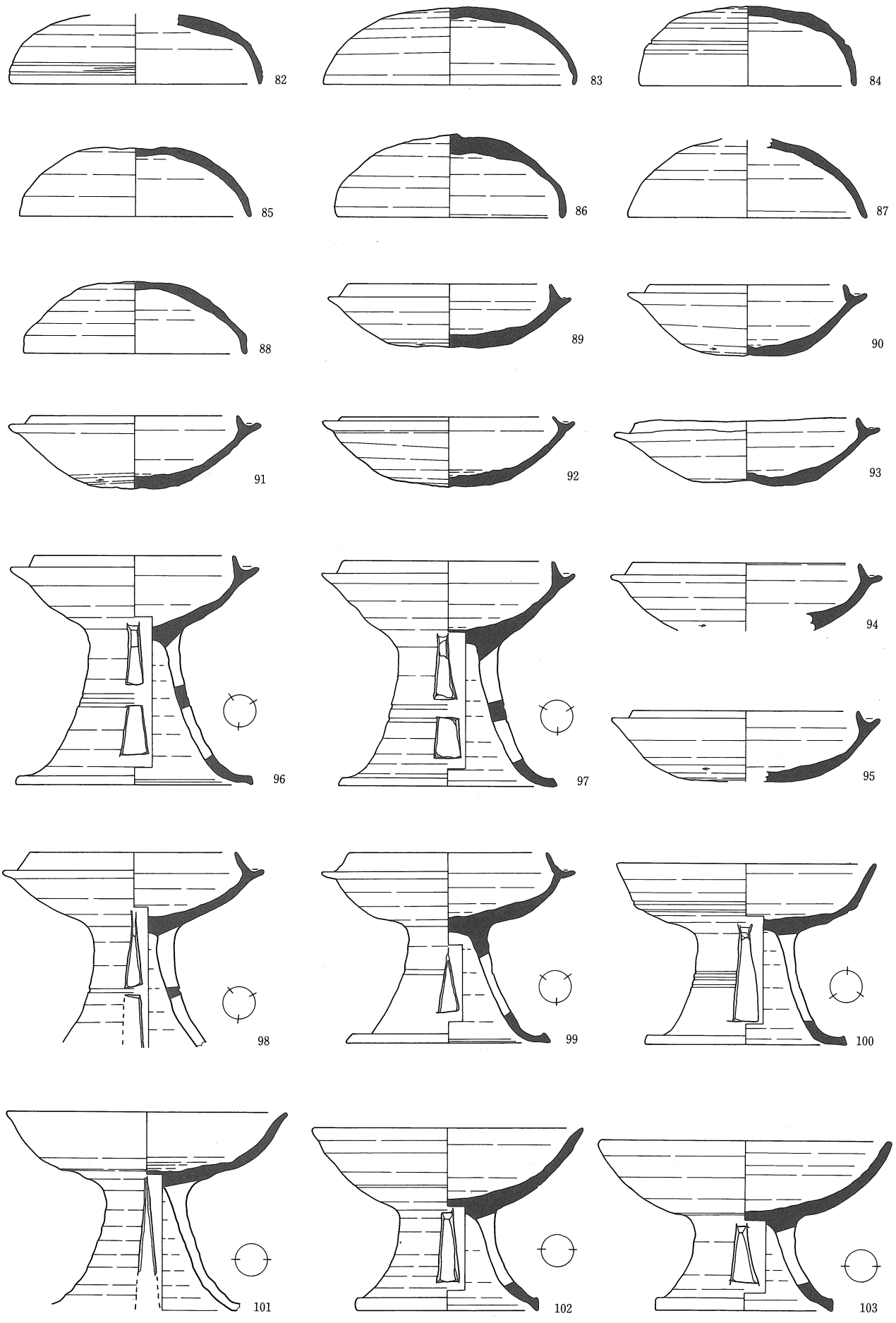
第59図　ＳＩ－10出土遺物実測図

模のピットである。ピット間距離は約２ｍを測る。西側が流失しているため、他のピットを確認できないが、ＳＩ－10はＰ１、２を柱穴とする４本柱の住居跡と推測される。

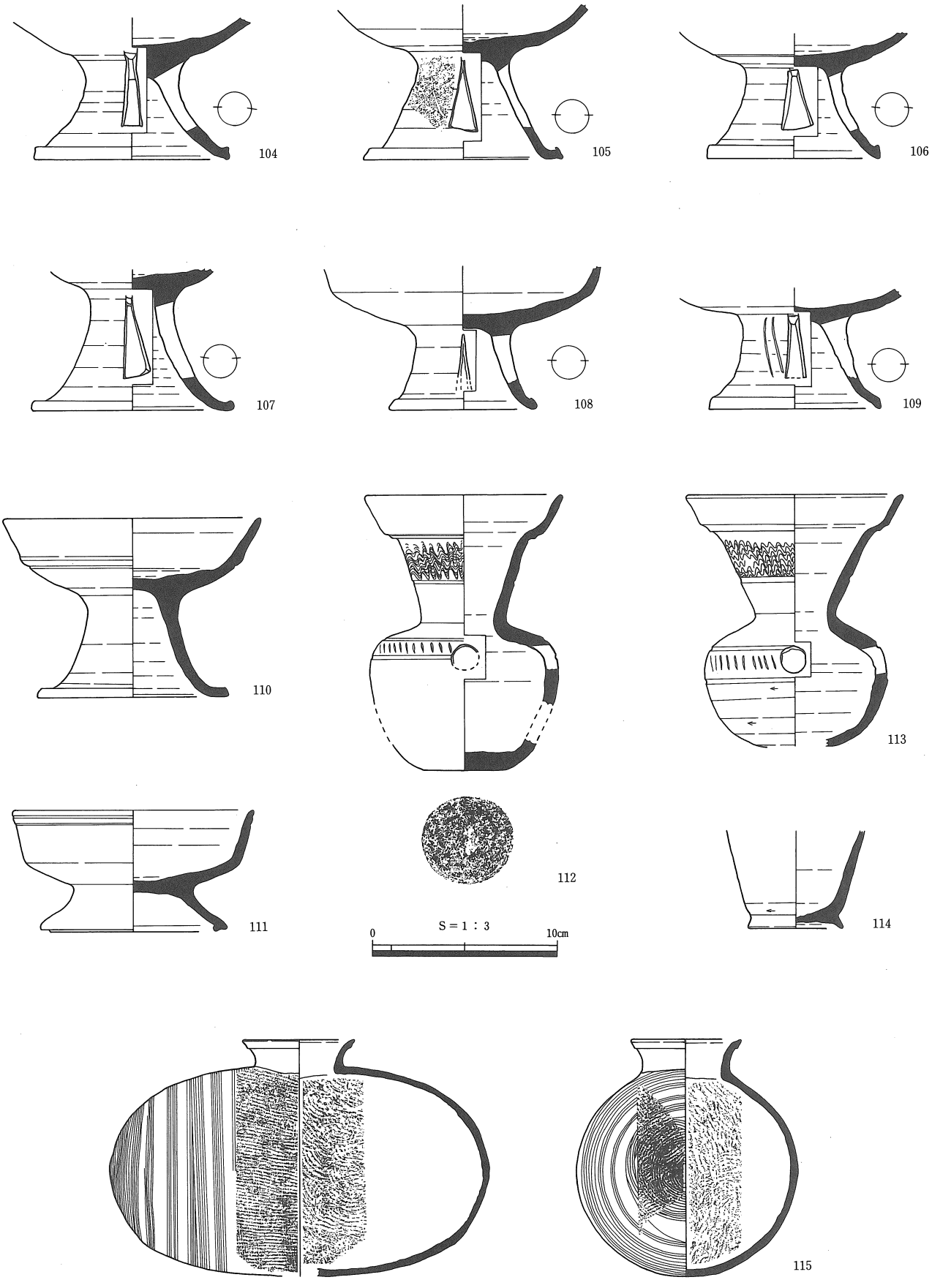
遺物は、須恵器の高坏、甕、土師器の甕が出土した。78は高坏の脚部である。溝３上にやや浮いた状態で出土した。梯形の透かしを施している。79は須恵器の甕の破片である。溝３底面上にやや浮いた状態で出土した。内面には同心円タタキが見られる。80、81は土師器の甕の口縁部である。ともに北側床面直上に出土した。外反する口縁部である。遺物の時期については、78が陰田編年６式（７世紀前葉）相当と考えるが、溝３の埋土中出土であり、遺構の直接的な時期を示すものとは言い難い。

ＳＩ－10は、位置関係から見て、ＳＩ－７廃棄後に新たに上部に構築された住居跡と考える。両住居の出土遺物にも時期的な矛盾はない。

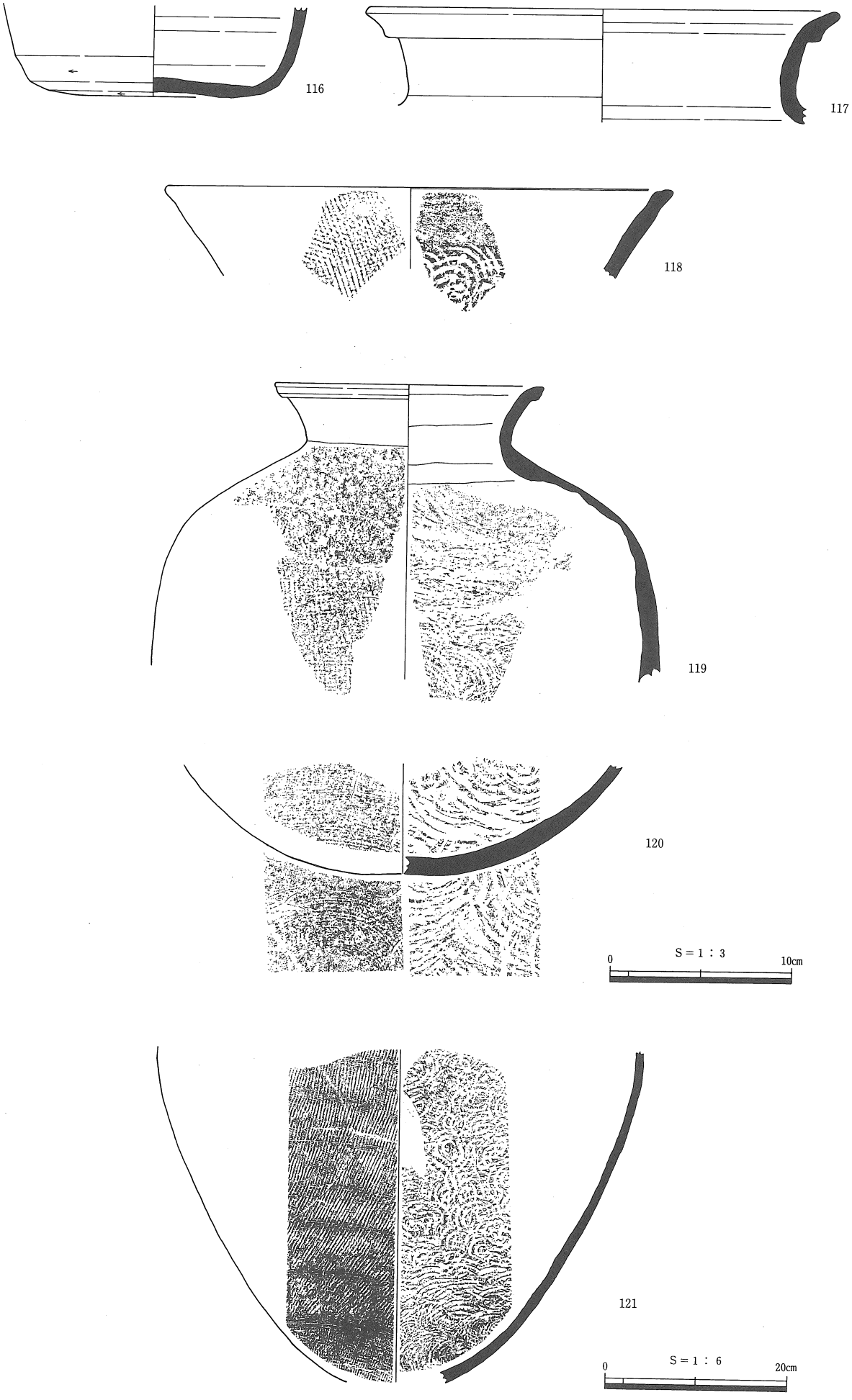
ＳＩ－11（第54～56、60～65図・写真図版15、74、75）は、標高約17.3ｍに位置し、Ａ区北側の丘陵斜面裾部に構築された竪穴住居跡である。残存壁高は、Ｉ－Ｉ'ラインで約1.2ｍを測る。壁面裾部には幅約20cm、深さ約5cmの側溝（溝１）と、床面には同規模の側溝（溝２）を検出した。ＳＩ－８より新しい住居跡である。ＳＩ－



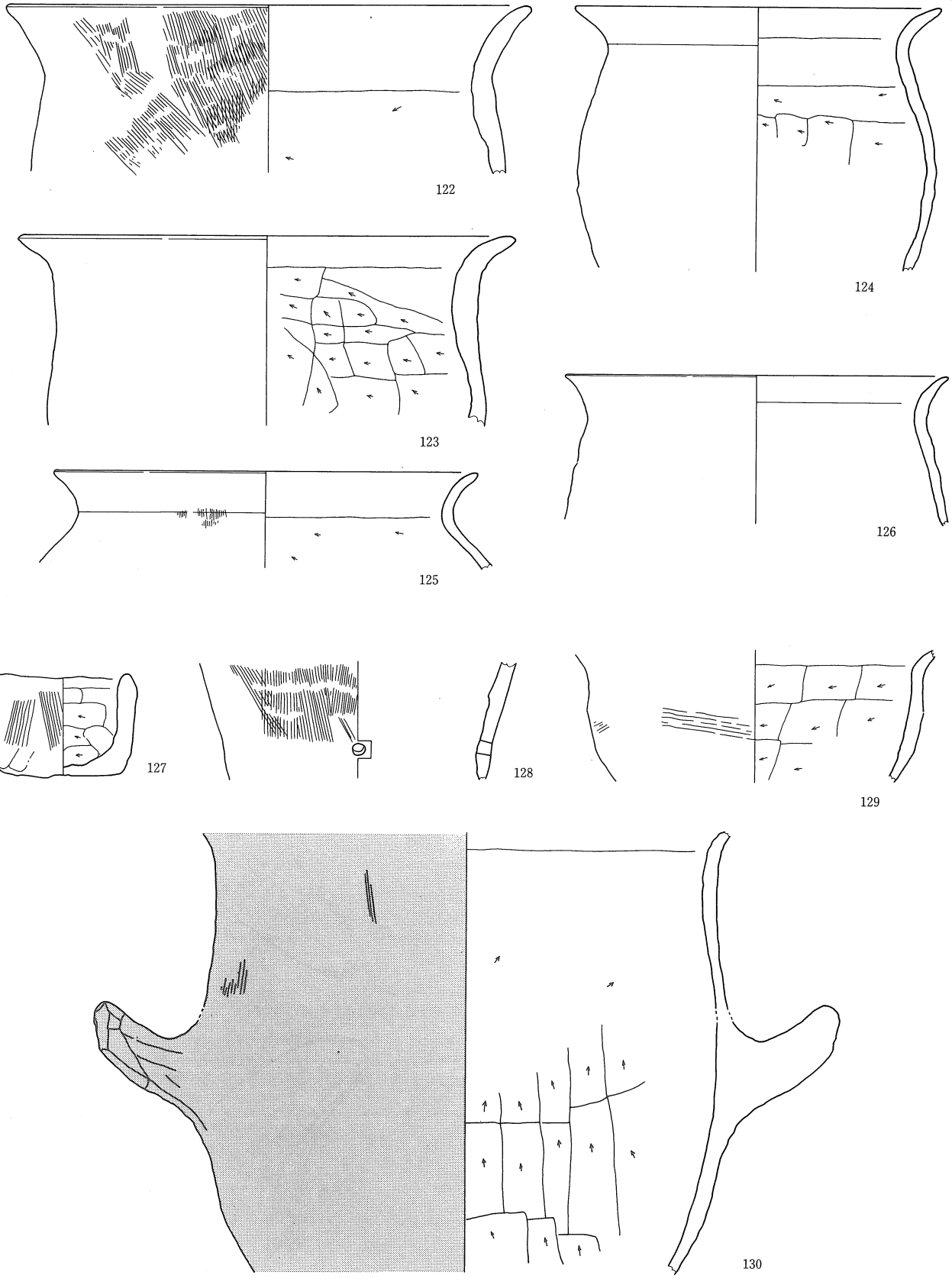
第60図　ＳＩ―11出土遺物実測図(1)



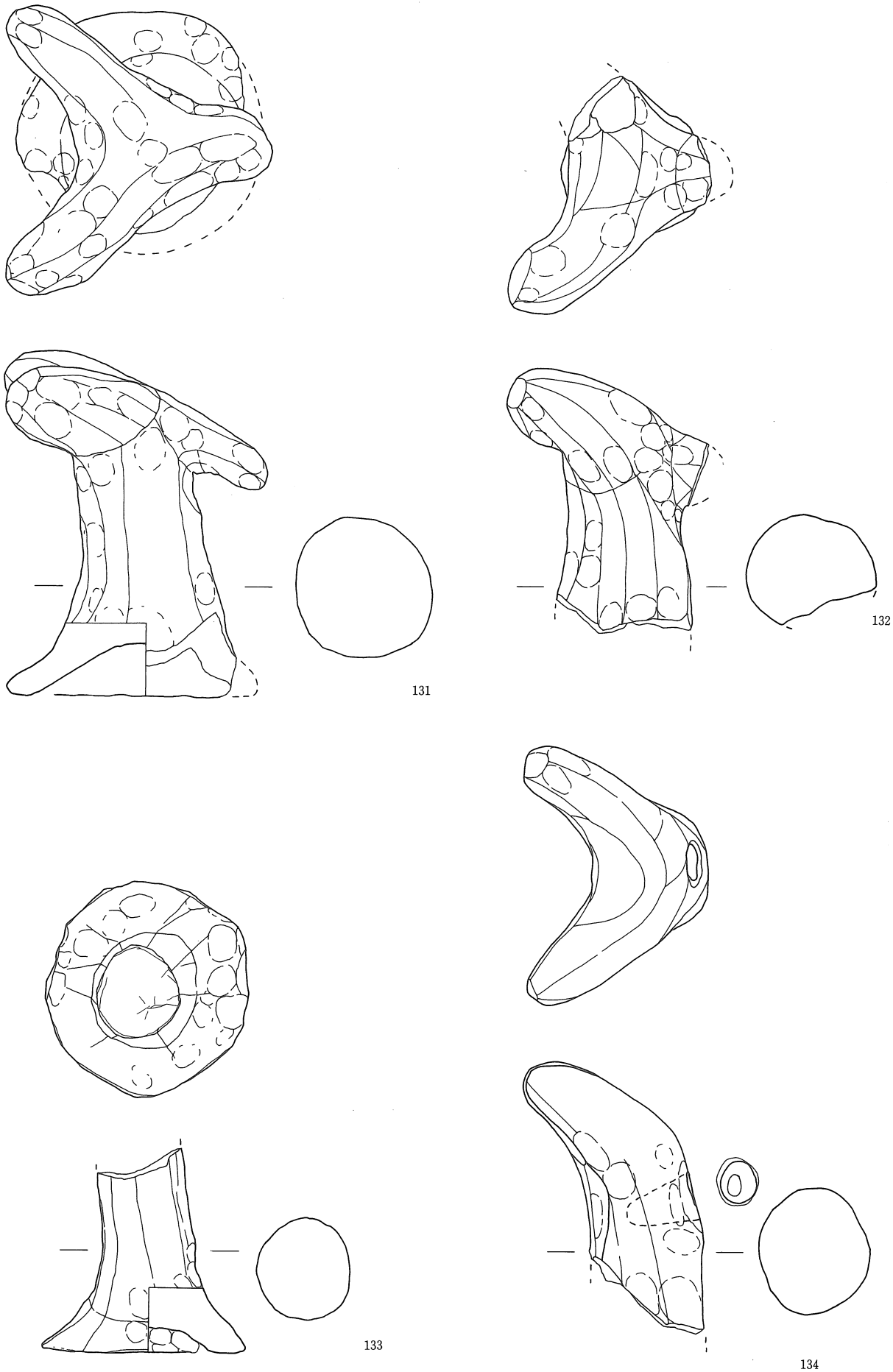
第61図　ＳＩ－11出土遺物実測図(2)



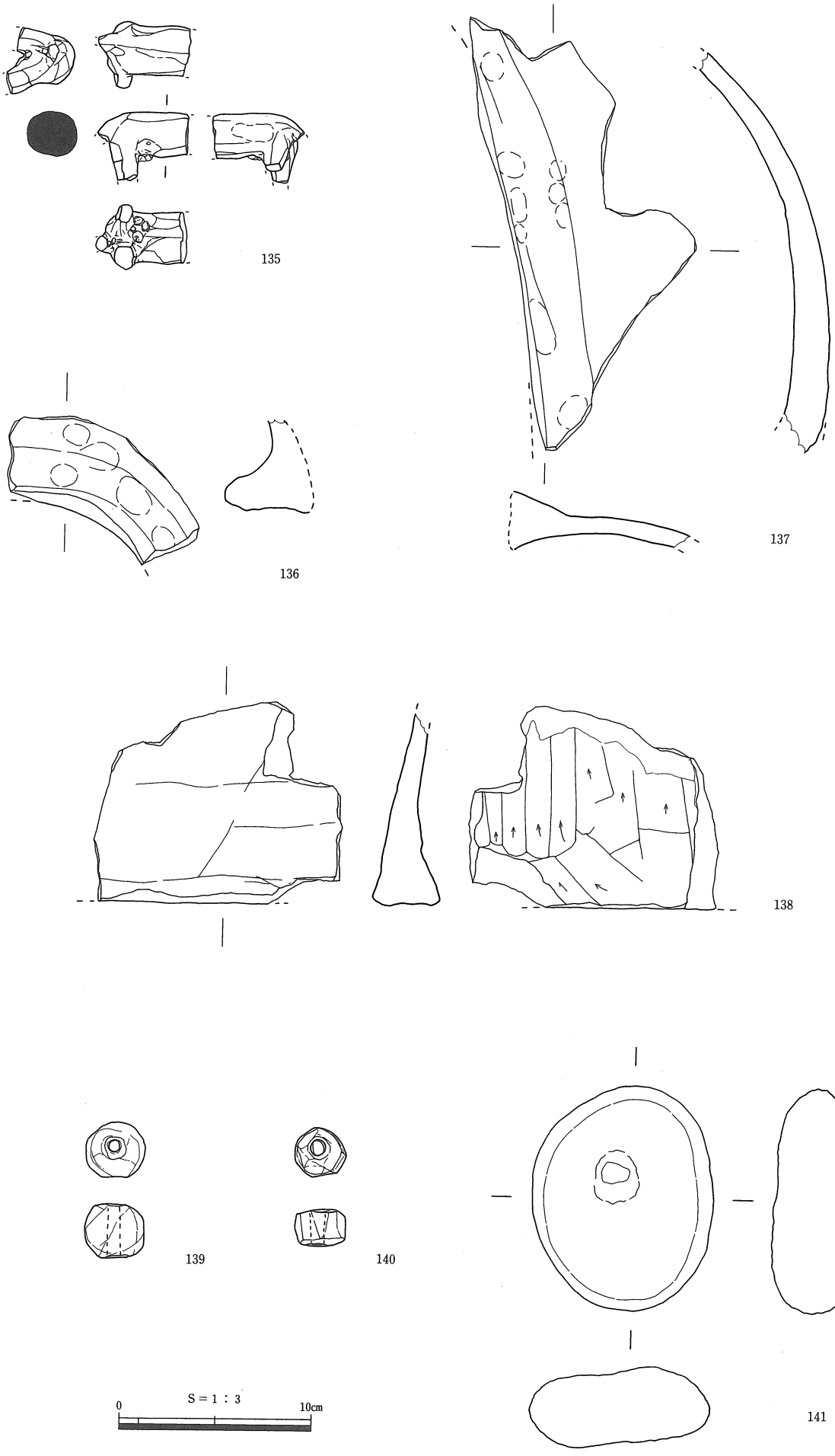
第62図　ＳＩ―11出土遺物実測図(3)



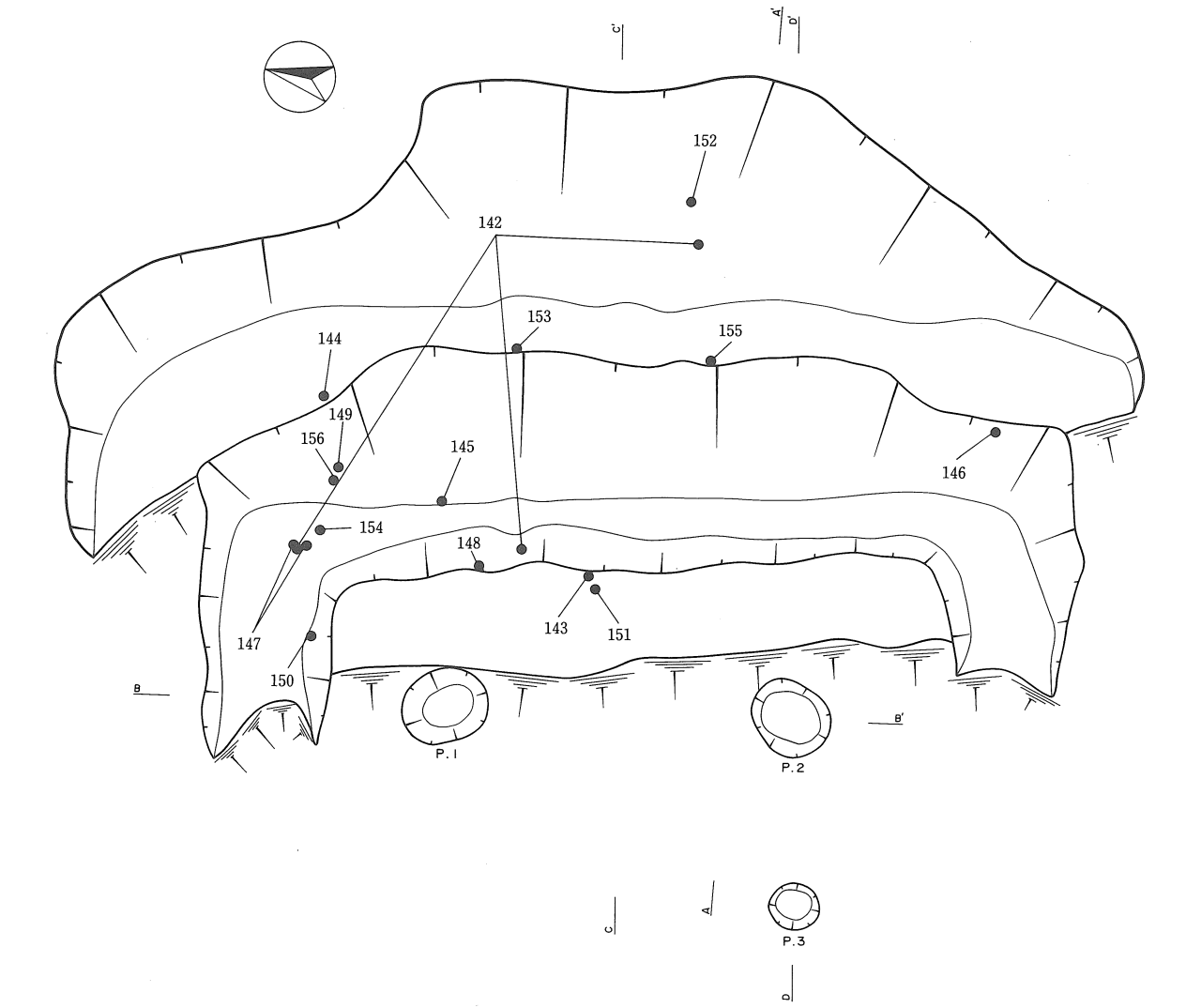
第63図　ＳＩ－11出土遺物実測図(4)

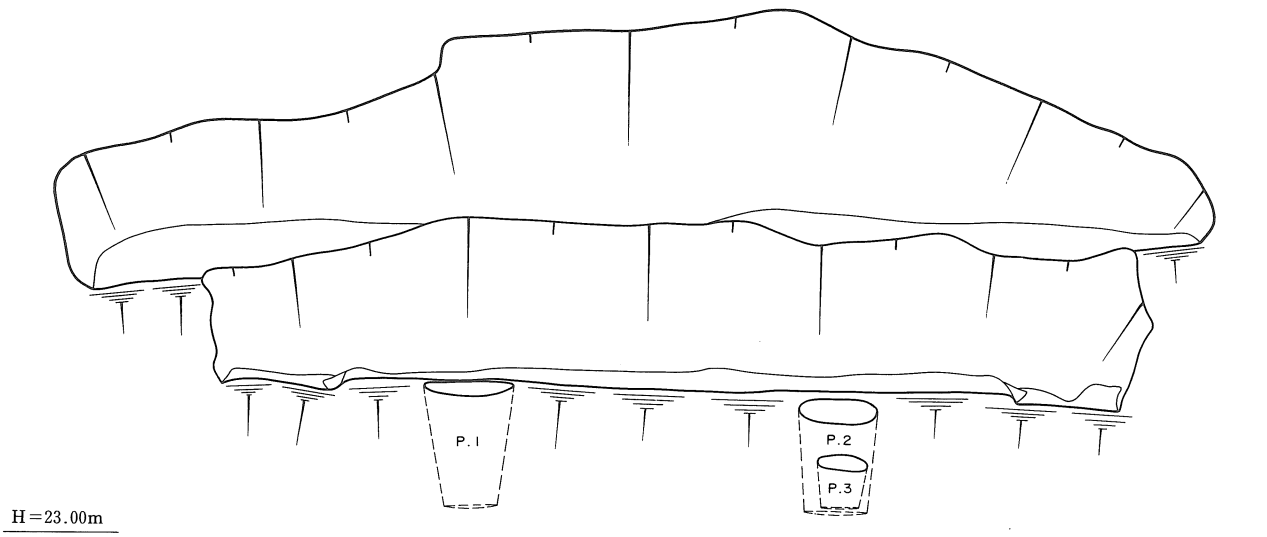


第64図　ＳＩ―11出土遺物実測図(5)



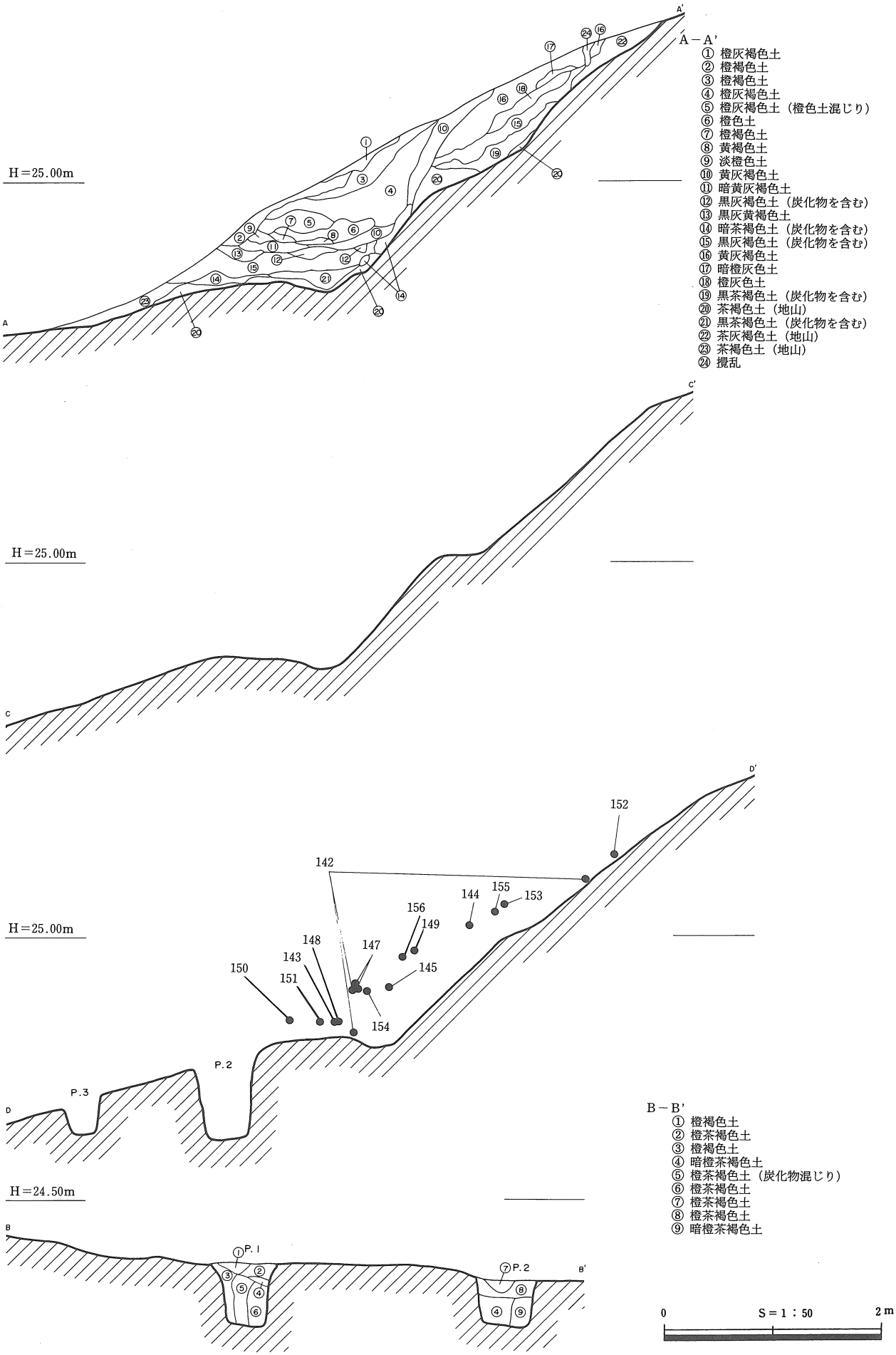
第65図　ＳＩ―11出土遺物実測図(6)



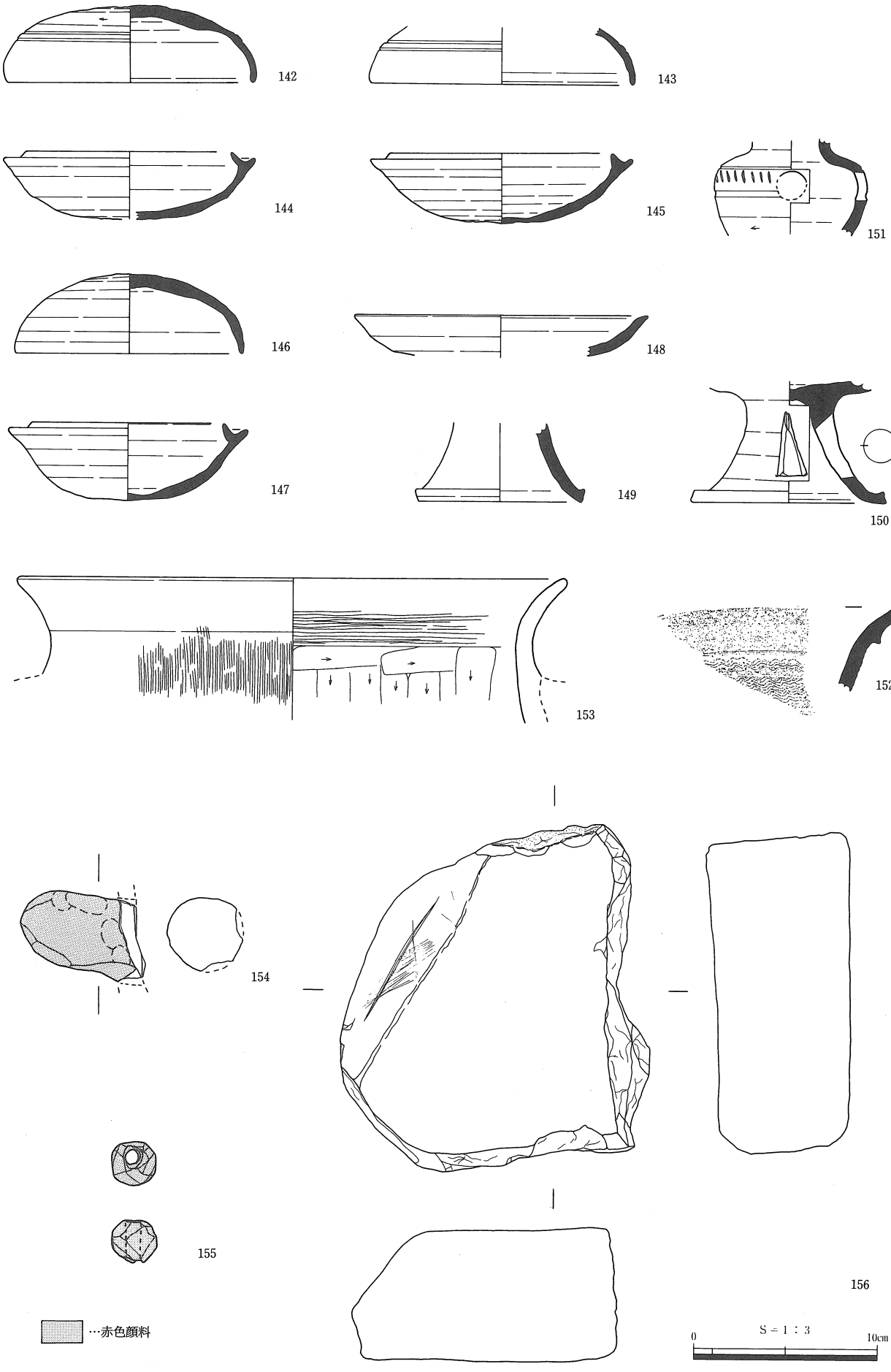


0 S=1:50 4m

第66図　ＳＩ－12実測図

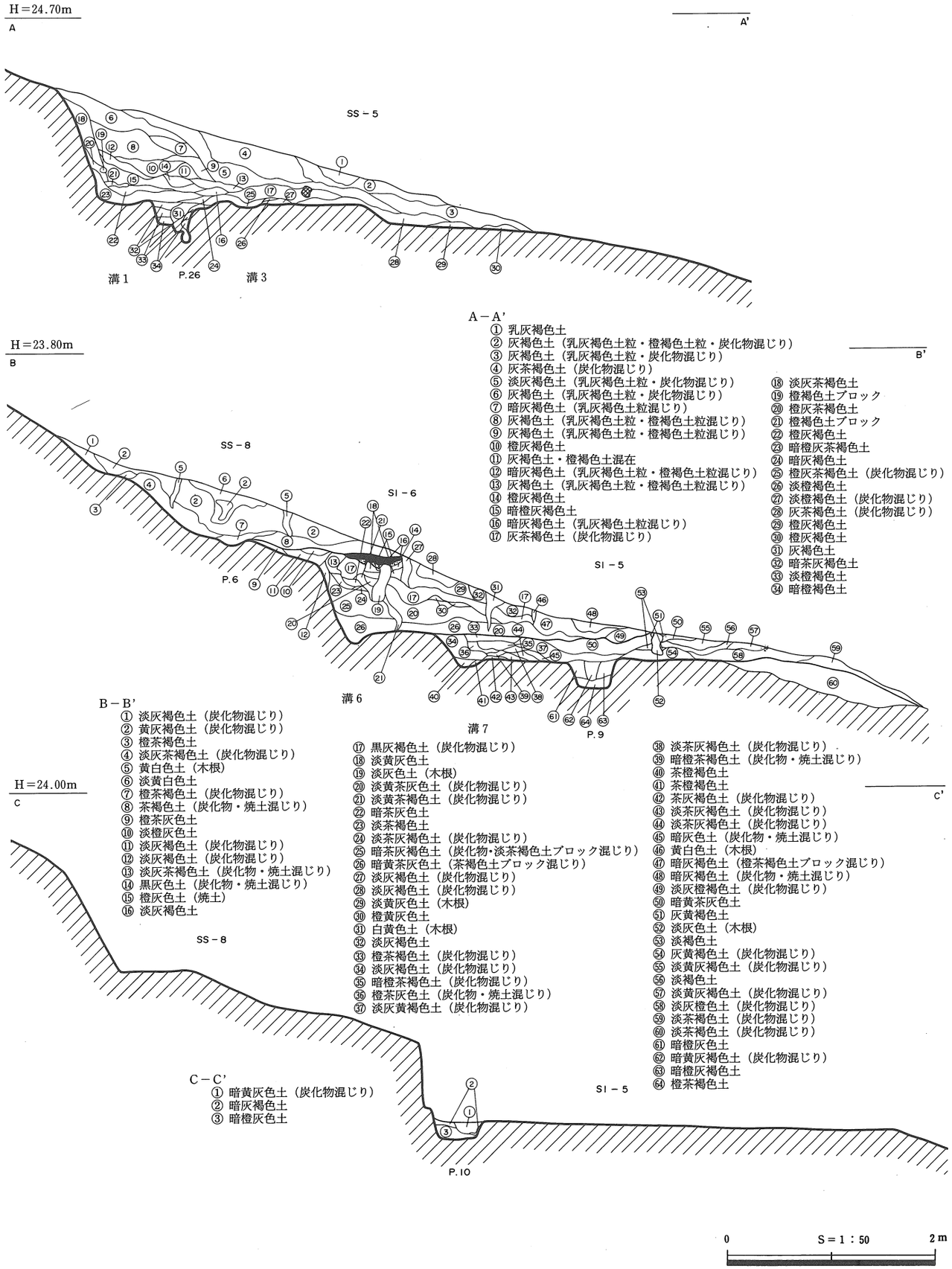


第67図　ＳＩ－12断面実測図

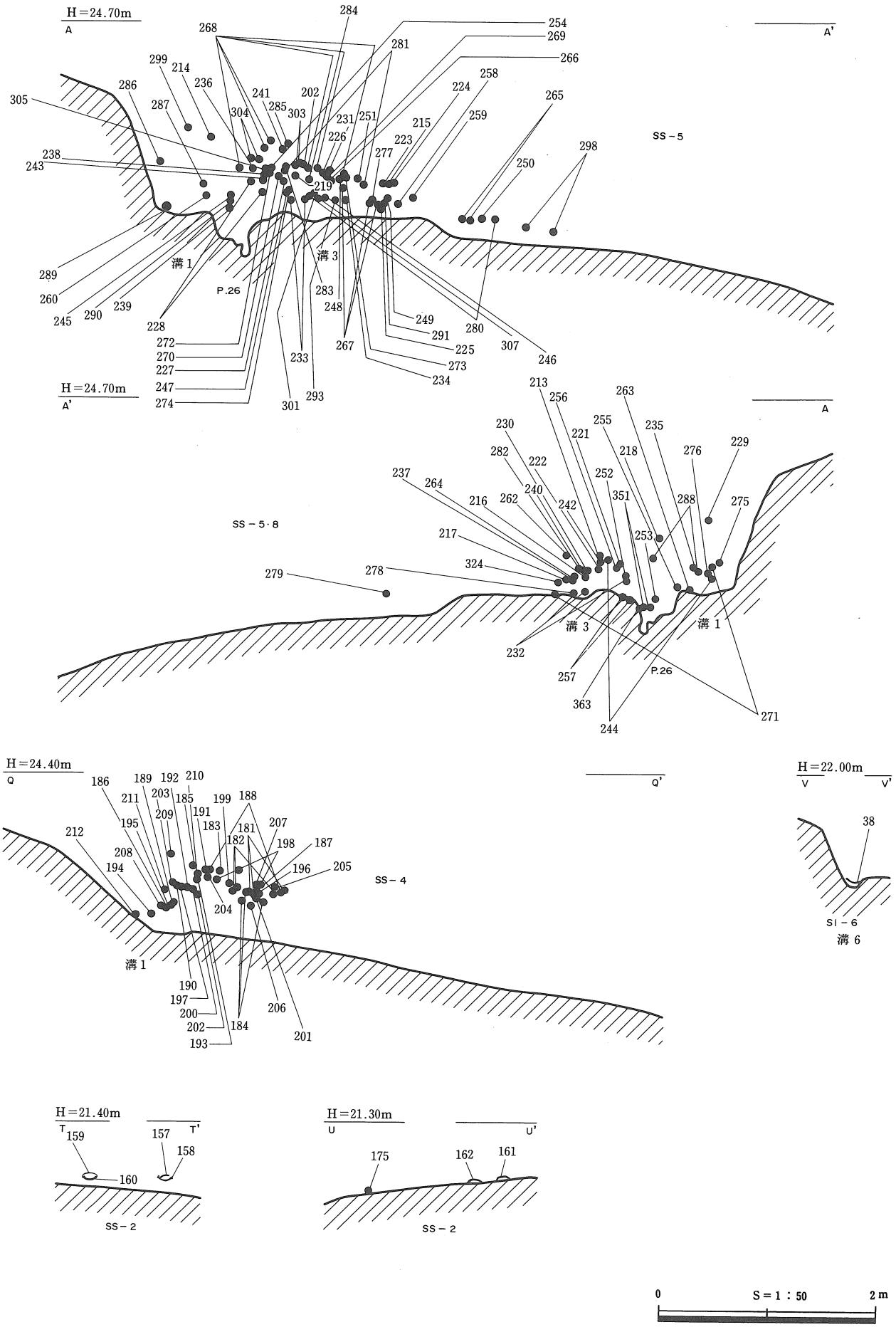


第68図　ＳＩ―12出土遺物実測図

第69図　ＳＩ－５、６、ＳＳ－２、４、５、８実測図



第70図　ＳＳ－５、８、ＳＩ－５、６断面実測図



第71図　ＳＩ－６、ＳＳ－２、４、５、８断面実測図

11は、まず溝２を側溝とする住居（①）を構築し、後に壁面を掘削して拡張し、溝１を側溝とする住居（②）を構築したものと推測される。平面プランはともに方形であり、その１辺は、①が推定約４ｍ、②が約７ｍを測る。Ｆ－Ｆ'土層断面からは、貼り床を施した形跡が窺える。

床面から検出したピットの配置状況から、Ｐ．７～10を柱穴とする４本柱の住居の存在が推測される。Ｐ．７、８は、直径約40cm、深さ40～50cmを測り、Ｐ．９、10は、直径約30cm、深さ約10cmを測る。Ｐ．９、10の上部は流失しており、本来はＰ．７、８とほぼ同規模のピットであったと推測される。Ｐ．７～10のピット間距離は、南北軸で約1.8m、東西軸で2.2～2.4mを測る。

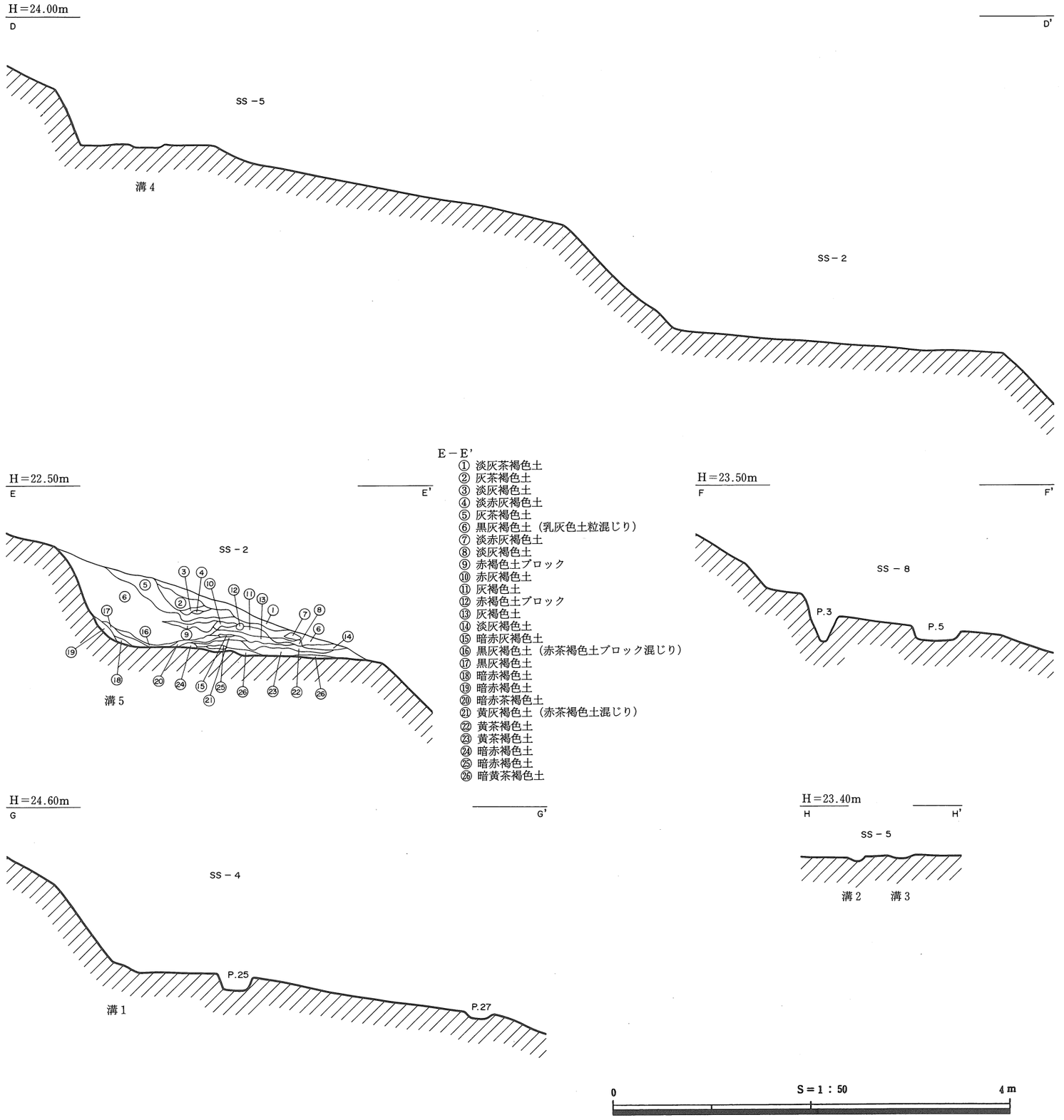
遺物は、須恵器、土師器、土製品、石製品、鉄滓類が出土している。82～121、135は須恵器である。82～88は坏蓋である。85～95は坏身である。立ち上がりはいずれも内傾する。受部は基本的にやや上方にのびる。96～99は有蓋高坏である。96～98は長脚２段透かしである。100～103、110、111は無蓋高坏である。基本的に三角形や梯形の透かしを施す。105、109外面にはヘラ記号が見られる。110は透かしをもたない高坏である。111は低脚の高坏である。112、113は須恵器の甕である。ともに口頸部に波状文を、肩部に連続刺突文を施している。112は平底の底部であり、ヘラ切りが観察される。113は丸底である。114は壺か。115は横瓶である。116は壺の底部である。117、119～121は須恵器の甕である。118は器台の受部か。内外面にタタキが施され、口縁端部は面取りされている。122～130は土師器である。122～126は甕である。127はコップ状の小形椀である。129は鉢である。128、130は甑である。130表面には赤色顔料が塗布されている。131～134は支脚である。131、132は３支、134は２支で、134は有孔部をもつ。135は須恵質の土馬の胴部片である。腹部に土粒の貼付が見られ、性別を表現したものと思われるが、雌雄は判然としない。136～138は竈である。139、140は土錘である。141は敲石である。石材は大山起源角閃石石英安山岩質火砕岩である。その他、含鉄鉄滓または鉄塊系遺物と思われるもの85ｇ分、椀形鍛冶滓36.4ｇ分が出土した（註13）。遺物はすべて床面から浮いた状態で出土しており、上方からの流入物と考える。遺物の出土レベルから、遺構への流入時期はほぼ２段階に区分でき、94～100、108、113、122～124、140は下段レベルから出土しており、初期の流入遺物と考える。遺構の時期を直接的に示すものは見られないが、これらの遺物は陰田編年５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に相当する。

ＳＩ－12（第66～68図、写真図版15）は、標高約24mに位置し、Ａ区東側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺約5.5mを測る方形の竪穴住居跡である。南西側は流失している。残存壁高は、北東壁で約１ｍを測る。壁面裾部には幅30～90cm、深さ約10cmの側溝を鍛状に検出した。また、壁面上部には長さ約7.5m、幅50～70cmの平坦部を検出した。ＳＩ－12に伴う施設と考える。この平坦面の残存壁高は、北東壁で最大1.3mを測る。

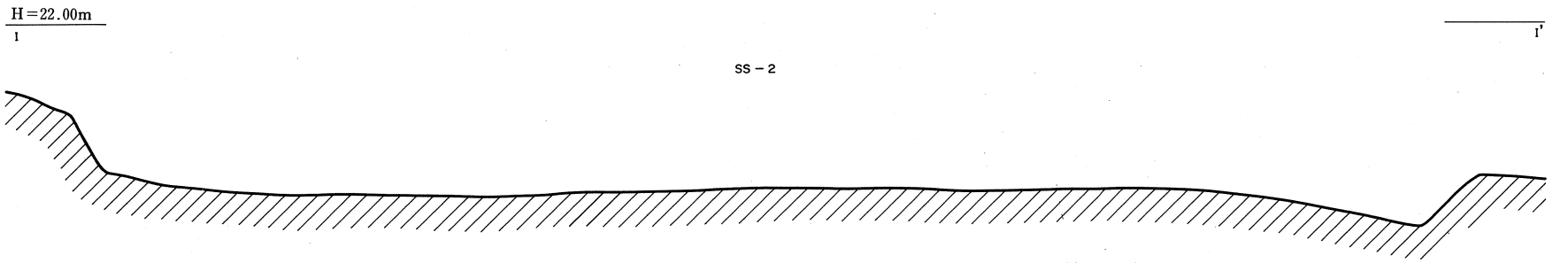
床面には、３基のピット（Ｐ．１～３）を検出した。Ｐ．１は直径約60cm、深さ約60cmを測り、Ｐ．２は直径約50cm、深さ約50cmを測る。Ｐ．２は上部をやや流失しており、本来的にはＰ．１と同規模の深さを有するピットと考える。ピット間距離は約２ｍを測る。Ｐ．３は直径約30cm、深さ約40cmを測るが、上部を流失で欠き、本来的にはＰ．１、２と同規模の深さを有すると考える。ピットの配置状況から、ＳＩ－12は、Ｐ．１、２を主柱穴とし、Ｐ．３を補助柱穴とする４本柱の住居跡と推測される。

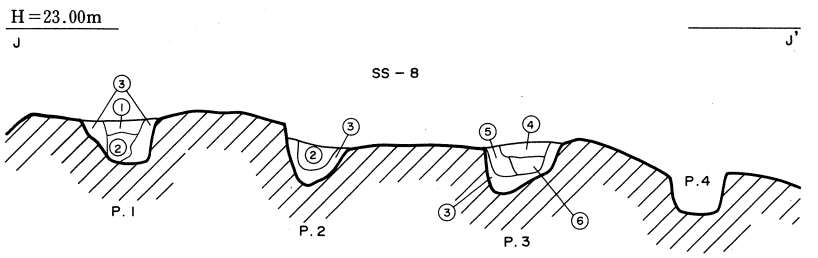
遺物は、須恵器、土師器、土製品、石製品が出土した。142～152は須恵器である。142、143、146は坏蓋である。142、143は口縁部と天井部の間に段を設けているが、稜の突出は鈍い。144、145、147は坏身である。ともに立ち上がりは内傾して短く、受部はやや上方にのびる。148は皿、あるいは高坏の坏部である。149、150は高坏脚部である。150は透かしを２方に施している。151は甑である。152は甕の口縁部である。頸部外面には波状文を施している。153は土師器の甕の口縁部である。口縁部内面にはハケメが見られる。剝離痕があり、把手をもつと推測される。154は支脚であり、155は土錘である。154、155ともに表面には赤色顔料が塗布されている。156は角閃石花崗岩製の砥石である。遺物はどれも浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と推測される。遺構の時期を直接的に示すものは見られないが、これらの遺物は、陰田編年６式（７世紀前葉）に比定される。

ＳＩ－13（第49図・写真図版14）は、標高21.5～22mに位置し、Ａ区東側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺約３ｍを測る方形の竪穴住居跡である。西側から南側にかけて流失している。北西にはＳＩ－７が、北にはＳ

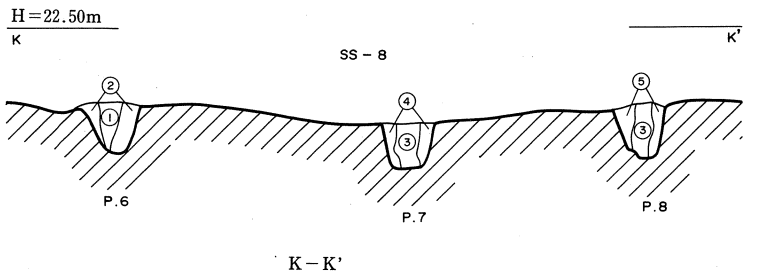


第72図　ＳＳ－２、４、５、８断面実測図

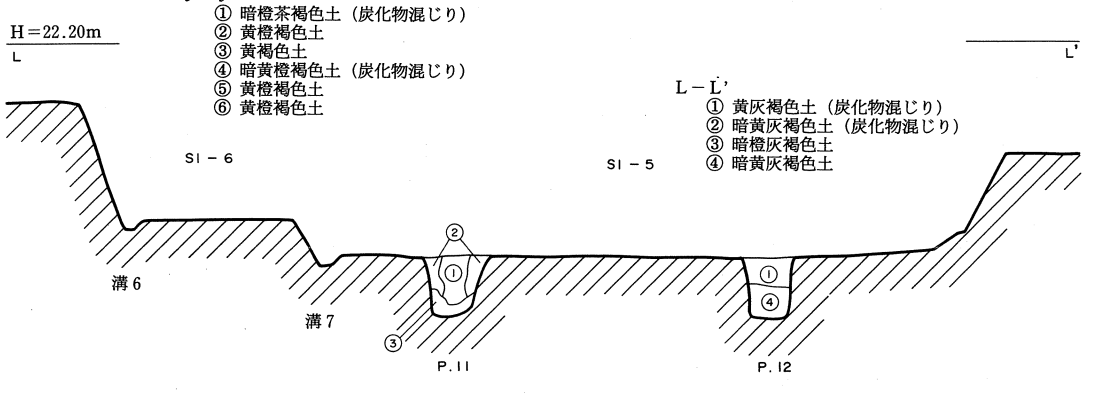




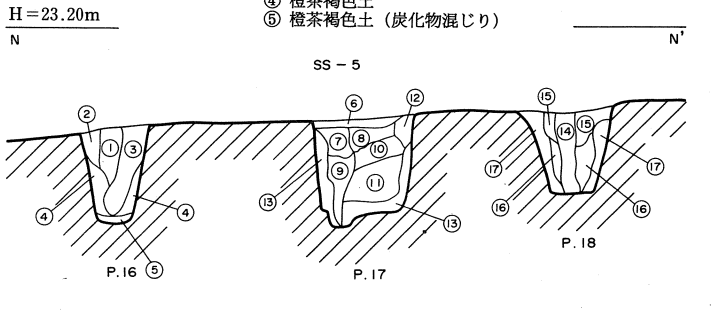
J－J'
① 暗橙茶褐色土（炭化物混じり）
② 黄橙褐色土
③ 黄褐色土
④ 暗黄橙褐色土（炭化物混じり）
⑤ 黄橙褐色土
⑥ 黄橙褐色土

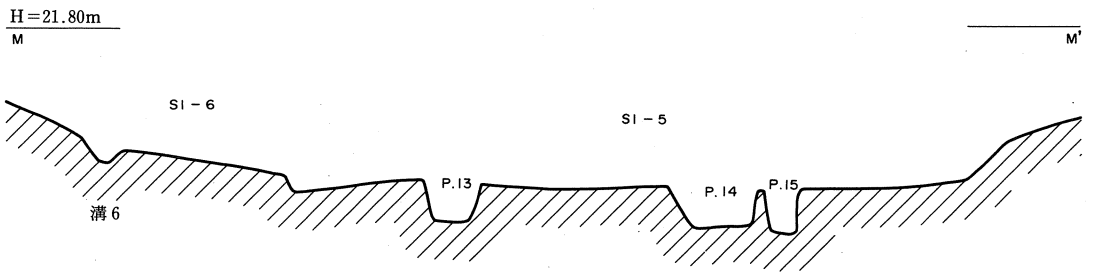


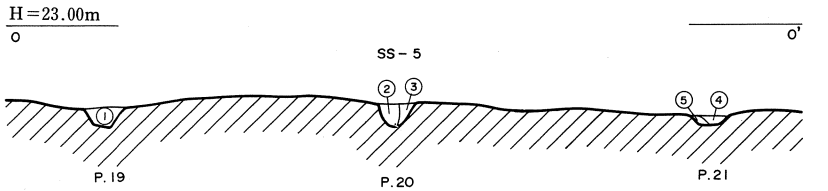
K－K'
① 暗灰褐色土（炭化物混じり）
② 暗橙茶灰褐色土（炭化物混じり）
③ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
④ 橙茶褐色土
⑤ 橙茶褐色土（炭化物混じり）

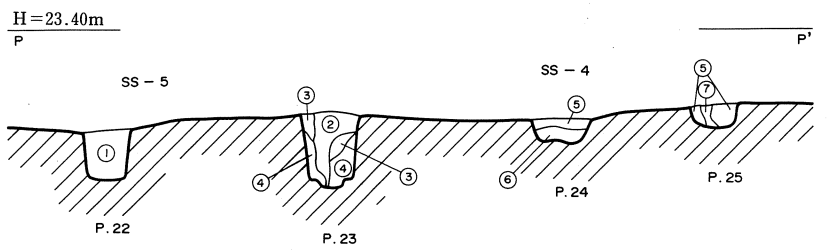


L－L'
① 黄灰褐色土（炭化物混じり）
② 暗黄灰褐色土（炭化物混じり）
③ 暗橙灰褐色土
④ 暗黄灰褐色土





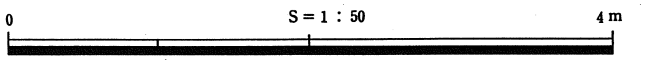




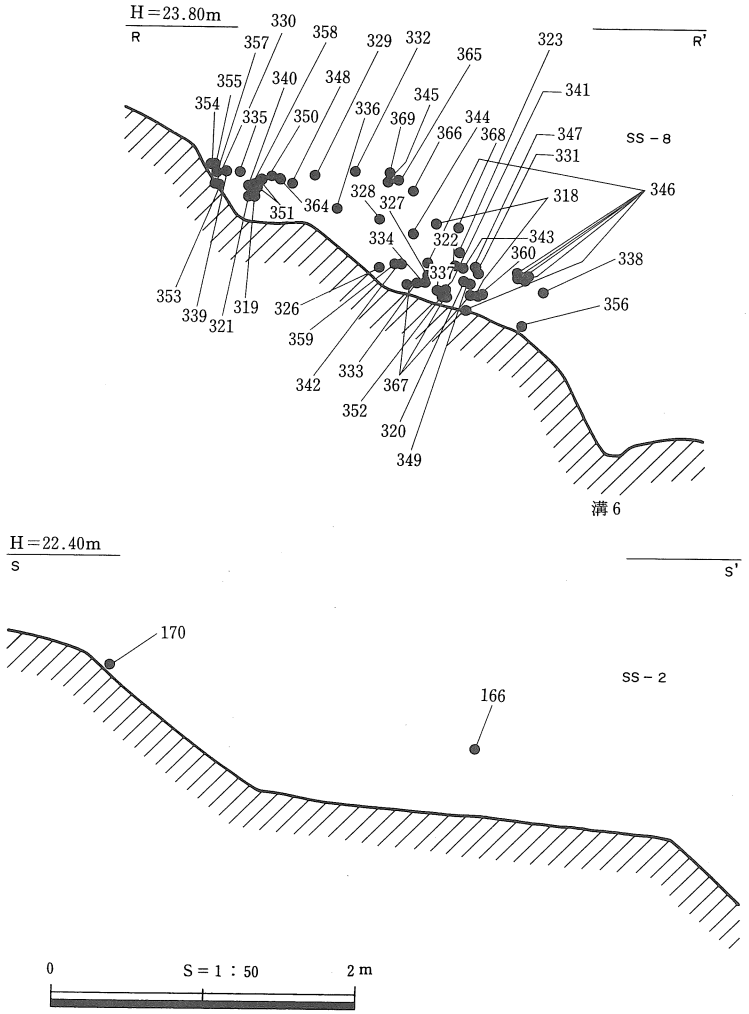
P－P'
① 暗茶褐色土
② 暗灰褐色土（炭化物混じり）
③ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
④ 茶褐色土（炭化物混じり）
⑤ 暗茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑥ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
⑦ 茶褐色土

N－N'
① 茶褐色土
② 茶褐色土
③ 淡橙褐色土
④ 茶褐色土（暗灰褐色土混じり）
⑤ 橙茶褐色土
⑥ 茶褐色土（暗灰褐色土混じり・炭化物混じり）
⑦ 茶褐色土（炭化物混じり）
⑧ 茶褐色土（炭化物混じり）
⑨ 茶褐色土（暗灰褐色土・炭化物混じり）
⑩ 茶褐色土（暗灰褐色土・炭化物混じり）
⑪ 茶褐色土（暗灰褐色土・炭化物混じり）
⑫ 茶橙褐色土
⑬ 淡橙褐色土
⑭ 暗茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑮ 暗茶褐色土（炭化物混じり）
⑯ 暗茶褐色土（炭化物混じり）
⑰ 淡橙褐色土

O－O'
① 茶褐色土
② 暗灰褐色土（炭化物混じり）
③ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
④ 暗茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑤ 暗茶灰褐色土（炭化物混じり）



第73図　ＳＩ－５、６、ＳＳ－２、４、５、８断面実測図



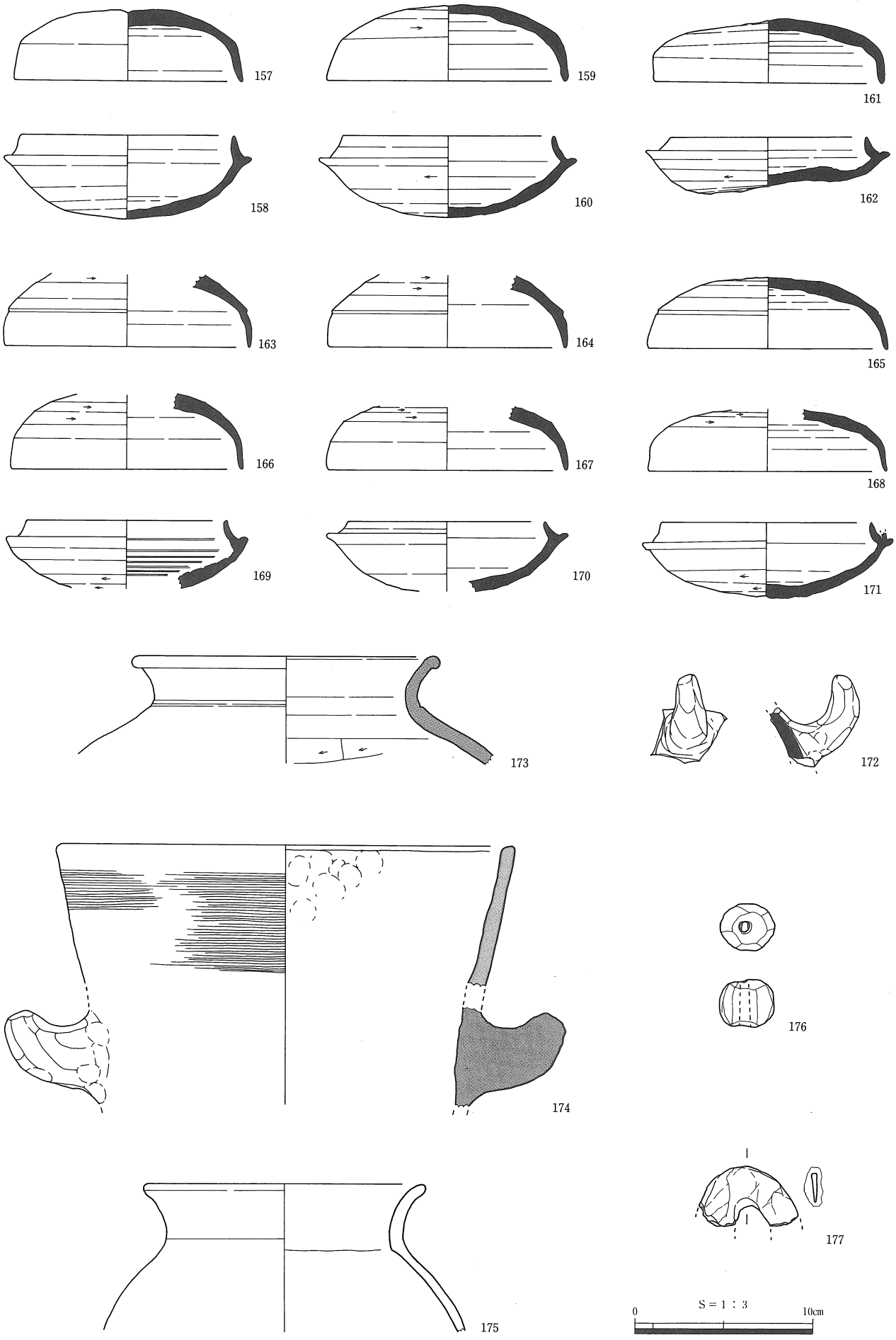
第74図　ＳＳ－２、８断面実測図

Ⅰ－10が隣接する。壁面は北端部で僅かに遺存し、残存壁高は約17cmを測る。壁面裾部には、幅約20cm・40cm、深さ約15cmの側溝（溝５）を検出した。北端部で溝幅は20cmから40cmへと変化する。

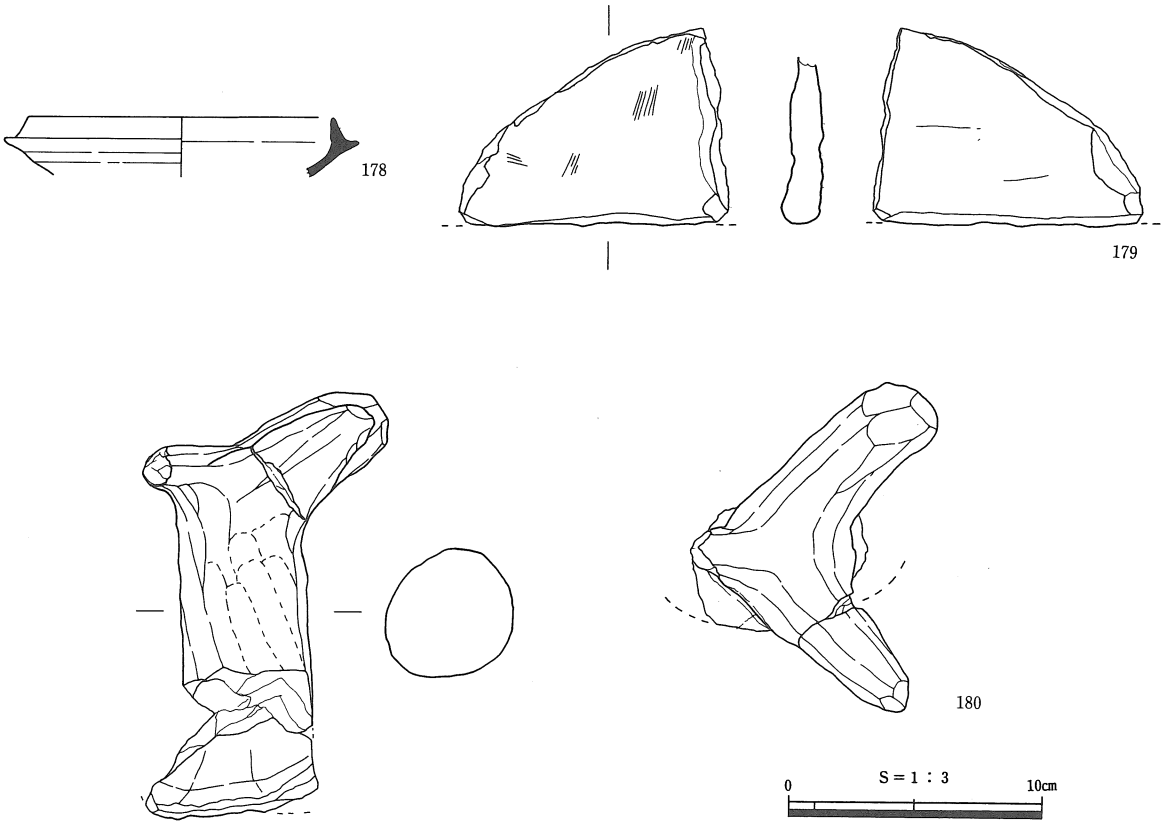
床面には直線上に連続する４基のピット（Ｐ．６～９）を検出した。溝５の形状上、Ｐ．９は住居に伴わないピットと判断する。Ｐ．６～８は、直径20～40cm、深さ10～15cmを測る。ピット間距離は、Ｐ．６、７で約80cm、Ｐ．７とＰ．８で約１ｍを測る。床面の大半が流失していることから住居の構造を把握しかねるが、ピットの配置状況から、Ｐ．６、８を主柱穴とし、Ｐ．７を補助柱穴とする４本柱の住居の存在が推測される。遺物は出土していない。

・テラス状遺構

テラス状遺構としてＳＳ－２～24の23基を検出した。基本的に、斜面を直立気味に掘削して断面Ｌ字状の平坦面を構築した遺構である。床面には数基のピットを穿ち、壁面裾部には側溝を設けているものもある。ＳＳ－２～19はＡ区丘陵斜面部に検出した。標高約17～17.5mに１基（ＳＳ－３）、標高21～24.5mに６基（ＳＳ－２、４、５、８、14、18）、標高25.5～27mに５基（ＳＳ－６、７、13、17、19）、標高27.5～29.5mに２基（ＳＳ－15、16）、標高29.5～32.5mに４基（ＳＳ－９～12）と、一定の標高ごとに数基の遺構が隣接している。ＳＳ－20～24はＢ区丘陵南斜面に検出した。ともに標高27～29.5mに位置する。



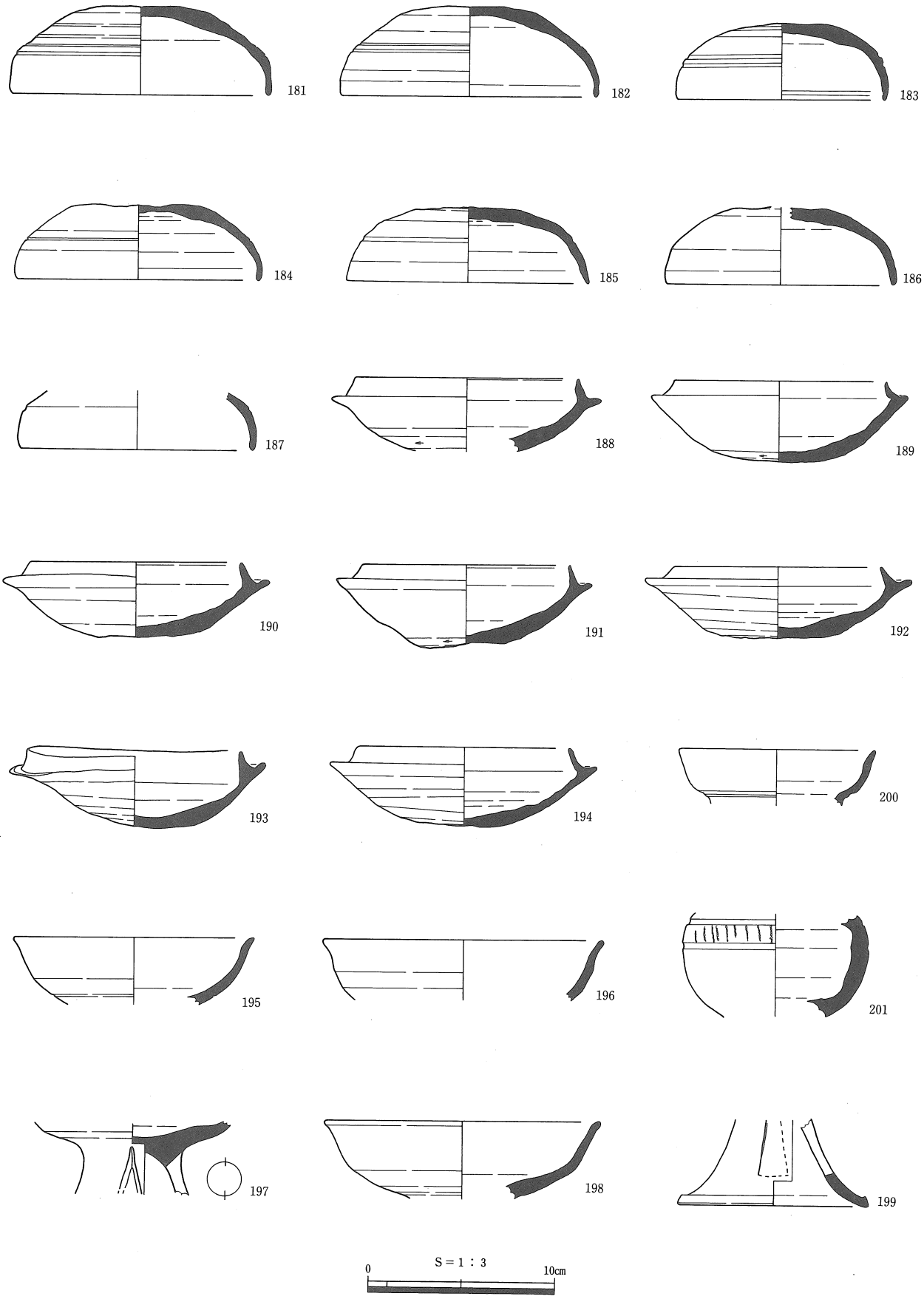
第75図　ＳＳ－２出土遺物実測図



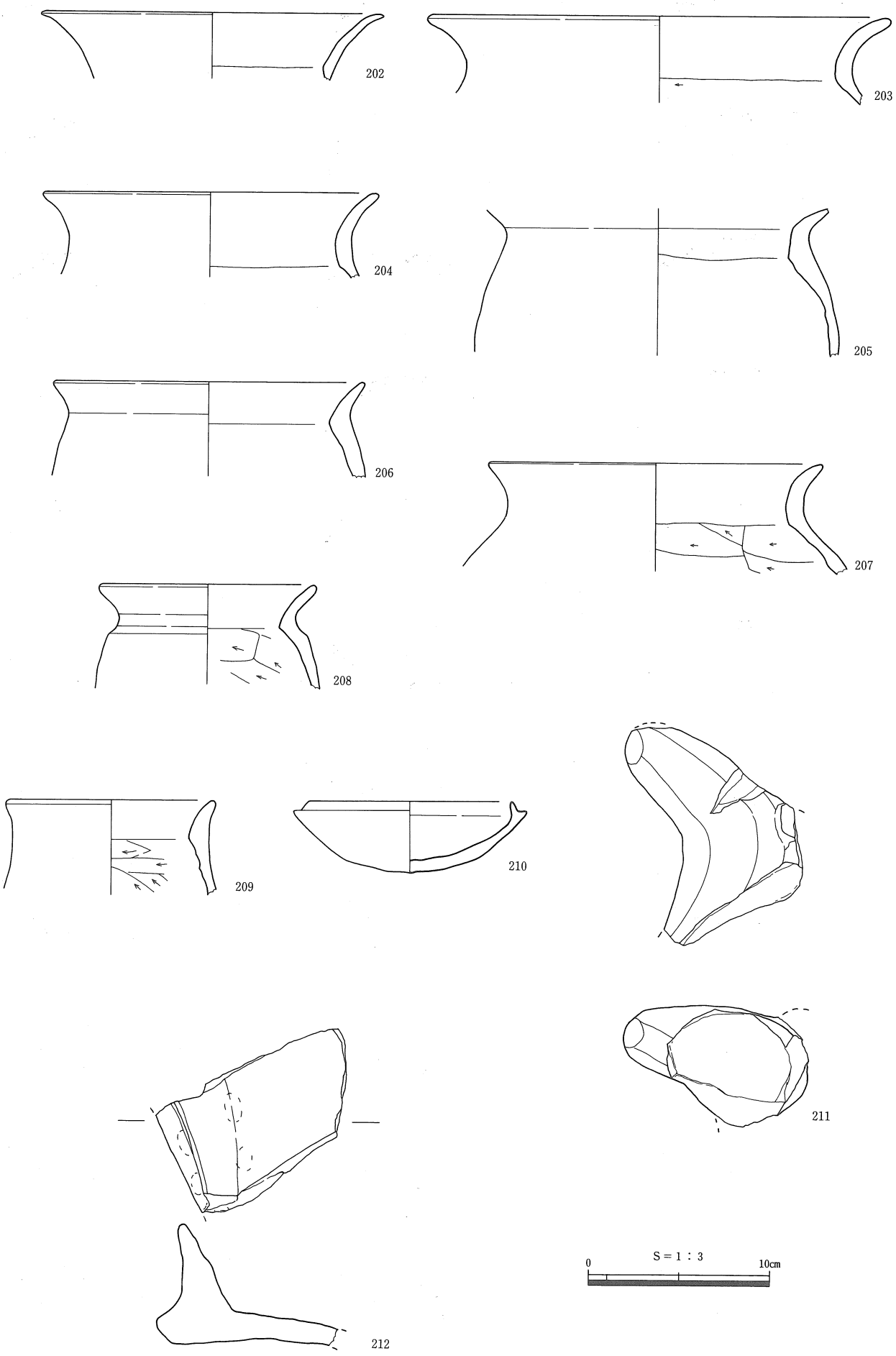
第76図　ＳＳ－３出土遺物実測図

古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡

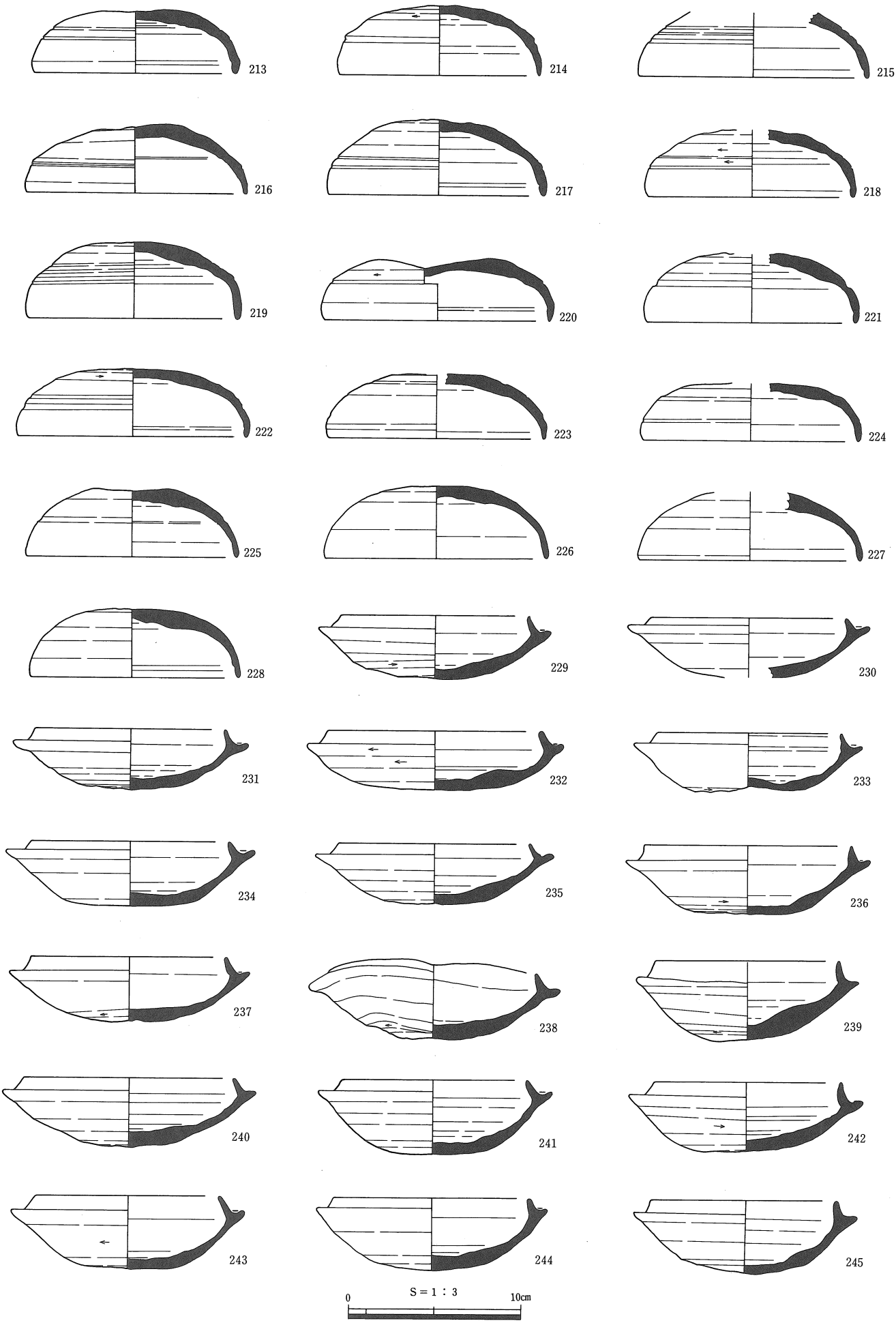
遺構名	規　模	平面プラン	主柱穴	出土遺物	備　考
ＳＩ－７	１辺約４ｍ	方形	４本	須恵器、土師器	ＳＩ－10より古い
ＳＩ－８	？	方形	？	土師器	ＳＩ－11より古い
ＳＩ－９	１辺約4.5m	方形	４本	須恵器	
ＳＩ－10	１辺約4.5m	方形	４本	須恵器、土師器	ＳＩ－７より新しい
ＳＩ－11①	１辺約４ｍ	方形	４本	須恵器、土師器 土製品、石製品 土馬、鉄滓	拡張建替 ＳＩ－８より新しい
ＳＩ－11②	１辺約７ｍ	方形			
ＳＩ－12	１辺約5.5m	方形	４本	須恵器、土師器 土製品、石製品	後背に段状部
ＳＩ－13	１辺約３ｍ	方形	４本	なし	



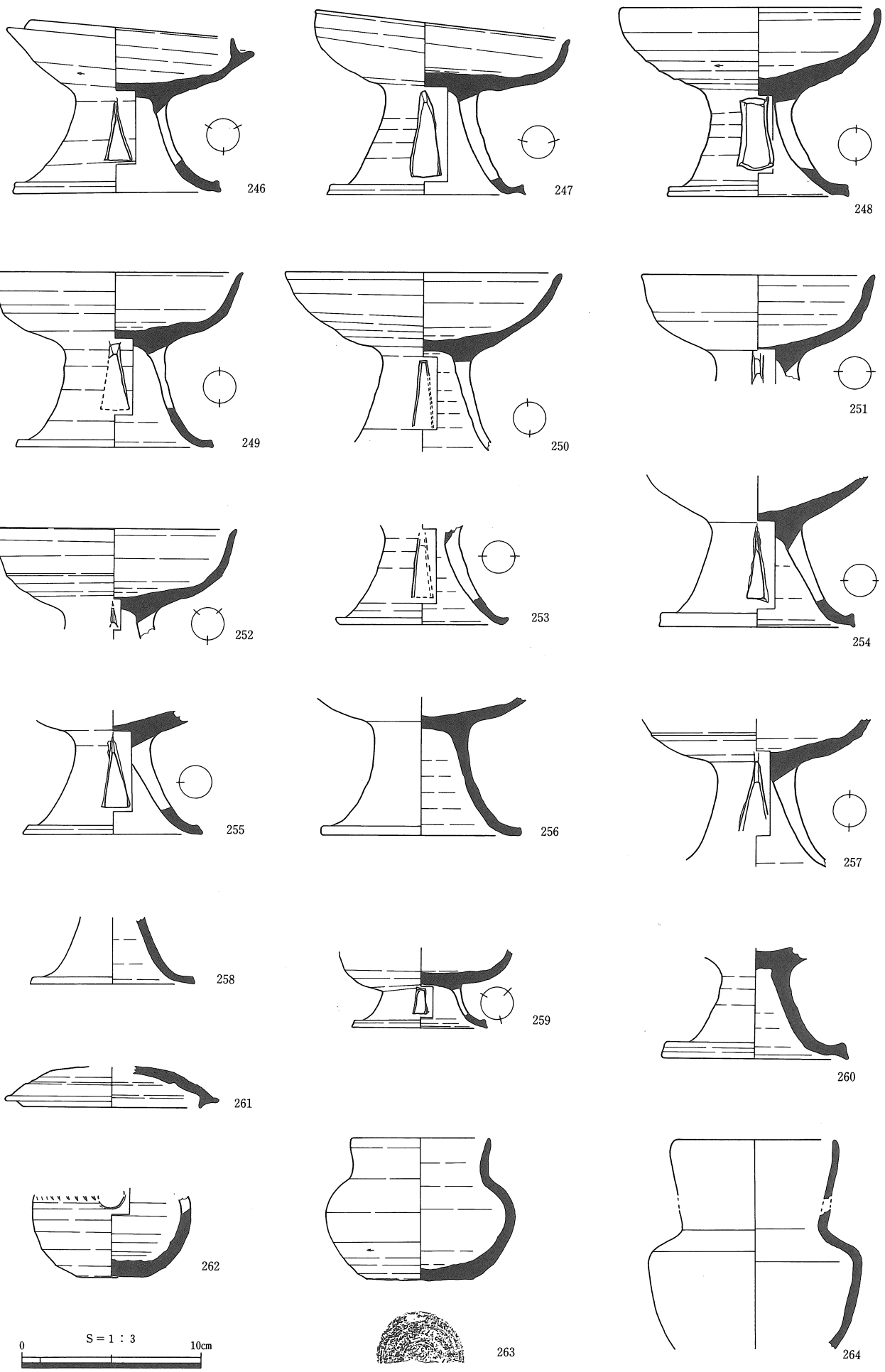
第77図　ＳＳ－４出土遺物実測図(1)



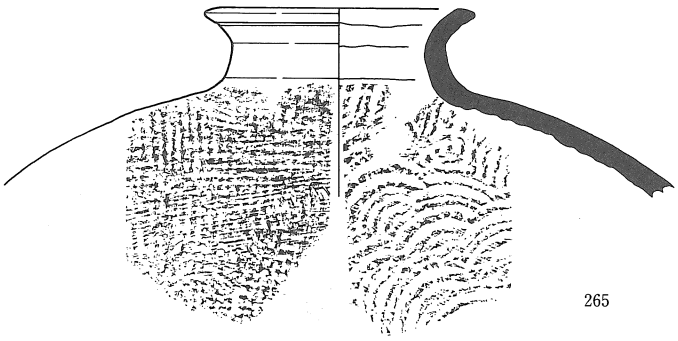
第78図　ＳＳ－４出土遺物実測図(2)

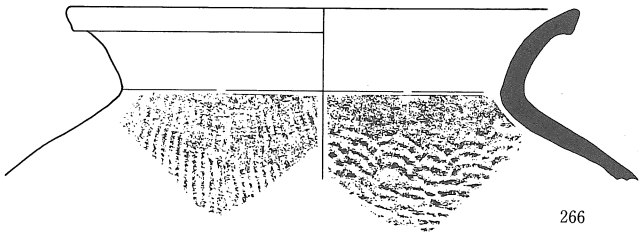


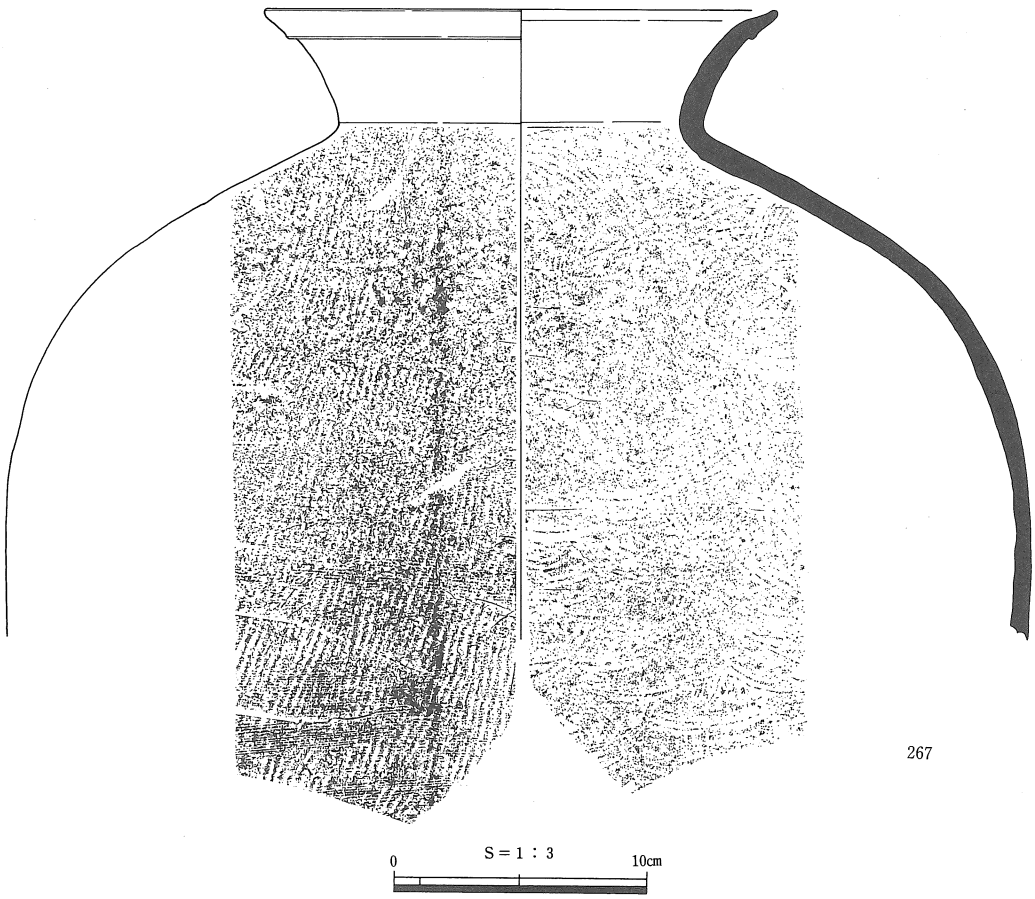
第79図　ＳＳ－５出土遺物実測図(1)



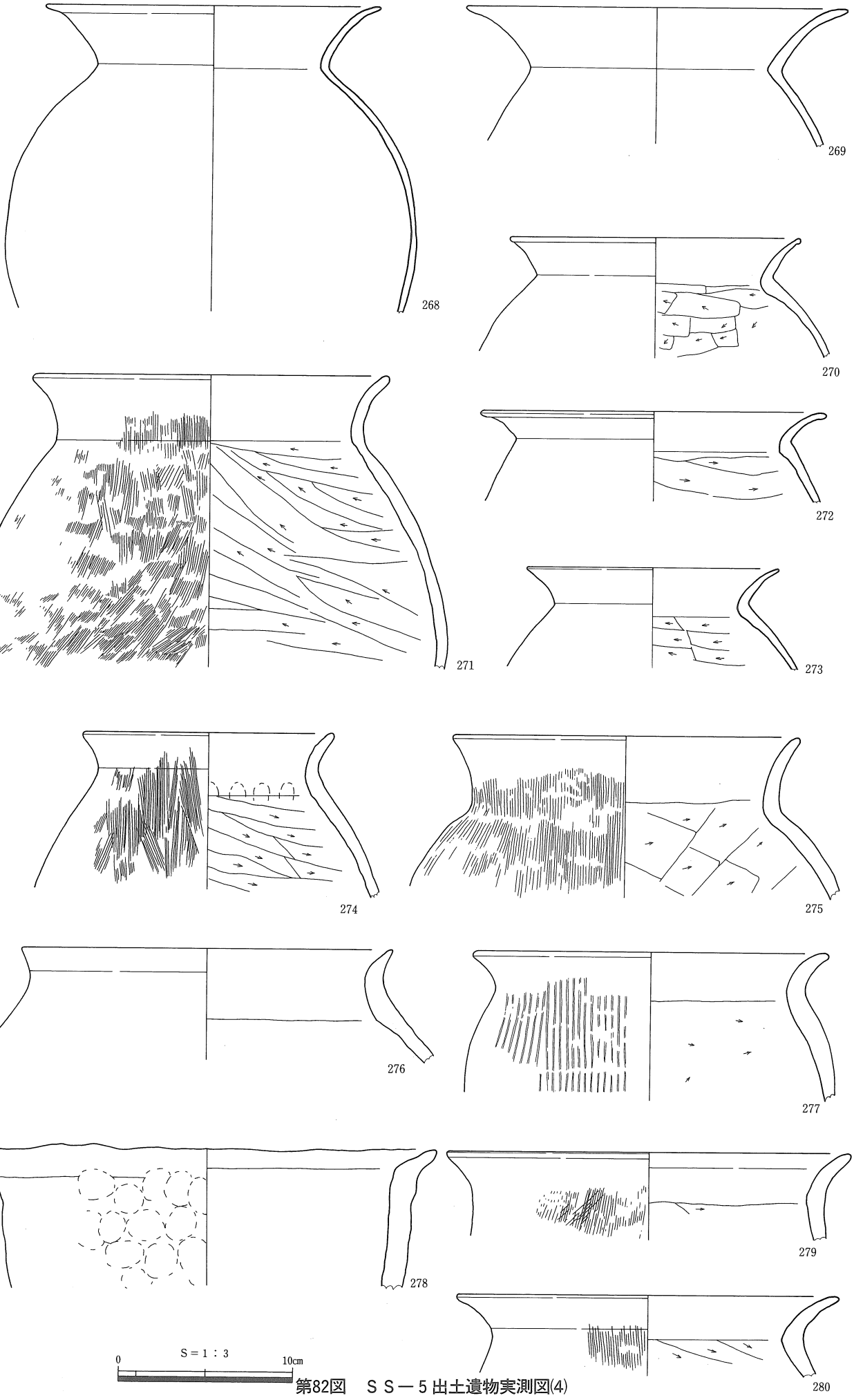
第80図　ＳＳ－５出土遺物実測図(2)



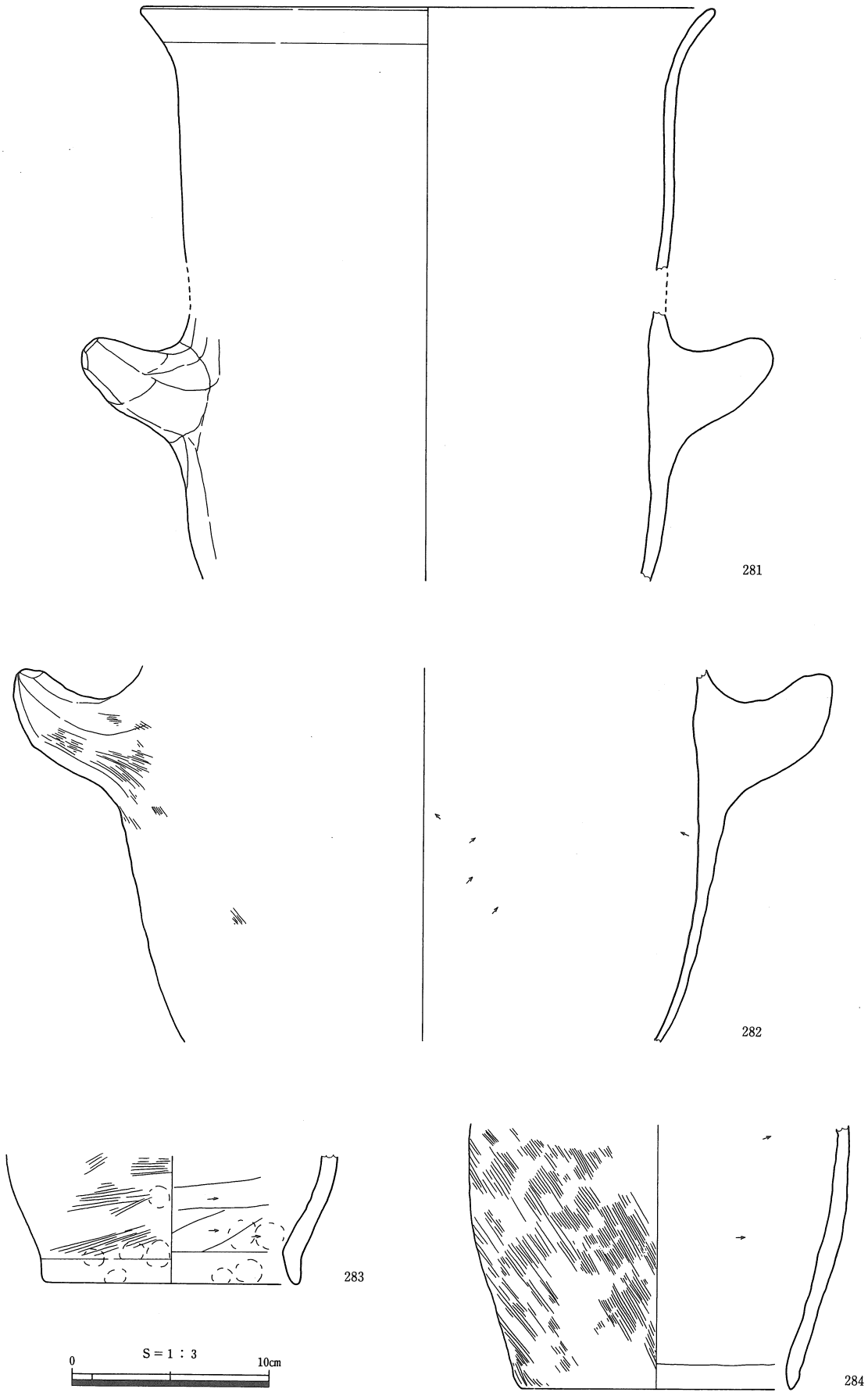




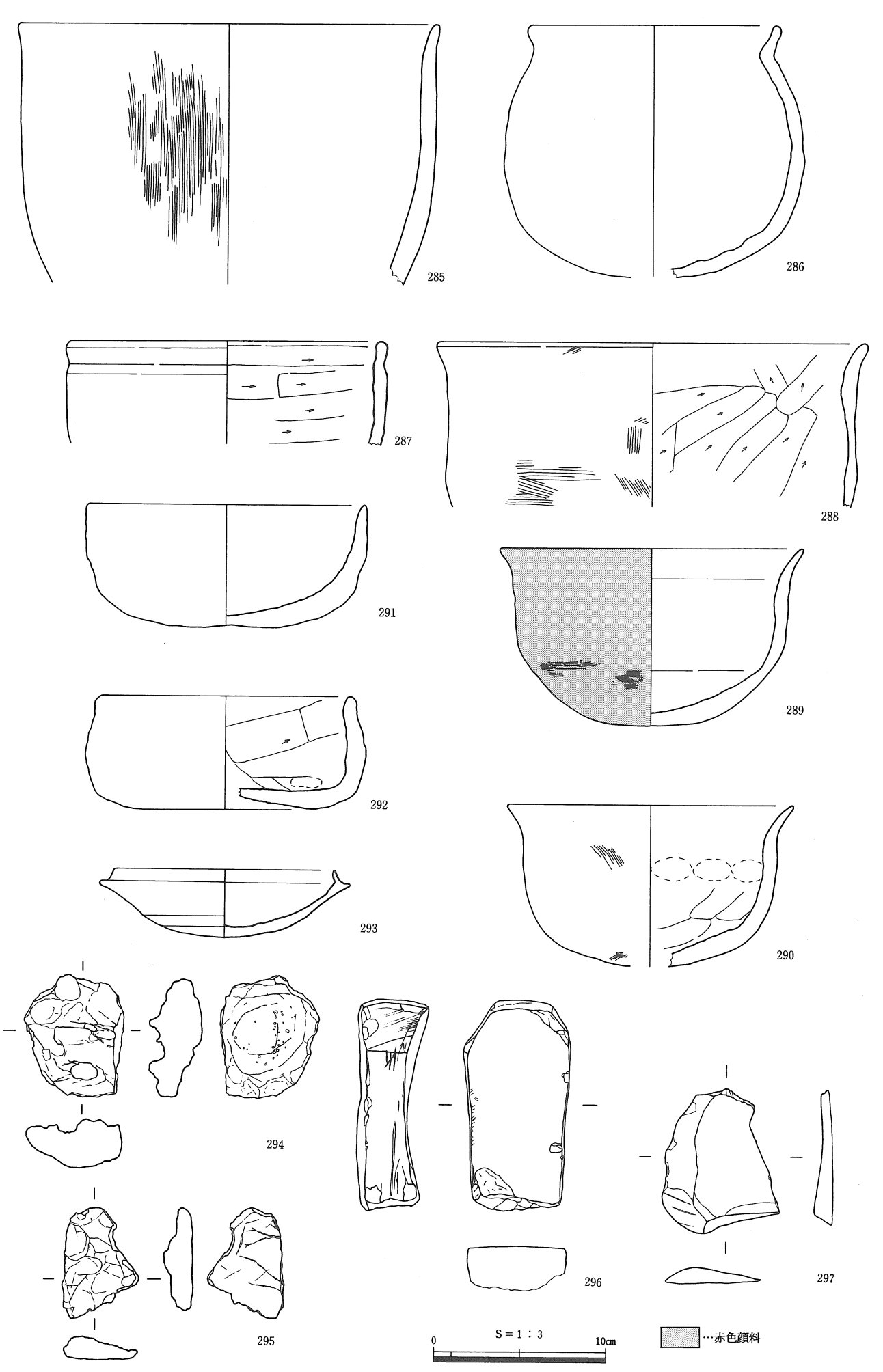
第81図　ＳＳ－５出土遺物実測図(3)



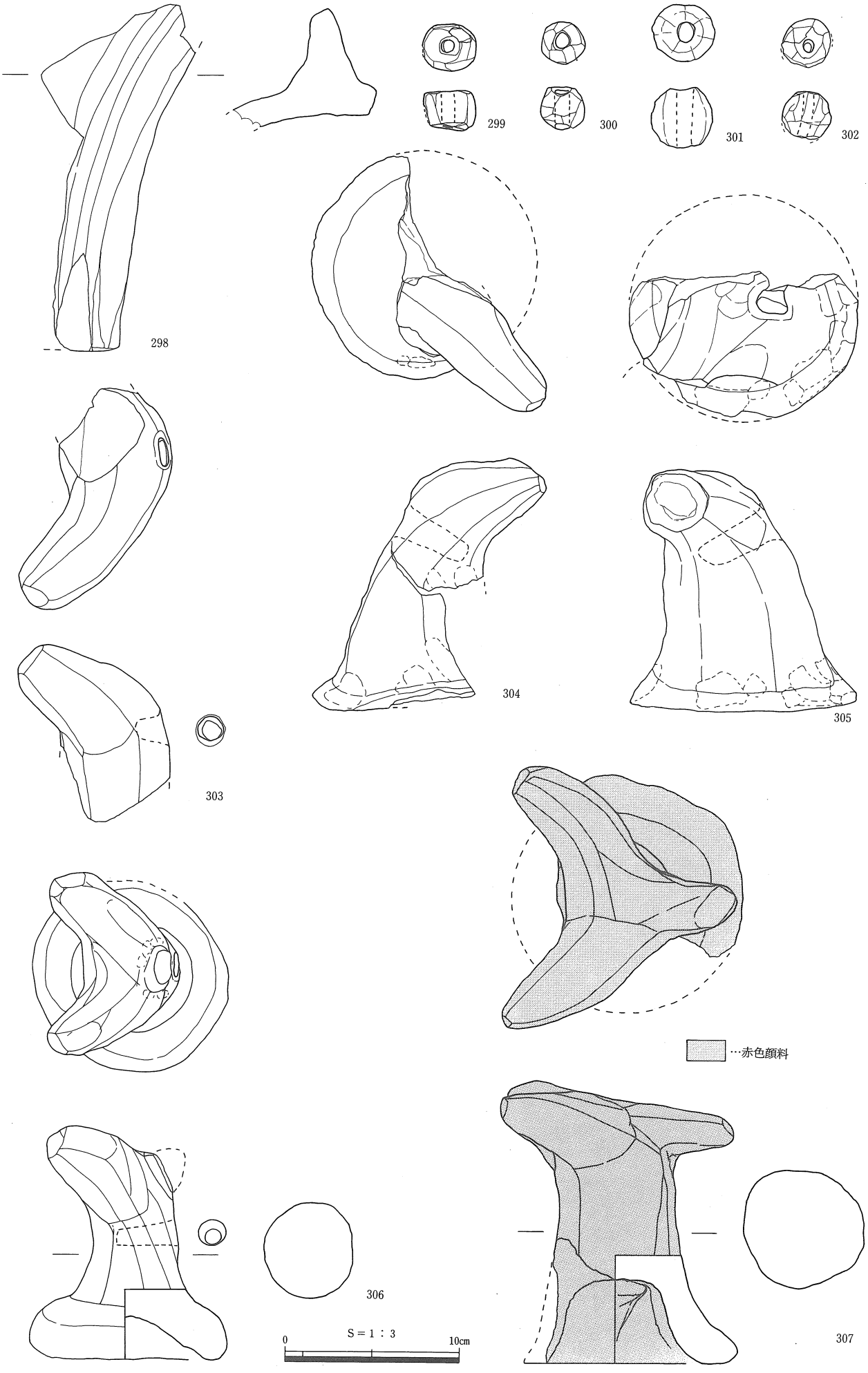
第82図　ＳＳ－５出土遺物実測図(4)



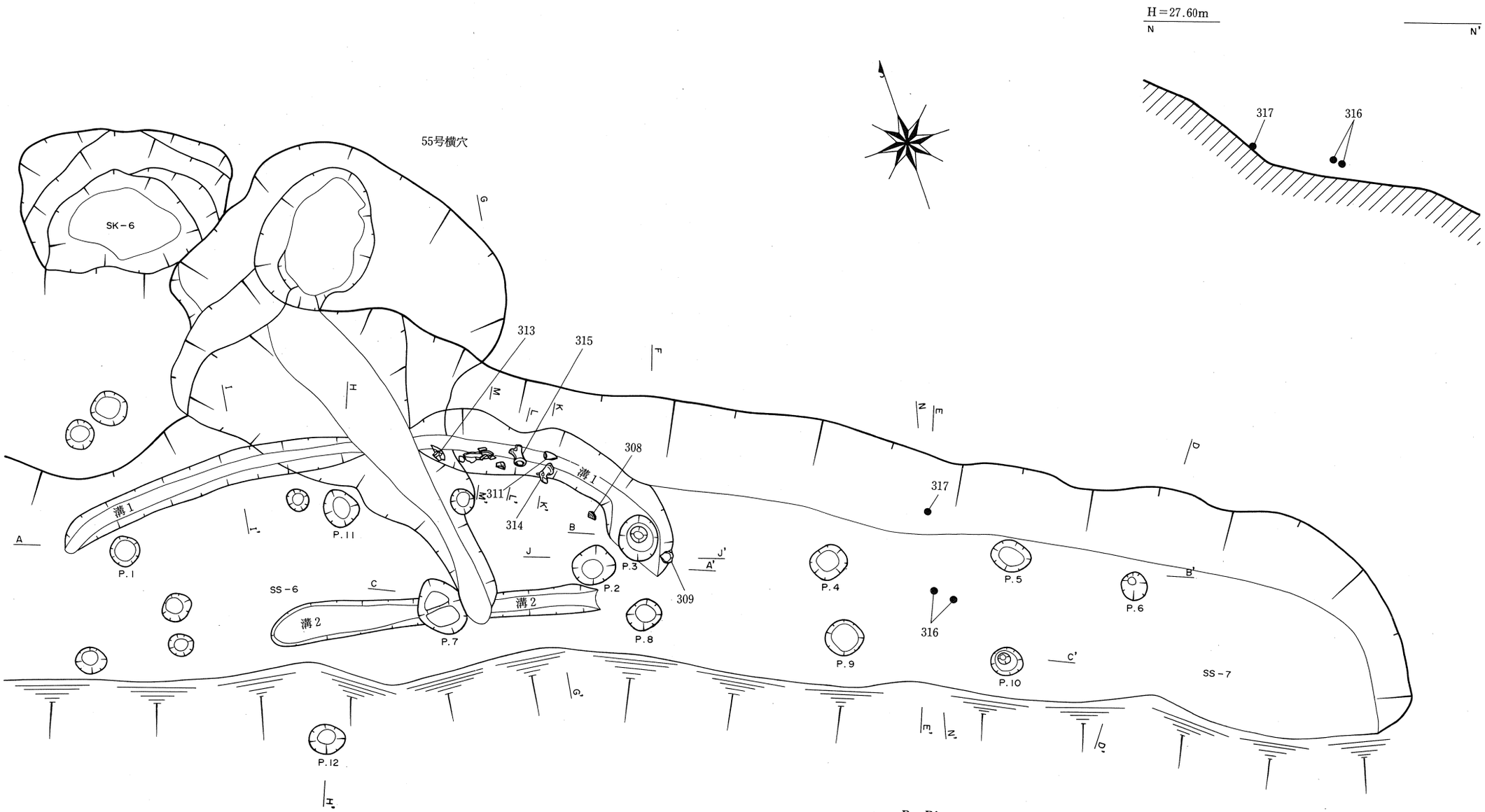
第83図　ＳＳ－５出土遺物実測図(5)



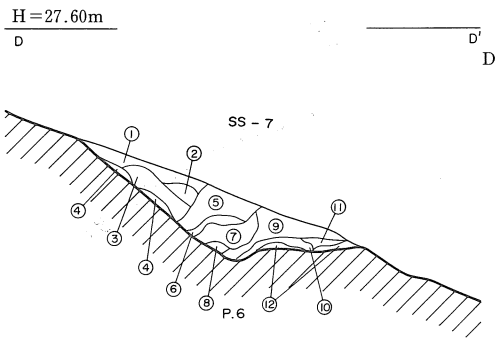
第84図　ＳＳ－５出土遺物実測図(6)



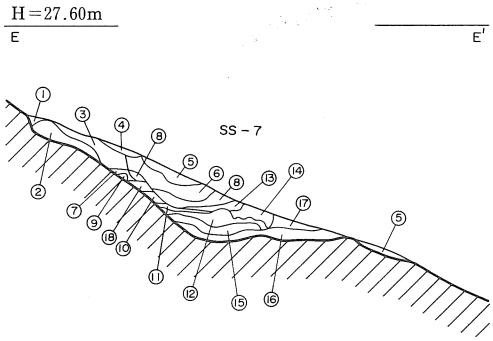
第85図　ＳＳ－５出土遺物実測図(7)



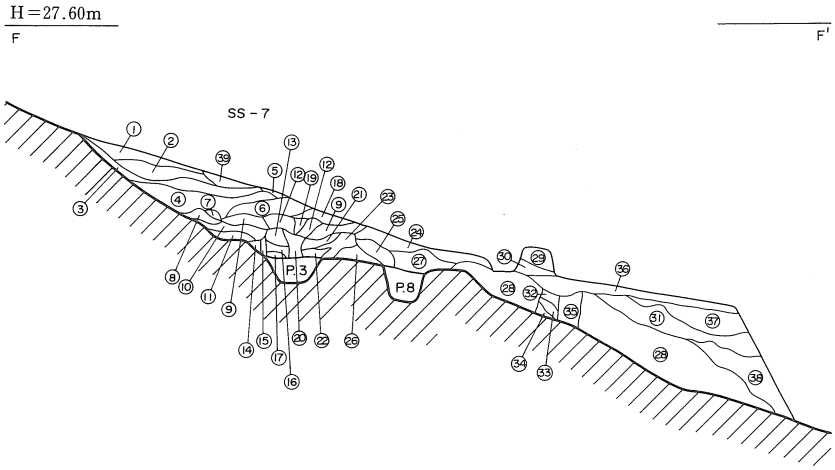
第86図　ＳＳ－６、７実測図



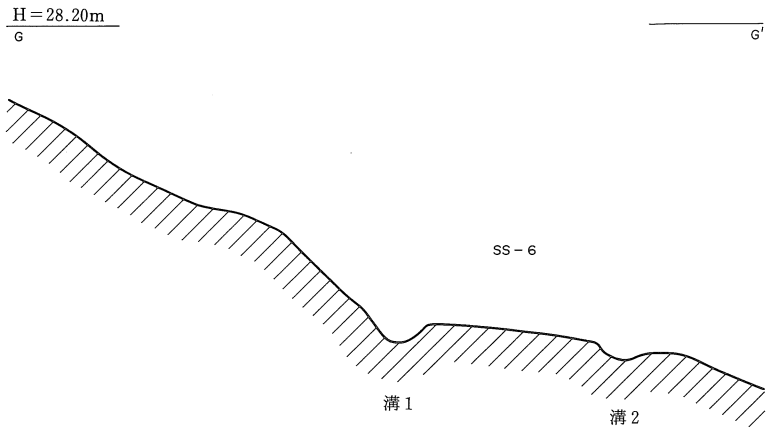
D－D'
① 黄灰色土（黒色土混じり）
② 黄灰色土（黒色土混じり）
③ 黄灰褐色土
④ 黄灰褐色土
⑤ 橙褐色土
⑥ 赤褐色土（礫混じり）
⑦ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑧ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑨ 灰色土（黒茶色土混じり）
⑩ 黄灰褐色土（黒色土混じり）
⑪ 淡黄褐色土
⑫ 灰色土（黒色土混じり）

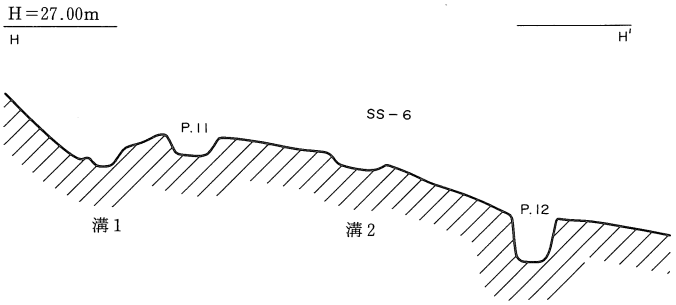


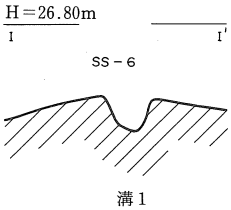
E－E'
① 黒色土
② 橙褐色土（灰色土混じり）
③ 黄灰色土（黒色土混じり）
④ 灰褐色土
⑤ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑥ 黄灰色土（黒色土・暗茶褐色土混じり）
⑦ 橙褐色土（灰色土混じり）
⑧ 黄灰色土
⑨ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑩ 黄灰褐色土
⑪ 黄灰色土（橙褐色土混じり）
⑫ 橙褐色土
⑬ 灰色土（橙褐色土混じり）
⑭ 灰色土（黒色土混じり）
⑮ 灰色土（橙褐色土・黒色土混じり）
⑯ 灰色土（黒色土混じり）
⑰ 灰色土（黒色土混じり）
⑱ 黒色土（黄灰色土混じり）

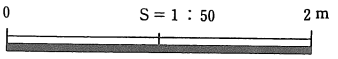


F－F'
① 暗黄灰褐色土（黒色土混じり）
② 暗黄灰色土（黒色土混じり）
③ 暗赤褐色土
④ 黄灰色土（黒色土・暗褐色土混じり）
⑤ 黄灰色土（黒色土・暗褐色土混じり）
⑥ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑦ 黄灰褐色土
⑧ 灰色土（黒色土混じり）
⑨ 灰色土（黒色土混じり）
⑩ 暗橙褐色土（黒色土・灰色土混じり）
⑪ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑫ 灰色土（黒色土・褐色土混じり）
⑬ 橙褐色土（暗灰色土混じり）
⑭ 黄灰色土
⑮ 黄灰色土（炭化物混じり）
⑯ 橙褐色土
⑰ 橙褐色土
⑱ 暗灰色土（黒色土・橙褐色土混じり）
⑲ 灰色土（黒色土混じり）
⑳ 黄灰色土（黒色土・褐色土混じり）
㉑ 橙褐色土（黒色土・暗灰色土混じり）
㉒ 橙褐色土（灰色土混じり）
㉓ 灰色土（黒色土・褐色土混じり）
㉔ 灰色土（暗茶褐色土混じり）
㉕ 灰色土
㉖ 橙褐色土
㉗ 灰色土
㉘ 黄灰褐色土（橙褐色土混じり）
㉙ 黄灰色土
㉚ 黄灰色土（黒色土混じり）
㉛ 黒色土（暗茶褐色土混じり）
㉜ 黄灰色土（黒色土・橙褐色土混じり）
㉝ 黄灰褐色土（黒色土・橙褐色土混じり）
㉞ 黄灰褐色土（黒色土・橙褐色土混じり）
㉟ 黄灰褐色土（黒色土・橙褐色土混じり）
㊱ 黄灰色土
㊲ 黒色土（褐色土混じり）
㊳ 暗茶褐色土
㊴ 灰色土（褐色土混じり）

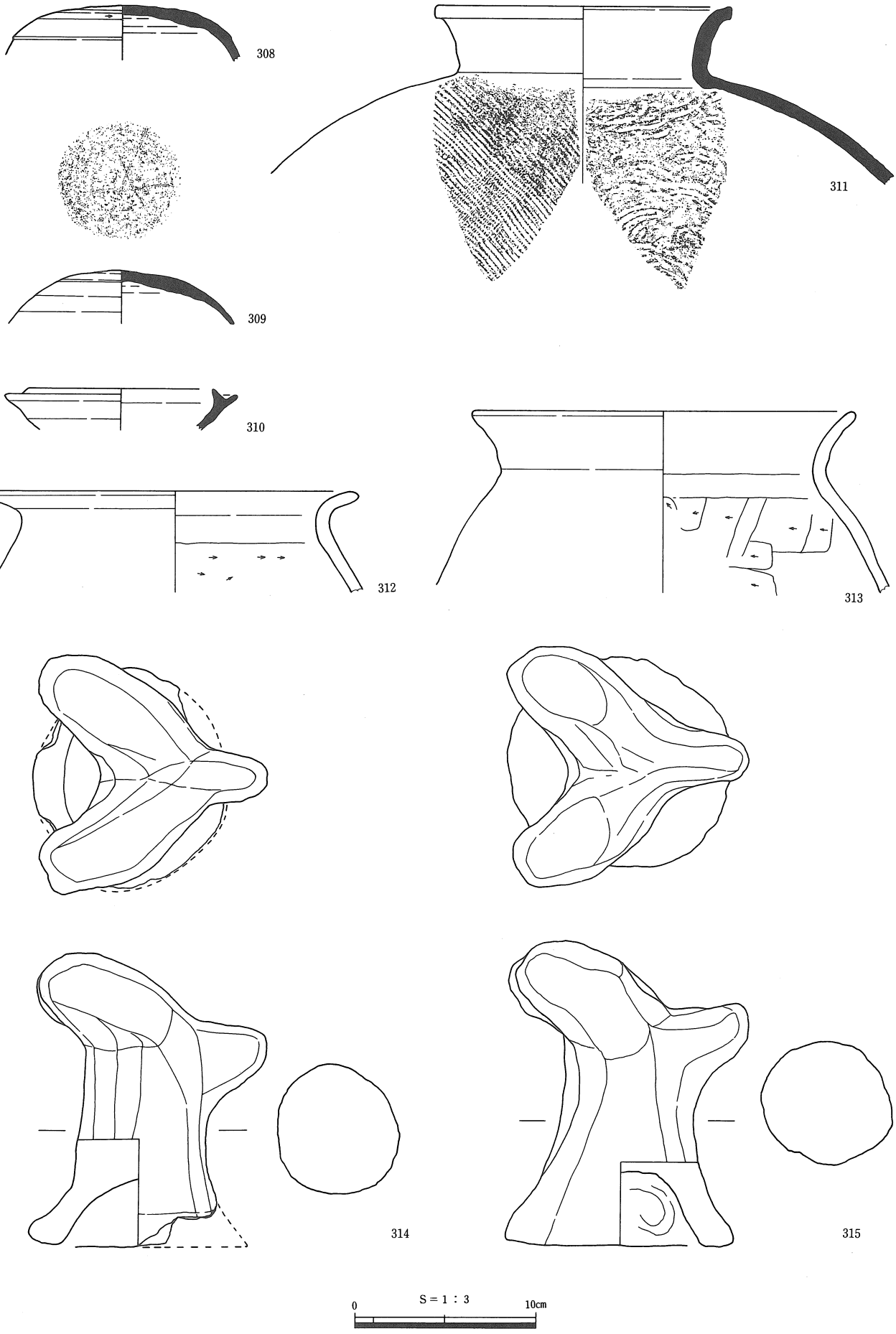








第87図　ＳＳ－６・７断面実測図



第88図　ＳＳ－６出土遺物実測図

第89図　ＳＳ－７出土遺物実測図

遺構はその配置状況から、①ＳＳ－３、②ＳＳ－２、４、５、８、18、③ＳＳ－14、④ＳＳ－６、７、13、17、19、⑤ＳＳ－15、16、⑥ＳＳ－９～12、⑦ＳＳ－20～24の７つのエリアに分けられると判断した。以下、エリアごとに各遺構を詳述する。

①ＳＳ－３

ＳＳ－３（第54、56、76図・写真図版15）は、標高約17～17.5mに位置し、Ａ区北側の丘陵斜面裾部に構築されたテラス状遺構である。古墳時代後期の竪穴住居跡（ＳＩ－８、９、11）とエリアを構成している。検出面には岩肌が露出しており、凹凸の激しい床面をなす。壁面稜線は明確に確認できなかった。東端部はＳＩ－11拡張住居によって切られており、ＳＳ－３はこれより古い遺構と判断する。テラスの規模は、長さ約５m、奥行き最大約２mを測る。

床面には２基のピット（Ｐ．１、２）を検出した。Ｐ．１は、直径約30cm、深さ約40cmを測り、Ｐ．２は直径約30cm、深さ約15cmを測る。また、ＳＩ－11西端部には、直径約30cm、深さ約40cmを測るＰ．３を検出している。Ｐ．１～３は約1.5m間隔で直線上に配列することから、Ｐ．３は本来的にはＳＳ－３に付随するピットであると考える。床面の凹凸部を盛土して整地し、Ｐ．１～３を柱穴とする建物を構築していたと推測する。

遺物は、須恵器、土製品が出土している。178は須恵器の坏の口縁部である。床面直上に出土した。立ち上がりは直立気味に内傾し、受部はほぼ水平方向にのびる。179は土師質の竈の破片である。床面上方の斜面部で出土しており、上方からの転落物と考える。180は支脚である。Ｐ．２の北西にほぼ床面直上で出土した。178は、陰田編年５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に比定される。

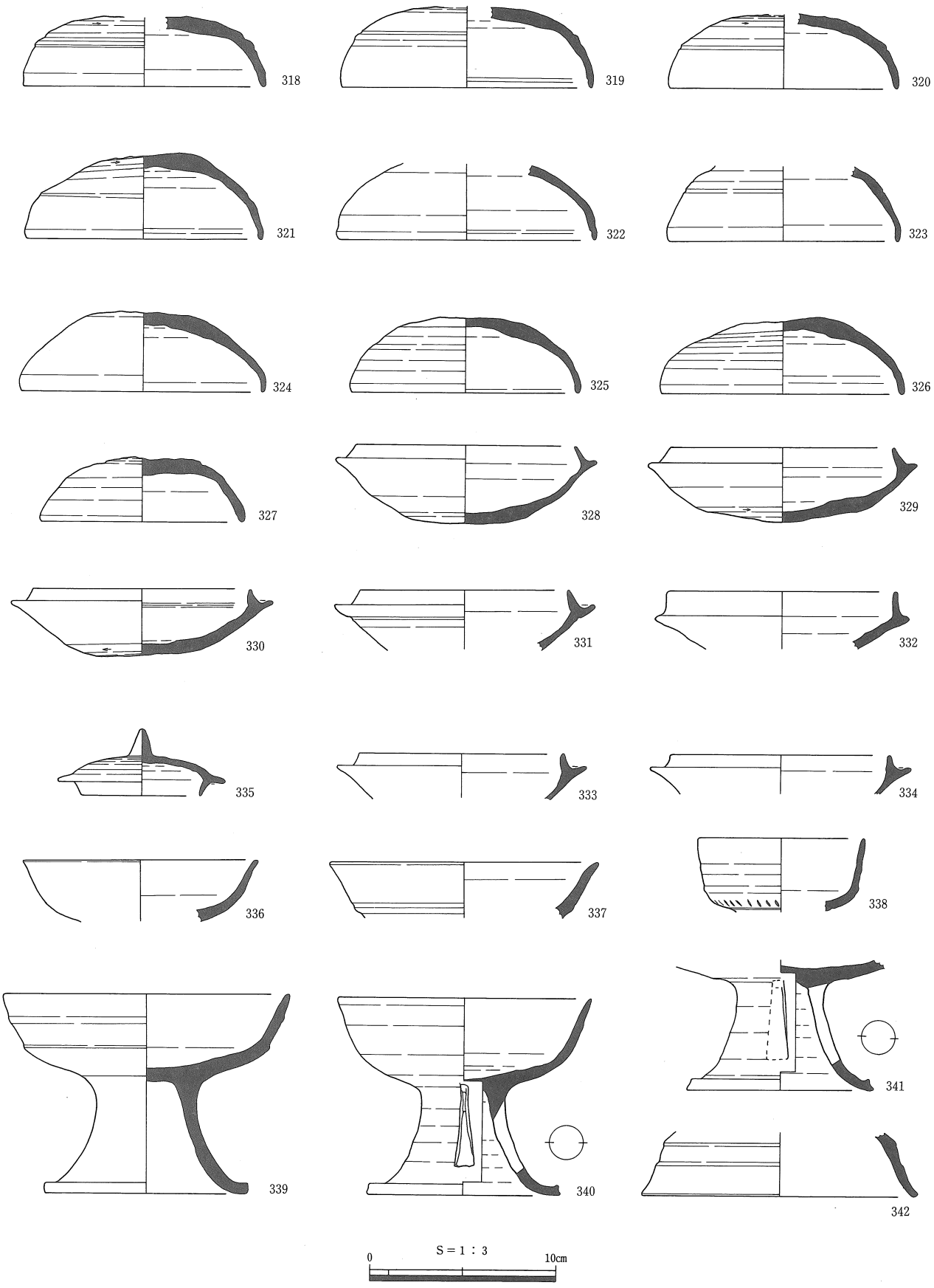
ＳＳ－３、ＳＩ－８、９、11の構築順序は把握できなかった。唯一、ＳＩ－８→11の順が明確である。ＳＳ－３、ＳＩ－11では同時期の遺物が出土していることから、ＳＳ－３はＳＩ－８より新しい遺構である可能性が考えられる。

②ＳＳ－２、４、５、８、18

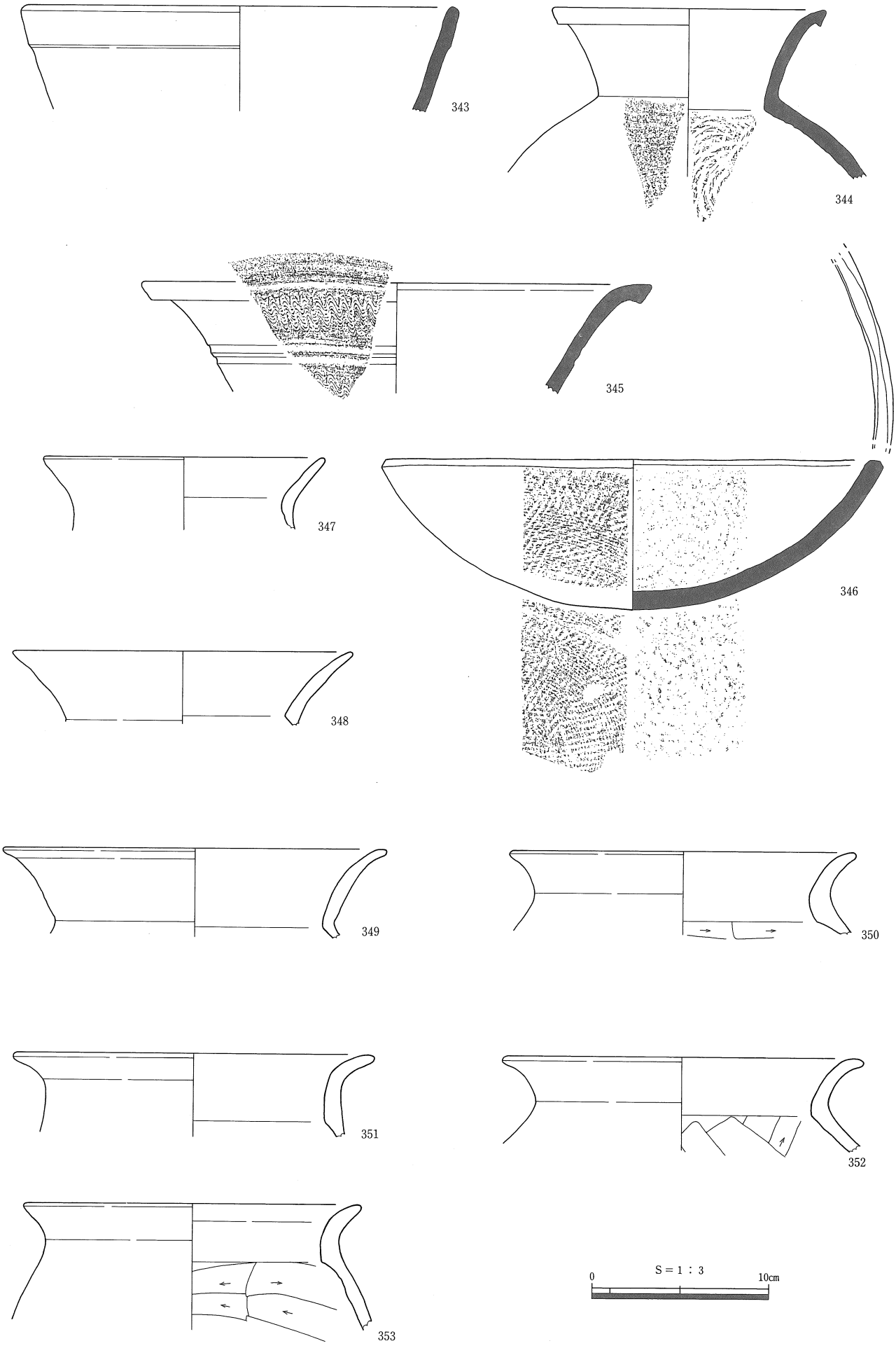
本エリアでは、ＳＳ－２、４、５、８、18を互いに近接して検出した。Ａ区北側の丘陵斜面部に構築されており、標高21～24.5mを測る。エリア内には弥生時代後期後半～古墳時代前半の竪穴住居跡（ＳＩ－５、６）も検出している。

ＳＳ－２（第69、71～75図・写真図版16、75、76）は、標高20.5～21mに位置し、長さ約10m、奥行きは床面西側で最大3.5mを測る。斜面上方にはＳＳ－４、５が、西側にはＳＩ－５、６が隣接する。残存壁高はＤ－Ｄ’ラインで約１mを測り、壁面裾部には検出面で幅約70cm、深さ２～３cmを測る側溝（溝５）を僅かに検出した。床面にはピットを検出しなかった。

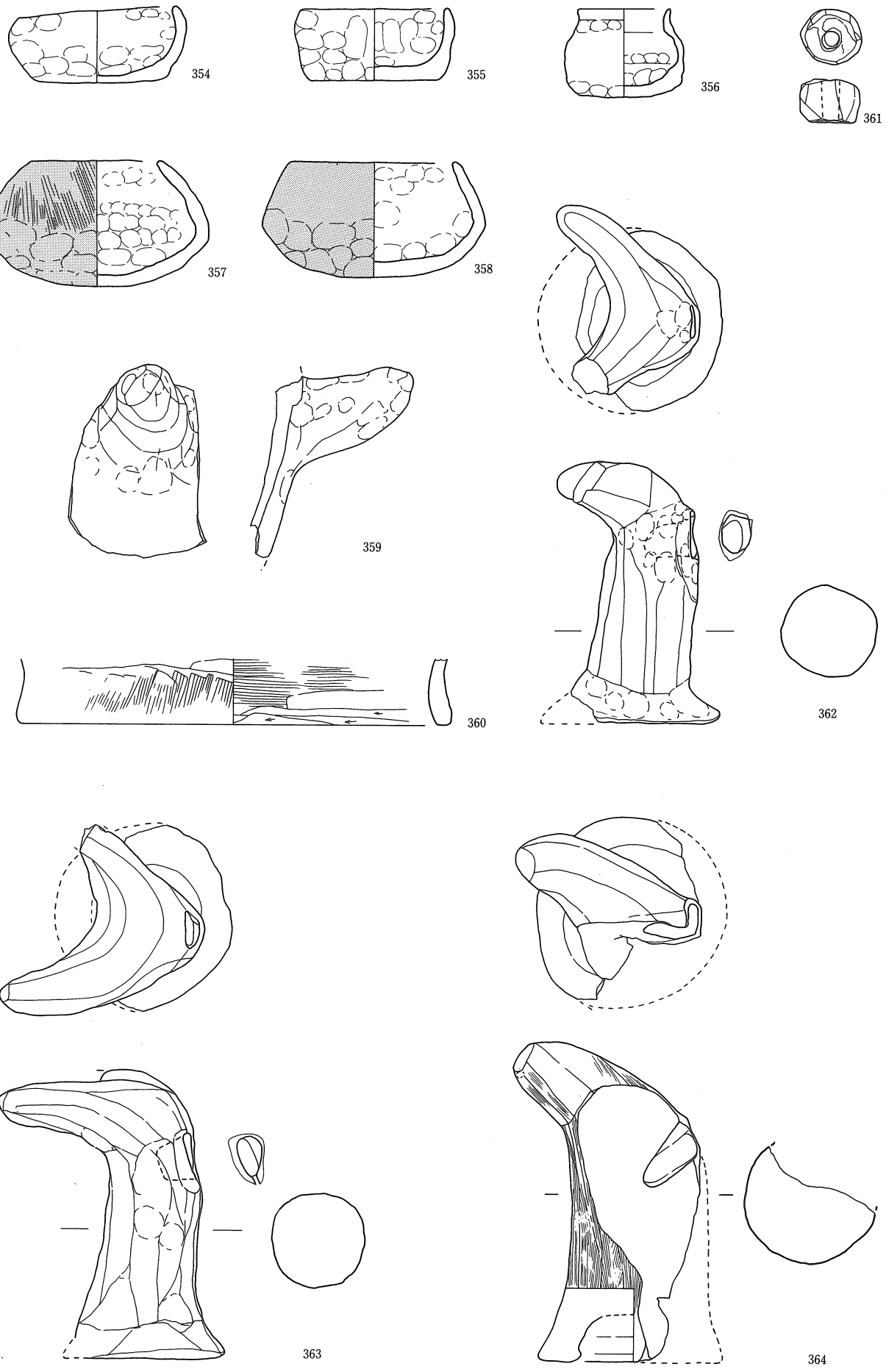
遺物は、須恵器、瓦質土器、土製品、鉄製の鍔が出土した。157～172は須恵器である。157と158、159と160は対をなす蓋坏である。床面中央部やや東寄りの地点で、蓋と坏とが重なり合った状態で出土した。161と162もまた対をなす蓋坏である。蓋、坏とも焼け歪んでいる。床面中央部の直上に互いに近接して出土した。163～168は坏蓋である。168は床面東端部直上に出土した。163～165は天井部と口縁部の間に段があり、稜が突出している。165は溝５上に浮いた状態で出土した。166は床面西端部に浮いた状態で出土した。169～171は須恵器の坏身である。ともに内傾する立ち上がりを呈する。170は壁面斜面直上に出土した。171は床面東端部直上に出土した。172は甕、または堤瓶の把手である。173、174は瓦質土器である。173は甕である。174は甑で、東壁斜面上に浮



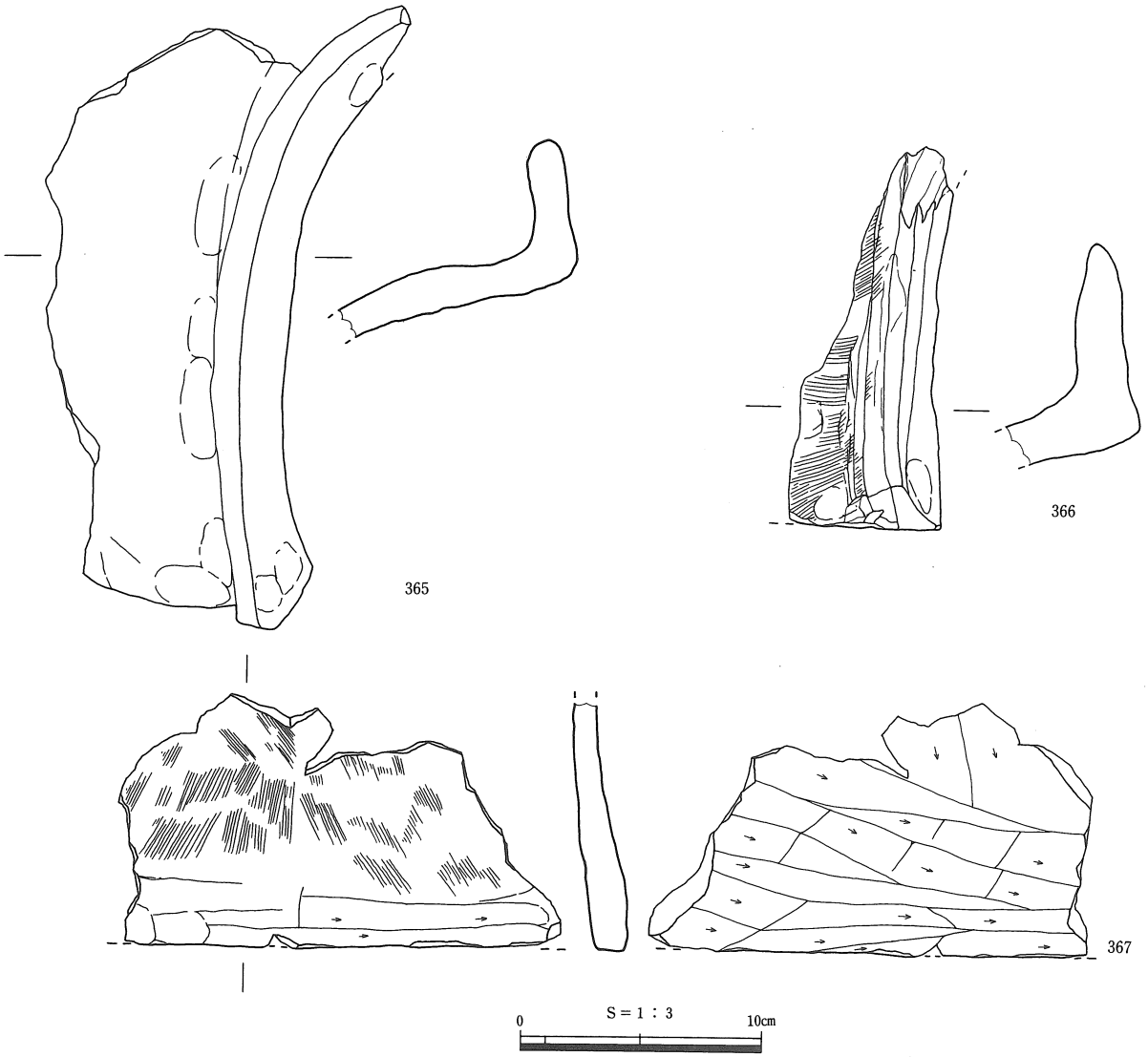
第90図　ＳＳ－８出土遺物実測図(1)



第91図　ＳＳ－８出土遺物実測図(2)



第92図　ＳＳ－８出土遺物実測図(3)



第93図　ＳＳ－８出土遺物実測図(4)

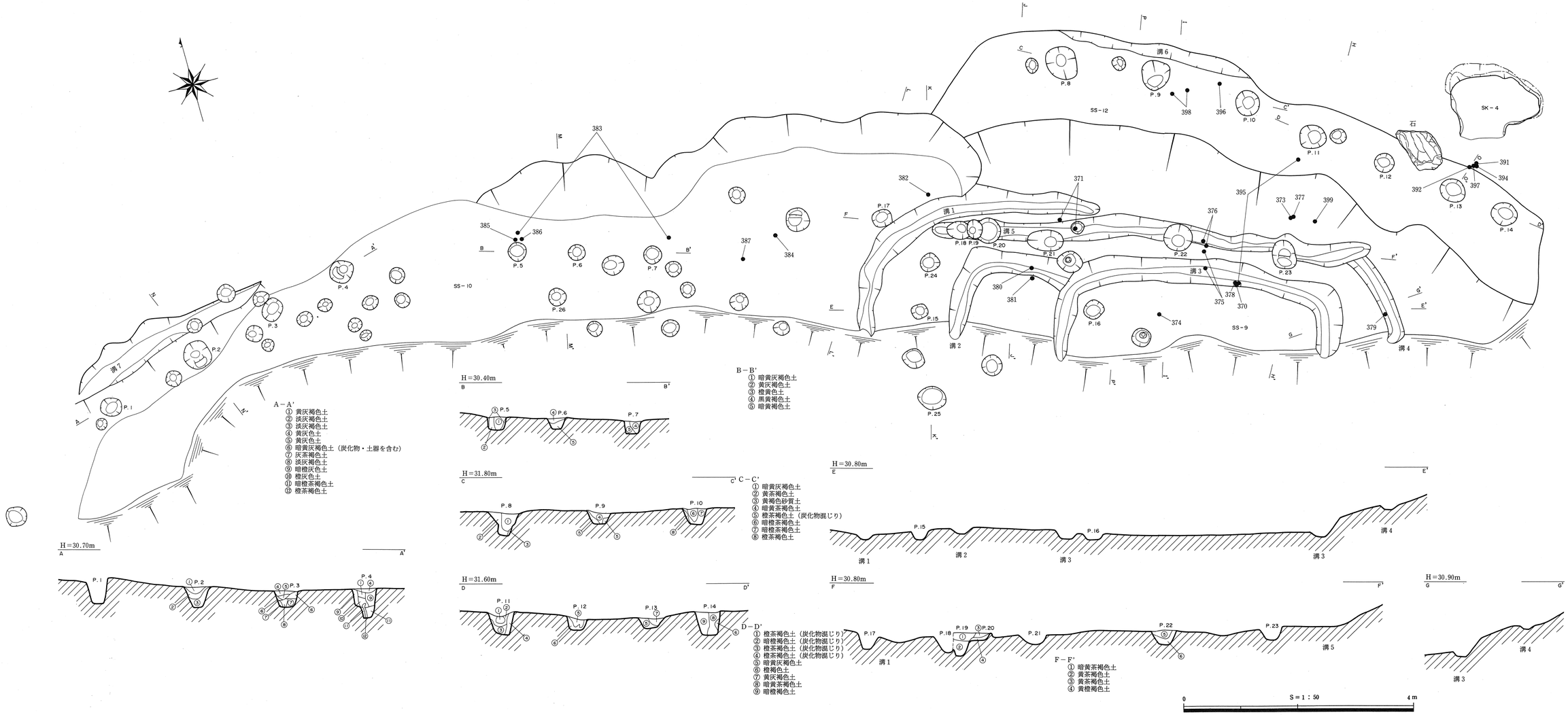
いた状態で出土した。175は土師器の甕である。外反した口縁部をもつ。床面中央部でほぼ直上に出土した。176は土錘である。177は鉄製の鍔である。これらの遺物は陰田編年４式（６世紀後葉）に比定され、ＳＳ－２はエリア内で最も古い時期を示すと考える。

ＳＳ－４、５（第69～73、77～85図・写真図版16、17、76、77）は、標高約22.5～23mに位置し、斜面下方にはＳＳ－２、西側にはＳＳ－８が隣接する。遺構面中央には、東西に横断する段差が確認でき、下段の遺構面をＳＳ－４、上段の遺構面をＳＳ－５と区分した。まずＳＳ－４を構築し、その後に壁面を掘削して拡張し、ＳＳ－５を構築したものと考える。その際ＳＳ－４の遺構面上を盛土し、ＳＳ－５の床面を造成したものと推測する。ＳＳ－４、５西端部は、ＳＳ－８によって削平されている。ＳＳ－４は、長さ約18m、奥行き３～４mを測り、残存壁高は、Ｄ－Ｄ'ラインで約１mを測る。ＳＳ－５との段差は、Ａ－Ａ'ラインで約20cmを測る。ＳＳ－５は、長さ約17.5m、奥行きは最大約2.5mを測る。残存壁高は、Ａ－Ａ'ラインで約1.2mを測る。両遺構の壁面裾部には、幅約40cm、深さ約５cmを測る側溝（溝１）を検出した。溝１は両遺構に連続的に敷設してあり、ＳＳ－５に伴う排水施設と推測する。ＳＳ－５には溝１のほかに、幅約10cm、深さ約５cmを測る溝（溝２）、幅30～40cm、深さ約５cmを測る溝（溝３）、幅約30cm、深さ約５cmを測る溝（溝４）を検出した。溝２、３は互いに切り合う関係にあり、ともに建物に伴う溝と推測される。建物は建て替えが行われたと考える。切り合いの関係からは、溝２、３の構築順序を明確に把握できなかった。本テラスは、壁面を掘削して床面を拡張したものと推測され、この構築順序を考慮すると、溝２は溝３より新しいと考えるのが妥当であろう。溝４は約1.2mにわたって検出した。

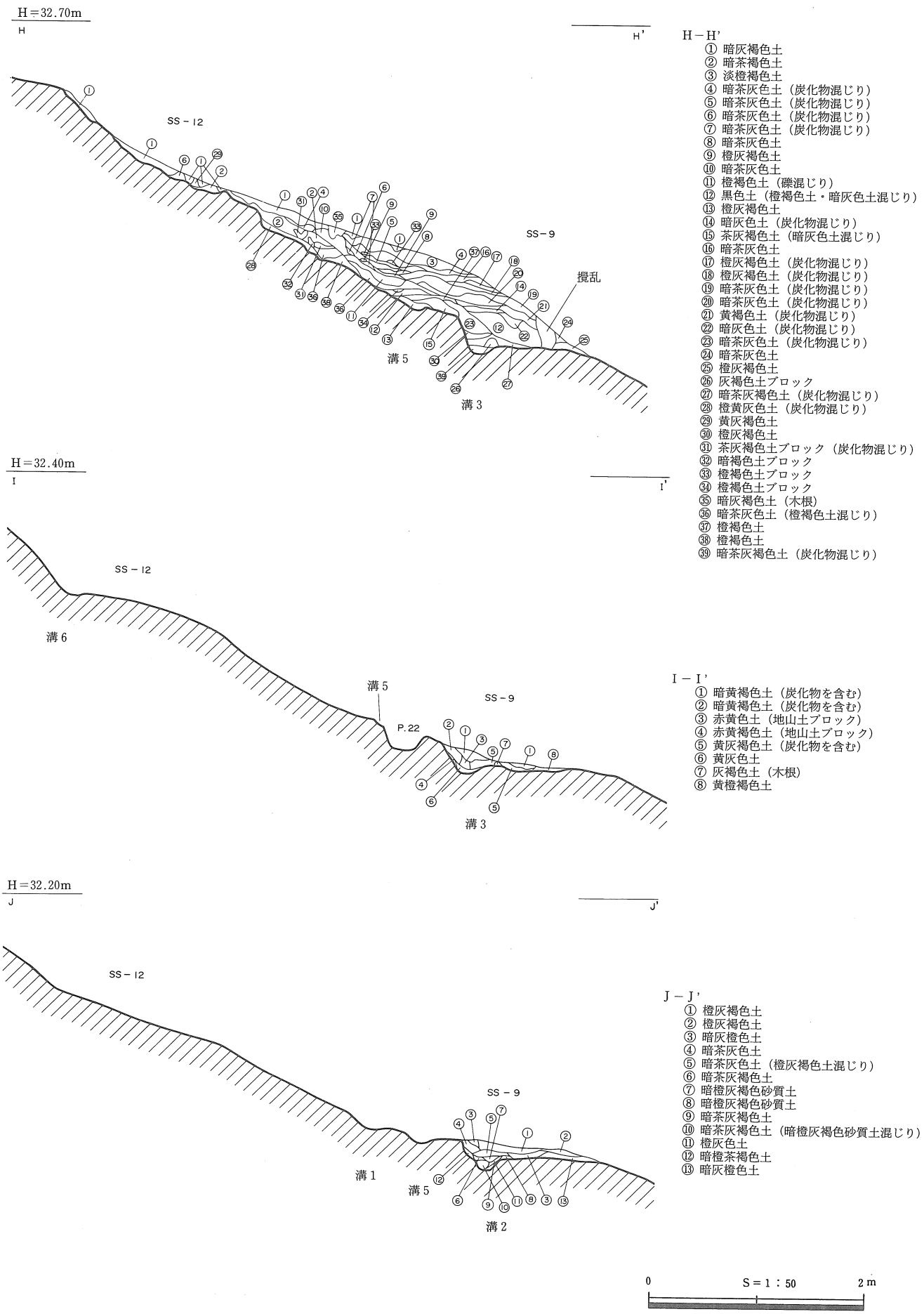
両遺構床面には、合計26基のピットを検出した。ピットの配置状況から、Ｐ.16～18、Ｐ.19～21、Ｐ.22～24をそれぞれ柱穴とする建物の存在が推測される。このうちＰ.16～18は、溝３に伴うものと考える。Ｐ.16～18は、直径45～65cm、深さ60～70cm、ピット間距離は約1.5mを測る。Ｐ.19～21は、直径約25cm、深さ５～15cm、ピット間距離は約２mを測る。上部は流失したものと考える。Ｐ.22、23は直径30～40cm、深さ35～50cmを測り、Ｐ.24は直径約40cm、深さ約15cmを測る。Ｐ.22～24のピット間距離は約1.5mを測る。上部は流失したものと考える。

ＳＳ－４からは、須恵器、土師器、土製品が出土した。181～201は須恵器である。181～187は坏蓋である。186、187を除いて、口縁部と天井部との間に段を設けている。181の口縁部は、直立した立ち上がりを呈する。182～184、187の口縁部は内湾しており、185、186の口縁部はやや外反している。188～194は坏身である。いずれも立ち上がりは内傾する。195～199は高坏である。197は２方に三角形の透かしを施している。195、196、198は坏部である。口縁部は外反しており、口縁端部は丸くおさめている。199は脚部であり、三角形あるいは梯形の透かしを施している。200は壺の口縁部でいる。201は壺の胴部である。肩部に連続刺突文を施している。202～210は土師器である。202～209は甕である。いずれも胴部下半を欠く。210は坏である。須恵器の坏的な器形だが、焼成は土師器である。内傾する立ち上がりをもつ。211は３支の支脚である。212は竈の庇である。溝１上方に位置する平坦面直上に出土した。遺物は、212を除く全てが浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。出土レベルから３段階の転落時期が推測される。186、189、194、195、208が初期の転落物であり、190、192、197、200、202、203、211が２期目の転落物、残りがその後の転落物であると考える。直接的に遺構の時期を示すものは殆ど見られないが、これらの遺物は陰田編年５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に比定される。

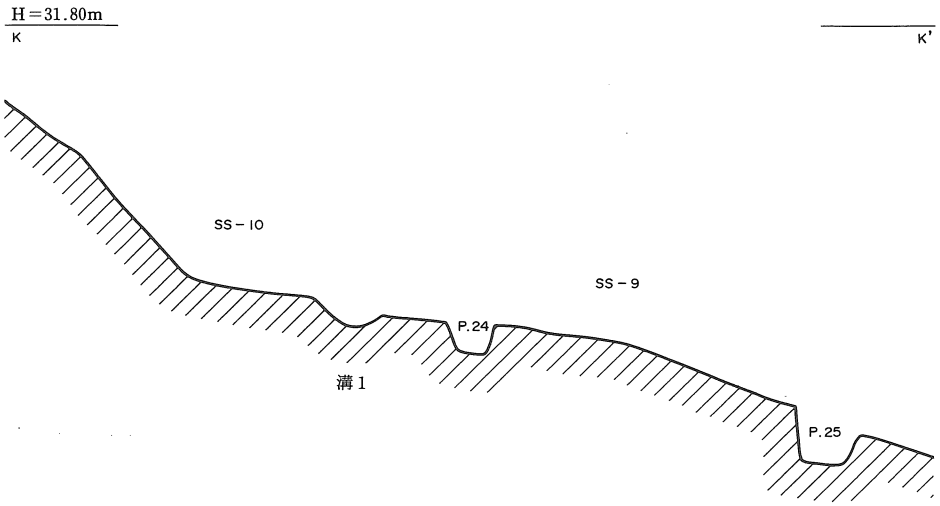
ＳＳ－５からは、須恵器、土師器、土製品、石製品、鍛冶関連遺物が出土している。213～267は須恵器である。213～228は坏蓋である。213～222、224、225には口縁部と天井部の間に段を設けている。229～245は坏身である。基本的に立ち上がりは内傾するが、236、239、242、245はやや直立気味である。246～260は高坏である。246は有蓋高坏、247～252は無蓋高坏である。脚部には三角形か梯形の透かしを施している。259は低脚の高坏であり、３方に梯形の透かしを施している。261はかえりをもつ蓋である。262は壺である。胴部には連続刺突文を施している。263、264は直口壺である。口縁部は直立気味に立ち上がる。263の底部にはヘラ切りが観察される。

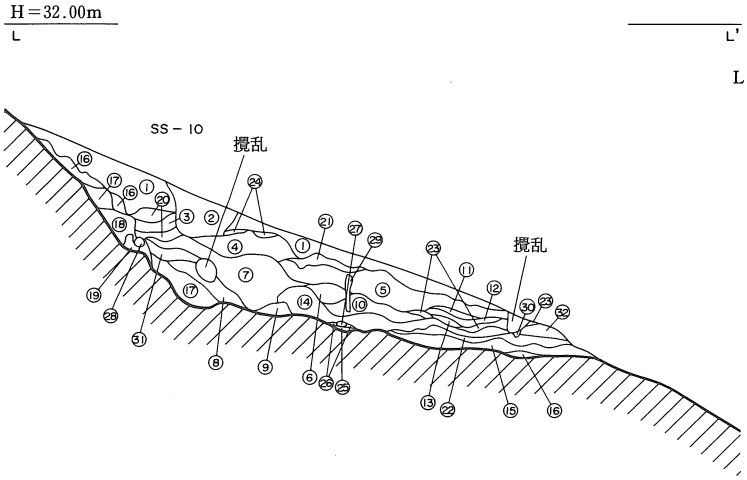


第94図　ＳＳ－９、10、12実測図



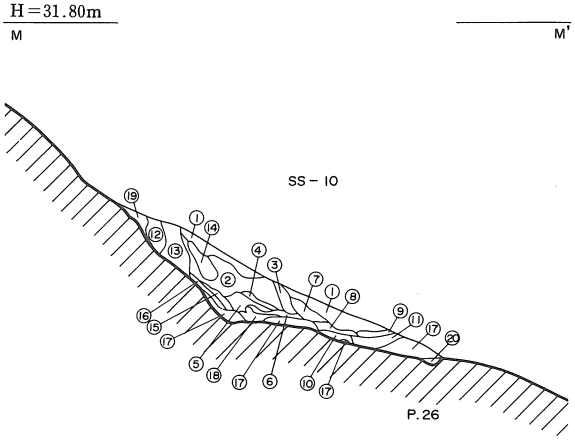
第95図　ＳＳ－９、12断面実測図

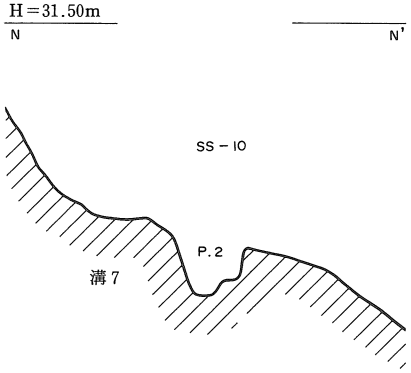




L－L'

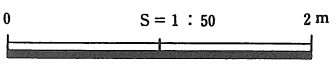
① 茶灰褐色土
② 黒褐色土
③ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
④ 淡茶灰褐色土
⑤ 茶灰褐色土
⑥ 茶灰褐色土
⑦ 茶灰褐色土
⑧ 茶灰褐色土
⑨ 茶灰褐色土
⑩ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑪ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑫ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑬ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑭ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑮ 茶灰褐色土（橙褐色土・炭化物混じり）
⑯ 橙褐色土（黄灰褐色土混じり）
⑰ 暗橙灰褐色土
⑱ 黄灰色土（橙褐色土混じり）
⑲ 橙褐色土
⑳ 赤褐色土（茶灰褐色土混じり）
㉑ 橙灰褐色土（炭化物混じり）
㉒ 橙灰褐色土（炭化物混じり）
㉓ 橙灰褐色土（炭化物混じり）
㉔ 橙褐色土ブロック
㉕ 橙褐色土（炭化物混じり）
㉖ 橙褐色土（炭化物混じり）
㉗ 黄褐色土ブロック
㉘ 黄褐色土ブロック
㉙ 青灰色土ブロック
㉚ 青灰色土ブロック
㉛ 暗橙灰褐色土
㉜ 淡茶灰色土



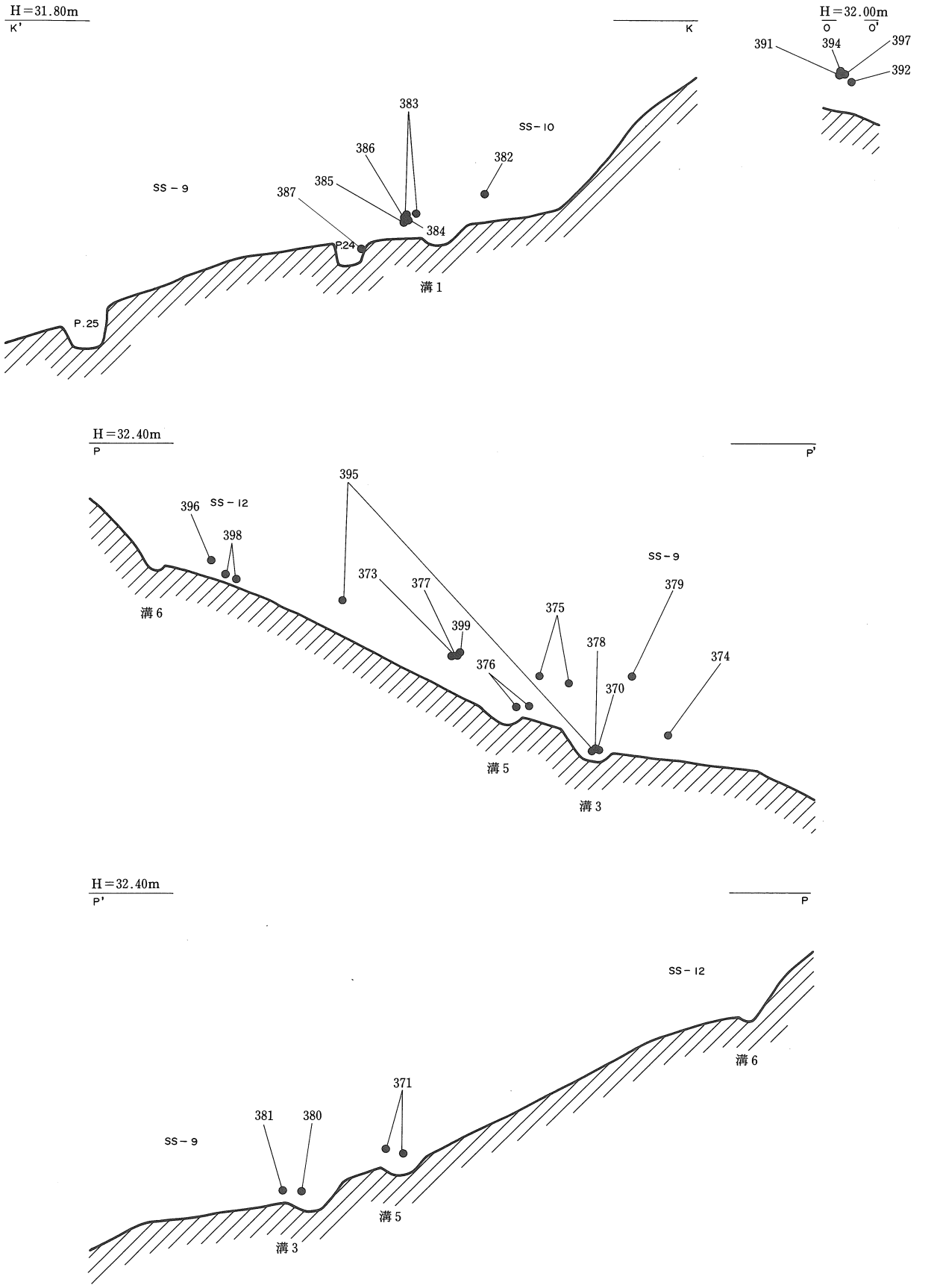


M－M'

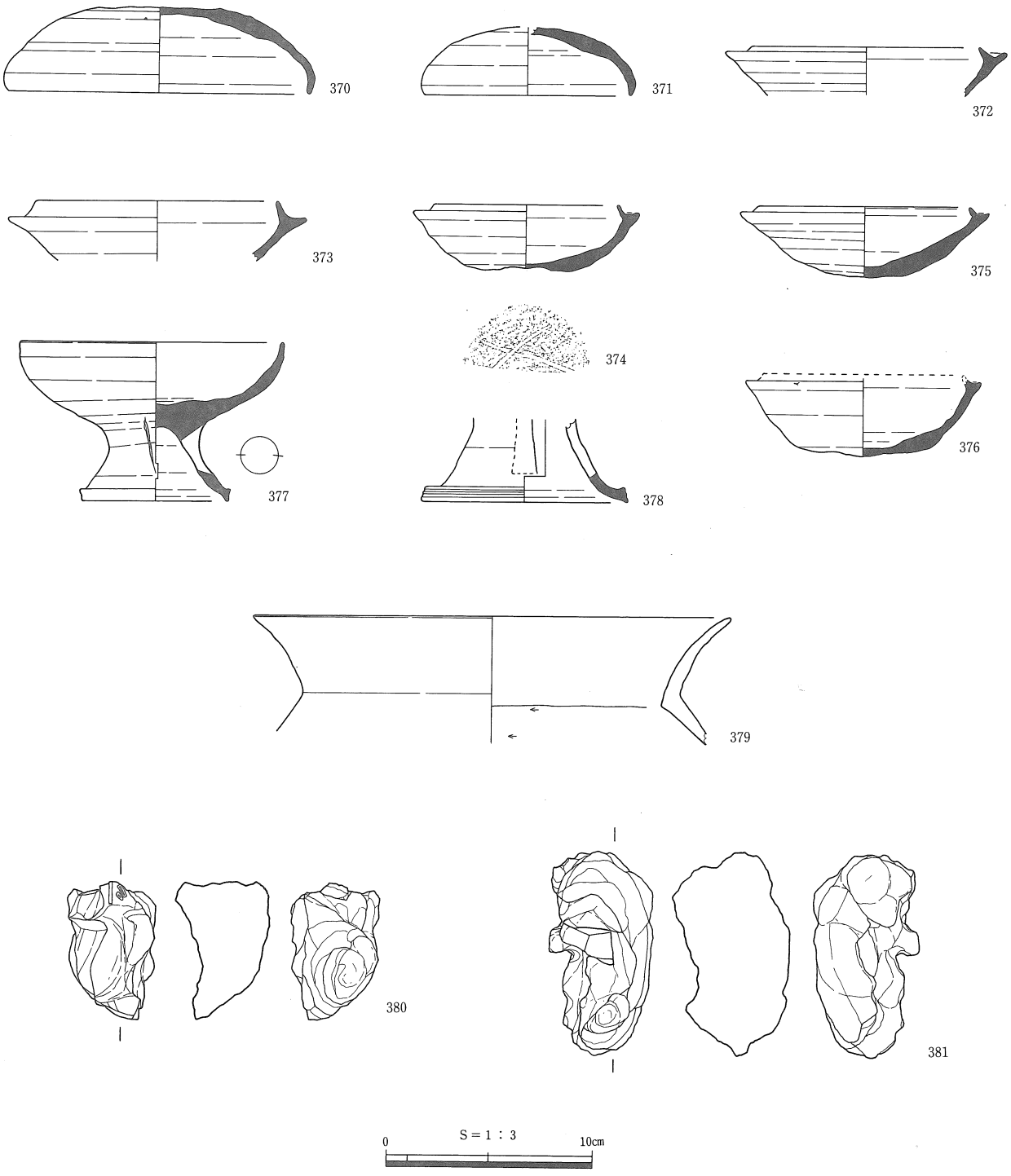
① 黄茶褐色土
② 茶褐色土
③ 茶褐色土
④ 暗茶褐色土
⑤ 暗茶褐色土
⑥ 暗黄褐色土
⑦ 暗黄灰褐色土
⑧ 暗黄灰褐色土
⑨ 暗黄灰褐色土
⑩ 暗黄灰褐色土
⑪ 暗黄灰褐色土
⑫ 淡黄灰褐色土ブロック（赤色土混じり）
⑬ 茶褐色土（淡黄灰褐色土ブロック混じり）
⑭ 淡黄灰色土ブロック
⑮ 淡桃灰色土
⑯ 暗茶褐色土
⑰ 淡桃褐色土
⑱ 桃褐色土
⑲ 暗茶褐色質土（礫混じり）



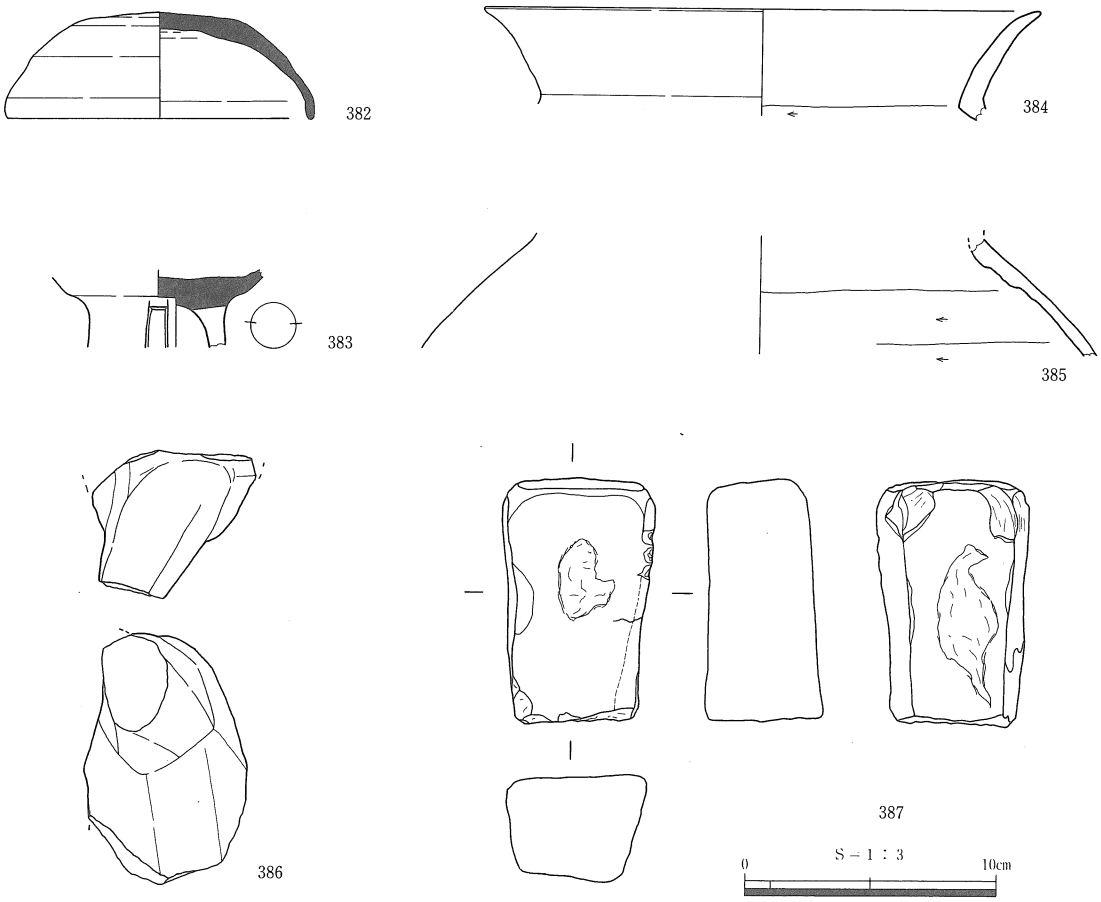
第96図　ＳＳ－９、10断面実測図



第97図　ＳＳ－９、10、12実測図



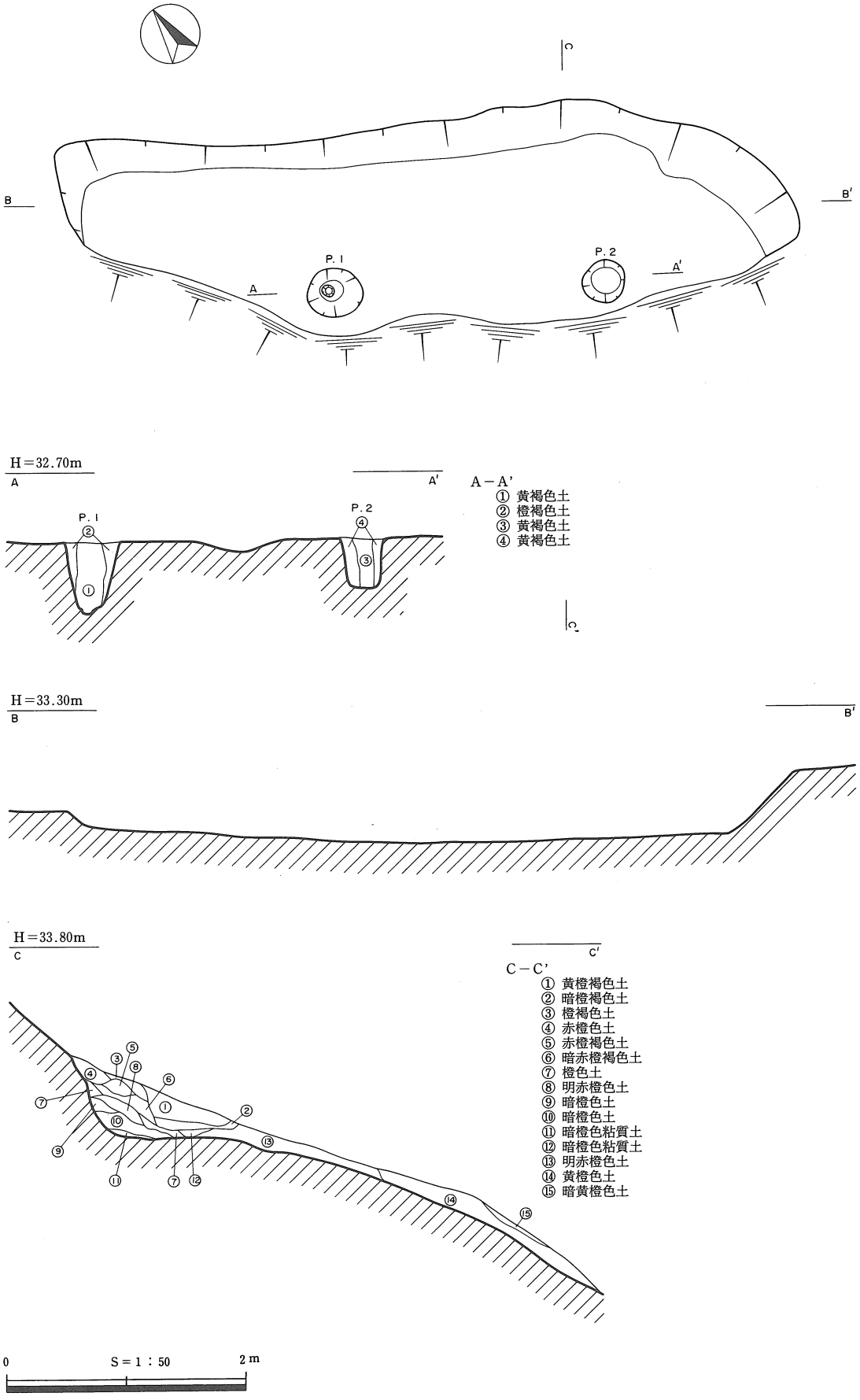
第98図　ＳＳ－９出土遺物実測図



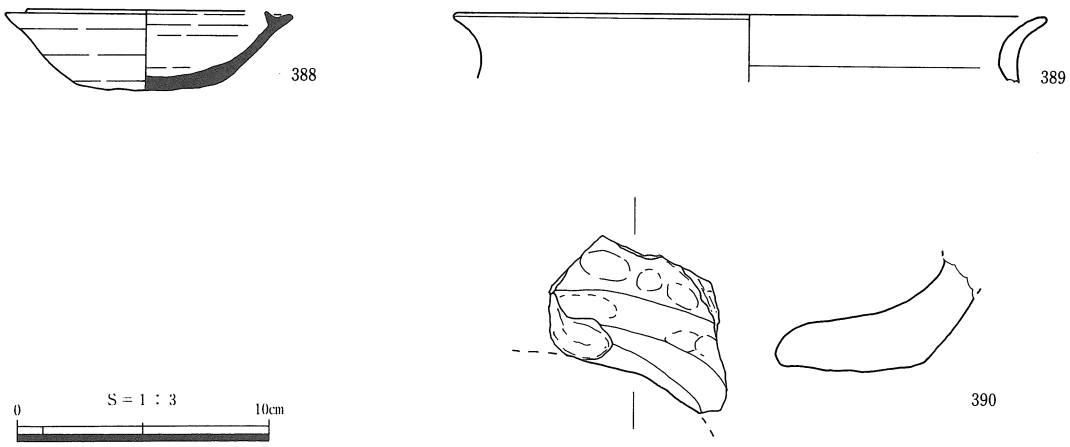
第99図　ＳＳ－10出土遺物実測図

265は横瓶である。266、267は甕である。いずれも胴部下半を欠く。268～293は土師器である。268～280は甕である。いずれも胴部下半を欠く。外面は基本的にハケ調整であるが、277のハケメはかなり粗い。278は外面を指押さえしている。281～284は甑である。285、287、288は器形不詳だが、甕～鉢系の器種か。286は小形の甕である。289～290は鉢である。289の外面には赤色顔料が塗布されている。Ｐ。26北東側の溝１底面直上に出土した。291、292は椀である。293は坏である。須恵器的な器形だが、焼成は土師器である。内傾する立ち上がりをもつ。294、295は椀形鍛冶滓である。ＳＳ－５からは、鍛冶関連遺物として、椀形鍛冶滓161.5ｇ分、その他の鉄滓28.2ｇ分、炉壁168.3ｇ分を出土している。296、297は砥石であり、表面は滑らかに磨耗している。石材は、296が流紋岩質凝灰岩、297が石英砂岩である。298は竈の庇である。299～302は土錘である。303～307は支脚である。303～305は２支、306は３支の支脚であり、これらはともに有孔部をもつ。307は３支の支脚であり、うち１支は水平にのびている。表面には、赤色顔料が塗布されている。遺物は、289を除く全てが浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。出土レベルから、最低２段階の転落時期が推測される。出土遺物中、225、233、234、239、245～247、249、250、253、255、257～260、263、265、267、271、274～276、278、280、286、287、290、291、293、298、301、307は初期の転落物と考える。遺構の時期を示すものは殆ど見られないが、これらの遺物は陰田編年６～７式（７世紀前葉～中葉）に比定される。

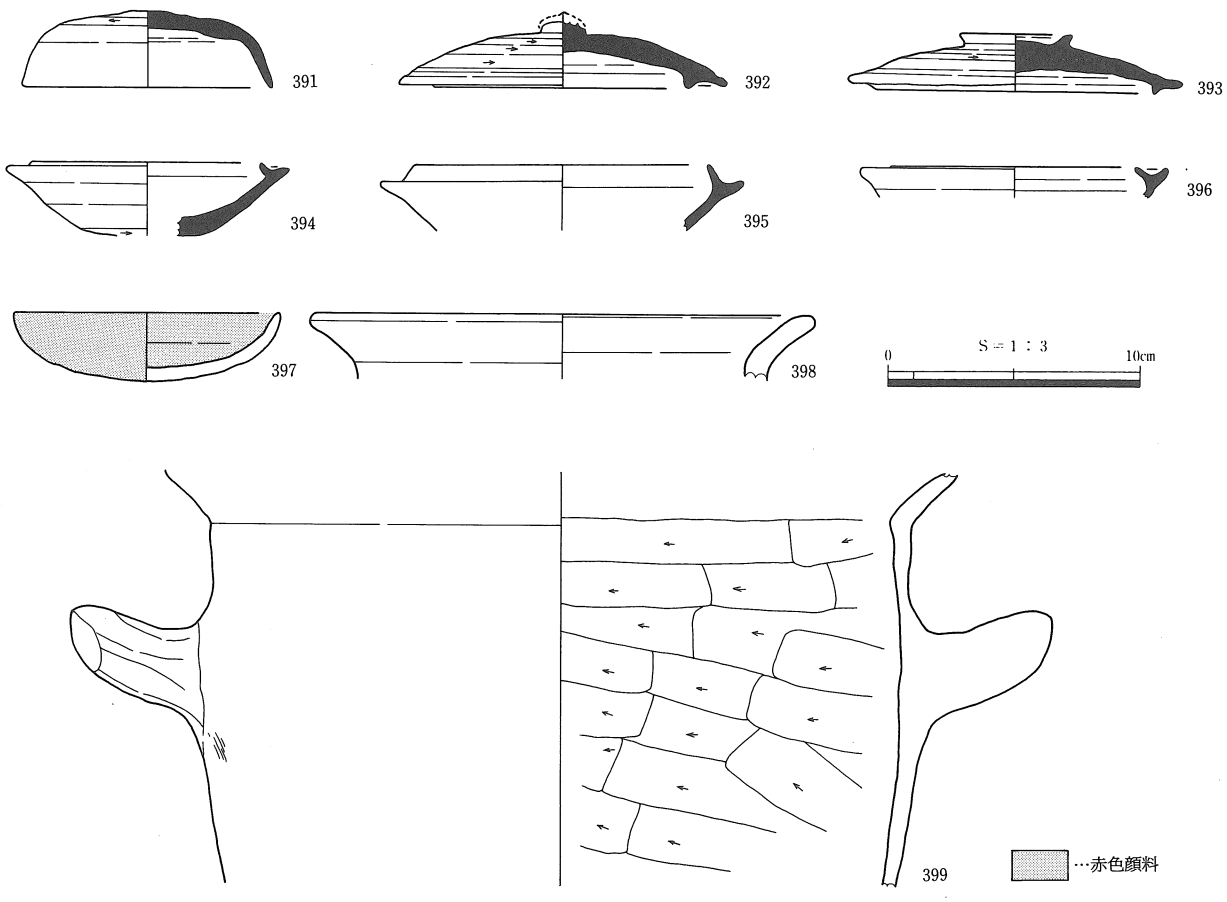
ＳＳ－８（第69、70、72～74、90～93図・写真図版16、19、77、78）は、標高約22～22.5mに位置し、長さ約11m、奥行きは西側床面で最大約1.7mを測る。東壁がＳＳ－４を、北壁がＳＳ－５を切っており、北壁の上部には、ＳＳ－５床面の１部と考える段状の平坦面を検出した。残存壁高は、Ｂ－Ｂ'ラインで約50cmを測る。Ｂ－Ｂ'土層断面から、ＳＳ－８はＳＳ－４、５より新しい遺構であると判断できる。南側にはＳＩ－５、６が存在する。後背壁面裾部に、側溝は確認できなかった。



第100図　ＳＳ－11実測図



第101図　ＳＳ－11出土遺物実測図



第102図　ＳＳ－12出土遺物実測図

床面には14基のピットを確認した。ピットの配置状況から、P．1～4を柱穴とする建物（a）と、P．6～8を柱穴とする建物（b）の存在が推測される。P．1～4は、直径35～50cm、深さ約30cm、ピット間距離約1.2mを測る。P．6～8は直径35～40cm、深さ30～40cmを測る。P．6、7のピット間距離は約2m、P．7、8のピット間距離は約1.5mを測る。B－B'土層断面からも、柱穴と思えるピット状の落ち込みを確認した。P．6の約1.5m南側に位置しており、bの柱穴の1基と考える。断面では、この落ち込みを覆うように、炭化物、焼土混じりの層（14層）および焼土層（15層）を確認しており、建物は焼失した可能性が高い。14層は、第70図中に黒く網掛けをしている層である。

遺物は、須恵器、土師器、土製品が出土した。318～346は須恵器である。318～327は坏蓋である。318～321、323は口縁部と天井部の間に段が施してあり、318～320の稜は突出している。328～334は坏身である。立ち上がりは、328～331は内傾し、332～334は直立する。335は蓋である。円錐形のつまみとかえりを有する。長頸壺の蓋か。336～341は高坏である。336～340は無蓋高坏である。336～338は脚部を欠く。338は小形の高坏であり、坏部の底部外面には連続刺突文を施している。340、341の脚部には、梯形の透かしを施している。342は台付椀の脚台である。343～345は甕である。いずれも胴部下半を欠く。345の口縁部外面には波状文を施している。346はボール状の器である。大型の甕の底部を利用し、口縁端部を削って面取りした転用品と考える。347～358は土師器である。347～353は甕である。354、355、357、358は椀であり、356は小形の壺である。いずれも内外面ともに指押さえが見られる。357は外面上半をハケ調整している。357、358は、354、355より大型であり、外面には赤色顔料を塗布している。356は床面東側の低位側端部にほぼ直上で出土した。359、360は甑である。362～364は支脚である。いずれも2支の支脚であり、有孔部をもつ。364の外面にはハケ調整を施している。365～369は竈である。365、366は庇部、367～369は基部で、369は庇を伴う。基本的には外面ハケ、内面ケズリ調整で、庇の取り付け部は指押さえで整えている。遺物は、356を除く全てが浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。遺物の出土レベルから、320、322、326、327、332～334、337、338、342、343、346、349、352、359、360、367は初期の転落物と考える。これらの遺物は、陰田編年6～7式（7世紀前葉～中葉）に比定される。

SS－18（第23～24図・写真図版5）は、標高約24mに位置し、長さ約5m、奥行き約2mを測る。②エリア内の他の遺構とはやや距離を置いて存在する。残存壁高は、D－D'ラインで約80cmを測る。床面にはピットを検出しなかった。遺物も出土していない。

各遺構は、SS－2→4→5→8の順に構築したものと考える。SS－18については時期不明である。

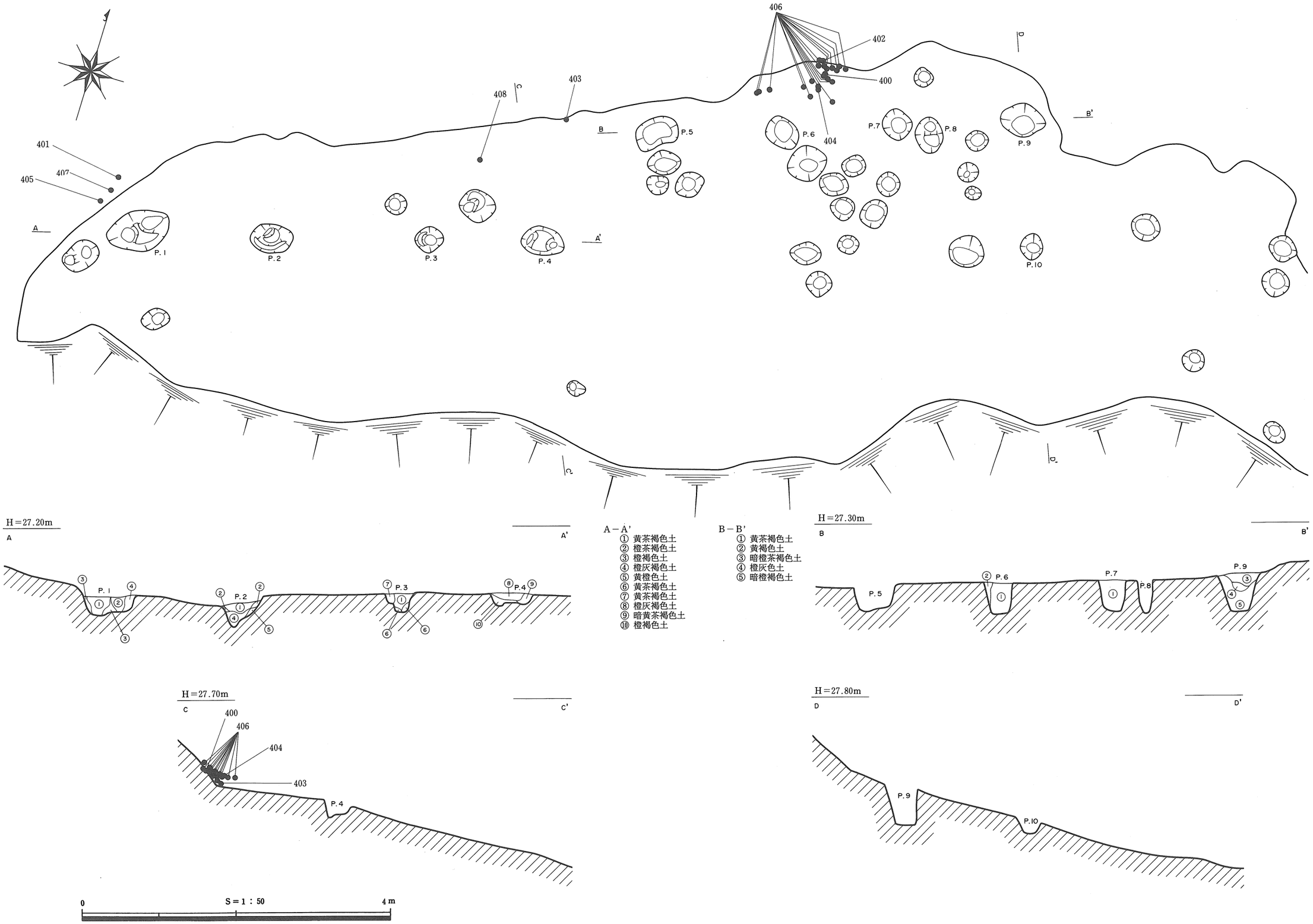
③SS－14（第49～52、105、106図・写真図版22、79）

③は、SS－14と竪穴住居跡SI－7、10、12、13によって構成されるエリアである。陰田60号墳の立地する丘陵の南西裾部に位置する。SS－14は、調査前の段階で段状地形が調査区外の南側に伸びているのが確認できた。検出面で標高22.5～24.5mに位置し、南北9.6m、東西3mの範囲で検出した。平坦面の規模は、南北4.4m、東西2.5mを測るが、さらに調査区外に続いている。後背の壁面の高さは、80cmを測る。2条の溝と13基のピットをテラス上に検出したが、建物の構成は不明である。西側を段状に検出したが、土層断面から推して、盛土して床面を造成していたものと思われる。後背の壁面から、横穴状のピットを検出した。入口高30cm、奥行き50cmを測る。遺物は、P．24の埋土中から土師器の甕（416）、テラスの床面よりやや浮いた位置から須恵器の坏（410、411）、鉄鉢形土器（413）、土師器の甕（417）、テラスの埋土中から須恵器の蓋（409）、高坏（412）、土師器の甕（414、415、418）が出土した。410は高台を持つもので、底部をナデている。411は底部糸切りである。これらの遺物は、陰田編年の9～10式（7世紀末～8世紀後半）に相当するものと判断する。

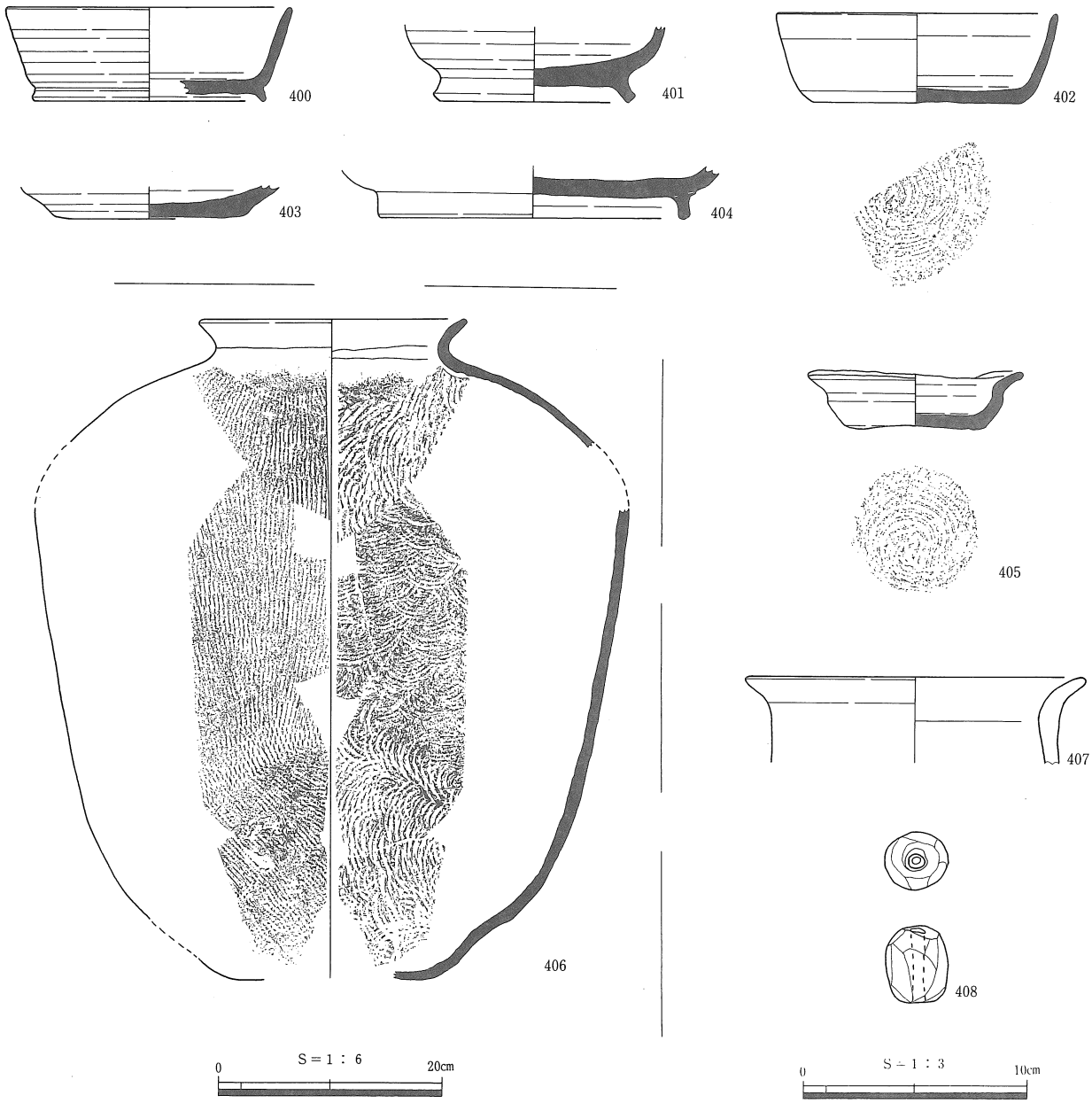
このエリアでの構築順序は、出土土器から判断して、SI－7（陰田編年5式）→SI－10、12（陰田編年6式）→SS－14（陰田編年9～10式）と推定する。SI－13については、時期不明である。

④SS－6、7、13、17、19

標高25.5～27mの範囲に所在するテラス状遺構群である。東から、SS－7→6→13→17→19の順に並ぶ。東



第103図　ＳＳ－13実測図

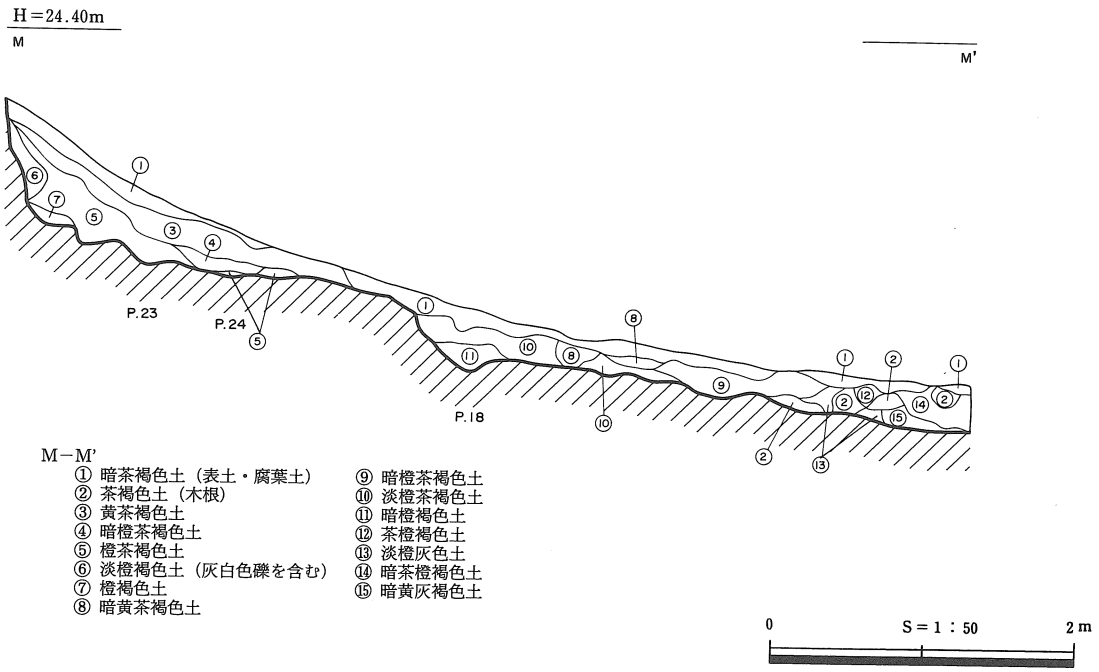


第104図　ＳＳ－13出土遺物実測図

西53mに渡る。

ＳＳ－６、７（第86～89図・写真図版３、18、77）は、標高26～27mに位置し、東西13.2m、南北2.5mの範囲で検出した。ＳＳ－６の後背部には、陰田55号横穴が築造されかけており、溝が前庭部によって切られている。ＳＳ－６と７は、１つのテラスを共有する形に検出しており、テラスとして区分し難いが、溝１でカバーされる範囲をＳＳ－６と認識し、これに重複し、Ｐ．７～10に沿う範囲をＳＳ－７と把握した。よってＳＳ－６は、東西６m、南北2.5mの範囲、ＳＳ－７は東西9.6m以上、南北2.5mの範囲となる。ＳＳ－６は、長さ６m、幅30～60cm、深さ５～20cmを測る溝１が円弧状をなし、これに沿ってＰ．１、11、２のピットが並ぶ。桁行長4.8m、柱間は1.8～2.1mを測る。南側には、Ｐ．７に切られた溝２が伸びる。溝１埋土上及びその周辺から308～315が出土した。308～311は須恵器である。308、309は坏蓋、310は坏身、311は甕である。312、313は、土師器の甕、314、315は３支の支脚である。308はヘラ切り後未調整、309はヘラ切り後ナデており、×状のヘラ記号が記されている。308～310は陰田編年の７式（７世紀中葉）に比定される。

ＳＳ－７は、Ｐ．７～10を柱穴とする建物か。桁行３間で梁行は確認できなかった。桁行長5.8mを測り、柱



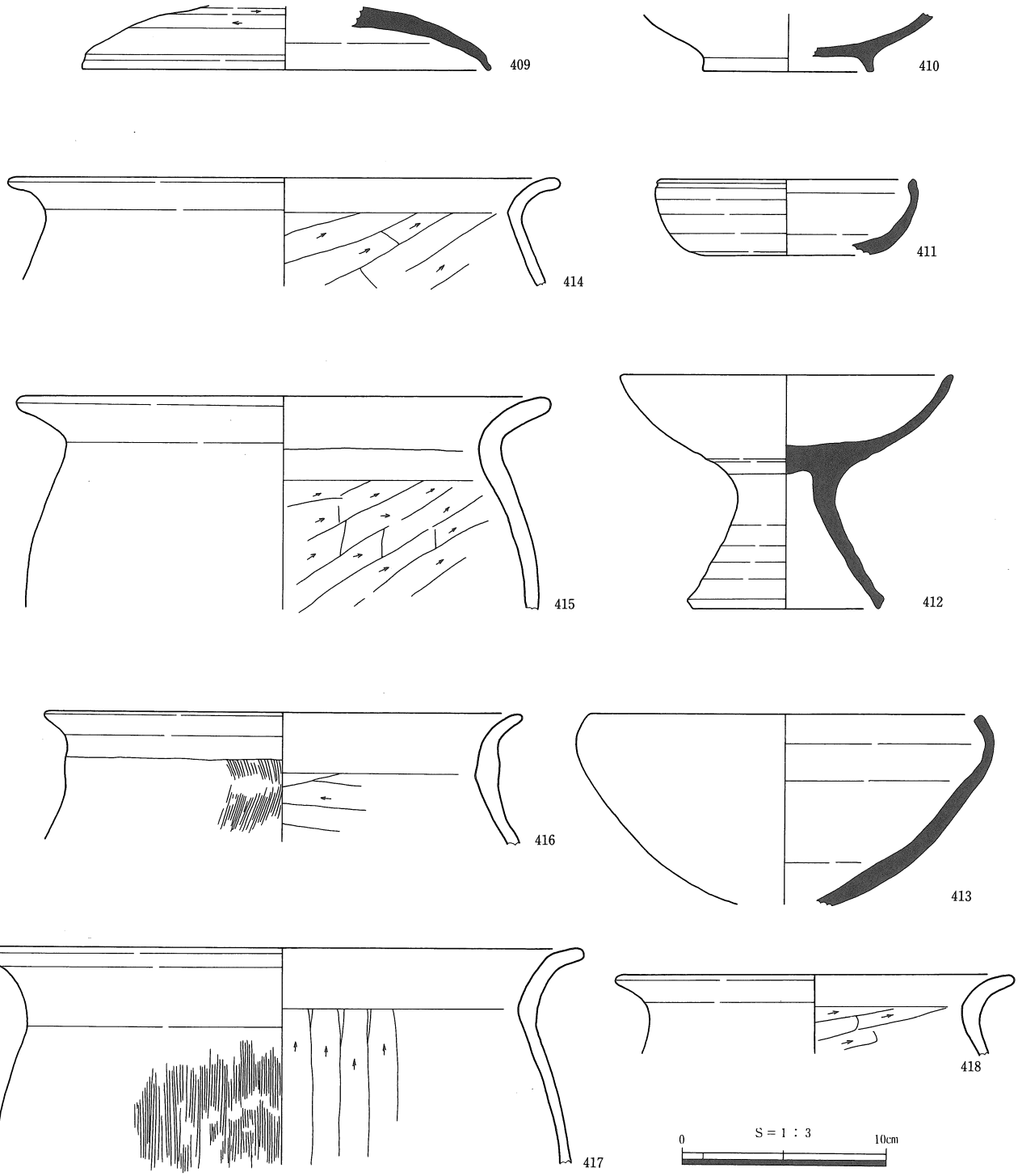
第105図　ＳＳ－14断面実測図

間1.3～1.6mで、ピットの径は35～50cmである。後背の壁面までの距離は、１m前後を測る。壁面の裾部には溝は確認されなかった。遺物は、壁面上から須恵器の坏蓋（317）、床面からやや浮いた位置で須恵器の坏蓋（316）が出土した。316は、土層断面から、遺構面上に相当するレベルに位置するものと推察される。316は、天井中心部までヘラケズリするものであり、陰田編年の５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に比定される。ＳＳ－６、７の出土遺物は、確実にこれら遺構に伴うものとは言い難く、両遺構の厳密な前後関係を判断するにいたらなかった。

ＳＳ－13（第103、104図・写真図版３、18、22、79）は、ＳＳ－６から面的に連なるテラスで、標高25.5～27mに位置し、東西17m、南北4.1mの範囲で検出した。テラス上では37基のピットを検出したが、建物を構成するピット列を明瞭に把握できなかった。強いて挙げれば、Ｐ．１～４の列が指摘できようか。３間で桁行長5.9mを測り、柱間は１～1.6m、ピットの径は30～60cmである。遺物は、テラスの西側壁面で須恵器の坏（401）と皿（405）、土師器の甕（407）が、中央部壁面裾部から須恵器の坏（403）、土錘（408）が、中央部やや東寄りの壁面裾部で須恵器の坏（400、402）、皿（404）、甕（406）が出土した。400、402、403、405は底部糸切り、401、404は底部糸切り後ナデ消している。406は、残存器高60cmを測る大型の甕である。遺構の時期は、遺物から８世紀後半以降と考える。

ＳＳ－17（第111～113図・写真図版22、23）は、標高25.5～27mに位置し、東西22m、南北4.8mの範囲で検出した。テラス上では26基のピットを検出したが、建物を構成するピット列を明瞭に把握できなかった。Ｐ．５、７、９の列は建物を構成する可能性がある。２間で桁行長4.2mを測り、柱間は1.1～1.25m、ピットの径は60cmである。岩盤で遺構検出したが、土層断面によれば、盛土により床面を造成していたようである。遺物は、Ｐ．４の埋土中から須恵器の坏（432）、テラス上から須恵器の坏（433）、甕（434）、土師器の甕（435）、ジャスパー製の管玉（436）が出土した。432、433は底部糸切りで、陰田編年の10式（８世紀後半）に比定される。

ＳＳ－19（第114、115図・写真図版22、23）は、標高26～26.5mに位置し、東西5.5m、南北２mの範囲で検出した。平坦面上にはＰ．１～３が並び、さらにテラス外にＰ．４が伸びる。テラスの範囲は東西5.5m、南北２mである。Ｐ．１～４、７を柱とする建物を構成すると思われ、桁行３間・梁行１間で、桁行長4.8m、梁行



第106図　ＳＳ－14出土遺物実測図

長2.4mを測る。柱間は1～1.6m、ピットの径は30～40cmである。岩脈を平坦に加工している。遺物は出土していない。

④のＳＳ－6、7、13、17、19のグループは、ＳＳ－6、7→ＳＳ－17→ＳＳ－13の順に構築されたものと思われる。ＳＳ－19については、時期不明である。

⑤ＳＳ－15、16

本エリアでは、ＳＳ－15、16を検出した。Ａ区東側の丘陵斜面部に構築されており、標高27.5～29.5mを測る。ともに西側は流失している。ＳＳ－16の北側にはＳＣ－5（溝状遺構）が走り、上方には、ＳＩ－3（弥生時代後期後半の竪穴住居跡）が存在する。

ＳＳ－15（第107～109図・写真図版23）は、標高28.2～28.4mに位置し、長さは溝4南端～ＳＳ－15南端で約12m、奥行きは最大約5mを測る。残存壁高は1mを超える。東壁中央付近には床面より約20cm上方に、幅約15cm、深さ約2cmを測る溝（溝5）を、また床面南端部の壁面裾部には、幅約20cm、深さ約5cmを測る溝（溝6）を検出した。溝5は約4.5m、溝6は約2.2mにわたって検出した。

遺構面には数基のピットを検出しているが、このうちＳＳ－5に伴うものは31基と考える。ピットの配置状況から、Ｐ.10、12、14、17、18を主柱穴とする建物の存在が推測される。これらのピットは、直径40～50cm、深さ約40～55cmを測り、ピット間距離は約2mを測る。溝5はこの建物に伴う溝と考える。

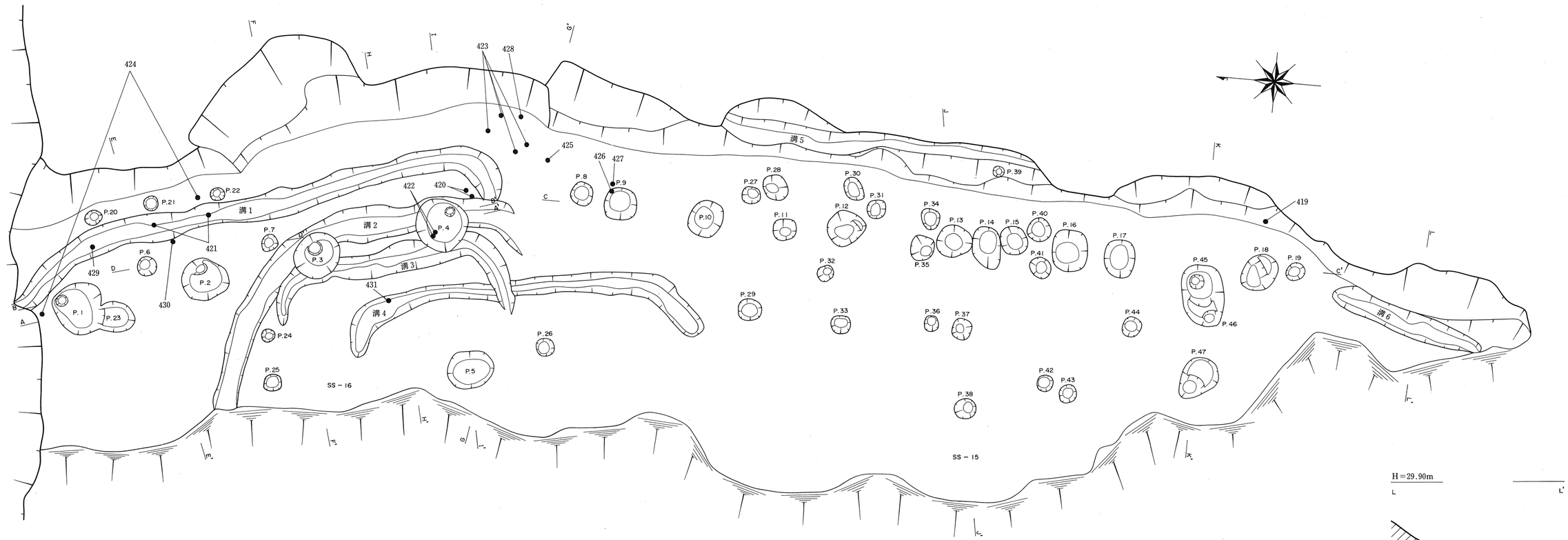
遺物は、須恵器の坏身（419）が出土した。底部には回転糸切り痕が見られる。Ｐ.18東側壁面直上に出土した。陰田編年10式（8世紀後半）に比定される。

ＳＳ－16（第107、108、110図・写真図版23、79）は、標高約28～28.4mに位置し、長さはＳＳ－16北端～溝4南端で約9.5m、奥行きは最大約5mを測る。北側にはＳＣ－5が走るが、切り合い関係は不明である。残存壁高は、Ｉ－Ｉ'ラインで約80cmを測る。床面には溝1～4の4本の溝を検出しており、それぞれに遺構面が形成されている。溝1に伴う遺構面をａ、溝2に伴う遺構面をｂ、溝3に伴う遺構面をｃ、溝4に伴う遺構面をｄとする。溝1は幅30～40cm、深さ約5～10cm、溝2は幅30～50cm、深さ約2～5cm、溝3は幅30～40cm、深さ約10cm、溝4は幅20～40cm、深さ約5cmを測る。Ｆ－Ｆ'、Ｇ－Ｇ'土層断面において、ｃがｂを切っていることが確認できることから、ｃはａ、ｂより新しい遺構と判断する。ｃは、1辺が約3mを測る方形の竪穴住居的な形状を呈する。また、Ｅ－Ｅ'土層断面の11、12層上面、およびＦ－Ｆ'土層断面の18～23、27層上面、Ｇ－Ｇ'土層断面の6、7、14層上面には、溝1東側平坦面の延長部と考える遺構面（ｅ）を確認した。

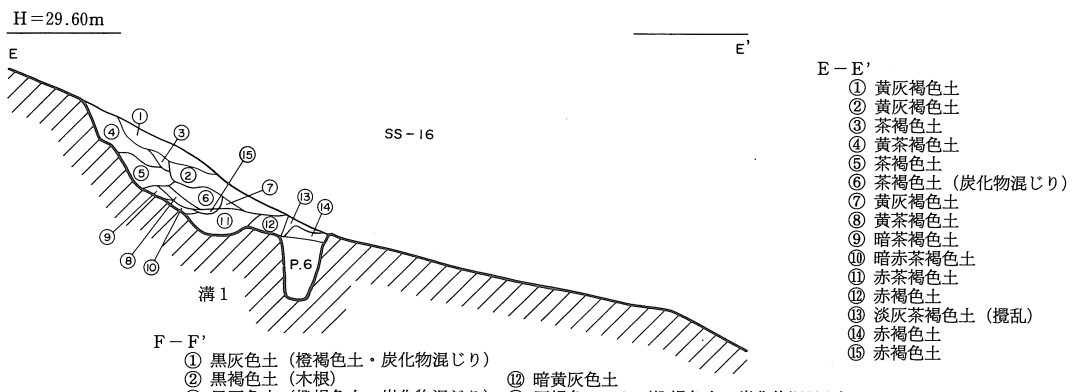
遺構面には数基のピットを検出したが、このうちＳＳ－16に伴うピットは16基と考える。ピットの配置状況から、Ｐ.1～4を主柱穴とする建物の存在が推測される。これらのピットは、直径50～70cm、深さ50～70cmを測る。ピット間距離は、Ｐ.1、2とＰ.3、4がそれぞれ約2m、Ｐ.2、3が約1.8mを測る。ａに伴う建物と考える。遺物は、須恵器、土師器、土製品、鍛冶関連遺物が出土した。420～427は須恵器である。420は坏蓋である。かえりと輪状のつまみをもつ。かえりは小さく、受部から突出しない。421～425は坏身である。立ち上がりをもたず、口縁端部は丸くおさめている。426は無蓋高坏の坏部である。口縁部は外反する。427は長頸壺の肩部である。428は土師器の鉄鉢形土器である。内外面には赤色顔料が塗布してある。429は土師器の甕の口縁部である。430は甑の把手である。431は椀形鍛冶滓である。85ｇを量る。溝4底面直上に出土した。他に炉壁8.4ｇ分も出土している。遺物の出土レベルおよびｅの床面レベルから、420、422～428、430はｅ床面上にやや浮いた状態で出土したと考える。これらの遺物はｅに伴う初期の転落物と推測する。ただし428は、Ｈ－Ｈ'ラインにおいては、かなり浮いた状態で出土しているように見えるが、出土地点に最も近いＧ－Ｇ'ラインにおいては、ほぼｅの壁面肩部（6層上面）直上に出土しているのが確認できる。421、429は溝1上方に浮いた状態で出土しており、出土レベルからａに伴う転落物と推測する。遺物は陰田編年10式（8世紀後半）に比定される。

ＳＳ－15、16は、切り合い関係や出土遺物からは構築順序を判断できなかった。ＳＳ－16におけるａ～ｄの構築順序については、ａ→ｃ→ｅ、ｂ→ｃ→ｅを確認するに止まった。

⑥ＳＳ－9～12

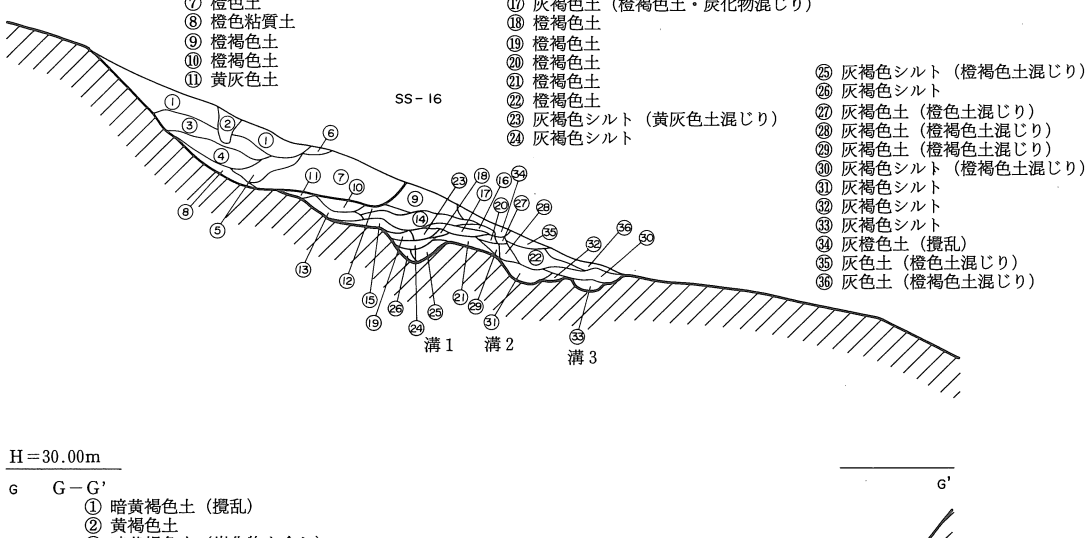


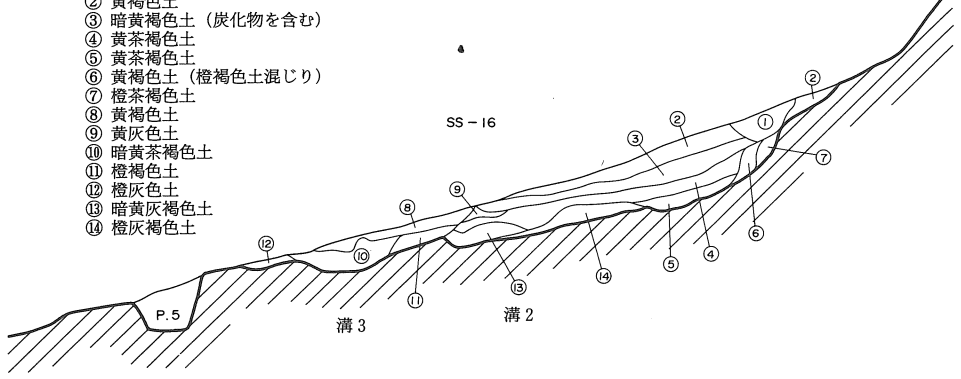
第107図　ＳＳ－15、16実測図



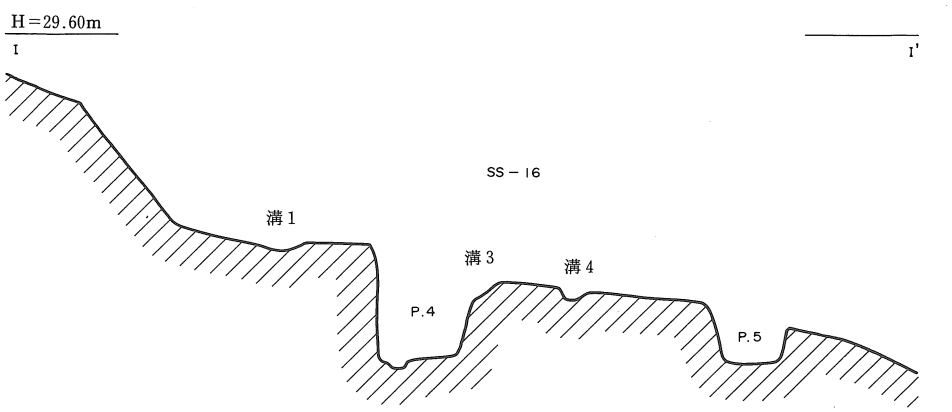
E－E'
① 黄灰褐色土
② 黄灰褐色土
③ 茶褐色土
④ 黄茶褐色土
⑤ 茶褐色土
⑥ 茶褐色土（炭化物混じり）
⑦ 黄灰褐色土
⑧ 黄茶褐色土
⑨ 暗茶褐色土
⑩ 暗赤茶褐色土
⑪ 赤茶褐色土
⑫ 赤褐色土
⑬ 淡灰茶褐色土（撹乱）
⑭ 赤褐色土
⑮ 赤褐色土

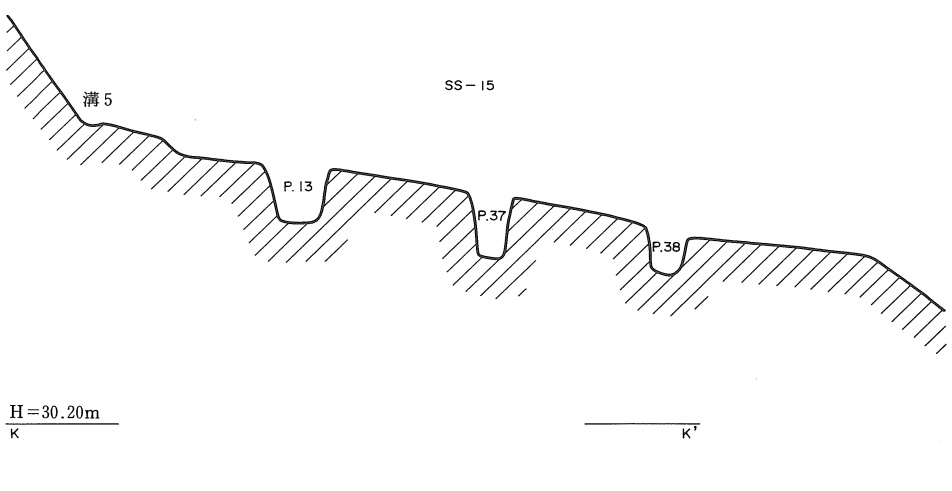
F－F'
① 黒灰色土（橙褐色土・炭化物混じり）
② 黒褐色土（木根）
③ 黒灰色土（橙褐色土・炭化物混じり）
④ 黒灰色土（橙褐色土・炭化物混じり）
⑤ 黒褐色土（橙褐色土・炭化物混じり）
⑥ 暗黄灰色土
⑦ 橙色土
⑧ 橙色粘質土
⑨ 橙褐色土
⑩ 橙褐色土
⑪ 黄灰色土
⑫ 暗黄灰色土
⑬ 灰褐色シルト（橙褐色土・炭化物混じり）
⑭ 灰褐色シルト（炭化物混じり）
⑮ 灰褐色シルト（炭化物混じり）
⑯ 暗橙灰色土（炭化物混じり）
⑰ 灰褐色土（橙褐色土・炭化物混じり）
⑱ 橙褐色土
⑲ 橙褐色土
⑳ 橙褐色土
㉑ 橙褐色土
㉒ 橙褐色土
㉓ 灰褐色シルト（黄灰色土混じり）
㉔ 灰褐色シルト
㉕ 灰褐色シルト（橙褐色土混じり）
㉖ 灰褐色シルト
㉗ 灰褐色土（橙色土混じり）
㉘ 灰褐色土（橙褐色土混じり）
㉙ 灰褐色土（橙褐色土混じり）
㉚ 灰褐色シルト（橙褐色土混じり）
㉛ 灰褐色シルト
㉜ 灰褐色シルト
㉝ 灰褐色シルト
㉞ 灰橙色土（撹乱）
㉟ 灰色土（橙色土混じり）
㊱ 灰色土（橙褐色土混じり）

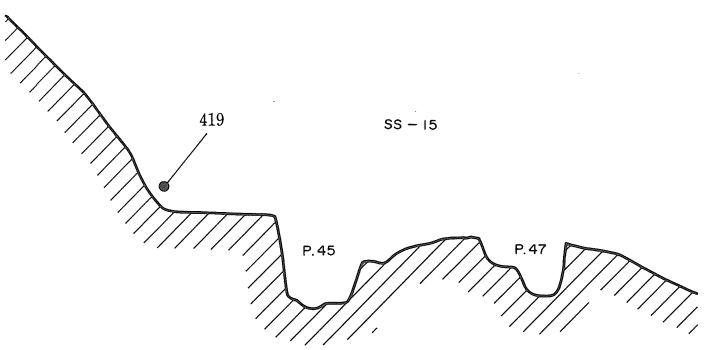


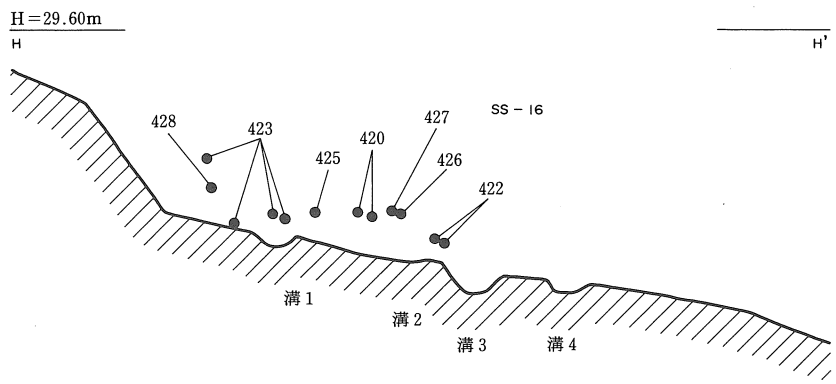


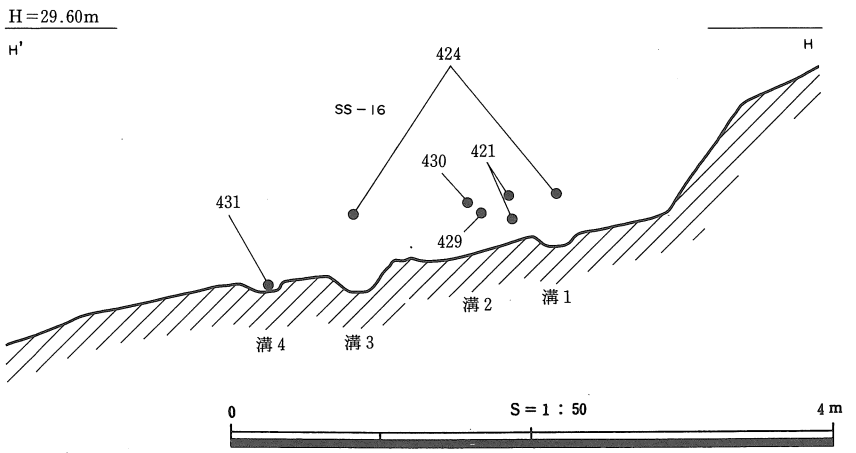
① 暗黄褐色土（撹乱）
② 黄褐色土
③ 暗黄褐色土（炭化物を含む）
④ 黄茶褐色土
⑤ 黄茶褐色土
⑥ 黄褐色土（橙褐色土混じり）
⑦ 橙茶褐色土
⑧ 黄褐色土
⑨ 黄灰色土
⑩ 暗黄茶褐色土
⑪ 橙褐色土
⑫ 橙灰色土
⑬ 暗黄灰褐色土
⑭ 橙灰褐色土



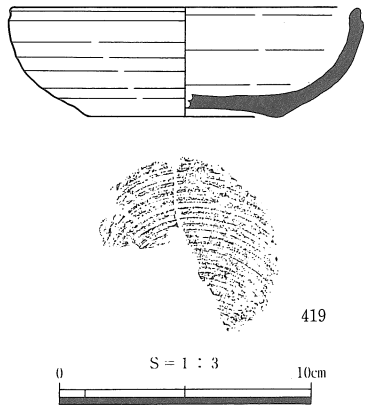








第108図　ＳＳ－15、16断面実測図



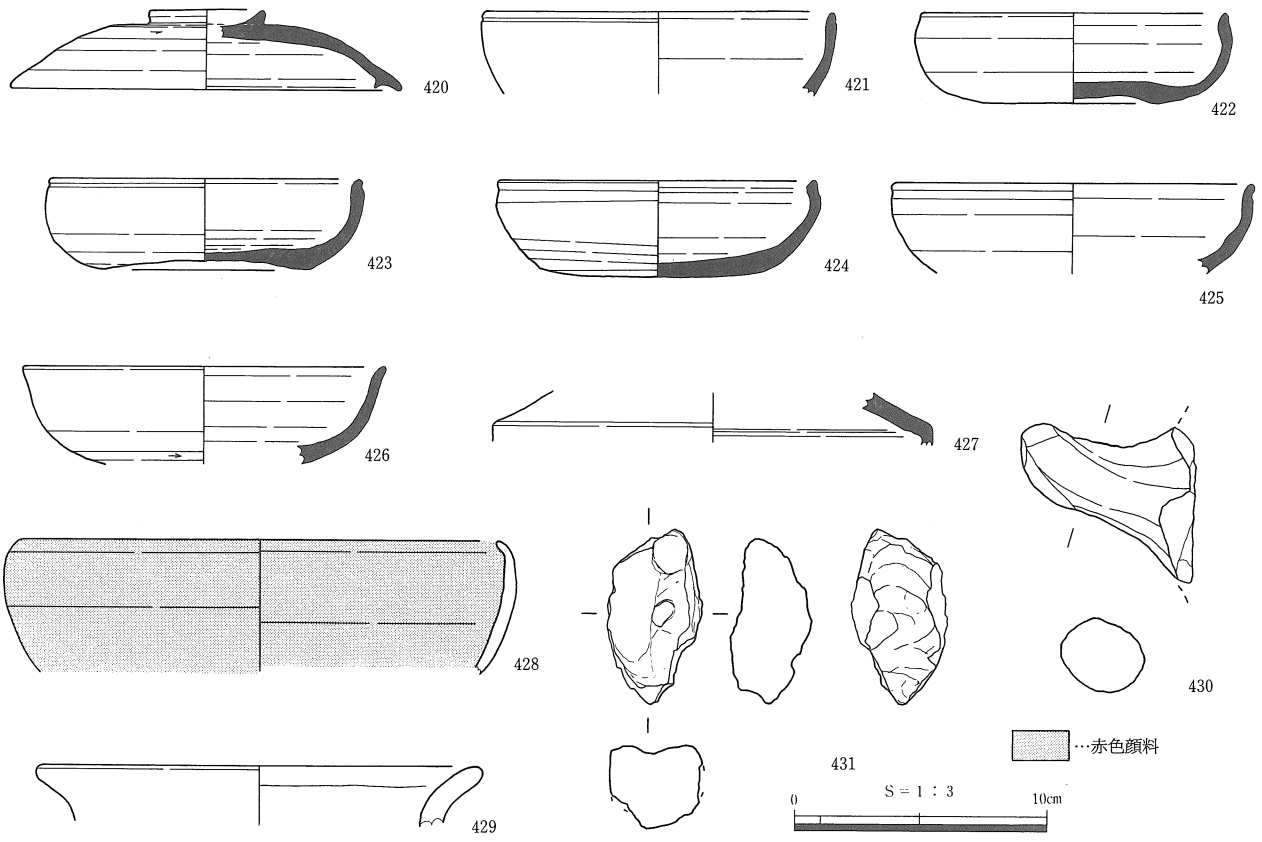
第109図　ＳＳ－15出土遺物実測図

本エリアでは、ＳＳ－９～12を互いに近接して検出した。Ａ区北側の丘陵斜面部に構築されており、標高29.5～32.5ｍを測る。いずれも南側は流失している。エリア内からは、ＳＳ－12東側にＳＫ－４、ＳＳ－９上にＳＫ－５を検出している。

ＳＳ－９（第94～98図・写真図版19～21、79）は、標高29.5～30ｍに位置し、斜面上方にはＳＳ－12が、西側にはＳＳ－10が隣接する。検出面には５本の溝（溝１～５）を検出した。溝１は幅30～40cm、深さ２～５cm、溝２は幅約30cm、深さ約15cm、溝３は幅30～50cm、深さ約10cm、溝４は幅約30cm、深さ約10cm、溝５は幅30～40cm、深さ約５～10cmを測る。溝５は約7.5ｍにわたって検出した。Ｈ－Ｈ'土層断面から、ＳＳ－９床面より約40cm上方に側溝を有する遺構面の存在を確認した。位置関係から、側溝は溝４の延長部と考える。溝４をさらに西側に延長すると、延長線上に溝１が存在する。溝１東端と溝４西端の底面検出レベルは、ともに標高約30ｍを測りほぼ一致していることから、溝１、４は同一の側溝であると判断した。

ＳＳ－９は、溝２に伴う遺構面（ａ）、溝３に伴う遺構面（ｂ）、溝１・４に伴う遺構面（ｃ）の３段階の遺構面をもつと考える。ａとｂは、切り合い関係からａが古いと判断する。溝５は、ａ、ｂに伴う溝であり、排水溝と考える。ｃとａは、Ｈ－Ｈ'土層断面からａが古いと確認でき、ａ→ｂ→ｃの順に床面が変遷したものと考える。ａは、検出面で長さ約1.5ｍ、奥行き約１ｍ、残存壁高は約30cmを測る。ｂは、長さ約4.5ｍ、奥行き１～1.5ｍ、残存壁高は約30cmを測る。ａ、ｂは方形の平面プランを呈する竪穴住居的な遺構面であり、後背部に排水溝をもつという点で、ＳＩ－10に共通する。ｃは、長さ約９ｍ、奥行き約２～2.5ｍ、残存壁高はＪ－Ｊ'ラインで約15cmを測る。ａ床面より約30cm、ｂ床面より約40cm上方に位置する。

ＳＳ－９の床面には15基のピットを検出した。ピットの配置状況から、Ｐ.21～24を柱穴とする建物の存在が



第110図　ＳＳ－16出土遺物実測図

推測される。ｃに関連する建物と考える。Ｐ.21～24は直径約35～60cm、深さ約20～25cmを測る。ピット間距離は、Ｐ.21、22、24で約2.2m、Ｐ.22、23で約２ｍを測る。

遺物は、須恵器、土師器、鍛冶関連遺物が出土した。370～378は須恵器である。370、371は坏蓋である。ともに口縁部は内湾する。372～376は坏身である。立ち上がりは内傾し、372、374、375の立ち上がりは小さめで、受部からあまり突出しない。374底部には×状のヘラ記号が見られる。376は立ち上がりを欠く。ｃの床面レベルから出土しており、遺構に伴う遺物と考える。377、378は高坏である。377は無蓋高坏であり、脚部には２方に線状の透かしを施している。378は脚部である。三角形または梯形の透かしを施している。379は土師器の甕である。胴部下半を欠く。380、381は椀形鍛冶滓である。381は溝２肩部直上に出土した。鍛冶関係遺物として、含鉄鉄滓または鉄塊系遺物と思われるもの44.4ｇ分、椀形鍛冶滓260ｇ分、その他の鉄滓223ｇ分が出土した。376、381を除いて、遺物は浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。380は381と近接して出土しており、ａに伴う初期の転落物と判断する。370、378、395はいずれも溝３上にやや浮いた状態で出土しており、ｂに伴う初期の転落物とも推測される。その他の遺物は、ｃ構築後の転落物と考える。370、373は陰田編年６式（７世紀前葉）に比定され、ｂの時期に近いものと判断する。371、372、374～376は陰田編年７式（７世紀中葉）に比定され、ｃの時期に近いものと判断する。

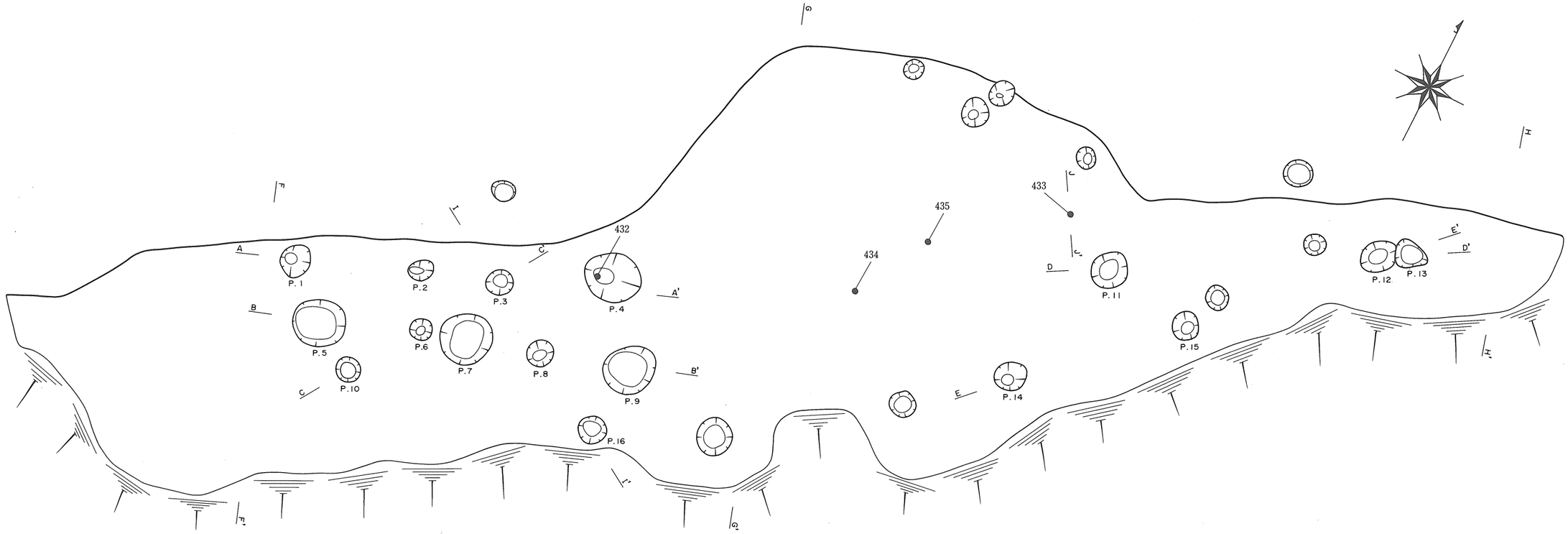
ＳＳ－10（第94、96、97、99図・写真図版19～21）は、標高29.5～30ｍに位置し、東端でＳＳ－９、12と切り合う。長さ約16m、奥行きは東側床面で最大約３ｍを測る。残存壁高は、Ｌ－Ｌ'ラインで約80cmを測る。西側の壁面上部には、検出面で幅25～30cm、深さ２～５cmを測る溝（溝７）を検出した。Ｌ－Ｌ'土層断面において、４、７層上面にＳＳ－12床面が確認できることから、ＳＳ－10はＳＳ－12より古い遺構と判断する。断面には、床面の低位側を盛土、造成した形跡も窺える。

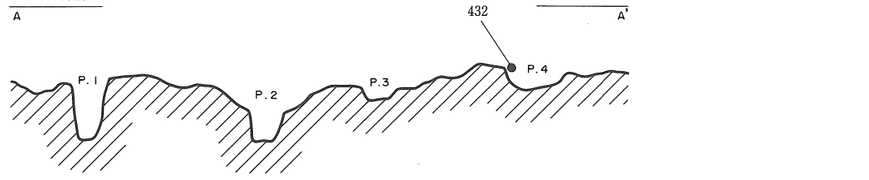
遺構面には、33基のピットを検出した。ピットの配置状況から、Ｐ.１～４、Ｐ.５～７を主柱穴とする建物の存在が推測される。Ｐ.１～４は、直径40～50cm、深さ約30～50cm、ピット間距離は1.5～1.7ｍを測る。Ｐ.５～７は、直径約30cm、深さ約20cm、ピット間距離は1.1～1.3ｍを測る。

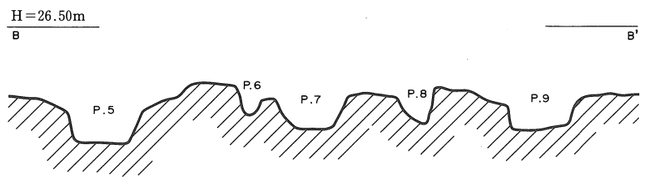
遺物は、須恵器、土師器、土製品、石製品が出土した。382は須恵器の坏蓋である。383は高坏である。脚部には２方に梯形の透かしを施している。384、385は土師器の甕である。384は口縁部であり、385は肩部である。386は支脚である。387は砥石で、表面は滑らかに磨耗している。石材は花崗岩である。遺物は全て浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。直接的に遺構の時期を示すものは見られないが、382は陰田編年７式（７世紀中葉）に比定される。

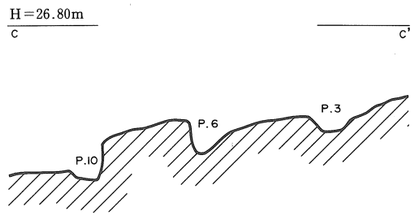
ＳＳ－11（第100、101図・写真図版20、21）は、標高約32.2ｍに位置し、長さ約5.5m、奥行きは最大約1.5mを測る。⑥エリア内の他の遺構とはやや距離を置いて、エリア東端に存在する。残存壁高は、Ｄ－Ｄ'ラインで約80cmを測る。

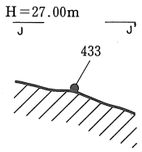
床面にはピット２基（Ｐ.１、２）を検出した。Ｐ.１は直径約40cm、深さ約60cm、Ｐ.２は直径約40cm、深さ約40cmを測る。ピット間距離は約2.3ｍを測り、Ｐ.１、２を柱穴とする建物の存在が推測される。

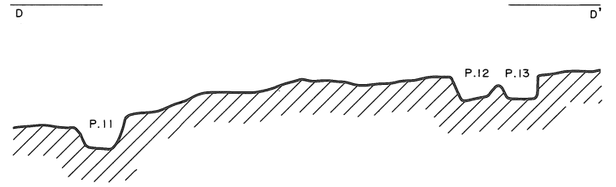


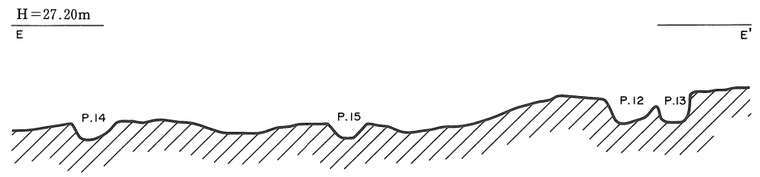


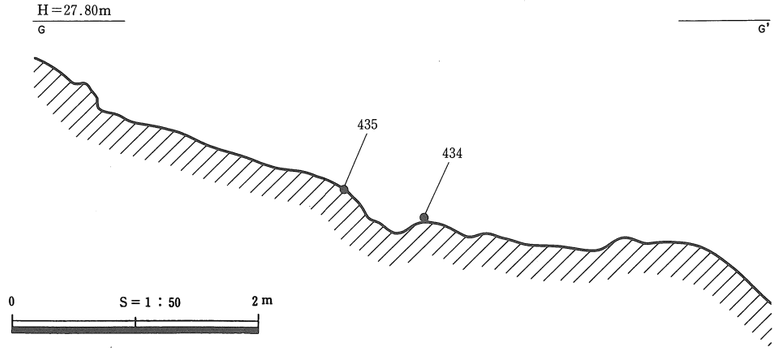




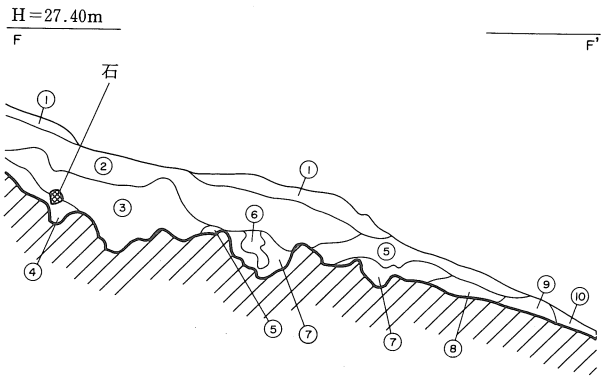




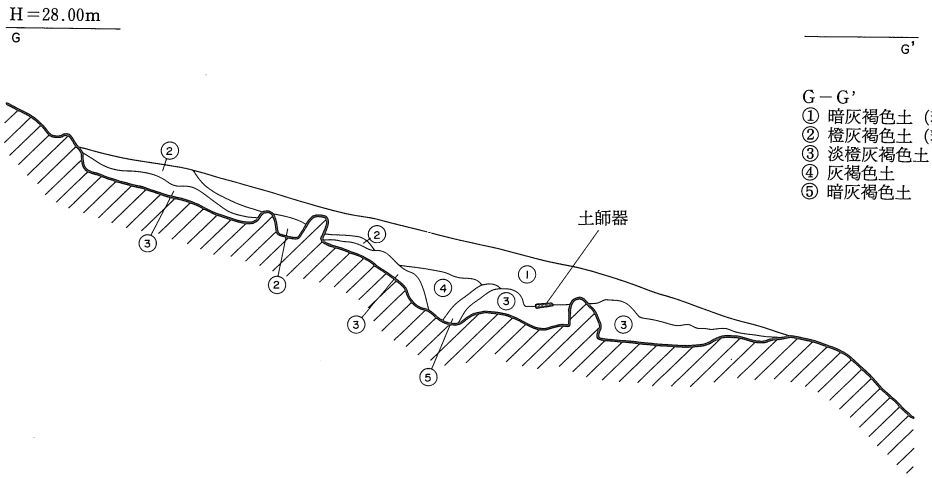




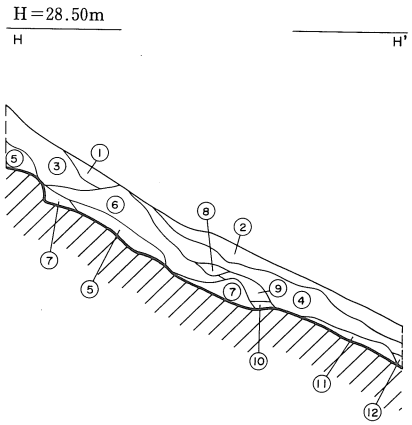
第111図　ＳＳ－17実測図



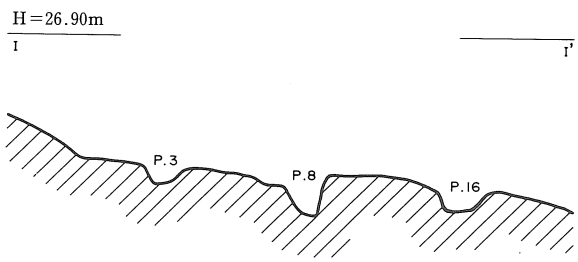
F－F'
① 暗灰色土（礫混じり）
② 暗灰褐色土（礫混じり）
③ 灰色土（礫混じり）
④ 灰褐色土(黄灰色礫ブロック・礫混じり)
⑤ 黄灰色土 （礫混じり）
⑥ 淡黄色礫ブロック
⑦ 黄灰色土
⑧ 橙褐色土（淡黄色礫混じり）
⑨ 橙褐色礫（灰色・白色粒混じり）
⑩ 黒灰色土

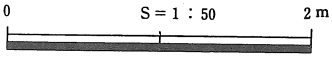


G－G'
① 暗灰褐色土（乳灰色粒混じり）
② 橙灰褐色土（乳灰色粒混じり）
③ 淡橙灰褐色土（乳灰色粒混じり）
④ 灰褐色土
⑤ 暗灰褐色土

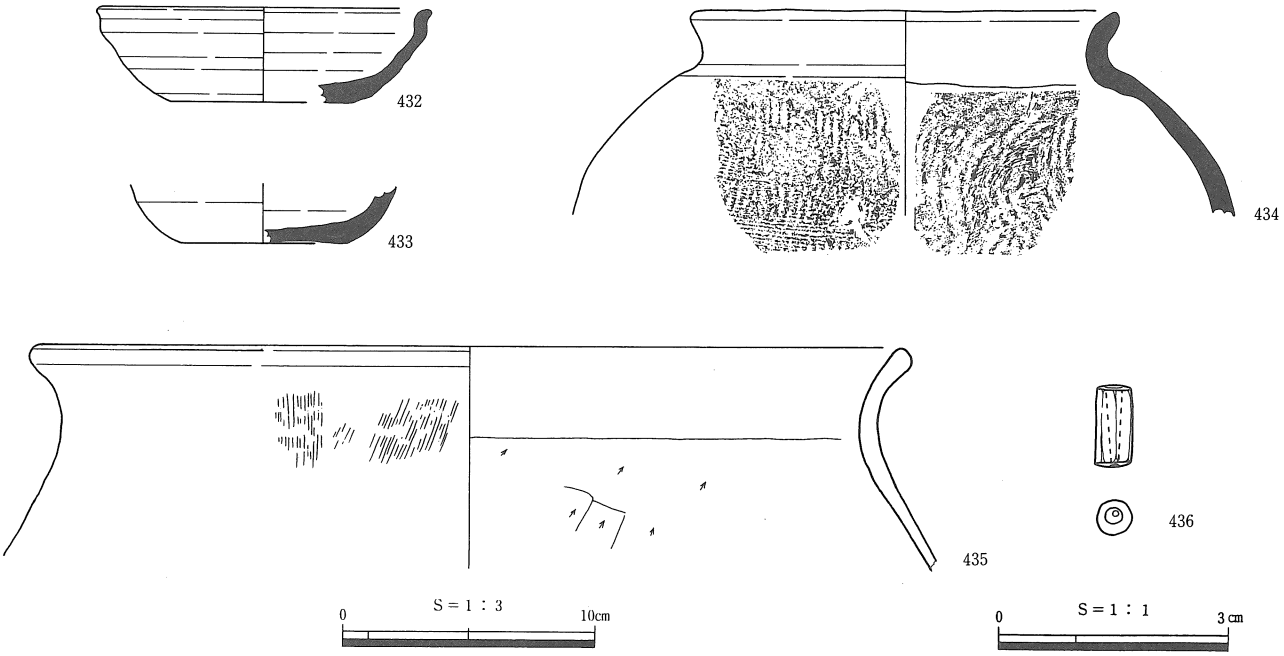


H－H'
① 暗灰色土
② 暗灰褐色土
③ 暗茶灰色土
④ 暗黄灰色土（礫混じり）
⑤ 暗茶灰褐色土（礫混じり）
⑥ 茶灰褐色土
⑦ 淡茶褐色土
⑧ 淡茶褐色土
⑨ 暗灰褐色土（黒色土混じり）
⑩ 暗灰褐色土
⑪ 暗灰褐色土
⑫ 暗灰褐色土





第112図　ＳＳ－17断面実測図



第113図　ＳＳ－17出土遺物実測図

遺物は、須恵器、土師器、土製品が出土した。388は須恵器の坏身である。立ち上がりは内傾して小さめで、受部からあまり突出していない。Ｐ．１北側に床面直上で出土した。389は土師器の甕の口縁部である。390は竈の庇である。これらの遺物は陰田編年７式（７世紀中葉）に比定される。

ＳＳ－12（第94～97、102図・写真図版19、20）は、標高約30.8～31.3mに位置し、斜面下方にはＳＳ－９、西側にはＳＳ－10、東側にはＳＫ－４が隣接する。長さ約10.5m、奥行き約1.5mを測る。残存壁高は、Ｈ－Ｈ'ラインで約70cmを測る。壁面裾部には、幅約15～25cm、深さ約２～５cmを測る溝（溝６）を検出した。Ｌ－Ｌ'土層断面から、ＳＳ－10より新しいと確認できる。

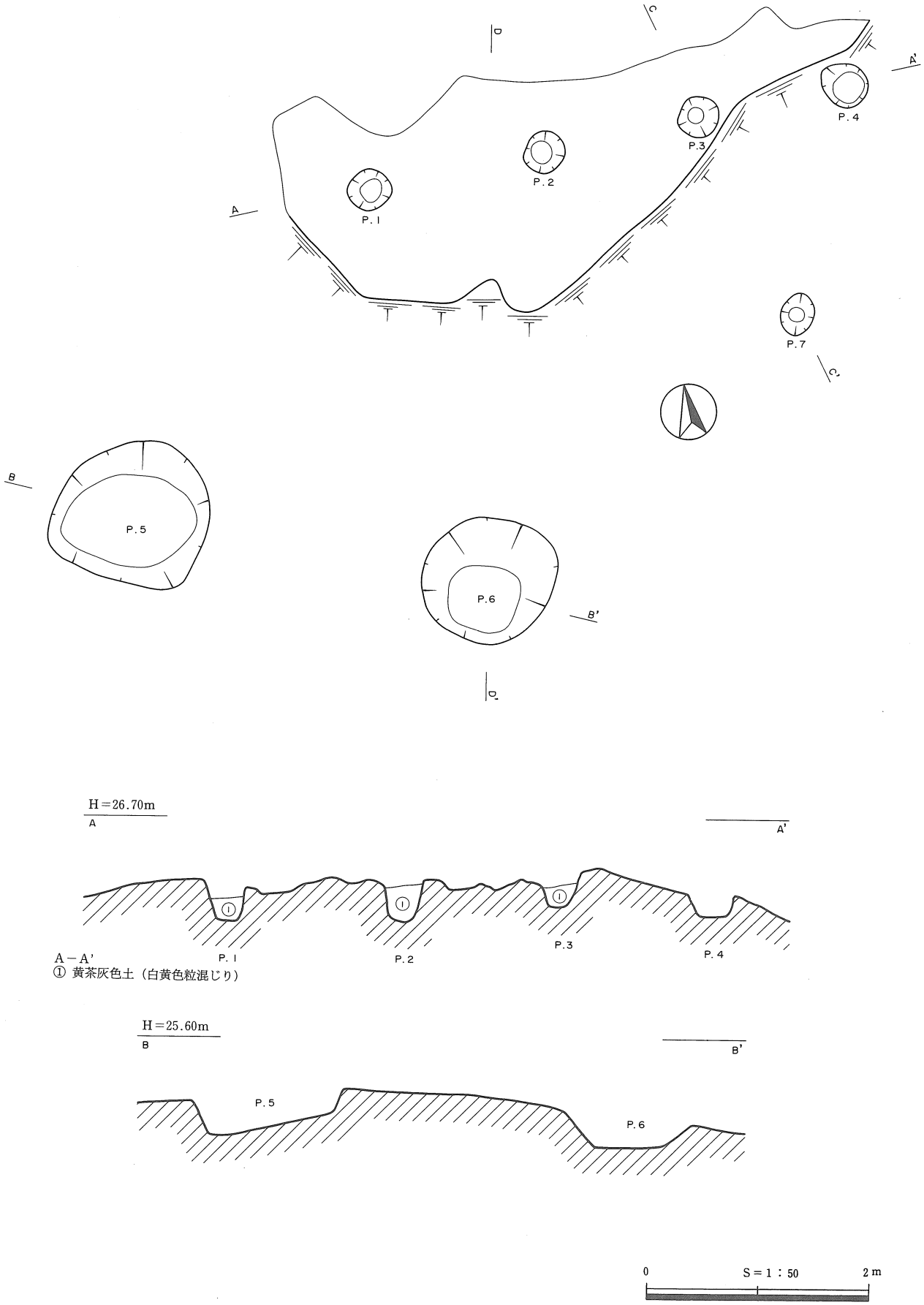
床面には10基のピットを検出した。ピットの配置状況から、Ｐ．８～10、Ｐ．11～14を主柱穴とする建物の存在が推測される。Ｐ．８～10は直径40～60cm、深さ20～40cm、ピット間距離は約1.7mを測る。Ｐ．11、14は直径約45cm、深さ約40cm、Ｐ．12、13は直径30～40cm、深さ約15cmを測る。ピット間距離は、Ｐ．11～13で約1.3mを測り、Ｐ．13、14で約１mを測る。

遺物は、須恵器、土師器、土製品が出土した。391～396は須恵器である。391～393は坏蓋である。392、393はかえりとつまみをもつ。392のつまみは欠損しているが、擬宝珠を呈するものと推測する。393は輪状のつまみである。394～396は坏身である。立ち上がりはいずれも内傾する。395は受部から立ち上がりが大きく突出しているが、394、396はあまり突出しない。397～399は土師器である。397は丹塗り土師器の皿である。398は甕の口縁部である。399は甑である。ＳＳ－12は、本来的には床面を盛土、造成していたと推測され、このことを考慮すると、遺物はほぼ床面あるいは造成埋土中から出土したと判断できる。３９５は、接合する破片がＳＳ－９のａの堆積埋土中とＳＳ－12の造成埋土中から別々に出土しており、ＳＳ－12がＳＳ－９のａより新しい遺構であることを示している。391、392、394、397は出土位置から、ＳＫ－４に伴う遺物の可能性もある。遺物は概ね陰田編年７式（７世紀中葉）に比定される。

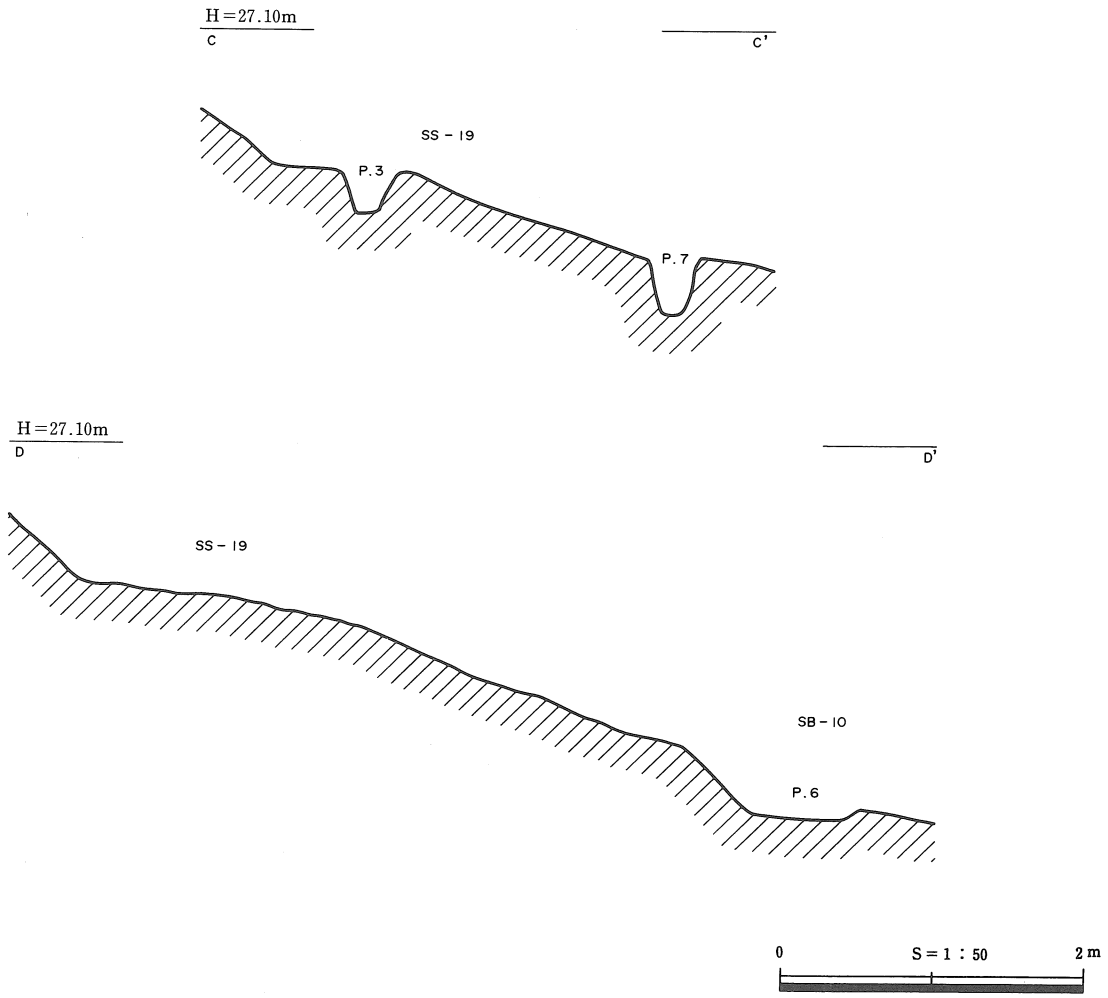
エリア内における各遺構の構築順序は明確ではない。その中でＳＳ－９は、ａ→ｂ→ｃの順に遺構面を構築したと考える。ＳＳ－12はＳＳ－９、10より新しいと判断するが、ＳＳ－９、10の構築順序は不明である。ＳＳ－９のｃ、11、12からはほぼ同時期の遺物が出土している。斜面下方から上方へと遺構を構築する傾向が窺える。

⑦ＳＳ－20～24

Ｂ区に所在するテラス状遺構である。西からＳＳ－22、20、21、24、23の順に並ぶ。ＳＳ－20（第116～128



第114図　ＳＳ－19、ＳＢ－10実測図

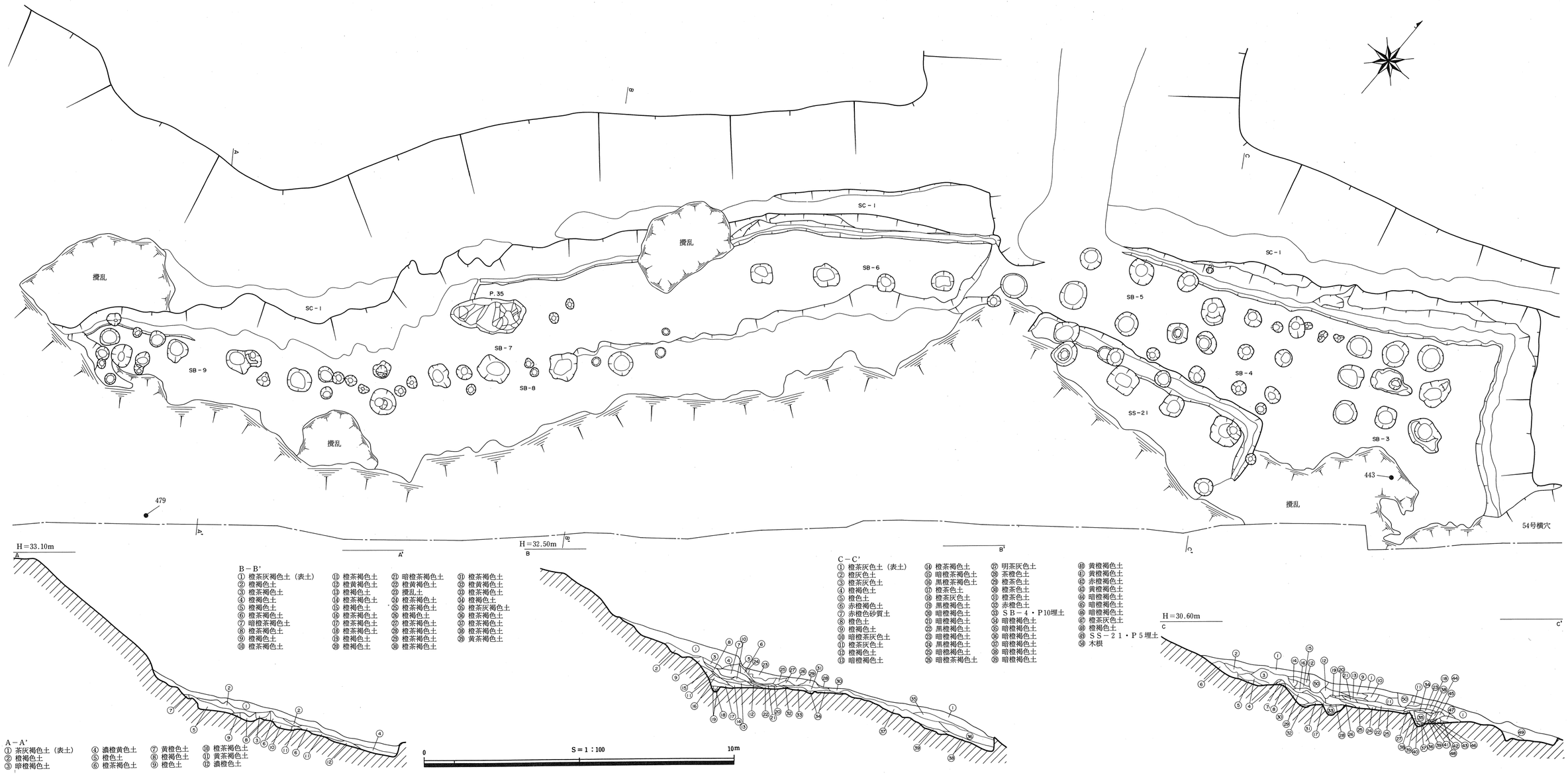


第115図　ＳＳ―19、ＳＢ―10断面実測図

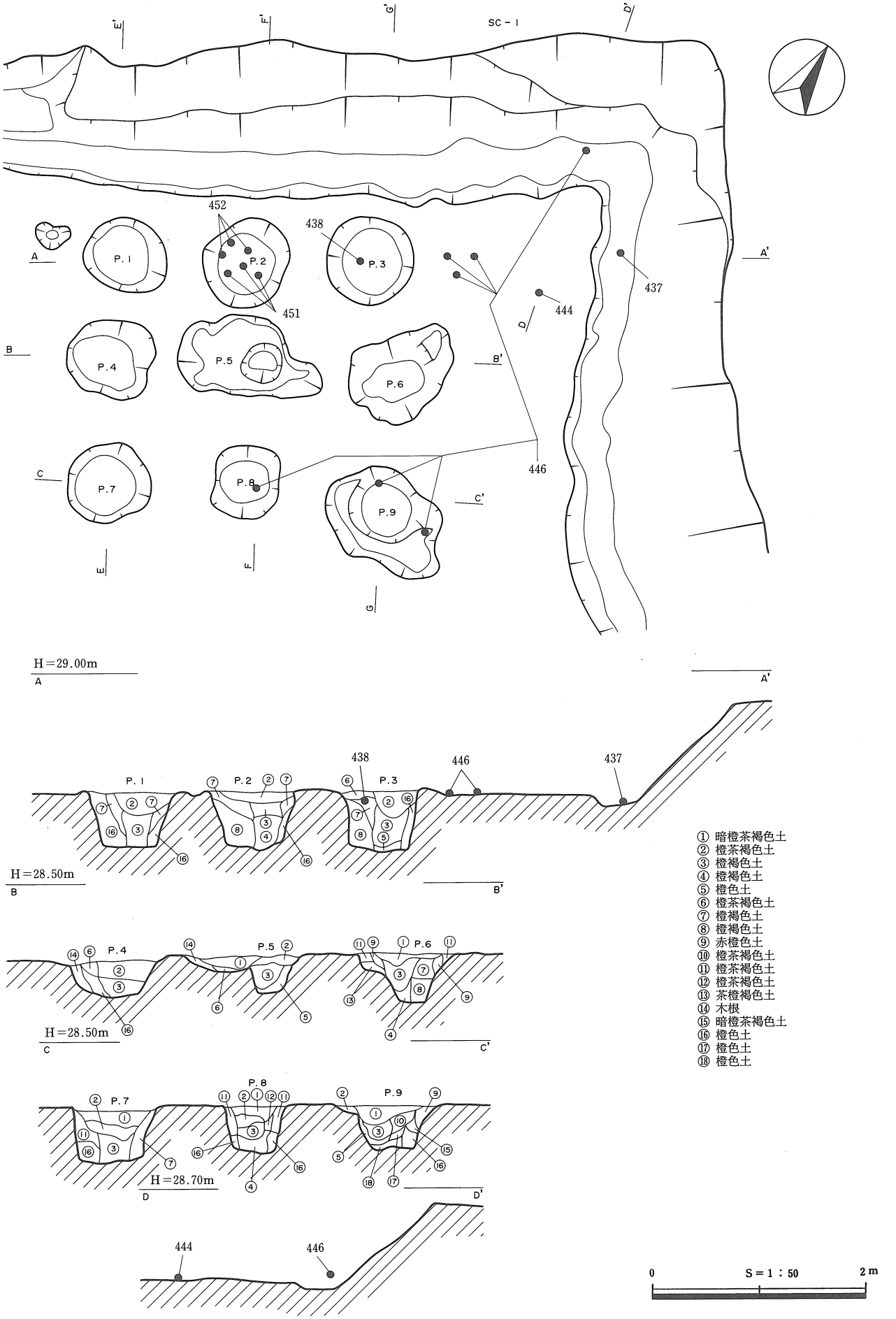
図・写真図版３、24～26、79、80）は、Ｂ区南側のほぼ中央部、標高27～29ｍの間に位置する長大なテラスである。東西46.5ｍ、南北５～７ｍの範囲で検出した。概して、攪乱、流出で平坦部の南側は完存していない。北側はテラスに平行してＳＣ－１が走り、これによって後背の壁面は上部を削平されている。西端は、ＳＣ－３や後世の攪乱により、遺存していない。東端は、壁をほぼ残しているものと思われる。テラスは、後背壁面裾部ラインの変化によって、３区画が把握される。東側の区画から中央の区画にかけて、壁沿いに溝が設けられている。東端壁で南方に折れ、鉤状をなす。幅25～50cm、深さ３～20cmを測る。東側の区画の溝は、中央の区画に比して幅広で浅い傾向にある。テラスの西側の区画においても、西端で溝を検出している。幅25～35cm、深さ５cmを測る。

東側の区画には、ＳＢ－３～６の４棟の掘立柱建物跡が検出され、東よりＳＢ－３→ＳＢ－６の順に並ぶ。ＳＢ－５とＳＢ－６の間は、丘陵尾根の鞍部にあたり、峠越えの往来道が通るため、テラスは流出している。ＳＢ－３～５は２間×２間の総柱の建物で、ＳＢ－６は１列のピット列である。

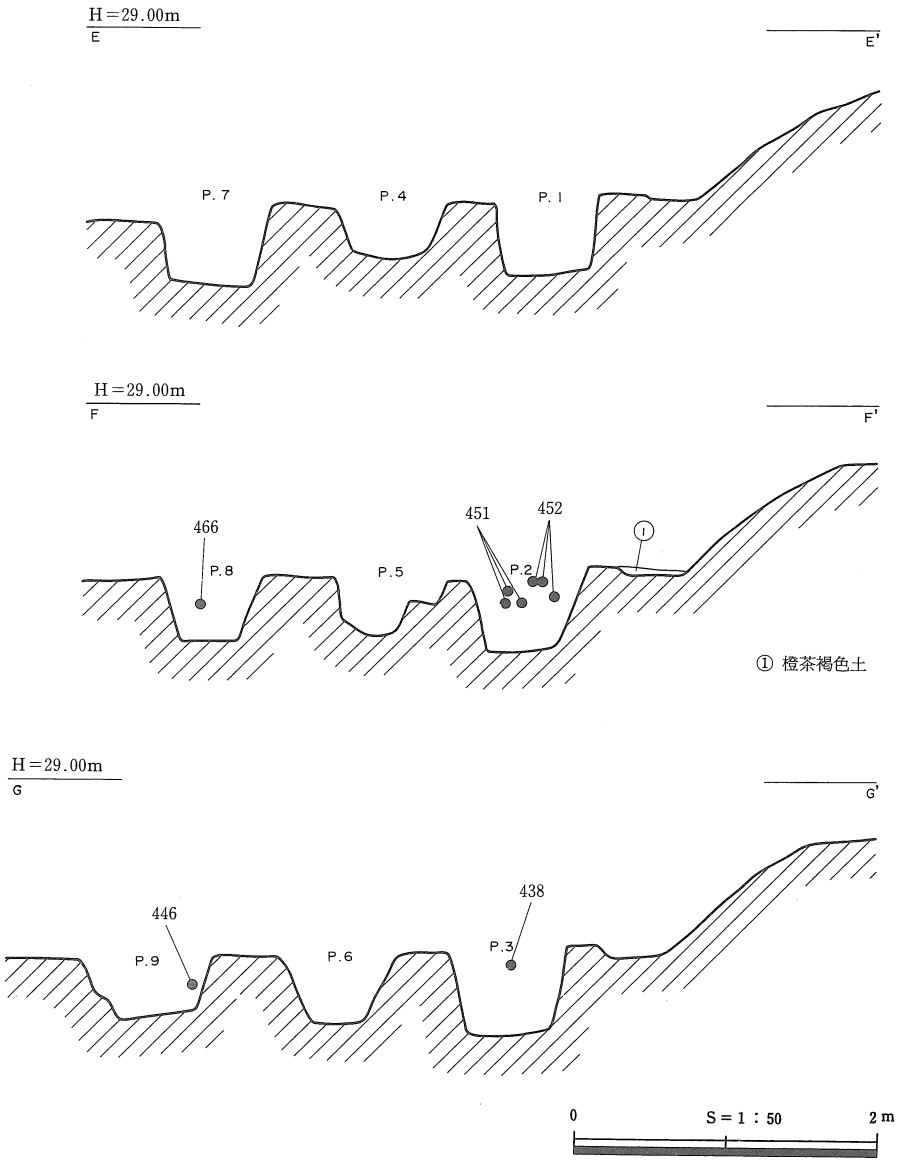
ＳＢ－３（第117、118、125図）は、Ｐ．１～９を柱穴とする、桁行２間・梁行２間の総柱の建物である。桁行長3.1～3.6ｍ、梁行長2.8～3.2ｍを測る。柱間は概ね20～55cmで、ピットの径は60～90cmである。ピットの径は大きく、柱間は比較的狭い。梁行方向の軸はＮ－33°－Ｗをとる。東側の溝との距離が1.2～1.6ｍを測るのに対し、北側後背の溝との距離は15～25cmと近い。溝が、雨落ち溝ではなく、後背丘陵からの流水を受け、排水するためのものであることを示すと考える。東側の壁高は95cm、北側の壁高は70～80cmを測る。建物の周辺でテラス床面の直上から出土した土器が、Ｐ．８、９の埋土中に検出した土器と接合した。446の須恵器の甕底部であ



第116図　ＳＳ－20、21実測図



第117図　ＳＳ―20・ＳＢ―３実測図

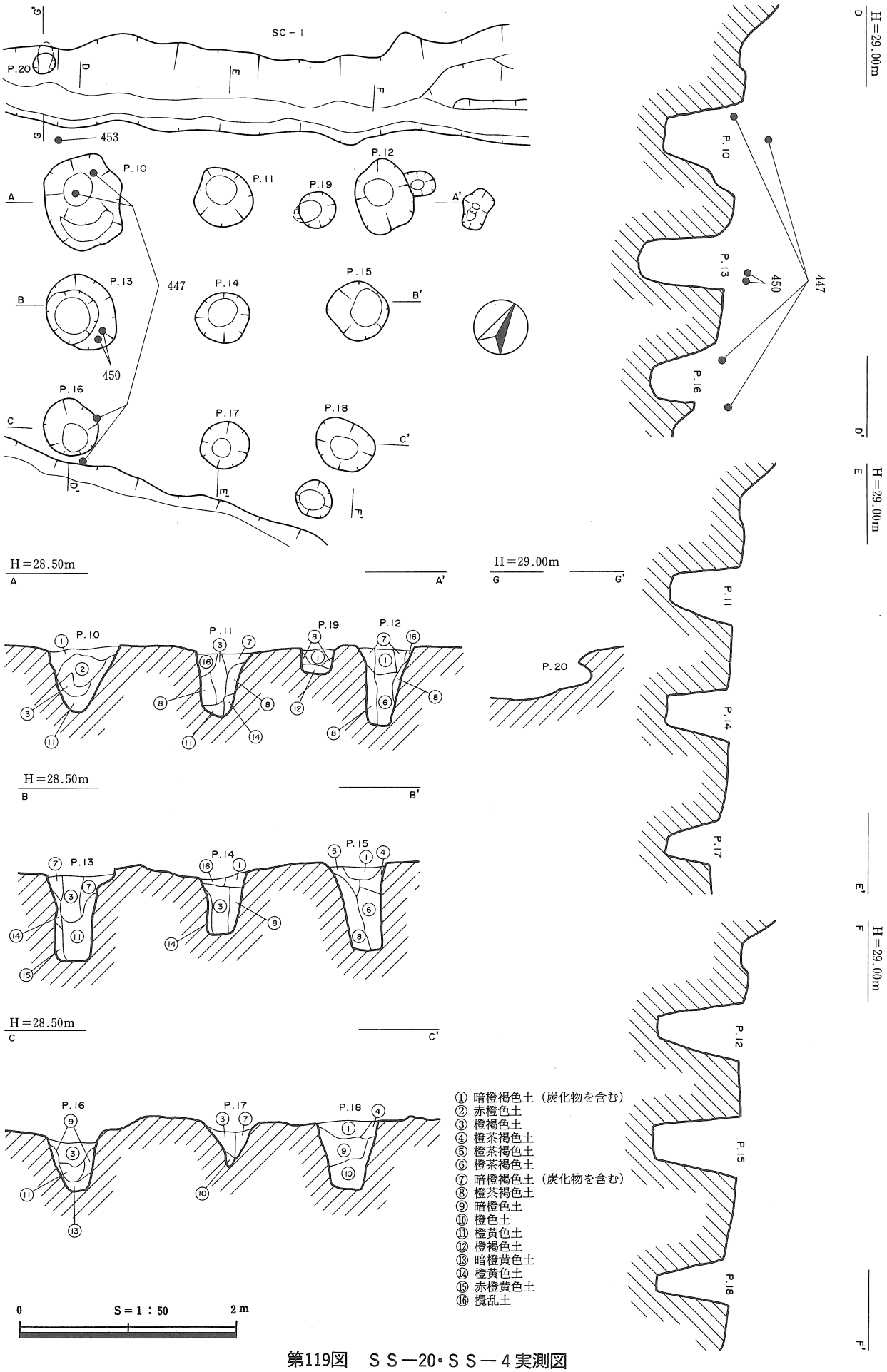


第118図　ＳＳ—20・ＳＢ—３断面実測図

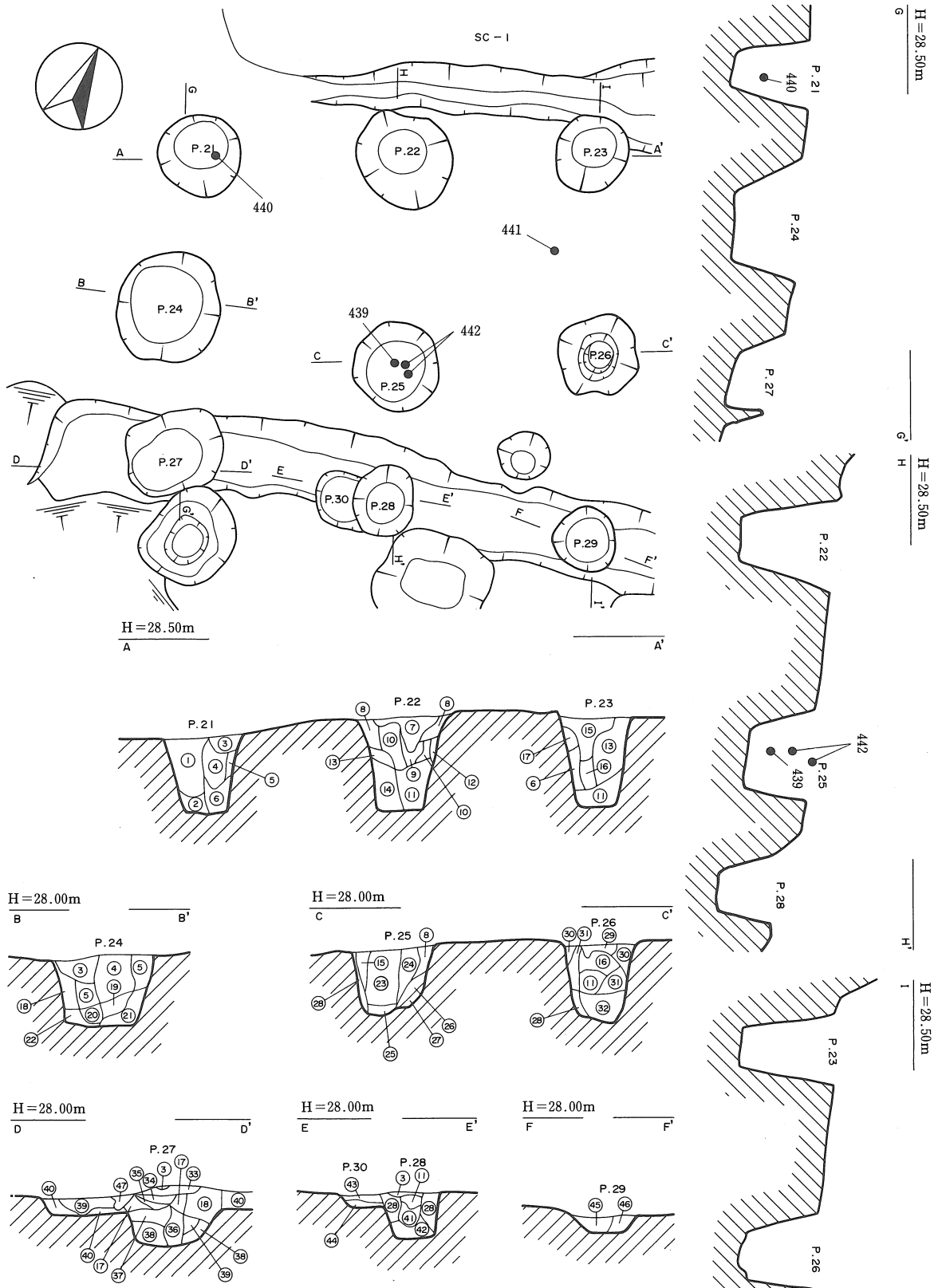
る。Ｐ．２の埋土中からは土師器の甕451、452が、Ｐ．３の埋土中からは須恵器の坏438が出土した。ＳＢ－３の周辺からは、437、443～445の須恵器が出土した。うち437は東側溝の底面直上から、444は建物東側のテラス床面直上から出土している。437はつまみの付く蓋、444は高台付きの皿である。443は、底部を糸切り後ナデ消す高台付きの坏である。445は坏であるが、底部をケズっている。437は陰田編年の９式（７世紀末～８世紀前半）に比定される。443は底部糸切り後ナデ調整するもので、８世紀前葉～中葉に比定されるものである（註14）。

ＳＢ－４（第119、125図）は、Ｐ．10～18を柱穴とする、桁行２間・梁行２間の総柱の建物である。桁行長3.1～3.45m、梁行長2.8～2.9ｍを測る。柱間は概ね20～75cmで、ピットの径は45～70cmである。柱間は比較的狭い。梁行方向の軸はＮ－30°－Ｗをとる。北側後背の溝との距離は20～30cmと近い。壁高は70cmを測る。Ｐ．10、13、16のライン上北側の壁面に、横坑状のピットＰ．20を検出した。入口部の径は20cm、奥行き15cmを測る。Ｐ．10、16両ピットの上方から出土した土器が接合した。447の須恵器甕である。Ｐ．13上方からは、土師器の甕450が出土し、Ｐ．10と北側の溝との間のテラス床面上から、砥石453が出土した。

ＳＢ－５（第120、125図）は、Ｐ．21～29を柱穴とする、桁行２間・梁行２間の総柱の建物である。Ｐ．27の土層断面より、ＳＳ－21の溝を切っているのが観察される。桁行長3.9～4.35m、梁行長3.2～3.7ｍを測る。柱

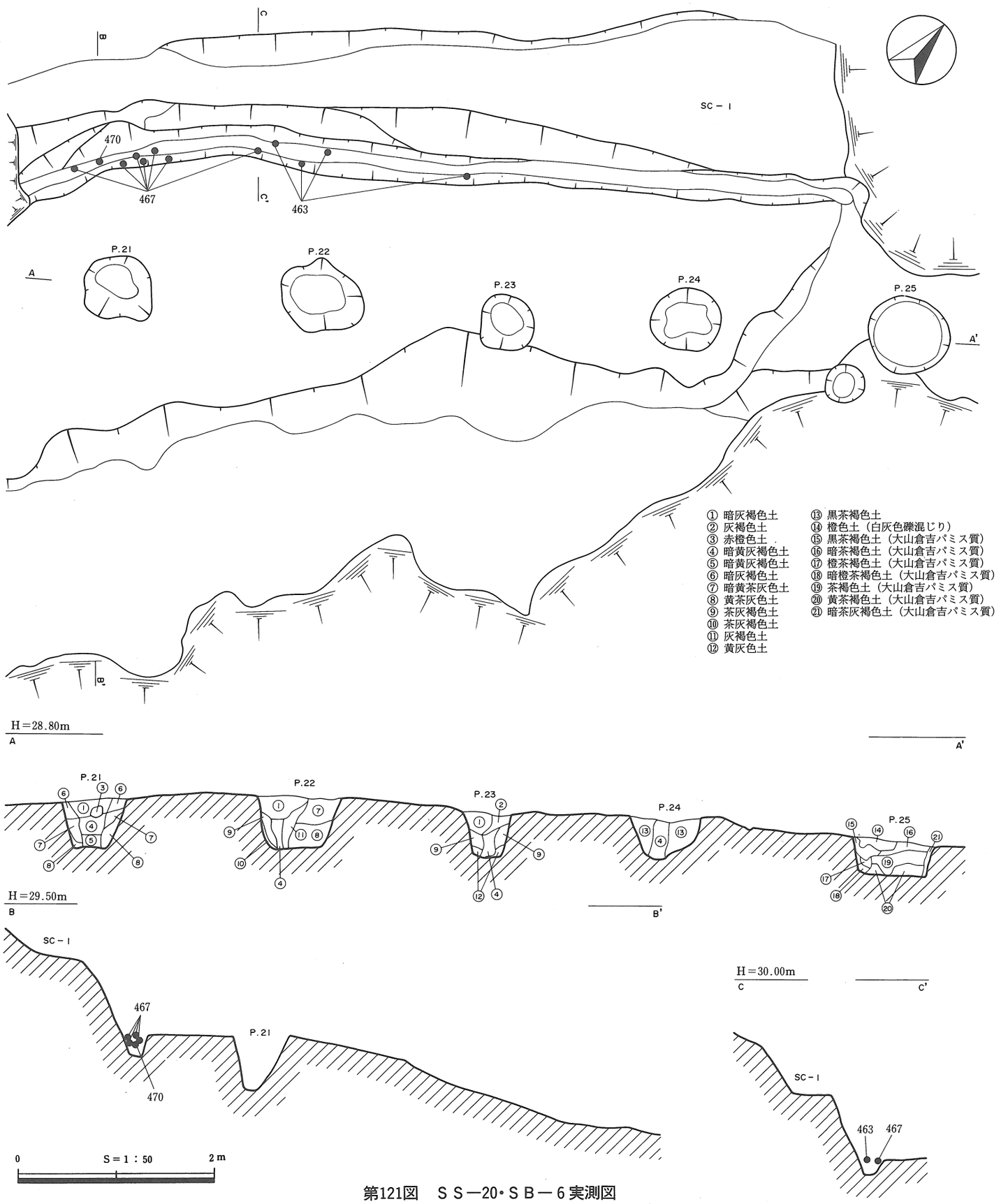


第119図　ＳＳ－20・ＳＳ－４実測図

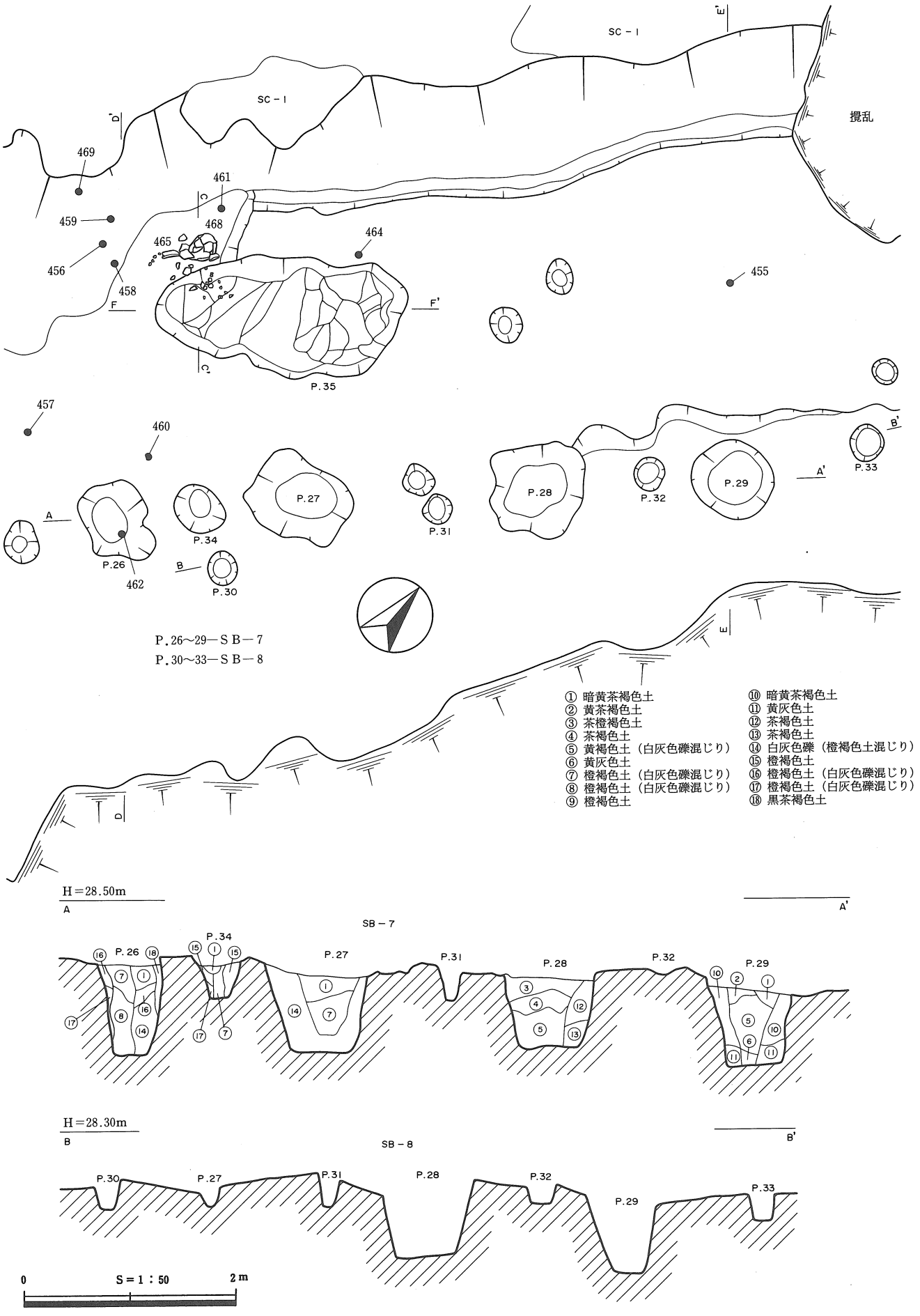


① 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
② 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
③ 黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
④ 暗橙灰色土
⑤ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
⑥ 橙茶褐色土
⑦ 茶灰褐色土(炭化物を含む)
⑧ 暗橙褐色土(炭化物を含む)
⑨ 赤橙褐色土
⑩ 赤橙褐色土
⑪ 橙黄色土
⑫ 濃橙色土
⑬ 橙褐色土
⑭ 暗橙黄色土
⑮ 暗橙褐色土(炭化物を含む)
⑯ 橙褐色土
⑰ 橙茶褐色土
⑱ 黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
⑲ 赤橙褐色土
⑳ 赤橙褐色土
㉑ 赤橙褐色土
㉒ 赤橙褐色土
㉓ 茶灰褐色土(炭化物を含む)
㉔ 橙灰色土
㉕ 橙灰色土
㉖ 黄灰色土
㉗ 橙灰色土
㉘ 橙黄色土
㉙ 暗黄褐色土
㉚ 暗橙黄色土
㉛ 橙黄色土
㉜ 黄橙色土
㉝ 赤橙色土
㉞ 黒橙茶褐色土
㉟ 灰褐色土
㊱ 黒黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊲ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊳ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊴ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊵ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊶ 暗黄橙褐色土
㊷ 黄橙褐色土
㊸ 黄褐色土
㊹ 暗黄褐色土
㊺ 黄灰褐色土
㊻ 黄灰褐色土
㊼ 攪乱土

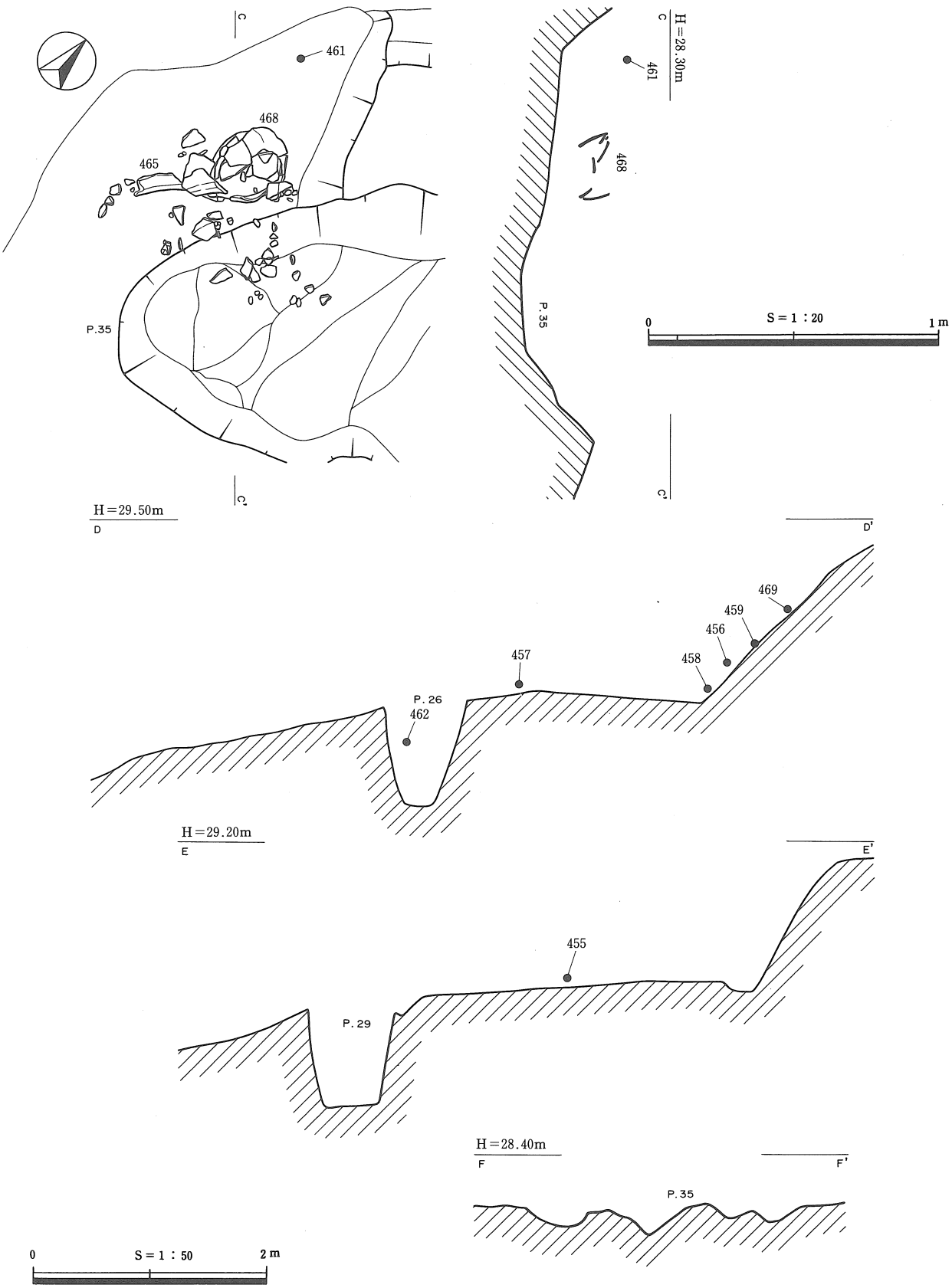
第120図　ＳＳ－20・ＳＢ－５実測図



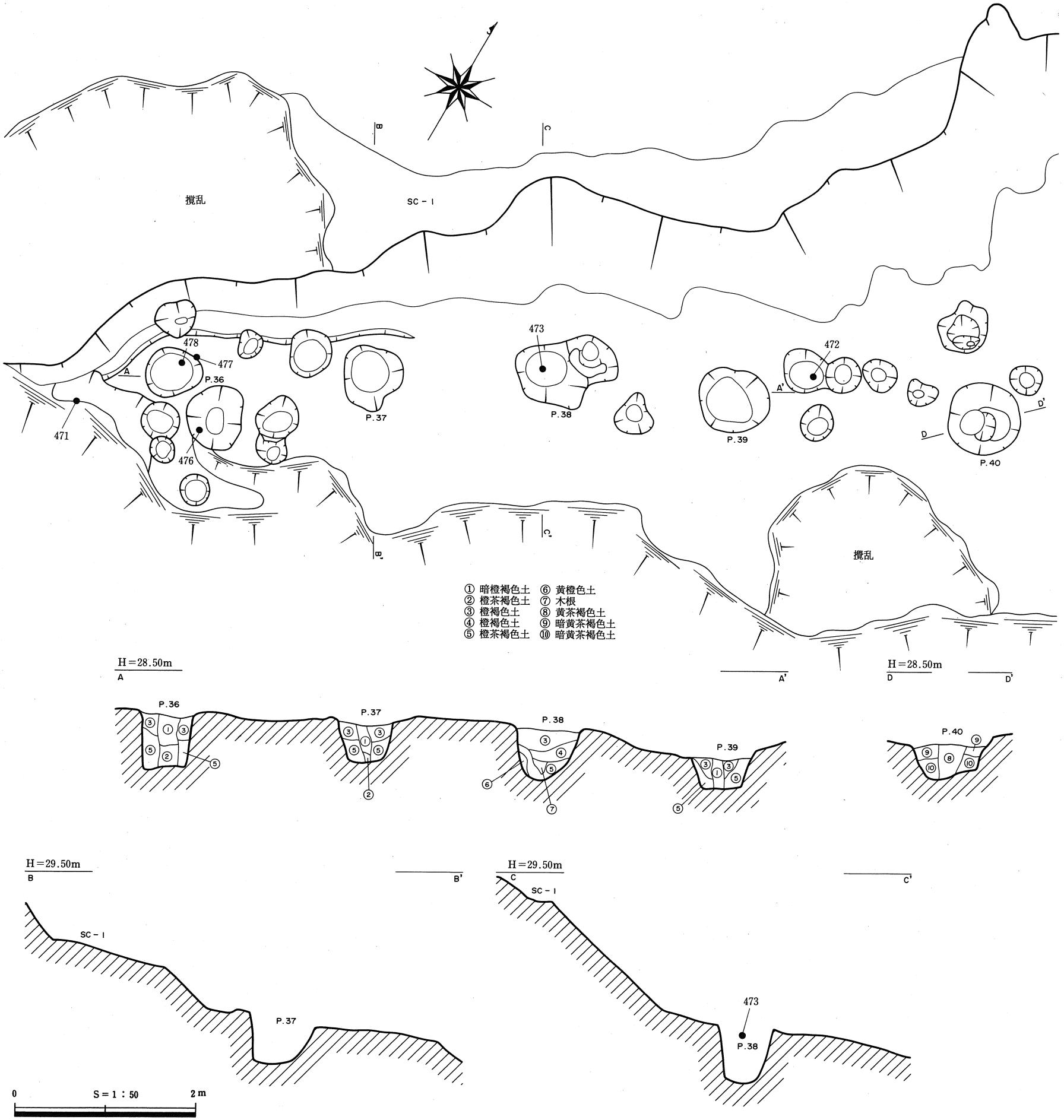
第121図　ＳＳ—20・ＳＢ—６実測図



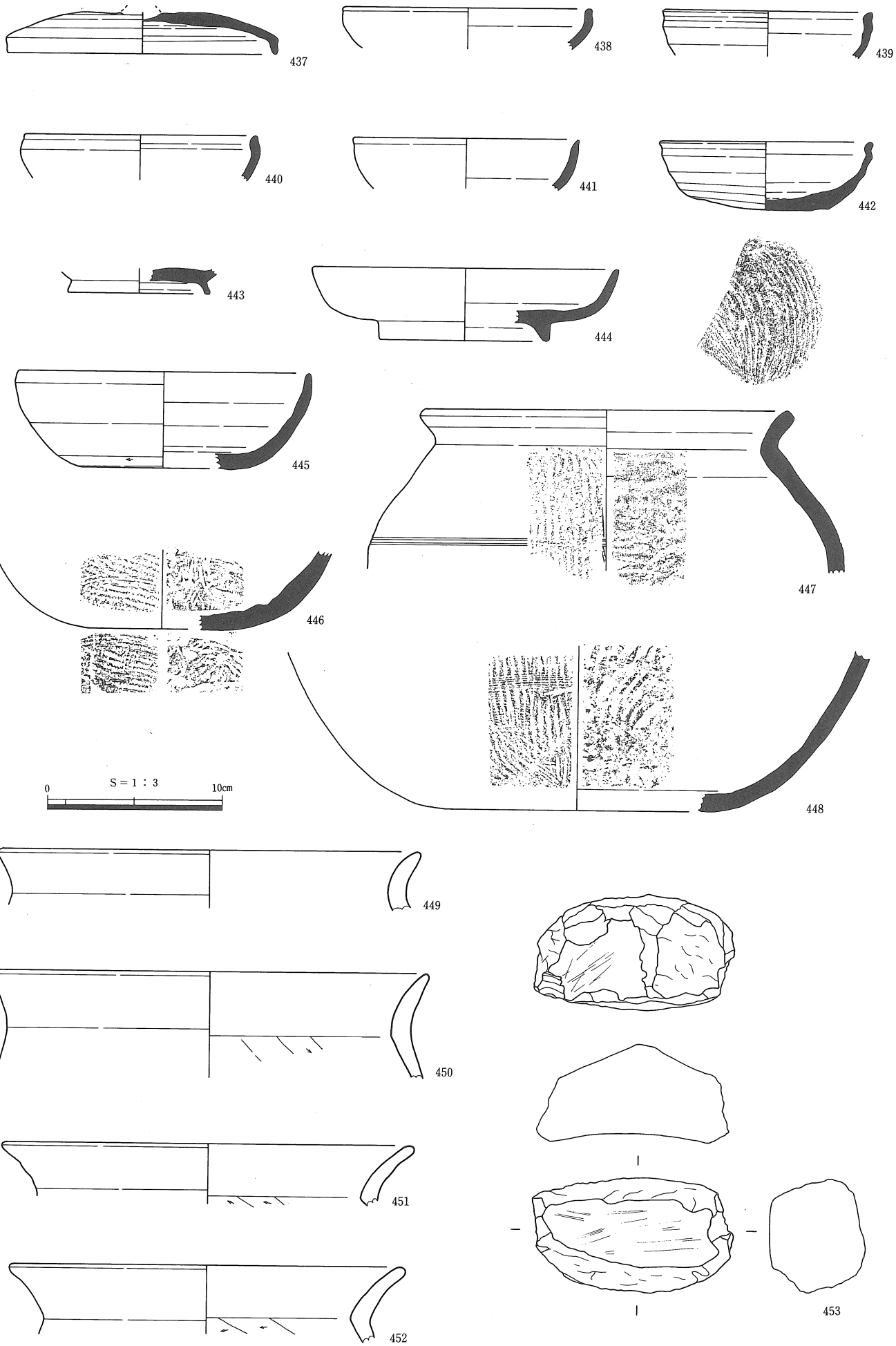
第122図　ＳＳ—20・ＳＢ—７、８実測図



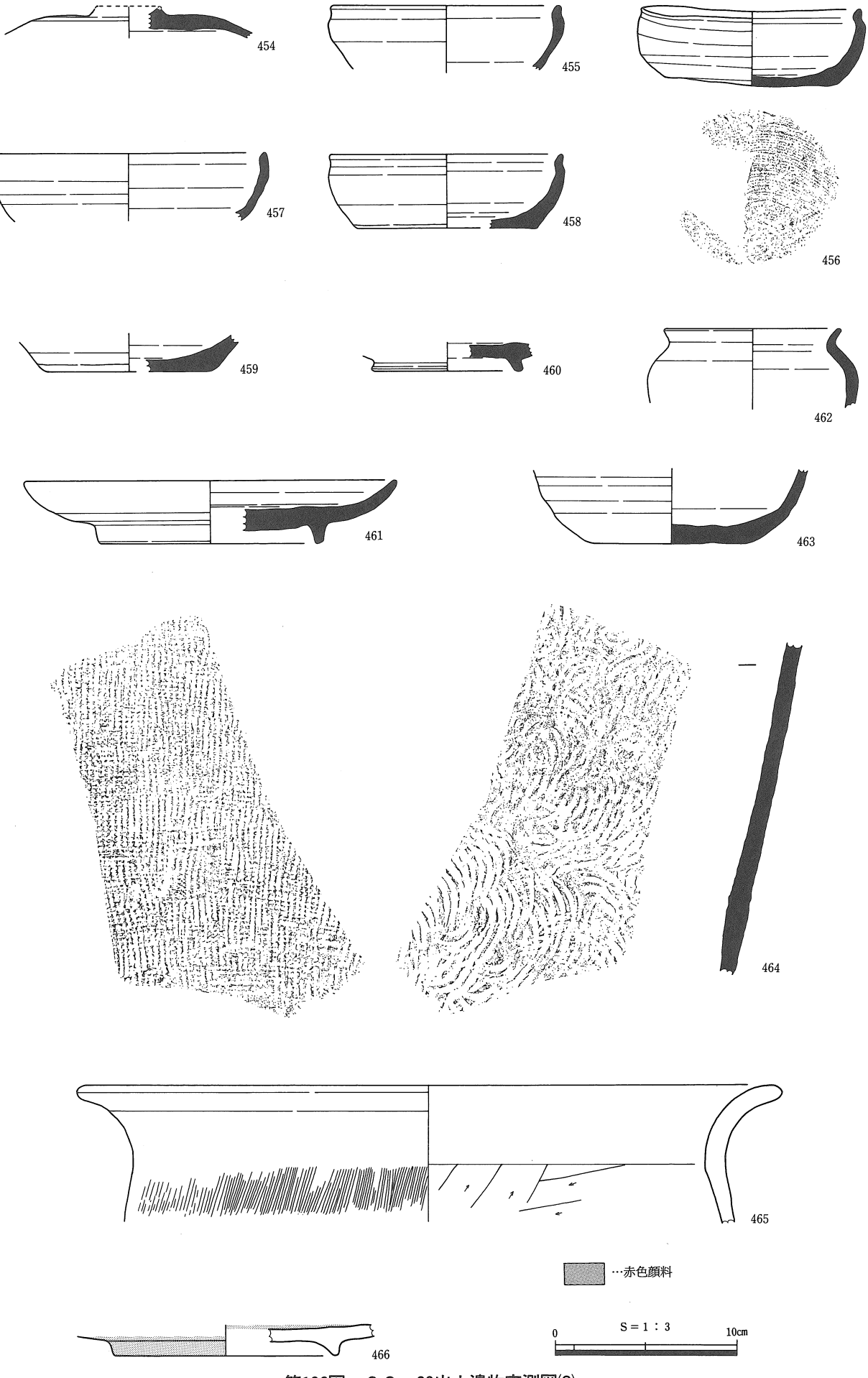
第123図　ＳＳ—20・ＳＢ—７断面実測図



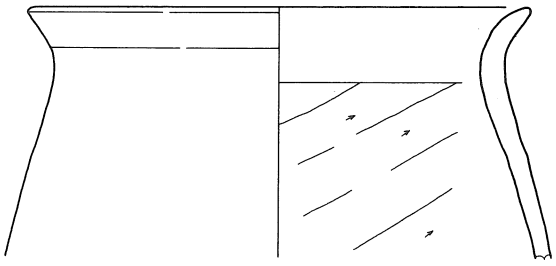
第124図　ＳＳ－20・ＳＢ－９実測図

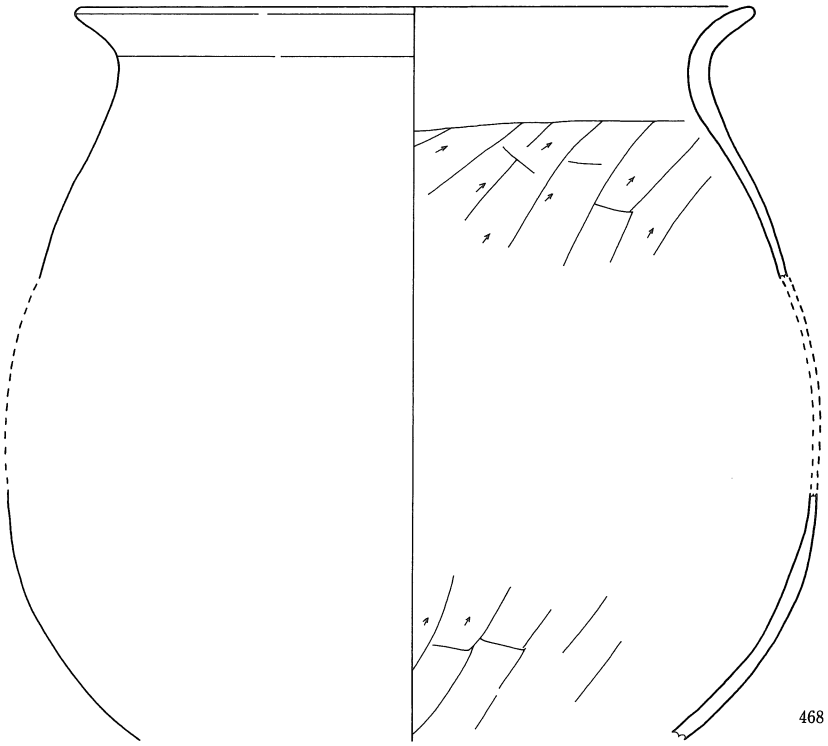


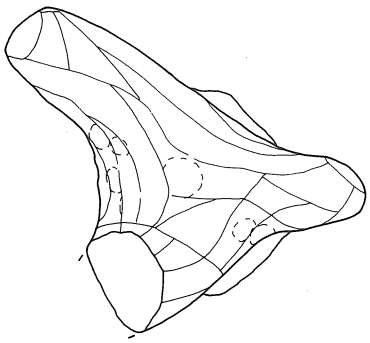
第125図　ＳＳ－20出土遺物実測図(1)

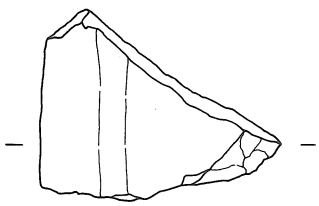


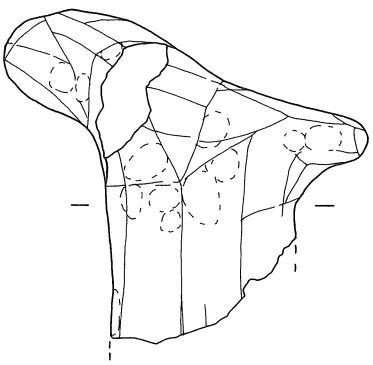
第126図　ＳＳ－20出土遺物実測図(2)

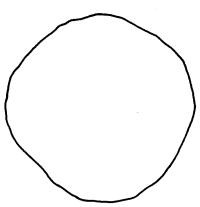


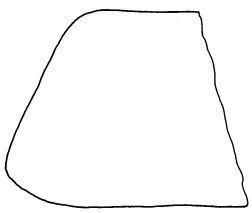


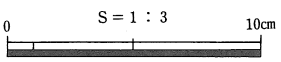




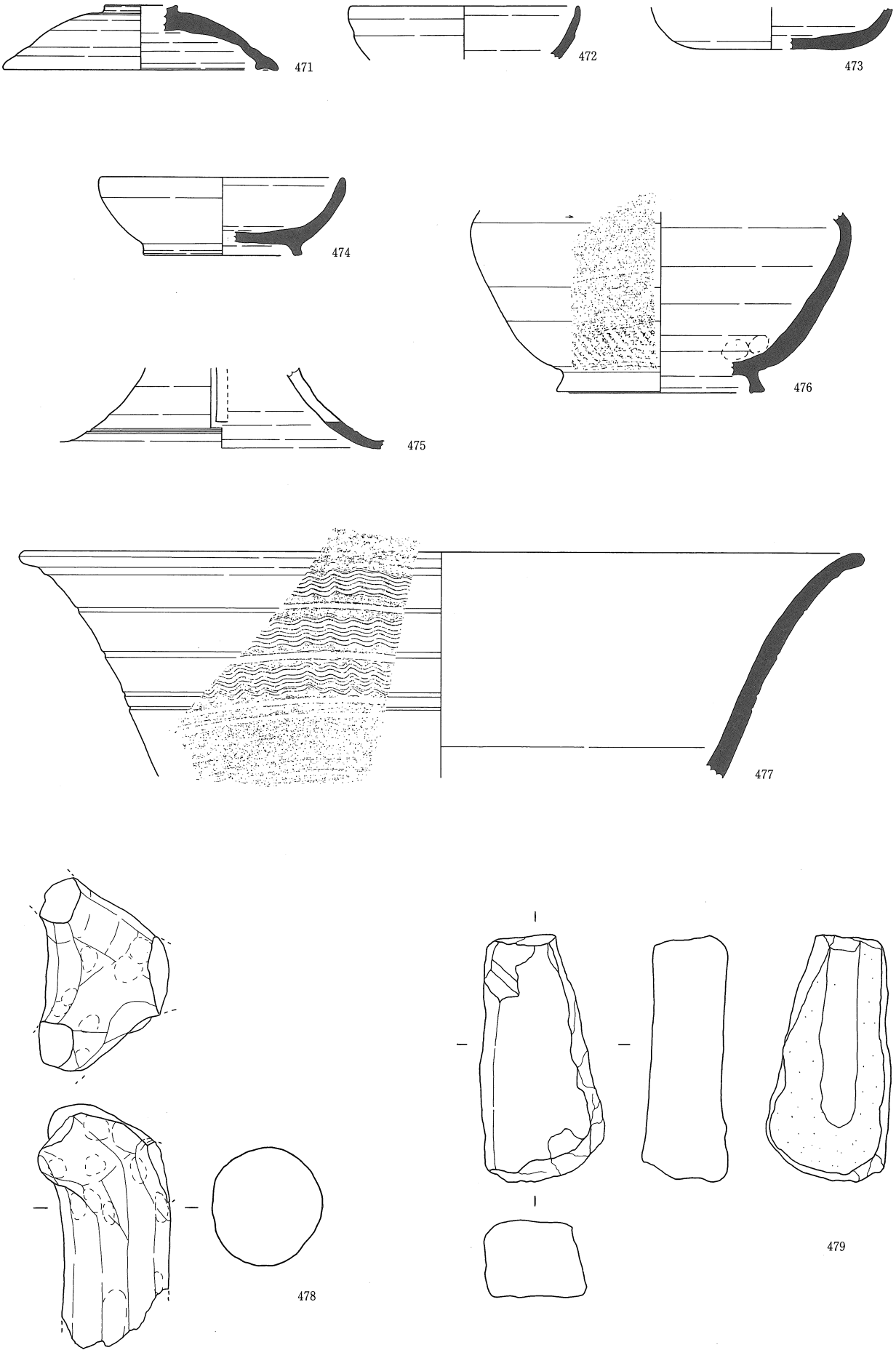




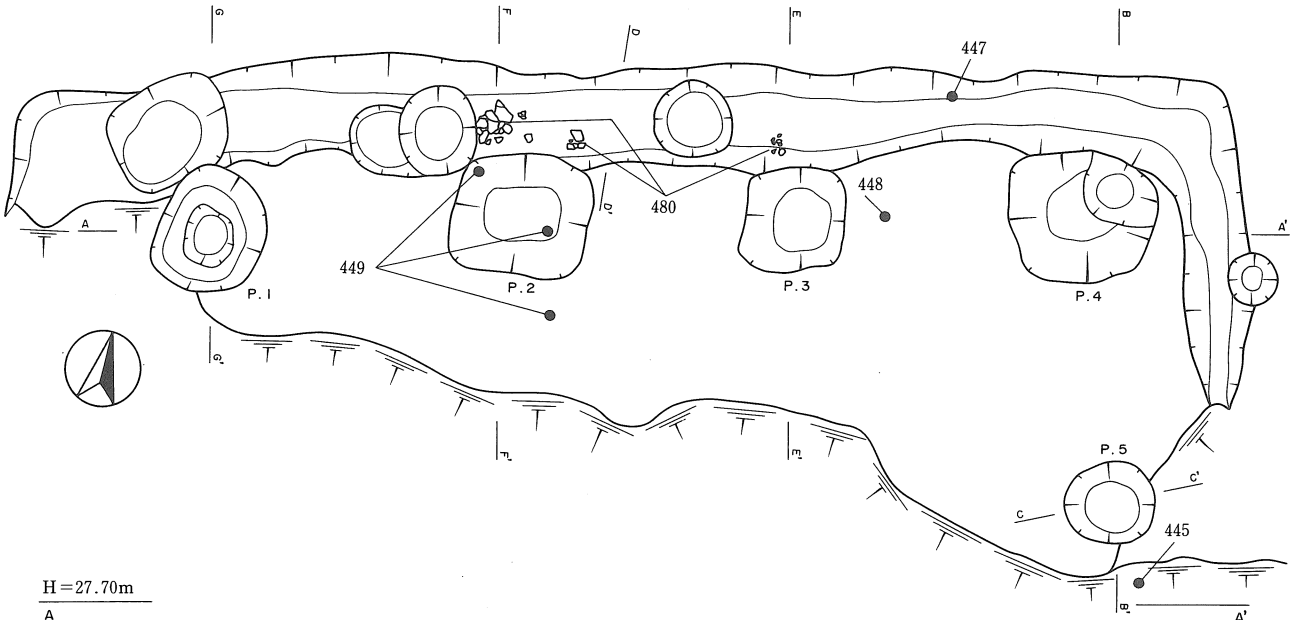


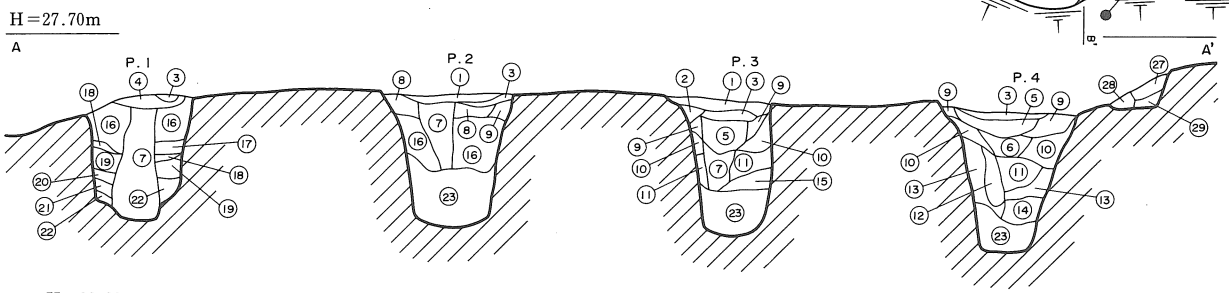


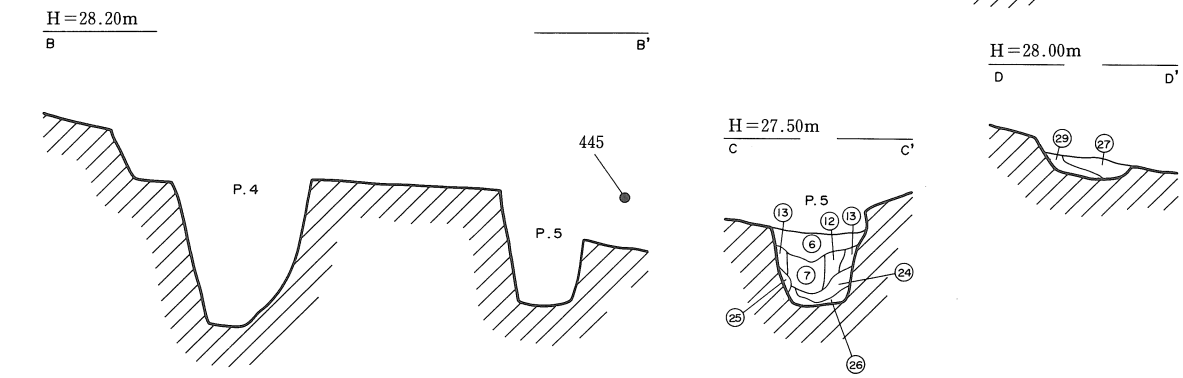
第127図　ＳＳ－20出土遺物実測図(3)

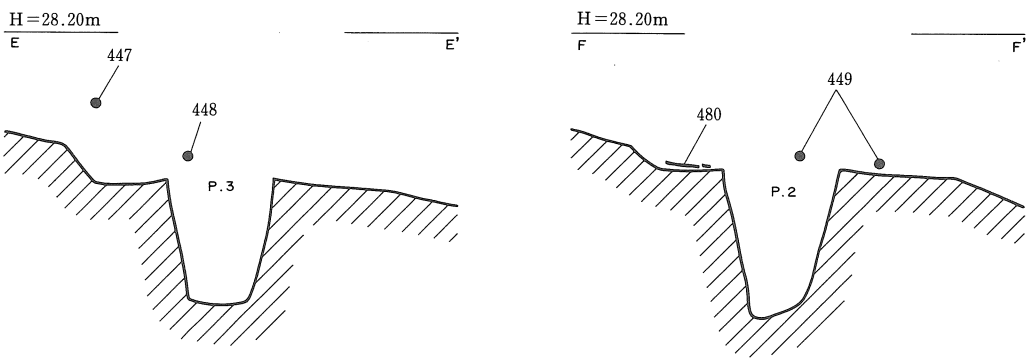


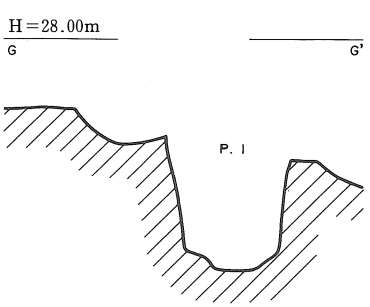
第128図　ＳＳ－20出土遺物実測図(4)







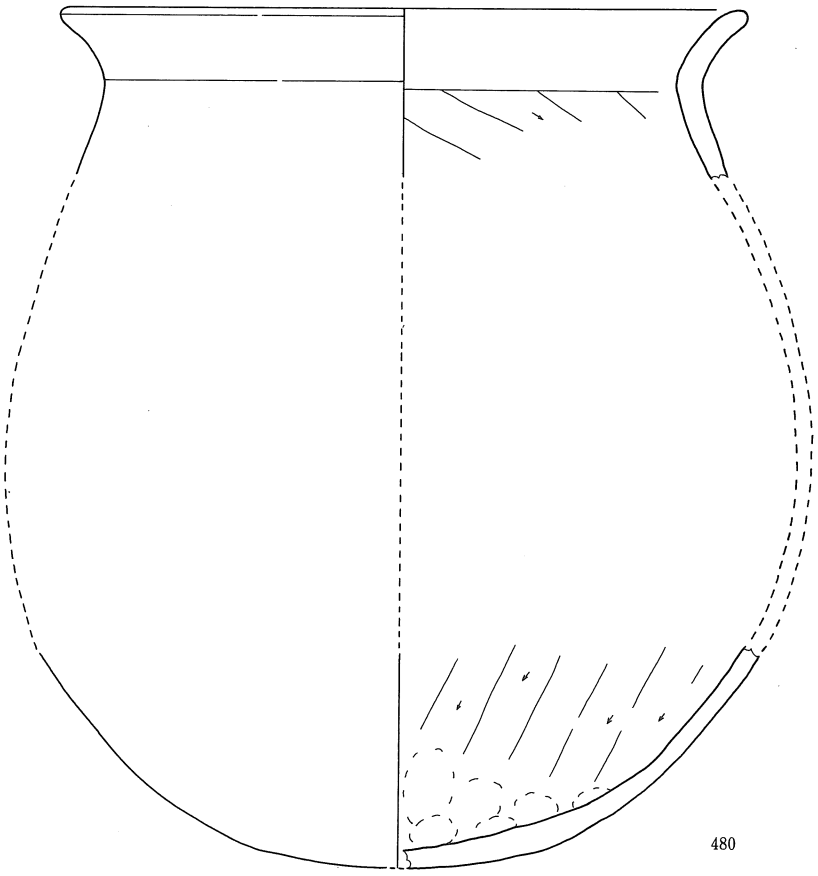




① 赤橙色土
② 濃橙茶褐色土
③ 赤橙色土
④ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
⑤ 黒黄褐色土
⑥ 黒橙茶褐色土
⑦ 暗黄褐色土
⑧ 黒黄褐色土
⑨ 暗黄褐色土
⑩ 暗黄褐色土
⑪ 暗橙茶褐色土
⑫ 暗黄褐色土
⑬ 暗黄褐色土
⑭ 黒黄褐色土
⑮ 黄灰褐色土
⑯ 黒灰褐色土
⑰ 橙灰褐色土
⑱ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
⑲ 橙灰褐色土
⑳ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
㉑ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
㉒ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
㉓ 黄灰褐色土
㉔ 暗橙茶褐色土
㉕ 濃橙茶褐色土
㉖ 暗黄褐色土
㉗ 暗黄茶褐色土
㉘ 黄茶褐色土
㉙ 黄茶褐色土

0　S＝1：50　2 m

第129図　ＳＳ－21実測図



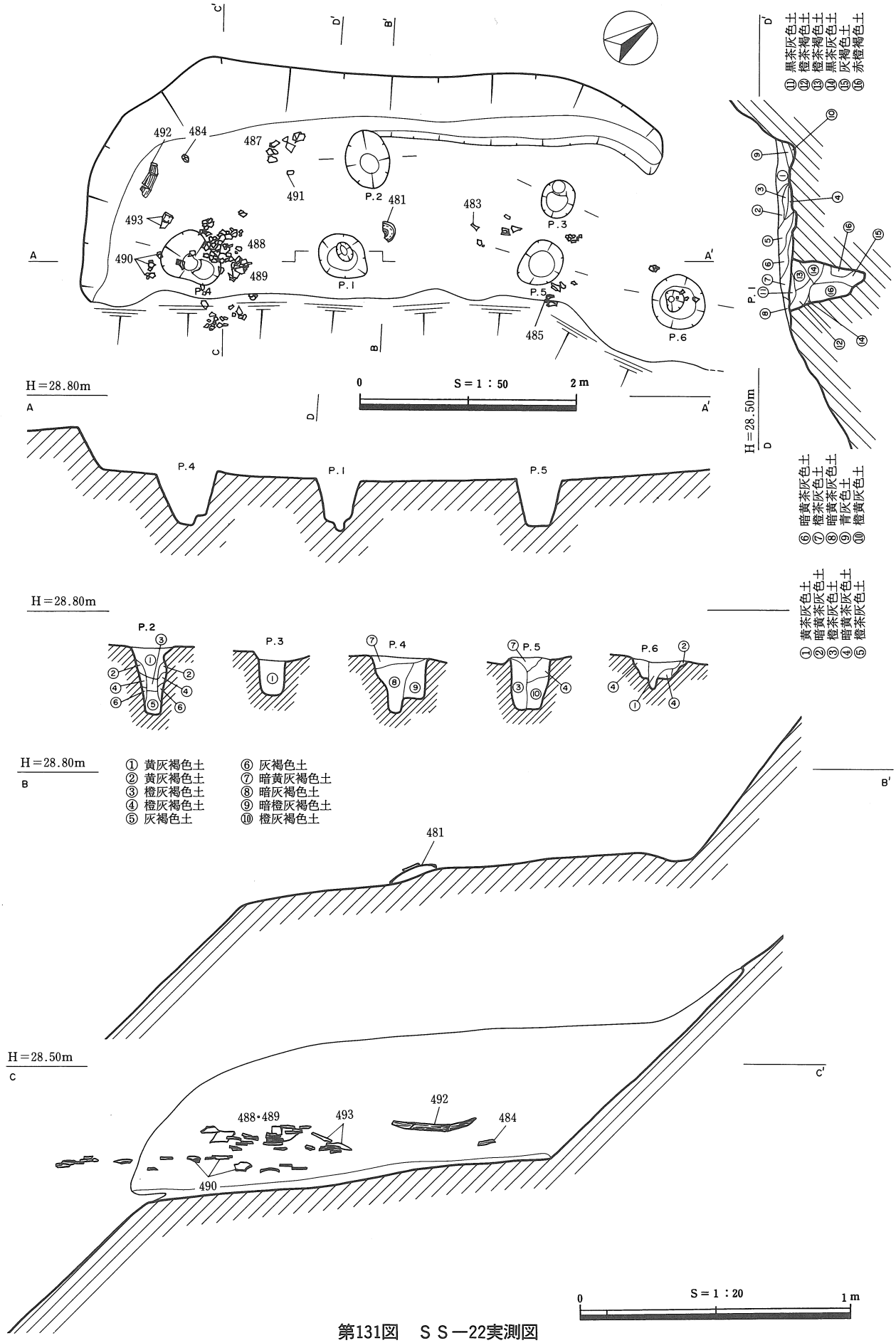
第130図　ＳＳ－21出土遺物実測図

間は概ね40cm～1.2mで、ピットの径は50～85cmである。柱間は比較的狭い。梁行方向の軸はＮ－25°－Ｗをとる。Ｐ．22は北側後背の溝の肩と接しており、Ｐ．23は肩を切っている。溝と後背壁は西に向かって消失していく。Ｐ．21の埋土中から須恵器の坏440が、Ｐ．25の埋土中から須恵器の坏439、442が出土した。442は底部糸切りである。Ｐ．23とＰ．26の中間のテラス床面上から、須恵器の坏441が出土した。439、442は陰田編年の10式（８世紀後半）に比定される。

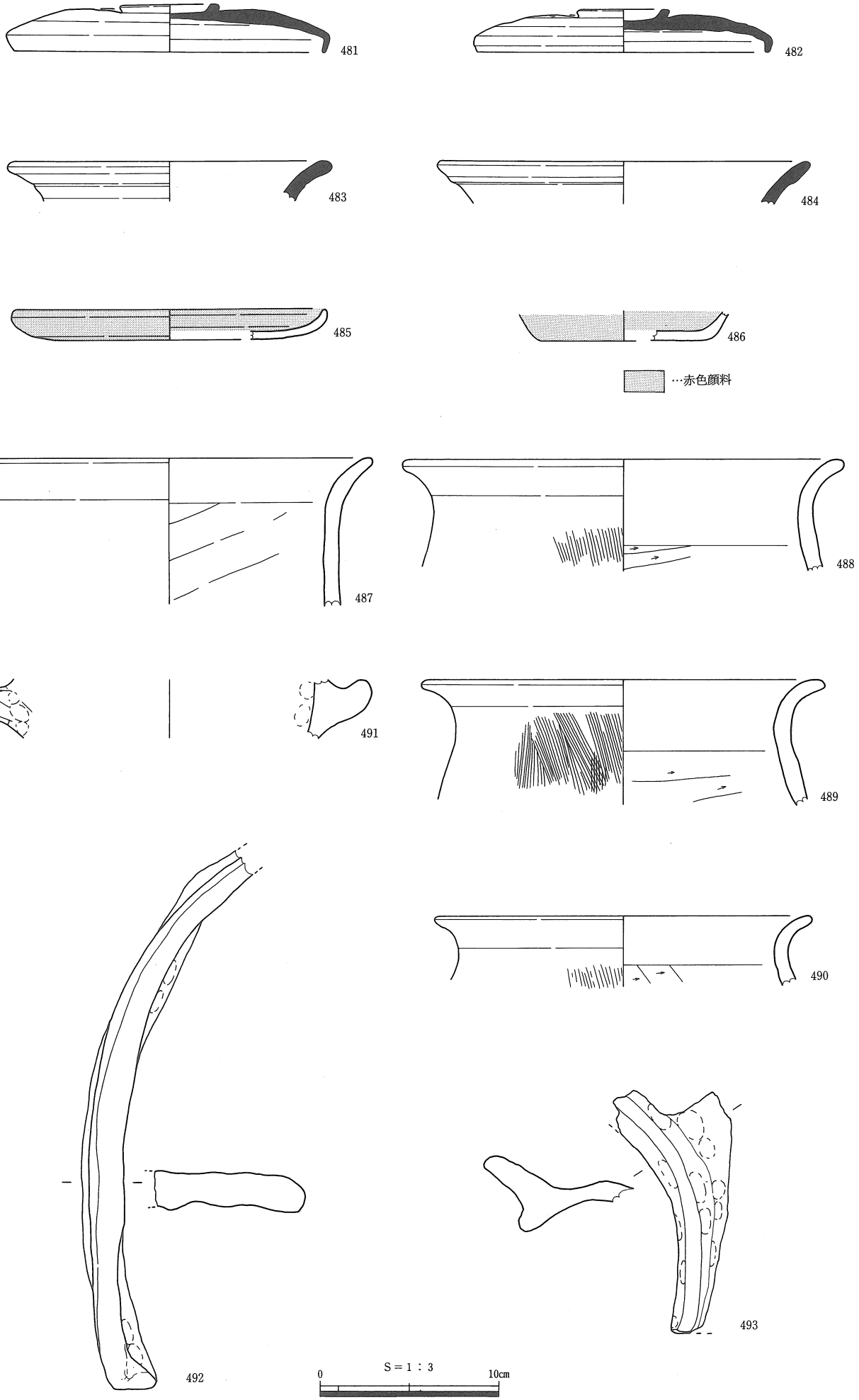
ＳＢ－６（第121、126、127図）は、Ｐ．21～25を柱穴とする４間の建物である。桁行のみで梁行方向のピットは確認できなかった。桁行長９ｍ、柱間は概ね1.2～1.5mで、ピットの径は55～85cmである。桁行方向の主軸はＮ－54°－Ｅをとる。北側後背の溝との距離は90cm～1.15m、壁高は80cmを測る。遺物は、溝の埋土中から出土した。463は須恵器の壺の底部、467は土師器の甕、470は細粒黒雲母花崗岩製の砥石である。

中央の区画には、ＳＢ－７と８が重複している。いずれも１列のピット列である。ＳＢ－７（第122、123、126図）は、Ｐ．26～29を柱穴とする３間の建物である。桁行のみで梁行方向のピットは確認できなかった。桁行長6.5m、柱間は概ね１～1.3mで、ピットの径は60～80cmである。桁行方向の主軸はＮ－47°－Ｅをとる。北側後背の溝との距離は2.2m～2.8m、壁高は1.1～1.3mを測る。遺物は、Ｐ．26の埋土中から出土した。462は須恵器の短頸壺である。

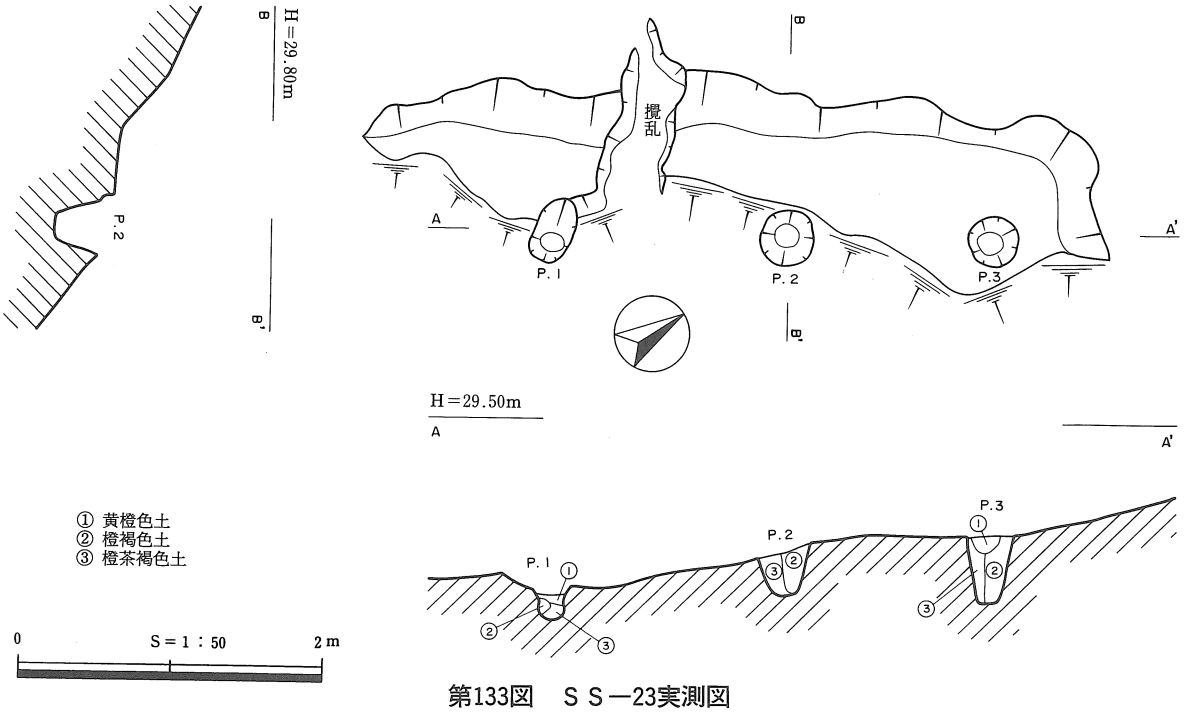
ＳＢ－８（第122図）は、Ｐ．30～33を柱穴とする３間の建物である。桁行のみで梁行方向のピットは確認できなかった。桁行長6.5m、柱間は1.8mで、ピットの径は30cmである。桁行方向の主軸はＮ－40°－Ｅをとる。北側後背の溝との距離は2.8mを測る。他の建物跡に比べて、ピットの径は小さいが、柱間はほぼ1.8m間隔で規則的である。



第131図　ＳＳ－22実測図



第132図　ＳＳ－22出土遺物実測図



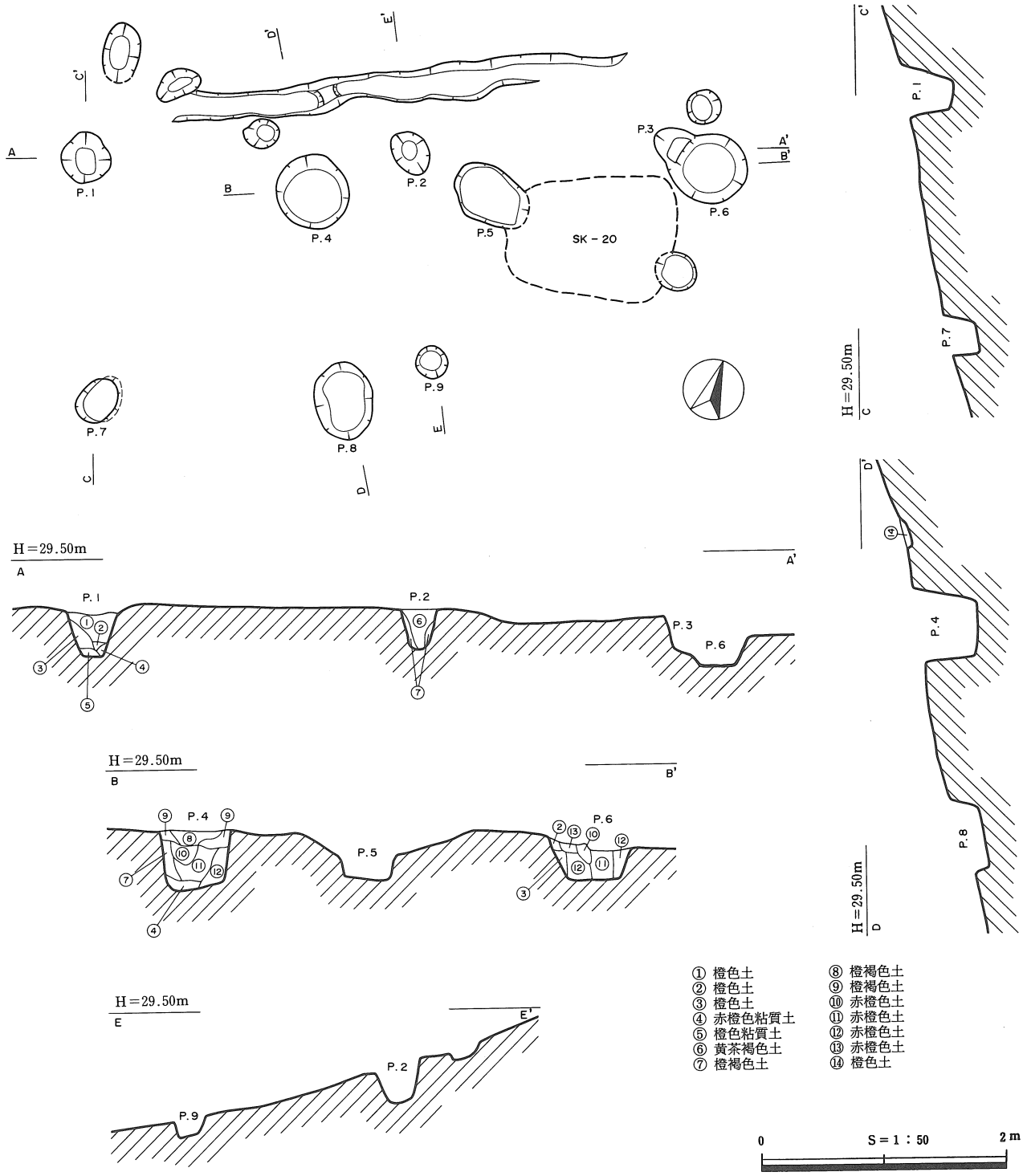
第133図　ＳＳ－23実測図

ＳＢ－７、８は、他の建物に比べ、溝との距離が２m以上を測り、後背に広い空間を有している。この空間には、いびつで浅く範囲の広いピットＰ．35（第122、123図）が穿たれている。2.4×１mの範囲で、深さは10～20cmを測る。底面は凹凸をなす。ピットを掘りかけて、岩脈に当たり、場所をずらすなど、さらに掘り下げを試みたが、結局掘削を断念したものと推察される。よって、テラスは造成したものの、建物はそれよりも前方に建てざるを得ない状況になったのであろう。

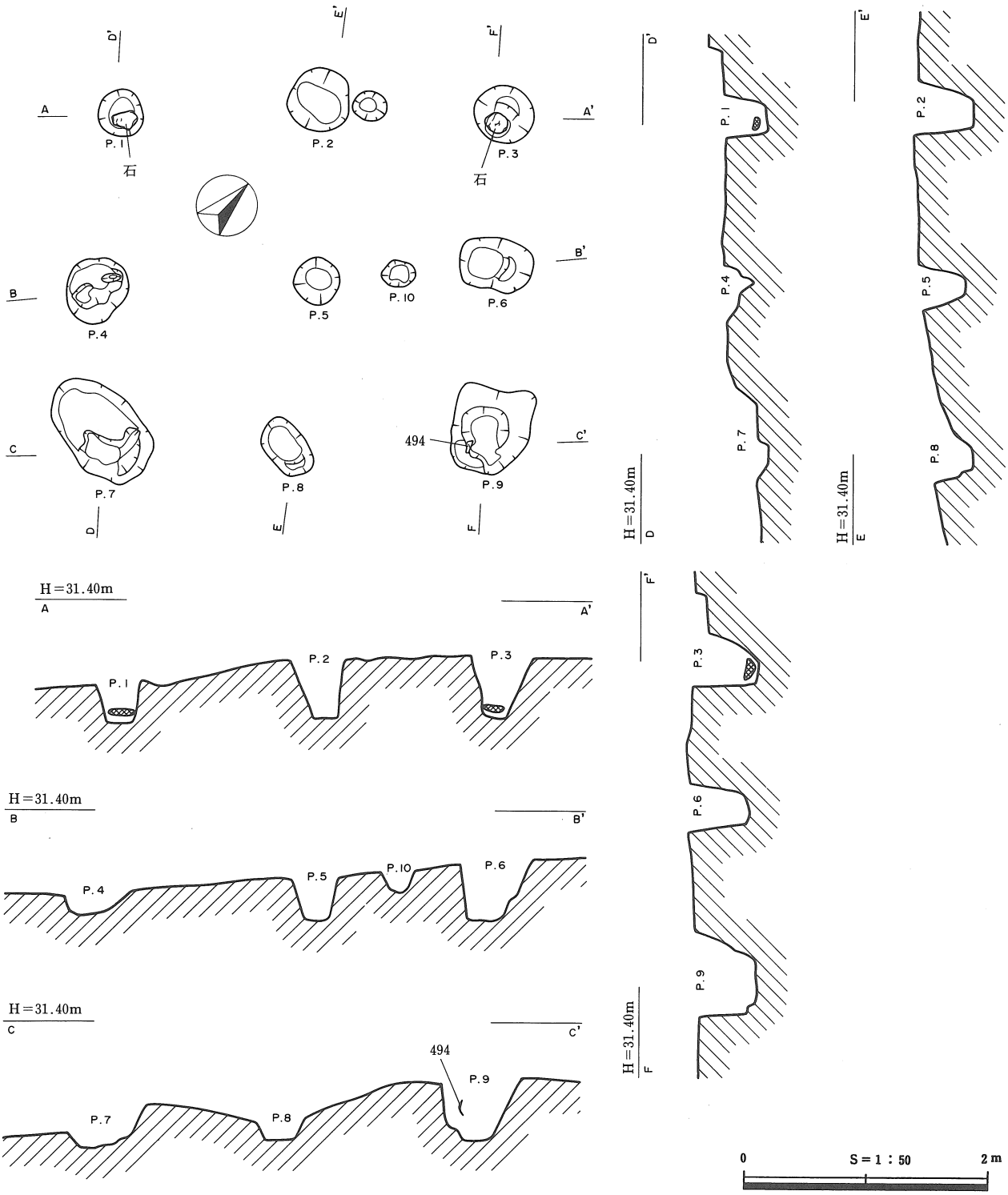
この空間から、須恵器の坏（455、457、460）、甕（464）が出土している。460は底部糸切りの高台付きの坏である。また、壁際から上方殻の転落遺物として、須恵器の坏（456、458、459）、皿（461）、土師器の甕（465、468）、支脚（469）が出土している。456、458は底部糸切りである。455、456、458、460は陰田編年の10式（８世紀後半）に比定される。

西側の区画には、ＳＢ－９（第124、126、128図）が構築されている。１列のピット列で、Ｐ．36～40を柱穴とする４間の建物である。桁行のみで梁行方向のピットは確認できなかった。桁行長9.8m、柱間は概ね1.2～２mで、ピットの径は60～80cmである。桁行方向の主軸はＮ－64°－Ｅをとる。北側後背の溝との距離は10m、壁高は50cm～1.2mを測る。遺物は、Ｐ．36の埋土中から須恵器の甕（477）、支脚（478）、Ｐ．38の埋土中から須恵器の坏（473）が出土した。473は底部糸切りである。ＳＢ－９の周辺からは、須恵器の蓋（471）、坏（472、474）、脚台（475）、壺（476）、丹塗り土師器の皿（466）、アプライト製の砥石（698）が出土している。474は底部糸切りの高台付きの坏である。471は陰田編年の８式（７世紀後葉）、473、474は陰田編年の10式（８世紀後半）に比定される。

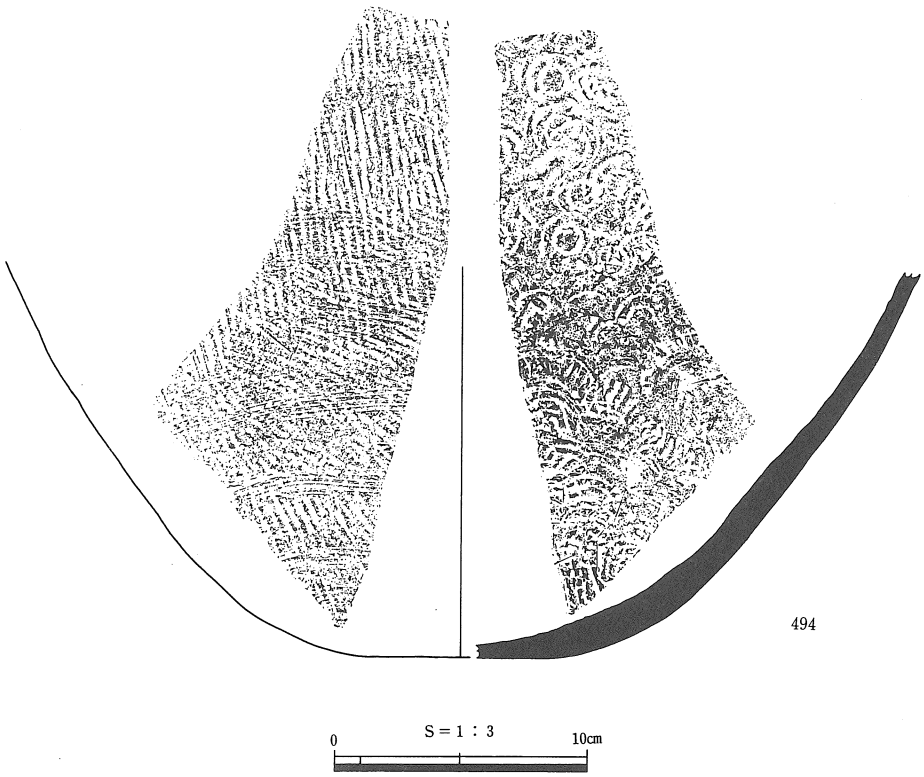
以上の状況から、ＳＳ－20は８世紀代に造成されたものと考えられる。テラスは、丘陵尾根鞍部によって東西に仕切られる恰好になっており、東に総柱の建物、西に１列のピット列で構成される建物を配置している。それぞれ３棟ずつの配置は、それぞれが１対をなす（総柱－ピット列）ように受け取れる。ＳＢ－３～５の掘立柱建物跡は、柱穴の規模に比して柱間が狭く、また総柱であることから、倉庫的な強固さが要求される建物の構造が想定される。ならば、ピット列により構成される建物は、居住用施設と位置付けられるのであろうか。ただし、ＳＢ－３～５は建物間の距離が近く、当時、火災時の延焼を想定していれば、同時並存した可能性は低いと考える。出土遺物的には、建物間の時期差を検証できなかったが、ＳＢ－３の周辺で出土した437、443は古い要素をもつものであり、テラスは東側から造成され、適宜拡張されていった可能性がある。



第134図　ＳＳ－24実測図



第135図　ＳＢ－１実測図

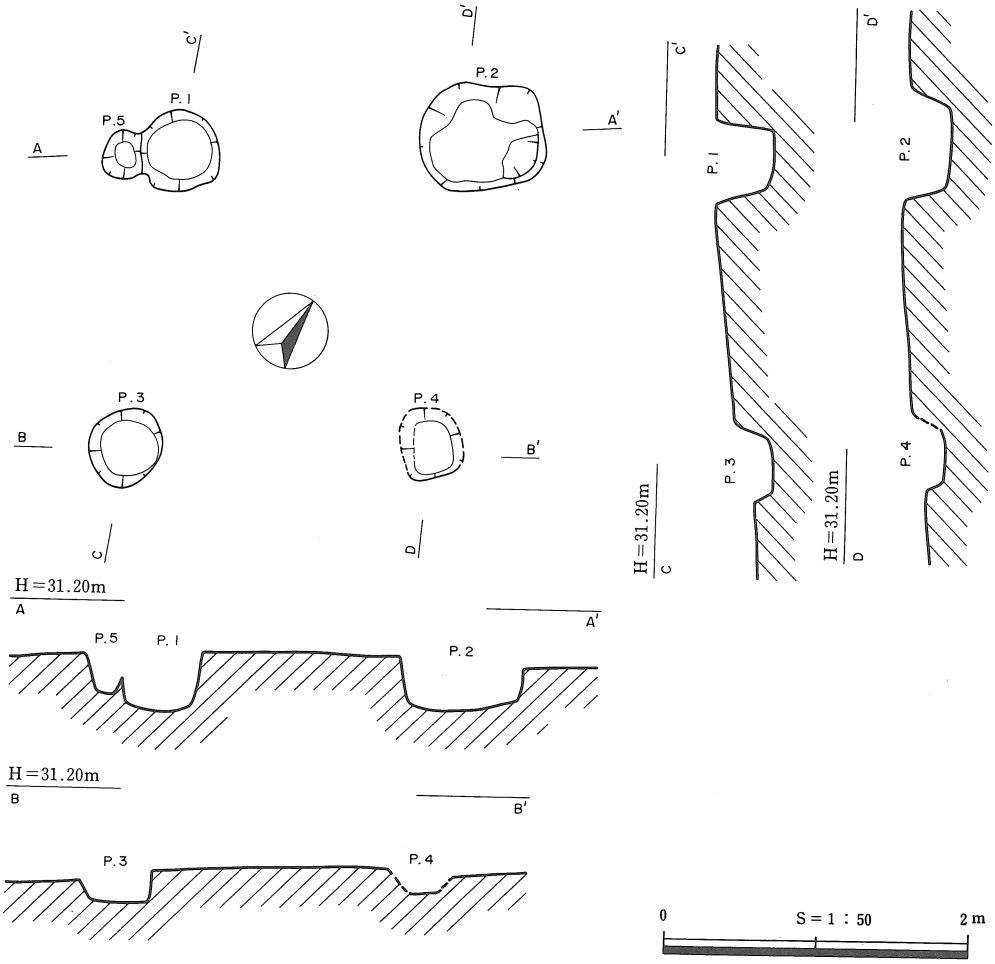


第136図　ＳＢ－１・Ｐ９出土遺物実測図

ＳＳ－21（第129、130図・写真図版３、24、26、80）は、ＳＳ－20のＳＢ－４、５の南側に隣接する。標高27～27.5mの間に位置する。東西8.1m、南北3.3mの範囲で検出した。平坦部の南側は、流出して完存していない。北側はＳＳ－20のＳＢ－５の柱穴によって溝が切られている。テラスは、東西6.5m、南北1.1～2.8mの範囲が遺存しており、壁沿いに鍛状に溝を設けている。幅30～60cm、深さ３～10cmを測る。溝の肩を切るように、柱穴を穿ち、Ｐ．１～５を柱穴とする、桁行３間・梁行１間の建物を構築している。桁行長6.6m、梁行長2.6mを測る。柱間は概ね１～1.2mで、ピットの径は60cm～１mである。東側の壁高は25cm、北側の壁高は20～35cmを測る。遺物は、Ｐ．２の埋土上面からやや浮いた位置で土師器の甕（449）、Ｐ．３の東側の地点で床面よりやや浮いた位置から須恵器の甕の底部（448）、Ｐ．２、３の北側、溝の底面直上から土師器の甕（480）が出土した。時期の詳細は不明だが、切り合い関係から（第120図・Ｄ－Ｄ'ライン土層断面）、ＳＳ－20のＳＢ－５より古い段階であるといえる。

ＳＳ－22（第131、132図・写真図版27、80）は、ＳＳ－20のＳＢ－９の西側にＳＣ－３を挟んで隣接する。標高27.5～28.5mの間に位置する。東西６m、南北2.2mの範囲で検出した。平坦部の南側は、流出して完存していない。東側はＳＣ－３によって切られている。テラスは、東西５m、南北1.3～1.7mの範囲が遺存しており、壁沿いの溝を一部確認できた。幅10～20cm、深さ５cmを測る。Ｐ．４、１、５、６を柱穴とする桁行３間の建物を構築している。梁行方向については確認できなかった。桁行長は5.1mを測り、柱間は概ね90cm～1.3mで、ピットの径は40～50cmである。壁高は西側で15cm、北側で70cmを測る。遺物は、テラスの西側に集中して出土した。481、483以外の遺物は、床面より浮いた状態である。481～484は須恵器で、481、482は輪状つまみのかえりのない蓋、483、484は甕の口縁部である。485～491は土師器である。485、486は丹塗り土師器の皿、487～490は甕、491は甑の把手である。487は甑である可能性もある。492、493は竈の庇である。481、482は、陰田編年の９式（７世紀末～８世紀前半）に比定される。

ＳＳ－23（第133図・写真図版11、27）は、ＳＫ－３の北東側に位置する。標高28.5～29.5mの間に位置する。南北５m、東西1.1mの範囲で検出した。平坦部の東側は、流出して完存していない。テラスは、南北4.6m、東



第137図　ＳＢ－２実測図

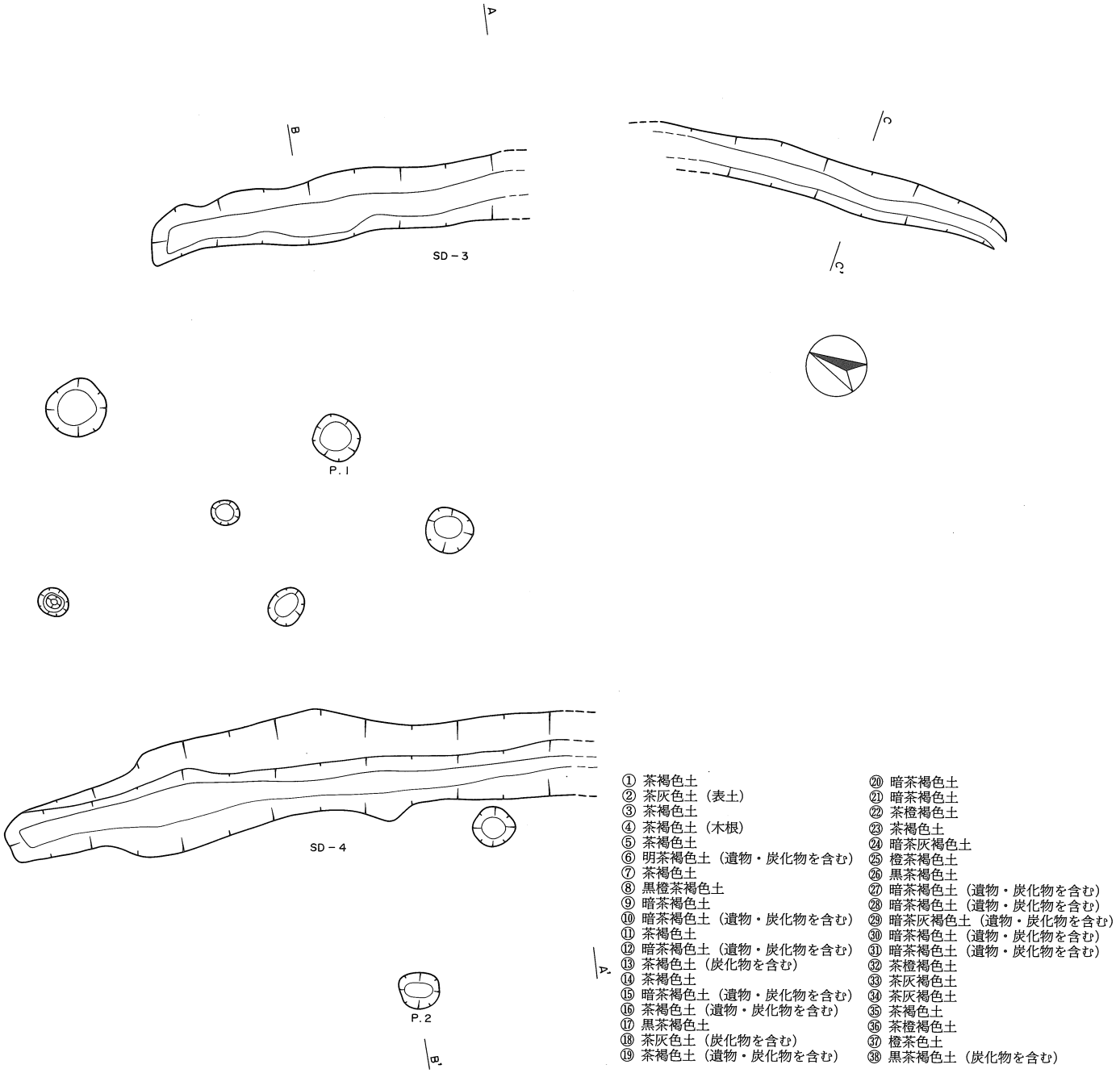
西60cm～１ｍの範囲が遺存しており、壁沿いに溝は確認できなかった。Ｐ．１～３を柱穴とする桁行２間の建物を構築している。梁行方向については確認できなかった。桁行長は3.2mを測り、柱間は概ね１～1.2mで、ピットの径は30～35cmである。壁高は北側で35cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＳ－24（第134図・写真図版３、12）は、ＳＫ－３の南東側に位置する。標高29m付近に位置する。東西4.8ｍ、南北３ｍの範囲で検出した。全体に削平されており、範囲を明確に把握できなかったが、ピット列とそれに伴う溝を確認したため、テラス状遺構と判断した。溝は幅20～30cm、深さ10cmを測る。Ｐ．４～６、８を柱穴とする桁行２間・梁行１間の建物を構築している。桁行長は3.9m、梁行長は2.4mを測り、柱間は概ね90cm～1.1ｍで、ピットの径は60cm前後である。遺物は出土していない。

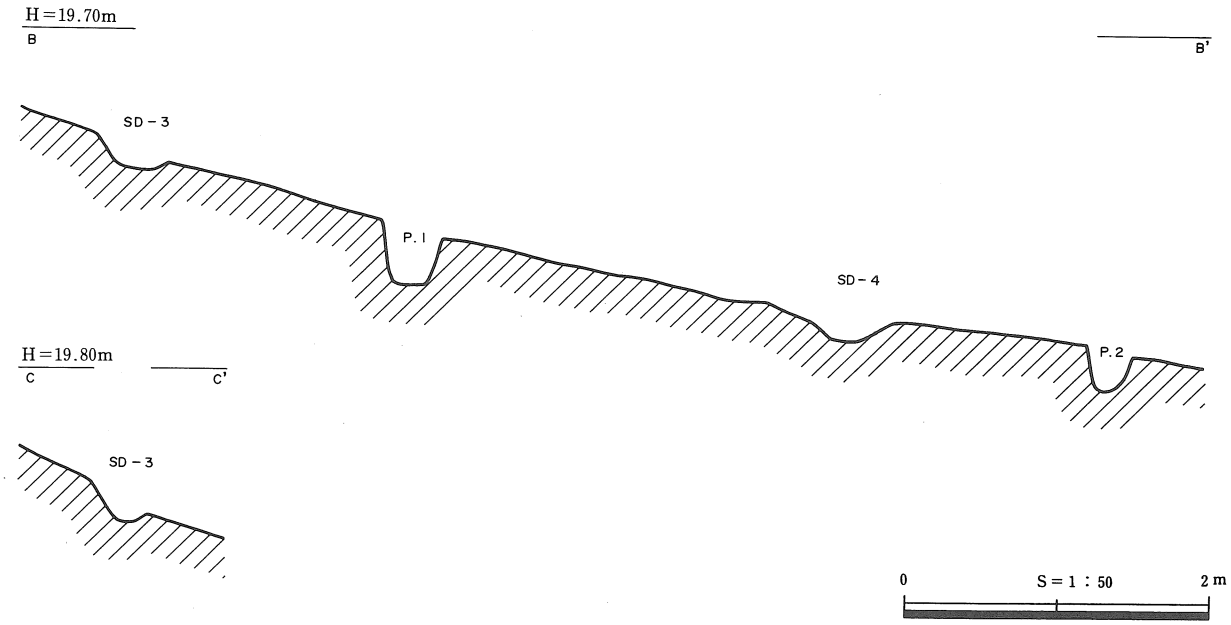
⑦のＳＳ－20～24のグループは、ＳＳ－21、22→ＳＳ－20の順に構築されたものと思われる。ＳＳ－23、24については、時期不明である。

・陰田第６遺跡における居住遺構の変遷

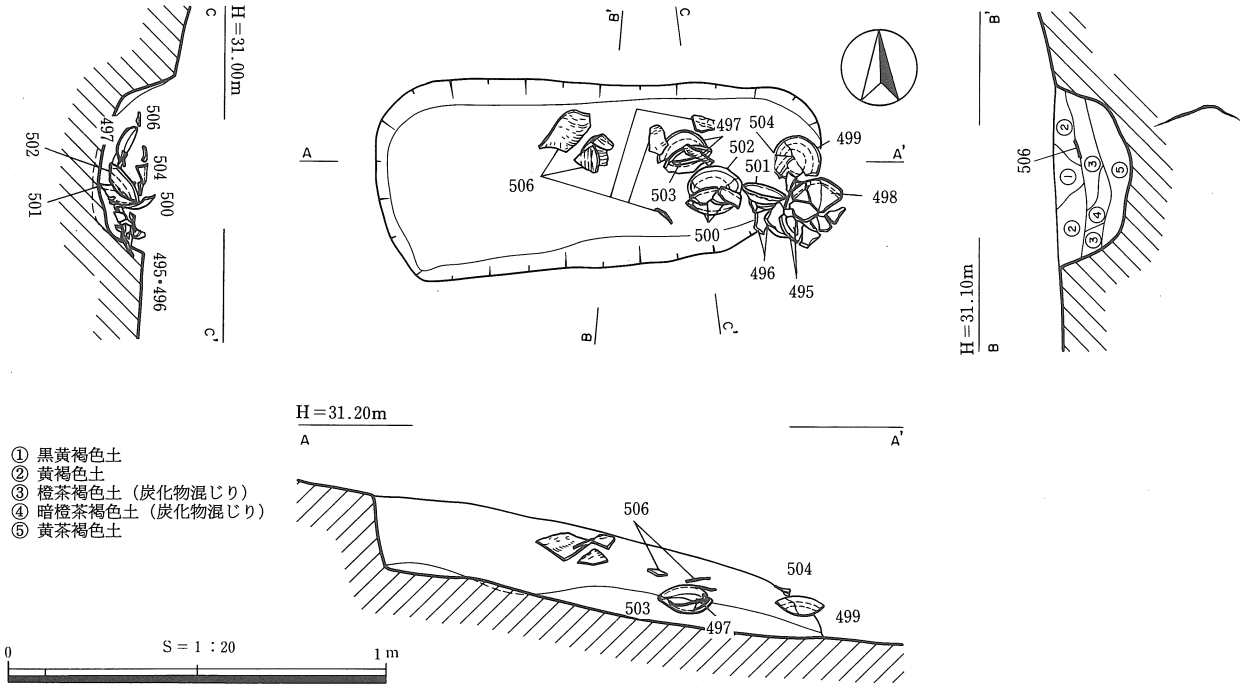
以上の所見をもとに、陰田第６遺跡における居住遺構の消長について、別表に纏めた（Ｐ181・「各エリアの変遷」）。「エリア」は、上述の①～⑦に区分したエリア名を指す。「地区」は、調査区のＡ区、Ｂ区を示す。変遷の縦軸は、陰田編年の４式から10式に、それぞれ便宜上Ⅰ～Ⅶの時期名を付したものである。よって、Ⅰ期－６世紀後葉、Ⅱ期－６世紀末～７世紀初頭、Ⅲ期－７世紀前葉、Ⅳ期－７世紀中葉、Ⅴ期－７世紀後葉、Ⅵ期－７世紀末～８世紀前半、Ⅶ期－８世紀後半に相当するものと理解されたい。時期不明のものは、最下欄に「不明」の項を設けた。エリアごとの丸付数字は、そのエリア内での構築順序を示す。数字が同一の場合は、併行して建てられていたことを表す。数字が空白のものは、厳密な順序を付け難かったものである。丸付数字の下方に伸びる矢印付の直線は、その遺構の存続期間を表す。時期設定は、上述のとおり、出土土器と切り合い関係をもとに行



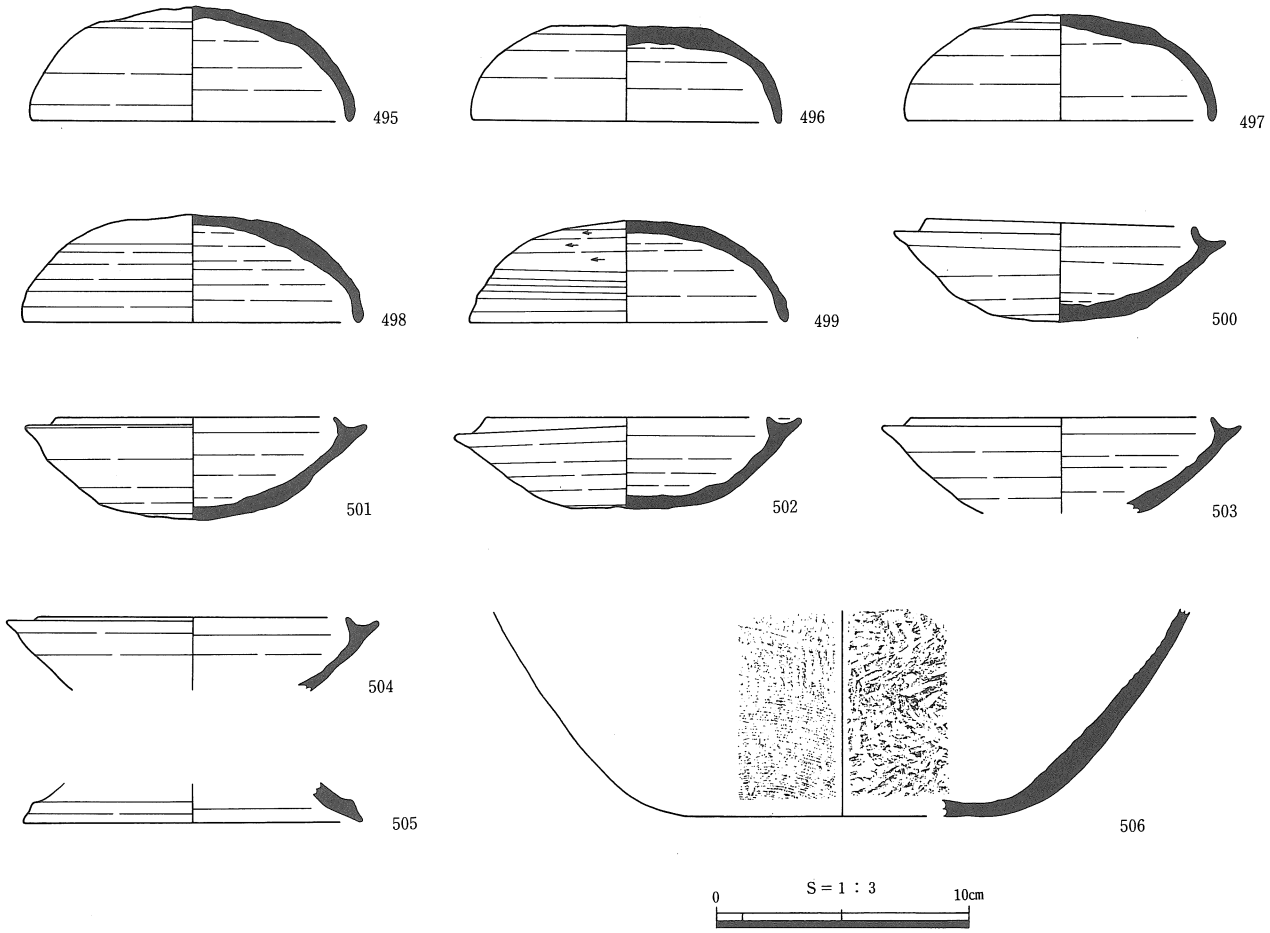
第138図　ＳＤ－３、４実測図



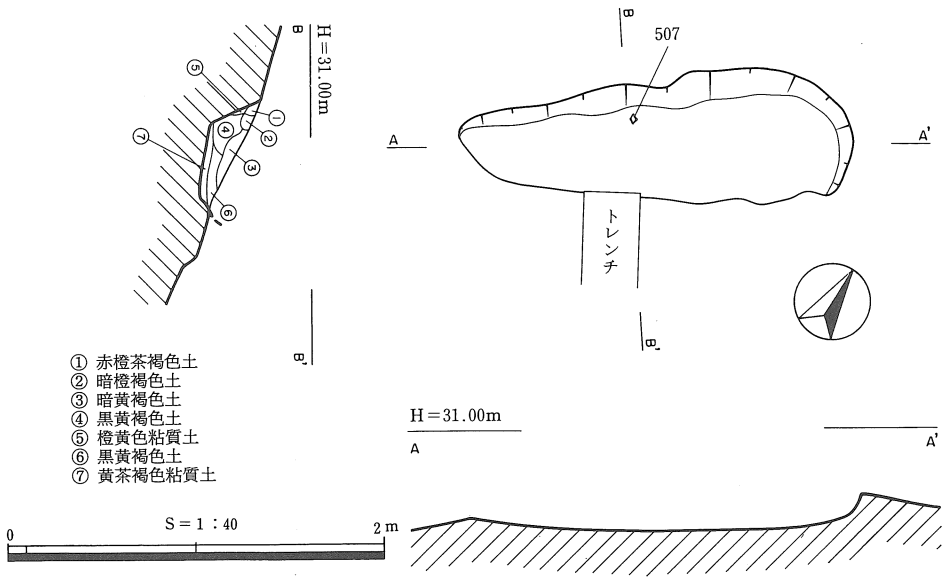
第139図　ＳＤ－３、４断面実測図



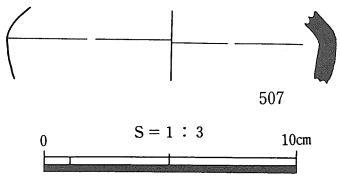
第140図　ＳＫ－１実測図



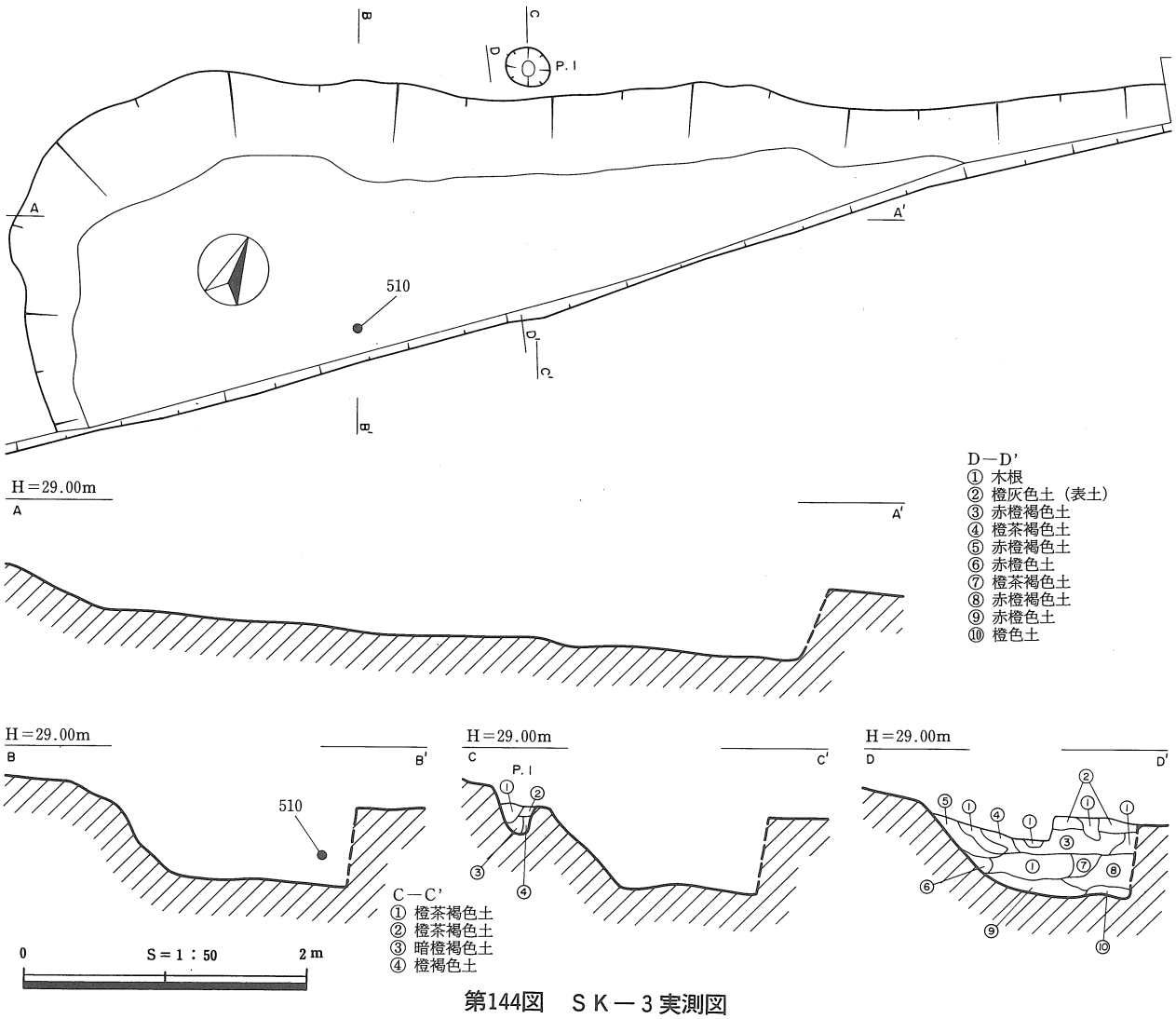
第141図　ＳＫ－１出土遺物実測図



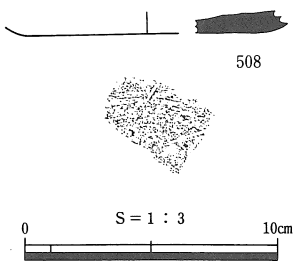
第142図　ＳＫ－２実測図



第143図　ＳＫ－２出土遺物実測図



第144図　ＳＫ－３実測図



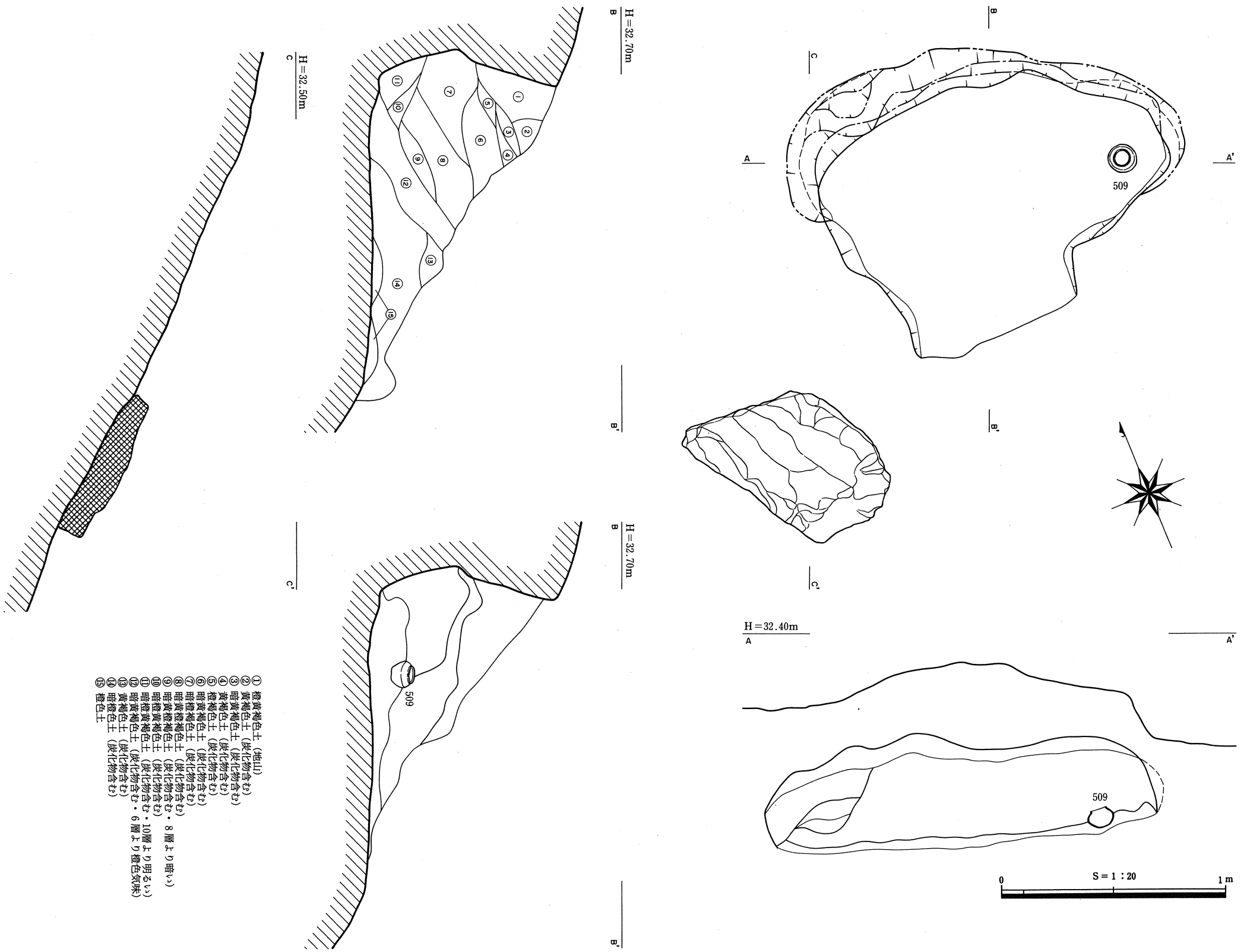
第145図　ＳＫ－３出土遺物

った。時期の古いものから新しいものへという変遷に従って配列したため、エリアの配列順が前後した。

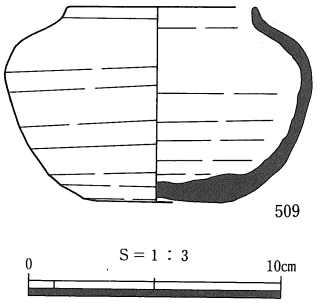
エリア②においては、ＳＳ－２がＩ期に始まり、II～III期にＳＳ－４、III～IV期にＳＳ－５、８が相当する。切り合い関係から、ＳＳ－５がＳＳ－８より先行するものと判断された。ＳＳ－18については、時期的に位置付けられなかった。エリア①においては、ＳＩ－９がII期に相当し、ＳＩ－８、11、ＳＳ－３はII～III期にあたる。ＳＩ－９、ＳＳ－３とＳＩ－８との先後関係はつかめなかったが、切り合いからＳＩ－11は、ＳＩ－８、９より後出であることが判断された。エリア③においては、ＳＩ－７がII期相当、ＳＩ－10、12がIII期に併行して存在する。２期おいて、ＳＳ－14は、VI～VII期に相当する。ＳＩ－13は時期不明である。エリア④においては、ＳＳ－６、７がII～IV期に併行して存在する。居住遺構ではないが、陰田55号横穴の施工は、V期に比定される。その後、VII期にＳＳ－17、13が併行して存在するが、出土土器相はＳＳ－13のほうがやや新しく位置付けられるものと判断した。ＳＳ－19は、時期不明である。エリア⑥においては、ＳＳ－９のａの建物がII期に始まり、ｂがIII期、ｃがIV期と変遷する。ｃと併行して、ＳＳ－12、10、11が存在した。切り合いにより、ＳＳ－12はＳＳ－10に先行すると判断されたが、ＳＳ－11については、他との先後関係を明らかにできなかった。エリア⑦については、ＳＳ－21がＳＳ－20に先行することは明らかだが、どの時期まで遡るかは、不明である。ＳＳ－22は

エリア	②	①	③	④	⑥	⑦	⑤
地区	A	A	A	A	A	B	A
	S S S S S S S S S S | | | | | 2 4 5 8 18	S S S S I I I S | | | | 9 8 11 3	S S S S S I I I S I | | | | | 7 10 12 14 13	S S 55 S S S S S 号 S S S | | 横 | | | 6 7 穴 17 13 19	S S S S S S S S S S S S | | | | | | 9 9 9 12 10 11 a b c	S S S S S S | | | 21 20 22	S S S S S S S S S S S S | | | | | | 15 16 16 16 16 16 a b c d e
Ⅰ（4式）	①						
Ⅱ（5式）	②	○① ② ○	①	①①	①		
Ⅲ（6式）	③④		②②		②		
Ⅳ（7式）					③③④○		
Ⅴ（8式）				②		①	
Ⅵ（9式）			③			②○	
Ⅶ（10式）				③ ④			○①①②○③
不明	○		○	○			

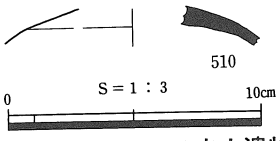
各エリアの変遷



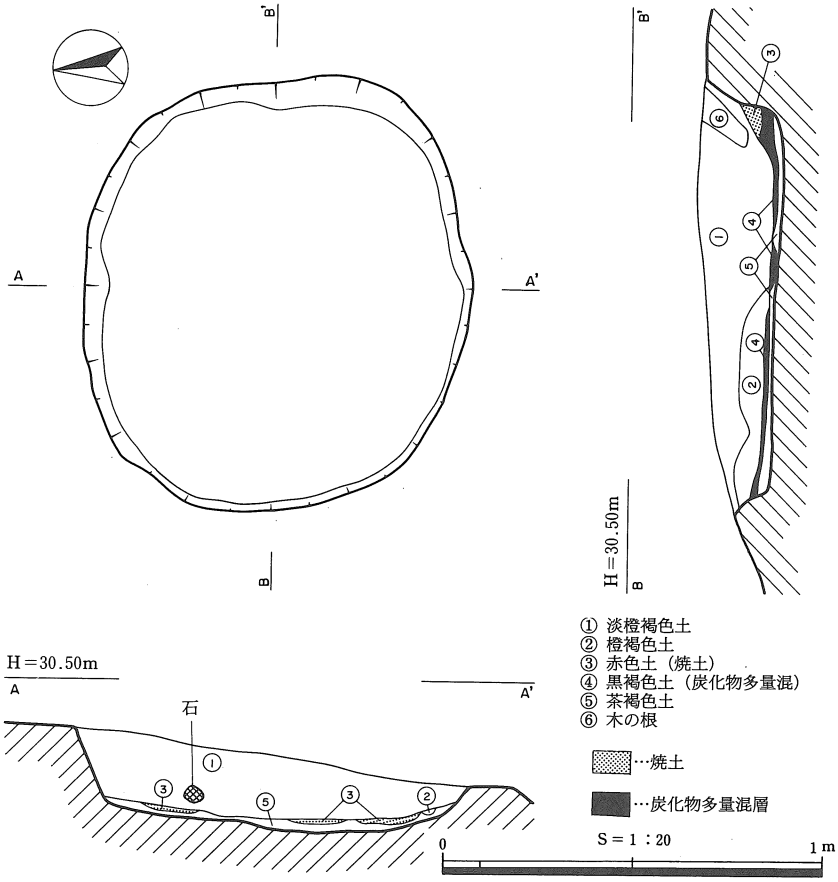
第146図　ＳＫ－４実測図



第147図　ＳＫ－４出土遺物実測図



第149図　ＳＫ－５出土遺物実測図



第148図　ＳＫ－５実測図

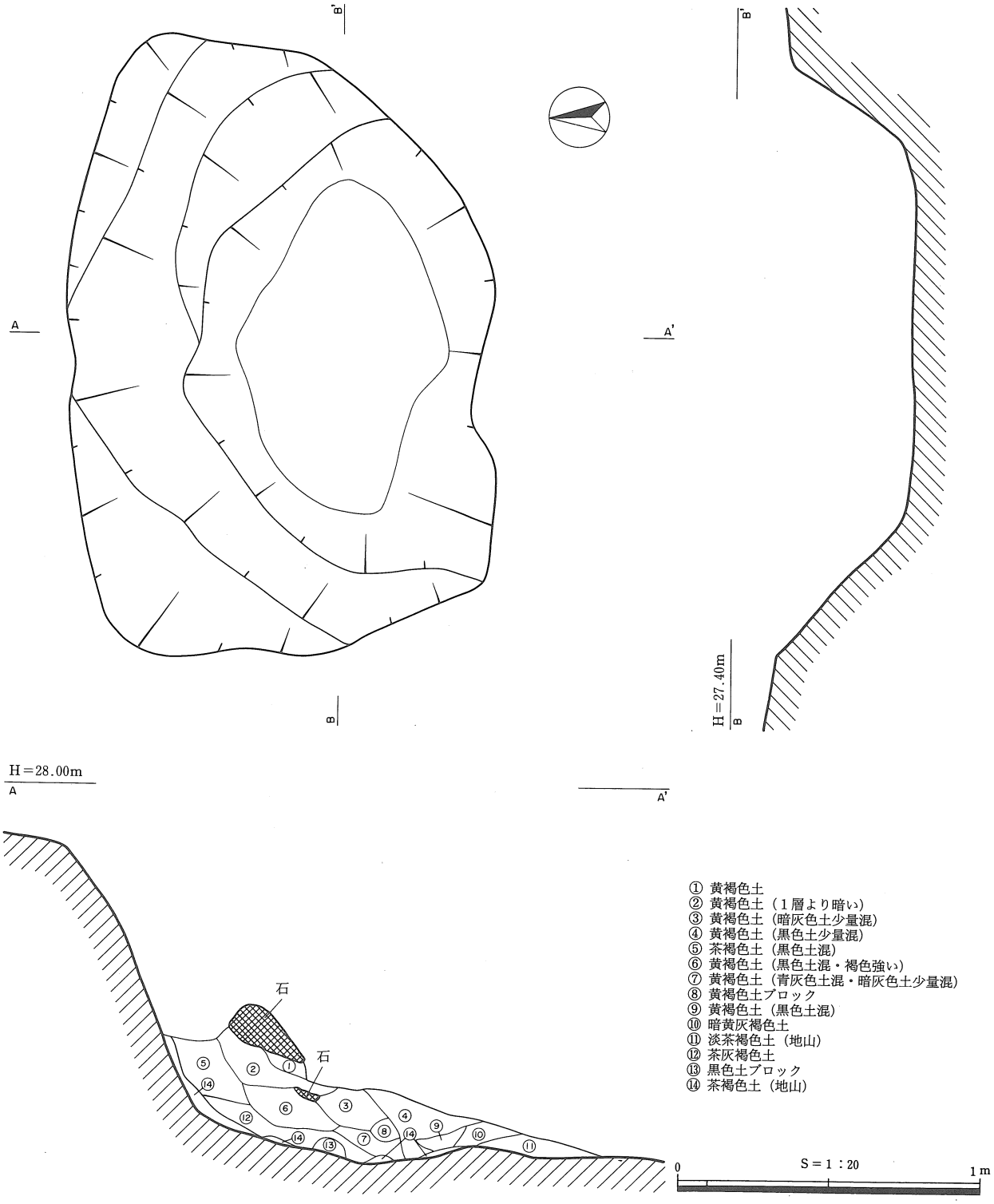
ＳＳ－20に併行するが、先後関係は判断できなかった。エリア⑤においては、すべてⅦ期の所作と判断したが、ＳＳ－15と16との先後関係は不明である。

以上の変遷を俯瞰してみるに、遺構群はＶ期を境に、２群に分けられるようである。すなわち、エリア②（ＳＳ－２、４、５、８、）、①（ＳＩ－９、８、11、ＳＳ－３）、③（ＳＩ－７、10、12）、④（ＳＳ－６、７）、⑥（ＳＳ－９、12、10、11）の１群と、エリア③（ＳＳ－14）、④（ＳＳ－17、13）、⑦（ＳＳ－21、20、22）、⑤（ＳＳ－15、16）の１群である。前者はⅠ～Ⅳ期（６世紀後葉～７世紀中葉）に、後者はⅥ、Ⅶ期（７世紀末～８世紀後半）に相当する。テラス状遺構自体の構造としては、基本的に変わるところはないが、後者の段階で、竪穴住居がみられなくなり、総柱の掘立柱建物が出現する。２群を区分するＶ期の段階においては、建物の構築が途切れ、横穴墓を構築しようと図っている。結果的に横穴は未完成に終わるが、この造墓行為は、集落形成の断絶を意味するものであろう。ところが、Ⅵ期以降に再び前代と同様な構造の建物を建造するのである。中途の時期の欠落は、両群を系譜的に繋ぎ難くするものであり、Ｖ期において、集落構造に何らかの変化が生じたことが推察される。この事象は、陰田横穴群の消長に重なる。陰田横穴群は、Ⅰ期に始まりＶ期に造墓を終える。陰田第６遺跡のⅠ～Ⅳ期の集団と陰田横穴群との間に、関連性を看取するものである。

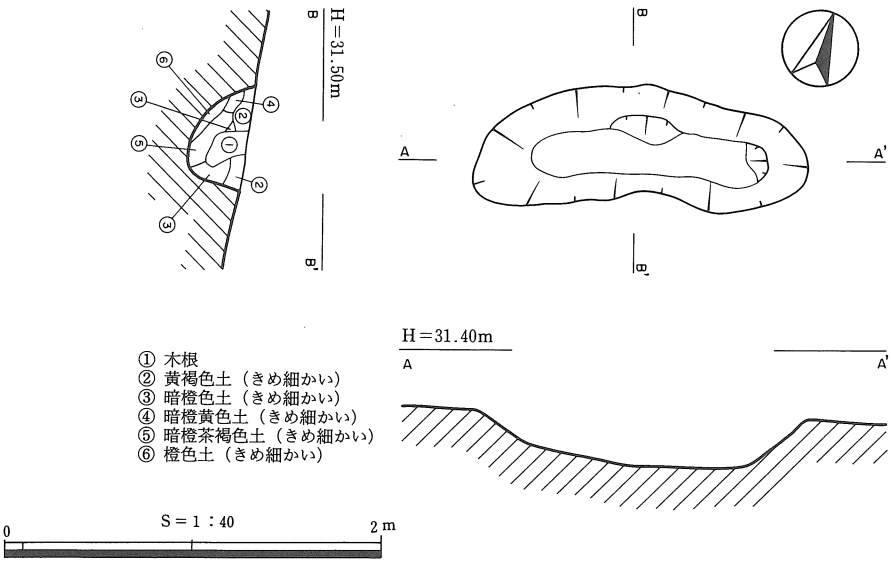
・掘立柱建物跡（ＳＢ－１、２、10）

ここでは、テラス状遺構に伴うものではない単独の掘立柱建物跡を扱う。Ｂ区東方のＳＳ－20・ＳＢ－３の北側にあたる丘陵尾根頂部にＳＢ－１、２を、Ａ区西方のＳＳ－19の南側に隣接してＳＢ－10を検出した。なおＳＢ－３～９は、ＳＳ－20に伴うものである。

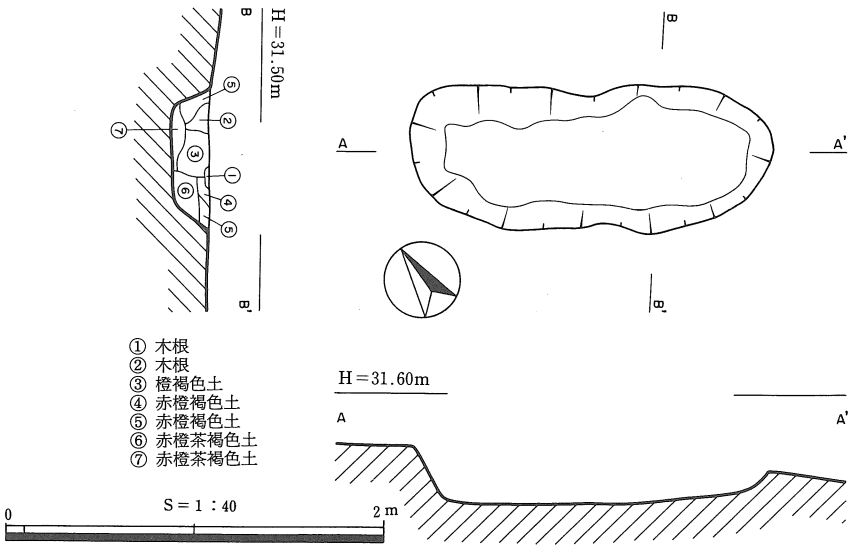
ＳＢ－１（第135、136図・写真図版３、28）は、桁行２間・梁行２間の総柱の建物である。桁行長3.6～3.9m、梁行長3.2mを測る。柱間は80cm～1.3mで、ピットの径は35～70cmと一律ではない。Ｐ．１とＰ．３でそれぞれ板状の礫を底面近くで検出した。根石となるものか。梁行方向の軸はＮ－42°－Ｗをとる。遺物は、Ｐ．９



第150図　ＳＫ－６実測図



第151図　ＳＫ－７実測図



第152図　ＳＫ－８実測図

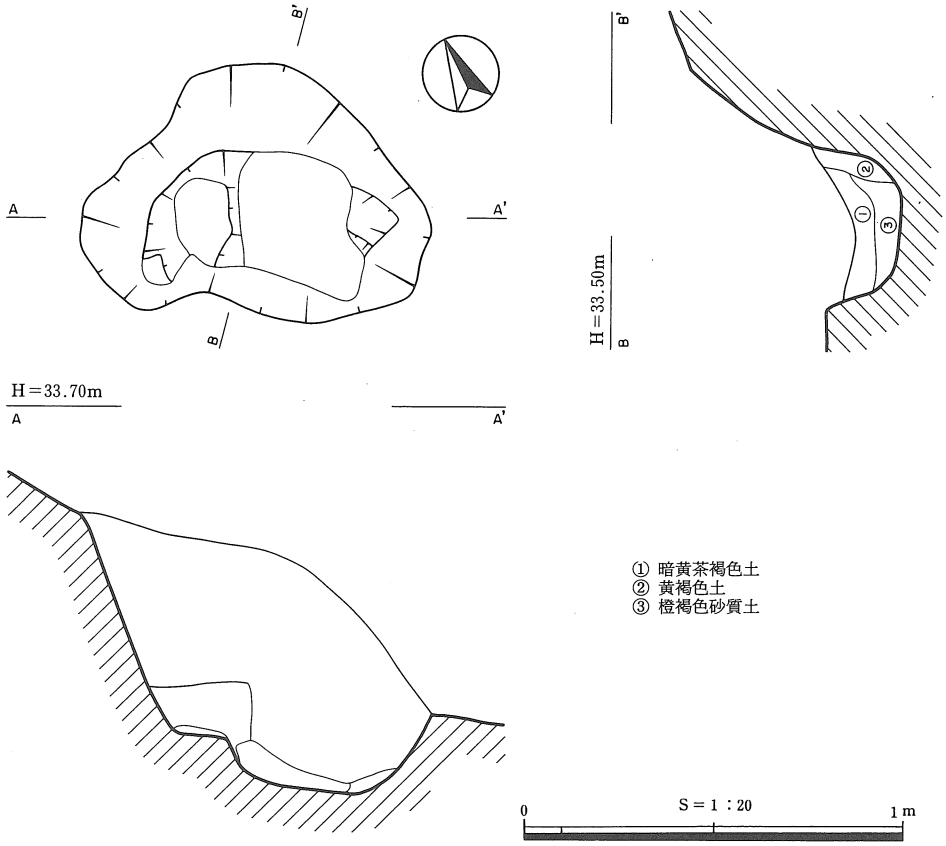
埋土中から須恵器の甕の胴部片が出土した。他に夾雑物がなく、古墳時代後期以降の時期としておきたい。

ＳＢ－２（第137図・写真図版３）は、桁行１間・梁行１間の建物である。桁行長2.5～2.7m、梁行長2.5mを測る。柱間は1.3～1.5mであるが、ピットの径は40～80cmと一律ではない。梁行方向の軸はＮ－28°－Ｗをとる。遺物は、出土していない。位置関係からみて、ＳＢ－１と並存したものと考え、古墳時代後期以降の時期としておきたい。

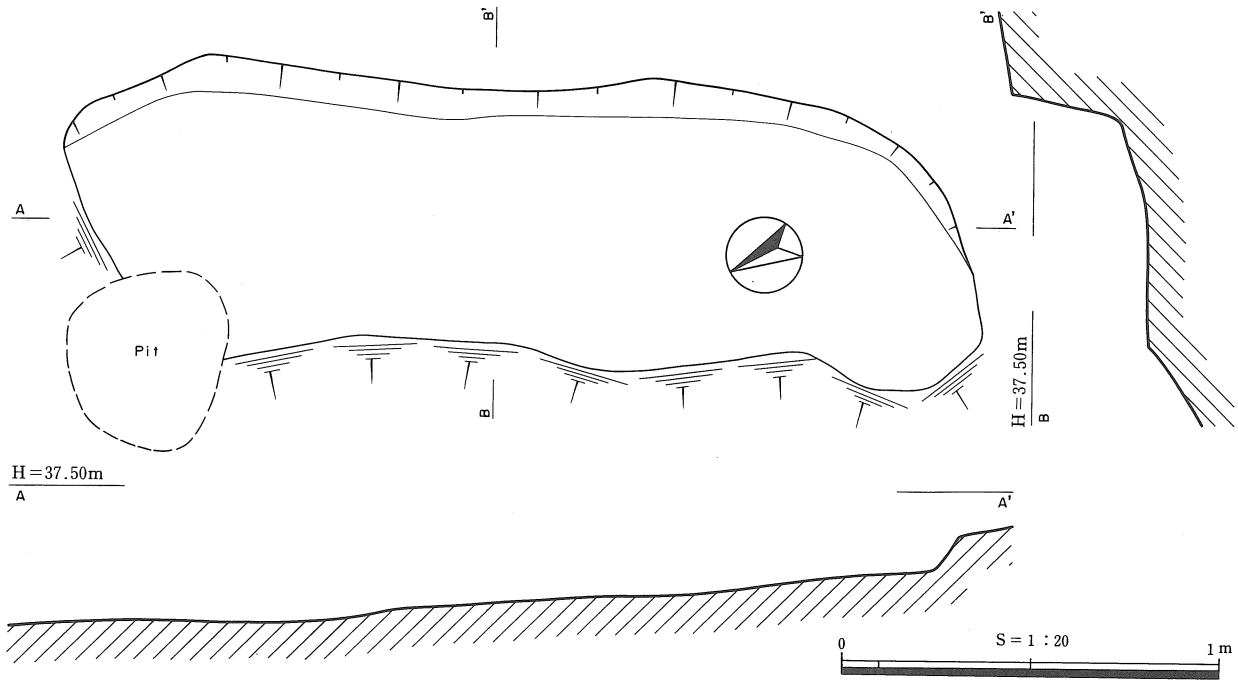
ＳＢ－10（第114、115図・写真図版22）は、径60～80cm、深さ30cmのピット２基による建物と判断した。東西長4.6mで、柱間は２mである。東西の軸はＮ－66°－Ｗをとる。遺物は、出土していない。テラス状遺構ＳＳ－19との関係は不明であるが、周囲の状況から、古墳時代後期以降の時期としておきたい。

・溝状遺構（ＳＤ－３、４）

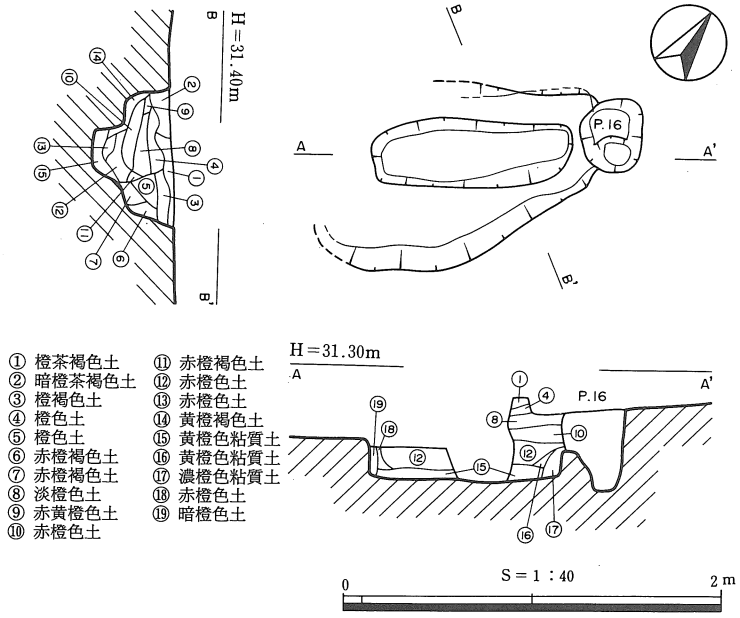
溝状遺構ＳＤ－３、４は、Ａ区南東部のピット群２の西側に、ほぼ平行するように検出した。両者の離隔は４mである。テラス状遺構であった可能性が高く、古墳時代後期～奈良時代の遺構としておく。



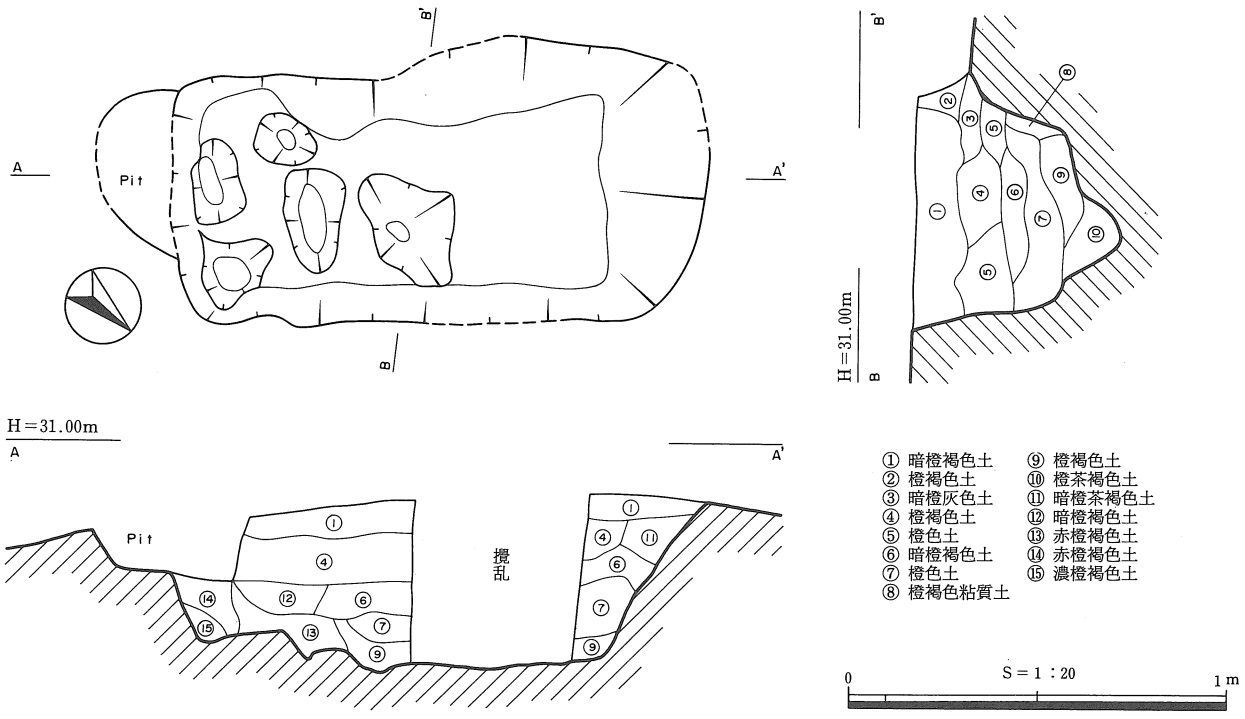
第153図　ＳＫ－９実測図



第154図　ＳＫ－10実測図



第155図　ＳＫ－11実測図

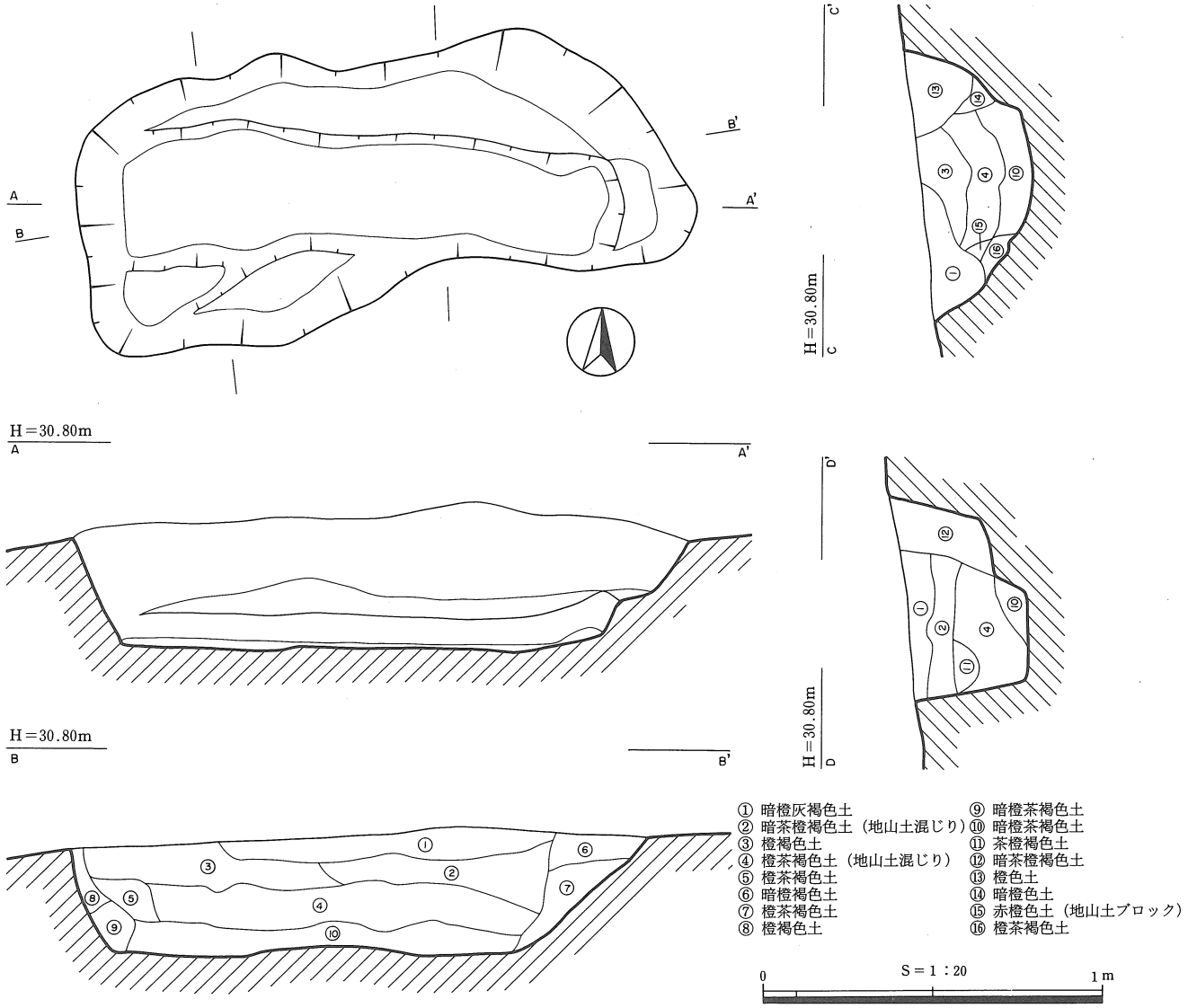


第156図　ＳＫ－12実測図

ＳＤ－３（第138、139図）は、やや弧状を呈する。検出面で長さ７ｍ、幅30～50cm、深さ15cmを測る。土層断面では、後背に立ち上がりのラインが観察でき、25、26層を床面とするテラス状遺構であった可能性がある。遺物は出土していない。

ＳＤ－４（第138、139図）は、南側を欠くが、やや弧状を呈する。長さ５ｍにわたって検出した。幅50～80cm、深さ30cmを測る。土層断面では、後背に立ち上がりのラインが観察でき、テラス状遺構であった可能性がある。その場合、ＳＤ－３より時期的に新しいものとなる。遺物は出土していない。

・**土坑**（ＳＫ－１～６）



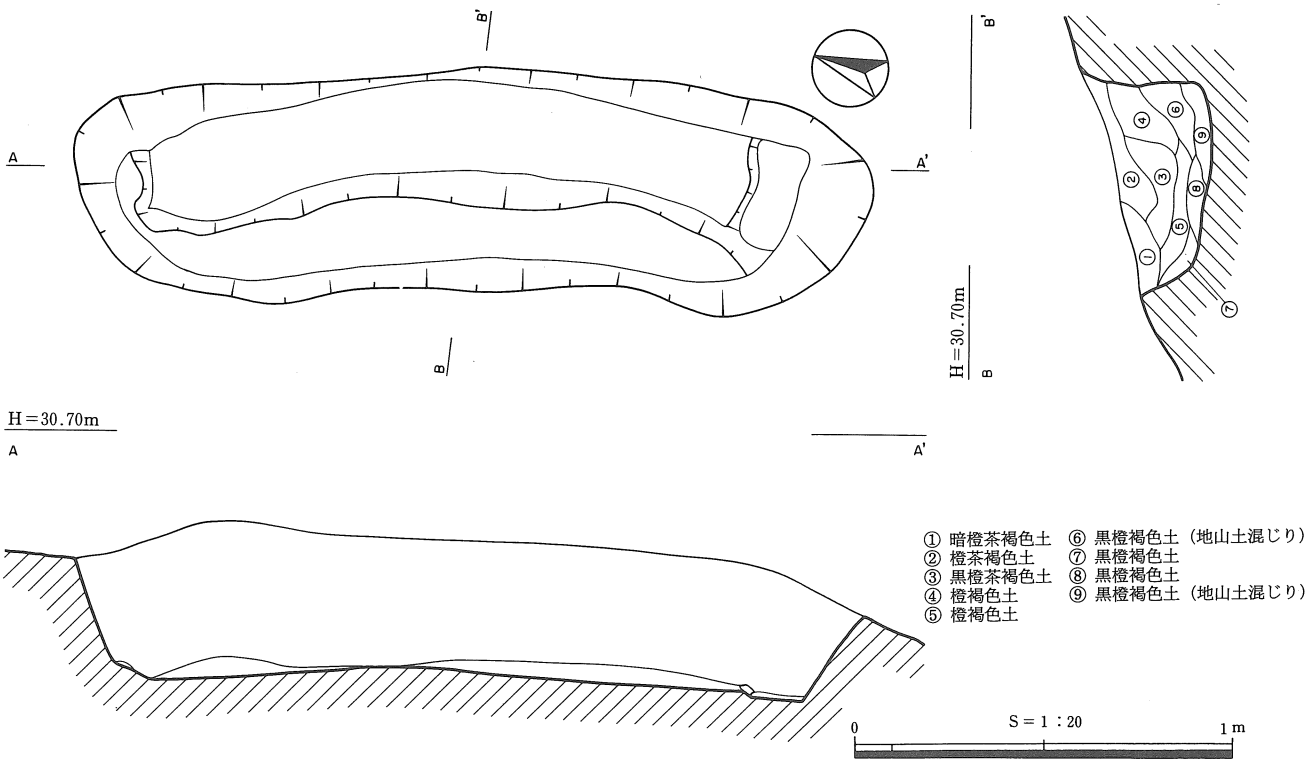
第157図　ＳＫ－13実測図

ＳＫ－１～３は、Ｂ区、ＳＫ－４～６はＡ区で検出した。当該期の遺物の出土をもって判断しており、遺物を伴わないものについては、他に時期を知る材料がなければ、時期不明として扱った。

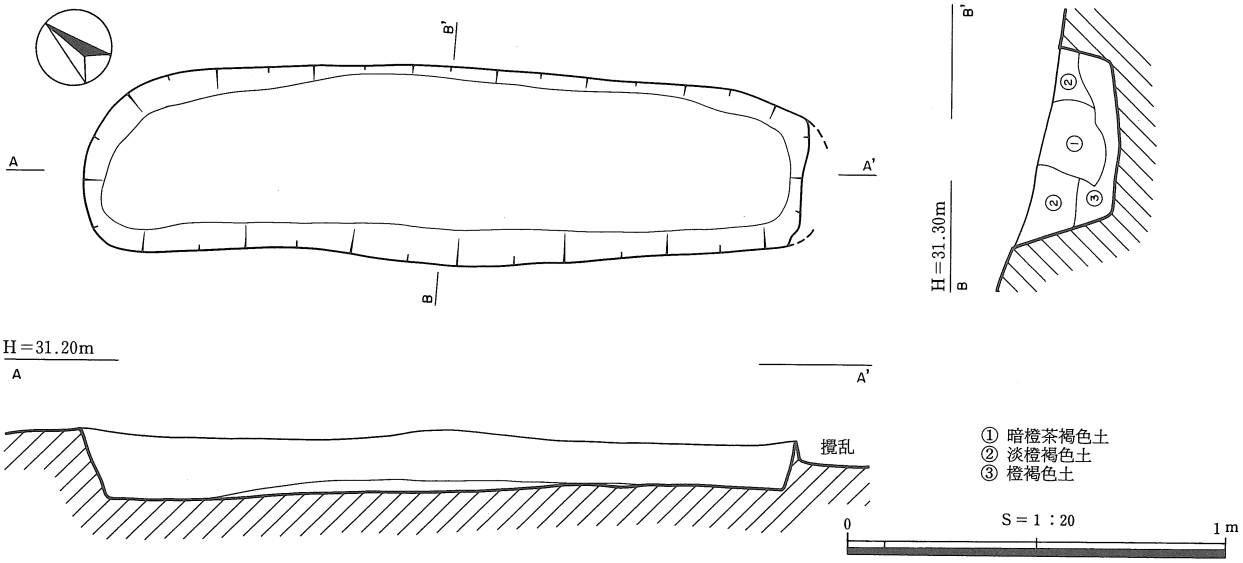
ＳＫ－１（第140、141図・写真図版28、80）は、東西長1.15m、南北長50cm、深さ20cmを測る。隅丸長方形を呈する。東側は流出し、肩が一部遺存していない。底面レベルは東西で15cm差があり、東側が低い。埋土中から、須恵器の坏蓋５、坏身５、高坏の脚部１、甕の底部１が出土した。蓋坏は完形になるものが多い。土坑の東側に集中しており、蓋坏は斜傾した状態で折り重なるように出土した。底面直上から出土するものはない。495～499は坏蓋、500～504は坏身である。505は高坏の脚部、506は甕の底部である。陰田編年の６式（７世紀前葉）相当と思われる。墓前祭祀等、陰田40号墳に関係する遺構である可能性も考えられる（Ｐ43参照）。

ＳＫ－２（第142、143図・写真図版28）は、検出面で東西長2.05m、南北長60cm、深さ25cmを測る。南側が流出しており、原形をとどめていないが、長楕円形で検出した。埋土中から、須恵器の壺と思われる破片１（507）が出土した。時期の詳細は不明だが、他に夾雑物がなく、古墳時代後期以降の時期としておく。土壙墓である可能性もある。

ＳＫ－３（第144、145図・写真図版28）は、Ｂ区南側の調査区界にかかっており、全容は不明であるが、検出した形状から推定すると、方形に展開しそうである。検出面で東西長8.2m、南北長2.5m、深さ60cmを測る。北



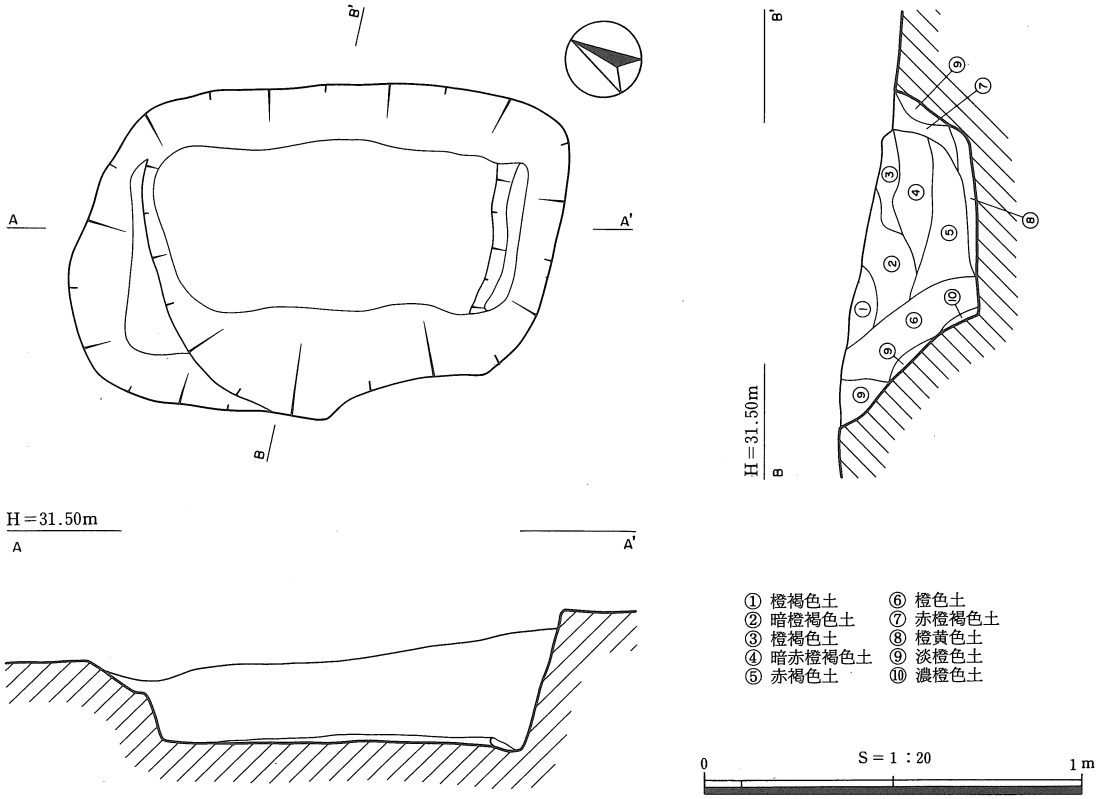
第158図　ＳＫ－14実測図



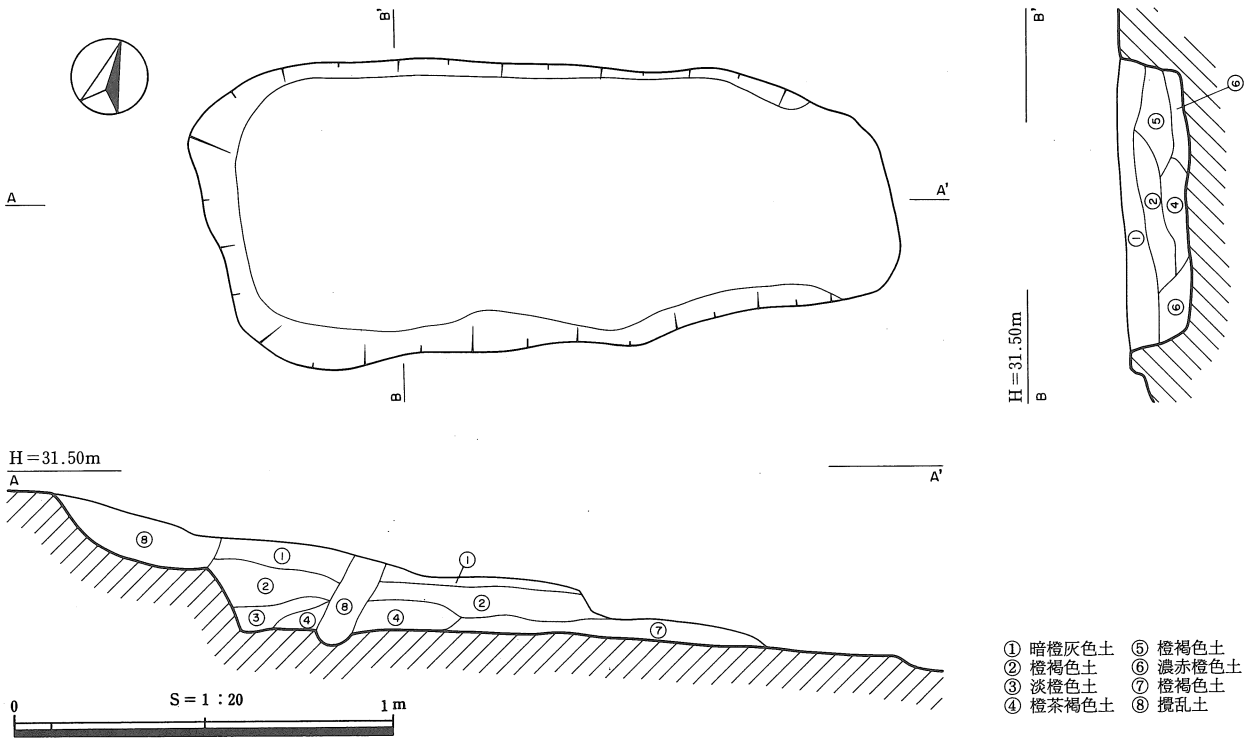
第159図　ＳＫ－15実測図

側にピットを１基（Ｐ．１）検出したが、当土坑との関わりは不明である。底面は平坦で、竪穴住居跡的であるが、壁面の立ち上がり角度は鈍角で、底面に柱穴が確認できなかった。テラス状遺構の可能性もある。埋土中から、底面から浮いた状態で糸切り底の須恵器の坏１（508）が出土した。陰田編年10式（８世紀後半）に相当する。斜面に則して立地しており、横穴の後背周溝の可能性も考えられるが、遺物は、横穴を築造しなくなった時期を示している。

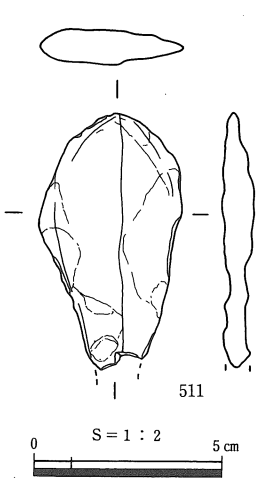
ＳＫ－４（第146、147図・写真図版29、80）は、閉塞石的な板状礫が近辺で検出されており、小横穴の可能性も考えられた。しかし、陰田横穴群における小横穴の従来の在り方が、横穴墓に付随するか、小横穴群を構成するかのいずれかであり、単独で存在する当遺構は例外的なものとなる。また、南側が流出している可能性が高



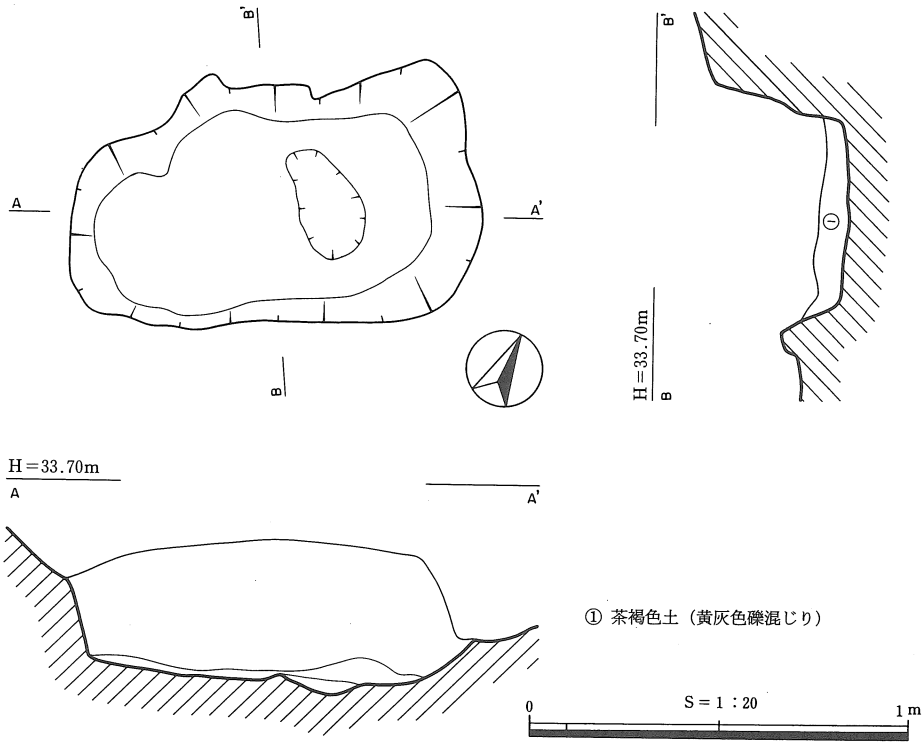
第160図　ＳＫ－16実測図



第161図　ＳＫ－17実測図



第162図　ＳＫ－17
出土遺物実測図



第163図　ＳＫ－18実測図

く、土層断面でも天井部の崩落を確認できず、横坑であることを検証できなかった。よって、土坑として扱うこととした。本来の平面形は不明だが、断面形は袋状を呈する。東西1.8m、南北1.6mの範囲で検出した。深さは85cmを測る。南側底面は羨道的だが、流出の結果と考える。南西部50cmのところに、板状の礫を検出した。長さ80cm、幅55cm、厚さ15cmを測る。当遺構に伴うものか否かは検証できない。東側底面上で須恵器の短頸壺１（５０９）を検出した。

ＳＫ－５（第148、149図・写真図版30）は、ＳＳ－９埋没後の所作である。南北１m、東西1.15m、深さ25cmを測る。円形を呈する。１、２層の橙褐色系の土層下に焼土と炭化物が斑状に広がる面を検出した。壁面もやや受熱して変成しており、火焚き場と考えられる。１層中より須恵器の坏蓋片１（510）が出土した。

ＳＫ－６（第150図・写真図版30）は、陰田55号横穴の北西側に隣接する。東西２m、南北1.3m、深さ１mを測り、楕円形を呈する。南側の肩が流出している。埋土中から須恵器片が出土している。

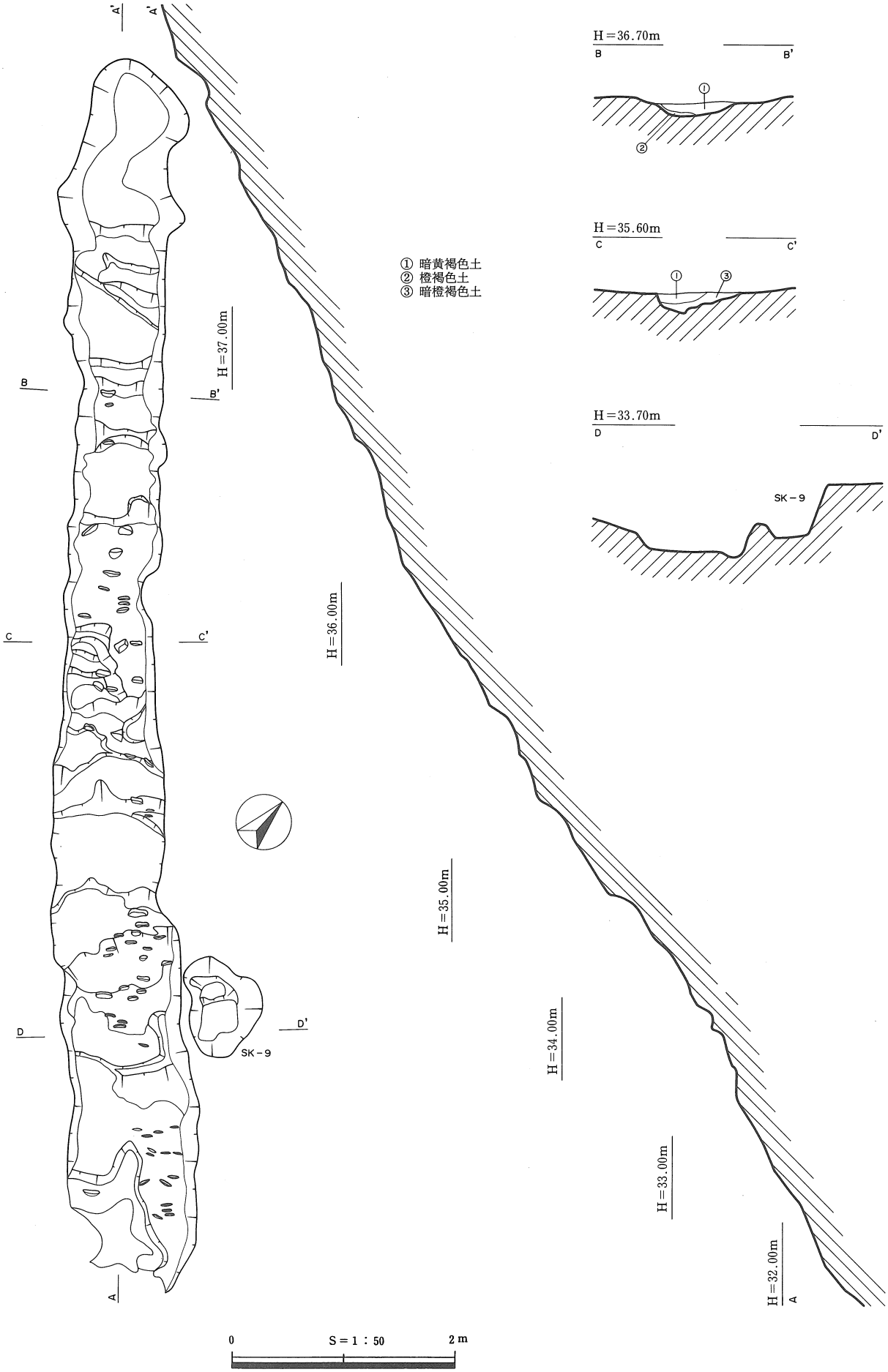
6　時期不明の遺構（ＳＫ－７～18、ＳＣ－１～８、ピット群１～３）

遺物の出土がみられないもの、あるいは時期を特定できないものを扱う。土坑４基（ＳＫ－７～10）、土壙墓８基（ＳＫ－11～18）、道状遺構８条（ＳＣ－１～８）、ピット群３ヶ所（ピット群１～３）である。土壙墓ＳＫ－11～14は、陰田40号墳に関係するものである可能性がある（Ｐ43参照）。

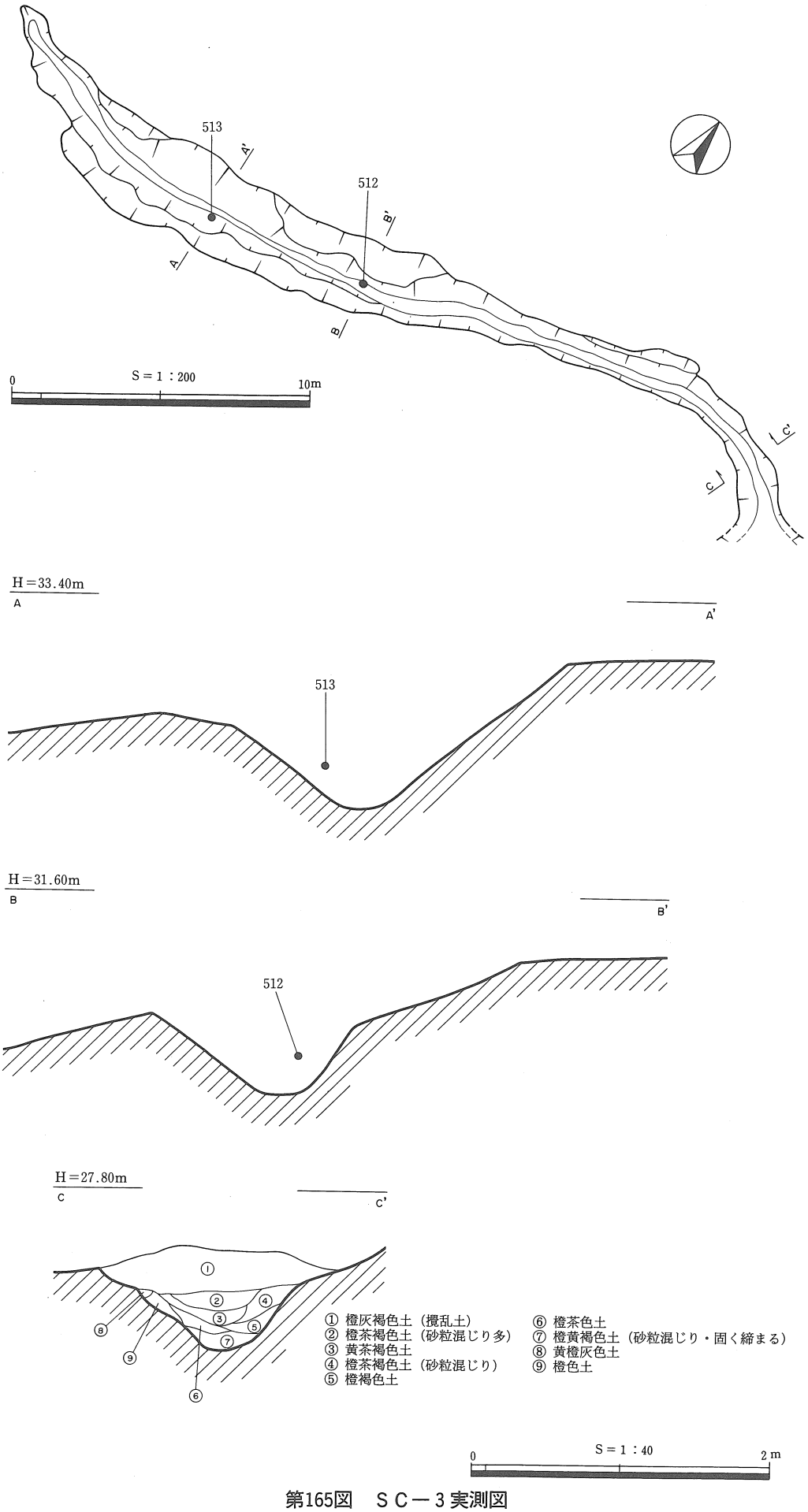
・土坑（ＳＫ－７～10）

すべてＢ区で検出した。ＳＫ－７（第151図・写真図版31）は、東西1.75m、南北60cm、深さ35cmを測る。平面は長楕円形、断面は「Ｕ」字形を呈する。ＳＫ－８（第152図・写真図版31）は、東西1.9m、南北80cm、深さ30cmを測る。平面は長楕円形、断面は逆台形を呈する。いずれも遺物を検出していないが、土壙墓である可能性もある。

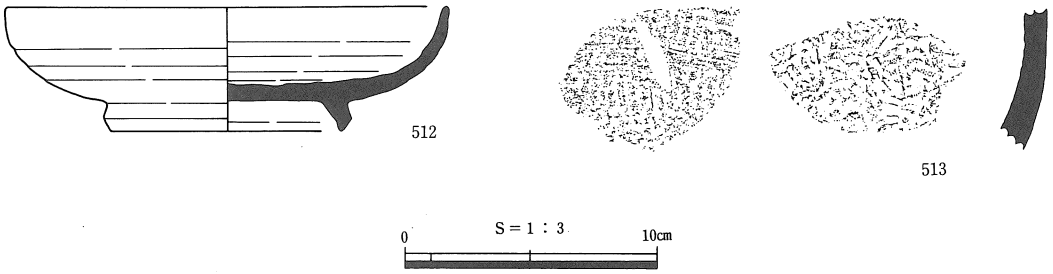
ＳＫ－９（第153図・写真図版31）は、道状遺構ＳＣ－２の南東側に接しており、急峻な斜面部上に掘り込まれている。東西90cm、南北65cm、深さ55cmを測る。平面は不整形だが、小判形を指向しているように思われる。断面は概ね「Ｕ」字形を呈する。岩脈部に掘り込まれており、底面はいびつである。



第164図　ＳＣ－２実測図



第165図　ＳＣ－３実測図



第166図　ＳＣ－３出土遺物実測図

ＳＫ－10（第154図・写真図版31）は、陰田60号墳の墳裾部に位置する。南北2.4m、東西70cm、深さ35cmを測る。西側は流出しており、原形をとどめていない。平面を長楕円形で検出した。断面形は逆台形か。

・土壙墓（ＳＫ－11～18）

すべてＢ区で検出した。ＳＫ－11（第155図・写真図版32）は、２段掘りの土壙墓と思われるが、１段目の西側は把握できなかった。１段目は、長さ1.5m、幅１ｍの範囲で検出した。深さは25cmを測る。不整な楕円形を呈する。東側の肩部をピットが切っている。２段目は、東西1.05m、南北40cm、深さ20cmを測る。平面は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－52°－Ｅにとる。

ＳＫ－12（第156図・写真図版32）は、長軸1.4m、短軸65cm、深さ45cmを測る。平面は長方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－40°－Ｗにとる。果樹による攪乱を被っており、南東側小口はピットに切られている。底面に凹凸がみられるが、棺材の痕跡は判断できなかった。

ＳＫ－13（第157図・写真図版32）は、変則的な２段掘りの土壙墓である。北側と東側、南西側に段を設けている。検出面で、長さ1.85m、幅70～80cmを測る。１段目までの深さは30cmを測る。平面は不整形に検出した。２段目は、長軸1.5m、短軸30cm、深さ10cmを測る。平面は長方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－87°－Ｅにとる。

ＳＫ－14（第158図・写真図版33）は、変則的な２段掘りの土壙墓である。北側と西側にのみ段を設けているが、２段目との段差は２cm程度である。検出面で、長さ2.1m、幅60cmを測る。１段目までの深さは30cmを測る。弧状気味の長楕円形を呈する。２段目は、長軸1.75m、短軸30cmを測る。平面は弧状気味の長楕円形を呈する。主軸方向は、Ｎ－19°－Ｗにとる。

ＳＫ－15（第159図）は、長軸1.9m、短軸55cm、深さ20cmを測る。平面は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－39°－Ｗにとる。南東側小口の肩部は攪乱されている。

ＳＫ－16（第160図・写真図版33）は、長軸1.25m、短軸90cm、深さ35cmを測る。平面は隅丸方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－26°－Ｗにとる。南側壁裾部に小口板の痕跡が認められる。

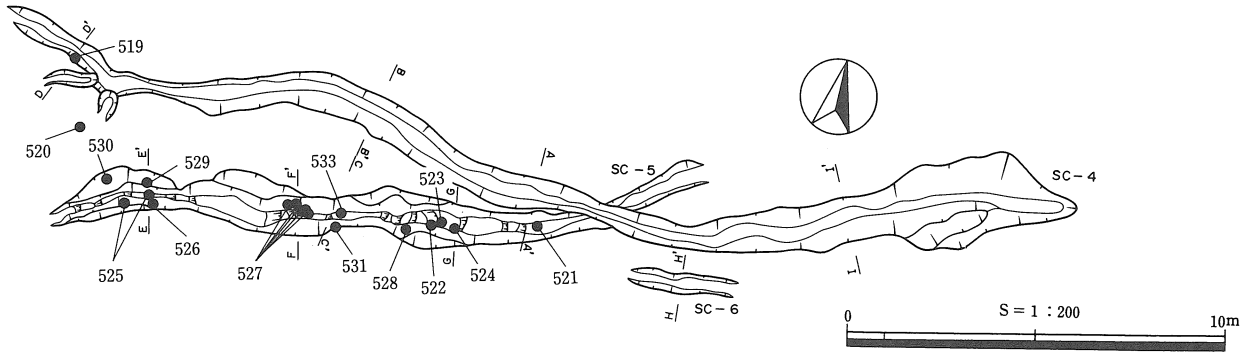
ＳＫ－17（第161、162図・写真図版33）は、長軸1.8m、短軸80cm、深さ20cm以上を測る。西側肩部は攪乱されている。平面は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－70°－Ｅにとる。511は鉄鏃である。攪乱部から出土しており、本来的な帰属は不明である。

ＳＫ－18（第163図・写真図版33）は、長軸1.1m、短軸65cm、深さ35cmを測る。岩脈に掘り込まれており、かつ上部を果樹に攪乱されているためいびつな平面形であるが、本来は方形を呈するものであろう。断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－54°－Ｅにとる。

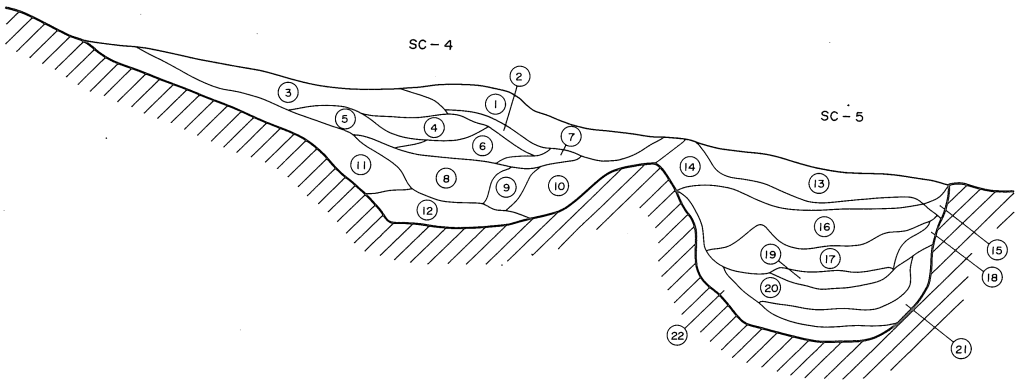
・道状遺構（ＳＣ－１～８）

ＳＣ－１～３はＢ区、ＳＣ－４～８はＡ区に所在する。ＳＣ－２以外の道状遺構は、基本的に地形に即した方向性を示している。遺物を伴うものもあるが、埋土中への流入であり、時期を確実に判断できるものはなかった。

ＳＣ－１（第８、116図・写真図版３）は、Ｂ区内を東西に走る。東はＳＳ－24付近から西はＳＳ－20・ＳＢ－９付近までの約50mの区間を検出した。Ｂ区の北側に横たわる尾根部の南側は、１～５ｍの段差をもって崖面をなしており、この裾部ラインにほぼ沿って、道は走る。標高29m前後の高度を保っている。崖面裾部の斜面を断面「Ｌ」字状に造成して、狭長な段を削り出している。路面は平坦面をなす。幅は最大で1.4mを測る。一

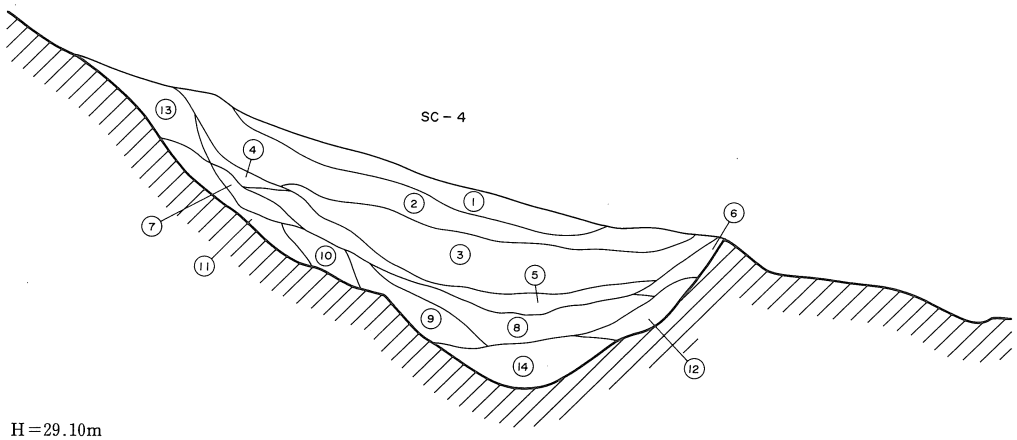


H＝30.80m
A　　A'



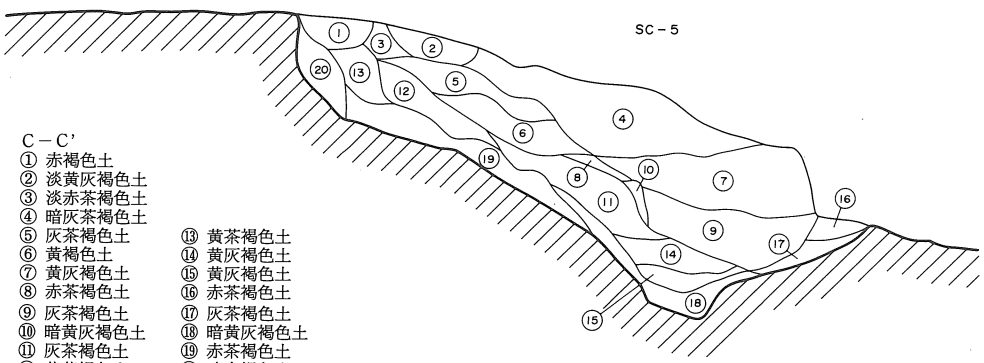
H＝29.90m
B　　B'

A－A'
① 暗黄褐色土
② 黄灰色土
③ 黄褐色土
④ 黄灰褐色土
⑤ 黄褐色土
⑥ 黄灰褐色土
⑦ 明黄灰色土
⑧ 橙黄色土（ややもろい）
⑨ 暗黄橙色土
⑩ 暗黄橙色土
⑪ 橙黄色土
⑫ 黄褐色砂質土
⑬ 暗灰褐色土
⑭ 暗灰褐色土
⑮ 橙褐色土
⑯ 灰褐色土
⑰ 灰褐色土（炭化物・焼土混じり）
⑱ 灰褐色土
⑲ 灰褐色粘質土（炭化物・焼土混じり）
⑳ 暗灰黄色土
㉑ 灰黄色土
㉒ 黄橙色粘質土



H＝29.10m
C　　C'

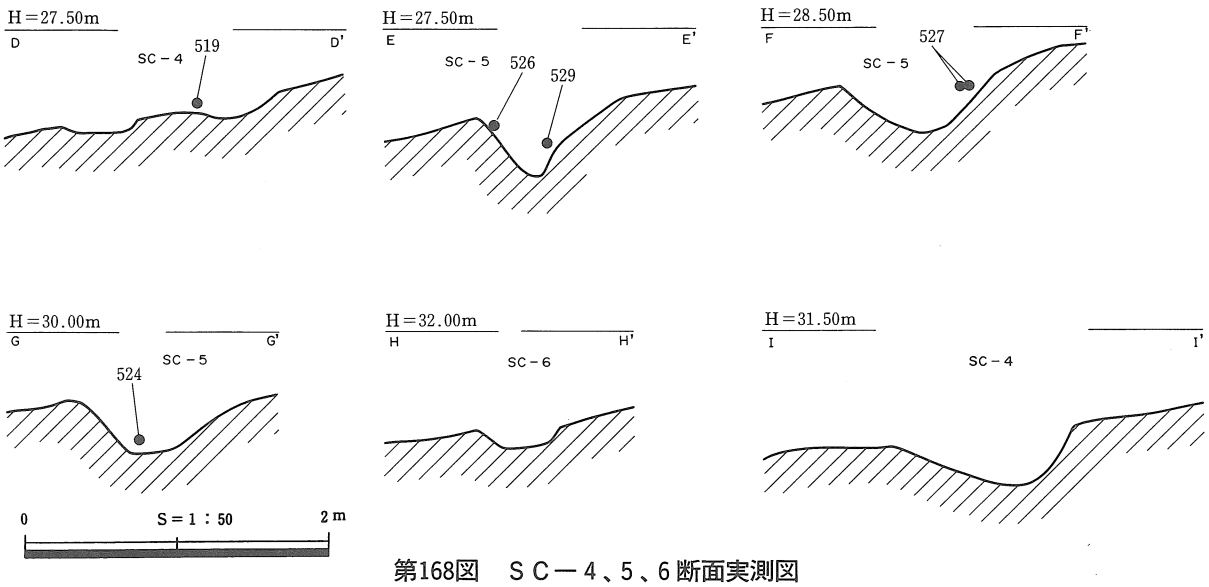
B－B'
① 黄橙色土
② 橙黄色土
③ 橙褐色土
④ 橙褐色砂質土
⑤ 橙黄褐色砂質土
⑥ 橙褐色土
⑦ 橙色土
⑧ 橙黄色砂質土
⑨ 橙褐色砂質土
⑩ 橙褐色土
⑪ 橙色土
⑫ 橙褐色土
⑬ 橙黄褐色土
⑭ 橙黄色砂質土



C－C'
① 赤褐色土
② 淡黄灰褐色土
③ 淡赤茶褐色土
④ 暗灰茶褐色土
⑤ 灰茶褐色土
⑥ 黄褐色土
⑦ 黄灰褐色土
⑧ 赤茶褐色土
⑨ 灰茶褐色土
⑩ 暗黄灰褐色土
⑪ 灰茶褐色土
⑫ 黄茶褐色土
⑬ 黄茶褐色土
⑭ 黄灰褐色土
⑮ 黄灰褐色土
⑯ 赤茶褐色土
⑰ 灰茶褐色土
⑱ 暗黄灰褐色土
⑲ 赤茶褐色土
⑳ 暗赤褐色土

0　S＝1：20　1m

第167図　ＳＣ－４、５、６実測図



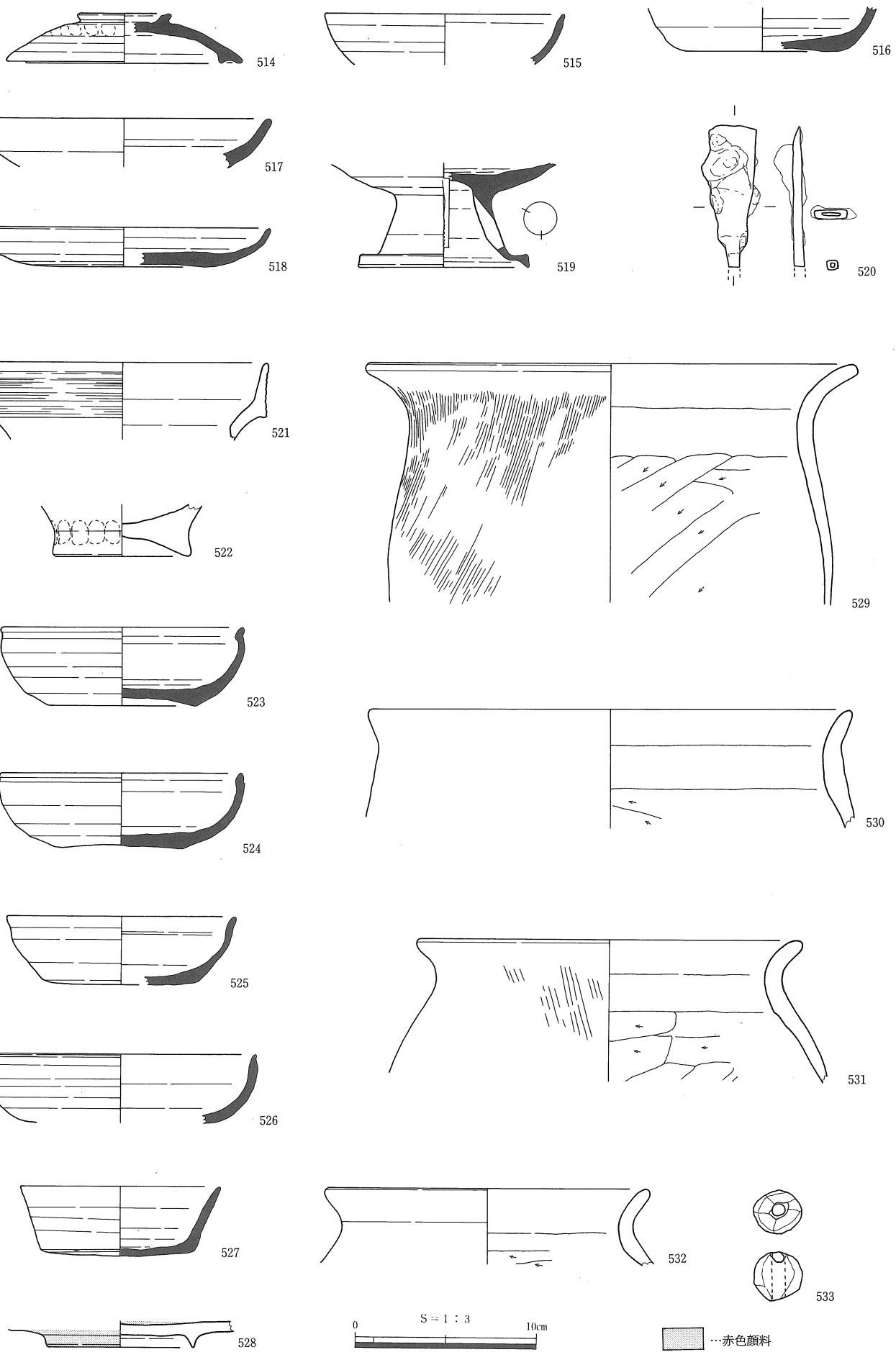
第168図　ＳＣ－４、５、６断面実測図

部後世の攪乱等で消失し、断続的になっているが、本来は西側でＳＣ－３と合流し、ＳＣ－４へ続いたものと思われる。途中、ＳＳ－20・ＳＢ－５とＳＢ－６の間の鞍部で南北両方向へ分岐し、それぞれ丘陵を下っていったものと思われる。古来地元では「天坂越え」と呼び、口陰田地区と奥陰田地区を結ぶ峠道であったと聞く。

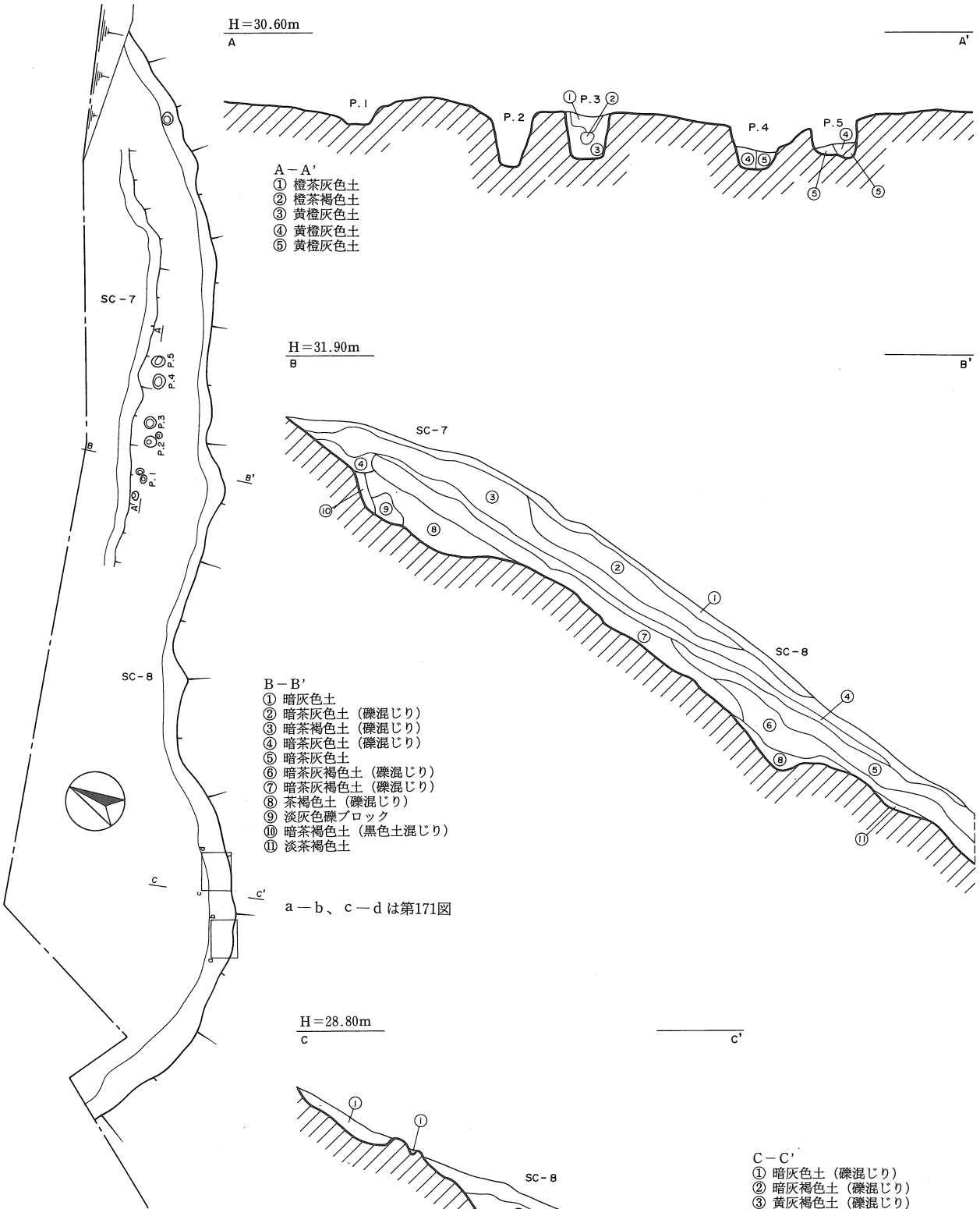
ＳＣ－２（第164図・写真図版34）は、陰田41号墳の墳裾南東部から、土坑ＳＫ－９をかすめて、南東方向に下る道である。全長11m、幅80cm～1.2mを測る。道の北西端の標高は37.5m、南東端は31.6mで、比高差は5.9m、傾斜角は約30°となる。断面形は凹形を呈し、深さは10～15cmを測る。かなり急峻な坂道であるが、５～20cm程度の段を設け階段状にし、昇降の難儀を緩和させている。道の高位側は総じて岩脈であり、路面はいびつに掘削されている。中位から下側の路面には、奥行き３cm程度、幅10cm程度の半月形状の掘削用工具痕が観察できた。下位側から上位側に向かって、鍬状の打ち降ろし具を打ち挽いている。道は、本来下方でＳＣ－１あるいはＳＣ－３と合流した可能性もあるが、麓部が削平されて遺存していない。陰田41号墳への墓道である可能性を提起しておきたい。

ＳＣ－３（第165、166図・写真図版34）は、陰田41号墳から陰田60号墳へ連なる丘陵鞍部から東方へ下る道である。全長33m、幅１～2.5mを測る。道の西端の標高は34.5m、東端は27mで、比高差は7.5m、傾斜角は概ね約25°となる。断面形は「Ｖ」字形を呈し、深さは60cm～１mを測る。全体に溝状を呈する。急峻な坂道であるが、道が適度に屈曲しており、また両脇の壁面の立ち上がりが急であるので足場として安定しており、これらのことが昇降の便宜を図る結果になっている。西端は流出して形状が判然としない。埋土中から須恵器の高台付き坏（512）、甕の胴部片（513）が出土した。512の底部は、糸切り後ナデ消している。８世紀前半に比定される（註15）。513の内面は、放射状タタキである。また、図化していないが、埋土上層から焼締陶器の甕胴部片が出土している。道は、ＳＣ－１やＳＣ－２と合流し、ＳＣ－４へ続いてＡ区に至るものと思われる。東は奥陰田地区へ下っていく。

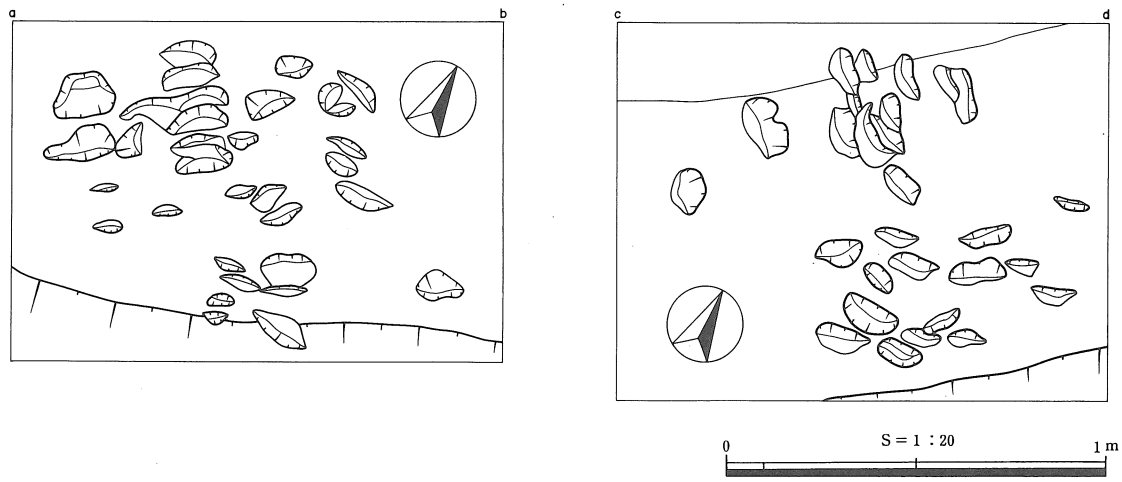
ＳＣ－４～６（第167～169図・写真図版３、35）は、陰田41号墳から陰田60号墳へ連なる丘陵鞍部から西方へ下る３条の道である。全体に溝状を呈する。ＳＣ－４は全長32m、幅50cm～２mを測る。道の東端の標高は35m、西端は27mで、比高差は８m、傾斜角は概ね約15°となる。断面形は「Ｕ」字形を呈し、深さは20～40cmを測る。西端は三又に分岐して、消失する。ＳＣ－５は全長17m、幅70cm～1.5mを測る。道の東端の標高は32m、西端は26mで、比高差は６m、傾斜角は概ね約20°となる。断面形は部位で異なり、深さは45cmを測る。ＳＣ－４とＳＣ－５は途中で１度交差し、ＳＣ－４がＳＣ－５を切っている。ＳＣ－６は全長３m、幅50cmを測る。道の東端の標高は32m、西端は30.5mで、比高差は1.5m、傾斜角は概ね約25°となる。断面形は逆台形を呈し、



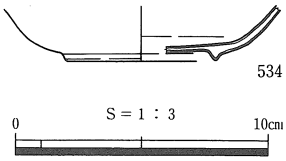
第169図　ＳＣ－４、５出土遺物実測図



第170図　ＳＣ－７、８実測図



第171図　ＳＣ－８工具痕実測図



第172図　ＳＣ－７出土遺物実測図

深さは15cmを測る。３条の道は、埋没等により、進路を幾度か変更していることを示している。基本的にＢ区のＳＣ－３に連なるもので、Ａ区とＢ区を結ぶものである。埋土中に弥生土器、土師器、須恵器等が混入していた。514～519はＳＣ－４から出土した須恵器である。514は微小なかえりをもつ輪状つまみの坏蓋である。515、516は坏である。516は底部糸切り底である。517は高坏の坏部か、皿である。518は皿である。519は高坏で、２方向の透かしの位置が変則的である。521～533は、ＳＣ－５の出土遺物である。521は弥生時代後期の甕の口縁部で、平行沈線を施している。522は弥生土器の底部である。523～527は須恵器の坏である。523～525は底部糸切りで、527は丁寧なヘラによる切り離しである。528は丹塗り土師器の皿である。529～532は土師器の甕、533は土錘である。520は、ＳＣ－４とＳＣ－５の間で出土した鉄鏃である。道の埋土中遺物は、８世紀後半のものが最新であり、道の造成はこれ以降の所作と考える。

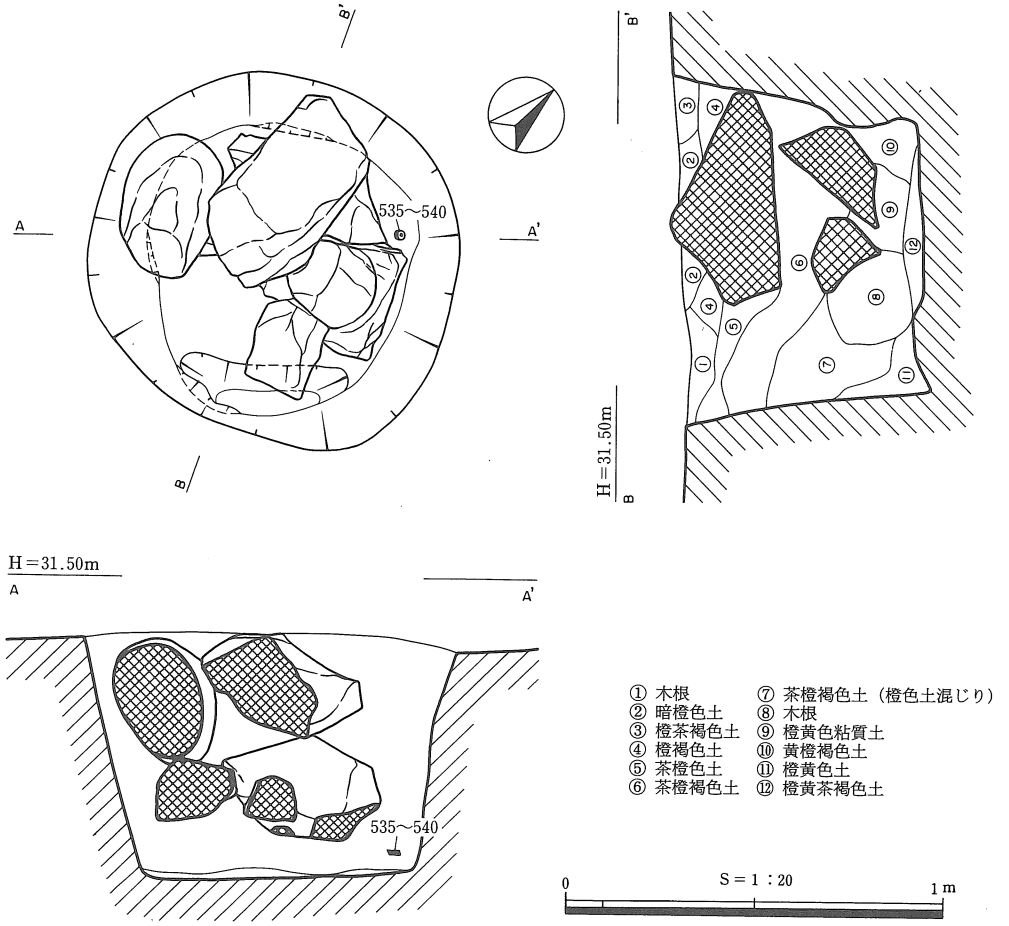
ＳＣ－７、８（第170～172図・写真図版22、35）は、Ａ区北西側を丘陵尾根にほぼ平行して走る道である。ＳＣ－７は、全長14m、幅50cmを測る。ＳＣ－８の２m上方に位置する。道は概ね標高30.5mの等高線ラインに沿っている。ＳＣ－８は、全長40m、幅40cm～１mを測る。道は概ね標高27mと31mの等高線ラインの間を、ＳＣ－７とほぼ平行して走っている。いずれの道も岩質の斜面を断面「Ｌ」字状に造成して、狭長な段を削り出している。両道の間に７基のピット列を検出している。路面は平坦面をなす。路面には、奥行き３～５cm程度、幅10～15cm程度の半月形状の掘削用工具痕が観察できた。基本的に低位側から高位側に向かって、鍬状の打ち降ろし具を打ち挽いている。道は、尾根の頂部に続く。昭和59年の調査の際、長さ12m、幅50cmの道状遺構が検出されているが（註16）、ＳＣ－８はこれに続くものであろう。ＳＣ－７上の表土中から白磁皿が出土した。

・ピット群（ピット群１～３）

規則性を持たず、建物を構築しないピット群を、３つのエリアで把握した。ピット群１（第８、190図・写真図版７）は、陰田60号墳の墳丘上に所在する。標高38.5～39.5mを測る。Ｐ．１から敲石（559）が出土している。後世の削平により、墳頂部が平坦面をなしており、曲輪であった可能性もある。ピット群２（第７図・写真図版２）は、Ａ区南辺、弥生時代後期後半の竪穴住居跡ＳＩ－４の南側に広がる比較的平坦な範囲で、ＳＤ－３、４の周辺である。標高11.5～20.5mを測る。ピット群３（第７図・写真図版２）は、Ａ区の西端、ＳＳ－19、ＳＢ－10の南側丘陵斜面に広がる標高19.5～25.5mの範囲である。

７　中、近世の遺構（ＳＫ－19～31）

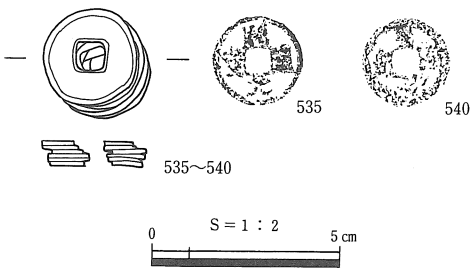
中、近世の遺構と判断したのは、土坑１基（ＳＫ－19）、土壙墓12基（ＳＫ－20～31）である。いずれもＢ区で検出した。



第173図　ＳＫ－19実測図

・**土坑**（ＳＫ－19）

ＳＫ－19（第173、174図・写真図版36）は、ＳＢ－１の東側、丘陵尾根上に立地する。検出面形、底面形ともに円形で、断面形は逆台形を呈する。検出面で径１m、底面で径70cm、深さ65cmを測る。大小６個の礫が、埋土中に混入していた。陥没したものではなく、埋め戻す際に投入されたと思われる。埋土下層中から、６枚の銅銭（535～540）が出土した。付着して一塊になっている。穴の部分が貫通しており、紐に通していたものと思われる。上下２枚の銭のみ観察できた。535は「開元通寶」（唐・初鋳621年）、540は「□元□□」と読める。土坑の機能は不明である。時期は中、近世以降としておく。



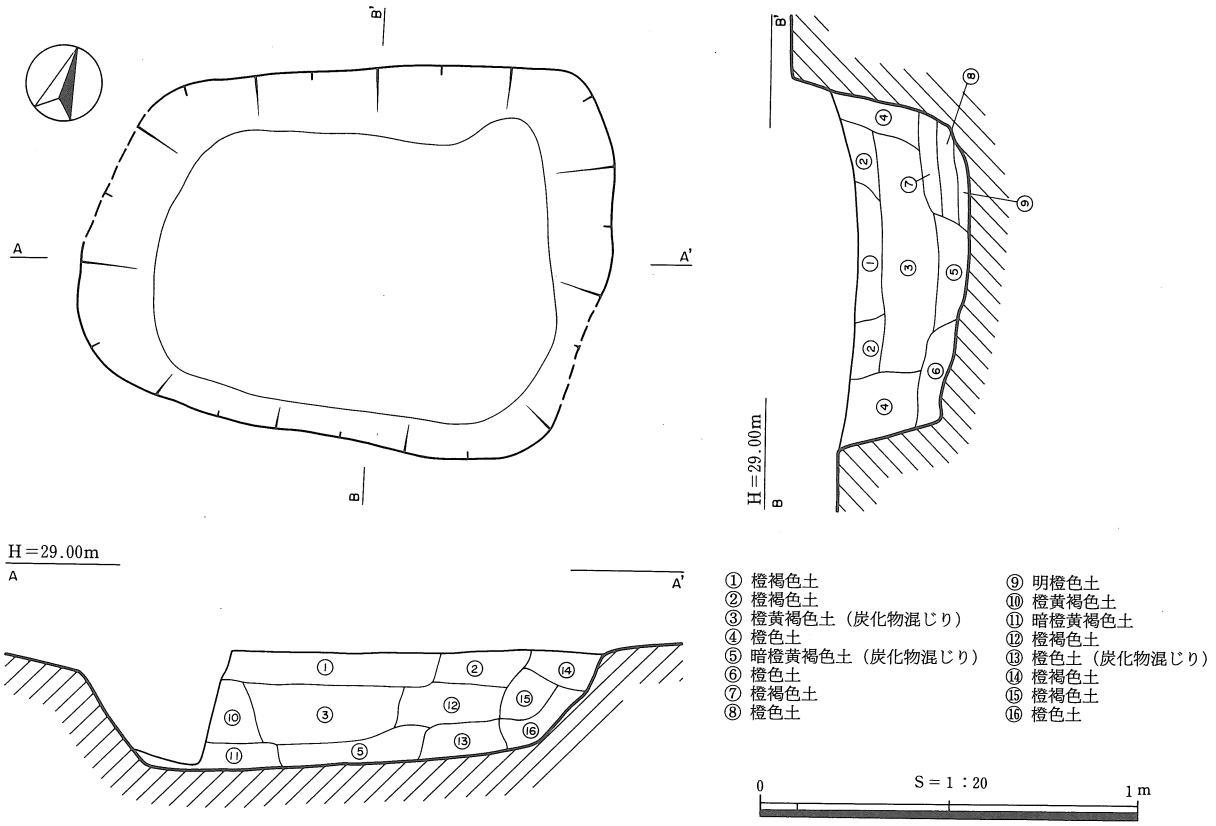
第174図　ＳＫ－19出土遺物実測図

・**陰田第６遺跡の古墓**

過去の調査により、63基の古墓が検出されている。久幸山、天神山丘陵上に点在するものをＡ群（25基）、陰田36号墳上に集中して所在するものをＢ群（38基）と区分されている。陰田39～40号墳上からは、古墓ＡＳＫ－03、04、11、12が、陰田41号墳上からは古墓ＡＳＫ－01が検出されている。ＡＳＫ－01、03、04は、陰田古墓群のⅠ期とされ、中世後期にあてられている。ＡＳＫ－11はⅡ期で中世末～近世初頭、ＡＳＫ－12はⅢ期で近世前期に比定されている（註17）。Ⅰ期の古墓はＡＳＫ－01、03、04の３基のみで、今回の調査域は、陰田古墓群中でも古相を示すエリアである。

・**土壙墓**（ＳＫ－20～31）

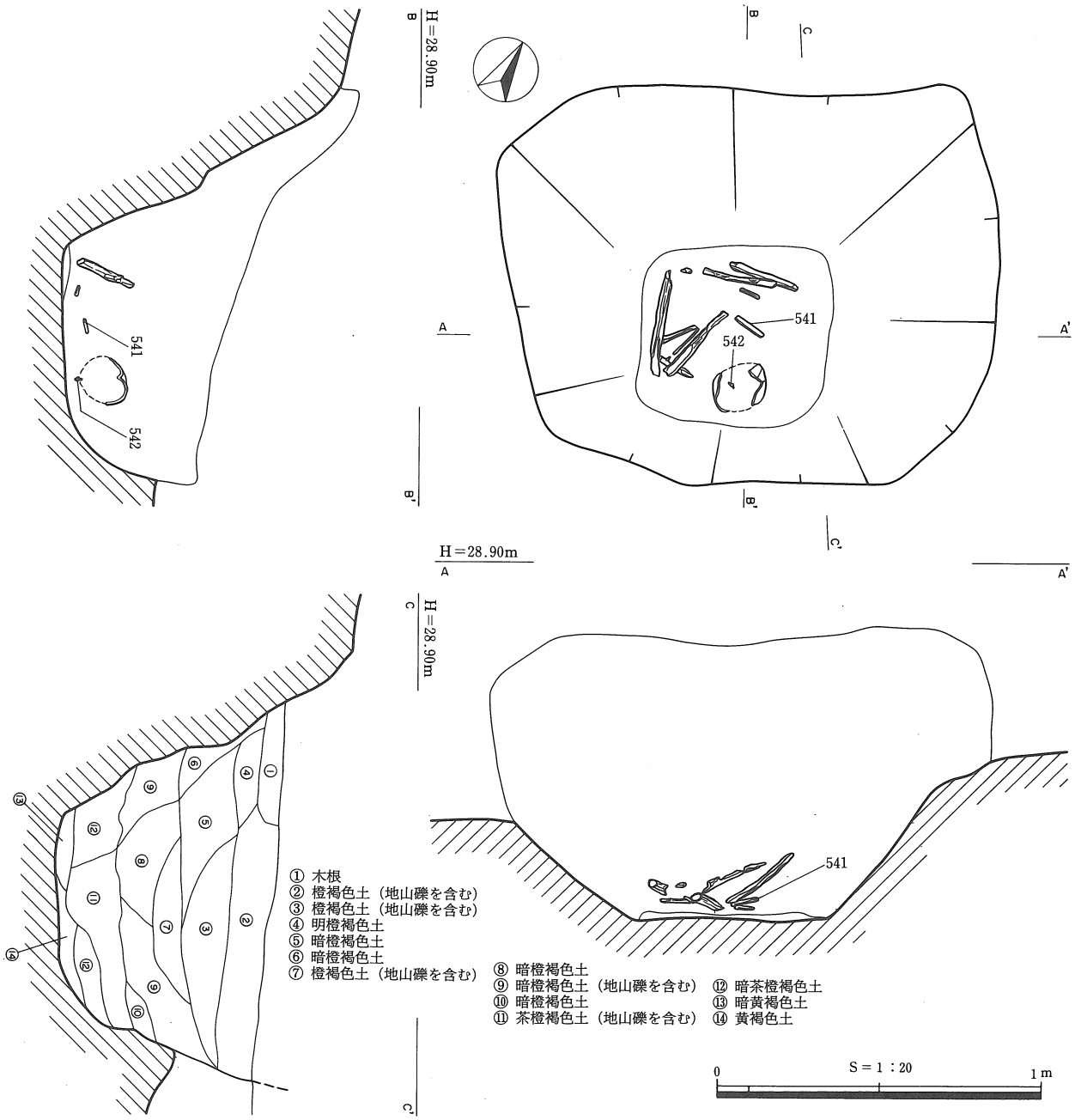
ＳＫ－20、21は、陰田54号横穴の周辺、ＳＫ－22～31は陰田60号墳の墳丘上で検出した。ＳＫ－20（第175図・写真図版36）は、東西1.4m、南北１m、深さ50cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出し



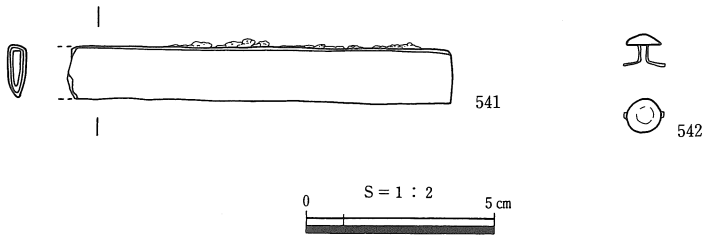
第175図　ＳＫ－20実測図

た。主軸方向は、Ｎ－82°－Ｅにとる。土層断面から木棺墓と思われる。時期を示す遺物の出土がなく、人骨も検出されなかったが、ＳＫ－21との比較において、形状、規模、方向性など、共通点があり、中、近世の土壙墓と判断した。ＳＫ－21は、２ｍの離隔をもって南西に位置する。

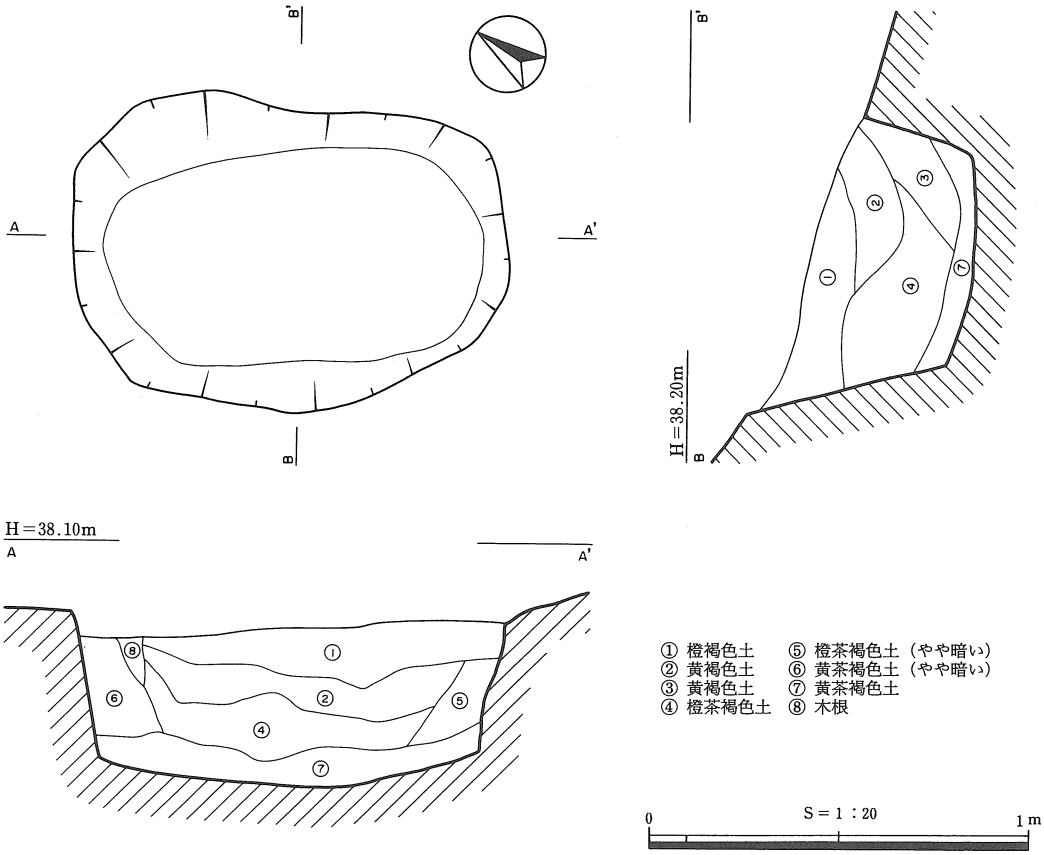
ＳＫ－21（第176、177、195図・写真図版37、81・「当章第４節　ＳＫ－21出土人骨について」参照）は、東西1.5m、南北1.2m、深さ85cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。底面は、１辺55cmの方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－58°－Ｅにとる。陰田54号横穴の後背周溝を切って掘り込んでおり、南東側掘方は周溝埋土のため判断し難く、肩を把握できなかった。墓壙底よりやや浮いた位置で、成人の人骨を検出した。遺体の腐蝕によって骨が平面的に散らばった状況にあるが、頭蓋骨の位置が墓壙底の南東側にあり、よって北西側が骨盤の位置と推測される。埋葬姿勢は座位と推察され、被葬者は丘陵尾根を背にして、南東方向の奥陰田の谷を望んでいたことになる。墓壙底面直上で検出された人骨はなく、３cm以上の隙間を有していることから、棺床の存在が推察され、埋葬主体は座棺であったと判断する。底面ほぼ中央、頭蓋骨と右大腿骨の中間で、銅製の刀子の鞘（541）が出土した。刃幅は１cmに満たず、刃渡り10cm以上に及ぶ。墓壙底面から５cmほど浮いた状態の横位で出土しており、これを棺床上に供献したものか、本来被葬者が身に付けていたものが離脱したものかは判断し難いところである。墓壙底の南西側、頭蓋骨の直下で、銅製の鋲（542）が１点出土した。底面から３cm浮いた状態である。直径８㎜の凸面をなす頭部から二又に分かれる足が伸び、相反する方向に折れ曲がる。遺体から離脱して落下した頭蓋骨の下で出土したものであり、棺内にまだ空間の残る時期であれば、棺の金具の可能性は低いと考える。11層の茶橙褐色土層中から種実が多量に出土した。頭蓋骨下に特に集中し、ここから北西方向に向かって帯状に伸びる範囲で出土している。本来有機質の袋にいれて供献していたものが、袋の腐蝕によって散らばったものと考える。散らばりが生じるとすれば、紐を付けて首から袋を提げていた可能性が高い。鋲は、この袋に本来留め金具として使われていたものであろうか。当土壙墓は、座棺であることから、近世以降の埋葬と考える（註18）。



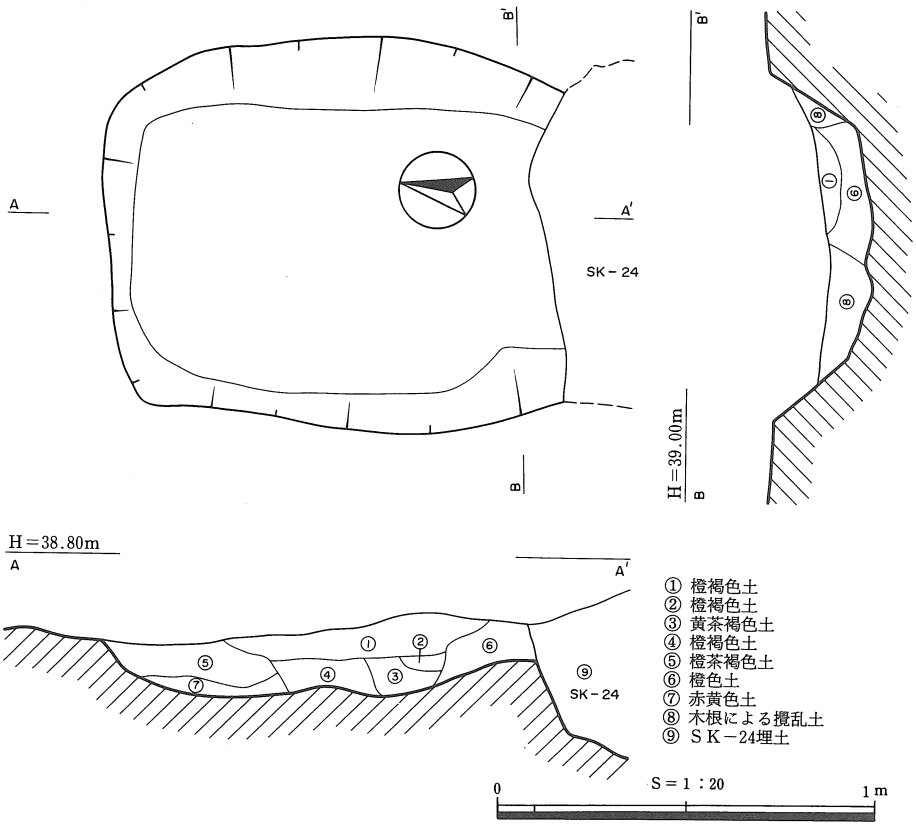
第176図　ＳＫ－21実測図



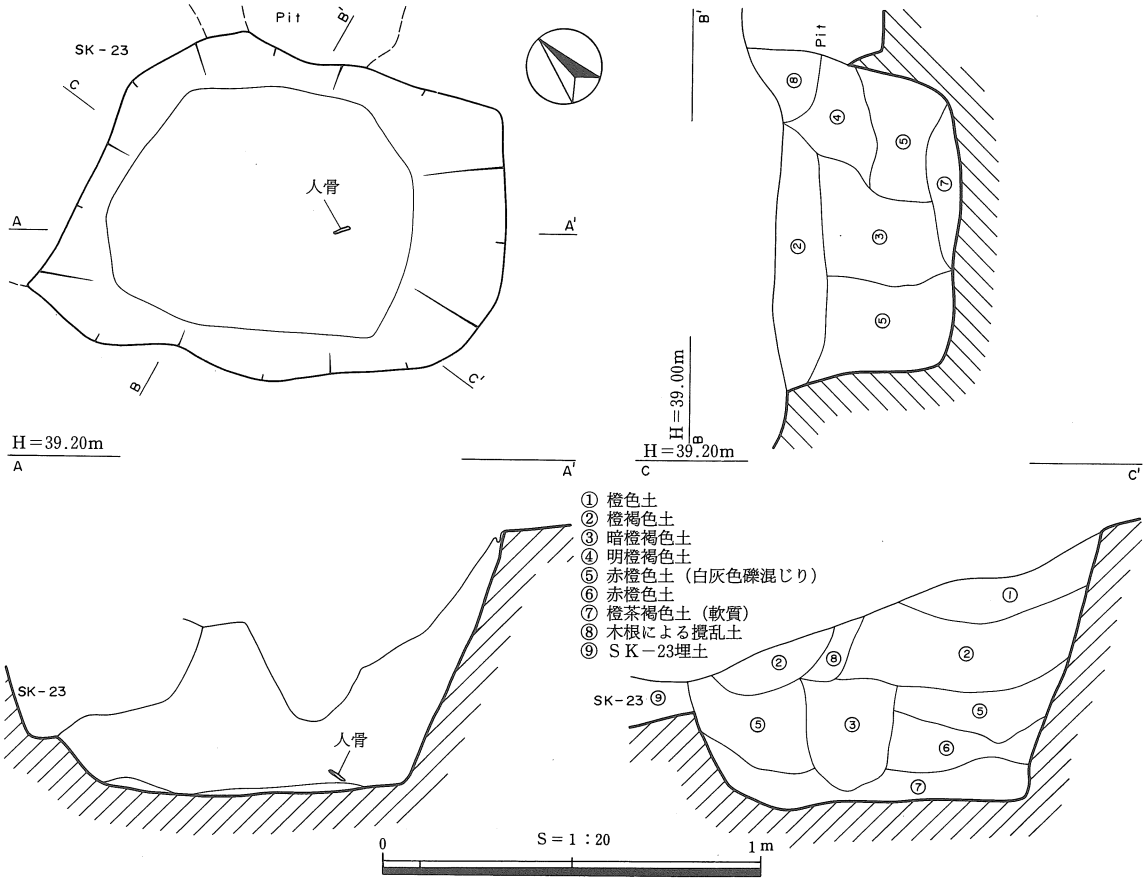
第177図　ＳＫ－21出土遺物実測図



第178図　ＳＫ－22実測図



第179図　ＳＫ－23実測図



第180図　ＳＫ－24実測図

ＳＫ－22（第178図・写真図版36）は、南北1.15m、東西70cm、深さ60cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－37°－Wにとる。遺物、人骨は出土しなかった。

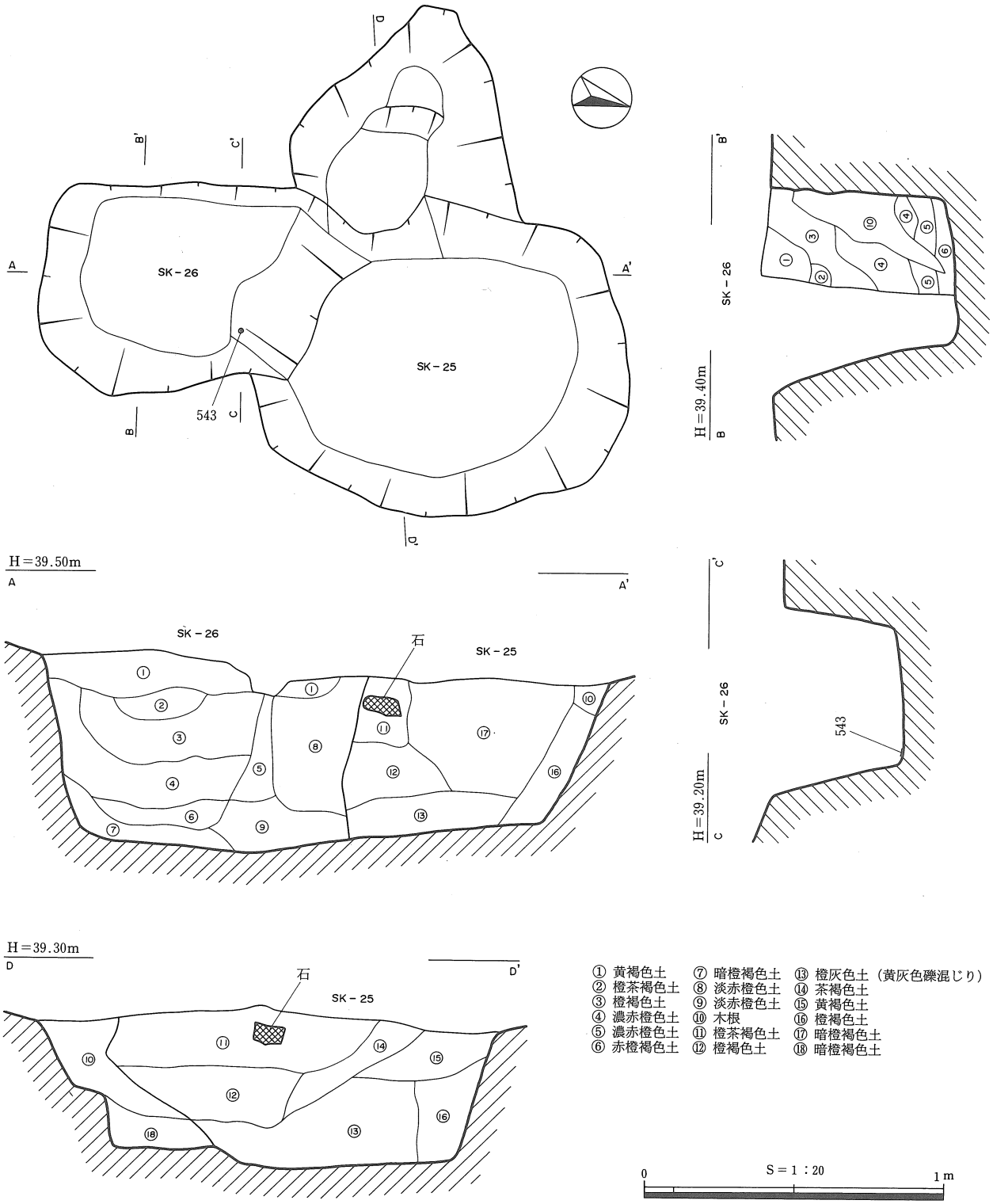
ＳＫ－23（第179図・写真図版38）は、南側をＳＫ－24に切られており、原形をとどめていないが、東西の側辺が南側でやや閉じ気味のカーブを示して切られており、検出形は原形にほぼ近いものと思われる。検出面で、南北1.15m、東西1.05m、深さ30cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－11°－Wにとる。遺物、人骨は出土しなかった。

ＳＫ－24（第180図・写真図版38）は、北側でＳＫ－23を切っている。検出面で、南北1.1m、東西85cm、深さ75cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－32°－Wにとる。墓壙底やや南東寄りの地点で骨片を検出した。７層の橙茶褐色土層中から出土しており、この層はかなり軟質で締まりの無い土質であった。他に遺物は出土していない。

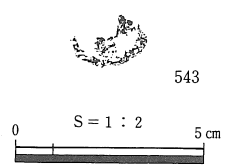
ＳＫ－25（第181図・写真図版38）は、南側をＳＫ－26に切られ、西側を木根で攪乱されている。検出面で、南北1.3m、東西1.05m、深さ50cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－13°－Wにとる。遺物、人骨は出土しなかった。

ＳＫ－26（第181、182図・写真図版38）は、北側でＳＫ－25を切っている。検出面で東西70cmを測り、南北は土層断面から1.1mと判断される。深さは65cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－７°－Wにとる。墓壙底やや北東寄りの地点で銅銭１枚（543）を検出した。底面直上での出土である。銭銘は判読できなかった。人骨は検出していない。

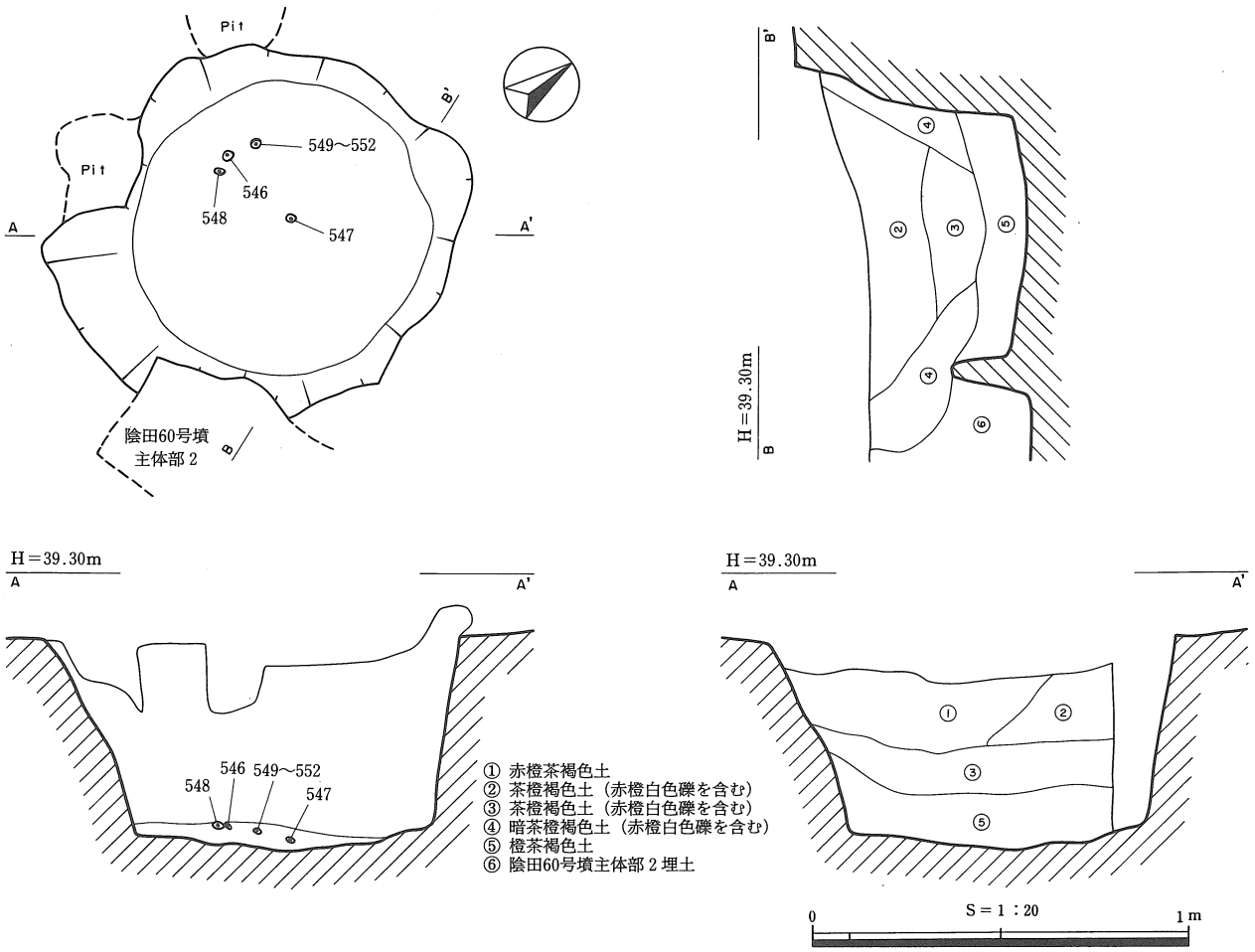
ＳＫ－27（第183、184図・写真図版38）は、南東側で陰田60号墳の主体部２を切っている。検出面で南北1.05m、東西１m、深さ60cmを測る。平面形は隅丸方形気味に検出したが、底面は径75cmの円形であり、原状は円形の土壙墓と思われる。断面は逆台形状に検出した。墓壙底西寄りで銅銭９枚（544～552）を検出した。５層橙茶



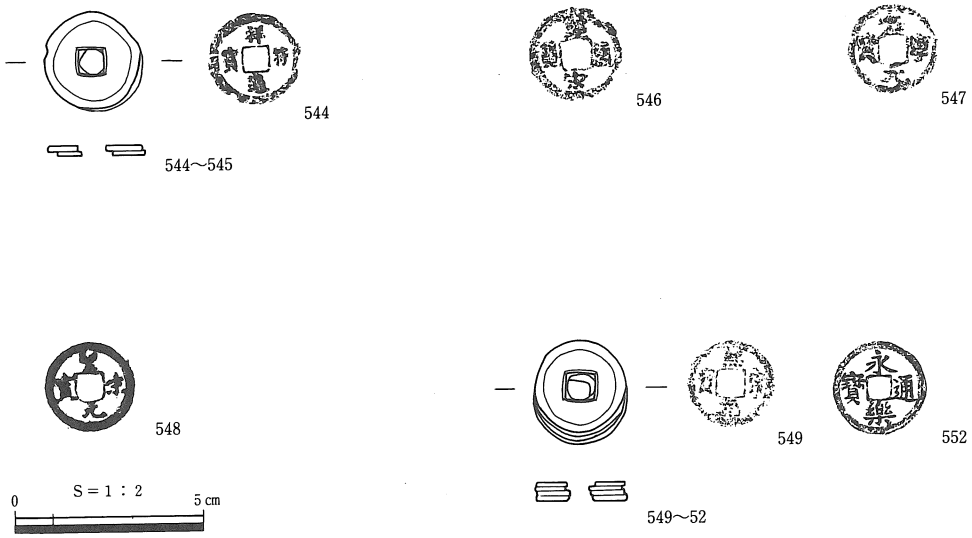
第181図　ＳＫ―25、26実測図



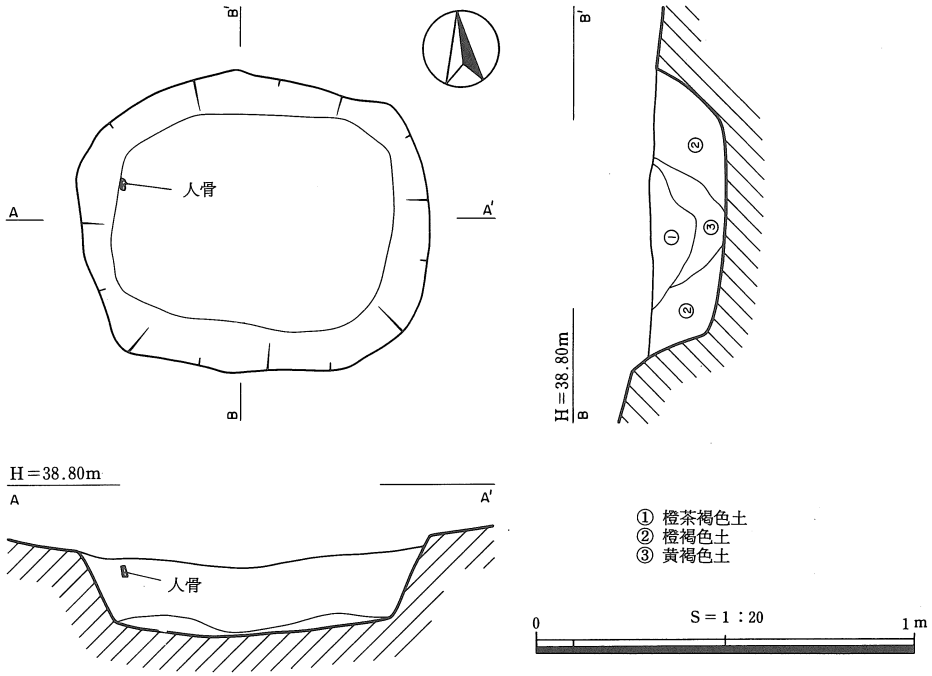
第182図　ＳＫ―26出土遺物実測図



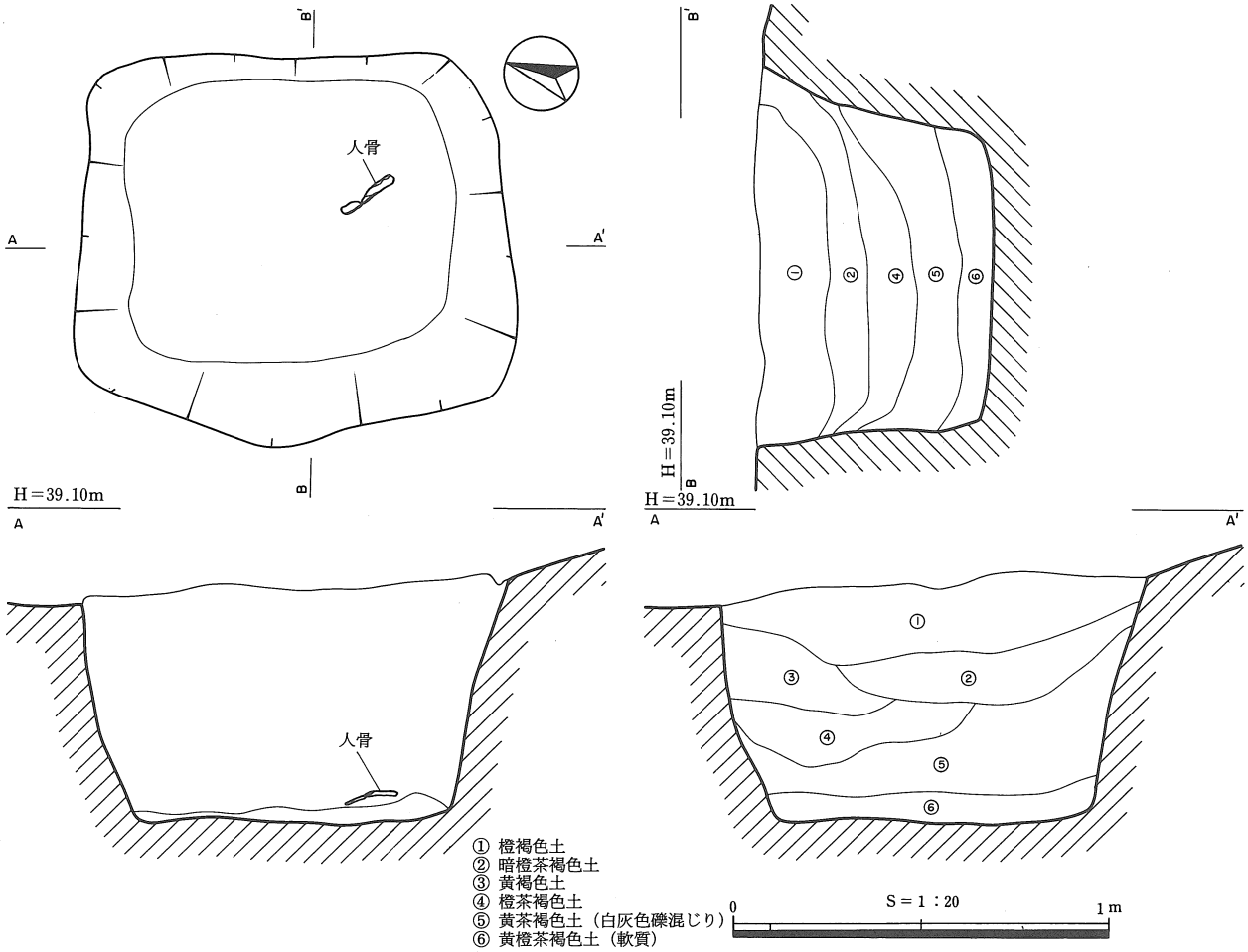
第183図　ＳＫ－27実測図



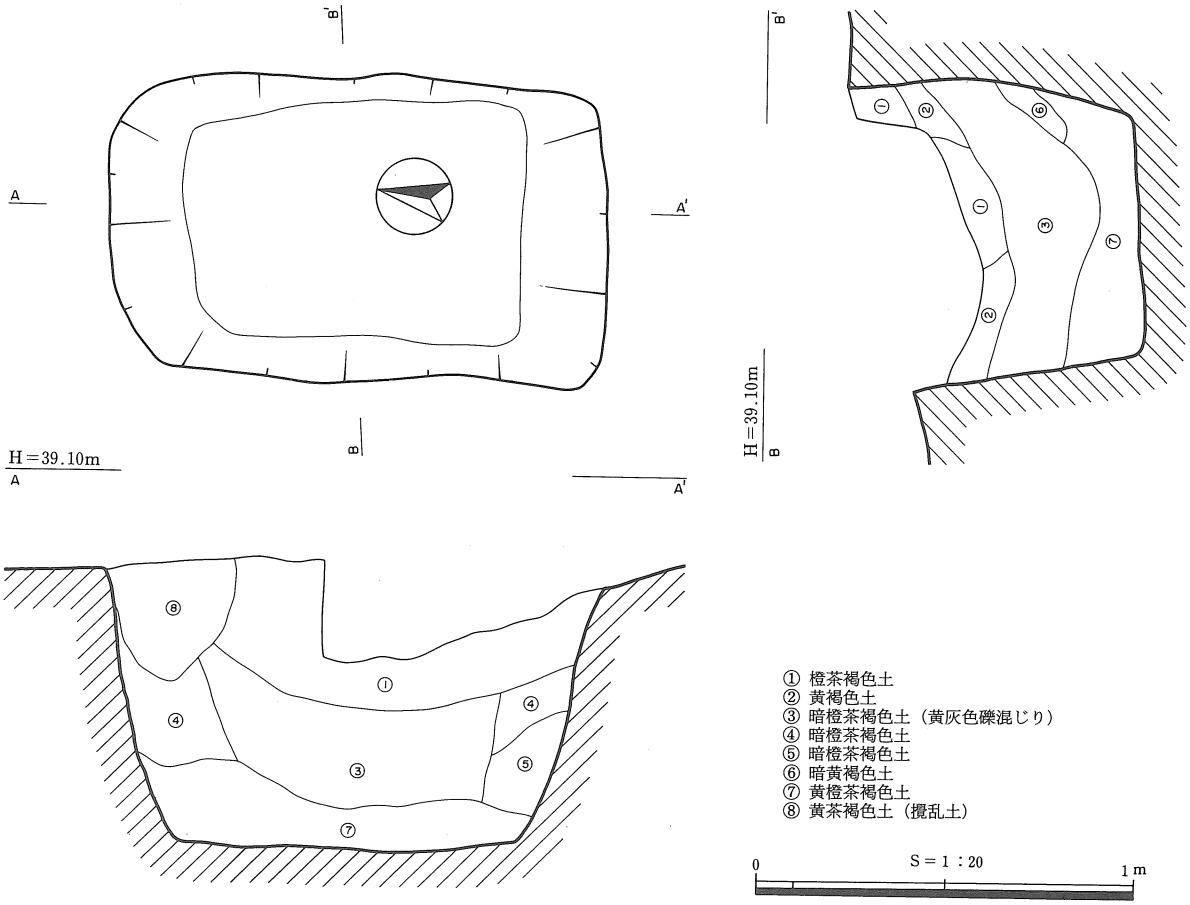
第184図　ＳＫ－27出土遺物実測図



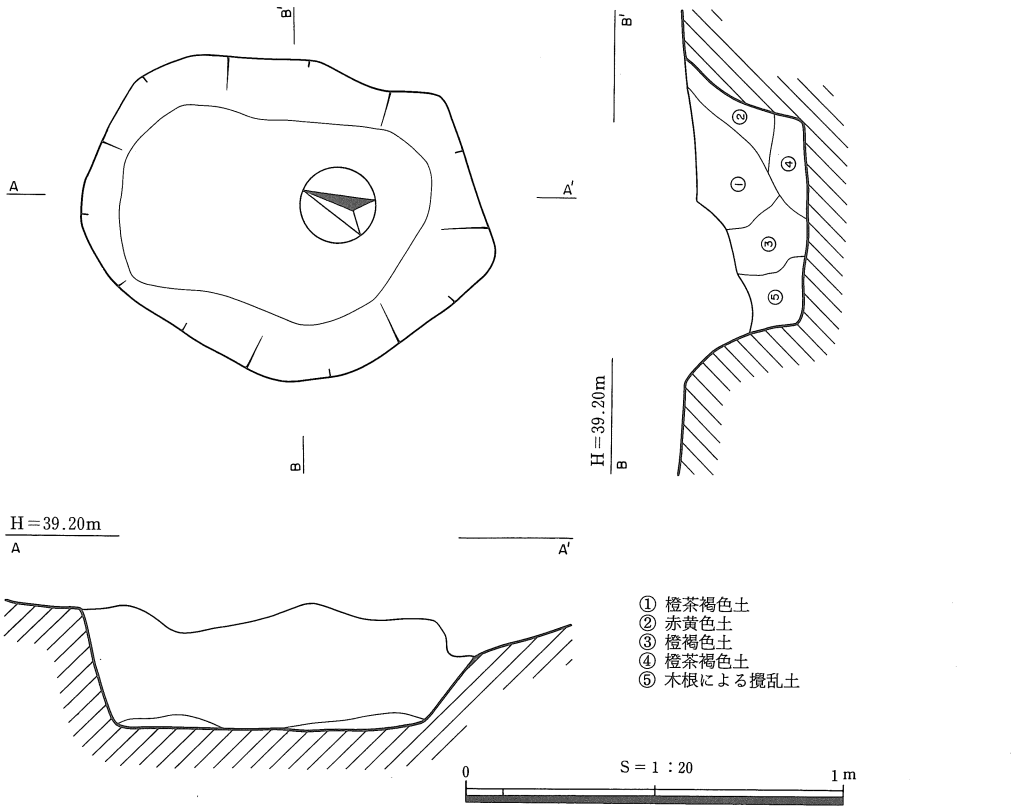
第185図　ＳＫ－28実測図



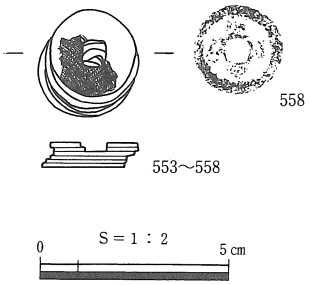
第186図　ＳＫ－29実測図



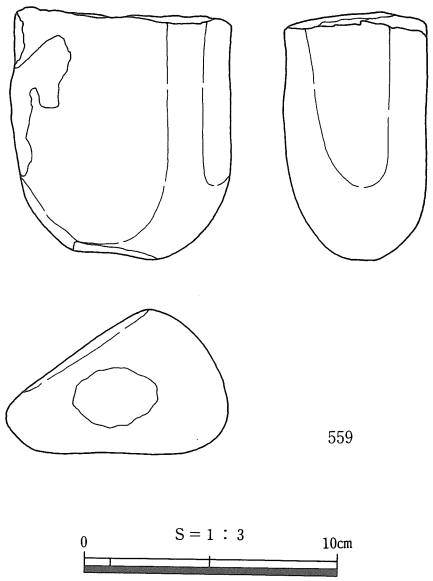
第187図　ＳＫ－30実測図



第188図　ＳＫ－31実測図



第189図　ＳＫ－31出土遺物実測図



第190図　ピット群１・Ｐ１出土遺物実測図

褐色土層中の出土で、底面から２～５cm浮いている。544は「祥符通寶」（北宋・初鋳1009年）、546は「皇宋通寶」（北宋・初鋳1039年）、547は「熙寧元寶」（北宋・初鋳1068年）、548は「聖宋元寶」（北宋・初鋳1101年）、549は「熙寧元寶」（北宋・初鋳1068年）、552は「永楽通寶」（明・初鋳1408年）である。544と545は２枚が付着し、549～552は４枚が付着している。いずれの塊も穴の部分が貫通しており、本来紐に通していたものと思われる。人骨は検出していない。

ＳＫ－28（第185図・写真図版39）は、検出面で、東西90cm、南北80cm、深さ25cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－83°－Wにとる。墓壙西端の埋土中で骨片を検出した。底面から13cm浮いた状態である。他に遺物は出土していない。

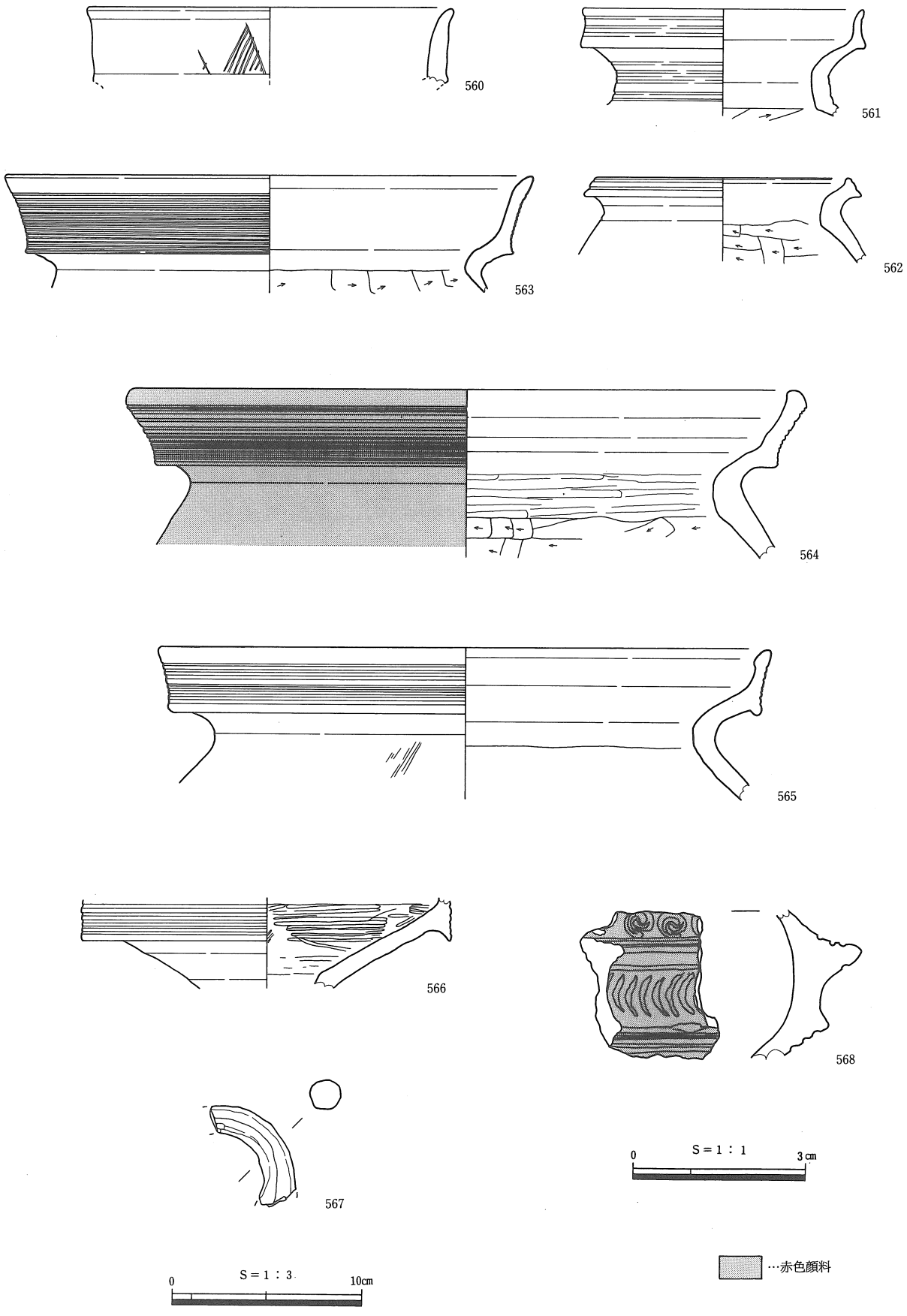
ＳＫ－29（第186図・写真図版39）は、検出面で、南北1.15m、東西１m、深さ65cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－17°－Wにとる。墓壙底南寄りの地点で骨片を検出した。底面から５cm浮いた状態である。６層の黄橙茶褐色土層中から出土しており、この層はかなり軟質で締まりの無い土質であった。他に遺物は出土していない。

ＳＫ－30（第187図・写真図版39）は、検出面で、南北1.3m、東西80cm、深さ75cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－10°－Wにとる。遺物、人骨は出土しなかった。

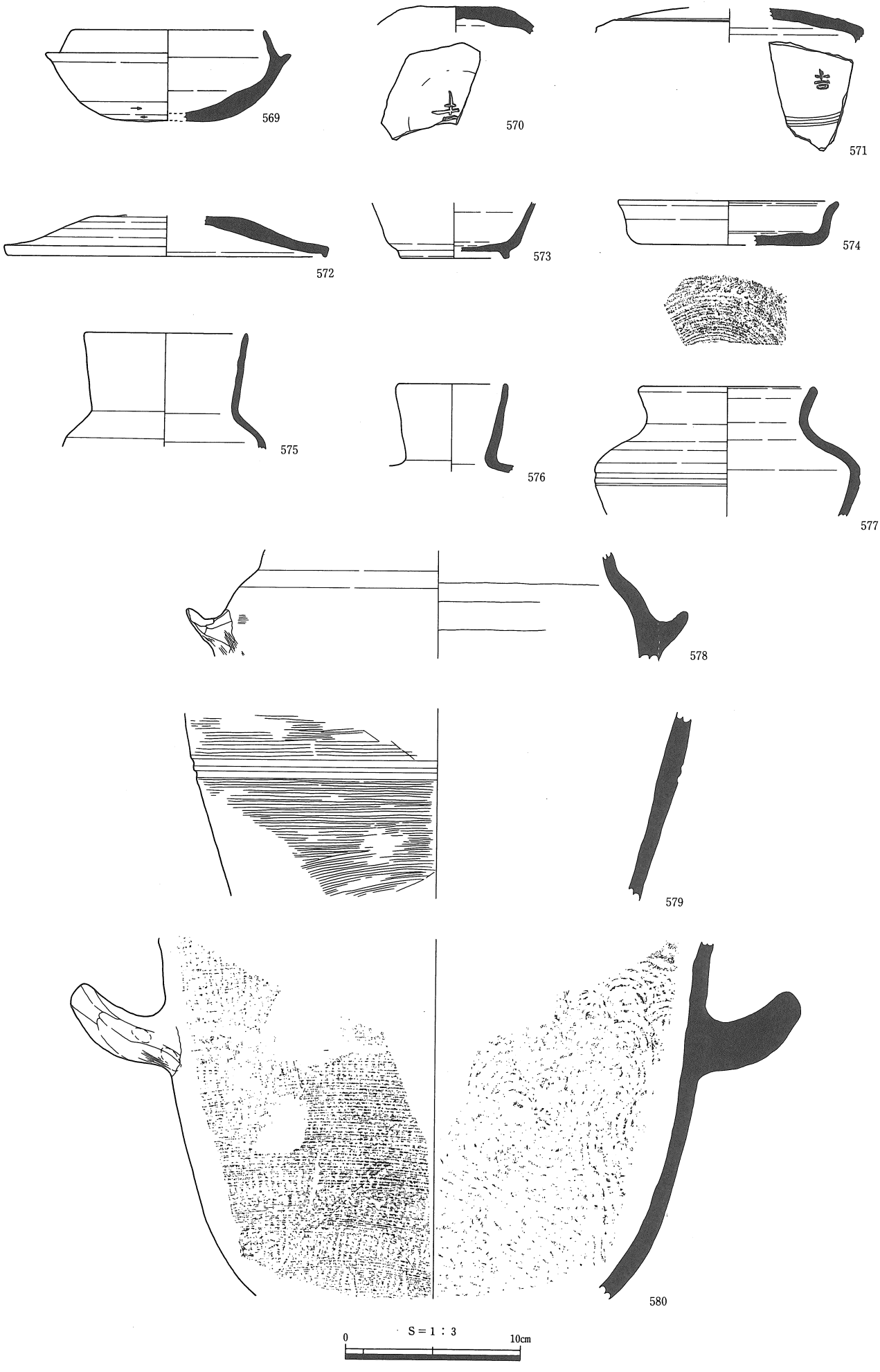
ＳＫ－31（第188、189図・写真図版39、81）は、検出面で、南北1.1m、東西80cm、深さ30cmを測る。平面形は隅丸五角形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－11°－Wにとる。墓壙埋土中から銅銭６枚（553～558）を検出した。付着して一塊になっている。片面に布が付着しており、布袋に入れられていたものと推察する。もう片面については、銭銘を判読できなかった。人骨は検出していない。

・古墓群

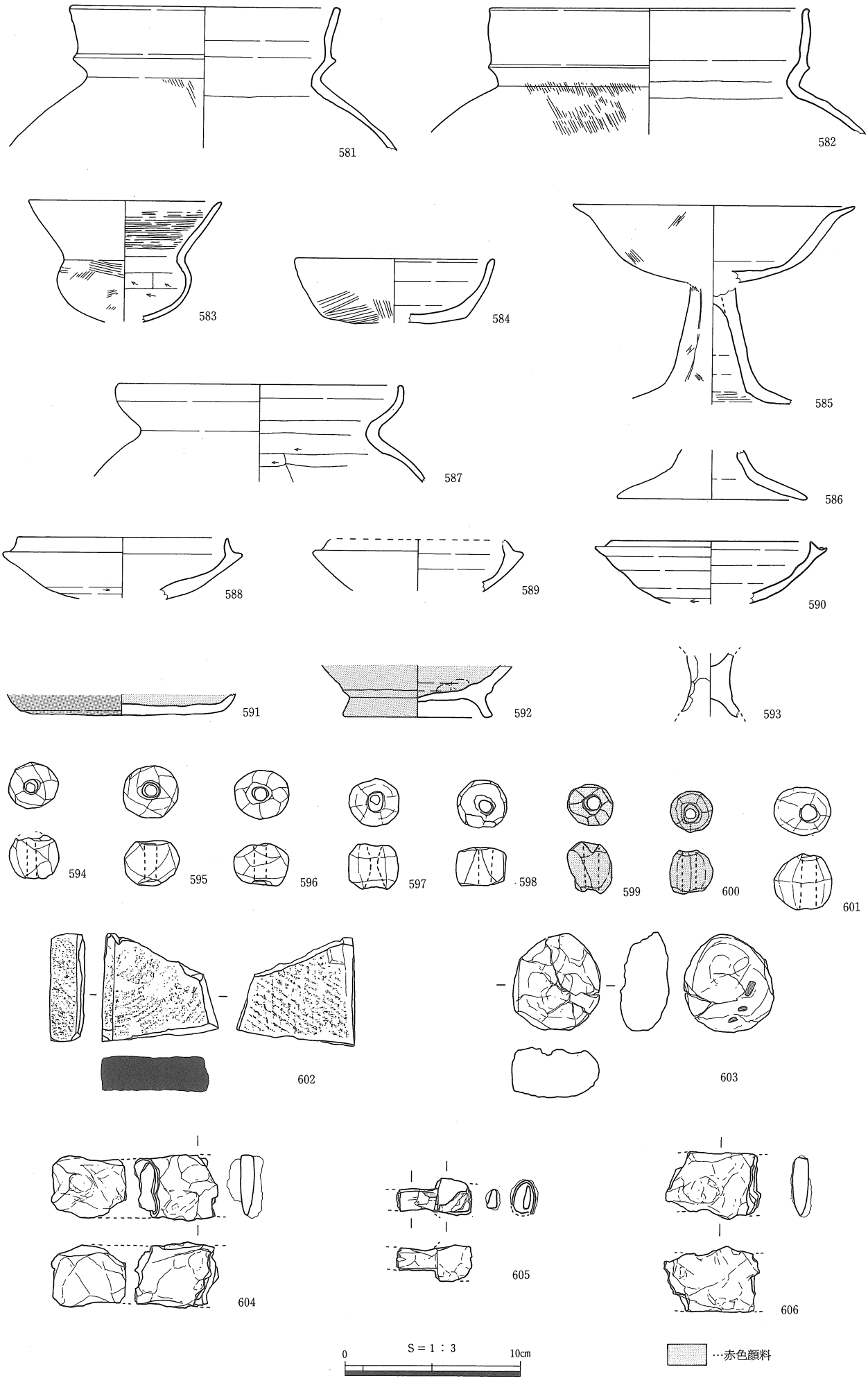
今回の調査で検出した古墓は、12基である。これらは、陰田54号横穴周辺の２基（ＳＫ－20、21）と、陰田60号墳の墳丘上の10基（ＳＫ－22～31）の２群に分けられる。便宜上前者をａ群、後者をｂ群と呼称する。ａ群は、座棺を埋葬主体とする近世墓と判断され、ｂ群は宋明銭の出土から中世墓と考える。時期的にはこの区分は、過去の調査における古墓の分布状況に合致するものである。ａ群は２例のみの検出であるが、あえてｂ群との比較を試みる。長軸方向の長さが1.4mを越えるもので、ｂ群に比して大型と言えよう。また主軸方向は、ａ群が北東－南西方向であるのに対し、ｂ群は北西－南東方向をとる。出土遺物においては、銅銭の出土はｂ群のみにみられた。



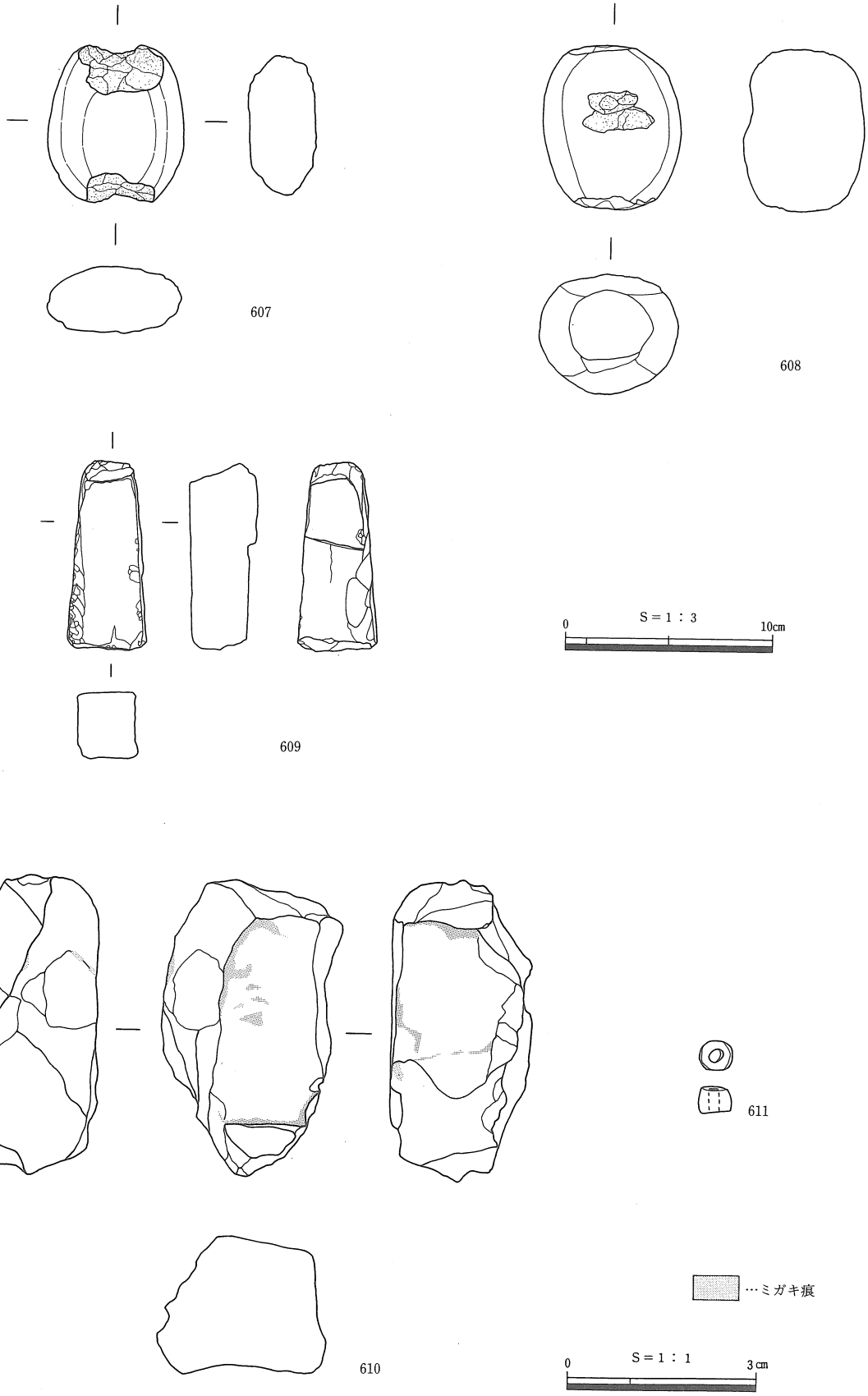
第191図　遺構外出土遺物実測図(1)



第192図　遺構外出土遺物実測図(2)



第193図　遺構外出土遺物実測図(3)



第194図　遺構外出土遺物実測図(4)

群	遺構名	形態	規模(cm)	主　軸	骨	銭	その他
a	ＳＫ－20	隅丸方形	140-100-50	N-82° -E	－	－	－
群	ＳＫ－21	隅丸方形	150-120-85	N-58° -E	○	－	鞘、鋲
	ＳＫ－22	隅丸方形	115-70-60	N-37° -W	－	－	－
	ＳＫ－23	隅丸方形	115-105-30	N-11° -W	－	－	－
	ＳＫ－24	隅丸方形	110-85-75	N-32° -W	○	－	－
b	ＳＫ－25	隅丸方形	130-105-50	N-13° -W	－	－	－
	ＳＫ－26	隅丸方形	110-70-65	N-7° -W	－	1	－
	ＳＫ－27	円形	105-100-60	－	－	9	－
群	ＳＫ－28	隅丸方形	90-80-25	N-83° -W	○	－	－
	ＳＫ－29	隅丸方形	115-100-65	N-17° -W	○	－	－
	ＳＫ－30	隅丸方形	130-80-75	N-10° -W	－	－	－
	ＳＫ－31	隅丸五角形	110-80-30	N-11° -W	－	6	－

古墓一覧表

8　遺構に伴わない遺物（第191～194図・写真図版81）

・弥生時代後期の土器（560～568）

560は、直立する壺の口縁部である。鋸歯文を施している。561は、平行沈線を口縁部と頸部に施す壺である。562は、繰り上げ口縁に平行沈線を施す甕である。内面は肩部までケズリを施している。563～565は、口縁部に平行沈線を施す甕である。口縁部径が28～36cmを測り、大型品と言えよう。564は、外面に赤色顔料が塗布されている。566は、器台の受部で、口縁部外面に平行沈線を施し、内面はミガキ調整している。567は環状の把手か。568は、算盤玉状の胴部を呈する壺の胴部片である。２条の凸帯に区切られた文様帯にスタンプ文が施されている。外面は赤色顔料が塗布されている。562は後期前半に比定され、その他は後期後半と考える。

・須恵器（569～580）

569は坏身である。陰田編年の４式（６世紀後葉）に相当する。570、571は、ヘラ書き文字の記された須恵器で、共に「吉」と読める。570は坏蓋の天井部ほぼ中央に書かれている。線の切り合いから、書き順は「一」→「十」→「𠂹」→「𠂹」→「𠂹」と判断される。571は長頸壺の肩部に書かれている。全体の書き順は不詳だが、「一」→「十」は判断できる。570と571では、書き順が異なっている。570は陰田編年の７～８式（７世紀中～後葉)、571は肩部の稜がシャープであり、ＭＴ－21以降（８世紀前半以降）と考える。572は、蓋である。573は高台付きの坏で、底部は糸切り後ナデ消している。574は、底部糸切りの皿である。573は８世紀前半、572、574は８世紀後半に比定する。575～577は、壺類である。575は直口壺、576は堤瓶または平瓶の口縁部と思われる。577は短頸壺である。578は、把手付きの甕か。579、580は甑である。579は外面に２条の沈線がめぐり、カキメが施されている。焼成は不良である。580は把手を持ち、外面は平行タタキ後カキメ、内面は同心円タタキである。

・土師器（581～593）

581、582、587は甕である。583は広口の小型丸底壺、584は坏、585、586は高坏である。581～583、585、586は古墳時代前期に比定される。588～590は須恵器の坏身的だが、焼成は明らかに土師器である。器形的には、陰田編年の５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に相当する。591、592は丹塗り土師器で、591は皿、592は高台付き

の坏である。593は両端がくぼむ柱状の土器である。製塩土器の可能性を指摘しておきたい。

・**土製品**（594～602）

594～601は土錘である。うち599、600には、赤色顔料の塗布が観察される。602は、布目の平瓦である。

・**鉄関係遺物**（603～606）

603は含鉄の椀形鍛冶滓で、再結合滓である。604、606は鉄刀の破片、605は刀子の関部分である。

・**石製品**（607～610）

607は、角閃石安山岩製の石錘である。608は、大山系角閃石石英安山岩製の敲石である。609は、流紋岩質凝灰岩製の砥石である。610は、めのう製で、磨石と判断した。ミガキ状の光沢が観察される。

・**玉**（611）

611は、青色のガラス小玉である。

註1　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註2　『陰田第6遺跡（久幸地区）』　米子市教育委員会　1984年

註3　萩本勝・佐古和枝「第4節；須恵器について」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註4　この古墓については、米子市教育委員会杉谷愛象氏にご教示をいただき、同氏より資料の提供を受けた。

註5　石製品の石材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご鑑定いただいた。

註6　前掲註3

註7　杉谷愛象ほか「第3節；古墳」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註8　前掲註7

註9　この石材については、鳥取大学医学部井上貴央先生、米子市教育委員会杉谷愛象氏からご教示いただいた。

註10　前掲註7

註11　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　鳥取県教育委員会　1978年

註12　杉谷愛象ほか「第4節；陰田横穴墓群」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註13　鉄滓については、房総風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。

註14　柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」　『松江考古』　第3号　松江考古学談話会　1980年

註15　前掲註14

註16　前掲註2

註17　杉谷愛象ほか「第5節；古墓」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註18　人骨取り上げの現地指導及び人骨の鑑定については、鳥取大学医学部井上貴央先生にお世話になり、本書にご寄稿いただいた。「陰田第6遺跡土壙墓より検出された人骨に関するコメント」（本書本文編Ⅰ第3章第4節ＳＫ－21出土人骨について）

第4節　ＳＫ－21出土人骨について

「陰田第6遺跡土壙墓より検出された人骨に関するコメント」

鳥取大学医学部解剖学第二講座
井上貴央

1　はじめに

本報告は、米子市陰田第6遺跡土壙墓（ＳＫ－21）から検出された人骨に関するものである。土壙墓から人骨の一部が検出されたとの知らせを受けて現地におもむき、人骨の検出をおこない、埋葬状況を確認した。人骨はほとんど風化して脆弱になっていて、骨から得られる情報はきわめて少ないと判断されたが、検出状況から若干の知見を得ることができた。検出後は図面の作製、骨の取り上げを調査担当者にお願いし、頭蓋については、室内で慎重に土を取り除きながら歯牙の有無等の確認をおこなった。

2　人骨の検出状況と埋葬人骨について

本土壙墓は北東から南西に長軸を有する長方形の土壙である。骨の検出状況を図に示した。また、図中の番号に対応する骨の部位を別表に示した。頭部は土壙の南東端にあって、骨盤の部分は北西端に位置していたようであるが、骨盤を構成する骨は検出されていない。左右の大腿骨が、骨盤部と思われる場所より頭方外側にむかって検出されており、左側では膝関節と思われる部位より遠位側に脛骨と思われる骨が検出されている。また、右の大腿骨の近くから右側上腕骨と思われる骨が検出されている。

歯は遊離歯として、上顎中切歯と犬歯が検出されている。咬耗は進んでおり、Martinの3度を示す。検出された右下顎骨片は右大臼歯部の歯槽は閉鎖しており、歯牙が脱落していたことを物語っている。

3　被埋葬人骨について

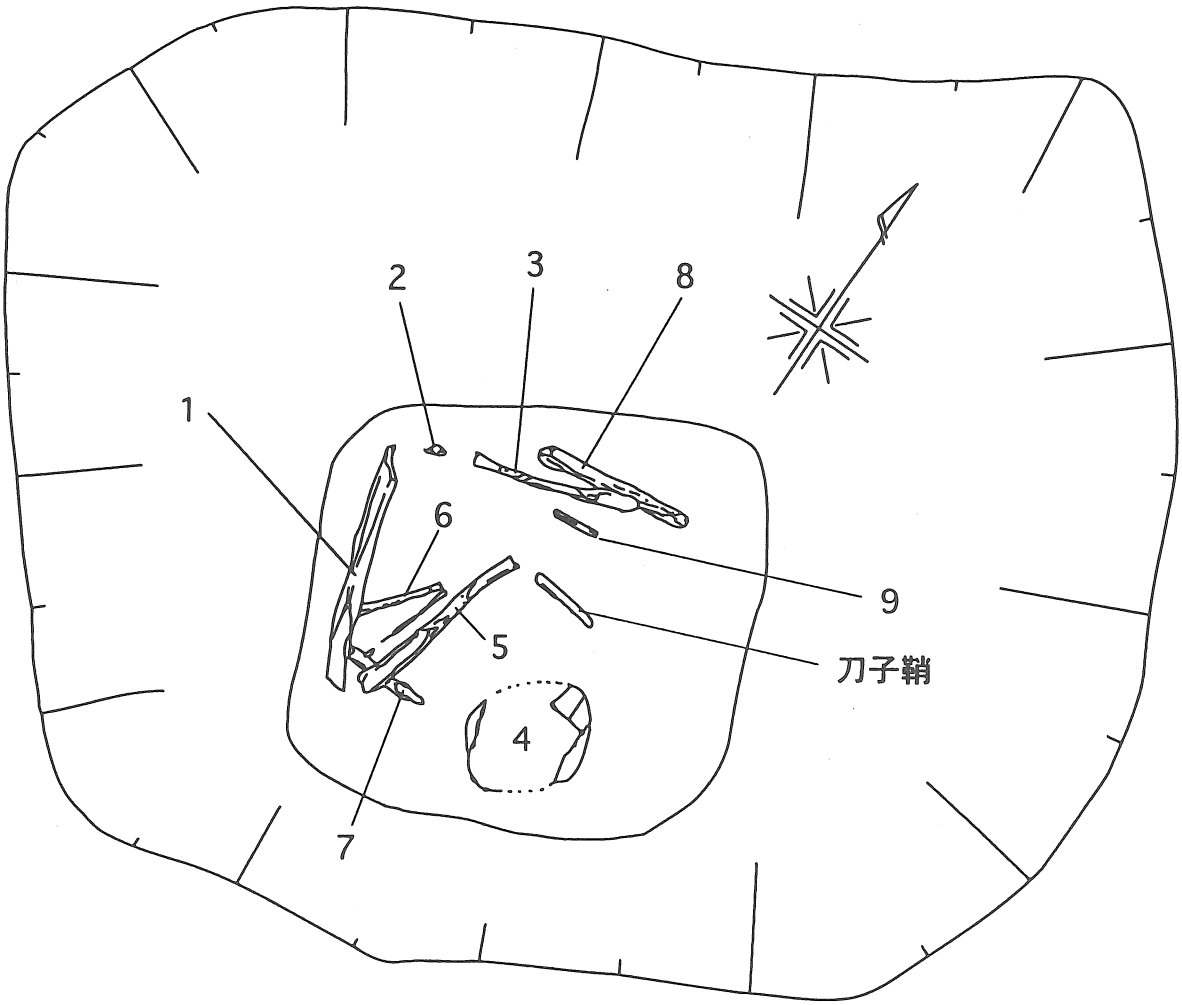
検出された人骨は、成人骨であることは確かであるが、骨の保存状況がきわめて悪く、性別については明らかにすることができなかった。本人骨の年齢は、歯牙の咬耗が進んでいることから熟年ではなかろうかと推定されるが確言できない。

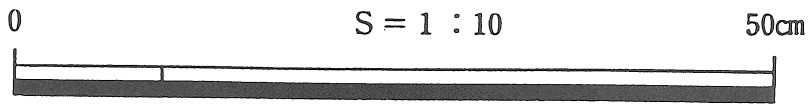
本土壙において認められるような埋葬肢位は、座棺に埋葬され肉質部が腐ちて骨が平面的に分布したときによく認められる。骨の検出状況から、本人骨は座位で埋葬していたものと考えられ、このような埋葬様式から考えると本土壙墓は近世墓の埋葬形式に合致する。

4　おわりに

今回の人骨は保存が悪く詳細な検討をおこなうことができなかったが、埋葬肢位や埋葬様式を確定できたことはせめてもの幸いといえる。

稿を終わるにあたり、本人骨の検討の機会を与えられた西部埋蔵文化財調査事務所の関係各位、とりわけ人骨の取り上げに立ちあっていただいた北浦弘人氏に御礼申し上げたい。





第195図　ＳＫ－21人骨出土状況

ＳＫ－21人骨リスト

骨番号	骨　　名	左右の別	残存部位	骨番号	骨名	左右の別	残存部位
1	大腿骨	左	Ｐ欠－Ｃ－Ｄ欠	6	骨片	不明	不明
2	骨片	不明	不明	7	上腕骨	左？	Ｃ
3	上腕骨	右？	Ｐ欠－Ｃ－Ｄ欠	8	大腿骨	右	Ｐ欠－Ｃ－Ｄ欠
4	頭蓋骨（含む下顎骨）			9	骨片	不明	不明
5	脛骨	左？	Ｐ欠－Ｃ－Ｄ欠				

残存部位のＰは近位端、Ｃは骨体、Ｄは遠位端をあらわす

第４章　陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区の調査

第１節　位置と環境（第196図）

遺跡は、米子市陰田町字久幸山および曲リ久コウに所在し、マノカンヤマと通称する丘陵（標高72.8m）の北麓に位置する。現況の地目は、雑木による山林と果樹園である。遺跡の眼前には溜め池の久幸池があり、遺跡の臨む谷筋は、豊富な水量を下流に供給している。北方の谷口部には、縄文時代前期末から中期の散布地である陰田第７遺跡が存在する。谷を挟んだ東方には久幸山（標高38.6m）がそびえ、この丘陵一帯に、弥生時代後期および古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡が検出された陰田第６遺跡が形成されている。調査区はａ区からｄ区に区分され、ａ区はマノカンヤマと北方に派生する支丘陵、通称墓山（標高33.3m）によってなす小さな谷地形の斜面部と谷底部に、ｂ区～ｄ区は丘陵の斜面部および麓部に立地する。調査区内の標高は、現況で10～27.5m、検出面で８～26mである。

第２節　調査の経過と方法（第197～199図）

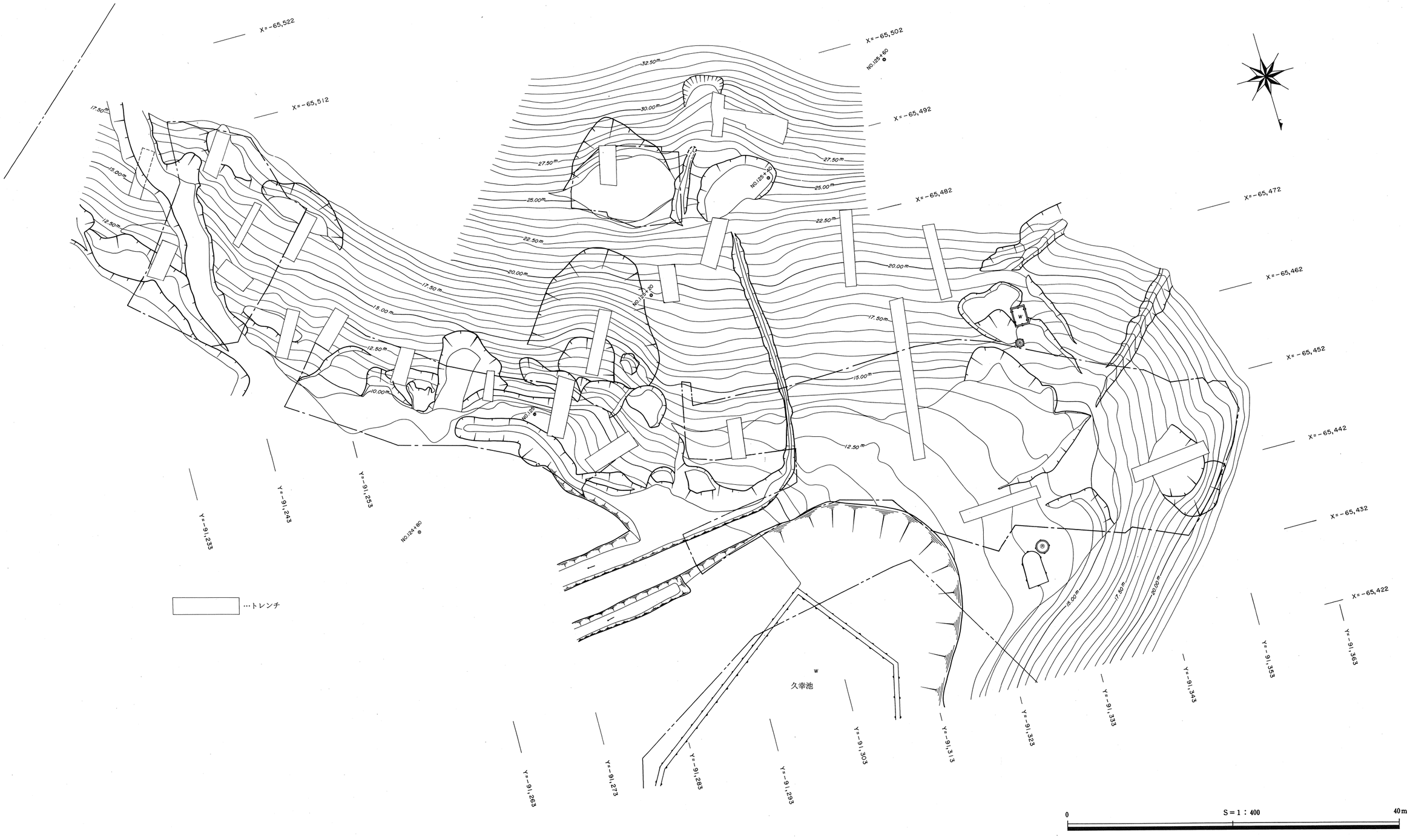
調査は、平成５年４月より準備作業に着手、以後11月まで現場作業を実施した。調査地内は、事前に米子市教育委員会によって試掘調査が行われており、遺構、遺物の検出状況と現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査区はａ区からｄ区の４ヶ所に区分され、総調査面積は1,985㎡であった。調査前の地形を平板測量し、試掘調査時の土層状況を勘案しながら重機により表土を除去後、10m画グリッドをなす測量用基準杭を南北軸にあわせて設定した。以後、土層断面観察用にベルトを残しながら掘り下げを行った。遺構の検出にあたっては、岩脈の卓越したａ区の西端斜面部やｃ区の西側丘陵裾部では、岩盤およびそれに連なる面を検出し、土質、土色の変化する落ち込みを追求した。ａ区の北側平坦部では、有機質を含む黒灰褐色粘質土の遺物包含層の広がりを検出、これを除去後その下面で茶褐色系の土の落ち込みを追求した。ｂ区では、炭化物や焼土を多量に含む灰褐色系の堆積土の広がりを検出、この層の下面を検出面とし、土質、土色の変化する落ち込みを追求した。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査区全体については、調査後の地形を平板測量し、ラジコン・ヘリコプターによる全体空中写真撮影を行った。

第３節　遺構と遺物

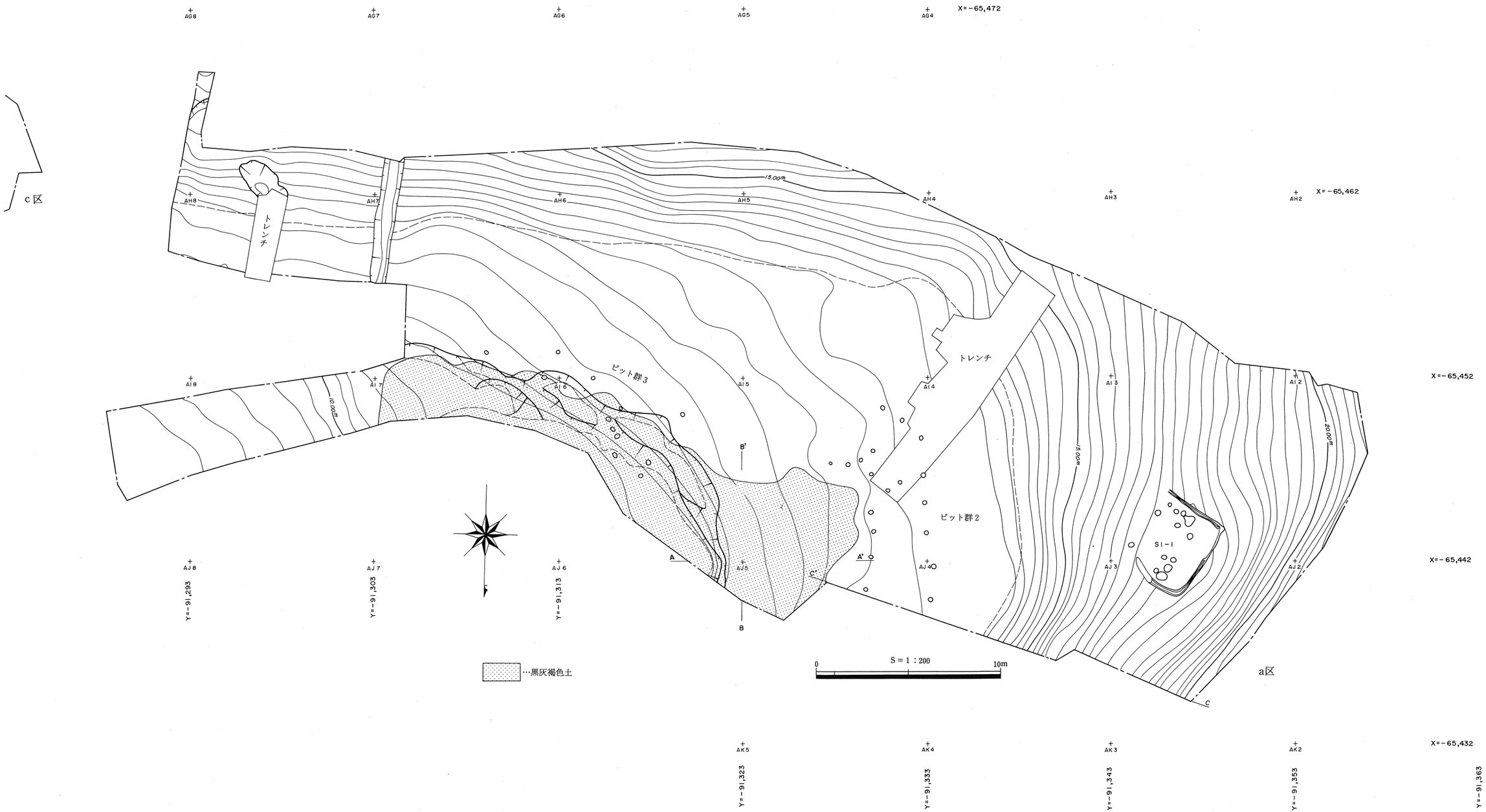
１　概要（第197～199図）

ａ区では、西側の谷奥斜面部で竪穴住居跡１棟（ＳＩ－１）、ａ区の北側の平坦部でピット群２ヶ所（ピット群２、３）を検出した。ピット群３付近では、検出面の地形が傾斜変換し、北方に向け段をなして下る。ここに遺物包含層である黒灰褐色粘質土が厚く堆積しており（第197図の網掛け部分）、弥生時代後期から奈良時代にかけての土器類が出土した。出土状況はプライマリーな状態を示さず、上方からの流入によるものと思われる。ａ区の谷部は、地滑りや近代以降の果樹園造園のため、原地形が大幅に改変されている。調査区外上方部の試掘調査においては、遺跡の広がりが確認されておらず、調査区周辺には、破壊や流出によって遺存していないが、本来遺構が存在していたものと推測される。この包含層中から出土した遺物についての詳細は後述するが、弥生時代後期から奈良時代にかけての土器が出土しており、ａ区の谷部では、本来的には断続的に遺跡が形成されていたものと推測される。

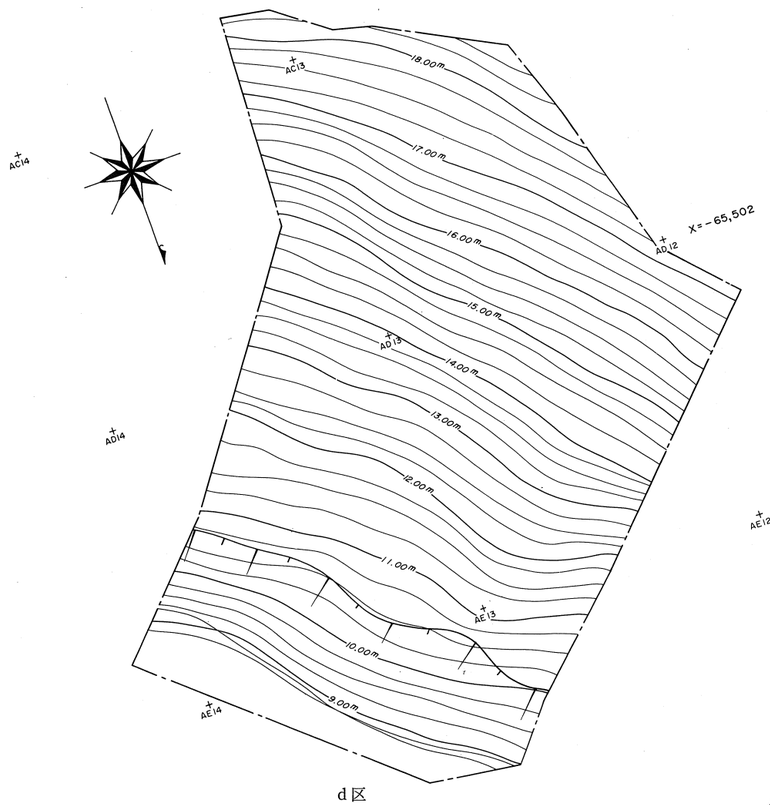
ピット群２の南西側には、大型のトレンチを変則的に掘り下げているが、この付近にみられた黒色土のシミ状の広がりを追求したものである。人為的なものではなく、自然堆積によるものであった。ａ区の東側にみえる溝

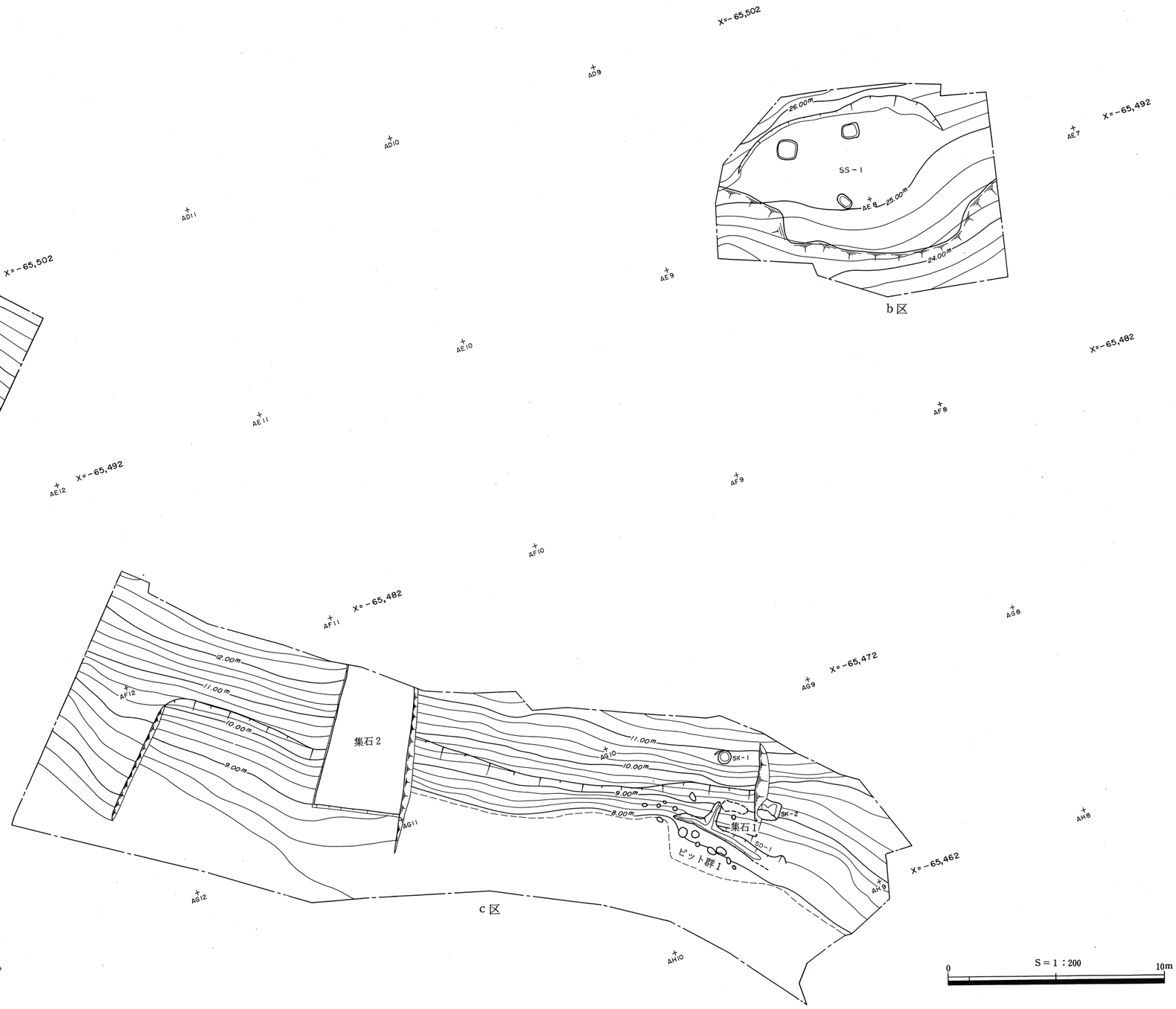


第196図　調査前地形実測図

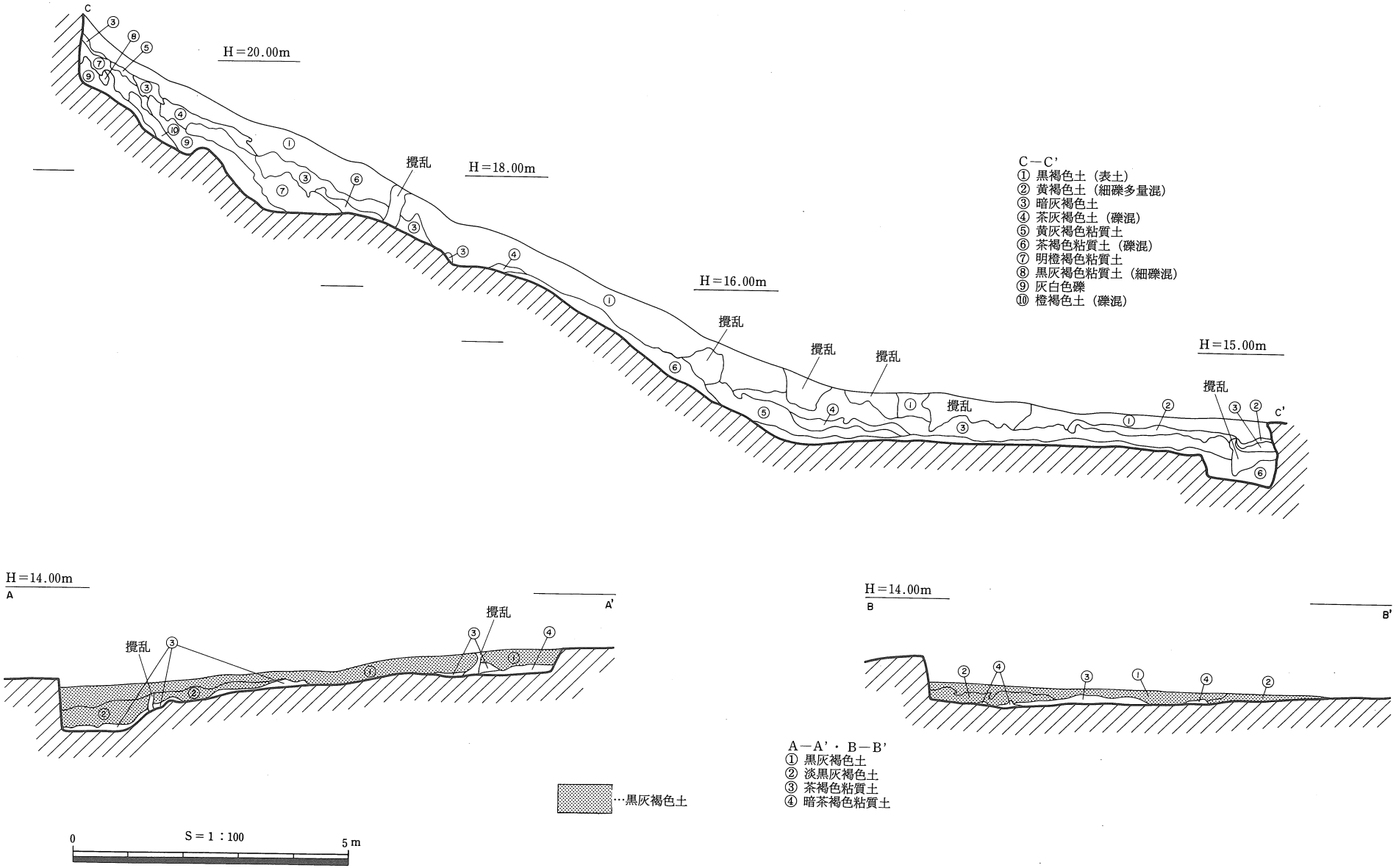


第197図　全体遺構実測図(1)

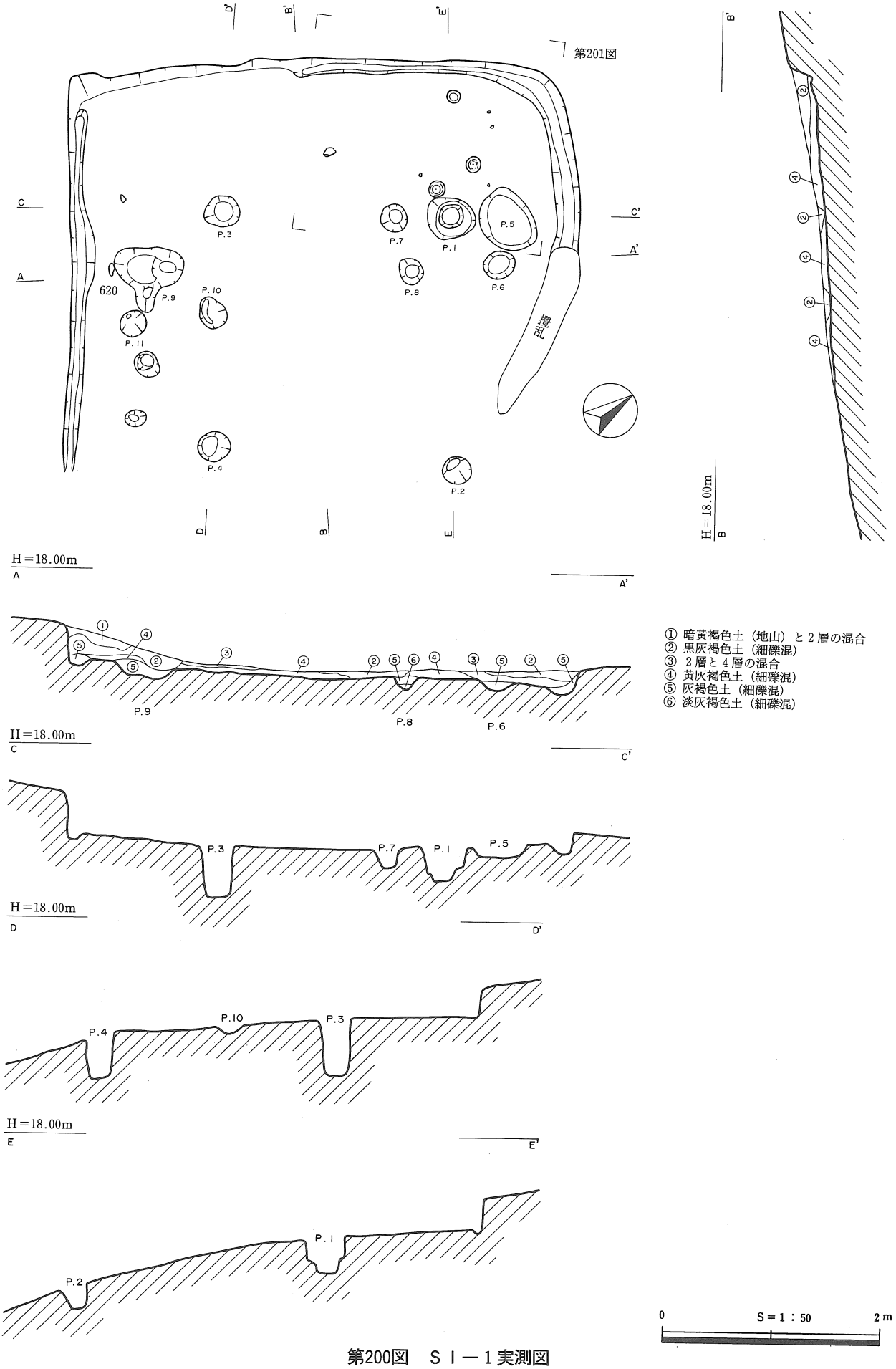




第198図　全体遺構実測図(2)



第199図　a区土層断面実測図



第200図　ＳＩ－１実測図

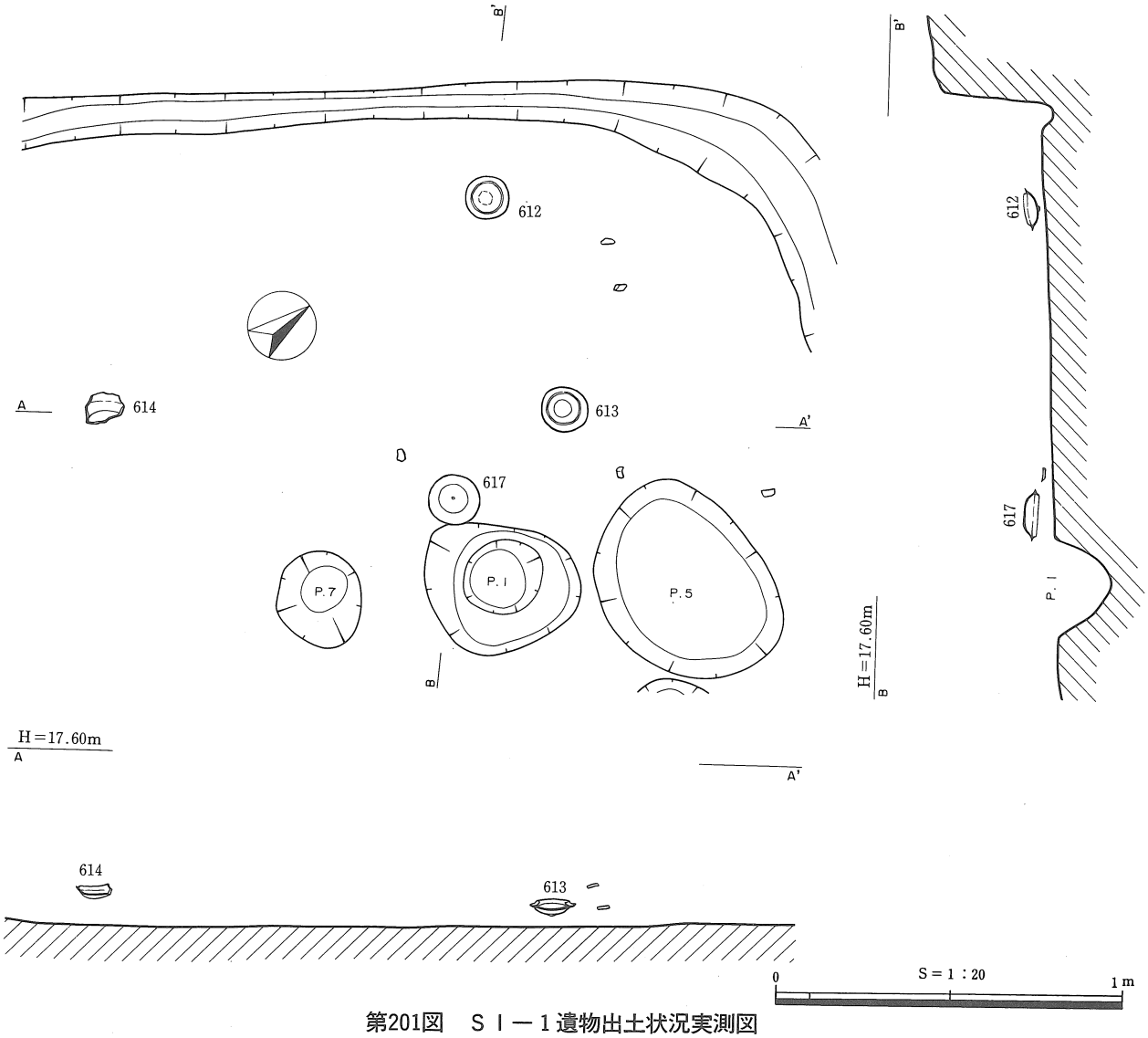
は、果樹園に伴う施設であり、さらにその東側のトレンチにかかった落ち込みは、木の根による攪乱坑である。

b区では、テラス状遺構1基（ＳＳ－１）を検出した。c区の西側の丘陵斜面部から裾部にかけては、土坑2基（ＳＫ－１、２）、集石1基（集石1）、溝状遺構1条（ＳＤ－１）、ピット群1ヶ所（ＳＢ－１）を、c区の中央部では、集石1基（集石2）を検出した。d区からは遺構を検出しなかった。

2　竪穴住居跡（ＳＩ－１）（第200～202図・写真図版41、82）

a区西側の谷奥斜面部に1基検出した。急峻な斜面をテラス状に整形して、住居を構築したものである。床面の標高は約17mである。平面形は方形を呈するが、南東側は流出している。規模は、北西辺で4.7m、残存壁高は南西側の壁で40cmを測る。床には、壁に沿って溝をめぐらしており、北東部で幅25cm、深さ10cmを測るが、南西部で途切れている。床面では、ピット13基を検出した。そのうち主柱穴と考えられるものは、Ｐ．１からＰ．４の4基である。Ｐ．１は2段に掘り込んだもので、他は素掘りである。周囲の状況から、集落を構成せず、単独で建造されたものと推察される。

遺物は、須恵器、土師器が出土した。住居跡の北西部にほぼ集中しており、床面に近い位置から検出した。器形の判断できるものはいずれも須恵器で、3種4個の蓋と坏身2、椀1、脚部片1、甕片1である。土師器はすべて細片である。616は、天井部を丁寧にヘラケズリしている坏蓋である。焼成の際の別個体との溶着痕が観察される。617と618は内傾するたちあがりをもつ坏身で、両者とも、底部を丁寧にヘラケズリしている。617の底部内面には、赤色の物質が付着している。618は、617に比べて底部が円味をもち、焼成は不良で、灰白色を呈

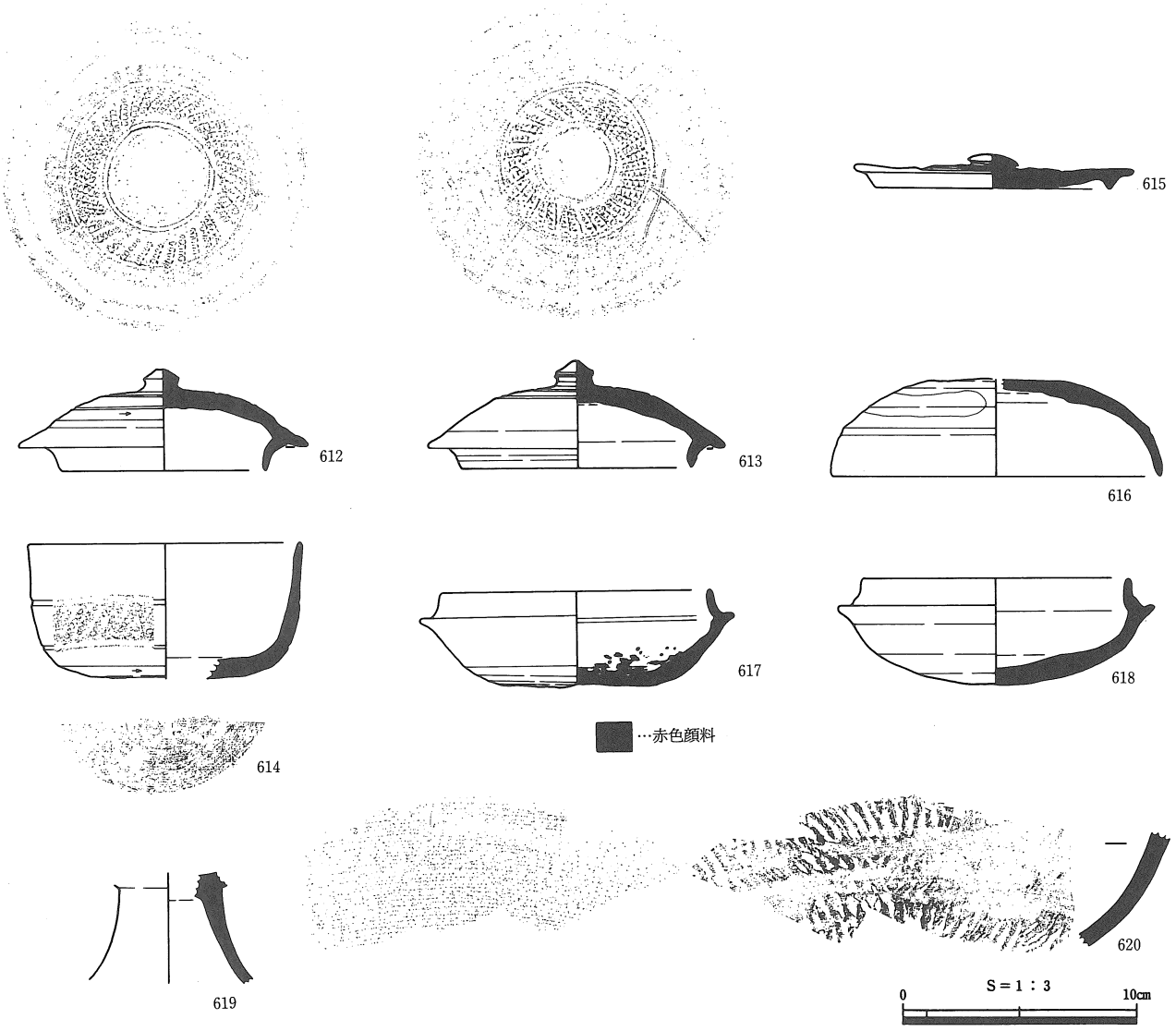


第201図　ＳＩ－１遺物出土状況実測図

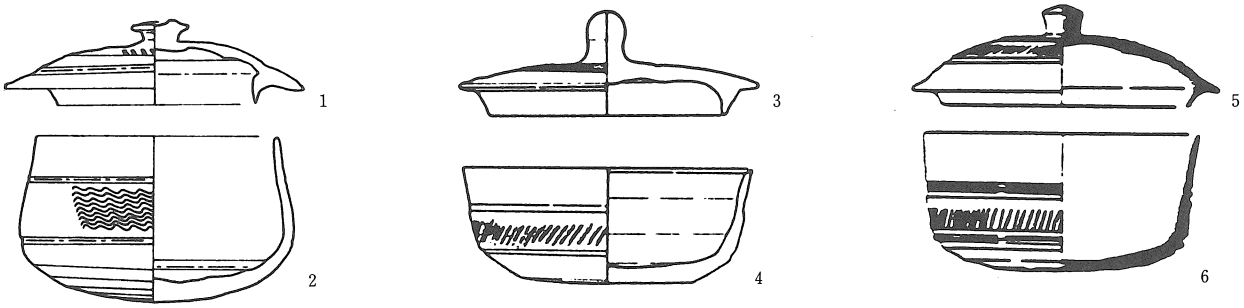
し、底部全面から口縁部にかけて広く黒斑が生じている。612と613は、擬宝珠つまみをもち、内面にかえりを有する蓋で、共に上面に2本の沈線をめぐらし、その間に板状工具による列点文を施している。613には、ヘラ記号のような×状の刻印が見える。調整は、両者とも上面はヘラケズリ後回転ヨコナデし、内面は、回転ヨコナデ後仕上げナデを施している。612はケズリがやや過ぎたものらしく、断面形が段状をなしている。614は、体部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がる椀である。体部には2条の沈線がめぐらされ、その間には板状工具による列点文が施されている。底部は、丁寧にヘラケズリされている。その文様構成は、612、613に通じるものであり、相互の口径からみても、612、613と614はセット関係にあると言えよう。615は、内面にかえりを有する、扁平な形態を示す蓋であり、宝珠つまみもボタン状に偏平である。上面には1条の沈線がめぐる。この蓋とセットになると思われる器種は見あたらない。619は高坏または台付椀の脚部と思われる。620は甕の胴部片で、外面にカキ目が施され、内面は波状のタタキ後ナデている。

遺構の時期は、616～618の蓋坏が示す陰田編年の4式（註1）に相当すると思われ、6世紀後葉の実年代が与えられている。

さて、612～614の有蓋椀について、若干触れておきたい。蓋はつまみとかえりを持ち、椀は小型無蓋高坏の坏部を彷彿とさせる形態で、底部を丁寧にケズる。蓋、椀ともに圏線をもって文様帯を区切る。類例の希有な器種であるが、今回の調査で、陰田小犬田遺跡のＳＫ－2から同様の蓋（第288図902・写真図版82）が出土している。若干偏平気味ながら、つまみの形態が類似する。鳥取県西伯郡会見町所在の寺内8号墳の周溝内出土遺物



第202図　ＳＩ－1出土遺物実測図



第203図　装飾のある有蓋椀（註２、３掲載書より転載）
１、２―寺内８号墳、３、４―川戸２号墳、５、６―平尾山古墳群

（第203図１、２）にも類例がみられる（註２）。ただし、椀は体部から口縁部にかけて内傾する器形であり、外面文様に、列点文ではなく、櫛描き波状文が施されている。蓋は、つまみの宝珠の先端が押圧されている。共伴する蓋坏は、陰田編年の４式相当、６世紀後葉から６世紀末の時期が与えられている。

近県の例では、岡山県英田郡大原町所在の川戸２号墳の玄室から、６組の有蓋椀（第203図３、４）が出土している（註３）。蓋のつまみは指頭状で、上方に伸びる形状を示す。寺内８号墳例のように先端がくぼんで偏平なものも１点みられる。椀は口縁部が外反し、文様帯は沈線ではなく稜をもって区切られているものもある。蓋、椀ともにマノカンヤマ遺跡例に比べて偏平な形態である。古墳の築造時期については、７世紀前後と推定されており、追葬は７世紀前半には終了したとみられている。

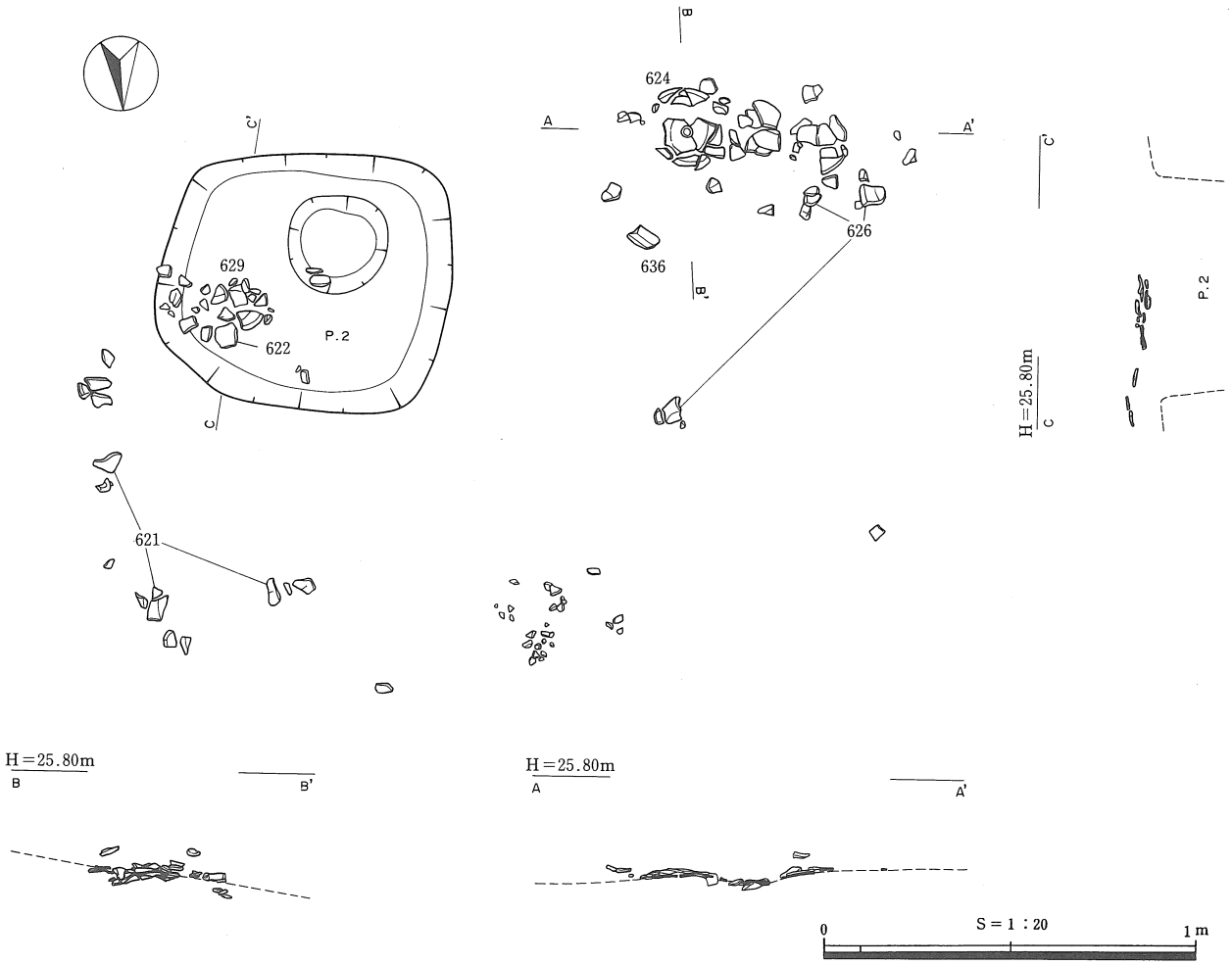
調査者の宇垣匡雅氏は、その調査報告書中で、装飾のある有蓋椀について集成し、他例と比較検討している。マノカンヤマ遺跡以外に12遺跡例が知られ、その分布は畿内から中国地方にかけて散在することを紹介している。有蓋椀を出土した遺跡のうちには、環頭大刀や金銅装馬具などを副葬し、大和政権との結び付きの密接さを窺わせる古墳が数例あること、これら古墳間には相当の離隔があり、首長間の交流によってこの有蓋椀が伝播したとは考え難く、畿内から直接各地へ伝えられたものと考察している。岡山県倉敷市所在の王墓山古墳出土例や大阪府柏原市所在の平尾山古墳群平野大県第20支群３号墳例（第203図５、６）の、銅椀を思わせる形態との比較において、川戸２号墳例は形態の崩れが認められ、在地での模倣品であることの可能性を指摘している。ちなみにマノカンヤマ遺跡例は、蓋のつまみが擬宝珠状である点に若干差異が認められるものの、前２者に近い形態と言える。

上述したとおり、装飾のある有蓋椀の出土例相互に微妙な形態的差異が認められる。宇垣氏の指摘どおり、畿内から銅椀を模した有蓋椀が各地に直接伝わったこと、あるいは在地での模倣が行われたことによるものと思われる。蛍光Ｘ線分析の結果によれば、616、618が地元産であるのに対し、612、614は外来品であり、陶邑産の可能性が指摘されている（註４）。

陰田地内における須恵器椀の出現は、陰田編年の４式にあたる。ＳＩ－１の時期と重なる。陰田地内ではこの時期より横穴墓の造営が始まり、新たな葬送儀礼に用いる新たな器種として椀が加えられたものと思われ、612～614もそのような背景のもとに出現したものとも考えられる。ただし、当遺跡における装飾のある有蓋椀の出土状況に唐突な感があり、他例の出土背景に窺われる大和政権との関係を、当遺跡においてどのように捉えるべきか、課題が残る（註５）。

３　テラス状遺構（ＳＳ－１）（第204～206図・写真図版42、83）

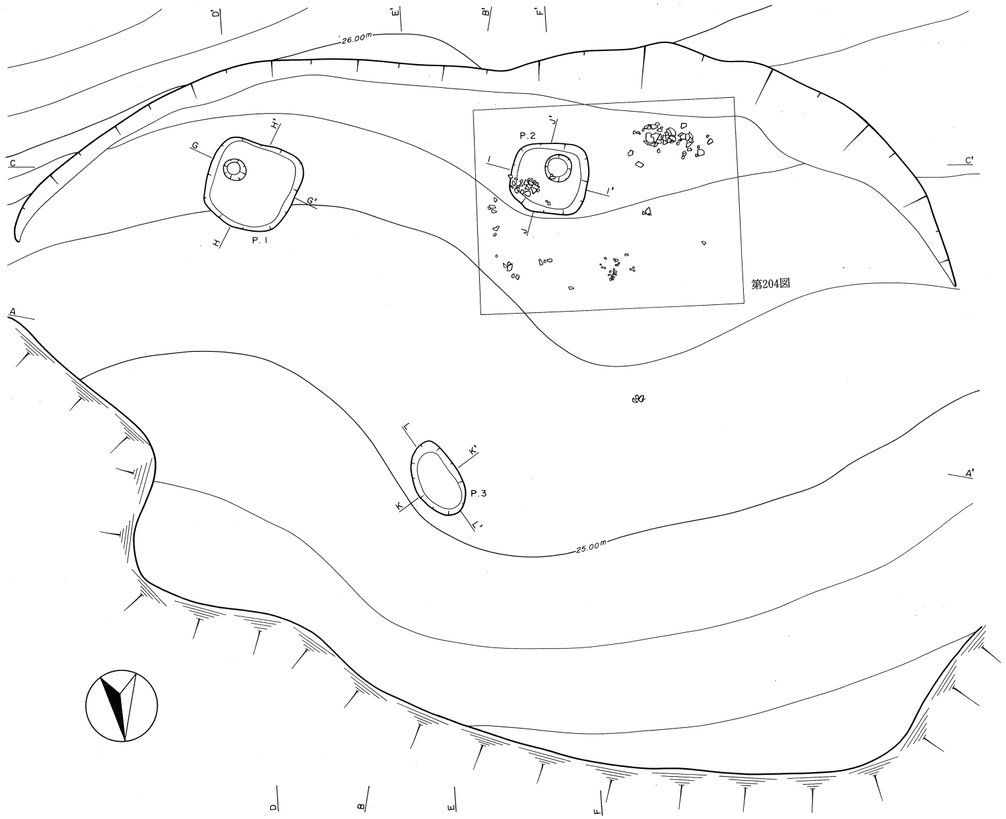
マノカンヤマ山頂から北に下る急斜面の中腹、標高約25m辺りに位置するテラス状の遺構である。調査区ｂ区にあたる。ここからの景観は、墓山と久幸山の２つの丘陵が左右の視界を阻んでおり、正面の谷口方面に沖積地を挟んで、日御碕神社の鎮座する天竺山が望まれる。遺構は、斜面を削平して、東西9.5m、南北最大長6.5mの



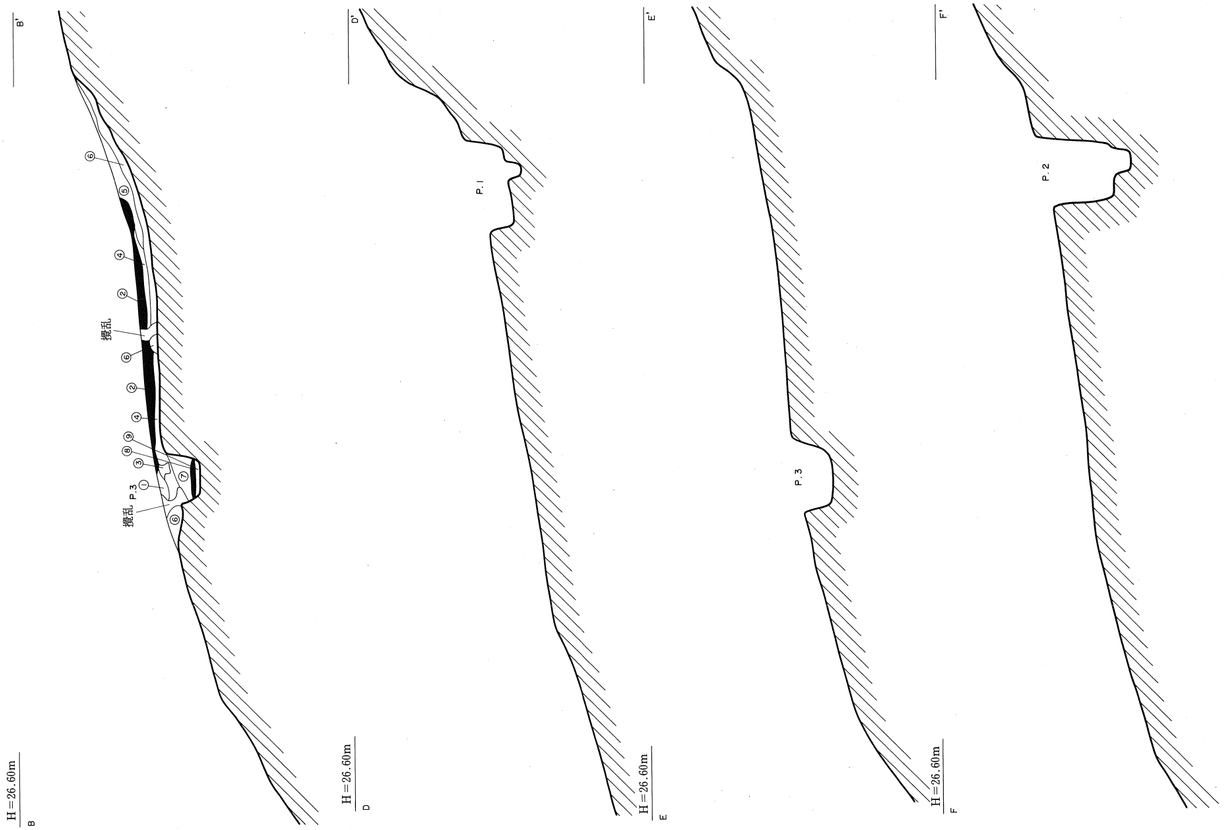
第204図　ＳＳ－１遺物出土状況実測図

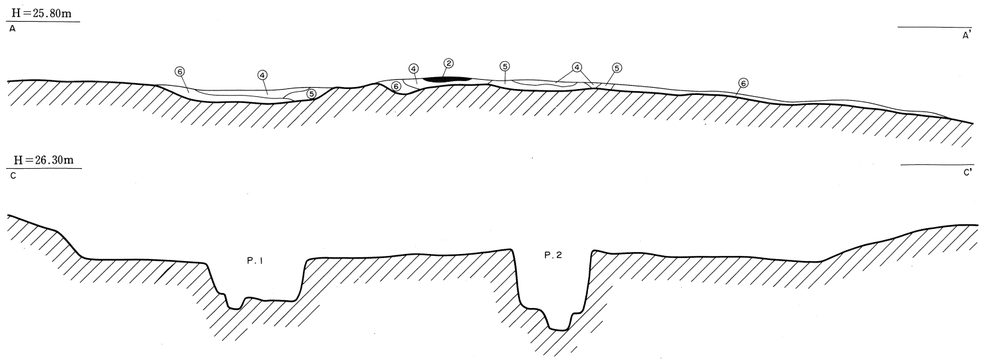
段状地形を造成したものである。遺構の南側（山頂部寄り）で地山を70cm程度ほぼ垂直にカットしている。北側（山裾側）は一部土砂が流出しており、平面形は不明である。底面は緩やかに傾斜している。表土を除去すると、テラスの南側部分に、炭化物の細粒を多く含んだ暗灰褐色土が約４ｍ四方に広がっているのが確認された。その下面からは、３基のピットが検出された。Ｐ．１とＰ．２は、2.1mの距離を置いてほぼ東西方向に並んでおり、柱穴と考えられる。平面が隅丸正方形を呈し、２段掘りである。テラスのほぼ中央に位置するＰ．３は、楕円形を呈する。埋土は３層に分層でき、中間層は炭化物層で、その下層は炭化物を多量に含んだ焼土である。遺構の性格としては、床面から出土した土器に二次的焼成の痕跡が認められないことより、焼出家屋の痕跡ではなく、火焚き場としての機能を考える。狼煙場または祭祀跡といった具体相を示す根拠は認められない。

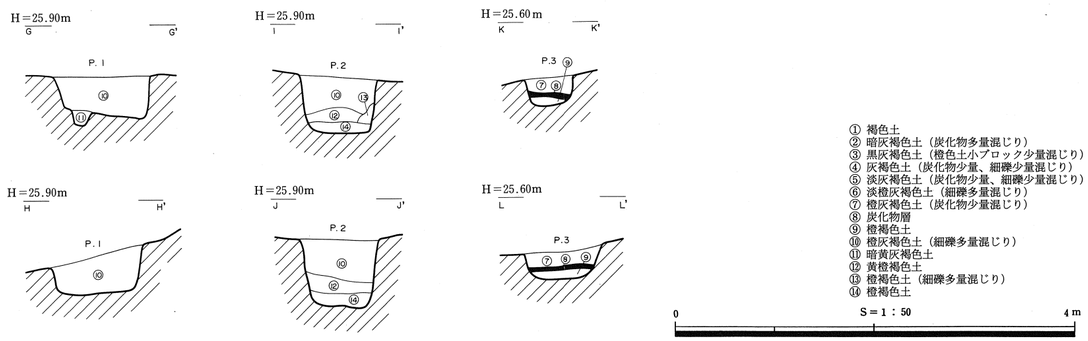
遺物は、628以外の土器がＰ．２周辺に集中し、ほぼ床面直上で出土した。確認できた器種は、須恵器が、蓋４、皿１、坏１、土師器が皿２、坏１である。628はＳＳ－１下方斜面に設定したトレンチから出土したものである。621、622、624、625は蓋である。621は口径19.2cmの大型のもので、口径に対して器高の低い形態を有する。天井部は平坦で、小さな径の環状つまみをもち、天井部から内湾気味に開きながら口縁部に向かう。端部は内面をややつまみ出している。全体にかなりシャープなつくりである。つまみ部分を欠損しているが、622もほぼ同様の形態を示す。624と625は、天井部から口縁部にかけてのカーブが、上記の２点よりも緩やかで膨らみを持つものである。624はつまみの欠損を観察できるが、625のつまみの有無については、確認できない。622と624のつまみは、その欠損状況から推して、擬宝珠状か621のような小径のものがつくと思われる。626は坏で、口縁部近くで大きく外に開く形態をもち、底部には粗い回転糸切り痕が観察される。628は、高台付きの坏であり、627は、高台付きの皿と思われる。623は小型の坏で、口縁端部が肥厚し、若干外反する。口縁部内面に漆様の付着物が観察される。土師器のほとんどが細片あり、器形の復元が困難であったが、629、630の皿を確認した。



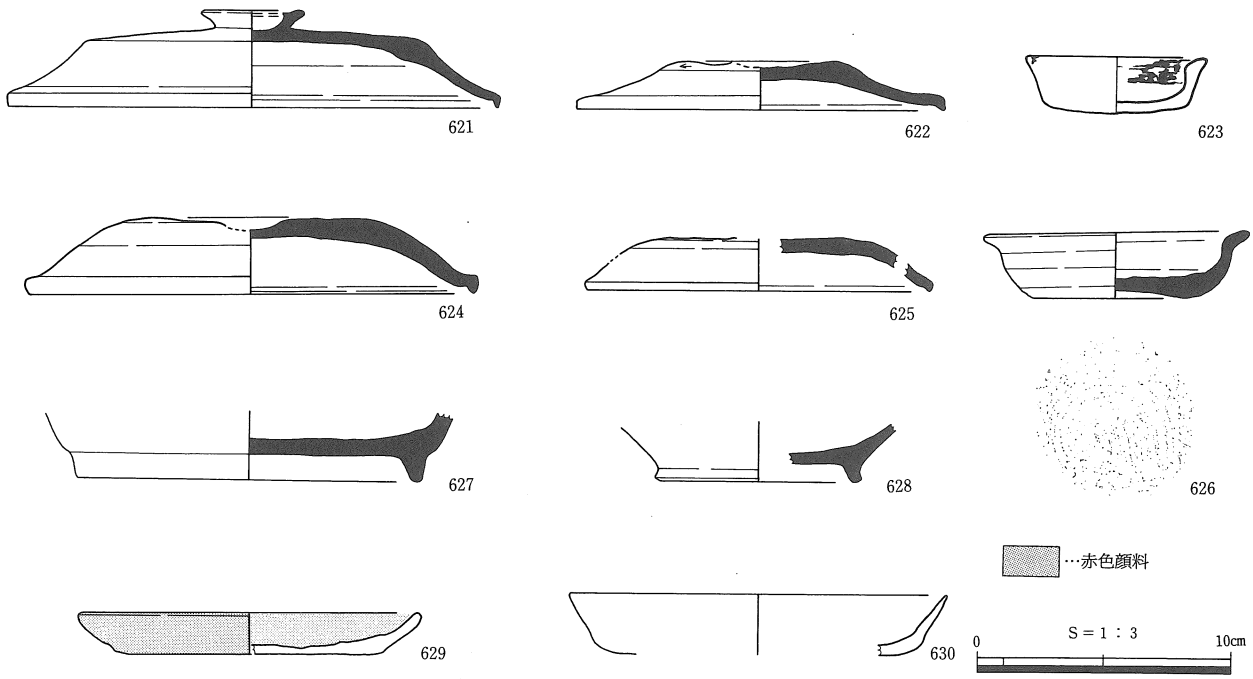
第204図





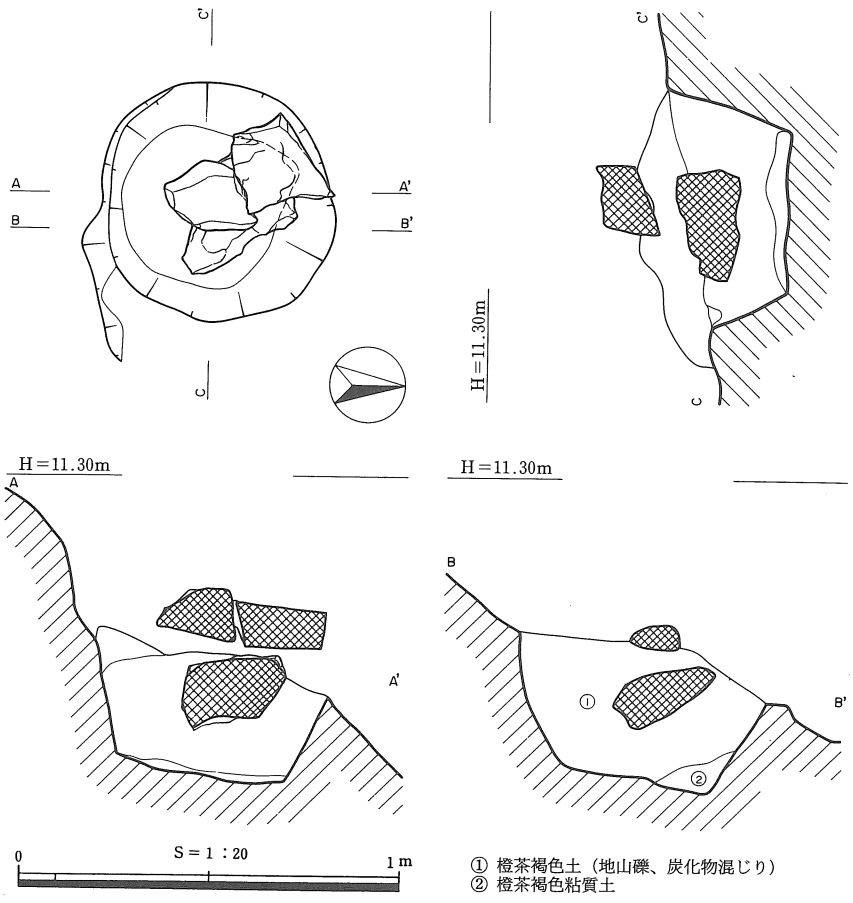


第205図　ＳＳ－１実測図



第206図　ＳＳ－１出土遺物実測図

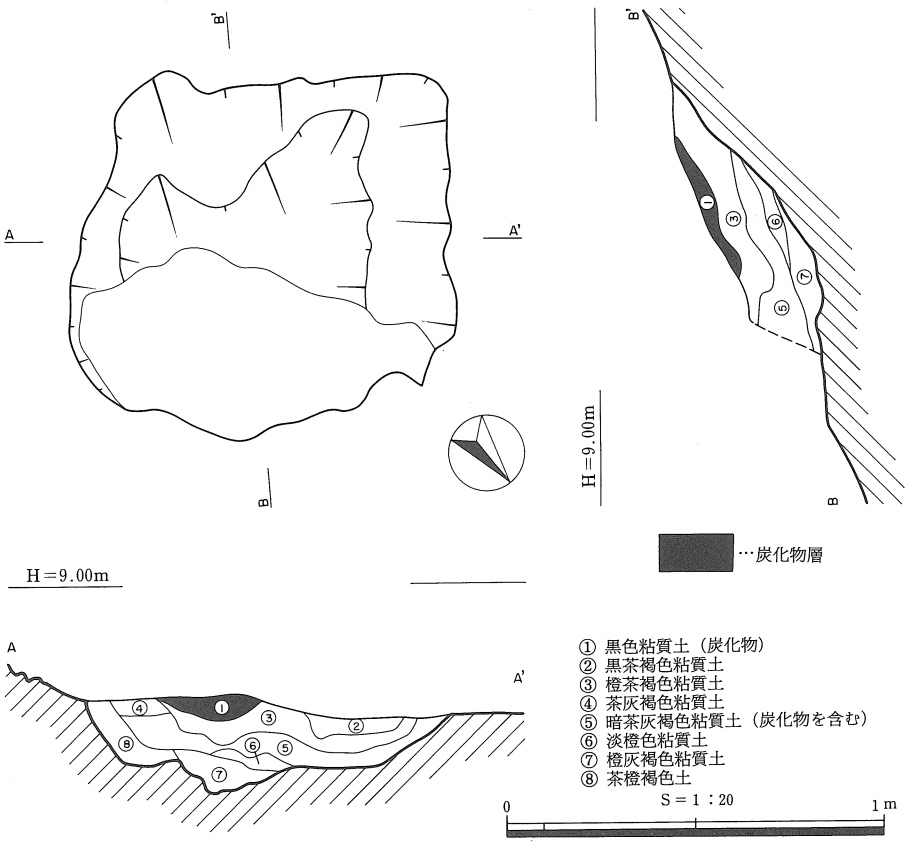
628以外の土器については、出土状況が一括的である。島根県安来市所在の高広遺跡（註６）における須恵器編年に従えば、621のように天井部が凹面をなして口縁部にいたる形態の蓋や、擬宝珠つまみが付く蓋はⅣＢ期に該当する。また、坏底部の回転糸切り手法の導入はこの段階から確認されている。ただし624は、つまみ以外の器形がⅢＢ期的であり、古い形態を残すものと言える。また帰属が不明確ながらも628もⅢＢ期相当と思われる。実年代は、ⅢＢ期が７世紀末～８世紀前葉、ⅣＢ期が８世紀末～９世紀前半代があてられている。出雲国庁跡の須恵器編年（註７）では、621タイプの蓋が５式に相当し、９世紀初頭に位置付けられている。奈良期の典型的な完形の坏が伴わないため、これらの土器の時期的位置付けをより困難にしていると言えるが、ＳＳ－１が営まれた時期については、８世紀後半を前後する時期と位置付けておきたい。



第207図　ＳＫ－１実測図

4　土坑（ＳＫ－１、２）（第207、208図・写真図版43、44）

土坑は、ｃ区の西側の丘陵斜面部から裾部にかけて２基（ＳＫ－１、２）検出した。ＳＫ－１（第207図・写真図版43）は、斜面部の棚状の微地形上に立地する。検出面の標高は、約11ｍである。土坑上で、20～30cm大の角礫を３個検出した。これらの礫は、面をほぼ水平に揃えて接しており、人為的に置かれたものとの印象を受けた。土坑は、地山の岩盤を掘削したもので、平面円形を呈し、検出面で径約60cm、深さ約30cmを測る。遺物は、出土しなかった。



第208図　ＳＫ－２実測図

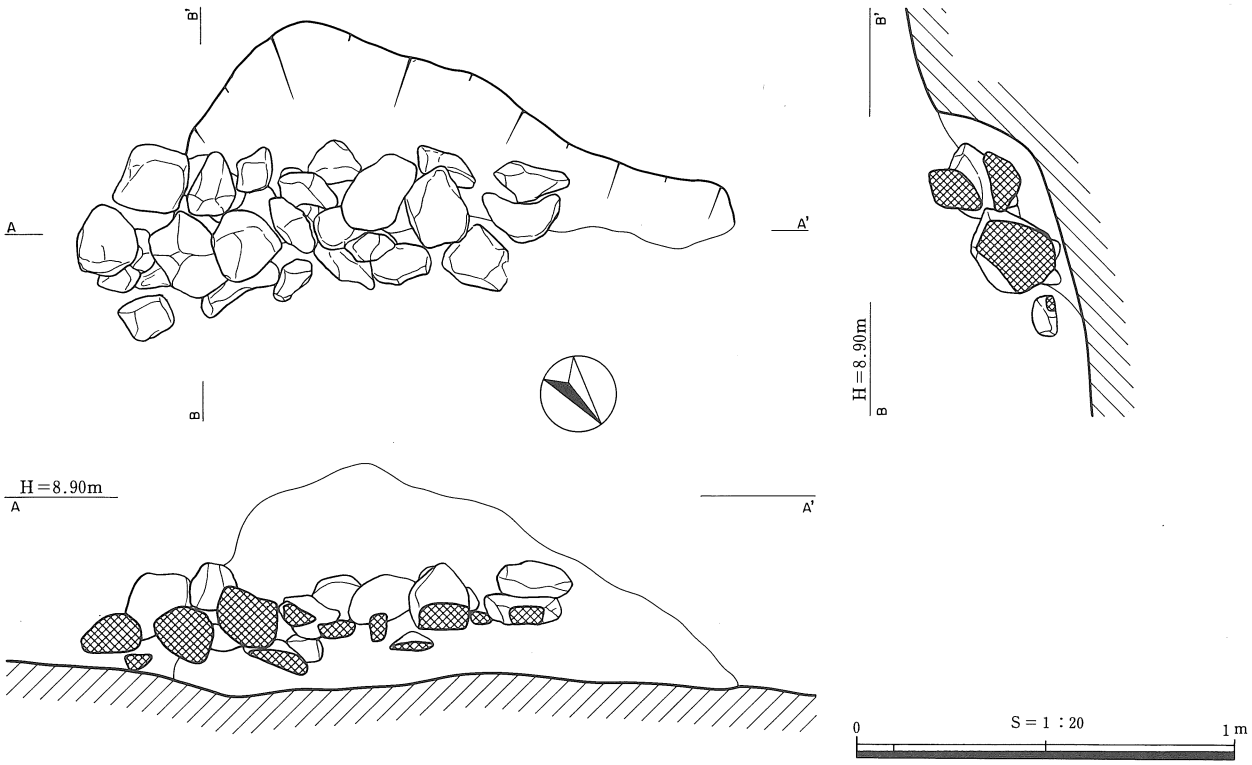
ＳＫ－２（第208図・写真図版44）は、丘陵麓部の斜面と平地の地形変換点付近に立地する。検出面の標高は、約９ｍである。地山の岩盤を１辺約95cmの隅丸正方形気味に掘削して、小さな段状に加工している。段の高さは、約40cmである。検出面で黒色粘質の炭化物の塊を確認し、その下層は焼土層であった。焼却跡と考えられる。遺物は、出土しなかった。

5　集石遺構（集石１、２）（第209～216図・写真図版44、45、83）

集石は、ｃ区で２基検出した。集石１（第209図・写真図版44）は、丘陵麓部の斜面と平地の地形変換点付近に立地する。標高約９ｍを測る。後背の斜面が垂直気味に立ち上がり、地盤が平坦になるよう周囲の岩盤を掘削した場所に形成されている。加工されたのは、長さ約142cm、幅約54cm、高低差約24cmの範囲である。人頭大の自然礫が、長さ130cm、幅55cmの範囲に27個集中しているが、礫の下面のレベルを揃えるなどの規格性は見受けられなかった。集石は、地山加工面から浮いた状態で検出されているが、上方からの転石の集合ではなく、人為的に集め置かれているような状況であった。地山加工は、集石１に関係するものではなく、ピット群１に伴う所作と推察される。集石中から、土師質土器の小破片が出土した。

集石２（第210～211図・写真図版45）は、表土中で宝篋印塔の基礎（Ｇ４）と塔身（Ｇ１）、五輪塔の地輪（Ｇ５）を確認していた。これらは原位置を保っておらず、表土層下の淡茶灰褐色土層中に本来帰属するものと思われる。標高は、約10.5ｍである。他に五輪塔の地輪１（Ｇ７）と水輪１（Ｇ２）、空輪１（Ｇ３）を、人頭大の自然礫５個と共に検出した。また集石の北側下方約５ｍの地点でも、五輪塔の地輪１（Ｇ６）を検出した。集石の下部には、人為的な掘り込み等は確認できなかった。これより上方は急斜面であり、墓地を形成したような地形は認められなかったことから、これらの石塔は他所から移された可能性が考えられる。

Ｇ４は宝篋印塔の基礎で、平面は35cm×35cmの正方形で、高さ28cmを測る。上面は高さ２cmの段をなし、28cm×28cmの平坦面になる。側面は、４面中３面に４弁の蓮華座をあしらった格狭間を施す。底面を、組み合わせ用に抉り込んでいる。Ｇ１は宝篋印塔の塔身と考えられるもので、24cm×24cm、高さ20.5cmを測る。上面と側面



第209図　集石１実測図

４面に梵字が刻されており、金剛界五仏を表している。Ｇ５は28cm×28cm、高さ17.4cm、Ｇ６は26cm×24cm、高さ11cm、Ｇ７は29cm×29cm、高さ14.4cmの直方体の石材で、五輪塔の地輪と考えられるものである。Ｇ２は26cm×24cm、高さ15cmで上面と下面に平坦面を設ける。平面形は円形、断面形は楕円形を呈しており、その形態から五輪塔の水輪と考えられる。Ｇ３は、16cm×14cm、高さ10cmで平面円形、断面楕円形の石材で、五輪塔の空輪にあたると思われる。

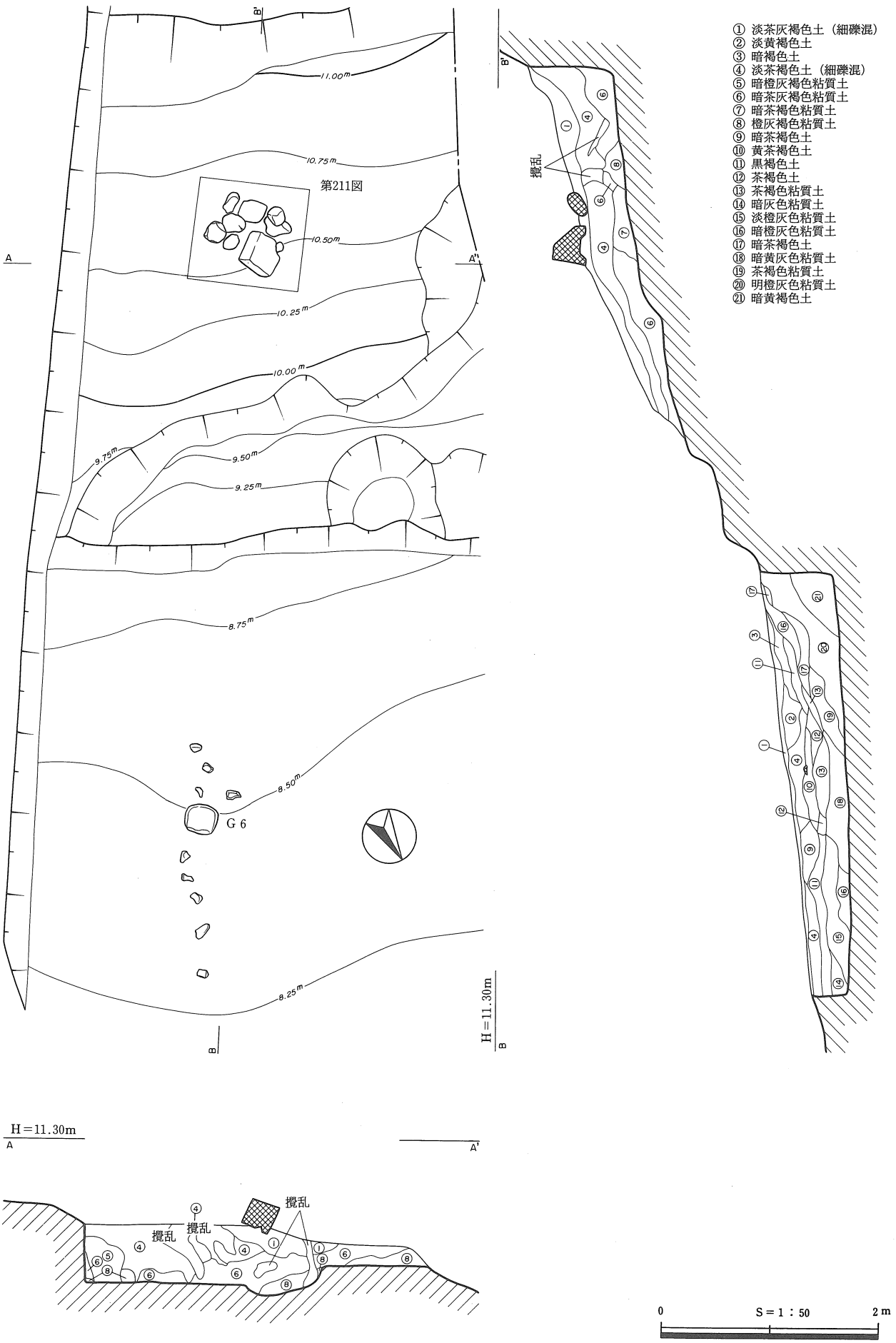
このほか集石２の周辺から、631～635の遺物が出土した。これらは原位置を保っていないものと思われる。631は、土師質土器の小皿で、煤の付着がみられ、灯明皿と思われる。632は、土師質土器の坏の底部で、糸切り痕が観察される。633は、備前焼の擂鉢で、６条の卸目が観察される。634は瓦質の平瓦である。635は銅銭で、「熙寧元寶」（北宋・初鋳1068年）と確認できる。原位置を保っていないものの、これらの遺物の出土から、集石２の石塔類は、ほど近い場所に本来位置していたものと考えられる。

6　溝状遺構（ＳＤ－１）（第217図）

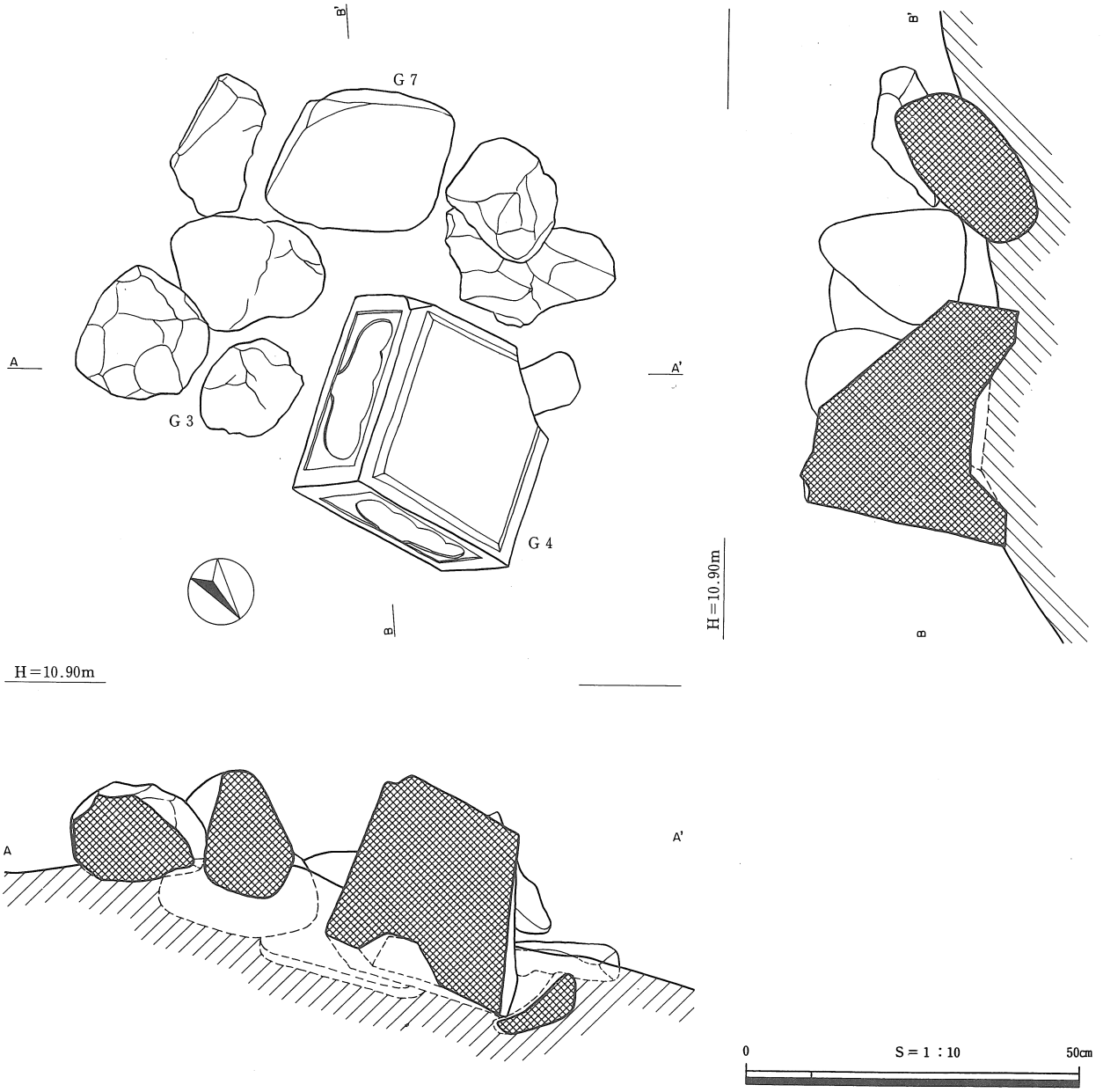
ＳＤ－１は、ｃ区の西側、集石１の北東側に隣接する。標高は、約8.5mである。平面はＴ字形、断面はＵ字形を呈する。ＳＤ－１は、ピット群１に関連する遺構と思われ、集石１で述べた地山加工面に設けられている。遺物は出土していない。

7　ピット群（ピット群１～３）（第217、218図・写真図版43）

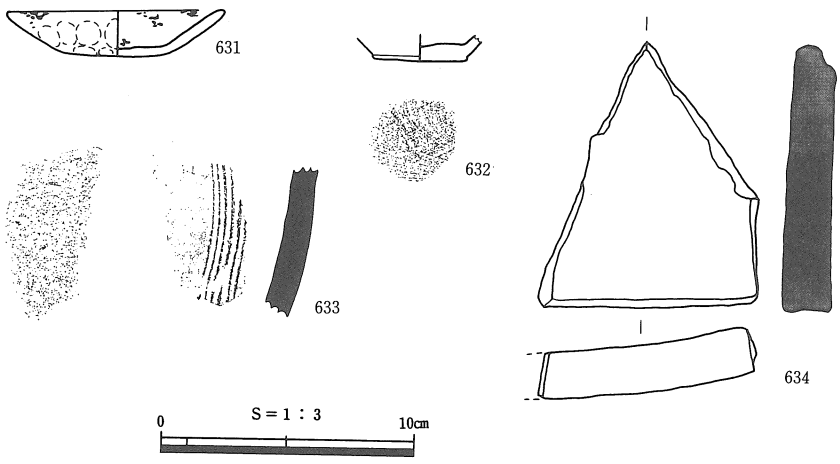
ピット群１（第217図）は、ｃ区の西側に位置し、標高は約８ｍである。ピットの数は14基で、ＳＤ－１を伴うものと思われる。配列に規則性を見出せなかった。遺物は出土していない。ピット群２（第218図・写真図版43）は、ａ区の西側、ＳＩ－１の下方に位置し、標高13m前後の地点の平坦面に立地する。19基のピットで構成され、柵列状の並びを示す。遺物は出土していない。ピット群３（第218図・写真図版43）は、ａ区北側の段状の落ち込み部周辺に位置し、標高11～12m地点にあたる。12基のピットで構成され、配列に規則性を見出せなかった。遺物は出土していない。ピット群２、３は、埋土の観察から、果樹園に伴う施設である可能性も捨てきれない。



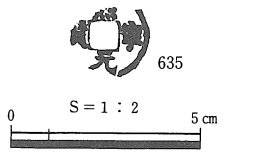
第210図　集石 2 実測図(1)



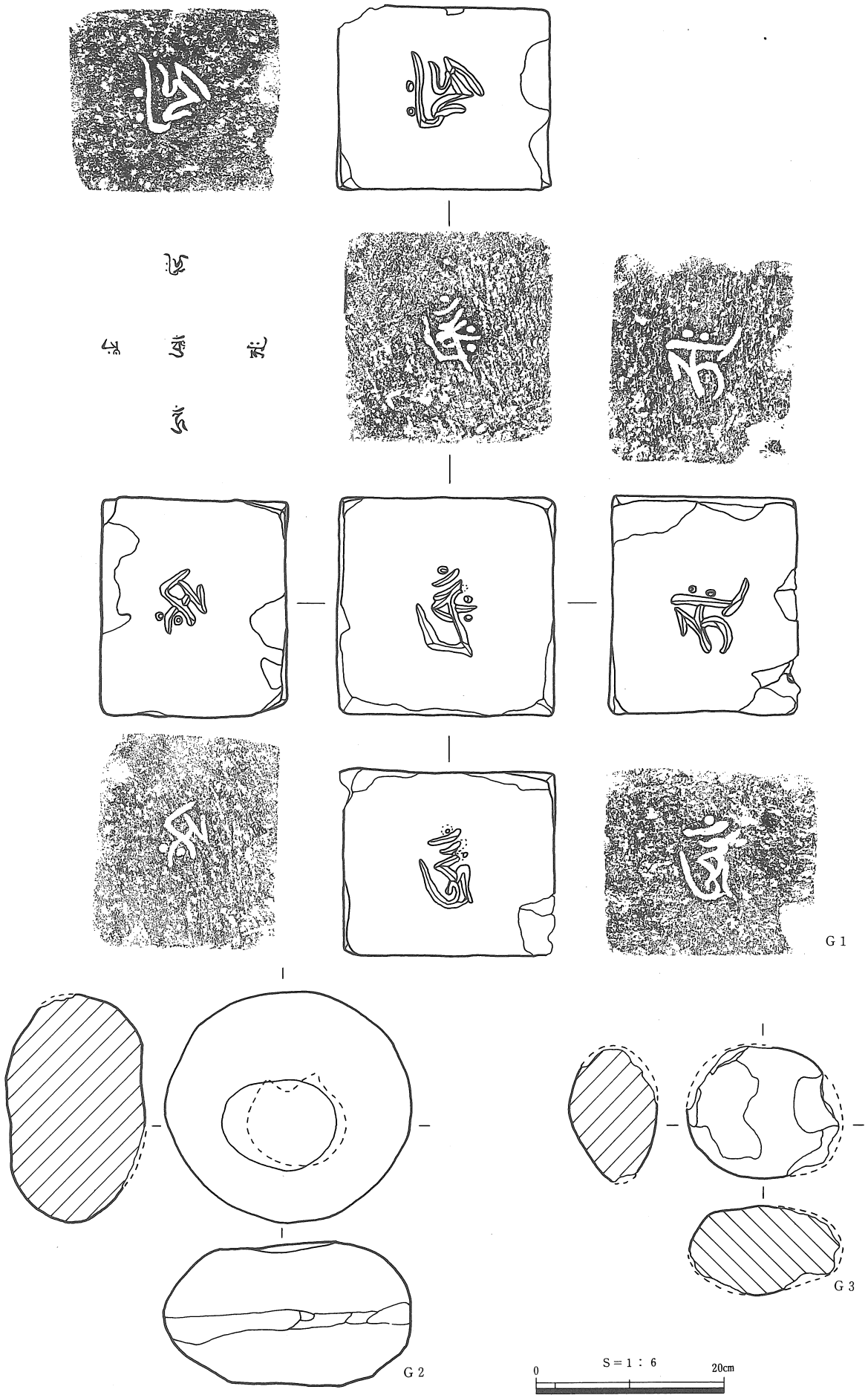
第211図　集石 2 実測図(2)



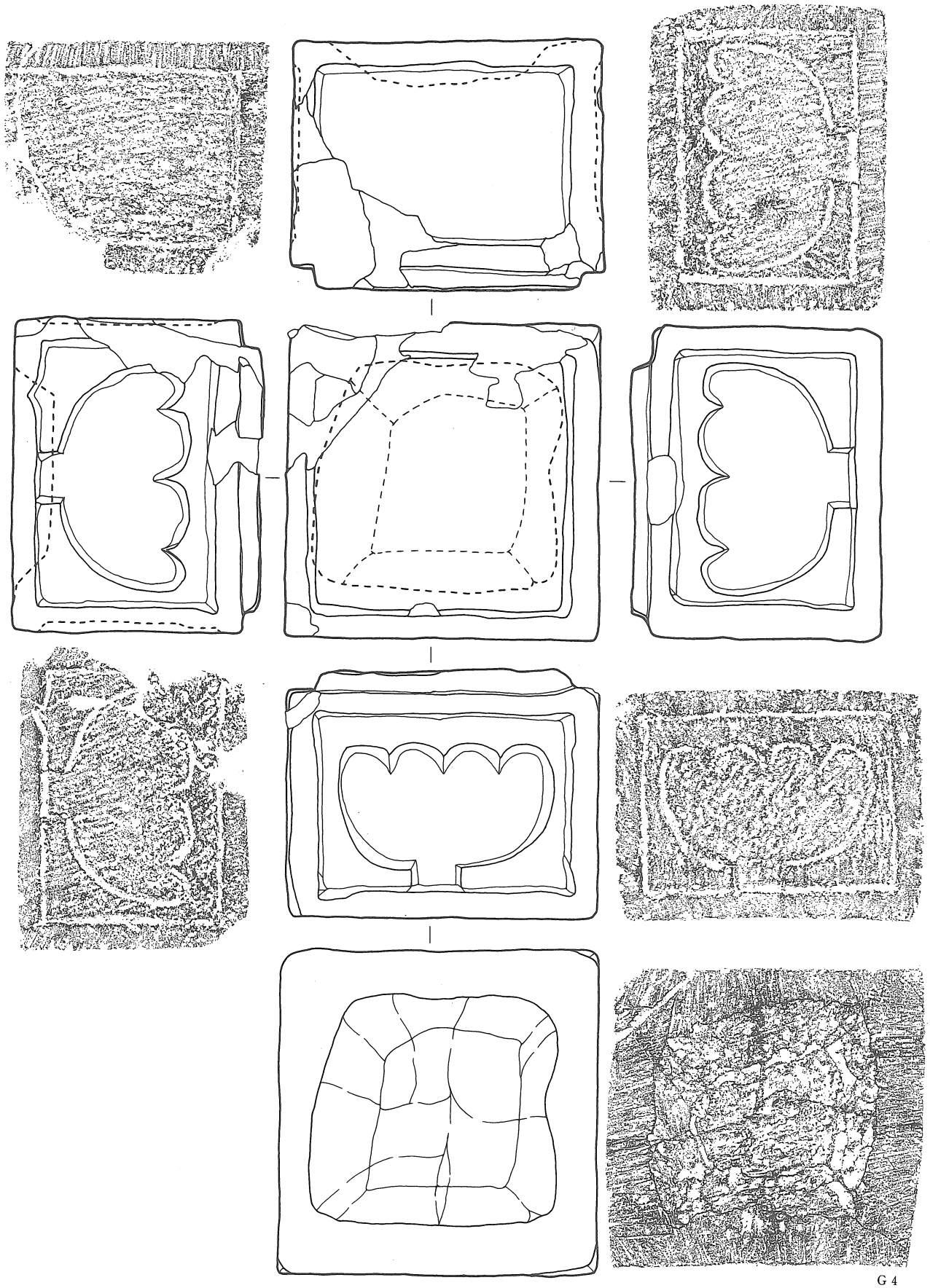
第212図　集石 2 出土遺物実測図(1)



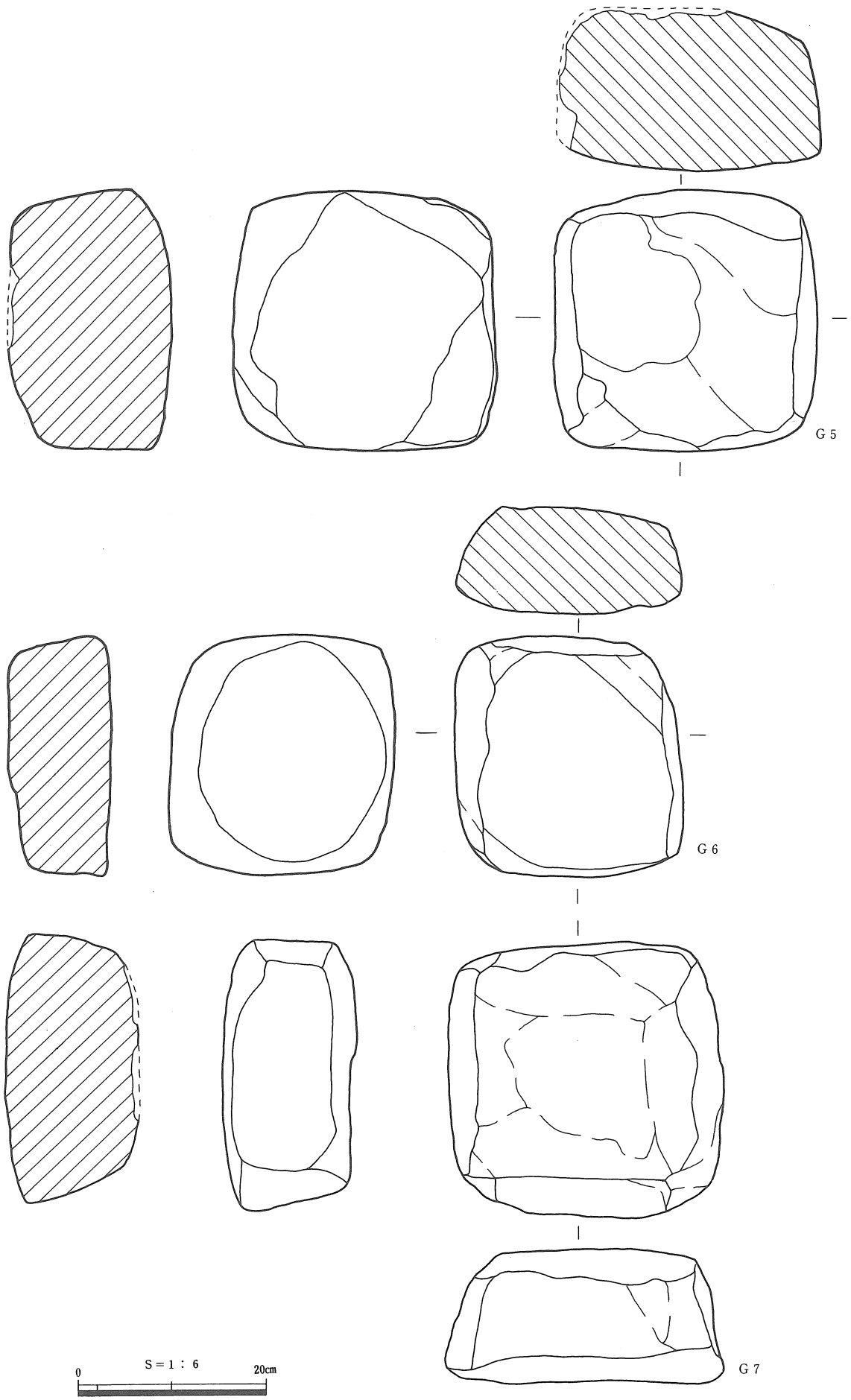
第213図　集石 2 出土遺物
実測図(2)



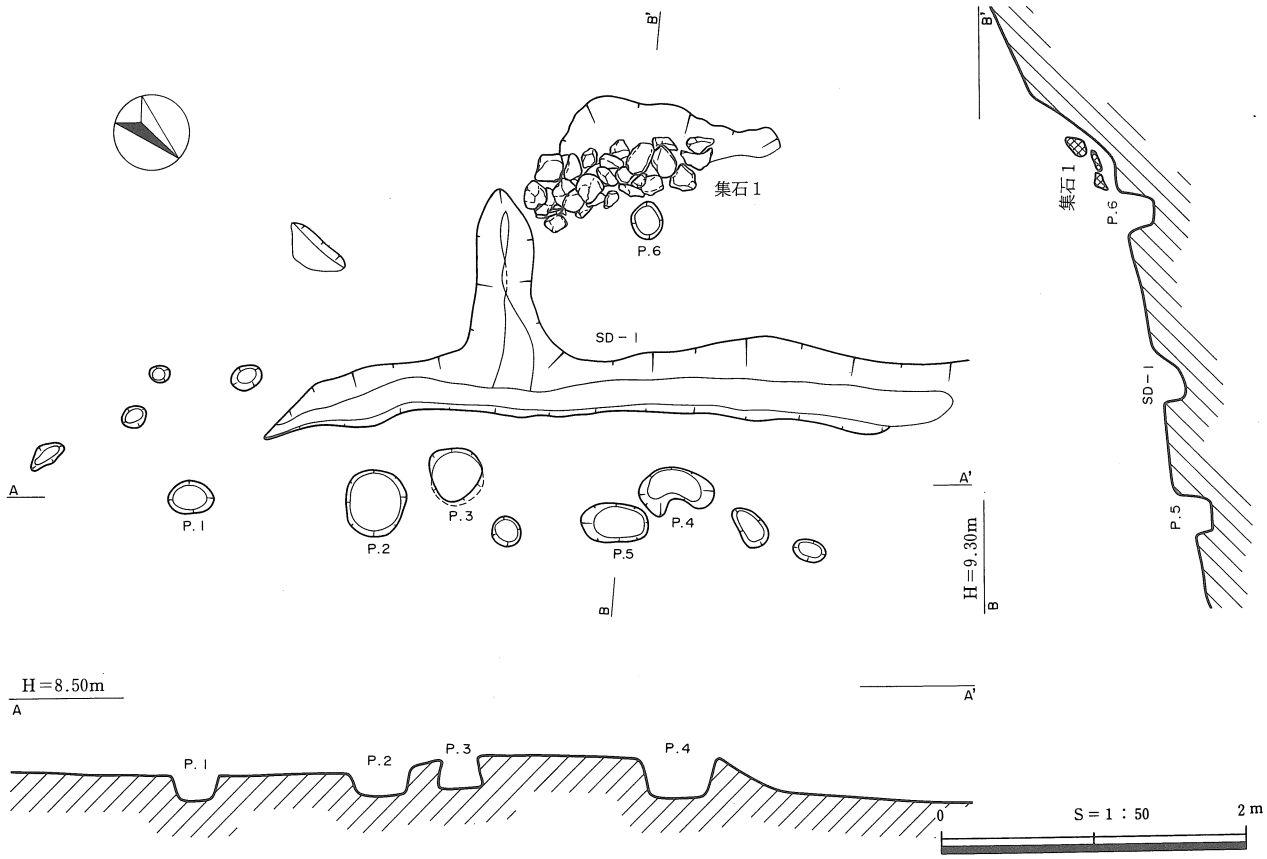
第214図　集石２出土石塔類実測図(1)



第215図　集石２出土石塔類実測図(2)



第216図　集石 2 出土石塔類実測図(3)



第217図　ＳＤ－１、ピット群１実測図

8　遺構に伴わない遺物（第219～225図・写真図版83、84）・弥生土器（636～641）（第219図）

626～639は、甕の口縁部で、636に平行沈線が観察される。639の口縁部外面には、ハケメが観察される。弥生時代後期終末に相当する。640は、器台型土器の脚部で、641は、上げ底気味の平底の底部である。弥生時代後期に相当すると思われる。

・土師器、土製品（642～668）（第219、220図・写真図版84）

645～647は壺である。645は古墳時代前期に相当する。642～644、648～651は甕、652～664は高坏で、古墳時代中期～後期に相当する。665は坏、666、667は手捏ね土器、668は支脚の円筒状の脚部である。

・須恵器（669～691）（第221図・写真図版83、84）

670は６世紀後葉、669、671、672は６世紀末～７世紀初頭の蓋坏である。675～683は奈良時代の蓋、坏で、底部に糸切り痕が観察される。673、674、684は高坏で、673は有蓋高坏の蓋である。685、686は甕の口縁部、687～689は壺である。690は小片ながら円面硯と判断した。691は壺甕類の把手であろう。

・陶磁器（692～697）（第222図）

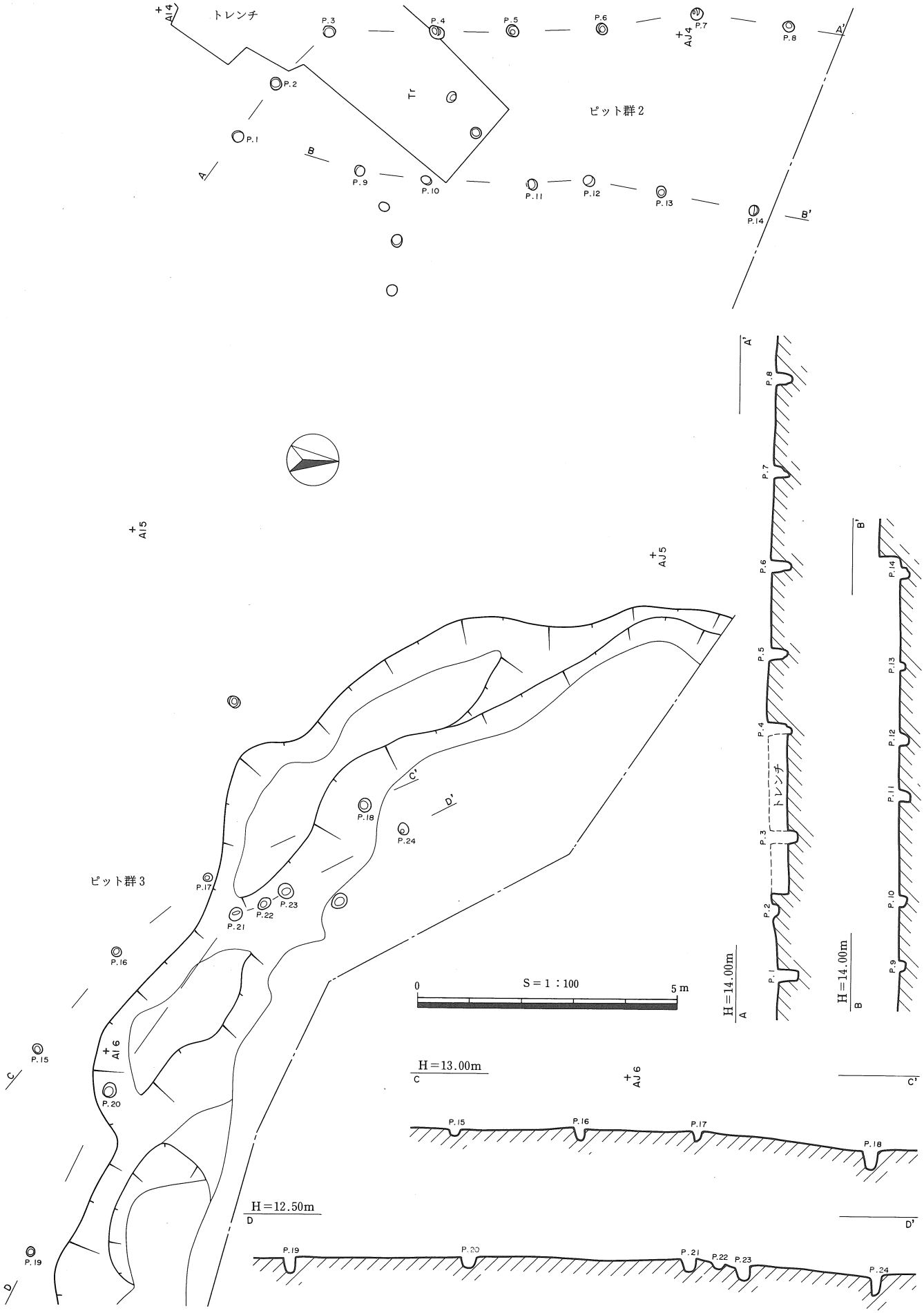
692は備前焼の擂鉢で、注口部を含む個体である。間壁編年のⅣＢ期、15世紀後半～16世紀初頭に相当する。693と696は国産青磁で、696は表面がかせている。694は瀬戸美濃の天目椀で、大窯Ⅲに相当する。697は18世紀前半の伊万里の染付磁器の皿で、695は産地不明の陶器だが、18世紀代のものと思われる。

・石製品（698～701）（第223、224図）

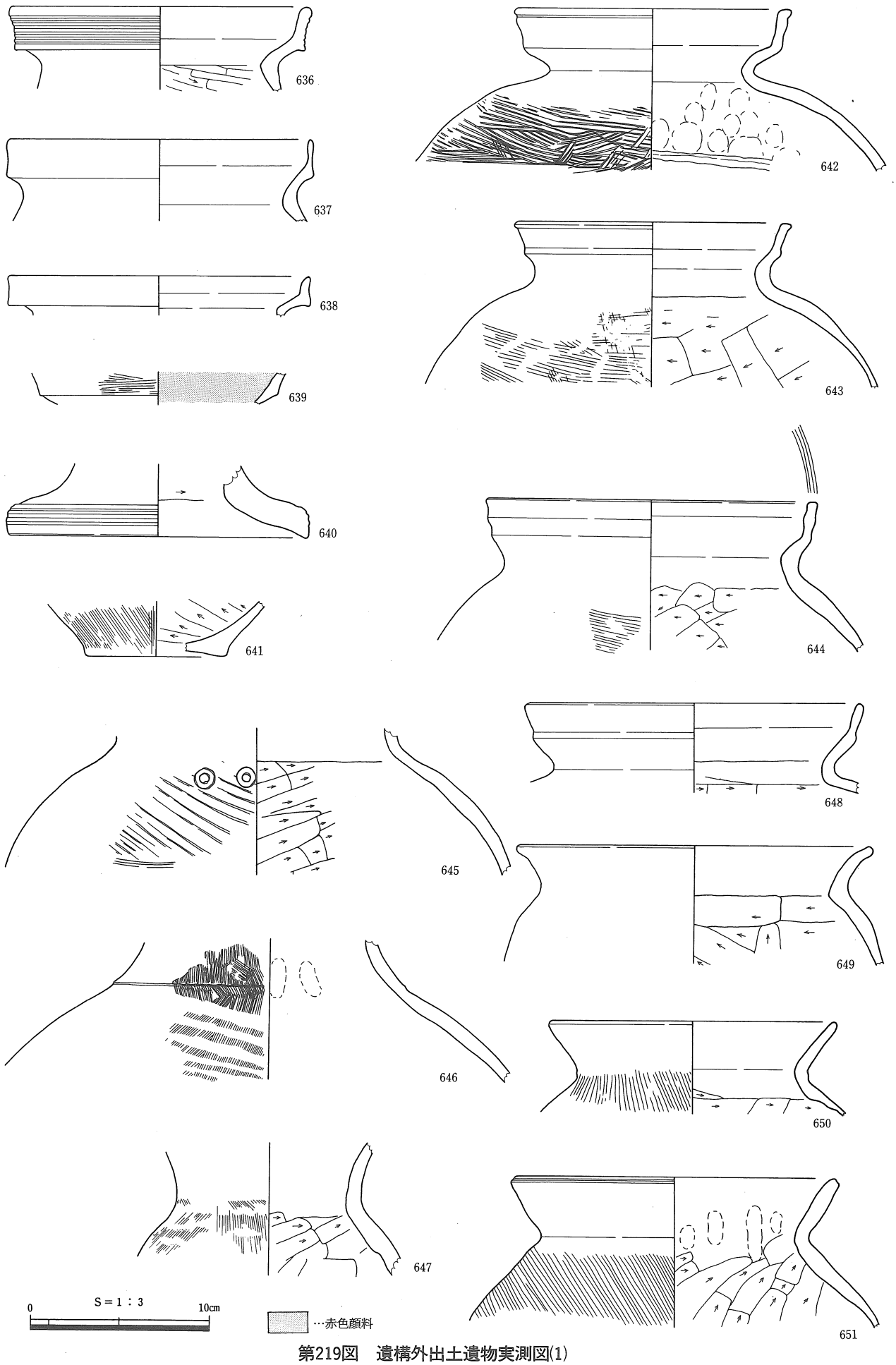
698は黒曜石製の楔形石器、699、700は黒曜石製の石鏃である。701は花崗斑岩製の台石で、赤色の物質が付着している（註８）。

・鉄製品（702）（第225図）

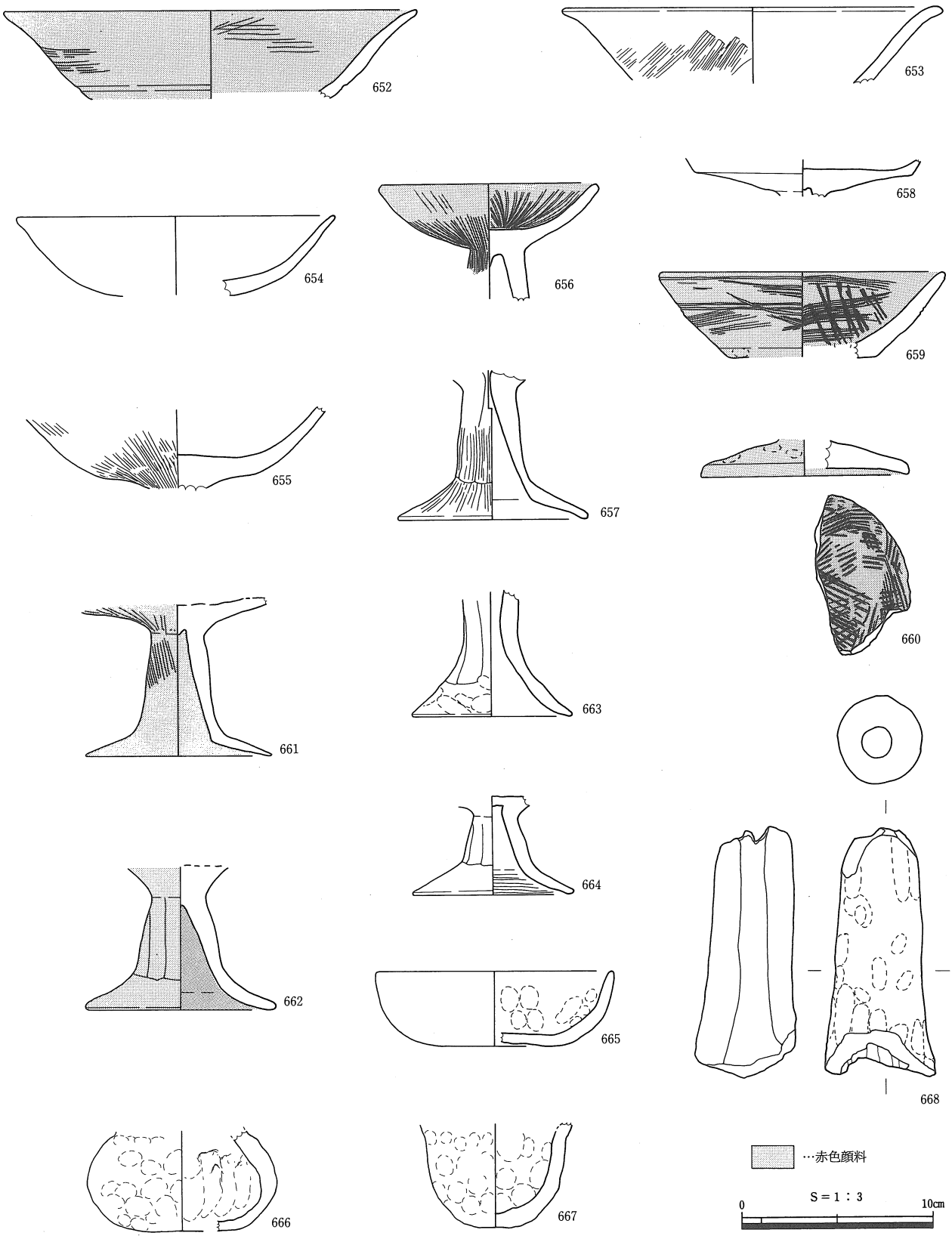
702は鉄鎌と思われる。



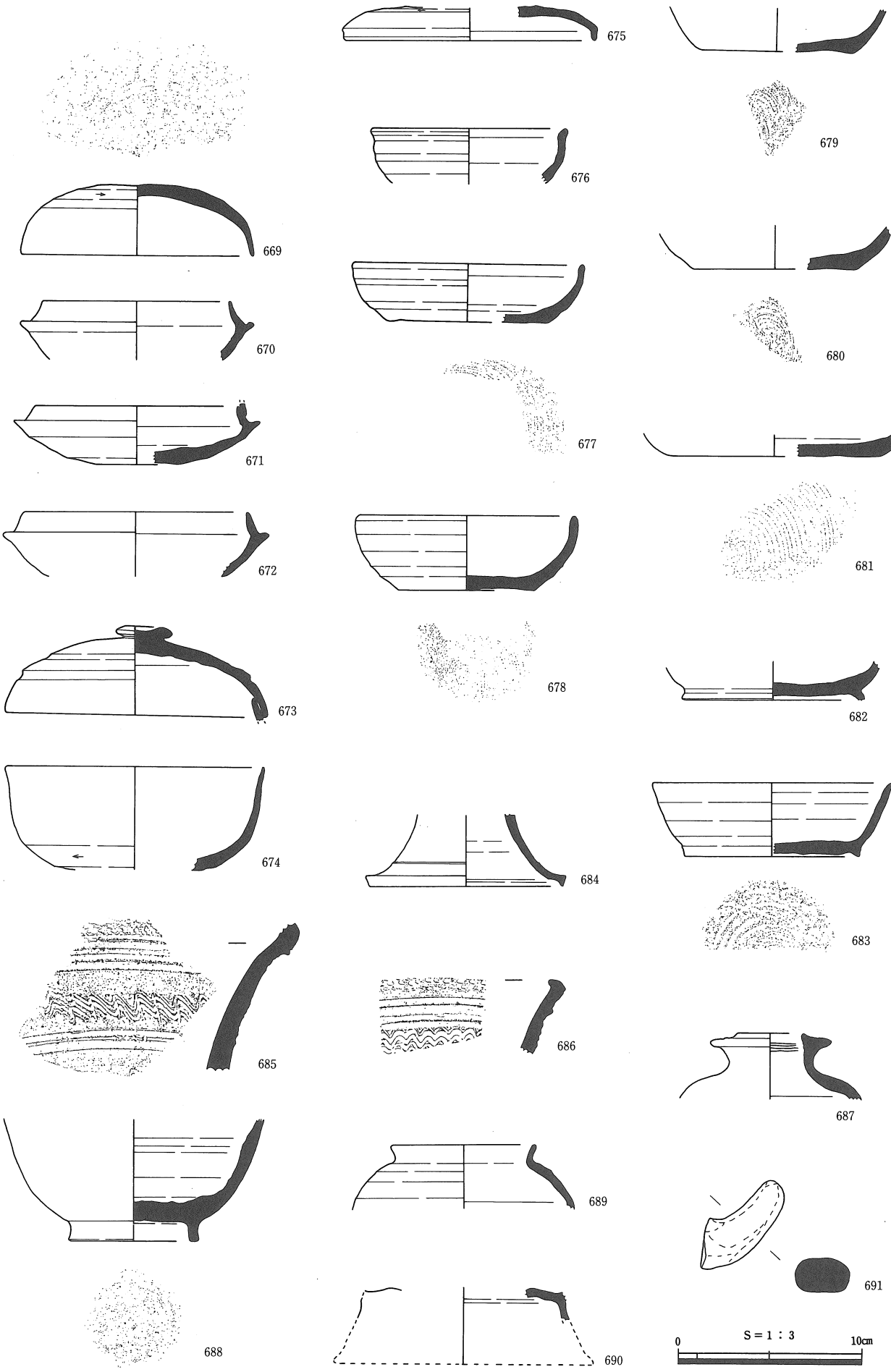
第218図　ピット群2、3実測図



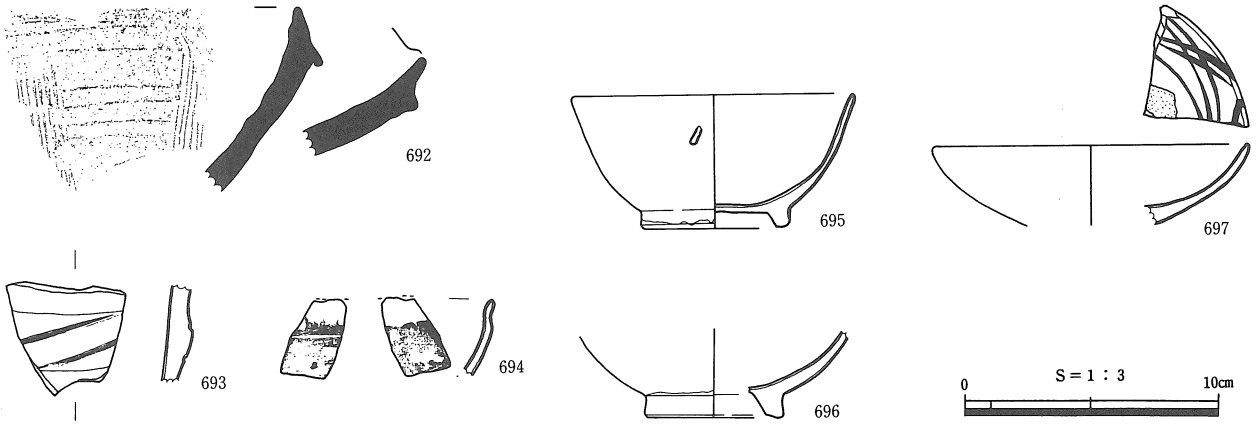
第219図　遺構外出土遺物実測図(1)



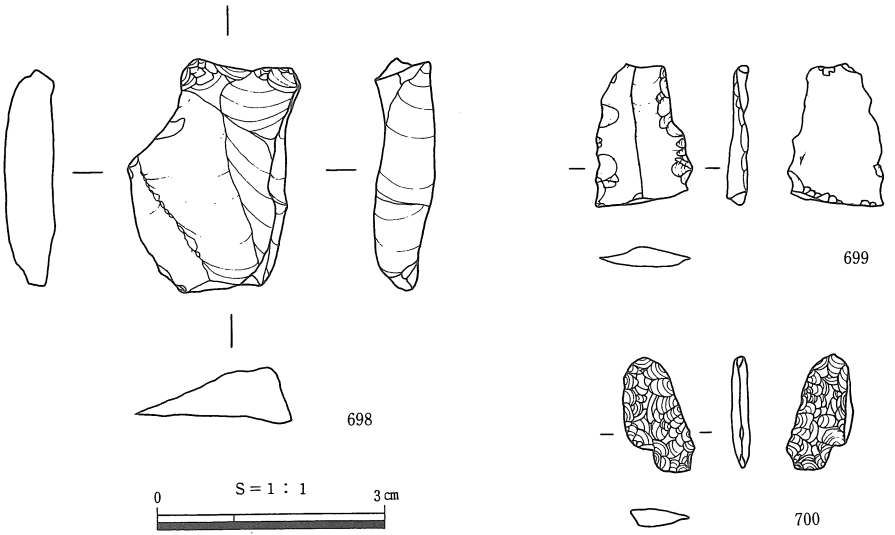
第220図　遺構外出土遺物実測図(2)



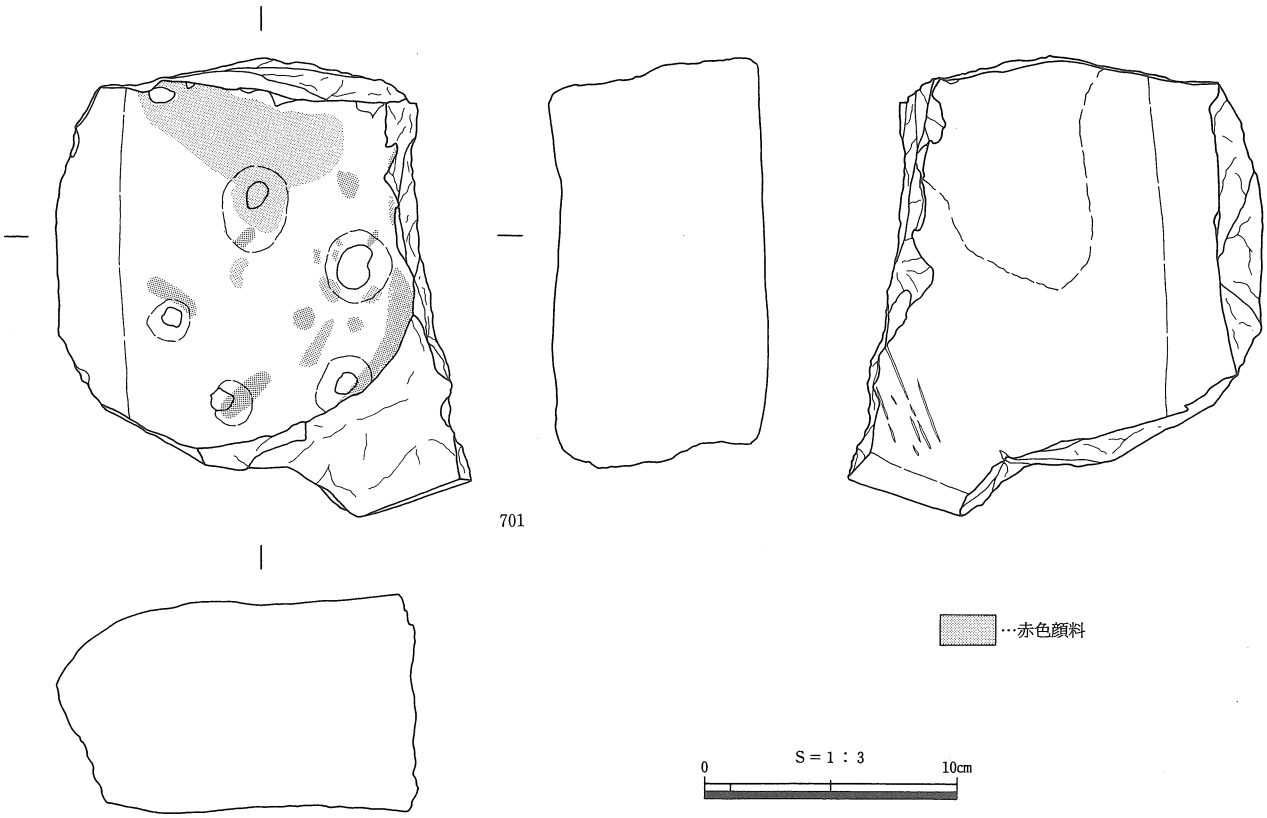
第221図　遺構外出土遺物実測図(3)



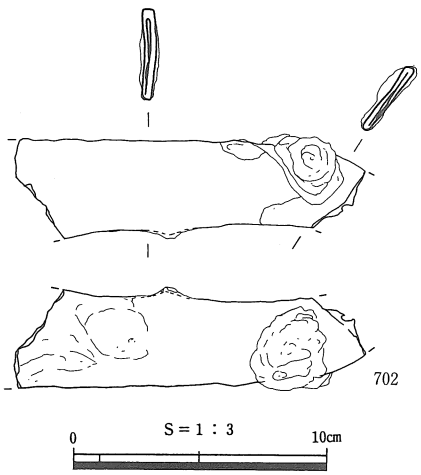
第222図　遺構外出土遺物実測図(4)



第223図　遺構外出土遺物実測図(5)



第224図　遺構外出土遺物実測図(6)



第225図　遺構外出土遺物実測図(7)

註1　萩本勝・佐古和枝　「第4節；須恵器について」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註2　『寺内八号墳発掘調査報告書』　会見町教育委員会

註3　宇垣匡雅　『川戸古墳群発掘調査報告書』　大原町教育委員会

註4　三辻利一　「陰田遺跡群出土須恵器の蛍光X線分析」　（本書第9章第1節）

註5　装飾のある有蓋椀については、岡山理科大学理学部亀田修一先生にご教示いただいた。

註6　『高広遺跡発掘調査報告書』　島根県教育委員会　1984年

註7　『出雲国庁跡発掘調査概報』　松江市教育委員会　1970年

註8　石製品の石材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご鑑定いただいた。

鳥取県教育文化財団調査報告書47
一般国道９号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ

鳥取県米子市

陰田遺跡群（本文編Ⅰ）

発　行　1996年３月29日
発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団
〒680　鳥取市東町１丁目271番地
電　話　（0857）26-8397
印　刷　中央印刷株式会社

鳥取県教育文化財団調査報告書　47

一般国道９号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　X

鳥取県米子市

陰田遺跡群

（本文編Ⅰ）

陰田第６遺跡

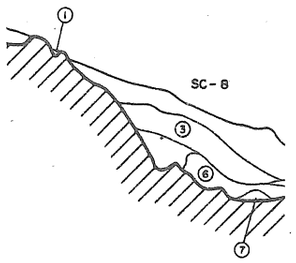
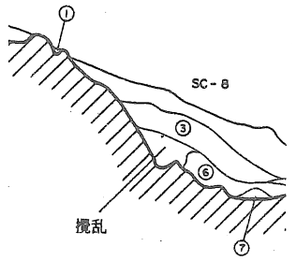
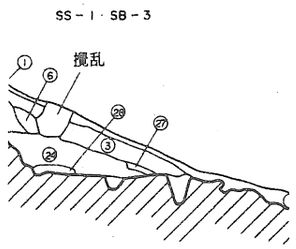
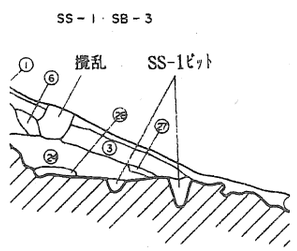
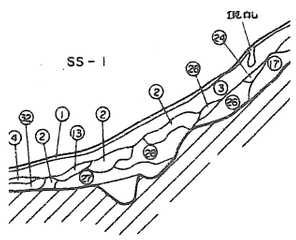
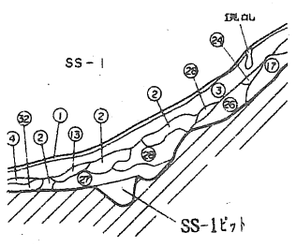
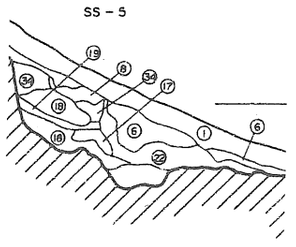
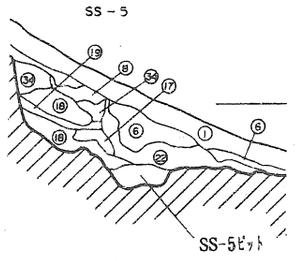
陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区

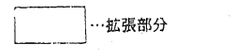
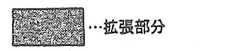
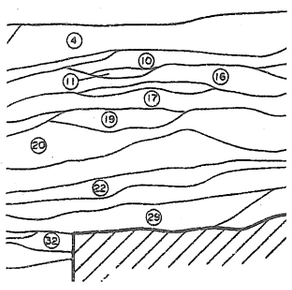
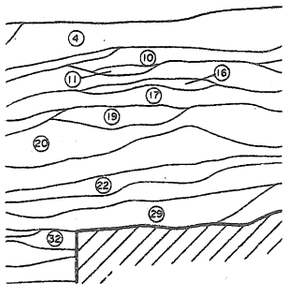
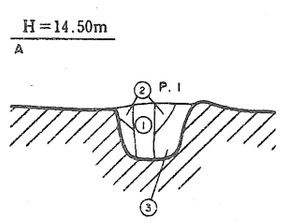
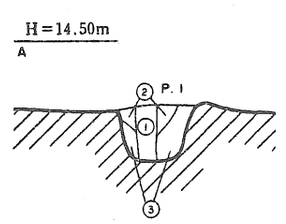
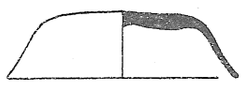
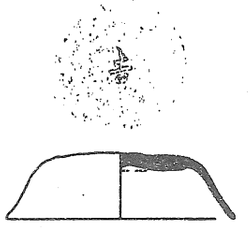
1996

財団法人　鳥取県教育文化財団
建設省　倉吉工事事務所

鳥取県教育文化財団調査報告書47
一般国道9号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X

『陰田町遺跡群』正誤表

頁	誤	正
本文編Ⅰ・陰田第6遺跡 P188・第170図 C−C' 断面図		
本文編Ⅱ・陰田ヒチリザコ遺跡　P24・第245図 B−B' 断面図		
本文編Ⅱ・陰田ヒチリザコ遺跡　P24・第245図 C−C' 断面図		
本文編Ⅱ・陰田ヒチリザコ遺跡　P24・第245図 H−H' 断面図		

頁	誤	正
本文編Ⅱ・陰田子犬田遺跡 P61・第278図左下隅		
本文編Ⅱ・陰田荒神谷遺跡 P129−130・第333図　A−A' 断面図		
本文編Ⅱ・陰田荒神谷遺跡 P139−140・第339図　A−A' 断面図		
本文編Ⅱ・第9章　考察 P196・11行目	ヒヂリザコ遺跡から・・・	ヒチリザコ遺跡から・・・
本文編Ⅱ・第9章 P223・図1 遺物番号839の土器		

序

米子市は、「山陰の商都」と称される鳥取県西部地域の中核都市であります。北は雄大な日本海、東は秀峰大山に臨んでおり、美しい自然環境にも恵まれ、産業と観光の両面で今後さらなる発展が期待される地域であります。近年、環日本海交流の推進が提唱される中、平成７年には中海臨海地域が輸入促進地域に指定され、米子市の果たす役割も重要視されております。道路等、交通網の整備が急速に進められており、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査件数も近年増加し、この地域の成り立ちを物語る遺跡が数多く発見されております。

当財団では、一般国道９号米子道路工事に伴い、建設省倉吉工事事務所から委託を受けて、鳥取県教育委員会の指導のもと、平成２年度から埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。平成５年度から平成７年度にかけては、米子市陰田町内で陰田遺跡群の発掘調査を実施し、記録保存に努めてまいりました。調査の結果、弥生時代から江戸時代にかけて断続的に遺跡が形成されていたことが確認され、当該地区の歴史の長さをあらためて認識することとなりました。特に古代においては、山陰地方有数の鉄器生産地帯であったことが解明され、山陰地方の古代史に貴重な資料を提供するものと考えます。本発掘調査の成果が、今後の調査研究の一助となり、多くの方々に活用していただければ、幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大なご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導いただきました方々、そのほか関係各位に対し、心から感謝申しあげます。

平成８年３月

財団法人　鳥取県教育文化財団
理事長　田　渕　康　允

序　文

建設省が管理する一般国道９号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）までの76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに西伯郡淀江町及び米子市地内において、将来の国土開発幹線道路として、当面活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である米子道路の整備を進めています。

米子道路は米子市及びその周辺部における一般国道９号の交通混雑を緩和するために計画され、昭和47年から事業に着手し、現在までに米子市尾高～陰田町約8.1km（一部ランプ使用）を供用しています。

現在、西伯郡淀江町今津から米子市赤井手及び米子市陰田町から県境までの間を自動車専用道路として施工中です。

このルートには、多数の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の３の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い記録保存を行うことになりました。

このうち一昨年・昨年・今年度は、「陰田小犬田遺跡」「陰田古墳群」「陰田第６遺跡」「陰田荒神谷遺跡」「陰田久幸山遺跡」の５箇所について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査を行いました。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを理解いただけることを期待するものであります。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成８年３月

建設省　倉吉工事事務所長

西　田　和　昭

例　言

1．本報告書は、「一般国道9号米子道路埋蔵文化財発掘調査」に伴い、平成5年度から平成7年度にかけて、鳥取県米子市陰田町地内で実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．本発掘調査は、建設省倉吉工事事務所の委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した。

3．本発掘調査は、年次ごとに下記の遺跡を対象として実施された。

平成5年度－陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡
（これらは、当初陰田久幸山遺跡と呼称していた遺跡である。）

平成6年度－陰田第6遺跡Ａ区、陰田小犬田遺跡

平成7年度－陰田第6遺跡Ｂ区（これは、当初陰田古墳群と呼称していた遺跡である。）、陰田荒神谷遺跡

なお、遺跡名変更のいきさつについては、本文中に記述した。

4．発掘調査を実施した各遺跡の所在地は、次のとおりである。

陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区－鳥取県米子市陰田町字久幸山および曲リ久コウ
陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区－　〃　字久幸山
陰田ヒチリザコ遺跡　－　〃　字久幸山
陰田第6遺跡Ａ区、Ｂ区　－　〃　字久幸山
陰田小犬田遺跡　－　〃　字小犬田堤ノ下
陰田荒神谷遺跡　－　〃　字荒神谷山および小犬田堤ノ下

5．本調査において、陰田第6遺跡で新たに確認された古墳および横穴の名称については、すでに登録されている陰田古墳群および陰田横穴群の末番の続き番号を採用した。以下が、新たに確認した墳墓である。
陰田66号墳、陰田51号、52号、53号、54号、55号横穴

6．本発掘調査の実施にあたっては、人骨取り上げの現地指導および人骨、動物遺体の鑑定を鳥取大学井上貴央先生、漆の分析を国立歴史民俗博物館永嶋正春先生、土器の胎土分析を奈良教育大学三辻利一先生、木製品の樹種鑑定を鳥取大学古川郁夫先生、石製品の石材鑑定を鳥取大学赤木三郎先生、鉄滓の分析を和鋼博物館佐藤豊先生、鉄生産関連遺物及び遺構の現地調査指導を房総風土記の丘穴澤義功先生にお願いし、御手を煩わせた。また、井上貴央先生、永嶋正春先生、三辻利一先生には本報告書に御寄稿いただいた。明記して、各先生方に深甚の謝意を表します。

7．本発掘調査の実施にあたっては、プラント・オパール分析及び植物珪酸体分析を（株）古環境研究所、鉄滓の分析を日立金属株式会社冶金研究所、（財）和鋼博物館、漆器の保存処理を（株）吉田生物研究所、地下レーダー探査を応用地質株式会社、調査地内の測量および基準杭の設定をシンワ技研コンサルタント株式会社、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を写測エンジニアリング株式会社にそれぞれ委託して実施した。

8．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されており、出土遺物は将来的に鳥取県教育委員会に移管する予定である。

9．出土した木製品および鉄製品の保存処理については、鳥取県埋蔵文化財センターにおいて実施した。

10．本報告書の作成は、調査員の協議に基づいて執筆、編集し、執筆担当者は目次に記載した。本報告書に掲載した実測図、写真図版は、西部埋蔵文化財陰田調査事務所で作成した。遺物の実測は、塚田文子、畑さおり、岡田千秋が担当し、遺物の写真撮影は、山川茂樹が担当した。

11．発掘調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からのご指導、ご助言、ご支援をいただいた。明記して、深謝いたします。（敬称略、順不同）

井上貴央　永嶋正春　三辻利一　古川郁夫　赤木三郎　佐藤　豊　内田貴志　穴澤義功　坂本敬司　村上恭通　梅野将之　松本　哲　矢中仁司　亀田修一　伊野近富　小林雅之　小原貴樹　井上　淳　杉谷愛象　下高瑞哉　西尾克巳　角田徳幸　岡田善治　山口　剛　内田律雄　門脇豊文　灘脇俊彦　高橋浩樹　田中一夫　足立良彦　青田光生　藤原彰子　前住和夫　山内紀嗣　井上武士　平井　勝　米子市教育委員会　米子市教育文化事業団　口陰田自治会　鳥取県立皆生養護学校　広島県埋蔵文化財センター　古代吉備文化財センター

凡　例

1．本報告書における方位はすべて真北を示し、レベルは海抜高である。X＝、Y＝の数値は、国土座標第Ⅴ系の座標値である。

2．本報告書において採用した遺構の略号は、次のとおりである。

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＳ：テラス状遺構　ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＤ：溝状遺構

ＳＫ：土坑、土壙墓　ＳＣ：道状遺構　ＳＥ：井戸　Ｐ：柱穴

3．遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、瓦質土器は断面網掛け、それ以外のものは断面白抜きで表した。また木製品の断面の年輪は、模式的な表示である。

4．本文中、挿図中および写真図版中の遺物番号は一致する。

5．遺物番号は、本報告書中を通じて通し番号である。

本　文　編　Ⅰ　目　次

第１章　陰田遺跡群発掘調査の経緯 …… 1

第１節　発掘調査に至る経緯（北浦）…… 1

第２節　調査体制（北浦）…… 1

第３節　遺跡の名称について（北浦）…… 2

第４節　発掘調査の経過と方法（北浦）…… 4

第２章　陰田遺跡群の位置と環境 …… 5

第１節　地理的環境（熊谷）…… 5

第２節　歴史的環境（熊谷・山川）…… 7

第３章　陰田第６遺跡の調査 …… 12

第１節　位置と環境（北浦）…… 12

第２節　調査の経過と方法（北浦）…… 12

第３節　遺構と遺物 …… 17

1　概要（北浦）…… 17

2　弥生時代後期の遺構（熊谷）…… 21

3　古墳時代前期の遺構（熊谷）…… 41

4　古墳・横穴（北浦）…… 41

5　古墳時代後期～奈良時代の遺構（熊谷・北浦）…… 59

6　時期不明の遺構（北浦）…… 181

7　中、近世の遺構（北浦）…… 189

8　遺構に伴わない遺物（北浦）…… 204

第４節　ＳＫ２１出土人骨について　鳥取大学　井上貴央 …… 206

第４章　陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区の調査 …… 208

第１節　位置と環境（北浦）…… 208

第２節　調査の経過と方法（北浦）…… 208

第３節　遺構と遺物 …… 208

1　概要　（北浦）……208
2　竪穴住居跡　（山田・北浦）……217
3　テラス状遺構　（山田・北浦）……219
4　土坑　（山田・北浦）……224
5　集石遺構　（山田・北浦）……224
6　溝状遺構　（北浦）……225
7　ピット群　（北浦）……225
8　遺構に伴わない遺物　（北浦）……231

本文編 II 目次

第5章　陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区の調査……1
第1節　位置と環境（北浦）　（北浦）……1
第2節　調査の経過と方法（北浦）　（北浦）……1
第3節　遺構と遺物……1
1　概要（北浦）　（北浦）……1
2　テラス状遺構　（北浦）……2
3　掘立柱建物跡　（北浦）……13
4　溝状遺構　（北浦）……15
5　土坑　（北浦）……15
6　土壙墓　（北浦）……15
7　遺構に伴わない遺物　（北浦）……16
第6章　陰田ヒチリザコ遺跡の調査……20
第1節　位置と環境　（北浦）……20
第2節　調査の経過と方法　（北浦）……20
第3節　遺構と遺物……20
1　概要　（北浦）……20
2　テラス状遺構　（北浦）……23
3　土坑　（北浦）……48
4　遺構に伴わない遺物　（北浦）……50
第7章　陰田小犬田遺跡の調査……59
第1節　位置と環境　（熊谷）……59
第2節　調査の経過と方法……59
1　自然科学的手法による調査　（熊谷）……59
2　陰田小犬田遺跡におけるプラント・オパール分析　（古環境研究所）……59
3　陰田小犬田遺跡における植物珪酸体分析　（古環境研究所）……66
4　調査の経過と方法　（熊谷）……71
第3節　遺構と遺物……73
1　概要　（熊谷）……73
2　土坑　（熊谷）……74
3　河川跡　（熊谷）……75

4　水田跡　（熊谷）……77
5　遺物の出土状況　（熊谷）……84
6　出土遺物　（北浦）……91
第4節　陰田小犬田遺跡の古環境について　（熊谷）……123
第5節　陰田小犬田遺跡出土土器付着漆の分析について　国立歴史民俗博物館　永嶋正春……125
第8章　陰田荒神谷遺跡の調査……127
第1節　位置と環境　（山川）……127
第2節　調査の経過と方法　（山川）……127
第3節　遺構と遺物……137
1　概要　（山川）……137
2　古墳時代後期～奈良時代のテラス状遺構　（山川）……137
3　中世以降のテラス状遺構　（山川）……164
4　土坑　（山川）……164
5　土器溜り　（山川）……169
6　ピット群　（山川）……170
7　井戸　（熊谷）……171
8　遺構に伴わない遺物　（北浦）……172
第9章　考察……191
第1節　陰田遺跡群出土須恵器の蛍光X線分析　奈良教育大学　三辻利一……191
I　陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡、陰田小犬田遺跡、陰田第6遺跡出土須恵器の蛍光X線分析……191
II　陰田荒神谷遺跡出土須恵器の蛍光X線分析……196
第2節　陰田遺跡群における鉄器生産の様相　（山川）……200
第3節　陰田遺跡群出土鉄滓の金属学的研究　和鋼博物館……203
I　陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区及び陰田ヒチリザコ遺跡出土鉄滓の調査……203
II　陰田小犬田遺跡出土鉄滓の調査……206
III　陰田荒神谷遺跡出土鉄滓の調査……210
第4節　陰田遺跡群の性格　（北浦）……220
おわりに……224
抄録……225

第１章　陰田遺跡群発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る経緯

本発掘調査は、建設省倉吉工事事務所により進められている一般国道９号米子道路工事事業を原因とし、米子市陰田町地内において建設予定地内に存在する埋蔵文化財の記録保存を目的としたものである。同事業における埋蔵文化財の保護と事業計画との調整については、昭和46年以来関係機関間で協議され、以後分布調査、発掘調査が実施されてきた。陰田町地内においては、昭和55年から昭和59年にかけて米子市教育委員会により発掘調査が実施され、50基にのぼる横穴墓群を中心とした一大遺跡群が発見された。今回の発掘調査地は、これらの西側に隣接する地帯で、その西端は島根県との県境である。

発掘調査地については、米子市教育委員会により遺跡の有無、範囲等を確認する事前の試掘調査が行われ、平成４年度には陰田久幸山遺跡（のち陰田マノカンヤマ遺跡、陰田ヒチリザコ遺跡に改称)、平成５年度には陰田久幸山遺跡、陰田小犬田遺跡、陰田荒神谷遺跡、平成６年度には陰田古墳群（のち陰田第６遺跡に変更）の存在が確認された。これを受けて、建設省倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、記録保存のための事前発掘調査を財団法人鳥取県教育文化財団に委託した。これにより、平成５年度から西部埋蔵文化財調査事務所が調査を担当することとなった。その後調査体制の変更によって、平成６年度は西部埋蔵文化財調査事務所陰田分室が、平成７年度は西部埋蔵文化財陰田調査事務所が調査を担当した。

第２節　調査体制

発掘調査は、下記の体制で行われた。

平成５年度調査体制

調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団　理事長　西尾邑次　副理事長兼常務理事　入江圭司　事務局長　若松良雄
財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター　所長　土井田憲治　次長　山根豊己
調査指導係　係長　田中弘道　文化財主事　久保譲二朗　長岡充展　山枡雅美
庶務係　庶務係長　山根夏男　主任事務職員　木下利雄　事務　嶋村八重子

調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　西部埋蔵文化財調査事務所　所長　松尾忠一
調査員　北浦弘人　原田雅弘　西川徹　山田真一　山川茂樹　仲田信一　中山寧人　志田睦
調査補助員　樋口友枝　山崎裕子　整理員　杉田千津子　測量補助　左藤博
主な整理作業員　二宮さおり　塚田文子　岡田千秋　稲垣美智恵　小川哲　遠藤和子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター

平成６年度調査体制

調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団　理事長　西尾邑次　副理事長兼常務理事　入江圭司　事務局長　若松良雄
財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター　所長　大和谷朝　次長　八木谷昇
調査指導係　係長　田中弘道　文化財主事　久保譲二朗　長岡充展　山枡雅美

庶務係　庶務係長　梅山昭美　主任事務職員　木下利雄　事務　嶋村八重子

調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　西部埋蔵文化財調査事務所　所長　松尾忠一
西部埋蔵文化財調査事務所陰田分室　分室主任　芦達賢二
主任調査員　北浦弘人　調査員　熊谷朗　山川茂樹
整理員　塚田文子　測量補助　左藤博
主な整理作業員　二宮さおり　西山八重子　佐々木美代子　井上紀美子　尾崎美江子　森脇淳子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター

平成７年度調査体制

調査主体　財団法人鳥取県教育文化財団　理事長　田淵康允　常務理事　上田徹　事務局長　若松良雄
財団法人鳥取県教育文化財団　鳥取県埋蔵文化財センター　所長　宮谷正信　次長　八木谷昇
調査指導係　係長　田中弘道　文化財主事　久保譲二朗　長岡充展　山枡雅美
庶務係　庶務係長　梅山昭美　主任事務職員　木下利雄　事務　西尾朋子

調査担当　財団法人鳥取県教育文化財団　西部埋蔵文化財陰田調査事務所　所長　芦達賢二
主任調査員　北浦弘人　調査員　熊谷朗　山川茂樹
整理員　塚田文子　測量補助　左藤博
主な整理作業員　畑さおり　西山八重子　佐々木美代子　小原円　井上紀美子　古谷京子

調査指導　鳥取県教育委員会　鳥取県埋蔵文化財センター

下記の方々が発掘調査作業に従事した。

鷲見勘二　佐野康雄　角田輝彰　吉井秀昭　野口洋一　福富美代子　高田茂　柏尾博臣　松原園子　山中実
米原愛子　村脇義之　足立導昭　山田修子　仲田政子　桜田美智子　吉田繁　西川幸枝　嘉本真弓　井上淳
倉益秀江　吉田一子　中田文子　松本良子　船越典子　河村富士江　野口稔　大本富介　遠藤国男　三好睦
松波綾子　本田美雪　伊澤正治　篠村孝美　下村哲夫　大森佐登子　山崎博　三浦一枝　大塚和子　篠村稔
野坂貞子　船田裕子　亀山梶子　奥田道子　矢信敦子　大草シズエ　勝部恵　山村節子　松原艶子　森安堯
中曽麗子　下村清美　斉木由和　吾郷琴江　福本蓉子　青田さち子　松井操　青田光生　船岡幹子　加川都
石山忠重　高塚克人　高原善夫　安達広典　仲田将吾　鷲見シヅ子　長尾茂

発掘調査参加者

角浩司　河本史幸　米子市立就将小学校６年生（平成６年度）の皆さん

第３節　遺跡の名称について（第１、５図）

発掘調査に着手するにあたり、調査地に遺跡名を付ける必要が生じた。既成の遺跡名を有していたのは、第１図に示した調査区Ａの陰田荒神谷遺跡と調査区Ｂの陰田小犬田遺跡、調査区Ｆ、Ｇの陰田第６遺跡であった。各

調査区の遺跡名命名のいきさつは、次のとおりである。

・調査区Ａ－陰田荒神谷遺跡（いんだかじだんいせき）

陰田荒神谷遺跡として従来設定されていた範囲は、谷の入り口部分およびその付近の段状地形を呈する畑地部分であった。試掘調査の結果、丘陵の斜面部分や谷奥部でも遺物の出土をみたため、遺跡の範囲は拡大されることとなった。当初は遺跡名を「こうじんだに」と読んでいたが、地元では「かじだん」と呼んでおり、これに従うこととした。

・調査区Ｂ－陰田小犬田遺跡（いんだこいんだいせき）

従来は、第図に示した①の地点を指していたが、同じ谷筋の沖積地に形成された遺物散布地ということで、Ｂの範囲も陰田小犬田遺跡と称することにした。旧字名は、①の地点が小犬田堤ノ上、Ｂのあたりが小犬田堤ノ下、Ｂの下側が小犬田鋤先となっている。陰田荒神谷遺跡との境界は、区分をつけ難く、それぞれの調査範囲域の境界を便宜上の境界とした。

・調査区Ｃ－陰田ヒチリザコ遺跡（いんだひちりざこいせき）

調査区Ｃ、Ｄ、Ｅは既成の遺跡名のない地区で、当初は字名をもって便宜上陰田久幸山遺跡（いんだきゅうこうやまいせき）と仮称していた。しかし本来久幸山は第１図の⑤の地点の山であり、③の山は地元でマノカンヤマと呼ばれていることから、遺跡名として適切でないと判断した。調査区Ｃは、②の谷筋の丘陵斜面に連なる谷口部分にあたる。現況で遺構と思われる段状地形が、この谷筋沿いにみられ、調査区Ｃはこの谷に形成された遺跡と一体のものと推測された。②の谷は字名をヒチリザコと称し、もって遺跡名とした。

・調査区Ｄ－陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区（いんだまのかんやまいせきつつみのしもちく）

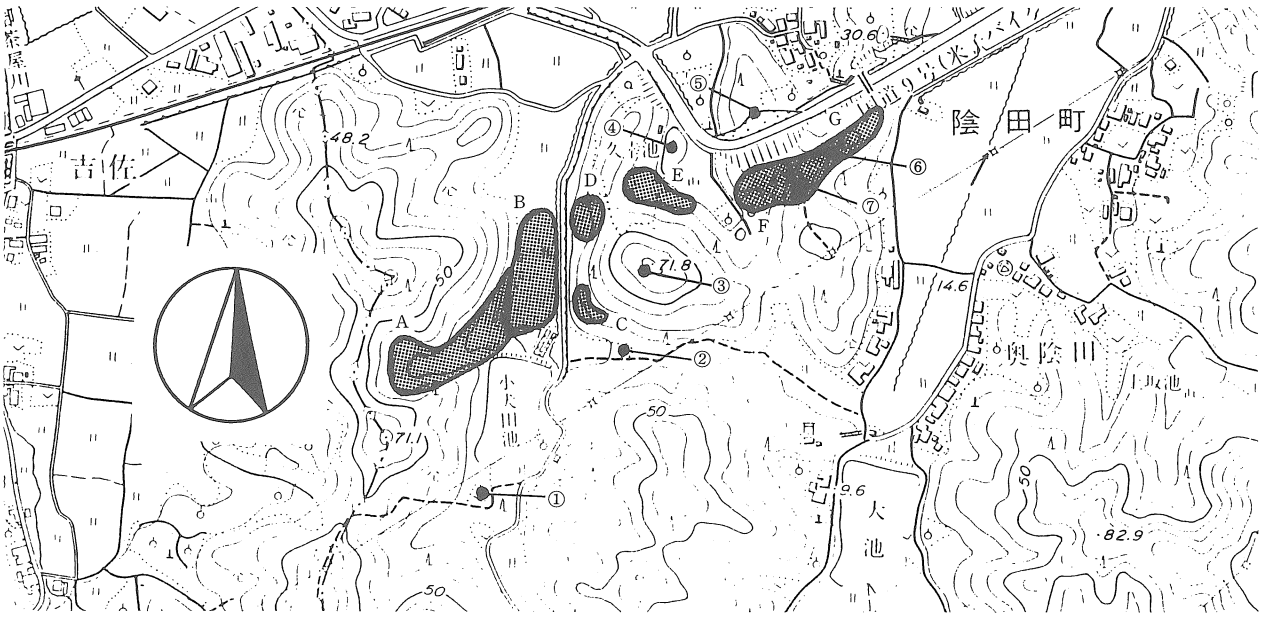
③のマノカンヤマをもって遺跡名とした。Ｅ区との区別のため、調査区が面する調査区Ｂの字名小犬田堤ノ下をもって地区名とした。

・調査区Ｅ－陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区（いんだまのかんやまいせききゅうこういけちく）

③のマノカンヤマをもって遺跡名とした。Ｄ区との区別のため、調査区が面する④の久幸池をもって地区名とした。

・調査区Ｆ、Ｇ－陰田第６遺跡（いんだだいろくいせき）

従来より陰田第６遺跡と呼ばれており、⑥の尾根鞍部を境に、西側を久幸地区、東側を天坂地区と分けられていた。天坂地区は陰田古墳群の範囲に重なっており、うち古墳以外の墳墓、集落跡を指す。今回の調査にあたっ



第１図　調査区の位置（Ｓ＝1：10,000）

ては、当初調査区Ｆを陰田第６遺跡、調査区Ｇを陰田古墳群と称した。両調査区の区分は、調査年度の違いによるもので、⑦の陰田60号墳を境とする。調査の結果、調査区Ｇにおいては古墳が遺跡の主体をなさず、調査区Ｆと一連の遺跡と考えられたので、調査区Ｆ、Ｇともに陰田第６遺跡と総称することとした。⑥による地区の区分については、両地区にまたがる遺構が存在するため、今回の調査においては採用しなかった。本調査において新たに確認された古墳、横穴については、今までのところ陰田古墳群が65号墳まで、陰田横穴群が50号横穴まで登録されていることから、それぞれの末番の続き番号を採用し、陰田66号墳、陰田51号～55号横穴とした。なお、本報告書中においては、便宜上調査区ＦをＡ区、ＧをＢ区と称することとする。

第４節　発掘調査の経過と方法

発掘調査は、平成５年度から平成７年度にかけての３ヶ年度にわたった。

平成５年度は、陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡を調査した。調査時はそれぞれ陰田久幸山遺跡のＡ区、Ｂ区、Ｃ区と称し、遺跡名の略称は、それぞれＩＮＫＡ、ＩＮＫＢ、ＩＮＫＣであった。谷筋が異なるため、発掘調査作業員を二班に分け、陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区と陰田ヒチリザコ遺跡を並行して調査し、陰田ヒチリザコ遺跡での作業が終了後、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区の調査に移行した。４月より着手し、11月に現場作業を終了、平成６年３月まで調査成果の纏めを行った。

平成６年度は、陰田小犬田遺跡と陰田第６遺跡Ａ区を調査した。遺跡名の略称は、それぞれＫＩＮ、ＩＮ６とした。陰田小犬田遺跡においては、排土処理の問題から、調査地を二分し、調査時の排土を片側に置き、その後排土を押し戻してもう片側を調査することとした。このため、陰田小犬田遺跡の調査半ばで陰田第６遺跡に調査を移し、これが終了後再び陰田小犬田遺跡に戻るという行程となった。４月より着手し、12月に現場作業を終了、平成７年３月まで調査成果の纏めを行った。

平成７年度は、陰田荒神谷遺跡と陰田第６遺跡Ｂ区を調査した。遺跡名の略称は、それぞれＫＪＤ、ＩＮ６（95）とした。谷筋が異なるため、発掘調査作業員を二班に分け、両遺跡を並行して調査した。４月より着手し、11月に現場作業を終了、平成８年３月まで調査報告書の作成を行った。

遺跡ごとの詳細については、各章にそれぞれ記述した。

第２章　陰田遺跡群の位置と環境

第１節　地理的環境

鳥取県

鳥取県は本州の西側、中国地方北東部に位置しており、北は日本海に臨み、東は兵庫県、西は島根県、南は岡山・広島の両県と接している。また、中国地方は中国山地を境にして山陰と山陽とに区分されており、鳥取県は島根県とともに山陰地方として位置づけられている。

鳥取県は古代行政区分のもと、東に因幡国、西に伯耆国の２国に分かれていた。（伯耆国は大山を境にして地理的に東伯耆と西伯耆とに区分される。）因幡国は現在の鳥取市、気高郡、八頭郡、岩美郡にあたり、岩美郡国府町に国府が置かれていた。伯耆国は現在の倉吉市、東伯郡、米子市、境港市、西伯郡、日野郡にあたり、東伯耆の倉吉市に国府が置かれていた。現在鳥取県は鳥取市、倉吉市、米子市、境港市をはじめとする４市32町４村から構成されており、鳥取市を中心とした東部、倉吉市を中心とした中部、米子市・境港市を中心とした西部の３地域に区分される。県人口は約62万人であり、そのうち４市の人口は約36万人に達しており、都市人口が県人口に占める割合は約60％弱にのぼる。

鳥取県は、東西に約126km、南北に約62kmの広がりを持っており、総面積は3,506.96㎢、そのうち86.3％を山地が占めている。東部・中部・西部のそれぞれに、千代川、天神川、日野川という代表的な河川が流れており、それぞれの下流に鳥取平野、倉吉・羽合・北条平野、米子平野と呼ばれる平野部が形成されている。また鳥取県は、東に鳥取砂丘、西に大山という観光地を抱えており、毎年多くの観光客が訪れている。平成４年の米子自動車道全線開通に伴い、その数も増加傾向にある。県では現在その豊富な自然環境をもとに、全県公園化構想を推進・着手している。

米子市

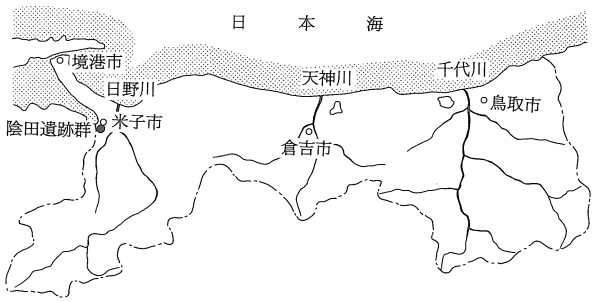
米子市は総面積99.46㎢、人口約13万人を有する鳥取県西部地方の中核都市であり、古くから「山陰の商都」と称されてきた商業都市である。古代行政区分においては、西伯耆の会見郡・汗入郡に属する地域である。

市の北部には、日野川からの流出土砂による砂州・弓浜半島が南北にのびており、この半島によって、市の北西には汽水湖・中海が形成されている。山陰地方の人口約140万人（鳥取県の人口約62万人・島根県の人口約78万人）の30％以上がこの中海圏域に集中しており、山陰の中枢地域としての役割をなしている。

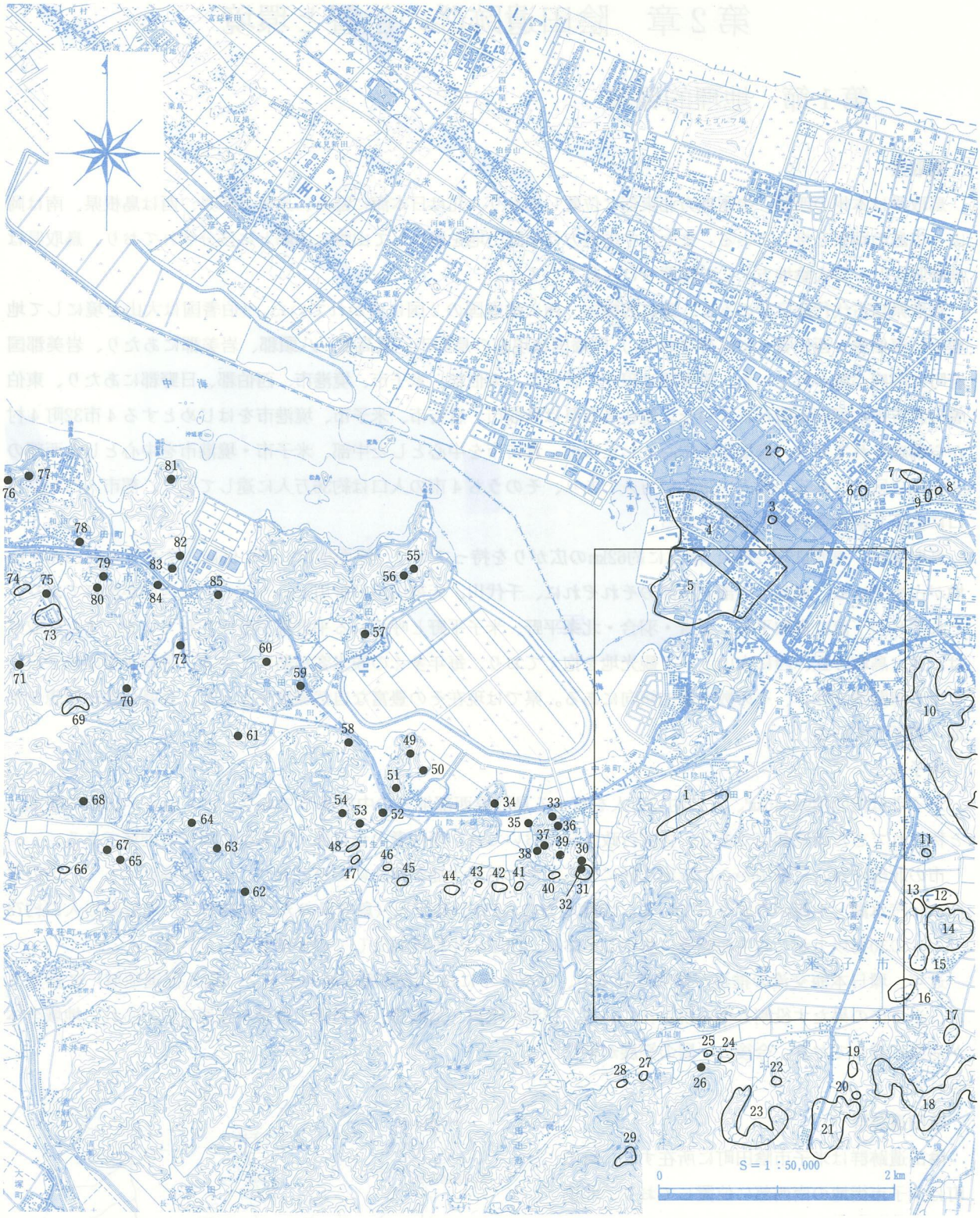
近年、環日本海交流の推進が提唱される中、平成７年には中海臨海地域がＦＡＺ（輸入促進地域）に指定され、米子市の果たす役割も重要視されている。空港・港湾・道路等、交通網の整備が急速に進められ、地域全体が活気に満ちており、今後の一層の発展が期待される。

陰田遺跡群

陰田遺跡群は米子市陰田町に所在する。陰田町は米子市街地の南西部に位置しており、北側は中海と近接し、三方を標高70～160ｍの山稜が取り囲む。農業を生活基盤とする世帯が多く、低地の沖積地を利用して花木栽培が広く行われている。また、丘陵部を利用した果樹栽培も盛んである。



第２図　遺跡群の位置



第３図　遺跡群周辺遺跡分布図

遺跡群の西端は島根県との県境であり、山１つ隔てて島根県安来市と隣接している。現在の県境は、古代の行政区分においてもそのまま旧出雲国と旧伯耆国の国境にあたり、当遺跡群は旧伯耆国会見郡に属する地域である。

陰田町は中海寄りの口陰田地区と谷奥部の奥陰田地区とに区分されており、古くから雲伯往来の要地としての役割を果たしてきた。また、遺跡群の谷奥から南方へ約1.5kmほど進んだ所で旧山陰道に至る。

中世の陰田町は、福田保のうちの「犬田村」と称されている。江戸時代の資料には、正保国絵図に「犬田村」、元禄郷帳に「陰田村」と、時期によって異なる地名の記述が見られ、このことから、17世紀後半には現在の「陰田」の呼称が用いられるようになったと考えられる。

またこの時期、伯耆誌では、会見郡のうち奥陰田、口陰田、西大谷、目角、大谷の5ヶ村を称して「犬田庄」と記している。しかし、元文2年村分帳、因伯郷村帳ではこの5ヶ村は「宗像庄」に属しており、「犬田庄」の庄名は見られず、記述の異なるところである。

第2節　歴史的環境

陰田地区では、近年、交通網の整備等で著しく開発が進んでおり、これに伴う遺跡の発掘調査が盛んに行われてきた。その結果、各時代で種々の性格を持つ遺跡の存在が確認されており、この地区の歴史を解明していく上で、貴重な資料を提示している。

米子市街地の南、陰田町の北東部には縄文時代早期末に始まる目久美遺跡が存在している。目久美遺跡は低湿地の遺跡であり、ここからは縄文時代の貯蔵穴群が確認されている。陰田地区においても、同様に陰田第1遺跡から縄文時代の貯蔵穴が検出されている。陰田地区の最古級の遺跡として、縄文時代前期初頭の遺物散布地である陰田第9遺跡が知られている。これに続く遺跡として縄文時代前期末～中期にかけての遺物が主体となって出土している陰田第7遺跡がある。

目久美遺跡からは弥生時代前期～後期の遺物も多く出土している。また、弥生時代の集落跡とともに水田跡が検出されており、初期農耕文化を今日に伝える貴重な遺跡となっている。遺跡群周辺の陰田第1遺跡・陰田第6遺跡からは、標高30～40mの丘陵尾根部および斜面部に弥生時代後期の住居跡が検出されており、この時期に集落が丘陵上にその生活拠点を移していたことを示している。

当遺跡群西側の丘陵尾根部には島根県安来市の国吉遺跡が隣接しており、そこから尾根を西に下った山麓にはカンボウ遺跡が位置している。このうち国吉遺跡からは遺物の出土はなく、小型の石蓋土壙墓1基が検出されている。カンボウ遺跡からは、谷底を中心に弥生時代後期の土器が出土している。この時期、集落が丘陵部に形成

1　陰田遺跡群　2　錦町第1遺跡　3　四日市町遺跡　4　米子城外郭　5　史跡米子城跡　6　勝田山横穴墓群　7　勝田遺跡　8　人斬り場遺跡　9　勝田土手遺跡　10　宗像古墳群　11　石井要害　12　奈喜良遺跡　13　奈喜良古墳群　14　橋本宝石城　15　橋本遺跡　16　吉谷遺跡　17　榎原第1遺跡　18　境古墳群　19　吉谷トコ遺跡　20　吉谷家ノ上遺跡　21　吉谷古墳群　22　古市横穴墓　23　古市古墳群　24　新山類ノ下遺跡　25　新山岡遺跡　26　新山23号墳　27　新山神遺跡　28　新山大谷原遺跡　29　新山要害　30　平横穴群　31　平ラ遺跡　32　穴神横穴　33　河原崎古墳群　34　八坂古墳　35　茶屋畑廃寺　36　八幡山遺跡　37　嵩横穴　38　屋敷廃寺　39　塚根山横穴群　40　平ラ遺跡　41　山ノ神遺跡　42　徳見津遺跡　43　目廻遺跡　44　五反田遺跡　45　陽徳遺跡　46　陽徳寺遺跡　47　門生黒谷Ⅰ遺跡　48　門生黒谷Ⅱ遺跡　49　和田古墳群　50　下口古墳群　51　山根古墳　52　大歳神社古墳　53　ウガフキ炉跡　54　高畑窯跡　55　岩崎宅横穴　56　赤崎山横穴　57　チョウ塚古墳　58　東谷古墳　59　佐伯互窯跡　60　剣御崎サン古墳　61　イナリ山古墳　62　山ノ神古墳　63　ミセン古墳　64　小田ヶ峰古墳　65　千人塚古墳　66　九重遺跡　67　ウバガ谷遺跡　68　丸山古墳　69　越峠遺跡　70　越峠古墳　71　大神谷古墳群　72　大納言山古墳　73　高広遺跡　74　佐久保遺跡　75　客サン古墳　76　十神山古墳　77　山ノ谷横穴群　78　宮ノ山古墳　79　長曽土壙墓群　80　刎畑遺跡　81　高留古墳　82　米垣山横穴　83　黒島横穴　84　大日サン古墳　85　小浜古墳

第3図　遺跡群周辺遺跡分布図番号対照表

されている割合が高く、カンボウ遺跡においても、果樹園によって削平された尾根部に集落が形成されていた可能性が強いと推測されている。

現在陰田地区では、60基を超える古墳が確認されており、そのうち陰田１号墳では、市内最大級の切石の横穴式石室が確認されている。また、陰田横穴群からは、古墳時代後期～終末にかけての50基にのぼる横穴が発見されており、後背部に墳丘を有する特色を持つ。米子市大垈山横穴群、同尾高１号横穴、西伯町マケン堀横穴群、安来市穴神横穴群においても同様の特色が見られ、この地方が九州地方の影響を受けていたことを窺わせる。（穴神横穴群からは彩色家型石棺内蔵の横穴墓が発見されている。）

奥陰田地区には、弥生時代後期～平安時代前期にかけての遺跡群である奥陰田遺跡群が形成されている。奥陰田遺跡群のうち、陰田隠れが谷遺跡・陰田広畑遺跡・陰田宮ノ谷遺跡等からは、丘陵斜面を加工して竪穴住居や掘立柱建物を構築したと考えられるテラス状の遺構が検出されている。また、陰田広畑遺跡からは、古墳時代後期～平安時代前期にかけての鉄の製錬滓が出土しているとともに、同時期の鍛冶炉が検出されており、製鉄・鍛冶に携わった製鉄関連遺跡であると考えられている。安来市高広遺跡からもテラス状遺構が多数検出されており、その周辺には古墳時代後期～終末の横穴墓も検出されている。また、近年、一般国道９号安来道路の工事に伴う発掘調査により、安来市吉佐町から門生町にかけて、古墳時代の製鉄関連遺跡の調査が行われている。

中世の陰田地区については、天文２年（1533）２月５日の尼子経久寄進状（日御碕神社文書）に「出雲国神門郡日御碕大明神江奉寄附、伯州相見郡福田保犬田村之内、米五十俵地利、十合枡、三斗六升入」と見えるのが初見である。犬田村は、尼子氏に変わって毛利氏・吉川氏が伯耆を制圧した後も、日御碕神社領として安堵され続ける。

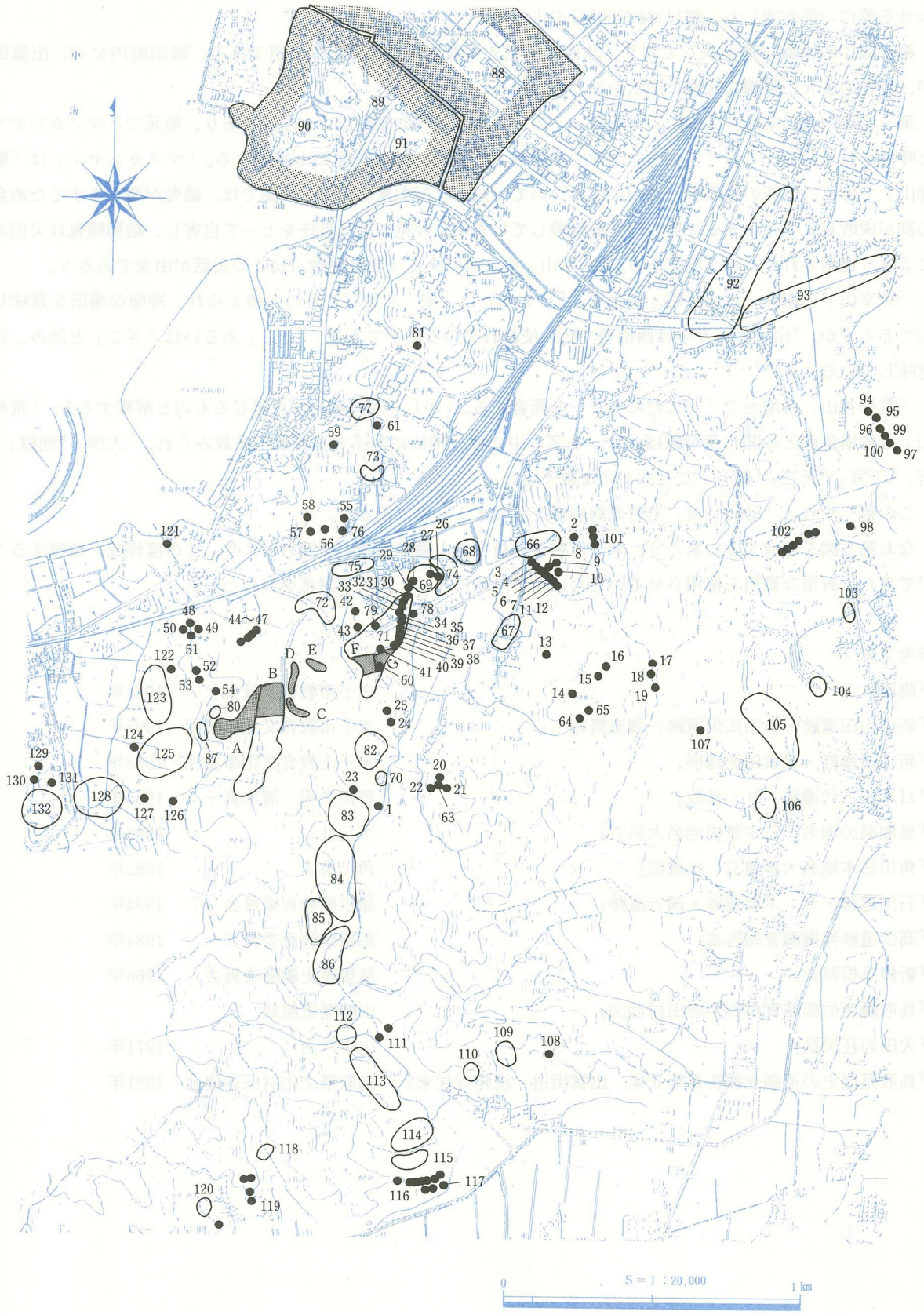
江戸時代初頭の犬田村は、中村忠一（一忠）の伯耆配置に伴い、中村氏の所領となる。中村氏改易後は、加藤貞泰が汗入と会見領有の米子城主となり、やがて、元和３年（1617）池田光政が因伯２国の領主となる。寛永９年（1632）の国替えによって池田光仲が鳥取藩主となると、光仲の主席家老・荒尾成利が米子城を預かることとなる。その後この地は明治に至るまで米子荒尾氏の給所であった。

江戸中期より陰田村と記されるようになった当地は、明治22年より成実村大字陰田となる。その後、大正15年

Ａ　陰田荒神谷遺跡　Ｂ　陰田小犬田遺跡　Ｃ　陰田ヒチリザコ遺跡　Ｄ　陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区　Ｅ　陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区　Ｆ　陰田第６遺跡Ａ区　Ｇ　陰田第６遺跡Ｂ区

１～65　陰田１～65号墳（48～51は別名国吉山古墳群）　66　陰田第１遺跡　67　陰田第２遺跡　68　陰田第３遺跡　69　陰田第４遺跡　70　陰田第５遺跡　71　陰田第６遺跡　72　陰田第７遺跡　73　陰田第８遺跡　74　陰田第９遺跡　75　口陰田遺跡　76　口陰田横穴　77　陰田サキノタニ遺跡　78　陰田横穴群Ａ支群　79　陰田横穴群Ｂ支群　80　陰田荒神谷山遺跡　81　総泉寺山横穴群　82　陰田宮ノ谷遺跡　83　陰田広畑遺跡　84　陰田隠れが谷遺跡　85　陰田ハタケ谷遺跡　86　陰田夜坂谷遺跡　87　国吉遺跡　88　米子城外郭　89　史跡米子城跡　90　米子城跡　91　飯山砦跡　92　目久美遺跡　93　池ノ内遺跡　94　美吉１号墳　95　美吉２号墳　96　宗像40号墳　97　宗像41号墳（別名高山古墳）　98　宗像42号墳（別名中山古墳・中山経塚）　99　宗像43号墳　100　宗像44号墳　101　大谷１～３号墳　102　奥谷１～６号墳　103　奥谷遺跡　104　石井遺跡　105　奥谷前新田遺跡　106　石井中村遺跡　107　石井１号墳　108　新山12号墳　109　新山字萱原所在遺跡　110　萱原遺跡　111　新山10・11号墳　112　下山遺跡　113　研石山遺跡　114　山田遺跡１区　115　山田遺跡２～４区　116　新山２～９・13・14号墳　117　新山１号横穴　118　新山江代谷遺跡　119　新山15～18号墳　120　新山兼廣遺跡　121　八幡山古墳　122　吉佐古墳　123　六ノ坪遺跡　124　神代塚古墳　125　カンボウ遺跡　126　神宝古墳群　127　きさ貝姫塚　128　石田遺跡　129　四方神古墳群　130　平横穴群　131　油田・平古墳群　132　平ラ遺跡

第４図　調査地周辺遺跡分布図番号対照表



第４図　調査地周辺遺跡分布図

より会見郡米子町大字陰田、昭和２年より米子市大字陰田となり、昭和10年より米子市陰田町となった。

第５図は、明治25年８月に作成された陰田町における小字別の地図の一部である。当時の陰田村には98の小字があり、その内、陰田遺跡群を中心とした周辺の39の小字を掲載した。図面は本来、断片の集成であり、繋ぎ合わせる際に一部改変した。縮尺は約3000分の１である。

第５図中の太線は道を表しており、北西隅に見える最も太い線は出雲街道である。陰田町内には、出雲街道が、現在のＪＲ山陰線の北側に旧状をとどめている。

第５図の中央に字名「久幸山」がある。この「久幸山」内に標高72.8mの山があり、地元で「マノカンヤマ」と呼称されている。この「マノカンヤマ」の呼称は、町内に残る民話にも登場する。「マノカンヤマ」は「魔の神山」であり、三匹の餓鬼がこの山に住みついていたことが由来である。民話では、餓鬼が悪さをするため会見の神が成敗しようと、誤って毘沙門天を射殺してしまう。会見の神は責任をとって自害し、結局餓鬼は犬田の神によって退治されたという話である。「久幸山」の北東にある「会見屋敷」はこの民話が由来であろう。

「久幸山」の南に「ヒチリ峪」がある。「ヒチリ」は「聖」に通じるものと考えられ、神聖な場所を意味したのであろうか。「峪」という字は西伯耆で広く使われている俗字であり、「さこ」あるいは「ざこ」と読み、谷を意味している。

「荒神谷山」は地元で「かじだんやま」と発音する。「かじ」が「鍛冶」に通じるものと解釈すると、「荒神谷山」と鉄器生産との関わりが偲ばれる。小字の中には、神仏に関係する言葉が多数みられ、「天神」「地獄」「上宮」「下宮」「天竺」「観音」など20ケ所を数える。

この他「汐入」、「砂口」は、当時の海岸線を示唆するものであろう。

なお第５図を作成するにあたり、米子市教育委員会と山陰歴史館のご協力により、この度作成、掲載することができた。貴重な資料を使用させていただいたご厚意に対し、記して謝意を表したい。

参考文献

『陰田』	米子市教育委員会	1984年
『新山山田遺跡・陰田広畑遺跡―調査概報―』	米子市教育文化事業団	1995年
『新山遺跡群・奥陰田遺跡群』	米子市教育文化事業団	1993年
『日本の古代遺跡　９　鳥取』	野田久男　清水真一	1983年
『鳥取県の地名　日本歴史地名大系32』	平凡社	1992年
『角川日本地名大辞典31　鳥取県』	角川書店	1982年
『石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡』	島根県教育委員会	1994年
『高広遺跡発掘調査報告書』	島根県教育委員会	1984年
『新修島根県史』	島根県史編纂委員会	1966年
『鳥取縣西伯郡成實村大字陰田村地図』	山陰歴史館蔵	
『犬田の荘民話』	山中六治	1971年
『鳥取県歴史の道調査報告書第６集　出雲街道・法勝寺往来』	鳥取県文化財保存協会	1991年

第 5 図　調査地周辺の字名（太線は道を示す）

第３章　陰田第６遺跡の調査

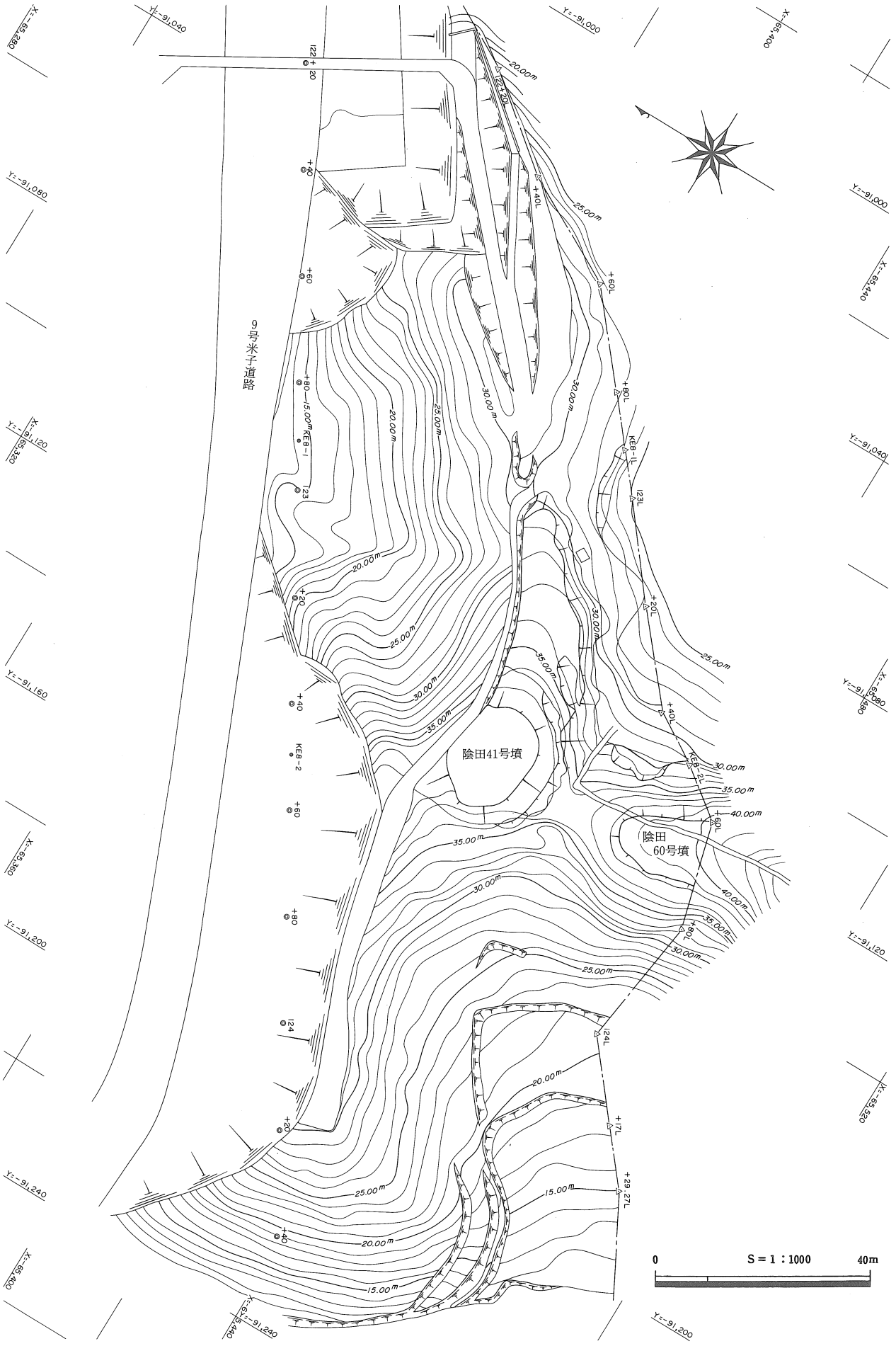
第１節　位置と環境（第４、６～８図）

調査地は、米子市陰田町字久幸山に所在し、久幸山（標高38.6m）と天神山（標高31.2m）が馬蹄形に連なる丘陵の南側斜面部に位置する。中央部に、陰田41号墳、60号墳の所在する尾根があり、これをもって西側をＡ区、60号墳の所在する尾根を含んで東側をＢ区とした。Ａ区は、久幸山の南側に位置し、久幸池のある谷から東方に派生した谷の斜面部にあたる。標高は現況で12～39m、検出面で11.5～38.5mである。現況の地目は果樹園で、段状に造成されている。Ｂ区は、天神山から南西に伸びる丘陵の南側斜面部に位置する。陰田横穴群の存在する斜面の延長部である。標高は、現況で25～38m、検出面で24.5～37.5mである。現況は雑木と針葉樹による山林であるが、以前は果樹園として利用されており、随所で地形の改変がみられた。

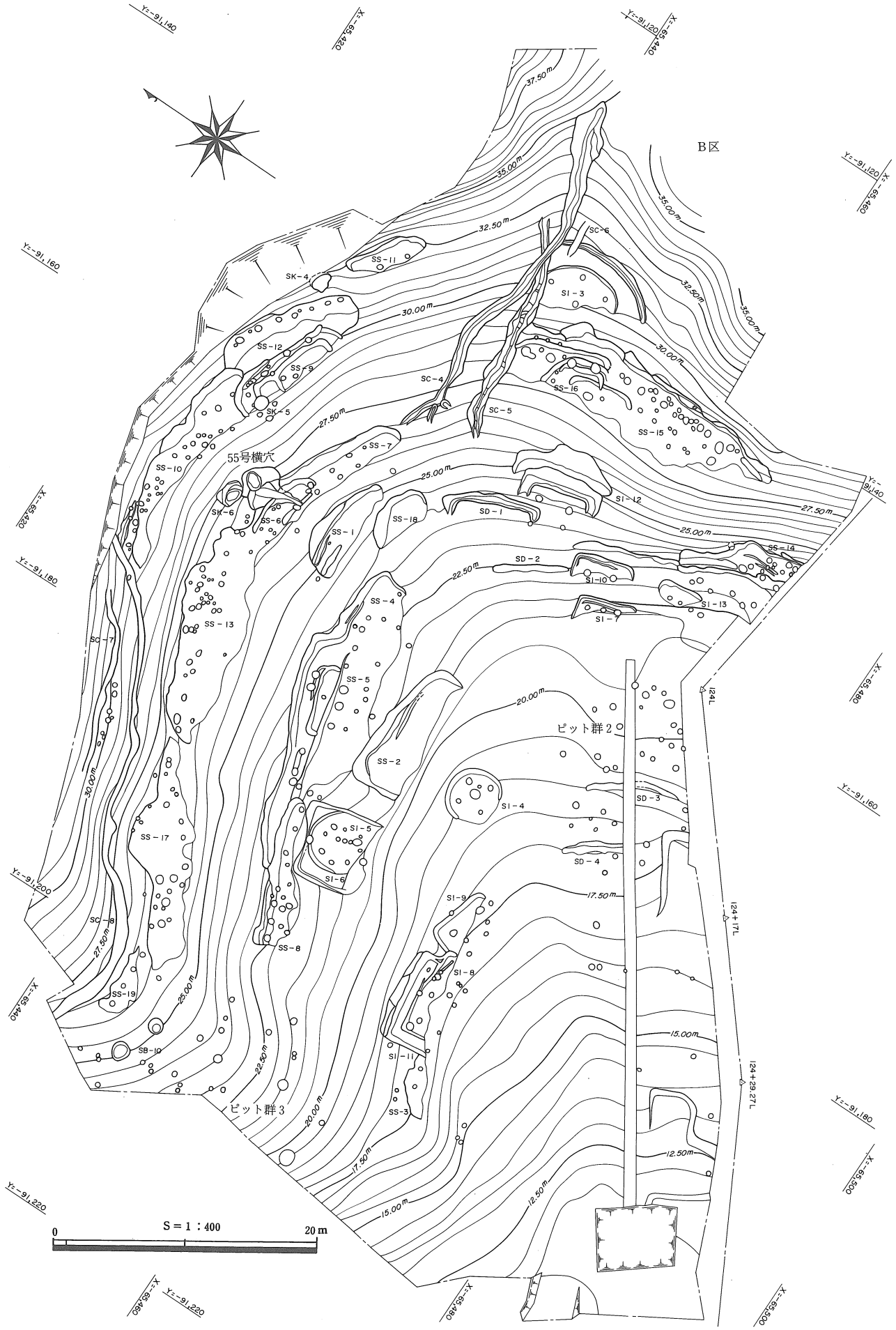
Ａ区北側の丘陵尾根部やＢ区以東に伸びる丘陵においては、米子市教育委員会によって発掘調査が行われており（註１）、弥生時代後期の竪穴住居跡17棟、古墳12基、横穴27基、未完成横穴３基、小横穴20基、古墓63基が検出されている。今回の調査区に隣接する箇所については、Ａ区の北側の斜面上部で、「段状住居跡」４棟が検出されている。調査者は、「斜面を直立気味に掘削して壁面を造り出す段状の遺構」で、「壁に沿って側溝を設け」、「柱痕が見うけられず」、「当初から段状それのみであった可能性も強い」と指摘している（註２）。今回の調査で、テラス状遺構としたものであろう。Ａ区とＢ区の中間の尾根では、陰田41、42号墳が調査されている。41号墳は、径30m、高さ２ｍを測る円墳で、組合わせ式箱形石棺や石槨木棺を中心主体とするものである。古墳時代中期に比定されている。陰田古墳群中最大の古墳である。42号墳は、径12～18mの円墳で、円筒埴輪棺が検出されている。陰田編年（註３）の３式、６世紀中葉に比定されている。なお、42号墳の北側下方には、前方後円墳の43号墳が位置しており、これは未調査の古墳である。Ｂ区の北東側に隣接する丘陵尾根上には、陰田38～40号墳が検出されている。当時は、各古墳北側墳丘の約２分の１の調査であり、38号墳、40号墳では主体部が確認されていない。39号墳では、13基の土壙墓が検出されている。横穴については、今回の調査地に最も近い位置に29号横穴があるが、これは未完成横穴である。Ａ区の西側、久幸池のある谷を挟んだ反対側には、陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区があり、古墳時代後期の竪穴住居跡１棟、奈良時代のテラス状遺構１基が検出されている（本書本文編Ⅰ第４章）。

第２節　調査の経過と方法（第６～８図）

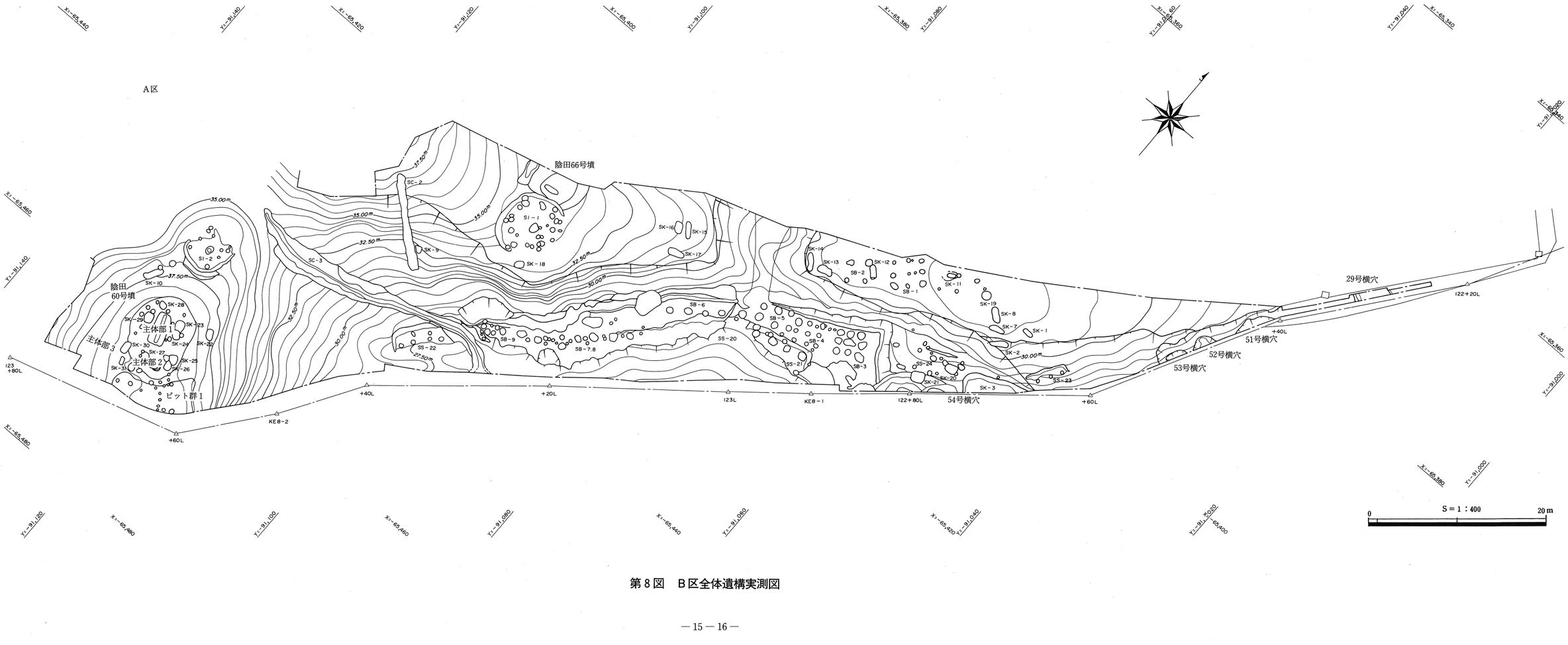
調査は、２ヶ年にわたる。Ａ区は平成６年４月に着手し、12月に現場作業を終了した。過去の調査結果や現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査面積は、4,592㎡であった。果樹園造成に伴い地形が改変されていたが、調査の結果、概ね原地形に沿った改変であったことが判明した。果樹園造成に伴わない段状地形も一部に確認できたが、調査地は概ね傾斜地であった。のちに検出したテラス状遺構の存在については、調査着手時には予測していなかった。存在を予測していたのは、近世墓である。かつて神道墓と思われる石塔がＳＳ－６付近に存在していたが、事前に石塔のみ他所へ改葬された。「文化四年（1807年）丁前修學道中山指間翁神魂卯七月二十二日」の墓碑銘が刻まれた、先端の尖った自然石の竿部で、基台も自然石を粗く加工したものであった（註４）。地下には埋葬施設が遺存するものと考えられ、この付近については重機を使用せず、表土から手掘りした。結果的には、この石塔に伴うべき埋葬施設の確認に至らなかった。基本的には、過去の調査結果から推察して、弥生時代後期の集落遺跡あるいは横穴群の存在を予測していた。遺構の予察のため、サブトレンチを数カ所に設定したところ、段状の落ち込みを確認し、古墳時代後期から奈良時代にかけての土器類が多量に出土したため、斜面部にテラス状遺構の存在を意識しての調査となった。調査前の地形を測量後、現地形を勘案してベ



第6図　調査前地形実測図



第7図　A区全体遺構実測図



第 8 図　B 区全体遺構実測図

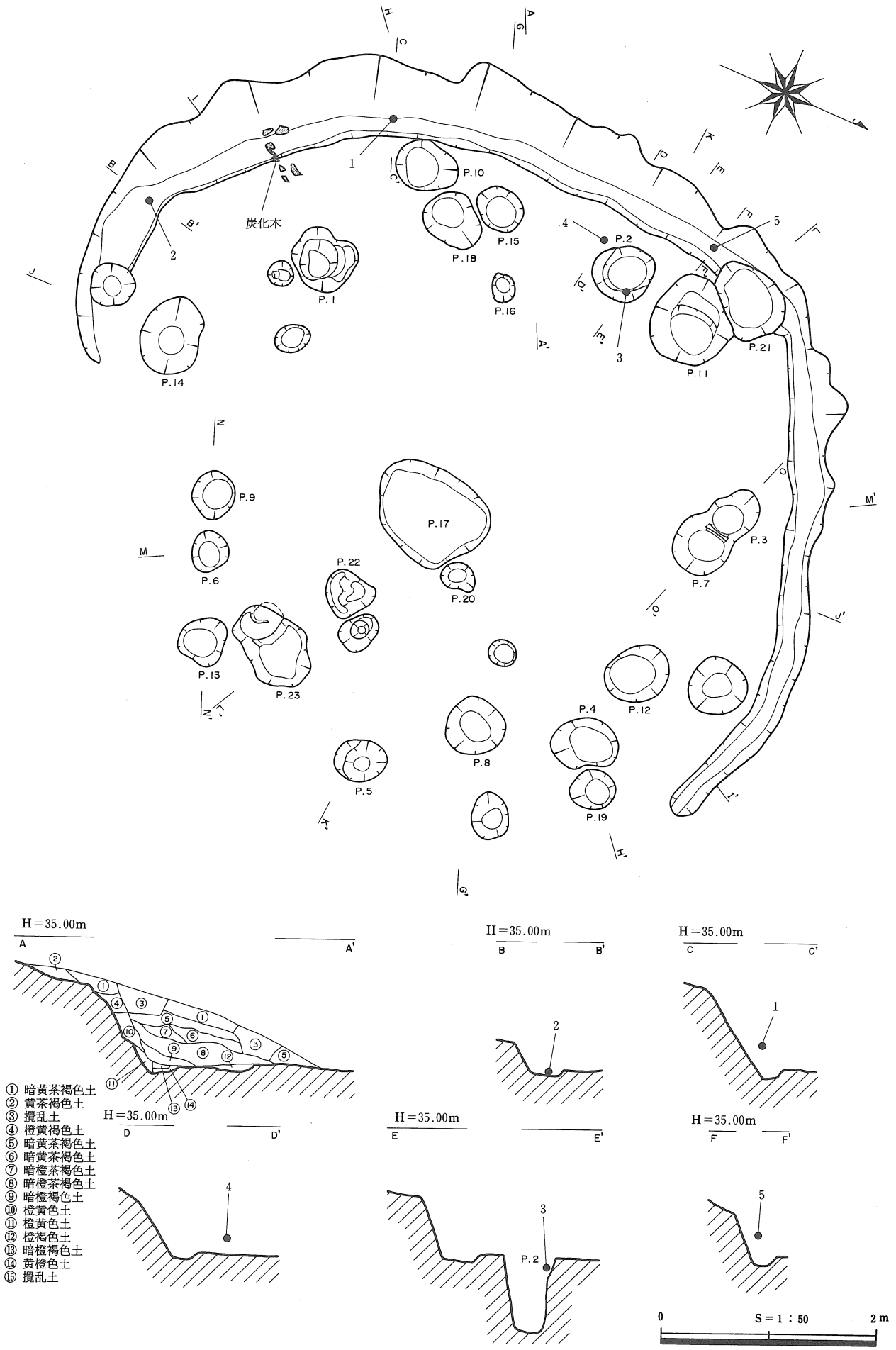
ルトを設定し、土層状況を観察しながら重機により表土を除去した。その結果、岩脈の走り方、風化の度合いが複雑で、箇所によりベースとすべき地盤が異なる状況が現れた。精査を重ねて行うことによって、炭化物を含む灰褐色系の土の半月形状の広がりを遺構の埋土と把握した（図版16）。この検出面を遺構検出面として、調査地全体に拡大して追求していった。遺構は、土層観察用ベルトを設定してサブトレンチを掘り下げ、遺構の床面と壁面を把握したうえで、全体的に掘り下げた。遺物については、必要に応じて出土状況の写真撮影、実測、取り上げを行った。実測は、測量用基準杭を実地に設定せず、トータルシスムを用いた。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査区全体については、調査後の地形を測量し、ラジコン・ヘリコプターによる全体空中写真撮影を行った。平成６年11月に現地説明会を実施し、遺跡と出土遺物を一般に公開し、多数の参加を得た。

Ｂ区は平成７年４月に着手、10月に現場作業を終了した。事前の米子市教育委員会による試掘調査の結果や過去の調査結果を勘案し、現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査面積は、2,500㎡であった。果樹園造成時に地形の改変がなされており、また果樹の施肥用の掘り込みが多数みられ、攪乱された状態が随所で検出された。調査着手の段階で予測されていたのは、丘陵尾根部では、弥生時代後期の集落、前節で触れた陰田38～40号墳の未調査部分と陰田60号墳、南側斜面部では古墳時代後期～奈良時代のテラス状遺構であった。陰田38～40号墳については、相当する箇所の表土直下で岩質の地山が現れ、墳丘を示す盛り土や掘り込みも確認されなかった。結果的には、副次的な主体部と思われる土壙墓を検出したが、中心的な主体部は確認できなかった。これら３基の古墳については、削平され消滅した可能性がある。丘陵尾根部の最東端には、狭長な調査対象域があり、ここに60㎝幅の調査区を設定したところ、中央部付近で段状の落ち込みを確認したため、さらに調査区幅を30㎝拡張して追求した。結果的にこの遺構は、過去に調査されている未完成横穴である陰田29号横穴の未調査部分にあたると判断された（第41図・写真図版11）。このあたりから西側にかけての斜面部には、過去の調査で横穴は検出されておらず、横穴群の終結が予測されていた。しかし、今回の調査で陰田54号横穴（第44図・写真図版12）の後背墳丘が確認されたため、横穴群の新たな支群が調査区南側斜面に展開することが予測された。さらなる精査の結果、調査区東南側、29号横穴と54号横穴の中間地点に、陰田51～53号横穴を確認した（第43図・写真図版11）。ただし、51号横穴は羨門部上方の地山加工部分のみの検出であり、また52、53号横穴は調査区境界線に近接して羨門部が開口し、かつ閉塞石と思われる礫が調査区境界線下の法面に挿し挟まっていた。横穴への入り口部分が境界線上にあたるという状況について、対応を検討した結果、51～53号横穴付近が工事の掘削予定にないことを確認した上で、雨水の流入等横穴内部に影響を与えぬよう急遽埋め戻し、現状保存することとなった。表土除去は、現地形を勘案してベルトを設定し、土層状況を観察しながら重機により行った。全体に岩質が卓越しており、遺構検出に幸いした。遺物については、必要に応じて出土状況の写真撮影、実測、取り上げを行った。実測は、トータルシステムを援用しながら、調査地内に基準ラインを設定し、これをもとに10m画のグリッドをなす基準杭を設定し、使用した。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査区全体については、調査後の地形を測量し、ラジコン・ヘリコプターによる全体空中写真撮影を行った。平成７年９月に、一般に遺跡を公開した。

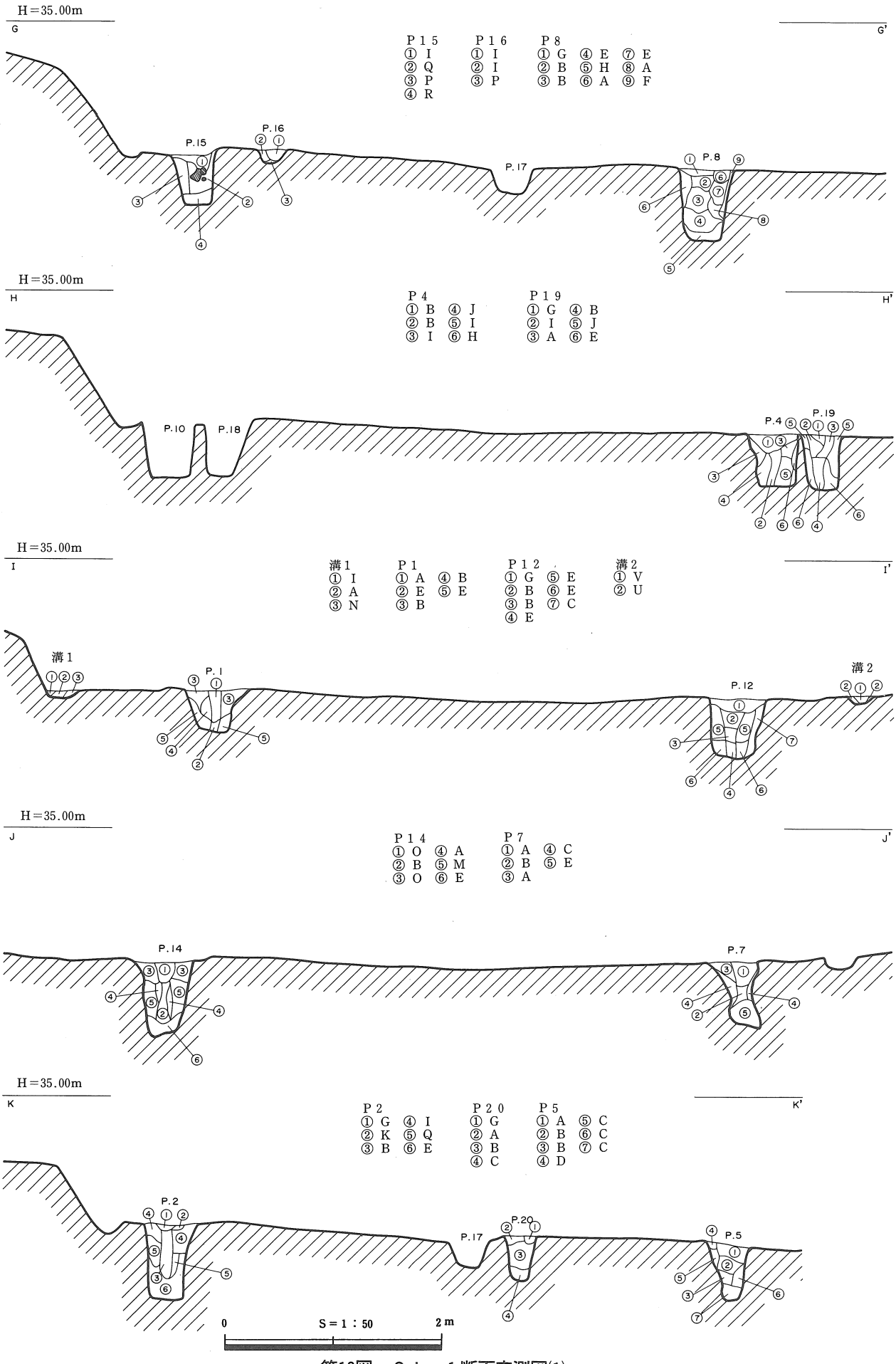
第３節　遺構と遺物

１　概要（第７、８図）

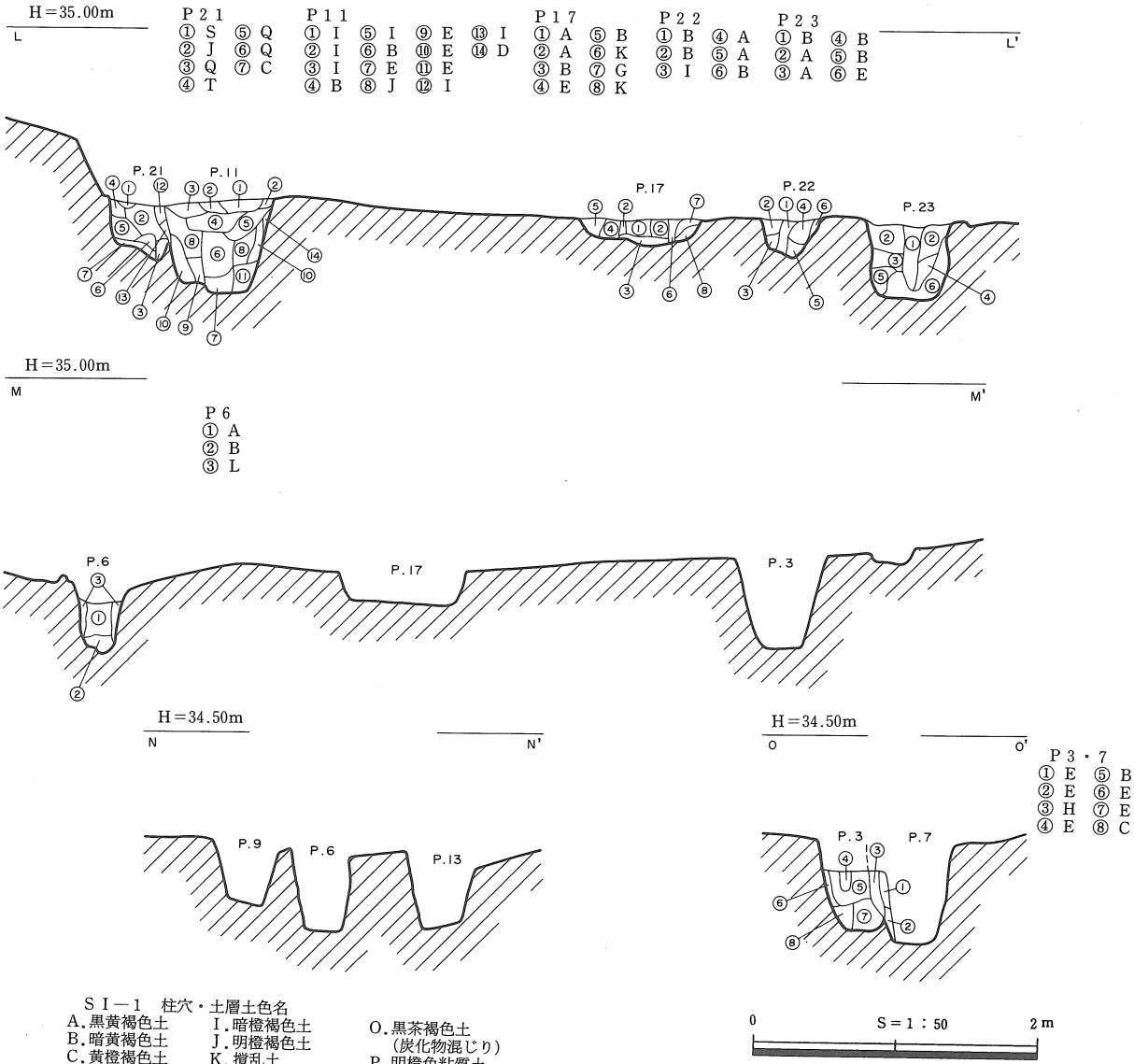
遺構は、竪穴住居跡13棟（ＳＩ－１～13）、テラス状遺構24基（ＳＳ－１～24）、溝状遺構４基（ＳＤ－１～４）、掘立柱建物跡３棟（ＳＢ－１、２、10）、古墳２基（陰田60、66号墳）、横穴６基（陰田29、51～55号横穴）、土坑５基（ＳＫ－１～10、19）、土壙墓20基（ＳＫ－11～18、20～31）、道状遺構８条（ＳＣ－１～８）、ピット群３ヶ所（ピット群１～３）を検出した。遺構の時期は、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期～奈良時代、近世である。遺跡は、弥生時代後期の集落に始まり、古墳時代前期に一部竪穴住居が残り、中期を隔て


炭化木
P.1
P.2
P.3
P.4
P.5
P.6
P.7
P.8
P.9
P.10
P.11
P.12
P.13
P.14
P.15
P.16
P.17
P.18
P.19
P.20
P.21
P.22
P.23
H＝35.00m
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
① 暗黄茶褐色土
② 黄茶褐色土
③ 攪乱土
④ 橙黄褐色土
⑤ 暗黄茶褐色土
⑥ 暗黄茶褐色土
⑦ 暗橙茶褐色土
⑧ 暗橙茶褐色土
⑨ 暗橙褐色土
⑩ 橙黄色土
⑪ 橙黄色土
⑫ 橙褐色土
⑬ 暗橙褐色土
⑭ 黄橙色土
⑮ 攪乱土
0
S＝1：50
2 m

第9図　ＳＩ－1実測図

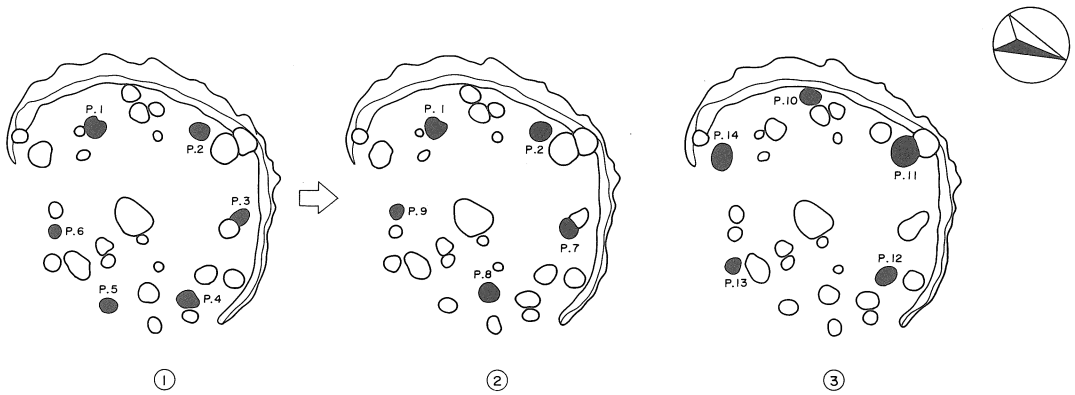


第10図　ＳＩ－１断面実測図(1)

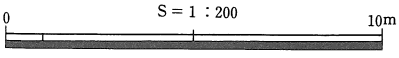


S I－1　柱穴・土層土色名

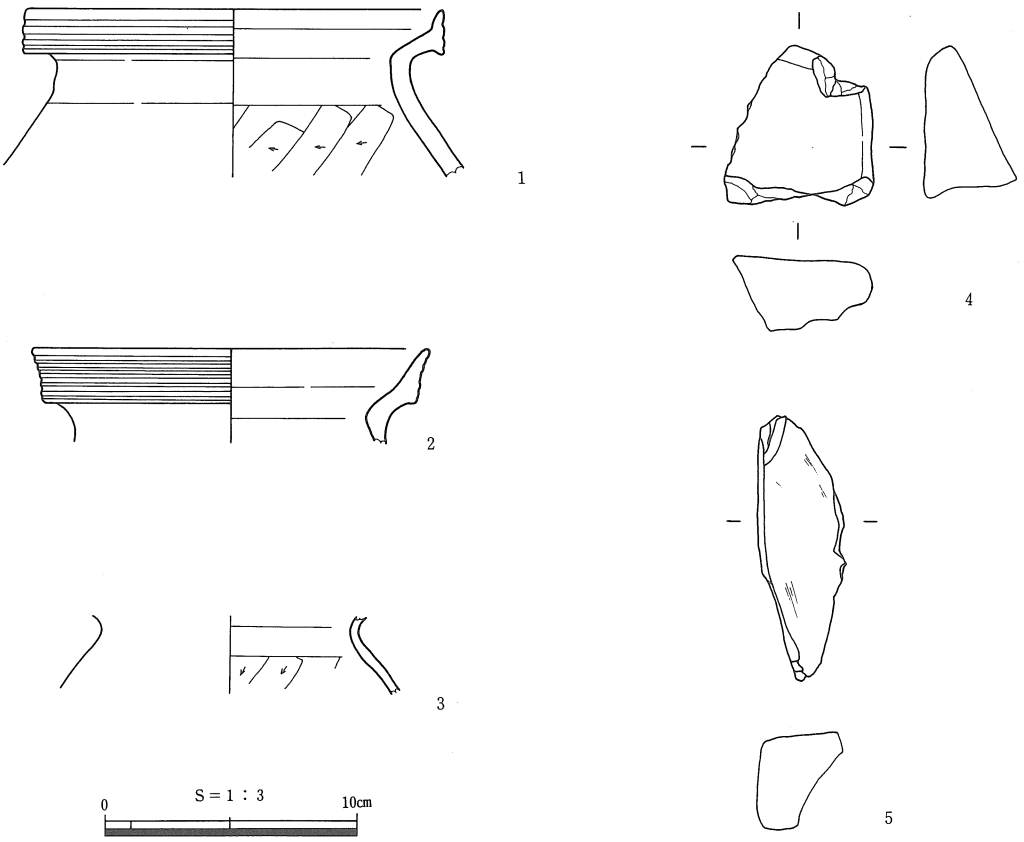
A. 黒黄褐色土
B. 暗黄褐色土
C. 黄橙褐色土
D. 橙色土
（地山土の崩落）
E. 黄褐色土
F. 橙茶褐色土
G. 灰黄褐色土
H. 橙色土
I. 暗橙褐色土
J. 明橙褐色土
K. 撹乱土
L. 黄茶褐色土
（黄白色礫混じり）
M. 暗橙茶褐色土
N. 暗黄茶褐色土
（黄白色礫混じり）
O. 黒茶褐色土
（炭化物混じり）
P. 明橙色粘質土
Q. 橙褐色土
R. 橙黄色土
S. 橙灰色土
T. 赤橙褐色土
U. 濃赤茶褐色土
V. 赤茶褐色土



住居の変遷



第11図　S I－1 断面実測図(2)



第12図　ＳＩ－１出土遺物実測図

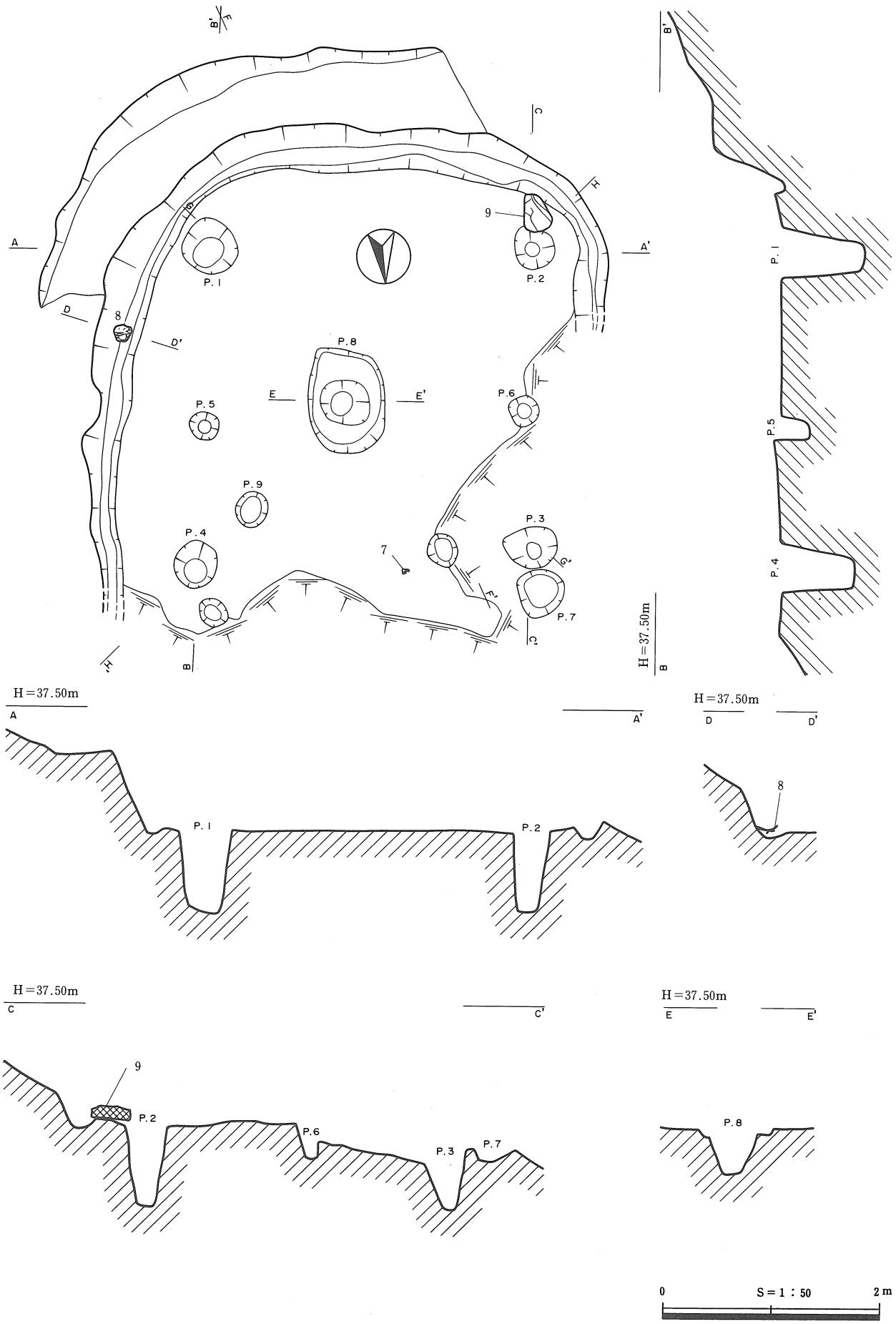
て古墳時代後期に再び集落を形成し、奈良時代まで継続する。古墳時代前期には丘陵頂部に古墳（陰田60号墳）が築かれ、隣接して中期には陰田41号墳が築かれている。後期には横穴が築かれ、同時に土壙墓も形成されている。その後道が残り、往来が現代まで続く。近世においては、古墓群が築かれている。

遺跡において、主要な位置を占める遺構は、古墳時代後期～奈良時代のテラス状遺構である。23基（ＳＳ－２～24）を検出した。斜面を断面Ｌ字状に削平し、平坦面を造成するもので、ピット列を伴う。単独で成立するものは少なく、他のテラス状遺構や竪穴住居と重複するケースが多い。よって遺跡内に、重複する遺構群を１単位となすエリア群が現出する状況となっている。

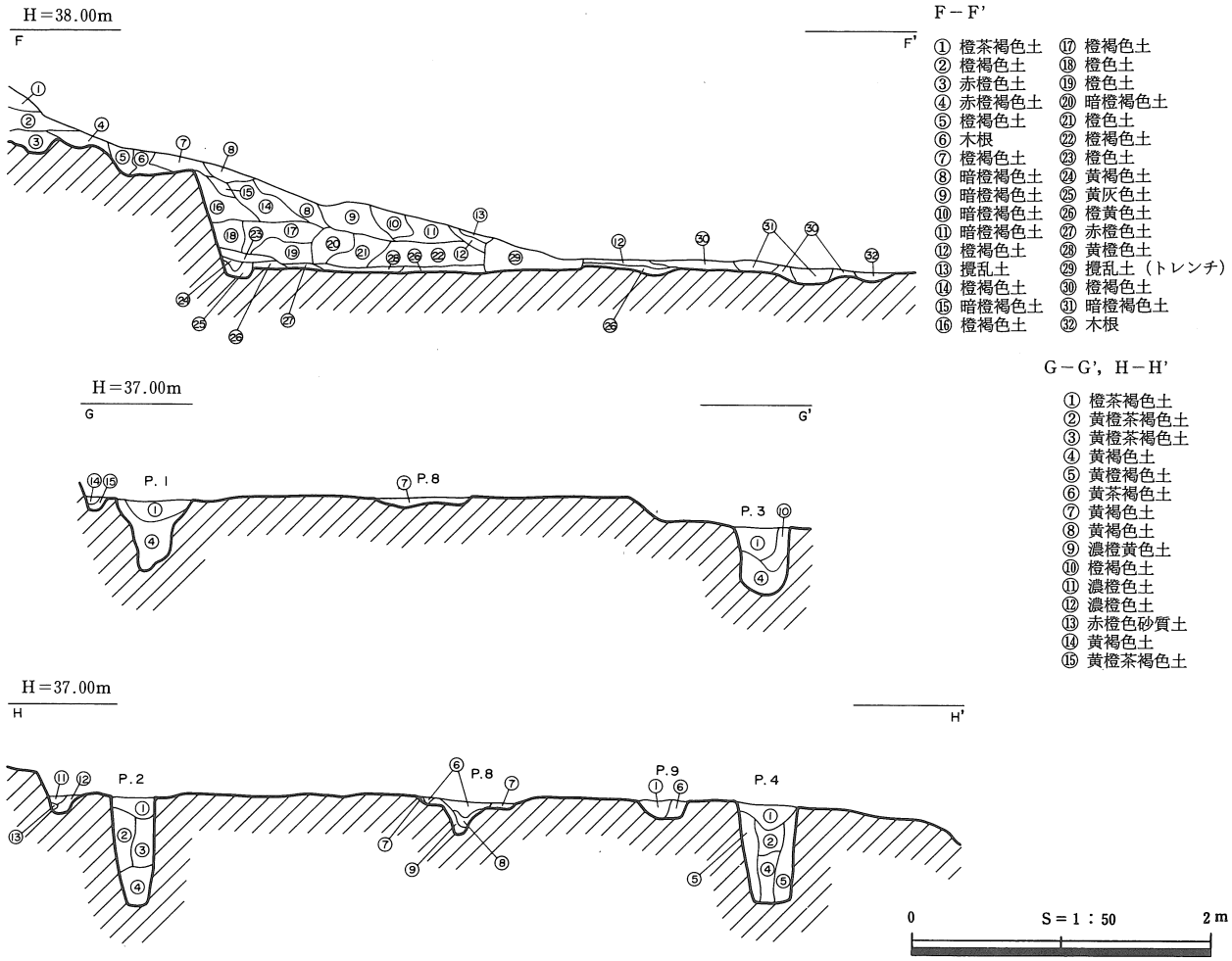
2　弥生時代後期の遺構（ＳＩ－１～５、ＳＳ－１、ＳＤ－１）

本遺跡からは、丘陵尾根部および斜面部に弥生時代後期の竪穴住居跡５棟（ＳＩ－１～５）、テラス状遺構１基（ＳＳ－１）、溝状遺構１条（ＳＤ－１）を検出した。竪穴住居跡は、斜面を直立気味に掘削して、壁面や床面を構築したものである。基本的に壁面裾部に側溝をもつ。円形、隅丸方形の平面プランを呈し、床面の低位側は流失しているものもある。流失部分には本来、斜面を加工した際に生じた廃土を利用して盛土し、床面を造成していたものと推測される。

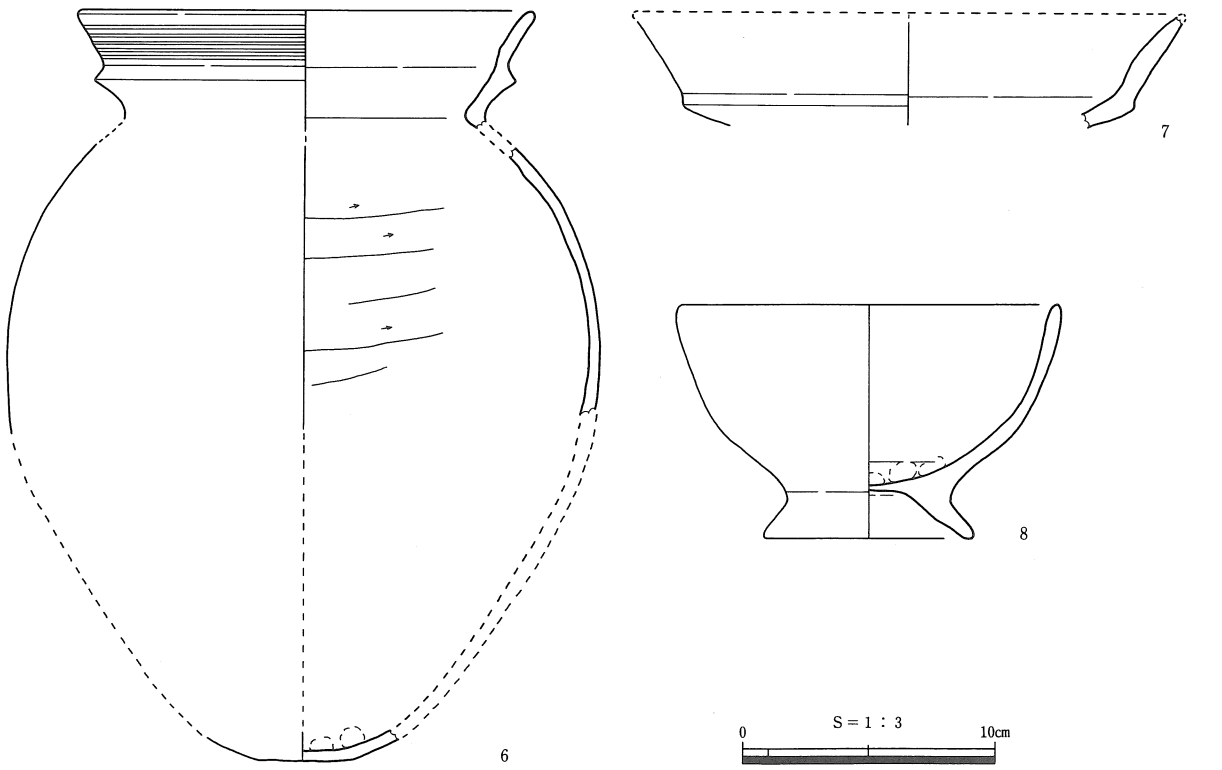
陰田第６遺跡では、昭和55～59年に行われた米子市教育委員会の調査によって、集落跡の存在が確認されている。当時の調査では、Ａ区上方の丘陵頂部周辺（久幸地区）から、円形、隅丸方形、多角形と多様な平面プランを呈する竪穴住居跡９棟を、Ｂ区東側に位置する丘陵尾根頂部周辺（天坂地区）には、円形、隅丸方形の平面プランを呈する竪穴住居跡８棟を検出している。これらの住居跡には、拡張建て替えの痕跡が窺えた。その概要については、Ｐ.27、28の表中に掲載する。今回の調査において検出した５棟の竪穴住居跡はこれらと大きな離隔もなく、時期的にも重なることから、同一集落と考えられる。



第13図　ＳＩ－２実測図

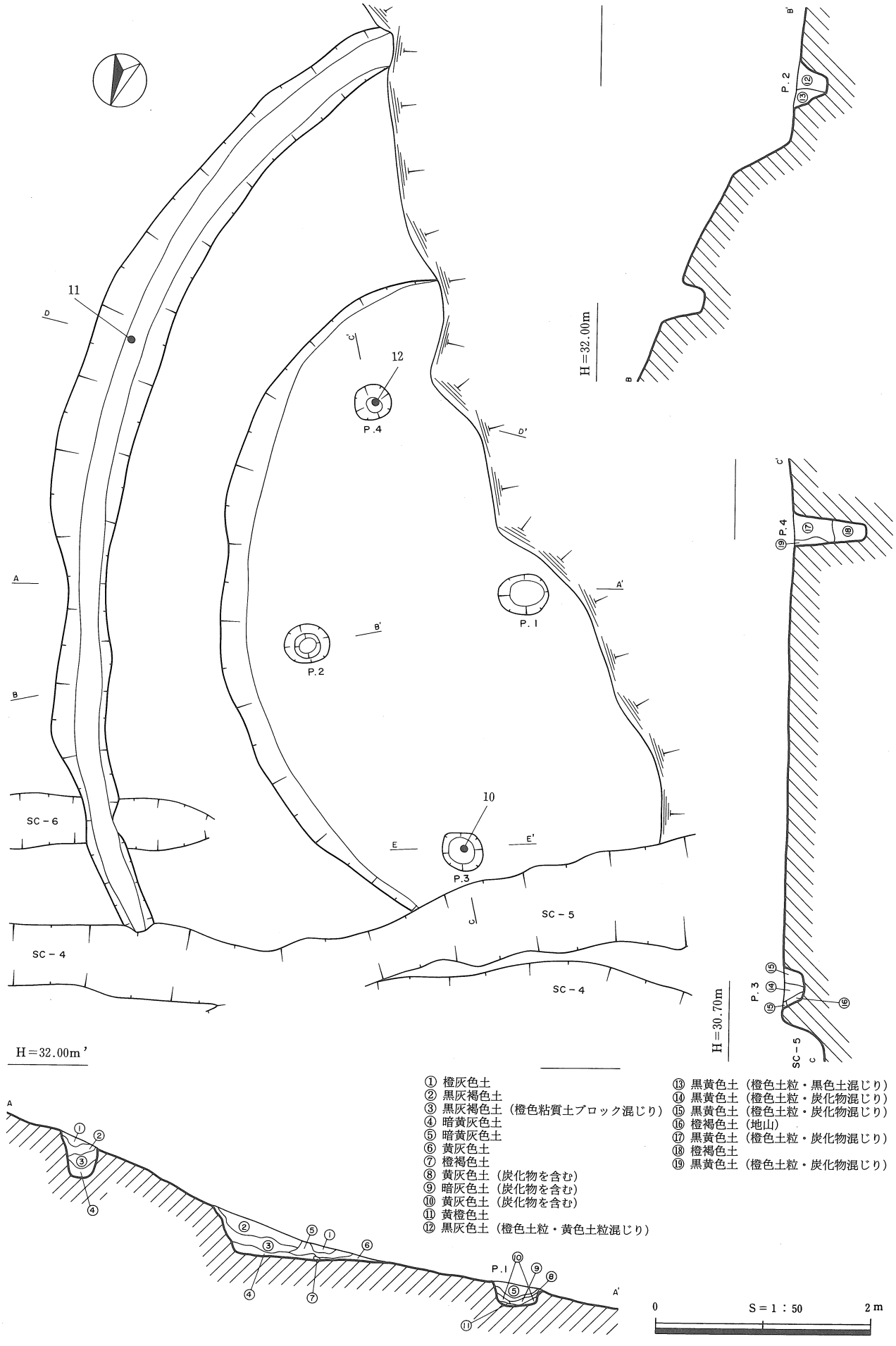


第14図　ＳＩ－２断面実測図



第15図　ＳＩ－２出土遺物実測図(1)

第16図　ＳＩ－２出土遺物実測図(2)


11
12
10
P.1
P.2
P.3
P.4
SC－6
SC－5
SC－4
H＝32.00m
H＝32.00m'
H＝30.70m
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
① 橙灰色土
② 黒灰褐色土
③ 黒灰褐色土（橙色粘質土ブロック混じり）
④ 暗黄灰色土
⑤ 暗黄灰色土
⑥ 黄灰色土
⑦ 橙褐色土
⑧ 黄灰色土（炭化物を含む）
⑨ 暗灰色土（炭化物を含む）
⑩ 黄灰色土（炭化物を含む）
⑪ 黄橙色土
⑫ 黒灰色土（橙色土粒・黄色土粒混じり）
⑬ 黒黄色土（橙色土粒・黒色土混じり）
⑭ 黒黄色土（橙色土粒・炭化物混じり）
⑮ 黒黄色土（橙色土粒・炭化物混じり）
⑯ 橙褐色土（地山）
⑰ 黒黄色土（橙色土粒・炭化物混じり）
⑱ 橙褐色土
⑲ 黒黄色土（橙色土粒・炭化物混じり）
0
S＝1：50
2 m

第17図　ＳＩ－３実測図

陰田第6遺跡の弥生時代後期の竪穴住居跡（『陰田』米子市教育委員会　1984年　による）

天坂地区

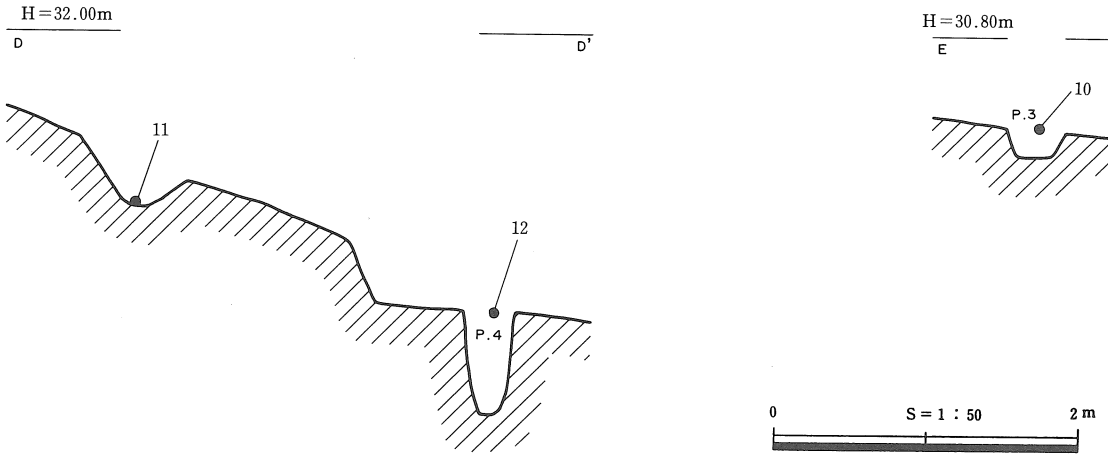
遺構名	規　模	平面プラン	主柱穴	出土遺物	備　考
ＳＩ01ａ	径5.1m	円形	5本	土器	
ＳＩ01ｂ	径6.65m	円形	8本		ＳＩ01ａの建替
ＳＩ02	径4.15m	円形？	4本		
ＳＩ03		隅丸方形？			
ＳＩ04	長軸4.2m 短軸3.45m	隅丸長方形	4本		
ＳＩ05				土器片	
ＳＩ06	1辺約3m	隅丸方形	4本		
ＳＩ07	径約5.2m	円形		土器片	焼失住居
ＳＩ08		隅丸方形？			

久幸地区

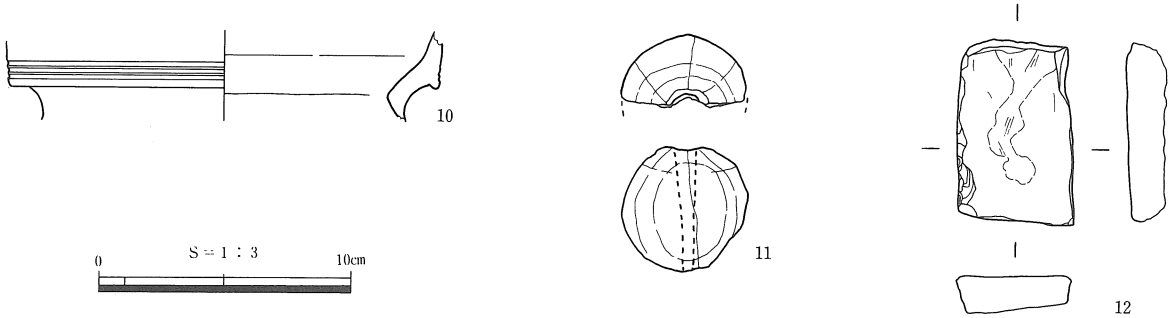
遺構名	規　模	平面プラン	主柱穴	出土遺物	備　考
ＳＩ01ａ	径約3.6m	隅丸六角形	6本		
ＳＩ01ｂ	径約4m	隅丸五角形	5本		ＳＩ01ａの建替
ＳＩ02ａ	最大長6.2m	隅丸方形？	4本		
ＳＩ02ｂ	1辺4.5m	隅丸五角形	5本	土器片・河原石	ＳＩ02ａの建替
ＳＩ03ａ	1辺4.8m	隅丸方形	4本		
ＳＩ03ｂ	1辺5.55m	隅丸方形	4本	土器	ＳＩ03ａの拡張建替
ＳＩ04ａ	径約3.5m	隅丸五角形	5本		

ＳＩ04ｂ	径約6.5m	円形？	5本		ＳＩ04ａの拡張建替
ＳＩ04ｃ	径約6.5m	円形？	6本	河原石、砥石	ＳＩ04ｂの建替
ＳＩ05ａ	径5.4m	円形	4本		
ＳＩ05ｂ	径約6.5m	円形	6本		ＳＩ05ａの拡張建替
ＳＩ05ｃ	径約３m	隅丸八角形	8本		ＳＩ05ｂの建替、焼失住居
ＳＩ06	１辺約5.7m	隅丸方形	4本	炭化材	焼失住居
ＳＩ07	１辺4.7m	隅丸方形	4本	弥生土器片	ＳＩ09の建替
ＳＩ08		隅丸方形？			ＳＩ07の建替
ＳＩ09		隅丸方形？	4本	弥生土器	

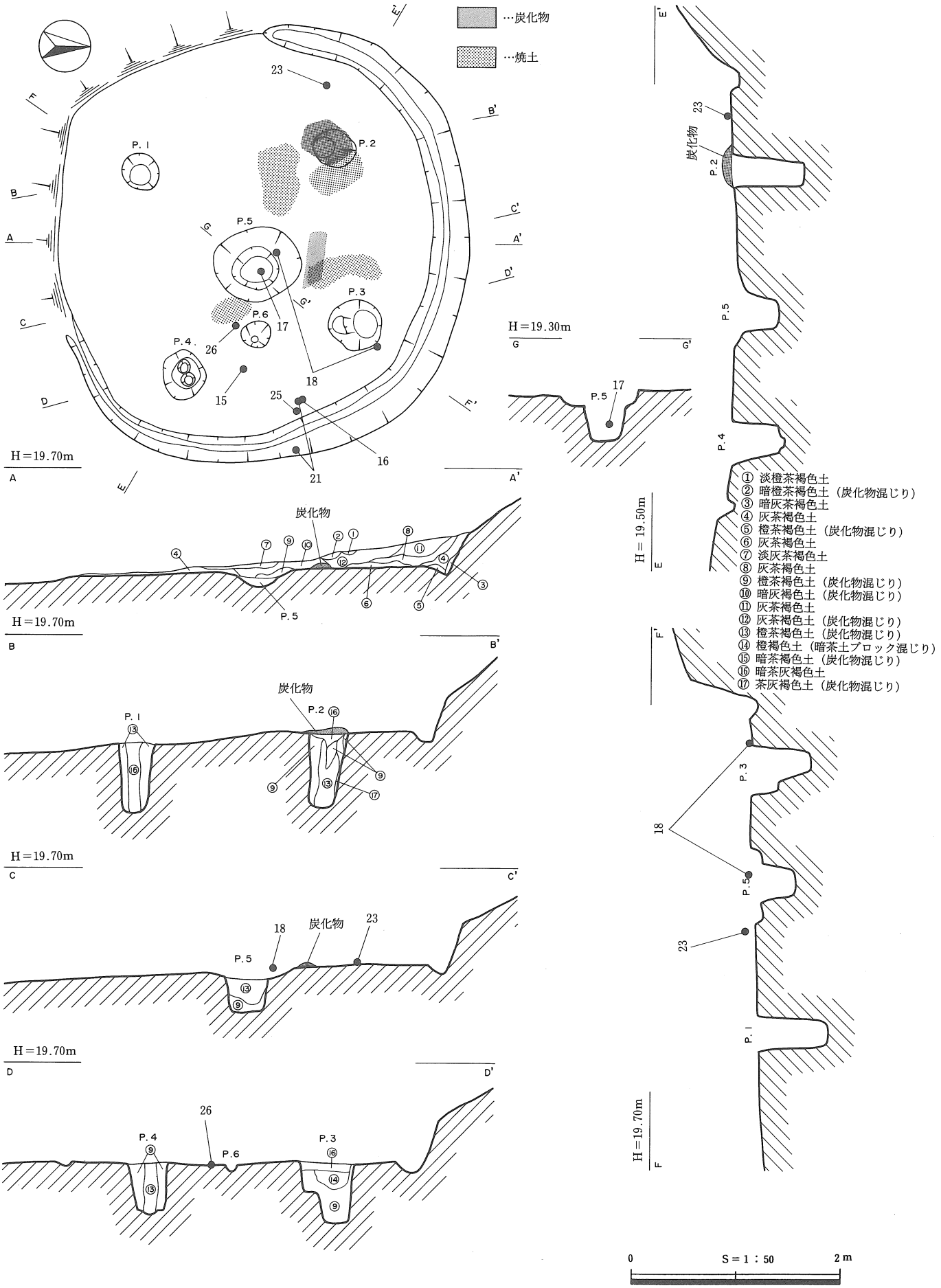
昭和59年に行われた米子市教育委員会による追加調査では、段状住居跡と推定された遺構（仮ＳＩ10～13）を確認しているが、本書ではテラス状遺構と呼称する。



第18図　ＳＩ－３断面実測図



第19図　ＳＩ－３出土遺物実測図


…炭化物
…焼土
P.1
P.2
P.3
P.4
P.5
P.6
23
17
26
18
15
25
16
21
H=19.70m
H=19.30m
H=19.50m
H=19.70m
炭化物
① 淡橙茶褐色土
② 暗橙茶褐色土（炭化物混じり）
③ 暗灰茶褐色土
④ 灰茶褐色土
⑤ 橙茶褐色土（炭化物混じり）
⑥ 灰茶褐色土
⑦ 淡灰茶褐色土
⑧ 灰茶褐色土
⑨ 橙茶褐色土（炭化物混じり）
⑩ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
⑪ 灰茶褐色土
⑫ 灰茶褐色土（炭化物混じり）
⑬ 橙茶褐色土（炭化物混じり）
⑭ 橙褐色土（暗茶土ブロック混じり）
⑮ 暗茶褐色土（炭化物混じり）
⑯ 暗茶灰褐色土
⑰ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
0
S=1：50
2m

第20図　ＳＩ－４実測図

第21図　ＳＩ－４出土遺物実測図

・ＳＩ－１（第９～12図・写真図版４、73）

ＳＩ－１は、標高約34mに位置し、Ｂ区の丘陵尾根部に構築された、直径約８ｍを測る円形の竪穴住居跡である。岩盤を加工して構築した住居のため壁面はいびつに歪んでおり、平面プランも不正な円形を呈している。南東側は、後世の果樹栽培によって削平されている。また北側は、近接して検出した陰田66号墳によって攪乱されている。残存壁高は、西壁で約90cmを測る。壁面沿いには、幅約20cm、深さ約10cmの側溝を検出した。

第22図　ＳＩ－５出土遺物実測図

床面には、合計29基のピットを検出した。土層断面からは住居の構築状況が把握できなかったため、検出したピットの配置状況から住居構造の考察を行い、第11図（住居の変遷）に示す①～③の柱穴の組み合わせを推定した。最低でも２回の建て替えが行われたものと推測される。①は、Ｐ．１～６を柱穴とした６本柱の住居跡であり、ピット間距離は2.5～３ｍを測る。②は、Ｐ．１、２、７、８、９を柱穴とする５本柱の住居跡であり、ピット間距離は2.5～3.3mを測る。③は、Ｐ．10～14を柱穴とする５本柱の住居跡であり、ピット間距離は３～４ｍを測る。それぞれのピットの規模は、Ｐ．１が深さ約40cmでやや浅いが、これを除くと、深さ50～70cmでほぼ同規模の柱穴と考えられる。①と②の構築順序は、Ｐ．３とＰ．７との切り合いの関係から、まず①が構築された後に、②への建て替えが行われたと判断できる。③は、①や②に絡むピットが検出されていないため、構築順序は判明しなかった。①、②、③いずれもＰ．17を中央ピットとして共有したものと推測される。建て替えの度に多少の移動があったと見られ、Ｐ．17はいびつな形を呈している。

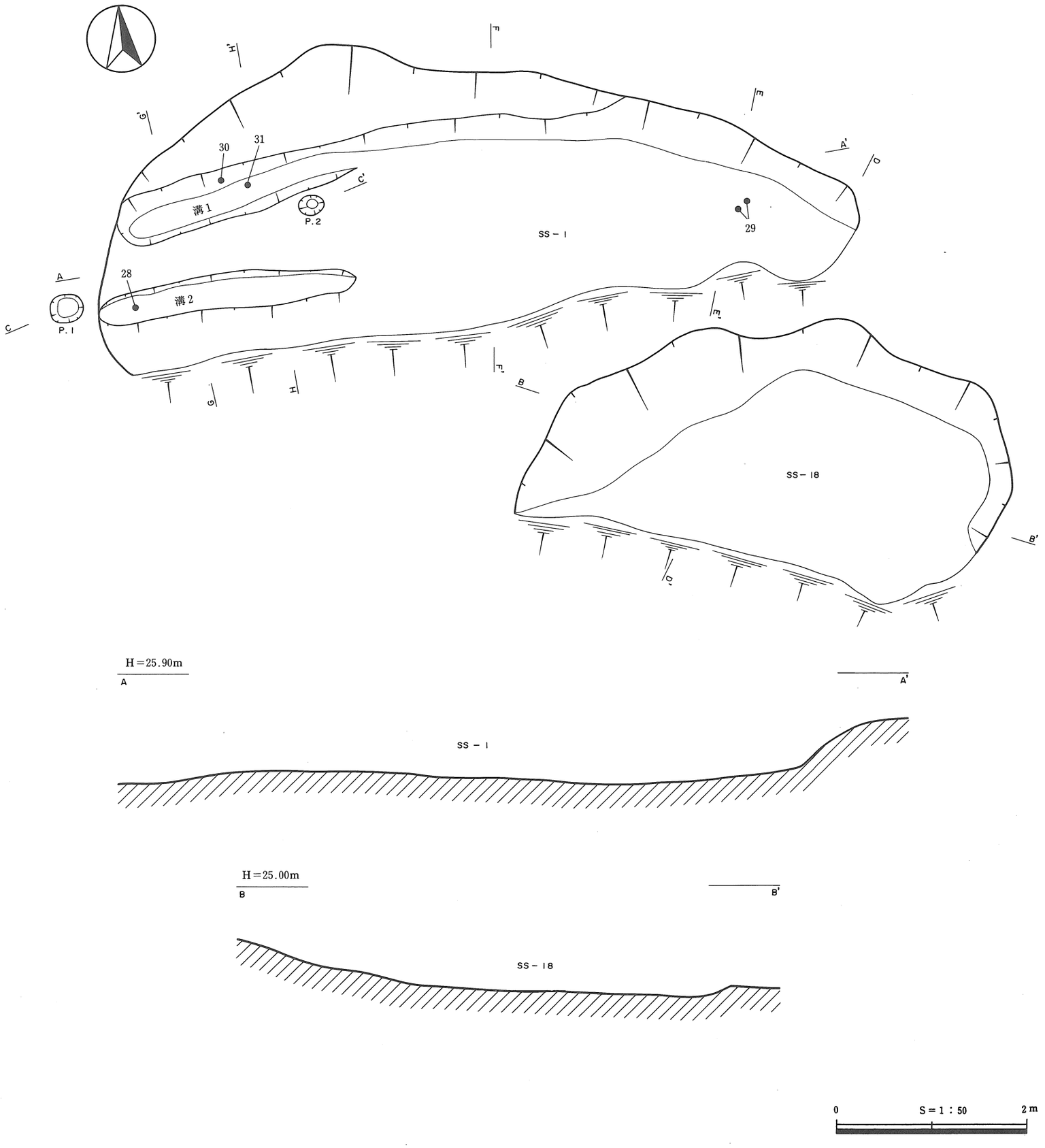
遺物は、弥生土器の壺や甕、砥石が出土した。１は壺の口縁部で、側溝上方に浮いた状態で検出した。直立した口縁部であり、外面には平行沈線を施している。２は甕の口縁部で、側溝直上に出土した。外反した口縁部であり、外面には平行沈線を施している。３は甕の頸部である。Ｐ．２の埋土中上方から出土した。１～３は弥生時代後期後半に比定される。４は砥石であって、Ｐ．２付近に浮いた状態で出土した。石材は細粒花崗岩である。５も砥石であり、Ｐ．21付近の側溝上方に浮いた状態で検出した。石材はアプライト（半花崗岩）である（註５）。そのほかに、Ｐ．17南東の側溝直上で炭化木が出土した。

・ＳＩ－２（第13・14図・写真図版４、５、73）

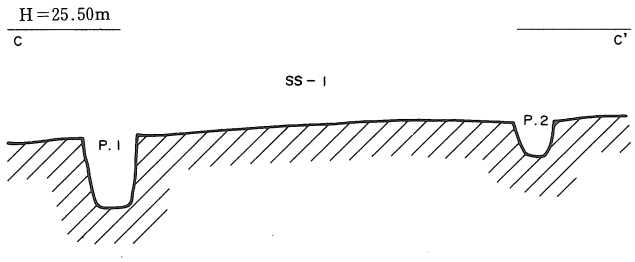
ＳＩ－２は、標高36.5mに位置し、Ａ区とＢ区を分ける丘陵尾根の鞍部に構築された、１辺が約４ｍを測る隅丸方形の竪穴住居跡である。確認の契機は、陰田60号墳検出のため設定したトレンチ内から弥生土器の甕（６）が出土したことによる。北側床面の一部が下方に流失している。残存壁高は、南壁で約60cmを測る。壁面沿いには幅約20cm、深さ約10cmの側溝を検出した。側溝の南側上方には、住居跡を囲むように、幅約50cm、残存壁高約30cmの段状の平坦面を検出した。竪穴住居に伴う施設と考える。Ｆ－Ｆ'ラインの土層断面からは、貼り床面が観察される。

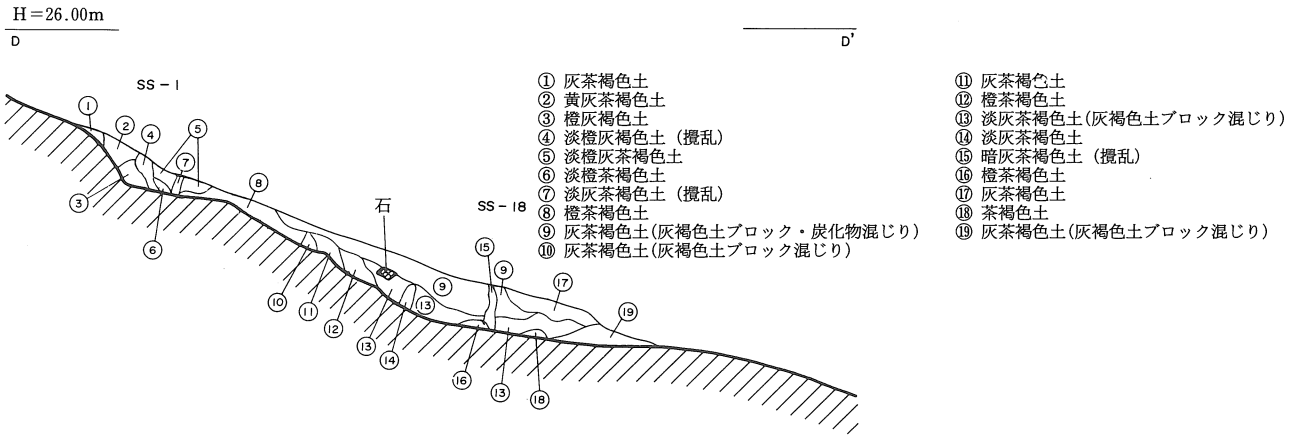
床面には、合計11基のピットを検出した。その配置状況から、ＳＩ－２はＰ．１～Ｐ．４を主柱穴とし、Ｐ．５、６を補助柱穴とする６本柱の住居跡と推測される。Ｐ．８は中央ピットと考えられる。Ｐ．１～４は、直径50～60cm、深さ約70cm、ピット間距離は約３ｍを測る。Ｐ．８は２段掘りとなっており、その上部は直径70cm～１ｍ、深さ約５cmを測り、下部は直径約40cm、深さ約35cmを測る。Ｐ．５、６はそれぞれＰ．１とＰ．４、Ｐ．２とＰ．３の中間点に位置しており、直径約20cm、深さ約30cmを測る。

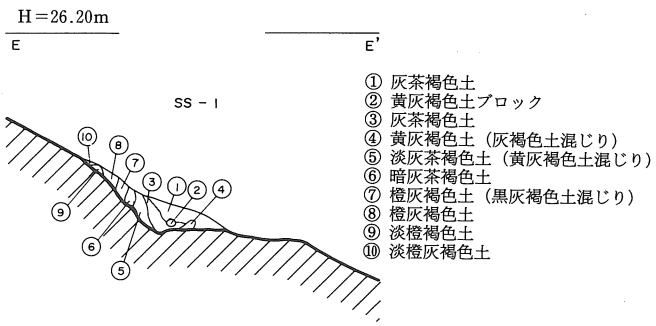
遺物は、弥生土器の甕、台付椀、台石が出土した。６は胴部下半を欠く甕である。口縁部は外反しており、外面には平行沈線を施している。肩部付近に最大径をもち、底部は丸底を指向した平底で、その内面には指押さえが見られる。７は甕の口縁部で、Ｐ．８の北側肩部付近の床面直上に出土した。６と同様に外反した立ち上がりを呈する口縁部である。外面には平行沈線を観察できなかった。８は台付椀であり、Ｐ．８南東の側溝上にやや浮いた状態で出土した。６～８は弥生時代後期後半に比定される。９は台石であり、Ｐ．２の南側肩部付近に床

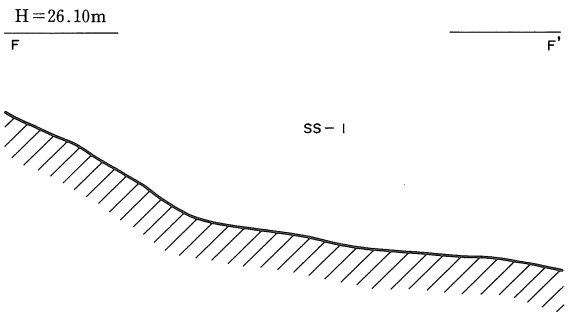


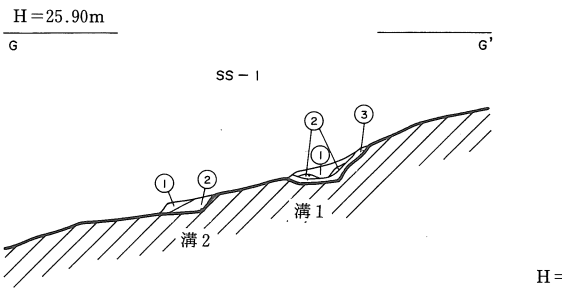
第23図　ＳＳ－１、18実測図

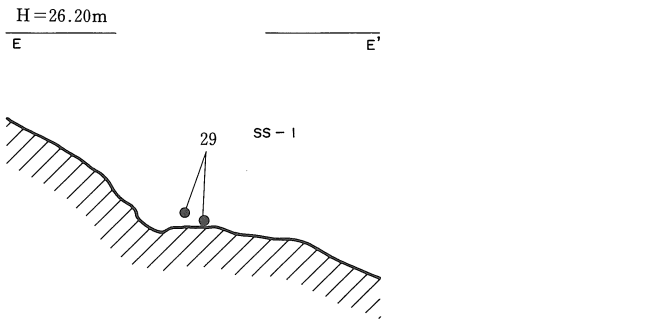


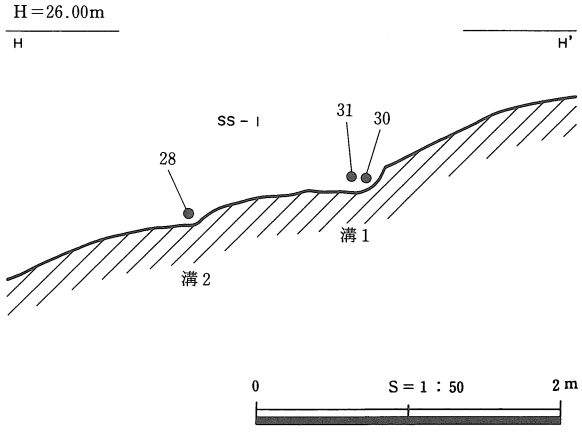




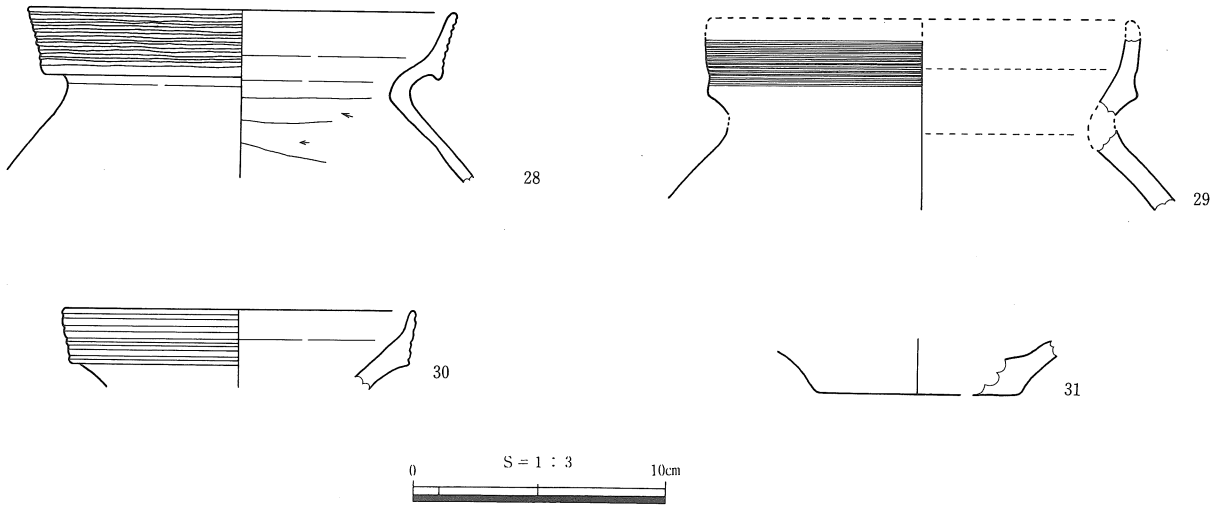




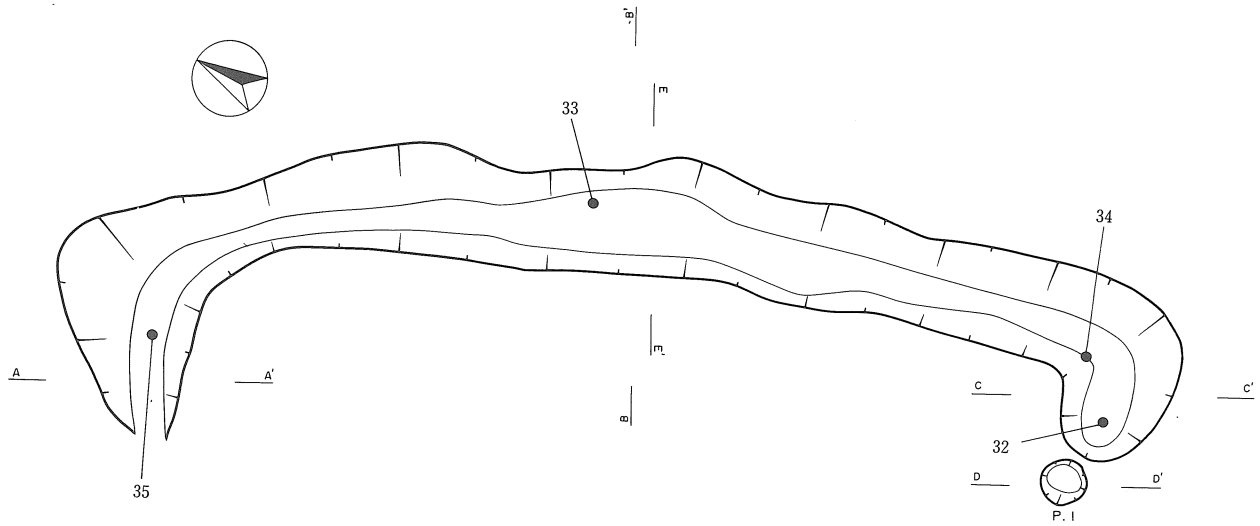


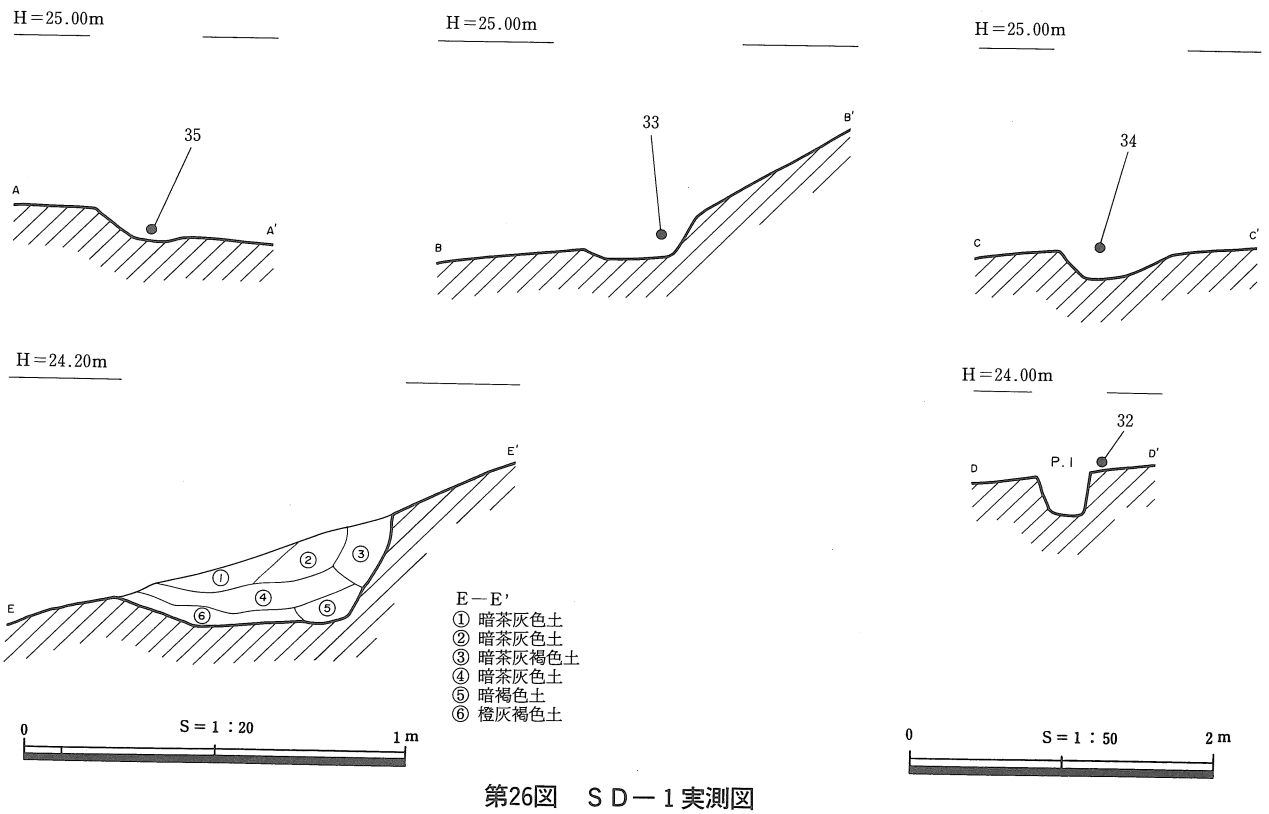


第24図　ＳＳ－１、18断面実測図

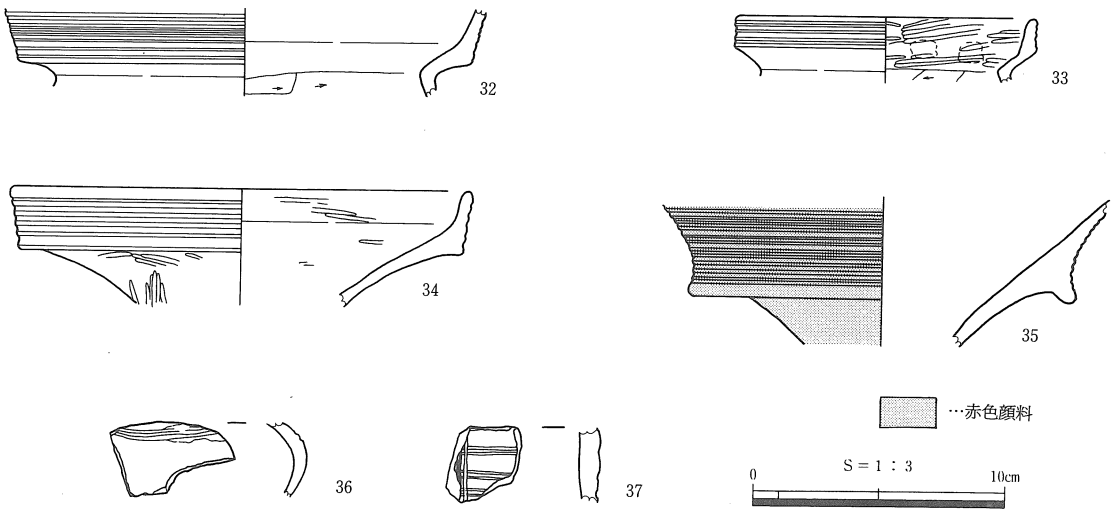


第25図　ＳＳ－１出土遺物実測図





第26図　ＳＤ－１実測図



第27図　ＳＤ－１出土遺物実測図

面直上で出土した。片面には炭化物が円形状に付着している。石材は石英斑岩である。

・ＳＩ－３（第17～19図・写真図版６）

ＳＩ－３は、標高約30mに位置し、急峻な斜面部に構築された円形の竪穴住居跡である。遺構の北側は、３条の道状遺構ＳＣ－４～６によって削平されている。また、盛土・造成したものと考えられる遺構の西側部分は流失しており、原形をとどめていない。ＳＩ－３の推定直径は、約６ｍである。残存壁高は、東壁で約40cmを測る。住居内に側溝をもたず、後背部に幅30～70cm、深さ約40cmの溝を配する住居跡である。溝は、約９ｍにわたって検出した。排水施設と思われる。

床面には、４基のピットを検出した。その配置状況から、ＳＩ－３はＰ．１を中央ピット、Ｐ．２～４を柱穴とする５本ないし６本柱の住居跡と推測される。４基のピットのうちＰ．１～３の３基は、直径約40cm、深さ20～30cmを測り、ほぼ同規模のものと考えられる。Ｐ．４は直径約30cm、深さ約70cmを測る。Ｐ．１～４は、約2.5m間隔で規則的に配列している。

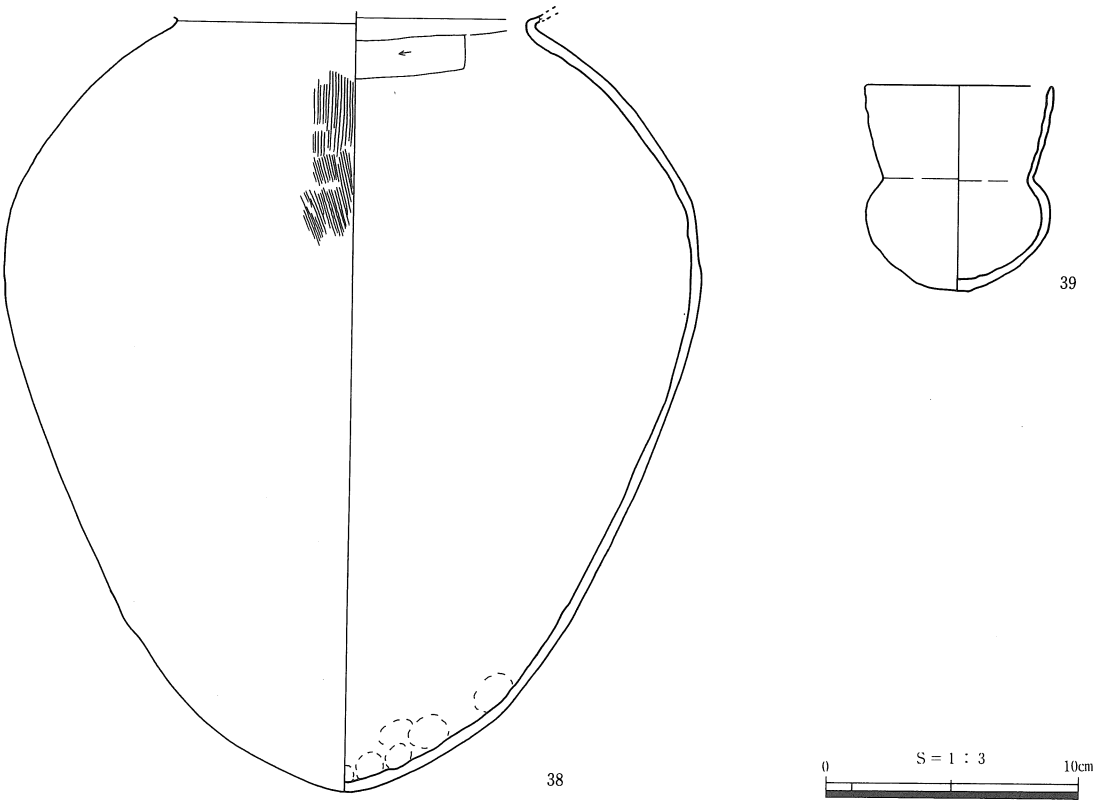
遺物は、弥生土器の甕や土錘、砥石が出土している。10は甕の口縁部であり、Ｐ．３検出面中央付近から出土した。直立する口縁部であり、外面には平行沈線を施している。弥生時代後期後半に相当する。１１は土錘である。溝底面直上で出土した。12は砥石であり、Ｐ．４検出面中央付近から出土した。石材は流紋岩である。

・ＳＩ－４（第20、21図・図版６、73）

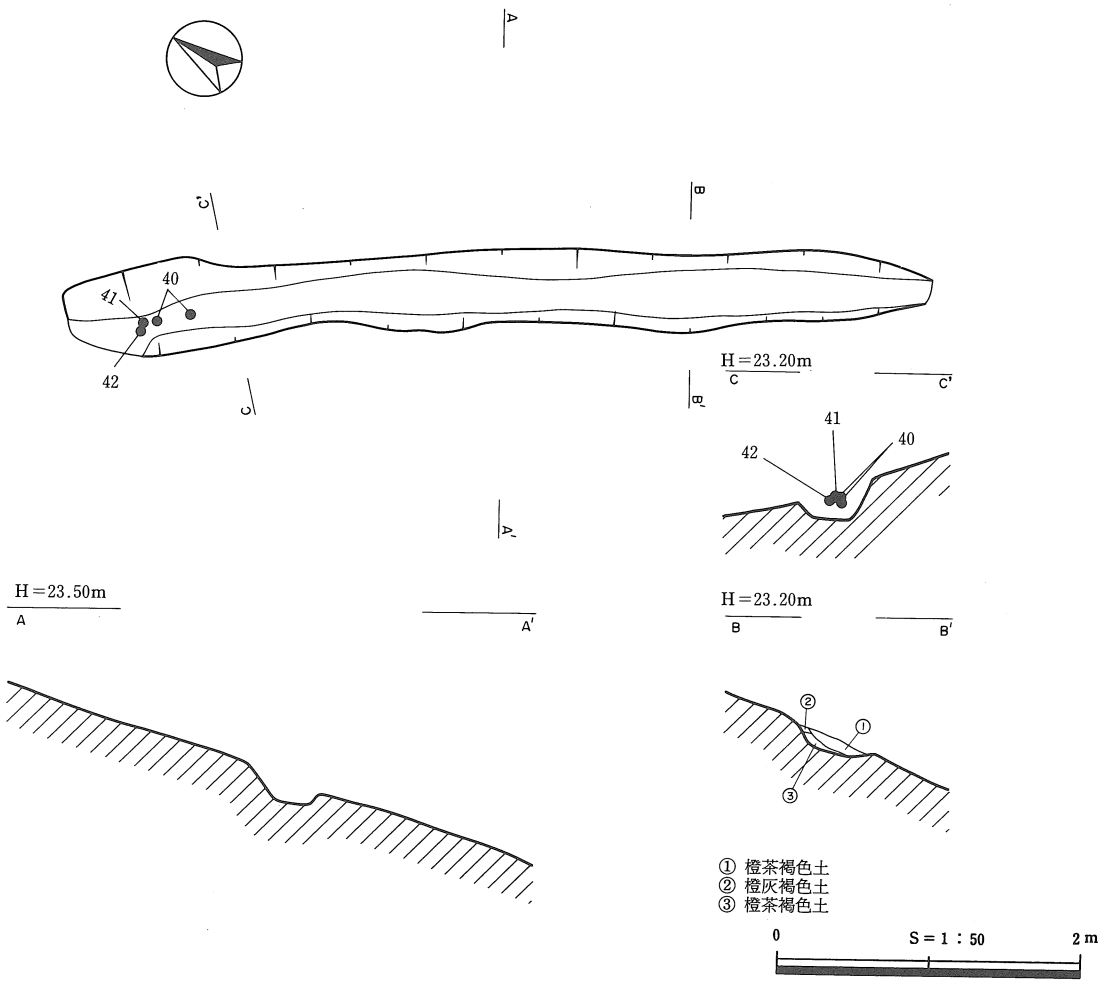
ＳＩ－４は、標高約19mに位置し、Ａ区の丘陵斜面裾部に構築された、直径約4.5mを測る円形の竪穴住居跡である。南西側は僅かに流失しているが、ほぼ原形をとどめている。残存壁高は、北壁で約60cmを測る。壁面沿いには幅約20cm、深さ約10cmの側溝を検出した。

床面には６基のピットを検出した。その配置状態から、ＳＩ－４はＰ．１～４を柱穴とした４本柱の竪穴住居跡と推測される。Ｐ．１～４は、直径30～50cm、深さ約50～70cmを測り、ほぼ同規模のピットである。Ｐ．１～４のピット間距離は約２ｍを測る。中央ピットと考えられるＰ．５は、２段掘りとなっており、ピット上部は直径約90cm、深さ約10cmを測り、下部は直径約40cm、深さ約30cmを測る。床面上には焼土や炭化物の広がりを確認した。焼土は、Ｐ．５やＰ．２の周辺に、炭化物はＰ．２の検出面上に検出した。焼土や炭化物の検出状況から、ＳＩ－４は焼失住居の可能性が高い。

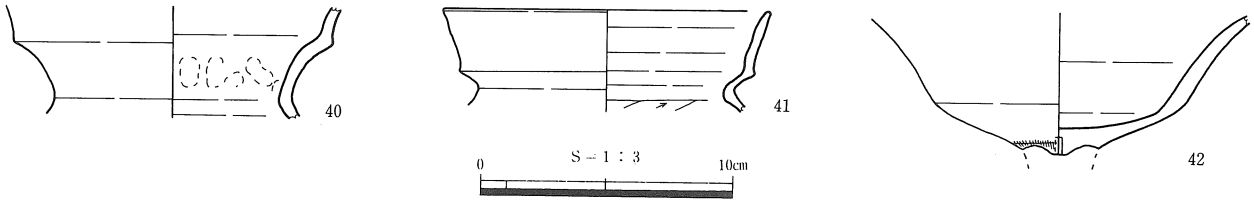
遺物は、弥生土器の甕、器台、敲石、砥石が出土した。13～18は甕の口縁部である。13～16は直立する口縁部であり、17、18は外反する口縁部である。外面にはともに平行沈線を施している。17はＰ．５埋土中に、18はＰ．５の検出面上およびＰ．３肩部直上に出土した。19～23は甕の底部である。ともに平底の底部である。23はＰ．２の西側約40cmの地点に床面直上で出土しており、外面にはハケメによる調整を施している。底部から胴部への立ち上がりから、胴部中央に最大径をもつと推定される。24は器台である。受部外面には平行沈線を施している。



第28図　ＳＩ－６出土遺物実測図



第29図　ＳＤ－２実測図



第30図　ＳＤ－２出土遺物実測図

内面にはミガキが見られる。13～24は、弥生時代後期後半に比定される。25は砥石である。床面東側の側溝沿いに出土した。表面は滑らかに磨耗している。石材は流紋岩質凝灰岩である。26は敲石である。Ｐ．６の南側肩部付近に床面直上で出土した。石材は安山岩である。

・ＳＩ－５（第22、69図・写真図版５）

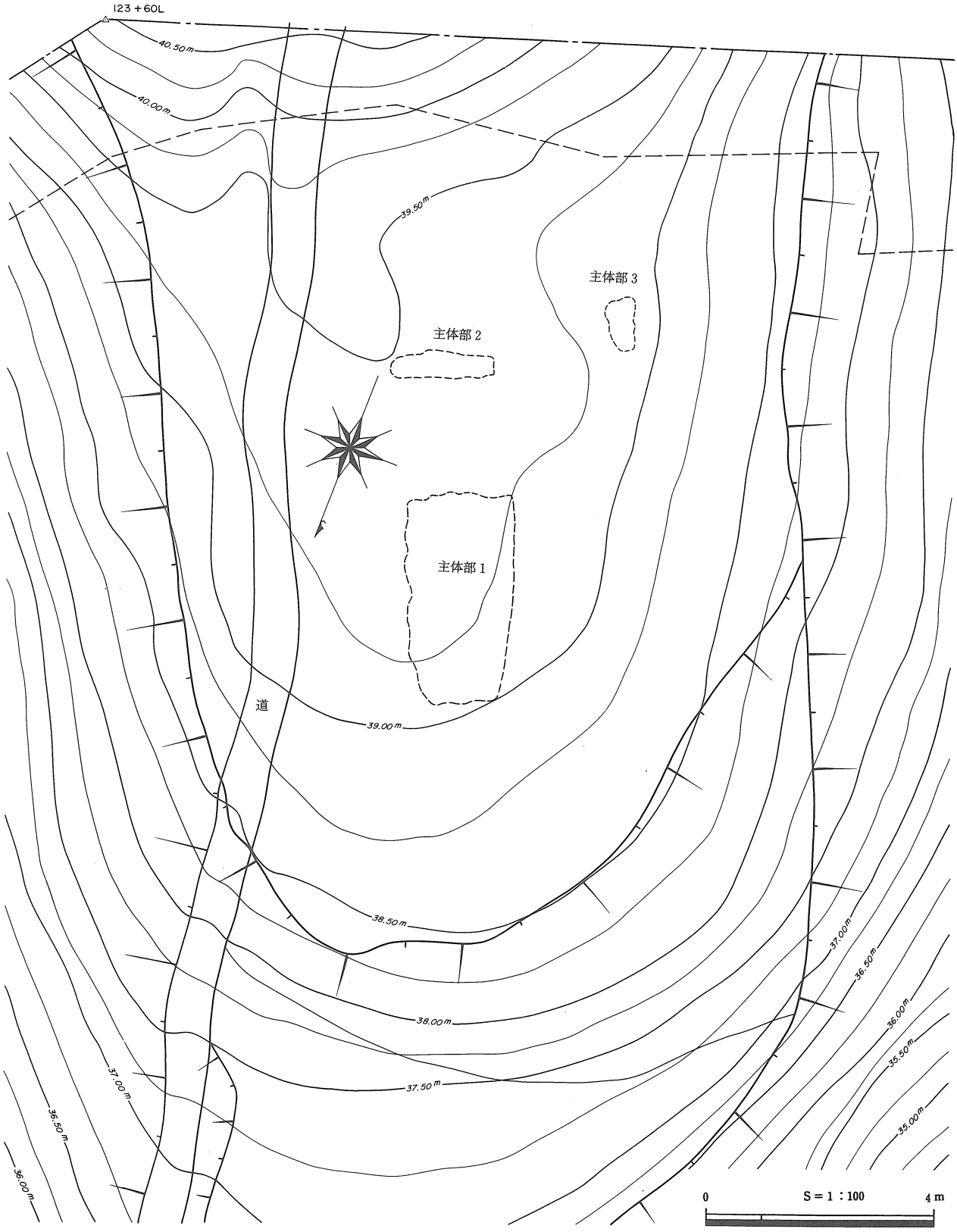
ＳＩ－５は、標高約21ｍに位置し、Ａ区の丘陵中腹に構築された、直径約4.5ｍを測る円形の竪穴住居跡である。ＳＩ－６と重複しており、ＳＩ－５の自然埋没後にＳＩ－６が構築されたものと推測される。南側は流失している。Ｂ－Ｂ'ラインの壁面で、残存壁高は約25cmを測るが、ＳＩ－６検出面からは95cmを測る。床面の西側には、幅約20cm、深さ約10cmの側溝を検出した。

床面からは合計14基のピットを検出した。その配置状態から、Ｐ.11～14を柱穴とした４本柱の住居の存在が推測されるが、ＳＩ－５、６のどちらに関連した柱穴かは判断できない。Ｐ.11～14は、直径40～60cm、深さ30～40cm、ピット間距離は約２ｍを測る。

27は磨石で、Ｐ.14北側ピット内から出土した。石材は頁岩岩片含有細粒砂岩である。時期決定のできる遺物の出土は見られないが、平面プランから弥生時代後期の住居跡と考える。

本調査で検出した弥生時代後期の遺構

遺構名	規模	平面プラン	主柱穴	出土遺物	備考
ＳＩ－１	径約８ｍ	円形	５～６本	土器、砥石	最低２回の建替
ＳＩ－２	１辺約４ｍ	隅丸方形	６本	土器、台石	貼り床
ＳＩ－３	推径約６ｍ	円形	5 or 6本	土器、土錘、砥石	後背に溝
ＳＩ－４	径約4.5m	円形	４本	土器、敲石、砥石	焼失住居
ＳＩ－５	径約4.5m	円形	４本？	磨石	ＳＩ－６と重複
ＳＳ－１	長さ約８ｍ 奥行き約２ｍ			土器	テラス状遺構
ＳＤ－１	幅50～80cm 深さ約20cm			土器	１辺が約6.5ｍを測る竪穴住居跡、あるいはテラス状遺構の一部？



第31図　陰田60号墳調査前実測図

・ＳＳ－１（第23～25図・写真図版５）

ＳＳ－１は、標高約25mに位置するテラス状遺構である。長さ約８m、奥行き約２mを測る。遺構全体がなだらかな断面形態を呈している。Ｄ－Ｄ'ラインの壁面で、残存壁高は約40cmを測る。

床面には、１基のピットと２本の溝を検出した。溝１は壁面裾部に設けられており、幅約50cm、深さ約15cm、長さ約2.5mを測る。溝２は溝１とほぼ平行に検出した。南側肩部を流失しており、幅約40cm、深さ約10cm、長さ約2.5mを測る。

遺物は、弥生土器の甕が出土している。28～30は甕の口縁部である。28、30はそれぞれ溝２、溝１上に浮いた状態で出土しており、29は東側床面のほぼ直上に出土した。28、30は外反気味の立ち上がりを、29は直立する立ち上がりを呈し、外面には平行沈線を施している。31は平底の底部である。溝１上に浮いた状態で出土した。28～31は、弥生時代後期後半に相当する。

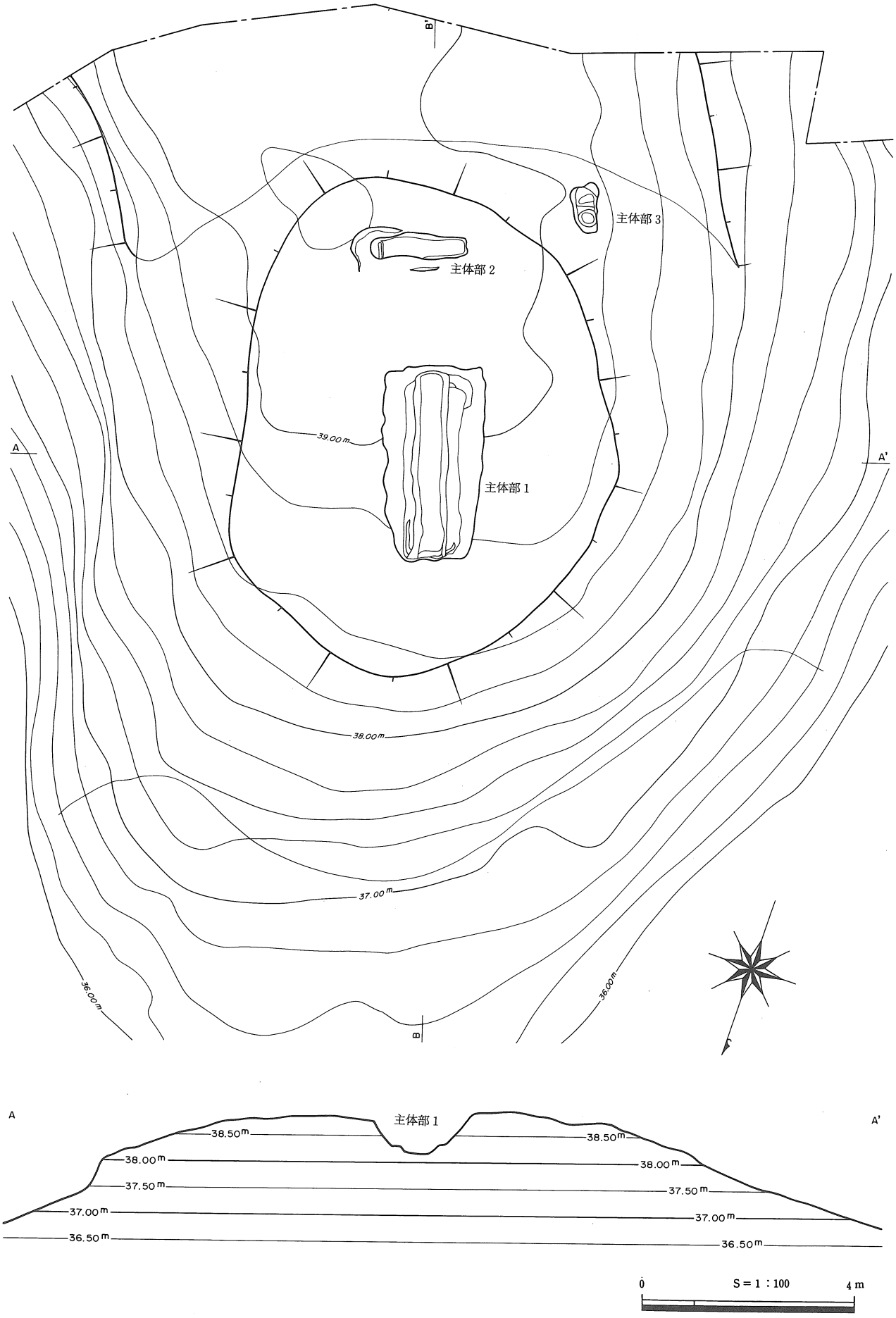
・ＳＤ－１（第26、27図・写真図版73）

ＳＤ－１は、標高約23.5mに位置し、幅50～80cm、深さ約20cm、長さ約6.5mを測る鋭状の溝状遺構である。付随して、ピットを１基検出した。その両端がほぼ直角に屈折しており、床面の殆どを流失した竪穴住居跡かテラス状遺構と推測される。

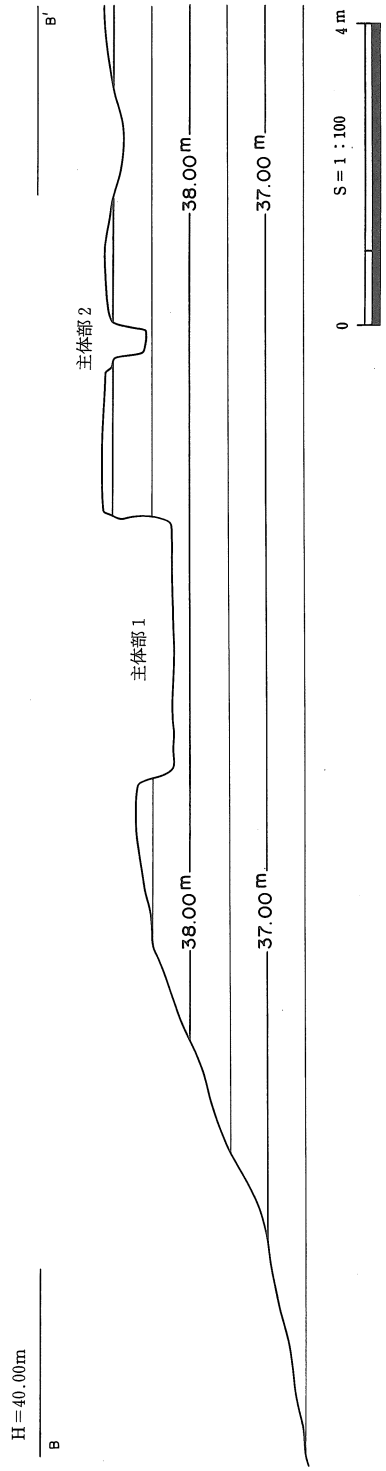
遺物は、弥生土器の甕、器台が出土している。32、33は甕の口縁部である。32は外反する口縁部であり、遺構南東端から出土した。33は直立する口縁部であり、遺構中央部から出土した。内面にはミガキが見られる。ともに外面には平行沈線を施している。34、35は器台である。34の受部はやや外反している。外面には平行沈線を施しており、ミガキも見られる。遺構南端から出土した。35の受部は強く外反した立ち上がりを呈し、外面には平行沈線を施すとともに、赤色顔料を塗布している。遺構北西端から出土した。36、37は器形が不明の土器片である。36の外面には弧文を施している。また、37の外面では、３条の横位の沈線を１条の縦位の沈線が切っている。32～37は、弥生時代後期後半に相当する。

弥生時代後期のテラス状遺構（『陰田第６遺跡（久幸地区）』米子市教育委員会　1984年による）

遺構名	規模	出土遺物	
仮ＳＩ10	長さ約5.5m 奥行き約1.5m	土器・甑・砥石・石鏃・河原石	仮ＳＩ11と同一遺構の可能性大
仮ＳＩ11	長さ約９m 奥行き約２m	土器・甑	仮ＳＩ10と同一遺構の可能性大
仮ＳＩ12	長さ約５m 奥行き約60cm～１m	土器	
仮ＳＩ13	長さ約６m 奥行き約1.5m		



第32図　陰田60号墳実測図



第33図　陰田60号墳断面実測図

3　古墳時代前期の遺構（ＳＩ－6、ＳＤ－2）

古墳時代前期の遺構として、竪穴住居跡１棟（ＳＩ－６）、溝状遺構１条（ＳＤ－２）を検出した。以下に遺構別の詳細を記す。

・ＳＩ－６（第28、69図・写真図版５）

ＳＩ－６は、標高約21ｍに位置し、Ａ区丘陵中腹に構築された、１辺が約５ｍを測る方形の竪穴住居跡である。南側は流失している。前項でも記した通り、ＳＩ－５埋没後に新たに斜面を掘削して、ＳＩ－５の床面から約25cm上方に床面を構築した住居跡である。残存壁高は、北壁で約70cmを測る。壁面沿い西側には、幅約20cm、深さ約10cmの側溝（溝６）を検出した。

床面には14基のピットを検出した。Ｐ.10はＳＩ－６に伴うピットである。長径約70cm、短径約45cmの小判形をしたピットで、深さは約15cmを測る。北側壁面沿い中央部に位置し、溝７を切っている。

38は口縁部を欠く土師器の甕である。西側側溝内からほぼ床面直上で出土した。その底部は自立できない丸底を呈し、内面には指押さえが見られる。39は小型丸底壺である。38とほぼ同地点の床面直上に出土した。古墳時代前期前半に相当する。

・ＳＤ－２（第29、30図）

ＳＤ－２は、標高約20ｍに位置し、幅約40cm、深さ約30cm、長さ約６ｍを測る溝状遺構である。床面の殆どを流失した竪穴住居跡かテラス状遺構の一部と推測できる。

遺物は、土師器の甕、壺、高坏が出土している。40は壺の口縁部である。外反する立ち上がりを呈する。41は甕の口縁部である。外反する立ち上がりを呈する。42は高坏の坏部である。40～42は遺構の北西端に集中して、ともに浮いた状態で出土した。これらは古墳時代前期前半に相当する。

4　古墳・横穴（第31～48図・写真図版３、７～13、18、74）

（陰田60、66号墳、陰田29、51～55号横穴）

古墳２基（陰田60、66号墳）、横穴６基（陰田29、51～55号横穴）を検出した。陰田60号墳は、陰田41号墳の南に隣接し、Ａ区とＢ区を区分する丘陵上に位置する。陰田66号墳は、陰田41号墳の東に隣接し、久幸山から天神山へ連なる丘陵尾根上に位置する。陰田29号横穴は、Ｂ区東端部の狭長な調査区で検出した。陰田51～54号横穴は、Ｂ区の南側斜面の東寄りの地点に位置する。陰田55号横穴は、Ａ区の北側斜面の中腹に位置する。

・陰田古墳群（第４図）

陰田古墳群は、奥陰田地区の谷筋及び陰田小犬田遺跡の所在する谷筋、口陰田地区の北側にあたる天竺山丘陵の尾根筋に分布する。今回の調査によって66号墳まで確認されることとなった。48～54号墳は島根県との県境付近に位置し、うち48～51号墳は島根県側では国吉古墳群と呼称されている。久幸山から天神山にかけて連なる丘陵には、26～43、60、66号墳の20基が所在し、うち31～42号墳の12基が今回までに調査されている。26～36、38～42、60、66号墳は円墳、37、43号墳は前方後円墳である。規模は、円墳は概ね径10～20ｍで、41号墳は径30ｍと傑出している。前方後円墳は、長さ20ｍ台である。中心主体が遺存しないものが多いが、木棺直葬墓または

土壙墓が検出されている。また副次的な主体部として、円筒埴輪棺が検出されている。37号墳では横穴式石室を、41号墳では箱形石棺と石槨木棺を主体部としている点が、例外的である。時期は、31号墳が陰田編年（註6）の1式（6世紀初頭）、33、35、36号墳が2式（6世紀前葉）、32、34、37、42号墳が3～4式（6世紀中葉～後葉）で、38～40号墳は不明である。4式から横穴の築造が始まり、当丘陵においては、5式（6世紀末～7世紀初頭）以降、古墳が築造されなくなるようである。陰田古墳群中、7世紀代に比定される古墳は、奥陰田地区の谷奥部、陰田大池のほとりに所在し、切石造りの横穴式石室を主体部とする陰田1号墳のみである。41号墳は時期を直接示す遺物の出土がなく、石棺の構造から古墳時代中期に比定されている。41号墳は、古墳群中最大規模を示し、展望のよい丘陵支丘上に立地している。同一丘陵上にありながらも、他の古墳とは一線を画す感があり、年代的にも従来古墳群中最古とされてきた。今回の調査で検出した60、66号墳は、41号墳に隣接するもので、これら3基は他の古墳と若干の離隔をもって存在している。（註7）

・**陰田38～40号墳**（第4、8図）

B区北東部、第8図で示すところのSK－1、2、7、8、11～14から51～53号横穴の北側にかけての丘陵尾根上に、本来存在した古墳である。前述したとおり、墳丘、中心主体部の痕跡が確認できず、消失したものと思われる。SK－11～14（第155～158図）は時期を示す遺物の出土がみられなかった土壙墓群であるが、位置的には陰田40号墳に付随する副次的な主体部である可能性も考えられる。SK－1（第140図）で、陰田編年6式相当の蓋坏（第141図）の一括出土がみられたが、当丘陵では古墳がもはや造られない時期であり、古墳との直接的な関連は希薄と考えるが、墓前祭祀に関わる遺構である可能性は捨てきれない。

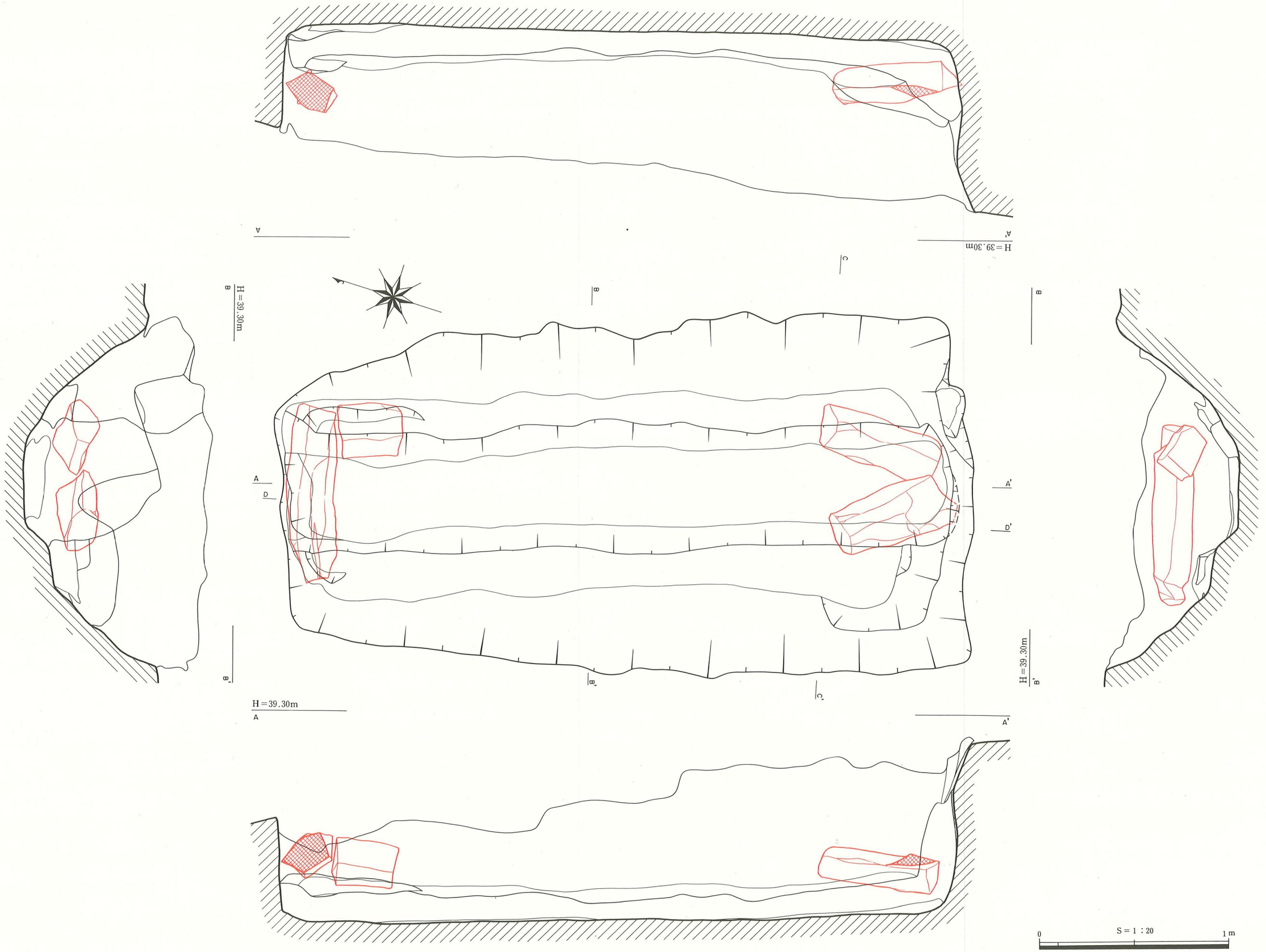
・**陰田60号墳**（第31～38図・写真図版3、7～9、74）

陰田60号墳周辺は、過去に一部が調査されているが（註8）、限られた範囲であったため、古墳としての確証を得るに至らなかった。今回の調査にあたっては、予察によって表土直下が岩質の地山であることを把握、盛土は遺存せず、墳頂部を削平して曲輪状の平坦面を造成しているものと推定した。結果的には、墳頂部に古墓群やピット群が検出され、中、近世期に墳丘が改変されていることが判明した。主体部の遺存深度から、基本的には、地山整形により墳丘を削り出したのち、若干の盛土を施したものと考える。後背の高位側には、堀切状の周溝を設けている。周溝の下端ラインや地山整形ラインから判断して、円墳と考える。墳頂部の標高は、39mである。規模は、墳裾で南北14m、東西12mを測り、東側墳裾部から1.5m、北側墳裾部から2.2mの高さが遺存していた。墳頂の平坦面はいびつな楕円形を呈し、南北9.5m、東西7mを測る範囲である。周溝は、幅2m以上、深さ30cmを測り、約12mの長さにわたって検出した。

主体部は3基確認した。墳頂部ほぼ中央に主体部1、主体部1の南側に2mの離隔を経て、主体部1の長軸と直行する方向に主体部2、主体部2の西側に2mの離隔を経て、主体部1の長軸に平行する方向に主体部3を検出した。主体部1、2は墳頂部平坦面の範囲内に、主体部3は周溝内に位置する。

主体部1（第34、35図・写真図版7、8）は、木棺墓と考える。墓壙は、検出面で南北長3.6m、東西幅は南側で1.8m、北側で1.2m、深さ90cmを測る。北側にややすぼまる長梯形で検出した。検出面の南北の比高差が約40cmあり、本来墓壙の北側肩が南側程度の高さであれば、平面形は長方形状になるものと思われる。主軸方向は、N－19°－Wにとる。2段掘りであり、墓壙中央に長さ3.3m、幅40cmの底面があり、10～15cmの段差をもって両脇に平坦な段を設けている。段は長さ約3m、幅20cm前後で、中央掘り方の両小口にはまわらない。段の北側では5～8cm程度の微細な段差を確認した。断面形は、短軸方向では高台の付く椀形とでも言えようか。長軸方向では概ね長方形状であるが、北側壁はほぼ直立気味の立ち上がりであるのに対し、南側壁はややオーバーハングしている。

墓壙の南北両小口からは、角礫を検出した。石材は、通称陰田石と呼ばれる凝灰岩質流紋岩である（註9）。南側小口では、長さ約60cm、幅20～30cm、厚さ約20cmで同規模の長角礫2個を、逆「V」字状に検出した。中央底面からは10～15cmほど浮いた状態であるが、「V」字状に開く両先端側が左右の段部分の床面にかかった状態であり、南方に閉じる側のレベルがやや下がっている。一方北側小口では、長さ約90cm、幅約20cm、厚さ約15cm



第34図　陰田60号墳主体部１実測図

の長角礫１個を、小口壁に沿った状態で検出し、これと逆「Ｌ」字状をなす配置で長さ約25cm、幅約30cm、厚さ約15cmの角礫を１個検出した。中央底面からは20～25cm浮いた状態であるが、南側小口と同様、左右の段部分にかかった状態であり、微細な段差の部分に合致するような検出位置である。これらの礫は、土層断面の観察からも、また個々の礫の出土レベルがさほどバランスを崩さず水平気味である点からも、埋土への混入や攪乱による投入は考え難く、当主体部に本来的に付随するものと考える。角礫以外に、人骨、遺物の出土はみられなかった。

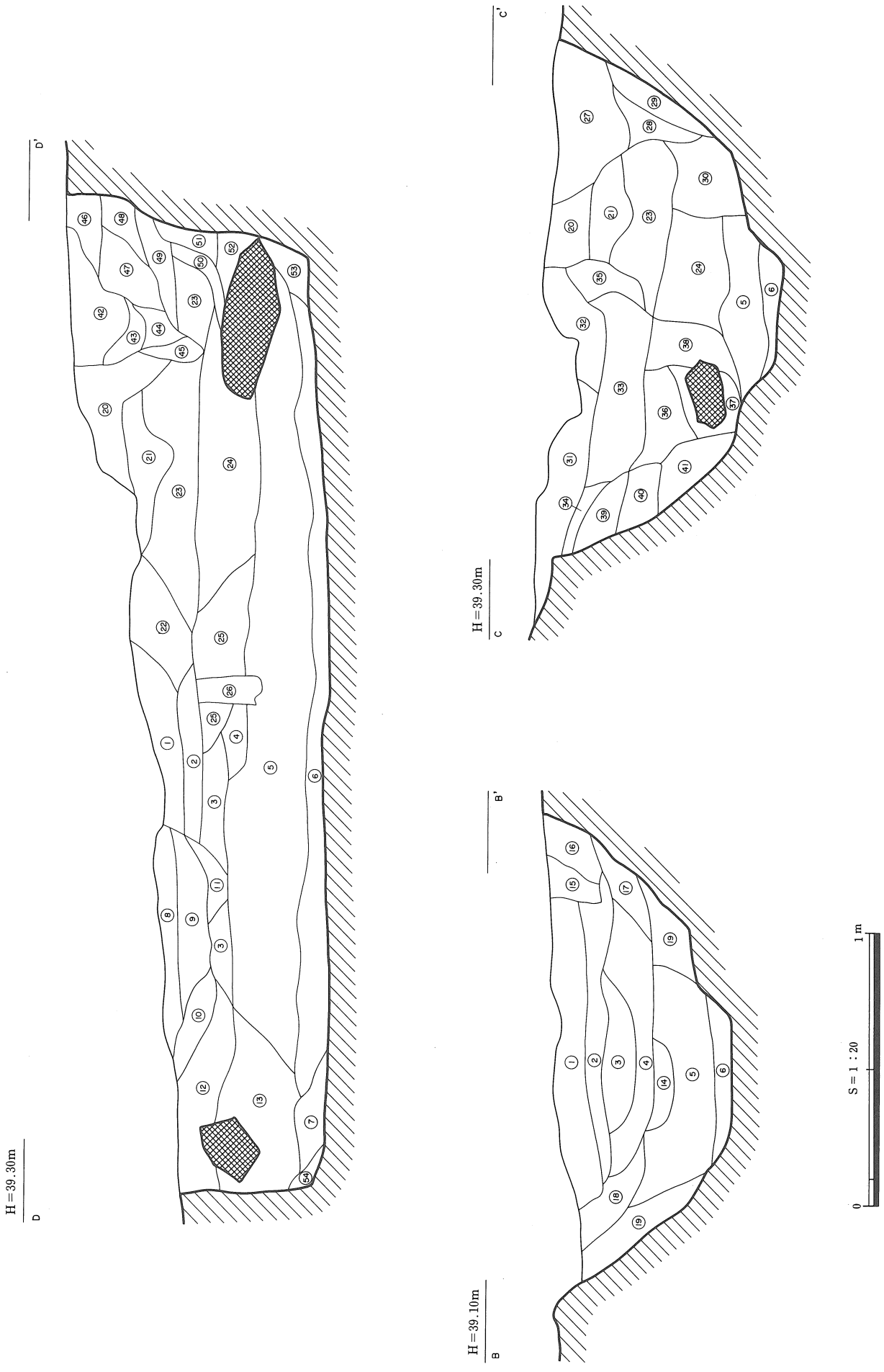
Ｂ－Ｂ'ラインの土層断面では、土質的に４種の系統にまとめられる。１～３層は橙茶褐色土系の層で、墓壙埋土の上部を被覆する層である。４～６、14、17、18層は橙褐色土系の層で、主体部の埋積土および主体部の被覆土である。５層橙褐色土層の左右の立ち上がりラインが外反している。19層は赤橙褐色土層で、裏込め土的である。15、16層の暗橙茶褐色土層は、木根による攪乱土層である。Ｃ－Ｃ'ラインの断面では、土質的に５系統にまとめられる。20、27、28、31～35層は攪乱土層と判断した。５、６、23、24、39、40層は橙褐色土系の層で、主体部の埋積土および主体部の被覆土である。29、30、41層は赤橙褐色土層で、裏込め土的である。21、36～38層は暗橙褐色土層で、21層は墓壙上部の被覆土的であり、36～38層は角礫に関わる層と考える。Ｄ－Ｄ'の長軸ラインでは、４系統の層にまとめられる。８～12、20、26、42～47層が攪乱土層である。１～３層の橙茶褐色土系の層、21、22層の暗橙褐色土系の層は、墓壙上部の被覆土層である。４～６、23～25層は橙褐色土系の層で、主体部の埋積土および主体部の被覆土である。７、51、52層の橙褐色土系の層、13層の暗橙褐色土層、50、53、54層の赤橙褐色土系の層は、小口の裏込め土的である。

墓壙埋土の埋積状況から、主体部は木棺直葬であると考える。ただし、裏込め土的な19、29、30、41層の立ち上がりラインが、２段掘りの左右の立ち上がりラインに続かず、段の肩より外側の地点から始まることから、木棺の側板は２段掘りの外側の段の上に立てられたものと推測する。小口板の状況は、北側では７、13、54層を裏込め土とし、小口板の外側の段の上に角礫を配置したものと思われる。一方南側においては、本来２本の角礫は南壁に接する様に直立していたものが、のちに木棺側に傾いたものと考える。36～38層は、本来的には50～53層と同様に裏込め土であったものが、角礫の傾斜とともに木棺側に流入したものと思われる。木棺の規模は、長さ約2.8m、幅70～80cmが推定される。なお、頭位がいずれかは、判断できなかった。

角礫は、重量や形状からみて、単純に裏込め石として使用されたものとは言い難い。隣接する陰田41号墳の調査では、第１埋葬主体から組合わせ式の箱形石棺が検出されているが（註10）、頭位側の小口板からさらに外側に側板を繋いで延ばし、足位側の小口板外には小円礫を敷き詰めるピットが設けられている。このように、小口板外の空間に対する特別な意識が、伝統的に存在したものと思われる。

主体部２（第36図・写真図版８、９）の墓壙は、検出面で東西長1.8m、南北幅は45cm、深さ50cmを測る。長方形状に検出した。墓壙の北西隅は、古墓ＳＫ－27によって攪乱されている。主軸方向は、Ｎ－70°－Ｅにとる。墓壙の北側上端から15cm外側に約60cmの長さで、墓壙の主軸方向に平行する段差を検出した。また、墓壙の東側上端から約30cm外側に約1.5mの長さで、「し」の字状を呈する段差を検出した。両段差とも、15cm程の高さである。後世の攪乱で原状をとどめていないが、本来は墓壙全体にめぐり、２段掘りであったものと推察される。底面は、東西長1.55m、南北幅はＢ－Ｂ'ラインで30cm、Ｃ－Ｃ'ラインで40cmを測り、東側が幅広である。断面形は、基本的に逆台形状であるが、底面の位置が墓壙検出面より全体的に北側に５cmほどずれており、北側壁面がオーバーハングする恰好になっている。よって、Ｃ－Ｃ'ラインでは断面形が平行四辺形状になっている。底面の東側小口部分に、南北長35cm、東西幅10cm、深さ12cmを測る長方形状の落ち込みを検出した。この落ち込みの西側肩部分に、角礫２個を検出した。墓壙の主軸ラインを挟み、面に傾斜をもたせて両角礫が向かい合うような状態である。枕と思われる。よって、遺体の頭位は東側となる。角礫以外、人骨、遺物の出土はみられなかった。

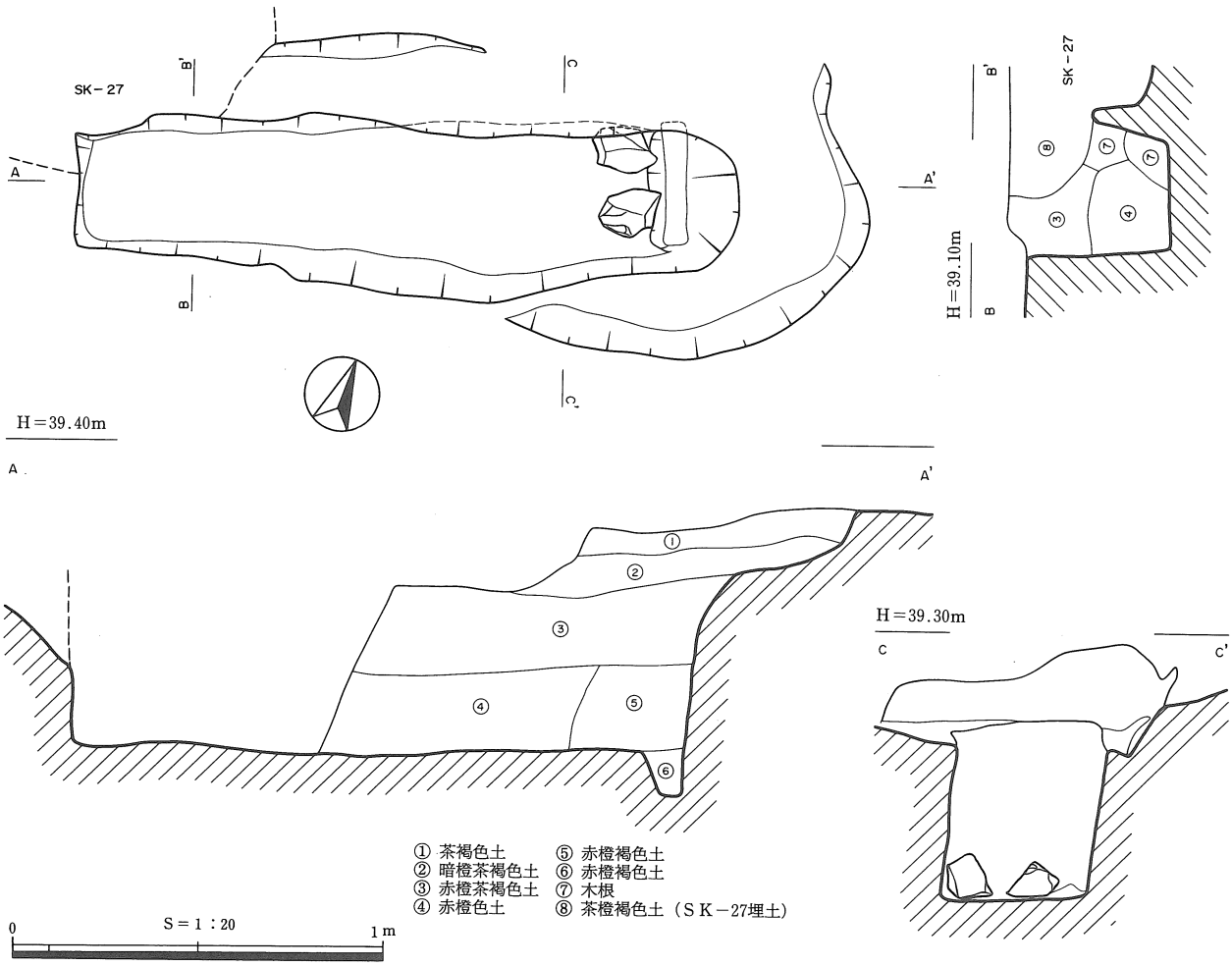
主体部２は、墓壙周辺の段差を利用した木蓋土壙墓であると考える。頭位側の溝状落ち込み部分は、一見木棺の小口板の痕跡のようだが、埋葬の構造上は必要のない施設である。北側の枕石が北側壁面にほぼ接するような位置にあり、このことから側板は置かれなかったとみてよく、土層断面にも観察されなかった。つまり、墓壙内に棺は組まれなかったと考える。むしろ、主体部１と同様な、墓壙の小口部分に対する特別な意識の表れと考え



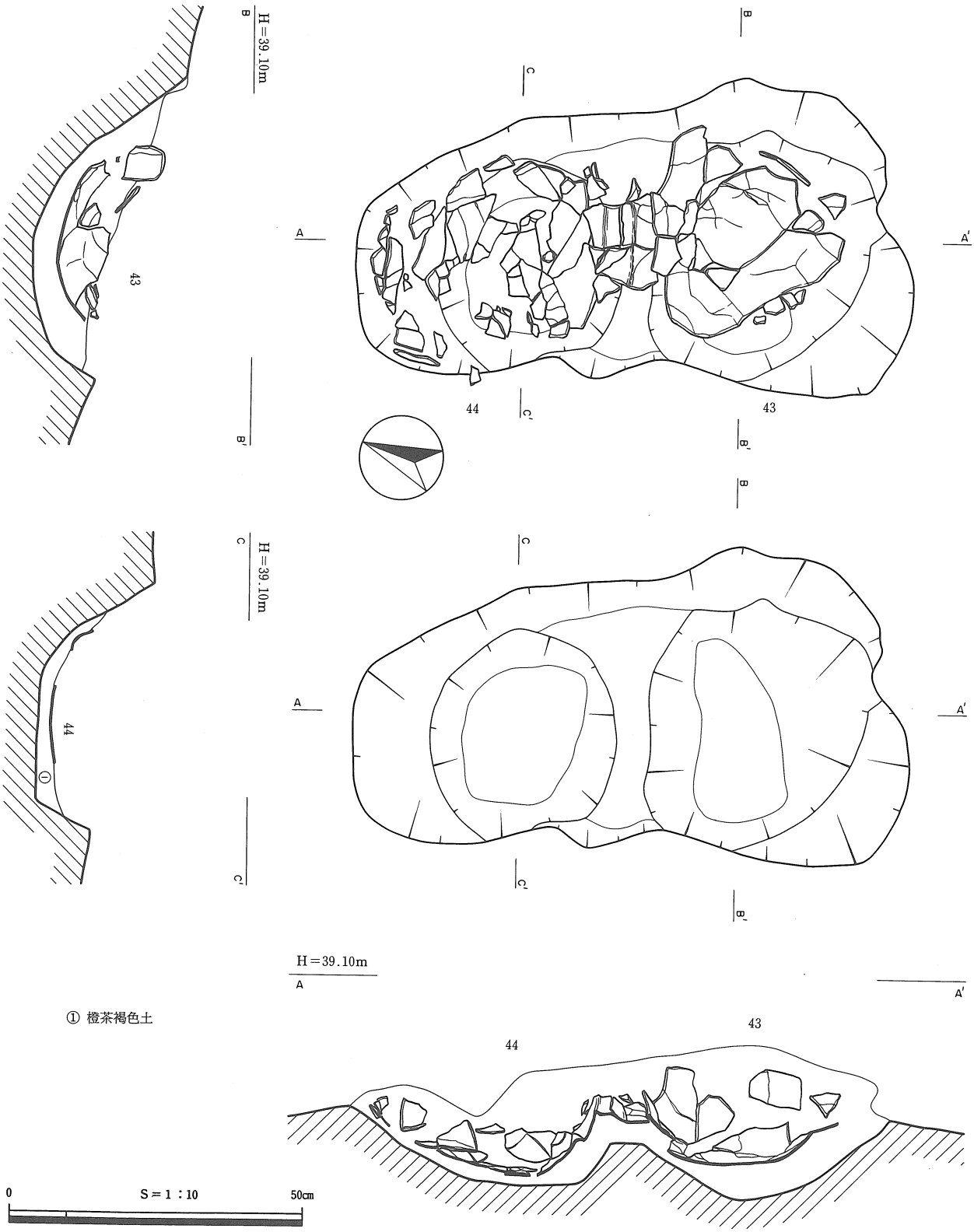
第35図　陰田60号墳主体部１土層断面実測図

1．橙茶褐色土（やや暗い）
2．橙茶褐色土（やや暗い）
3．橙茶褐色土
4．橙褐色土（やや濃い）
5．橙褐色土
6．橙褐色土（やや暗い）
7．橙褐色土（やや淡い）
8．暗橙茶褐色土（やや淡い）
9．暗橙茶褐色土（やや暗い）
10．暗橙茶褐色土（やや暗い）
11．暗橙褐色土
12．暗橙茶褐色土
13．暗橙褐色土
14．橙褐色土（やや暗い）
15．暗橙茶褐色土
16．暗橙茶褐色土
17．橙褐色土
18．橙褐色土
19．赤橙褐色土
20．暗橙茶褐色土
21．暗橙褐色土
22．暗橙褐色土
23．橙褐色土
24．橙褐色土
25．橙褐色土
26．暗橙茶褐色土
27．暗橙茶褐色土
28．暗橙茶褐色土
29．赤橙褐色土
30．赤橙褐色土
31．橙茶褐色土
32．橙茶褐色土
33．橙茶褐色土
34．橙茶褐色土
35．暗橙茶褐色土
36．暗橙褐色土
37．暗橙褐色土
38．暗橙褐色土
39．橙褐色土
40．橙褐色土
41．赤橙褐色土
42．暗橙茶褐色土
43．橙茶褐色土
44．橙茶褐色土
45．橙褐色土
46．暗橙茶褐色土
47．橙茶褐色土
48．橙茶褐色土
49．橙茶褐色土
50．赤橙茶褐色土
51．橙褐色土
52．橙褐色土
53．赤橙褐色土
54．赤橙褐色土

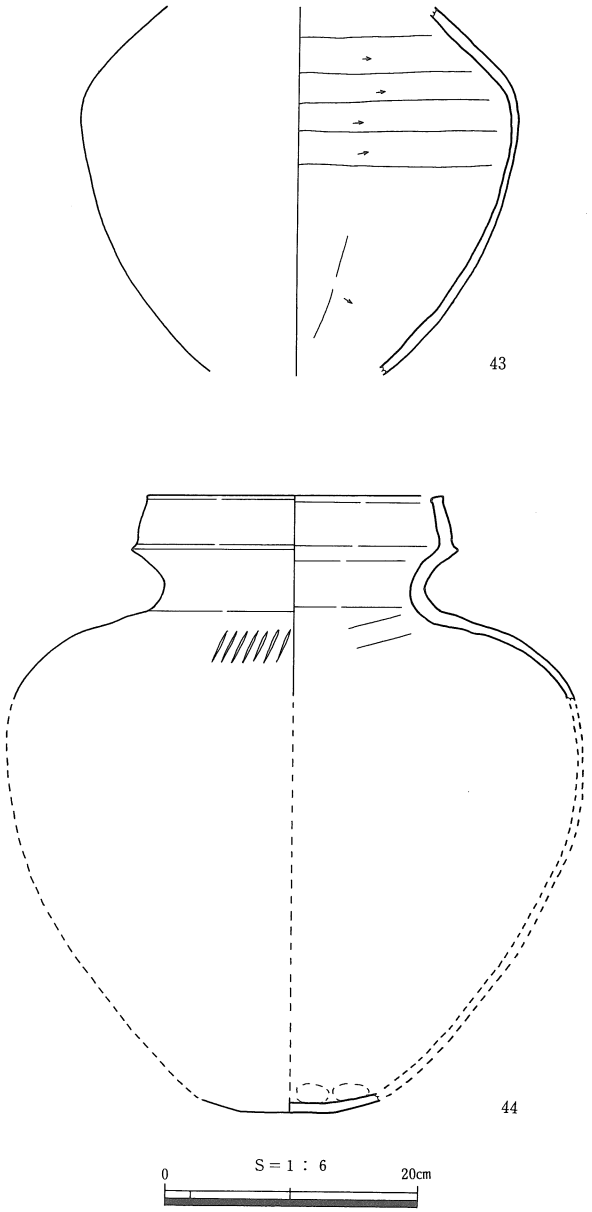
陰田60号墳・主体部１土層断面図土色対照表



第36図　陰田60号墳主体部２実測図



第37図　陰田60号墳主体部３実測図



第38図　陰田60号墳主体部３出土遺物実測図

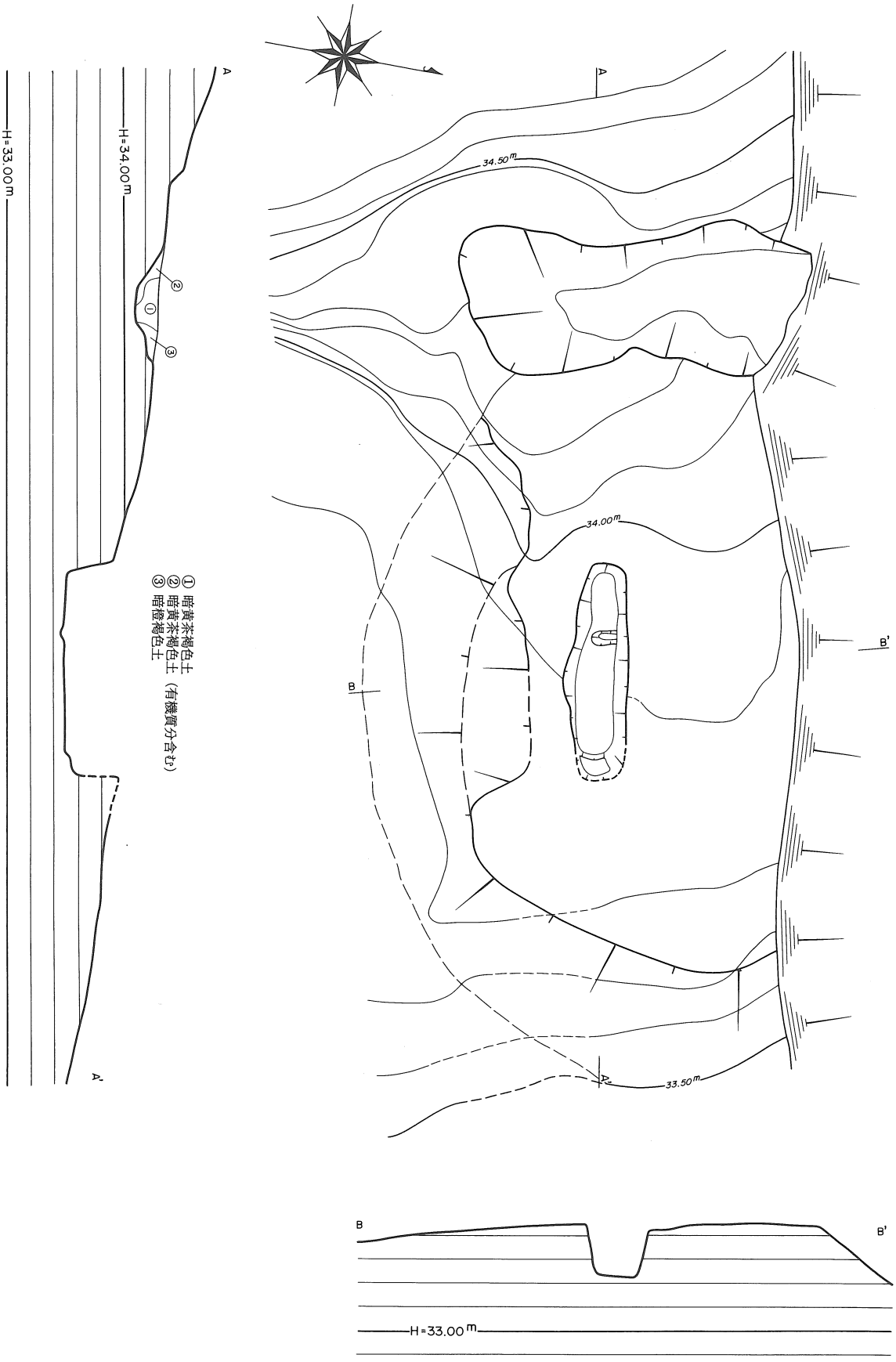
たい。確認には及ばなかったが、食料や有機質用具の副葬空間と推察したい。

主体部３（第37、38図・写真図版９、74）は、土器棺墓である。小児墓と思われる。上部を削平されている。墓壙は、検出面で南北長95cm、東西幅は30～55cm、深さ20～27cmを測る。不整な楕円形状に検出した。主軸方向は、N－26°－Wにとる。断面形は東西が「U」字状、南北が「W」字状である。墓壙の中央には土手状の高まりがあり、これによって２ヶ所のくぼみが仕切られている。それぞれのくぼみに、土器が横位に置かれている。遺物は、土器棺以外出土していない。土器棺は、壺の口縁部（44）と、口縁部を打ち掻いた壺または甕（43）の頸部を合わせたものである。43は、風化のため外面調整は不明だが、内面は肩部から胴部上半にかけてが横方向、胴部下半が斜め方向のケズリ調整である。底部を確認できなかったが、比較的寸の詰まった器形であり、肩部の張りが顕著である。44は、外面肩部に連続刺突文を施し、肩部内面をケズリ調整している。底部内面に指押さえが観察される。口縁部の立ち上がりはやや内傾しており、端部は面をなす。短い頸部から肩部へ移行し、肩の張りは顕著である。底部は丸底気味の平底で、自立が可能と思われる。全体に寸の詰まった器形を推定した。43、44ともに大型品と言っても差し支えなかろう。44の時期は、青木編年（註11）のⅦ期、古墳時代前期前半に位置付けられると考える。

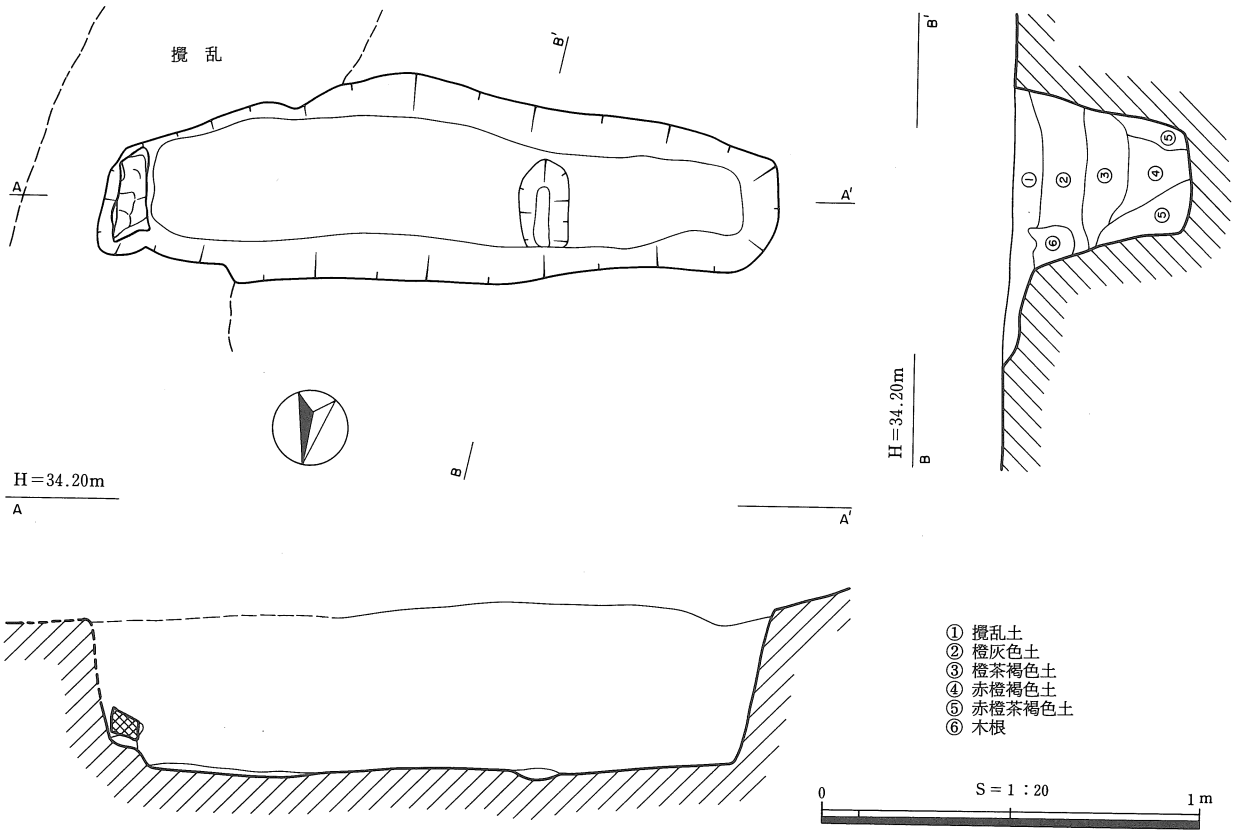
主体部１～３の位置関係から、これらはいずれも陰田60号墳に帰属する埋葬主体と考える。これらの埋葬順序については検証できなかったが、主体部３の土器棺（43、44）の時期が、当古墳の築造時期を概ね示すものと考える。60号墳は、古墳時代中期に比定される41号墳よりも高位に隣接しており、また主体部内の構造についても共通性が認められることから、両古墳は累代の関係にあると思われる。

・陰田66号墳（第39、40図・写真図版10）

陰田66号墳周辺は、果樹により攪乱を受けており、また北側が削平されて地形が大幅に改変されている。基本的には、地山整形により墳丘を削り出したのち、若干の盛土を施したものと考える。後背の高位側には、堀切状の周溝を設けているが、弧状にめぐる形に検出できなかった。本来的な墳丘の高まりがあれば、墳丘を半周する形になるものと思われる。周溝の下端ラインや地山整形ラインから判断して、円墳と考える。墳頂部の標高は、34mである。規模は、墳裾で東西6.5mを測り、南北は2.6m程度遺存していた。東側墳裾部からの遺存高は80cmである。墳頂の平坦面はいびつな形状を呈し、西側周溝寄りでは周溝に向かってレベルが上がっていく。よって墳頂部は完全に削平されているものと推定される。周溝は、幅90cm～1.3m、深さ20cmを測り、2.8mの長さにわたって検出した。



第39図　陰田66号墳実測図



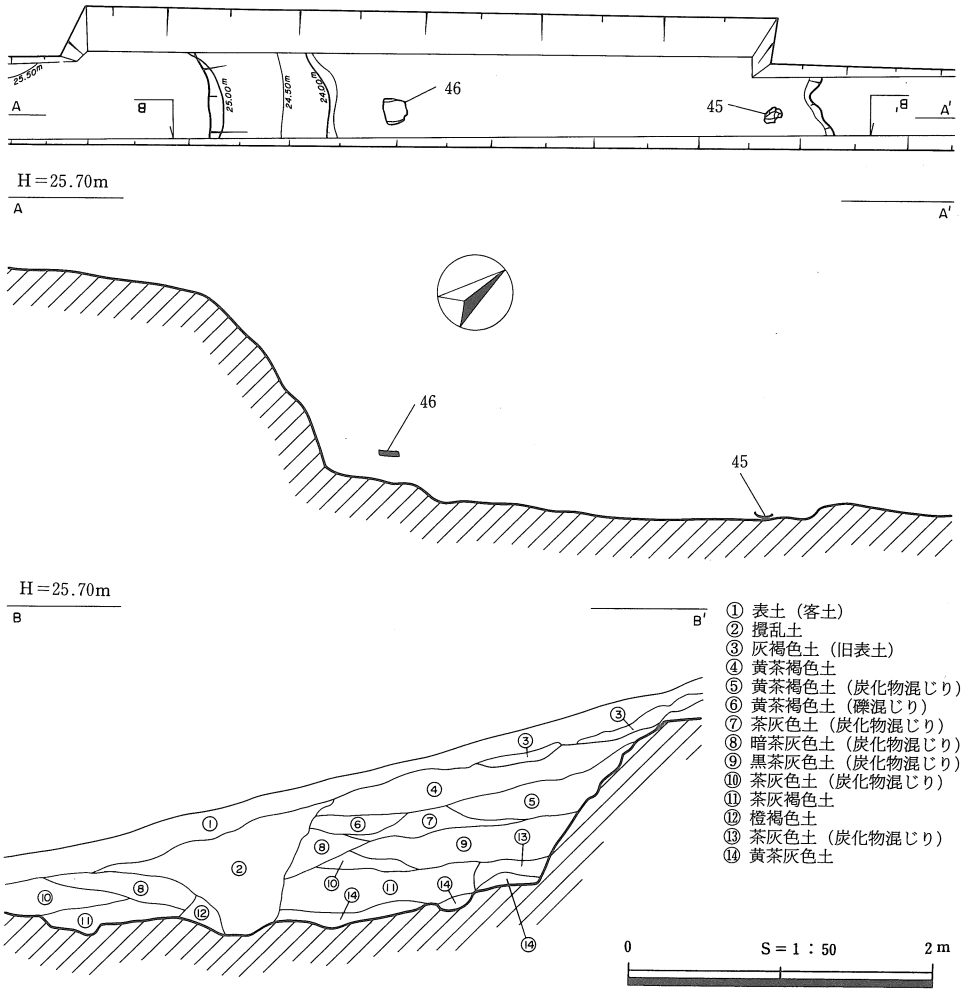
第40図　陰田66号墳主体部実測図

主体部は１基確認した。推定するに、墳頂部からやや南寄りに位置する。墳裾部に副次的な主体部は確認されなかった。墓壙は、検出面で東西長1.8mを測る。墓壙の東側が果樹により攪乱をうけており墓壙の幅を把握し難いが、中央部で55cm、西側で30cmを測り、西側幅がすぼまる。深さは45cmを測る。胴の膨らむ長方形状に検出した。主軸方向は、N－79°－Eにとる。底面は、東西長1.65m、南北幅15～30cmを測り、中央部が幅広である。底面中央やや西寄りの地点に溝状の落ち込みを検出した。幅12cm、深さ３cm程度のもので、棺材を自立させることはできないものと思われる。墓壙の断面形は、逆台形状である。底面の東側小口部分に、南北長20cm、東西幅７cm、高さ５cmを測る段を検出した。この段上に角礫１個を検出した。枕と思われる。よって、遺体の頭位は東側となる。角礫以外、人骨、遺物の出土はみられなかった。

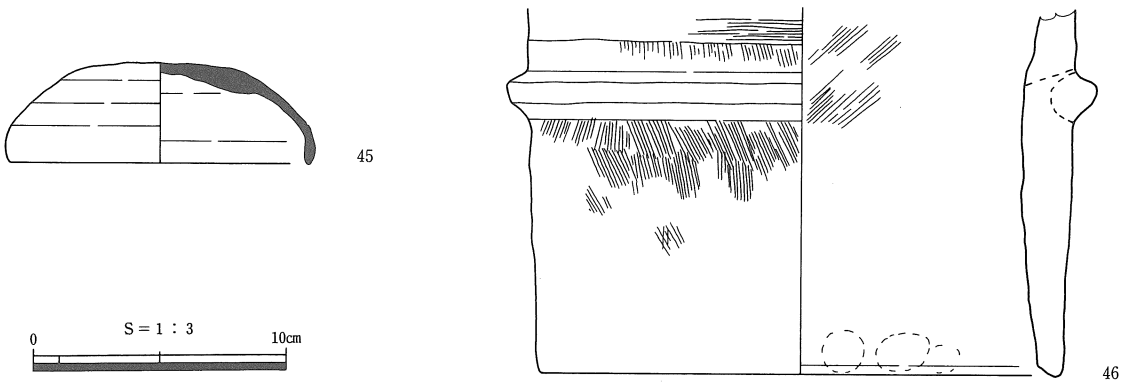
主体部は、木蓋土壙墓であると考える。枕石が東側壁面にほぼ接するような位置にあり、このことから小口板は置かれなかったとみてよく、墓壙内に棺は組まれなかったと考える。時期を示す遺物の出土がみられず、推測の域をでないが、陰田41、60号墳との位置関係や、本主体部が60号墳の主体部２に共通する枕石を伴う木蓋土壙墓である点などから、41、60号墳に近い時期の築造と考える。

・陰田横穴群（第４図）

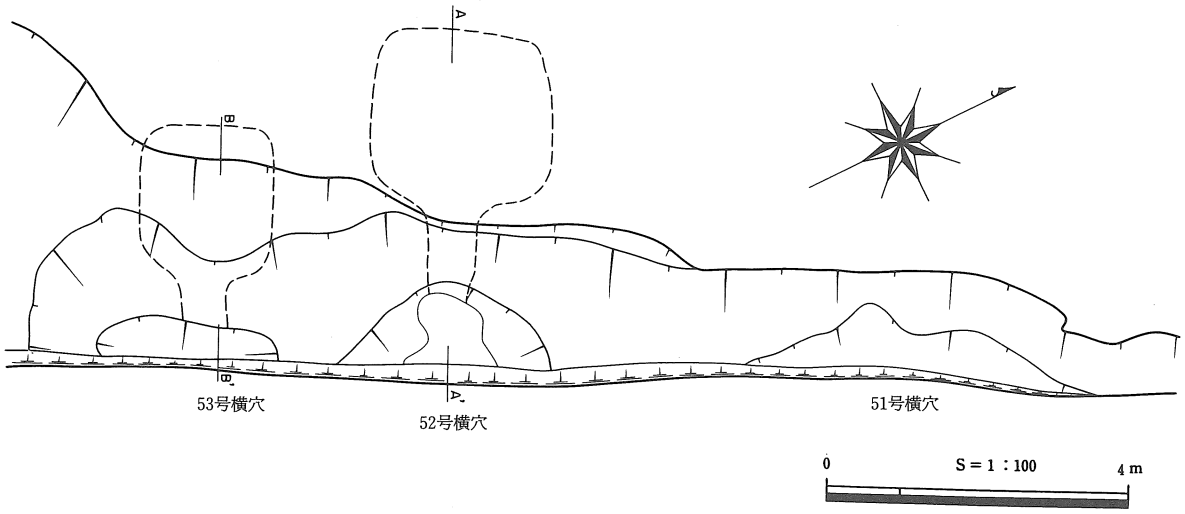
陰田横穴群は、天神山丘陵の東側斜面部及び久幸山丘陵の北側斜面部に形成されたもので、前者をＡ群、後者をＢ群と呼称する。Ａ群では、横穴23基、未完成横穴３基、小横穴15基、Ｂ群では横穴４基、小横穴５基が検出されている。後背に周溝、墳丘を伴う横穴も確認されている。６世紀後葉から築造が開始され、７世紀中葉に築造が終わり、７世紀末～８世紀前葉まで追葬が行われたことが確認されている（註12）。陰田29号横穴は、以前の調査でＡ群に属する未完成横穴であることが確認されており、当時調査区外であった部分を今回調査した。51～54号横穴は、Ａ群の西側延長部に所在する。55号横穴は、Ｂ群の丘陵を挟んだ裏側に所在する。従来横穴が確認されていない地区である。

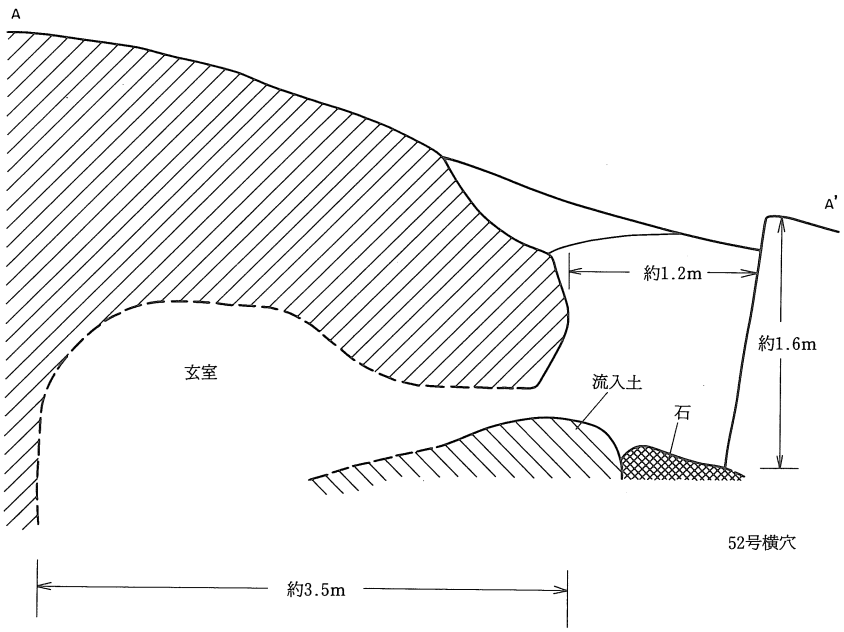


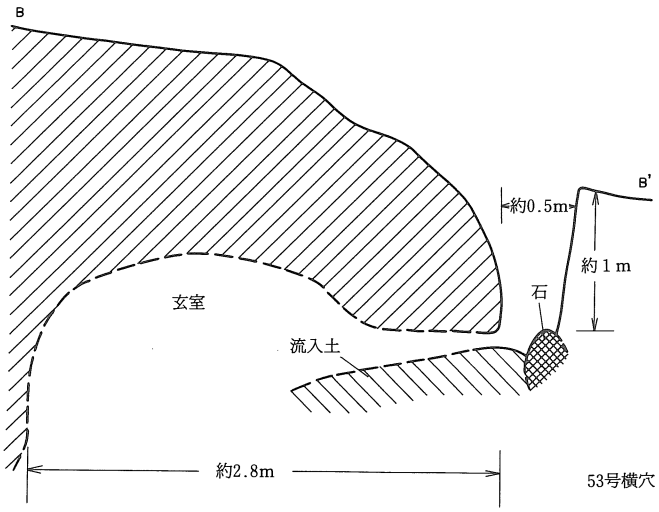
第41図　29号横穴実測図



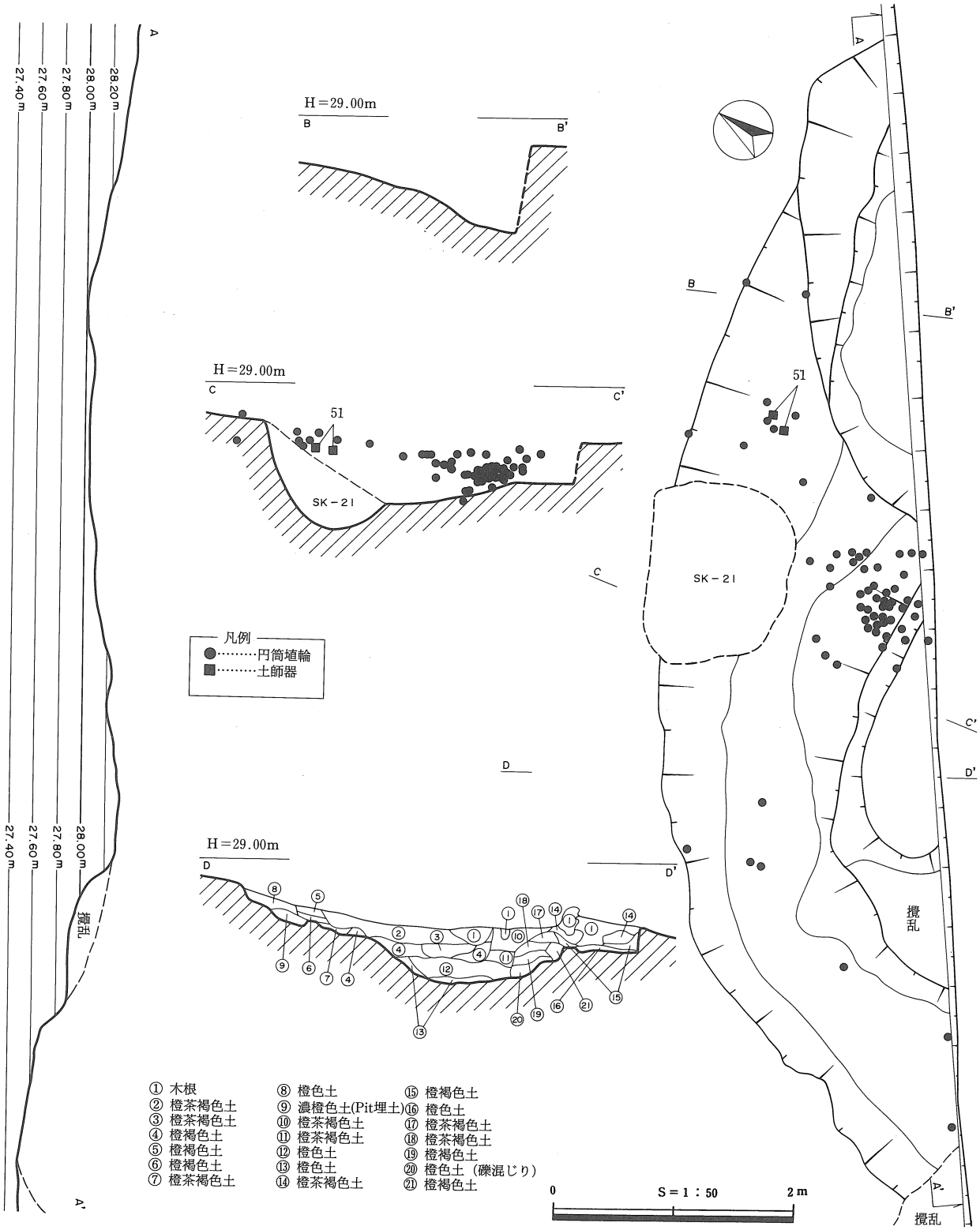
第42図　29号横穴出土遺物実測図



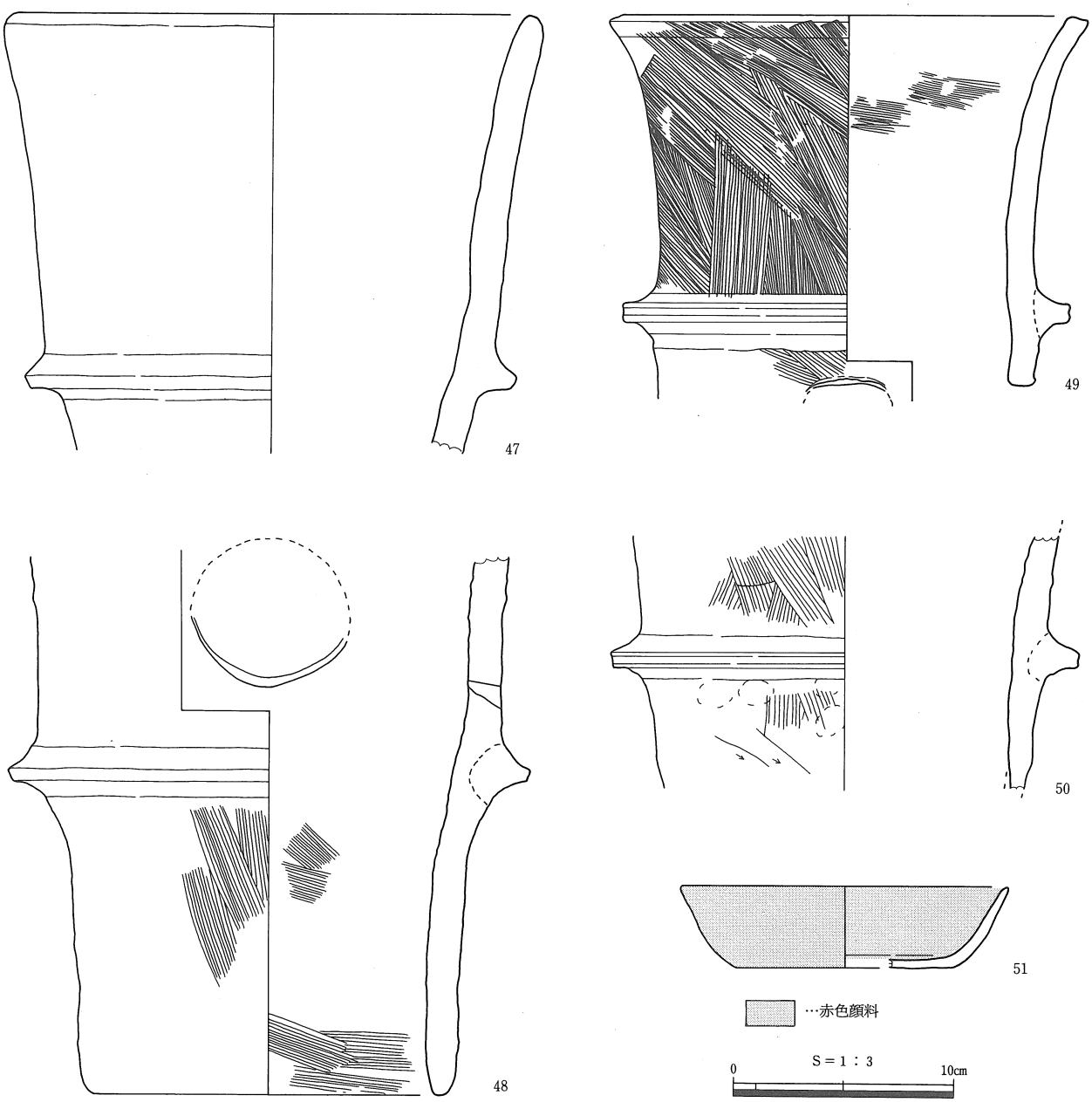




第43図　51号、52号、53号横穴実測図および断面概念図



第44図　54号横穴実測図



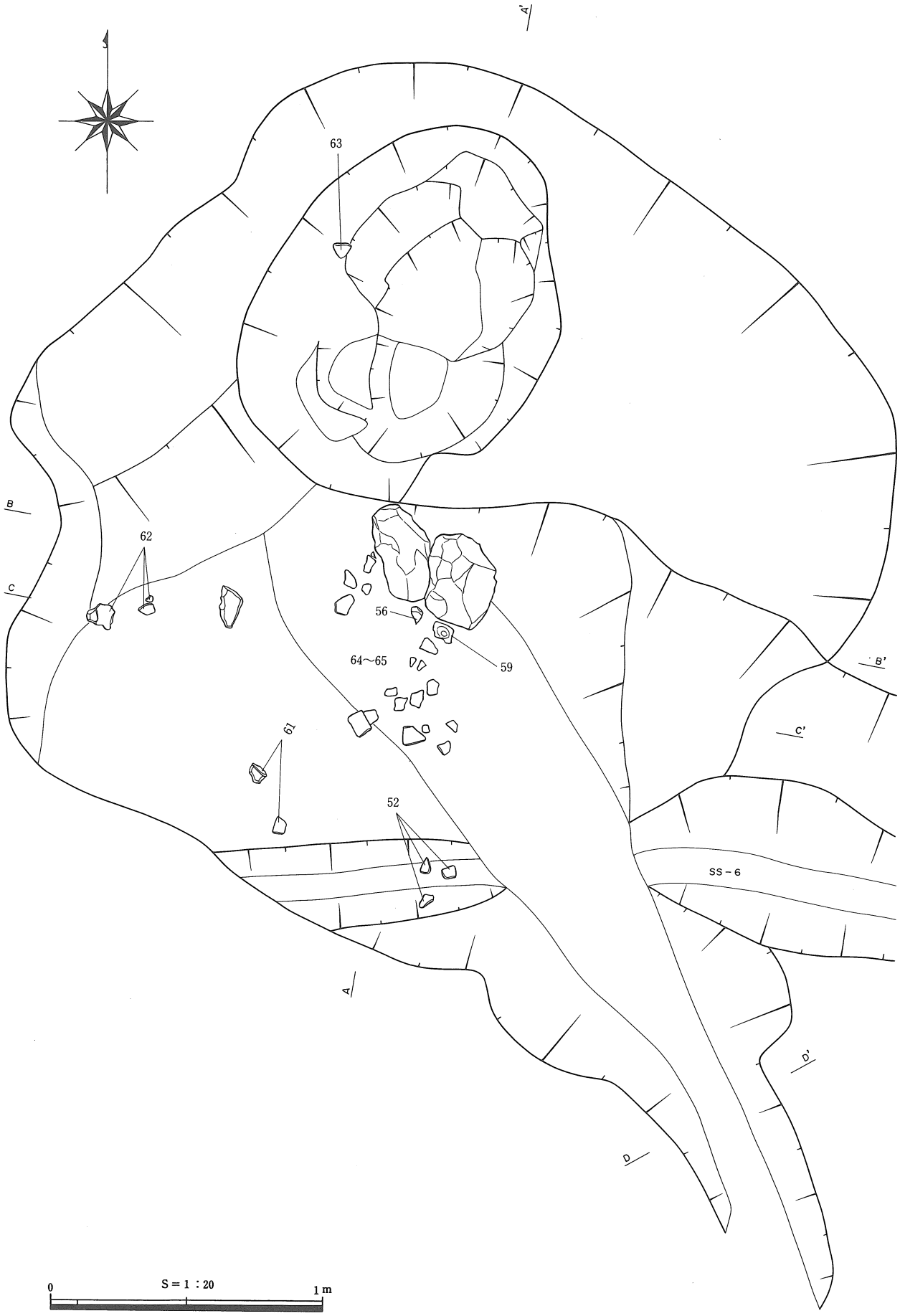
第45図　54号横穴遺物実測図

・**陰田29号横穴**（第41、42図・写真図版11）

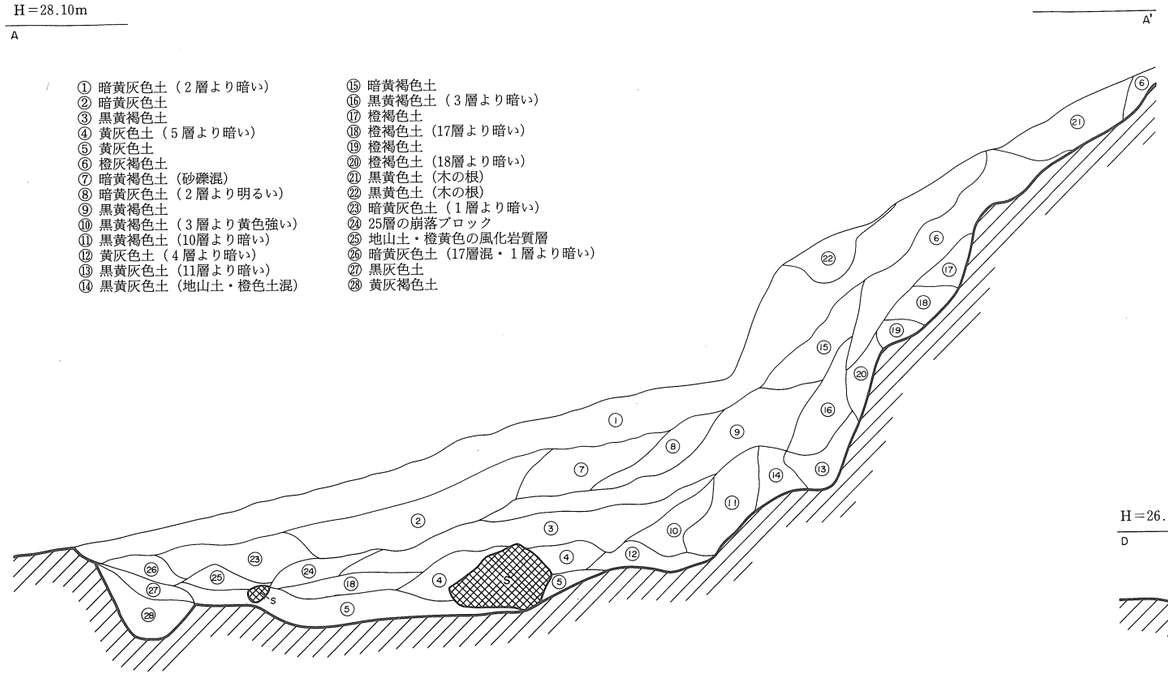
B区の東端の狭長な調査区で検出した。過去の調査で未完成横穴であることが確認されている。岩質の卓越した場所である。高さ約１ｍの段を約50㎝の幅で確認した。横穴の前庭を意図した箇所の壁面と思われる。埋土中から45、46が出土した。45は床面上から出土した。須恵器の坏蓋である。陰田編年の７式（７世紀中葉）相当か。46は混入と思われる。円筒埴輪の基部である。底部再調整の指押さえが観察される。

・**陰田51～53号横穴**（第43図・写真図版11）

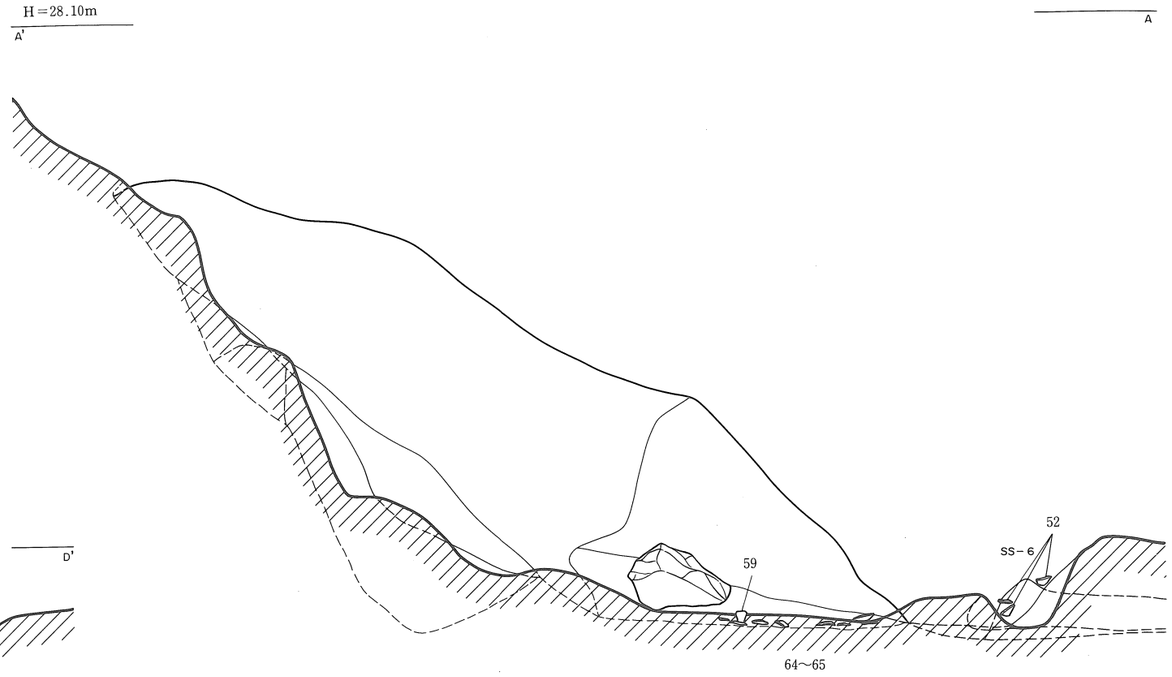
いきさつは第２節に述べたとおりであり、急遽埋め戻したため、詳細なデータを採っていない。平面を平板測量し、断面を略測した結果を示すに留まる。まず丘陵を広く掘削してから、その範囲内に３基を築造している。広い範囲の掘削は、３基が同一支群であることを示唆するものである。51号横穴は、３基中最も北東寄りの位置にあたる。地山加工の痕跡を確認したのみだが、他の２基の状況から推して、羨門部上方部分と判断される。52号横穴は、３基の中央に位置する。調査区界法面から約1.2m、表土上面から約1.6mを測る地点に羨門が開口した。かなりの流入土で羨門部は塞がっていたが、内部には空間が広がっているようである。玄室の奥行きは約3.

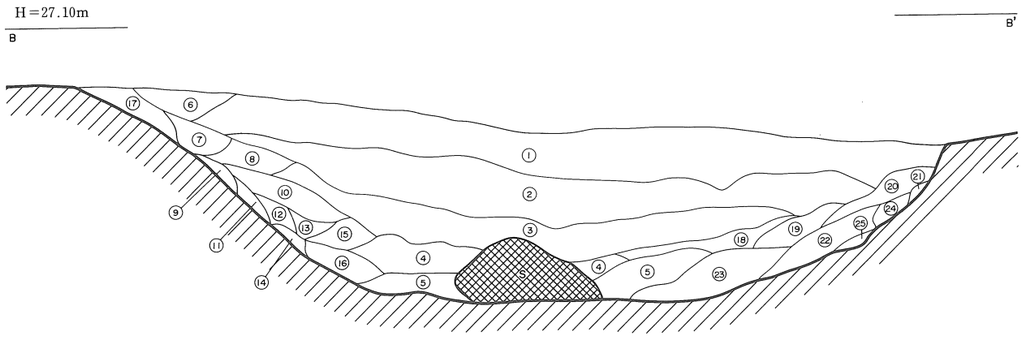


第46図　55号横穴実測図

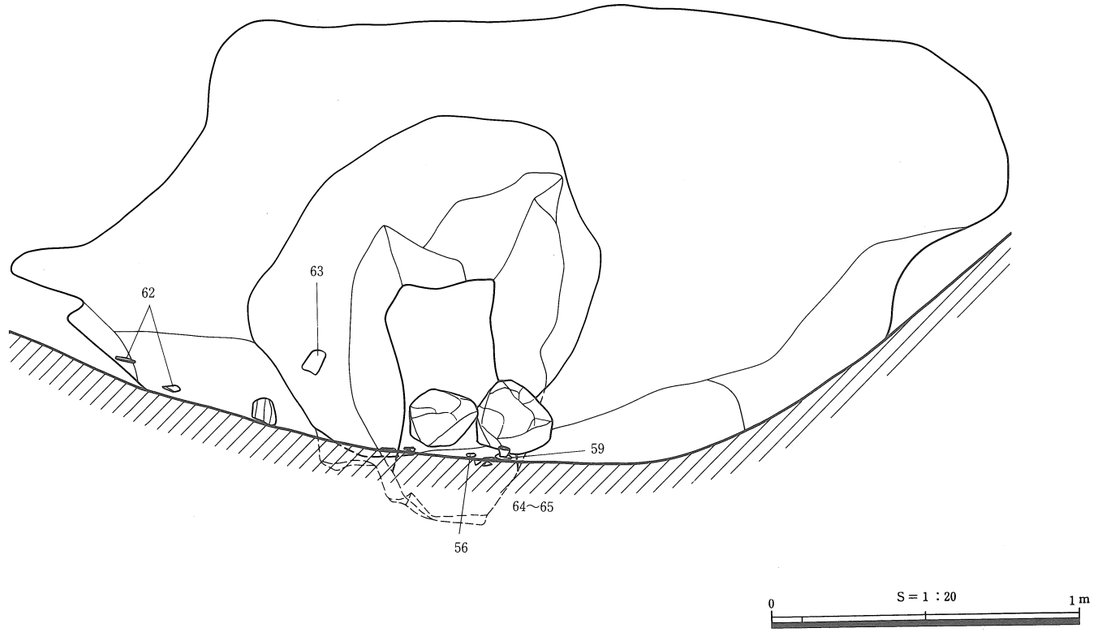


① 暗黄灰色土（２層より暗い）
② 暗黄灰色土
③ 黒黄褐色土
④ 黄灰色土（５層より暗い）
⑤ 黄灰色土
⑥ 橙灰褐色土
⑦ 暗黄褐色土（砂礫混）
⑧ 暗黄灰色土（２層より明るい）
⑨ 黒黄褐色土
⑩ 黒黄褐色土（３層より黄色強い）
⑪ 黒黄褐色土（10層より暗い）
⑫ 黄灰色土（４層より暗い）
⑬ 黒黄灰色土（11層より暗い）
⑭ 黒黄灰色土（地山土・橙色土混）
⑮ 暗黄褐色土
⑯ 黒黄褐色土（３層より暗い）
⑰ 橙褐色土
⑱ 橙褐色土（17層より暗い）
⑲ 橙褐色土
⑳ 橙褐色土（18層より暗い）
㉑ 黒黄色土（木の根）
㉒ 黒黄色土（木の根）
㉓ 暗黄灰色土（１層より暗い）
㉔ 25層の崩落ブロック
㉕ 地山土・橙黄色の風化岩質層
㉖ 暗黄灰色土（17層混・１層より暗い）
㉗ 黒灰色土
㉘ 黄灰褐色土





① 暗黄灰色土（２層より暗い）
② 暗黄灰色土
③ 黒黄灰色土（18層より暗い）
④ 黄灰色土（５層より暗い）
⑤ 黄灰色土
⑥ 暗黄灰色土（17層少量混）
⑦ 暗黄灰色土（17層混）
⑧ 暗黄灰色土（17層多量混）
⑨ 17層の崩落ブロック
⑩ 黒黄褐色土（17層混）
⑪ 暗橙褐色土
⑫ 黒黄褐色土（17層混・10層より暗い）
⑬ 黄灰色土（砂礫混）
⑭ 暗橙褐色土
⑮ 黄灰色土（４層より暗い）
⑯ 黄灰色土（15層より暗い）
⑰ 地山土・赤橙色土
⑱ 黒黄灰色土
⑲ 黄褐色土（23層より暗い）
⑳ 黄茶褐色土
㉑ 橙色土
㉒ 黄褐色土（地山ブロック混・19層よりやや暗い）
㉓ 黄褐色土
㉔ 25層の崩落ブロック
㉕ 地山土・橙黄色の風化岩質層



第47図　55号横穴断面実測図

5m程度と思われる。閉塞石と思われる礫を、調査区界法面に挿し挟まった状態で確認した。53号横穴は、３基中最も南西寄りの位置にあたる。調査区界法面から約0.5m、表土上面から約１ｍを測る地点に羨門が開口した。かなりの流入土で羨門部は塞がっていたが、内部には空間が広がっているようである。玄室の奥行きは約2.8m程度と思われる。閉塞石と思われる礫を、調査区界法面に挿し挟まった状態で確認した。これら３基の横穴の時期を示す遺物の出土はみられず、また後背墳丘等の施設は確認できなかった。

・**陰田54号横穴**（第44、45図・写真図版12、74）

横穴の後背墳丘及び後背周溝を検出した。墳丘はいびつな形状だが、円形を指向するものと思われる。東西4.2m、南北1.2mの半月形の範囲で検出した。墳裾のラインから推定される墳丘の円弧の半径は、2.6mである。Ｄ－Ｄ'ラインの土層断面によれば、14～21層による盛土が観察される。墳裾からの高さは、40cm以上となるであろう。地山整形後盛土による整形が行われたものとみられる。周溝は、東西9.5m、南北2.3mの半月形の範囲を検出した。周溝外側ラインから推定される周溝の円弧の半径は、6.8mである。周溝底までの深さは、約70cmである。周溝の断面形は椀形である。周溝の北東側は他の周溝と重複している可能性もある。遺物は、円筒埴輪片が墳丘の北東側墳裾部に集中して出土した。完形に接合できるものはなかったが、複数個の個体が確認できた（47～50）。埴輪棺を形成するものではなく、また墳裾に樹立されたものでもなかった。墳丘上に据え置かれたものが転落した可能性は残る。５１の丹塗り椀は、周溝内への流れ込み遺物である。

・**陰田55号横穴**（第46～48図・写真図版13）

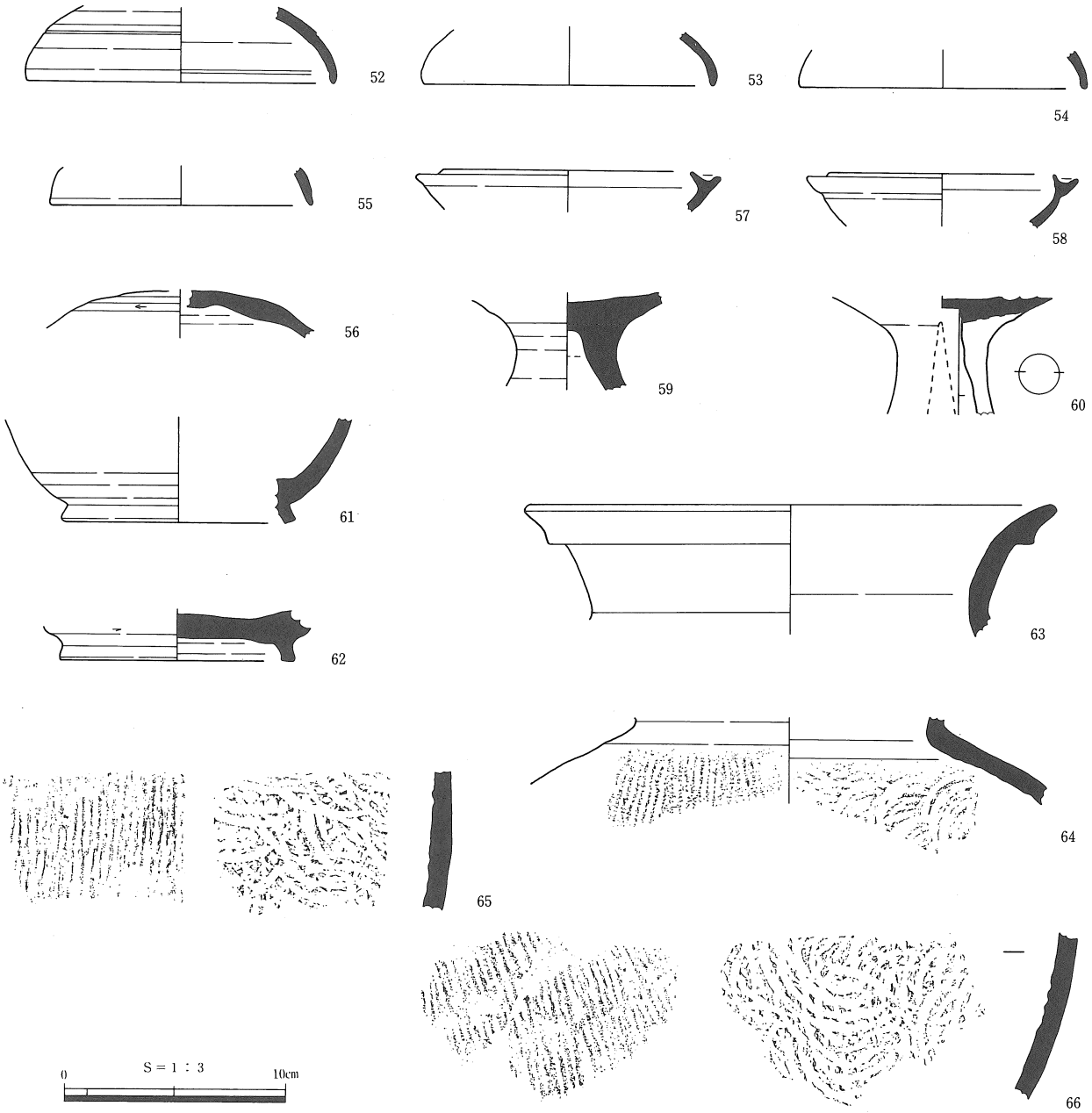
未完成横穴である。テラス状遺構ＳＳ－６の溝を切っている。ＳＳ－６、７で造成されたテラス状地形の後背崖面を利用しようとしたものであるが、横穴を掘り進めていく過程で、岩脈に当たり、構築を断念したものと思われる。墓道から前庭部に至り、羨門を掘りかけたところで中断されている。墓道は、外方に向け先細りで、前庭部に向けて開く溝状を呈する。検出面で幅40cm、底面で幅15cm、深さ10cmを測る。前庭部は、東西３m、南北1.7mの範囲に擂鉢状のくぼみを設けている。墓道から引き続き55cmの底面幅で、羨門方向へ導く。Ｂ－Ｂ'ラインでは、深さ75cmを測る。墓道から前庭部にかけては、羨門に対し正面からではなく、南東方向にあたる斜め方向から入場する形になっており、羨門の正面に対峙した場合の中心軸と墓道－前庭部の中心軸とは、30°のずれを生じる。羨門側崖面の掘削は、東西3.3mの幅に及び、その高さは1.45mを測る。羨門直前の底面は、深さ20cm程度くぼむ。羨門に相当する箇所は、いびつな稜線が走り、掘削をさらに試みた様子が窺える。羨門前の前庭部底面上では、30～40cm大の礫を２個、接するように検出した。また、前庭部底面直上から須恵器片の出土がみられた。完形になるものはなく、いずれも破片であり、横穴構築放棄後の上方からの転落遺物と考える。埋土の堆積状況に、人為的な埋め戻しは窺われなかったことから、構築断念後は、放置されていたものと推察される。

出土遺物はいずれも須恵器で、52～58は蓋坏である。59、60は高坏、61、62は壺の底部、63～66は甕である。52、56はやや古い要素をもつが、53～55、57、58は陰田編年の７式（７世紀中葉）相当と思われる。

当横穴の出土遺物が、横穴構築放棄後の転落遺物であることから、当横穴は７式以降の所作と言える。７式は、Ａ群においては横穴の構築が停滞する段階であり、一方Ｂ群では、32号横穴のみが存在した時期である。８式に至り、Ｂ群に31、33、34号が構築され、これをもって陰田横穴群の構築は終焉する。31、33、34号横穴が、32号横穴と同一支群であることから、32号横穴構築後に構築場所の変更を意図したとは考え難い。よって、８式以降に新たに横穴を構築しようとしたが果たせなかったものと推察される。しかし、造られなかった横穴が、その後どこに築かれたのか、不明である。

５　古墳時代後期～奈良時代の遺構（ＳＩ－７～13、ＳＳ－２～24、ＳＢ－１、２、10、ＳＤ－３、４、ＳＫ－１～６、ＳＣ－１～８）

本遺跡からは、古墳時代後期～奈良時代にかけての遺構として、竪穴住居跡７棟（ＳＩ－７～13）、テラス状遺構23基（ＳＳ－２～24）、掘立柱建物３棟（ＳＢ－１、２、10）、溝状遺構２条（ＳＤ－３、４）、土坑６基（ＳＫ－１～６）を検出した。

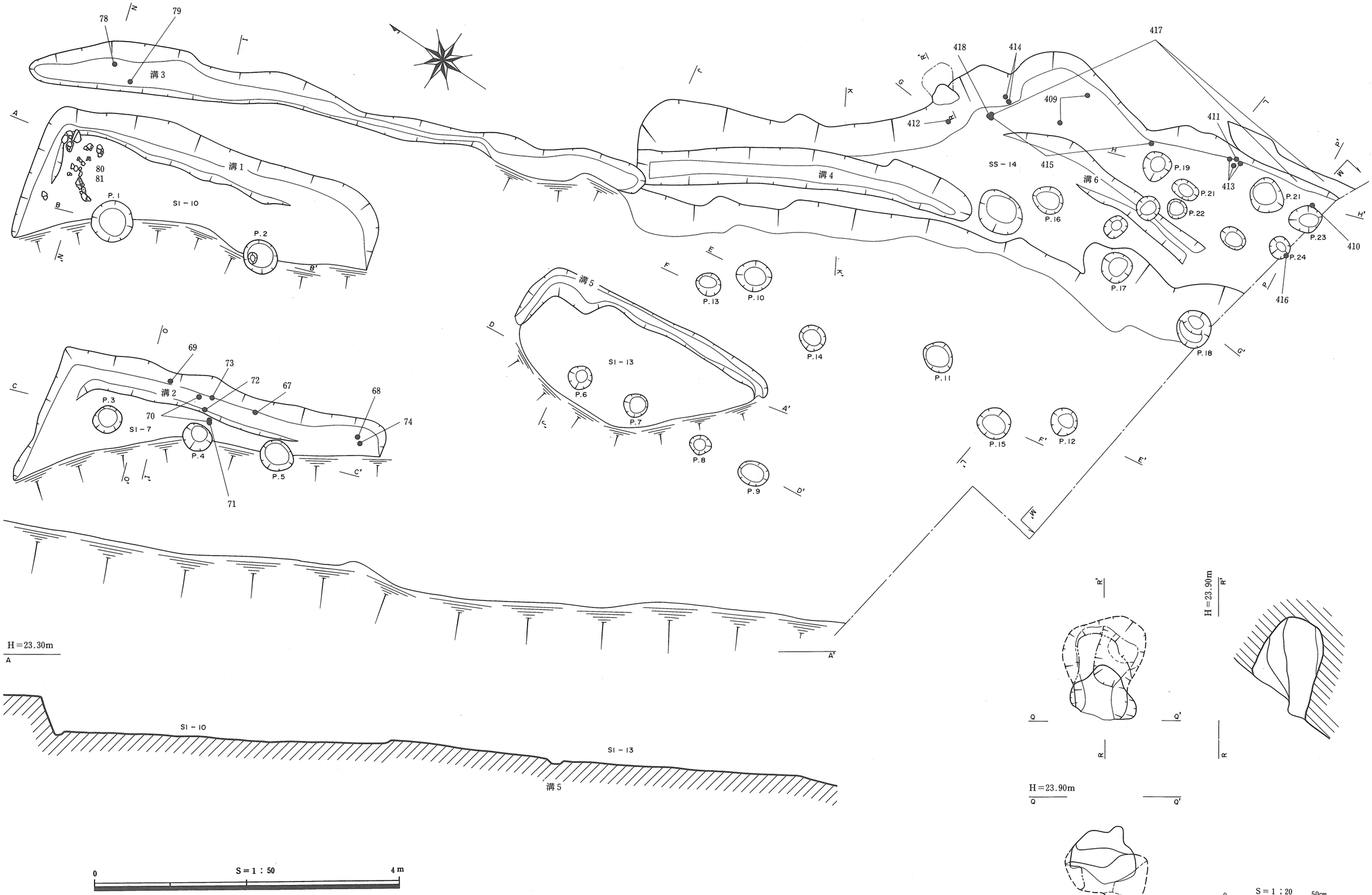


第48図　55号横穴出土遺物実測図

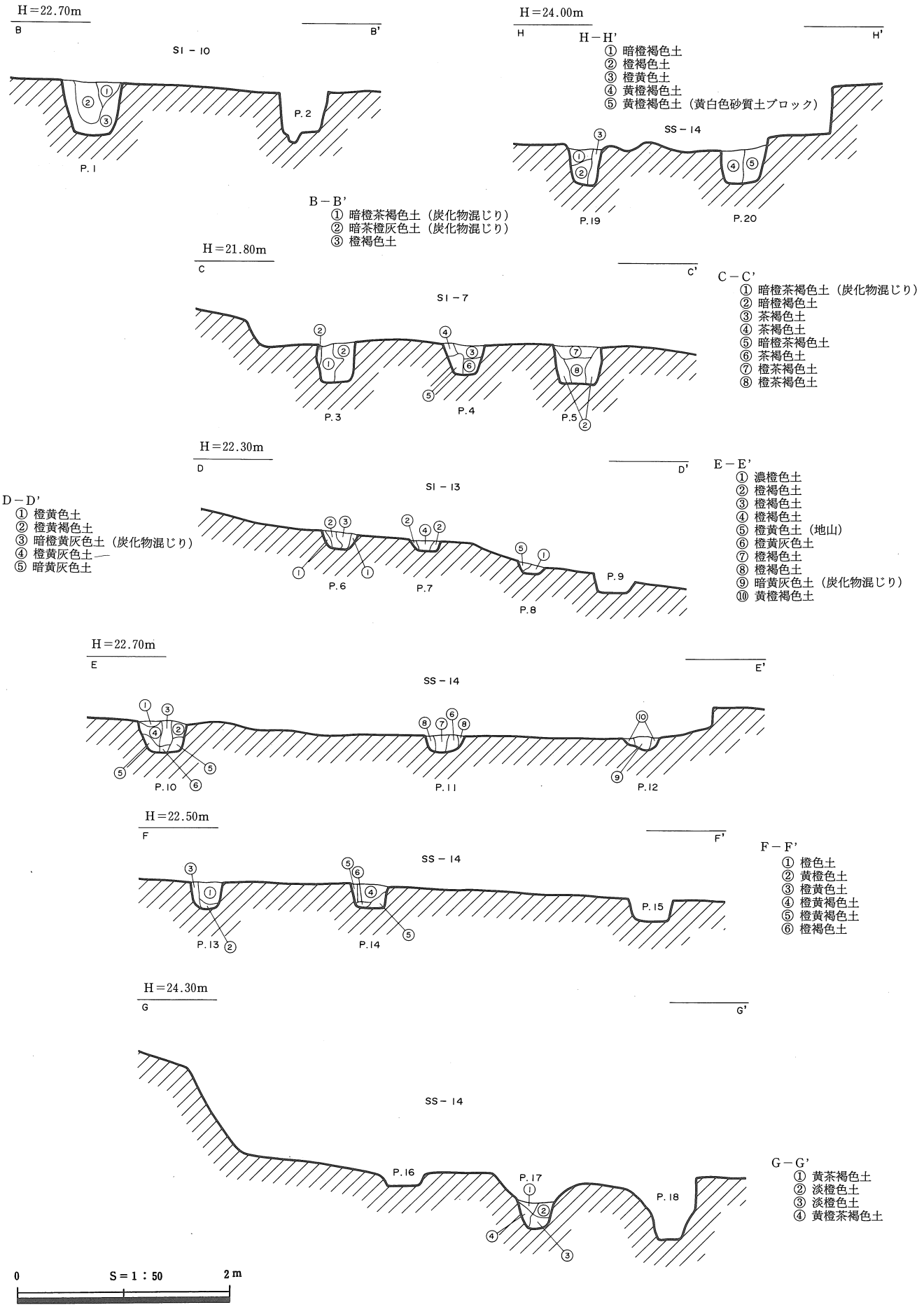
・竪穴住居跡

竪穴住居跡として、ＳＩ－７～13の７棟を検出した。丘陵斜面部を直立気味に掘削し床面を構築した住居跡である。掘削によって生じた廃土を斜面部に盛土し、床面を造成したものと考える。基本的に壁面裾部には側溝を設けている。盛土、造成した床面の低位側はともに流失しており、どの遺構も住居の構造を明確に把握することはできなかった。壁面や側溝の構築状況から、平面プランはともに方形を呈するものと考える。７棟いずれもＡ区の丘陵斜面裾部に構築されており、標高17～18.5mに３棟、標高21～26.5mに４棟を互いに近接して検出した。

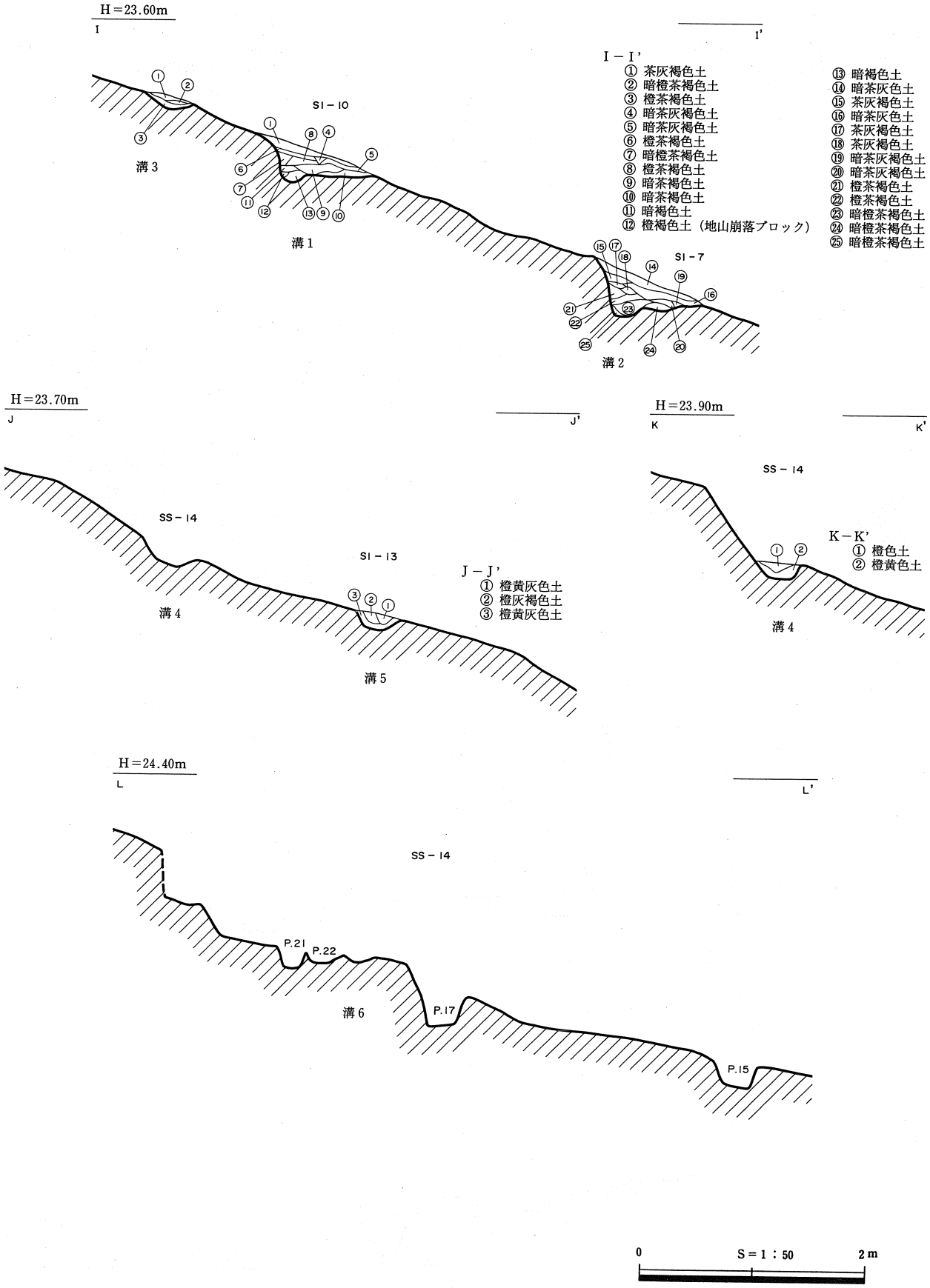
ＳＩ－７（第49～53図・写真図版14）は、標高約21mに位置し、Ａ区東側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺が約４mを測る方形の竪穴住居跡である。西側は流失しており、原形をとどめていない。残存壁高は、東壁で約50cmを測る。壁面裾部には、幅約30cm、深さ約10cmの側溝（溝２）を検出した。斜面の約３m上方にはＳＩ－10が位置する。



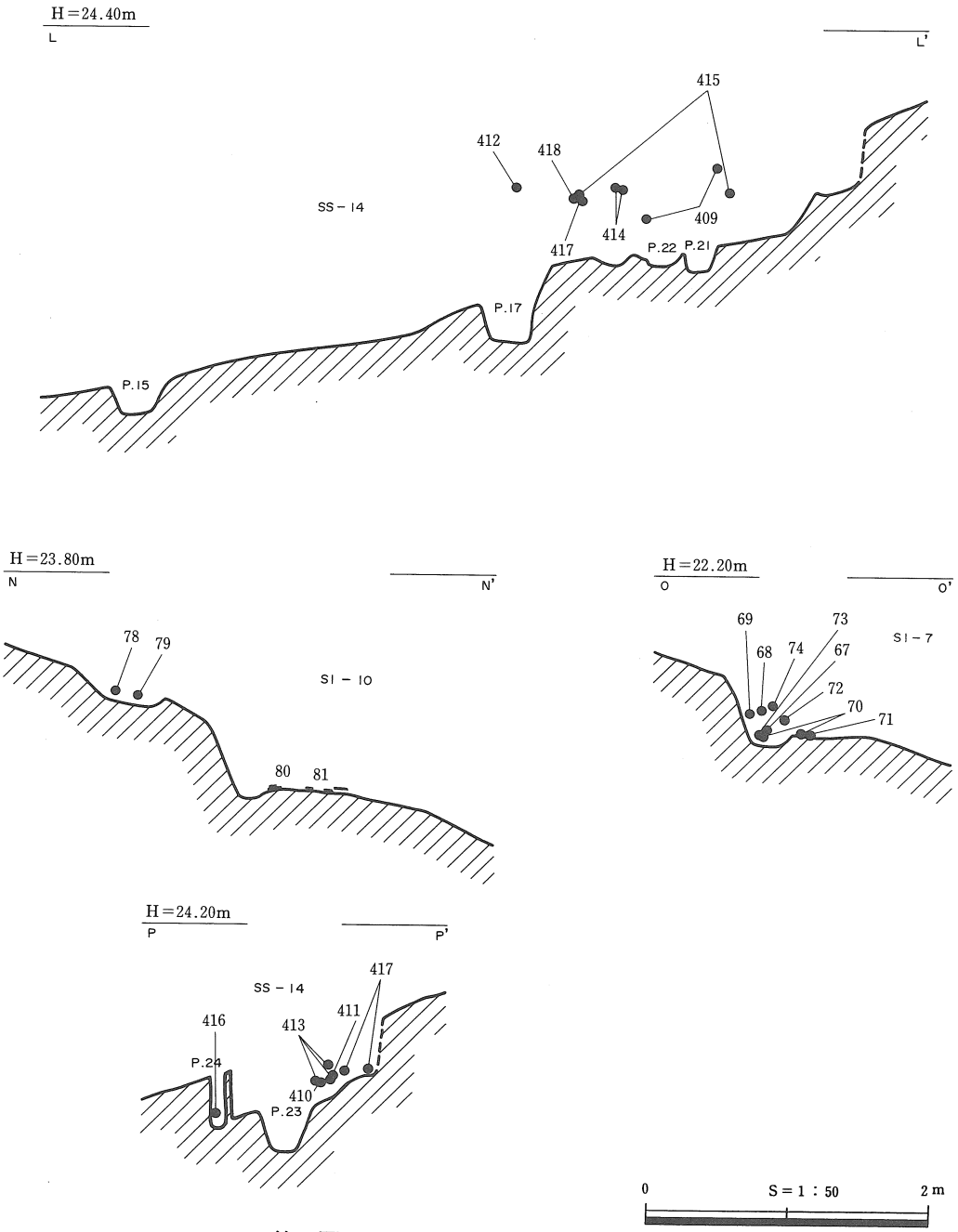
第49図　ＳＩ－７、10、13、ＳＳ－14実測図



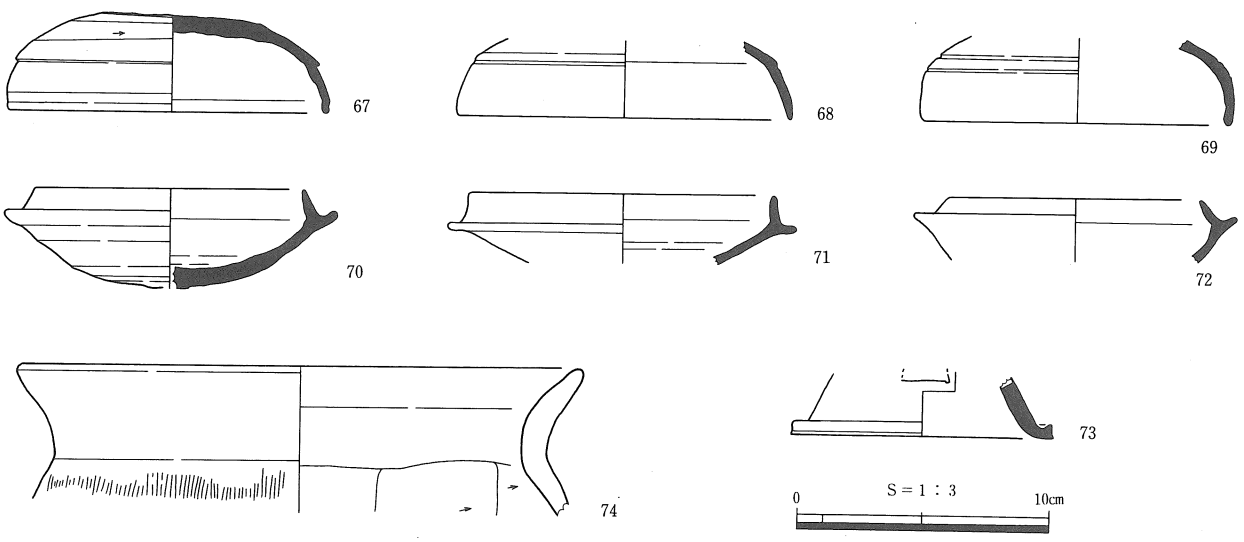
第50図　ＳＩ－７、10、13、ＳＳ－14断面実測図(1)



第51図　ＳＩ－７、10、13、ＳＳ－14断面実測図(2)



第52図　ＳＩ－７、10、ＳＳ－14断面実測図



第53図　ＳＩ－７出土遺物実測図

床面には、３基のピット（Ｐ．３～５）を検出した。Ｐ．３～５は、直径30～40cm、深さ30～40cmを測り、直線上に位置する。ピット間距離は、Ｐ．３、４で約1.2m、Ｐ．４、５で約１ｍを測る。ピットの配置状況から、ＳＩ－７はＰ３、５を主柱穴とする４本柱の住居跡と推測される。Ｐ．４は補助的な柱穴か。

遺物は、須恵器の蓋坏、高坏の脚部、土師器の甕が出土した。67～69は坏蓋である。67は、溝２上の中央やや南側に、浮いた状態で出土した。口縁部と天井部の間に段を設け、稜が突出する。天井部は、ヘラ切り後ナデている。68は床面南端に浮いた状態で出土した。口縁部と天井部の間に段を設け、稜は小さく突出する。69は、溝２上の中央やや北側に、浮いた状態で出土した。口縁部と天井部の間に段を設けているが、稜の突出は鈍い。70～72は坏身である。70は溝２底面上とＰ．４東側肩部付近にほぼ床面直上で出土した。立ち上がりが内傾し、受部はやや上方にのびる。底部は丸みを帯び、ヘラ切り後ナデている。71はＰ．４東側肩部付近にほぼ床面直上で出土した。直立する立ち上がりをもち、受部は水平にのびる。72は溝２上に浮いた状態で出土した。立ち上がりは内傾し、受部はやや上方にのびる。73は高坏の脚部である。透かしを施している。74は甕の口縁部である。床面南端に浮いた状態で出土した。外反する口縁部で、外面にはハケメが見られる。これらの遺物は、陰田編年５式（６世紀末～７世紀初頭）に比定される。

ＳＩ－８（第54～57図・写真図版15）は、標高約17.5mに位置し、Ａ区北側の丘陵斜面裾部に構築された竪穴住居跡である。幅約15cm、深さ約10cmの側溝を検出した。ＳＩ－11と重複しており、第56図Ｉ－Ｉ'ラインにおける溝２、３の切り合い関係から、ＳＩ－11より古い住居跡であることが確認された。ＳＩ－11の構築に伴い、ＳＩ－８の壁面は削平されたため、明確に遺構の範囲を把握するには至らなかった。壁面は東側が僅かに遺存しており、床面南側は流失している。残存壁高は約25cmを測る。遺構東側はＳＩ－９南西端と切り合っている。切り合いの関係は把握できなかった。側溝と東壁の形状から、ＳＩ－８の平面プランは方形を呈すると推測される。

床面には数基のピットと１条の溝（溝５）を検出した。遺構範囲が明確でなく、ＳＩ－11と重複しているため、どのピットがＳＩ－８に伴うものか判断できない。

遺物は、土師器の小壺（75）が出土している。75は溝３上に浮いた状態で出土した。外反する口縁部で、表面には横方向のハケメが見られる。時期は不詳であるが、古墳時代後期以降であろう。

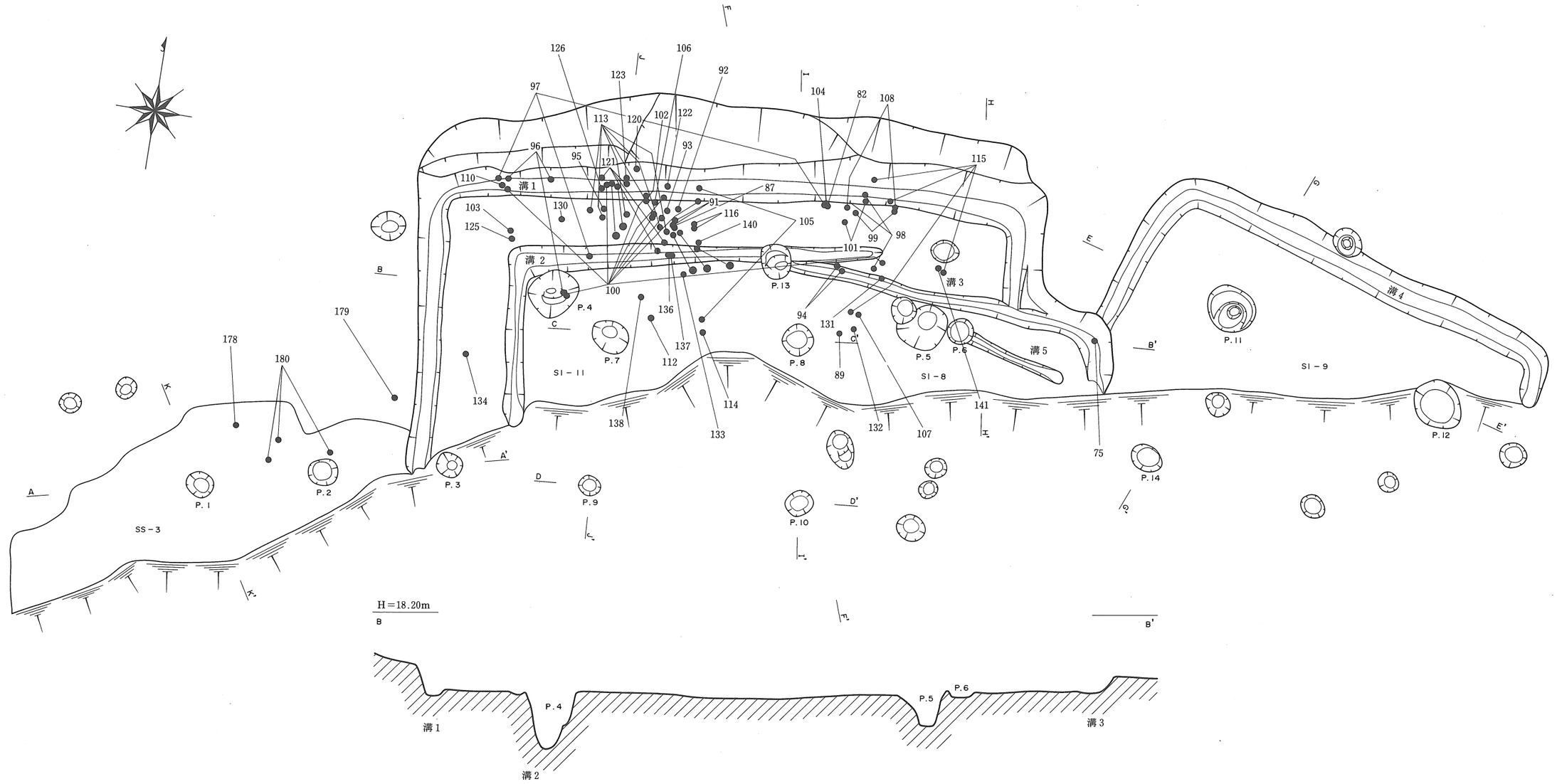
ＳＩ－９（第54、55、58図・写真図版15）は、標高約17.5mに位置し、Ａ区北側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺約4.5mを測る方形の竪穴住居跡である。残存壁高は、北東壁で約40cmを測る。壁面裾部には、幅約25cm、深さ約15cmの側溝（溝４）を検出した。南側は流失している。南西にはＳＩ－８が位置し、切り合っている。切り合いの関係は把握できなかった。

遺構からは８基のピットを検出しており、そのうちの７基は床面に、１基は溝４の北東側肩部に検出した。その配置状況から、ＳＩ－９はＰ11、12、14を主柱穴とする４本柱の住居跡と考える。Ｐ.11は２段掘りになっており、上部は直径約60cm、深さ約５cmを測り、下部は直径約25cm、深さ約50cmを測る。Ｐ.12は直径約60cm、深さ約50cmを測り、Ｐ.11とのピット間距離は約2.5mを測る。Ｐ.14は直径約30cm、深さ約30cmを測るが、上部を流失しており、本来はＰ.11、12と同規模の深さを測るピットであったと推測される。Ｐ.11とのピット間距離は約２mを測る。

遺物は、須恵器の坏蓋（76、77）が出土した。76は口縁部と天井部の間に段を設けているが、稜は突出しない。77はやや外反した口縁部をもつ。これらの遺物は、陰田編年５式（６世紀末～７世紀初頭）に相当する。

ＳＩ－10（第49～52、59図・写真図版14）は、標高約22mに位置し、Ａ区東側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺約4.5mを測る方形の竪穴住居跡である。斜面の約３m下方にはＳＩ－７が位置する。残存壁高は、東壁で約40cmを測る。壁面裾部には、幅約20cm、深さ約10cmの側溝（溝１）を検出した。また後背には、幅約40cm、深さ約20cmを測る溝（溝３）を約８m検出した。ＳＩ－10東壁とほぼ平行に位置しており、ＳＩ－10に伴う遺構と考える。排水施設と推測される。

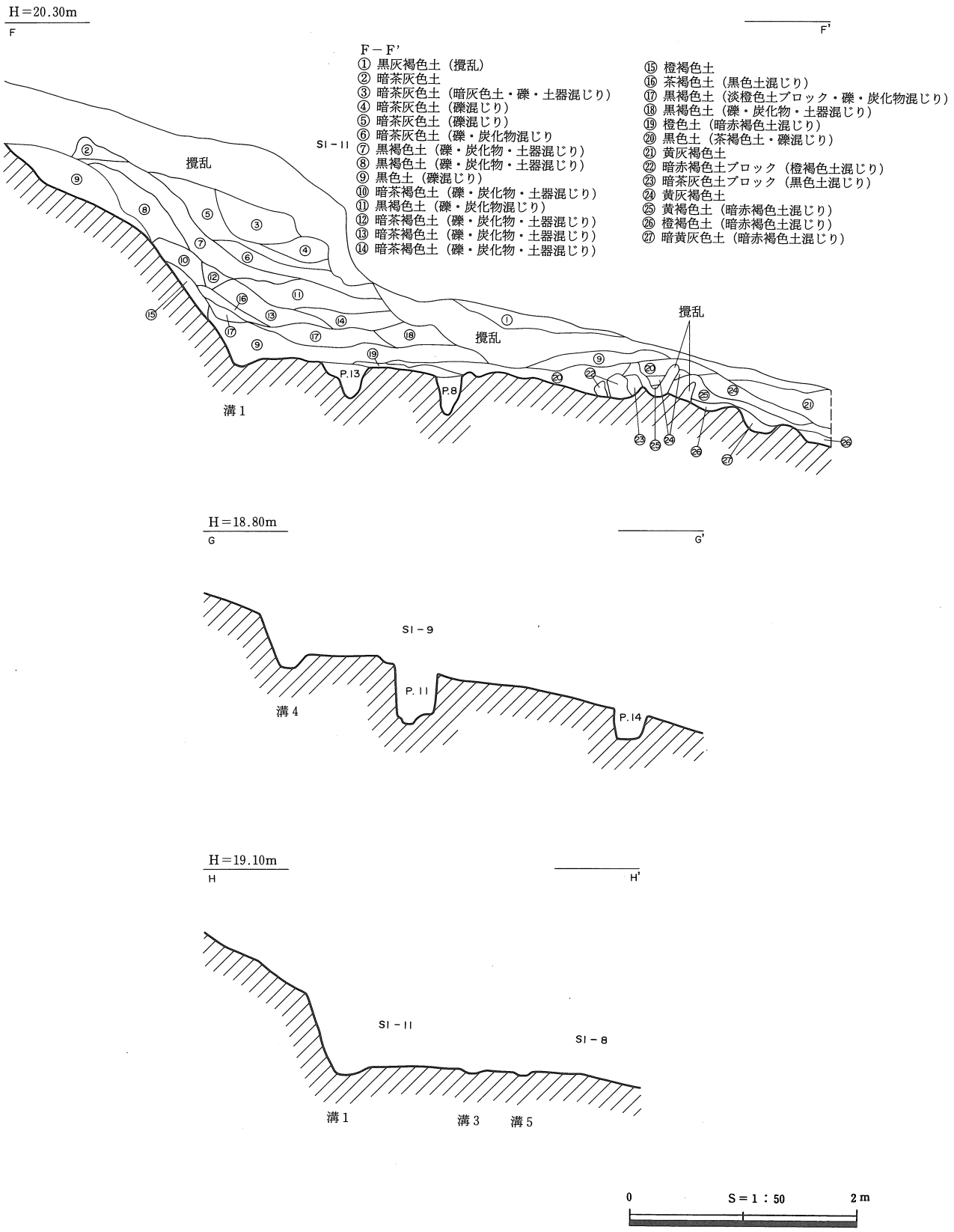
床面には、２基のピット（Ｐ．１、２）を検出した。Ｐ．１、２は直径40～50cm、深さ約50cmを測り、ほぼ同規



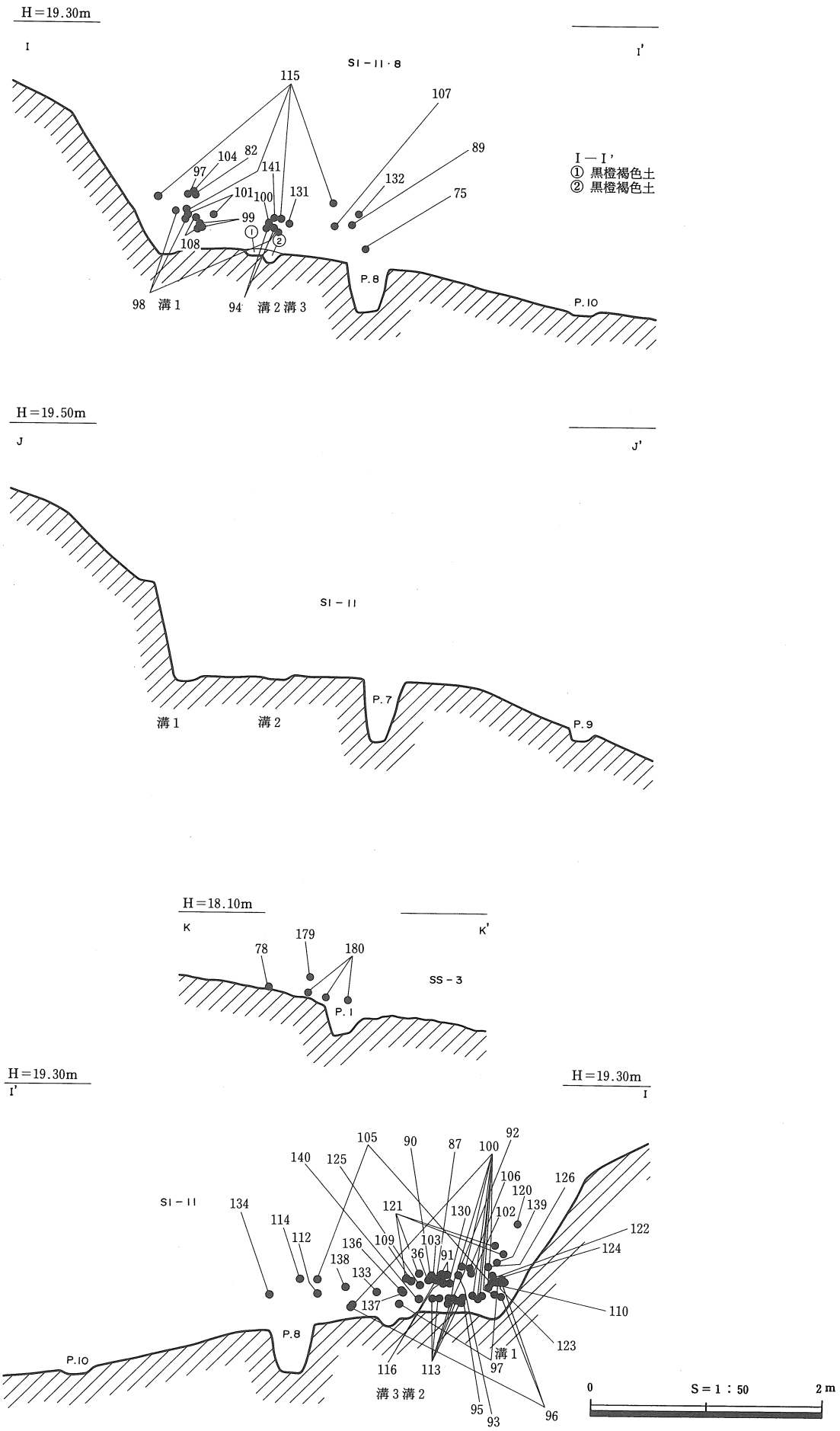
A－A'
① 淡橙灰色土（黄白色土ブロック混じり）
② 淡橙灰色土（黄白色土ブロック混じり）
③ 橙茶灰褐色土
④ 淡橙灰色土
⑤ 橙茶灰色土（炭化物混じり）
⑥ 茶灰褐色土
⑦ 茶灰褐色土
⑧ 橙灰色土（炭化物混じり）

C－C'
① 黒橙褐色土（炭化物混じり）
② 橙茶褐色土

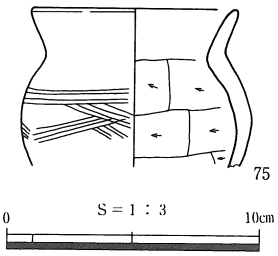
第54図　ＳＩ－8、9、11、ＳＳ－3実測図



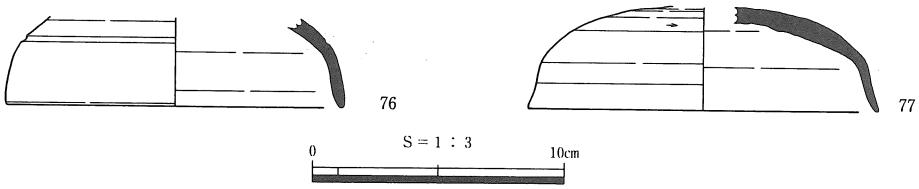
第55図　ＳＩ－８、９、11断面実測図



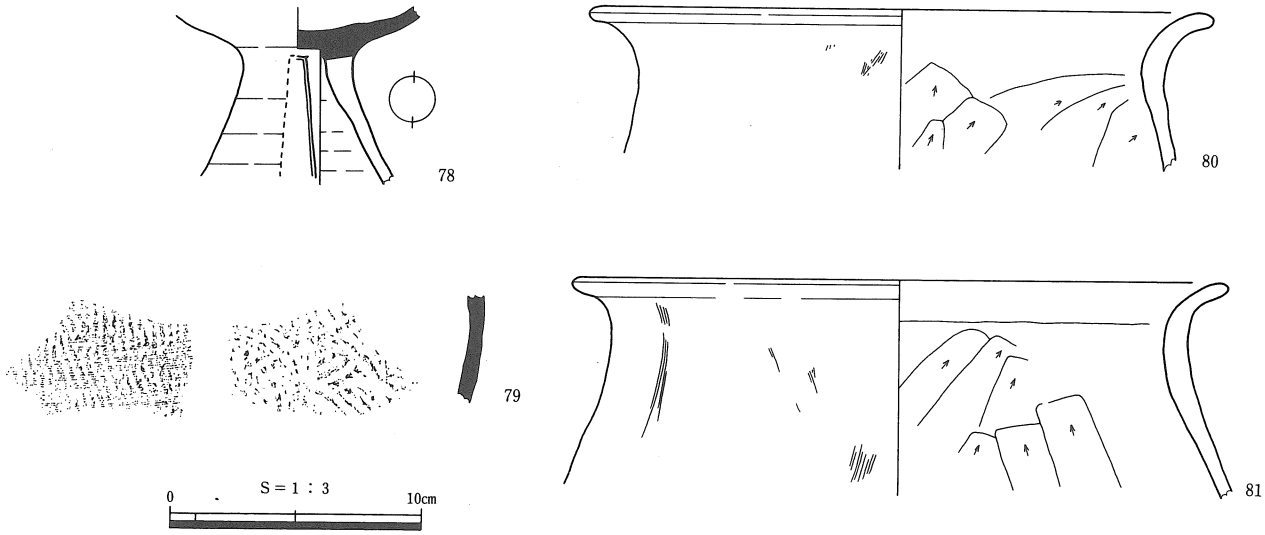
第56図　ＳＩ－８、11、ＳＳ－３断面実測図



第57図　ＳＩ－８出土遺物実測図



第58図　ＳＩ－９出土遺物実測図



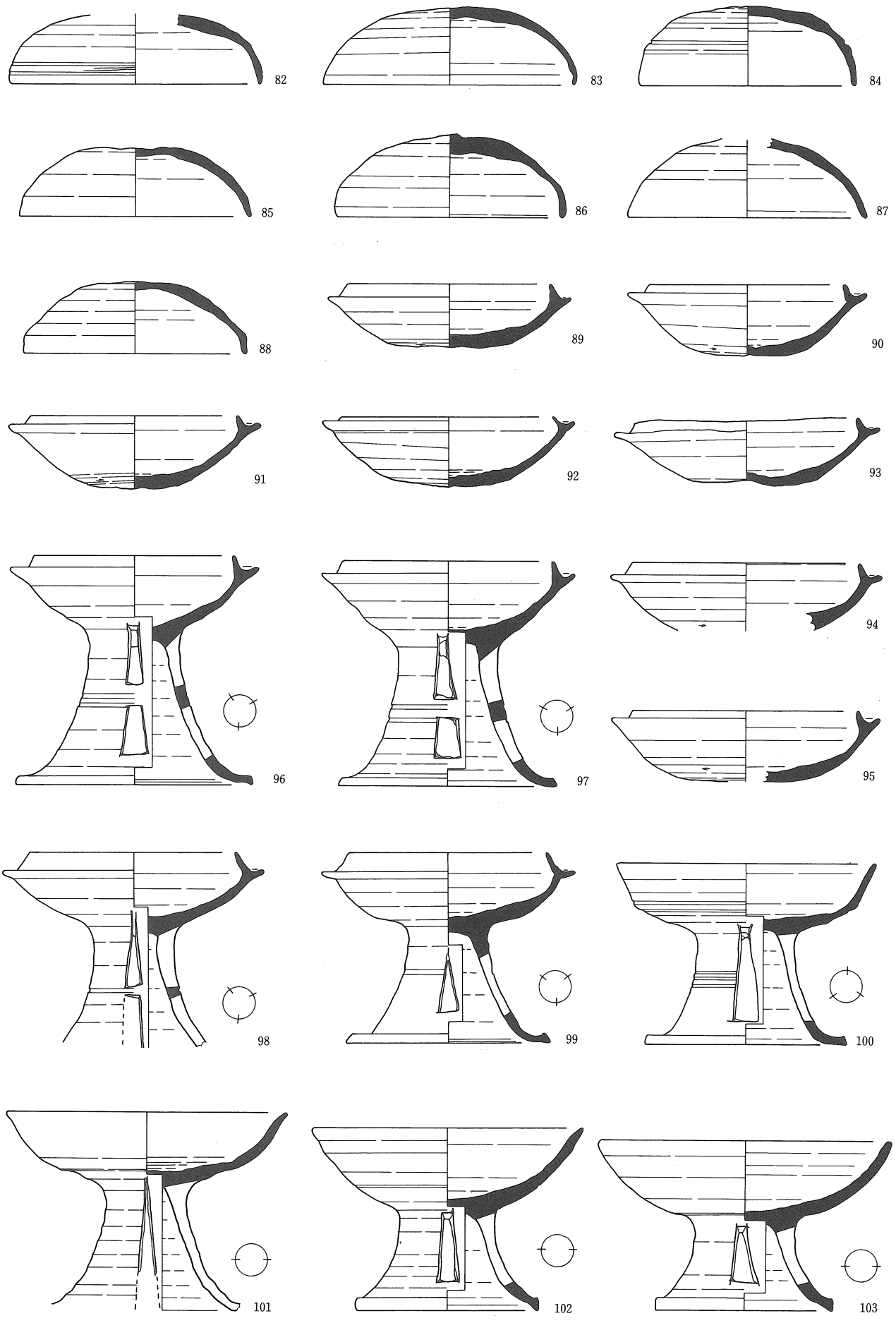
第59図　ＳＩ－10出土遺物実測図

模のピットである。ピット間距離は約２ｍを測る。西側が流失しているため、他のピットを確認できないが、ＳＩ－10はＰ１、２を柱穴とする４本柱の住居跡と推測される。

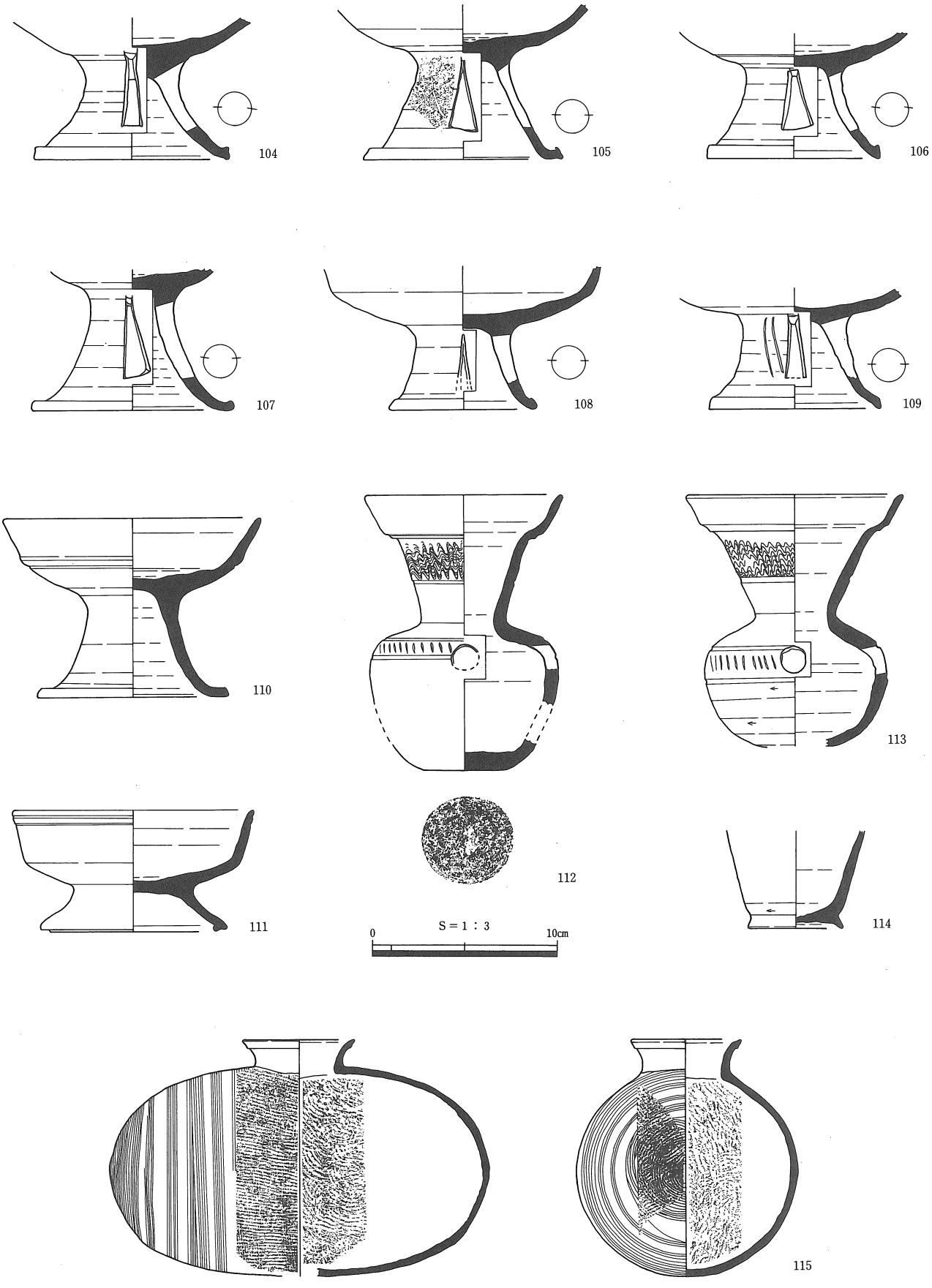
遺物は、須恵器の高坏、甕、土師器の甕が出土した。78は高坏の脚部である。溝３上にやや浮いた状態で出土した。梯形の透かしを施している。79は須恵器の甕の破片である。溝３底面上にやや浮いた状態で出土した。内面には同心円タタキが見られる。80、81は土師器の甕の口縁部である。ともに北側床面直上に出土した。外反する口縁部である。遺物の時期については、78が陰田編年６式（７世紀前葉）相当と考えるが、溝３の埋土中出土であり、遺構の直接的な時期を示すものとは言い難い。

ＳＩ－10は、位置関係から見て、ＳＩ－７廃棄後に新たに上部に構築された住居跡と考える。両住居の出土遺物にも時期的な矛盾はない。

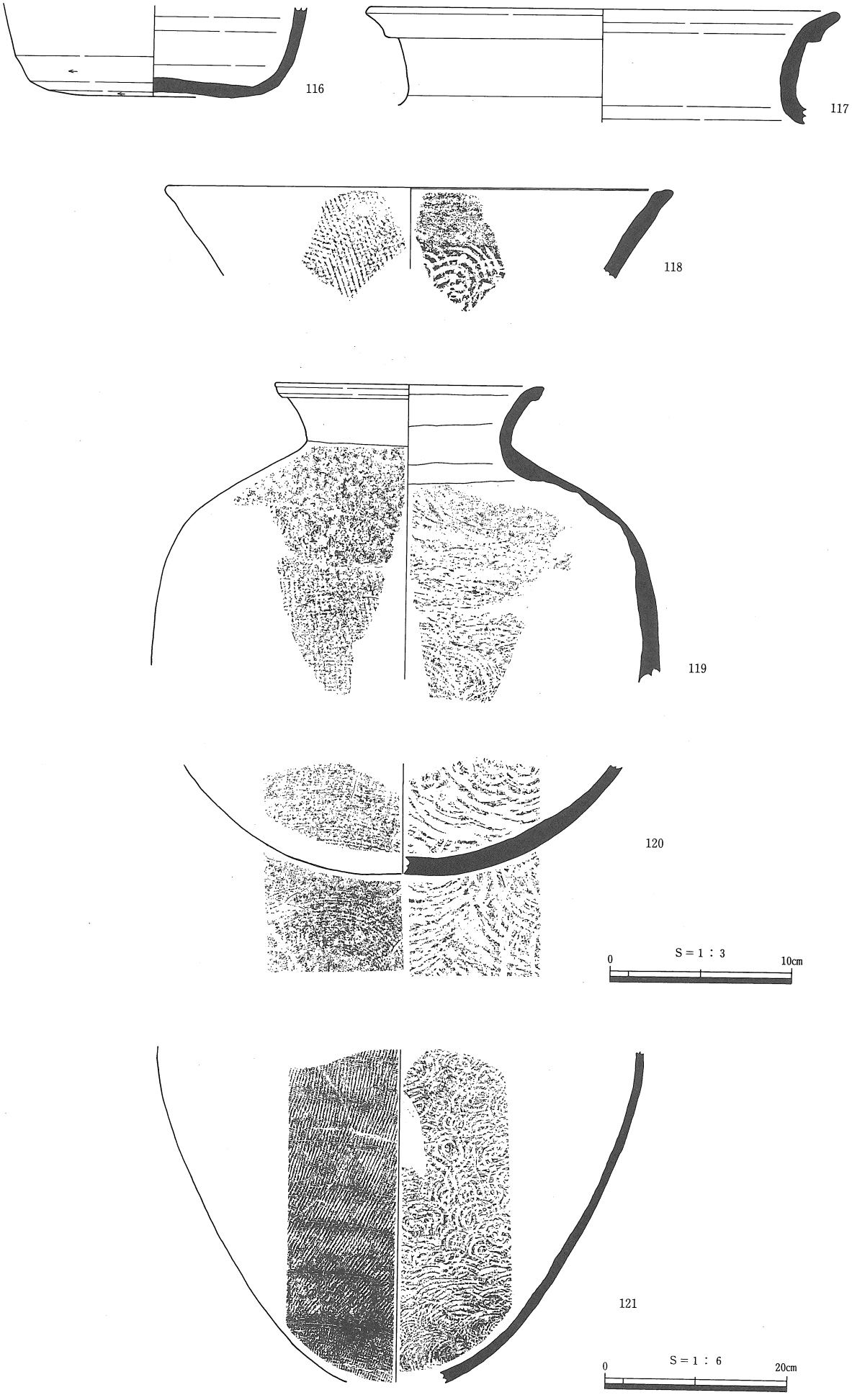
ＳＩ－11（第54～56、60～65図・写真図版15、74、75）は、標高約17.3ｍに位置し、Ａ区北側の丘陵斜面裾部に構築された竪穴住居跡である。残存壁高は、Ｉ－Ｉ'ラインで約1.2ｍを測る。壁面裾部には幅約20cm、深さ約5cmの側溝（溝１）と、床面には同規模の側溝（溝２）を検出した。ＳＩ－８より新しい住居跡である。ＳＩ－



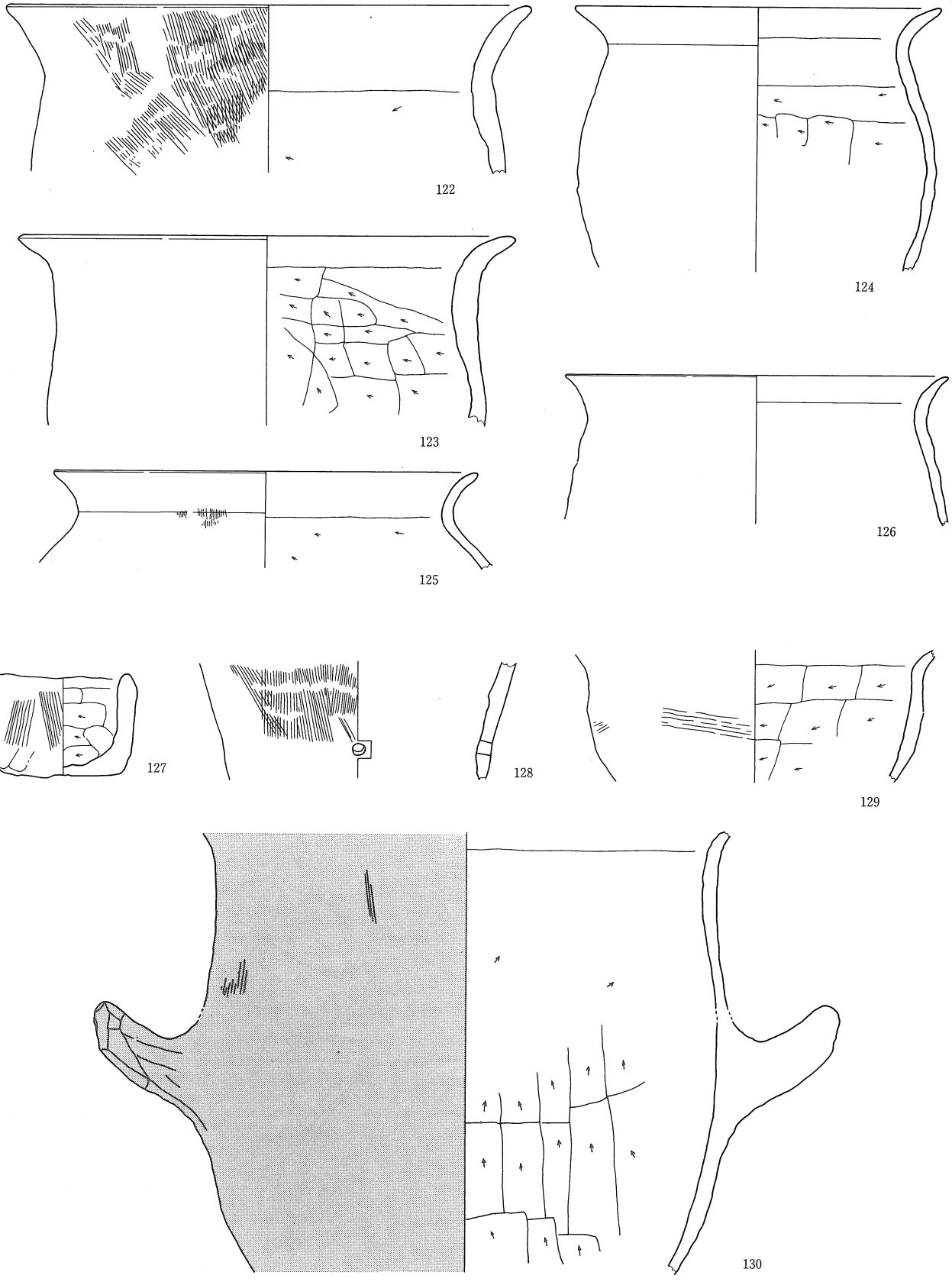
第60図　ＳＩ―11出土遺物実測図(1)



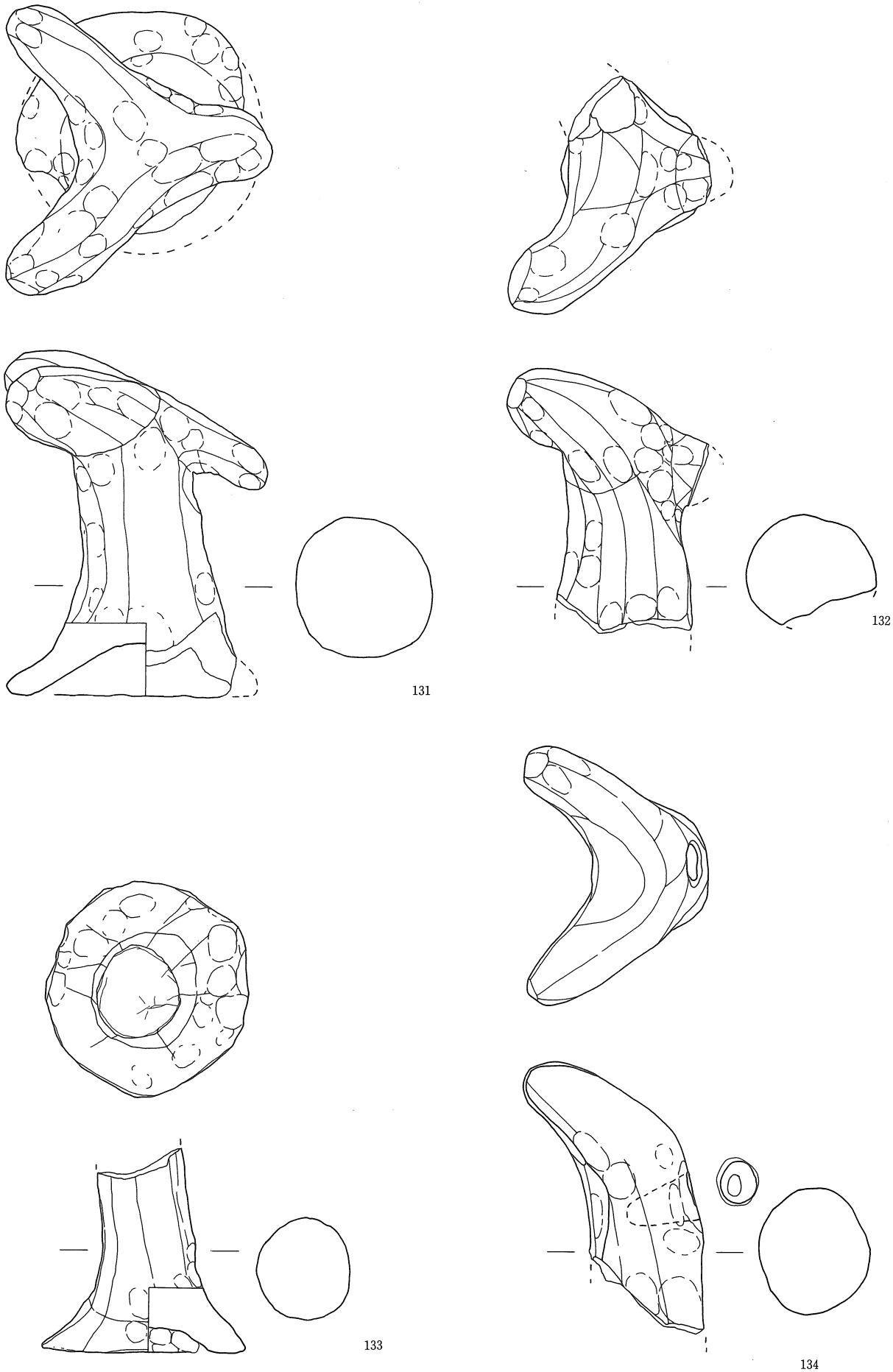
第61図　ＳＩ－11出土遺物実測図(2)



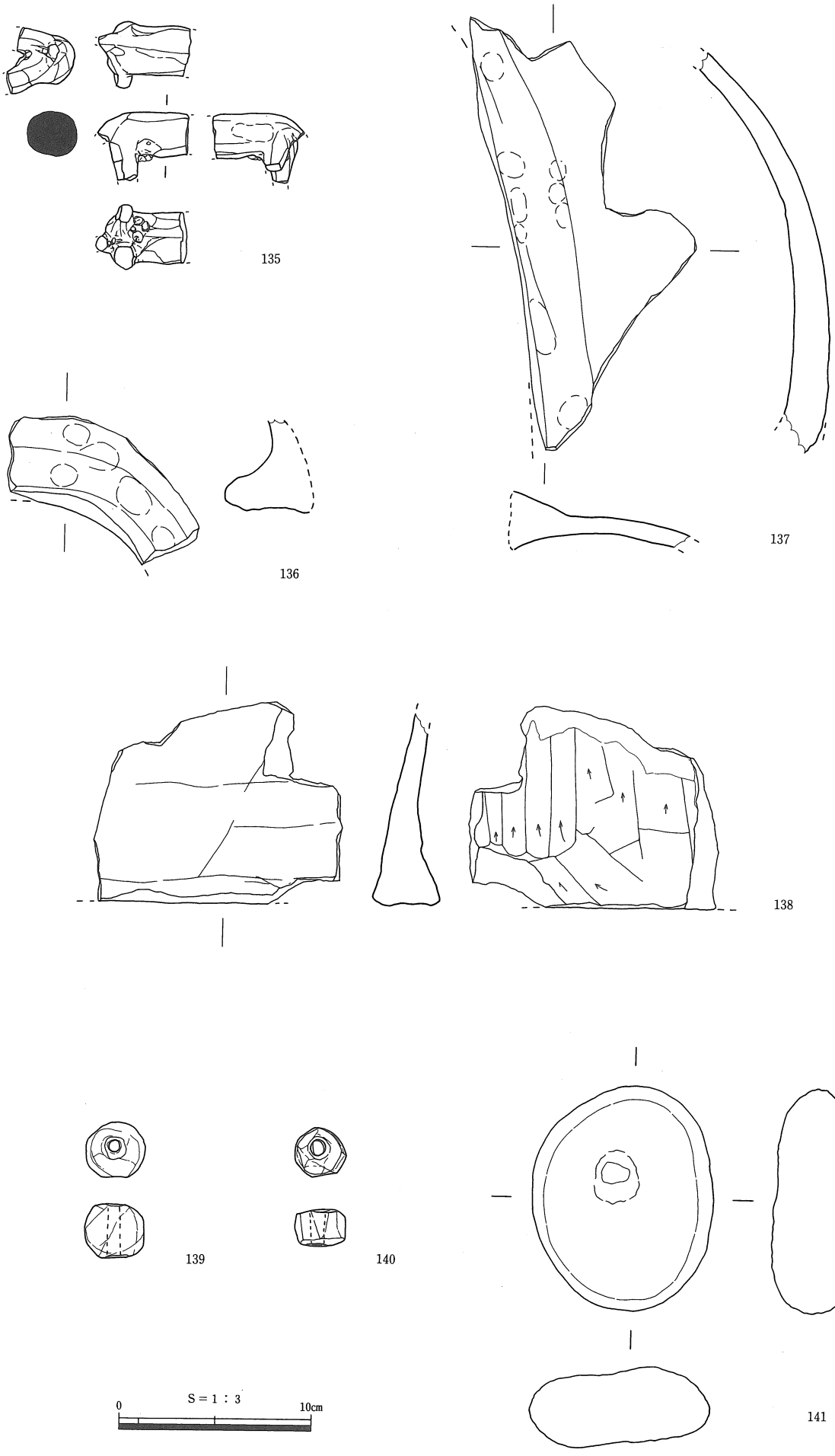
第62図　ＳＩ―11出土遺物実測図(3)



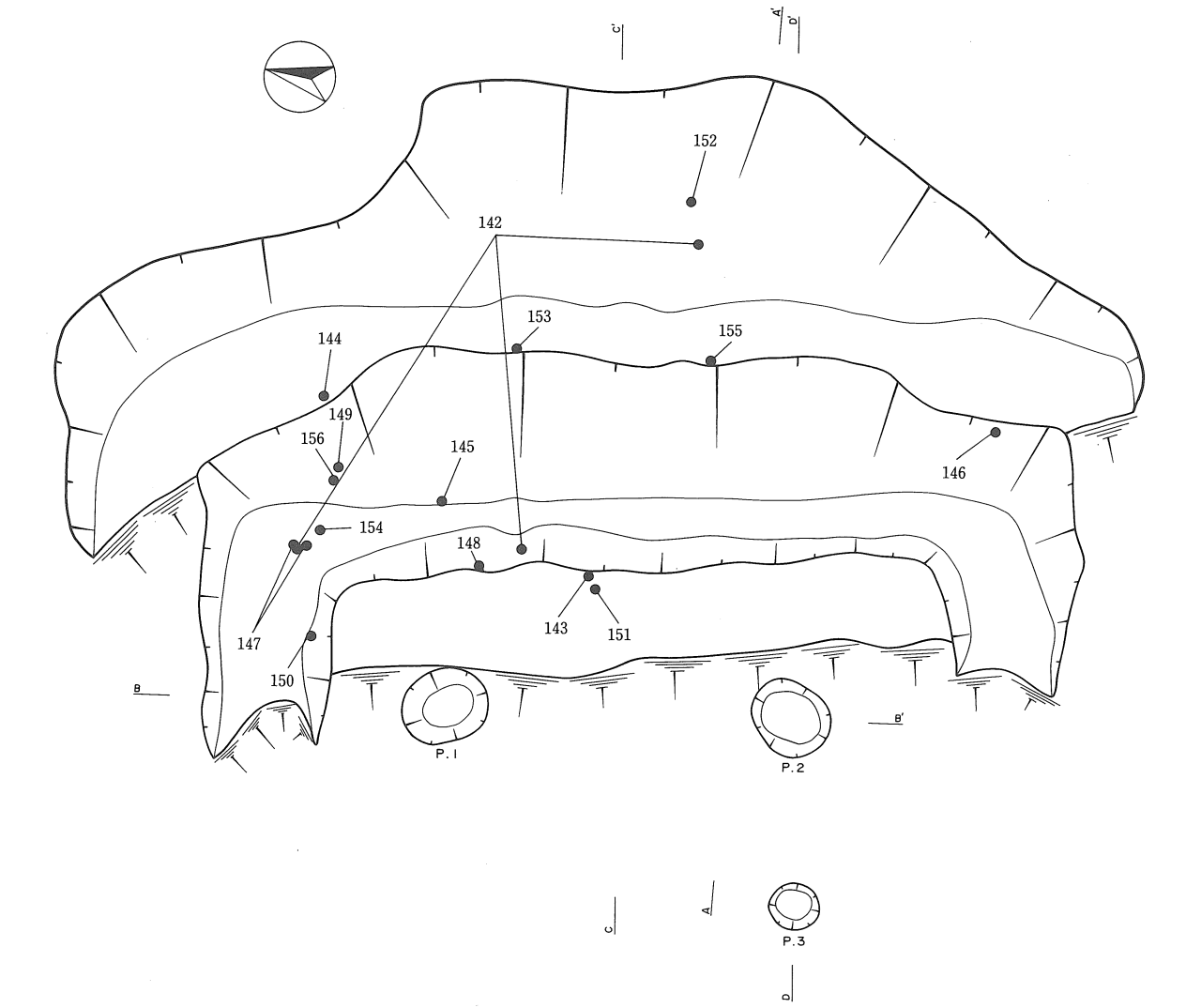
第63図　ＳＩ－11出土遺物実測図(4)

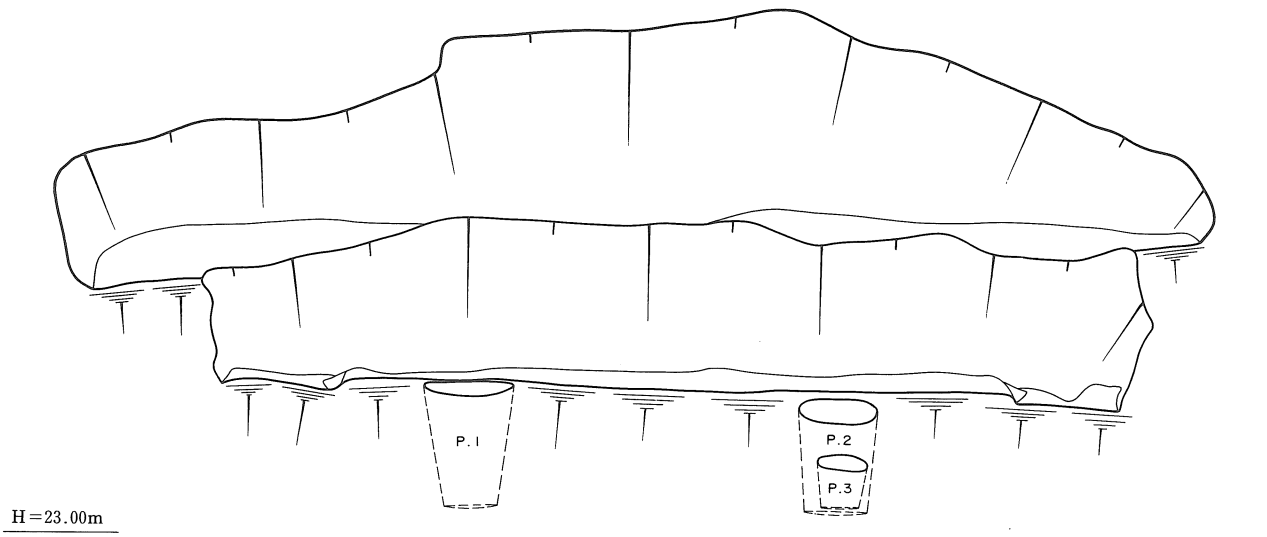


第64図　ＳＩ―11出土遺物実測図(5)



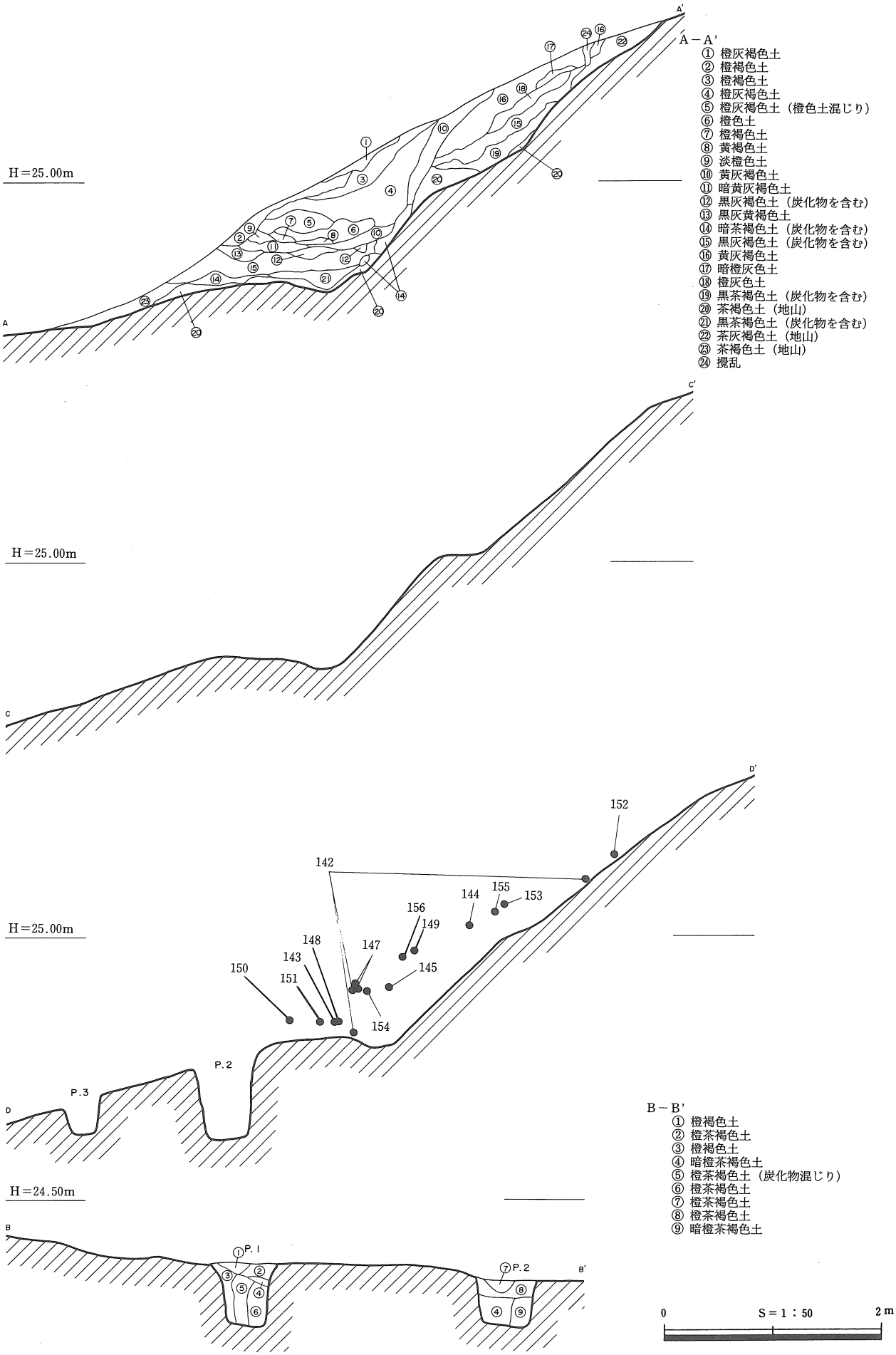
第65図　ＳＩ―11出土遺物実測図(6)



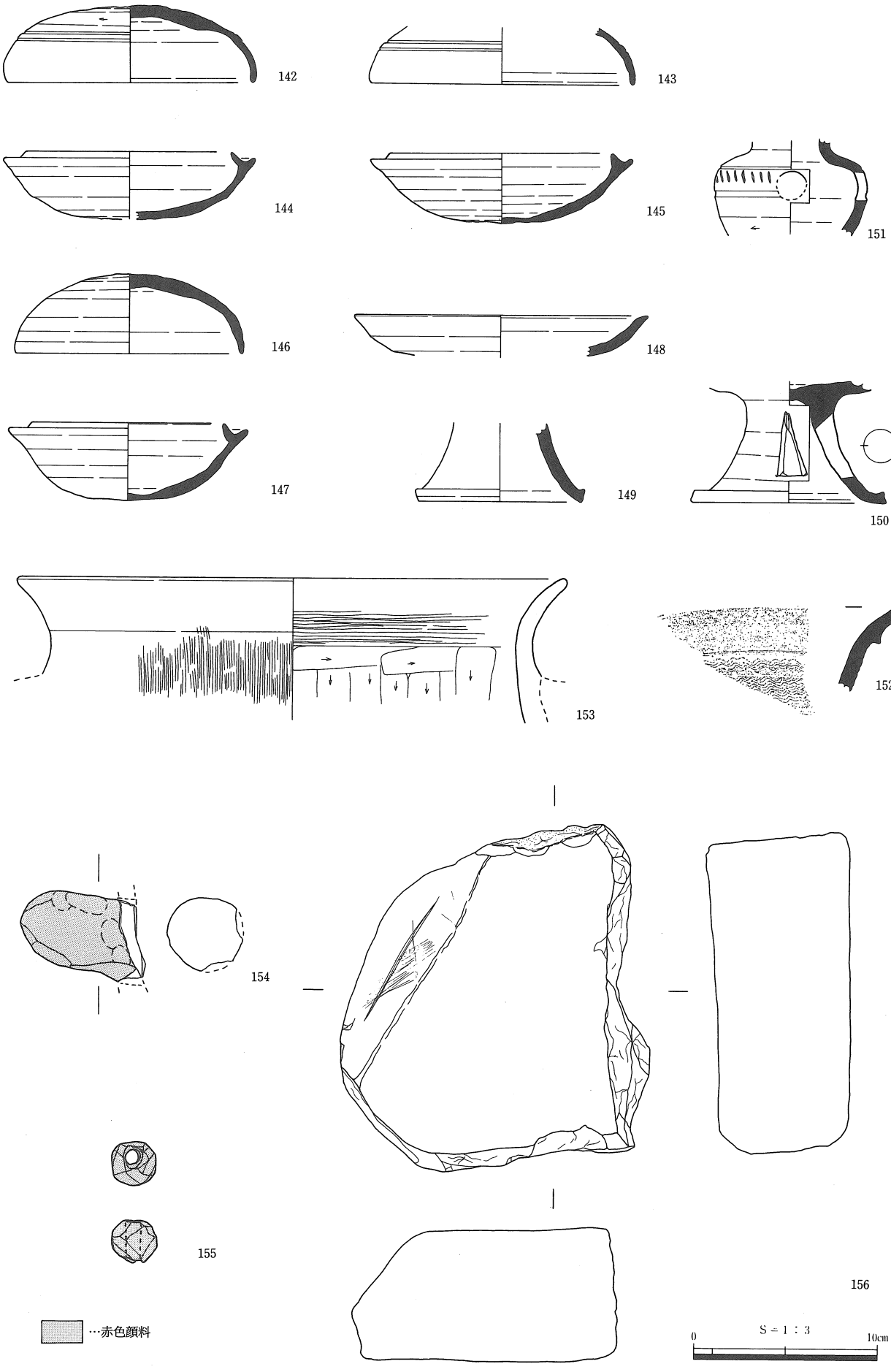


0 S=1:50 4m

第66図　ＳＩ－12実測図

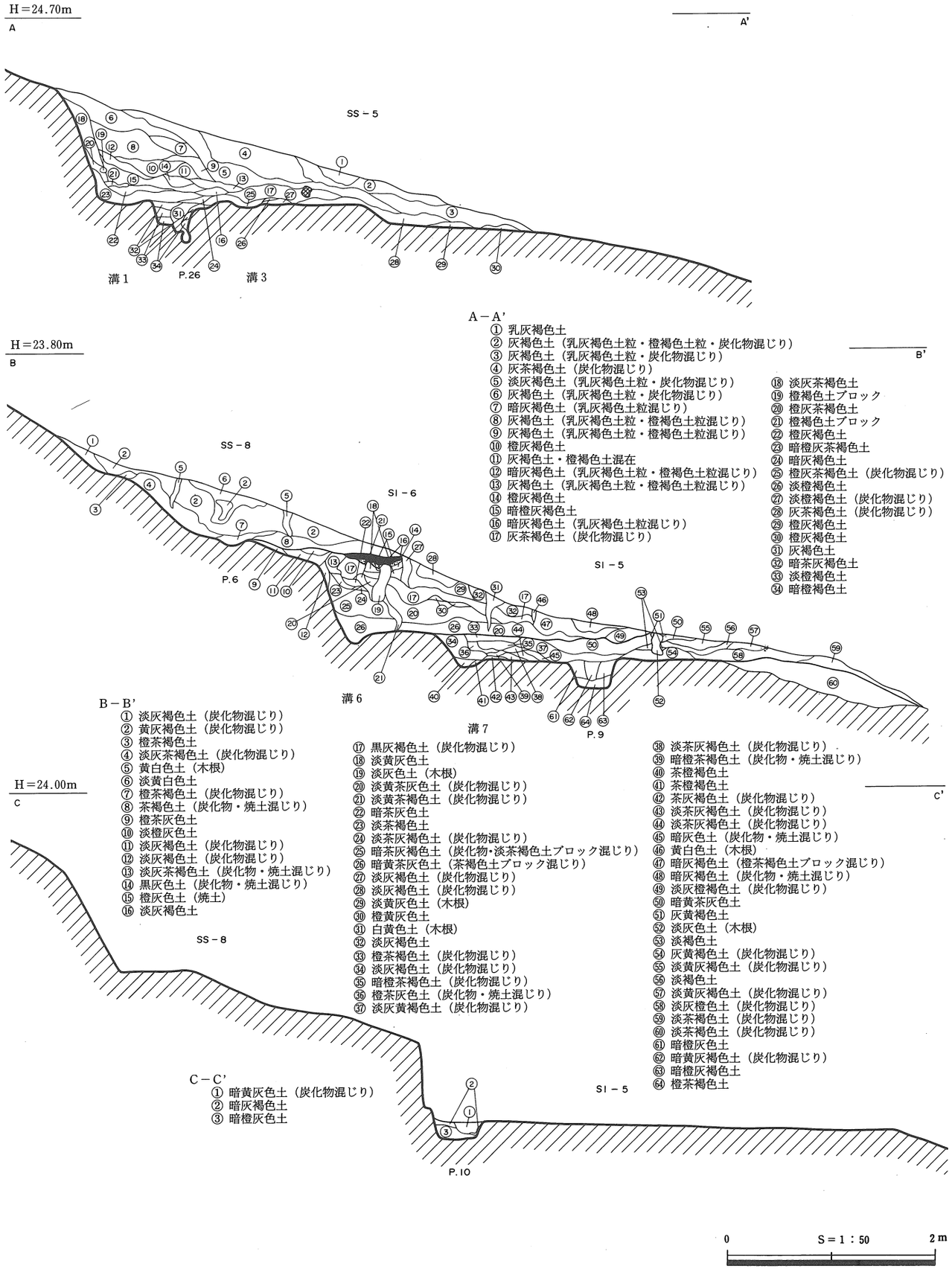


第67図　ＳＩ－12断面実測図

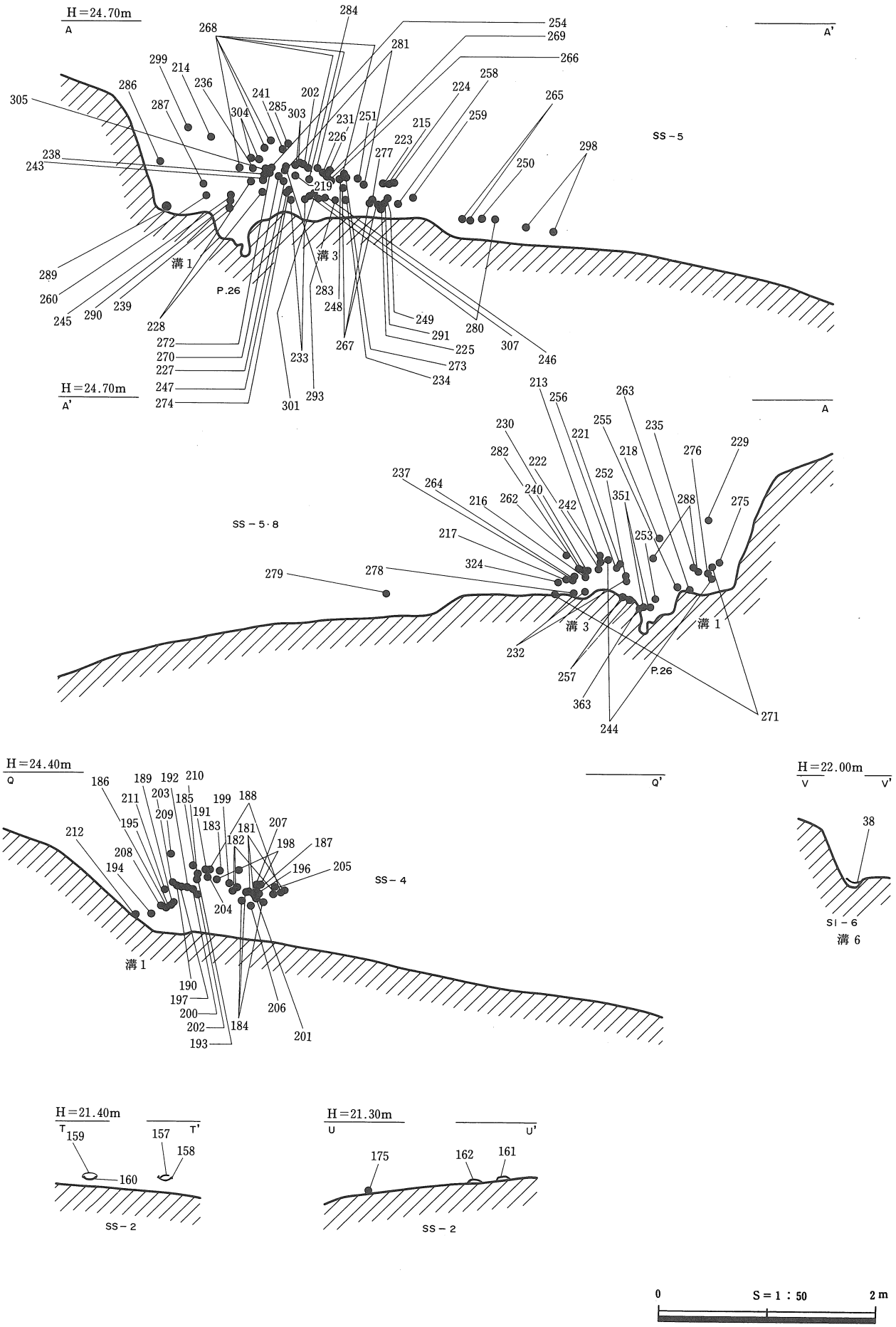


第68図　ＳＩ―12出土遺物実測図

第69図　ＳＩ－５、６、ＳＳ－２、４、５、８実測図



第70図　ＳＳ－５、８、ＳＩ－５、６断面実測図



第71図　ＳＩ－６、ＳＳ－２、４、５、８断面実測図

11は、まず溝２を側溝とする住居（①）を構築し、後に壁面を掘削して拡張し、溝１を側溝とする住居（②）を構築したものと推測される。平面プランはともに方形であり、その１辺は、①が推定約４ｍ、②が約７ｍを測る。Ｆ－Ｆ'土層断面からは、貼り床を施した形跡が窺える。

床面から検出したピットの配置状況から、Ｐ．７～10を柱穴とする４本柱の住居の存在が推測される。Ｐ．７、８は、直径約40cm、深さ40～50cmを測り、Ｐ．９、10は、直径約30cm、深さ約10cmを測る。Ｐ．９、10の上部は流失しており、本来はＰ．７、８とほぼ同規模のピットであったと推測される。Ｐ．７～10のピット間距離は、南北軸で約1.8m、東西軸で2.2～2.4mを測る。

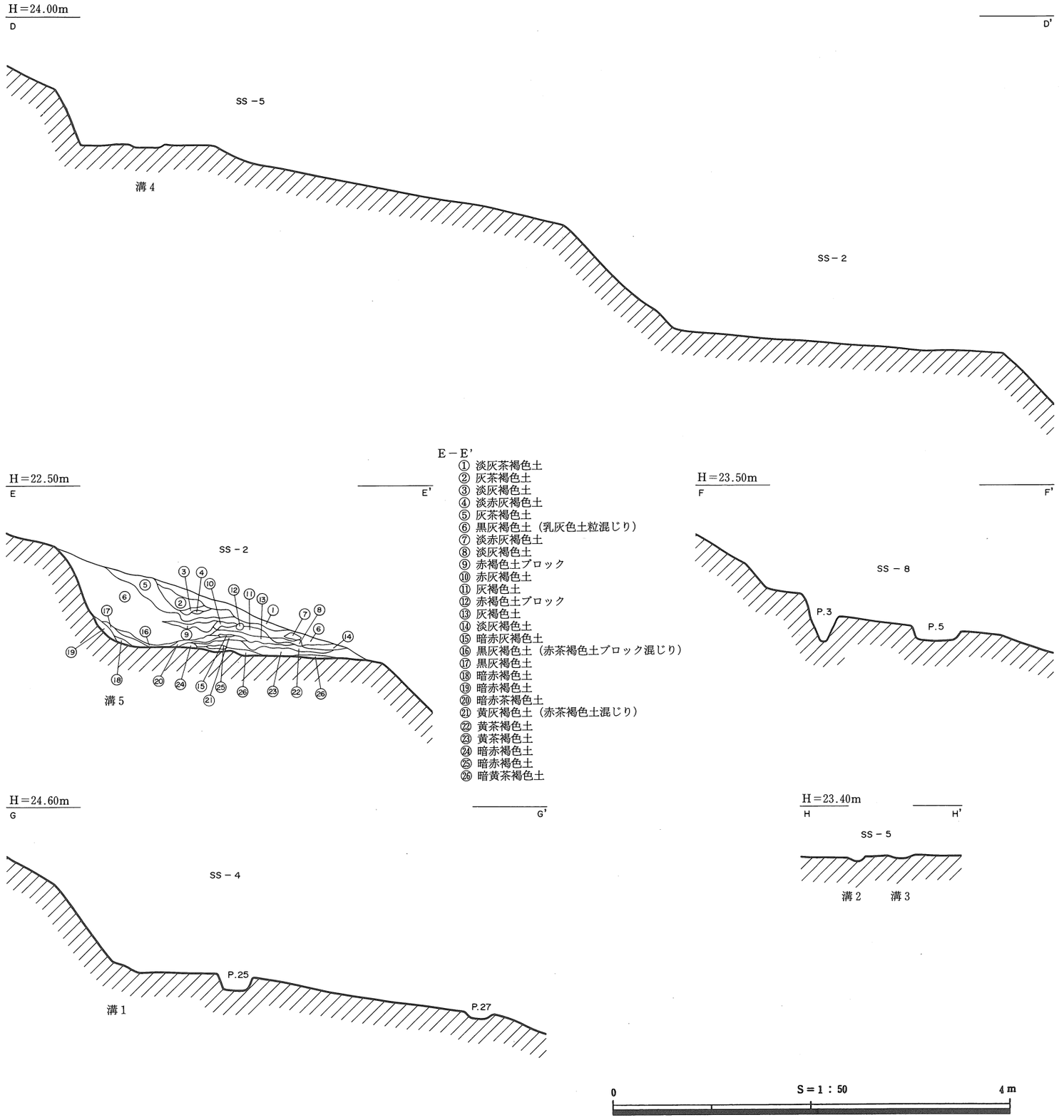
遺物は、須恵器、土師器、土製品、石製品、鉄滓類が出土している。82～121、135は須恵器である。82～88は坏蓋である。85～95は坏身である。立ち上がりはいずれも内傾する。受部は基本的にやや上方にのびる。96～99は有蓋高坏である。96～98は長脚２段透かしである。100～103、110、111は無蓋高坏である。基本的に三角形や梯形の透かしを施す。105、109外面にはヘラ記号が見られる。110は透かしをもたない高坏である。111は低脚の高坏である。112、113は須恵器の甕である。ともに口頸部に波状文を、肩部に連続刺突文を施している。112は平底の底部であり、ヘラ切りが観察される。113は丸底である。114は壺か。115は横瓶である。116は壺の底部である。117、119～121は須恵器の甕である。118は器台の受部か。内外面にタタキが施され、口縁端部は面取りされている。122～130は土師器である。122～126は甕である。127はコップ状の小形椀である。129は鉢である。128、130は甑である。130表面には赤色顔料が塗布されている。131～134は支脚である。131、132は３支、134は２支で、134は有孔部をもつ。135は須恵質の土馬の胴部片である。腹部に土粒の貼付が見られ、性別を表現したものと思われるが、雌雄は判然としない。136～138は竈である。139、140は土錘である。141は敲石である。石材は大山起源角閃石石英安山岩質火砕岩である。その他、含鉄鉄滓または鉄塊系遺物と思われるもの85ｇ分、椀形鍛冶滓36.4ｇ分が出土した（註13）。遺物はすべて床面から浮いた状態で出土しており、上方からの流入物と考える。遺物の出土レベルから、遺構への流入時期はほぼ２段階に区分でき、94～100、108、113、122～124、140は下段レベルから出土しており、初期の流入遺物と考える。遺構の時期を直接的に示すものは見られないが、これらの遺物は陰田編年５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に相当する。

ＳＩ－12（第66～68図、写真図版15）は、標高約24mに位置し、Ａ区東側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺約5.5mを測る方形の竪穴住居跡である。南西側は流失している。残存壁高は、北東壁で約１ｍを測る。壁面裾部には幅30～90cm、深さ約10cmの側溝を鍛状に検出した。また、壁面上部には長さ約7.5m、幅50～70cmの平坦部を検出した。ＳＩ－12に伴う施設と考える。この平坦面の残存壁高は、北東壁で最大1.3mを測る。

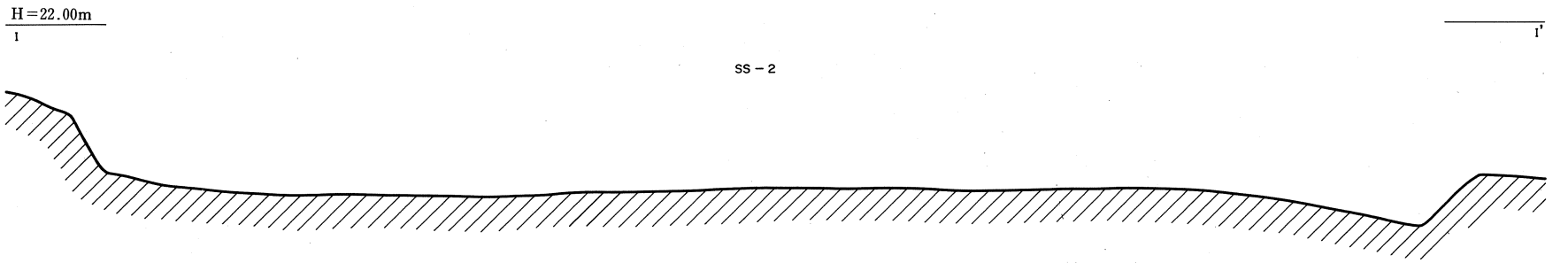
床面には、３基のピット（Ｐ．１～３）を検出した。Ｐ．１は直径約60cm、深さ約60cmを測り、Ｐ．２は直径約50cm、深さ約50cmを測る。Ｐ．２は上部をやや流失しており、本来的にはＰ．１と同規模の深さを有するピットと考える。ピット間距離は約２ｍを測る。Ｐ．３は直径約30cm、深さ約40cmを測るが、上部を流失で欠き、本来的にはＰ．１、２と同規模の深さを有すると考える。ピットの配置状況から、ＳＩ－12は、Ｐ．１、２を主柱穴とし、Ｐ．３を補助柱穴とする４本柱の住居跡と推測される。

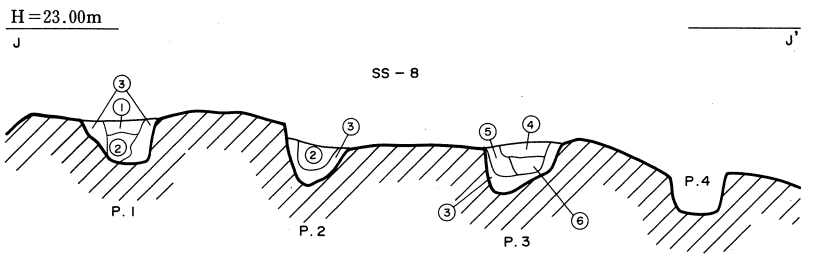
遺物は、須恵器、土師器、土製品、石製品が出土した。142～152は須恵器である。142、143、146は坏蓋である。142、143は口縁部と天井部の間に段を設けているが、稜の突出は鈍い。144、145、147は坏身である。ともに立ち上がりは内傾して短く、受部はやや上方にのびる。148は皿、あるいは高坏の坏部である。149、150は高坏脚部である。150は透かしを２方に施している。151は甑である。152は甕の口縁部である。頸部外面には波状文を施している。153は土師器の甕の口縁部である。口縁部内面にはハケメが見られる。剝離痕があり、把手をもつと推測される。154は支脚であり、155は土錘である。154、155ともに表面には赤色顔料が塗布されている。156は角閃石花崗岩製の砥石である。遺物はどれも浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と推測される。遺構の時期を直接的に示すものは見られないが、これらの遺物は、陰田編年６式（７世紀前葉）に比定される。

ＳＩ－13（第49図・写真図版14）は、標高21.5～22mに位置し、Ａ区東側の丘陵斜面裾部に構築された、１辺約３ｍを測る方形の竪穴住居跡である。西側から南側にかけて流失している。北西にはＳＩ－７が、北にはＳ

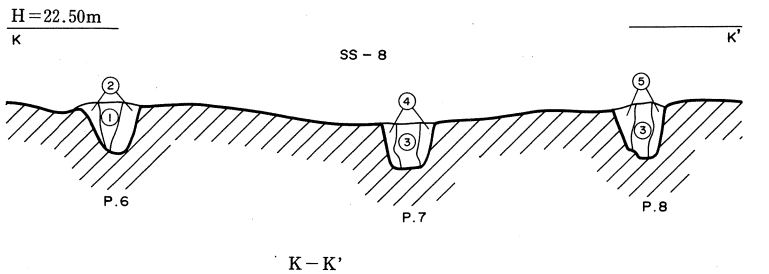


第72図　ＳＳ－２、４、５、８断面実測図

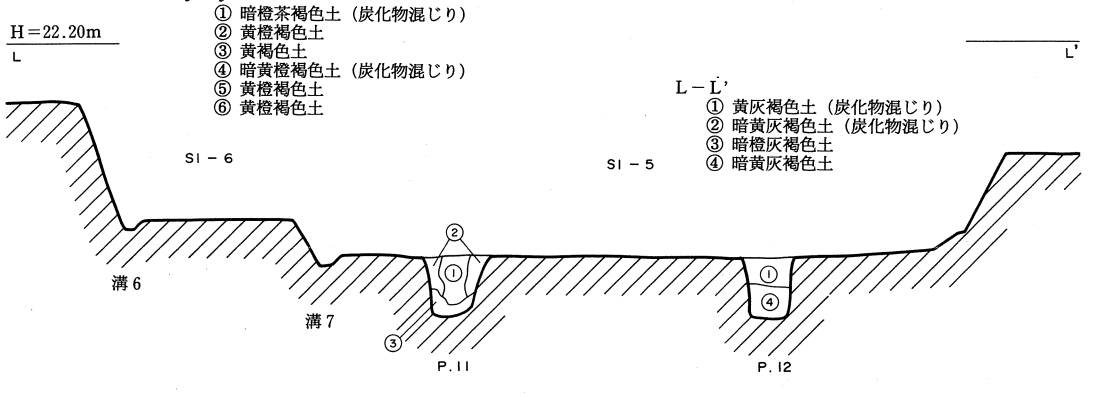




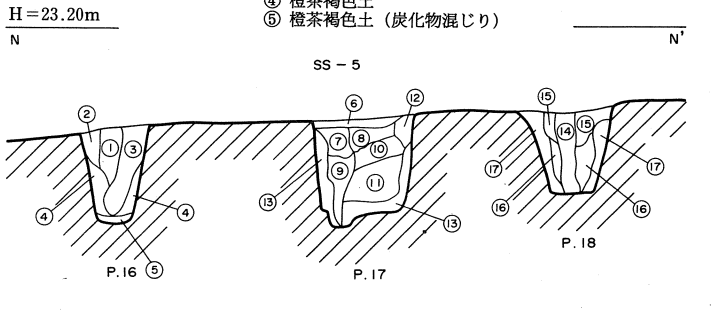
J－J'
① 暗橙茶褐色土（炭化物混じり）
② 黄橙褐色土
③ 黄褐色土
④ 暗黄橙褐色土（炭化物混じり）
⑤ 黄橙褐色土
⑥ 黄橙褐色土

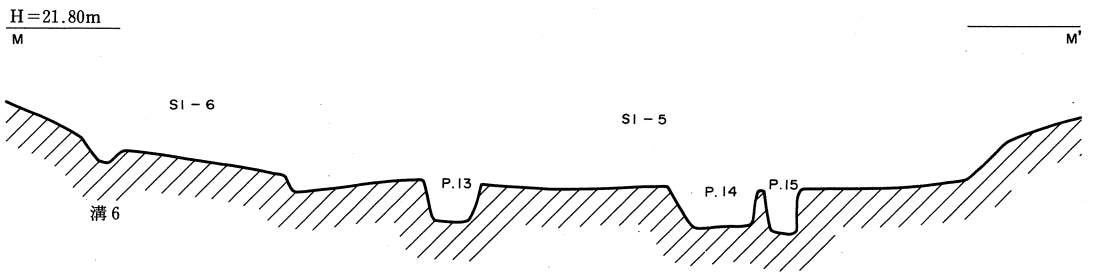


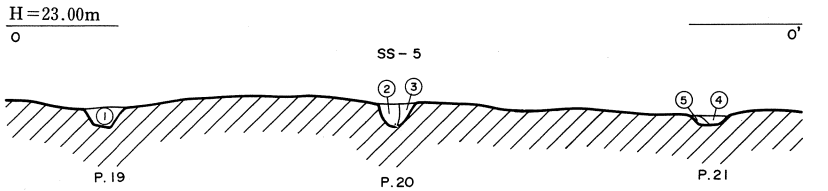
K－K'
① 暗灰褐色土（炭化物混じり）
② 暗橙茶灰褐色土（炭化物混じり）
③ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
④ 橙茶褐色土
⑤ 橙茶褐色土（炭化物混じり）

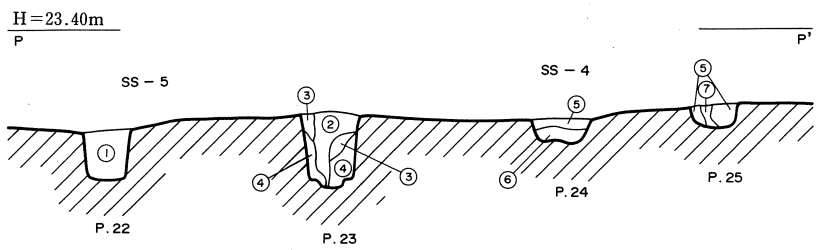


L－L'
① 黄灰褐色土（炭化物混じり）
② 暗黄灰褐色土（炭化物混じり）
③ 暗橙灰褐色土
④ 暗黄灰褐色土





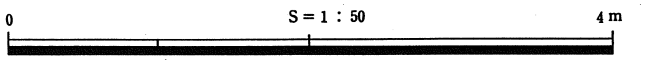




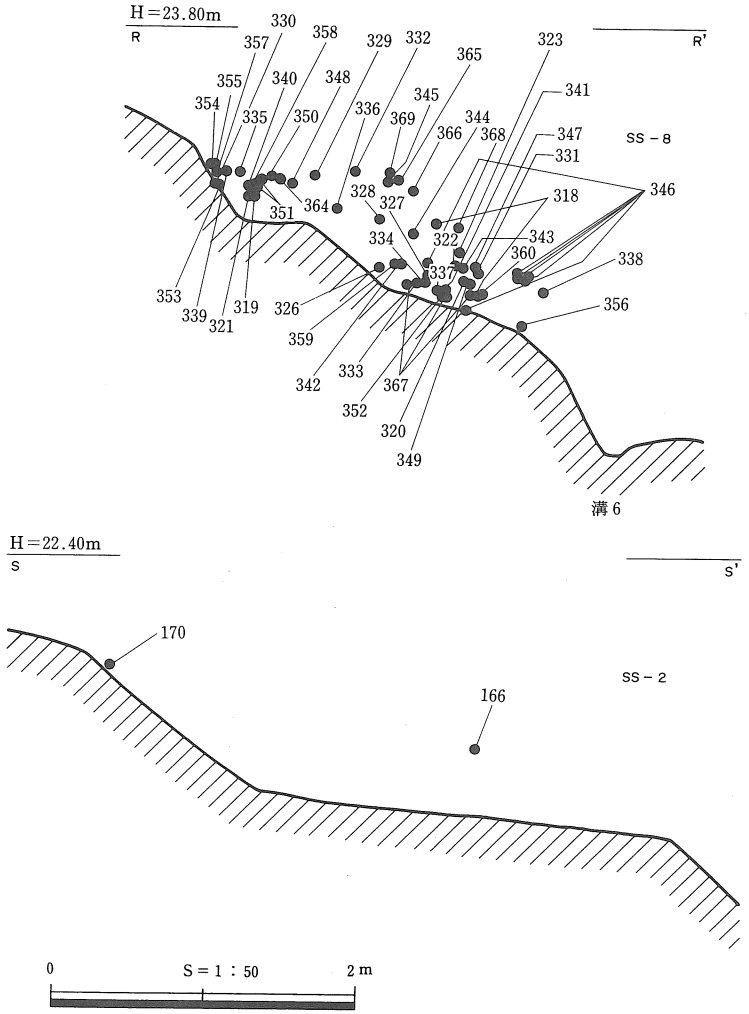
P－P'
① 暗茶褐色土
② 暗灰褐色土（炭化物混じり）
③ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
④ 茶褐色土（炭化物混じり）
⑤ 暗茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑥ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
⑦ 茶褐色土

N－N'
① 茶褐色土
② 茶褐色土
③ 淡橙褐色土
④ 茶褐色土（暗灰褐色土混じり）
⑤ 橙茶褐色土
⑥ 茶褐色土（暗灰褐色土混じり・炭化物混じり）
⑦ 茶褐色土（炭化物混じり）
⑧ 茶褐色土（炭化物混じり）
⑨ 茶褐色土（暗灰褐色土・炭化物混じり）
⑩ 茶褐色土（暗灰褐色土・炭化物混じり）
⑪ 茶褐色土（暗灰褐色土・炭化物混じり）
⑫ 茶橙褐色土
⑬ 淡橙褐色土
⑭ 暗茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑮ 暗茶褐色土（炭化物混じり）
⑯ 暗茶褐色土（炭化物混じり）
⑰ 淡橙褐色土

O－O'
① 茶褐色土
② 暗灰褐色土（炭化物混じり）
③ 暗灰褐色土（炭化物混じり）
④ 暗茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑤ 暗茶灰褐色土（炭化物混じり）



第73図　ＳＩ－５、６、ＳＳ－２、４、５、８断面実測図



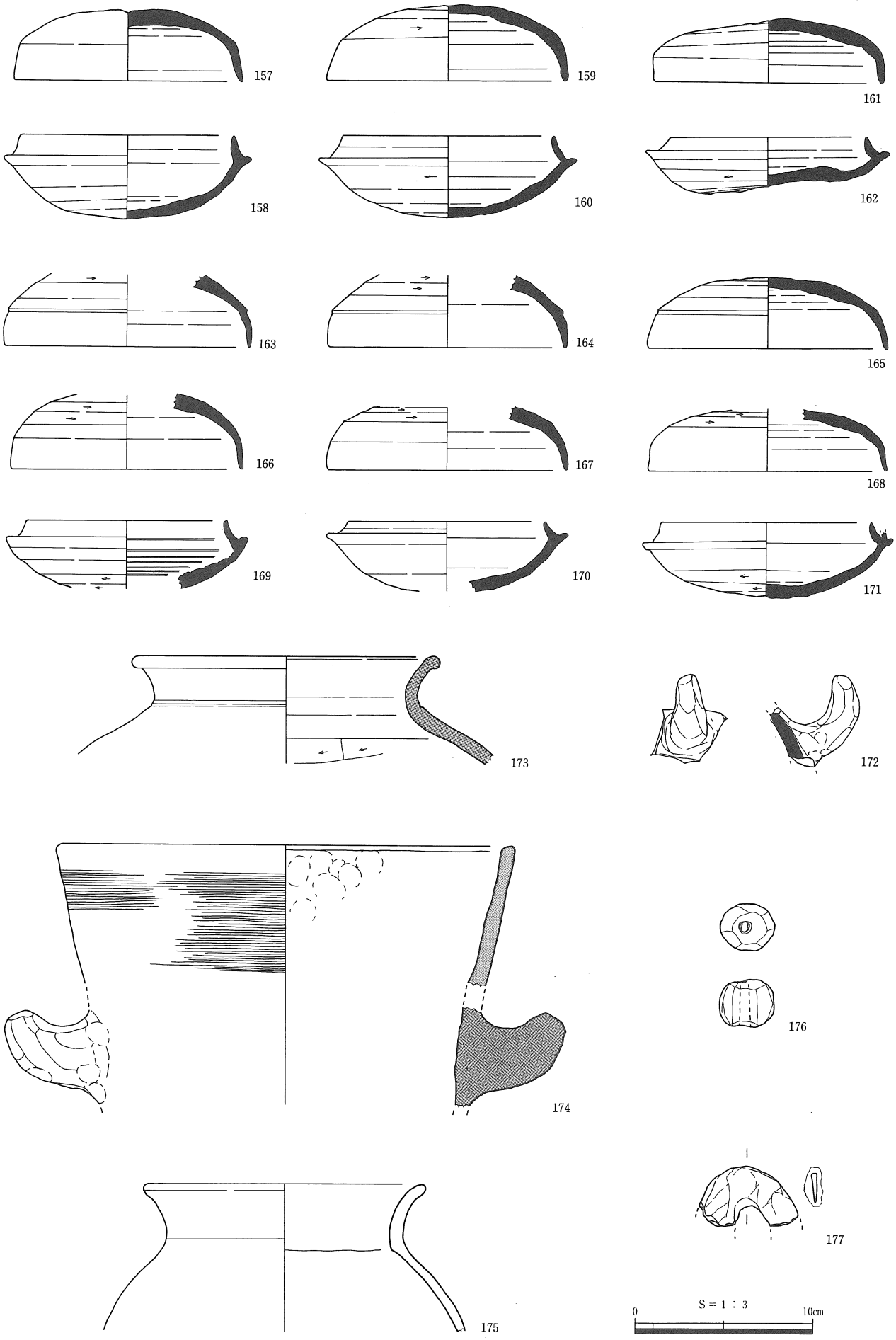
第74図　ＳＳ－２、８断面実測図

Ⅰ－10が隣接する。壁面は北端部で僅かに遺存し、残存壁高は約17cmを測る。壁面裾部には、幅約20cm・40cm、深さ約15cmの側溝（溝５）を検出した。北端部で溝幅は20cmから40cmへと変化する。

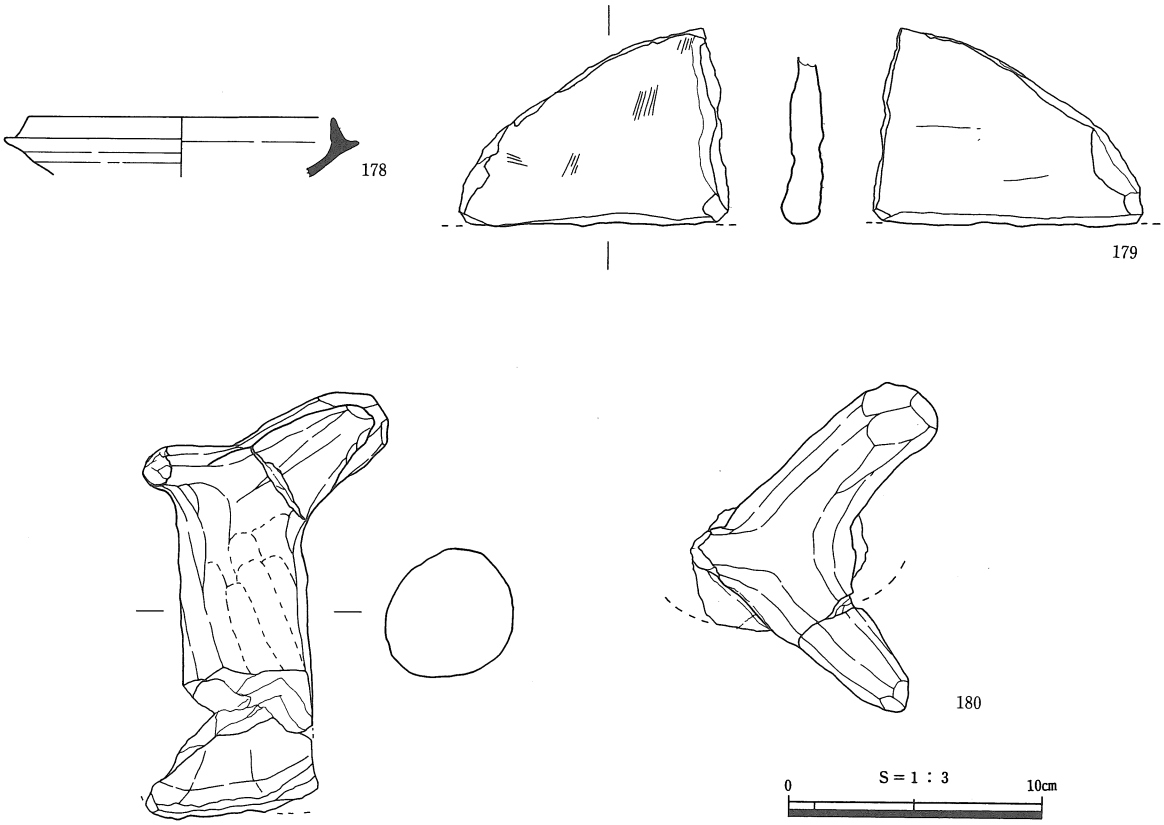
床面には直線上に連続する４基のピット（Ｐ．６～９）を検出した。溝５の形状上、Ｐ．９は住居に伴わないピットと判断する。Ｐ．６～８は、直径20～40cm、深さ10～15cmを測る。ピット間距離は、Ｐ．６、７で約80cm、Ｐ．７とＰ．８で約１ｍを測る。床面の大半が流失していることから住居の構造を把握しかねるが、ピットの配置状況から、Ｐ．６、８を主柱穴とし、Ｐ．７を補助柱穴とする４本柱の住居の存在が推測される。遺物は出土していない。

・テラス状遺構

テラス状遺構としてＳＳ－２～24の23基を検出した。基本的に、斜面を直立気味に掘削して断面Ｌ字状の平坦面を構築した遺構である。床面には数基のピットを穿ち、壁面裾部には側溝を設けているものもある。ＳＳ－２～19はＡ区丘陵斜面部に検出した。標高約17～17.5mに１基（ＳＳ－３）、標高21～24.5mに６基（ＳＳ－２、４、５、８、14、18）、標高25.5～27mに５基（ＳＳ－６、７、13、17、19）、標高27.5～29.5mに２基（ＳＳ－15、16）、標高29.5～32.5mに４基（ＳＳ－９～12）と、一定の標高ごとに数基の遺構が隣接している。ＳＳ－20～24はＢ区丘陵南斜面に検出した。ともに標高27～29.5mに位置する。



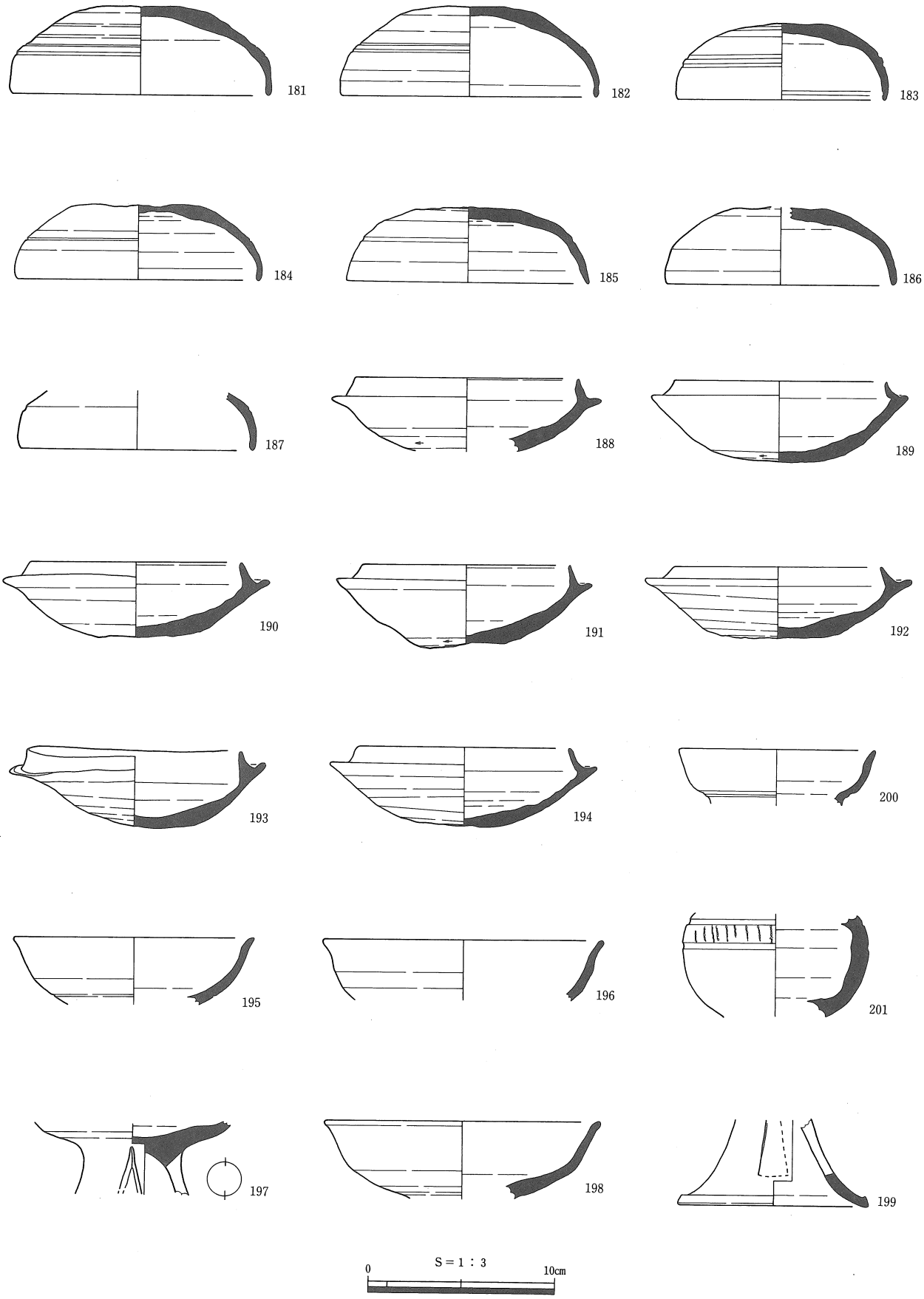
第75図　ＳＳ－２出土遺物実測図



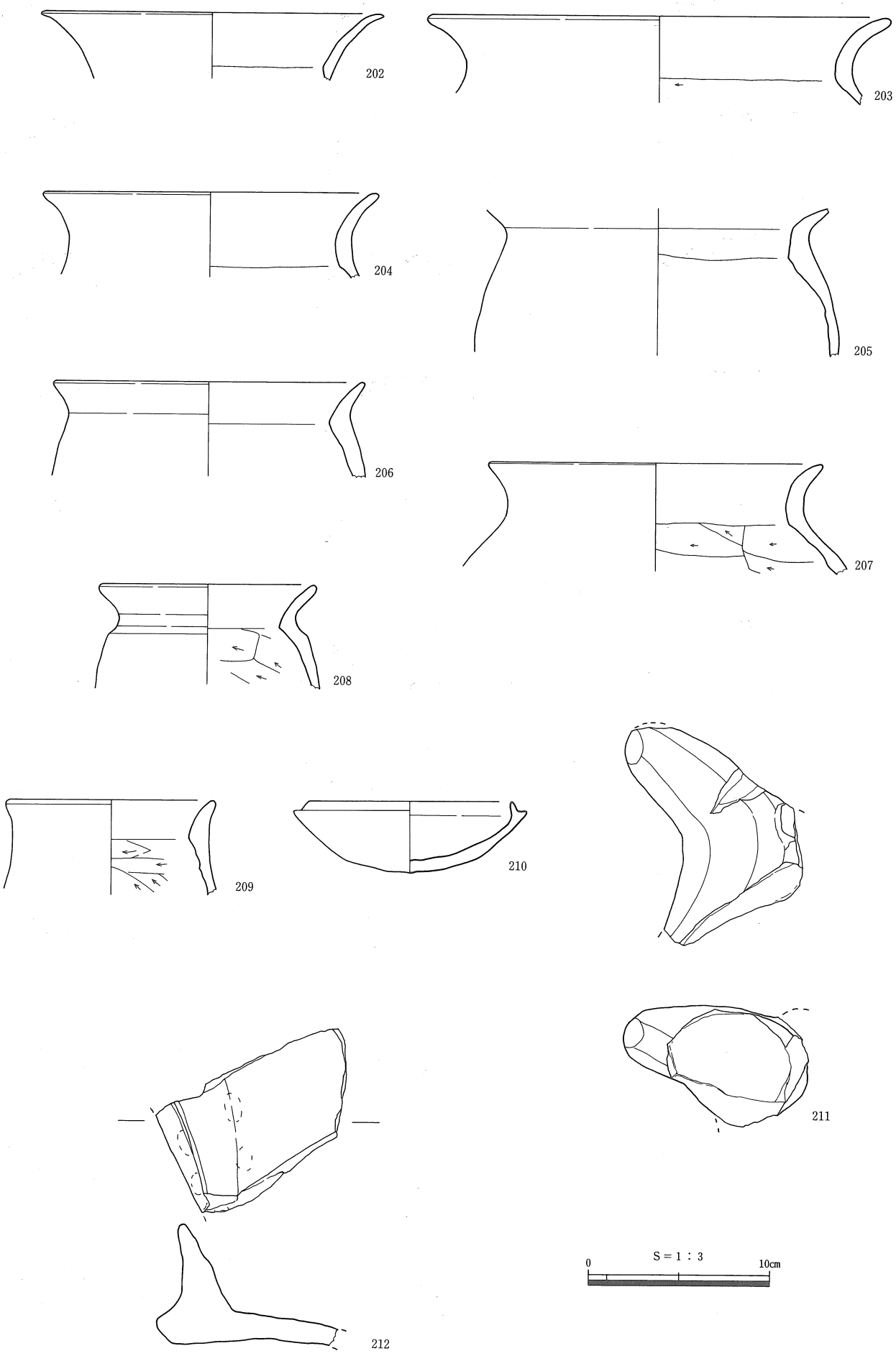
第76図　ＳＳ－３出土遺物実測図

古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡

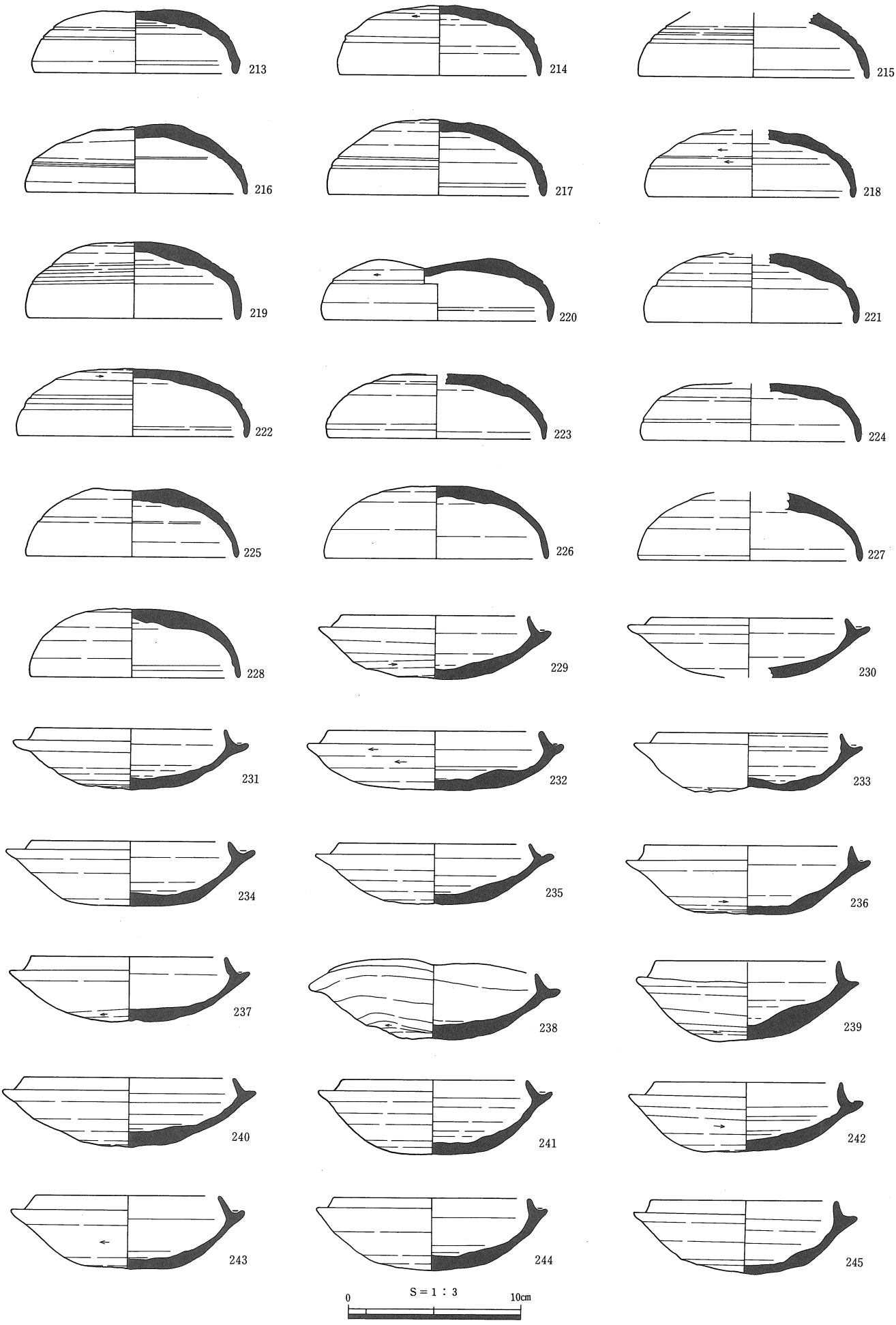
遺構名	規　模	平面プラン	主柱穴	出土遺物	備　考
ＳＩ－７	１辺約４ｍ	方形	４本	須恵器、土師器	ＳＩ－10より古い
ＳＩ－８	？	方形	？	土師器	ＳＩ－11より古い
ＳＩ－９	１辺約4.5m	方形	４本	須恵器	
ＳＩ－10	１辺約4.5m	方形	４本	須恵器、土師器	ＳＩ－７より新しい
ＳＩ－11①	１辺約４ｍ	方形	４本	須恵器、土師器 土製品、石製品 土馬、鉄滓	拡張建替 ＳＩ－８より新しい
ＳＩ－11②	１辺約７ｍ	方形			
ＳＩ－12	１辺約5.5m	方形	４本	須恵器、土師器 土製品、石製品	後背に段状部
ＳＩ－13	１辺約３ｍ	方形	４本	なし	



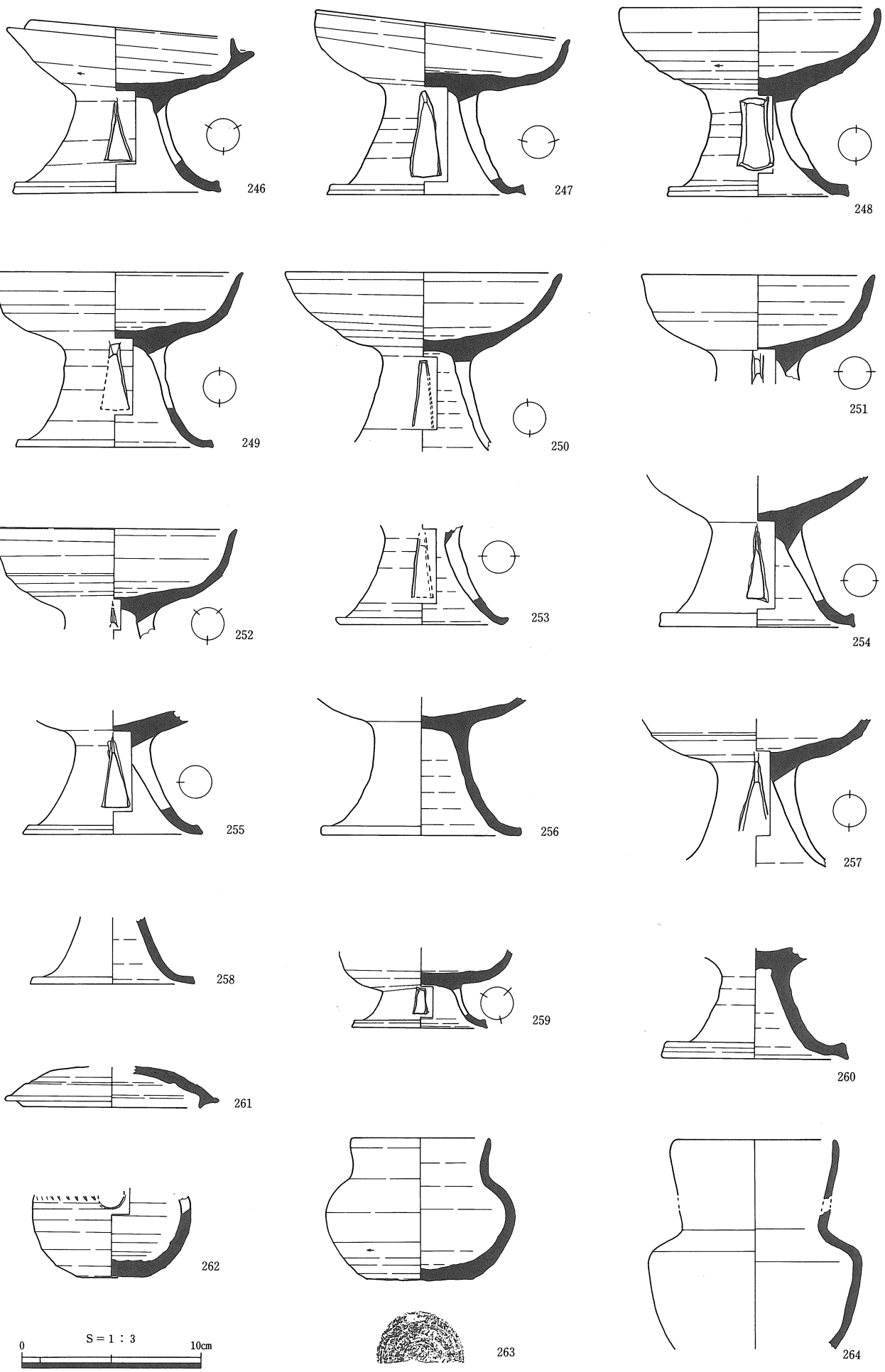
第77図　ＳＳ－４出土遺物実測図(1)



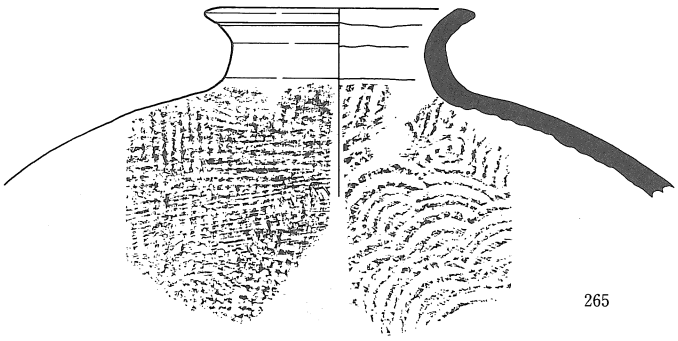
第78図　ＳＳ－４出土遺物実測図(2)

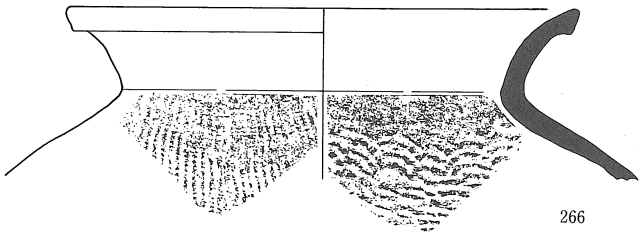


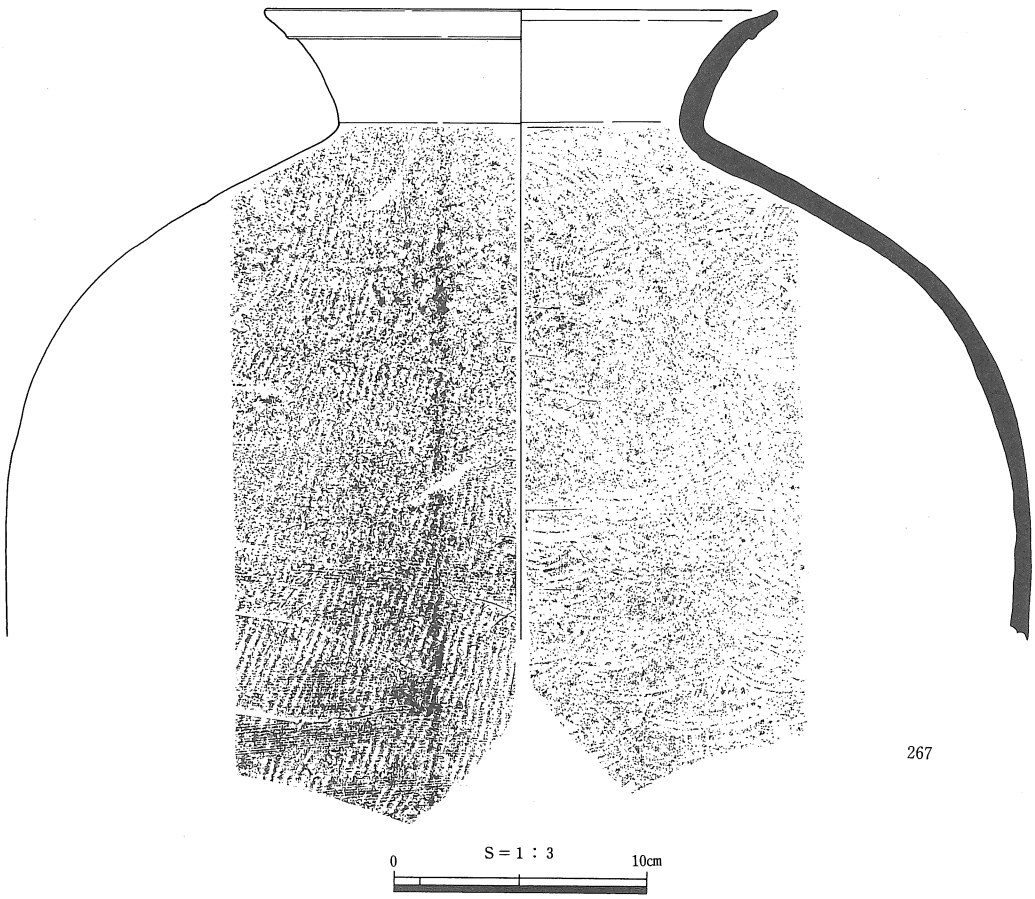
第79図　ＳＳ－５出土遺物実測図(1)



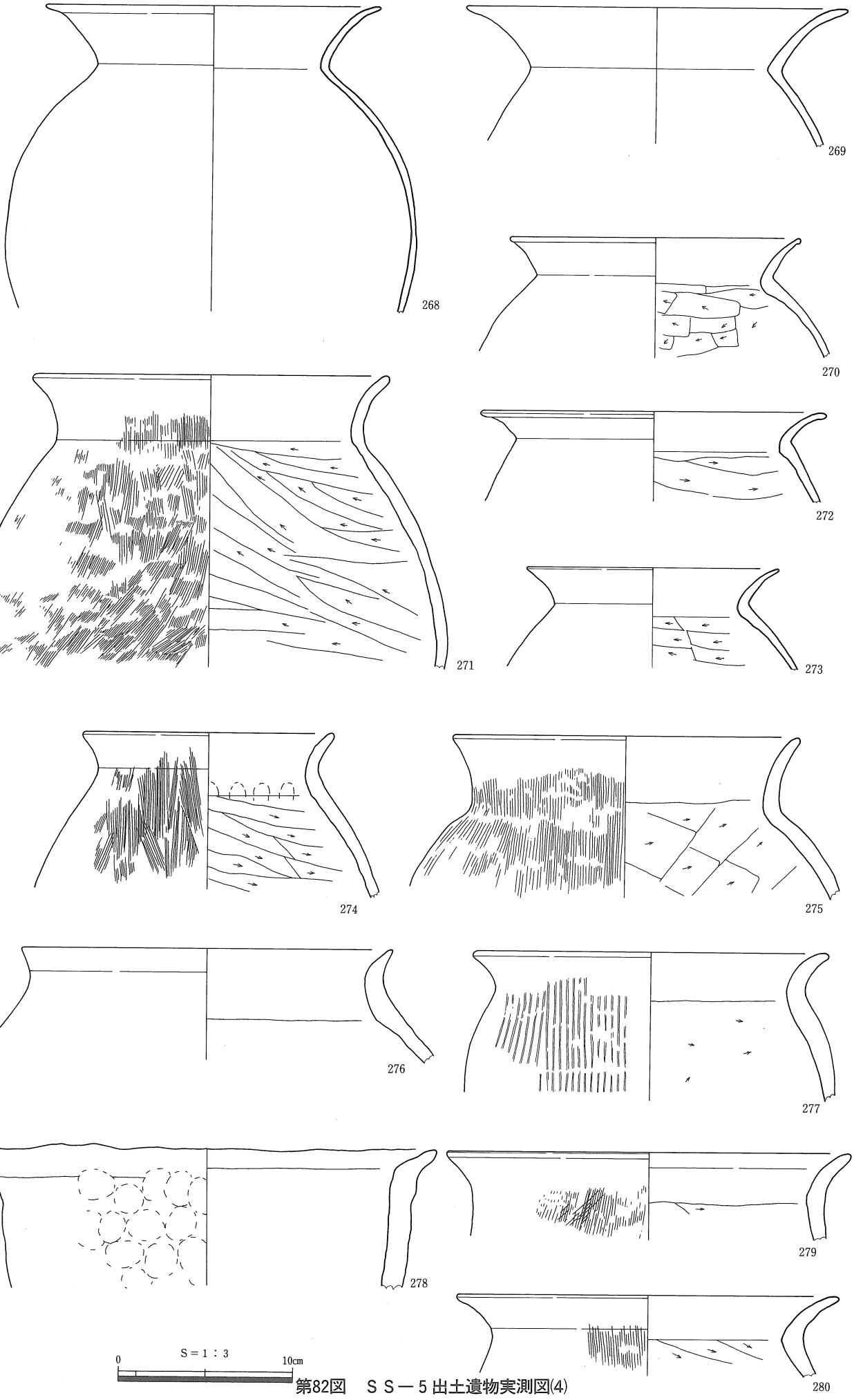
第80図　ＳＳ－５出土遺物実測図(2)



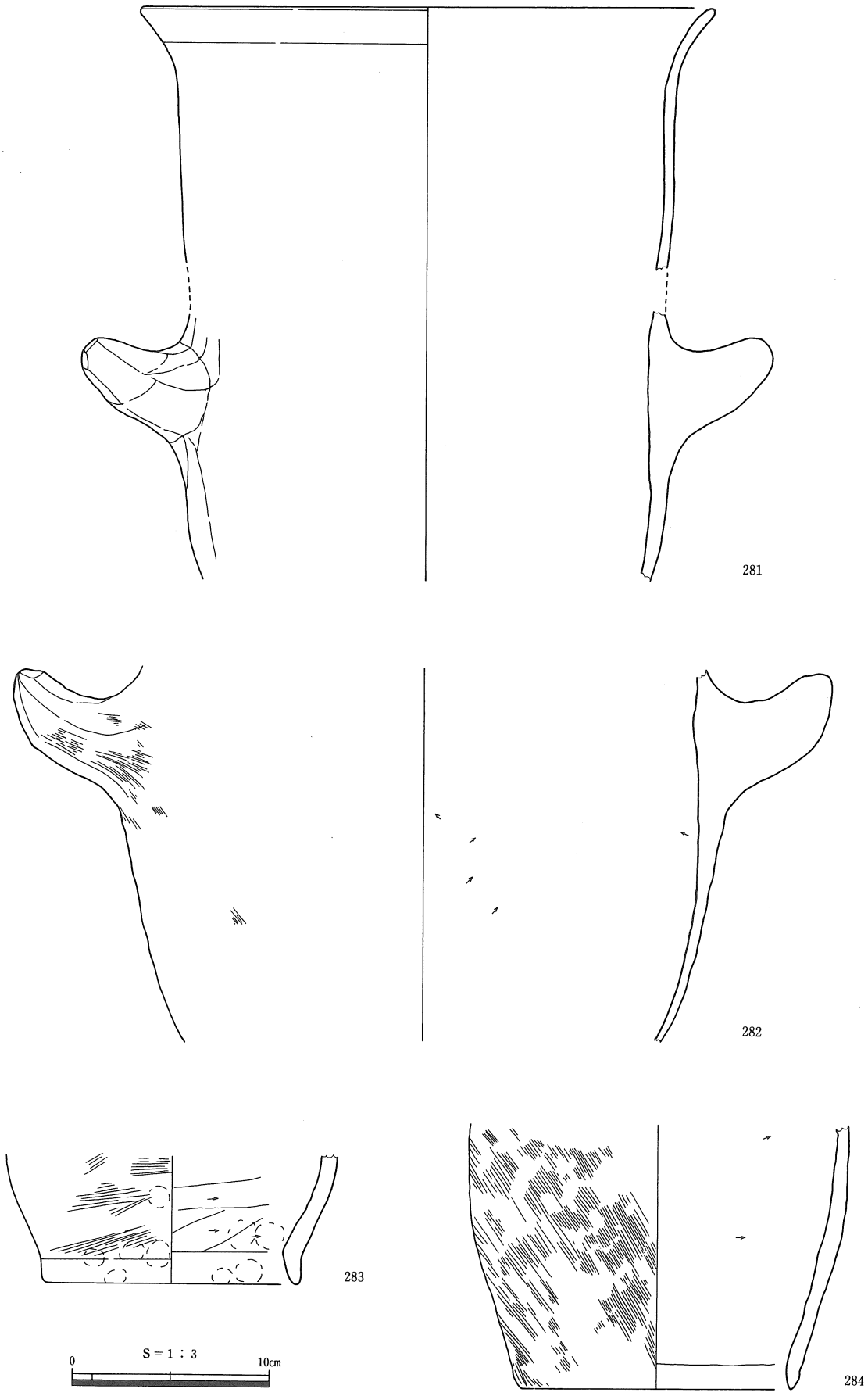




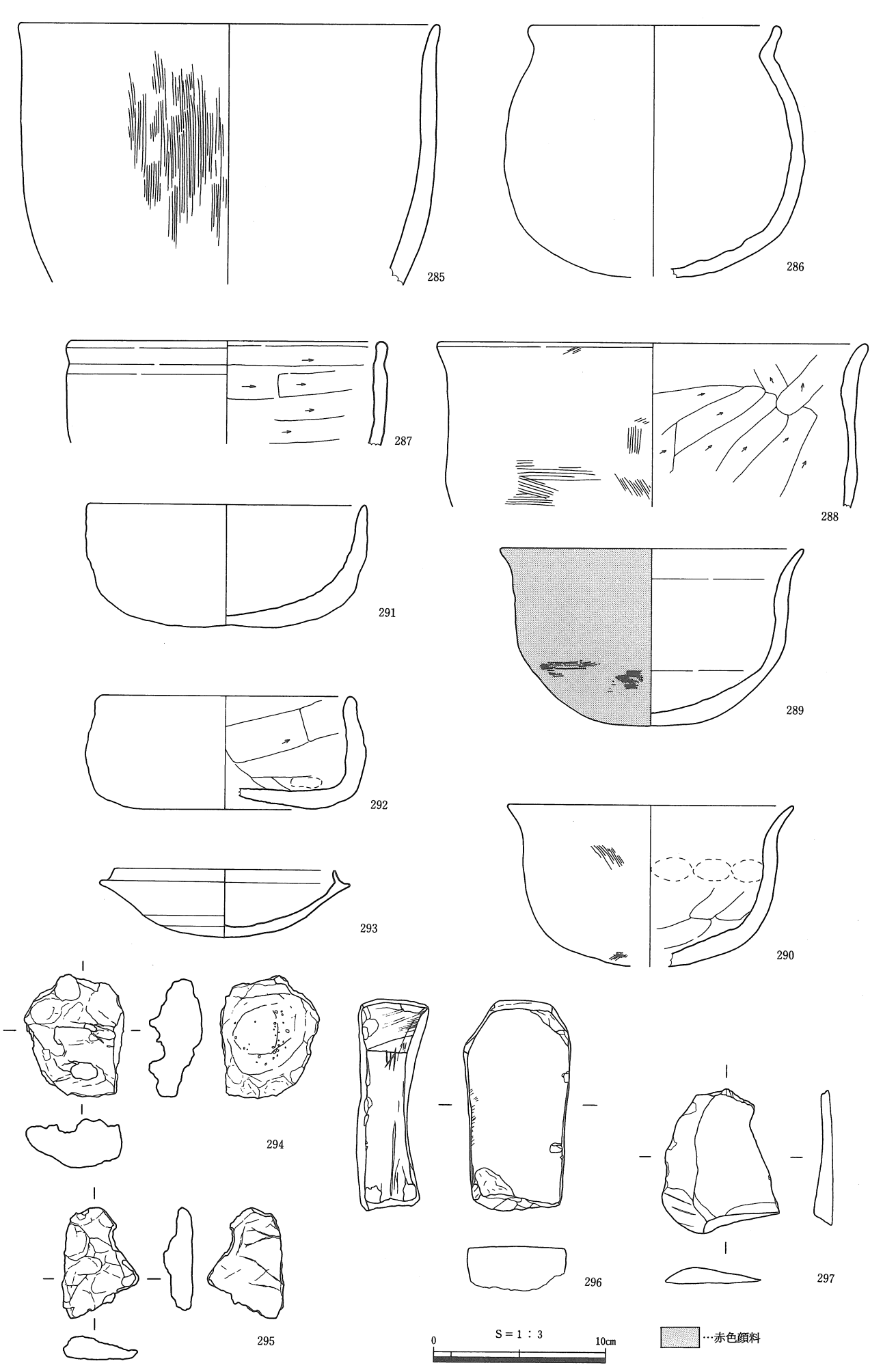
第81図　ＳＳ－５出土遺物実測図(3)



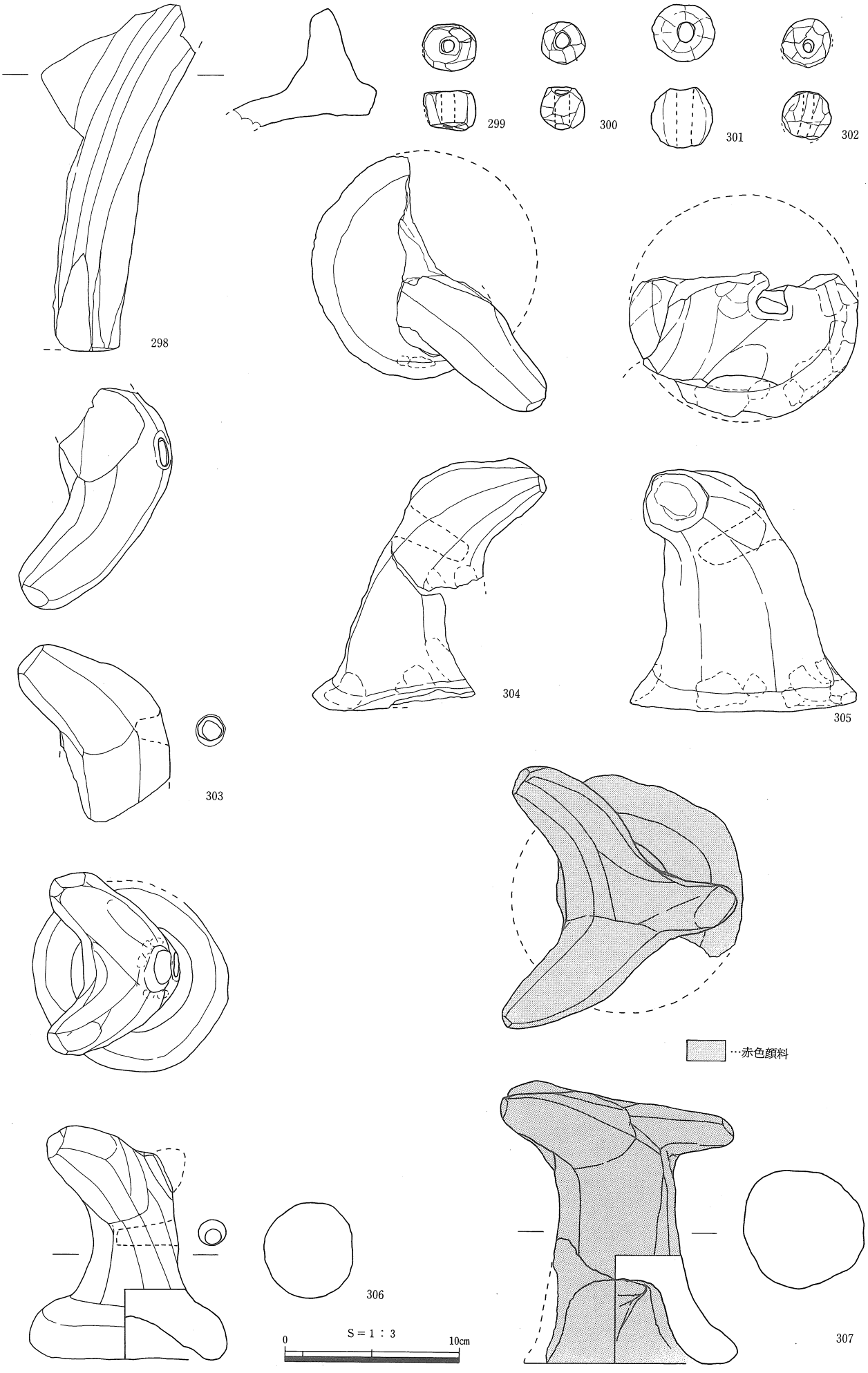
第82図　ＳＳ－５出土遺物実測図(4)



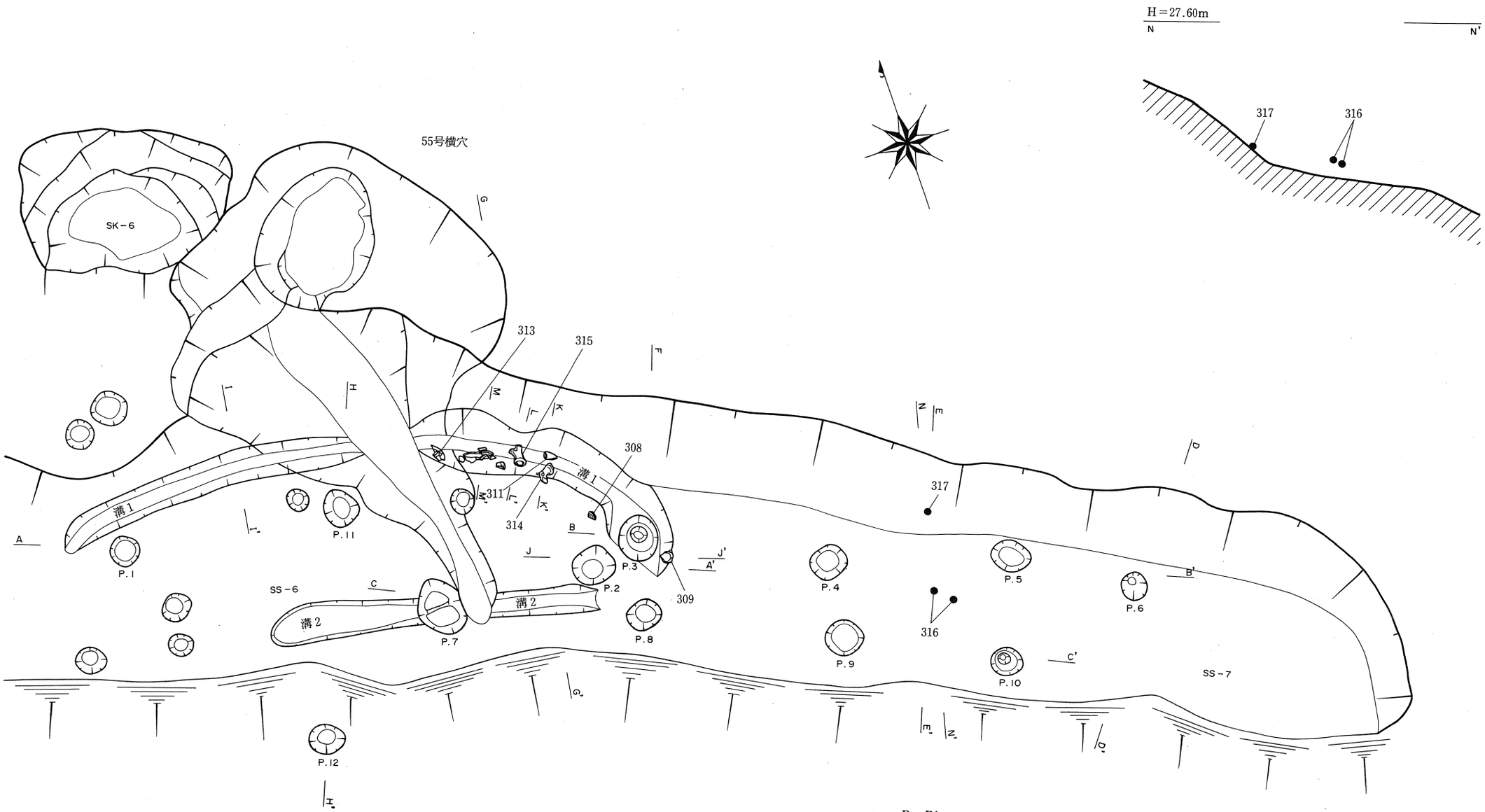
第83図　ＳＳ－５出土遺物実測図(5)



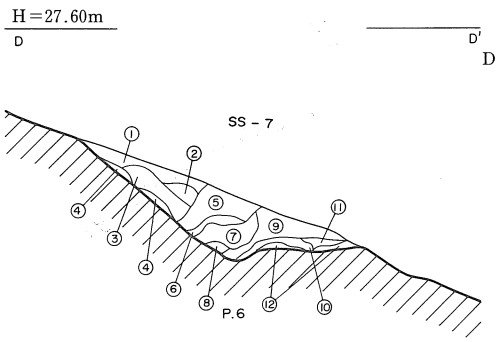
第84図　ＳＳ－５出土遺物実測図(6)



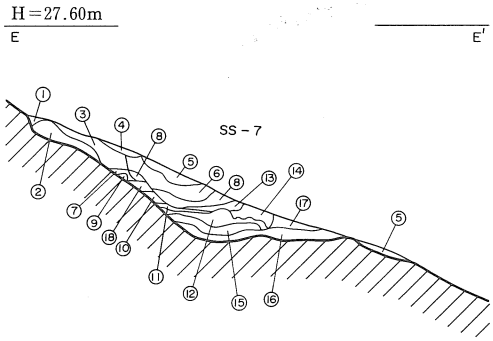
第85図　ＳＳ－５出土遺物実測図(7)



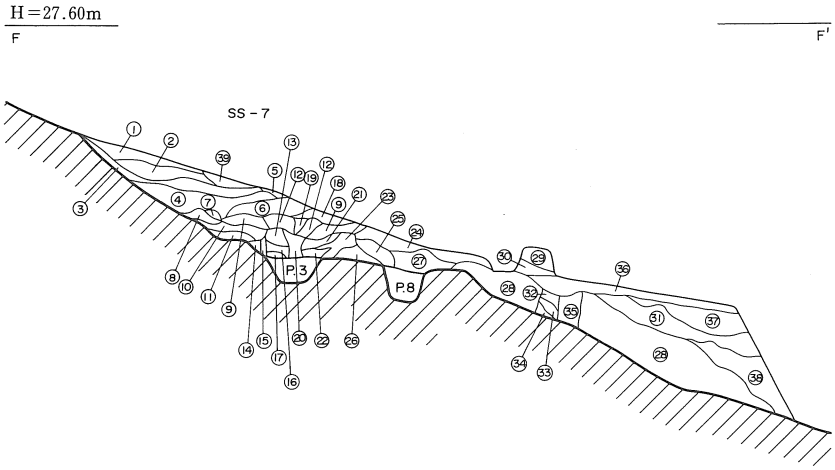
第86図　ＳＳ－６、７実測図



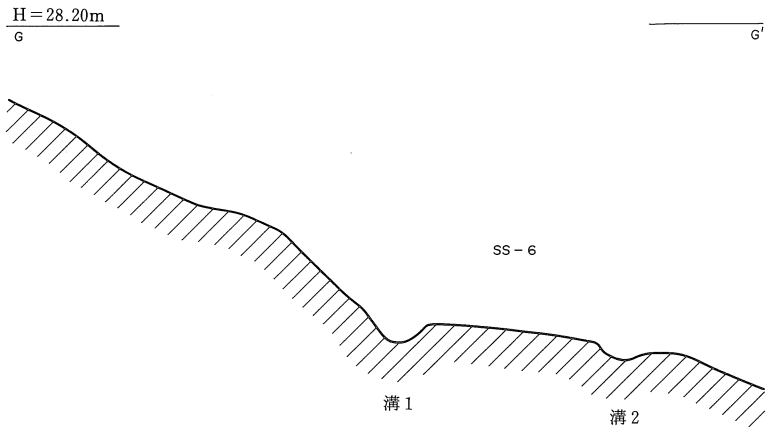
D－D'
① 黄灰色土（黒色土混じり）
② 黄灰色土（黒色土混じり）
③ 黄灰褐色土
④ 黄灰褐色土
⑤ 橙褐色土
⑥ 赤褐色土（礫混じり）
⑦ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑧ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑨ 灰色土（黒茶色土混じり）
⑩ 黄灰褐色土（黒色土混じり）
⑪ 淡黄褐色土
⑫ 灰色土（黒色土混じり）

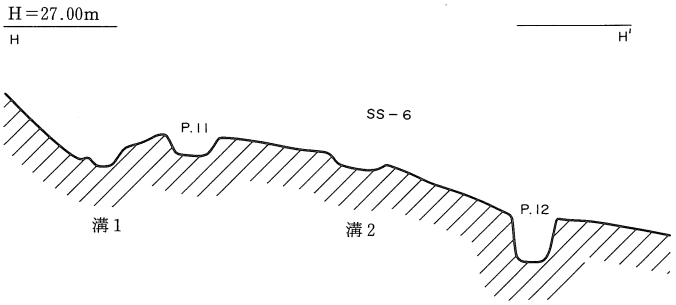


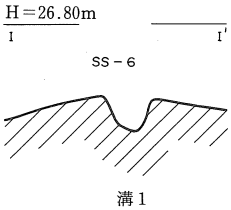
E－E'
① 黒色土
② 橙褐色土（灰色土混じり）
③ 黄灰色土（黒色土混じり）
④ 灰褐色土
⑤ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑥ 黄灰色土（黒色土・暗茶褐色土混じり）
⑦ 橙褐色土（灰色土混じり）
⑧ 黄灰色土
⑨ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑩ 黄灰褐色土
⑪ 黄灰色土（橙褐色土混じり）
⑫ 橙褐色土
⑬ 灰色土（橙褐色土混じり）
⑭ 灰色土（黒色土混じり）
⑮ 灰色土（橙褐色土・黒色土混じり）
⑯ 灰色土（黒色土混じり）
⑰ 灰色土（黒色土混じり）
⑱ 黒色土（黄灰色土混じり）

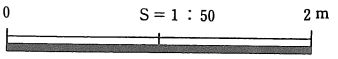


F－F'
① 暗黄灰褐色土（黒色土混じり）
② 暗黄灰色土（黒色土混じり）
③ 暗赤褐色土
④ 黄灰色土（黒色土・暗褐色土混じり）
⑤ 黄灰色土（黒色土・暗褐色土混じり）
⑥ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑦ 黄灰褐色土
⑧ 灰色土（黒色土混じり）
⑨ 灰色土（黒色土混じり）
⑩ 暗橙褐色土（黒色土・灰色土混じり）
⑪ 黄灰色土（黒色土混じり）
⑫ 灰色土（黒色土・褐色土混じり）
⑬ 橙褐色土（暗灰色土混じり）
⑭ 黄灰色土
⑮ 黄灰色土（炭化物混じり）
⑯ 橙褐色土
⑰ 橙褐色土
⑱ 暗灰色土（黒色土・橙褐色土混じり）
⑲ 灰色土（黒色土混じり）
⑳ 黄灰色土（黒色土・褐色土混じり）
㉑ 橙褐色土（黒色土・暗灰色土混じり）
㉒ 橙褐色土（灰色土混じり）
㉓ 灰色土（黒色土・褐色土混じり）
㉔ 灰色土（暗茶褐色土混じり）
㉕ 灰色土
㉖ 橙褐色土
㉗ 灰色土
㉘ 黄灰褐色土（橙褐色土混じり）
㉙ 黄灰色土
㉚ 黄灰色土（黒色土混じり）
㉛ 黒色土（暗茶褐色土混じり）
㉜ 黄灰色土（黒色土・橙褐色土混じり）
㉝ 黄灰褐色土（黒色土・橙褐色土混じり）
㉞ 黄灰褐色土（黒色土・橙褐色土混じり）
㉟ 黄灰褐色土（黒色土・橙褐色土混じり）
㊱ 黄灰色土
㊲ 黒色土（褐色土混じり）
㊳ 暗茶褐色土
㊴ 灰色土（褐色土混じり）

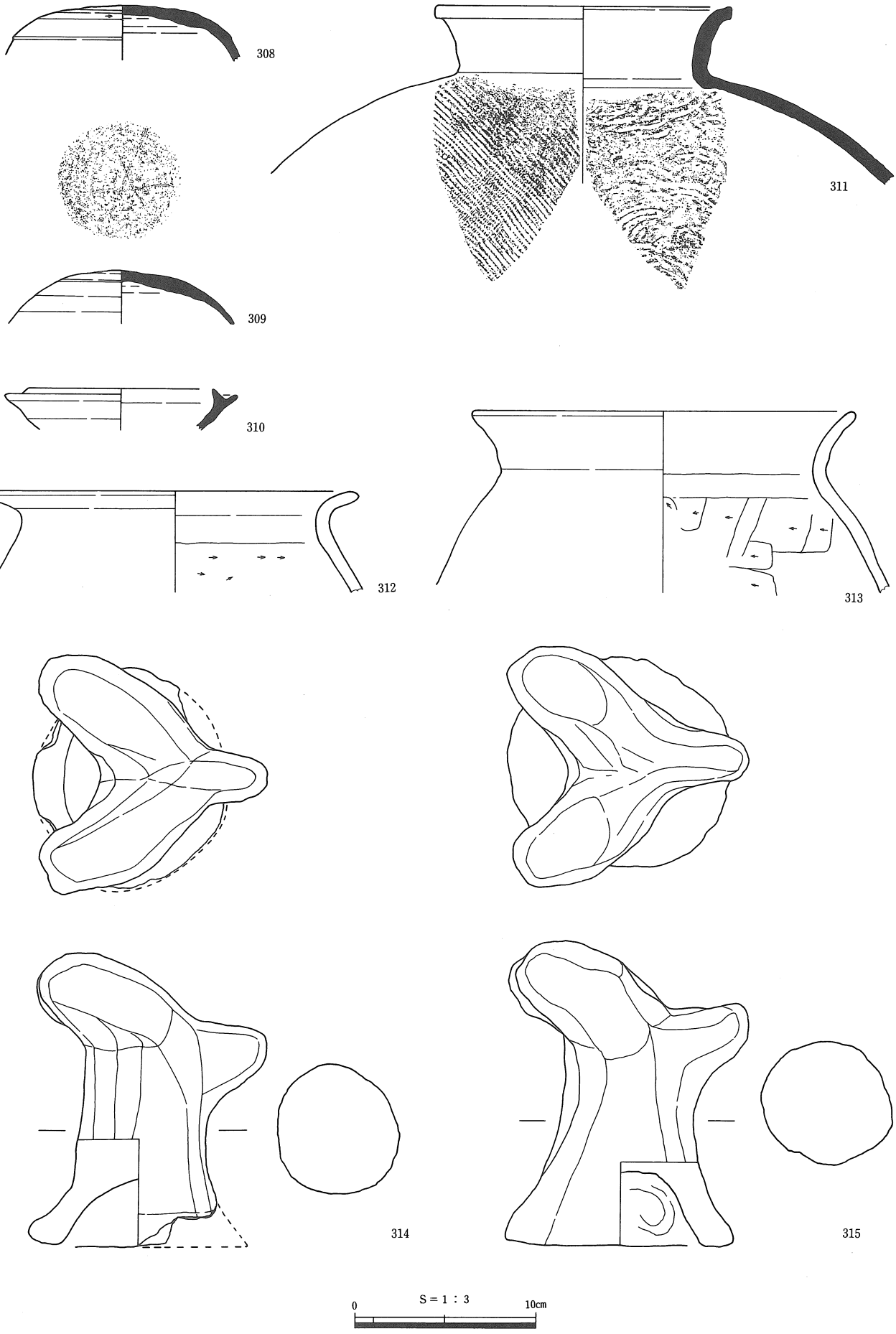








第87図　ＳＳ－６・７断面実測図



第88図　ＳＳ－６出土遺物実測図

第89図　ＳＳ－７出土遺物実測図

遺構はその配置状況から、①ＳＳ－３、②ＳＳ－２、４、５、８、18、③ＳＳ－14、④ＳＳ－６、７、13、17、19、⑤ＳＳ－15、16、⑥ＳＳ－９～12、⑦ＳＳ－20～24の７つのエリアに分けられると判断した。以下、エリアごとに各遺構を詳述する。

①ＳＳ－３

ＳＳ－３（第54、56、76図・写真図版15）は、標高約17～17.5mに位置し、Ａ区北側の丘陵斜面裾部に構築されたテラス状遺構である。古墳時代後期の竪穴住居跡（ＳＩ－８、９、11）とエリアを構成している。検出面には岩肌が露出しており、凹凸の激しい床面をなす。壁面稜線は明確に確認できなかった。東端部はＳＩ－11拡張住居によって切られており、ＳＳ－３はこれより古い遺構と判断する。テラスの規模は、長さ約５m、奥行き最大約２mを測る。

床面には２基のピット（Ｐ．１、２）を検出した。Ｐ．１は、直径約30cm、深さ約40cmを測り、Ｐ．２は直径約30cm、深さ約15cmを測る。また、ＳＩ－11西端部には、直径約30cm、深さ約40cmを測るＰ．３を検出している。Ｐ．１～３は約1.5m間隔で直線上に配列することから、Ｐ．３は本来的にはＳＳ－３に付随するピットであると考える。床面の凹凸部を盛土して整地し、Ｐ．１～３を柱穴とする建物を構築していたと推測する。

遺物は、須恵器、土製品が出土している。178は須恵器の坏の口縁部である。床面直上に出土した。立ち上がりは直立気味に内傾し、受部はほぼ水平方向にのびる。179は土師質の竈の破片である。床面上方の斜面部で出土しており、上方からの転落物と考える。180は支脚である。Ｐ．２の北西にほぼ床面直上で出土した。178は、陰田編年５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に比定される。

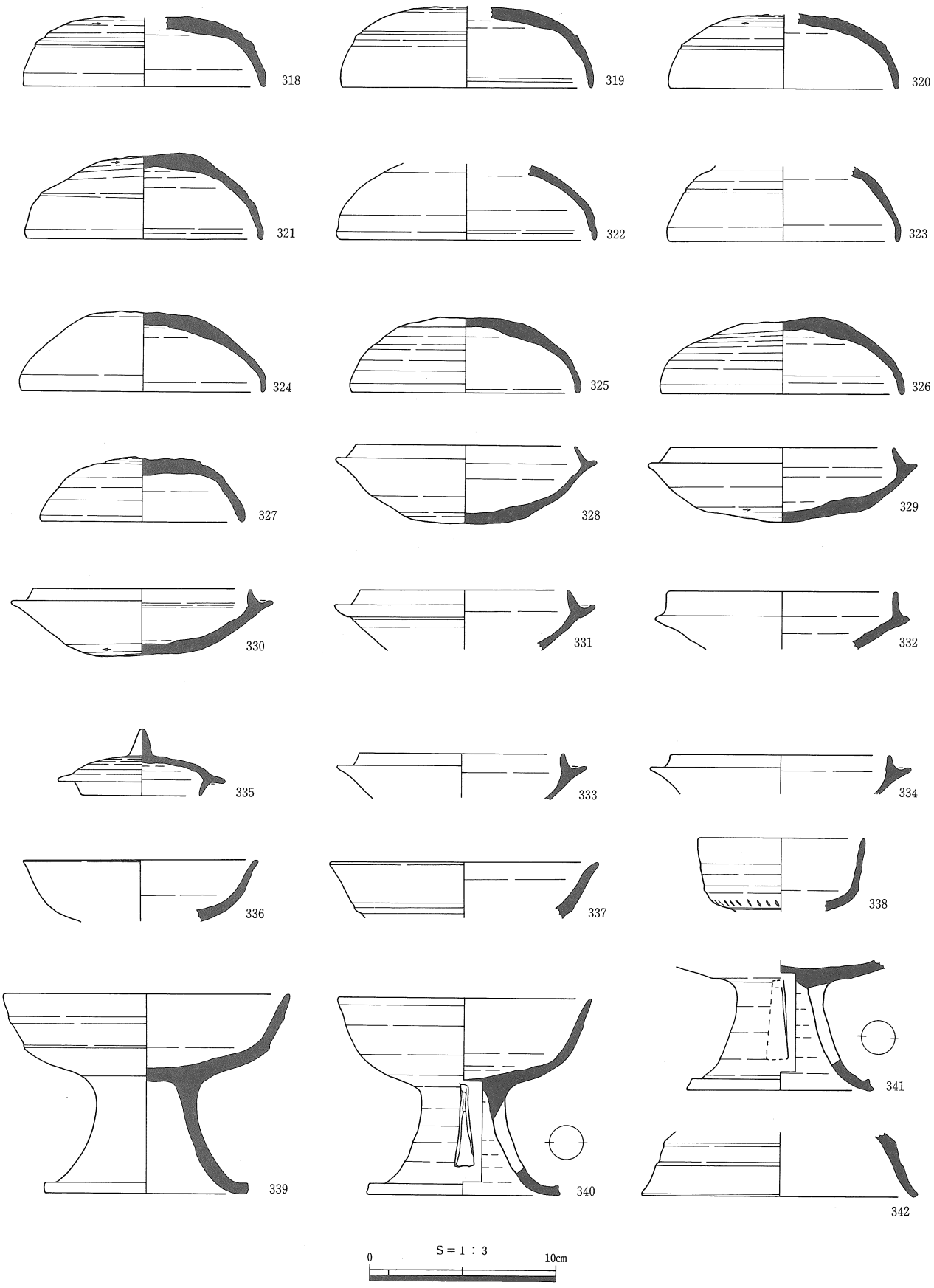
ＳＳ－３、ＳＩ－８、９、11の構築順序は把握できなかった。唯一、ＳＩ－８→11の順が明確である。ＳＳ－３、ＳＩ－11では同時期の遺物が出土していることから、ＳＳ－３はＳＩ－８より新しい遺構である可能性が考えられる。

②ＳＳ－２、４、５、８、18

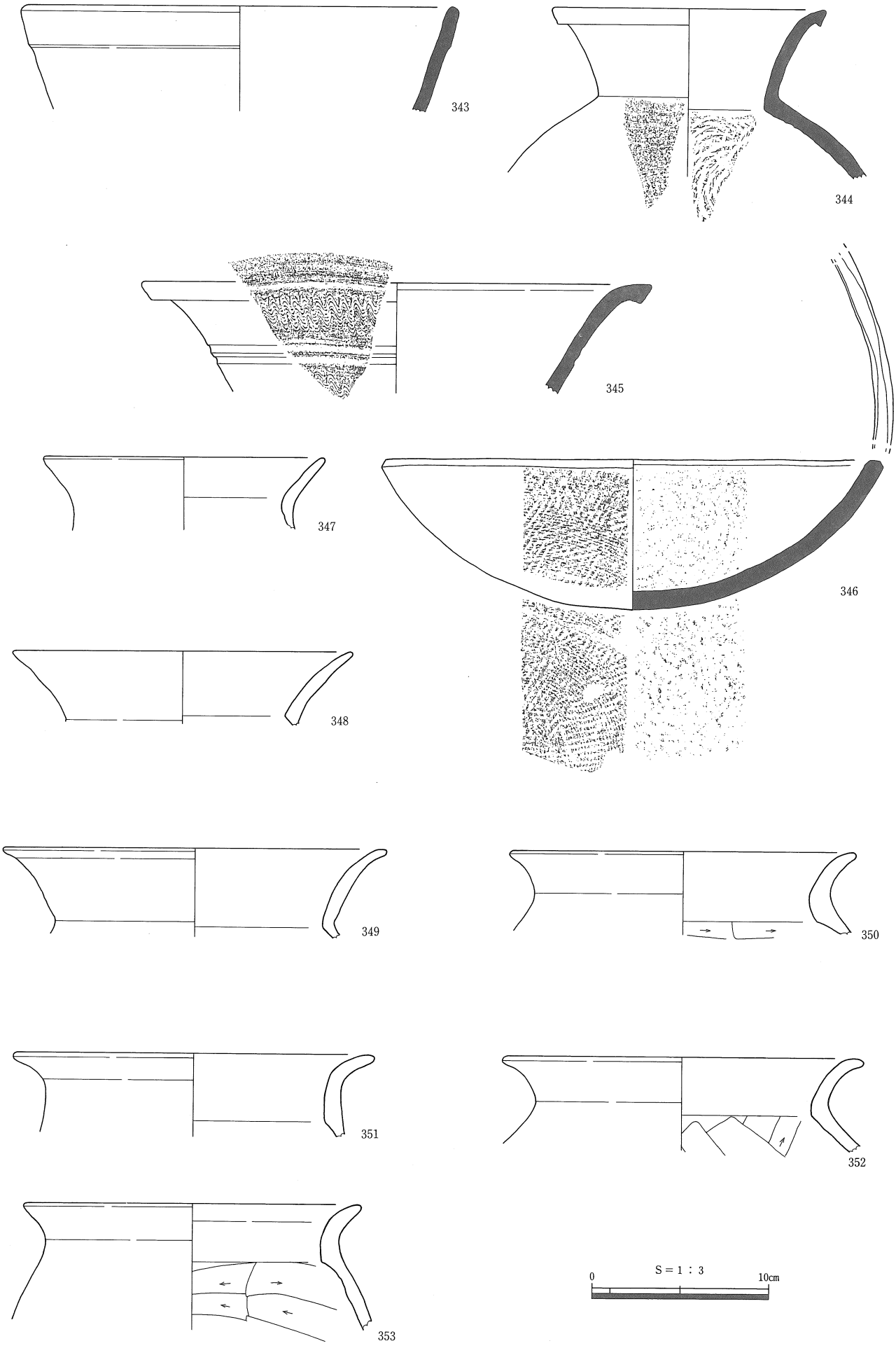
本エリアでは、ＳＳ－２、４、５、８、18を互いに近接して検出した。Ａ区北側の丘陵斜面部に構築されており、標高21～24.5mを測る。エリア内には弥生時代後期後半～古墳時代前半の竪穴住居跡（ＳＩ－５、６）も検出している。

ＳＳ－２（第69、71～75図・写真図版16、75、76）は、標高20.5～21mに位置し、長さ約10m、奥行きは床面西側で最大3.5mを測る。斜面上方にはＳＳ－４、５が、西側にはＳＩ－５、６が隣接する。残存壁高はＤ－Ｄ’ラインで約１mを測り、壁面裾部には検出面で幅約70cm、深さ２～３cmを測る側溝（溝５）を僅かに検出した。床面にはピットを検出しなかった。

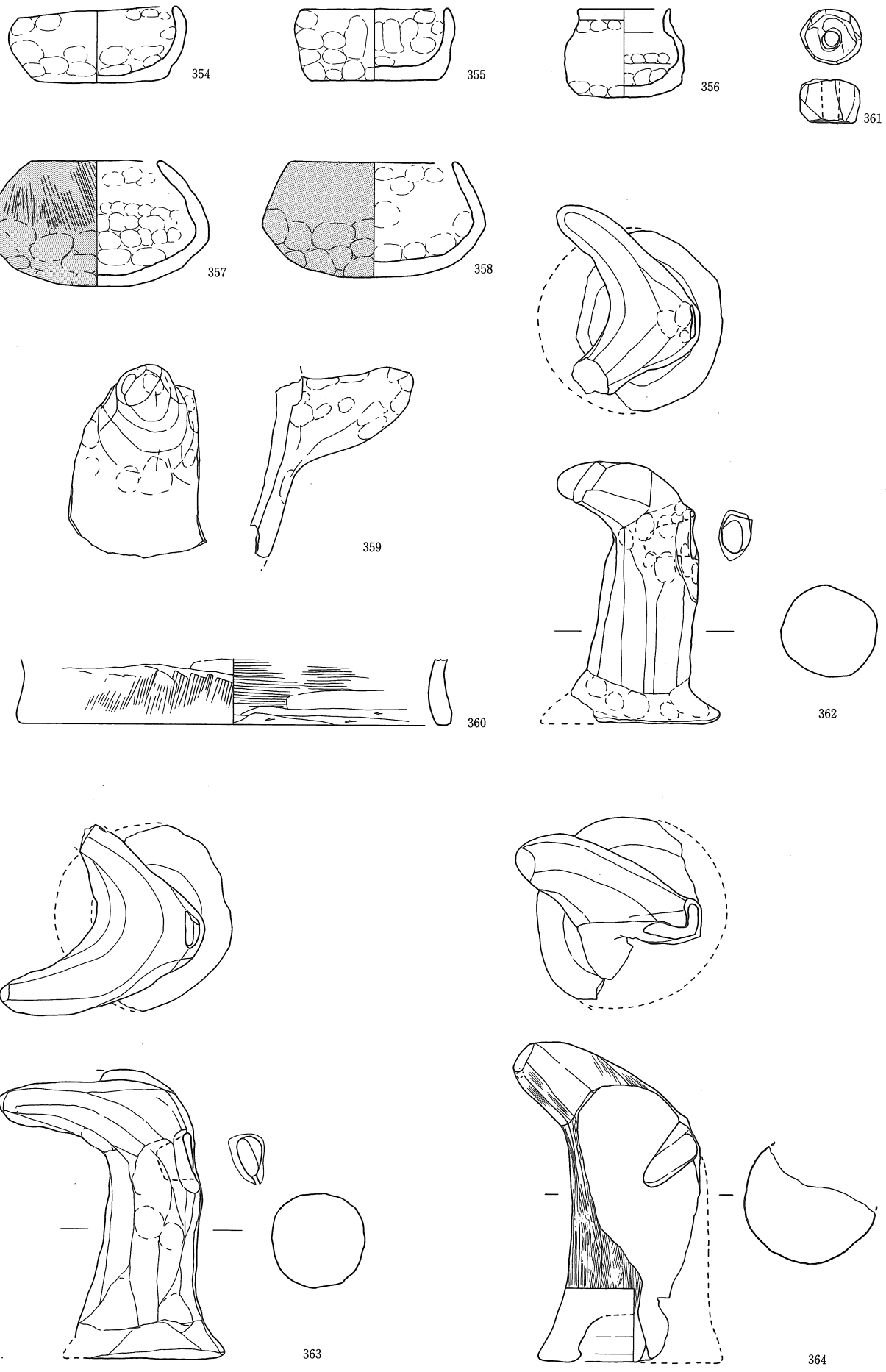
遺物は、須恵器、瓦質土器、土製品、鉄製の鍔が出土した。157～172は須恵器である。157と158、159と160は対をなす蓋坏である。床面中央部やや東寄りの地点で、蓋と坏とが重なり合った状態で出土した。161と162もまた対をなす蓋坏である。蓋、坏とも焼け歪んでいる。床面中央部の直上に互いに近接して出土した。163～168は坏蓋である。168は床面東端部直上に出土した。163～165は天井部と口縁部の間に段があり、稜が突出している。165は溝５上に浮いた状態で出土した。166は床面西端部に浮いた状態で出土した。169～171は須恵器の坏身である。ともに内傾する立ち上がりを呈する。170は壁面斜面直上に出土した。171は床面東端部直上に出土した。172は甕、または堤瓶の把手である。173、174は瓦質土器である。173は甕である。174は甑で、東壁斜面上に浮



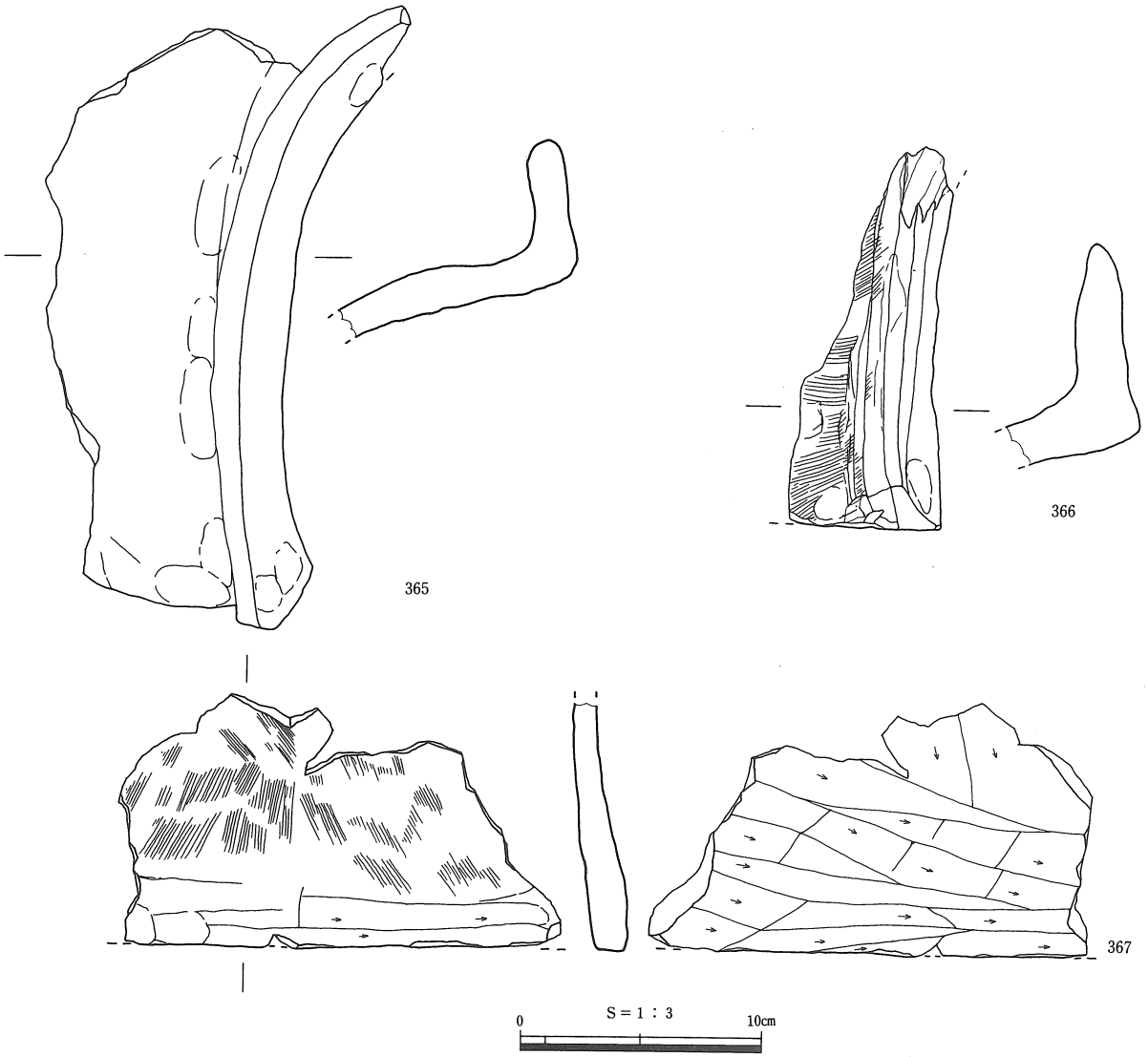
第90図　ＳＳ－８出土遺物実測図(1)



第91図　ＳＳ－８出土遺物実測図(2)



第92図　ＳＳ－８出土遺物実測図(3)



第93図　ＳＳ－８出土遺物実測図(4)

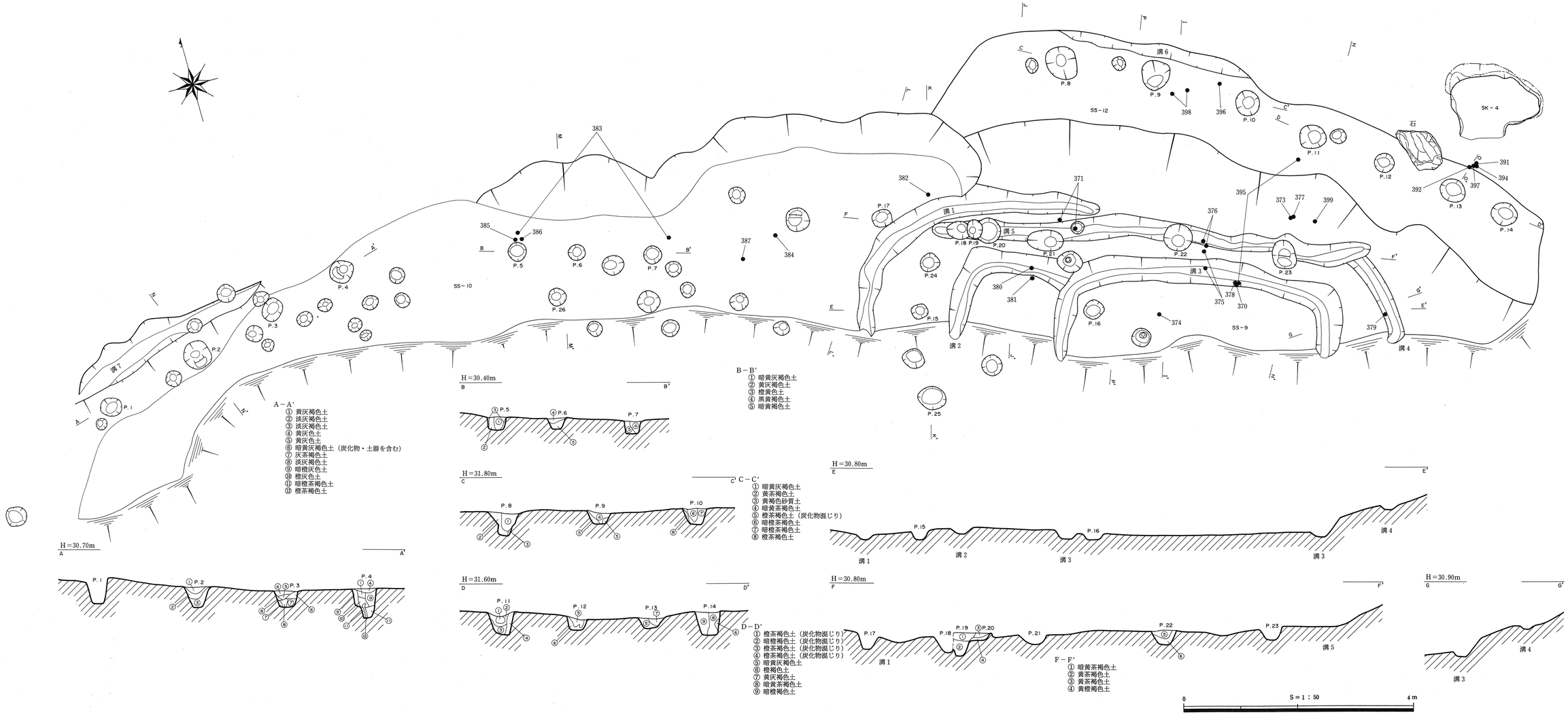
いた状態で出土した。175は土師器の甕である。外反した口縁部をもつ。床面中央部でほぼ直上に出土した。176は土錘である。177は鉄製の鍔である。これらの遺物は陰田編年４式（６世紀後葉）に比定され、ＳＳ－２はエリア内で最も古い時期を示すと考える。

ＳＳ－４、５（第69～73、77～85図・写真図版16、17、76、77）は、標高約22.5～23mに位置し、斜面下方にはＳＳ－２、西側にはＳＳ－８が隣接する。遺構面中央には、東西に横断する段差が確認でき、下段の遺構面をＳＳ－４、上段の遺構面をＳＳ－５と区分した。まずＳＳ－４を構築し、その後に壁面を掘削して拡張し、ＳＳ－５を構築したものと考える。その際ＳＳ－４の遺構面上を盛土し、ＳＳ－５の床面を造成したものと推測する。ＳＳ－４、５西端部は、ＳＳ－８によって削平されている。ＳＳ－４は、長さ約18m、奥行き３～４mを測り、残存壁高は、Ｄ－Ｄ'ラインで約１mを測る。ＳＳ－５との段差は、Ａ－Ａ'ラインで約20cmを測る。ＳＳ－５は、長さ約17.5m、奥行きは最大約2.5mを測る。残存壁高は、Ａ－Ａ'ラインで約1.2mを測る。両遺構の壁面裾部には、幅約40cm、深さ約５cmを測る側溝（溝１）を検出した。溝１は両遺構に連続的に敷設してあり、ＳＳ－５に伴う排水施設と推測する。ＳＳ－５には溝１のほかに、幅約10cm、深さ約５cmを測る溝（溝２）、幅30～40cm、深さ約５cmを測る溝（溝３）、幅約30cm、深さ約５cmを測る溝（溝４）を検出した。溝２、３は互いに切り合う関係にあり、ともに建物に伴う溝と推測される。建物は建て替えが行われたと考える。切り合いの関係からは、溝２、３の構築順序を明確に把握できなかった。本テラスは、壁面を掘削して床面を拡張したものと推測され、この構築順序を考慮すると、溝２は溝３より新しいと考えるのが妥当であろう。溝４は約1.2mにわたって検出した。

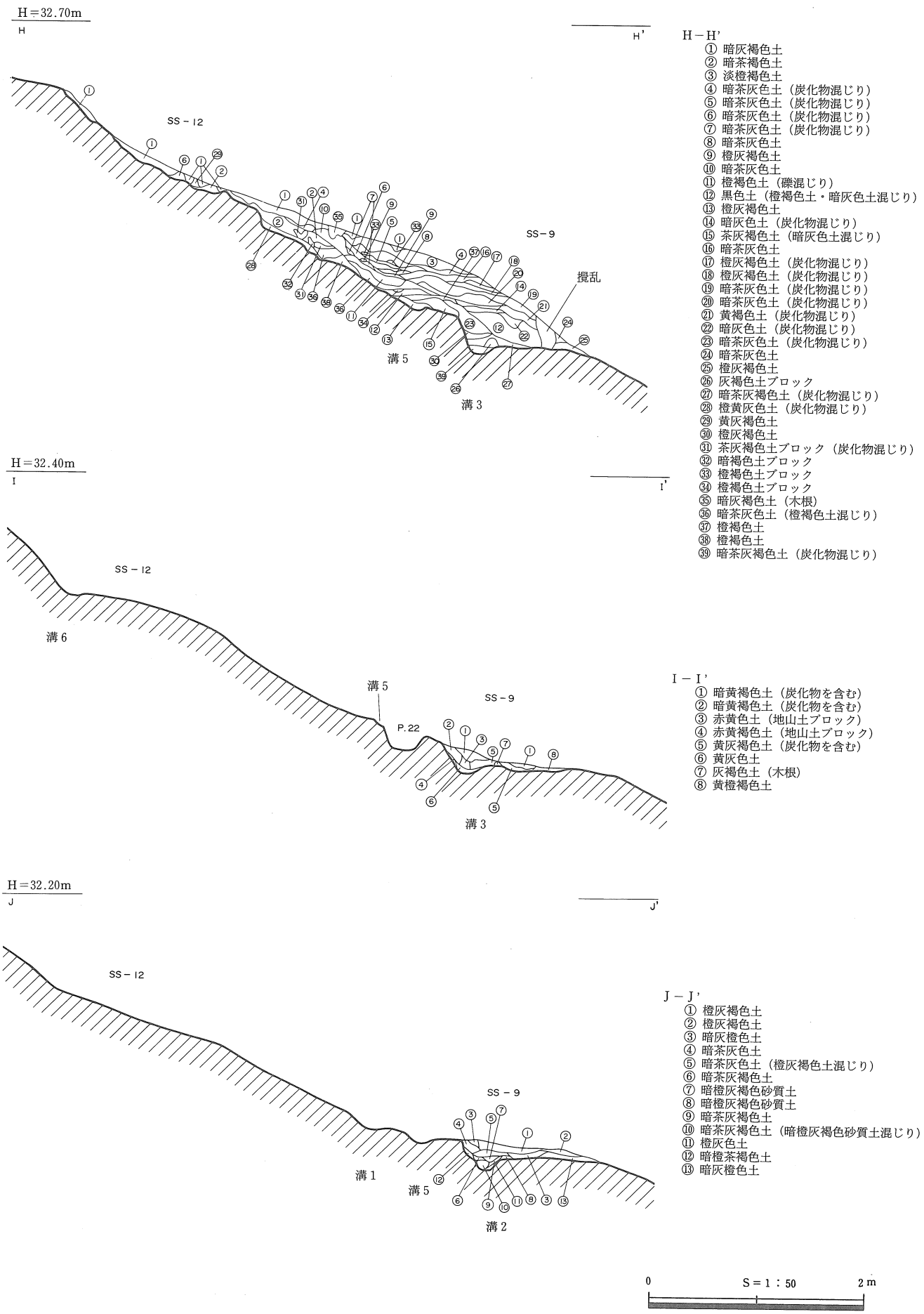
両遺構床面には、合計26基のピットを検出した。ピットの配置状況から、Ｐ.16～18、Ｐ.19～21、Ｐ.22～24をそれぞれ柱穴とする建物の存在が推測される。このうちＰ.16～18は、溝３に伴うものと考える。Ｐ.16～18は、直径45～65cm、深さ60～70cm、ピット間距離は約1.5mを測る。Ｐ.19～21は、直径約25cm、深さ５～15cm、ピット間距離は約２mを測る。上部は流失したものと考える。Ｐ.22、23は直径30～40cm、深さ35～50cmを測り、Ｐ.24は直径約40cm、深さ約15cmを測る。Ｐ.22～24のピット間距離は約1.5mを測る。上部は流失したものと考える。

ＳＳ－４からは、須恵器、土師器、土製品が出土した。181～201は須恵器である。181～187は坏蓋である。186、187を除いて、口縁部と天井部との間に段を設けている。181の口縁部は、直立した立ち上がりを呈する。182～184、187の口縁部は内湾しており、185、186の口縁部はやや外反している。188～194は坏身である。いずれも立ち上がりは内傾する。195～199は高坏である。197は２方に三角形の透かしを施している。195、196、198は坏部である。口縁部は外反しており、口縁端部は丸くおさめている。199は脚部であり、三角形あるいは梯形の透かしを施している。200は壺の口縁部でいる。201は壺の胴部である。肩部に連続刺突文を施している。202～210は土師器である。202～209は甕である。いずれも胴部下半を欠く。210は坏である。須恵器の坏的な器形だが、焼成は土師器である。内傾する立ち上がりをもつ。211は３支の支脚である。212は竈の庇である。溝１上方に位置する平坦面直上に出土した。遺物は、212を除く全てが浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。出土レベルから３段階の転落時期が推測される。186、189、194、195、208が初期の転落物であり、190、192、197、200、202、203、211が２期目の転落物、残りがその後の転落物であると考える。直接的に遺構の時期を示すものは殆ど見られないが、これらの遺物は陰田編年５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に比定される。

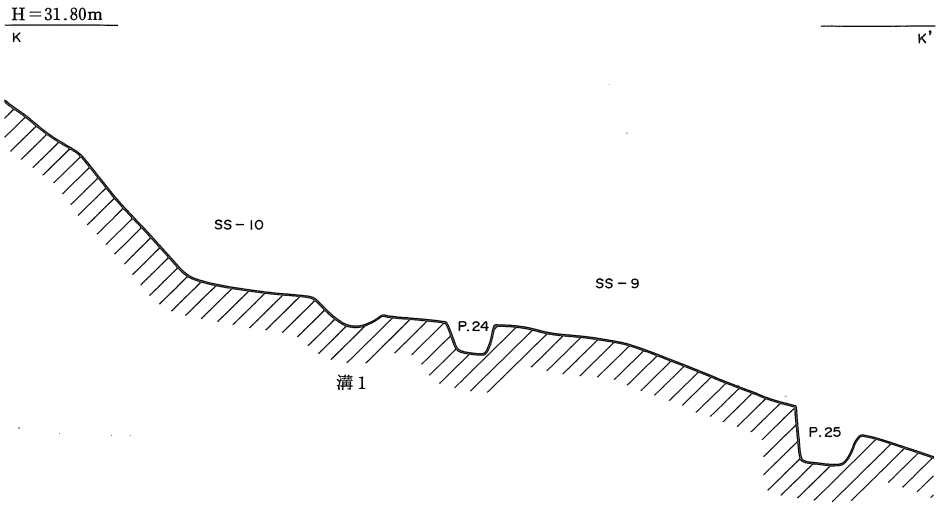
ＳＳ－５からは、須恵器、土師器、土製品、石製品、鍛冶関連遺物が出土している。213～267は須恵器である。213～228は坏蓋である。213～222、224、225には口縁部と天井部の間に段を設けている。229～245は坏身である。基本的に立ち上がりは内傾するが、236、239、242、245はやや直立気味である。246～260は高坏である。246は有蓋高坏、247～252は無蓋高坏である。脚部には三角形か梯形の透かしを施している。259は低脚の高坏であり、３方に梯形の透かしを施している。261はかえりをもつ蓋である。262は壺である。胴部には連続刺突文を施している。263、264は直口壺である。口縁部は直立気味に立ち上がる。263の底部にはヘラ切りが観察される。

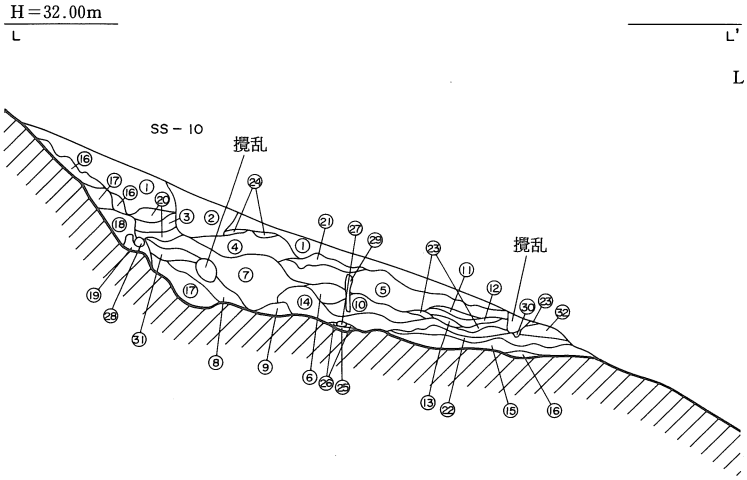


第94図　ＳＳ－９、10、12実測図



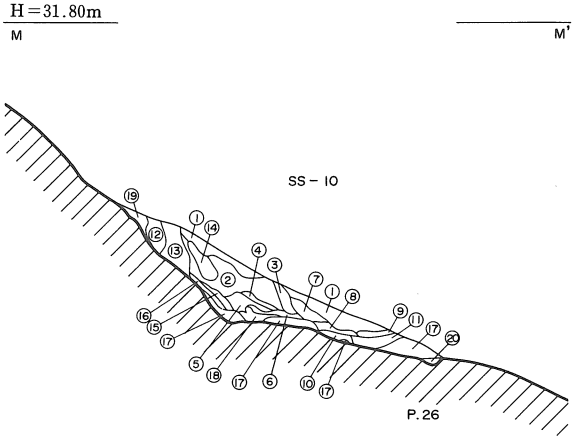
第95図　ＳＳ－９、12断面実測図

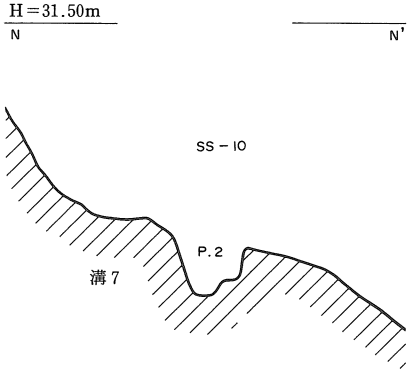




L－L'

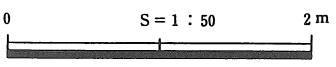
① 茶灰褐色土
② 黒褐色土
③ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
④ 淡茶灰褐色土
⑤ 茶灰褐色土
⑥ 茶灰褐色土
⑦ 茶灰褐色土
⑧ 茶灰褐色土
⑨ 茶灰褐色土
⑩ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑪ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑫ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑬ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑭ 茶灰褐色土（炭化物混じり）
⑮ 茶灰褐色土（橙褐色土・炭化物混じり）
⑯ 橙褐色土（黄灰褐色土混じり）
⑰ 暗橙灰褐色土
⑱ 黄灰色土（橙褐色土混じり）
⑲ 橙褐色土
⑳ 赤褐色土（茶灰褐色土混じり）
㉑ 橙灰褐色土（炭化物混じり）
㉒ 橙灰褐色土（炭化物混じり）
㉓ 橙灰褐色土（炭化物混じり）
㉔ 橙褐色土ブロック
㉕ 橙褐色土（炭化物混じり）
㉖ 橙褐色土（炭化物混じり）
㉗ 黄褐色土ブロック
㉘ 黄褐色土ブロック
㉙ 青灰色土ブロック
㉚ 青灰色土ブロック
㉛ 暗橙灰褐色土
㉜ 淡茶灰色土



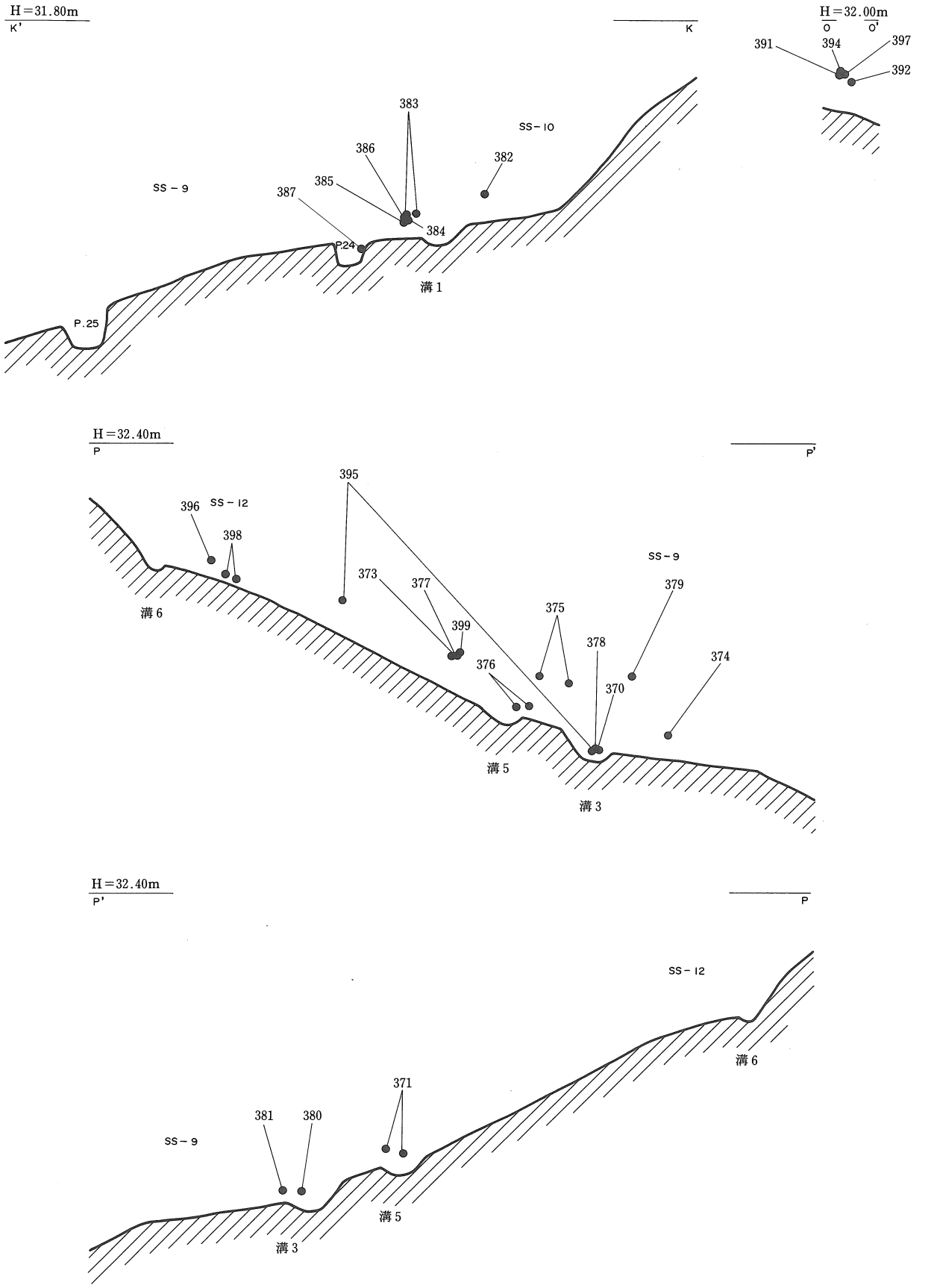


M－M'

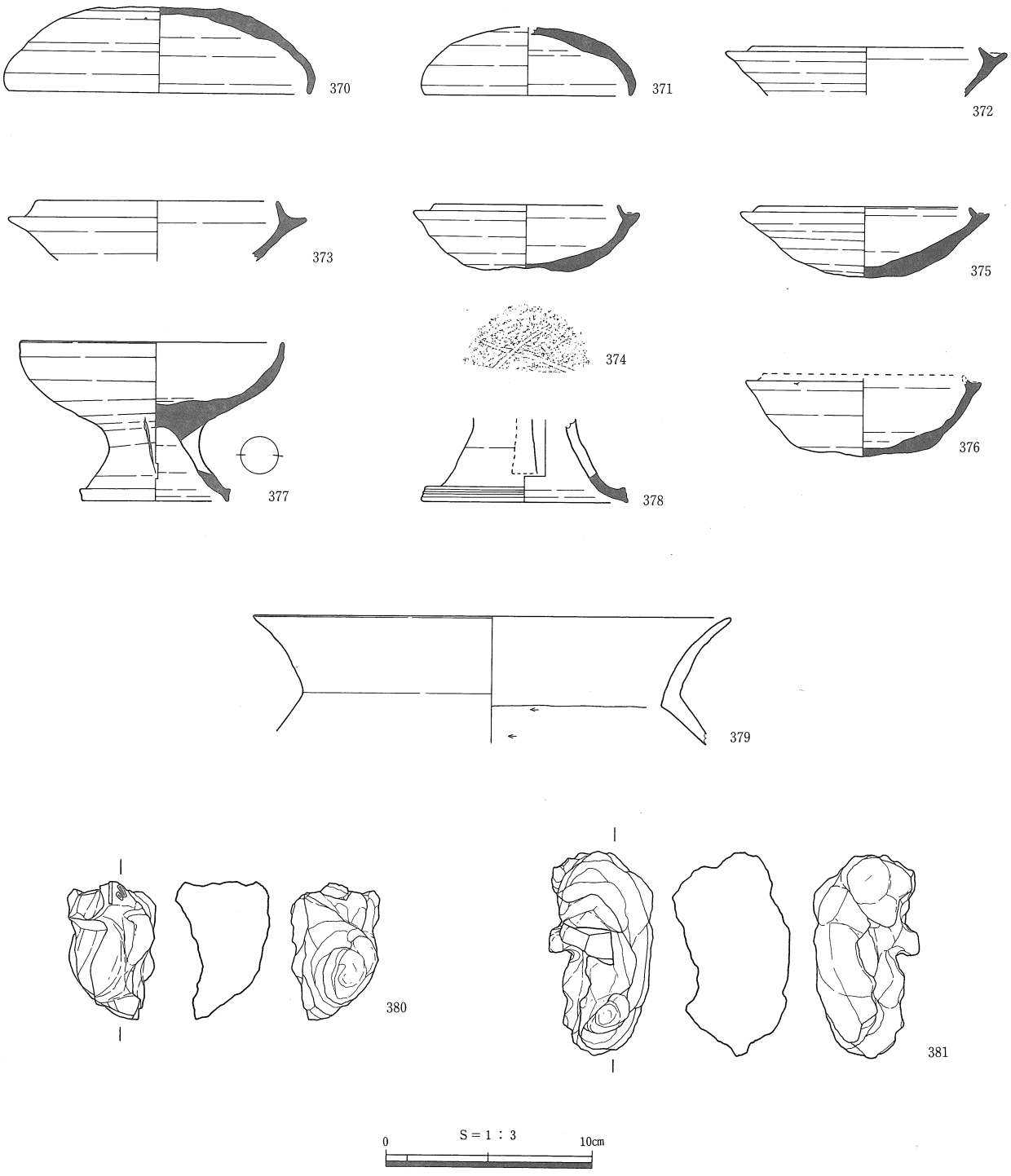
① 黄茶褐色土
② 茶褐色土
③ 茶褐色土
④ 暗茶褐色土
⑤ 暗茶褐色土
⑥ 暗黄褐色土
⑦ 暗黄灰褐色土
⑧ 暗黄灰褐色土
⑨ 暗黄灰褐色土
⑩ 暗黄灰褐色土
⑪ 暗黄灰褐色土
⑫ 淡黄灰褐色土ブロック（赤色土混じり）
⑬ 茶褐色土（淡黄灰褐色土ブロック混じり）
⑭ 淡黄灰色土ブロック
⑮ 淡桃灰色土
⑯ 暗茶褐色土
⑰ 淡桃褐色土
⑱ 桃褐色土
⑲ 暗茶褐色質土（礫混じり）



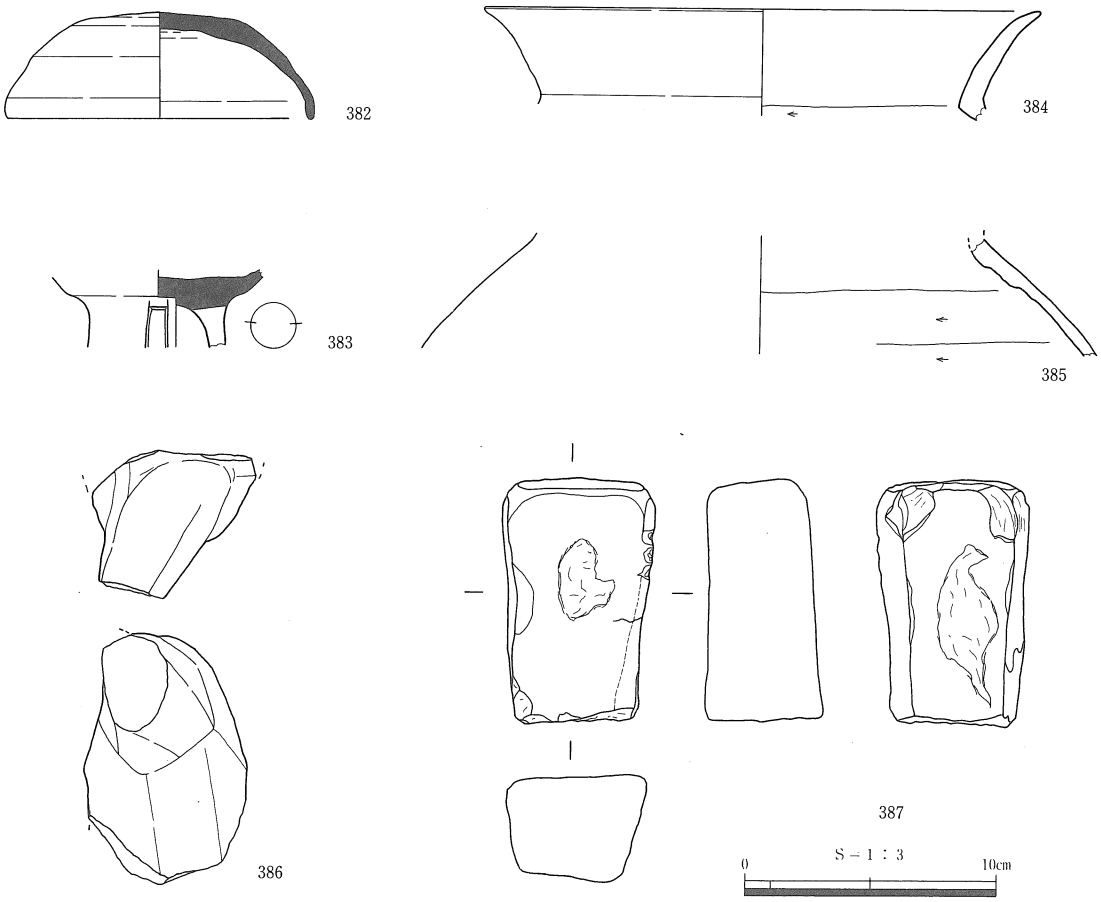
第96図　ＳＳ－９、10断面実測図



第97図　ＳＳ－９、10、12実測図



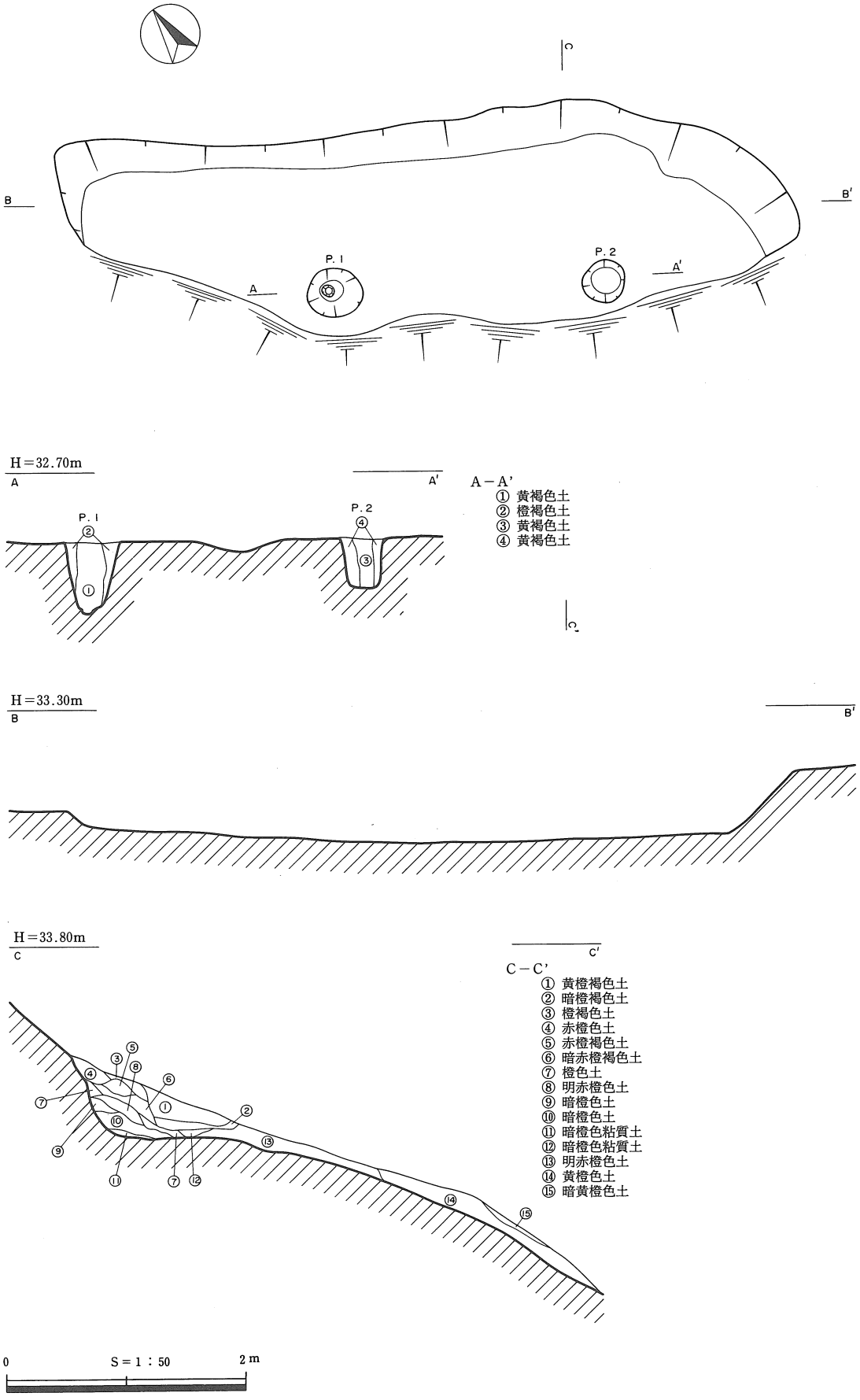
第98図　ＳＳ－９出土遺物実測図



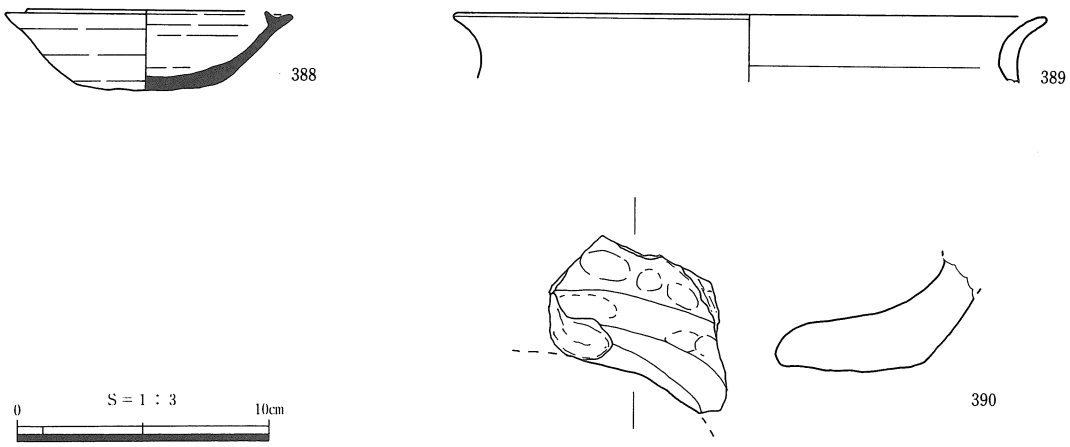
第99図　ＳＳ－10出土遺物実測図

265は横瓶である。266、267は甕である。いずれも胴部下半を欠く。268～293は土師器である。268～280は甕である。いずれも胴部下半を欠く。外面は基本的にハケ調整であるが、277のハケメはかなり粗い。278は外面を指押さえしている。281～284は甑である。285、287、288は器形不詳だが、甕～鉢系の器種か。286は小形の甕である。289～290は鉢である。289の外面には赤色顔料が塗布されている。Ｐ。26北東側の溝１底面直上に出土した。291、292は椀である。293は坏である。須恵器的な器形だが、焼成は土師器である。内傾する立ち上がりをもつ。294、295は椀形鍛冶滓である。ＳＳ－５からは、鍛冶関連遺物として、椀形鍛冶滓161.5ｇ分、その他の鉄滓28.2ｇ分、炉壁168.3ｇ分を出土している。296、297は砥石であり、表面は滑らかに磨耗している。石材は、296が流紋岩質凝灰岩、297が石英砂岩である。298は竈の庇である。299～302は土錘である。303～307は支脚である。303～305は２支、306は３支の支脚であり、これらはともに有孔部をもつ。307は３支の支脚であり、うち１支は水平にのびている。表面には、赤色顔料が塗布されている。遺物は、289を除く全てが浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。出土レベルから、最低２段階の転落時期が推測される。出土遺物中、225、233、234、239、245～247、249、250、253、255、257～260、263、265、267、271、274～276、278、280、286、287、290、291、293、298、301、307は初期の転落物と考える。遺構の時期を示すものは殆ど見られないが、これらの遺物は陰田編年６～７式（７世紀前葉～中葉）に比定される。

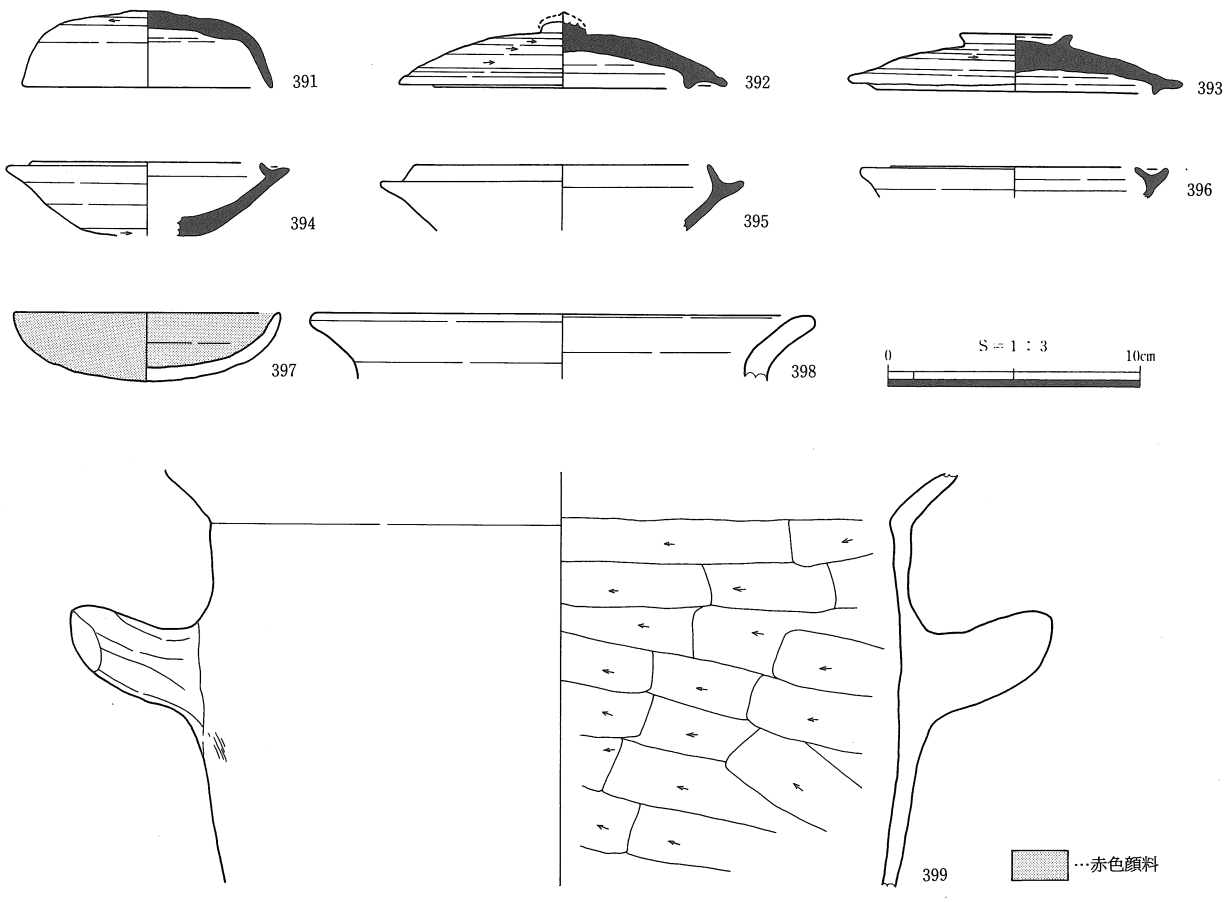
ＳＳ－８（第69、70、72～74、90～93図・写真図版16、19、77、78）は、標高約22～22.5mに位置し、長さ約11m、奥行きは西側床面で最大約1.7mを測る。東壁がＳＳ－４を、北壁がＳＳ－５を切っており、北壁の上部には、ＳＳ－５床面の１部と考える段状の平坦面を検出した。残存壁高は、Ｂ－Ｂ'ラインで約50cmを測る。Ｂ－Ｂ'土層断面から、ＳＳ－８はＳＳ－４、５より新しい遺構であると判断できる。南側にはＳＩ－５、６が存在する。後背壁面裾部に、側溝は確認できなかった。



第100図　ＳＳ－11実測図



第101図　ＳＳ－11出土遺物実測図



第102図　ＳＳ－12出土遺物実測図

床面には14基のピットを確認した。ピットの配置状況から、P．1～4を柱穴とする建物（a）と、P．6～8を柱穴とする建物（b）の存在が推測される。P．1～4は、直径35～50cm、深さ約30cm、ピット間距離約1.2mを測る。P．6～8は直径35～40cm、深さ30～40cmを測る。P．6、7のピット間距離は約2m、P．7、8のピット間距離は約1.5mを測る。B－B'土層断面からも、柱穴と思えるピット状の落ち込みを確認した。P．6の約1.5m南側に位置しており、bの柱穴の1基と考える。断面では、この落ち込みを覆うように、炭化物、焼土混じりの層（14層）および焼土層（15層）を確認しており、建物は焼失した可能性が高い。14層は、第70図中に黒く網掛けをしている層である。

遺物は、須恵器、土師器、土製品が出土した。318～346は須恵器である。318～327は坏蓋である。318～321、323は口縁部と天井部の間に段が施してあり、318～320の稜は突出している。328～334は坏身である。立ち上がりは、328～331は内傾し、332～334は直立する。335は蓋である。円錐形のつまみとかえりを有する。長頸壺の蓋か。336～341は高坏である。336～340は無蓋高坏である。336～338は脚部を欠く。338は小形の高坏であり、坏部の底部外面には連続刺突文を施している。340、341の脚部には、梯形の透かしを施している。342は台付椀の脚台である。343～345は甕である。いずれも胴部下半を欠く。345の口縁部外面には波状文を施している。346はボール状の器である。大型の甕の底部を利用し、口縁端部を削って面取りした転用品と考える。347～358は土師器である。347～353は甕である。354、355、357、358は椀であり、356は小形の壺である。いずれも内外面ともに指押さえが見られる。357は外面上半をハケ調整している。357、358は、354、355より大型であり、外面には赤色顔料を塗布している。356は床面東側の低位側端部にほぼ直上で出土した。359、360は甑である。362～364は支脚である。いずれも2支の支脚であり、有孔部をもつ。364の外面にはハケ調整を施している。365～369は竈である。365、366は庇部、367～369は基部で、369は庇を伴う。基本的には外面ハケ、内面ケズリ調整で、庇の取り付け部は指押さえで整えている。遺物は、356を除く全てが浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。遺物の出土レベルから、320、322、326、327、332～334、337、338、342、343、346、349、352、359、360、367は初期の転落物と考える。これらの遺物は、陰田編年6～7式（7世紀前葉～中葉）に比定される。

SS－18（第23～24図・写真図版5）は、標高約24mに位置し、長さ約5m、奥行き約2mを測る。②エリア内の他の遺構とはやや距離を置いて存在する。残存壁高は、D－D'ラインで約80cmを測る。床面にはピットを検出しなかった。遺物も出土していない。

各遺構は、SS－2→4→5→8の順に構築したものと考える。SS－18については時期不明である。

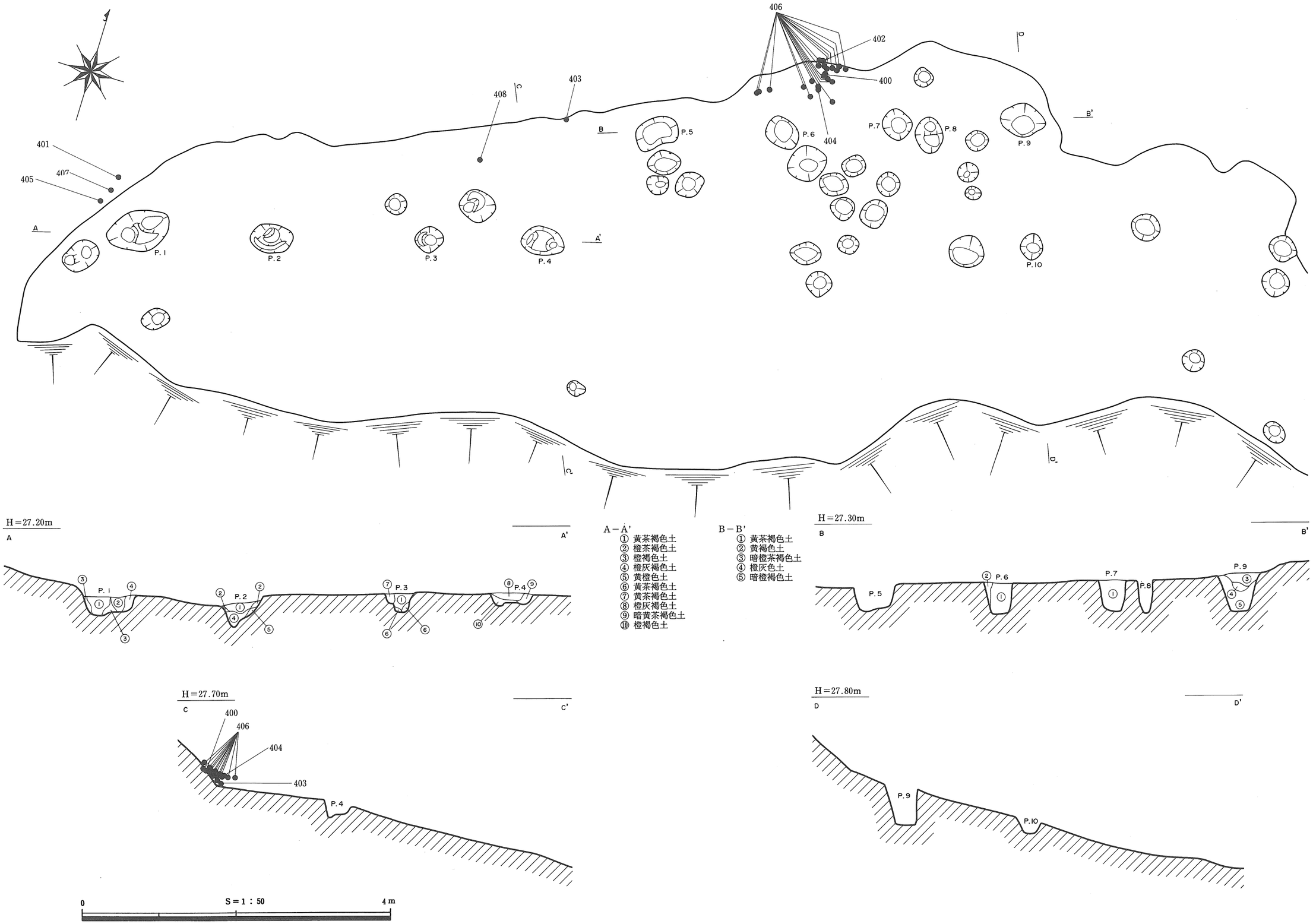
③SS－14（第49～52、105、106図・写真図版22、79）

③は、SS－14と竪穴住居跡SI－7、10、12、13によって構成されるエリアである。陰田60号墳の立地する丘陵の南西裾部に位置する。SS－14は、調査前の段階で段状地形が調査区外の南側に伸びているのが確認できた。検出面で標高22.5～24.5mに位置し、南北9.6m、東西3mの範囲で検出した。平坦面の規模は、南北4.4m、東西2.5mを測るが、さらに調査区外に続いている。後背の壁面の高さは、80cmを測る。2条の溝と13基のピットをテラス上に検出したが、建物の構成は不明である。西側を段状に検出したが、土層断面から推して、盛土して床面を造成していたものと思われる。後背の壁面から、横穴状のピットを検出した。入口高30cm、奥行き50cmを測る。遺物は、P．24の埋土中から土師器の甕（416）、テラスの床面よりやや浮いた位置から須恵器の坏（410、411）、鉄鉢形土器（413）、土師器の甕（417）、テラスの埋土中から須恵器の蓋（409）、高坏（412）、土師器の甕（414、415、418）が出土した。410は高台を持つもので、底部をナデている。411は底部糸切りである。これらの遺物は、陰田編年の9～10式（7世紀末～8世紀後半）に相当するものと判断する。

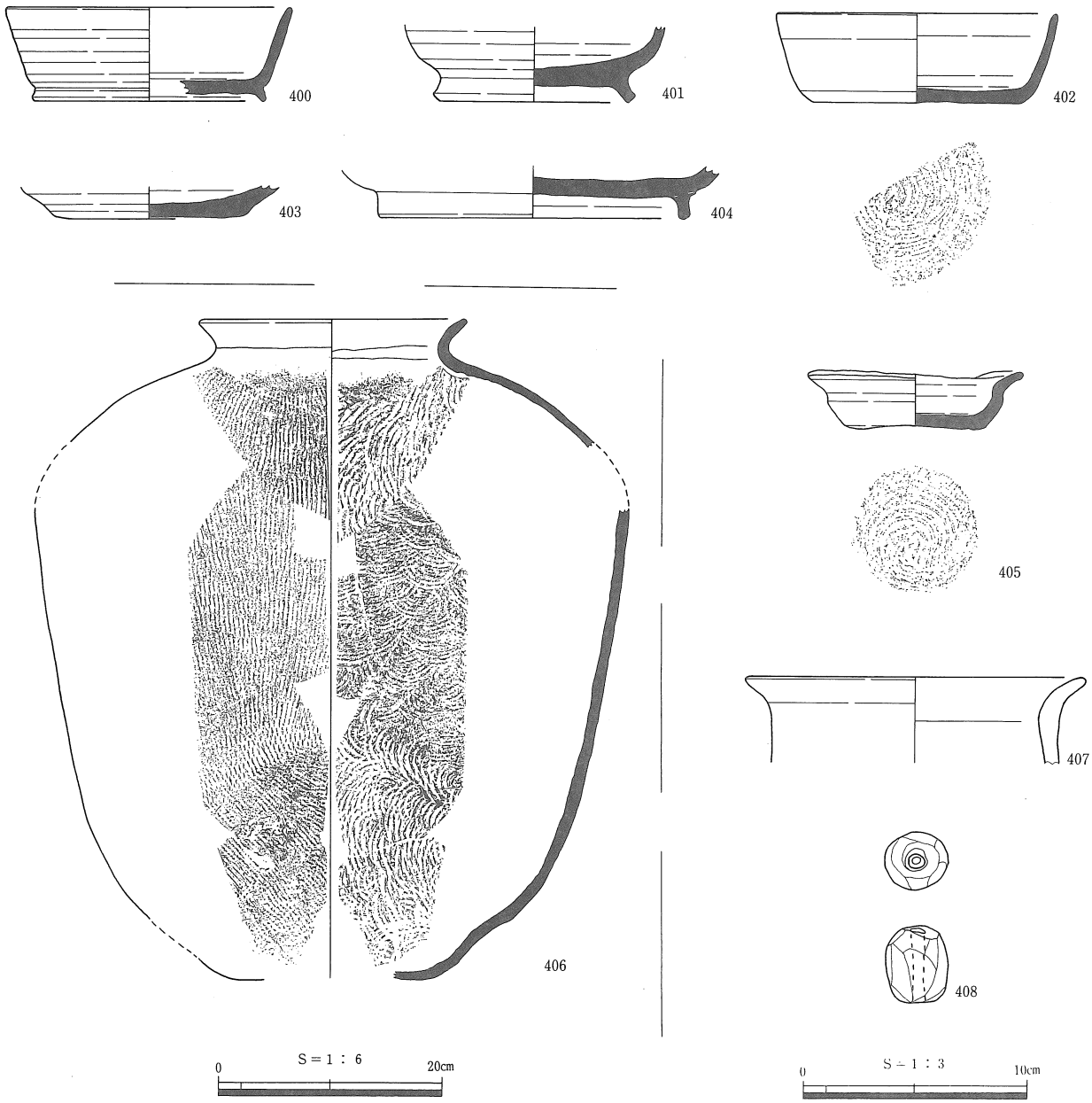
このエリアでの構築順序は、出土土器から判断して、SI－7（陰田編年5式）→SI－10、12（陰田編年6式）→SS－14（陰田編年9～10式）と推定する。SI－13については、時期不明である。

④SS－6、7、13、17、19

標高25.5～27mの範囲に所在するテラス状遺構群である。東から、SS－7→6→13→17→19の順に並ぶ。東



第103図　ＳＳ－13実測図

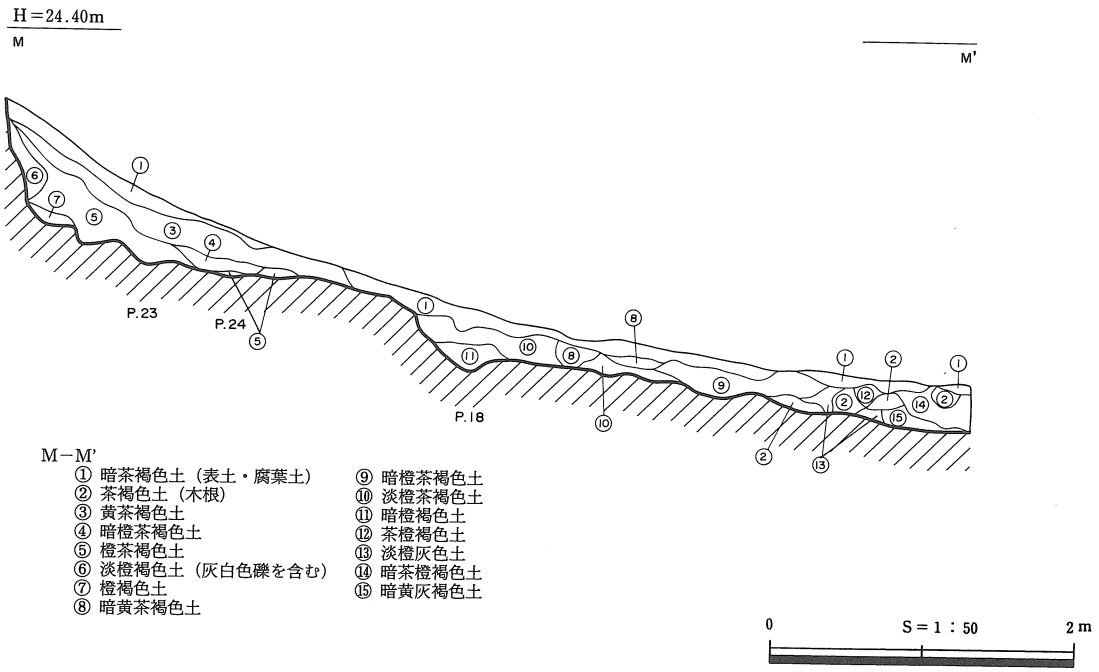


第104図　ＳＳ－13出土遺物実測図

西53mに渡る。

ＳＳ－６、７（第86～89図・写真図版３、18、77）は、標高26～27mに位置し、東西13.2m、南北2.5mの範囲で検出した。ＳＳ－６の後背部には、陰田55号横穴が築造されかけており、溝が前庭部によって切られている。ＳＳ－６と７は、１つのテラスを共有する形に検出しており、テラスとして区分し難いが、溝１でカバーされる範囲をＳＳ－６と認識し、これに重複し、Ｐ．７～10に沿う範囲をＳＳ－７と把握した。よってＳＳ－６は、東西６m、南北2.5mの範囲、ＳＳ－７は東西9.6m以上、南北2.5mの範囲となる。ＳＳ－６は、長さ６m、幅30～60cm、深さ５～20cmを測る溝１が円弧状をなし、これに沿ってＰ．１、11、２のピットが並ぶ。桁行長4.8m、柱間は1.8～2.1mを測る。南側には、Ｐ．７に切られた溝２が伸びる。溝１埋土上及びその周辺から308～315が出土した。308～311は須恵器である。308、309は坏蓋、310は坏身、311は甕である。312、313は、土師器の甕、314、315は３支の支脚である。308はヘラ切り後未調整、309はヘラ切り後ナデており、×状のヘラ記号が記されている。308～310は陰田編年の７式（７世紀中葉）に比定される。

ＳＳ－７は、Ｐ．７～10を柱穴とする建物か。桁行３間で梁行は確認できなかった。桁行長5.8mを測り、柱



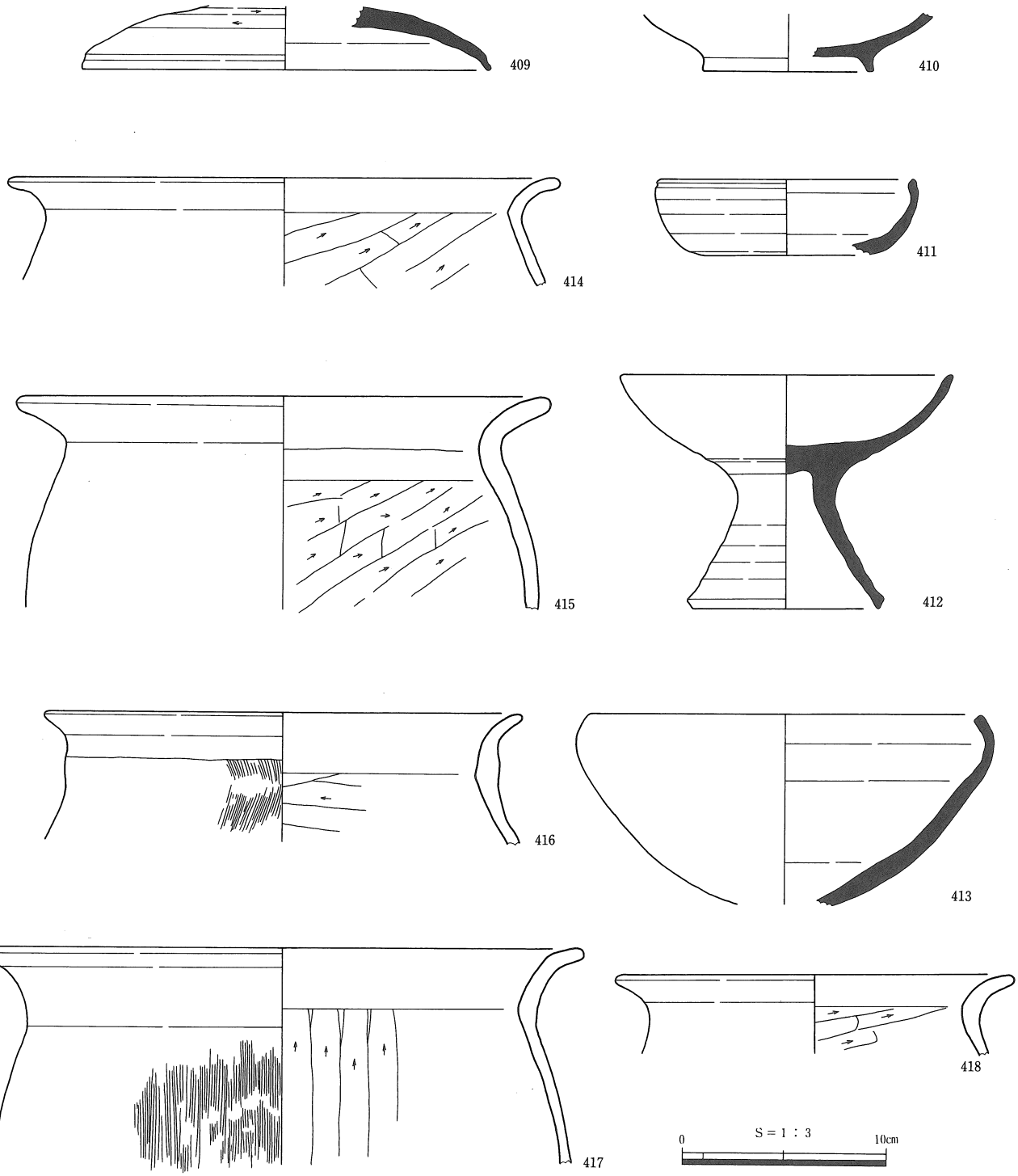
第105図　ＳＳ－14断面実測図

間1.3～1.6mで、ピットの径は35～50cmである。後背の壁面までの距離は、１m前後を測る。壁面の裾部には溝は確認されなかった。遺物は、壁面上から須恵器の坏蓋（317）、床面からやや浮いた位置で須恵器の坏蓋（316）が出土した。316は、土層断面から、遺構面上に相当するレベルに位置するものと推察される。316は、天井中心部までヘラケズリするものであり、陰田編年の５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に比定される。ＳＳ－６、７の出土遺物は、確実にこれら遺構に伴うものとは言い難く、両遺構の厳密な前後関係を判断するにいたらなかった。

ＳＳ－13（第103、104図・写真図版３、18、22、79）は、ＳＳ－６から面的に連なるテラスで、標高25.5～27mに位置し、東西17m、南北4.1mの範囲で検出した。テラス上では37基のピットを検出したが、建物を構成するピット列を明瞭に把握できなかった。強いて挙げれば、Ｐ．１～４の列が指摘できようか。３間で桁行長5.9mを測り、柱間は１～1.6m、ピットの径は30～60cmである。遺物は、テラスの西側壁面で須恵器の坏（401）と皿（405）、土師器の甕（407）が、中央部壁面裾部から須恵器の坏（403）、土錘（408）が、中央部やや東寄りの壁面裾部で須恵器の坏（400、402）、皿（404）、甕（406）が出土した。400、402、403、405は底部糸切り、401、404は底部糸切り後ナデ消している。406は、残存器高60cmを測る大型の甕である。遺構の時期は、遺物から８世紀後半以降と考える。

ＳＳ－17（第111～113図・写真図版22、23）は、標高25.5～27mに位置し、東西22m、南北4.8mの範囲で検出した。テラス上では26基のピットを検出したが、建物を構成するピット列を明瞭に把握できなかった。Ｐ．５、７、９の列は建物を構成する可能性がある。２間で桁行長4.2mを測り、柱間は1.1～1.25m、ピットの径は60cmである。岩盤で遺構検出したが、土層断面によれば、盛土により床面を造成していたようである。遺物は、Ｐ．４の埋土中から須恵器の坏（432）、テラス上から須恵器の坏（433）、甕（434）、土師器の甕（435）、ジャスパー製の管玉（436）が出土した。432、433は底部糸切りで、陰田編年の10式（８世紀後半）に比定される。

ＳＳ－19（第114、115図・写真図版22、23）は、標高26～26.5mに位置し、東西5.5m、南北２mの範囲で検出した。平坦面上にはＰ．１～３が並び、さらにテラス外にＰ．４が伸びる。テラスの範囲は東西5.5m、南北２mである。Ｐ．１～４、７を柱とする建物を構成すると思われ、桁行３間・梁行１間で、桁行長4.8m、梁行



第106図　ＳＳ－14出土遺物実測図

長2.4mを測る。柱間は1～1.6m、ピットの径は30～40cmである。岩脈を平坦に加工している。遺物は出土していない。

④のＳＳ－6、7、13、17、19のグループは、ＳＳ－6、7→ＳＳ－17→ＳＳ－13の順に構築されたものと思われる。ＳＳ－19については、時期不明である。

⑤ＳＳ－15、16

本エリアでは、ＳＳ－15、16を検出した。Ａ区東側の丘陵斜面部に構築されており、標高27.5～29.5mを測る。ともに西側は流失している。ＳＳ－16の北側にはＳＣ－5（溝状遺構）が走り、上方には、ＳＩ－3（弥生時代後期後半の竪穴住居跡）が存在する。

ＳＳ－15（第107～109図・写真図版23）は、標高28.2～28.4mに位置し、長さは溝4南端～ＳＳ－15南端で約12m、奥行きは最大約5mを測る。残存壁高は1mを超える。東壁中央付近には床面より約20cm上方に、幅約15cm、深さ約2cmを測る溝（溝5）を、また床面南端部の壁面裾部には、幅約20cm、深さ約5cmを測る溝（溝6）を検出した。溝5は約4.5m、溝6は約2.2mにわたって検出した。

遺構面には数基のピットを検出しているが、このうちＳＳ－5に伴うものは31基と考える。ピットの配置状況から、Ｐ.10、12、14、17、18を主柱穴とする建物の存在が推測される。これらのピットは、直径40～50cm、深さ約40～55cmを測り、ピット間距離は約2mを測る。溝5はこの建物に伴う溝と考える。

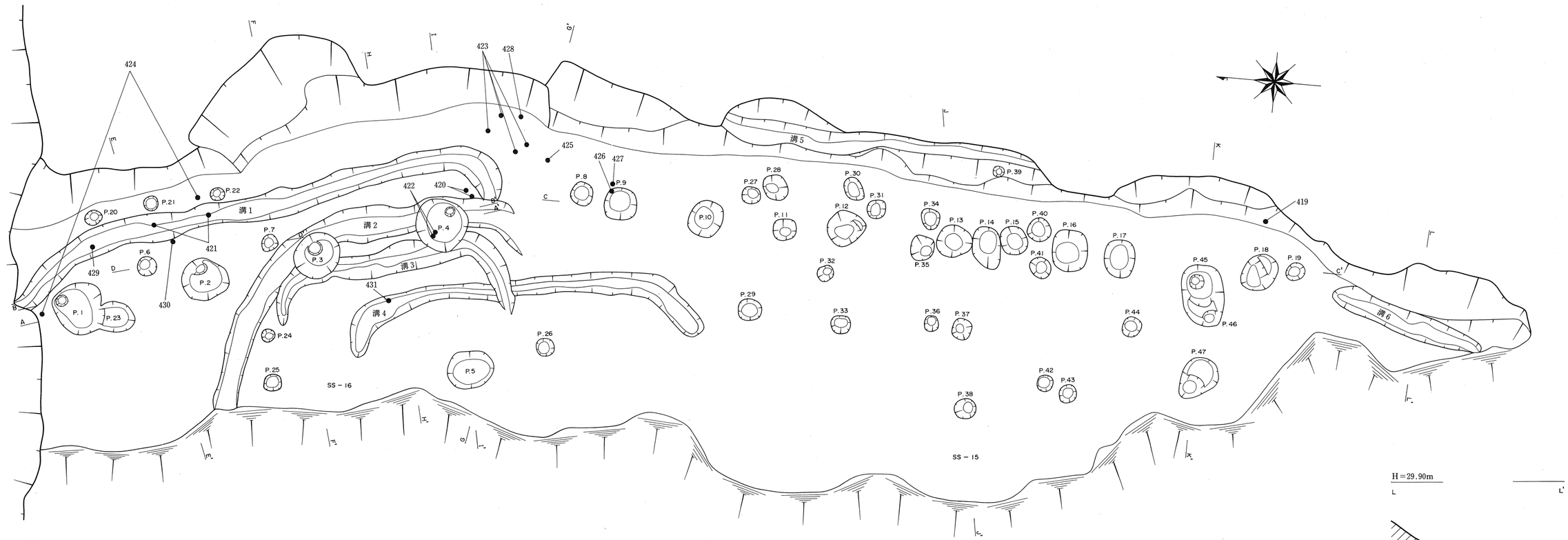
遺物は、須恵器の坏身（419）が出土した。底部には回転糸切り痕が見られる。Ｐ.18東側壁面直上に出土した。陰田編年10式（8世紀後半）に比定される。

ＳＳ－16（第107、108、110図・写真図版23、79）は、標高約28～28.4mに位置し、長さはＳＳ－16北端～溝4南端で約9.5m、奥行きは最大約5mを測る。北側にはＳＣ－5が走るが、切り合い関係は不明である。残存壁高は、Ｉ－Ｉ'ラインで約80cmを測る。床面には溝1～4の4本の溝を検出しており、それぞれに遺構面が形成されている。溝1に伴う遺構面をａ、溝2に伴う遺構面をｂ、溝3に伴う遺構面をｃ、溝4に伴う遺構面をｄとする。溝1は幅30～40cm、深さ約5～10cm、溝2は幅30～50cm、深さ約2～5cm、溝3は幅30～40cm、深さ約10cm、溝4は幅20～40cm、深さ約5cmを測る。Ｆ－Ｆ'、Ｇ－Ｇ'土層断面において、ｃがｂを切っていることが確認できることから、ｃはａ、ｂより新しい遺構と判断する。ｃは、1辺が約3mを測る方形の竪穴住居的な形状を呈する。また、Ｅ－Ｅ'土層断面の11、12層上面、およびＦ－Ｆ'土層断面の18～23、27層上面、Ｇ－Ｇ'土層断面の6、7、14層上面には、溝1東側平坦面の延長部と考える遺構面（ｅ）を確認した。

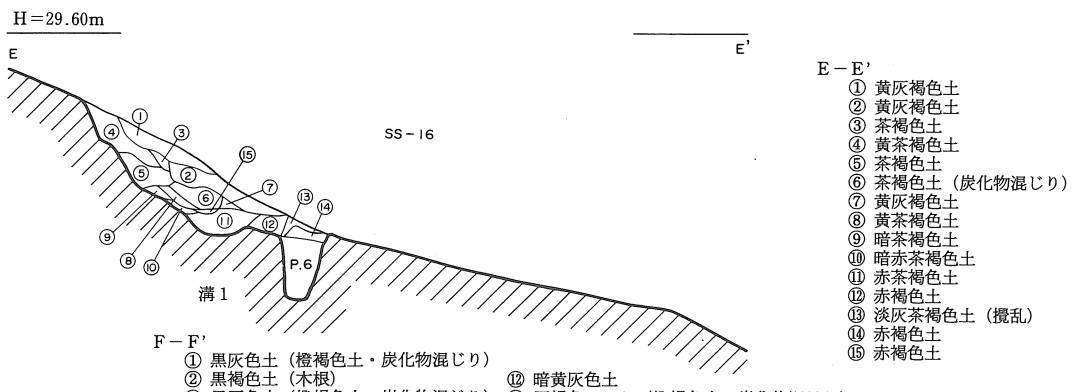
遺構面には数基のピットを検出したが、このうちＳＳ－16に伴うピットは16基と考える。ピットの配置状況から、Ｐ.1～4を主柱穴とする建物の存在が推測される。これらのピットは、直径50～70cm、深さ50～70cmを測る。ピット間距離は、Ｐ.1、2とＰ.3、4がそれぞれ約2m、Ｐ.2、3が約1.8mを測る。ａに伴う建物と考える。遺物は、須恵器、土師器、土製品、鍛冶関連遺物が出土した。420～427は須恵器である。420は坏蓋である。かえりと輪状のつまみをもつ。かえりは小さく、受部から突出しない。421～425は坏身である。立ち上がりをもたず、口縁端部は丸くおさめている。426は無蓋高坏の坏部である。口縁部は外反する。427は長頸壺の肩部である。428は土師器の鉄鉢形土器である。内外面には赤色顔料が塗布してある。429は土師器の甕の口縁部である。430は甑の把手である。431は椀形鍛冶滓である。85ｇを量る。溝4底面直上に出土した。他に炉壁8.4ｇ分も出土している。遺物の出土レベルおよびｅの床面レベルから、420、422～428、430はｅ床面上にやや浮いた状態で出土したと考える。これらの遺物はｅに伴う初期の転落物と推測する。ただし428は、Ｈ－Ｈ'ラインにおいては、かなり浮いた状態で出土しているように見えるが、出土地点に最も近いＧ－Ｇ'ラインにおいては、ほぼｅの壁面肩部（6層上面）直上に出土しているのが確認できる。421、429は溝1上方に浮いた状態で出土しており、出土レベルからａに伴う転落物と推測する。遺物は陰田編年10式（8世紀後半）に比定される。

ＳＳ－15、16は、切り合い関係や出土遺物からは構築順序を判断できなかった。ＳＳ－16におけるａ～ｄの構築順序については、ａ→ｃ→ｅ、ｂ→ｃ→ｅを確認するに止まった。

⑥ＳＳ－9～12

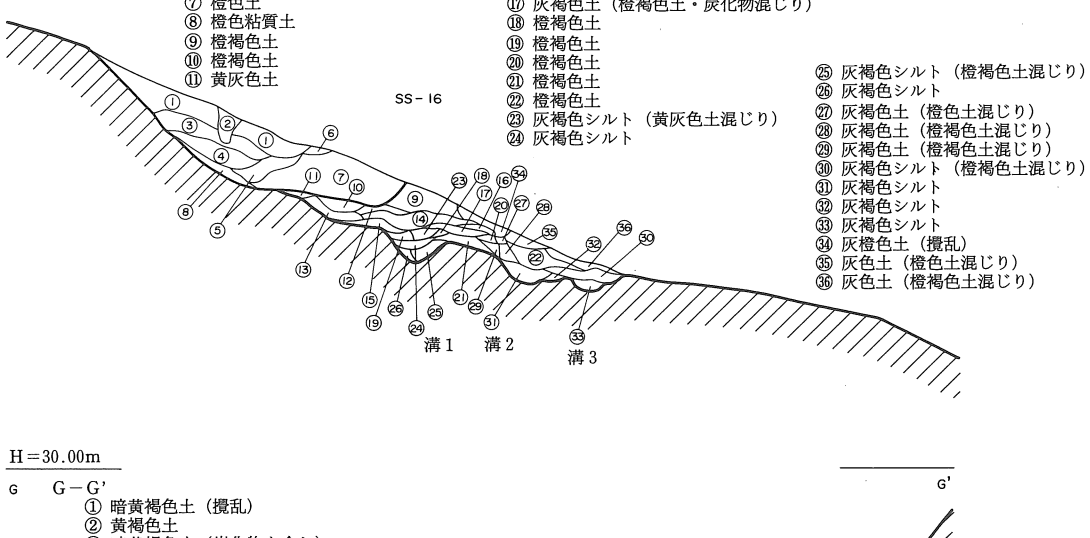


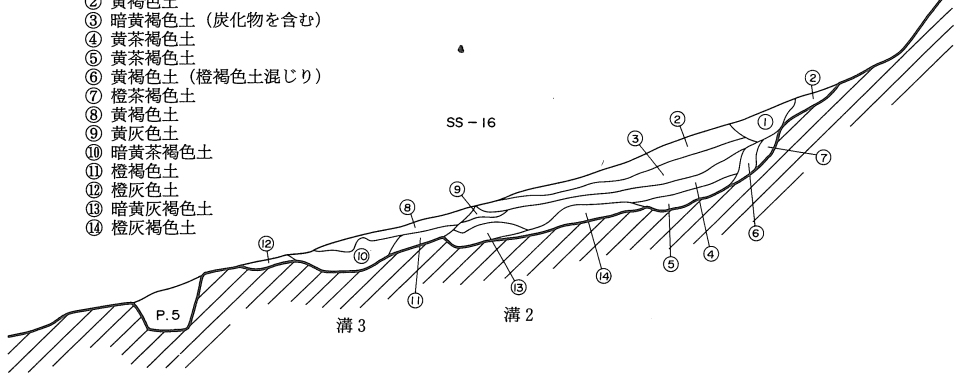
第107図　ＳＳ－15、16実測図



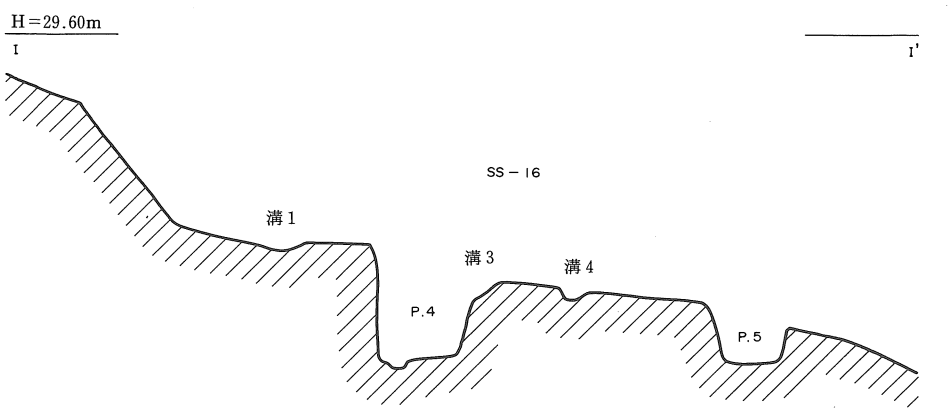
E－E'
① 黄灰褐色土
② 黄灰褐色土
③ 茶褐色土
④ 黄茶褐色土
⑤ 茶褐色土
⑥ 茶褐色土（炭化物混じり）
⑦ 黄灰褐色土
⑧ 黄茶褐色土
⑨ 暗茶褐色土
⑩ 暗赤茶褐色土
⑪ 赤茶褐色土
⑫ 赤褐色土
⑬ 淡灰茶褐色土（撹乱）
⑭ 赤褐色土
⑮ 赤褐色土

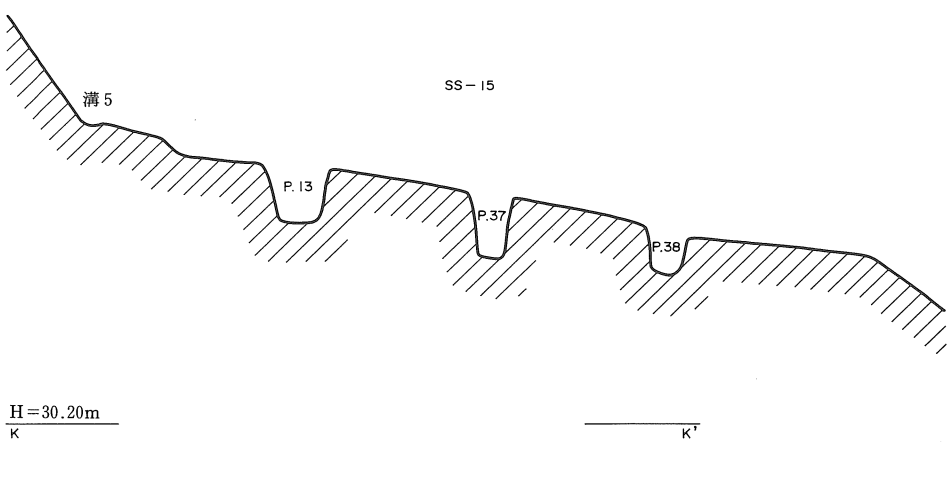
F－F'
① 黒灰色土（橙褐色土・炭化物混じり）
② 黒褐色土（木根）
③ 黒灰色土（橙褐色土・炭化物混じり）
④ 黒灰色土（橙褐色土・炭化物混じり）
⑤ 黒褐色土（橙褐色土・炭化物混じり）
⑥ 暗黄灰色土
⑦ 橙色土
⑧ 橙色粘質土
⑨ 橙褐色土
⑩ 橙褐色土
⑪ 黄灰色土
⑫ 暗黄灰色土
⑬ 灰褐色シルト（橙褐色土・炭化物混じり）
⑭ 灰褐色シルト（炭化物混じり）
⑮ 灰褐色シルト（炭化物混じり）
⑯ 暗橙灰色土（炭化物混じり）
⑰ 灰褐色土（橙褐色土・炭化物混じり）
⑱ 橙褐色土
⑲ 橙褐色土
⑳ 橙褐色土
㉑ 橙褐色土
㉒ 橙褐色土
㉓ 灰褐色シルト（黄灰色土混じり）
㉔ 灰褐色シルト
㉕ 灰褐色シルト（橙褐色土混じり）
㉖ 灰褐色シルト
㉗ 灰褐色土（橙色土混じり）
㉘ 灰褐色土（橙褐色土混じり）
㉙ 灰褐色土（橙褐色土混じり）
㉚ 灰褐色シルト（橙褐色土混じり）
㉛ 灰褐色シルト
㉜ 灰褐色シルト
㉝ 灰褐色シルト
㉞ 灰橙色土（撹乱）
㉟ 灰色土（橙色土混じり）
㊱ 灰色土（橙褐色土混じり）

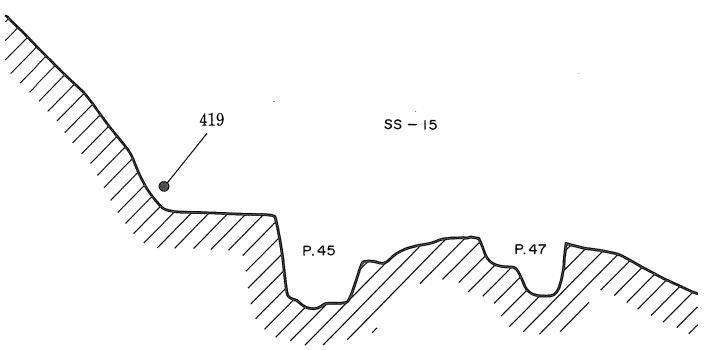


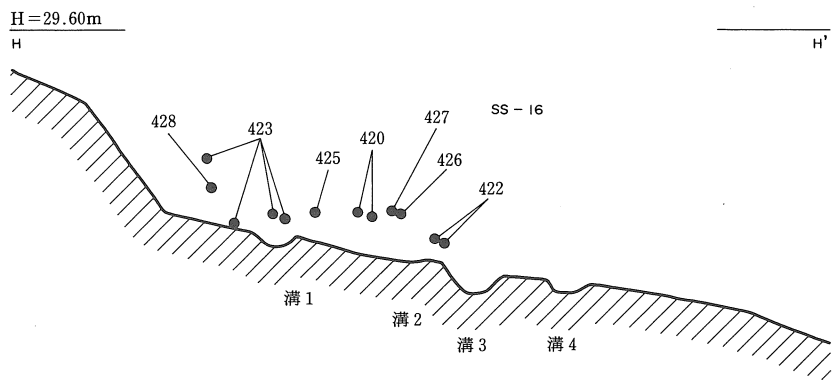


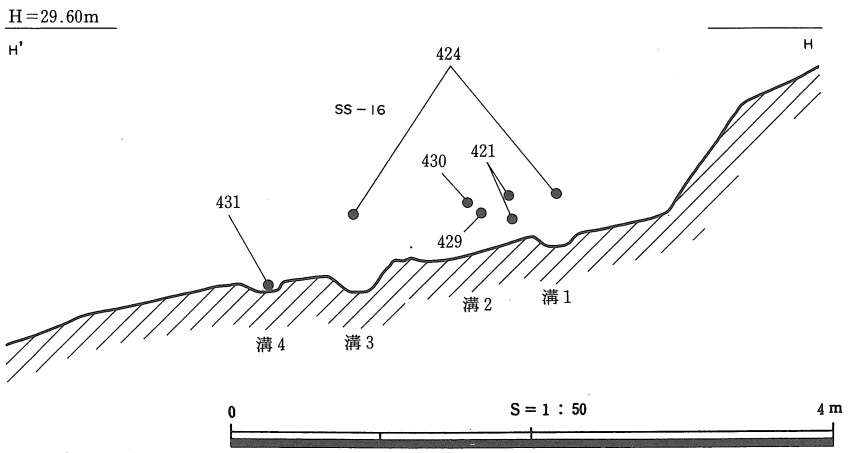
① 暗黄褐色土（撹乱）
② 黄褐色土
③ 暗黄褐色土（炭化物を含む）
④ 黄茶褐色土
⑤ 黄茶褐色土
⑥ 黄褐色土（橙褐色土混じり）
⑦ 橙茶褐色土
⑧ 黄褐色土
⑨ 黄灰色土
⑩ 暗黄茶褐色土
⑪ 橙褐色土
⑫ 橙灰色土
⑬ 暗黄灰褐色土
⑭ 橙灰褐色土



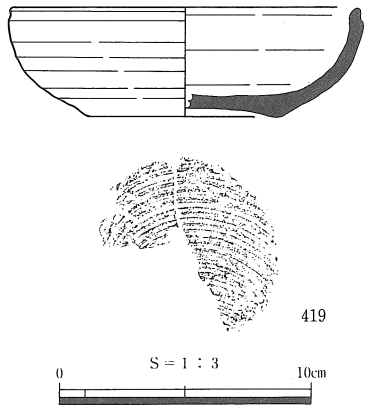








第108図　ＳＳ－15、16断面実測図



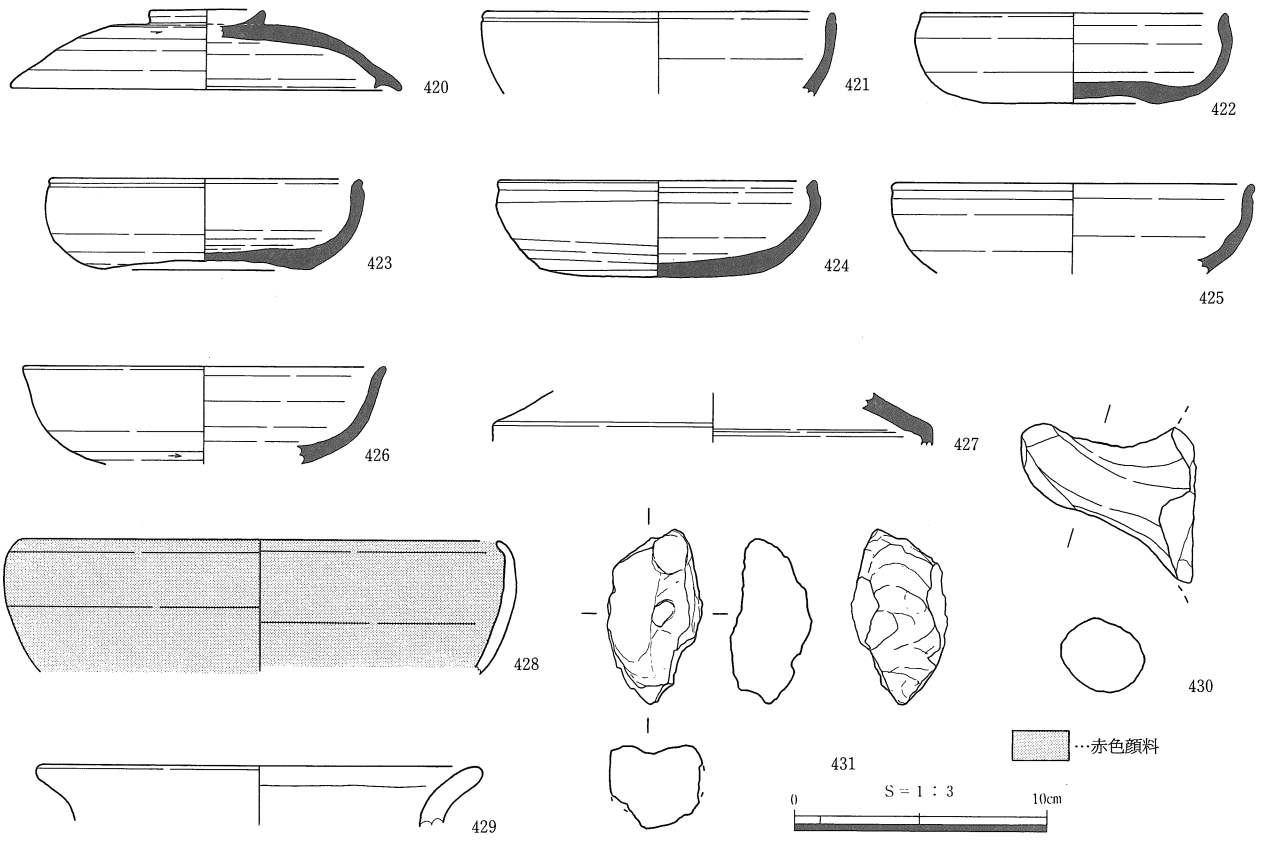
第109図　ＳＳ－15出土遺物実測図

本エリアでは、ＳＳ－９～12を互いに近接して検出した。Ａ区北側の丘陵斜面部に構築されており、標高29.5～32.5ｍを測る。いずれも南側は流失している。エリア内からは、ＳＳ－12東側にＳＫ－４、ＳＳ－９上にＳＫ－５を検出している。

ＳＳ－９（第94～98図・写真図版19～21、79）は、標高29.5～30ｍに位置し、斜面上方にはＳＳ－12が、西側にはＳＳ－10が隣接する。検出面には５本の溝（溝１～５）を検出した。溝１は幅30～40cm、深さ２～５cm、溝２は幅約30cm、深さ約15cm、溝３は幅30～50cm、深さ約10cm、溝４は幅約30cm、深さ約10cm、溝５は幅30～40cm、深さ約５～10cmを測る。溝５は約7.5ｍにわたって検出した。Ｈ－Ｈ'土層断面から、ＳＳ－９床面より約40cm上方に側溝を有する遺構面の存在を確認した。位置関係から、側溝は溝４の延長部と考える。溝４をさらに西側に延長すると、延長線上に溝１が存在する。溝１東端と溝４西端の底面検出レベルは、ともに標高約30ｍを測りほぼ一致していることから、溝１、４は同一の側溝であると判断した。

ＳＳ－９は、溝２に伴う遺構面（ａ）、溝３に伴う遺構面（ｂ）、溝１・４に伴う遺構面（ｃ）の３段階の遺構面をもつと考える。ａとｂは、切り合い関係からａが古いと判断する。溝５は、ａ、ｂに伴う溝であり、排水溝と考える。ｃとａは、Ｈ－Ｈ'土層断面からａが古いと確認でき、ａ→ｂ→ｃの順に床面が変遷したものと考える。ａは、検出面で長さ約1.5ｍ、奥行き約１ｍ、残存壁高は約30cmを測る。ｂは、長さ約4.5ｍ、奥行き１～1.5ｍ、残存壁高は約30cmを測る。ａ、ｂは方形の平面プランを呈する竪穴住居的な遺構面であり、後背部に排水溝をもつという点で、ＳＩ－10に共通する。ｃは、長さ約９ｍ、奥行き約２～2.5ｍ、残存壁高はＪ－Ｊ'ラインで約15cmを測る。ａ床面より約30cm、ｂ床面より約40cm上方に位置する。

ＳＳ－９の床面には15基のピットを検出した。ピットの配置状況から、Ｐ.21～24を柱穴とする建物の存在が



第110図　ＳＳ－16出土遺物実測図

推測される。ｃに関連する建物と考える。Ｐ.21～24は直径約35～60cm、深さ約20～25cmを測る。ピット間距離は、Ｐ.21、22、24で約2.2m、Ｐ.22、23で約２ｍを測る。

遺物は、須恵器、土師器、鍛冶関連遺物が出土した。370～378は須恵器である。370、371は坏蓋である。ともに口縁部は内湾する。372～376は坏身である。立ち上がりは内傾し、372、374、375の立ち上がりは小さめで、受部からあまり突出しない。374底部には×状のヘラ記号が見られる。376は立ち上がりを欠く。ｃの床面レベルから出土しており、遺構に伴う遺物と考える。377、378は高坏である。377は無蓋高坏であり、脚部には２方に線状の透かしを施している。378は脚部である。三角形または梯形の透かしを施している。379は土師器の甕である。胴部下半を欠く。380、381は椀形鍛冶滓である。381は溝２肩部直上に出土した。鍛冶関係遺物として、含鉄鉄滓または鉄塊系遺物と思われるもの44.4ｇ分、椀形鍛冶滓260ｇ分、その他の鉄滓223ｇ分が出土した。376、381を除いて、遺物は浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。380は381と近接して出土しており、ａに伴う初期の転落物と判断する。370、378、395はいずれも溝３上にやや浮いた状態で出土しており、ｂに伴う初期の転落物とも推測される。その他の遺物は、ｃ構築後の転落物と考える。370、373は陰田編年６式（７世紀前葉）に比定され、ｂの時期に近いものと判断する。371、372、374～376は陰田編年７式（７世紀中葉）に比定され、ｃの時期に近いものと判断する。

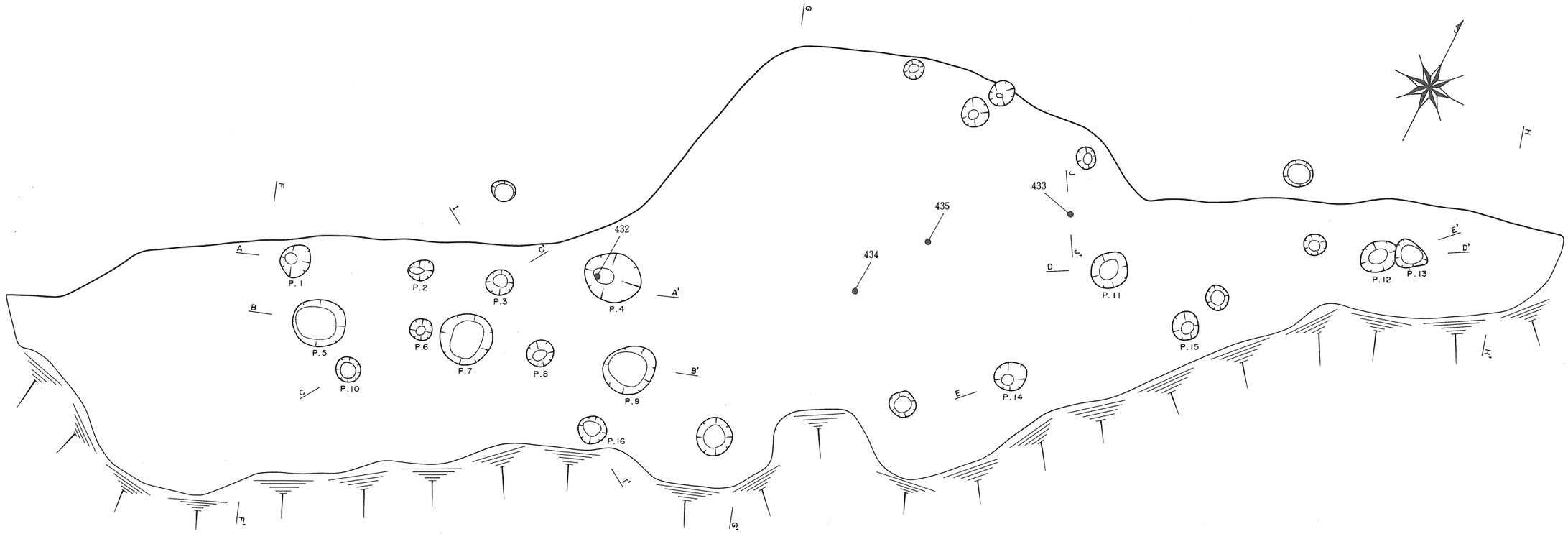
ＳＳ－10（第94、96、97、99図・写真図版19～21）は、標高29.5～30ｍに位置し、東端でＳＳ－９、12と切り合う。長さ約16m、奥行きは東側床面で最大約３ｍを測る。残存壁高は、Ｌ－Ｌ'ラインで約80cmを測る。西側の壁面上部には、検出面で幅25～30cm、深さ２～５cmを測る溝（溝７）を検出した。Ｌ－Ｌ'土層断面において、４、７層上面にＳＳ－12床面が確認できることから、ＳＳ－10はＳＳ－12より古い遺構と判断する。断面には、床面の低位側を盛土、造成した形跡も窺える。

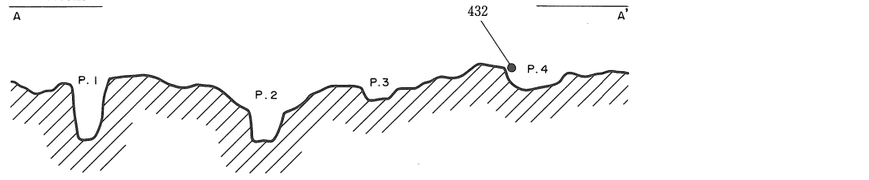
遺構面には、33基のピットを検出した。ピットの配置状況から、Ｐ.１～４、Ｐ.５～７を主柱穴とする建物の存在が推測される。Ｐ.１～４は、直径40～50cm、深さ約30～50cm、ピット間距離は1.5～1.7ｍを測る。Ｐ.５～７は、直径約30cm、深さ約20cm、ピット間距離は1.1～1.3ｍを測る。

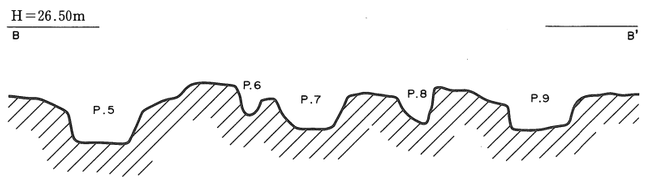
遺物は、須恵器、土師器、土製品、石製品が出土した。382は須恵器の坏蓋である。383は高坏である。脚部には２方に梯形の透かしを施している。384、385は土師器の甕である。384は口縁部であり、385は肩部である。386は支脚である。387は砥石で、表面は滑らかに磨耗している。石材は花崗岩である。遺物は全て浮いた状態で出土しており、上方からの転落物と考える。直接的に遺構の時期を示すものは見られないが、382は陰田編年７式（７世紀中葉）に比定される。

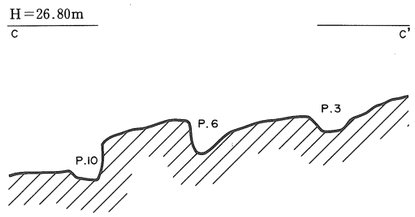
ＳＳ－11（第100、101図・写真図版20、21）は、標高約32.2ｍに位置し、長さ約5.5m、奥行きは最大約1.5mを測る。⑥エリア内の他の遺構とはやや距離を置いて、エリア東端に存在する。残存壁高は、Ｄ－Ｄ'ラインで約80cmを測る。

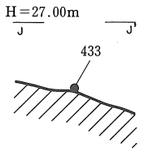
床面にはピット２基（Ｐ.１、２）を検出した。Ｐ.１は直径約40cm、深さ約60cm、Ｐ.２は直径約40cm、深さ約40cmを測る。ピット間距離は約2.3ｍを測り、Ｐ.１、２を柱穴とする建物の存在が推測される。

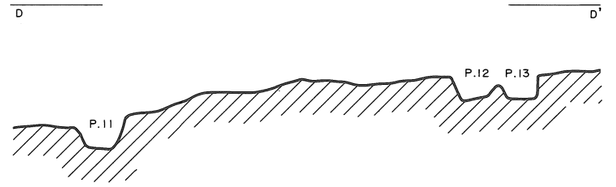


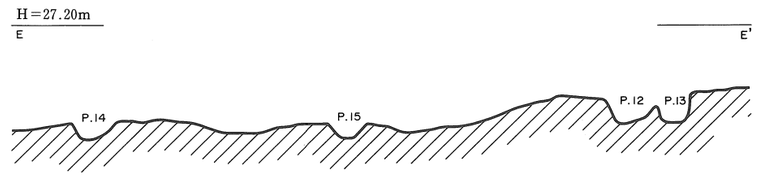


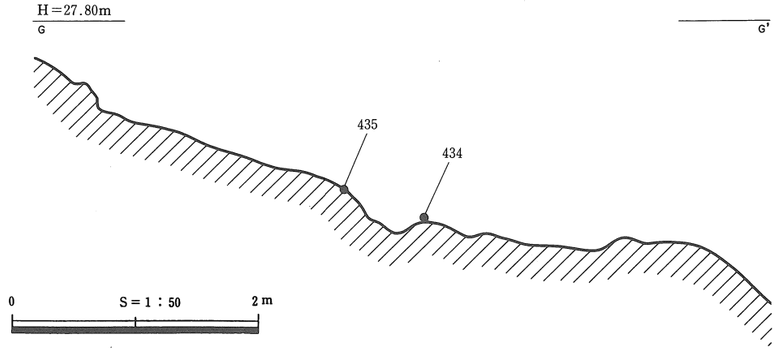




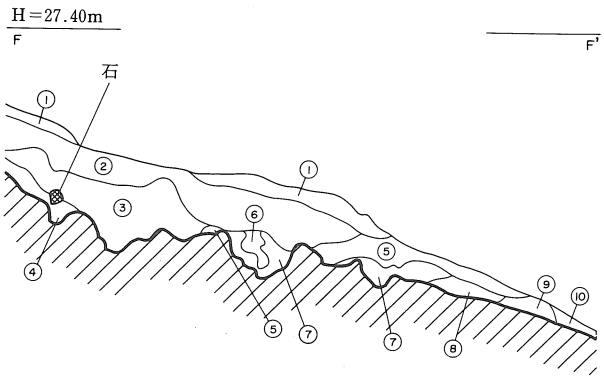




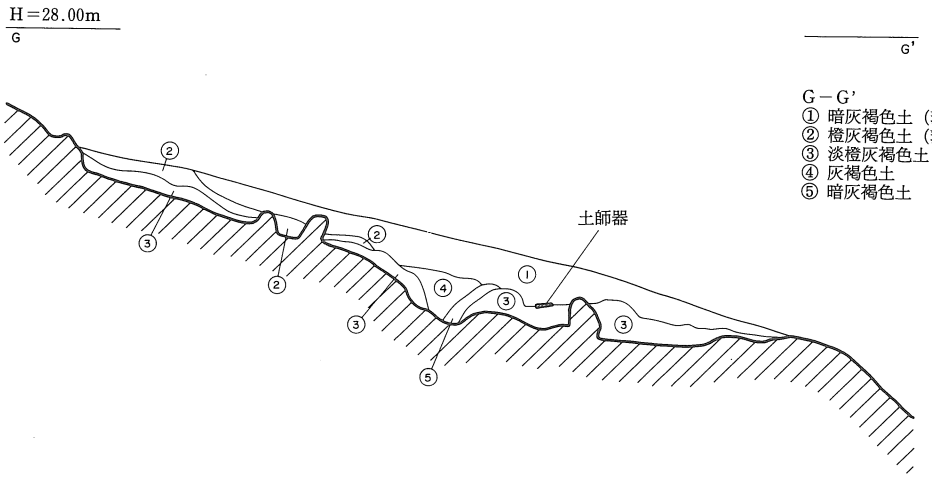




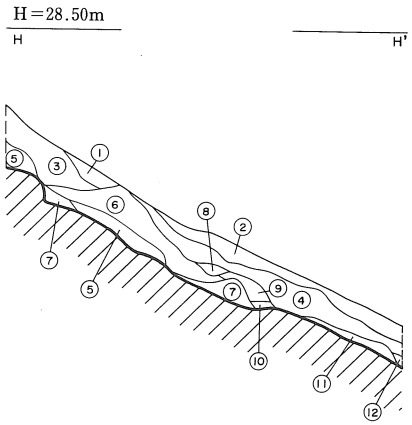
第111図　ＳＳ－17実測図



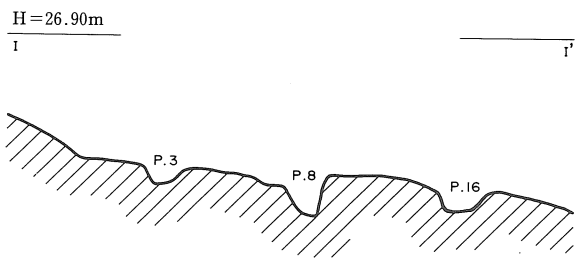
F－F'
① 暗灰色土（礫混じり）
② 暗灰褐色土（礫混じり）
③ 灰色土（礫混じり）
④ 灰褐色土(黄灰色礫ブロック・礫混じり)
⑤ 黄灰色土 （礫混じり）
⑥ 淡黄色礫ブロック
⑦ 黄灰色土
⑧ 橙褐色土（淡黄色礫混じり）
⑨ 橙褐色礫（灰色・白色粒混じり）
⑩ 黒灰色土

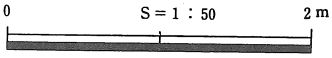


G－G'
① 暗灰褐色土（乳灰色粒混じり）
② 橙灰褐色土（乳灰色粒混じり）
③ 淡橙灰褐色土（乳灰色粒混じり）
④ 灰褐色土
⑤ 暗灰褐色土

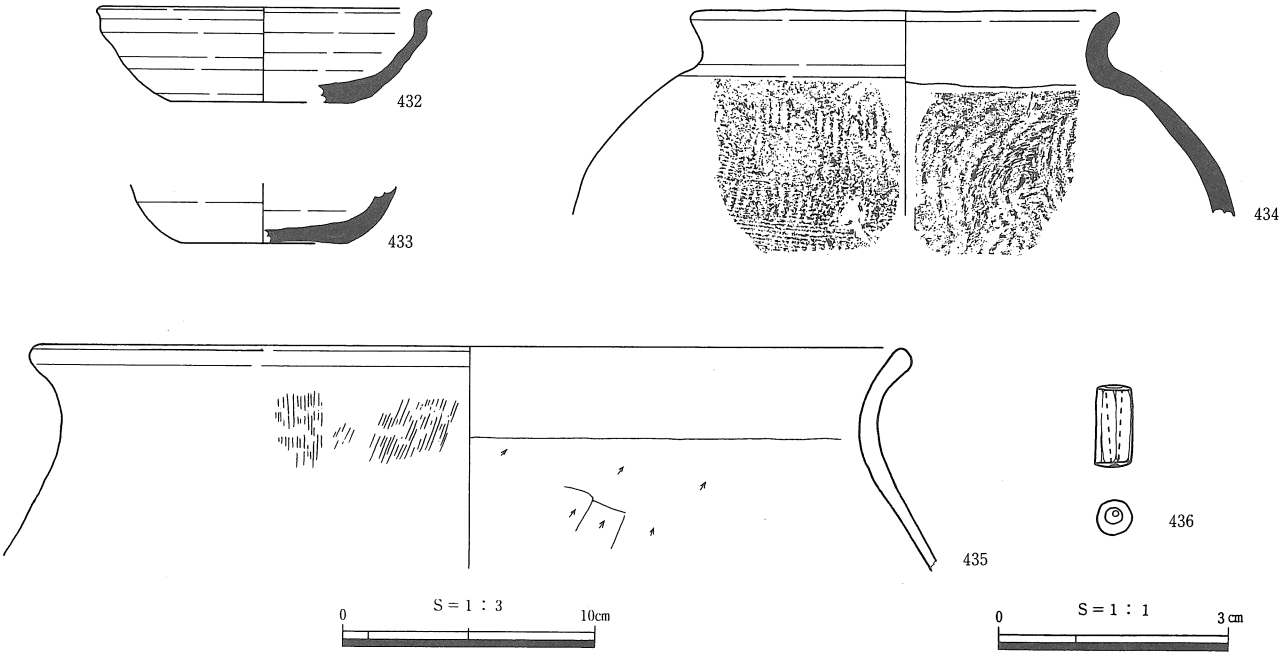


H－H'
① 暗灰色土
② 暗灰褐色土
③ 暗茶灰色土
④ 暗黄灰色土（礫混じり）
⑤ 暗茶灰褐色土（礫混じり）
⑥ 茶灰褐色土
⑦ 淡茶褐色土
⑧ 淡茶褐色土
⑨ 暗灰褐色土（黒色土混じり）
⑩ 暗灰褐色土
⑪ 暗灰褐色土
⑫ 暗灰褐色土





第112図　ＳＳ－17断面実測図



第113図　ＳＳ－17出土遺物実測図

遺物は、須恵器、土師器、土製品が出土した。388は須恵器の坏身である。立ち上がりは内傾して小さめで、受部からあまり突出していない。Ｐ．１北側に床面直上で出土した。389は土師器の甕の口縁部である。390は竈の庇である。これらの遺物は陰田編年７式（７世紀中葉）に比定される。

ＳＳ－12（第94～97、102図・写真図版19、20）は、標高約30.8～31.3mに位置し、斜面下方にはＳＳ－９、西側にはＳＳ－10、東側にはＳＫ－４が隣接する。長さ約10.5m、奥行き約1.5mを測る。残存壁高は、Ｈ－Ｈ'ラインで約70cmを測る。壁面裾部には、幅約15～25cm、深さ約２～５cmを測る溝（溝６）を検出した。Ｌ－Ｌ'土層断面から、ＳＳ－10より新しいと確認できる。

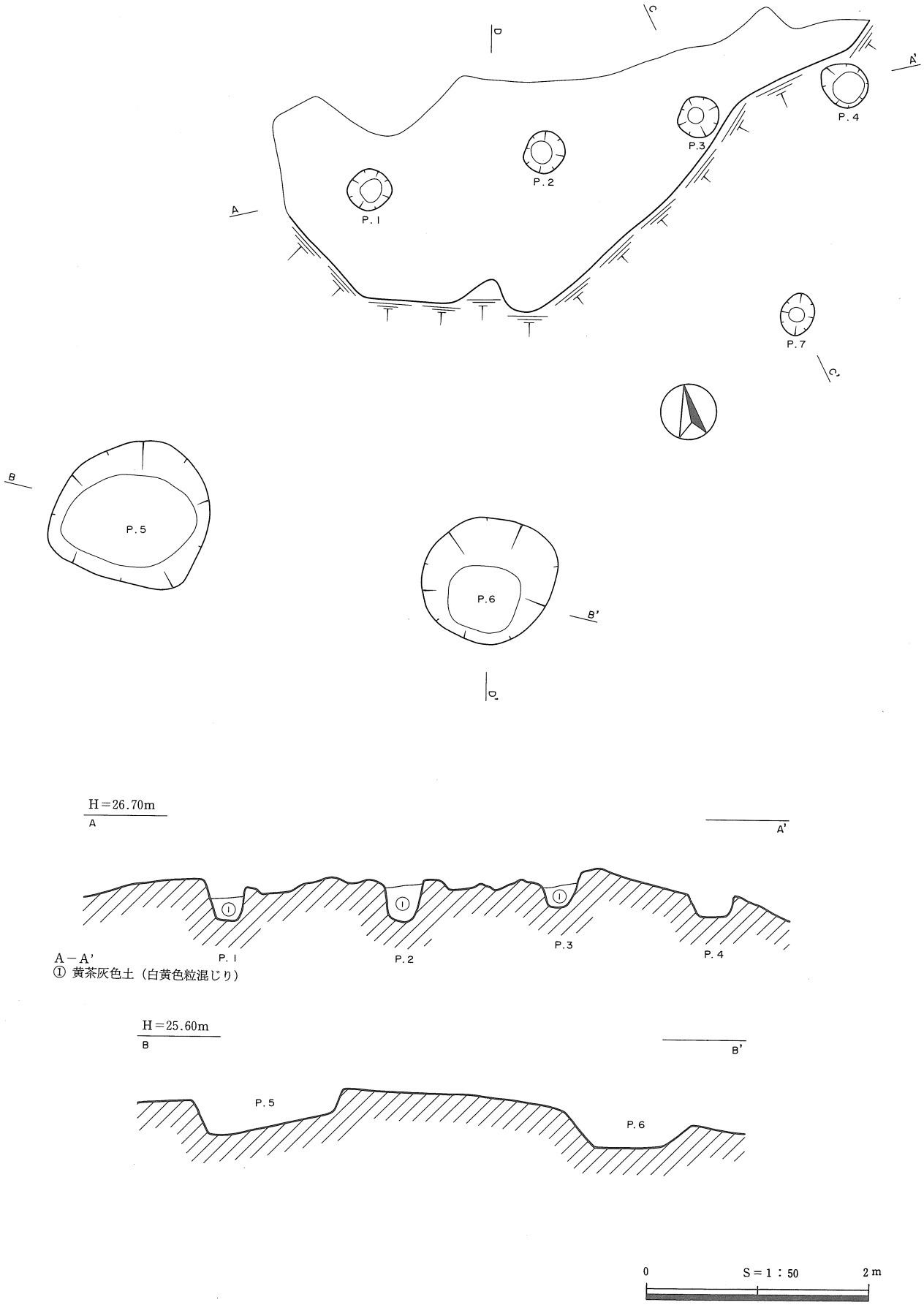
床面には10基のピットを検出した。ピットの配置状況から、Ｐ．８～10、Ｐ．11～14を主柱穴とする建物の存在が推測される。Ｐ．８～10は直径40～60cm、深さ20～40cm、ピット間距離は約1.7mを測る。Ｐ．11、14は直径約45cm、深さ約40cm、Ｐ．12、13は直径30～40cm、深さ約15cmを測る。ピット間距離は、Ｐ．11～13で約1.3mを測り、Ｐ．13、14で約１mを測る。

遺物は、須恵器、土師器、土製品が出土した。391～396は須恵器である。391～393は坏蓋である。392、393はかえりとつまみをもつ。392のつまみは欠損しているが、擬宝珠を呈するものと推測する。393は輪状のつまみである。394～396は坏身である。立ち上がりはいずれも内傾する。395は受部から立ち上がりが大きく突出しているが、394、396はあまり突出しない。397～399は土師器である。397は丹塗り土師器の皿である。398は甕の口縁部である。399は甑である。ＳＳ－12は、本来的には床面を盛土、造成していたと推測され、このことを考慮すると、遺物はほぼ床面あるいは造成埋土中から出土したと判断できる。３９５は、接合する破片がＳＳ－９のａの堆積埋土中とＳＳ－12の造成埋土中から別々に出土しており、ＳＳ－12がＳＳ－９のａより新しい遺構であることを示している。391、392、394、397は出土位置から、ＳＫ－４に伴う遺物の可能性もある。遺物は概ね陰田編年７式（７世紀中葉）に比定される。

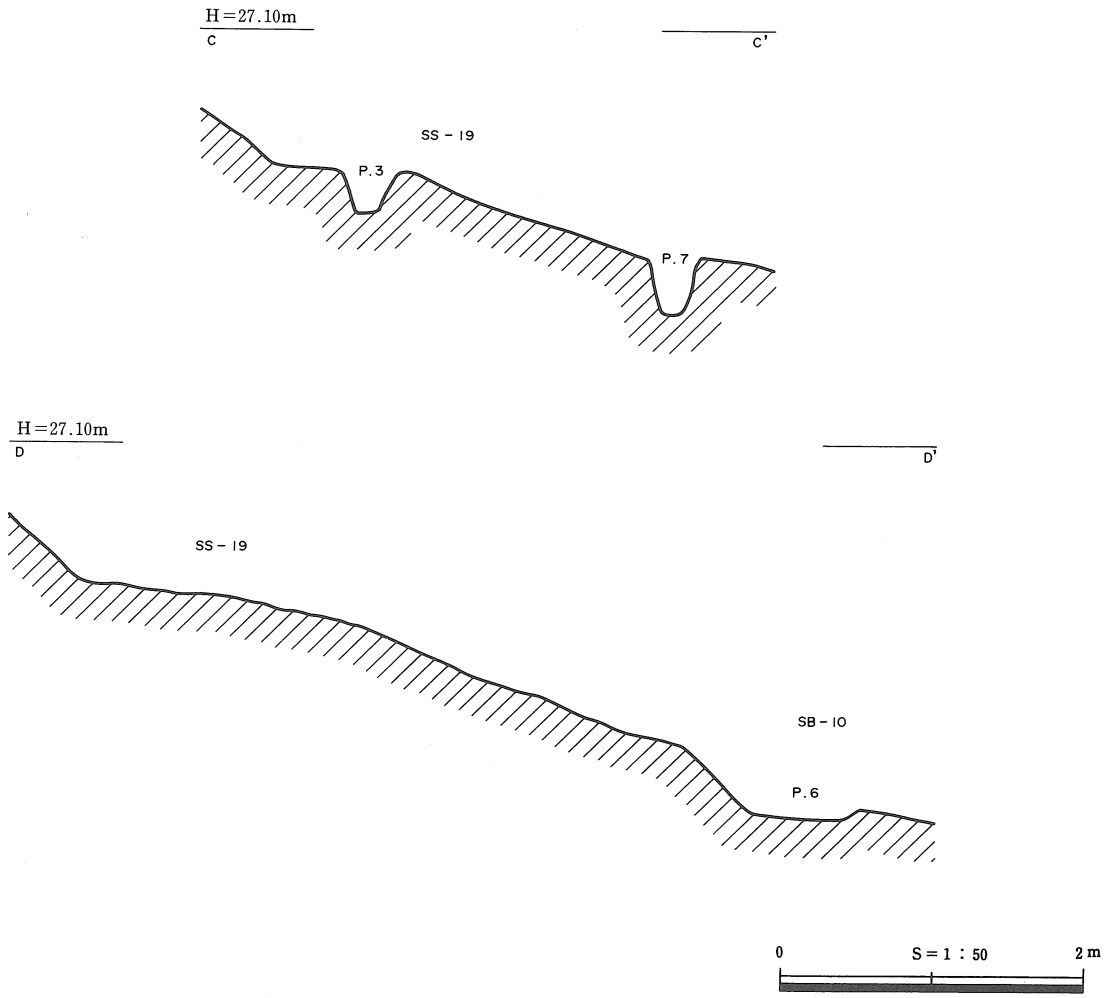
エリア内における各遺構の構築順序は明確ではない。その中でＳＳ－９は、ａ→ｂ→ｃの順に遺構面を構築したと考える。ＳＳ－12はＳＳ－９、10より新しいと判断するが、ＳＳ－９、10の構築順序は不明である。ＳＳ－９のｃ、11、12からはほぼ同時期の遺物が出土している。斜面下方から上方へと遺構を構築する傾向が窺える。

⑦ＳＳ－20～24

Ｂ区に所在するテラス状遺構である。西からＳＳ－22、20、21、24、23の順に並ぶ。ＳＳ－20（第116～128



第114図　ＳＳ－19、ＳＢ－10実測図

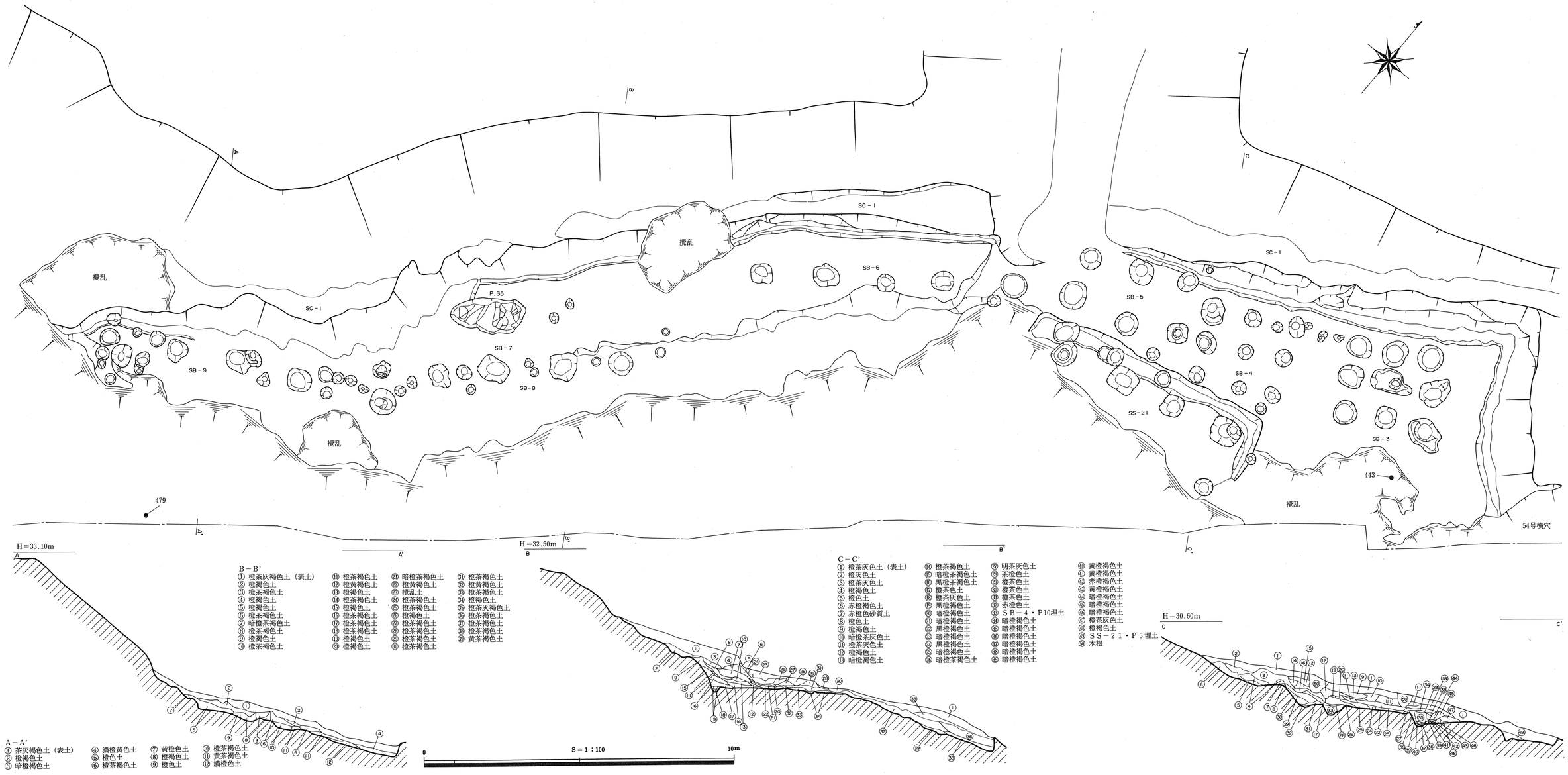


第115図　ＳＳ―19、ＳＢ―10断面実測図

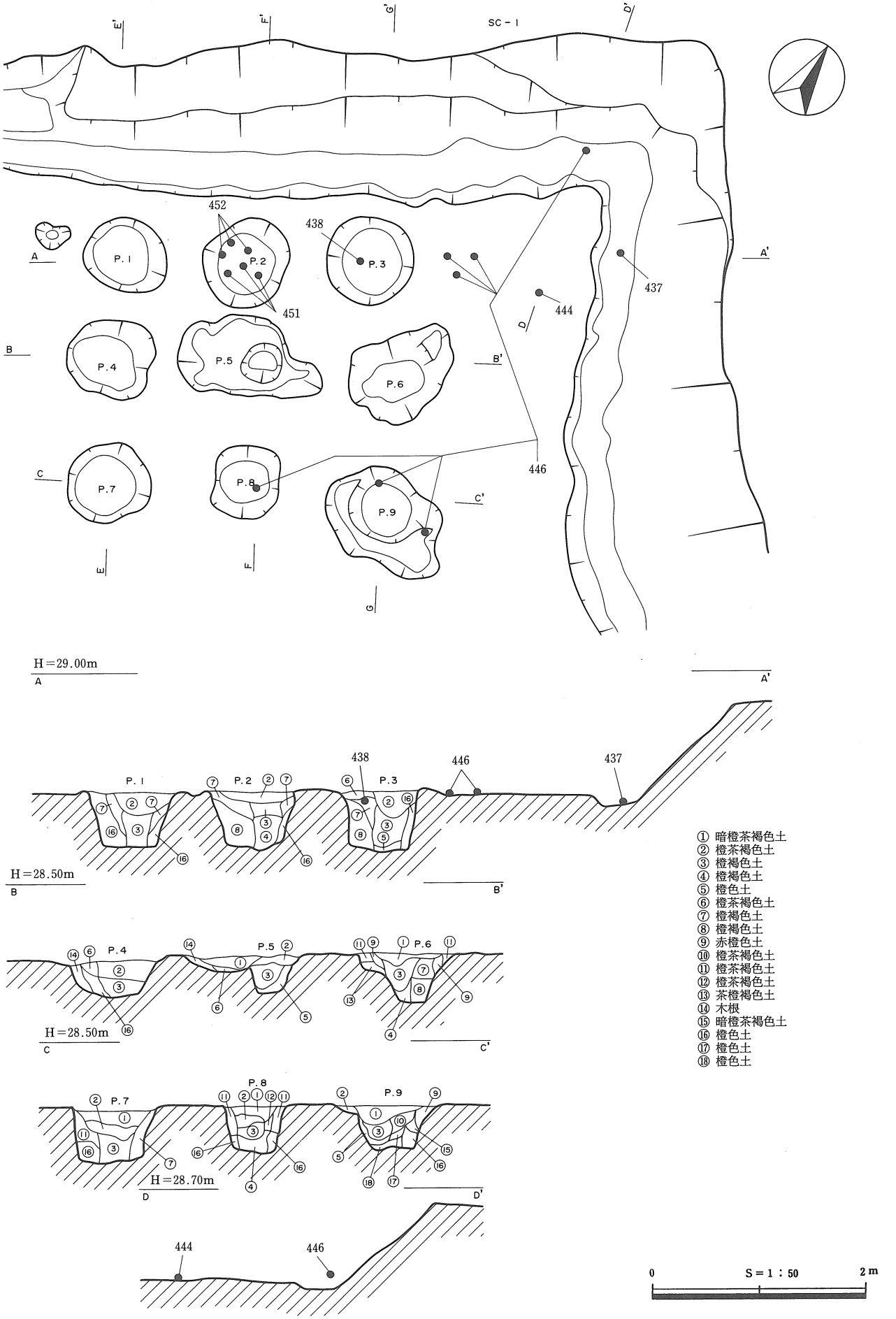
図・写真図版３、24～26、79、80）は、Ｂ区南側のほぼ中央部、標高27～29ｍの間に位置する長大なテラスである。東西46.5ｍ、南北５～７ｍの範囲で検出した。概して、攪乱、流出で平坦部の南側は完存していない。北側はテラスに平行してＳＣ－１が走り、これによって後背の壁面は上部を削平されている。西端は、ＳＣ－３や後世の攪乱により、遺存していない。東端は、壁をほぼ残しているものと思われる。テラスは、後背壁面裾部ラインの変化によって、３区画が把握される。東側の区画から中央の区画にかけて、壁沿いに溝が設けられている。東端壁で南方に折れ、鉤状をなす。幅25～50cm、深さ３～20cmを測る。東側の区画の溝は、中央の区画に比して幅広で浅い傾向にある。テラスの西側の区画においても、西端で溝を検出している。幅25～35cm、深さ５cmを測る。

東側の区画には、ＳＢ－３～６の４棟の掘立柱建物跡が検出され、東よりＳＢ－３→ＳＢ－６の順に並ぶ。ＳＢ－５とＳＢ－６の間は、丘陵尾根の鞍部にあたり、峠越えの往来道が通るため、テラスは流出している。ＳＢ－３～５は２間×２間の総柱の建物で、ＳＢ－６は１列のピット列である。

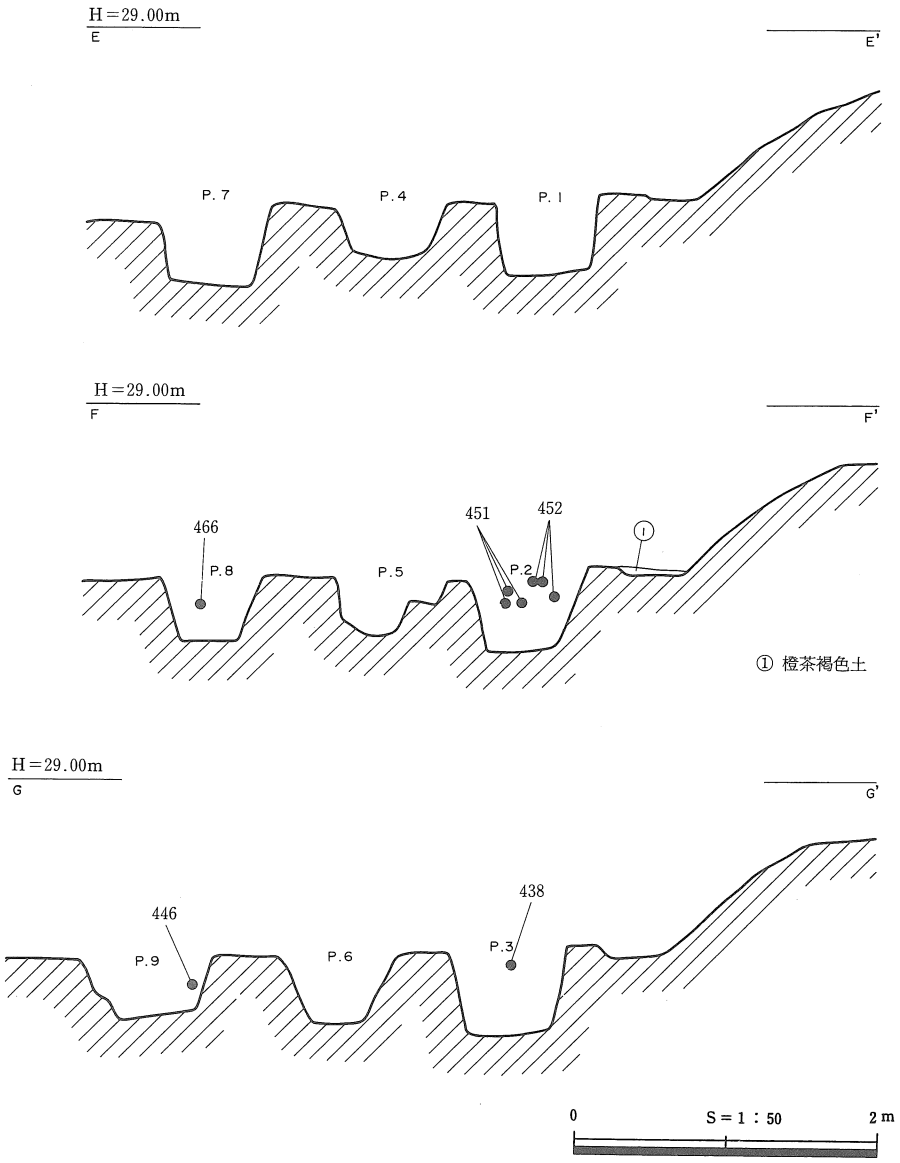
ＳＢ－３（第117、118、125図）は、Ｐ．１～９を柱穴とする、桁行２間・梁行２間の総柱の建物である。桁行長3.1～3.6ｍ、梁行長2.8～3.2ｍを測る。柱間は概ね20～55cmで、ピットの径は60～90cmである。ピットの径は大きく、柱間は比較的狭い。梁行方向の軸はＮ－33°－Ｗをとる。東側の溝との距離が1.2～1.6ｍを測るのに対し、北側後背の溝との距離は15～25cmと近い。溝が、雨落ち溝ではなく、後背丘陵からの流水を受け、排水するためのものであることを示すと考える。東側の壁高は95cm、北側の壁高は70～80cmを測る。建物の周辺でテラス床面の直上から出土した土器が、Ｐ．８、９の埋土中に検出した土器と接合した。446の須恵器の甕底部であ



第116図　ＳＳ－20、21実測図



第117図　ＳＳ―20・ＳＢ―３実測図

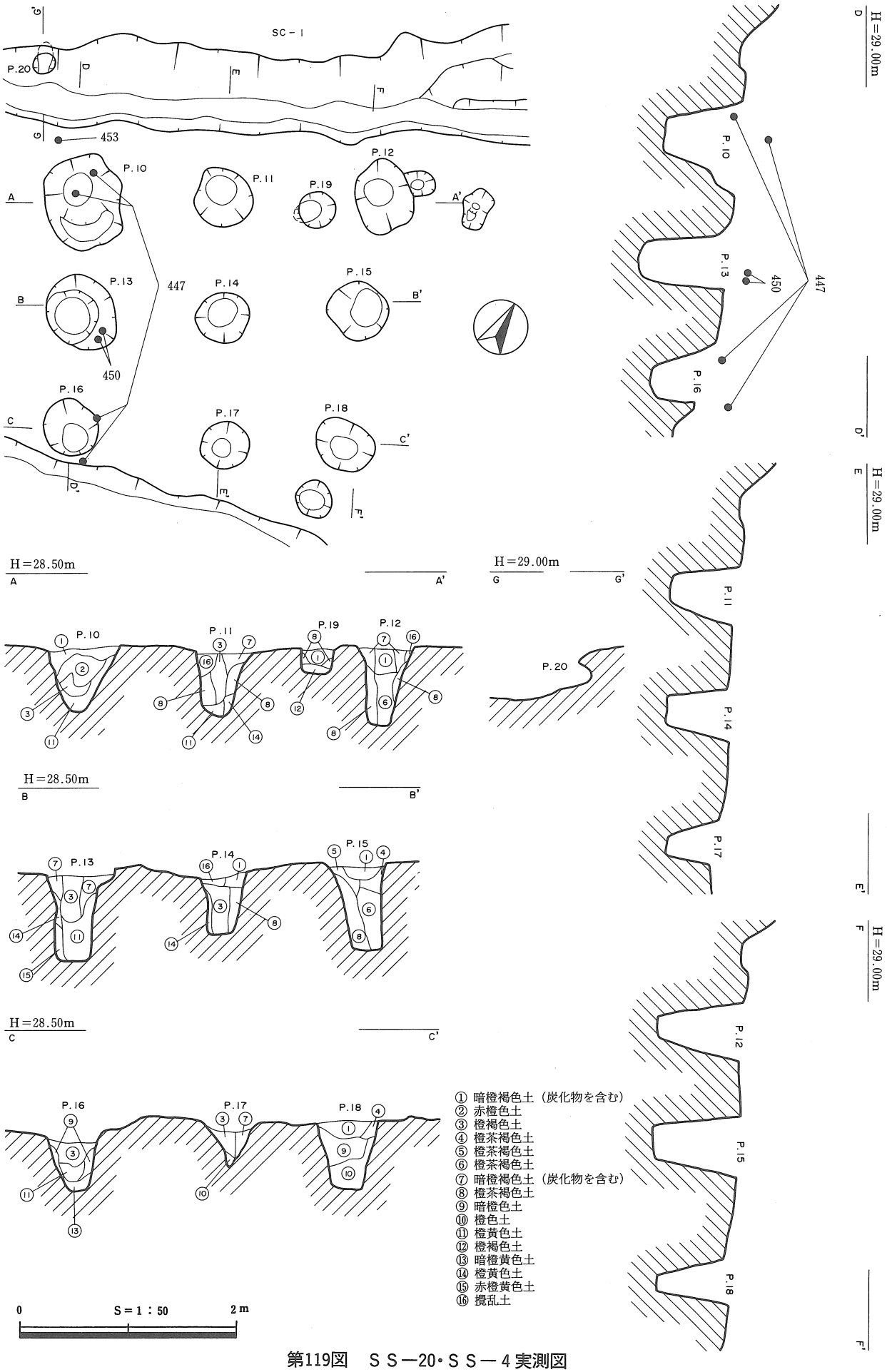


第118図　ＳＳ—20・ＳＢ—３断面実測図

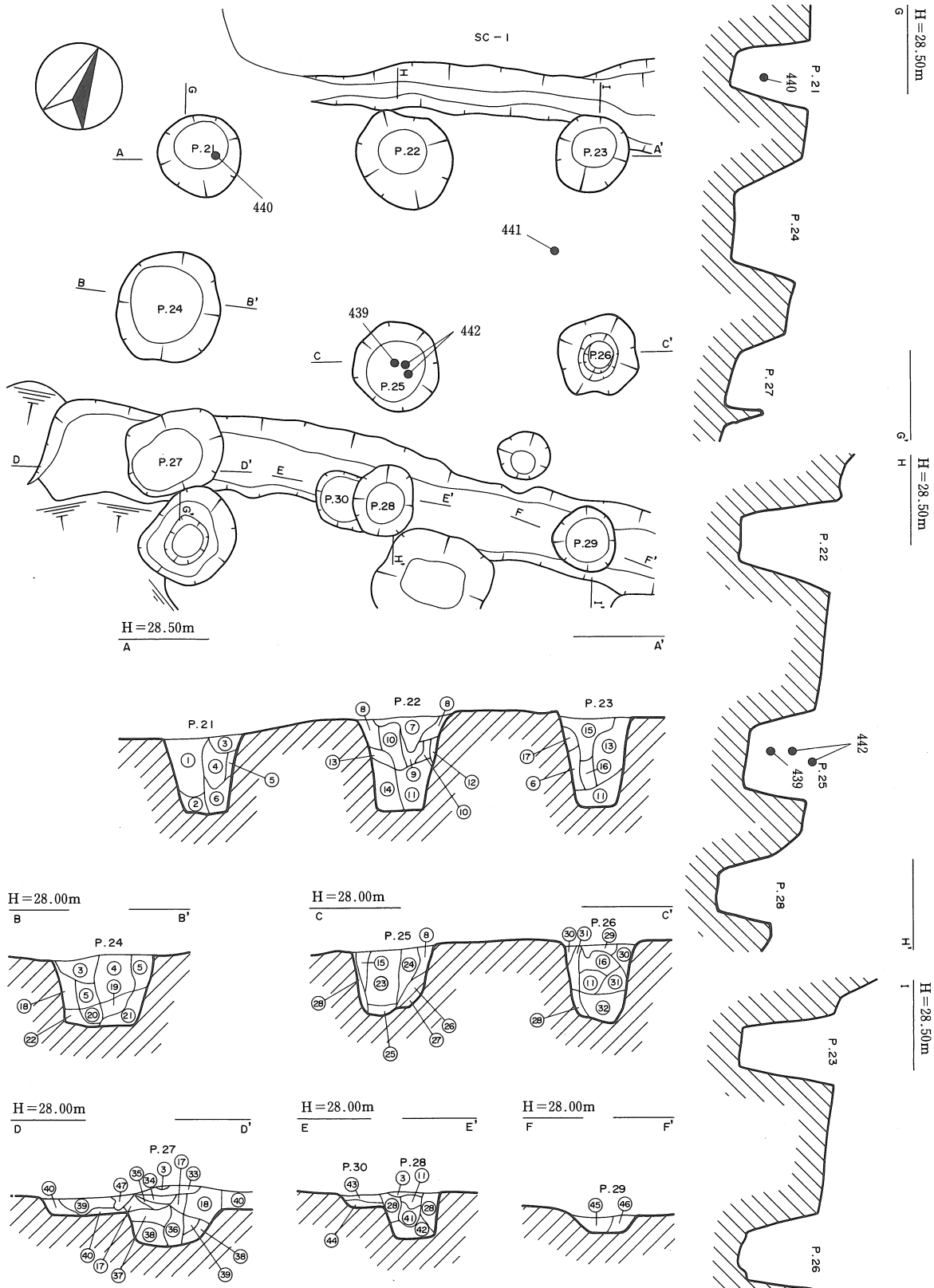
る。Ｐ．２の埋土中からは土師器の甕451、452が、Ｐ．３の埋土中からは須恵器の坏438が出土した。ＳＢ－３の周辺からは、437、443～445の須恵器が出土した。うち437は東側溝の底面直上から、444は建物東側のテラス床面直上から出土している。437はつまみの付く蓋、444は高台付きの皿である。443は、底部を糸切り後ナデ消す高台付きの坏である。445は坏であるが、底部をケズっている。437は陰田編年の９式（７世紀末～８世紀前半）に比定される。443は底部糸切り後ナデ調整するもので、８世紀前葉～中葉に比定されるものである（註14）。

ＳＢ－４（第119、125図）は、Ｐ．10～18を柱穴とする、桁行２間・梁行２間の総柱の建物である。桁行長3.1～3.45m、梁行長2.8～2.9ｍを測る。柱間は概ね20～75cmで、ピットの径は45～70cmである。柱間は比較的狭い。梁行方向の軸はＮ－30°－Ｗをとる。北側後背の溝との距離は20～30cmと近い。壁高は70cmを測る。Ｐ．10、13、16のライン上北側の壁面に、横坑状のピットＰ．20を検出した。入口部の径は20cm、奥行き15cmを測る。Ｐ．10、16両ピットの上方から出土した土器が接合した。447の須恵器甕である。Ｐ．13上方からは、土師器の甕450が出土し、Ｐ．10と北側の溝との間のテラス床面上から、砥石453が出土した。

ＳＢ－５（第120、125図）は、Ｐ．21～29を柱穴とする、桁行２間・梁行２間の総柱の建物である。Ｐ．27の土層断面より、ＳＳ－21の溝を切っているのが観察される。桁行長3.9～4.35m、梁行長3.2～3.7ｍを測る。柱

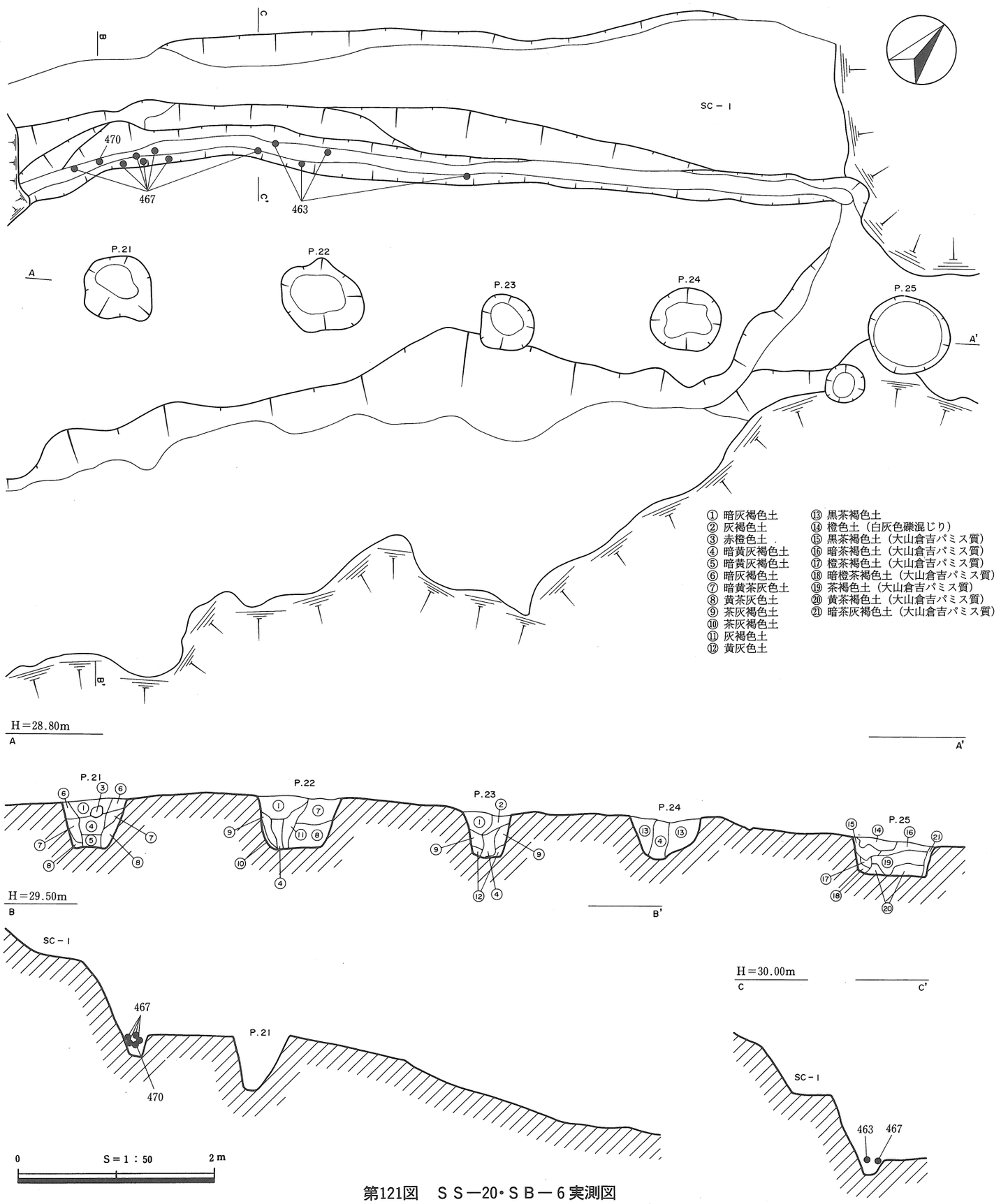


第119図　ＳＳ－20・ＳＳ－４実測図

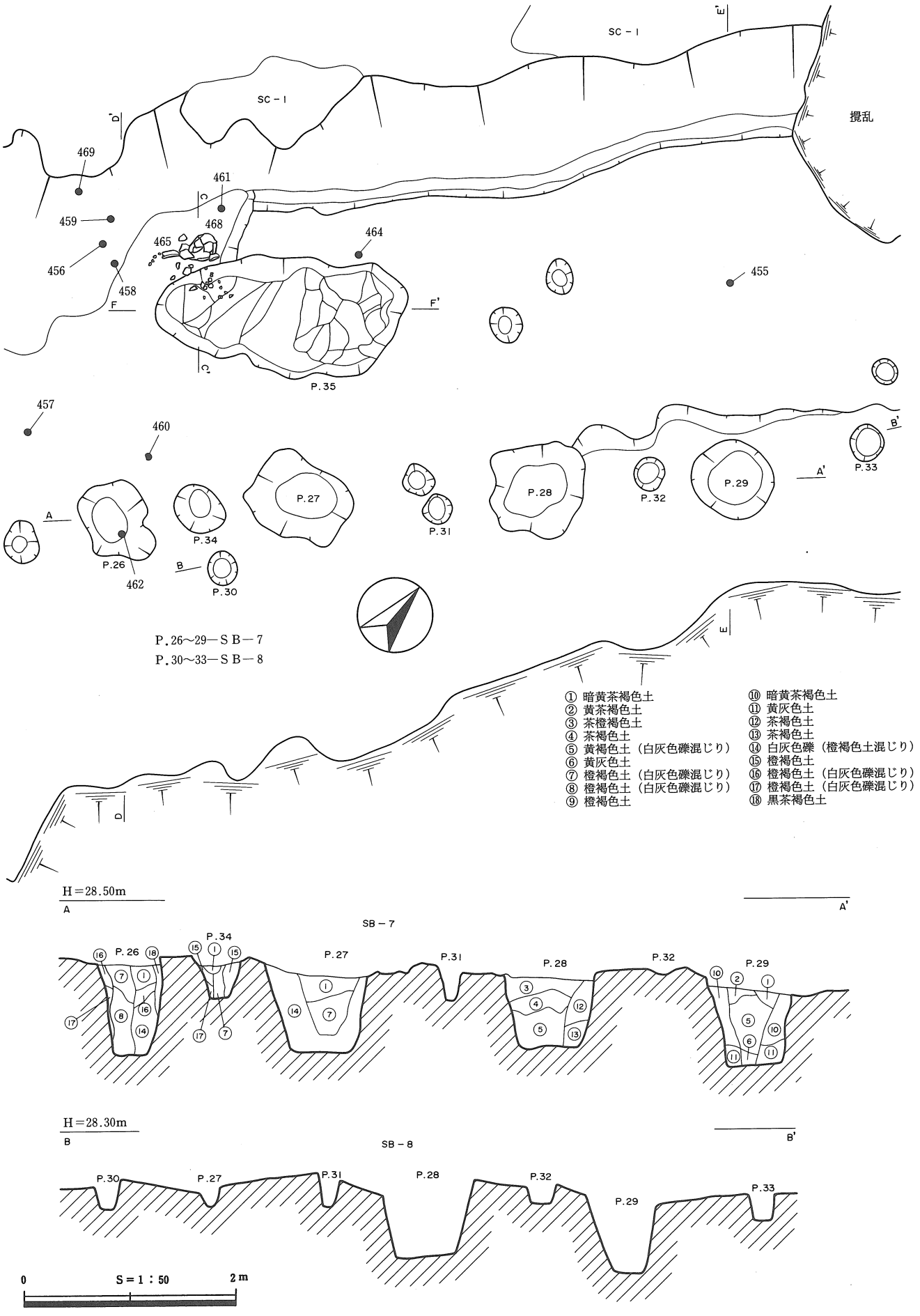


① 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
② 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
③ 黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
④ 暗橙灰色土
⑤ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
⑥ 橙茶褐色土
⑦ 茶灰褐色土(炭化物を含む)
⑧ 暗橙褐色土(炭化物を含む)
⑨ 赤橙褐色土
⑩ 赤橙褐色土
⑪ 橙黄色土
⑫ 濃橙色土
⑬ 橙褐色土
⑭ 暗橙黄色土
⑮ 暗橙褐色土(炭化物を含む)
⑯ 橙褐色土
⑰ 橙茶褐色土
⑱ 黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
⑲ 赤橙褐色土
⑳ 赤橙褐色土
㉑ 赤橙褐色土
㉒ 赤橙褐色土
㉓ 茶灰褐色土(炭化物を含む)
㉔ 橙灰色土
㉕ 橙灰色土
㉖ 黄灰色土
㉗ 橙灰色土
㉘ 橙黄色土
㉙ 暗黄褐色土
㉚ 暗橙黄色土
㉛ 橙黄色土
㉜ 黄橙色土
㉝ 赤橙色土
㉞ 黒橙茶褐色土
㉟ 灰褐色土
㊱ 黒黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊲ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊳ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊴ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊵ 暗黄茶褐色土(大山倉吉パミス質)
㊶ 暗黄橙褐色土
㊷ 黄橙褐色土
㊸ 黄褐色土
㊹ 暗黄褐色土
㊺ 黄灰褐色土
㊻ 黄灰褐色土
㊼ 攪乱土

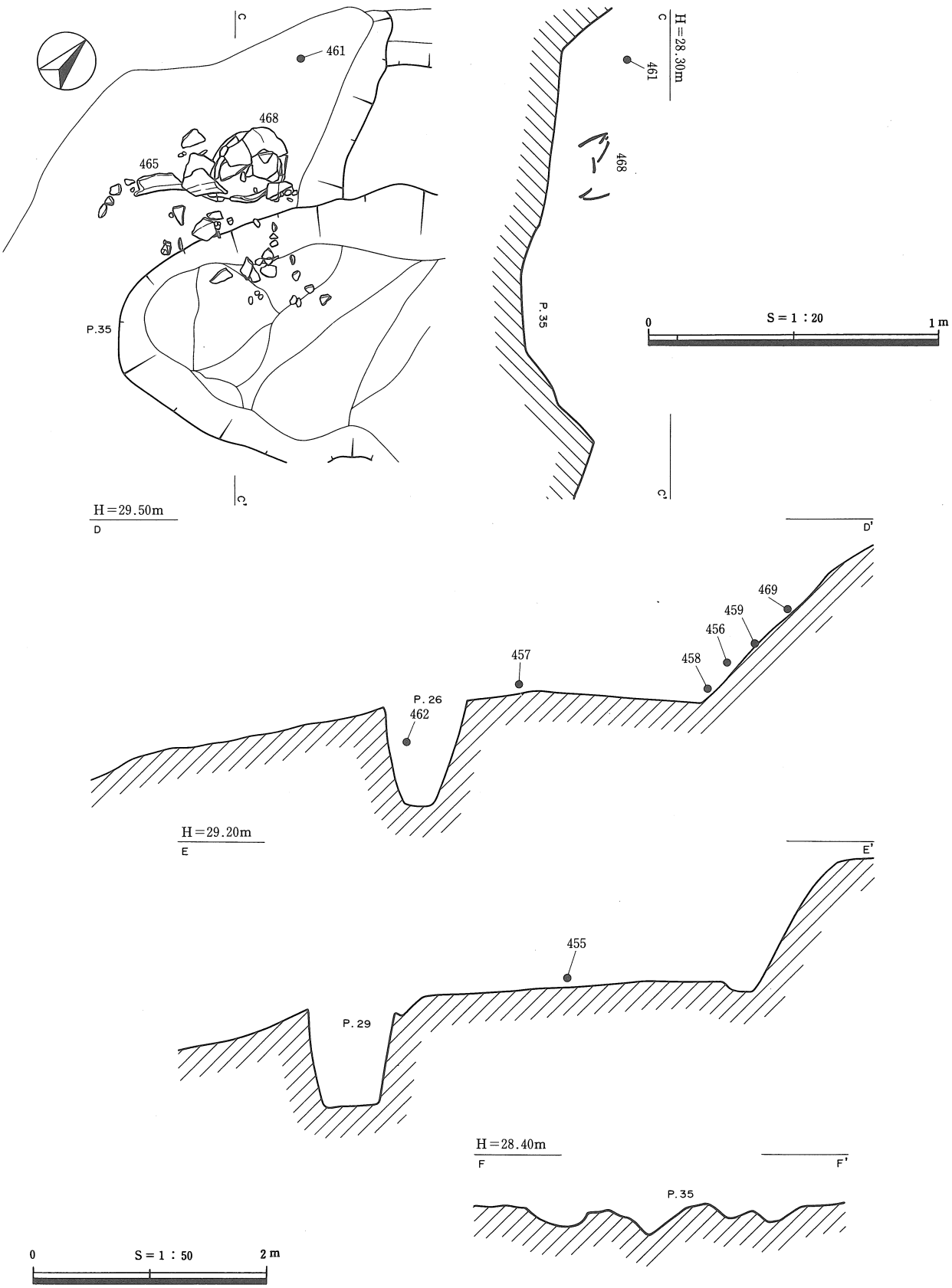
第120図　ＳＳ－20・ＳＢ－５実測図



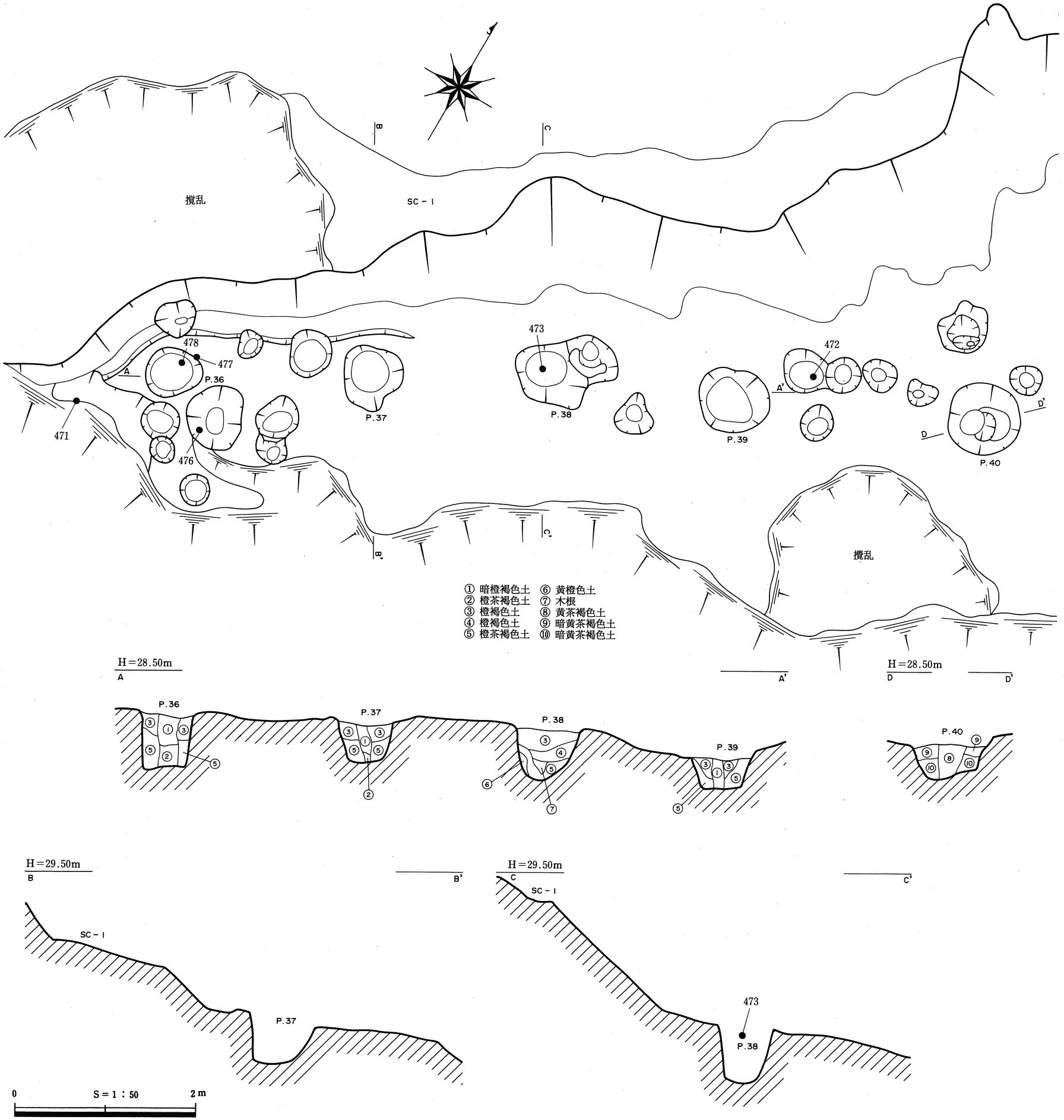
第121図　ＳＳ—20・ＳＢ—６実測図



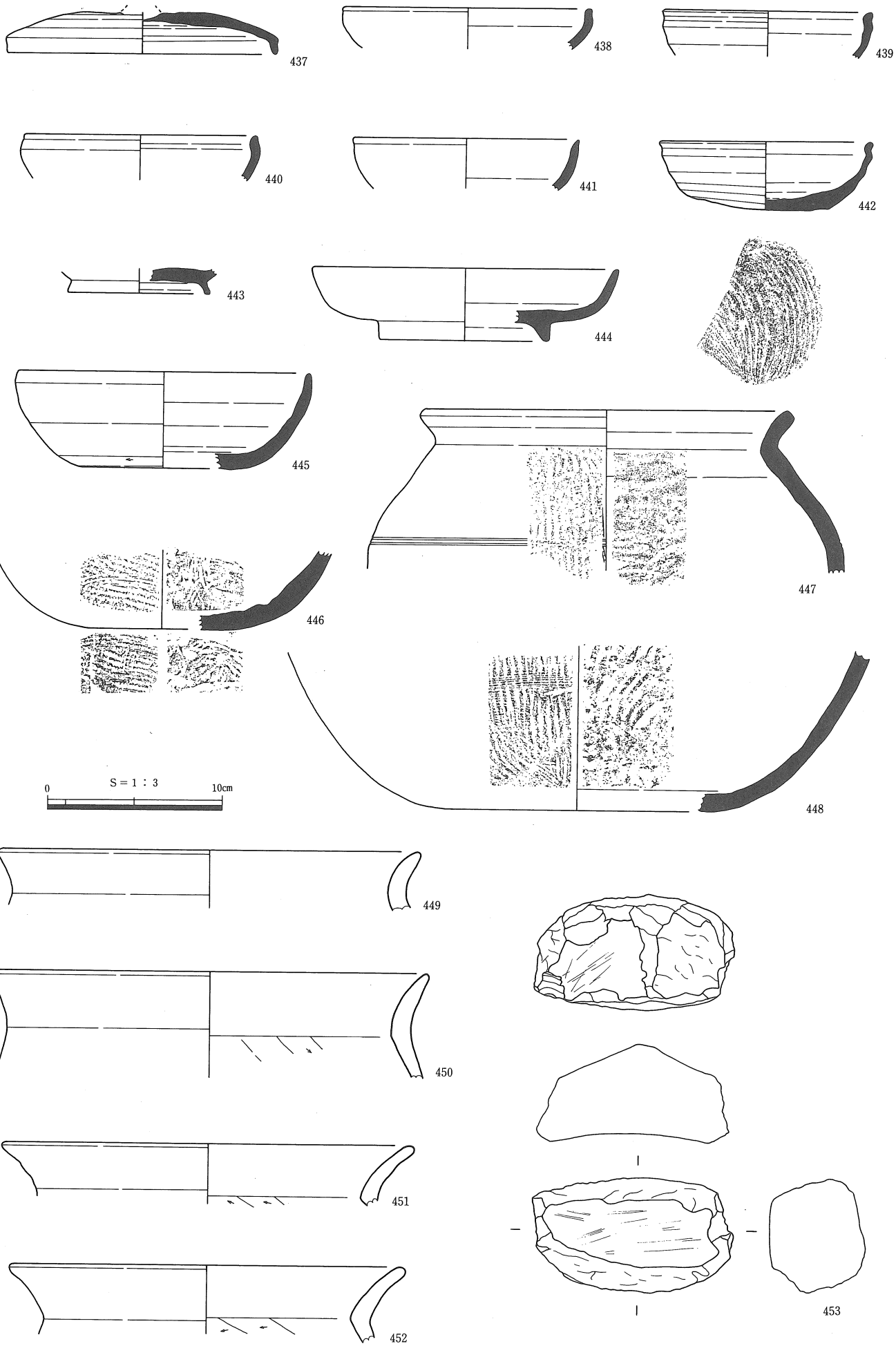
第122図　ＳＳ—20・ＳＢ—７、８実測図



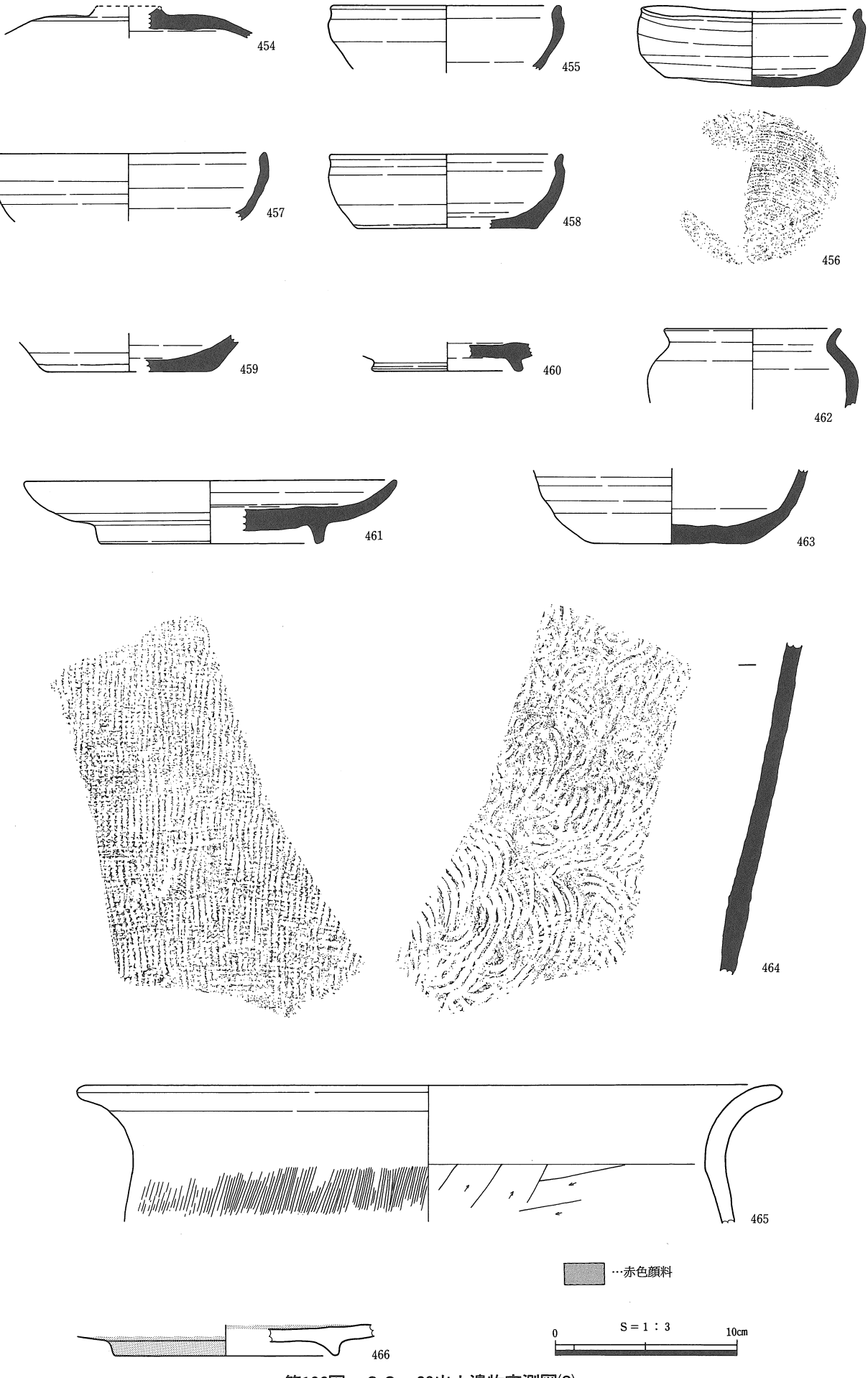
第123図　ＳＳ—20・ＳＢ—７断面実測図



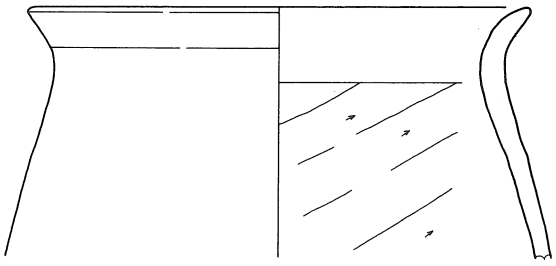
第124図　ＳＳ－20・ＳＢ－９実測図

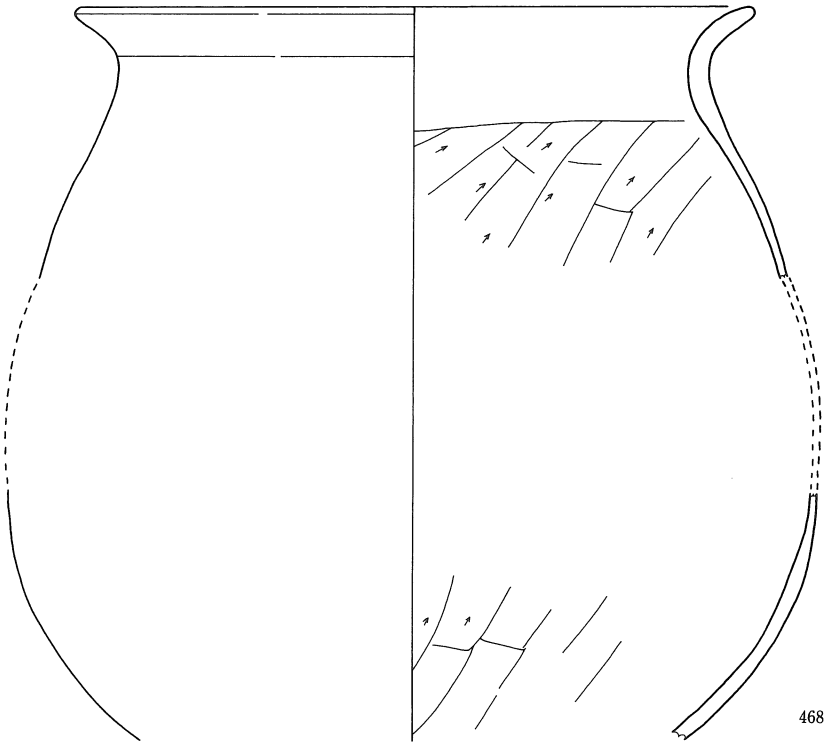


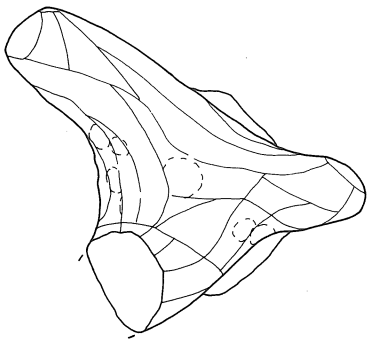
第125図　ＳＳ－20出土遺物実測図(1)

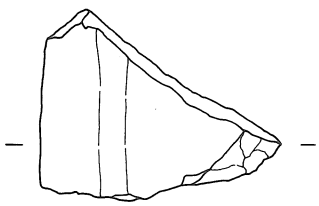


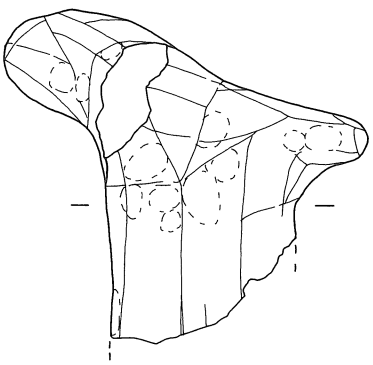
第126図　ＳＳ－20出土遺物実測図(2)

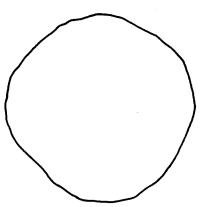


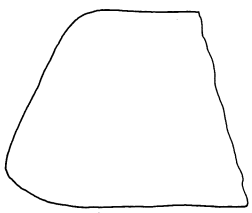


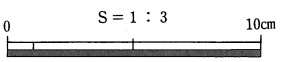




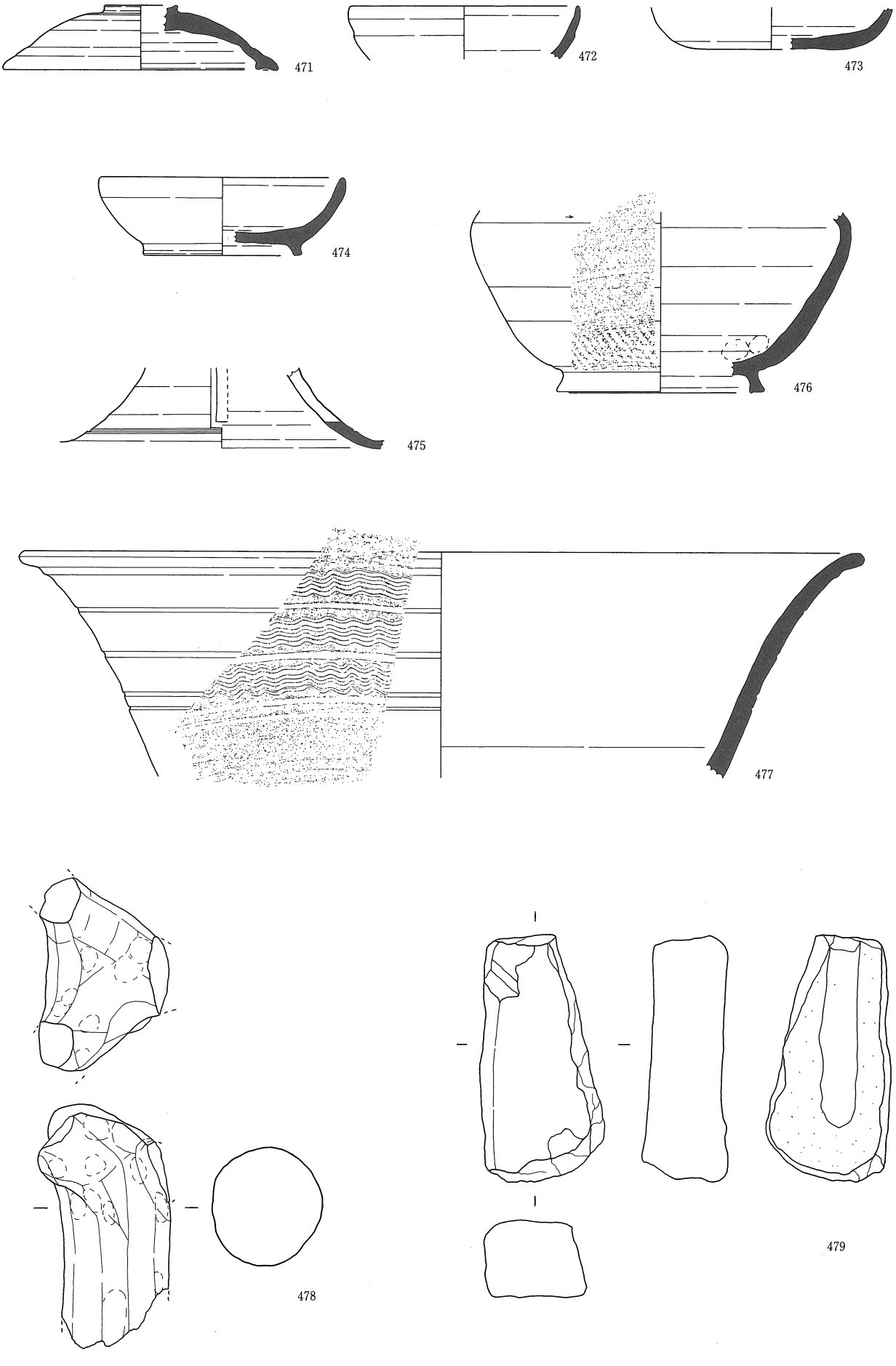




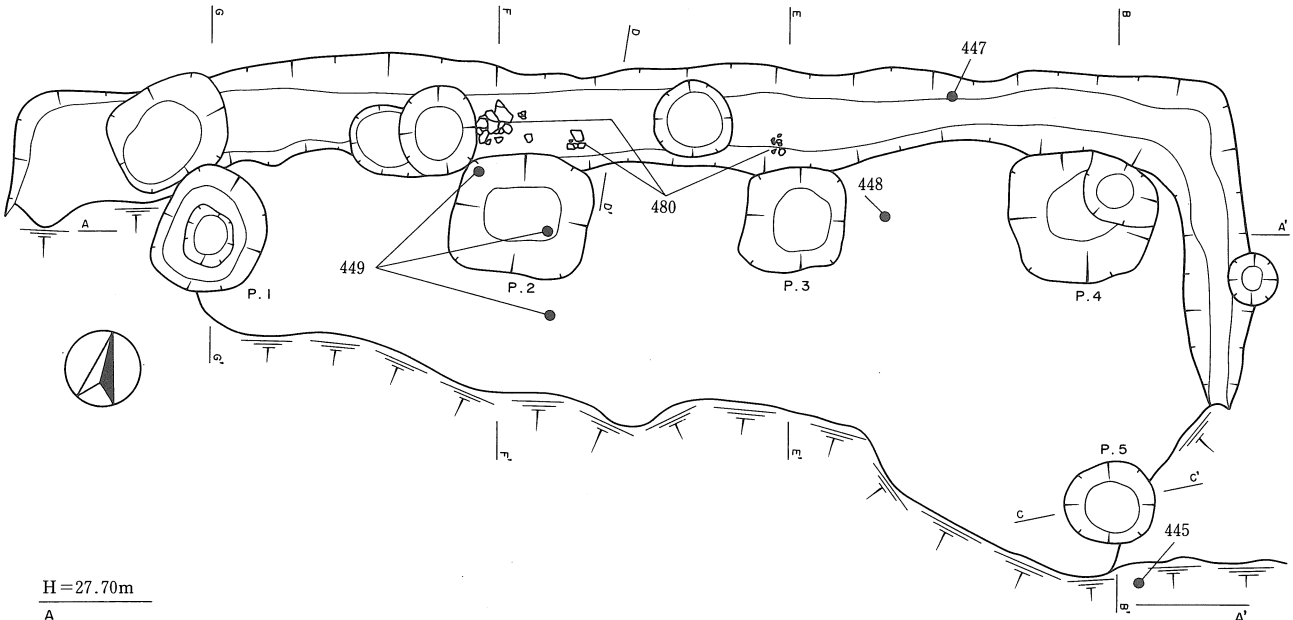


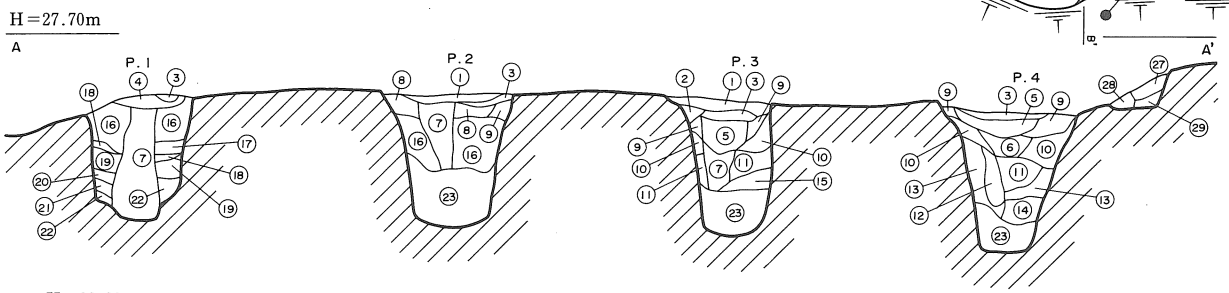


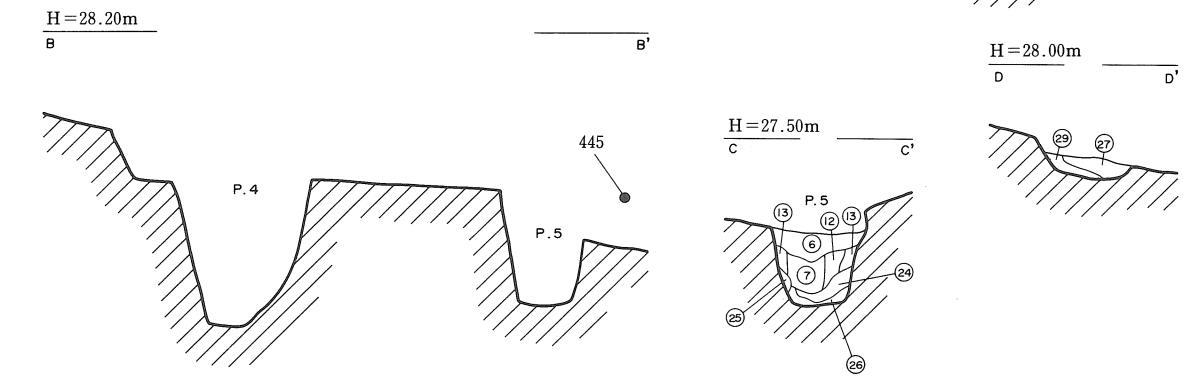
第127図　ＳＳ－20出土遺物実測図(3)

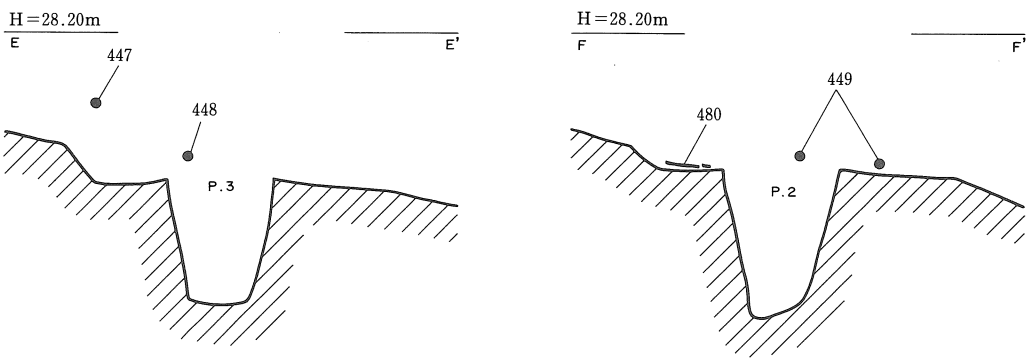


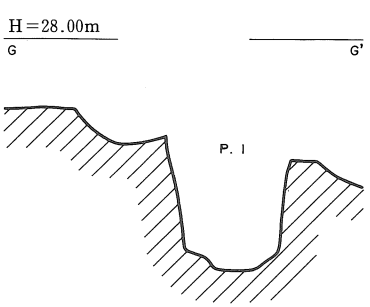
第128図　ＳＳ－20出土遺物実測図(4)







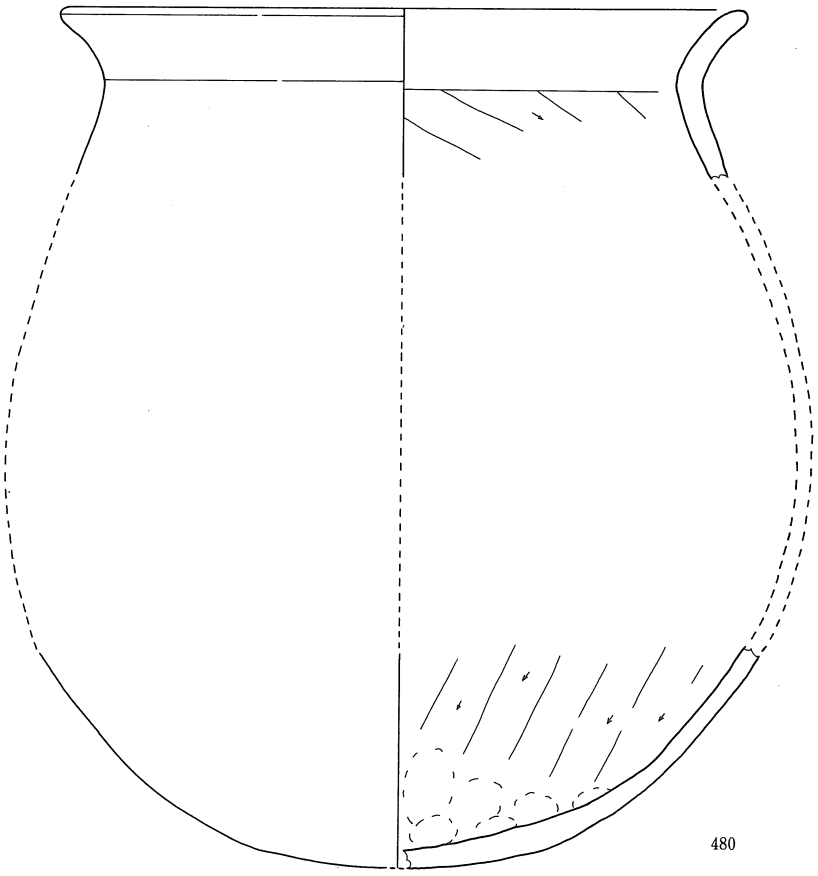




① 赤橙色土
② 濃橙茶褐色土
③ 赤橙色土
④ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
⑤ 黒黄褐色土
⑥ 黒橙茶褐色土
⑦ 暗黄褐色土
⑧ 黒黄褐色土
⑨ 暗黄褐色土
⑩ 暗黄褐色土
⑪ 暗橙茶褐色土
⑫ 暗黄褐色土
⑬ 暗黄褐色土
⑭ 黒黄褐色土
⑮ 黄灰褐色土
⑯ 黒灰褐色土
⑰ 橙灰褐色土
⑱ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
⑲ 橙灰褐色土
⑳ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
㉑ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
㉒ 暗黄茶褐色土（大山倉吉パミス質）
㉓ 黄灰褐色土
㉔ 暗橙茶褐色土
㉕ 濃橙茶褐色土
㉖ 暗黄褐色土
㉗ 暗黄茶褐色土
㉘ 黄茶褐色土
㉙ 黄茶褐色土

0　S＝1：50　2 m

第129図　ＳＳ－21実測図



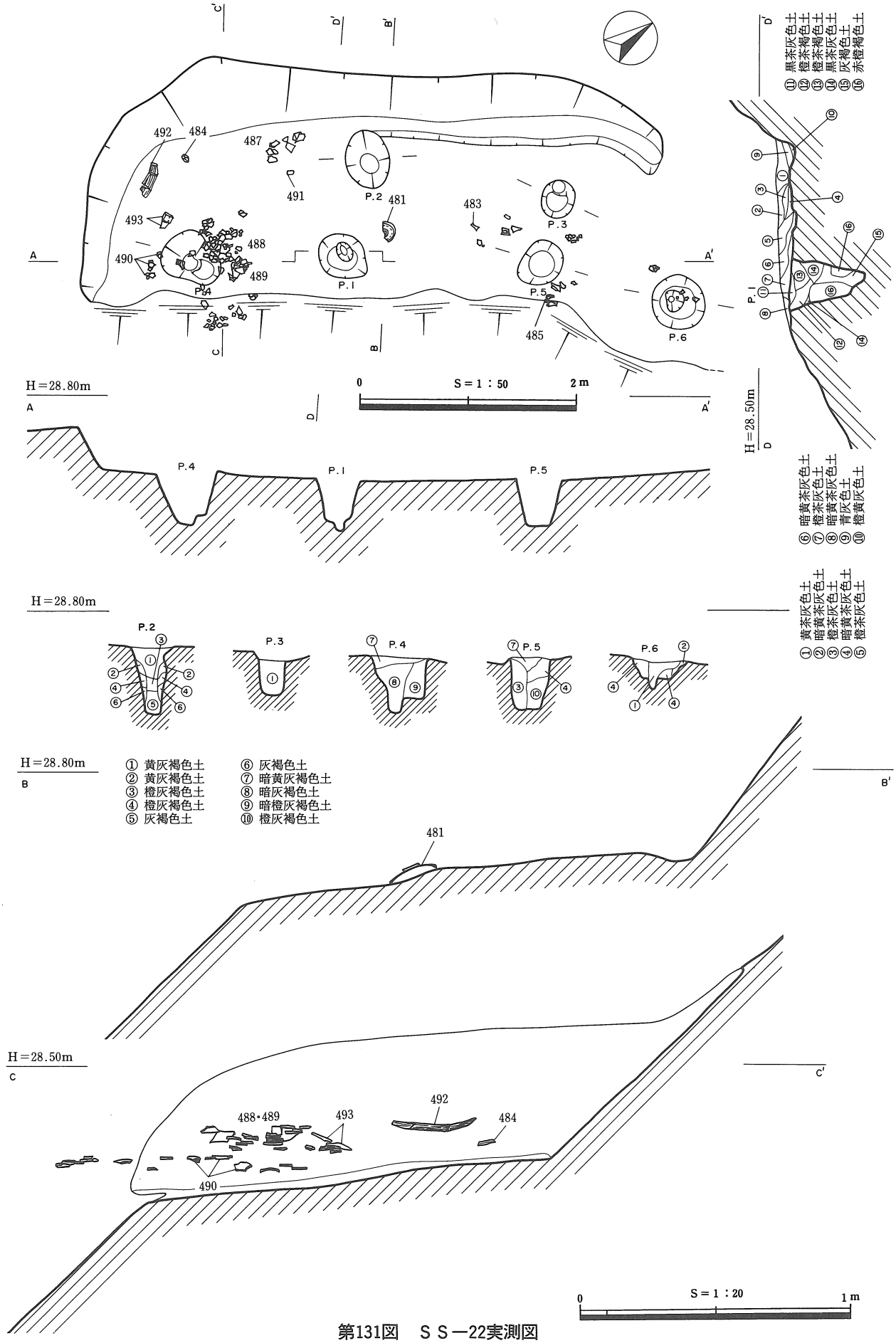
第130図　ＳＳ－21出土遺物実測図

間は概ね40cm～1.2mで、ピットの径は50～85cmである。柱間は比較的狭い。梁行方向の軸はＮ－25°－Ｗをとる。Ｐ．22は北側後背の溝の肩と接しており、Ｐ．23は肩を切っている。溝と後背壁は西に向かって消失していく。Ｐ．21の埋土中から須恵器の坏440が、Ｐ．25の埋土中から須恵器の坏439、442が出土した。442は底部糸切りである。Ｐ．23とＰ．26の中間のテラス床面上から、須恵器の坏441が出土した。439、442は陰田編年の10式（８世紀後半）に比定される。

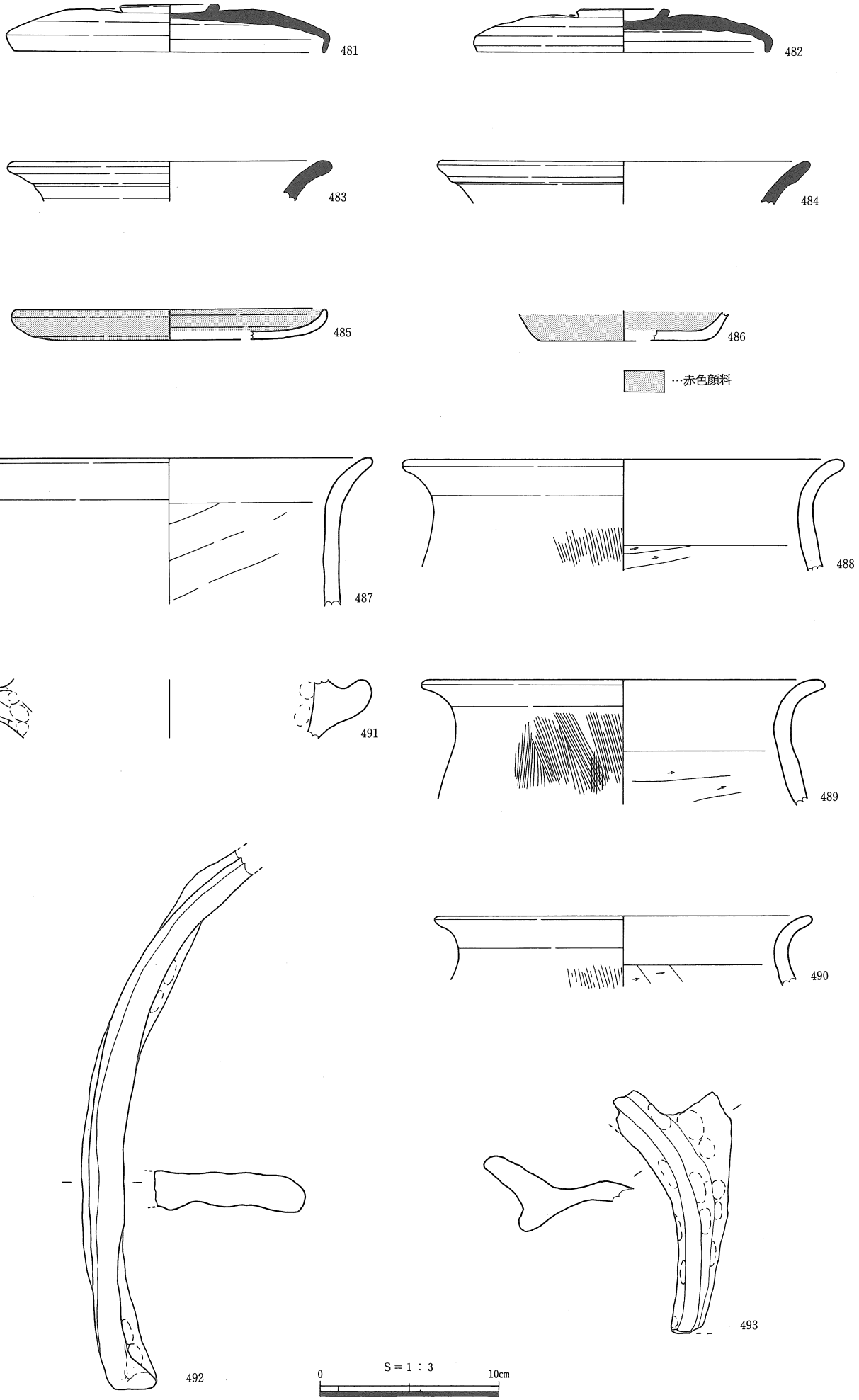
ＳＢ－６（第121、126、127図）は、Ｐ．21～25を柱穴とする４間の建物である。桁行のみで梁行方向のピットは確認できなかった。桁行長９ｍ、柱間は概ね1.2～1.5mで、ピットの径は55～85cmである。桁行方向の主軸はＮ－54°－Ｅをとる。北側後背の溝との距離は90cm～1.15m、壁高は80cmを測る。遺物は、溝の埋土中から出土した。463は須恵器の壺の底部、467は土師器の甕、470は細粒黒雲母花崗岩製の砥石である。

中央の区画には、ＳＢ－７と８が重複している。いずれも１列のピット列である。ＳＢ－７（第122、123、126図）は、Ｐ．26～29を柱穴とする３間の建物である。桁行のみで梁行方向のピットは確認できなかった。桁行長6.5m、柱間は概ね１～1.3mで、ピットの径は60～80cmである。桁行方向の主軸はＮ－47°－Ｅをとる。北側後背の溝との距離は2.2m～2.8m、壁高は1.1～1.3mを測る。遺物は、Ｐ．26の埋土中から出土した。462は須恵器の短頸壺である。

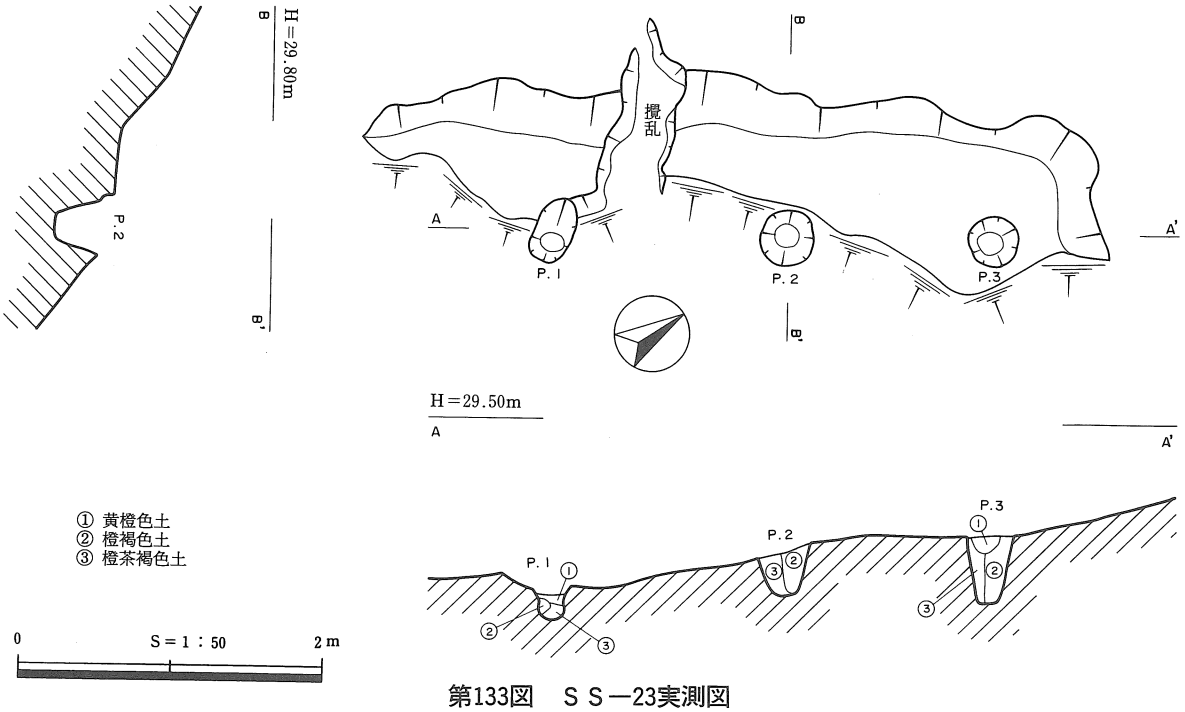
ＳＢ－８（第122図）は、Ｐ．30～33を柱穴とする３間の建物である。桁行のみで梁行方向のピットは確認できなかった。桁行長6.5m、柱間は1.8mで、ピットの径は30cmである。桁行方向の主軸はＮ－40°－Ｅをとる。北側後背の溝との距離は2.8mを測る。他の建物跡に比べて、ピットの径は小さいが、柱間はほぼ1.8m間隔で規則的である。



第131図　ＳＳ－22実測図



第132図　ＳＳ－22出土遺物実測図



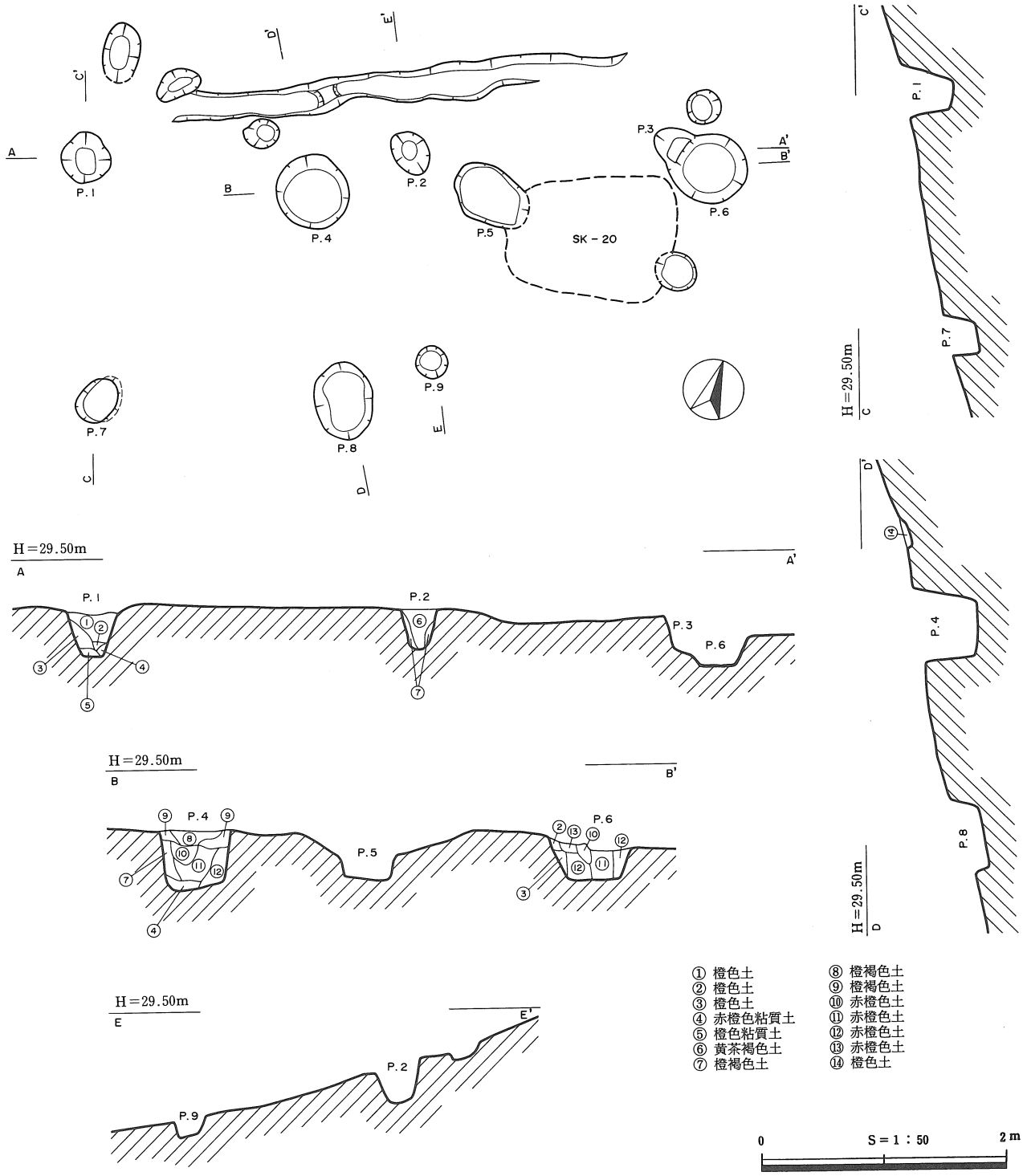
第133図　ＳＳ－23実測図

ＳＢ－７、８は、他の建物に比べ、溝との距離が２m以上を測り、後背に広い空間を有している。この空間には、いびつで浅く範囲の広いピットＰ．35（第122、123図）が穿たれている。2.4×１mの範囲で、深さは10～20cmを測る。底面は凹凸をなす。ピットを掘りかけて、岩脈に当たり、場所をずらすなど、さらに掘り下げを試みたが、結局掘削を断念したものと推察される。よって、テラスは造成したものの、建物はそれよりも前方に建てざるを得ない状況になったのであろう。

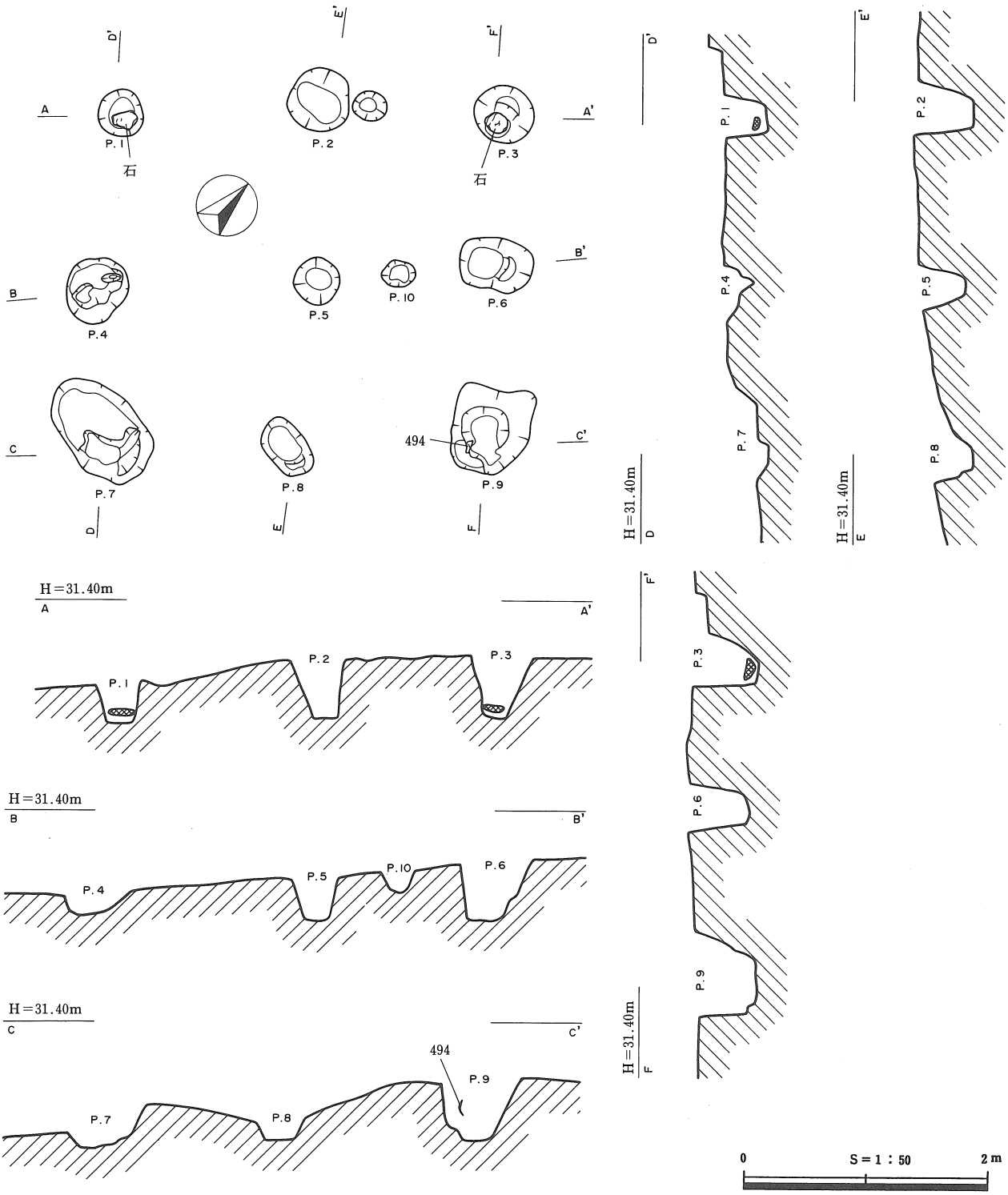
この空間から、須恵器の坏（455、457、460）、甕（464）が出土している。460は底部糸切りの高台付きの坏である。また、壁際から上方殻の転落遺物として、須恵器の坏（456、458、459）、皿（461）、土師器の甕（465、468）、支脚（469）が出土している。456、458は底部糸切りである。455、456、458、460は陰田編年の10式（８世紀後半）に比定される。

西側の区画には、ＳＢ－９（第124、126、128図）が構築されている。１列のピット列で、Ｐ．36～40を柱穴とする４間の建物である。桁行のみで梁行方向のピットは確認できなかった。桁行長9.8m、柱間は概ね1.2～２mで、ピットの径は60～80cmである。桁行方向の主軸はＮ－64°－Ｅをとる。北側後背の溝との距離は10m、壁高は50cm～1.2mを測る。遺物は、Ｐ．36の埋土中から須恵器の甕（477）、支脚（478）、Ｐ．38の埋土中から須恵器の坏（473）が出土した。473は底部糸切りである。ＳＢ－９の周辺からは、須恵器の蓋（471）、坏（472、474）、脚台（475）、壺（476）、丹塗り土師器の皿（466）、アプライト製の砥石（698）が出土している。474は底部糸切りの高台付きの坏である。471は陰田編年の８式（７世紀後葉）、473、474は陰田編年の10式（８世紀後半）に比定される。

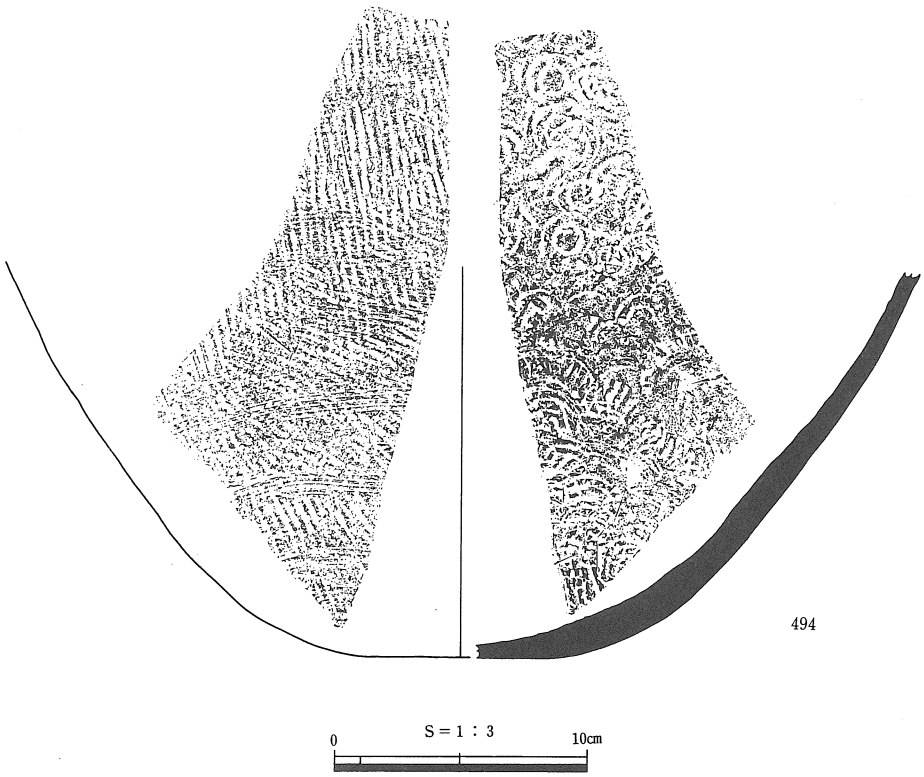
以上の状況から、ＳＳ－20は８世紀代に造成されたものと考えられる。テラスは、丘陵尾根鞍部によって東西に仕切られる恰好になっており、東に総柱の建物、西に１列のピット列で構成される建物を配置している。それぞれ３棟ずつの配置は、それぞれが１対をなす（総柱－ピット列）ように受け取れる。ＳＢ－３～５の掘立柱建物跡は、柱穴の規模に比して柱間が狭く、また総柱であることから、倉庫的な強固さが要求される建物の構造が想定される。ならば、ピット列により構成される建物は、居住用施設と位置付けられるのであろうか。ただし、ＳＢ－３～５は建物間の距離が近く、当時、火災時の延焼を想定していれば、同時並存した可能性は低いと考える。出土遺物的には、建物間の時期差を検証できなかったが、ＳＢ－３の周辺で出土した437、443は古い要素をもつものであり、テラスは東側から造成され、適宜拡張されていった可能性がある。



第134図　ＳＳ－24実測図



第135図　ＳＢ－１実測図

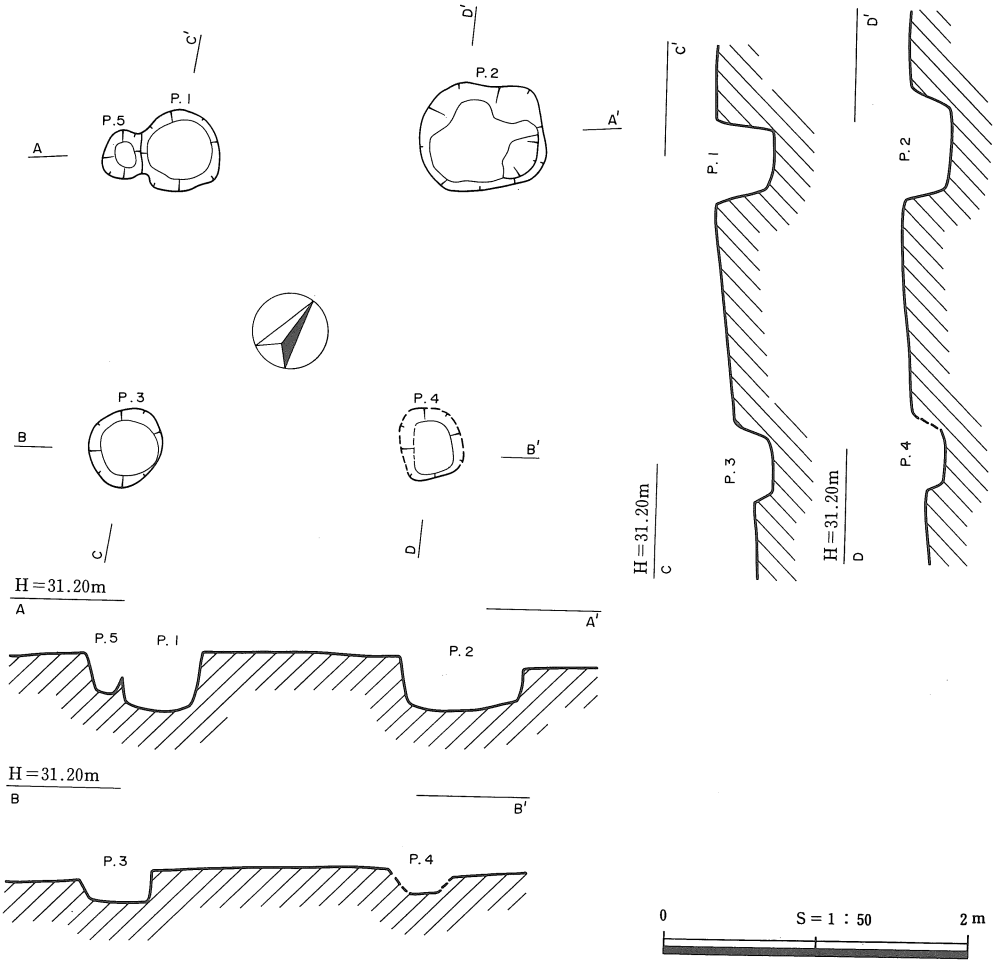


第136図　ＳＢ－１・Ｐ９出土遺物実測図

ＳＳ－21（第129、130図・写真図版３、24、26、80）は、ＳＳ－20のＳＢ－４、５の南側に隣接する。標高27～27.5mの間に位置する。東西8.1m、南北3.3mの範囲で検出した。平坦部の南側は、流出して完存していない。北側はＳＳ－20のＳＢ－５の柱穴によって溝が切られている。テラスは、東西6.5m、南北1.1～2.8mの範囲が遺存しており、壁沿いに鍛状に溝を設けている。幅30～60cm、深さ３～10cmを測る。溝の肩を切るように、柱穴を穿ち、Ｐ．１～５を柱穴とする、桁行３間・梁行１間の建物を構築している。桁行長6.6m、梁行長2.6mを測る。柱間は概ね１～1.2mで、ピットの径は60cm～１mである。東側の壁高は25cm、北側の壁高は20～35cmを測る。遺物は、Ｐ．２の埋土上面からやや浮いた位置で土師器の甕（449）、Ｐ．３の東側の地点で床面よりやや浮いた位置から須恵器の甕の底部（448）、Ｐ．２、３の北側、溝の底面直上から土師器の甕（480）が出土した。時期の詳細は不明だが、切り合い関係から（第120図・Ｄ－Ｄ'ライン土層断面）、ＳＳ－20のＳＢ－５より古い段階であるといえる。

ＳＳ－22（第131、132図・写真図版27、80）は、ＳＳ－20のＳＢ－９の西側にＳＣ－３を挟んで隣接する。標高27.5～28.5mの間に位置する。東西６m、南北2.2mの範囲で検出した。平坦部の南側は、流出して完存していない。東側はＳＣ－３によって切られている。テラスは、東西５m、南北1.3～1.7mの範囲が遺存しており、壁沿いの溝を一部確認できた。幅10～20cm、深さ５cmを測る。Ｐ．４、１、５、６を柱穴とする桁行３間の建物を構築している。梁行方向については確認できなかった。桁行長は5.1mを測り、柱間は概ね90cm～1.3mで、ピットの径は40～50cmである。壁高は西側で15cm、北側で70cmを測る。遺物は、テラスの西側に集中して出土した。481、483以外の遺物は、床面より浮いた状態である。481～484は須恵器で、481、482は輪状つまみのかえりのない蓋、483、484は甕の口縁部である。485～491は土師器である。485、486は丹塗り土師器の皿、487～490は甕、491は甑の把手である。487は甑である可能性もある。492、493は竈の庇である。481、482は、陰田編年の９式（７世紀末～８世紀前半）に比定される。

ＳＳ－23（第133図・写真図版11、27）は、ＳＫ－３の北東側に位置する。標高28.5～29.5mの間に位置する。南北５m、東西1.1mの範囲で検出した。平坦部の東側は、流出して完存していない。テラスは、南北4.6m、東



第137図　ＳＢ－２実測図

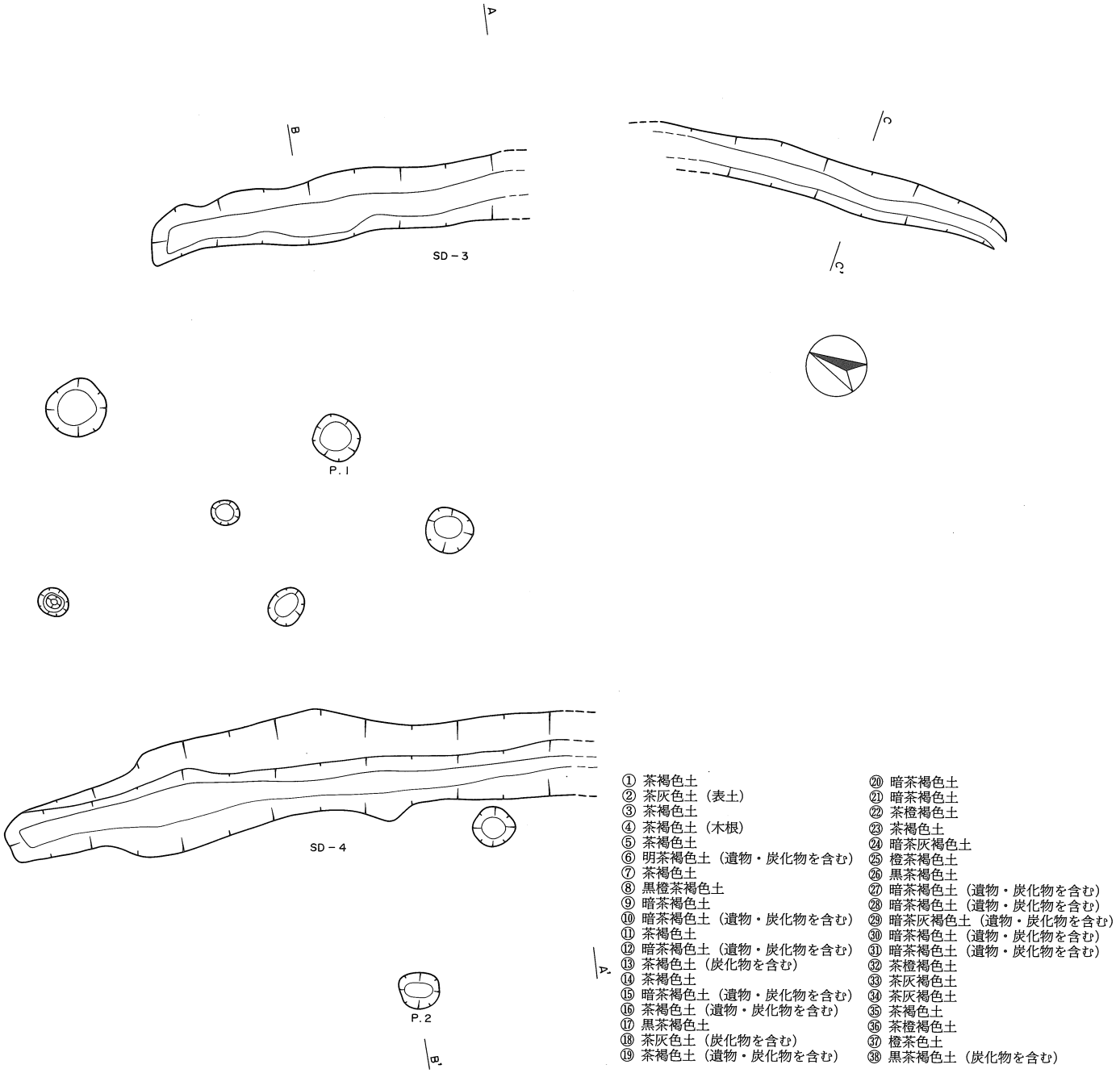
西60cm～１ｍの範囲が遺存しており、壁沿いに溝は確認できなかった。Ｐ．１～３を柱穴とする桁行２間の建物を構築している。梁行方向については確認できなかった。桁行長は3.2mを測り、柱間は概ね１～1.2mで、ピットの径は30～35cmである。壁高は北側で35cmを測る。遺物は出土していない。

ＳＳ－24（第134図・写真図版３、12）は、ＳＫ－３の南東側に位置する。標高29m付近に位置する。東西4.8ｍ、南北３ｍの範囲で検出した。全体に削平されており、範囲を明確に把握できなかったが、ピット列とそれに伴う溝を確認したため、テラス状遺構と判断した。溝は幅20～30cm、深さ10cmを測る。Ｐ．４～６、８を柱穴とする桁行２間・梁行１間の建物を構築している。桁行長は3.9m、梁行長は2.4mを測り、柱間は概ね90cm～1.1ｍで、ピットの径は60cm前後である。遺物は出土していない。

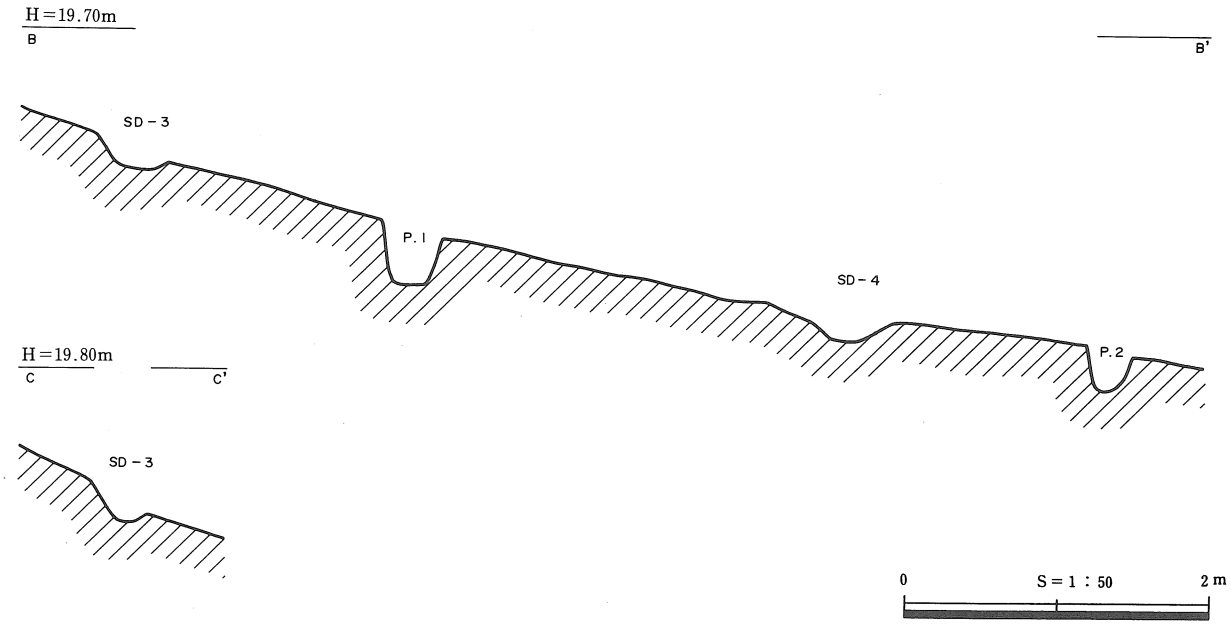
⑦のＳＳ－20～24のグループは、ＳＳ－21、22→ＳＳ－20の順に構築されたものと思われる。ＳＳ－23、24については、時期不明である。

・陰田第６遺跡における居住遺構の変遷

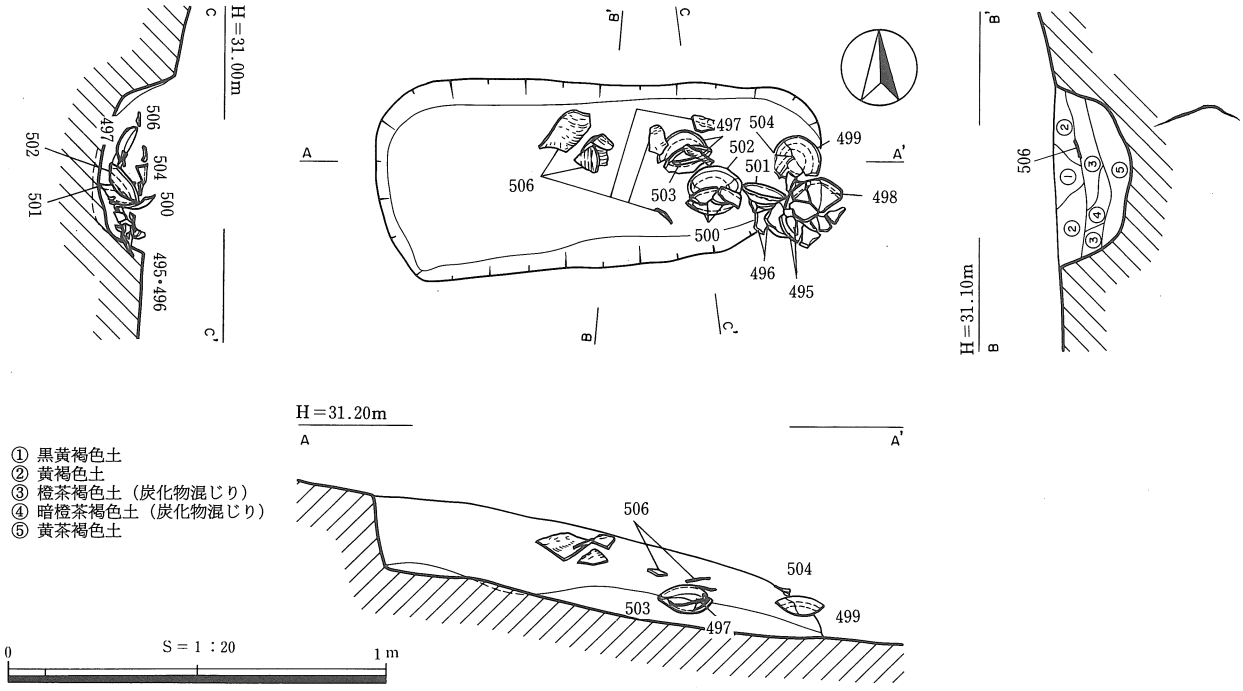
以上の所見をもとに、陰田第６遺跡における居住遺構の消長について、別表に纏めた（Ｐ181・「各エリアの変遷」）。「エリア」は、上述の①～⑦に区分したエリア名を指す。「地区」は、調査区のＡ区、Ｂ区を示す。変遷の縦軸は、陰田編年の４式から10式に、それぞれ便宜上Ⅰ～Ⅶの時期名を付したものである。よって、Ⅰ期－６世紀後葉、Ⅱ期－６世紀末～７世紀初頭、Ⅲ期－７世紀前葉、Ⅳ期－７世紀中葉、Ⅴ期－７世紀後葉、Ⅵ期－７世紀末～８世紀前半、Ⅶ期－８世紀後半に相当するものと理解されたい。時期不明のものは、最下欄に「不明」の項を設けた。エリアごとの丸付数字は、そのエリア内での構築順序を示す。数字が同一の場合は、併行して建てられていたことを表す。数字が空白のものは、厳密な順序を付け難かったものである。丸付数字の下方に伸びる矢印付の直線は、その遺構の存続期間を表す。時期設定は、上述のとおり、出土土器と切り合い関係をもとに行



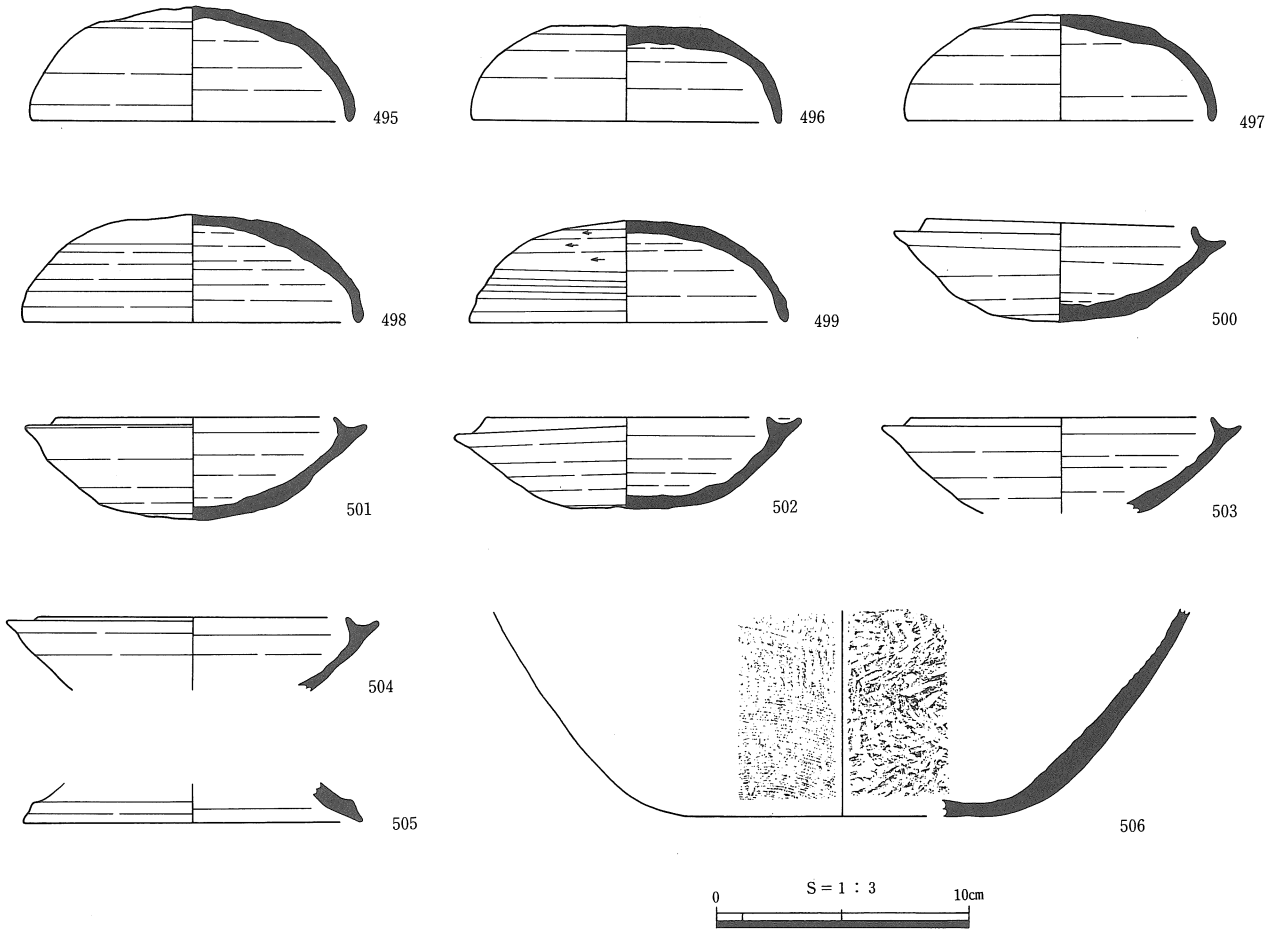
第138図　ＳＤ－３、４実測図



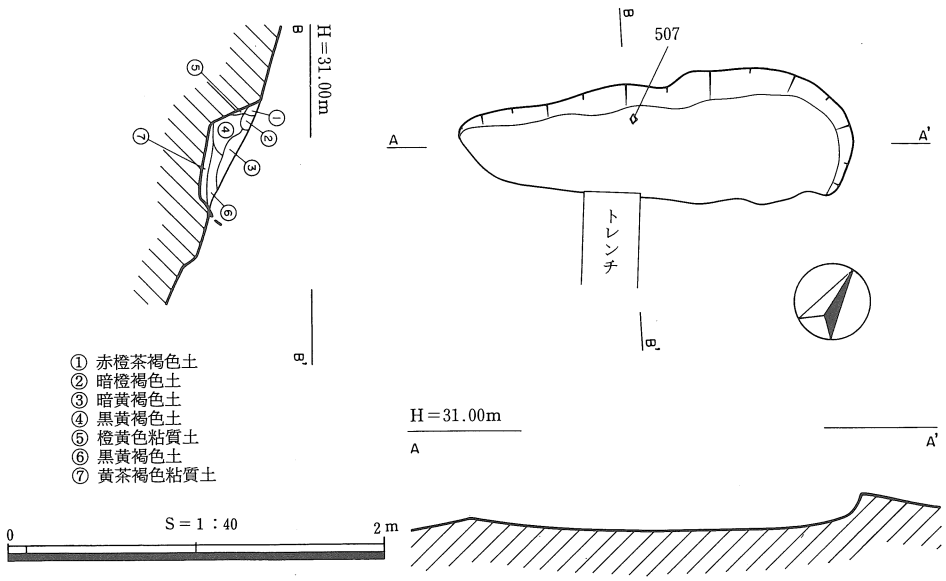
第139図　ＳＤ－３、４断面実測図



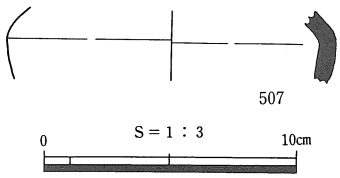
第140図　ＳＫ－１実測図



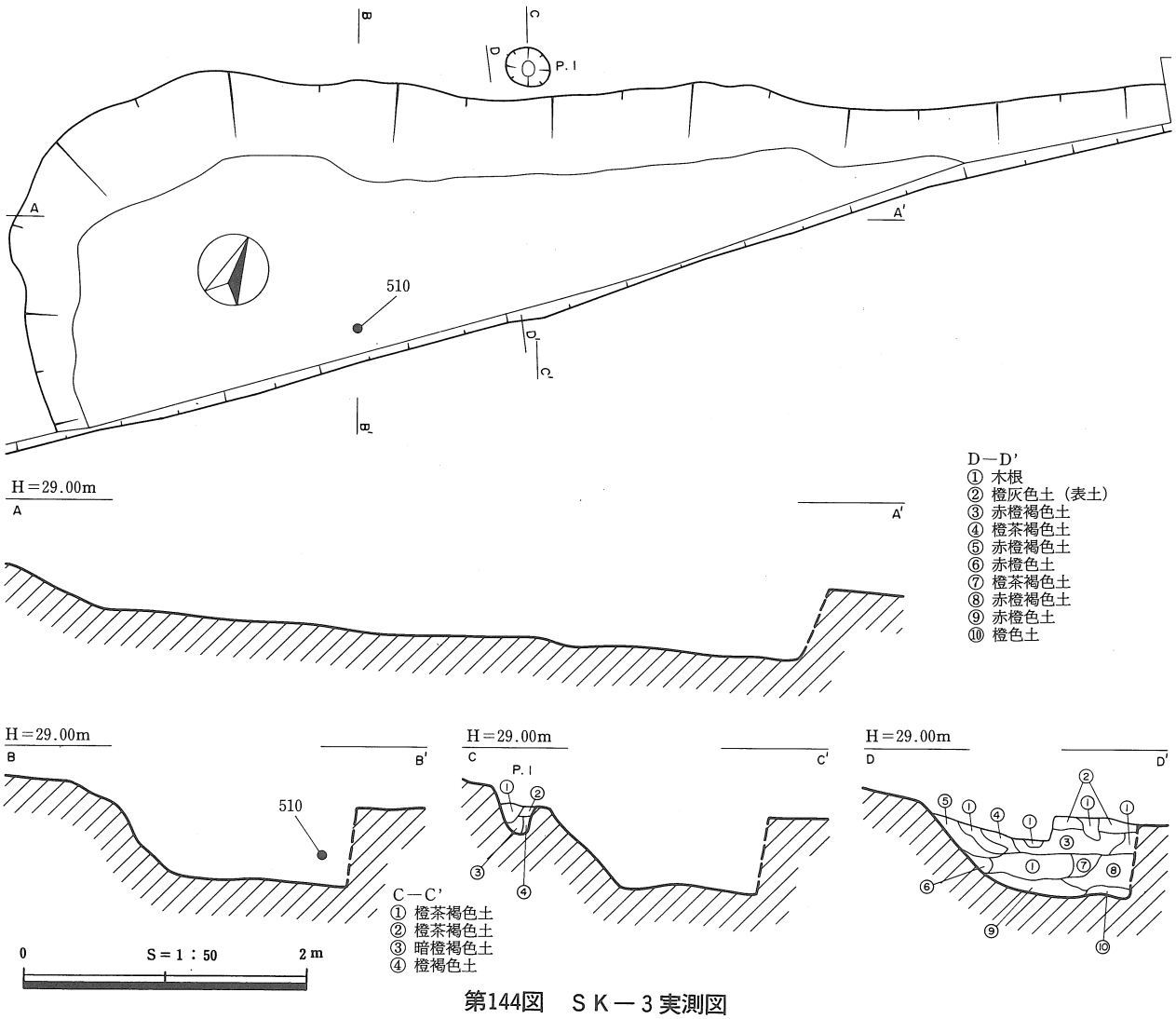
第141図　ＳＫ－１出土遺物実測図



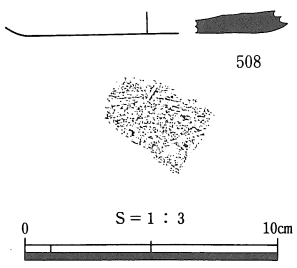
第142図　ＳＫ－２実測図



第143図　ＳＫ－２出土遺物実測図



第144図　ＳＫ－３実測図



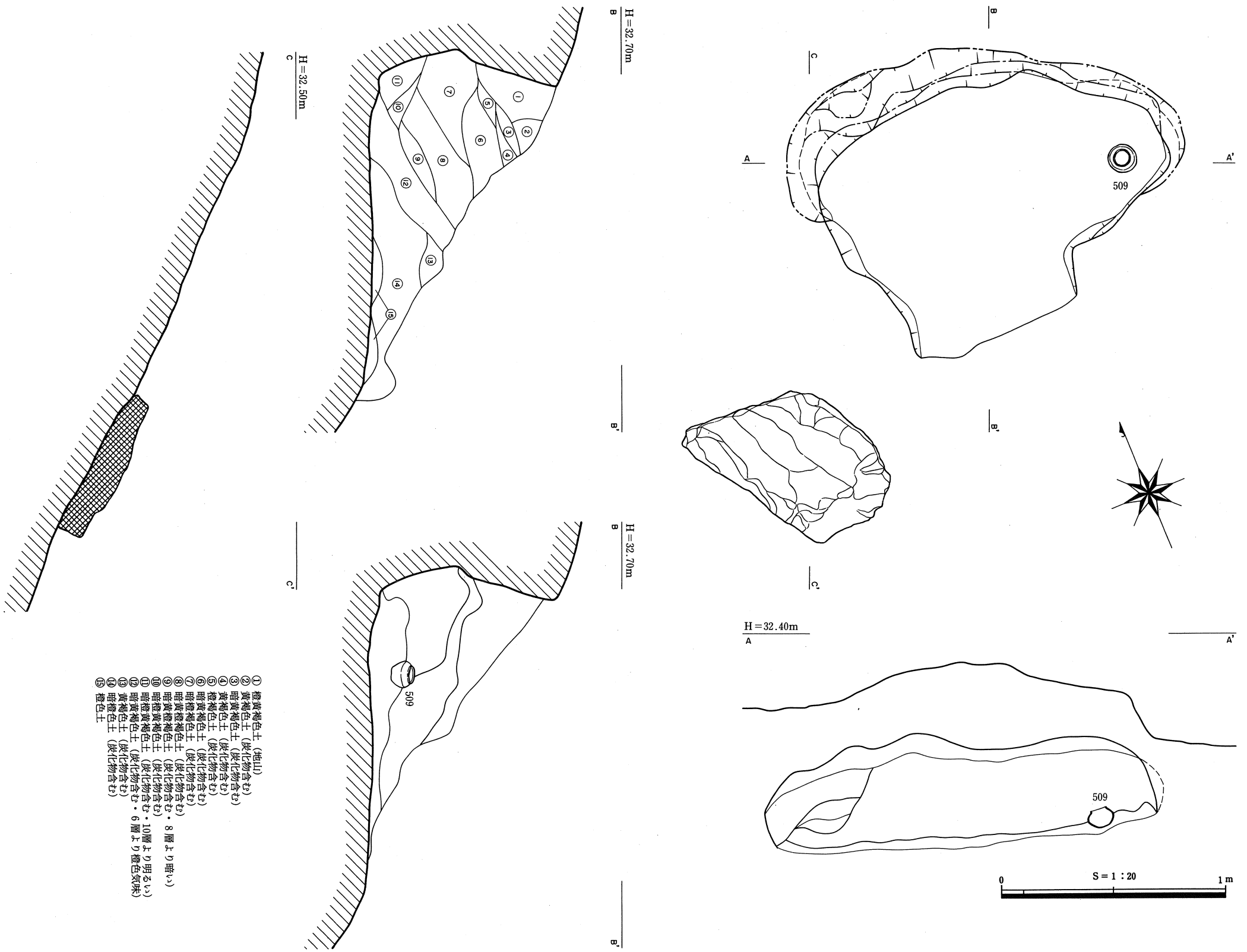
第145図　ＳＫ－３出土遺物

った。時期の古いものから新しいものへという変遷に従って配列したため、エリアの配列順が前後した。

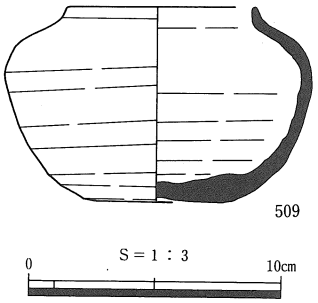
エリア②においては、ＳＳ－２がＩ期に始まり、II～III期にＳＳ－４、III～IV期にＳＳ－５、８が相当する。切り合い関係から、ＳＳ－５がＳＳ－８より先行するものと判断された。ＳＳ－18については、時期的に位置付けられなかった。エリア①においては、ＳＩ－９がII期に相当し、ＳＩ－８、11、ＳＳ－３はII～III期にあたる。ＳＩ－９、ＳＳ－３とＳＩ－８との先後関係はつかめなかったが、切り合いからＳＩ－11は、ＳＩ－８、９より後出であることが判断された。エリア③においては、ＳＩ－７がII期相当、ＳＩ－10、12がIII期に併行して存在する。２期おいて、ＳＳ－14は、VI～VII期に相当する。ＳＩ－13は時期不明である。エリア④においては、ＳＳ－６、７がII～IV期に併行して存在する。居住遺構ではないが、陰田55号横穴の施工は、V期に比定される。その後、VII期にＳＳ－17、13が併行して存在するが、出土土器相はＳＳ－13のほうがやや新しく位置付けられるものと判断した。ＳＳ－19は、時期不明である。エリア⑥においては、ＳＳ－９のａの建物がII期に始まり、ｂがIII期、ｃがIV期と変遷する。ｃと併行して、ＳＳ－12、10、11が存在した。切り合いにより、ＳＳ－12はＳＳ－10に先行すると判断されたが、ＳＳ－11については、他との先後関係を明らかにできなかった。エリア⑦については、ＳＳ－21がＳＳ－20に先行することは明らかだが、どの時期まで遡るかは、不明である。ＳＳ－22は

エリア	②	①	③	④	⑥	⑦	⑤
地区	A	A	A	A	A	B	A
	S S S S S S S S S S | | | | | 2 4 5 8 18	S S S S I I I S | | | | 9 8 11 3	S S S S S I I I S I | | | | | 7 10 12 14 13	S S 55 S S S S S 号 S S S | | 横 | | | 6 7 穴 17 13 19	S S S S S S S S S S S S | | | | | | 9 9 9 12 10 11 a b c	S S S S S S | | | 21 20 22	S S S S S S S S S S S S | | | | | | 15 16 16 16 16 16 a b c d e
Ⅰ（4式）	①						
Ⅱ（5式）	②	○① ② ○	①	①①	①		
Ⅲ（6式）	③④		②②		②		
Ⅳ（7式）					③③④○		
Ⅴ（8式）				②		①	
Ⅵ（9式）			③			②○	
Ⅶ（10式）				③ ④			○①①②○③
不明	○		○	○			

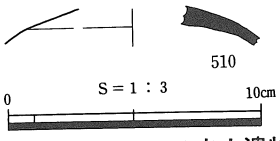
各エリアの変遷



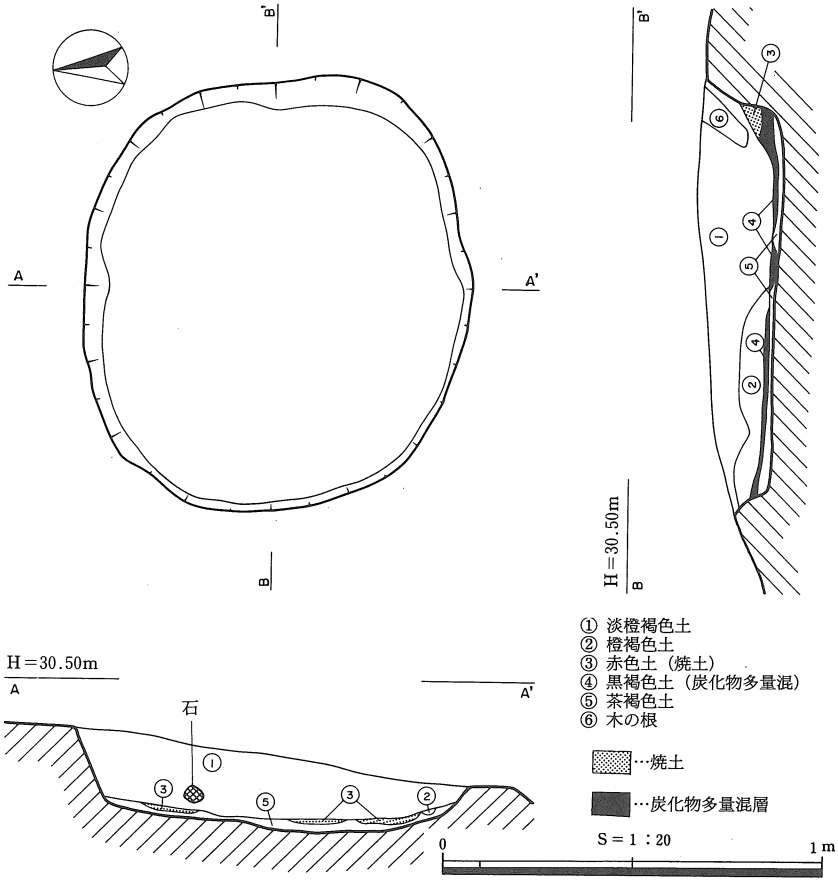
第146図　ＳＫ－４実測図



第147図　ＳＫ－４出土遺物実測図



第149図　ＳＫ－５出土遺物実測図



第148図　ＳＫ－５実測図

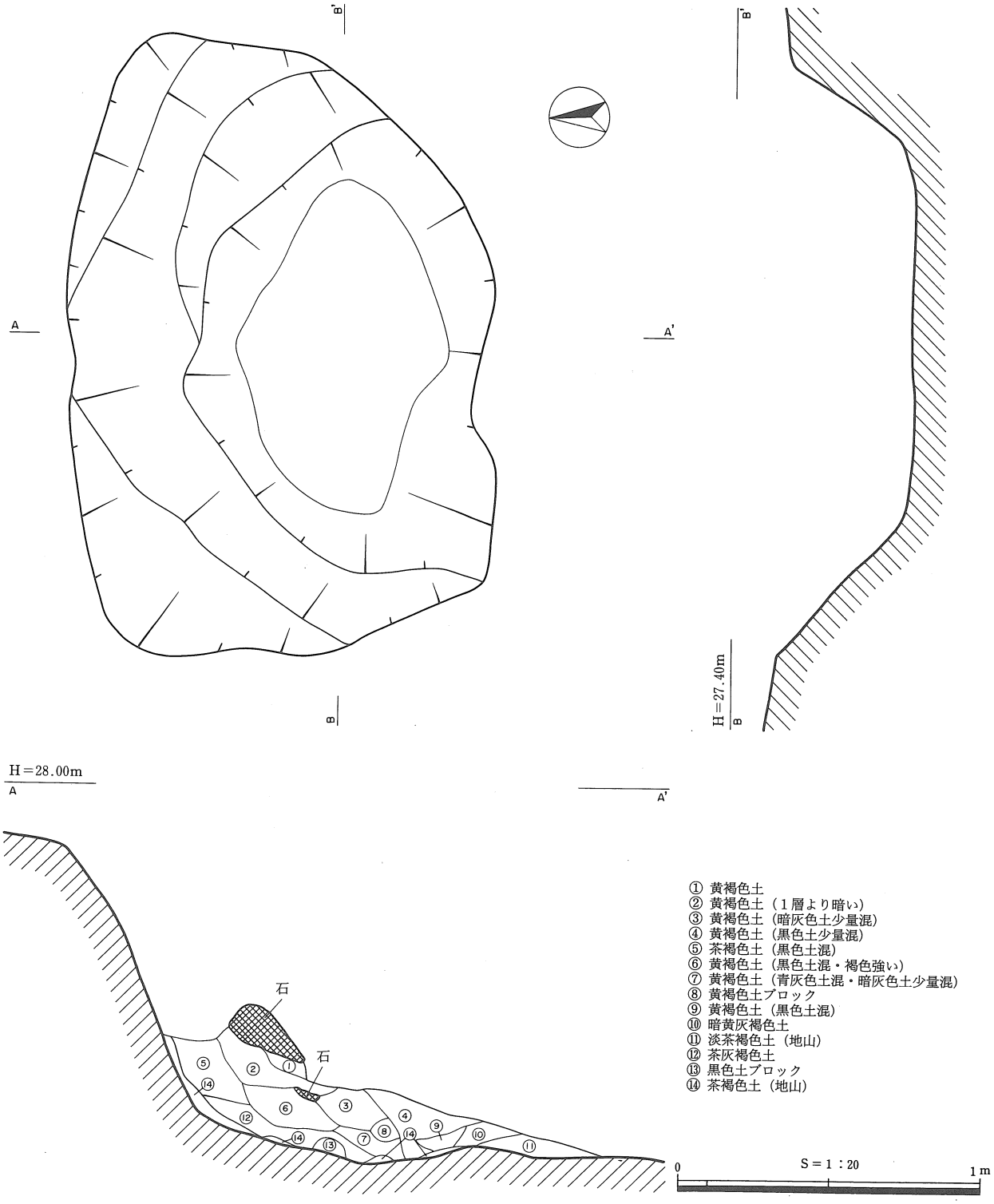
ＳＳ－20に併行するが、先後関係は判断できなかった。エリア⑤においては、すべてⅦ期の所作と判断したが、ＳＳ－15と16との先後関係は不明である。

以上の変遷を俯瞰してみるに、遺構群はＶ期を境に、２群に分けられるようである。すなわち、エリア②（ＳＳ－２、４、５、８、）、①（ＳＩ－９、８、11、ＳＳ－３）、③（ＳＩ－７、10、12）、④（ＳＳ－６、７）、⑥（ＳＳ－９、12、10、11）の１群と、エリア③（ＳＳ－14）、④（ＳＳ－17、13）、⑦（ＳＳ－21、20、22）、⑤（ＳＳ－15、16）の１群である。前者はⅠ～Ⅳ期（６世紀後葉～７世紀中葉）に、後者はⅥ、Ⅶ期（７世紀末～８世紀後半）に相当する。テラス状遺構自体の構造としては、基本的に変わるところはないが、後者の段階で、竪穴住居がみられなくなり、総柱の掘立柱建物が出現する。２群を区分するＶ期の段階においては、建物の構築が途切れ、横穴墓を構築しようと図っている。結果的に横穴は未完成に終わるが、この造墓行為は、集落形成の断絶を意味するものであろう。ところが、Ⅵ期以降に再び前代と同様な構造の建物を建造するのである。中途の時期の欠落は、両群を系譜的に繋ぎ難くするものであり、Ｖ期において、集落構造に何らかの変化が生じたことが推察される。この事象は、陰田横穴群の消長に重なる。陰田横穴群は、Ⅰ期に始まりＶ期に造墓を終える。陰田第６遺跡のⅠ～Ⅳ期の集団と陰田横穴群との間に、関連性を看取するものである。

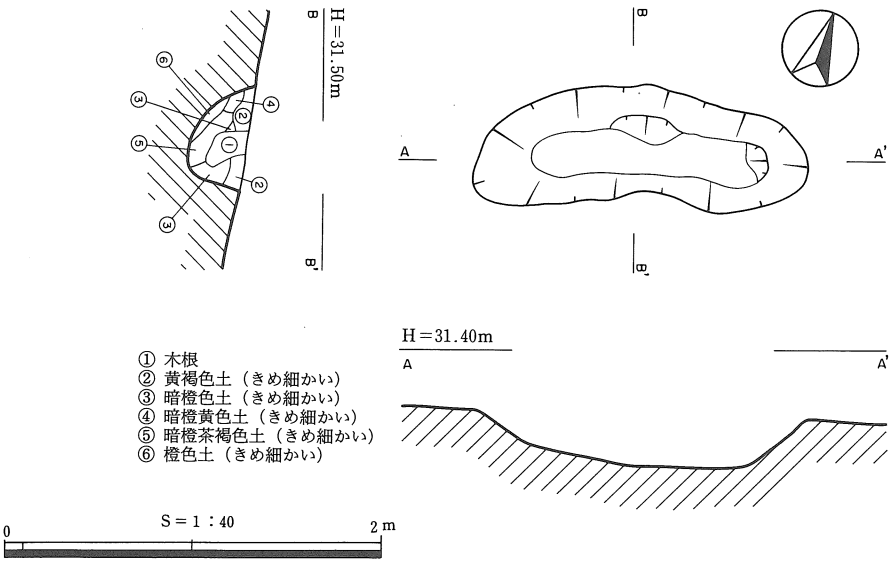
・掘立柱建物跡（ＳＢ－１、２、10）

ここでは、テラス状遺構に伴うものではない単独の掘立柱建物跡を扱う。Ｂ区東方のＳＳ－20・ＳＢ－３の北側にあたる丘陵尾根頂部にＳＢ－１、２を、Ａ区西方のＳＳ－19の南側に隣接してＳＢ－10を検出した。なおＳＢ－３～９は、ＳＳ－20に伴うものである。

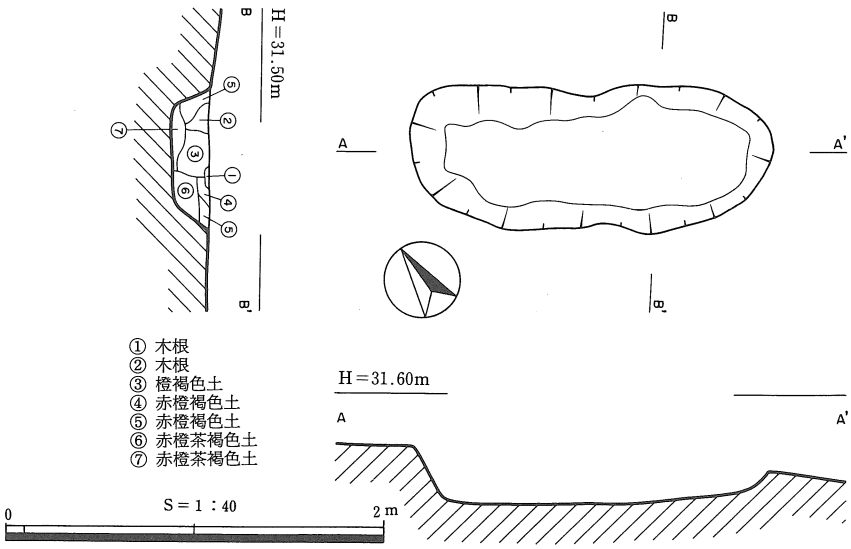
ＳＢ－１（第135、136図・写真図版３、28）は、桁行２間・梁行２間の総柱の建物である。桁行長3.6～3.9m、梁行長3.2mを測る。柱間は80cm～1.3mで、ピットの径は35～70cmと一律ではない。Ｐ．１とＰ．３でそれぞれ板状の礫を底面近くで検出した。根石となるものか。梁行方向の軸はＮ－42°－Ｗをとる。遺物は、Ｐ．９



第150図　ＳＫ－６実測図



第151図　ＳＫ－７実測図



第152図　ＳＫ－８実測図

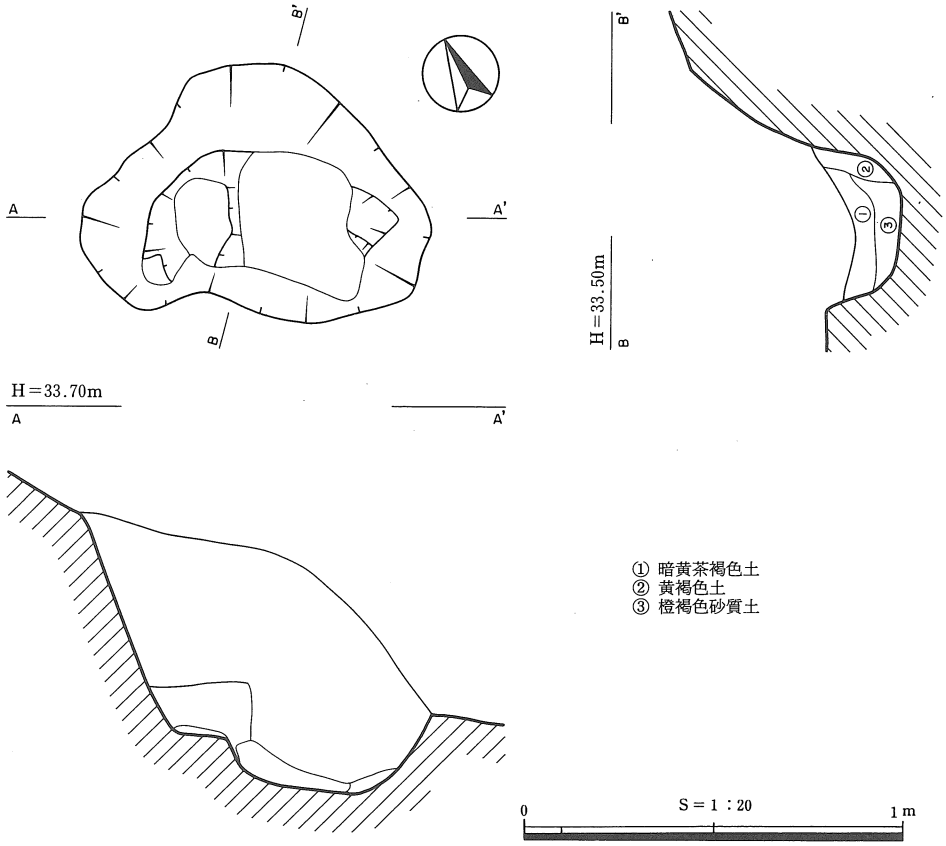
埋土中から須恵器の甕の胴部片が出土した。他に夾雑物がなく、古墳時代後期以降の時期としておきたい。

ＳＢ－２（第137図・写真図版３）は、桁行１間・梁行１間の建物である。桁行長2.5～2.7m、梁行長2.5mを測る。柱間は1.3～1.5mであるが、ピットの径は40～80cmと一律ではない。梁行方向の軸はＮ－28°－Ｗをとる。遺物は、出土していない。位置関係からみて、ＳＢ－１と並存したものと考え、古墳時代後期以降の時期としておきたい。

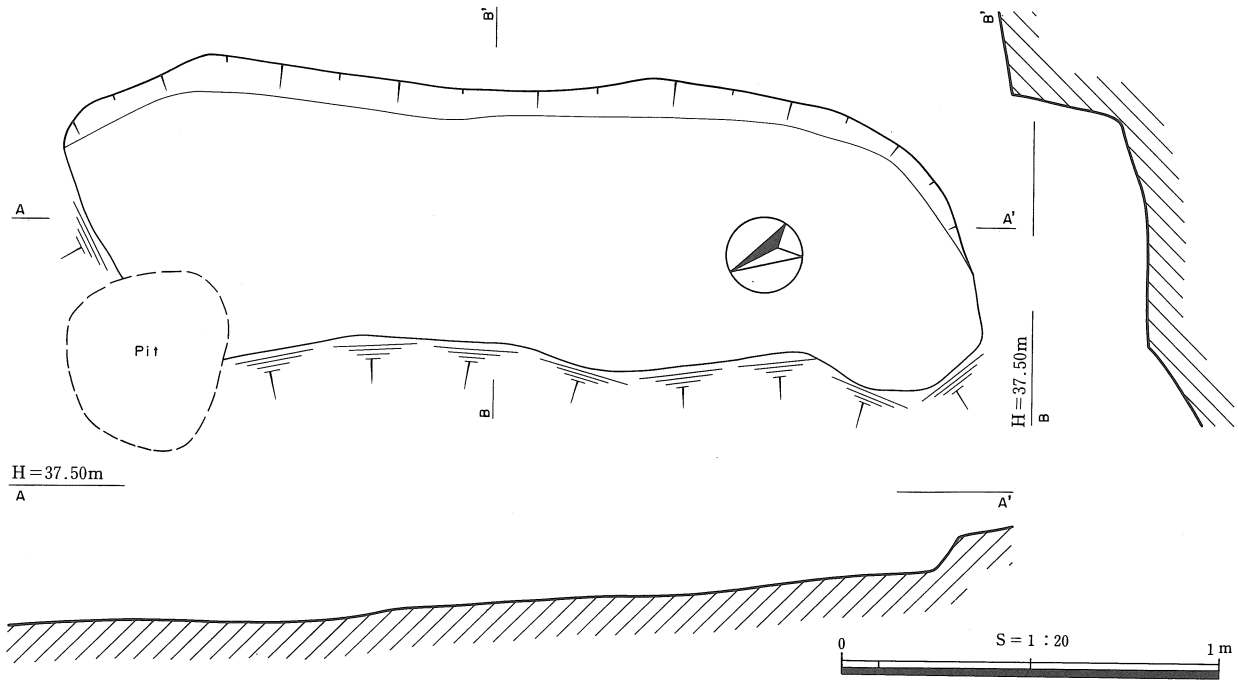
ＳＢ－10（第114、115図・写真図版22）は、径60～80cm、深さ30cmのピット２基による建物と判断した。東西長4.6mで、柱間は２mである。東西の軸はＮ－66°－Ｗをとる。遺物は、出土していない。テラス状遺構ＳＳ－19との関係は不明であるが、周囲の状況から、古墳時代後期以降の時期としておきたい。

・溝状遺構（ＳＤ－３、４）

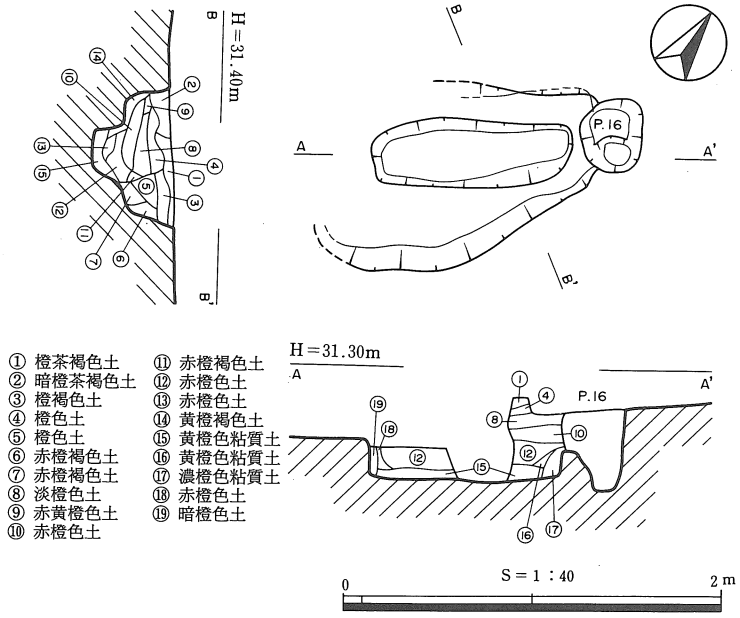
溝状遺構ＳＤ－３、４は、Ａ区南東部のピット群２の西側に、ほぼ平行するように検出した。両者の離隔は４mである。テラス状遺構であった可能性が高く、古墳時代後期～奈良時代の遺構としておく。



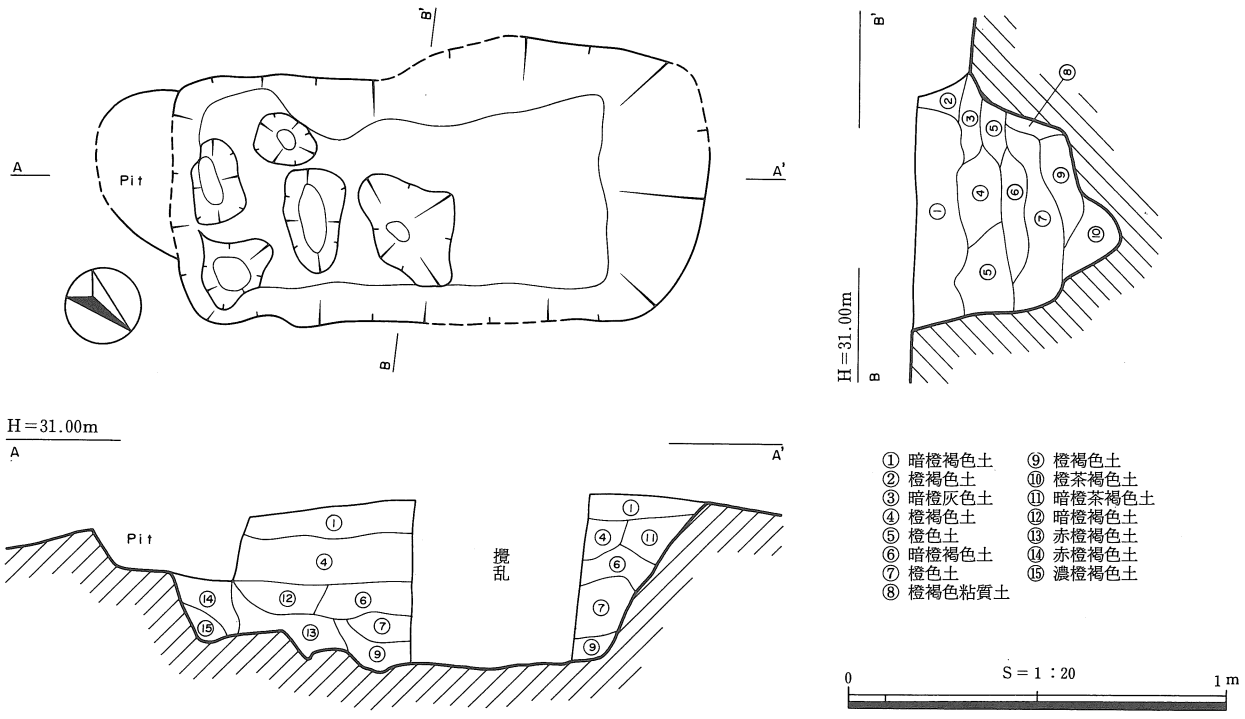
第153図　ＳＫ－９実測図



第154図　ＳＫ－10実測図



第155図　ＳＫ－11実測図

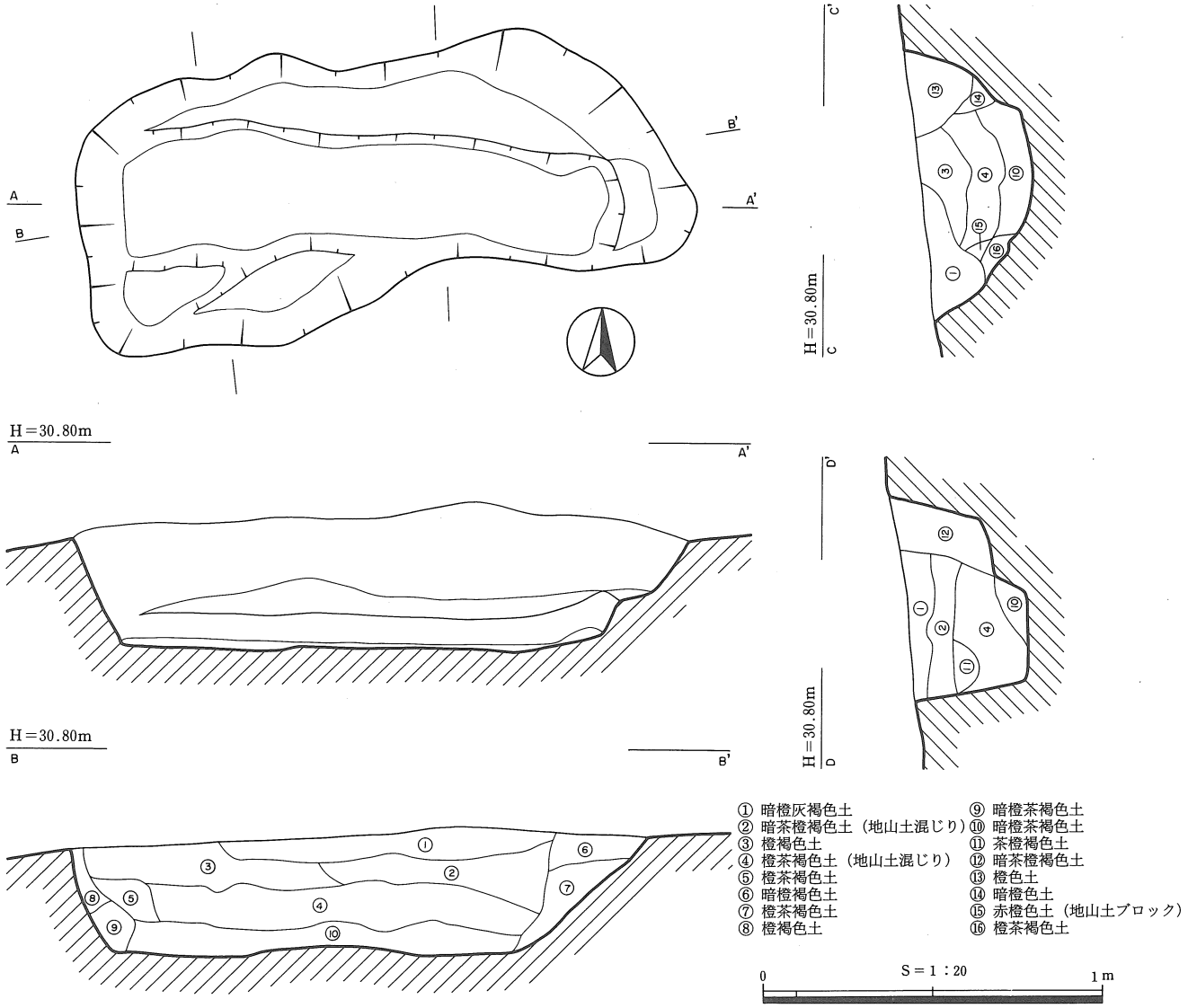


第156図　ＳＫ－12実測図

ＳＤ－３（第138、139図）は、やや弧状を呈する。検出面で長さ７ｍ、幅30～50cm、深さ15cmを測る。土層断面では、後背に立ち上がりのラインが観察でき、25、26層を床面とするテラス状遺構であった可能性がある。遺物は出土していない。

ＳＤ－４（第138、139図）は、南側を欠くが、やや弧状を呈する。長さ５ｍにわたって検出した。幅50～80cm、深さ30cmを測る。土層断面では、後背に立ち上がりのラインが観察でき、テラス状遺構であった可能性がある。その場合、ＳＤ－３より時期的に新しいものとなる。遺物は出土していない。

・**土坑**（ＳＫ－１～６）



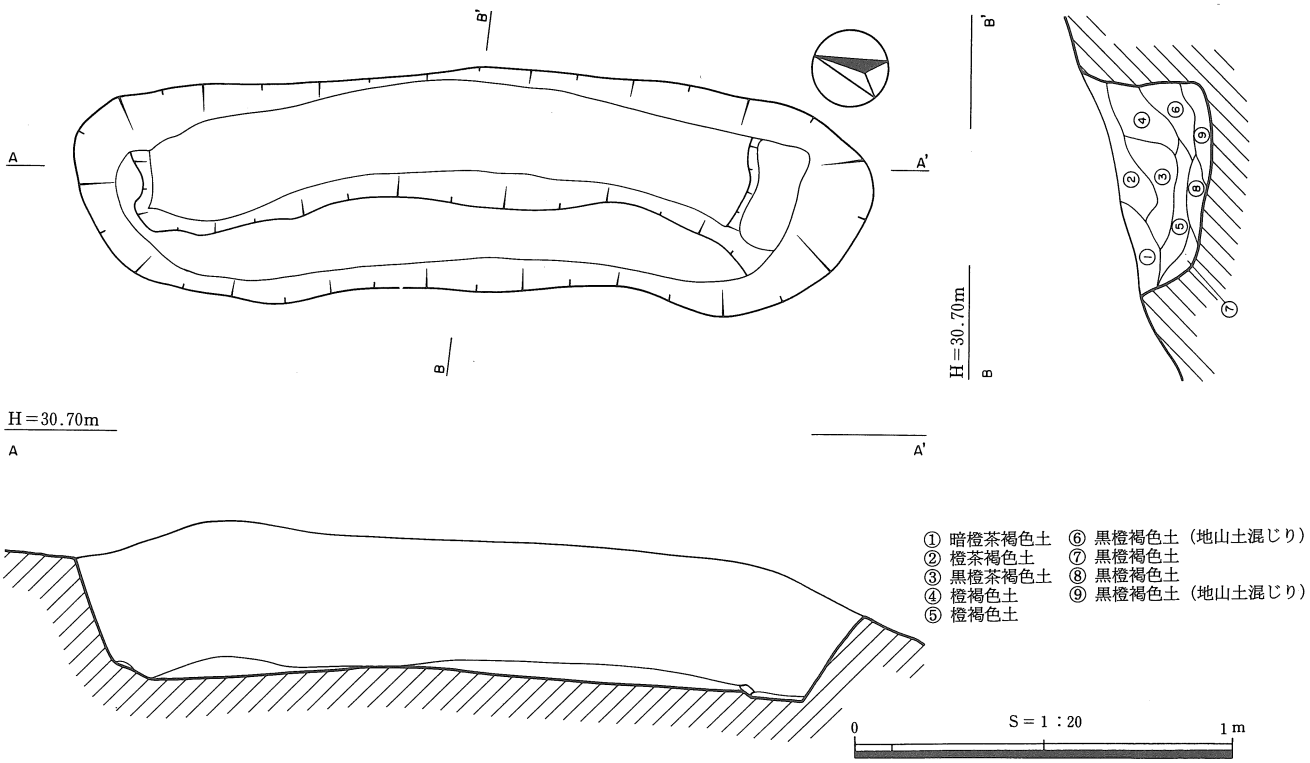
第157図　ＳＫ－13実測図

ＳＫ－１～３は、Ｂ区、ＳＫ－４～６はＡ区で検出した。当該期の遺物の出土をもって判断しており、遺物を伴わないものについては、他に時期を知る材料がなければ、時期不明として扱った。

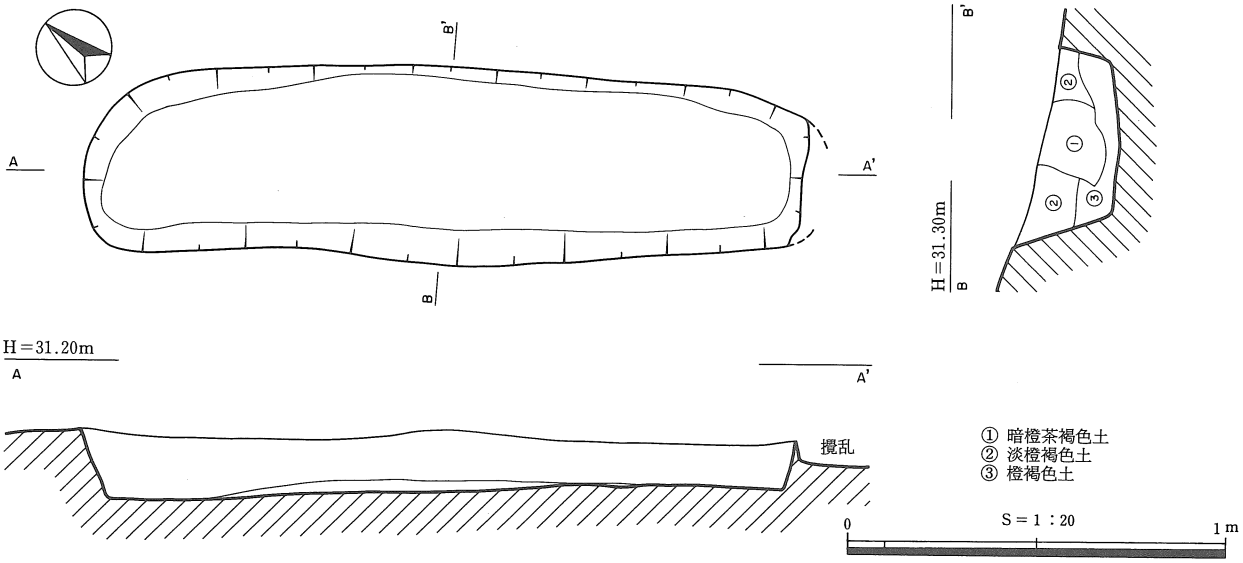
ＳＫ－１（第140、141図・写真図版28、80）は、東西長1.15m、南北長50cm、深さ20cmを測る。隅丸長方形を呈する。東側は流出し、肩が一部遺存していない。底面レベルは東西で15cm差があり、東側が低い。埋土中から、須恵器の坏蓋５、坏身５、高坏の脚部１、甕の底部１が出土した。蓋坏は完形になるものが多い。土坑の東側に集中しており、蓋坏は斜傾した状態で折り重なるように出土した。底面直上から出土するものはない。495～499は坏蓋、500～504は坏身である。505は高坏の脚部、506は甕の底部である。陰田編年の６式（７世紀前葉）相当と思われる。墓前祭祀等、陰田40号墳に関係する遺構である可能性も考えられる（Ｐ43参照）。

ＳＫ－２（第142、143図・写真図版28）は、検出面で東西長2.05m、南北長60cm、深さ25cmを測る。南側が流出しており、原形をとどめていないが、長楕円形で検出した。埋土中から、須恵器の壺と思われる破片１（507）が出土した。時期の詳細は不明だが、他に夾雑物がなく、古墳時代後期以降の時期としておく。土壙墓である可能性もある。

ＳＫ－３（第144、145図・写真図版28）は、Ｂ区南側の調査区界にかかっており、全容は不明であるが、検出した形状から推定すると、方形に展開しそうである。検出面で東西長8.2m、南北長2.5m、深さ60cmを測る。北



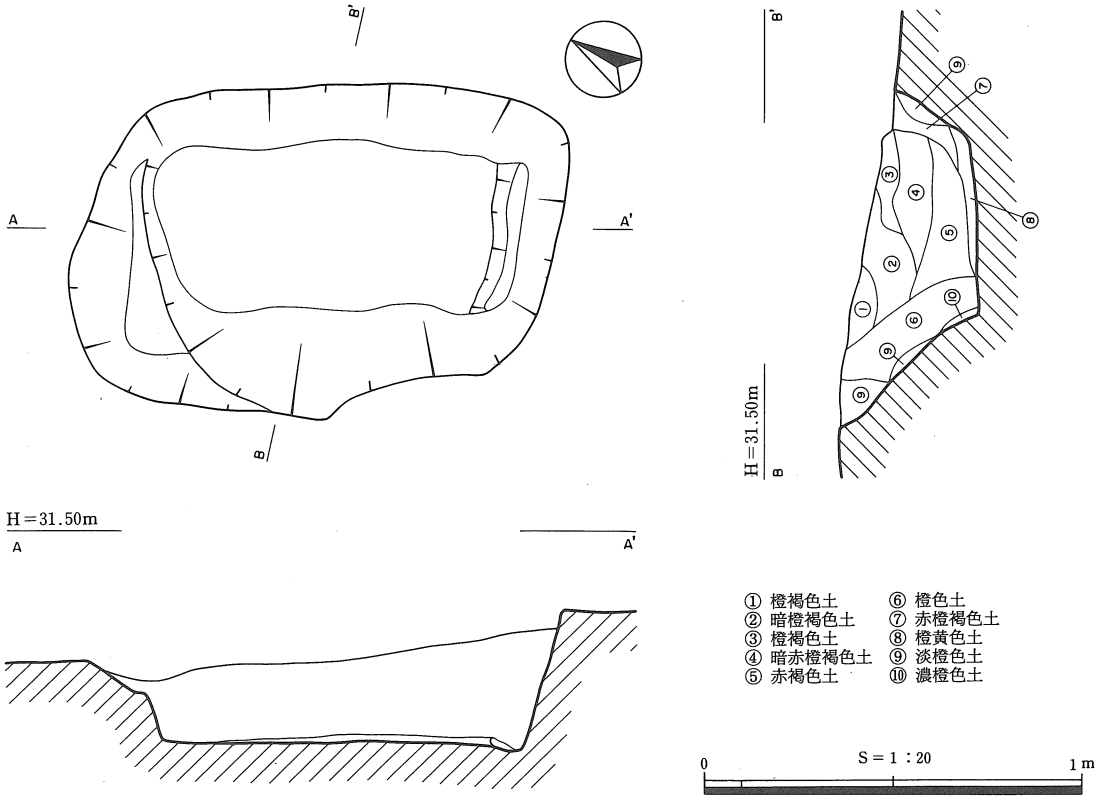
第158図　ＳＫ－14実測図



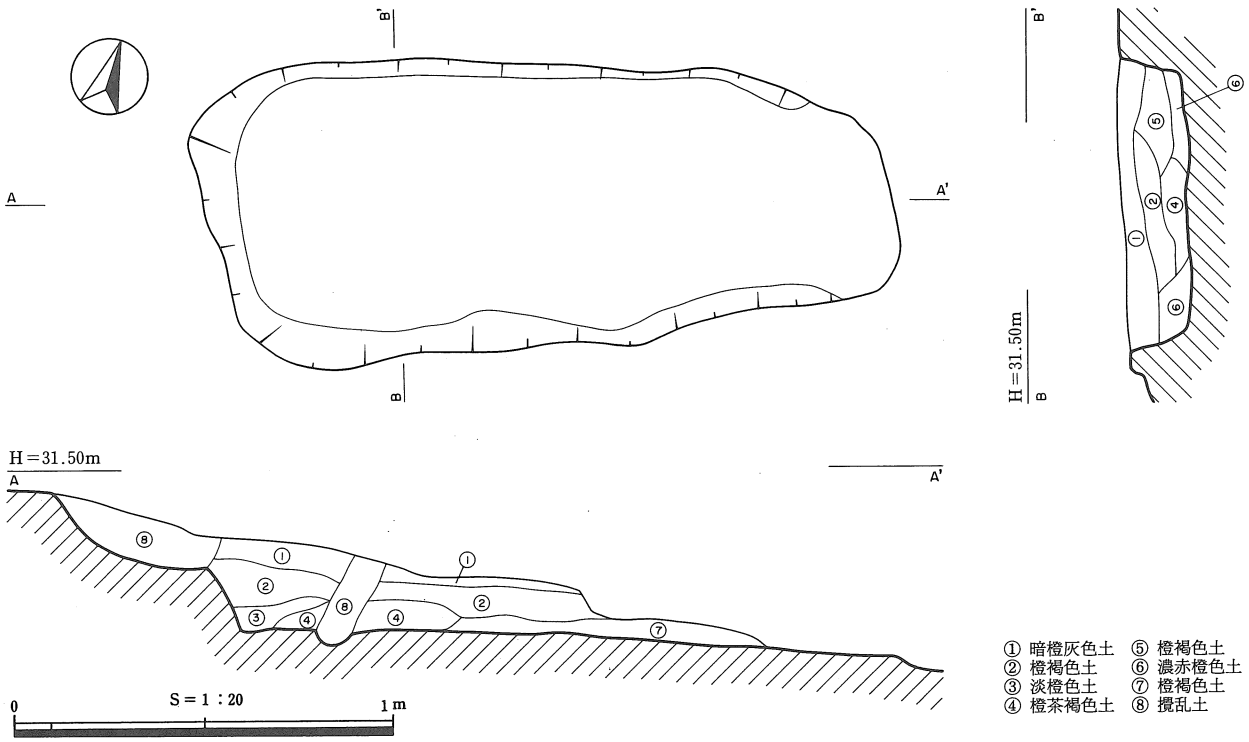
第159図　ＳＫ－15実測図

側にピットを１基（Ｐ．１）検出したが、当土坑との関わりは不明である。底面は平坦で、竪穴住居跡的であるが、壁面の立ち上がり角度は鈍角で、底面に柱穴が確認できなかった。テラス状遺構の可能性もある。埋土中から、底面から浮いた状態で糸切り底の須恵器の坏１（508）が出土した。陰田編年10式（８世紀後半）に相当する。斜面に則して立地しており、横穴の後背周溝の可能性も考えられるが、遺物は、横穴を築造しなくなった時期を示している。

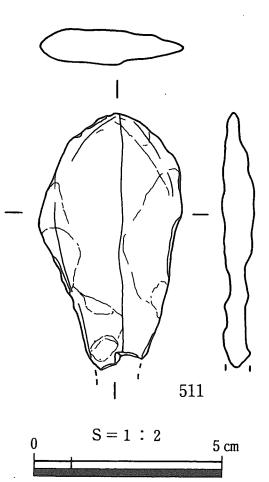
ＳＫ－４（第146、147図・写真図版29、80）は、閉塞石的な板状礫が近辺で検出されており、小横穴の可能性も考えられた。しかし、陰田横穴群における小横穴の従来の在り方が、横穴墓に付随するか、小横穴群を構成するかのいずれかであり、単独で存在する当遺構は例外的なものとなる。また、南側が流出している可能性が高



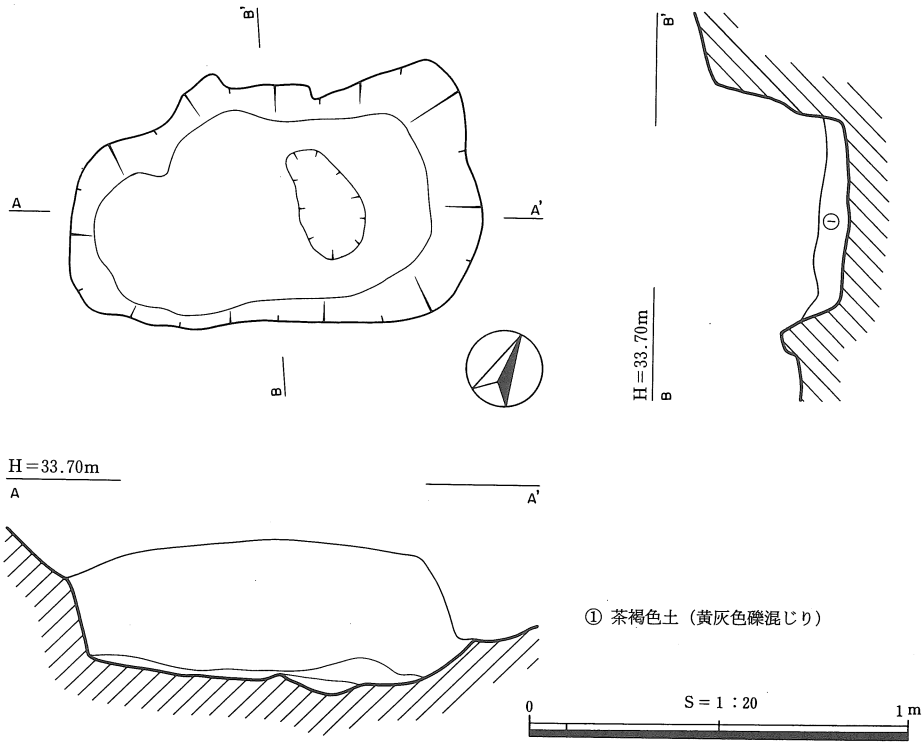
第160図　ＳＫ－16実測図



第161図　ＳＫ－17実測図



第162図　ＳＫ－17
出土遺物実測図



第163図　ＳＫ－18実測図

く、土層断面でも天井部の崩落を確認できず、横坑であることを検証できなかった。よって、土坑として扱うこととした。本来の平面形は不明だが、断面形は袋状を呈する。東西1.8m、南北1.6mの範囲で検出した。深さは85cmを測る。南側底面は羨道的だが、流出の結果と考える。南西部50cmのところに、板状の礫を検出した。長さ80cm、幅55cm、厚さ15cmを測る。当遺構に伴うものか否かは検証できない。東側底面上で須恵器の短頸壺１（５０９）を検出した。

ＳＫ－５（第148、149図・写真図版30）は、ＳＳ－９埋没後の所作である。南北１m、東西1.15m、深さ25cmを測る。円形を呈する。１、２層の橙褐色系の土層下に焼土と炭化物が斑状に広がる面を検出した。壁面もやや受熱して変成しており、火焚き場と考えられる。１層中より須恵器の坏蓋片１（510）が出土した。

ＳＫ－６（第150図・写真図版30）は、陰田55号横穴の北西側に隣接する。東西２m、南北1.3m、深さ１mを測り、楕円形を呈する。南側の肩が流出している。埋土中から須恵器片が出土している。

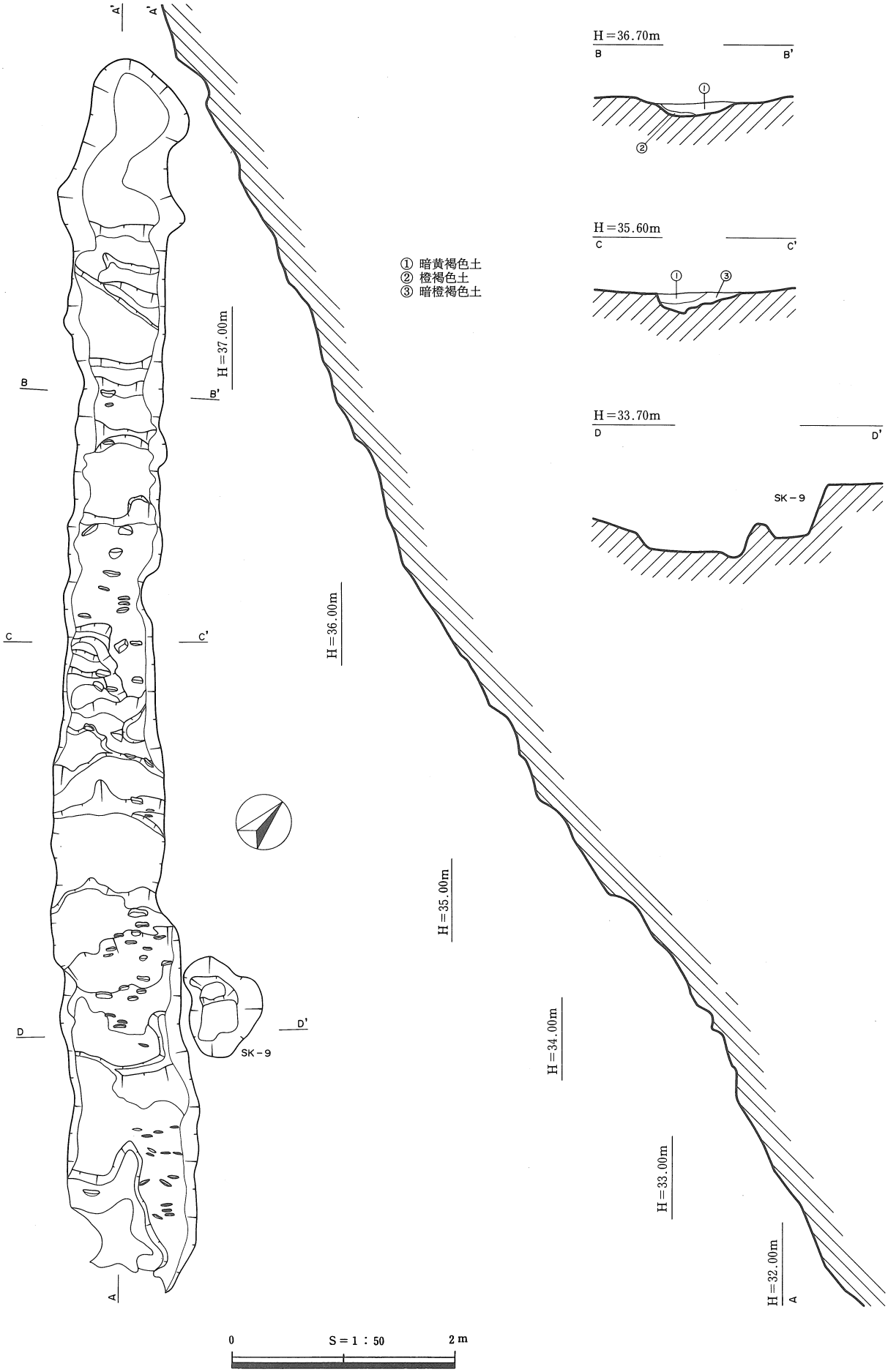
6　時期不明の遺構（ＳＫ－７～18、ＳＣ－１～８、ピット群１～３）

遺物の出土がみられないもの、あるいは時期を特定できないものを扱う。土坑４基（ＳＫ－７～10）、土壙墓８基（ＳＫ－11～18）、道状遺構８条（ＳＣ－１～８）、ピット群３ヶ所（ピット群１～３）である。土壙墓ＳＫ－11～14は、陰田40号墳に関係するものである可能性がある（Ｐ43参照）。

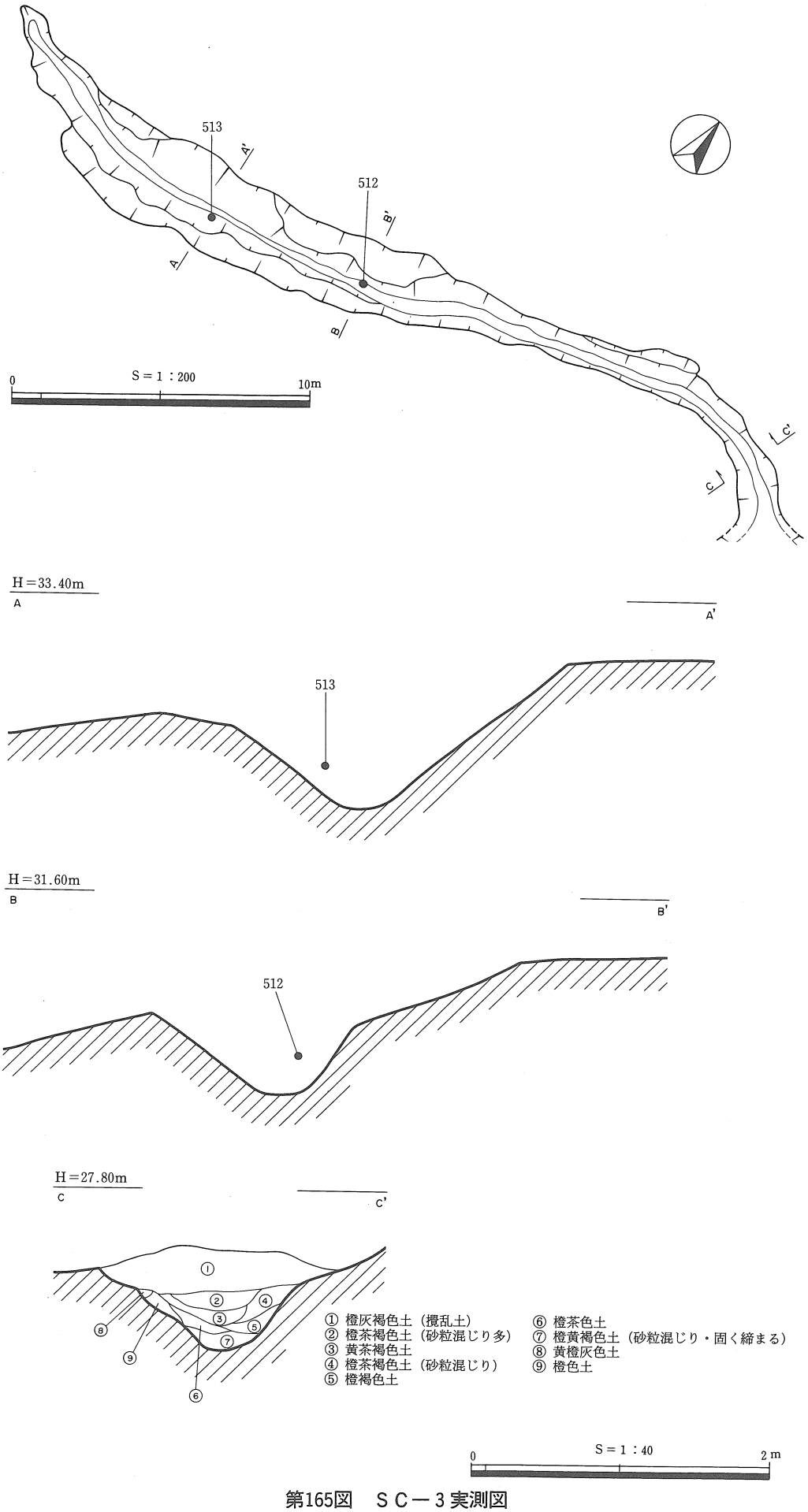
・土坑（ＳＫ－７～10）

すべてＢ区で検出した。ＳＫ－７（第151図・写真図版31）は、東西1.75m、南北60cm、深さ35cmを測る。平面は長楕円形、断面は「Ｕ」字形を呈する。ＳＫ－８（第152図・写真図版31）は、東西1.9m、南北80cm、深さ30cmを測る。平面は長楕円形、断面は逆台形を呈する。いずれも遺物を検出していないが、土壙墓である可能性もある。

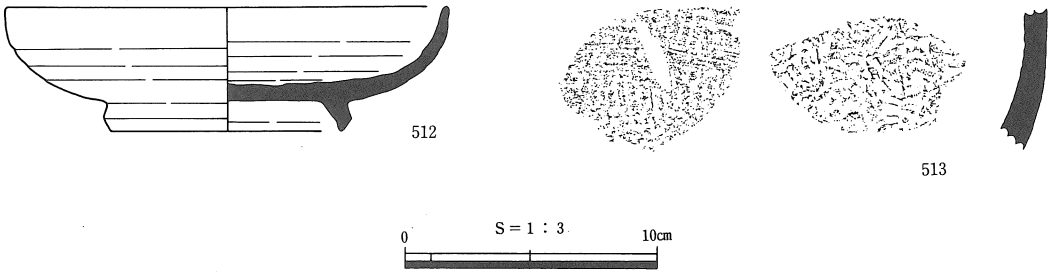
ＳＫ－９（第153図・写真図版31）は、道状遺構ＳＣ－２の南東側に接しており、急峻な斜面部上に掘り込まれている。東西90cm、南北65cm、深さ55cmを測る。平面は不整形だが、小判形を指向しているように思われる。断面は概ね「Ｕ」字形を呈する。岩脈部に掘り込まれており、底面はいびつである。



第164図　ＳＣ－２実測図



第165図　ＳＣ－３実測図



第166図　ＳＣ－３出土遺物実測図

ＳＫ－10（第154図・写真図版31）は、陰田60号墳の墳裾部に位置する。南北2.4m、東西70cm、深さ35cmを測る。西側は流出しており、原形をとどめていない。平面を長楕円形で検出した。断面形は逆台形か。

・土壙墓（ＳＫ－11～18）

すべてＢ区で検出した。ＳＫ－11（第155図・写真図版32）は、２段掘りの土壙墓と思われるが、１段目の西側は把握できなかった。１段目は、長さ1.5m、幅１ｍの範囲で検出した。深さは25cmを測る。不整な楕円形を呈する。東側の肩部をピットが切っている。２段目は、東西1.05m、南北40cm、深さ20cmを測る。平面は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－52°－Ｅにとる。

ＳＫ－12（第156図・写真図版32）は、長軸1.4m、短軸65cm、深さ45cmを測る。平面は長方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－40°－Ｗにとる。果樹による攪乱を被っており、南東側小口はピットに切られている。底面に凹凸がみられるが、棺材の痕跡は判断できなかった。

ＳＫ－13（第157図・写真図版32）は、変則的な２段掘りの土壙墓である。北側と東側、南西側に段を設けている。検出面で、長さ1.85m、幅70～80cmを測る。１段目までの深さは30cmを測る。平面は不整形に検出した。２段目は、長軸1.5m、短軸30cm、深さ10cmを測る。平面は長方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－87°－Ｅにとる。

ＳＫ－14（第158図・写真図版33）は、変則的な２段掘りの土壙墓である。北側と西側にのみ段を設けているが、２段目との段差は２cm程度である。検出面で、長さ2.1m、幅60cmを測る。１段目までの深さは30cmを測る。弧状気味の長楕円形を呈する。２段目は、長軸1.75m、短軸30cmを測る。平面は弧状気味の長楕円形を呈する。主軸方向は、Ｎ－19°－Ｗにとる。

ＳＫ－15（第159図）は、長軸1.9m、短軸55cm、深さ20cmを測る。平面は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－39°－Ｗにとる。南東側小口の肩部は攪乱されている。

ＳＫ－16（第160図・写真図版33）は、長軸1.25m、短軸90cm、深さ35cmを測る。平面は隅丸方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－26°－Ｗにとる。南側壁裾部に小口板の痕跡が認められる。

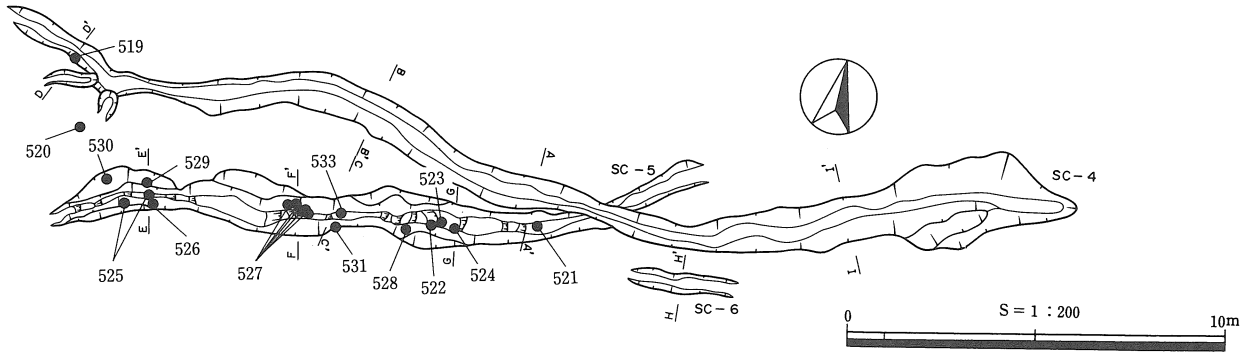
ＳＫ－17（第161、162図・写真図版33）は、長軸1.8m、短軸80cm、深さ20cm以上を測る。西側肩部は攪乱されている。平面は隅丸長方形、断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－70°－Ｅにとる。511は鉄鏃である。攪乱部から出土しており、本来的な帰属は不明である。

ＳＫ－18（第163図・写真図版33）は、長軸1.1m、短軸65cm、深さ35cmを測る。岩脈に掘り込まれており、かつ上部を果樹に攪乱されているためいびつな平面形であるが、本来は方形を呈するものであろう。断面は逆台形を呈する。主軸方向は、Ｎ－54°－Ｅにとる。

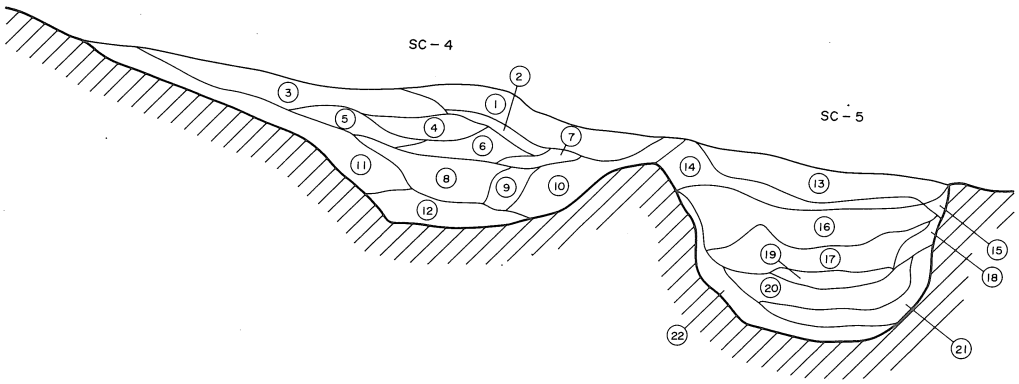
・道状遺構（ＳＣ－１～８）

ＳＣ－１～３はＢ区、ＳＣ－４～８はＡ区に所在する。ＳＣ－２以外の道状遺構は、基本的に地形に即した方向性を示している。遺物を伴うものもあるが、埋土中への流入であり、時期を確実に判断できるものはなかった。

ＳＣ－１（第８、116図・写真図版３）は、Ｂ区内を東西に走る。東はＳＳ－24付近から西はＳＳ－20・ＳＢ－９付近までの約50mの区間を検出した。Ｂ区の北側に横たわる尾根部の南側は、１～５ｍの段差をもって崖面をなしており、この裾部ラインにほぼ沿って、道は走る。標高29m前後の高度を保っている。崖面裾部の斜面を断面「Ｌ」字状に造成して、狭長な段を削り出している。路面は平坦面をなす。幅は最大で1.4mを測る。一

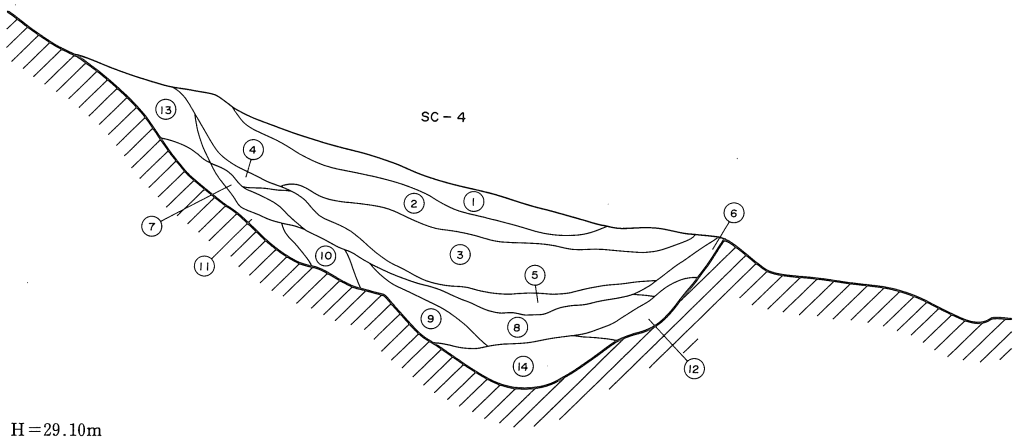


H＝30.80m
A　　A'



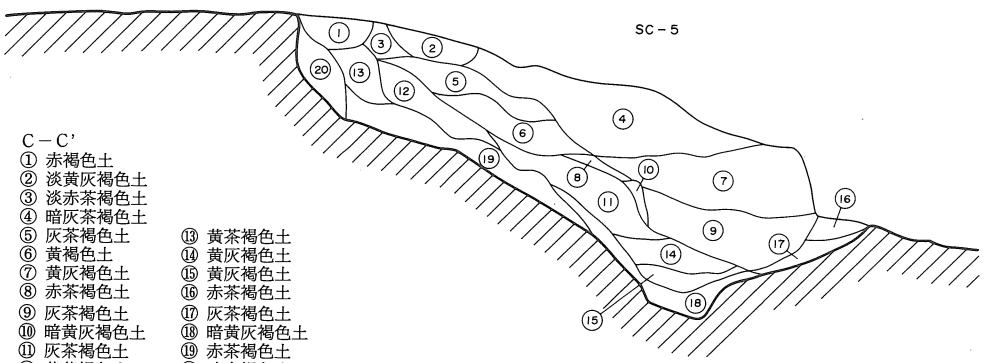
H＝29.90m
B　　B'

A－A'
① 暗黄褐色土
② 黄灰色土
③ 黄褐色土
④ 黄灰褐色土
⑤ 黄褐色土
⑥ 黄灰褐色土
⑦ 明黄灰色土
⑧ 橙黄色土（ややもろい）
⑨ 暗黄橙色土
⑩ 暗黄橙色土
⑪ 橙黄色土
⑫ 黄褐色砂質土
⑬ 暗灰褐色土
⑭ 暗灰褐色土
⑮ 橙褐色土
⑯ 灰褐色土
⑰ 灰褐色土（炭化物・焼土混じり）
⑱ 灰褐色土
⑲ 灰褐色粘質土（炭化物・焼土混じり）
⑳ 暗灰黄色土
㉑ 灰黄色土
㉒ 黄橙色粘質土



H＝29.10m
C　　C'

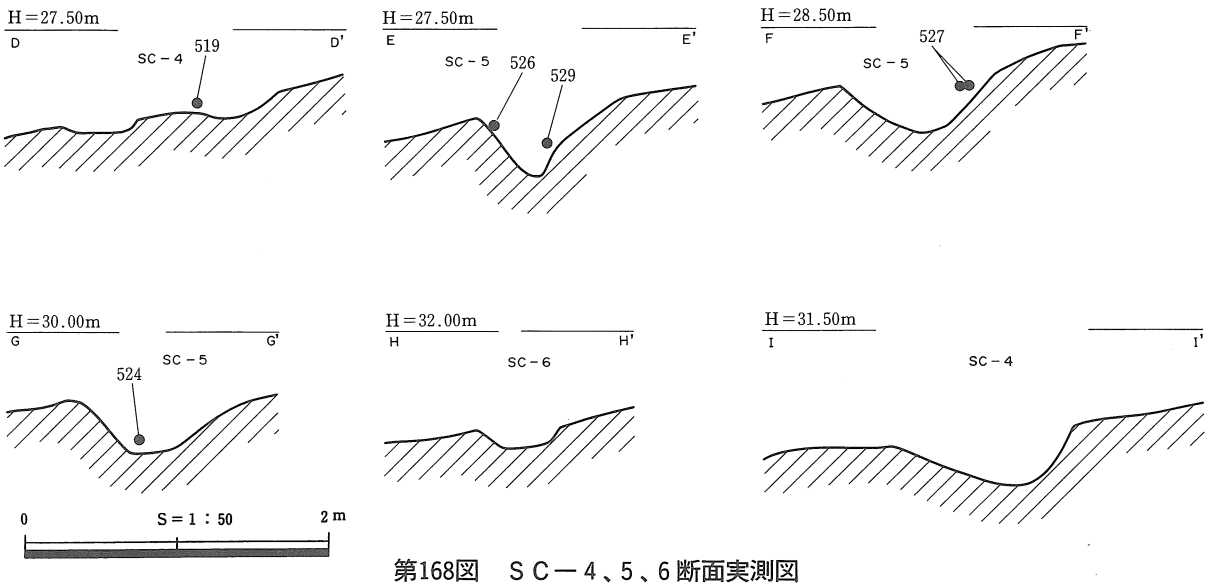
B－B'
① 黄橙色土
② 橙黄色土
③ 橙褐色土
④ 橙褐色砂質土
⑤ 橙黄褐色砂質土
⑥ 橙褐色土
⑦ 橙色土
⑧ 橙黄色砂質土
⑨ 橙褐色砂質土
⑩ 橙褐色土
⑪ 橙色土
⑫ 橙褐色土
⑬ 橙黄褐色土
⑭ 橙黄色砂質土



C－C'
① 赤褐色土
② 淡黄灰褐色土
③ 淡赤茶褐色土
④ 暗灰茶褐色土
⑤ 灰茶褐色土
⑥ 黄褐色土
⑦ 黄灰褐色土
⑧ 赤茶褐色土
⑨ 灰茶褐色土
⑩ 暗黄灰褐色土
⑪ 灰茶褐色土
⑫ 黄茶褐色土
⑬ 黄茶褐色土
⑭ 黄灰褐色土
⑮ 黄灰褐色土
⑯ 赤茶褐色土
⑰ 灰茶褐色土
⑱ 暗黄灰褐色土
⑲ 赤茶褐色土
⑳ 暗赤褐色土

0　S＝1：20　1m

第167図　ＳＣ－４、５、６実測図



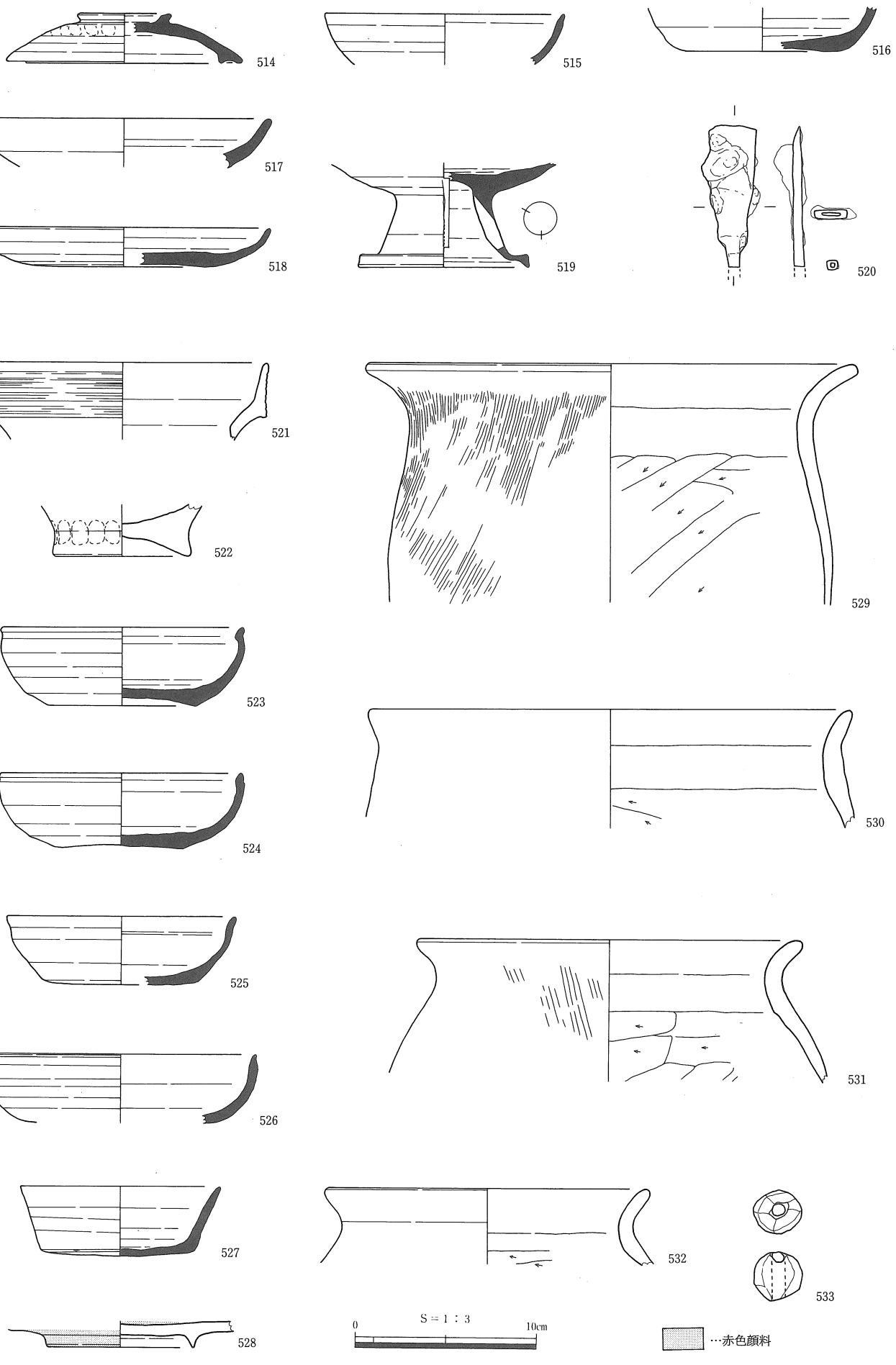
第168図　ＳＣ－４、５、６断面実測図

部後世の攪乱等で消失し、断続的になっているが、本来は西側でＳＣ－３と合流し、ＳＣ－４へ続いたものと思われる。途中、ＳＳ－20・ＳＢ－５とＳＢ－６の間の鞍部で南北両方向へ分岐し、それぞれ丘陵を下っていったものと思われる。古来地元では「天坂越え」と呼び、口陰田地区と奥陰田地区を結ぶ峠道であったと聞く。

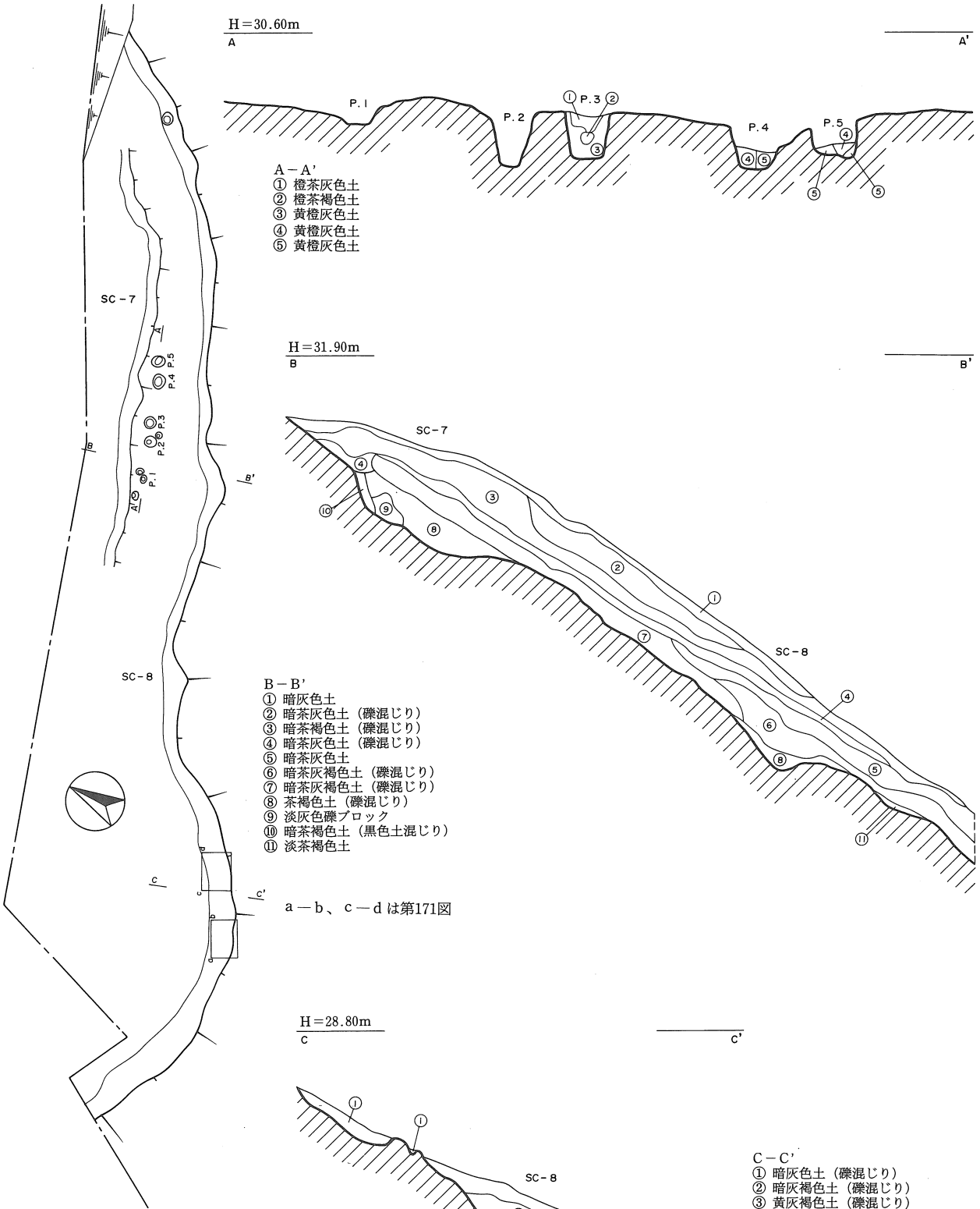
ＳＣ－２（第164図・写真図版34）は、陰田41号墳の墳裾南東部から、土坑ＳＫ－９をかすめて、南東方向に下る道である。全長11m、幅80cm～1.2mを測る。道の北西端の標高は37.5m、南東端は31.6mで、比高差は5.9m、傾斜角は約30°となる。断面形は凹形を呈し、深さは10～15cmを測る。かなり急峻な坂道であるが、５～20cm程度の段を設け階段状にし、昇降の難儀を緩和させている。道の高位側は総じて岩脈であり、路面はいびつに掘削されている。中位から下側の路面には、奥行き３cm程度、幅10cm程度の半月形状の掘削用工具痕が観察できた。下位側から上位側に向かって、鍬状の打ち降ろし具を打ち挽いている。道は、本来下方でＳＣ－１あるいはＳＣ－３と合流した可能性もあるが、麓部が削平されて遺存していない。陰田41号墳への墓道である可能性を提起しておきたい。

ＳＣ－３（第165、166図・写真図版34）は、陰田41号墳から陰田60号墳へ連なる丘陵鞍部から東方へ下る道である。全長33m、幅１～2.5mを測る。道の西端の標高は34.5m、東端は27mで、比高差は7.5m、傾斜角は概ね約25°となる。断面形は「Ｖ」字形を呈し、深さは60cm～１mを測る。全体に溝状を呈する。急峻な坂道であるが、道が適度に屈曲しており、また両脇の壁面の立ち上がりが急であるので足場として安定しており、これらのことが昇降の便宜を図る結果になっている。西端は流出して形状が判然としない。埋土中から須恵器の高台付き坏（512）、甕の胴部片（513）が出土した。512の底部は、糸切り後ナデ消している。８世紀前半に比定される（註15）。513の内面は、放射状タタキである。また、図化していないが、埋土上層から焼締陶器の甕胴部片が出土している。道は、ＳＣ－１やＳＣ－２と合流し、ＳＣ－４へ続いてＡ区に至るものと思われる。東は奥陰田地区へ下っていく。

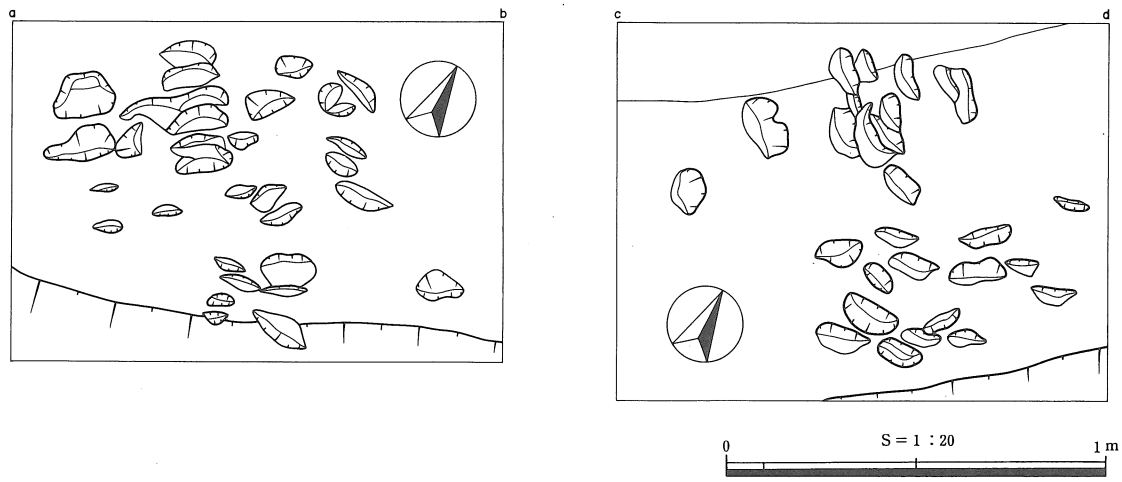
ＳＣ－４～６（第167～169図・写真図版３、35）は、陰田41号墳から陰田60号墳へ連なる丘陵鞍部から西方へ下る３条の道である。全体に溝状を呈する。ＳＣ－４は全長32m、幅50cm～２mを測る。道の東端の標高は35m、西端は27mで、比高差は８m、傾斜角は概ね約15°となる。断面形は「Ｕ」字形を呈し、深さは20～40cmを測る。西端は三又に分岐して、消失する。ＳＣ－５は全長17m、幅70cm～1.5mを測る。道の東端の標高は32m、西端は26mで、比高差は６m、傾斜角は概ね約20°となる。断面形は部位で異なり、深さは45cmを測る。ＳＣ－４とＳＣ－５は途中で１度交差し、ＳＣ－４がＳＣ－５を切っている。ＳＣ－６は全長３m、幅50cmを測る。道の東端の標高は32m、西端は30.5mで、比高差は1.5m、傾斜角は概ね約25°となる。断面形は逆台形を呈し、



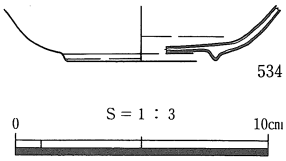
第169図　ＳＣ－４、５出土遺物実測図



第170図　ＳＣ－７、８実測図



第171図　ＳＣ－８工具痕実測図



第172図　ＳＣ－７出土遺物実測図

深さは15cmを測る。３条の道は、埋没等により、進路を幾度か変更していることを示している。基本的にＢ区のＳＣ－３に連なるもので、Ａ区とＢ区を結ぶものである。埋土中に弥生土器、土師器、須恵器等が混入していた。514～519はＳＣ－４から出土した須恵器である。514は微小なかえりをもつ輪状つまみの坏蓋である。515、516は坏である。516は底部糸切り底である。517は高坏の坏部か、皿である。518は皿である。519は高坏で、２方向の透かしの位置が変則的である。521～533は、ＳＣ－５の出土遺物である。521は弥生時代後期の甕の口縁部で、平行沈線を施している。522は弥生土器の底部である。523～527は須恵器の坏である。523～525は底部糸切りで、527は丁寧なヘラによる切り離しである。528は丹塗り土師器の皿である。529～532は土師器の甕、533は土錘である。520は、ＳＣ－４とＳＣ－５の間で出土した鉄鏃である。道の埋土中遺物は、８世紀後半のものが最新であり、道の造成はこれ以降の所作と考える。

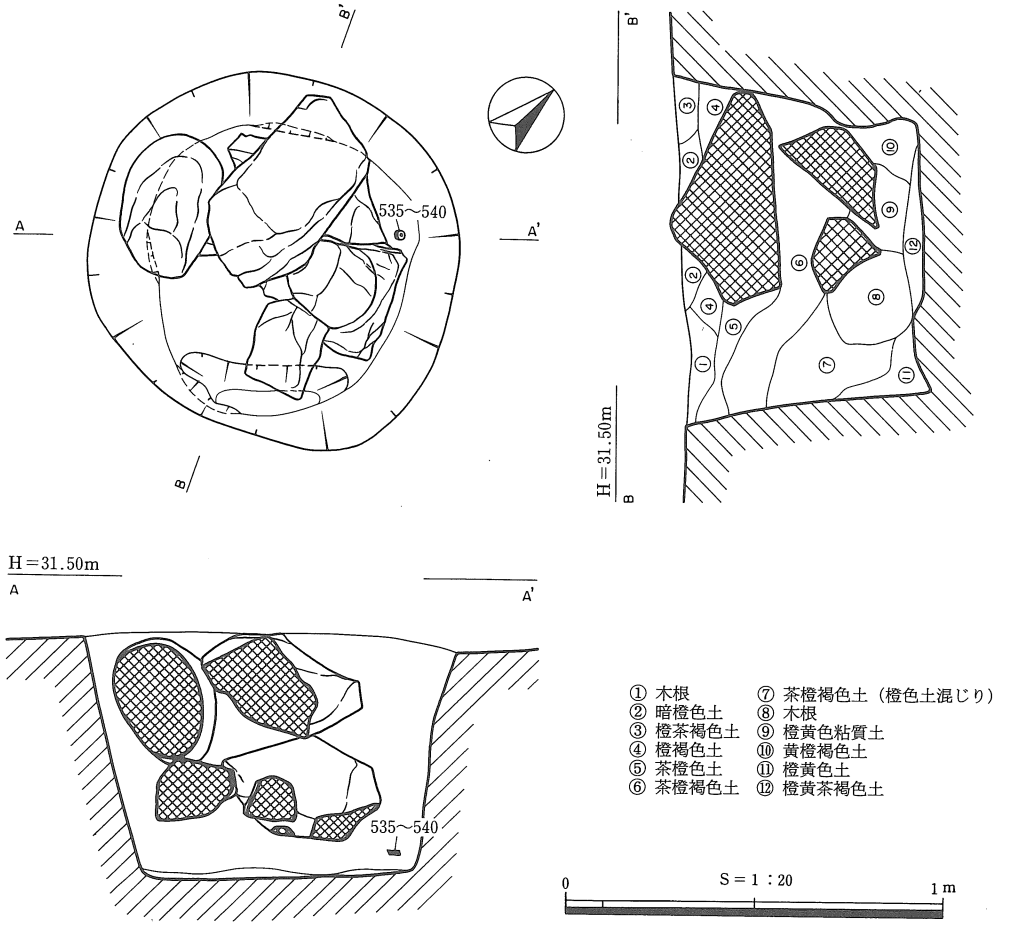
ＳＣ－７、８（第170～172図・写真図版22、35）は、Ａ区北西側を丘陵尾根にほぼ平行して走る道である。ＳＣ－７は、全長14m、幅50cmを測る。ＳＣ－８の２m上方に位置する。道は概ね標高30.5mの等高線ラインに沿っている。ＳＣ－８は、全長40m、幅40cm～１mを測る。道は概ね標高27mと31mの等高線ラインの間を、ＳＣ－７とほぼ平行して走っている。いずれの道も岩質の斜面を断面「Ｌ」字状に造成して、狭長な段を削り出している。両道の間に７基のピット列を検出している。路面は平坦面をなす。路面には、奥行き３～５cm程度、幅10～15cm程度の半月形状の掘削用工具痕が観察できた。基本的に低位側から高位側に向かって、鍬状の打ち降ろし具を打ち挽いている。道は、尾根の頂部に続く。昭和59年の調査の際、長さ12m、幅50cmの道状遺構が検出されているが（註16）、ＳＣ－８はこれに続くものであろう。ＳＣ－７上の表土中から白磁皿が出土した。

・ピット群（ピット群１～３）

規則性を持たず、建物を構築しないピット群を、３つのエリアで把握した。ピット群１（第８、190図・写真図版７）は、陰田60号墳の墳丘上に所在する。標高38.5～39.5mを測る。Ｐ．１から敲石（559）が出土している。後世の削平により、墳頂部が平坦面をなしており、曲輪であった可能性もある。ピット群２（第７図・写真図版２）は、Ａ区南辺、弥生時代後期後半の竪穴住居跡ＳＩ－４の南側に広がる比較的平坦な範囲で、ＳＤ－３、４の周辺である。標高11.5～20.5mを測る。ピット群３（第７図・写真図版２）は、Ａ区の西端、ＳＳ－19、ＳＢ－10の南側丘陵斜面に広がる標高19.5～25.5mの範囲である。

７　中、近世の遺構（ＳＫ－19～31）

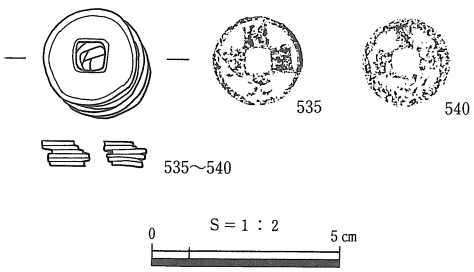
中、近世の遺構と判断したのは、土坑１基（ＳＫ－19）、土壙墓12基（ＳＫ－20～31）である。いずれもＢ区で検出した。



第173図　ＳＫ－19実測図

・**土坑**（ＳＫ－19）

ＳＫ－19（第173、174図・写真図版36）は、ＳＢ－１の東側、丘陵尾根上に立地する。検出面形、底面形ともに円形で、断面形は逆台形を呈する。検出面で径１m、底面で径70cm、深さ65cmを測る。大小６個の礫が、埋土中に混入していた。陥没したものではなく、埋め戻す際に投入されたと思われる。埋土下層中から、６枚の銅銭（535～540）が出土した。付着して一塊になっている。穴の部分が貫通しており、紐に通していたものと思われる。上下２枚の銭のみ観察できた。535は「開元通寶」（唐・初鋳621年）、540は「□元□□」と読める。土坑の機能は不明である。時期は中、近世以降としておく。



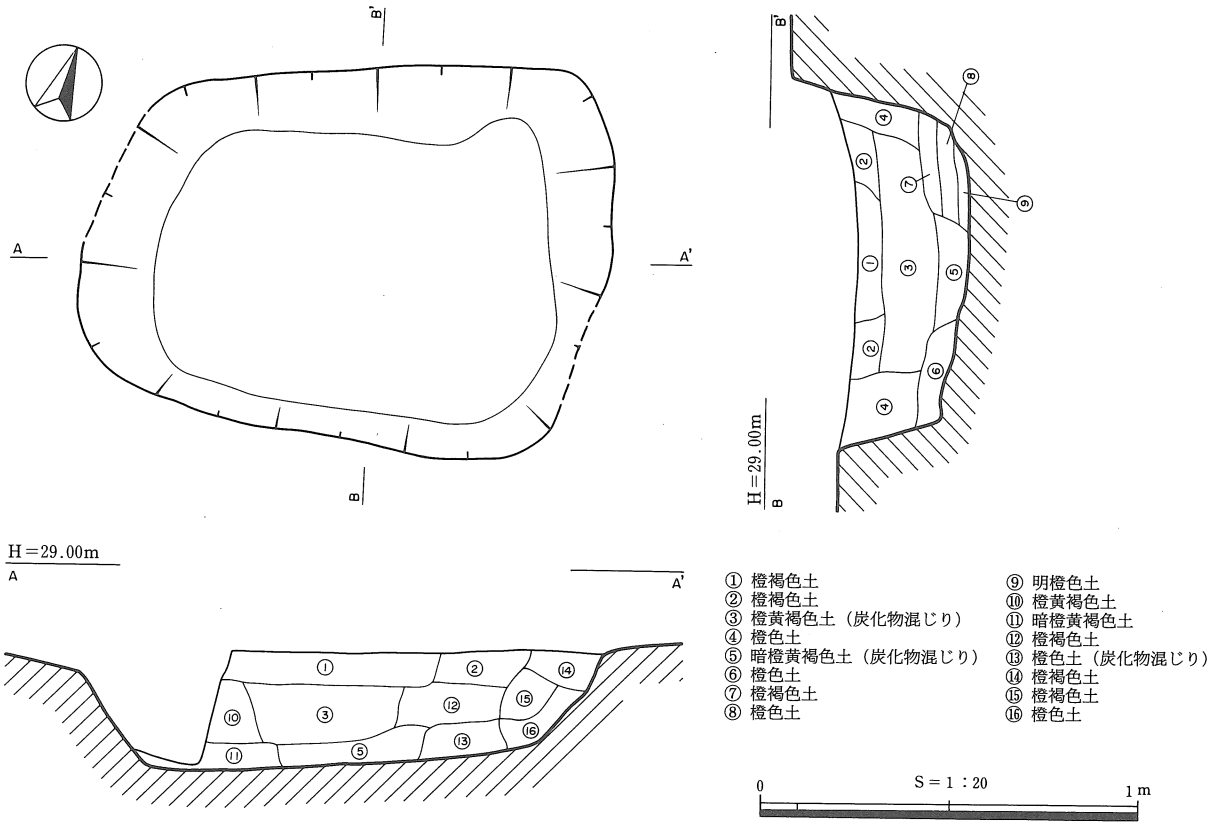
第174図　ＳＫ－19出土遺物実測図

・**陰田第６遺跡の古墓**

過去の調査により、63基の古墓が検出されている。久幸山、天神山丘陵上に点在するものをＡ群（25基）、陰田36号墳上に集中して所在するものをＢ群（38基）と区分されている。陰田39～40号墳上からは、古墓ＡＳＫ－03、04、11、12が、陰田41号墳上からは古墓ＡＳＫ－01が検出されている。ＡＳＫ－01、03、04は、陰田古墓群のⅠ期とされ、中世後期にあてられている。ＡＳＫ－11はⅡ期で中世末～近世初頭、ＡＳＫ－12はⅢ期で近世前期に比定されている（註17）。Ⅰ期の古墓はＡＳＫ－01、03、04の３基のみで、今回の調査域は、陰田古墓群中でも古相を示すエリアである。

・**土壙墓**（ＳＫ－20～31）

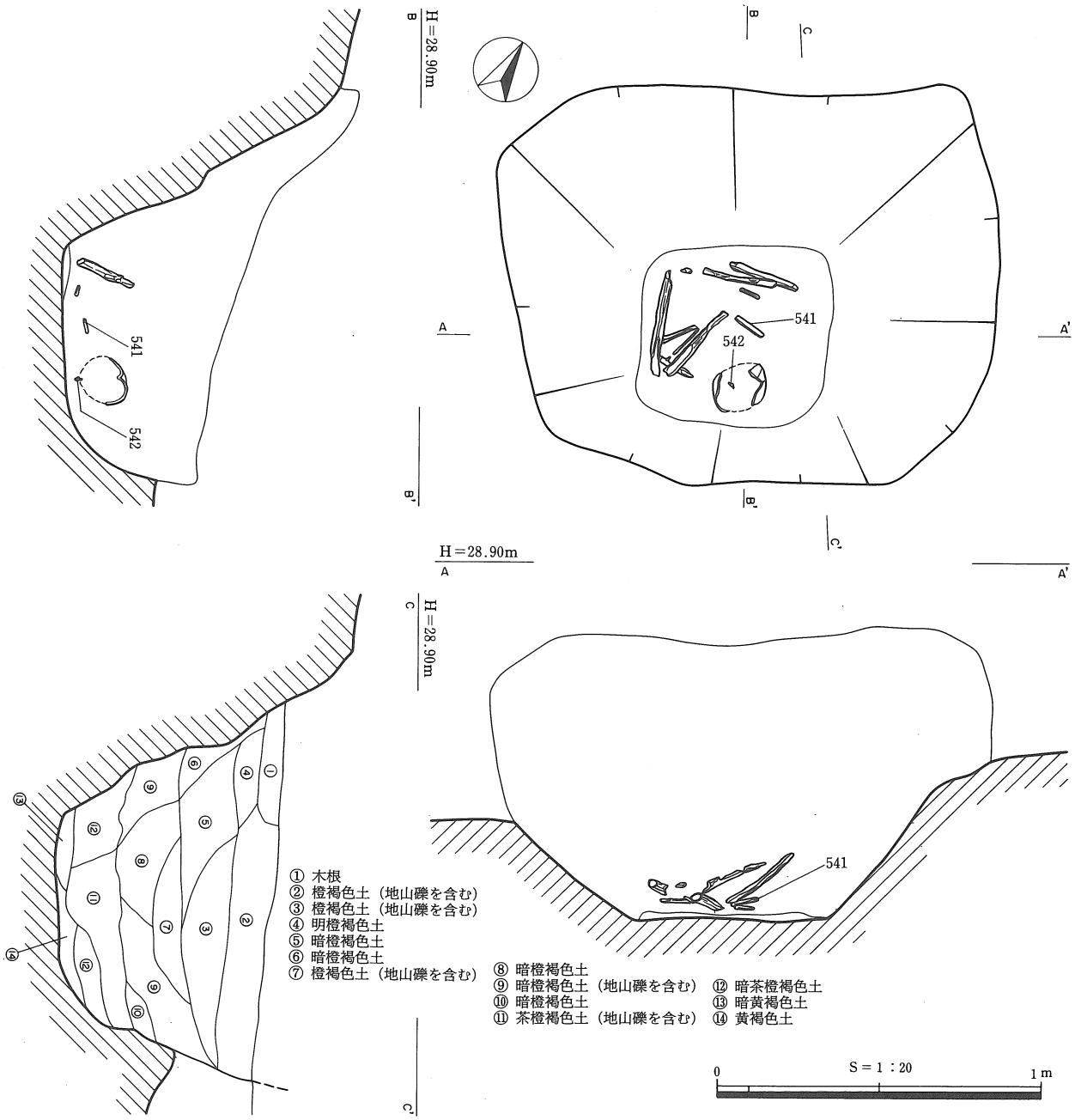
ＳＫ－20、21は、陰田54号横穴の周辺、ＳＫ－22～31は陰田60号墳の墳丘上で検出した。ＳＫ－20（第175図・写真図版36）は、東西1.4m、南北１m、深さ50cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出し



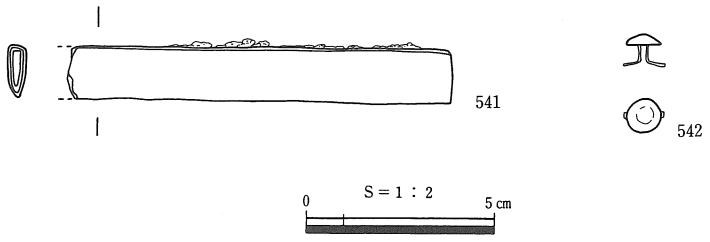
第175図　ＳＫ－20実測図

た。主軸方向は、Ｎ－82°－Ｅにとる。土層断面から木棺墓と思われる。時期を示す遺物の出土がなく、人骨も検出されなかったが、ＳＫ－21との比較において、形状、規模、方向性など、共通点があり、中、近世の土壙墓と判断した。ＳＫ－21は、２ｍの離隔をもって南西に位置する。

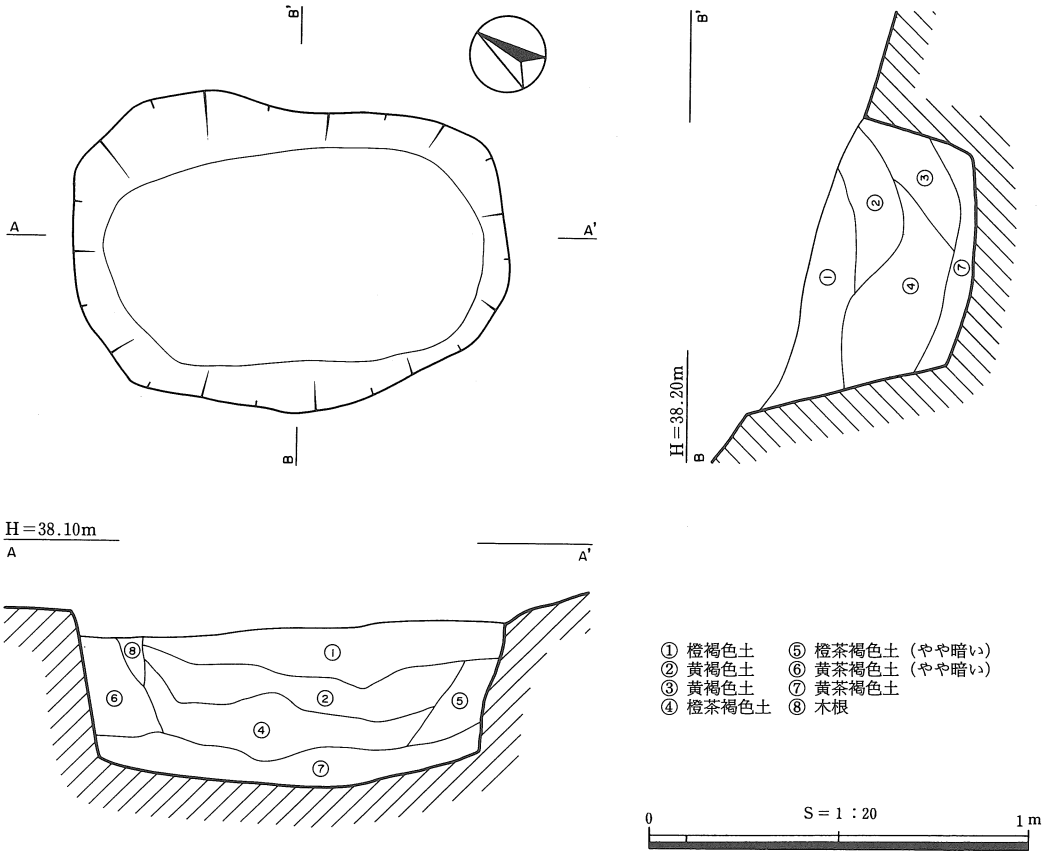
ＳＫ－21（第176、177、195図・写真図版37、81・「当章第４節　ＳＫ－21出土人骨について」参照）は、東西1.5m、南北1.2m、深さ85cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。底面は、１辺55cmの方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－58°－Ｅにとる。陰田54号横穴の後背周溝を切って掘り込んでおり、南東側掘方は周溝埋土のため判断し難く、肩を把握できなかった。墓壙底よりやや浮いた位置で、成人の人骨を検出した。遺体の腐蝕によって骨が平面的に散らばった状況にあるが、頭蓋骨の位置が墓壙底の南東側にあり、よって北西側が骨盤の位置と推測される。埋葬姿勢は座位と推察され、被葬者は丘陵尾根を背にして、南東方向の奥陰田の谷を望んでいたことになる。墓壙底面直上で検出された人骨はなく、３cm以上の隙間を有していることから、棺床の存在が推察され、埋葬主体は座棺であったと判断する。底面ほぼ中央、頭蓋骨と右大腿骨の中間で、銅製の刀子の鞘（541）が出土した。刃幅は１cmに満たず、刃渡り10cm以上に及ぶ。墓壙底面から５cmほど浮いた状態の横位で出土しており、これを棺床上に供献したものか、本来被葬者が身に付けていたものが離脱したものかは判断し難いところである。墓壙底の南西側、頭蓋骨の直下で、銅製の鋲（542）が１点出土した。底面から３cm浮いた状態である。直径８㎜の凸面をなす頭部から二又に分かれる足が伸び、相反する方向に折れ曲がる。遺体から離脱して落下した頭蓋骨の下で出土したものであり、棺内にまだ空間の残る時期であれば、棺の金具の可能性は低いと考える。11層の茶橙褐色土層中から種実が多量に出土した。頭蓋骨下に特に集中し、ここから北西方向に向かって帯状に伸びる範囲で出土している。本来有機質の袋にいれて供献していたものが、袋の腐蝕によって散らばったものと考える。散らばりが生じるとすれば、紐を付けて首から袋を提げていた可能性が高い。鋲は、この袋に本来留め金具として使われていたものであろうか。当土壙墓は、座棺であることから、近世以降の埋葬と考える（註18）。



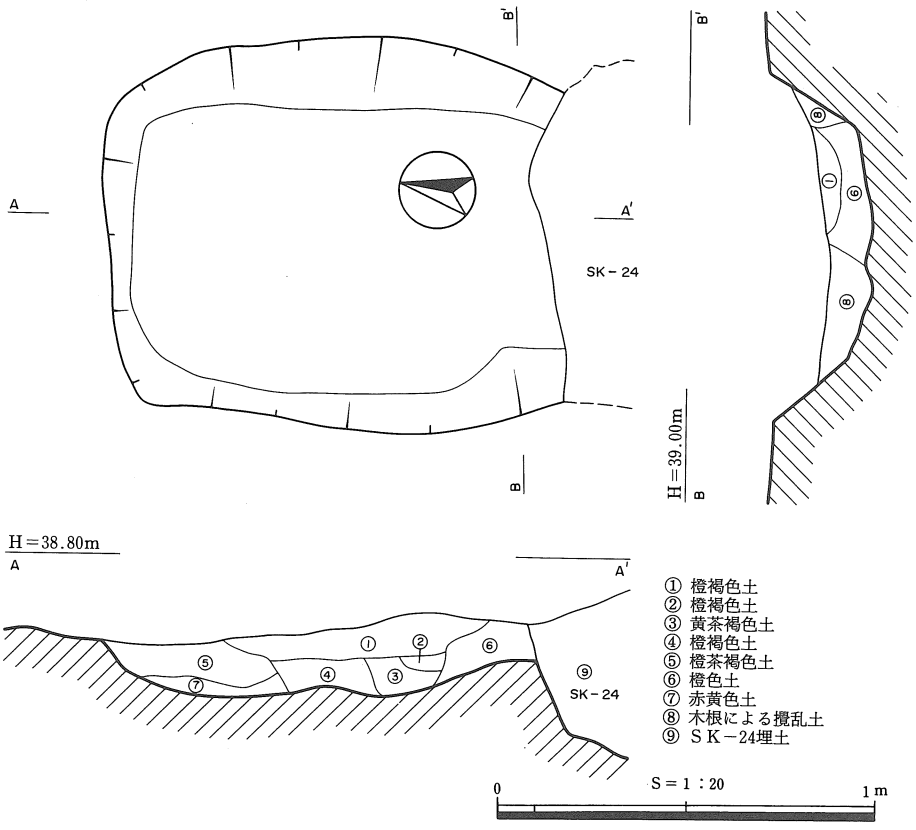
第176図　ＳＫ－21実測図



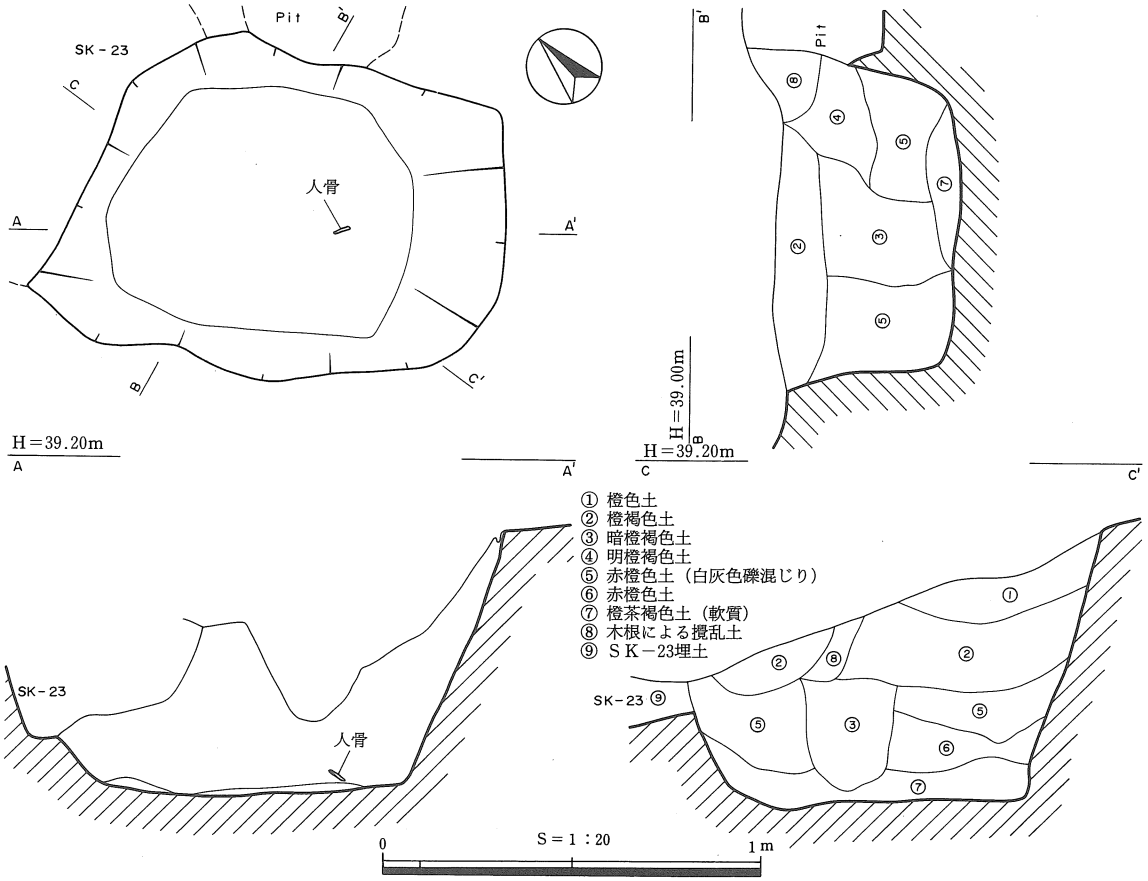
第177図　ＳＫ－21出土遺物実測図



第178図　ＳＫ－22実測図



第179図　ＳＫ－23実測図



第180図　ＳＫ－24実測図

ＳＫ－22（第178図・写真図版36）は、南北1.15m、東西70cm、深さ60cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－37°－Wにとる。遺物、人骨は出土しなかった。

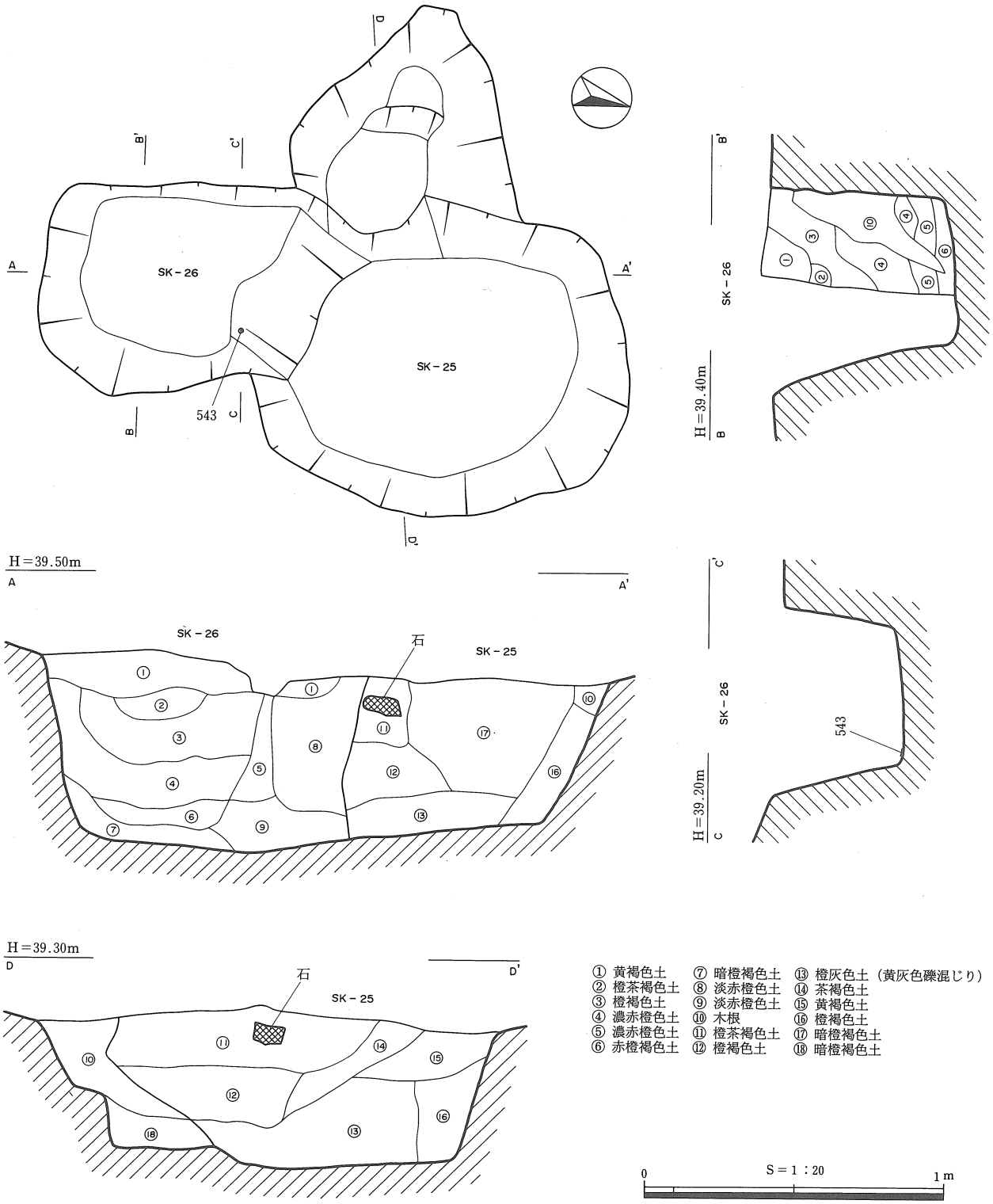
ＳＫ－23（第179図・写真図版38）は、南側をＳＫ－24に切られており、原形をとどめていないが、東西の側辺が南側でやや閉じ気味のカーブを示して切られており、検出形は原形にほぼ近いものと思われる。検出面で、南北1.15m、東西1.05m、深さ30cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－11°－Wにとる。遺物、人骨は出土しなかった。

ＳＫ－24（第180図・写真図版38）は、北側でＳＫ－23を切っている。検出面で、南北1.1m、東西85cm、深さ75cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－32°－Wにとる。墓壙底やや南東寄りの地点で骨片を検出した。７層の橙茶褐色土層中から出土しており、この層はかなり軟質で締まりの無い土質であった。他に遺物は出土していない。

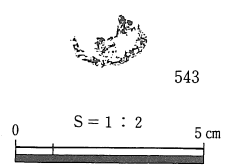
ＳＫ－25（第181図・写真図版38）は、南側をＳＫ－26に切られ、西側を木根で攪乱されている。検出面で、南北1.3m、東西1.05m、深さ50cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－13°－Wにとる。遺物、人骨は出土しなかった。

ＳＫ－26（第181、182図・写真図版38）は、北側でＳＫ－25を切っている。検出面で東西70cmを測り、南北は土層断面から1.1mと判断される。深さは65cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－７°－Wにとる。墓壙底やや北東寄りの地点で銅銭１枚（543）を検出した。底面直上での出土である。銭銘は判読できなかった。人骨は検出していない。

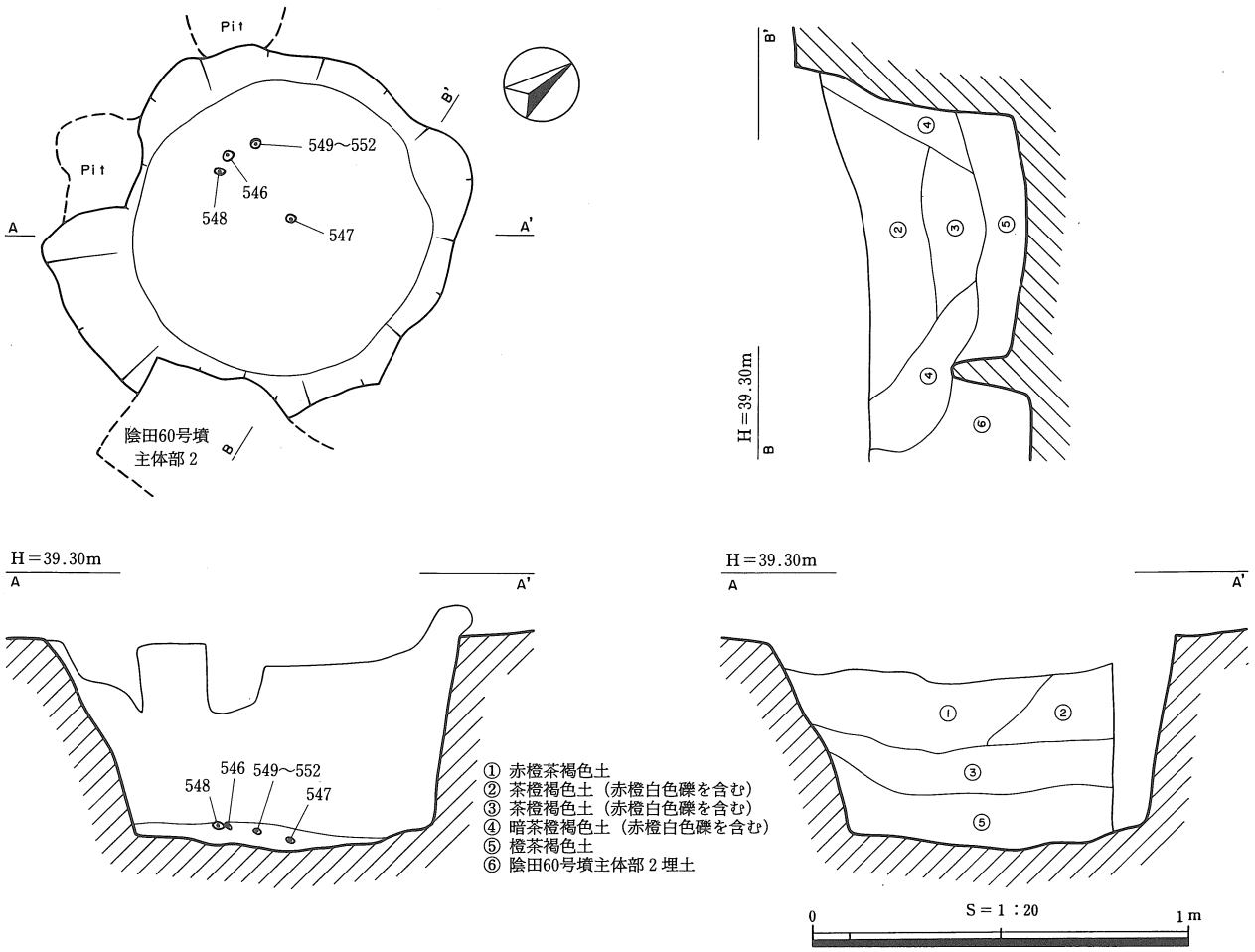
ＳＫ－27（第183、184図・写真図版38）は、南東側で陰田60号墳の主体部２を切っている。検出面で南北1.05m、東西１m、深さ60cmを測る。平面形は隅丸方形気味に検出したが、底面は径75cmの円形であり、原状は円形の土壙墓と思われる。断面は逆台形状に検出した。墓壙底西寄りで銅銭９枚（544～552）を検出した。５層橙茶



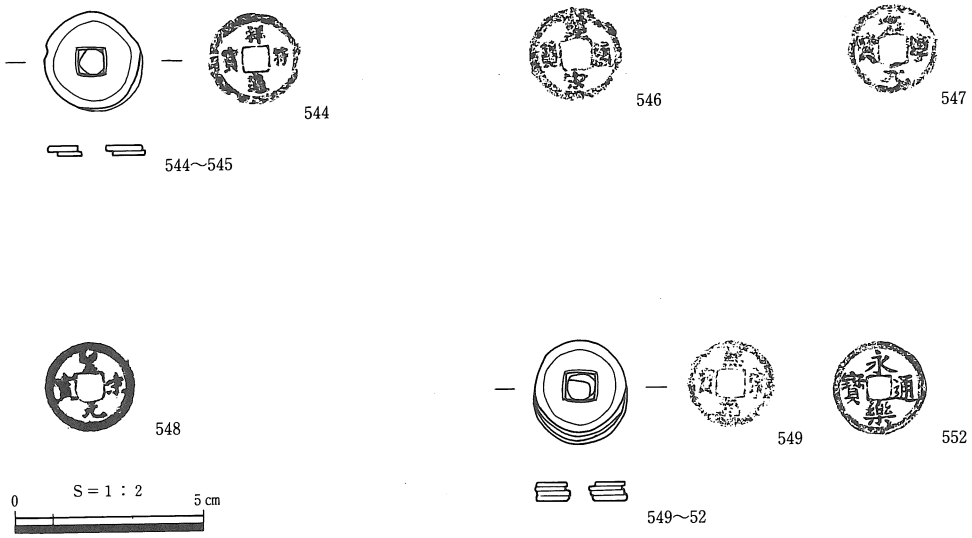
第181図　ＳＫ―25、26実測図



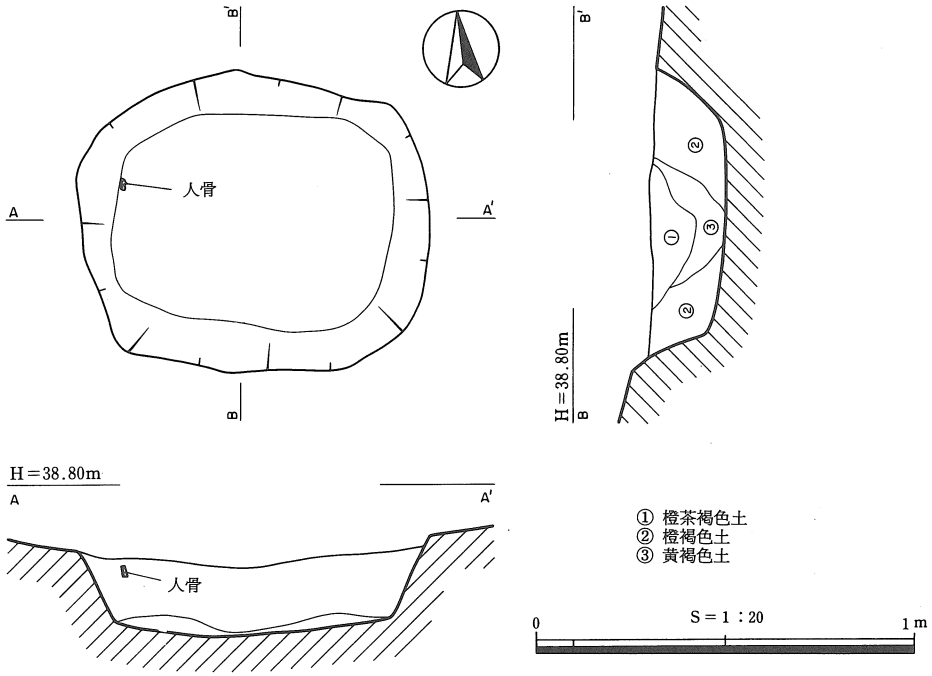
第182図　ＳＫ―26出土遺物実測図



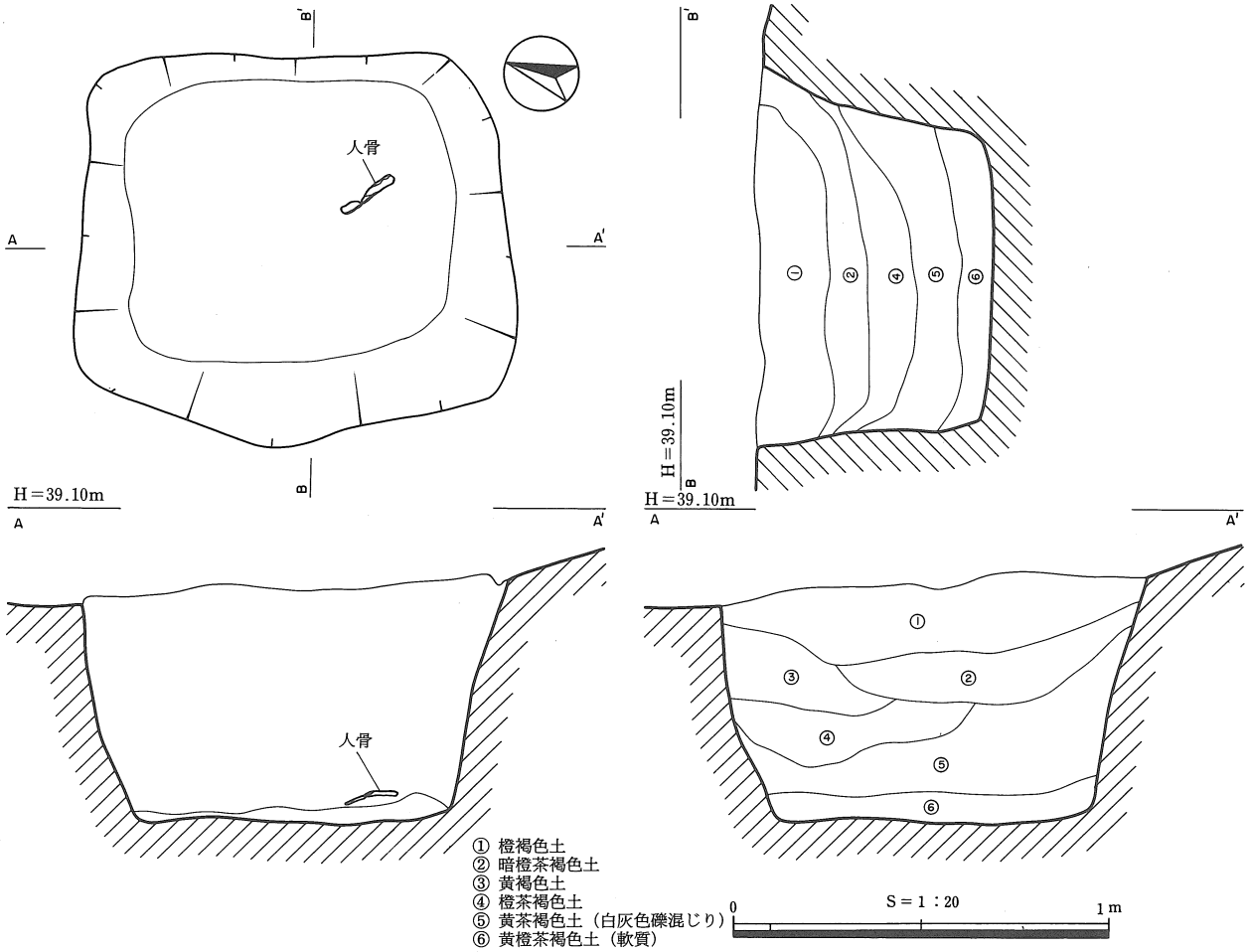
第183図　ＳＫ－27実測図



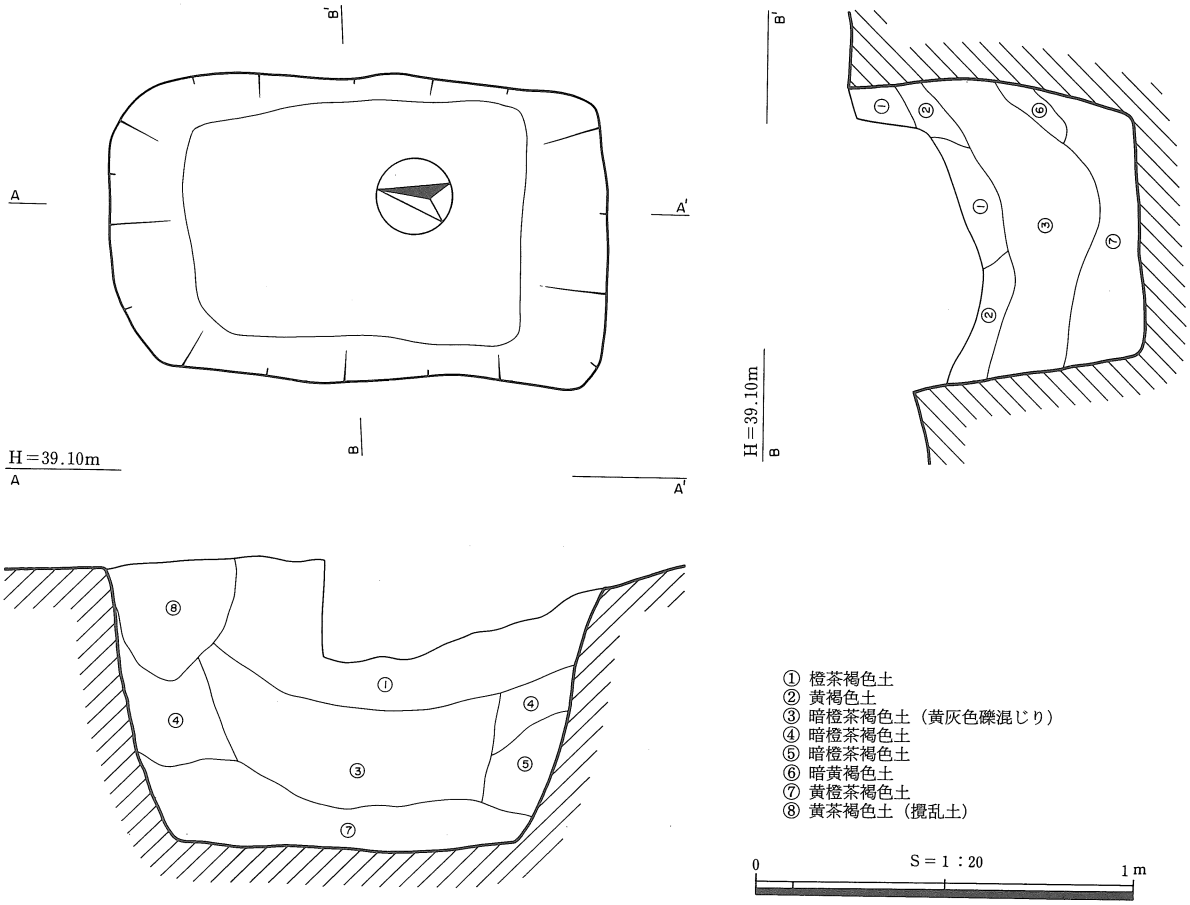
第184図　ＳＫ－27出土遺物実測図



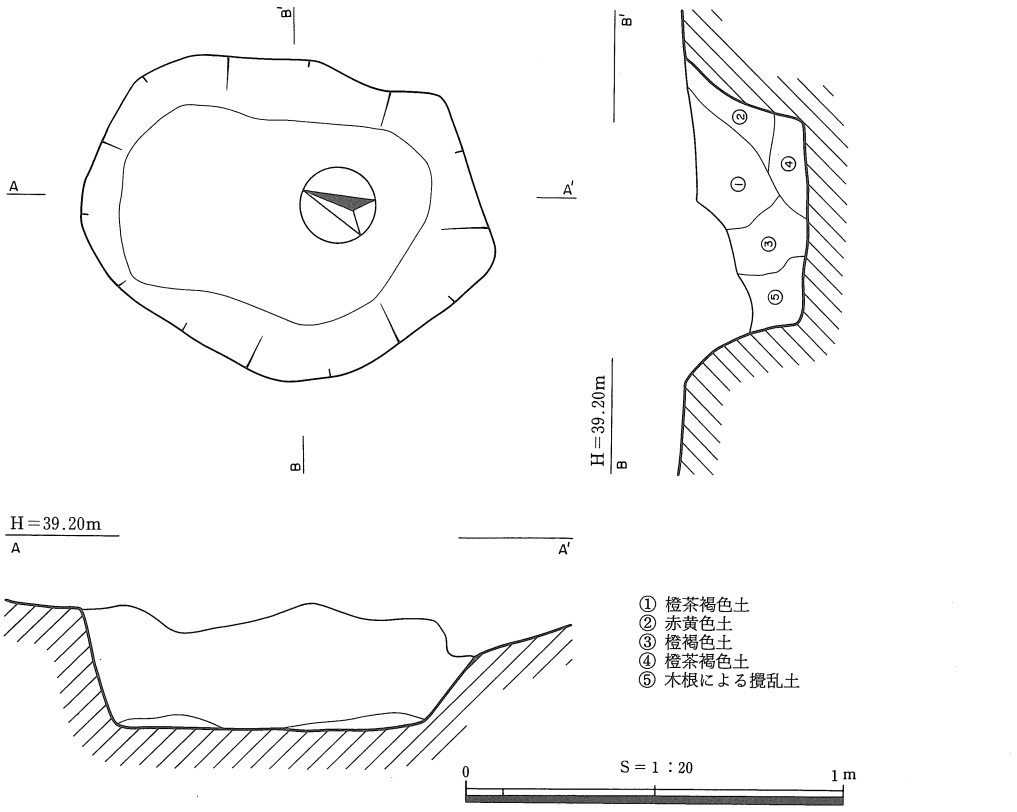
第185図　ＳＫ－28実測図



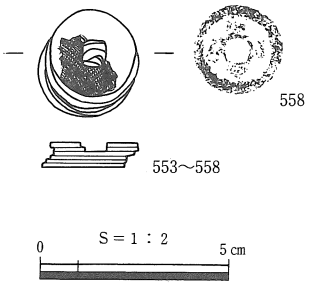
第186図　ＳＫ－29実測図



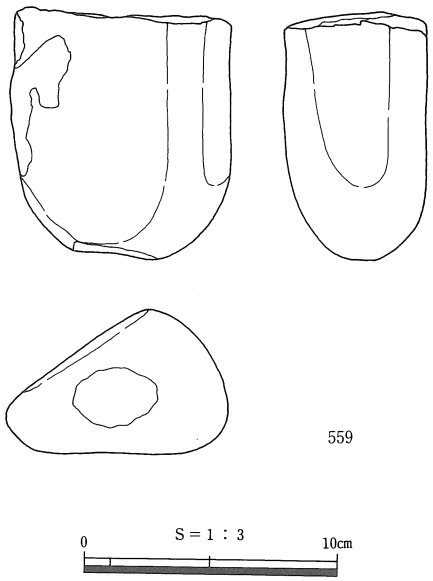
第187図　ＳＫ－30実測図



第188図　ＳＫ－31実測図



第189図　ＳＫ－31出土遺物実測図



第190図　ピット群１・Ｐ１出土遺物実測図

褐色土層中の出土で、底面から２～５cm浮いている。544は「祥符通寶」（北宋・初鋳1009年）、546は「皇宋通寶」（北宋・初鋳1039年）、547は「熙寧元寶」（北宋・初鋳1068年）、548は「聖宋元寶」（北宋・初鋳1101年）、549は「熙寧元寶」（北宋・初鋳1068年）、552は「永楽通寶」（明・初鋳1408年）である。544と545は２枚が付着し、549～552は４枚が付着している。いずれの塊も穴の部分が貫通しており、本来紐に通していたものと思われる。人骨は検出していない。

ＳＫ－28（第185図・写真図版39）は、検出面で、東西90cm、南北80cm、深さ25cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－83°－Wにとる。墓壙西端の埋土中で骨片を検出した。底面から13cm浮いた状態である。他に遺物は出土していない。

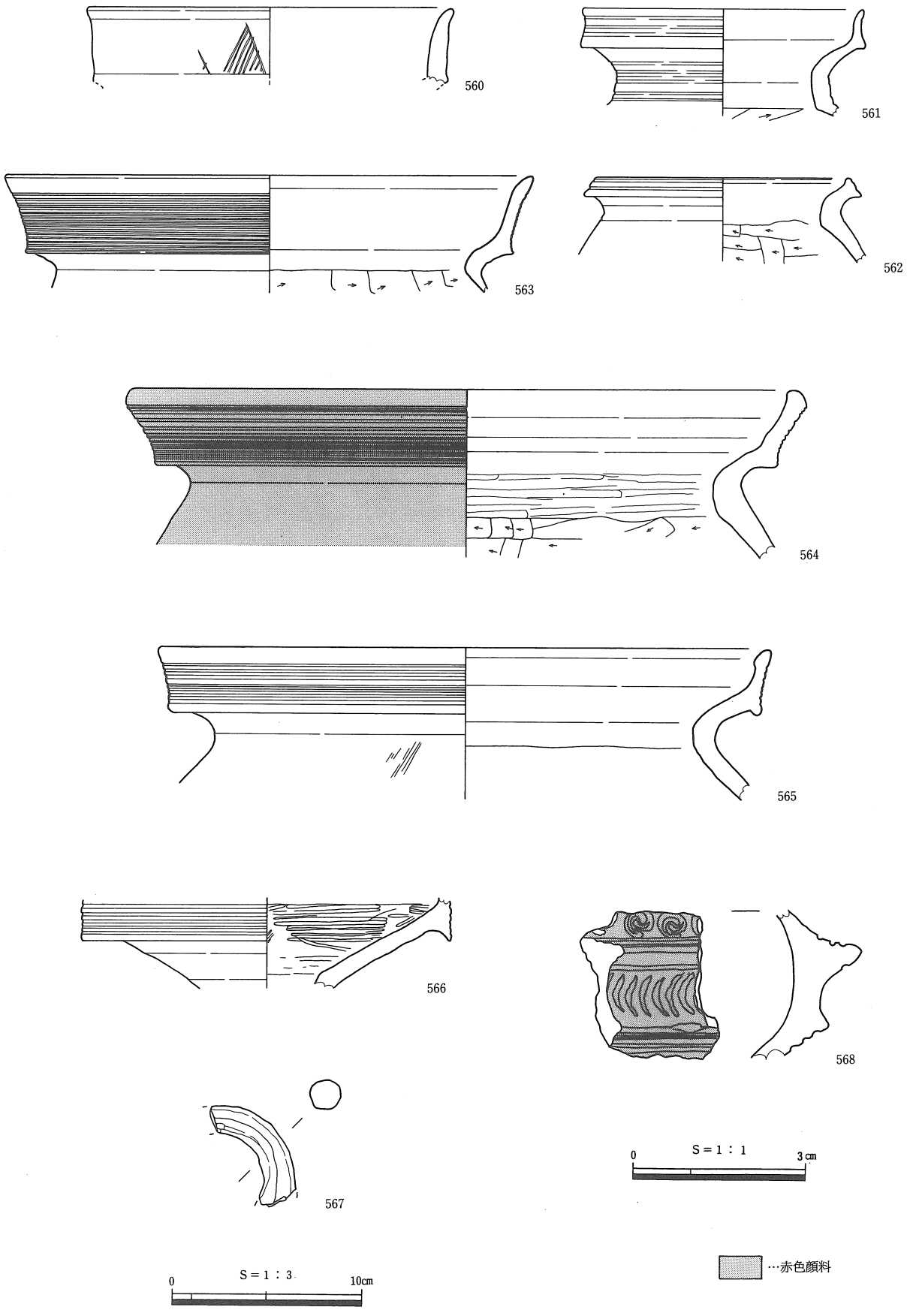
ＳＫ－29（第186図・写真図版39）は、検出面で、南北1.15m、東西１m、深さ65cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－17°－Wにとる。墓壙底南寄りの地点で骨片を検出した。底面から５cm浮いた状態である。６層の黄橙茶褐色土層中から出土しており、この層はかなり軟質で締まりの無い土質であった。他に遺物は出土していない。

ＳＫ－30（第187図・写真図版39）は、検出面で、南北1.3m、東西80cm、深さ75cmを測る。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－10°－Wにとる。遺物、人骨は出土しなかった。

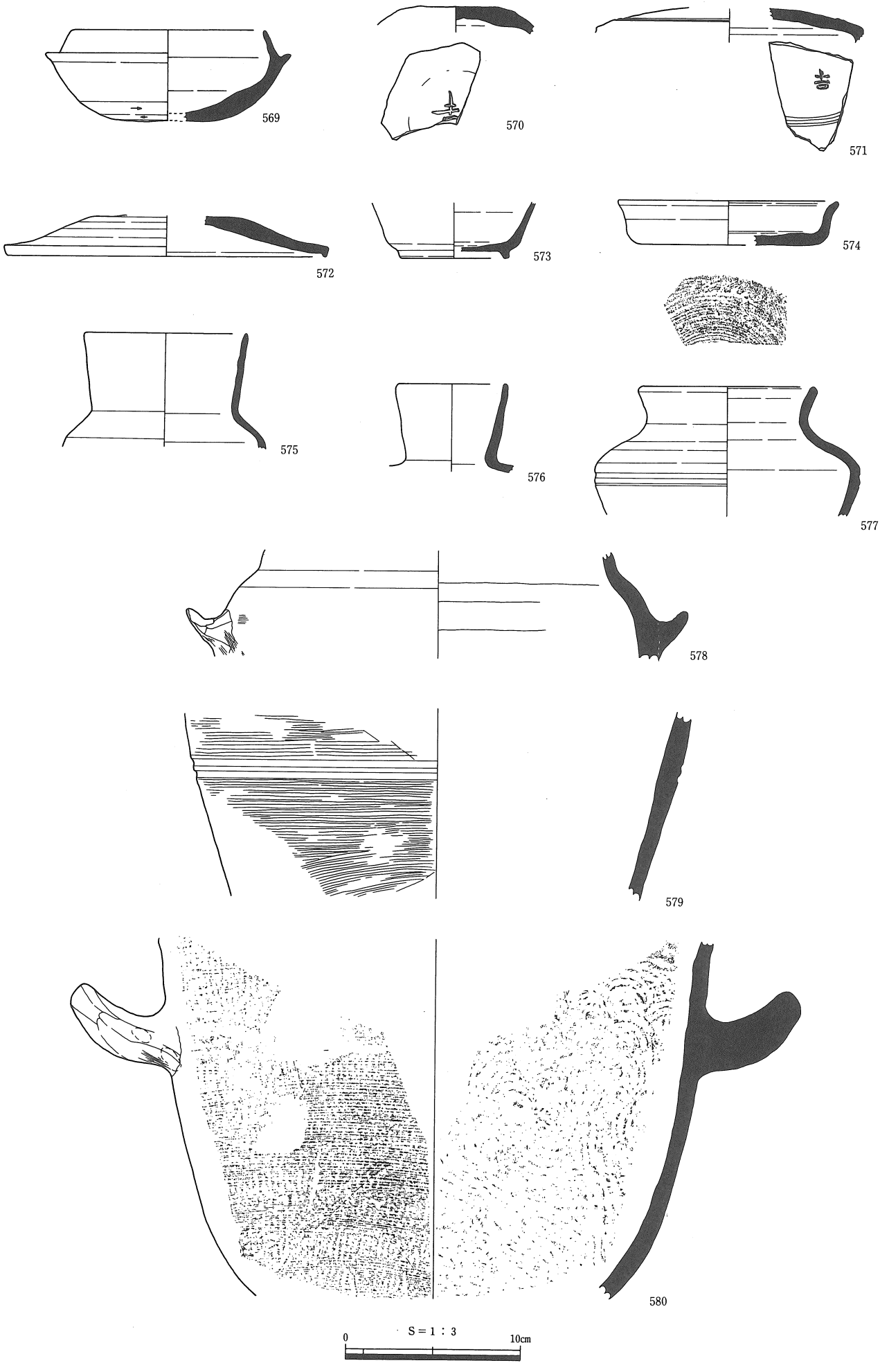
ＳＫ－31（第188、189図・写真図版39、81）は、検出面で、南北1.1m、東西80cm、深さ30cmを測る。平面形は隅丸五角形で、断面は逆台形状に検出した。主軸方向は、Ｎ－11°－Wにとる。墓壙埋土中から銅銭６枚（553～558）を検出した。付着して一塊になっている。片面に布が付着しており、布袋に入れられていたものと推察する。もう片面については、銭銘を判読できなかった。人骨は検出していない。

・古墓群

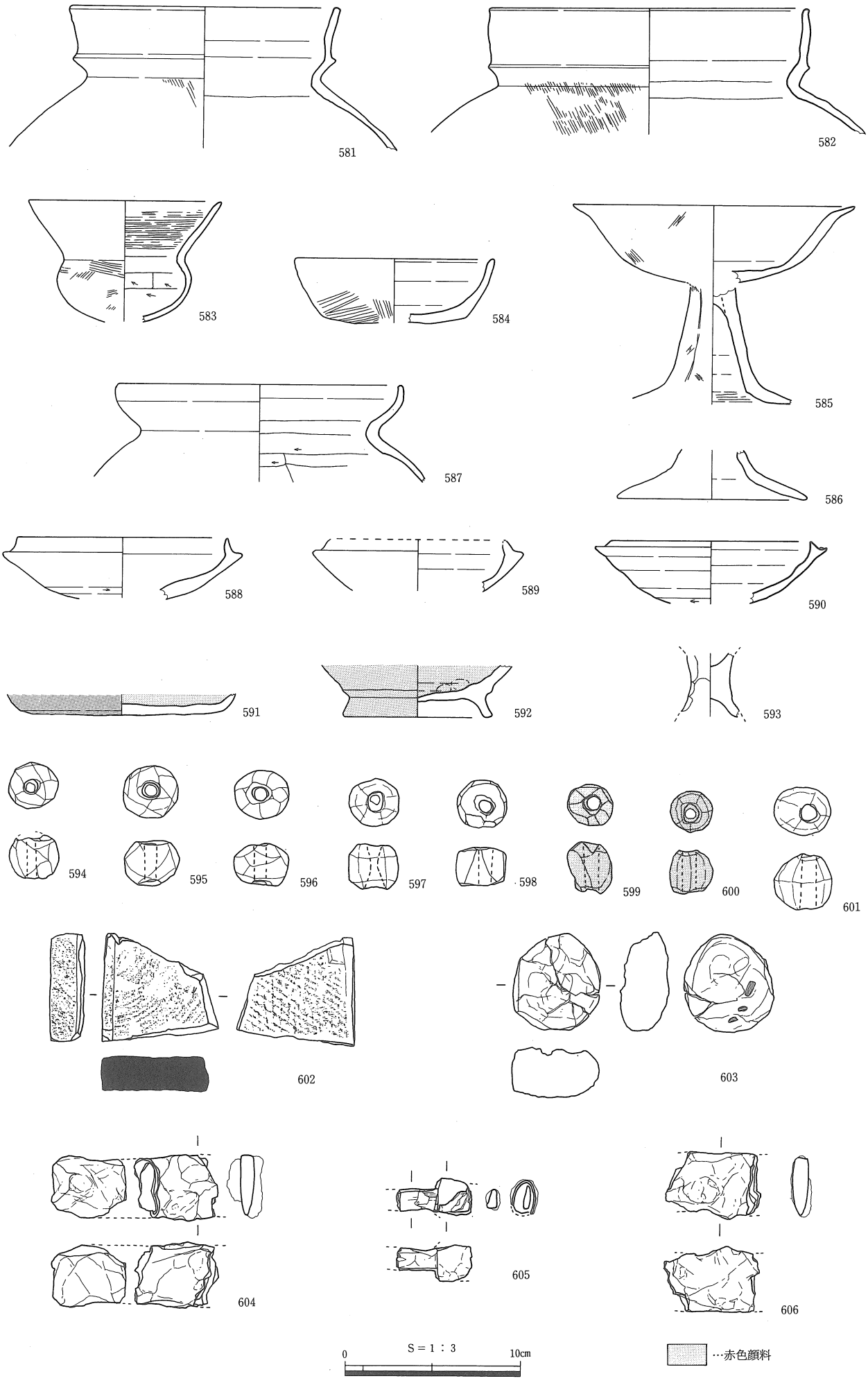
今回の調査で検出した古墓は、12基である。これらは、陰田54号横穴周辺の２基（ＳＫ－20、21）と、陰田60号墳の墳丘上の10基（ＳＫ－22～31）の２群に分けられる。便宜上前者をａ群、後者をｂ群と呼称する。ａ群は、座棺を埋葬主体とする近世墓と判断され、ｂ群は宋明銭の出土から中世墓と考える。時期的にはこの区分は、過去の調査における古墓の分布状況に合致するものである。ａ群は２例のみの検出であるが、あえてｂ群との比較を試みる。長軸方向の長さが1.4mを越えるもので、ｂ群に比して大型と言えよう。また主軸方向は、ａ群が北東－南西方向であるのに対し、ｂ群は北西－南東方向をとる。出土遺物においては、銅銭の出土はｂ群のみにみられた。



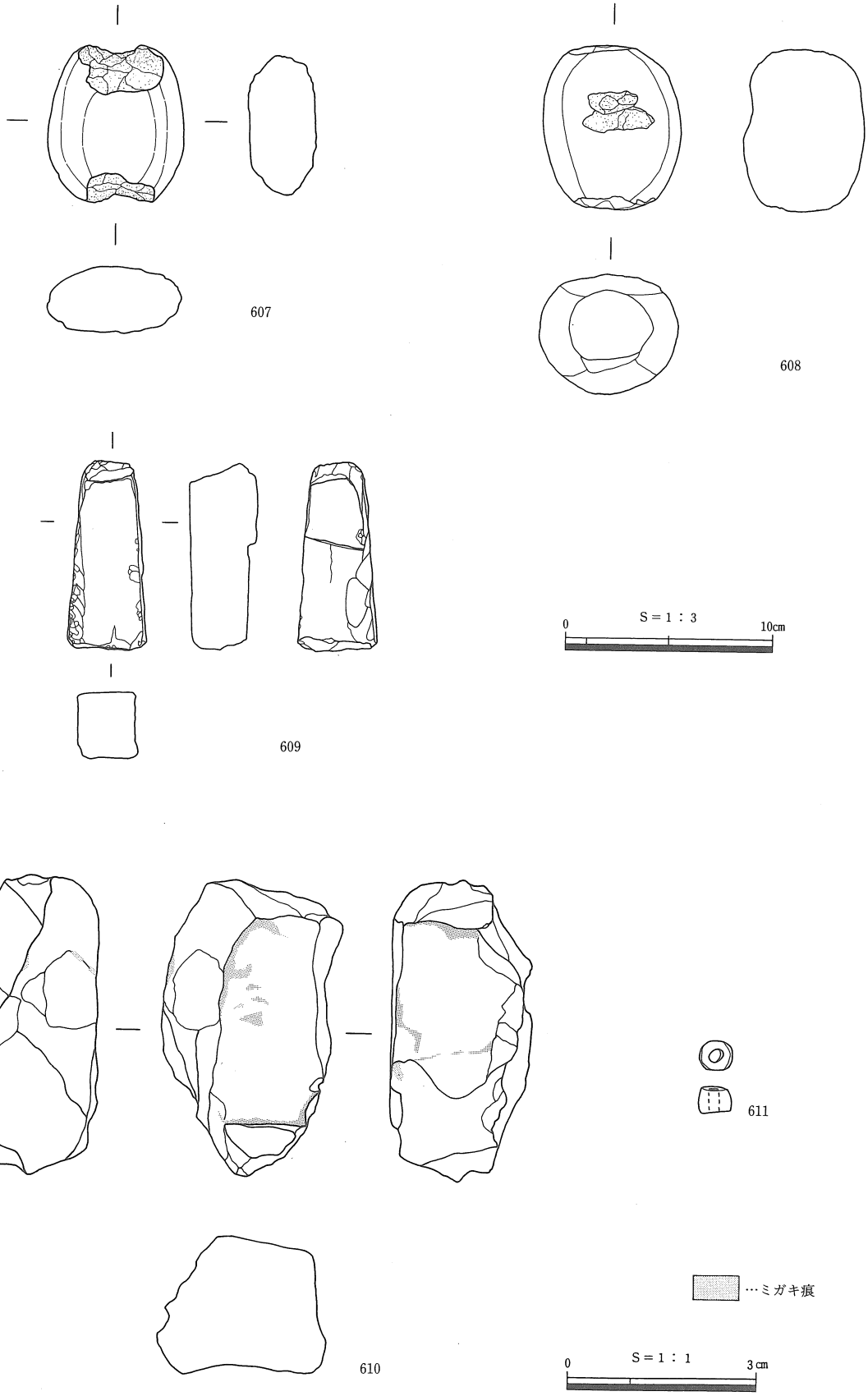
第191図　遺構外出土遺物実測図(1)



第192図　遺構外出土遺物実測図(2)



第193図　遺構外出土遺物実測図(3)



第194図　遺構外出土遺物実測図(4)

群	遺構名	形態	規模(cm)	主　軸	骨	銭	その他
a	ＳＫ－20	隅丸方形	140-100-50	N-82° -E	－	－	－
群	ＳＫ－21	隅丸方形	150-120-85	N-58° -E	○	－	鞘、鋲
	ＳＫ－22	隅丸方形	115-70-60	N-37° -W	－	－	－
	ＳＫ－23	隅丸方形	115-105-30	N-11° -W	－	－	－
	ＳＫ－24	隅丸方形	110-85-75	N-32° -W	○	－	－
b	ＳＫ－25	隅丸方形	130-105-50	N-13° -W	－	－	－
	ＳＫ－26	隅丸方形	110-70-65	N-7° -W	－	1	－
	ＳＫ－27	円形	105-100-60	－	－	9	－
群	ＳＫ－28	隅丸方形	90-80-25	N-83° -W	○	－	－
	ＳＫ－29	隅丸方形	115-100-65	N-17° -W	○	－	－
	ＳＫ－30	隅丸方形	130-80-75	N-10° -W	－	－	－
	ＳＫ－31	隅丸五角形	110-80-30	N-11° -W	－	6	－

古墓一覧表

8　遺構に伴わない遺物（第191～194図・写真図版81）

・弥生時代後期の土器（560～568）

560は、直立する壺の口縁部である。鋸歯文を施している。561は、平行沈線を口縁部と頸部に施す壺である。562は、繰り上げ口縁に平行沈線を施す甕である。内面は肩部までケズリを施している。563～565は、口縁部に平行沈線を施す甕である。口縁部径が28～36cmを測り、大型品と言えよう。564は、外面に赤色顔料が塗布されている。566は、器台の受部で、口縁部外面に平行沈線を施し、内面はミガキ調整している。567は環状の把手か。568は、算盤玉状の胴部を呈する壺の胴部片である。２条の凸帯に区切られた文様帯にスタンプ文が施されている。外面は赤色顔料が塗布されている。562は後期前半に比定され、その他は後期後半と考える。

・須恵器（569～580）

569は坏身である。陰田編年の４式（６世紀後葉）に相当する。570、571は、ヘラ書き文字の記された須恵器で、共に「吉」と読める。570は坏蓋の天井部ほぼ中央に書かれている。線の切り合いから、書き順は「一」→「十」→「𠂹」→「𠂹」→「𠂹」と判断される。571は長頸壺の肩部に書かれている。全体の書き順は不詳だが、「一」→「十」は判断できる。570と571では、書き順が異なっている。570は陰田編年の７～８式（７世紀中～後葉)、571は肩部の稜がシャープであり、ＭＴ－21以降（８世紀前半以降）と考える。572は、蓋である。573は高台付きの坏で、底部は糸切り後ナデ消している。574は、底部糸切りの皿である。573は８世紀前半、572、574は８世紀後半に比定する。575～577は、壺類である。575は直口壺、576は堤瓶または平瓶の口縁部と思われる。577は短頸壺である。578は、把手付きの甕か。579、580は甑である。579は外面に２条の沈線がめぐり、カキメが施されている。焼成は不良である。580は把手を持ち、外面は平行タタキ後カキメ、内面は同心円タタキである。

・土師器（581～593）

581、582、587は甕である。583は広口の小型丸底壺、584は坏、585、586は高坏である。581～583、585、586は古墳時代前期に比定される。588～590は須恵器の坏身的だが、焼成は明らかに土師器である。器形的には、陰田編年の５～６式（６世紀末～７世紀前葉）に相当する。591、592は丹塗り土師器で、591は皿、592は高台付き

の坏である。593は両端がくぼむ柱状の土器である。製塩土器の可能性を指摘しておきたい。

・**土製品**（594～602）

594～601は土錘である。うち599、600には、赤色顔料の塗布が観察される。602は、布目の平瓦である。

・**鉄関係遺物**（603～606）

603は含鉄の椀形鍛冶滓で、再結合滓である。604、606は鉄刀の破片、605は刀子の関部分である。

・**石製品**（607～610）

607は、角閃石安山岩製の石錘である。608は、大山系角閃石石英安山岩製の敲石である。609は、流紋岩質凝灰岩製の砥石である。610は、めのう製で、磨石と判断した。ミガキ状の光沢が観察される。

・**玉**（611）

611は、青色のガラス小玉である。

註1　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註2　『陰田第6遺跡（久幸地区）』　米子市教育委員会　1984年

註3　萩本勝・佐古和枝「第4節；須恵器について」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註4　この古墓については、米子市教育委員会杉谷愛象氏にご教示をいただき、同氏より資料の提供を受けた。

註5　石製品の石材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご鑑定いただいた。

註6　前掲註3

註7　杉谷愛象ほか「第3節；古墳」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註8　前掲註7

註9　この石材については、鳥取大学医学部井上貴央先生、米子市教育委員会杉谷愛象氏からご教示いただいた。

註10　前掲註7

註11　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　鳥取県教育委員会　1978年

註12　杉谷愛象ほか「第4節；陰田横穴墓群」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註13　鉄滓については、房総風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。

註14　柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」　『松江考古』　第3号　松江考古学談話会　1980年

註15　前掲註14

註16　前掲註2

註17　杉谷愛象ほか「第5節；古墓」　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註18　人骨取り上げの現地指導及び人骨の鑑定については、鳥取大学医学部井上貴央先生にお世話になり、本書にご寄稿いただいた。「陰田第6遺跡土壙墓より検出された人骨に関するコメント」（本書本文編Ⅰ第3章第4節ＳＫ－21出土人骨について）